限界超えの天賦《スキル》は、転生者にしか扱えない
ー　オーバーリミット・スキルホルダー

三上康明

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
限界超えの天賦（スキル）は、転生者にしか扱えない　ー　オーバーリミット・スキルホルダー

【Ｎコード】
Ｎ５３７８ＧＣ

【作者名】
三上康明

【あらすじ】
「人には等しく、８枠の天賦（スキル）ホルダーがある。【腕力強化】のような１枠ならよいが、レアなスキルは４枠や５枠、あるいは８枠すべてを使ってしまうでのう」

天賦珠玉（スキルオーブ）が発掘されるオーブ鉱山で、ヒンガ老人は僕にそう語った。だけど僕ら「奴隷」は契約魔術でスキルを取得できず、奴隷に未来なんてものはなかった。

それは運命の日。
鉱山を所有する貴族――つまり僕らの「主」がオーブ鉱山に視察に来た。
地震によって崩落する天井。貴族の脳天に直撃する岩塊。

貴族の死。
瞬間、僕らの契約魔術が消える。
目端の利いた奴隷は走った。スキルオーブが格納されている倉庫に。
そしてレアなスキルを取り込むと、目を疑うような能力や魔法によって警備兵を薙ぎ倒し、鉱山から飛び出していく。

暴動だ。

出遅れた僕に拾えるオーブはなかった
――終わった。僕はまた奴隷戻りだ。
絶望したときに見たのは、「あり得ないスキルオーブ」だった。

ホルダー「１０枠」を使う【森羅万象】《ワールド・ルーラー》。
使える人間がいないことから研究者以外、興味を持たれない、規格外のスキルオーブ。

だけれど僕は、【森羅万象】を取り込むことができた――なぜか？
それは僕が「転生者」だったから。
僕には一般人の８枠＋８枠、「合計１６枠」ものスキルホルダーがあったから。

鉱山は包囲され、出口は１か所。僕の手には謎のスキル【森羅万象】。

さあ、どうする――。

1

子どもひとりが身体をひねり、ごつごつする岩肌に服をこすりつけながらなんとか通れる坑道があって、これを鉱山夫たちは「狸穴（まみあな）」と呼んでいた。

「天賦珠玉（スキルオーブ）あったぜ！」

と甲高い声が狸穴から聞こえてきたので、ぼろぼろのリュックを下ろして水筒を飲んで一服していた僕は腰を上げる。

「これで今日のノルマはクリアだよ！」

狸穴の奥へと声を掛けた。

奥、と言っても真っ暗なわけじゃない。壁面がほんのりと発光する不思議な力によって明るさが確保されている。

これは「ダンジョン」と呼ばれる「モンスターが出現する場所」の特徴らしい。

ただ僕とラルクのいるダンジョンは他とはちょっと違っていて――天賦珠玉を発掘できる世界に８つしかない場所のうちのひとつだ。

「……ラルク？　どうしたの？」

なかなか戻ってこないので、僕は狸穴に首を突っ込んで彼女の名を呼んだ。ラルクは僕より３つ上の１３歳で、３年前、僕がこの鉱山に売られて来るまでは彼女が最年少だった。

なので、彼女はいつだって僕に対して「年上」ぶる。

でも……それはあまりイヤな気持ちじゃなかった。貧乏で、食べ

るものすらぎりぎりで分け合って――むしろ非力な僕の食料を奪われていたころを思えば、ラルクの「お姉さん」ぶりなんてありがたいくらいだった。なにせ僕には食べ物だけでなく「名前」さえも与えられなかったから。

ラルクは率先してツライ仕事を引き受けてくれるし。もっと食え、って言ってパンをほんの少し分けてくれたりするし――まあ、確かに、僕は栄養が足りなかったらしく今も背がだいぶ低いのだけれども。

それはともかく、ラルクは、僕らに課せられたノルマである「1日10個の天賦珠玉の発掘」をこなすためにさっさと狸穴から出てくるのがいつもの常だった。

それが、出てこないということは――。

「まさか、モンスター!?」

僕は背筋が冷たくなった。

ここは天賦珠玉が発掘される鉱山で、限られた冒険者と限られた鉱山奴隷しか入れない。だけど、坑道を闊歩しているのは僕らだけじゃない。

モンスターだ。

狸穴は僕らのような年少者が率先して天賦珠玉を回収しなければいけない。それは身体的な問題ということもあるし、一方、モンスターが出現しにくいからという意味合いもある。

でも「しにくい」であって「絶対出ない」のではないのだ。

過去に、逃げ場のない狸穴に、ナメクジのモンスターが出たことがあったらしい。運悪くそこにいた子どもは、ナメクジに襲われ、溶かされた――。

「ま、待ってて!」

ナメクジのことまで思い出したときには、僕は腰に吊った鑿（ノミ）をつかんで狸穴へと上半身を滑り込ませた。両腕でぐいと踏ん張って身体全体を通路へと押し込む。

僕ら鉱山夫も武器の携帯は許されている。奴隷だから、魔術によって絶対に反抗できないから大丈夫なんだそうだ。だけど子どもの僕らに与えられた武器と言えば先っちょの欠けたナイフが一本で、それは「お姉さん」のラルクが僕に渡してくれるはずもない。

だから、鑿。

でも鑿だって、武器になる。岩だって削るしゴブリンの目くらいえぐれるはず。いや、ゴブリン見たことないけど。

ずずずずずず……。

ちょうどその瞬間、地響きが聞こえたものだから僕の小さな心臓は縮み上がった。だけれどラルクを放ってはおけない。

「僕が今から助けに行――もごっ!?」

勇んで乗り込んでいった僕の目の前に現れたのは、湿って、柔らかい、表面は布の感触だった。

「ぎゃあ!?　ちょっ、なに来てんだよ!」

「もごもがっ!?」

詰まるところ僕の顔面はラルクのお尻に埋まっているわけで、

「動くなバカッ、アホッ、くすぐっ……ぎゃはは!」

「あごふっ!?」

くすぐったかったらしいラルクが大笑いし、跳ね上がった彼女の

足が僕のアゴにヒット。その衝撃で僕の頭は狸穴の天井に激突したのだった……。

2

「悪かったって、なあ、弟くん」
「……」
「お前だって悪いんだろーが。あたしが入ってるのわかってるのに突っ込んできて」
「それはっ、ラルクが帰ってくるのが遅いから！」
「あー、悪い悪い。ちょっと天賦珠玉に見入っちまってさ」

狸穴から出てきた帰り道、僕らは坑道を出口へ向けて進んでいた。
僕の隣を歩く、僕よりも頭１つぶん大きいのがラルクだ。長い金髪を後ろで無造作に束ね、イタズラ好きな目は紫色。つんとした鼻の下には薄めの唇があって、そこからは絶えずとりとめもない言葉が紡ぎ出されている。
たぶん、彼女は将来美人になるタイプの女の子なんだろう。たまに冒険者に遭遇すると、彼らは「おっ」という顔でラルクを見るから――僕らのような鉱山奴隷は、契約魔術によって性欲をカットされた「去勢済み（魔術的な意味で）」らしいのでそのあたりはよくわからないのだけれど。

――弟くんってさ、なんか知らないけど難しい言葉知ってるよね？　どこで聞いた？

一度ラルクにそんなことを言われたことがあるけど、よくわからないとしか言えない。ただ年齢の嘘を吐いているわけではなくて、僕は正真正銘の１０歳である。
坑道は大樹の枝のように分かれていく。壁面はゴツゴツしているけれどその表面は濡れてぬらぬらしている。ここに、ぽっこりと、

コブだか水ぶくれだかそんな感じで天賦珠玉が生える。……

枝のように分かれているのだから、逆に言えば太い道を選んでいくと最後は入口につくという寸法だ。もっとも、僕らがいるのは「上層」と呼ばれる上澄みに過ぎなくて、「中層」や「下層」はまた全然違うらしい。そっちは凶悪なモンスターが出るので冒険者や、元冒険者の鉱山夫たちの出番だった。そしてもちろん、「中層」や「下層」のほうがよい品質の天賦珠玉が生える。

「見入ったって？　確かにきれいだけど、いつも見慣れてるだろ」

僕の背負っているリュックには天賦珠玉が9つ入っている。色合いは様々で、赤、青、黄色……と様々だ。大きさは僕の握りこぶしより二回りくらい大きい。

僕が今日取った天賦珠玉を思い浮かべる。

色はうっすらとした赤。内側から発光しており、文字が浮かんでいる。

【脚力強化★】

数日に1回見られるかどうかというレアなものもあって、青色の、

【火魔法★★】

なんてものも、今日は見つけられた。

「見慣れてるぅ？　これだから弟くんはなー」

「もったいぶってないでさっさと出してよ。なに、星3つが出たとか？」

この星の数が多ければ多いほどレアらしい。僕の感覚では星1つ

に対して星２つは１００に１つ。星３つは１，０００に１つくらいだ。ただ「中層」や「下層」はまた違うんだってさ。

僕は今までに星３つを１度しか見たことがない。星１つが冗談みたいなほどに、星３つは輝いていた。星３つともなると天賦珠玉は結構な高値で売れるらしいけれど、奴隷の僕が売値を知るよしもない。

「３つどころじゃないっつーの。しょうがないなあ、弟くんには見せてやろうかなぁ～」

「……や、どうせ出口で検査官に全部見せることになるじゃん」

奴隷が発掘してきた天賦珠玉は当然、すべて没収されるのである。そこで今日のノルマを達成したかどうかのチェックも行われる。

「ノリ悪いぞー！　つまんなーい！」

「いやそんなわかりやすく唇を尖らせられましても」

「見たくない？　見たくない？」

「わかったよ、わかったわかった、見たい見たい、見たいからこめかみに拳を当てないで。ぐりぐりしないで。痛たたたたっ！？」

「ふふっ、素直がいちばんよ、弟くん」

ラルクは腰にぶら下げた袋から――それを、取り出した。

この瞬間まで、僕はラルクの持ってきたものがせいぜい星４つのすっごくレアなものなんだろうなーくらいにしか思っていなかった。

だから、油断しきっていたのだ。

「うっ」

僕は思わず顔を背けた。なぜって、明かりが、強すぎるから。

光は虹色。

この強さは、星3つなんて比じゃない。

「星4つ……？　まぶしいよ」

しかも放たれる光の色は……虹色。

あらゆる系統に属さない「ユニーク特性」を持つ天賦珠玉だ。

「バーカ。弟くん、これが星4つの光かね？　これはね……」

ラルクは僕の耳元で囁いた。

楽しさを、抑えきれないというように。

興奮を、噛みしめるように。

去勢されたはずの欲望を、思い出したように。

――星6つだよ。

と。

そのまばゆい輝きの中央には、

【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】

という文字が浮かんでいた。

3

鉱山の入口は巨大な空洞があって木造住居がいくつも建てられてあった。平地にあるのは冒険者用の宿泊施設や来客用設備。鉱山夫の寝起きする場所はもっと端に追いやられていて――それどころか壁にへばりつくように垂直に展開していた。

手すりもない、細い木製の階段は岸壁に打ち込まれている。この様子を見ると「ああ、ここはダンジョン範囲外なんだなぁ」とわかる。なぜって、ダンジョンの壁面は光るものだけれどここは光らないし、ダンジョンの壁面は破損すると自動的にじわりじわりと修復するんだけどここは修復しない。刺さった木杭はそのままで何年も経過している。あるいは、何十年も？　それを考えると折れるのが怖くて渡れないので僕は気にしないようにしている。

大空洞は中央天井に穴が空いているので昼は明るく夜は暗い。当然、雨も落ちてくる。だけど空に行くに従ってすぼまっているので「壁面住居」はほとんど濡れないのがマシと言えばマシだった。

ずずずず……。

まただ。また地響きが聞こえる。最近はよく聞くような気がするけれど鉱山夫たちは誰も気にしていなかった。「いつものこった。地響きがするからって仕事は待っちゃくれねえ」と。それは、そのとおりではあるんだけど。

「揺れが収まった……」

「おーい、弟くん。なにしてんだよ。早く行こうぜ」

一日の汚れを濡らした布きれで拭いた僕とラルクは食堂へと向か

うところだった。

食堂は火を使うせいか、広さが必要なせいか、壁面ではなく地面に建てられてある。細長いスペースにはごちゃごちゃとテーブルに丸太を切っただけのイスが並べられてあって、鍋から立ち上るもうもうとした湯気はうまく外に逃げずに食堂中に充ちていた。

ジャガイモ、ニンジン、タマネギ、それに肉片が少々。辛めの香辛料でいっしょくたに煮込んだだけの食事だ。それに加えてパンがあるのだけれど、少々くたびれている竈で焼かれるパンはたまに真っ黒焦げだ。今日は無事だった。

根菜ばかりなのは日持ちするからだ。ごく稀に葉物が入るけれど鉱山夫たちには不人気で、僕は喜んでそれを食べている。葉っぱも食べた方が栄養になるから。

「すっげぇな、ラルク！　おめでとう！」

「やったわねえ、今日はお祝いで肉を増やしてあげようかねえ」

「ついにお前もここを出るんだなあ！　おめでとう！」

ラルクが星６つの天賦珠玉【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】を持ち帰ったという一報は、鉱山に轟いた。

鉱山夫たちからそんな言葉が次々に掛けられると、ラルクは少し微妙そうな顔で「ありがと」と言葉少なに返していた。

「坊主は小せえなあ。もっと食ってでかくなれ」

後ろから手が伸びてきて、強面のおじさんが僕の頭を無造作になでた。ニカッと笑うその顔に「これでも大きくなってるんだけどな」と小声で返答したのだけれど、きっと聞こえなかったろう。なんせ、食堂内は耳を塞がなければいけないほどうるさいのだから。

「あら弟くん。アンタももっと食べなきゃね。お肉オマケしとこう」

と、食堂のおばちゃんから僕が少しばかり肉を多めにもらえるのもいつものことだった。ちなみにおばちゃんの腕にも1本の入れ墨が走っている。ここにいるのはみんな奴隷だ。

鉄のスプーンを刺した木の器を持ってラルクといっしょに食堂を奥へと進む。

僕らがいつも使っているテーブルは、高さが低く、大人には使いにくいものだ。僕らにはちょうどいいんだけどね。

「ラルクの話でみんな持ちきりだね。なんせ星6つの天賦珠玉だ。これでラルクはめでたく奴隷年季も明ける」

僕らは奴隷だけれど、働きに応じて報酬が支払われる。星の数が増えれば増えるだけ報酬もいっしょに増え、その金額が一定額に達すると「年季明け」となって平民になれる。この、危険で暗くて湿った鉱山を出られる。

そりゃまあ、ラルクがいなくなっちゃうのは寂しいけど……ここにいる鉱山夫たちはみんな同じ「奴隷」という立場もあって助け合っている。僕みたいに「売られて」来た奴隷だけでなく「犯罪の償い」のために来ている奴隷もいるんだけど、ほんとうにこの人が罪を犯したの？　と思ってしまうくらい穏やかな人ばかりだ。左腕に、バングルのように青い入れ墨が彫られてあるのは奴隷の証拠。これが2本だと犯罪奴隷なんだ。僕とラルクは1本。大体半分くらいが犯罪奴隷。

ラルクがいなくなっても、大丈夫さ。

がやがやと騒がしい食堂内を見回せば、薄い布の服を着た男たち――稀に女の人もいるけれど、その全員ががっしりとした体格だ。

どう見ても、狸穴に潜れそうなのはラルクと僕しかいない。ラルクがいなくなれば僕が狸穴にひとりで潜ることになる……のは少し怖いけれど、いつか鉱山を出られることを思えばがんばれるし、い

つか僕よりも年下の子が入ってくるだろう。そのとき、近い年齢の仲間がいなかったらかわいそうだしね。

「僕はラルクがいなくてもなんとかやっていけそうだよ。ほら見て。こんなに筋肉もついてきたんだよ」

僕は腕を曲げて力を入れてみた。そこには力こぶが……うん、まあ、あると言えばあるだろ？　あるのだと思って見ればある。間違いなくある。信じたそこに道はある。

「……」

と、僕がなまっちょろい腕を見せていたのだけれど、ラルクはなにも言わなかった。

「ラルク？　どうしたの？」

「ん？　あー……。みんな、バカだなって」

「なっ！？」

急になにを言い出すんだ。

するとラルクは密やかに言う。

「考えてもみろよ……星６つの天賦珠玉なんていくらの値段がつくと思う？　国の１つが傾くほどの値段だぞ」

「えっ、そ、そうなの？」

「それを見つけたのはあたしとお前。だというのに手に入るのはあたしの身の自由だけ。おかしくない？　せめてお前だっていっしょに自由になったっていいだろ」

「僕は……だってアレを見つけたのはラルクだし」

「あたしとお前はセットで１日１０個の天賦珠玉がノルマになって

るんだ。だったらお前にも報酬が必要だろ？　それをあの野郎……」

ラルクは天賦珠玉の検査官に、報酬は僕のぶんも加えてくれと申し出ていた。

だけどそれはあっけなく断られた。

――こいつまでいなくなったら、誰が狸穴に潜るんだ。

今まで狸穴から出るのは星1つか星2つがせいぜいだと思われていた。だけどラルクが星6つを見つけてしまったせいで風向きが変わったのだ。

せめて僕のように身体の小さい鉱山夫が見つかるまでは僕を解放する気は鉱山側にはないのだろう。

その事情を知りつつもラルクは「がるるるる」と野獣のように牙を剥く。……おかしいな？　ラルクにも僕と同じ契約魔術が掛かっているはずなんだけど、明らかに僕よりもずっと欲望が出てるんだよね。

契約魔術も万能じゃないってことかもしれない。「強すぎる欲望を完全に封じ込めることはできない」って聞いたことがあるし。

「僕はいいよ……外に行きたいって気持ちもないし……」

「なにヘタレてんだ」

「痛っ」

デコピンされて僕はのけぞった。

「あーあ。こんなことなら星6つ、隠しときゃよかったな……そんであたしが鉱山を出るときにこっそり使っちまうんだ……」

中空を見つめながらラルクは言う。

「失敗したな……星６つだぞ……どんな力があるんだよ……」

彼女の視線の先には、ほこりをかぶり、蜘蛛の巣の張った天井の梁しかなかったのだけれど。

4

食事が終わると、僕とラルクはひとりぶんの食事を持って壁面住居の階段を上っていく。

食堂の騒ぎはこれからどんどん大きくなっていく。大人の鉱山夫はもっと危険な場所へと潜って天賦珠玉を探すのだけれど、そのぶん星も多い――と言っても僕らが星1つのところを星が2になる程度らしいけれど。星が多ければ報酬も増えるので彼らはその報酬を天引きにしてお酒を飲むのだ。僕が鼻をつまみたくなるようなキツイニオイのお酒だ。僕らはニオイから逃げるように階段を上がる。

その最上階にあるボロ屋に住んでいるのが、ヒンガ老人だった。

「ジイさん、飯持ってきたぞー」

「ラルク、ノックくらいしなっていつも言ってるじゃないか」

「いんだよ。別に。ジイさん相手に気ぃ遣ってどーすんだ」

ヒンガ老人に食事を届けるのが僕らの仕事だ。老人はこのボロ屋に住んでいて、鉱山夫たちが採めたときにケリをつける、言わば村長みたいな役割をしている。そのおかげでこの人は日々のノルマを免れているようだけれど。

しわくちゃな顔に、手入れのされていないボサボサの髪の毛が垂れている。あごのひげも長く、僕は老人がこの家から出ているのを見たことがない。トイレの問題があるから――トイレは共同トイレしかないし――家から出ているはずなんだけど。

藁の寝床を置けば一杯になるような壁面住居で、客用のイスが置かれてあるのなんてここくらいだろう。イスに座った老人は僕が差し出した木の器と鉄のスプーンを両手で丁寧に受け取った。

「よう来たな」
「あたしたちが来ないと、ジイさんだって干上がっちまうだろ」
「さて、どこまで話したものかな」

ラルクの軽口がヒンガ老人に響いたことはない。ラルクは僕を見て肩をすくめて見せたけれど、大人しくイスに座った。
食事をしながら、しわがれた声でヒンガ老人が語る言葉はこの世界の知識だ。
僕たちは、寝る前のこの時間を使って老人からいろいろと教わっている――ラルクは大抵居眠りしてしまうんだけど。

「ラルク、お前は星6つの天賦珠玉を見つけたそうじゃな」
「そうそう！　それを聞きたかったんだよ！　ジイさん、【影王魔剣術（シャドウキング）】ってスキルのこと知ってるか？　どんな効果なんだ？」
「知らぬのう」
「知らねーのかよ！　あーあ、つっかえねー」
「ラルク！」

あまりにひどい言葉遣いに僕はラルクをたしなめたが、ラルクは僕のことなんて気にせずに「あーあ」と天を仰ぐし、ヒンガ老人もまったく気にした様子もなく真っ先に肉を食べていた。この老人はまだまだ元気だ。

「人には等しく、8枠の天賦（スキル）ホルダーがある。【腕力強化★】のような1枠ならよいが、レアなスキルは4枠や5枠、あるいは8枠すべてを使ってしまうでのう。天賦は慎重に選ばなければならぬ」
「知ってるよジイさん。あたしは【腕力強化★】と【スタミナ強化★】の2つを持ってるし。あと6つってことだろ？」

またもラルクは「あーあ」とぼやいている。あと6枠。彼女が見

つけた星６つだとぴったり当てはまる。

「この天賦珠玉は発掘されると国がすべて買い上げる。そしてそれを民に卸す」

「どれくらいの価値があるんですか？」

僕がたずねると、ボサボサの白髪の向こうで瞳が僕へと向いた。琥珀色の目だ。

「星１つは、銀貨１枚。街の食堂で飯が３回食えるほど。星２つは銀貨１００枚」

「１００枚！？」

毎日星１つを１０個発掘しても、食事を３０回も食べられるってことじゃないか……。いったいこの鉱山はどれくらいの利益を生んでいるんだろう？　それを考えると僕らだってそこそこ稼いでいるってことになるじゃないか。

「……ちなみに、星６つは？」

「値がつかぬ」

「……」

僕がラルクを見ると、「ほらな？」という感じでラルクも僕を見ていた。

「おそらく国の宝物庫に納められる。国難が起きた際に、国軍いちばんの剣の使い手に使われることじゃろう」

「あーあ……せっかくあたしが見つけた天賦珠玉も、宝物庫で腐らせられるんだよ……」

「天賦珠玉は腐らないんじゃないっけ？」

「もののたとえだよバカ弟」

ムスッとしたラルクの毒舌が僕へと向いた。これはしばらくそっとしておいたほうがよさそうだ。

「えっと、ヒンガ老人。でもふつうの人はスキル枠８つを全部使うんですよね？」

「左様。木こりは【斧術★★】を、魔法使いは【火魔法★★】を、奴隷商人は【隷属権能（スレイブマスター）★★★】を。星１つで８つを埋める者はまずおらん」

「そうしたら国が危機のときに、スキル枠が６つも空いている人がいるんですか」

「世界には、数が少ないながらも【オーブ着脱★★★★】というスキルがある」

天賦は取り外しができる、という情報は衝撃だった。僕が思っていた以上に天賦の持つ可能性は限りがないのかもしれない。

「とは言っても、僕たち奴隷は契約魔術に縛られて天賦珠玉を使えないんですよね？」

「当然じゃ。『聖剣術』や『八道魔法』なんていう極めて有用かつ希少な天賦珠玉は莫大な金額で取引されるでの。拾った奴隷が使わんようにせねばなるまい」

「スキルがあればどんな未来も切り開ける……だけど僕らにはスキルを手にできるような未来もない……」

「奴隷としてここにいる以上、未来を望むのはおこがましいことじゃ」

違いない、と言ってラルクはげらげら笑い出した。だけど彼女の笑いは空虚だと僕は思った。よくは、わからないけれど、なんとな

くそんな気がしたんだ。ラルクは本気では笑っていないんだって。

「ヒンガ老人。最高の星は8つってことですよね。どんなスキルがあるんですか？」

「……大それたことを聞くものでない」

不意に老人の目が、恐怖に震えた。だけれどその目は今までよりもずっと賢そうで、この人はこんなところにいるべきではないのではないかと僕の胸に疑問がよぎる。

「8を超える星も存在する……」

「え？」

「それらは人には扱えぬもの。ワシは一度見たことがある……この鉱山倉庫の奥に眠っている人智を越えた天賦珠玉（オーバーリミット・スキルオーブ）を……」

倉庫、とは、たぶん「天賦珠玉倉庫」のことだと思う。

僕らが持ってきた天賦珠玉は検査官がチェックし、目録を作り、倉庫へと運んでいく。その倉庫だけは木造建築が並んでいるこの一帯では異質の、石造りの建物だった。両開きの鉄の扉はあちこち錆びているけれど、侵入者を絶対に通さないという強い意志を感じさせる。

1日の終わり、発掘された天賦珠玉が運び込まれる夕刻には倉庫が開いている。だけれど周囲は鉱山兵が固めている。彼らはそろって鍋の蓋みたいな銀の小盾を装備していて、とんがった鉄兜を装着していた。

あの倉庫に、人智を越えた天賦珠玉がある？

今まで聞いたこともない。

「それって、どんな天賦――」

「話はここまでじゃ。さあ、今日はもう帰れ。今日は早う寝るんじ

ゃ。坊主は眠くないかもしれんが、寝台で目をつむればやがて眠りが訪れる」

ずずずずずず……。

また、地響きがあった。ぱらりと天井から砂が落ちてきた。

「鉱山の怒りに触れるでない」

ヒンガ老人は怖い顔をして言ったけれど、それはあまり効果がなかった。僕の横ではすでにラルクがうつらうつらと船を漕いでいたし。

僕は一一日々に満足していた。

そして、変わり映えのしない毎日が続くのだと思っていた。

「おっ。今日はこの狸穴行ってみるか」

「ええ？　ここって先月も入って、なんにもなかったところじゃないか」

「新しく生えてるかもしれないだろーが。ジイさんが言うには天賦珠玉は夜更けに生まれるんだろ？」

「崖があるからイヤなんだよね……」

「そういうところにこそレアな天賦珠玉がある。あたしの鼻がそう言ってるね！」

「はいはい……わかったよ」

「あーあ。次見つけたら今度こそは隠しておくんだ、あたし」

僕はラルクの後に続いて狸穴一一にしてはちょっと大きな通路を

進んでいく。大人が通るには少々心許ないところだけれど。
崖に出ると、足元が崩れるんじゃないかとびくびくしてしまう。ラルクが言うには「ダンジョンが崩落するわけないだろ」ということだったけど、ここで地響きが来たらマズイよね、絶対。
崖、というよりとんでもない縦穴は、下から上へと風が吹き抜ける。
はるか下の方から声が聞こえてきた。どうやら何階層も下、縦穴に突き出た広場のような場所で、冒険者が戦っているようだった。

「おー、おー。派手な魔法使ってらー」
「すごっ……」

どおん、と爆発音がして巨大な炎が一瞬、広場を明るくする。オオトカゲみたいなモンスターが数体いて冒険者が剣を振り回す。

「さ。あたしたちはさっさと行くか」
「うん……」
「なんだよ。弟くんは冒険者になりたいのか？」
「僕は、別に」

――なにかを望むことは奴隷の身分では「おこがましい」というのはヒンガ老人の言うとおりだ。

「……僕らが通る場所よりも深いところは、全然雰囲気が違うんだよね？」
「そうらしーなー。なんでも巨大な滝があったり、自分の姿が映る鏡ってのがあるところもあったり、目を開けていられないほどの風が吹く通路もあるんだとか」
「へえ」
「あっちは凶悪なモンスターがごろごろいるんだってさ。そのぶん、

レアな天賦珠玉も出やすいみたいだけど」
「今の僕らには関係ないことだったね」
「……そーだな。今のあたしらにはな」

――でも。

「あーあ」とラルクが自分の失敗を嘆くように。

ヒンガ老人が時折、賢者のような目をするように。

僕が、なぜだかわからないけれど、多くの知識を望むように。

変わり映えのしない毎日の中にも少しずつの変化が訪れた。
考えてみれば、すべての出来事が小さな歯車のように噛み合って、大きな力を生んだのかもしれない――僕がこんなことを口にすればラルクはきっと「お前はどこでそんな言葉を聞いてくるんだ？」って言うだろうけれど。

「あー！　もう、長い道を延々と来て天賦珠玉ゼロかよー！」
「だから言ったじゃないか。あの崖をまた歩いて戻るのはイヤだなぁ……」
「しょーがねーだろ。あたしの鼻も鈍ったかな？」

あーあ、とラルクはもう一度言った。

5（前書き）

スキルを手に入れるところまで更新してしまいます。

5

すべてはこの日に、端を発する。

鉱山夫の朝は早い。６の鐘で起こされ、６の半鐘で鉱山へと出発するために坑道入り口へと集まる。僕は昨日と同じスープで硬くなったパンをふやかせて、口に詰め込んだ。昼食なんて優雅なものはない。しっかり食べておかないと１日もたないからだ。

ラルクといっしょに食堂を出る。

大空洞の天井を見上げると、褪めたような青い空が見える。夏は涼しく冬は暖かいこの鉱山では、切り取られた空の色だけが季節を感じさせる。

今日は春の空だった。

「なあ、弟くんよ」

「なに？」

眠い目をこすりながら僕は返事をした。

「アンタの黒髪と黒目、あたしは好きだなぁ」

「？　急になんだよ」

そんなこと、言われたこともなかった。

僕の髪の毛は黒く、目も黒い。それはなかなか珍しい特徴らしく――「凶兆」だなんて言われたこともあった。

兄弟がいる中で、僕だけ目の敵にされて売られる原因になったのはこの「黒」のせいだった。

だけれどこの鉱山では誰も僕の髪の色なんて気にもしなかった。

みんな明るく、大雑把で、間が抜けていた。

「うぐっ！？」

「ラ、ラルク！？　どうしたの？」

「ううぅっ……あたしちょっとお便所……」

「ええ！？　今から朝会だよ！？」

「なんとか誤魔化しといて！　じゃ！」

お腹を抱えてラルクは走っていった。

「なんなんだよ、まったく……」

らしくないな、と思った。ラルクらしくない。トイレに行ったことじゃなく、僕の見た目を褒めたことだ。

僕はひとりで朝会へと参加した。鉱山夫が集まって一段高いところにいる鉱山長の話を聞く、ただそれだけのいつもと変わらない日常。

坑道への入口前は広場になっていて、そこに三々五々、鉱山夫が集まってくる。だけれど様子がなんだかおかしい。いつもの倍以上、鉱山兵がいるのだ。

ほの暗い早朝なので、鉱山兵たちは松明を持っていた。ちりちりとした火の粉が宙を舞っている。

坑道入り口は巨大な穴だ。僕ら鉱山夫が一斉に突撃しても悠々呑み込んでしまうほど。その先に進めば進むほどだんだん細くなり狸穴なんてものまで出てくるのだけど。

それはまあ、置いておいて。

鉱山兵は一か所に集まっていた。その中心にいるのは鉱山長――でっぷりと太り、シルクハットで頭頂部のハゲを隠している男――と、もうひとりいた。

「……誰だろ？」

鉱山長に負けず劣らずでっぷりしているものの、髪はふさふさで後ろになでつけてあった。

目は逆三角形の吊り目で、周囲を威圧している。あの鉱山長が……僕らの顔も名前も一向に覚えようともしない（僕に名前がないというのはさておき）威張り散らすだけの存在である鉱山長が、へこへこしている。

「全員聞け！　これから本鉱山六天鉱山（シックスマイン）の所有者にして本キースグラン連邦の公爵であらせられるアッヘンバッハ様の貴重なお話がある！　膝を地面につけ！」

鉱山兵の大声で、鉱山夫たちはお互いの顔を見やった。「どうする？」「なんだよ公爵って？」みたいな反応だ。だがひとりが地面に膝をつくと、他の鉱山夫たちも膝をつき始め、僕もそれに倣った。固い地面に膝小僧が痛い……。

僕は初めてこの鉱山が「キースグラン連邦」という連邦国家に所属していることを知った。誰もそんなことを教えてくれなかったし、坑道に潜ってモンスターの影に怯えながら狸穴を突き進むのに、国の名前なんてなんの助けにもならなかったしね。

「ふぅむ……いつ来てもじめじめして不快な場所だな」

「申し訳ありません、公爵閣下」

甲高い声で文句を言ったのが公爵で、へこへこしているのはやっぱり鉱山長だ。鉱山の中がじめじめしているのなんて当然のことだし、なにを謝っているんだろうね。

「おお、臭い臭い。一段高いところではにおいが上ってくるようだ」

「申し訳ありません、公爵閣下……奴隷たちにはきちんと身体を拭くように言っておきます」
「もういい。ここには二度と来ないだけだ」

そんなやりとりを、僕ら鉱山夫たちはぼんやりと眺めている。不愉快なことを言われているような気がするものの、ささくれだった気持ちが起きないのだ。これも奴隷になるときに掛けられた契約魔術のせいなんだろうか？

「ではさっさと終わらせるぞ。――先日、この鉱山で星６つの天賦珠玉が発掘されたと聞いた。その視察に我は来たのである」

星６つ！　きっとラルクが見つけた天賦珠玉だ。
この国の偉い人が来るほどのものだったなんて。ラルクは確かに値段をつけたら「国が傾く」と言ったし、ヒンガ老人も「値がつけられぬ」と言っていたけれど。

「はっ、こちらにそのオーブがございます」

鉱山兵のひとりが、盆に載せられた天賦珠玉を運んでくる。それには紫色の布が掛けられてあって中が見えない。
恭しく差し出された盆を、一段高いところからアッヘンバッハ公爵がのぞき込み、パッ、とその布を剥いだ。
オオッ……と声を上げたのは鉱山夫たちだ。
放たれた虹色の輝きは確かにあの日、僕がラルクに見せてもらったそれだ。まだこの鉱山にあったんだなぁ。

「これが……。なるほど、ユニーク特性の天賦珠玉であるな」
「ははっ」
「早速使いたいところであるが、これは連邦政府の長であり我が従

兄であるゲッフェルト王が是非とも見たいと仰せだ。よって、ゲッフェルト王と協議し、この天賦珠玉の使い道を決定する」

「ははっ」

なんだかすごいことになってきた。ラルクが見つけた天賦珠玉がどこぞの王様のところに運ばれるんだって！　……そのラルクはトイレに行ったまま戻ってこないんだけど。

「ついては、これを見つけた奴隷を、本日をもって奴隷身分を解放し、平民とする」

偉そうにアッヘンバッハ公爵は言ったけれど、その言葉は予想の範疇だったので鉱山夫たちも「お～」くらいの反応だった。

「この天賦珠玉を見つけた者を、これへ！」

その声が掛かって、鉱山夫たちが見たのは――僕だった。

「え？」

「ああ、そうだそうだ。お前だったな。こっちへこい」

見知った顔の検査官が走ってきて僕の腕をつかんで立たせる。

「いや、違っ、その、僕じゃなくてラルクが……」

「いいから早くしろ」

僕は引っ張られるようにアッヘンバッハ公爵の前へと連れて行かれる。それを止められる人間は誰もいない。だって、鉱山夫からしたら僕が奴隷解放されようがラルクだろうがどっちでも変わらないのだから。

違う、違うよ！　僕じゃなくてラルクなんだ。僕みたいな無気力少年じゃなく、ラルクみたいに前向きで、活発で、がつがつしてる人こそが鉱山の外に出ていくべきだ。そうだろ？

声を上げたかったのに、なんだか言葉が出てこなかった。首の周りにはなにもないのに、僕の首は不可思議な圧迫感を覚えていた。息苦しいんだ。

「こ、こやつが……？」

公爵は、僕を見て顔をゆがめた。

「なんだこの黒髪は！？　凶事の象徴ではないか！　ええい、近づけるなァッ！！」

突然の大声に、みんながぎょっとする。

「鉱山長！」
「は、はいっ」
「これを生かしておけばろくなことにはならん！　殺せ！」
「……は？」
「聞こえなかったのか、殺せと言ったのだ！」
「いいいやしかしでございますね、公爵閣下、この者が星６つの天賦珠玉を……」
「うるさい！　お前がやらぬのならば我がやる」

公爵は、後ろにいた鉱山兵の、腰に吊られていた剣を引き抜いた。僕はその銀色の刃に松明の光が映じるのをぼんやりと眺めていた。このまま突っ立っていれば死ぬとわかっているのに身体が動かないのだ――ああ、契約魔術のせいかと理性では気づいているのに身体は動かない。

嫌悪感に満ちたまなざしが僕に向けられている。なんで。どうして。黒髪黒目がそんなに悪いことなの？　僕にはわからない。わからないんだ。

「ちょっと待てよ！」

そこへ割り込んできた声は、

「ウチの弟くんがなにしたんだよ！？」

確認するまでもない――僕の姉のものだった。

「なんだお前は！？」
「あたしはラルク」
「なんでこんな小汚い子どもが出てくるのだ！　鉱山長！」
「は、ははっ」
「まとめて処分しろ、今すぐに！」
「し、しかし……」
「私の言うことが聞けんのかァァッ！」

公爵の絶叫が響き渡ったときだった。

ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず

ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずずず
ずずずずずずずずずずずず

6（前書き）

人が死ぬ表現があります。

6

「な、ななんなんっ！？」

足元が揺れ、僕は立っていられなくなった。その場に尻餅をついた僕が見上げたのは――ラルクの背中だった。

彼女の顔が見えなかった。

それがたまらなく不安だったけれど、それどころじゃなかった。今まで経験したこともない尋常じゃない地響きに周囲は大パニックに陥った。

誰かが叫び、誰かが地面にうずくまり、誰かが神の名を呼んだ。

「落ち着けっ、お前たちこれは――」

鉱山長の静止の声は無意味だった。

「あ」

僕は呆けた声を上げた。顔を空へと向けていたからわかったんだ。空洞の抜ける青い空――壁面部分が崩れて落ちてくる。ここはダンジョンの外。破壊もできるし崩落もする。

危ない、とか、逃げて、とか言う余裕もなかった。巨大な岩が降り注いで人々の悲鳴があちこちから上がった。

そして、僕は見てしまったんだ。

「いったいなんなのだ、これは……ぐぇっ」

一段高いところで、頭を抱えてうずくまっていた公爵の頭に、そ

の頭よりも大きな岩がぶつかったところを。台すらを砕いて公爵はでんぐり返しで地面に落ちて大の字に広がったところを。首から上がなくなった公爵の身体がぴくんぴくんと動いたところを。
その直後、僕は身体に異変を感じた。
突如体内に暴風が吹き荒れたような異変だ。

「あ……あ、あ、あ」

凍える冬。
納屋で、布団もなくたったひとりで過ごした夜。
寂しい。つらい。悲しい。苦しい。どうして。僕だけ。こんな目に。痛い。止めて。つらい。寒い。ひとりはイヤだ。寂しい。痛い。寒い。どうして。なんで。僕だけ。みんなは。僕だけ。つらい。こんな目に。イヤだ。イヤだ。イヤだ。イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ—————————。

「あああああああああああああ！！！！！！！！」

大嫌いだった。家族なんて。僕をひとりのけものにして、石を投げ、兄弟は僕からご飯を取り上げた。父も母も僕を見て見ぬフリをした。「そうしないと黒髪黒目のお前の仲間だと思われる」だって？　僕は知っている。何度となく僕を殺そうとした父を。「他の兄弟を守るためなの」だって？　僕は知っている。僕が浮気によって生まれた子ではないかと夫婦ゲンカになって、父は母を拳で殴り、それなら私がこの手で殺すからと媚びるように言った母を。
僕はなんとか殺されずに済んだ。夜には納屋に逃げたからだ。だけれど昼に受けた傷が痛くて、苦しくて、泣きたくて、でもそれ以上につらかったのが空腹で。

そうして行商人が村に訪れたとき、僕は立候補したのだ。自らを売りたいと。そうしなければいつしか親に殺されるだろうから。

「おうぇえええええええっ」

僕は嘔吐していた。先ほど食べたものをすべて吐き出していた。胃液まみれのそこにあったのは腐った肉を無理に煮込んだスープだ。ジャガイモもニンジンも変色していて本来なら食べられたものではない。パンだって、粗悪な麦を雑に挽いて焼いただけの代物だ。焼きすぎた、黒々とした塊が胃液の中に転がっていた。

今の今まで、まやかしにかかっていたのだ。僕は、あんな家畜のエサ未満のものを「腹ごしらえ」だなんて言って食べていた。

そうか、そうだったんだ。

それはすべて、

「契約魔術のまやかし、だったんだ……」

いきなりよみがえった苦しい記憶、さらには気づかされた劣悪な食事で、僕は両目から涙をこぼしていた。だけれど滲む視界でもその青さははっきりわかる——ガリガリの白い腕に、バングルのような入れ墨が一本入っている。

すべては、契約魔術によってなされたものだった。

奴隷が反抗的にならないように。特に犯罪奴隷が妙な気を起こさないように。奴隷同士がトラブルを起こさないように。まるで催眠術をかけて人を羊の群れに変えてしまうように——彼らは僕らに契約魔術を掛けた。

だけれどその魔術は解けた。

なぜか——決まっている。僕らの奴隷の「持ち主」であり、契約魔術の「主」に当たる公爵が死んだからだ。

ワァッ――。

喚声が上がって僕はハッとした。

僕のようにうずくまって嘔吐している奴隷が半分くらいいたけれど、残りの半分はすでに行動を起こしていた。彼らの腕にある入れ墨は2本。犯罪奴隷たちだ。

手の早い奴隷は鉱山兵を殴り倒すと、剣を奪ってためらわずに喉笛を掻き切った。

「ぎゃっはははははは！　これで俺は自由だぞ！」

ああ、あの人は、僕が食堂で並んでいると後ろから頭をなでて「坊主は小せえなあ。もっと食ってでかくなれ」と笑っていた人じゃないか……。

それにあそこで鉱山兵を張り飛ばしているのは、坑道で重い荷物を持ってふらふらしていた僕を助けてくれた人……。

あそこで吐いている奴隷を蹴飛ばして道を作っているのは、坑道でモンスターに遭遇したときにどうしたらいいか教えてくれた人……。

一斉に、契約魔術が解けたんだ。

そうして彼らの心にも多くの記憶と、感情とがよみがえったに違いない。そんな彼らを縛るものはもうなにひとつないのだ。

もちろん奴隷になるタイミングで、彼らの主要なスキルは外されているのだろう。スキルを着脱できるスキルがあるってヒンガ老人も言っていたし。それでも奴隷たちは、特に犯罪奴隷たちは強かった。訓練されているにしても練度が低い鉱山兵よりも、ずっと。

「鉱山兵、奴隷どもを鎮圧しろ！　早くしろ！　手の空いている冒険者を投入してもいい！」

鉱山長が叫んでいる。その顔を見て、僕は目を疑った。
この人は――こんなにも目を血走らせて、欲にまみれた醜悪な顔だったんだ――。
奴隷として従順にさせるために、つらいことや苦しいことのすべてにフタをされていたらしい。それだけでなく悪感情を催すあらゆるものがシャットアウトされていた。

「うわっ!?　お、おい、お前！　それは――」
「――これは元々、あたしのだ!!」

よく知った声が聞こえて、僕はそちらを見た。
僕が「姉」だと思い、彼女もまた「弟」だと呼んでくれたその人は、今、手に虹色に輝く天賦珠玉を持っていた。

（あれは……よくない光だ）

肌が粟立つのを感じた。ラルクが手にしていた天賦珠玉は確かに虹色だったのだけれど、さっきまで感じていた純粋な美しさよりも、今はどこか、未知なるなにかににらまれているかのような不気味さを覚えたのだ。

「ラルク、ダメっ――」

僕の声は、届かなかった。
天に届けとばかりに細い右手を伸ばしたラルク。虹色の天賦珠玉はひときわ大きく輝くと、彼女の身体に吸い込まれていったのだ。

「これが、【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】……！　これが、星６つの力……!!」

楽しさに、こらえきれないとばかりに唇が震え、笑い声が漏れるラルク。
だけれど彼女を放っておくほど鉱山長ものんびりとはしていなかった。

「こいつを捕らえろ！　いや、腕と足を切っても構わん、無力化するんだ！　だが殺すなよ！？　さもないと天賦珠玉を抜き出せなくなる！！」

ワァッ、と声を上げて鉱山兵たちがラルクへと殺到する。そこにもはや手加減はない。剣を抜き、小さな盾を構えて突進する。

「来い、あたしの魔剣」

彼女が手をかざすと、そこから三日月のような黒いなにかが宙を滑って飛んでいく。
それは鉱山兵数人を巻き込むと、彼らの身体を――胴体を真っ二つにして、盾すらも破壊して、消えた。

「わあああああっ！？」

見ていた鉱山長は恐れおののき、ラルクに背を向けて走り出した。
彼はラルクから、あまりにも近いところにいた。
鉱山長だけではない。ラルクを攻撃するよう命令された鉱山兵たちもまた逃げ出していた。

「逃げてんじゃねーよ」

上から下へと振り下ろされた手。ほとばしった黒い影は鉱山長を縦真っ二つにした。鉱山長は右と左に身体が分かれ、内臓と血をま

き散らして絶命する。
うぶっ……僕もまた強烈な嘔吐感に襲われたけれど、先ほど全部吐いてしまった後だったのでもはやなにも出なかった。

「……」

地べたに座り込む僕を、ラルクが見下ろしていた。
近くの鉱山兵が落とした松明が、ラルクの紫色の瞳に映じている。

「弟くん」

僕がこのとき感じたのは恐怖だった。
痩せた彼女の顔はそれでも整っていた。人を殺したせいか、あるいは別の感情か、わからないけれど彼女の瞳には憂いがよぎっていた。

タスケテ。

そんな声が聞こえたような気がした。いや、ただの幻聴だ。現にラルクは口を開いていないじゃないか？

「立てるか」

差し伸べられた手に、チリッ、と黒い影が見えた。

「ひっ」

反射的に後じさってしまった僕を見て、ラルクはハッとして手を引っ込める。

「……」

ラルクは僕の目を見ていた。僕もラルクの顔を見たかった。でも、見られなかった。

ラルクはやがてふいっと顔を背け、

「……道は切り開く。お前も上手く逃げるんだ」

言葉を残して小走りに去っていった。

「あ……」

僕は――その背中に言うべき言葉があるのを知っていた。言うべき言葉は1つじゃなく、10や100もあったに違いない。

だというのになにも言えなかった。差し伸べられた彼女の手を拒否した後ろめたさから？　人殺しの彼女の手なんて取れない？　自分もまた殺されるかと思った？

「さよなら、弟くん――」

僕は、バカだ。彼女の手を取らなかった。

このことをずっと後悔し続けるに違いないとわかっているのに、それでもなお、声が出なかったんだ。

7（前書き）

今日3話更新しているのでご注意ください。

7

悲鳴と怒号が響き渡る。僕はよろよろと立ち上がると、自分がなにをしなければいけないのかわからなかった。周囲は逃げようとする大半の奴隷たちと、逃げずにただ震えている奴隷たちとに分かれていた。

逃げ出す奴隷の多くが向かったのは天賦珠玉が収められている倉庫だった。【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】を取り出すために倉庫の扉は開かれていた。危険なスキルを取り上げられていた奴隷たちは、逆に言えば「スキルを入れる余裕」がある。それに、天賦珠玉を持ち出せば高く売れる、そんなことも考えたのかもしれない。

そこでは倉庫を守る鉱山兵と奴隷たちとの間で血みどろの激戦が繰り広げられていた。

（僕は……どうなるんだ？）

このままぼけっと突っ立っていても、やがて鉱山兵によって捕まって、また別の「主」を設定された契約魔術によって奴隷に戻るだけだ。

（……イヤだ。まやかしの生活に戻るのは）

僕はこの鉱山での生活に慣れ、「そう悪くないじゃないか。少なくとも兄弟に忌み嫌われて食事を抜かれるよりは」なんて考えていたけれど、それが契約魔術による幻想だったとわかると二度とあの境遇には戻りたくない。

かといって、生まれ故郷にも戻りたくない。

ではどうする――決まっている。自分で「生き抜く力」を身につ

けるんだ。

（……ラルク）

彼女は真っ先にその「生き抜く力」を手に入れた。そして僕に救いの手を差し伸べた……。

（今は、彼女のことを考えるな）

ここに残った僕にできることは、１つしかない。倉庫に行こう。そして天賦珠玉を手に入れるのだ。幸か不幸か僕はスキルを１つも取得していないからなんでも吸収できる。

倉庫へと向かうと、奴隷たちが優勢で決着がつきそうだった。こんなところで無駄死にしたくはない鉱山兵と後がない奴隷では意気込みが違う。倉庫に雪崩れ込む奴隷たちについて僕もまた倉庫内へと侵入した。

「こういうふうになってるんだ……！」

倉庫は広く、いくつもの棚が置かれてあった。棚のすべてに穴がくりぬかれてあって、そこに天賦珠玉が置けるようになっている。だけれど、今、棚のほとんどは空だった。

「クソッタレ！　めぼしいスキルは出荷した後かよ！」
「星１なんて要らねえ！」
「要らねえなら寄越せや！」
「ああッ！？　これは売るんだよ！」

残ったわずかな天賦珠玉の取り合いで奴隷同士の殺し合いが始まりかねなかったけれど、

「おい、奥に扉があるぞ！」

奴隷たちは一斉にそちらを向いた。鍵の掛かっていた鉄扉は、必死の形相でやってくる奴隷たちの前には無力だった。彼らが何度も何度も剣や盾を振り下ろすとカギは壊れ、扉が開いた。

「うおおおおおっ！　なんだこりゃ！」
「レアオーブだらけじゃねえか！」

扉から光が漏れてくる。奴隷たちはその小部屋に殺到すると、オーブを手にしては吸収していく。

「てめえ、それは俺が目をつけてたんだ！」
「バカが、先に取ったもんの勝ち――いでえ！？」

横から剣が突き出され、奴隷の手から天賦珠玉が落ちた。その青色の珠はまばゆいばかりの光を纏って僕の足元に転がってきたのだ。

【四元魔法★★★★】

と表示されたそれは、星４つ。ラルクの手に入れた星６つをのぞけば見たこともないレアなオーブだった。僕があわてて拾おうとしたとき、横からぬっと影が割って入った。

「ガキが、すっこんでな！」
「うぐっ！？」

真横から蹴り飛ばされた僕は倉庫の地面にバウンドした。胃の中はカラッポだったけれど、お腹がちぎれるほどに痛い。

「アハハハ！　運が回ってきたじゃないのさ！」

星４つの天賦珠玉を手にして笑っていたのは――食堂のおばちゃんだった。光は彼女の身体に吸い込まれる。

「てめっ、ババア！」

「返せ！」

「アハハハ！　ウスノロどもが、消えな！」

おばちゃんが右手をかざすと、そこから強風が発生し、奴隷ふたりが倉庫の壁に叩きつけられる。

（すごい……天賦珠玉ひとつで、こんな力を手に入れられるのか？）

魔法の巻き添えを食ってはかなわないと、奴隷たちは小部屋から飛び出した。もちろん、もはや天賦珠玉はひとつも残っていなかった。

「クソッ、あのババア、覚えてろ……」

壁に叩きつけられた奴隷たちもまた倉庫から外へと出ていく。おばちゃんはもうとっくに出てしまっていた。

「なにも、ない……」

がらんとした倉庫に取り残されていたのは僕だけだった。

痛むお腹を押さえながらよろよろと小部屋へと向かうけれど、薄暗いそこにはやっぱりなにもなかった――ん？

「あれ？　１つ、転がって――ハッ」

僕はあわてて口を両手で押さえた。天賦珠玉には人間の感覚を高めるものもあるという。ふと漏らした声を聞かれてはたまらない。

僕は恐る恐るそれへと近づいた。

ごくり、とつばを呑んだ。

それは真っ黒な天賦珠玉だった。中央に虹色の点があって、光を吸い込むように回転している。

【森羅万象（ワールド・ルーラー）★★★★★★★★★★】

あり得ない、天賦珠玉。

――８を超える星も存在する……。

――え？

――それらは人には扱えぬもの。ワシは一度見たことがある……

この鉱山倉庫の奥に眠っている人智を越えた天賦珠玉（オーバーリミット・スキルオーブ）を……。

これが、そうなんだ。人智かどうかはわからないけれど、限界（オーバー）を超えた天賦珠玉（リミット・スキルオーブ）とはこれなんだ。

僕はなぜだか、この天賦珠玉に呼ばれている気がした。

指先をそっと伸ばし、珠の表面に触れる。つるりとした手触りを期待していたのに僕の指先はとぷんっと水面に触れたかのように珠へとめり込んだ。

「あ……」

黒い表面が割れ、中から虹色の光がほとばしる。光は奔流のようにうねり、幾筋にも分かれ、小部屋を駈け巡り、僕の額へと飛び込んで来た。

「あ、あ、あ、あああああああああああッ！」

僕の目に見えたのは小部屋の壁を越え、大空洞を越え、鉱山を越え、雲を越え、大気圏を越え、そこに広がる宇宙だ。

「そう、だったんだ……」

僕はこのとき、知った。

「だから、僕はこの天賦珠玉が使えたんだ……」

過去の心の傷をえぐられ、凄惨な殺人をいくつも見て、さらには蹴り飛ばされ——姉の手を払いのけ、散々な目に遭っているというのに今の僕は清々しいような気持ちになった。

「……僕がこんなふうに異世界転生するだなんて。前世と、今世と、ふたりぶんの人生があるから僕のスキル枠は倍の１６もあるんだ」

そう、僕にはちゃんと名前があった。

「僕は晴海礼治。高校生のときに死んで……この世界に転生した」

＊　＊

窓の外は真っ暗になっていた。

教室にひとり残り、慣れないキーボードをぽちぽちと叩いてた僕は、「うん……」とひとつ伸びをした。

「ようやく終わったぁ～……疲れた」

文化祭のクラス出し物、お化け屋敷。そんなありきたりなものでも、怠惰で保守的な担任教師は「予算と計画。危険防止のための施策内容をまとめろ」とクラスに投げた。で、クラス委員は僕に「晴海くん、やってくれるよねぇ～？」と押しつけて帰っていったのだ。

この仕事は、仕事のための仕事。どうせ書類がまとまっても担任が見るだけで終わり。そんな無駄なことに時間を割きたくない――彼からはそういう気配が透けて見えた。

「はー……帰って勉強しよ」

誰かが僕のためになにかをしてくれるなんてことはほとんどなかったように思う。ただこうして他人から「使われ」、「感謝もされない」日々を僕は送っていた。

だけど勉強は僕を裏切らない。勉強すればするだけテストの点数は伸びるし、志望の大学ランクも上げていける。今の僕にとって楽しいことは「勉強」だった。

……そんなの虚しい、って？

確かに！　そりゃまあ、僕だって女子と甘酸っぱい高校生活を送りたかったけれども！

「この低い身長じゃなぁ……」

と学校を出てギコギコ自転車を漕ぎながら、僕は小さく産まれてなかなか育てなかった自分の身体を恨むのだった――そんなふうに他のことに気を取られていたのがいけなかった。

自転車は車道から滑り落ちた。僕は先日の雨によって増水した用水路にはまり込んで、溺死した。

＊　＊

手に入れた天賦が【森羅万象（ワールド・ルーラー）★★★★★★★★★★】がどんな効果を持っているかはすぐにわかった。

頭に流れ込んでくる様々な情報こそがこの天賦の真髄。たとえば空を見上げれば、これが春の空だということがわかり、夜半に一雨降るだろうこともわかる。なんとも言えない感覚だった。目に見える範囲の事象がわかってしまう、全能感。

「これが……世界（ワールド・ルーラー）を統べる者……！」

8（前書き）

朝に3話更新しています。

8

力を手にしたラルクの気持ちがわかる気がしたけれど、彼女のように強い欲求は感じず、僕はただ淡々としていた。

……鉱山兵が増員されている。寝ていた冒険者たちも起こされて鉱山兵側に組み込まれている。僕ら奴隷は無地の服を着ているからすぐにわかってしまう。このままでは鎮圧されるのも時間の問題だ。

「だけど、僕なら逃げられる」

大空洞にいる人数が手に取るようにわかった。この隙を突けばいくらでも逃げる方法があるのだ。

僕は倉庫から飛び出した。そして向かった――「壁面住居」に。

僕とラルクが3年もの間寝起きしていた、絶壁にへばりつくように建てられていた木造住宅はひどいことになっていた。あちこちで崩落があり、家ごと落ちて潰れていた。幸いにもこの「壁面住居」は鉱山奴隷のために用意されたものだから、ほとんどの人間は朝会のために無人であったということだろう。

「ああっ……」

だけれど、ごく少数残っていた奴隷もいる。昨晩飲み過ぎて寝過ごした者、病気で寝込んでいる者。

僕が見たのは家に押しつぶされ、すでに動かない誰かの腕がはみ出しているところだった。

「くそっ」

なんだったんだ、あの地響きは。地震なのか？　だけれどこの世界で地震の話はとんと聞いたことがない。そういう単語があるかすら怪しい。みんな、この揺れのことを「地響き」だなんて言っていたし。

僕は走った。探しているのはヒンガ老人だ。老人の家はすでに壁面にはないので、地面に落ちているらしいことはわかる。

「ヒンガ老人！」

僕は、老人の家が他の家を押しつぶしてナナメに立っているのを見つけた。ドアは仰角４５度の方向に開いている。

その下、がれきに腰を下ろしている老人の姿を僕は見つけた。

「……なんじゃ、坊主。あの崩落を生き延びたのか」

駈けつけた僕に、いつものように少しだけ突き放すような口調で老人は言った。

ああ――そうか。

この人は、そうなんだ。

僕は契約魔術が解けて初めて気がついた。ヒンガ老人の腕には入れ墨がない。彼は元々鉱山奴隷ではないのだ。それなのにどうしてこの鉱山に、奴隷たちと同じ住居に寝起きしているのかはわからなかったけれども、それでも老人の意志はわかった。

ヒンガ老人は、底抜けに優しいのだと。

この世界で「知識」を得るのはとんでもなく難しい。高等教育機関――いわゆる「大学」どころか「高校」すらごくごく限られた特権階級の人間しか通うことができない。

だというのに、この老人は多くの知識を持ち、それを望む者――僕のことだ――に無償で振る舞った。いや、食事は運んでいたけれど、そんな労働なんて対価になり得ないほど多くのことを老人は教

えてくれた。
鉱山のこと。天賦珠玉のこと。奴隷と魔術のこと。毒と薬草のこと。この世界で生きる術。
だけれどけっしてヒンガ老人は僕に優しく振る舞おうとはしなかった。
それは、

「ヒンガ老人……あなたは、僕らがなんの未練もなく鉱山を出て行けるよう、わざと突き放して接したんですね」

気づいたのは僕にスキルがあるからじゃない。この人のたたずまいがすべてを物語っていた。
ただ者ではないと思っていたけれど、今ここに座るヒンガ老人は完全に賢者の風格だった。

「！　……そうか、お前は、そうか……契約魔術が切れたんじゃな。アッヘンバッハの小倅が死んだか」
「公爵のことをご存じなんですか」
「ヤツ本人はほとんど知らんが、ヤツの父はよう知っておる。それこそ酒を飲みすぎて働いた失態の尻拭いを、ワシが何度してやったことか」

この老人は僕が思っている以上に偉い人なのかもしれない。それは、社会的な意味で。

「ヒンガ老人。今、ここは大混乱に陥っています。いっしょに出ませんか」
「……それはできぬ」
「どうして」
「ワシが、もとよりここで朽ちるつもりで住んでいたことが1つ。

そしてもう1つは――これじゃ」
「！」
僕はヒンガ老人の話で頭がいっぱいで気づかなかった。老人の左の腹から出血していることを。
「落ちたときに……？」
「それもあるが、古傷が開いたというのも大きい。どのみち先も短い命じゃった。大人しくここで死ぬさ」
僕はなにも言えず、ただ歯噛みした。
老人の口からつぅと血が垂れて、老人はそれを手の甲でぬぐう。忌々しそうに顔をしかめる。
「……最後にお天道様くらいは拝んでおきたかったがの……真昼まではまだまだ遠い。ここは正午のほんの30分程度しか日が差さん」
「老人」
僕はすでに、決心していた。
「昼までは遠いけど鉱山の出口までは、そこまで遠くありません。僕が肩を貸します」
「……心遣いだけもらっておくとするかの。いくらここの鉱山兵がボンクラばかりでも、さすがに老人と坊主ふたりを通すことはあるまい」
「――レイジ、です」
「む？」
「僕の名前、レイジです。坊主じゃない」
前世での人生は終わった。だけれど今世では名前を与えられなか

った。
だから僕はレイジの名前を続けようと思う。
ただ――。

「レイジのレイはゼロの零。レイジのジは2の二」
「……お前さん、この短い時間でなにがあった？」

ヒンガ老人はわからない、と言うように顔をしかめた。この世界には、僕の知る限り漢字はないから。
僕はこの世界で再出発する。「ゼロ」からのスタート。そして――姉がいるのだから、弟として「2番」を名乗る。

「行きます。さあ、手を」
「……本気なんじゃな」
「もちろんです」

老人は僕の手をつかみ、よろめきながら立ち上がる。傷口の反対側から僕は老人を支える――のだけれどまるで抱きついているみたいな格好になった。
この人からは、垢じみたようなニオイがしないのに気がついた。つんとしたハッカのようなニオイがした。

「っく……」

枯れ木のような老人とは言え、僕は全力を発揮しなければヒンガ老人を支えることができなかった。

「行きますっ……！」

この人をこんな場所で死なせたくないという思いだけで歩き出し

た。一歩ずつ、着実に。のろのろとした亀のような歩みであったとしても、僕らは着実に鉱山の外へと向かった。僕がこの人を連れ出すのだという一念だけが僕を動かしていた。

だってこの人は、僕が前世で望んでいた「勉強」をさせてくれた人だから。

誰かに「使われ」、「感謝もされない」だけの僕に、無償でなにかをしてくれた人だから。

この世界でも奪われるだけだった僕に、「与えて」くれたふたりめの人だから。

そして――僕に最初に「与えて」くれたラルクとのつながりを知る人だから。

9（前書き）

今日はお昼に1話、朝に3話更新しているのでお気をつけください。

9

（奥に３人の鉱山兵。右は――奴隷が５人。ぶつかる）

僕は【森羅万象】を使って全力でトラブルを回避する。崩れかけた建物の裏を通り、鉱山兵と奴隷が戦っているその横を通り過ぎる。老人と子どもなんて誰も気にしていないのが唯一の希望だった。

鉱山入口は一か所しかない。そこはすぼまっており、当然――多くの鉱山兵が詰めかけていた。木製のバリケードまで展開されている。

５０人を越える奴隷と、１００人からの鉱山兵と冒険者の混成部隊が激突していた。

「す、ごっ……」

魔法が飛び交い、剣と剣がぶつかって火花が飛ぶ。

強い奴隷も多かったけれど人数と地の利で勝る防衛部隊のほうが優勢だ。

僕はしばらく、人と人とがぶつかりあう鈍い音、叫び声、舞う血しぶきを呆然と見ていた。だけれどすぐに、そんなことをしている場合じゃないと我に返る。

（混乱に紛れていけるか？　――否、ネズミ一匹通さないような防衛ラインだ。ならば手薄のところを襲えるか？　――否、僕の身体能力じゃ、ここにいるいちばん弱い大人を相手にしても負ける。なにか高いところから飛んで渡れるか？　――否、ヒンガ老人を担いで行くことはできない）

僕の頭が素早く計算する。それも【森羅万象】があるからこそできるワザだった。息を吸うように情報が入ってきて、それらはすんなりと頭に定着するのだから。

「……坊主、いや、レイジくん。ここが終わりのようだな」
「まだ終わっていません。まだあなたに太陽を見せていない」

イヤなことに大空洞の出口は西に向いていた。防衛部隊の向こうは森になっていて鬱蒼とした木々が見通しを悪くしているけれど、木々の上部に燃えるような橙色の光が跳ね返って見える。太陽の光だ。

あと少しなんだ。あと少しでここを脱出できる。

他に方法はないのか？【森羅万象】、答えてくれよ……！

だけれどスキルは沈黙していた。

ほんの短い使用期間でわかったことがある。このスキルは応答型のものではなくて、目に見える、耳で聞く、鼻で嗅ぐ範囲の情報を余すところなく僕に教えてくれるということだ。見えないものはわからないし、聞こえないものはわからないし、においがなければ情報も得られない。

情報をどうするかは僕の仕事だ。僕の考えに対し、成功する・しないを教えてはくれるけれど、アイディアをひねり出すのも僕の仕事だ。

「もうあきらめたほうがいい……君ひとりならなんとかなるかもしれない。もし捕まったとしてもワシが口を利いてやるから、ひどい目に遭うことはない」
「……ヒンガ老人。ぬるま湯のようなまやかしを見せられ、偽りの平和の中で考えることさえ奪われる……それのどこが『ひどい目』ではないと言うんですか」
「！」

僕が支えるヒンガ老人がぴくりと動いた。
支えている両腕がぷるぷるする。僕の体力もだんだん限界だ。
「君は……ほんとうに変わったのう……。まるで別人じゃ」
変わったと言うより人格がひとつ増えたんだけどね。
「ならば最後まで付き合うとするか――君にできるかはわからんが、アイディアをひとつやる」
「アイディア？」
「大空洞入口の上部を見てご覧。布の貼られている場所があるだろう」
入口部分はレンガのように四角く切られた石が積まれていたが、上部は岩肌が露出している。そこには確かに、不自然に大きな布が貼られてあった。
「あそこは何年か前に一度穴が空いた場所じゃ。応急処置はしたが、それだけなんじゃよ」
「……つまり、つつけば崩れるかもしれない？」
「さよう」
「……」
布に隠れて見えないそこに、もしも穴を穿てる余地があるのなら――賭けてみる価値はあるんじゃないか？
【森羅万象】からの答えはない。布に隠れて見えない場所だからか。
「ヒンガ老人、ちょっとここで待っていてください」
「……わかった」

僕が建物の陰にヒンガ老人を下ろすと、老人は傷が痛むのか顔をしかめた。その傷がどれほどのものなのか、あとどれくらいなら老人はもつのか――老人の顔色はもはや青を通り越して白だった。

【森羅万象】は答えを知っていた。老人はあと30分ももたないだろうと。傷の深さもさることながら、血を流しすぎ、急激に老人の体温は低下しているからだ。

僕は多くの人間の死角に入るよう走り、倒れて絶命していた鉱山兵の腰から剣を引き抜いた――重い。こんなのを大人は振り回しているのか……!?

ターゲットはひとり。

戦っている集団の後ろにくっついている、僕も知っている人物――食堂のおばちゃんだ。

「チッ、なんだいなんだい、こんなところで足止めを食って……さっさと鉱山兵くらいぶちのめせってんだよ。奴隷どももたいしたことがない――ヒッ!?」

「動くな」

僕はおばちゃんの背後から、彼女の首の真横に剣をぬっと差し出した。

魔法を手に入れたおばちゃんだけれど、逃げ切れずまだこんなところでもたもたしているらしい。

ちなみにラルクの姿はとっくに見えないから、彼女は先に出ていったんだろう。

「動けば振り回す。顔に傷程度ならまだマシだけど、首が切れたらあなたは死ぬ」

「ア、ア、アンタ……黒髪の気味悪いガキ……」

「僕の要求は1つ」

僕は入口上部の布を指し示した。

「あそこになんでもいいから魔法をぶっ放せ」

「あたしの魔力はあとちょっとしかないんだ。そんな酔狂に付き合っているヒマは……」

「そう。残念だよ」

剣を動かしておばちゃんの首に触れる。

「わ、わかった！　わかったって！　撃てばいいんだろ、撃てば！？」

おばちゃんは両手を入口上部の布に向けてかざすと、ゴウッ、と周囲の空気を巻き込んでバスケットボール大の炎の塊が射出された。奴隷たちの背を照らし、鉱山兵のとんがり兜に映じ、冒険者たちの怪訝そうな顔を照らし出したその炎弾は見事、布に直撃する。衝撃で炎は爆発四散し、燃え移った布がちりぢりになりながら落ちていく。同時に――がらがらと巨大なながれきが崩れ落ち、ぽっかりと西の空が見える。

突然落ちてきた岩石に、鉱山兵の数人がつぶれ、冒険者は逃げた。ここぞとばかりに奴隷が殺到してついに防衛ラインは崩れた。

「えっ、ウソ！　あたしやったわ！　すごくない！？　ねえ、すごくない！？」

とおばちゃんは叫んでいたけれど、僕はとっくにヒンガ老人の元へと戻っていた。

「……うまくやったな」

「はい……」

傷口の広がり方が、ひどい。ほんの少しの時間離れただけだというのに、老人の顔は土気色になりつつあった。

「行きましょう。もう、すぐそこです」

僕は努めて、老人に迫る死については考えないようにしながら肩を貸して歩き出す。背中に添えた手に、もはや温かさはほとんど伝わってこない。老人の身体は震えて、吐く息も乱れていた。

間違ったことをしているのだろうか。僕が老人を連れ出さなければ、騒動の鎮圧後に老人は治癒されたのだろうか。あるいは回復魔法を使える誰かを探すべきだったのだろうか。

【森羅万象】が伝えてくる情報は、命のタイムリミットがもう少しで尽きそうだということ。……なにが星10だよ、なにが限界（オーバーリミット・スキルオーブ）を超えた天賦珠玉だよ。ヒンガ老人ひとり、助けられないじゃないか……。

……わかっている。

悪いのは、僕だ。このスキルを使いこなせない僕なんだ。きっともっといい解決方法があったんじゃないかという気がしてならないのは、【森羅万象】を通じて得られる情報を僕が有効に使えていないからだ。

「……ワシの奥歯はな、差し歯なんじゃ」

「は？　突然、なにを……？」

防衛ラインはすでに突破されているので、鉱山兵や冒険者は、逃げ出した奴隷を追っている。数人の鉱山兵が仲間の死体や瀕死の仲間を連れて大空洞内へ入っていくのがわかったけれど、入口付近は誰もいなかった――倒れている奴隷の死体以外は。

「そこに、燐熒（りんけい）魔石という希少な鉱石を仕込んである。ワシが死んだら、これを持っていってくれ……売れば多少の金にはなろう」
「……形見分けということですか」
「そんなに気取ったものではない」

僕らは倒れたバリケードをかわし、死体を踏まないようにしながら進んでいく。
吹き抜けた風に、乾いた、清冽なものを感じて僕は顔を上げた。

「あ……」

すぐそこに、木が生えている。視線を上げれば薄青い空がある。
僕は、ついに……鉱山から脱出したのだ。

「この道は鉱山兵の往来が多い。あっちに行こう」

振り返るとそそり立つような絶壁になっており、老人はそれに沿って北へと続く小道を指した。僕は老人とともに北へと歩いていく。

「もしもワシの孫に会うことがあれば、ワシは最後まで誰を恨むことなく死んだと伝えてくれんか……」
「……お孫さん、ですか」
「名をルルシャという。ワシに似ず、利発で、可愛らしい女の子だったな……」

老人の声がだんだん小さくなる。引きずるように歩く足に、どこまで力が入っているのだろう。
僕らは上り坂をゆっくりと、信じがたいほどに遅い速度で上っていた。あと少し先に大岩が立っていて、その向こうにはちょっとし

た広場があり――そこには目に痛いほどの朝日の照り返しがあった。
進む速度は遅くとも、確実にそこへと近づいていた。
契約魔術が解けてからというもの、僕にはあまりに多くのことが襲いかかり、正直に言えば脳みそは大いに混乱していた。だけれど今は考えるのをすべて止めた。万が一にも転んだりしないよう細心の注意を払ってヒンガ老人とともに歩を進めることだけを考えた。

「おぉ……」

ヒンガ老人の足先が陽光に触れ、次いで前のめりになっていた老人の白髪が、顔が、上半身が、身体のすべてが朝日に覆われていく。
僕もまた、朝日を見たのはこの鉱山に来て以来だった。僕らは上り坂によって木々より高い場所にいた。広がる、海原のごとき樹林の向こうに、燃える赤き太陽がじりじりと昇りつつあった。たなびく雲を赤く染め、樹林に恵みの光をもたらし、地面に立つ僕らを温かくする太陽だ。

「……この身は、罰を受けるためにあり。死ぬことでは償えぬ罪を犯したゆえ。されど、今際にて日の光を浴びるほどの僥倖に浴した。天地を統べる万能の神よ、願わくばこの忌み子に祝福を授けよ……」

祝詞にも近い、旋律を含んだ言葉に僕が顔を上げると、涙をこぼしながらヒンガ老人が僕に微笑みかけているところだった。僕の頭に載せられたシワだらけの手が、優しく髪をなでた。

「レイジ、お前の人生に幸多からんことを願う」
「……ありがとう」

ああ、死ぬのだ。この人は、今から死ぬ。
だというのに僕の幸せを願ってくれた。

鼻がツンとなって目の奥から温かいものがにじみ出てくるけれど、僕は奥歯を噛みしめて感情をぐっとこらえた。

ヒンガ老人の身体から力が抜けた。僕はそれを受けきれずに、そのまま尻餅をついた。僕の横にどさりと倒れたヒンガ老人は――事切れていた。

僕は老人の口に手を突っ込み、奥歯を探った。明らかに手触りの違うそれをつまんで引き抜くと、その黄色く変色した差し歯からはほんのりと青色の光が漏れ出ている。これが、ヒンガ老人の言っていた燐熒魔石とやらだろう。

僕は腰の革袋にこの差し歯を入れた。そして老人の身体を仰向けにし、両手をお腹の上で組むようにする。服の汚れを軽くはたいて、目に掛かっていた白髪をどけてやる。

「……あなたにそんな気はなかったかもしれないけど、僕にとってあなたは間違いなく、この世界での人生の師でした。あなたに恥じない今世を生きると……誓います」

僕は黙祷を捧げる。

空の高いところを鳥が飛び、鳴き声が聞こえる。太陽に温められた僕の身体はぽかぽかしている。

――血の跡があるぞ。上にも逃げた奴隷がいるようだ。

そんな声が聞こえて、複数の人間が向かってくる気配があった。

瞳を開いた僕は、来た道を戻らず、砂利の斜面を滑り降りていく。向かう先の森は僕なんかが入れば一気に呑み込まれてしまいそうだけれど、僕は、二度と鉱山に戻るつもりはなかった。

9（後書き）

これにてプロローグはお終いで、
次から1章「旅立ちは密やかに、人知れず。出会いは密やかに、導かれる。」が始まります。

←にある★をタップして応援していただけると大変うれしいです！
モチベーションにつながります！

1（前書き）

本日は朝昼晩の3回更新予定です。【森羅万象】の内容に関する部分なので先に進めちゃいたいなと。

1

この世界には天賦（スキル）があって、それは天賦珠玉（スキルオーブ）によって取得できる。天賦にはレア度によって取得に必要な枠がある。そして人の、スキル枠は８つと決まっている――ヒンガ老人の教えてくれた知識だ。

だけれど僕には、１６の枠がある。それは日本人の男子高校生だった「前世」を持っているからだと思われる。前世があるせいだろう、僕は前世を思い出す前から同い年の子どもが知らないようなことまで知っていた。まあ、それを表す言葉がわからなかったこともあって知識を披露する機会は少なかったのだけれど。

「この世界ではほんっと、天賦がすべてなんだよね……あ、これうまっ」

僕がかじりついたこぶし大の青リンゴ――っぽい果実は、みずみずしくて酸味が効いていた。大物が掛かってしなる釣り竿のような枝の先に１つだけ生（な）っているのがこの果実だ。【森羅万象】によると「無害」という感触だったので僕は果実をむしった。ひゅんっ、と枝が上へと跳ねたのが面白かった。

この謎の青い果実を両手で持てるだけ持って、それをかじりながら僕は森の中を歩いている。

むやみやたらに歩いているわけじゃない。ヒンガ老人を見送ったときに炊煙のような煙が立ち上る場所を見つけていたので、そちらに向けて歩いている。おそらく鉱山最寄りの街ではないかなと思っているのだけれど詳しくはわからない。鉱山と街をつなぐ道は多くの鉱山兵が行き交っているのでなるべく離れるようにしている。

落葉による腐葉土が地面を覆っていて、ところどころに藪があったり地面に起伏があったりするものの十分歩けるコンディションだ。

「夜になるまでには街に着きたいな……」

【森羅万象】のおかげで、周囲には危険な動物がいないということがわかっている。ただ、「僕が感知できる範囲で」しかわからないので、夜になって視界が閉ざされたらどうなるかわからない。日本の山だって、鹿やイノシシが降りてくるのは夜になってからだしね。この世界にはきっと狼だっているだろうし、野犬ですら今の僕には十分な脅威だ。

この【森羅万象】は思ったほど万能ではないんじゃないだろうか……。

僕が知っているアニメや小説に出てくる「鑑定」スキルみたいなものは、植物の名前や由来、レア度、ものによってはいくらで取引されているかまでわかるじゃないか。だけれど【森羅万象】は、ぼやーっとした印象が伝わってくるのだ。僕が知ろうとしなければわからないし。

まるでいびつなレンズで風景を見ているような感じ……だろうか。僕が感知しなければわからない以上、「いびつなレンズ」イコール「僕」ということになるんだけどね！　ちくしょう！

「……おっ、あっちっぽい」

僕は小川を発見した。その流れを追っていくと森が切れ、広大な草原へと出た。その向こうに土を積んだだけの簡素な防御壁ではあったけれど――石積みの家々が並ぶ街が見えてきたのだ。

あわてて僕は木の陰に身を潜めた。１００メートルほど離れたところで奴隷３人と、１０人を超える鉱山兵が戦っているのだ。そう言えばここに来るまでひとりも奴隷を見なかったけれど、どこに行ったんだろう……。

「あっ」

多勢に無勢、奴隷は全員その場に倒れた。すると鉱山兵があわてて手を挙げている。のそのそと出てきたのはびらびらした服を着た小太りの男だった。

なにをしているんだ……。

男は倒れている奴隷に手をかざすと――奴隷がわずかに発光し、水底から立ち上る気泡のように天賦珠玉（スキルオーブ）が出てきたのだ。

「あれ、もしかして【オーブ着脱】！？」

鉱山兵のひとりがこちらを見た。

「……」

僕はあわてて顔を引っ込め、息を殺す。来るな。来るな、来るな。来るな……。

じっとすること数分。僕には異様なまでに長く感じられた時間だったけれど、僕の周囲ではなにも起きなかった。そろりそろりと顔を上げると鉱山兵のほとんどと、小太りな男は引き上げた後だった。残った鉱山兵は奴隷の死体をふたりがかりで持つと草原へ分け入って、そこに放り投げた。

そこに置いておけばなんとかなる――つまり夜には野犬の類がやってきて食べてしまうということか。ひょっとしたら野犬なんかじゃなくてもっとファンタジーなにかかもしれないけれど。

「ふー……びっくりした。気をつけなきゃね」

いくら2度目の人生だと言っても、戦争もサバイバルもない日本の高校生だった経験しかないのだ。切った張ったで生きてきた人た

ちがいるこの世界では僕なんて文字通りただの「小僧」だ。【森羅万象】は有能だけど、これに頼りきりでどうにかなるとは思わない方がいいだろう。

「……にしても星１０にしてはしょぼくないですかね、【森羅万象】さん？」

僕は木の幹に身体を預け、謎の青い果実を食べながらぼやいた。

「さっきの【オーブ着脱】なんてすごいじゃないか。問答無用で天賦を天賦珠玉に変換できてしまうってことだろ？　あんなふうに簡単に手をかざすだけで、ずるり、と天賦珠玉が……」

僕の胸から、ずるり、と黒に虹色の天賦珠玉が出てきた。

「……え？」

僕の手には確かに、【森羅万象（ワールド・ルーラー）★★★★★★★★★★】が握られていた――。

焦った。ドチャクソ焦った。しかも身体がぐったりしてしばらく動けなかった。カブトムシの幼虫みたいに身体を丸めてぴくぴくしつつ（しかも口から垂れるよだれすら拭けない）も、頭を働かせて僕は考えた。

体内に【森羅万象】が残っている気配はない。つまり、僕は天賦珠玉を自ら取り出したということになる。誰にでもできるのだろうか？　いや、そんなわけはない。できるのならもっと気軽に天賦珠玉の取引がされているはずだし、奴隷たちがそんなやりとりをして

いるのを見たことも聞いたこともない。
ということは、僕は遠目で見た【オーブ着脱】スキルを自動学習（ラーニング）したのだ。
僕にそんな才能が！？
そんなわけがない。これが――これこそが【森羅万象】の本領だということだろう。

「ふー……」

ようやく疲労が回復して僕は身体を起こした。落ちてしまった謎の青い果実を手に取り、土を払ってもう一度かじる。

「あの男は、天賦珠玉を取り出しても平然としてたよね……少なくとも疲れた様子すら見せなかった」

ということは、僕は他人のスキルを使えるようになるけれど、本職ほど自在には扱えないのだろう。
改めて【森羅万象】を身体に取り込むと、スッ、と脳に張っていた霧が晴れるような全能感に包まれる。これはクセになるな……もう一度抜いたりはしないけどね。死ぬほどだるくなるから。身体が。

「待てよ」

僕はふと思い返す。奴隷たちがスキルを使っていたはずだ。特に、食堂のおばちゃんの魔法。
あれも僕は使えるのでは？

「えーっと……確か、こうして風を出してた」

右手をかざして、ふんぬっ、と踏ん張ってみる。

「……」

だけれど僕の右手からは突風どころかそよ風すら起きなかった。

「あれ？　ダメか……。火ならどうだ？」

右手を見つめながら念じると、そこにはポッと火が点った。

「やった！　でき――」

その瞬間、僕はたちくらみを起こして横倒しに倒れた。あまりの眠さに、目を閉じた。

2（前書き）

本日2話目。夕方も更新します。

2

「……頭が、痛い」

起きたときには夕暮れだった。僕は逃亡中の身で一体なにをやっているんだ……。この間にも鉱山兵に見つからなかったのはただの偶然だ。こんな検証は今やらないほうがいいのは間違いないよね……。

ただ、わかったこともある。

【風魔法】と【火魔法】でなにが違うのか――僕が【森羅万象】を手に入れる「前後」なのだ。手に入れていないときに見た【風魔法】は使えず、手に入れた後に見た【火魔法】は使える。

だけど、【オーブ着脱】のときに感じた疲れと【火魔法】を発動したときに感じた疲れとは全然違った。前者が「身体がぐったりする」のに対して、後者は「なんか力が抜けるぅ」という感じ。わかる？　わからない？　僕もよくわからん。

たぶん、これが魔力ってやつなんだろうね。天賦の中には【魔力強化★】なんてのもあるから。

「さて……そんなことよりこれからどうするか、だよね」

僕は鉱山の街になんとか潜り込んで、まず服を変えようと思っていた。今の僕は身分的には「逃亡奴隷」となるので鉱山兵に限らずどこの誰に捕まってもマズイ。とはいえあからさまに「奴隷」だとバレなければ身元の確認なんてされないわけで、されたところで「解放奴隷だ」と言い張ればいい。

なのでいちばんの問題は服。明らかに奴隷とわかる粗末な服だ。あとは左腕の入れ墨だけど、長袖を着ていれば見えないのでこちら

はそんなに急がなくてもいい。

「うーん。なんかイヤな予感がする」

鉱山最寄りの街なんて、鉱山兵が駐屯しているだろうし真っ先に警戒されるところだよね。というか僕と同じ考えの逃亡奴隷なんて大勢いるはずで、となると街の中で戦闘が何度か起きていると考えたほうがよさそうだ。

「……この街は飛ばして次を目指すか？　でもそうなると夜をどうやって過ごすかっていう問題もあるんだよなぁ。あー、もう、スキルの検証なんてやるんじゃなかった！」

でも検証してしまうのはしょうがない。お金もない、体力もない僕が当面頼らなきゃいけないのはこの【森羅万象】だけなのだ。もはや【森羅万象】様、【森羅万象】大先生などと呼んだほうがいいかもしれない。

悩むに悩んだ挙げ句、僕はとりあえずここで夜を越してみることにした。日中に眠りこけていて鉱山兵が僕を発見しなかったので、彼らは街から鉱山に掛けてはあまり注目していないのではないかと思われる（そりゃまあ、街のすぐそばで眠りこけているなんて思わないよな！）。

街から近いのであまり野犬も出ないだろう……というのは僕の希望的観測ではなく、【森羅万象】御大も「かもね」という感じでおっしゃっているのだ。

一晩明けた。結論から言うと、なにも起きなかった。

「……」

木の枝から下りてきた僕は、眠い目をこすった。なにも起きなかったことは起きなかったんだ……でもあちこちで犬の遠吠えが聞こえてきたんだよ。

それに思った以上に森の中って真っ暗で、「さすがに街から見えるところで寝るのは止めとくか～」なんて少しだけ森に入ったところを選んだ自分を僕は何度殴ってやろうと思ったことか。

ちょっと森に入っただけで闇アンド闇。そして暗いので場所チェンジもできやしない。【森羅万象】があるから「この遠吠えは仲間を呼んでいるだけ」とか「今のガサガサは小動物」みたいにわかったのはよかったけれど、二度とはやろうと思わない。

闇の中で僕は鉱山にいたころのことを思い出していた。なんだか靄に包まれたような記憶ではあるけれど、覚えていることも多い。

ラルクといっしょに回った坑道のこと。ヒンガ老人に教わった様々なこと。

「ラルク……大丈夫かな」

強いスキルを手に入れたと言っても、僕と同じ子どもだ。日本での経験があるぶん、僕のほうがいろいろとわかっているかもしれない。

「今は自分のことか」

僕は街の外周を遠目に見ながらぐるりと周り、街道が見えるところまで移動した。馬車を駆る商隊が見えたのであれが街道なんだろう。荷台に乗っているのは冒険者だろうか？　遠目だとわからないな……と思っていると、乗っていた冒険者がこちらを見た。僕は草むらに隠れているのにじーっと見てくる。冷や汗がどっと出たけど

特になにかされるわけでもなく商隊は遠ざかっていった。「手を出してこなければこちらからも手を出さない」ということなんだろうか？

あれって、気配を察知するスキルなんだろうか？　あるいは単に目がいいだけ？

「……もしやあれがスキルなら【森羅万象】でコピーできるのでは？」

僕は遠くに生えている木をじっと見つめた。――すると、

「見える！？」

視覚強化的なものなんだろうか？　すごい！　葉っぱのひとつひとつがくっきり見える！

「――ハッ」

【森羅万象】を使ったことによる疲労の反動を忘れてた！　――僕は身構えたけれど、反動は来なかった。どうやら肉体の能力を伸ばすようなものは反動がないようだ。

それはよかったけれど、僕が見よう見まねでやってこれくらいの効力があるのだ。

「さっきの冒険者はもっとはっきりくっきり見えてたんだろうな……」

気をつけて行動しなきゃと僕は思った。

街道沿いの草原を歩きながら僕はいろいろと試していた。奴隷や

鉱山兵の戦いで【剣術】系のスキルも発揮されていたはずだけれど、あれは僕が使える感じがしない。それは僕がしっかりとこの目で見ていなかったからなんだろう。「観察」することが【森羅万象】には必要な要素なんだ。確かに【火魔法】が使われたときは壁が崩れるかどうかが生命線だったからしっかり見てたしね。

そして【森羅万象】は確かにオリジナルの劣化コピーにはなってしまうけれど、「スキル枠を消費しない」という点ですさまじいメリットがある。ヒンガ老人によれば【剣術】スキルがなくとも「剣術」の達人はいるし、【火魔法】のようなスキルを持っていなくとも「火魔法」を使えるようになる人もいるとのことだ。あくまでもスキルは「できるようになるための近道」で、人間本来が持っている可能性は無限大なのだという。

だから僕は【森羅万象】を通じて、その力を学ぶことができるということなんだろう。僕という「いびつなレンズ」が「精巧なレンズ」に変われば、学べる度合いも増えるのかもしれない――これは仮説に過ぎないけれど。

「今の段階では完璧にコピーできないにしても、だぞ……【森羅万象】ってめちゃくちゃなスキルなんじゃないか？」

僕は星１０天賦の持つ可能性にどこか空恐ろしさを感じながらも、

「……そんなことより今は、生き延びることを考えなきゃな」

気を引き締めた。

3（前書き）

本日3話更新しているのでお気をつけください。
あと誤字脱字報告ありがとうございます！

3

謎の青い果実を実らせる木はところどころにあった。ちょうど今が実の生る時期らしく、すでに半分食われたような実もいくつか見かけた。

僕の持ち物は、鉱山での天賦珠玉発掘作業に必要なものだけだった。カラッポのリュック、腰の道具袋には鑿と手頃なサイズの石（ハンマー代わりに見つけておいたもの）だけ。あとはヒンガ老人からもらった光る魔石。

服は染められてもいない粗末なものに、靴だけは頑丈な革で、靴底は木製だった。さすがに僕もこの靴に慣れているので今さら靴擦れもしないけれど、長時間歩くのにはまったく向いていないし、ぬかるみを歩くととてもよく滑った。

「ん、この葉っぱは……」

見た目がヨモギに似ている葉っぱを見かけたけれど、【森羅万象】先生が仰るには「軽い毒性」らしい。ただ入れ墨を消すのに使えそうだとわかったから僕はヨモギモドキを引きちぎり、手首にこすりつけた。

緑色の汁とともに清涼感ある香りが立ち上った。

「……うーん……消え、て、る……？」

疑問符がつく程度ではあったけれどなんとなく入れ墨がうっすらしたのでは……？　まあ、手につけたところで無害ではあるので気にせず塗りたくっていこう。ニオイも悪くないし。

僕はヨモギモドキを何本も引き抜いて、腰紐に挟み込んで歩き出

した。

その日は結局、次の町には着かなかった。

森と草原の境目あたり、木の枝の上に陣取った僕は夜を迎える。

あれからドングリモドキ、桑の実モドキを手に入れた僕は、それらをかじりながら月を眺めていた。

日本にいるときは、地方都市とは言いながらも自宅の周りは畑と田んぼしかないようなところで育った。そんな場所だから星空はきっと東京よりもずっと美しかったんだろう。

でも――どうだろう、この場所は。

「すっげー……」

ミルキーウェイのような、星屑の流れが幾筋もあった。夜空に薄く切れ込みを入れたような三日月は地球と同じものだ。

よくよく考えてみると星座こそ違うものの、月があり、空気があり、人間の形状も同じ――つまるところ進化の過程が同じなのだ。地球のコピーと言ってもいいかもしれない。まあ、魔法なんていうトンデモ要素や天賦なんていうトンデモ要素もあるんだけど。

この世界の成り立ちについて僕が知ることはないだろう。地球でだって、解明されていないことばかりだったのだから――ビッグバンからの進化論を信じていない人たちだって地球にはいっぱいいたんだしね？

薄ら明るい草原は、風が吹くとさやさやと揺れている。犬の遠吠えも虫の鳴き声もない静かな夜だった。

「……ん？」

草原の向こう、山々の稜線が黒い影になってかすかに見える。

そこに鳥のようなシルエットが見えた。
いや。いやいや。待て待て待て。この距離だぞ？　なんで鳥が見える？
そのシルエットは天空へ向けて口を大きく開けた。
カッ――。
僕の周囲まで照らし出すような白の光球を吐き出した。その球は流れ星のようにいくつにも分かれ、放物線を描きながら地上に突き刺さった。
――ギィァアアオオオオオオオッ。
遅れて、僕のところにそんな声が聞こえてきた。それから爆発音が。
「な、な、な……なん、なんなん、あれ……？」
さらに遅れて地響きが起きて僕のいる木が揺れる。
僕はこのときになってようやく気がついた。今夜、野犬や動物の気配がないこと、虫が鳴かないことの理由を。
あの巨大な生き物が、現れたからだ。
僕よりも野性に優れた動物はとっくに身を潜めていたのだ。
黒いシルエットについて【森羅万象】は沈黙していた――シルエットだけでは判別できなかったからだろうか？　光については「届かないために無害」という情報がぼんやりと伝わってきただけだ。
シルエットは山の稜線に溶け込むようにして消えた。
僕はあちらが、僕らのいた鉱山がある方角なんじゃないかという気がしてならなかった……【森羅万象】先生の答えは「はい」だった。

次の町が見えてきた。
慣れない野宿で疲れも取れないし、寝不足でフラフラだった僕は大喜び――しようとした。
街道とつながっている門の周辺は衛兵でざわついている。

――奴隷が？
――鉱山は……。

そんな言葉が風に乗って聞こえてきて、僕は密やかに彼らから遠ざかる。
ここは……回避だな。
ずっと慎重に行動してきたのにわざわざ危険を冒す必要はなにひとつない。しんどいけど。眠いけど。寂しいけど！
とはいえ、サバイバル生活に順応するしかないわけで。
朝、木の上で起きる。小川が近くにあれば顔を洗い、口をゆすぐ。ヨモギモドキで手首をゴシゴシしながら歩き（入れ墨がうっすら消えてきている気がする。気のせいかもしれない。やはり気のせいでは？）、食べられそうな果実、タネを採取してはつまみ食いをする。
森には恵みが多く、食べられる植物がいっぱいあったのは救いだった。
いい加減、パンやパスタの主食や肉や魚を食べたい気持ちはあったけれど、あと1週間くらいならこの生活を続けられそうだ。そのころには僕も立派な野人になっているかもしれないけれど。
それから2日が経った。次の街にはまだ着かない。
僕が異変に気づいたのは最初、ニオイでだった。

「ん？　料理……？」

香辛料が焦げるようなニオイが鼻をついたのだ。最初は僕の希望が見せた幻覚ではないかと思ったけれど、【森羅万象】で確認すると僕の鼻は正しかった。

今、僕から１００メートルほど離れた、森の中のちょっとした開けた場所でたき火をおこしている３人組がいる。ひとりは大男。ひとりは僧侶のような女性。もうひとりはフードをかぶった小さい人だ。

時刻は夕方になろうとしていて、彼らはたき火で串刺しの肉をあぶっていた。

ごくり。

なんかすごい音がしたなと思ったら僕がつばを呑んだ音だった。あと５日くらいはサバイバルオッケーとか言っていたけれど、そんなことは到底不可能に思えた。僕は今すぐ肉を食わないと死ぬ。【森羅万象】の答えは「あと１０日は大丈夫」だった。うるさい黙れ。

「……うう」

だけれど、ここで自分から姿を現すなんてバカなことはできない。今のところ理性が勝っている。これだけ苦労して森を逃げてきたというのに、素性の知れない彼らの前に姿を見せるなんて危険もいいところだ。

ぎぎぎぎ。

なんかすごい音がしたなと思ったら僕が歯ぎしりをしている音だった。そんなに肉が食いたいのか、僕？　イエス、食いたいです。……なにかミラクルでも起きてあの人たち一斉にトイレに行ったり

しないかな？　あの肉がロケット花火みたいに飛んできて僕の手元に落ちてきてもいいんだけれど。いやそんな薄気味悪い肉を食べるのかと言われるとアレか？　いやそれでも食べたいな？

「……だいぶ頭がどうかしてる」

僕は自分の理性のぶっ飛び具合に恐れおののきながら木に手をついた。このニオイはダメだ。人をダメにする。肉汁の焼けるニオイまで漂ってきて、ああ、もうっ！

「離れよう……」

たき火の冒険者たちに背を向ける――そのときだった。

「！」

フードをかぶった小柄な冒険者の上に枝が張りだしていた。そこに、枝に同化するように動いている蛇がいた。

毒性。極めて強い。腕を噛まれれば腕を斬り落とすしかなく、胴体の場合は死を免れない――【森羅万象】から情報が流れ込んでくる。逃げるべし。逃げるべし。逃げるべし。

ハッとしてもう一度見ると、その蛇は小柄な冒険者の上でちろちろと舌を伸ばしていた。まさか降りてあの人を……？

「う、上……！」

僕はこの瞬間、自分の立場とか、リスクとか、彼らの素性とか、そういった「考えなければいけないこと」をすべて忘れて声を上げていた。彼らに向かって走り出す。ぎくりとしたように大柄の男が振り返り、すぐ横に置いてあった短刀を引き抜いた。たき火が、刀

身にぎらりと光る。

「上！　上です！」

「――待つべなダンテス。あの子なにか言ってる」

「しかし……」

「上ぇぇぇぇえ蛇いぃぃいいいいい！！」

「え、蛇？」

小柄な冒険者が上を向くと、ちょうど毒蛇がそこへと落ちていくところだった。それが僕にはスローモーションのように見えた。明らかに僕は、届かない。短刀を握った大男は僕のほうばかり気にしていてそちらを見てもいない。もうひとりはおろおろしているだけ。そして小柄な冒険者本人は――上を向いた拍子にはらりとフードが取れた。そこに現れたのは飴色の長い髪だ。それを複雑に編んでいて、ところどころにカラフルなビーズのようなもの――きっと鉱石だろう――を結わえている。シャーマンのような出で立ちの女性だった。

広い額の下、大きく透き通った青い目が蛇を映す。

4（前書き）

今日も朝昼夕と3回更新の予定です。がんばるで～～。

4

――ああ、ダメだ。もうダメだ。
開かれた口、そこにある牙が彼女の鼻に触れる瞬間だった。

「ウオオオオォォォッ！！」

黒い突風のように飛び出してきた何者かが、毒蛇を横からはたいて吹っ飛ばした。

「ミミノォ！　なにボサッとしてる！！　ギットスネークだぞありゃ！」
「へ？　え、えええええええ！？」
「ぬんっ」

座っていた大男が膝立ちになり、手にしていた短刀を投げると刃は見事毒蛇の鎌首を斬って捨てた。よかった……。

「それにそこのお前！　何者だぁ？」
「ひっ」

それは濃い灰色の髪の毛を逆立て、たてがみのように後ろになびかせている男だ。よく日に焼けた目元は吊り上がり、口元に犬歯がのぞく。身長は１８０を優に超えている。黒のレザーパンツが盛り上がるほどに両足の筋肉が発達していて、全身まるごとバネみたいな男だった。

「あっ、ぼ、僕は……」

敵意をぎらつかせた男が近づいてくる。その足元からほとんど音がしないことに僕は驚いていた。これほどの身体ならば落ち葉を踏んだ音がするはずなのに――それほどまでに訓練を積んだ凄腕ということだ。こんな人、奴隷の中にはいなかった。

「止せ、ライキラ。まだ子どもだ」

「子どもぉ？　よく見ろや、このガキの服。こいつぁおそらく――」

「おそらく命の恩人だべな！」

座っていた大男がかばおうとしてくれたけれど、それより先に灰色髪の男と、僕の間に割り込んできたのがフードの女性だった。

「わたしがギットスネークに気づいていないから、この子は教えてくれたべな！　それ以外になにがある！？」

「おいおいミミノぉ……おめーだって気づいてんだろぉが。こいつは奴隷だぞ」

「！」

「しかも逃亡奴隷だ」

僕はハッとして入れ墨の入った腕を隠したけれど、遅すぎる。こんなにも簡単にバレてしまうものなんだ。やっぱり、向こう見ずに人の命を救おうと行動したことは浅はかなことなんだ……。

「……それでも、いいではありませんか」

今まで黙っていた女性が口を開いた。緑色の髪を後ろで束ねていて、修道服を着ている。年齢は僕と同じ――「前世の僕」という意味で、１６歳くらいだろうか。だけれど眠そうな目をしていた。

「奴隷は契約魔術によって行動を規制されています。ですがこんな森の奥にいるということは、すでに魔術が切れているということ。少年の身分が解放されたか、少年の主が亡くなったか、どちらかということでしょう？」

「……主が死んだどさくさで逃げたのかもしんねーぞぉ。そういう場合は、奴隷売買の契約は残っている。奴隷はその場に残らなきゃいけねぇ。わかってんだろーが、あぁ？」

「わたしには、わからないべな」

「……おい今なんつったミミノぉ」

「わたし、そんなことわからないし知らないし知りたくもないべな」

「あのなぁ！　俺ぁ嫌みやフザけて言ってんじゃねーんだよ！　厄介ごとを巻き込むなっつぅ――」

「この子は！」

ミミノ、と言われたフードの女性は今の僕と同じくらいの背の高さだった。小さいというのに話し方はまるで大人だ――彼女はもしかしたら、ヒト種族ではないのかもしれない。灰色髪の男が獣人であるように。

「自分の立場が悪くなるかもってわかってんのに、わたしのことを助けようとしてくれたべな！　それで十分だろ!?」

「うっ……」

強く言われ、灰色髪の獣人はたじろいた。

「な、怖がらせちまったみたいでごめんな。名前はなんていうべな？」

僕を振り返り、にっこりと笑ったその顔はとても愛くるしかった。彼女はゆったりとした深緑色のフード付きローブを羽織っており、

縁には赤や白、黄色といった様々な色で染め上げられた糸による刺繍がなされていた。
　腕にいくつものミサンガを着けているあたり、彼女はなんらかの魔法使いなんだろう。

「レイジ、です」
「レイジくんか、いい名前だな！　わたしはミミノ、このパーティーでは自然魔術師（ドルイド）として所属してるんだ。そこのガラの悪いのがライキラ」
「誰のガラが悪いってぇ！？」

　獣人のライキラは、すでにたき火のそばに腰を下ろしてふてくされたように自分の膝に頬杖をついていた。
　露出している肌の半分は毛によって覆われている。ヒト種族ばかりいる村に生まれ、ヒト種族ばかりが働いている鉱山にいた僕にとって獣人を見る機会はめったになく、とても珍しい。この世界はやっぱりファンタジーやで……。

「……俺はダンテス。こっちは娘のノンだ」

　毒蛇に短刀を投げた大男は、足を引きずるようにして戻ってくるとそう言った。娘……娘！？　パッと見では３０歳くらいにしか見えないのだけれど、かなり年齢が行っているんだろうか？
　ダンテスは肩や胸、肘といった要所に金属を施した鎧を装備していて、他の部分は茶色っぽい鱗――鱗と言っても３センチくらいはある――を編み込んだスケイルメイルを着ていた。地球の史実にあったスケイルメイルは確か、金属片を鱗のように編み込むものだったはずだけれど、これは本物の鱗だ。
　鎧を着込んでいても、彼の肉体がとてつもなく筋肉質で盛り上がっているのがわかる。横に転がっている鋼板は「なんでベンチの座

面がここに？」と思ってしまうところだけれど、そこに持ち手がついている以上、きっとダンテスがこれを振り回すのだろう……べ●セルクかな？

そんな彼の顔はいかついけれど目元は優しい。短く刈り込んだ緑髪と緑色の目は「娘」のノンといっしょだ。

僕はふと彼の首筋が一部灰色になっているのに気がついた。それは「石化」……らしい。【森羅万象】先生が聞きもしないのに教えてくれた。

「……俺の身体はメデューサの呪いで石化が進んでいてな、娘が治療のためについていてくれるんだ」

「お父様の治療のために、光天騎士王国の王都を目指しています。とても回復魔法に優れた聖者様がいらっしゃるんですよ」

「そう、なんですか……」

僕はそう言うしかなかった。石化の呪いなんてものがこの世界にあるんだな……【森羅万象】で治療方法を確認しようとしても頭に思い浮かぶ素材のイメージは僕の知らないものばかりだった。なんだろう、これ……紅葉みたいな葉っぱだけど先っぽが５つに分かれてるもの。銀色の金属……だけどすごく深みのある銀色。それに、うねうねしてる生き物？　ミミズ？　わからん。

【森羅万象】にこんな使い方ができるとは思わなかったな。これってほんとうに石化を治せる素材なんだろうか？　これ、言ったほうがいいのかな……でもどうやってそんな知識を得たのかって聞かれても答えられないし、そもそもこの素材がなんなのかよくわからないし……。

とりあえずノンさんは魔法による治療を考えているんだから、変なことを言わないでおこう。

「さ、レイジくん、こっちに来るべな！　ちょうどお肉も焼けたこ

ろだ！」

僕はミミノに手を引かれてたき火のあるところへと連れてこられた。彼女の手はとても小さかった。

あったけぇ……。

地面に座ると、僕はどっと疲れが噴き出るのを感じた。

「はい、食べる？」

ミミノは僕に串焼き肉を差し出した。なんの肉かはわからないけれど、表面は大量の香辛料がまぶされている。

脂身は少ないけどそんなものは関係なかった。ほかほかと立つ湯気と、肉のニオイを嗅いだ僕は彼女の手をつかんで肉にかぶりついた。

「――――」

目の前に火花が散った。香辛料の刺激がパァッと広がって、それから僕の舌が感じ取る肉の脂。熱さに舌が火傷するかと思ったけれど、僕は肉汁一滴すら逃したくなくて絶対に口を開かなかった。

肉を噛みしめると歯茎が痛い。奥歯が一本ぐらぐらしている。突然やってきた動物性タンパク質に驚いたのか、心臓がばくばくいって身体中が熱を持ったようになる。

呑み込む瞬間は至福だった。おっかなびっくり肉片を受け止めた胃袋は、消火活動にいそしむ消防団員のように胃液をじゃんじゃんぶっかけている。

「……レイジくん」

気遣うような声に僕は我に返った。ミミノの手を握りっぱなしだ

ったのだ。

「あ、す、すみませんっ……僕、こんなみっともない……」

「ううん。いいべないいべな。子どもはたーんと食べるべな」

ミミノは僕の手に串焼き肉を握らせると、そっと両手を差し伸べて僕の頭を抱きかかえる。

「え……？」

「つらいことも今は忘れて、食べるべな。なっ？」

そのとき僕は気がついた。

僕は、ぼろぼろに涙を流して泣いていたことに。

5（前書き）

朝にも更新しているのでご注意ください。

5

＊　冒険者たち　＊

「……寝たか？」
「ああ、寝たみたいだ」

ダンテスがたき火に枝を足しながら聞くと、横になっているレイジの隣に座ったミミノはそう答えた。
たき火の番は順番制で、今はダンテスの担当なのだがミミノはレイジが眠るまでそばで見守っていたようだ。

「奴隷の子か……この辺りならば天賦珠玉の鉱山にいたのかもしれん」
「どこだっていいべな。こんなに小さい子を奴隷として働かせるなんて……それにこんなに痩せっぽっちで……安売りしてた干し肉を、あんなに美味しい美味しい言って食べて……」

ミミノが手を伸ばし、ぼさぼさのレイジの髪の毛を目元からどけてやる。

「ミミノ。哀れな者に手を差し伸べるのはお前の美徳でもあるが、ほどほどにするんだぞ」
「……それは一般論？　それともダンテスの経験からくる知恵？」
「一般論でもそうだし、俺の経験からもそうだ」
「仲間をかばって石化したダンテスを、わたしは見放したりはしないさ。……みんなのようにはな」

「……」
「……」

ふたりは物思いに耽るようにたき火を見つめていたが、

「そろそろ寝ろ。明日眠くっても知らんぞ」
「……うん、そうする」

ミミノはレイジのそばに毛布を広げると横たわり、目を閉じた。

「レイジくんだってわたしは見放さないさ。わたしが守るべな……」

＊　＊

どうやら僕は「相当かわいそうな子」としてこの冒険者パーティーに迎え入れられたようだ。確かに、まぁ、奴隷の見た目で安い肉にがっついて泣いてればそうもなるよね。

冒険者は数人でチームを組み、それを「パーティー」と名乗り、「パーティー」単位で依頼を受ける。このパーティーの名前は「銀の天秤」というらしい。元々ダンテスさんとミミノさんが同じパーティーで活動していて、実力者であるダンテスさんがメデューサの呪いを受けたことでそのパーティーが空中分解したのだとか。

それから、ダンテスさんは娘のノンさんの治療を受けたが石化は治らず、光天騎士王国を目指すことになった。同じパーティーだったよしみでミミノさんも含めて3人で「銀の天秤」を結成し、旅の途中で獣人のライキラさんを拾ったとダンテスさんは言っていた。

「ライキラは、レイジ、お前と同じ……空腹でぶっ倒れていたのをミミノに助けられたんだ」
「そうなんですか？」
「アイツは助けられてからも『俺みたいな怪しい獣人を助けるお人好しは見てらんねーよ』とか言ってな、それで『銀の天秤』についてきた。ライキラの動き、見ただろう？　あの運動能力はすさまじく高い。きっと名のある傭兵か冒険者だったに違いない」

名のある傭兵か冒険者だったらしいライキラさんはじっと僕を見ていることが多かった。僕が疫病神であることを警戒しているのだろう――そう考えると悪い人じゃないのかもしれない（お上品だとは言っていない）。

ギットスネークが落ちてきたときにたき火のそばにいなかったのは、周囲にモンスターがいないかどうか索敵をしていたらしい。獣人は感覚に優れているのでライキラさんが索敵を買って出ているようだ。ギットスネークもライキラさんが近くにいればすぐ気づいたし、ふだんならダンテスさんやミミノさんも気づくレベルのものなのだが食事の準備で注意が散漫だったようだ。

「ライキラは獣人だし、ミミノはハーフリングだ……キースグラン連邦はヒト種族による連邦国家だからな。亜人に対して偏見が強い」

ダンテスさんは渋い茶を飲んだような顔で、そう言って話をしめくくった。
「銀の天秤」は森の中を進んだ。街道ではなく森だ。そのほうが面倒がなくていいということだった。僕は知らなかったが、それくらいヒト種族は排他的なのだ。

「よし、できたっ。レイジくんちょっと来るべな～」

翌日の夜、森の中でたき火を囲んでいるとミミノさんに呼ばれた。

「はい、これ。足りないところは端切れを足したからちょっと色がちぐはぐだけどな、今着てる服よりはマシだべな」

ミミノさんは僕の体型を測り服を調えてくれたのだ。前で合わせて腰紐で縛るタイプの服は、ベースが臙脂色で肘から先が緑というなかなか奇抜な色だった。

「い、いいんですか……？」

だけれど僕にとっては、誰かが僕のために服を調えてくれたことも、繕ってくれたことも、こちらの世界ではなかった。

「もちろんだよ～」

「げーっ、なんだそりゃ。俺なら恥ずかしくて着てらんねぇ……って」

通りがかったライキラさんが絶句している。僕はもらった服を抱きしめてまたしても泣いてしまった。ああ、よくないな。僕はなんだか涙もろくなってる。もっとちゃんとしなくちゃいけないのに……。

「ほらほら、早く着るべな！」

「あ、ちょっ」

僕はミミノさんに服を脱がされる。彼女の目も少し潤んでいたの

は気づかなかったことにしたほうがいいかもしれない。

「身体も垢だらけだからついでに洗っちゃうよ」

「え、ええっ？」

頭を下げた僕の後頭部に冷たい感触があったと思うと、だばーと水が流れて出た。あれ？　今、ミミノさん水なんて持ってなかったよな？　ていうか今日の鍋に入っている水も、どこかで汲んできた感じじゃないよな？

「あ、あの、この、水って、その」

わしゃわしゃとミミノさんに頭を洗われながらたずねると、

「ああ、これはわたしの【生活魔法（コンビニエント）★】だよ。見たことない？」

「ない……ですね」

「こうして飲料水を出したり、火をおこしたり、風を吹かせたり、竈を作ったり、服を伸ばしたり……できることはいろいろ多い、文字通り生活に即した魔法だな」

「ユニーク特性のスキルですか？」

「うん。冒険者をやるならパーティーに1人か2人、これを持ってるのがいるだけでずいぶん楽になるべな――これでよしっ。次は背中」

「あひゃっ」

濡れた髪には布きれが掛けられ、僕が拭いている間に背中をこすられる。どうもこの人は僕を子ども扱いしたいらしく、さすがに他のパーティーメンバーがいるところで貧相な身体を晒すのは……すでに高校生まで経験している僕からすると恥ずかしいのだ。

「あ、あの、ひとりでできます」
「子どもは遠慮なんかするもんか」
「いえ、あの、もう１０歳ですし」

中身は１６歳だけど。

「え！？　１０歳！？　てっきり５、６歳かと思ったべな」
「そんなにミミノさんと変わらないですよ……」
「むむっ！？　変わりますー！　わたしはもう２０歳ですからー！」

ミミノさんが唇をとがらせ顔を赤くすると、

「ぶはっ！　どう見たってミミノは１３、４歳だわなあ！　あっははははは――いでっ」

ライキラさんが大笑いし、ミミノさんの投げつけた石を頭に食らっていた。

ミミノさんは僕より頭ひとつ大きいくらい。数字で言えば１５０センチはないだろう。

いや、だけどミミノさんは２０歳……？　日本だとお酒飲める年齢？　すごいな、ファンタジー。ミミノさんが缶ビール飲んでたら犯罪臭ハンパないんだけど。ちなみにダンテスさんは３５歳で最年長、娘のノンさんは１６歳。ライキラさんは１８歳ということだった。ノンさん……世界が違えば僕のクラスにいたかもしれないのか。そう考えるとすごいな、なんか。彼女は着ている服がだぼっとしているのでわからないけれど、胸がとても大きいのだ。男子は彼女に夢中になるだろうね……。

逆にミミノさんは絶壁だけれど、まあ、うん、はい。ノーコメントで。

身長順に見ると、ミミノさんより大きいのがノンさんで、女性に

しては少し大きいくらいだ。もしかしたらもっと成長するのかも。
ダンテスさんとライキラさんはぶっちぎりで大きい。
ミミノさんからすると自分が今までいちばん小さかったから、さらに小さい僕が現れてうれしいのかもしれない。でも、それと僕の羞恥心とは話が別だ。

「おお～。似合うべな！　でもすぐに大きくなるかもしれんねえ」

僕が服に袖を通すとミミノさんがそう言って喜び、ノンさんがにっこりと微笑んでカミソリを手に近づいてきた……。

「な、な、なんですか……？」
「髪を切りましょうね」

あ、ああ、髪か……びっくりした。この人、なにを考えているのかわからないところがあるから、刃物を持っているのを見るとぎょっとするんだよね。
しばらくショリショリされると、

「うん、よし」
「お～」

髪がだいぶさっぱりした気がする。奴隷のときは伸びっぱなしで、邪魔になったら適当に切ってたくらいだしね……。
ぱちぱちとミミノさんが手を叩いているのを見るに、多少はマシになったんだろうか？

「え、えーっと……改めまして、よろしくお願いします」
「うん、よろしくな～レイジくん」
「よろしく」

「よろしくね」
「……チッ」
ふて寝するように横になっていたライキラさんだけは舌打ちが返ってきて「ライキラ！」とミミノさんにお尻を蹴っ飛ばされていた。

5（後書き）

次は夕方にも更新できそうです。

6（前書き）

本日3話目ですのでお気をつけください。

6

「銀の天秤」は強かった。控えめに言っても、森の中では「敵なし」だ。

森の暗い夜に僕が怯えて震えていた相手の野犬――茶色い毛皮の狼と犬のあいの子みたいなモンスターも彼らにとってはたいしたことのない相手だった。これは「チャコールウルフ」と呼ばれるモンスターらしく、鋭い嗅覚で人間の接近を把握すると、群れとなってまず人間を遠巻きに囲む。人間が気づいたときには遅い。圧倒的数の差で迫ってこられ、食い殺される。

だけれどライキラさんの嗅覚はチャコールウルフと同等（本人が言うには「あ？　もっとすげぇけど？」とのことだがダンテスさんからすると「同等」）で、チャコールウルフが人間に気づくころにはライキラさんも気づいている。向こうが群れを作る前にライキラさんが接近して倒してしまう。

ライキラさんの戦い方はかなり尖っていた。敵だとわかると音もなく走り出し、接近するや相手の機動力を奪うべく足元にキックを入れる。少しでも素早さが落ちたら、しめたものだ。翻弄するだけしまくって、ダガーで仕留めるもよし、蹴り殺すもよし。

（……【脚力強化★】のスキルがあるのかな？　あるいは【蹴術★★】？）

天賦珠玉に関してはちょっとばかし詳しい僕は、思いつく範囲で考えてみた。

僕は彼の動きをじっと観察した。十分過ぎるほどに。休憩時間にこっそりと真似てみるのだけれど、彼の動きをコピーすることはできなかった。僕が想像するのとはまったく違う天賦珠玉を取り込ん

でいるのかもしれない。
うーむ、スキル、奥が深い……。
あの落ち葉を踏んでも音を鳴らさないのもそうだ。なにかのスキルかと思ったけれど真似できないってことは、彼が自分で身につけたテクニックなんだろうか？
勝手にスキルをコピーすることには少々もやっとする部分もあったけれど、僕がこの世界で生きていくのに必要なことなのだからと割り切った。完璧にコピーできるわけでもないし、むしろ足手まといの僕が多少でも「使える」ようになったほうが「銀の天秤」にとってもいいことだろうし。

「見ての通り、ライキラは口が悪いけども、動物系モンスターが相手ならば圧倒的に強いべな」
「あの……ミミノさん。ライキラさんがパーティーに入る前はどうやって戦っていたんですか？」
「わたしの魔法で敵を感知していたね。だけどそうするといざってときに魔力が足りなくなったりするし、1日の行動時間も少なくなる。だからライキラがいてくれて助かるんだ」
「そうですか……魔法か」

敵の位置を把握するような魔法があるのだろうか。
この世界には魔法が存在するが、「魔力」を消費する魔法は「魔法特性」の天賦珠玉に連なる8種類の魔法と、「神秘特性」に連なる2種類がほとんどだ――とヒンガ老人が言っていた。
ほとんど、というのは「ユニーク特性」などに例外があるからだ。ミミノさんの使える【生活魔法（コンビニエント）】もそれで、僕は少量ながら水を生み出したりすることに成功していた。これは便利。

「……僕も魔法を使えるようになれば、多少は役に立てますか？」
「いいんだいいんだ、レイジくんは戦わなくとも」

「でも、タダ飯食らいでは気が引けます」
「――そうだぜ。働かざる者食うべからずってな、なんか仕事やらせろや」

チャコールウルフを仕留め、戻ってきたライキラさんがそう言った。ミミノさんは露骨に顔をしかめる。

「子どもにやらせることないべな」
「子ども子どもっつうけどなぁ、この森の中じゃ子どもも大人もねーんだよ。なにもできねーガキは狼に食われて死ぬだけだ」
「うむむ……」
「ライキラさんの言うとおりです。自分の身を守る意味でもなんとかしたいです」
「……レイジくんがそこまで言うなら、わたしの知っている魔法を教えようかねぇ。でもな、魔法の才能がなければ違うことにするよ？」
「はい！　それで構いません、ありがとうございます、ミミノさん。それにライキラさんも……」
「チッ」

舌打ちしたライキラさんは僕らに背を向け、仕留めたチャコールウルフの皮を剥ぐようだ。「肉は臭くて食えたものではない」とダンテスさんは言っていたけれど、皮は売り物になるのだとか。

ライキラさん……これはやっぱりアレだ。ツンデレだ。ツンデレだと思うと「しょうがないなぁ、またツンが発動したのか？」と思って微笑ましい気持ちになれるから不思議。だけど細マッチョ獣人のツンデレとか僕にはノーサンキュー。

「それじゃ、わたしの魔法について説明するね」
「あっ……」

「ん？」

「その……スキルのことについて聞いたりするのは、もしかしてマナー違反だったりしますか？」

「初対面で聞くのはマナー違反だけどな、同じ仲間内だったら構わないべな。レイジくんはなにかスキルがある？」

「……僕は、その……」

どうしよう。【森羅万象】のことを話したら、必然的に転生の話もしなきゃいけなくなる。話して信用してもらえるだろうか？　というか星１０の天賦珠玉を使ったことが漏れたりしたら、必然的に僕は鉱山にいたことがバレ、さらにはそれを勝手に使って持ち出したことまでバレてしまうんだよな……。

「あっ、いいのいいの。今度レイジくんになにか天賦珠玉を買ってやるから、な？　スキルがなくても気にする必要はないっ！」

僕が戸惑っていると、「この子はスキルもない子」と認識されたみたいだ。その認識はほとんど合ってはいるんだけど、かといってミミノさんの中でさらに「かわいそう」ポイントが積み重なるのはいたたまれない。

「わたしのスキルはね」

と、ミミノさんは地面に枝で文字を書いた。そこにはミミノさんの持っているスキルがずらりと並ぶ。

【魔力強化１・魔法適性強化１・魔力操作１・花魔法２・土魔法２・生活魔法１】

おお……魔法型冒険者だ。やっぱり、と言うべきか。

【花魔法】と【土魔法】は「魔法特性」に連なるスキルである。
僕は【火魔法】を少しだけ使えたけれど天賦珠玉を通じて覚えるほうが圧倒的に効率はいい。

（とはいっても、星２つの天賦珠玉を買えるお金なんてないし、今の僕にはミミノさんから教えてもらうのがいちばんいいよな）

ヒンガ老人が言うには、星２つの天賦珠玉を買うにはおよそ大銀貨１０枚。
日本円で、１０万円くらいだ。
それで魔法を買えるなら安いようにも感じるけど、適性がなかった場合にはほとんど使えないし、貴重な枠を２つも消費してしまう。

「まずは、こうっ」

ミミノさんが手をかざすと、木の枝に突然花が開いた。

「【花魔法】は花だけでなく樹木を扱える魔法だからねえ、こうして自然のいろいろなものに影響を与えられるんだよ」
「なるほど……」

僕は今見た魔法の発動をしっかりと記憶する。
そして同じように手をかざし、

「こうっ！」

【森羅万象】の力を借りて魔法を発動する――と、

「えええええ!?」

枝からはバババッと大振りの花が3つも咲いた。

「す、すごい、すごいべなレイジくん！　君は才能が――」

僕はミミノさんの言葉を最後まで聞くことができなかった。なぜならその場にぶっ倒れたからだ。

6（後書き）

コロナ騒ぎがまだ一段と大きくなってきましたが、私にできることはこうしてお話を書いて皆さんに届けることだけなんだよなぁと。だからこそ厳しい状況ながらも人と人との触れあいが温かいようなお話を書きたくなったのかもしれません。

そして物語としては次のフェイズに移り、だんだんとレイジくんが成長していく萌芽が見えてきたところです。

今この状況を思うと小説ってのはいいですね。誰にも会わずにひっそりと楽しめる。

皆さんもお気をつけください。

7（前書き）

今日も朝昼夕の3回更新予定です。

7

魔法を使ったことによる魔力の減少は、あたかも血圧が一時的に下がったような立ちくらみを発生させる。僕は気を失ってしまったらしい。同じ失敗を2度もしてしまうとは……。

「レイジくん、天賦珠玉がなくとも初歩的な【花魔法】は使えるようになるべな！」

しょげる僕とは裏腹に、ミミノさんは上機嫌だった。

気絶している間にチャコールウルフの処理は終わり、僕はダンテスさんに背負われて移動していた。今は、食事も終わってミミノさんの薬草茶をいただく寝る前の時間だった。

ちなみに今夜のメニューも干し肉。超美味いんですけど。ライキラさん、そんなにマズそうに食べるなら僕がもらいますよ？

「そ、そうですかね……？」

「うんうんっ。わたしが最初に【花魔法】を使ったときよりずっとすごいんだもの。これで天賦珠玉があればいっぱしの【花魔法】使いになれるべな！」

「その前に魔力量増やすスキルがねーと意味ねーだろが」

ライキラさんが口を挟んでくる。薬草茶が嫌いらしく、お茶は断り、苦みのある味がする草の茎を噛んでいる。

「そうは言うけどねぇ、ライキラ。【魔力量増大】の天賦珠玉はとんでもなく高価（たか）いんだよ？」

ミミノさんが言うには、彼女の持っている【魔力強化★】【魔法適性強化★】は出現頻度が高いために安く販売されており、【魔力量増大★】は星3つと同じくらいの金額で取引されているという。

星が少ないほど出現しやすいのは事実なのだけれど、確かに僕とラルクが3年間発掘してきた中で【魔力量増大★】は一度も見たことがないな。同じ星の数でも出やすさが違うんだろう。

「魔力量」はRPGで言うところの「MP」かな。これが多ければたくさん魔法を撃てる。僕はメチャクチャ少ないんだろう。

「ちなみにな、【魔力量増大★★】は『雪風の賢者』とも呼ばれた大魔導師（ウォーロック）様が使っていたみたいで、【魔力量増大★★★】は発見された記録はあるものの、どこかの国で厳重にしまわれて管理されているんだとか」

「へー。同じ種類なのに星が増えるんですね」

ヒンガ老人からその話は聞いたことがなかったな。

「そうだよ？　ちなみに【魔力強化★】を2つ装着するよりも【魔力強化★★】1つのほうが効果が高いんだよ？」

「へえー！」

それもそうか。星1つを2つくっつけて、星2つと同じ効果があるなら、星2つの天賦珠玉なんてなんの意味もないもんね。

「そう言えば、ミミノさんも持っていた【魔力強化】にはどんな意味があるんですか？」

「単純に魔法の威力が上がるべな」

「【魔法適性強化】は……？」

「魔法を使える幅が広がるって感じかなー。それで【魔力操作】は魔法を発動するときにいろいろと細かい融通が利くようになる」

なるほど。

入手のしやすさと使い勝手の良さを考えた上で、ミミノさんはスキルを選んだって感じか。

「……魔力量は、魔法を使っていれば増えるんですか？」

ここが重要だ。僕は今のところお金もないし。

「それがねえ……よくわからないんだべな」

「わからない？」

「レイジくんが言ったみたいに『使えば増える』という人もいるし、『年齢で増える』という人もいるし、『肉体が成長すれば増える』という人もいてな。果ては『種族によって違う』なんていう人もいるもんだから……わからない」

「あらら……じゃあ、僕はこの先どうなるかはわからないですね」

「でも、使う練習はしておいたほうがいいね。他の魔法を習得するにしても役に立つしな！」

「はい！」

「がんばろー！」

「おー！」

「……」

「……？　どうしました、ミミノさん？」

じっ、とミミノさんが見てくるので僕はなんだか居心地が悪い。

「いやさ、レイジくん、ほとんどなにもわたしが教えてないのに魔法を使えたな、って……わたしだってお姉ちゃんに結構仕込まれたんだけどな」

ミミノさんにはお姉さんがいるようだ。
僕の姉……ラルクは今ごろどうしてるかな。

「あ、そ、そうですね！？　おっかしいなー、使うのは初めてなんですけどね、いやほんと」

じろっとライキラさんが疑わしそうな目で見てきたけれど「あは、あはは」と僕は適当にごまかすしかない。この世界の常識がよくわからない！　助けて、【森羅万象】！　……はい、わかってた。返事がないことくらい。そういう便利なスキルじゃないからね、君は。

「いやあ、もしかしたらレイジくんは魔法の才能がすごいのかもな！」

ミミノさんはそう言うと、うれしそうに笑った。

それから僕は【花魔法】の使い方をいろいろとミミノさんに教わった。だけれど、僕の魔力量が足りなくて発動できないものばかりだった。【土魔法】も同様だ。それでも――いつか魔力量が増えたら使えるようになるかもしれない。だから、僕はじっと見つめて勉強した。

【魔力強化】、【魔法適性強化】、【魔力操作】はコピーできたのかどうかよくわからない。そもそも魔力が足りなくて魔法を使えていなかったからね。

枝を生やして足場を作る魔法。逆に枝を消す魔法。草を操り転ばせるトラップを作る魔法。ツタで相手を締め上げる魔法。トゲを飛ばす攻撃魔法。花粉で眠らせる魔法――。

土の壁を作り出す魔法。落とし穴を作る魔法。石を割る魔法。金

属の硬度を一時的に増す魔法。土を固めて射出する攻撃魔法。地面の揺れで敵の位置を把握する魔法。洞窟の壁面や天井を補強する魔法――。

実は、ノンさんが毎晩ダンテスさんに掛けている治療の魔法についても僕は使えるようになっていた。その魔法は身体の活性を高めて自己治癒能力につなげる魔法なので、僕は擦り傷程度なら治せるようになった。

一方で、ダンテスさんが振り回すベンチのような大剣や、ライキラさんの身のこなしについては使えるようにはならなかった。そもそも大剣どころか刃物すら僕は持っておらず、鑿（のみ）ではその代用品にもならないからだ。ライキラさんのほうは……わからない。【脚力強化】か【蹴術】なんだと思っているのだけど、僕はその真似ができないのだ。どうしてだろう？　獣人が持ってるそもそものポテンシャルなんだろうか？　だとしたら獣人ってだけでチートじゃない？

ライキラさんが自分のスキルについて教えてくれれば解決しそうだけれどもちろん教えてくれるわけもなく、僕からも聞くことはなかった。

ただダンテスさんとノンさんは教えてくれたっけ。

ダンテスさんのスキルは、こうだ。

【腕力強化１・背筋力強化１・腹筋力強化１・手先が器用１・大剣術２・免疫強化２】

僕は【手先が器用】なんて天賦珠玉、自分で何度も発掘したことはあったけれど実際に使う人がいるとは思わなかったよ……。聞いてみると、実は使い勝手がいいらしく、装備品や道具の修理、料理をするのにも役に立つんだとか。

スキルの世界は奥が深い（２回目）。

そして星２つの中でもレアな【免疫強化】は石化に掛かってから

有り金を全部使って買ったらしい。元々持っていたスキルを「破壊」して、新しいスキルを手に入れたところで無一文どころか借金をしたのだとか。

スキルの「破壊」は専門の人にお金を払えばやってもらえるようで、【オーブ着脱】と違い、なくすだけなのでたいした金額ではないんだって。

ともあれ【免疫強化】のおかげでそれで石化の進行を食い止めることができ、冒険者として活動再開できるようになって借金を返したとダンテスさんは言っていた。

ノンさんのスキルは、こうだ。

【神感強化1・祈祷術1・回復魔法2・補助魔法2・神聖魔法2】

すべて「神秘特性」の天賦珠玉だ。ノンさんは着ている服が修道服っぽいなと思っていたけれどそのものずばり修道女だった。ダンテスさんが石化に掛かったと聞いて、一時的に教会を抜けてお父さんのところへと飛んできた。

教会は「神秘特性」の天賦珠玉を国から配布される。ノンさんは修道女になる代わりにお金を払わずにこれらのスキルを得られたと言っていた。逆に修道女を辞めることはほぼ不可能で、ダンテスさんの石化みたいに特別な理由があって、ようやく一時的に抜けられる程度だ。

【補助魔法】や【神聖魔法】は見てみたいんだけど、まだ見たことがないくらいには「銀の天秤」はモンスターを相手にびくともしない。

【祈祷術】はなにに使うの？　と聞いたら、「よりいっそう神に感謝の念を送れます」と真顔で返された。

この世界、スキルが多すぎない？　やはり奥が深い（3回目）。

僕のいた鉱山も含め、この世界には全部で8か所の天賦珠玉の出

現ポイントがあるのだから毎日すさまじい数が産出しているんだよね……とはいえ鉱山は、今は操業停止なんだろうけれど。

8

森での生活はどこかのんびりしていて楽しかった。一口に「森」と言っても道はある。街道ではない、狩人や商人が使う秘密のルートがいくつもあるようだ。

ハーフリングであるミミノさんは方向感覚に極めて優れていて、地図もない森をすいすいと進んでいく。

（ほんとうに合ってるのかな……）

と僕はいぶかしんだけれど、パーティーメンバーの誰も疑っていないので問題ないみたいだ。まあ信じる以外に僕にできることもないけど。

食事は森で獲れたものが中心で、そこでは僕も活躍した。食べられる果実やキノコ、野草は【森羅万象】で全部わかるからね。あと薬草類が生えているとミミノさんに教えて採取してもらう。「よく知ってるべな～」と褒めてもらうのは楽しい。ミミノさんは知らないけれど【森羅万象】は知っているという草も、とりあえず集めておいた。売れるかもしれないしね。

ただ香辛料や塩、それにお酒はなくなってしまう――ダンテスさんはお酒が好きみたいで、ちびりちびりと酔わない程度に毎晩呑んでいる。

そんな生活必需品の補給は、林道で出会う商人から購入できた。彼らもまた街道を使わない、あるいは使えない商人だ。どこか後ろ暗い過去がありそうな男だったり、猫の獣人だったり。身体よりもずいぶん大きなリュックを背負った行商人の彼らは数人単位で動いていることが多く、ミミノさんやダンテスさんが交渉して商品を手に入れていた。

ただ――こののんびりとした森での生活が、ずっと続くわけではなかった。

そもそも「銀の天秤」のメンバーには目的地がある。

光天騎士王国だ。ダンテスさんの石化を治すために。

目的地へ急ぐ意味もあって「銀の天秤」のメンバーは森を進むのが早かった。僕の体力がついていかず、ちょくちょくダンテスさんに背負ってもらうことになったけれど、数日で僕の身体もついていけるようになったんだから僕も成長しているのです（ドヤ顔）。

「もう、父のおんぶは必要ないのですか？」

「はい！　だいぶしっかり歩けるようになりました」

「そう、ですか……」

僕が胸を張ると、ノンさんはなぜか悲しそうな顔をした。

な、なぜ……もしや小さい子どもがおんぶされている姿に興奮する特殊な性癖の持ち主とか？　――とか死ぬほどどうでもいいことを考えていると、ノンさんは理由を話してくれた。

「……石化の呪いは他者に伝染りません。ですがまるで伝染病であるかのように忌み嫌う人も多いのです」

つまり僕が、石化のことなんてなにも気にせずダンテスさんの背中におぶさっていることがうれしいみたいだ。いや、うん、そういうことですよね。わかってた。

（ん。ってことは……そうか）

僕は気がついてしまった。

「獣人」「ハーフリング」という亜人要素だけでなく、ダンテスさん自身もまた差別されかねない対象だったんだ。

（……僕の髪のこと、なにも言われない）

黒髪に黒目、親や公爵からあんなに嫌われたのに――憎まれるほどだったのに、誰もなにも言わないのは、彼ら自身が差別されることの恐ろしさを知っているからだろう。

僕は、彼らがとても温かな人たちなのだということを改めて知った。

僕はとても恵まれているんだ。

願わくば……姉のラルクにもこんな素敵な出会いがあらんことを……。

「……みんな、今日は街に入るべな」

明くる日の早朝、たき火がくすぶって白煙を立ち上らせているそこでミミノさんが言った。

みんなが神妙な顔でうなずく。やっぱり、彼らにとってヒト種族の多い街に入るのは覚悟が要ることなんだろう。

「レイジくん。わたしらといっしょにいたら君までなにか言われるかもしれないけどな……どうする？」

「もちろんいっしょに行きます」

「ん……そっか」

「というか目的地もありませんしね……。今はミミノさんたちにしていただいたことへ、恩返しをしなきゃってそれくらいだけで。それには、街に行かないとですし」

僕の人生の目的なんて今はないに等しい。
できれば、ヒンガ老人のお孫さんに会って老人の最期について伝えなきゃとは思うけど。まだ燐燹魔石は道具袋に入っている。
それと……ラルクだ。
彼女にもう一度会いたい。これだけは、絶対に。
とはいえそれもこれも、僕がこの世界で独り立ちできるようにならなきゃどうにもならないんだよね。とりあえず、生活を安定させるのが第一だ。

「わたしらのことなんて、気にしなくていいんだよ？」
「そういうわけには……」
「でも、そう言ってくれるのはうれしいべなぁ」

ミミノさんがにっこりとしているが、そこへ、

「おいミミノぉ、いい加減ちゃんと話しとけよ。俺たちゃ街じゃ『嫌われモン』なんだってよ」
「ちょっ、ライキラ！」

ライキラさんの言葉にミミノさんは焦るけれど、僕はそこについては重々承知だ。

「どーせ遅かれ早かれバレんだ。はっきりさせといたほうがいいだろーが。それにこのガキだって……」
「ええ、わかっています。僕の黒髪も、いろんな人に嫌われて、殺されそうになったことも何度かあるので、街でも同じことが起きるかも」

ミミノさんは僕の言葉に、石でも呑んだように固まった。彼女だ

けでなくノンさんもだ。ダンテスさんはいつもよりもずっと渋いお茶を飲んだような顔で、ライキラさんは苦しそうに顔をゆがめた――ああ、この人はやっぱり、意地悪なことを言いながらも僕のことを気にしてくれてる。

「銀の天秤」はパーティーそのものが「目立つ」のだ。ヒト種族の街ではね。だから僕の「黒髪黒目」にもまた注目が集まってしまうかもしれない。僕ひとりで行動していればそうはならないかもしれないのに……と、そう考えてくれているのだ。

この人はなんて不器用なんだろう。でも細マッチョ獣人のツンデレはノーサンキュー。

「僕は大丈夫ですけど、逆に迷惑を掛けたらすみません」

ぺこりと頭を下げると、大きな手のひらがそっと差し出されて僕の額を押し上げた。

「子どもが心配などするな。大人の傘に隠れていればいいんだ」

ダンテスさんだった。

「……レイジくん。君は……わたしが絶対に守るからね」

ミミノさんは頬を紅潮させ、目を潤ませながらそう言ってくれた。この人もまた僕に負けず劣らず涙もろいようだ。

「泣いてんじゃねーよミミノぉ。朝からシケた顔すんなや」

「こっ、これは煙が目にしみたからだべな！」

ごしごしと袖で目をこすって、

「よし、行こう！」

「銀の天秤」は一路、アッヘンバッハ公爵領の領都である「ユーヴェルマインズ」を目指したのだった。

8（後書き）

いよいよ街に。鉱山のその後とかわかったり。いろいろと事件が起きます。

9（前書き）

すみませんんんんんミルコの名前をミミノに変えました。諸事情で。申し訳ない。（平謝り）

……さて。

別途連載しておりました「学園騎士のレベルアップ！」が本日から双葉社がうがうモンスターにてコミカライズ始まりました～！　やったぜ。

小説とは違う魅力があるコミカライズも是非お楽しみください。

あと、今日はこのオバリミ3話更新しているのでお気をつけください。

9

「でっか……」

領都ユーヴェルマインズは高く積まれた石による城壁がぐるり取り囲んだ都市だった。僕が左右を見ても、どこまで広がっているのかわからないほどの壁だ。

中に入りきらない家が城壁の外に並んでいるけれど、これは単なる住居だけではなく領都を目指してやってきた旅人を相手にした商店や宿でもあった。

そんな商売が成り立つほどに、領都に入るには時間が掛かる。城門が豆粒ほどに見える位置からずらりと人々が列をなしている。

並んでいるのは旅人、商人、引っ越しのように家財を持ってきた人たち――と様々だ。時々列をすっ飛ばして駈けていく領兵の馬を、みんな恨めしそうに見ている。

「ん～これだと入れるのは明日になるべなぁ」

「チッ、しょうがねー。そこら行って獣でも仕留めてくら」

ライキラさんがそう言って列から離れようとすると、

「おっ、獣人の兄(アン)ちゃん、狩りかい？　ハマダラ鳥を仕留めたら譲ってくれよ。金ははずむぜ！」

と前に並んでいた商人が声を掛けた。

「あぁ？　やだよ。アンタ、こすっからそうな顔してやがる」

「おいおい、商人なんてこすっからくてナンボだろう」

「言うじゃねーか。まあ、見つかったらな」

そんなこと言いながらライキラさんは草原を突っ切って森を目指した。

獣人にも差別がある……みたいなことを覚悟していたのだけど、この商人さんは特に気にしたふうもなかった。

「ハマダラ鳥というのはな、身体に草の葉をくっつけた鳥で地を歩いている。だが擬態がなかなか見事で、これを仕留められるのは嗅覚の優れた者だけなんだ」

ダンテスさんが教えてくれる。するとその横で、娘のノンさんもうっとりとし、

「ハマダラ鳥は冬を越えてから夏にかけてとても脂がのるんです。美味しいんですよ……せめて1羽、いえ、贅沢は言わないので脚1本でも獲ってきてくださるといいんですけど」

脚1本とれたらすでにその鳥は死んでいるか動けないのでは……？

「まあ、待つべな。こういうときのライキラはきっと期待に応えてくれるものだ」

「お。それは楽しみですなあ」

気がつくと商人と販売交渉をしていたミミノさんがそんなことを言い、商人もにこやかに言った。

結果、1羽どころかなんの成果も得られずにとぼとぼとライキラさんが帰ってきたのは夜も更けてからだったけども。

食べてみたかったなあ、ハマダラ鳥。

変わらぬ干し肉を食べて僕らは野宿だ。干し肉美味しいです。

朝日が昇ると、夜間には閉じられていた城門が開く。お昼を過ぎたころ、僕の目にはそびえ立つような城壁と城門が見えてきた。城門、とは言っても、部材の1本1本が丸太を使った木の柵を下ろしていただけのようだ。

中に入るのが遅いのは税金の徴収が行われているからだ。旅人はひとりあたり銀貨1枚でおよそ1，000円ほどの金額を払う。商人は商品内容に応じて税金が掛かるので――商人の商品査定に時間が掛かるらしい。

分けてくれればいいのにねえ……。空港の税関だって外国人と国民とで分けてるしね。

「次」

ようやく僕らの番だ。

鉱山兵とよく似た、とんがった兜をかぶった領兵が僕らを呼んだ。彼らは身体には鎖帷子（チェインメイル）を装備していて、武器は短槍だった。

「パーティー『銀の天秤』です」

「なんだ冒険者か。さっさと通れ」

ミミノさんが鉄製のカードのようなものを差し出すと、領兵は一瞥しただけで僕らを奥へと通す。んもう、こんなんで済むならさっさと入れてよね。

それにしても、これでやっと領都だ。こっちの世界にやってきてから初めての大都市だ――。

「――ちょっと待て」

横を通り抜けようとした僕の腕が、つかまれた。袖が少しめくれて入れ墨の痕がはっきりと見えてしまっている。

マズイ――。

僕は心臓が跳ね上がった。

ライキラさんがそろりと脚を動かし、ダンテスさんが腰の短刀に手を掛けるのが横目に見えた。

そしてその向こう、先頭を進んでいたミミノさんが、大きく目を見開いて領兵を見据える――ぞわりと彼女の魔力が、彼女の髪の毛を持ち上げていく。え、待って待って待って！　なにしようとしてるの！？

ダメだよ！　僕のためにみんながトラブルに巻き込まれるなんて！

「……なんだ奴隷か」

と思っていると、領兵はその程度の反応だった。

「子どもだから冒険者ではないだろうとは思ったが……奴隷は旅人と同じく銀貨1枚の税金が掛かる」

「そうなのですね、知りませんでしたわ」

するりとみんなの前に出てきたノンさんが、領兵に銀貨を手渡し、その手をそっと温かく包んだ。「お、おう」なんて言いながら領兵はちょっと顔を赤らめ、ノンさんの胸をガン見していた。

「君は修道女では……？」

「はい。ですが今は冒険者として活動する特別な許可を教会から得ております。こちらが私の冒険者証です」

「う、うむ。確かに」

「お務めご苦労様ですわ。さ、行きましょう」

ノンさんに促されて歩き出した僕らは、入ってしばらく進んだところで道を曲がって路地裏に入った。

「――お父さん、ライキラさん、それにミミノさんも！　なんですかあの殺気は!?」

ノンさん、怒る。

だよね。あれ、確実に殺気だったよね？

「いざとなったら『パーティーで購入した奴隷だ』と主張する約束だったでしょう!?　それを、ちょっとした計画外のことで殺気を出すなんて！　もう！」

「す、すまん。出だしがうまくいったもので、つい……」

「……悪りぃ」

「……ごめんなさい」

「あそこでもめ事になったら領兵全部と戦うことになったんですよ！　たぶん、殺気には何人か気づかれてたはずですよ！」

知らなかった。みんなはちゃんと僕について呼び止められたらどうしようかということまで話し合っていてくれたんだ。

ダンテスさんはぺこぺこと謝り、ライキラさんはばつが悪そうにそっぽを向き、ミミノさんは今にも泣きそうだった。

「わ、わたしのせいでレイジくんを危険な目に遭わせたかもしれなかったんだべな……」

「ちょっ、ミミノさん、大丈夫ですから、大丈夫、ちゃんと街に入れましたし！　ね？　ノンさんも怒ってるわけじゃないですよ」

「もっ、もちろんです。……ごめんなさい、私もちょっと動揺していたようです」

ノンさんもぺこぺこと頭を下げた。その仕草があまりにダンテスさんにそっくりで、ふたりはやっぱり親子なんだなとしみじみ感じた。

僕は――幸せ者だ。こんなにもいいパーティーに拾ってもらえて……。

じーんとしている僕は、ここからさらに幸せが待っているとは思いもしなかった。

なんと泊まる宿には温泉がついていたのだ。

9（後書き）

さあ、次は温泉回だ！（立ちふさがるＲ－１５規制）

10

大きな湯船に身体をつけると、ずぶぶぶと溶け出してしまいそうだ。

まさか温泉が湧き出ていて、領都ではどの宿でも提供しているなんて……。異世界小説にありがちな「風呂に入りてぇ！　なにぃ、風呂なんて王侯貴族しか入らねぇだとぉ!?」問題を僕はあっけなくクリアした。

湯気がもうもうと立ちこめて端から端まで見渡せないほどに大きな浴場は、僕以外には誰もいない。宿のロビーで会った人は数人いたけれど、みんな商人らしい。商人、とわかるのはミミノさんから「この宿は冒険者や旅人でなく、商人向けだからな」と聞いていたのと、あとは切った張ったの戦いに向いている肉体ではなかったからだ。

ヒト種族でなくとも平等に接してくれるのは商人で、次に一般市民、次に冒険者、次に貴族、次に農民……ということらしい。いちばん農民が激しい差別意識をもっているそうで、というのも彼らは閉鎖的な村に住んでいるのでヨソ者をことのほか嫌うからだった。

聞けば、納得ではある。

とはいえ「一般市民」というくくりも大きいし、実際には商人でも偏見まみれの人がいるから気をつけるように……と釘を刺された。

「ふー……ひとりだと落ち着くなぁ」

【森羅万象】によると、これは源泉掛け流しというヤツで、紛れもなく地中から湧き出た温泉だった。皮膚病には効くけれど石化には効かないみたいだ。

石造りの大浴場は、建物の半地下にある。

上のほうに換気用の通気窓があった。
明かりは乏しいので僕以外に誰かがいてもわからないけれど、夜も遅いのでここにはいなさそうだ。
ちなみにライキラさんは「獣人が風呂になんか入るわけねーだろ」と言い（毛がいっぱい抜けるので嫌がられるそうだ）、ダンテスさんも「俺は止しておこう」と寂しそうに言った。石化が伝染するとか思う人に気を遣っているらしかった。
なので、僕はお風呂を独り占めできているというわけだ。ぶくぶくぶく……あー、極楽じゃよ……。

ガラガラッ。

とか思っていると引き戸の開く音が聞こえた。独り占めの時間は終了だ。まあ、ひとりっきりというのも寂しいし、いいか。ただ僕の黒髪を怖がられると困るけど。

「レイジくんいるか？」
「ぶほっ」

水面で息を吐いてあぶくを作っていた僕は思いっきり噴き出した。
そりゃ噴き出しますよ！？　な、なんでここに――。

「なんで！？　なんでミミノさん！？」
「そりゃだって、この時間は女の時間だものな」
「私もいますよ～」

引き戸から入ってきたのは、ミミノさん、そしてノンさんだった。
もうもうとしている湯気のおかげで見えないのが残念――じゃない！　見てる場合じゃないよ！？

「この時間は女性!?　僕に行ってきなさいって言いましたよね!?」

「うん。だけどレイジくん出てくるの遅いから女の時間になったんだべな。レイジくんは１０歳だし、見た目ももっと小さいから全然平気よ」

僕が平気じゃないですぅ！　近寄らないで！　近い近い近い近い！　すぐ後ろで話しかけないで！

「で、で、でも――僕出ます！」

「こぉら、話すときは人の顔を見るだな」

「!?」

両手でがっしと顔をつかまれ、そっちを振り向かされた。

そこには、薄明かりの中に立っているミミノさんとノンさんのふたりがいた――。

ミミノさんはともかく（失礼）、ノンさんの破壊力（なにとは言わない）は、すごかったです。

「……おお、戻ってきたか」

僕が部屋に戻ると、イスに座っていたダンテスさんが言った。ライキラさんはすでに寝ているようで、ベッドに横になっていた。僕はどさりとダンテスさんの向かい、イスに腰を下ろす。

「どうした？　レイジ」

「……いえ、あの、いえ、なんでも、ないです……」

「？　そうか」

一応女性ふたりは隣の部屋なので、なにが起きたのかダンテスさんは知らないのだろう。もしもノンさんとお風呂に入ったことがバレてしまったら「ウチの娘になにしてくれるんじゃァァ」と鬼の形相で迫ってくるかもしれない……ふだん優しいダンテスさんが！　確実にちびる。

「それにしても、いいんですか？　こんなにいい部屋に泊めてもらって……」

「ああ。俺たちはふだんは森を進むだろう？　だから旅費はほとんど掛かっていない。レイジも食べられる野草を見つけてくれているし食費も圧縮できている。街にいる間はいい宿に泊まってしっかり疲れを取る。それが俺たちのやり方……なんだ」

俺たちの、と言ったときにダンテスさんは一瞬寂しそうな顔をした。ひょっとしたらそのやり方、ポリシーは、前のパーティーのものなのかもしれない。

「ふうむ、しかしレイジは賢そうな顔をしているな」

「え、ええっ!?」

「元々賢いとは思っていたが、汚れを落とすとさらにそう見えるぞ」

「あ、ありがとうございます……？」

今はこっちの世界で生きてきたキツイ記憶よりも、男子高校生だったころの記憶を思い出すようにしている。キツイことなんて思い出したってつらいだけだしさ……。

そのせいで平和ボケしたように見えるのだろうか？

「さぞ、いい教育を受けたのだろう――あ、いや、これは忘れてく

れ」
「いえ構いませんよ。僕は確かに、それなりの教育を受けたのだと思います」

こっちの世界は子どものころから親の仕事の手伝いだもんね。職業が決まれば丁稚奉公みたいに親方に弟子入りして、天賦珠玉をもらって仕事をする。

木こりなら木材関連の、漁業なら漁業の関連ギルドがあって、そこから天賦珠玉が安く回ってくるらしい。この世界はすべて天賦珠玉だ。

「ダンテスさんも優しさがにじみ出ていますよ」
「……俺が、か？」
「はい。特にノンさんを見ているときは」
「……」

ダンテスさんは難しそうな顔をした。僕はなにか変なことを言っただろうか――ハッ。ま、まさか、大浴場でなにがあったのかを知っているとか！？　すすすみません！　悪気があったわけじゃなくて！

「……俺は、な」

ぽつりとダンテスさんは言った。

「たぶん、石化を治すことができずに死ぬんだ」
「……え？」
「相当に難しい呪いらしくてな。光天騎士王国に行っても治せる確率は低い、とはもう何度も聞いたんだ。各町の回復魔法使いからはな」

僕は――知らなかった。

この人は、もう、死を覚悟しているのだということに。残された最後の時間を娘のノンさんと過ごすことに使おうと決めていたのだ……。

「だから俺は、ノンはもちろん、こんな旅に付き合ってくれたミミノにもできる限り尽くしたい。なにかの縁だからライキラやお前にも惜しみなく知識を与えるし、なにかあれば命を懸けても守ってやりたいと思う。……もしそうなっても気にしないで欲しい。それは、俺のワガママなんだ。生きているうちになにか、爪痕を残したいと……そう思っているだけだからな」

「……」

「すまん、湿った話をしてしまったな」

ははは、と笑うダンテスさんはいつものダンテスさんだった。

ミミノさんが言うには、前のパーティーでも仲間を守る立ち回りをしていたらしい。

この人は、どれほど人のために尽くそうというのだろう……。

「ダンテスさん」

僕は、僕に「与えて」くれる人をけっして裏切らない。裏切りたくない。

「なんだ？」

「もし、もしもですよ、僕がワガママを言って『お金を貸して欲しい』と言ったら快く貸して欲しいんです。なにを買ったのか後で必ず言いますし、いや、まあ、まだ買うと決まったわけではないんですけど……」

「なんだなんだ。欲しいものでもあるのか」
「はい」
僕は真っ直ぐにダンテスさんを見つめていた。
――紅葉のような葉っぱで先っぽがさらに5つに分かれている。
――すごく深みのある銀色の金属。
――ミミズのようなうねうねしている生き物。
そのイメージは、ダンテスさんの石化部分を見つめていると今でも浮かんでくる。
売っていたら絶対に買う。森の中で見つけたら絶対に確保する。
今はまだ、言えないけれど……ぬか喜びをさせたくないし。
ただ僕は決めた。ダンテスさんの石化を治すために僕もできる限りをしようと。
「……そうか。構わんぞ。男の子は欲しいものをねだるくらいじゃなきゃな。ノンは全然おねだりをしなかったし、お前も出来がよすぎて困るんだ」
ダンテスさんは立ち上がり、まだちょっと濡れている僕の頭をなでた。
「さあ、そろそろ寝なさい。明日は旅の途中で見つけたあれこれを売りに冒険者ギルドに行くぞ」
「……はい」
僕は促され、ベッドに入った。目を閉じるとすぐに眠気はやってきて、次に目を開けたときには朝だった。
つまり夢は見なかったということで、さらに僕は気づいてしまっ

たのだけれど、この世界に来て初めてベッドで寝たのでは……？

１０（後書き）

そろそろ毎日３話がちょっと厳しいので、朝夕の２話にさせてください……すまねえ、すまねえ……！

もはやストーリーのストックなんてゼロなんや！（唐突すぎる告白）

11

翌朝、「男子部屋」にやってきたミミノさんとノンさんを正面から見られなかったのは仕方ないよね？　そんな僕の恥ずかしさなんてガン無視でミミノさんが、

「なあなあレイジくん！　これ試してみるべな！」

と言いながら僕の顔をつかんでぐいっと彼女のほうへと振り向かせる。

ああ、この人は……昨日お風呂に入るときにはほどいていた髪を、すべてまたキレイに編み直して、それにどれくらい時間がかかるんだろう。いやほんと肌もキレイだったし……。

「レイジくん？」

「なんでもありません！　なんですかこれは！？」

記憶に浸っている場合じゃない！　っていうかやけにくっきりはっきり覚えてるな僕は。そんなに、そんなに刺激が強かったのか……！（答えはＹＥＳ）

ミミノさんは手に小さな壺を持っていた。コルク栓を抜いてみると、ぷうんと草を煮詰めたようなニオイが漂ってきた。

「うぇっ。なんだよそりゃぁ。朝っぱらから変なもん出すんじゃねーよ」

「うっさい。時間掛かるから文句あるなら部屋を出てるべなー」

「チッ」

ブツブツ言いながらライキラさんが部屋を出て行くが、僕にはその壺に入っているものがなにかわかっていた――正確には【森羅万象】が教えてくれた。

「もしかして、染色剤……ですか？」

「そう！　髪に塗れば黒くなくなるんだ。えーっと……どう？　使ってみる？」

黒い髪は僕が僕である象徴みたいに思ってくれているのかもしれない。複雑に長い髪を編み込んでいるくらいだから髪にはこだわりがあるだろうし。

だけど日本では髪を染めるのなんてふつうだったし、むしろ染めてみたかったけど僕というキャラ的にそれってどうなの？　という感じなので今ここで髪を染められるならむしろ、

「やります！」

「わっ。きょ、今日はなんだかレイジくんは元気だべな……？」

「ミミノさんが作ってくれたんでしょう？　絶対やります。あの、黒髪になんのこだわりもないんで」

「そうなのか～。それならよかったべな」

ミミノさんは僕をぎゅっと抱きしめていいこいいこと頭をなでてくれるのだけど、さすがにちょっと恥ずかしいので人前では止めていただきたい。言えないけど。あと「人前でなければいいのか」という問題もあるけどそれはそのときまた考えることにしよう……。

それから３０分後。

「――おおおっ、キレイに染まったべな～」
「へ、変じゃないですか？」
「そんなことないよ、わたしとおそろいだべな！」

金髪になった僕がいた。芯のほうはオレンジが残っている金なので、飴色の髪であるミミノさんよりも明るい色なのだけど「おそろい」と言われると「うん、おそろい！」と言いたくなってしまうからミミノさんの魅力が恐ろしい。

ちなみにこの染色剤（ヘアダイ）、製造には酸性の水が必要みたいだ。だから真水を生成する【生活魔法（コンビニエント）】では作れず、酸性の温泉が出るここで作った――ということらしい。

「うむ。なかなか悪くないじゃないか。目だけが黒ならさほど目立たない」
「とても快活な雰囲気になりますのね」

ダンテス父娘（おやこ）にも好評だった。

宿を出て行くと、表のベンチで草を噛んでいたライキラさんは出てきた僕を見てぎょっとした顔を一瞬したけど、すんすんと鼻を動かすと「薬草くせーな」と言い、「……ま、悪くないんじゃねーの」と付け加えた。この人は枕詞に悪口を入れないと会話ができないのかな？

そんなわけで僕らはアッヘンバッハ公爵領の領都を歩いた。

朝の街路にはすでに人が多く行き違っている。

アッヘンバッハ公爵領は大陸でも北方にあるので、冬の間は雪がどんどこ降る。そう言えば鉱山の入口、大空洞にも開けた空から雪が降ってたっけ。すぐに鉱山に潜っちゃうし、潜ると適温なのであまり気にしたことがなかったな。

「あの屋根は雪が多いせいだ」

ダンテスさんが教えてくれる。
家々の屋根は一方に強めの傾斜をつけた屋根となっていた。雪を積もらせない工夫みたいだ。
石造りの家々は四角いものが多いのだけれど、中には円柱みたいな家もあって見ていて楽しい。
お店がある建物は軒先に看板がぶら下がっていた。
動物の看板ならその肉、ハサミならば衣料品、壺ならば……壺？

「あの壺の看板はなんですか？」
「ああ、あれは薬屋だな」
「薬師ギルドに加入している正規のお店しか看板を出してはいけないんだ。わたしも正規の会員だから、店を開けるんだぞ」

薄い胸を張ってえっへんとミミノさんが言う。

「……ちょっと寄ってみたいです」
「え？　うーん……まあ、いいか」

薬屋に入ると、ミントのような爽やかな香りが漂っていた。棚にはいくつもの壺が並んでいて、値札と、商品名が書かれている。「傷薬」「虫下し」「胸のムカムカ治し」「便秘解消」……いろいろとあって、ほとんどの金額は銀貨１枚、物価換算で千円程度だ。

「中が見えないんですね」

陶器の壺は当然光を通さない。そう言えばガラス製品をこの世界ではほとんど見ていないな。ごく稀に建物に窓ガラスがあるような家屋もあったけれど、基本は木窓で、開けているか閉めているかのどちらかだ。

「中が見たいのならご自由にどうぞ」

カウンターの向こうにいた優しそうな老女がそう言ってくれた。
僕はお言葉に甘えてぱかぱかと壺の蓋を開いては中を確認していく。
甘ったるいニオイもあれば、鼻が曲がるようなニオイもあった。

（原材料、原材料……）

【森羅万象】で確認していく。中には商品名に書かれている効果を発揮しないインチキめいた薬もあった。
「精力薬」だ。
……藁にもすがる思いでこの薬を買う哀れな男性のことを思うと、やるせない気持ちになってしまう。これは精力なんてつかずに、お腹が少々下る程度の弱毒性の薬物ですよ……。
結局、お目当てのものは見つからずに薬屋を出た。

「遅っせーな、なにをそんなに時間掛けてんだか」

ニオイが嫌いなライキラさんは外で待っていて、合流して再度「冒険者ギルド」を目指す。

「レイジくんはなにが欲しかったんだべな？」
「あ、ええと……この入れ墨を消せるものがないかなと」
「あ～」

納得、という感じでミミノさんはうなずいたけれど、これはウソだった。あ、いや、ほんのちょっと入れ墨のことも頭にあったので完全なウソじゃないけどね。ヨモギモドキを使い続けたおかげが入れ墨の模様はうっすらとしてきた……気がする。

僕が探していたのは石化に効く薬――の材料だ。
【森羅万象】によれば、3種の材料を集めればなんとかなる。回復魔法や神秘魔法でもなんでもなく。

「ミミノさん。いちばん品揃えのいい薬屋さんとかってわかりますかね？」
「品揃えはどこもいっしょだよ」
「――え？」
「薬師ギルドに登録している以上、販売できるのはギルドが認めたものだけだからな～」
「あぁ……なるほど……」

ある種の免許制みたいなものだから、しょうがないのかもしれない。
買うほうだって効果がはっきりしているものを買いたいだろうしね……精力はつかないけど……。

「……レイジくん、薬を作る素材なら別のところで売ってるけども、興味ある？」
「！　あります！」

考え込んでいる僕にミミノさんが提案してくれたので一も二もなく僕は飛びついた。
冒険者ギルドでの素材売却が終わってからは自由行動なので、そのときに行こうかとミミノさんは言ってくれた。
そうと決まれば冒険者ギルドだ。
ファンタジーゲームの定番、異世界転生小説の定番、冒険者ギルドである。

「む。通りが騒がしいな……」

朝食代わりに屋台でサンドイッチを買い、冒険者ギルドの場所を聞いた。宿は素泊まり宿なので（温泉つきなのに！）朝食はないのだ。

ハムの挟まったサンドイッチは食べ盛りの僕にはとても美味しく感じられたけれど――なんか甘ったるいジャムっぽいのはいただけないが――夢中になって食べ歩いているとダンテスさんが僕らを手で制して止めた。

道は広く、自動車なら2車線ぶんくらいはある通りから、僕らはその倍以上の広さである大通りへ出ようとしていた。そこががやがやとしていたのだ。

「……領兵どもじゃねーか。出兵か？」

「うむ。なにかあったな」

他の通行人よりも頭ひとつ高いライキラさんとダンテスさんが大通りの様子について言う。

「かなりの人数だ。１００ではきかないだろう……道を渡ることはできなさそうだから、裏道から行く」

「なにがあったんべな？」

「さあな。ドデカい山賊のアジトでも見つかったか、あるいは国境で小競り合いでもあったか……あるいは」

――巨大なモンスターでも出たか。

「！」

その言葉に僕はハッとする。

鉱山を抜け出した僕が、夜に見た巨大な鳥のシルエット。鉱山に

なにかあったとしたら……？

世界には8か所も、天賦珠玉を発掘できる場所がある。

逆に言うと、世界に流通するほとんどの天賦珠玉がそこでしか取れない。これを失ったとなればとんでもない事態になる。

（鉱山奴隷の暴動だけなら、新たな奴隷を補充したり、冒険者の受け入れを拡大すればいいだけ……だよね。でもこれだけ領兵を動員するってことは、やっぱりあの「鳥」が……）

11（後書き）

不穏な動きが最後に出てきていますが、レイジはこれで動きやすくなりました。
次話では視点を変えて鉱山での暴動に対応する特権階級の様子がちょっと出てきます。

12（前書き）

本日も2回更新の予定です。

12

＊　キースグラン連邦　首都ヴァルハラ　＊

そびえ立つ白亜の城は「芸術」とすら呼ばれていた。
広大なキースグラン連邦の中心である首都ヴァルハラの「王」は、すなわち連邦の盟主でもある。
王の名はゲッフェルト。芸術のごとき白亜の城を住処としている。

「陛下。アッヘンバッハ公爵のご子息、ダニエル＝アッヘンバッハ様から緊急の魔導通信が入っております」

古き良き城砦という見た目を持つ城ではあったが、その内部はいささか様相が異なる。
もちろん、客人が来る大広間や謁見の間は外見の印象そのままの、豪奢な調度品がそろえられているのだが、執務を行うエリアは最新式の魔道具がそろえられていた。
ボタンひとつで適温のお湯が出てきて、ゲッフェルト王の好むお茶を淹れられるポットもまた魔道具だ。これはモンスターを倒すことで得られる「魔石」によって稼働している。
魔道具を動かすのは魔石だ。
それは現代日本の様々なツールを動かすのが電気であることとさほど違いはない。
違うのはその魔道具があまりにも高価で、一部の人間にしか使えないことくらいだ。

「緊急……？　ダニエルとは確か公爵の長男じゃな？」
「はっ」
「はて、公爵の息子に緊急通信を使う権限を与えておったかのう？」

痩せこけた老人が返事をした。
総白髪を後ろになでつけ、見事な長いあごひげはヘソに届くかというほど。
宝石をちりばめた王冠、それに真紅のマントの重さでつぶされそうになっているようにしか見えないこの老人こそがゲッフェルトだ。

「はっ。それが……公爵閣下がお亡くなりになったと」

報告にやってきた侍従が声を潜めるようにして言うと、ゲッフェルトの眉がピクリと動く。

「ならば新公爵に話を聞かねばならぬな」

深い銀色に輝く杖は痩せこけた老人が軽々と持ち上げられるほどに軽い。老人はそれを突いて部屋を出て行った。
長い廊下を進むその脚は、見た目に反して意外なほど壮健だ。曇りひとつないほどに磨かれた窓ガラスから、明るい陽射しが射し込んでいる。
老人がすぐについた場所は、先ほどと変わらない広さの部屋ではあった。しかし部屋の壁面には金属製のパネルがいくつも取り付けられ、その前にはイスが並び、オペレーターたちが送られてくる通信内容を書き留めている。
ここここそが、キースグラン連邦の各地と魔導通信によってつながっている場所だ。
広大なキースグラン連邦を治めるのに最も必要なものは「情報」とゲッフェルトは言い切り、１０年の歳月を掛けて魔導通信ネット

ワークを築き上げた。
それから25年。今も各地の情報を吸い上げ、ゲッフェルトの耳に届くようになっている。
ペンがさらさら鳴る音だけが聞こえる部屋を通り抜け、隣の小部屋へとゲッフェルトは入る。侍従がスイッチを入れると空気が震えるような感覚が走り、消音の魔道具が起動する。
小部屋の中央にはゲッフェルト用のイスが置かれてあり、対面するように水晶球と、それを支えるスタンドがあった。

「これは新公爵よ。なにやら緊急の連絡ということじゃな？」

水晶球にはしきりに額の汗を拭いている小太りの男が映し出されている。三角の吊り目は、似なくてもいいところだというのに父であるアッヘンバッハ公爵――前公爵にそっくりだった。

『ゲッフェルト陛下に置かれましては本日もご機嫌麗しく……』
「くだらぬ挨拶を聞かせるのが緊急の連絡か？」
『はっ。も、申し訳ありません……』

ダニエル＝アッヘンバッハはまたもハンカチで額を拭いた。今まで執務はすべて父が行ってきたので、なにをどうしていいのかわからないのだろう。
ゲッフェルトは内心で舌打ちをする。こんなのが跡継ぎか。公爵領は終わりだな。

「それで？　貴殿の連絡ならば六天鉱山（シックスマイン）に関わることであろう？」
『そ、そのとおりでございます。ご賢察、誠に痛み入ります』
「追従は要らぬ。本題に入れ本題に」

思わず苛立った声が出てしまった。新公爵はまたも汗を拭く。時

間が無為に過ぎていく。
だが次に公爵の口から発せられる言葉はさすがのゲッフェルトも予想していなかった。

『それが、六天鉱山が崩壊しました』
「なるほど。崩壊か……なに？」
『文字通り、がれきの下に沈んだのです。父もそれに巻き込まれて死んだと思われます』

老人が目をぱちぱちと瞬かせている間に公爵は説明をしていく。
奴隷の暴動が起きたこと。巨大な「竜」らしき存在が出現し、鉱山が崩壊したこと。そして父が死んだこと。

（順序が逆だ。奴隷は契約魔術によって縛られており、暴動はできない。先に公爵が死んだのだろう……誰かが殺したか？　いや、今はそんなことはどうでもいい）

ゲッフェルトの声も自然と荒くなる。

「それで、鉱山の稼働は？」
『「竜」とやらが居座っているらしく、中に入ることができません……。それが本物の「竜」なのかは確認させているところですが、発掘中の冒険者たちとも連絡が取れなくなっております……』
「冒険者などどうでもいい！　領兵でなんとかならんのか！？」
『は、はい。現在、すべての兵力を差し向けて鉱山奪還に向けた活動をしております』
「ぐぬ……」

そこだけは及第点だ、とゲッフェルトは思う。

「『竜』じゃと……？　あんな天災級のバケモノが鉱山にいた……？　おい。至急、過去に似たようなことがなかったかを調べよ。最優先じゃ」
「はっ」
侍従のひとりがそれを聞いて部屋を飛び出していった。
「新公爵。『竜』とやらがどんな見た目なのか、大きさはいかほどか、情報をすべて寄越すのだ」
『も、もちろんでございます』
「『竜』――『竜』か。それならば投入するのは冒険者が早いか……」
独り言のようにゲッフェルトは言うと、
「新公爵。最新式の魔導飛行船でヴァルハラ屈指の冒険者を送り込む。発着場はいつでも使えるように開けておけ」
『かしこまりました！　し、しかしその……冒険者、ですか？』
「ヤツらは危険と名声を天秤に掛けたときに名声を取る。余の虎の子である騎士団は遠征に出ておりすぐには動けぬ。1か月後に解決していなかったら騎士団を派遣する。それでよいな？」
『は、はいっ』
そうして通信は切れた。
「マズイ、マズイぞ……」
ゲッフェルトはしわがれた指であごひげをしごいた。
「六天鉱山以外に天賦珠玉を採れるのは、我が直轄領たる三天森林（サードフォレスト）

しかない……。あそこはハイエルフが天賦珠玉を出すのを渋るからな……」

するとハッとしてゲッフェルトは残っている侍従のほうを向いた。

「ハイエルフで思い出した。『紅蓮の竜殺し』と呼ばれる冒険者がこのヴァルハラにいるのではなかったか？」

「はっ。天銀（ミスリル）級冒険者であるハーフエルフのクリスタ＝ラ＝クリスタは、現在首都ギルドに滞在しているという情報があります。現在はギルドとヴァルハラ市長からの要請で『闇牙傭兵団』の掃討作戦に参加していると聞いております」

「竜殺しだな？」

「はい。過去に竜の討伐経験がございます」

「ならばそやつをアッヘンバッハ公爵領へと送れ！　傭兵団など後回しだ！」

「かしこまりました」

「急げ！　六天鉱山のことが知れたら、連邦各国がやいのやいのと言い出すぞ。できる限り情報を伏せよ！」

そしてまた侍従が部屋を飛び出していった。

レイジのいた鉱山で起きた暴動は、すでにキースグラン連邦全体の問題になりつつあった。

＊　　＊

領兵が殺気立って領都を出て行くのを横目で見ながら、僕らは裏通りを抜けて冒険者ギルドへと向かった。

冒険者ギルドの建物は石畳で整備された大通りに面しており、3

階建ての大きな建物だ。両開きの鉄扉は全開になっているし、木窓もすべて開いているので中のがやがやとした声は外まで丸聞こえだ。

――鉱山で暴動があったそうだ。

――奴隷が周りの街を襲ってるんだと。集落のほうはもっとヤバイかもな。

――皆殺しになってる場所もあるってんだから、怖いねえ。

――そりゃ領兵が動員されるわな。奴隷狩りか。

奴隷、という言葉を聞くたびに僕は心に冷や水を浴びせられたような気持ちになる。

そのとき僕の手が、温かい手につかまれた。

「レイジくん、大丈夫だべな。君は『銀の天秤』のメンバーだから」

「ミミノさん……」

この人はどうしてそこまで僕によくしてくれるんだろう。僕に返してあげられることなんてほとんどないのに。

先頭をダンテスさんが、続いてライキラさんが入っていくとギルド内は、しん、と静まり返った。

僕も後に続いて入る。1階は広々としていた。床は大通りと同じく石畳になっていて、木製のテーブルとイスが散らばっている。入口正面には長いカウンターがあって、同じ制服を着たギルド職員らしき人たちがこちらをちらりと見た。

冒険者たちはぶしつけにじろじろと見ていた。性別や年齢はそれこそ様々で、10歳以上であれば誰でも登録ができ、定年はない。その日その日をなんとかしのいで生きているような底辺冒険者から、貴族と見まがうようなきらびやかな鎧を纏った冒険者までいる。

冒険者ギルドは、社会の縮図でもあるのだ。

最後にノンさんが入ってくると、ヒュ～ィと口笛が聞こえた。

「冒険者ギルドになにかご用ですかな」
「素材の売却と、この子のギルド登録をお願いしたい」

ダンテスさんの手が僕の頭にポンと載せられ――え、僕？
応対しているのは白髪交じりの初老の男性だ。右目に片眼鏡（モノクル）をつけている。

「……すみませんが、規約上、ギルドへの登録は１０歳からとなっております」
「この子はもう１０歳だ」
「失礼ながらそうは見えません。その場合は市民登録証などの証明が必要になりますが」
「そんなものはない」
「でしたらこちらで登録はできませんな……ちょっとお待ちを。あなたはもしや石化の呪いに？」
「ああ、そうだ」

ダンテスさんは首まで覆っているインナーをめくって、石化している肌を見せた。ギルド内がざわっとした。

「――げっ、石化じゃねえか」
「――ヤバいぞ、あれ、伝染するんだろ？」
「――しねえよ」
「――だけど近づいとかんどこ」
「――それがいいな」

テーブルでだらだらしていた冒険者たちはそそくさとギルドを出て行った。

「はあ……困りますなぁ、ダンテス様。これでは営業妨害のようなものです。こちらはただでさえ忙しく、ギルドマスターも公爵閣下に呼ばれててんてこまいなのですよ」

ギルド職員はダンテスの差し出したギルド証を確認しながら言う。

「メデューサの呪いは伝染しない。当然知っているだろう？」

「私は知っておりますが、知らない者もおります」

「それはギルドが教育すべきことだ」

「ともかく、困ると言っているのです。石化を嫌う信仰を持つ者もおりますからな。素材は購入いたしますが、用事を済まされたらすぐに領都から出て行くことをお勧めします。……なんせ」

ギルド職員はちらりと、ライキラさんとミミノさんを見た。

「今、領都は混乱しておりますから」

13

「チッ、なんなんだよあの男はよぉ」

ギルドの建物の裏にやってきた。ここは倉庫になっていて、素材の計量や査定を行う場所のようだ。チャコールウルフの毛皮や、僕やミミノさんが採取した希少な薬草の類を卸している。

結局、僕の冒険者登録はできなかったのだ。

「へっ、サブマスに当たっちまったのかい、獣人の兄さん。そりゃあ不運だったな」

毛皮を受け取ったのは左腕をなくした若い男だった。

「あれがここのサブマスターか？　感じが悪いったらねぇよ」

「サブマスはヒト種族以外が大嫌いだからねえ……ほお、こりゃきれいに取れてら」

若い男はチャコールウルフの毛皮を見ながら感心している。

「そりゃそうよ。俺様がキッチリ仕留めてダンテスのおっさんがキレイに下処理したからな」

「ふーむ。納品される素材が毎度こうだといいんだけどな。――1枚あたり銀貨5枚ってところだな。6枚あるから銀貨30枚か」

「おいおい！　こんだけちゃんとしてる毛皮で銀貨5枚はねぇだろぉ？」

「チャコールウルフは人気がないんだよ。なんたって森の嫌われ者だからなあ……これでも色つけてるんだぜ？　疑うなら市場にでも

行って見てきな」
「うぐっ……」
「――その価格でいいさ。銀貨5枚で頼もう」

横からダンテスさんがやってきて、価格は決まった。
時間をかけて剥ぎ取って、毛皮の下処理、さらにここまで運搬までして銀貨5枚……5千円程度だったら確かに安いよなぁ。

「俺たちにとっては事のついでだ」
「だけどよぉ……」
「金になる獲物を狙えばいいだけだ。たとえばハマダラ鳥とかな」
「ちょっ！？」

ハマダラ鳥か。ライキラさんが「獲ってくる」と言って森に消えて、結局なにも獲れなかったアレか。

「おお～、ハマダラ鳥なら大銀貨はくだらねぇな！　獣人の兄ちゃん、今度はハマダラ鳥持ってきてくれよ」
「は！？　大銀貨！？」
「……ま、次がんばれ、ライキラ」

ダンテスさんがぽんぽんとライキラさんの肩を叩く。ちなみに大銀貨は1万円ほどの価値がある。

「お待たせしました。薬草はどちらに？」

ちょびひげのオッサンがやってきた。こちらは薬草を査定する人らしい。

「いやはや、結構な量ですねえ。ふむふむ、傷薬に使う棘緑草……

こちらは虫下しの三日月草ですな。で、これは……？」
「肝臓の働きを助ける草の根です」

僕が独自に採取したのは【森羅万象】が教えてくれた薬草だ。
葉の縁がぎざぎざしていて、茎に赤い点々がある。微妙に毒々しい草だけれど、根っこは太い。この根っこをよく洗い、刻んでお湯でエキスを抜けば肝臓の薬に早変わり――というのを実演した。しかも「無毒なら飲んでみてください」と言われて飲んでみた。黄色い液体は苦くてマズイです。

「ふーん、これがねぇ……？」
「わたしも知らないけど、レイジくんの故郷では薬として使われていたんだべな」
「ハーフリングの薬師さんでも知らない？」

どうやらミミノさん、というより、ハーフリングは薬師として有名な種族らしい。薬師ギルドの登録証を見せると、ちょびひげのオッサンは露骨に態度を変えた。
だけれど今はそれが逆効果だった。ミミノさんが知らないのならば、僕の知識は眉唾ではないかと思われている。

「買い取れませんな」
「えー……」

予想はしてたけど。ミミノさんにも「買ってくれないかもしれないべな」と言われていたし。
だけど残念。せっかくお湯まで沸かして薬を作ったのに。

「効果の信頼性が乏しいですし、大体肝臓とはなんですか」

そっちかよ。

「えぇと……まあ簡単に言えば、二日酔いに効きます」
「なんだって！？」

いきなり食いついてきた。

「二日酔いに……ほぉ……」

めっちゃ考え込んでいる。

「……おい、裏に行ってあの給料泥棒を連れてこい」
「へーい」

ちょびひげのオッサンに言われた毛皮のお兄さんはしばらくして、足元ふらふらの無精ひげの男を連れてくる。

「……こいつはね、あのサブマスターの甥だからって冒険者ギルド職員になってるんですが、見ての通り役立たずなんですよ」
「うぃ～」
「酒に弱いくせに毎晩飲むんで……」

絵に描いたようなダメ人間だった。

「この薬湯をコイツに飲ませてみましょう。これが効くようなら、薬師ギルドには卸せませんが私が個人的に買います。給料泥棒を働かせるために」
「は、はあ……」

そんなこんなでいきなり人体実験が始まってしまった。

無理矢理飲まされた役立たずさんは「うげ～～マズイ～～」と言っていたがみんな無視して飲ませている。役立たずさんの扱いって……。

僕らが売却を済ませると、ちょうどノンさんもギルドの建物から出てくるところだった。

「毛皮はたいした金額がつかなかったが、ミミノの薬草は相変わらずいい金額で売れたぞ」

とダンテスさんがノンさんに報告している。

そう、ミミノさんが採取してきた多くの薬草はすべて買い取りが決まり、品質もよいことから小金貨４枚――２０万円ほどで売れたのだ。薬草は少量でも多くの薬を作れること、採取に危険を伴う――たとえば餓えた狼が森にいるとか――ことから、高額で買い取られる。

「薬草類の栽培はできないからねぇ」

とミミノさんが言う。薬草栽培の研究は当然行われていたが、今のところよい結果は出ていないらしい。僕も【森羅万象】で確認してみたけれど、どうも空中と土中の魔力濃度が必要とか……？　魔力濃度ってなんだよって感じなんだけど、ミミノさんが魔法を使うときに身体から出てくる魔力と似ているのでなんか空気や土にも魔力はあるんだろう。うん。

「そっちはどうだった、ノン」

「はい。書いてもらいましたわ」

ノンさんがひとり、ギルドに残っていたのには理由があった。このアッヘンバッハ公爵領は連邦の国境に位置しており、隣国である光天騎士王国へとつながっている。国境を越えるには冒険者ギルドの登録証だけでは不十分で、ギルドから推薦状を書いてもらう必要があった。

「よく書いてくれたな。あのサブマスターの男がこれを？」
「ふっふっふ。おとなしく書いた方がお得ですよということを丁寧にお伝えしましたところ、快く書いてくださいましたわ」
「……」

ノンさんは笑っているけど目は笑ってない。「丁寧にお伝え」のルビで「きょうはく」とつけたくなるんだけど、僕は余計なことを言わないでおこう。口にチャック。見た目はいちばん優しそうだし修道女なんだけどいちばん怖いのがノンさんなんだよなぁ……。

「それじゃあ俺とノンは買い出しに行ってくるかな。ミミノはレイジと市場に行くんだろう？」「うん」
「えっ、そうなんですか？」
「薬草見に行くべな？」
「あ」

薬師ギルドが卸さないような薬草は市場にあるってことか。

「行きます！」
「そうか――レイジちょっと」

ダンテスさんに呼ばれて、僕は肩を組んで囁かれた。
そして小さな革袋を押しつけられる。

「小遣いだ、持ってけ」
「へ！？　で、でも――」
「なにか欲しいものがあるんだろう？」
「あ……」

昨晩の話のことだろう。僕はありがたくいただいておくことにした。

「よし、それじゃミミノはレイジから目を離すなよ」
「わかってるわかってる」
「ライキラはどうする？」
「……」
「ライキラ？」
「……ん？　あ、ああ……俺は宿に戻って昼寝でもしてる」
「まだ朝だぞ」
「細かいことはいいんだよ。それじゃな」

ひらひらと手を振ってライキラさんは戻ってしまった。……なんだか様子がおかしい？　ついさっきまではなにもなかったし、ノンさんと合流してからはこの大通りをずっと眺めていただけだったんだけど……。

「レイジくん、行くべな」
「あっ、はい！」

僕はミミノさんに連れられて市場へと向かった。

１４（前書き）

今日も朝夕の２回更新……できたら、いい、な……！

14

公設市場は商業ギルドにお金を払えば誰でも店を出せるようで、だだっ広い石畳の広場に多くの露店が出ていた。

ハンドメイドのアクセサリを売っていたり、ドライフルーツを売っていたりと、日本のフリマにもありそうな屋台もあれば、鉄板でじゅうじゅうとソバ的ななにかを作って売っている屋台もある。

どうやらある程度、場所によって売るものが異なっているらしい。

まあそりゃそうだよね。ごった煮になってたら買うほうも買いづらいし。

「……どこもかしこも鉱山の話題ばかりだべな」

不意にミミノさんがそんなことを言った。

「聞こえてこない？　みんなそんな話ばっかりよ」

――六天鉱山（シックスマイン）が止まってるって？

――でなきゃ領兵があんなに出張らないだろう。

――公爵様は責任を感じて城から出てこないそうだぞ。

――あれ、公爵様って鉱山に行ってなかったか？

――理由はなんなんだ、理由は。

――鉱山が止まったら領都も先細りだよな……。

――一時的なものだろう。

確かに、ちょっと耳を澄ませるだけで、お客と店主のやりとりが聞こえてくる。

正確な情報は伝わっていないけれど、とにかく鉱山がヤバイ、み

たいな感じでみんな話していた。それほどまでにあの鉱山はアッヘンバッハ公爵領にとって重要なものだったってことか……。

「まったくねぇ、天賦珠玉に頼り切ってたからこの国は」
「そう……なんですね」
「鉱山がなくなったらどうなるか？　いい薬かもしれないべな」

にこっ、とミミノさんは笑ったけれど僕には笑えなかった。

「……レイジくん？　どしたの？」
「あ、い、いいえ。大丈夫です」
「そう？」

ミミノさんはさりげなく僕の手を握ってくれた。身長差はあるけれど、こうなると少年少女のお使いカップルみたいになってしまう……いやいやそんな、カップルって、そんな（その程度でテンパってしまう恋人履歴なしの僕）。

「ここからが薬草を扱ってる露店みたいだね」

ミミノさんの言葉で我に返る。地べたに布を広げて、そこに乾燥させた葉っぱを並べている露店がたくさん出ている。

「おおお」

僕は喜び勇んで露店を回っていく。
ふつうの薬草もあれば、香辛料を扱っている店も多かった。というよりほとんどが香辛料だ。乾燥させたタネをごろっと売っていて、後は自分で処理しろという感じだろうか。
中には壺に香辛料を入れている露店もあるけれど、それは天秤で

の量り売りで、値段は結構高い。
僕の探している草は、まったくなさそうだった。

「なにか欲しいのがあるべな？」
「え、えぇっと……ミミノさんが知ってるかはわからないんですけど」

僕はミミノさんに葉っぱについて説明した。紅葉のように５つに分かれている葉っぱで、その先端がさらに５つになっている。僕の中では「ダブルモミジ」と勝手に名付けている葉だ。

「なんだべな、それ？」

ミミノさんもわからないらしく、こてんと首をかしげた。なにそれカワイイ。これで２０歳だっていうんだから反則だよ。

「――ハーフリングの薬師も知らない葉だと？　俺にも教えてくれや」

すると近場にいたひげもじゃのオッサンが立ち上がって出てくる。

「なにぃ、ハーフリングの薬師も知らない幻の葉だと？」
「おいおい、ハーフリングの里に伝わる秘伝の葉？」
「なんだって、ハーフリングの長老が栽培した伝説の葉？」

どんどん伝播して露店からオッサンたちが出てくるんですけど！？　しかも尾ヒレがついてるし！「ハーフリング」と「葉」しか合ってないよもう！

ぐるりとオッサンたちに囲まれた僕らだったけれど、ミミノさんは冷静に、僕が言った葉っぱの特徴をオッサンたちに伝えている。

「――アレじゃねえのか、ほら、氷落樹の葉」
「バカ。アレは三つ叉だ」
「俺見たことあるぞ。あれは確かクルヴァーン聖王国の珊瑚礁で……」
「海にあるわけないだろ」

やいのやいのとあれこれ言っているけれどなかなか正解にはたどり着けそうもない。というか、それくらいレアな素材なのかな……。
それなら、深みのある銀色の金属と、うねうねしたミミズみたいな生き物について聞いてみようかな――と思っていたときだった。

「フォフォフォ。これはなんの騒ぎじゃ」

ぴっかぴかの禿頭に長い眉毛が目までかぶさっている老人が、杖をつきながら現れた。

「長老」
「長老だ。これで判明するな」
「長老」

露店の薬師たちはザッと横にどいて僕らのところまで一直線の道ができた。

「坊主。この御方は『歩く薬草辞典』と呼ばれる方だ」
「そ、そうなんですか？　お名前は……」
「名前は知らん」

知らんのかい。

「フォフォフォ。なにやら面白そうな草について話しているようじゃな……ぬ!?　お前はハーフリング!?」

柔和な雰囲気が一転していきなりつばを飛ばしてきた!?

「ハーフリングの薬師めぇええ……またも人間の縄張りを荒らしに来たかぁああ」

「ちょ、長老。この方は旅の薬師だ。露店荒らしじゃないさ」

「ワシは信じぬぞぉ!　ハーフリングのいる場ではなにも語らぬ!」

語らぬ、とか言い出したけど特にまだなにも話はしてないんだけど……。

とは思うものの、チラッ、チラッ、と僕の様子をうかがってくるあたりがなんだかめんどくさい。

「……えっと、じゃあミミノさん、行きましょうか?」

僕がミミノさんを促して離れようとすると、

「いいのかのう!?　ワシは『歩く薬草辞典』じゃというのにのう!　他のどの薬師が知らずともワシが知っていることもあるでのう!」

うわぁ、めんどくせえ……。

これは無理です。相手にするだけで疲れることこの上なし。さっさと離れよう――と思っているのに、当のミミノさんがこんなことを言い出した。

「レイジくん、わたしは離れてるから、この方に話してみるべな」

「で、でも……」

「いいからいいから、なっ？　ダメで元々だ」

そう言ってミミノさんは僕から離れていった。むう……僕としてはミミノさんを悪く言う人と話したくなんてないのに。

「で？　坊主、なんの葉っぱが欲しいんじゃ？　ん？　快楽に溺れるような葉っぱか？」

この人、なんか麻薬でも扱ってるんですか……？

結論から言うと、老人は「ダブルモミジ」を知っていた。

どころか、持っていた。

その葉は「生命樹の葉」と呼ばれる代物で、ハイエルフの管理する森でしか手に入らない貴重なものだという。

だけれど僕は、ダンテスさんから預かった「お小遣い」だけで買わせてもらった――なぜかと言えば、「生命樹の葉」は貴重なのだけれどハイエルフ以外には調合できないのでただの趣味の一品になっているからしい。

「フォフォフォ。こうして、先々代から引き継いだ『生命樹の葉』を誰かに託すことになるとはのう……」

「ありがとうございました。ではもう行きますね」

「そう。あれは先々代の元に弟子入りしたこのワシが……」

「その話長いですか？　もう行っていいですよね」

最近の子どもは礼儀を知らんとかなんだとかいろいろ言われたけれど、僕は解放された。ここは老人の露店で、老人は最後にそっと、

「……ハーフリングはの、確かに薬師としては優れておる。じゃが、その金への執着から悪く言う者もあるのだ。坊主はそれを知っておきなさい」

と言われた。ミミノさんを遠ざけたのは、老人なりの配慮だったんだろうか……。

だとしてもミミノさんはミミノさん。十把一絡げにまとめて欲しくはない。

複雑な気持ちのまま、僕の手のひらよりもずっと大きな「生命樹の葉」を見つめる。採取されてから数十年経っているらしいが、つい先ほどまで枝にくっついていたのではないかと思えるほどにみずみずしい。【森羅万象】を通して見ると、様々な可能性がこの葉っぱに眠っていることがわかる。

「――おっ、レイジくん、お目当てのものは手に入ったようだね？」

「ミミノさん……」

にっこりして近づいてきてミミノさんに、僕は頭を下げた。

「ごめんなさい。僕のワガママでミミノさんにイヤな思いさせて……」

「え！？　そ、そんなこと気にしないでいいよ～。ハーフリングは確かに、あの老人が言ったみたいに市場を荒らしたりすることもあるんだ。だから嫌う人も多い」

「それでも、ミミノさんは関係ないじゃないですか」

「レイジくんがそれをわかってくれるならそれでいいべな。だって、関係ない人のことまで気にしてられんもんね？」

「でも……」

ミミノさんはそっと僕の頭をなでてくれた。

「……でもその葉っぱ、あとでわたしにも見せてな？」
「はい、もちろんです！」
ふたりして笑い合った――ときだった。
「い、いたっ、ミミノさん、レイジくん！」
息を切らせて走ってきたのはノンさんだった。
「急いで冒険者ギルドまで来て！　レイジくんが薬を飲ませた人が――」
僕とミミノさんは顔を見合わせ、走り出した。

15

＊　アッヘンバッハ公爵邸　＊

イライラとした様子を隠そうともせず、貧乏揺すりが止まらない。公爵の長男であるダニエル＝アッヘンバッハは室内にいる、きらびやかな鎧を纏った騎士と、執事へと視線を投げる。

「六天鉱山（シックスマイン）からまだ連絡はないの！？」

「はい。先遣隊はすでに到着していてもおかしくない時間ではありますが、魔導通信機の設置に時間が掛かっているのかもしれません。裏を返すと鉱山にある通信機が使えない状況だと思われます」

「そんなことはわかっているんだよ！　問題は竜と、星６つの天賦珠玉のこと！」

年齢は４０を超えているというのに甘ったれた口調で言うと、ダニエルはハンカチで額を拭いた。

「坊ちゃま。鉱山兵の報告ではすでに星６つの天賦珠玉は使われ、少女が逃走しているということでした。であればどこかの街に寄らねば餓死するでしょう。そこは気を長く待つしか……」

「そんなことはわかっているんだってば！　鉱山の子どもなんて少ないだろ！？　どうして見つからないの！」

「全公爵領に通達が終わったのが昨日です。そう、すぐには……いえ、少々お待ちを。確かに子どもは少ないですね……」

「ん？　なになに？　執事長はなにか思いついた？」

執事はぺらぺらと手元の記録をまくっている。

「――おっしゃるとおり、鉱山奴隷で働いていた子どもは2人しかいません」

「うんうん、それで？」

「子ども同士は仲が良くなるものではありませんか？」

「そりゃ、そうだろうけど……それが？」

「もうひとりの子どもは、名前がついておりません。が、黒髪黒目という特徴があります。子どもはひとりでは行動せず、このもうひとりの子どもと行動しているのではありませんか？　ラルクという逃亡奴隷は平均的な見た目ですが、黒髪黒目は探しやすいです」

「！　なるほど！　――っていうか、黒髪黒目ってほんとうか？」

「……はい、事実でございます」

ダンッ、とダニエルは拳をテーブルに叩きつけた。

「『災厄の子』じゃないか……！　言い伝えはほんとうだったんだな！」

じろりと騎士をにらみつける。

「黒髪黒目も探せ！　見つけたら星6つの在処を吐かせて、なるべく早く殺すんだ！」

「……いいんですか？」

「いいに決まってる！　これは公爵命令だぞ！　行け！」

「了解しました……」

明らかに気が乗らないふうではあったが、騎士は出て行った。

「くそっ。星6つを失ったことがゲッフェルト陛下に知れたら大変

なことになるぞ」

騎士の元へ、「黒髪黒目の奴隷が領都にいる」という情報が衛兵から上がってくるにはそれからあと半日ほどが必要だった。

一方の執事は魔導飛行船の発着場を整える業務に走り回った。この日の夕方、天銀級冒険者を乗せた飛行船が到着予定だからだ。

＊　＊

僕とミミノさんが、ノンさんに呼ばれて大慌てで冒険者ギルドに――その裏手にある倉庫へと戻ると、そこには驚くべき光景が広がっていた。

「ウソだろ……」

「なんてこった……」

ちょびひげのオッサンと片腕の査定係さんが唖然としている。

「ん～～。これはここに運んでおいてよかったんでしたっけ？　主任」

「あ、ああ……」

「それじゃ中の書類片づけてきますわ！」

じゃ、と言って、無精ひげの「役立たず」さんはギルドへと入っていった。

つい1時間程前まではフラフラだった人が、である。

「――君！」

ちょびひげオッサンは僕へと振り返った。

「あの草、全部買おう！　いくらだね！？」

「え、え？」

「二日酔いに効果てきめんじゃないですか！　これからはギルドでも採取依頼を出しましょう！　私が！」

「あ、はあ……」

どうやら僕が渡した黄色の薬はばっちり効いたらしい。それはよかったのだけれど、そんなに効果があるものなんだろうか……？【森羅万象】で確認するけれど「肝臓の機能を高める」しかわからなかった。

……まあ、確かに、機能を高めるという点では間違っていない、か？

モ●ハンでも同じ「体力回復」で「大」と「小」じゃ全然違うし。むしろその「大小」が重要なのでは……？

「！」

僕がじっと草の根を見つめていると、「肝臓の機能をすごく高める」というイメージが頭に湧いてきた。

できるんじゃん！　そこまで！　だったら最初からそうしてよ！？いや、ちょっと待てよ。もしかしたら僕がそこまで細かく確認しようとしなかったからこうなったのか……？

「ちなみにこれはなんという草なのですかな？」

「あ、このウコンのことですか――」

言いかけて僕はハッとした。いやいや、ウコンじゃない！　いや、

本物のウコンがどんなのかは知らないけど！

「ほう、ウコンというのですか……」

「あ、あのですね。わからないというか、正式名称は、ただ僕が『ウコンっぽいな』と思ってウコンと呼んでいるだけというか」

「まあ、正式名称がもしわかればそれはそのときでいいでしょう」

「で、でしたらもうちょっと違う名前にしませんか？」

「ふーむ……でしたら便宜上、領都ギルドではこの草を『レイコン』と呼びましょうか」

「……へ？」

「発見者の名前にちなんだものです」

「あ、う……」

僕は迷った。異世界で間違ったウコンの名前を広めるくらいなら……いやそもそもこの世界にウコンがあるかわからないんだけど……まあ、いいのか……？

いいか。

いいよね。

きっと学術的な名称は誰かがつけてるだろうし。

「わかりました。それじゃあ、レイコンで……」

「承知しました。金額ですが、すべてまとめて小金貨1枚でよろしいですか？」

思いがけず大金になりそうだ。「生命樹の葉」を買った金額を優に超えている。やったぜ。

僕がうなずこうとすると、

「ちょ～～～っと待つんだべな！」

「ミミノさん？」

「あれだけの効果がある薬を、小金貨1枚ってのは安すぎるべな」

するとちょびひげのオッサンは、

「いやいや、二日酔いは回復魔法でもある程度治療できますぞ。であればこれでも高いほうです」

「回復魔法とは違う使い方ができるでしょう？」

「違う、使い方……？」

「事前服用」

ミミノさんが言うと、オッサンは「あっ」と声を上げた。

「事後にしか使えない魔法と違って、これはあらかじめ服んでおけますね！　そうなると……そうか、そうか！　これはすごいことになるかも……！」

なんだかオッサンが興奮しているけれど僕にはよくわからない。

「どういうことなんですか、ミミノさん」

「ん～、大人になるとわかると思うけど、偉い立場の人はお酒を飲まなきゃいけない場面が結構多いんだよね。でもみんながみんなお酒に強いわけじゃないべな？」

「はい」

「かといってお酒の場でいろんな取り決めや商談が決まることも多い。お酒に弱い人にとっては自分の弱みだし、強い人にとっては強みになる。酔っ払った頭で交渉なんてできないし」

「あ……なるほど。この薬を事前に服用しておけば、お酒に酔いにくくなりますね！」

「その可能性があるってところだべな。検証はこれから……」

「いえいえ。確かにお酒の前に服んでる人、結構いましたもん。だ

から効きますよ」
「……えっと、それは、レイジくんの故郷の話かな？」
あ、やっべ。
聞きかじりの日本の知識を披露してしまった。確かにドラッグストアに行くと「飲み会の前に」みたいなポップつきで売ってるんだよね、「ウ●ンの力」とか「ヘパ●ーゼ」が。
「わかりました」
僕がわたわたしていると、ちょびひげのオッサンはポケットから金貨を取り出した。
「連邦金貨１枚で行きましょう。これは先行投資で、これ以上はさすがに出せません。久しぶりにわくわくするような薬効を見られたのでここまで出すのです」
「十分だべな！『取引の神は公正に見ておられる』ことよ」
「『売り手よし買い手よしの取引』だったと報告しましょう」
オッサンとミミノさんが握手していた。――後になって聞いたところ、そのやりとりは商売人がよく使う挨拶のフレーズらしい。
「あ、ごめんな、レイジくん。勝手に取引結んじゃって……」
「いえいえ。僕は全然事前服用の可能性なんて考えていなかったので、ありがたかったです」
「はい。レイジくんのお金」
「あ……」
手渡された連邦金貨は、小金貨よりも大きくずっしりと重い。これで１０万円ほどの価値がある。

「いい結果が出たみたいだな。ギルドの人間があわててたもので、もしかしたらマズいことになったのかと思っていたよ」
「ダンテスさん」
「知識は力です。レイジくんのもたらした知識が多くの人の利益になるといいですね」

ダンテスさんの横にノンさんがいて、そう言ってくれる。僕がどこでこんな情報を得たのかとか、そういうことは聞かれていない。気遣って、聞かないでいてくれている。
……いつか、全部話すときが来るのかな？
わからないな……。

「ん」

そのとき、僕は喚声を聞いた。倉庫の横に同じような形の建物があって、そこから聞こえてくるらしい。

「あそこはなんですか？」
「ああ。あれは訓練場だ。冒険者たちがトレーニングしているんだよ……行ってみるか？」
「行きたいです！」
「――の前に、ご飯だご飯。まだわたしらはなーんにも食べてないべな」

ミミノさんに言われて、僕はお腹に手を当てた。きゅるる、と小さく音が鳴った。

15（後書き）

次回は訓練場！　そう、つまり……？

作品を読んで「面白かった」と思われましたら←の星をタップして応援よろしくお願いします！

続けるモチベーションになりますので！

16（前書き）

今日も2回更新予定であります。

16

ダンテスさんにお小遣いを返そうとしたけれど、受け取ってくれなかった。「欲しいものが見つかったのならよかったじゃないか。残りはお菓子でも買いなさい」と頭をなでてくれた。

僕はそのとき、今までほとんど思い出さなかった日本の父を思い出した。ダンテスさんよりも１０以上年上で、だというのに頼りなくて、休日にごろごろしていると母から「掃除の邪魔」と言われていた典型的なダメリーマン。僕も、将来はサラリーマンになるのだろうとは思っていたけれど、父のようにはなっちゃダメなんだろうな、とかぼんやりと考えていた。

……なのに今は、たまらなく懐かしかった。

お昼は麺だった。魚の干物で出汁を取った――と言ってもかなりざっくりした出汁なので、魚臭くしょっぱいスープに、不揃いな麺が漂っているだけのものだ。

だけどそんなものでもとても美味しくて、僕は夢中で食べた。食べ終わると、ミミノさんと、ダンテスさんと、ノンさんが微笑ましい顔をしていたのが恥ずかしかった……。

「そ、それじゃ訓練場見に行っていいですか？」

「いいとも。やっぱりレイジは男の子だな、そういうものが見たいなんて」

ダンテスさんは完全にパパの顔でそんなことを言ったのだけれど、実は目的は違う。

冒険者たちの戦いを見て、【森羅万象】で僕自身の力に変えようと思ったのだ。

訓練場は倉庫と同じ、だだっ広く、足元は土が剥き出しだった。ところどころ陥没していたりして激しい使われ方をしているのがわかる。

手前にはかかしのような打ち込み用の人形が立っていて、奥は自由に戦えるスペースだ。

「連携が甘すぎるぞ！　天賦に振り回されとる！」

筋肉ムキムキのスキンヘッドさんが４人を相手に立ち回っている。レザー製の簡素なプロテクターをつけて、木剣による訓練だ。

攻撃側の４人は若く、１０代の半ばだろうと見える。

壁際には同じように少年少女がいて、スキンヘッドさんの木剣でひとりが叩かれて「うげっ」と声を上げるたびに青い顔をして震えていた。

「あれ、ライキラさん」

僕はそのトレーニングを見守っている背の高い獣人に気がついた。フードを目深にかぶって、パッと見は獣人ではなく見える。

ミミノさんとノンさんは必要物資の買い出しに出かけ――僕のレイコン騒ぎでノンさんたちは買い出しを途中で切り上げていたのだ――僕はダンテスさんに連れられてこの訓練場に来ていた。

「ん。……なんだ、オッサンとレイジじゃねーか」

「寝ていたのかと思っていました」

「……ああ、まあ、なんだ。ちょっとこのギルドのレベルが気になってな。今は新人（ヒヨッコ）どものトレーニングらしいが、次にベテランが訓練するらしい」

「なるほど」

やっぱりなんか、ライキラさんの様子が変だな……元気がない？
まあ、いいか。僕が聞いても教えてくれそうにないし。
僕はライキラさんとダンテスさんに並んで訓練を見やった。

（【腕力強化】【脚力強化】【剣術】【槍術】……それにあれは【補助魔法】？）

バックアップらしい少年が、前衛の少女に魔法を掛けている。

「いいぞいいぞ！　どんどん魔法を使え！　そうして実戦に慣れるんだ！　ただし八道魔法は禁止だぞ！　倉庫を壊したらタダじゃおかねえからな！」

スキンヘッドさんが声を上げると、攻撃魔法を使おうとしていたらしい少年はビクッとして集中を止めた。

「八道魔法はどのタイミングで力を込めて、魔法を放つかを考えろ！　敵と自分をつなぐ直線に仲間がいたら使えねぇからな！　いちばん立ち回りが難しいと思え！」

なるほど。ゲームと違って攻撃魔法は仲間にも当たっちゃうもんな……。

（【聴覚強化】かな？　……む、当たりだ。ものすごく僕もよく聞こえるようになってきた）

僕は次々と入れ替わる少年少女の戦いを見つつ、自分の体内に天賦を少しずつ取り込んでいく。
あ～～戦ってみたい。【剣術】とかどのくらいのものなのか試してみたいなぁ。

「くっくっ。真剣に見てると思ったら、コイツ、手が動いてやがる」
「ハッ」

ライキラさんに笑われて僕は身体が熱くなるのを感じた。恥ずかしい。部屋の電球にぶら下がっているヒモを相手にシャドウボクシングしているのを見られた気分だよ……。

「……あの教官、もしや純金級（ゴールド）の冒険者ではないか？　確か一度会ったことが……」

ダンテスさんがそんなことを言った。

「純金級……ってなんですか？」
「ああ、まだレイジには話してなかったか」

ダンテスさんは冒険者のランクについて教えてくれる。
なりたては「青銅（ブロンズ）」、次に「赤銅（カッパー）」、次に「黒鉄（アイアン）」、次に「灰銀（シルバー）」、次に「純金」とランクが上がっていく。
純金級まで行くと、各ギルド支部においてトップランカーとなるらしい。これは冒険者に限らず他の薬師ギルドや商人ギルドも同じランキングを採用している。

ミミノさん、ダンテスさんは「灰銀」なので高ランクと言える。
ノンさんとライキラさんは「銀の天秤」に入ってからギルドに加入したので「青銅」のままだった。
「純金」の中でも名うての冒険者は「白金（プラチナ）」となり、最高級が「天銀（ミスリル）」となる。

天銀の単語を聞いたとき、ライキラさんはピクリと反応したようだけれどなにも言わなかった。

「お？　そこにいるのは『硬銀の大盾』ではないか？」

スキンヘッドさんがダンテスさんに気がついて声を掛けてくる。

「……やはりあなたは『消えぬ光剣』ヨーゼフか」

「久しいな！　ゴブリンの大群を殺して以来か」

「あのときはあなたが討伐数（キルマーク）トップだった」

「いやはや、後衛をしっかり守ってくれる『大盾』がいてくれたからよ」

ダンテスさんは呼ばれてそちらに歩いていくが、それを見ていたライキラさんが口元を手で押さえて肩を震わせていた。

「……ライキラさん？」

ちょっとイヤな予感がして聞いてみると、

「ぶほっ、き、消えぬ光……ってお前、ツルツルの頭のことじゃねーの……？　くくっ」

やっぱり！　この人そんなこと考えて笑ってる！

「どうだ、『大盾』。新人の教育に付き合ってくれないか」

「いや。見ての通り俺は半分石化が進んでいてな」

「そのくらいハンデがあってちょうどいいだろう！　わっはははは」

ツルツル……じゃなかった、ヨーゼフさん！　ああ、もう、ライキラさんのせいで変な言葉が出てきちゃうじゃないか！

ヨーゼフさんは石化のことなんてまったく気にせず、ダンテスさ

んとともに教育に当たるようになった。
ただ新人の中には明らかに「石化」と聞いてびびっているのもいて、そういう人にはヨーゼフさんが突っ込んでいって尻を蹴飛ばしていた。
ますます悲鳴があがる。
（……ダンテスさん、すごい）
「大盾」なんて言われながらも、ここでは盾を持たず、ふだん使っていない木剣で攻撃をしのいでいる。ダンテスさんは一歩も動いていない。攻撃側は石化している左側から迫っているというのにそれすらあっさりとダンテスさんはさばいている。
「ダンテスのオッサンはやっぱすげーな。二つ名付きだけはある」
「……やっぱり二つ名ってすごいんですね？」
「まあな。ランクは依頼をこなしゃ上がるが、二つ名は偉業を成し遂げねーとつかねえ。自分で勝手に名乗るヤツも多いが、ああやってよその街まで来て知られてるってのはとんでもねーことだよ」
ライキラさんはさっきまでの暗い空気はもうなくなっていて、口が軽くなったのかいろいろと話し出した。
「攻撃してるあの青髪の男いるだろ？　アレはたぶん【疾走術】を持ってる。だが使いこなせてねーな」
「【疾走術】？」
「体力（スタミナ）を消費するが、一時的にダッシュが速くなったり、足音を殺して動けるようになる」
「！」
足音を殺せる？　それって……。

「俺も持ってるんだが――」

やっぱり！　ライキラさんの動きは特殊なスキルだったんだ！

「――【スタミナ強化】とセットで組み込んでおかねーと、すぐにへばる。【スタミナ強化】は便利なんだ。長時間の移動でもへばらねーし。……って、おい、どうした？」

「……い、いいえ、なんでも……」

「いや、いきなり頭抱えてうずくまったらどうかしたって思うよな？」

僕は気がついていた。ライキラさんはきっと【スタミナ強化】も持っている。

そして、僕もまた気がつかぬうちにライキラさんの【スタミナ強化】を習得していた……つまり、森の中を動いてもへばらなくなっていたのは僕の身体も成長したのではなかったのである！

ああ、もう！「僕も成長しているのです（ドヤ顔）」とかやっていた自分が恥ずかしい！　そりゃそうだよね！？　1日2日歩いただけで体力つくわけないよね！？

「おい、おい、ガキ」

「あ、え、はい」

「呼ばれてんぞ」

「え」

見るとダンテスさんが来い来いと手招きし、ヨーゼフさんが横で腕組みしながらじーっと僕を見つめている。

「……すごくイヤな予感がします」

16（後書き）

もうちょっとだけ訓練場のシーンは続くんじゃよ。

17

「さっさと行け」

尻をバシンと叩かれて僕は前のめりに出て行った。ちくしょー、覚えてろよ細マッチョツンデレ獣人め……。

「ほう、君が『大盾』のパーティーメンバーか」

ヨーゼフさんが言うと、離れたところで泥だらけ、汗だくの少年少女たちがざわついた。

――あの「硬銀の大盾」のパーティーメンバー!?　あんな子が!?

――ああ見えて剣の達人とかなんじゃないか？

「いや、そのぉ……ついていってるだけと言いますか」

「面白い」

「面白くはないと思います」

「剣の腕を見てやろう。打ち込んでくるがいい」

はい。人の話を聞かないタイプのスキンヘッドさんでした。

僕はダンテスさんに救いを求めたけれど、「せっかくだから胸を借りたらどうだ。いい経験になるぞ」とにこにこしながらうなずくだけだった。

「わ、わかりました……いっときますけど、僕は素人ですからね……」

少年のひとりから木剣を借りると、僕の身体にはなかなかに重たい代物だった。だけれど学習していた【腕力強化】のおかげで両手なら持つことができる。ここにさらに【補助魔法】で身体の動きを強化する。少しだけね。やり過ぎると僕は魔力切れ起こしますからねえ……。

距離を置いてヨーゼフさんに相対する。

……いや、え？　こっからどうするの？

確か、体育の授業で剣道をやったときのことを思い出すと……。

「ほう。なかなか様になっている」

両手で中段の構えをした。

で、ここからすりあしのように近づいていって……僕は木剣を振り上げた。

（――えっ？）

振り上げた瞬間、身体が勝手に動くように感じられる。これが【剣術】の影響？

「せえええええいっ！」

真っ直ぐに振り下ろした木剣の一撃は、僕が16歳だったころにも放てなかったほどに鋭い一撃だ。腕力、脚力、背筋力、腹筋力、そのすべてがあわさってすさまじい勢いでヨーゼフさんの顔面に向かっていく――僕の身長だと頭には届かないからだ。

だけれどその一撃は、ヨーゼフさんには届かなかった。

「ぬうん！」

まるで岩にでも木剣を叩きつけたかのような感触だった。ヨーゼフさんが無造作に振り払った木剣は、僕の木剣を弾き飛ばした。回転しながら木剣が天井に当たってぱらぱらと砂埃とともに落ちてくる。コォンとマヌケな音を立てて固い地面に当たって跳ねた。

「いってぇ……てててててて」

手がビリビリする。無理矢理吹っ飛ばされたから手のひらと手首とが痛い。

「なかなかよい一撃だな！　だが剣筋が真っ直ぐに過ぎるし、天賦に振り回されておる！」

僕が神妙な顔でこっそりと回復魔法を使い、手首の傷を治していると、

「天賦……」

ダンテスさんはぽかんとしていた。僕はなんの天賦も持っていないと思っていただろうしね。

あとで言い訳しなきゃなぁ。

「もっとしごいてやりたいところだが」

ひっ。

「残念ながら時間が来たようだ。ベテラン勢の訓練時間だ」

ほっ……。

「はい。ありがとうございました」

ふー、助かった。

僕は手首をこきこき回しながらライキラさんのところへと逃げていく。回復魔法で痛みはもう取れたけれど、１０代の少年少女たちの視線が痛い。

――なんだよあの剣。子どもがやれるような剣か？

――訓練官も言ってたけどスキルなんじゃ？

――レアスキル持ちかよ。いいなぁ～。

レアスキル持ちというところは当たってるけど、たぶん想像してるのとは違うんだよなあ。

その間に、明らかに年齢が上がり、２０代から３０代という冒険者たちがぞろぞろと訓練場にやってきた。

「う～～ん、かったりー」

「ちゃんと身体慣らしておけよ。明日から1週間は街の外だ」

「3日？　4日ぶりだっけ、剣持つの」

どうやら護衛や、採取の依頼を受けている冒険者たちで、しばらく領都で骨休めをしていたようだ。

勘を取り戻すために訓練場で身体を動かすのだろう。

「お前やるじゃん」

ライキラさんはにやりと笑っただけだった。

同じく戻ってきたダンテスさんは、

「――まだ見ていくのか？」
とだけ聞いてくる。
「えっと、はい。……ダメ、ですかね？」
「いや、構わないぞ。見て学べることは多い。……俺とライキラは出ているがいいか？　あとで迎えに来る。ギルド内だから問題は起きないだろうし」
「ありがとうございます」
「よし。ライキラ行くぞ。ノンたちの買い込んだ荷物を運ばなきゃな」
「へーい」

ふたりは出て行った――ダンテスさんはなにも聞かないでいてくれた。きっと、僕が心を開くのを待ってくれているのだろう……いい人過ぎてつらい。
僕はひとりで訓練場に残った。そこは初めて足を踏み入れた場所だけれど心細さは感じない。
それよりも高ランクの冒険者たちがどんな戦い方をして、どんな天賦を持っているかが気になって仕方なかった。
【森羅万象】で学習していくことに、他人の努力を盗むような気がしてまだどこかに罪悪感はあった。だけれど、それでも僕が生きていく上では絶対になくてはならないものだったし――それ以上に天賦は「使いこなしてナンボ」なので問題は手に入れてから先なのだと気づいた。
ヨーゼフさんが口を酸っぱくして少年少女たちに伝えていたことだ。
天賦を与えられればいきなり強くなれる。でも、だからといって、それに振り回されてはすぐに大ケガをする。
冒険者なら、運が悪ければ死ぬ。

（今は学ぶときだ）

僕はじっと目を凝らした。

こんなチャンスは滅多にない。

なるべく多くを学ばなければ――。

――【脚力強化★】【聴覚強化★】【握力強化★】【柔軟性強化★】【瞬発力強化★】

――【剣術★★】【槍術★★】【斧術★★】【弓術★★】【短剣術★★】【近接格闘術★★】【蹴術★★】【盾術★★】【疾走術★★】【硬化術★★】

――【補助魔法★★】

――【曲射術★★★】【舞踏剣術★★★】

おそらく学べたところはこの辺りだと思う。星３つの天賦は僕も知っているものだった。星がひょっとしたらさらに＋１されている上位の天賦もあったかもしれないけれど、そこまで詳しくはわからないのが難点だ。

すでに学んだものはこの辺りだろう。

――【視覚強化★】【腕力強化★】【背筋力強化★】【腹筋力強化★】【手先が器用★】【魔力操作★】【魔力強化★】【魔法適性強化★】【スタミナ強化★】

――【生活魔法★】

――【祈祷術★】

――【免疫強化★★】

――【大剣術★★】

――【火魔法★★】【花魔法★★】【土魔法★★】【回復魔法★★】

祈祷術は「術」系統のスキルなのに、星1つという特殊な立ち位置だ。

「……天賦を使いこなさなきゃな、意味がない……」

僕はひたすら観察し続けた。

17（後書き）

強くなってきたところで――物語が動きます。

18（前書き）

今日も朝夕の2回更新です。（エイプリルフールではないです）

18

身体がびっくりしていた。あまりに多くの天賦を取り込みすぎたからかもしれない。

肉体はぴくぴくしているし、頭は変に冴え冴えしつつも熱っぽさを感じる。これは……アレか。もしかしたら【演算力強化】とか【記憶力強化】の脳みそ強化系――天賦珠玉の種別で言うところの「知能特性」系の天賦も学習してしまったのかもしれない。

僕は訓練場で見た戦闘を思い返す。

……うん、アレだ。なんていうか記憶がまったく色あせない。いや、よくよく思い返してみると木の上で夜を過ごしたときのこともくっきりはっきり思い出せるんですけど？　もしやこれは完全記憶能力ですか……？

（どう考えたって【森羅万象】の能力だよね、これ……）

改めて星１０天賦珠玉のぶっ壊れっぷりに僕はおののいていた。もうこの人ナシじゃ生きていけないのボク……って感じだよ。いやよくわからん。ぼくはこんらんしている！

そんなわけで「大丈夫だべな？」「風邪か？」とか心配されながらも夕食を食べ（なにを食べたかあまり覚えていないのに記憶はしているという気持ち悪さにまたしてもおののきつつ）早めにベッドに入った。

「俺はヨーゼフに呼ばれているから、一杯やってくる」

「……ヨーゼフさんと？」

「ああ。ヨーゼフは今は冒険者を引退して、ギルドに雇われて新人の教育をしているんだそうだ。ただやはり寂しさもあるようでな。

安定した生活というのもままならんものだ」

じゃ、と言ってダンテスさんは出て行った。その足取りはウッキウキだ。お酒好きなんだなあ。

「……さっさと寝な、レイジ。お前明らかに疲れてんぞ」

「はい、そうします……」

とまで言ったところで僕の意識はぷつんと途切れた。身体は休息を求めていたらしい――。

――ギィ。

目が覚めたときには、部屋は真っ暗だった。そして扉が閉まるところだった。

……？

あ、そうか、僕寝てたのか。

横のベッドからはダンテスさんのいびきが聞こえてくる。うっ、お酒のニオイすごいな。なにが「一杯やってくる」だよ、まったくもう。

……ということは今出て行ったのはライキラさんか？

僕は周囲を伺うけれど、ライキラさんのベッドは無人のようだ。建て付けの悪い窓の隙間からうっすら入ってきている月光は、いまだに夜だということを示している。

（……こんな夜中に出て行く？　トイレ？）

しかし待てど暮らせどライキラさんは戻ってこない。

（そう言えば、お昼の様子はちょっとおかしかった……）

ライキラさんがとっつきにくいのはいつものことだけれど、心ここにあらずというような感じがあった。部屋で寝てるって言ってたのに訓練場にいたりとか……。

胸騒ぎがして、僕も部屋を出た。【疾走術】の訓練のつもりで足音をなるべく立てないように――おおっ、なんとかかんとかできる！【疾走術】は体力消費はすごいけど、足音を消したり一時的にダッシュ力を高めたりできるみたいなんだよな。便利。

廊下には誰もいない。エントランスロビーにも――いない。

表へと出るドアが細く開いている。

……外に行ったのか？

僕はそのドアへと手を掛けたところで、声が聞こえてきた。

「……これで足りるか？」

「……へっへっ、旦那。ありがとうございます。またお願いします」

「……ったく、いい加減にしろよ」

「……そう言わずに。いいんですかい？　ここにあなたがいることを密告しても」

「……あ？」

「……す、すみません、じょーだんですよじょーだん。それじゃあっしはこれで……」

外の様子をうかがうと、ライキラさんが黒フードの誰かと話しているところだった。その誰かに革袋を――チャリ、と硬質な音が聞こえたので（【聴覚強化】はすごい）お金なのは間違いない。

（だ、誰？　ライキラさんが脅されてる、のか、脅してるのか……？　いや、脅してる相手にお金を渡す？）

黒フードの男が去り際、こちらを向いたときに僕の【視覚強化】は彼の顔が毛むくじゃらだということを捉えた。獣人だ……。

（あ！　ライキラさんがこっちに来る！）

僕は【疾走術】を駆使して音を立てずに移動し、カウンター脇の小テーブルに隠れた。

ギィ、と扉を開いたライキラさんが入ってくる――そして、ため息。

「……レイジ、出てこい」

バレてるぅぅぅうううう！？

「わぁってんだよ、俺には【嗅覚強化】があるからな」

「……あ、ライキラさん？　どうしたんですかこんな夜更けに。いやー、僕はおしっこがしたくなっちゃって、イヤですねえ、年を取るとトイレが近くなって……」

「待てや」

ひょこっと顔を出してさっさと離脱しようとした僕の首根っこをつかまれた。

「なにが年を取るとだ、１０歳が」

「いやーははは……」

「……見てたのか？」

「……」

僕が答えずにいると、チッ、と舌打ちしてライキラさんは僕をつ

かむ手を離した。

「……ちょっと付き合え」

そうして夜の街へと連れ出されたのだ。

街は静まり返っていた――ということもなくて、僕らの宿泊している宿はいわゆる宿が密集しているホテル街みたいなところにあるので、朝までやっている居酒屋や、お姉さんたちとキャッキャウフフできるようなお店や、あるいは僕が行ったら大人の階段を【疾走術】で駆け上がれるようなお店がちらほらとある。

光が漏れているお店からは喧噪が表通りに流れ出ていて、そこは居酒屋のようだ。

ピンク色のランプを灯しているところは、きわどい服を着たお姉さんが立っており、通りがかる通行人（男限定）を誘惑している。

「あそこに立ってる女、いるだろ。アレはヒト種族と獣人のハーフだ」

「え……そうなんですか？」

「見りゃわかるだろ」

「いいえ？」

「頭髪が多めで、服で隠してるが体毛も多い」

「全然わからないですけど」

見えないなあ。ふつうのお姉さんにしか見えない。あ、お姉さんがこっちに気がついて手を振ってきた。えへへへ。

「なに喜んでんだガキ」

「い、いいじゃないですか……」
「ったく、お前はミミノみたいなつんつるてんが好きなのかと思ったら、獣人のハーフでもいけるのか？　節操ねーな」
「え！？　い、いやむしろライキラさんのほうがミミノさんが好きなのでは？」
「はあ！？　なんでそうなるんだよ！？」

いや、だってさ？　ミミノさんに「拾われた」って言ってたし、なんかやけに突っかかるし……思春期の少年みたいだしね？　言ったら怒るよね？　だから言わないよ。

「ミミノはダメだ。ついでに言うとノンもダメだ。論外」
「はあ～？　どんだけハードル高いんですか？」

ミミノさんも背は低いけどメチャクチャ可愛いし、ノンさんに至ってはカワイイ＋清楚＋ダイナマイトですよ？　ダイナマイトはニトログリセリン等を使った爆薬のことです。深い意味はないです。あとノンさんは怖い。

「俺はもっと毛深くなきゃ無理」
「ファ！？」

なにその断言！

「あのつんつるてんは『他種族だな』くらいにしか思わん。知ってるか？　ミミノの腕はつるつるなんだぞ？」
「……」

知ってます。お風呂で見たからね……。
ああ！　あのときの光景をくっきりはっきり覚えているのは【森

羅万象】のせいなのか!?　くっそー、【森羅万象】め！　これでは忘れることができないじゃないかー！（棒）

「……お前たまにひとりで悔しそうな顔しながら地面を踏んだりしたりするよな。なにそれ。地面に恨みでもあんの？　そんな信仰を持ってんの？」

「お気遣いなく。――それで、毛深いってどれくらいがいいんですか？」

「そりゃぁな、おめー、背中を触るとふさふさで、滑らかで、するりと手が通るような……ってなに言わせんだ恥ずかしい！」

「お、おう……」

好みは人それぞれなんだね。僕はまたひとつ賢くなったよ。

「……お前が俺に隠れて見た、アイツはな、この街だと金を稼ぐこともできねーんだ。だから俺が金を渡してやった」

話が、元に戻ってきた。

19

「あの人……獣人、なんですよね？　ライキラさんと同じ」
「ああ。俺は『銀の天秤』というパーティーに拾われてるからな、まだいい。だけど獣人だけで生きていくには、この国はキツすぎる。見たろ？　客引きの女だって獣人のハーフにやらせているくらいだ。獣人の立場は低い。獣人が突っ立ってたらヒト種族の客は近寄らねーし、純粋な獣人にはあんな仕事もない」
「それは……」
「お前だって毛深い女は無理なんだろ？」
「うっ、た、確かに」
「それはしょうがねーことではあるんだけどな……この国が獣人にはキツイってのもまた事実ってだけだ」
「他の国に行けばいいってことですか」
「その道が閉ざされてんだよ。国境を越えるにはギルドの推薦状が必要で、それを持って役所に行って通行許可証をもらう必要がある。俺はダンテスのオッサンの治療に合わせて便乗させてもらうだけだ。そういう話になってる」
「えっ、光天騎士王国に行ったらライキラさんいなくなっちゃうの！？」
「まあ、そうなるだろうな。言っとくが、ミミノやオッサンは承知の上だぞ」
「え、えぇ……」
数日だけど細マッチョツンデレ獣人さんとは少し仲良くなれた気がするのに……。
「ってことはライキラさん、他になにか目的があるんですか？」

「……ああ」

ライキラさんは立ち止まり、夜空を見上げた。

そこには満ちようとしているほぼ真円に近い月が昇っている――ああ、この世界にも月はあるのだ。ただその月の周囲に3つの衛星がさらにあるというだけで。

「殺したいヤツがいる」

淡々と告げられた言葉は、あまりに現実感を伴っていなかった。

僕は、「へ？」だなんていう間の抜けた声を上げてしまった。

「俺や、金をくれてやったアイツはもともと同じ傭兵団に所属していた。『闇牙傭兵団』っつってな、獣人だけで結成した傭兵団なんだ。金で雇われて戦場やモンスターの狩場を転々とする……俺たちは依頼者に言われたとおりに動いていただけだったが、つまらねーミスを犯した」

傭兵団、という言葉を僕は知らなかった。

「デカイ貴族の裏稼業（シノギ）を荒らしちまったんだ」

「シノギ……？」

「麻薬だよ。このキースグラン連邦のリグラ王国……このアッヘンバッハの隣だな。そこは小さい国ではあるんだが麻薬を各国に流してボロ儲けしていた。俺らはその事実は知っていたが、まさかリグラ王国内の『山に棲み着いたモンスターを討伐してくれ』と言われて倒したモンスターが、麻薬の製造所を守っていたモンスターだとは思わないわな」

「な、なんですかそれ。モンスターが、守る？」

「【モンスター育成術】とかいうふざけたスキルがあるらしいぜ」

マジかよ。なんて万能なんだスキル、さすが奥が深い……じゃなかった、今はそれどころじゃない。

「それで……ライキラさんたちは？」

「モンスターを討伐したぞと報告した依頼主はな、大喜びで自爆の魔道具を持って製造所に突撃した。そして麻薬もろともドカーンよ」

「……は？」

「後で知ったが、依頼主には麻薬中毒になった一人娘がいて、死んだらしい。俺たちはその復讐に付き合わされたってわけだ」

僕は唖然とした。この世界にはやはり暴力が満ちている。そして、欲望もまた……。

「そいつは死んで終わりだ。だけど俺たちは生き残ってる。で、報酬もちゃんと支払われた――そこから足がついた」

ライキラさんは言う。

大金が動いたせいで「闇牙傭兵団」は麻薬製造所破壊に関係した一員だとリグラ王国ににらまれた。

「リグラ王国は大金を積んで、連邦の首都であるヴァルハラのトップ、市長を動かした。そして市長を通じて冒険者ギルドを動かした。『闇牙傭兵団』は麻薬製造の元締めでありこれを駆逐すべし……とな」

「えええええ！？」

「声がでけーよ」

「いや、だって、え！？　そんなことって……！？」

「富豪の死、ってのは大事件でな、製造所は明るみに出ちまったわけだろ。じゃあこの麻薬は誰が作ってたんだってことになる……そ

こでリグラ王国は巧みに罪をすり替えたんだ」
「そ、そんな……」

ライキラさんは、傭兵団はただの被害者じゃないか……。
「で、俺らのもとに派遣されてきた冒険者は……天銀級（ミスリル）だった」

天銀級。
冒険者の中でも最上級。

「たったひとりのそいつを相手に、５０人いた傭兵団は壊滅だよ。俺は命からがら逃げ出して、仲間はちりぢりになった……」
「仲間のひとりが、さっきの……？」

ライキラさんは、うなずいた。

「……あの冒険者に俺たちはすべてを話した。ただハメられただけで被害者なんだってことをな。それをフンフンとうなずいて聞いた直後、あいつは大魔法をぶっ放した。仲間が燃えて、泣き叫んで、一瞬でそこは地獄と化した」

僕はただ聞いていることしかできなかった。
ライキラさんの中で燃え盛る炎は、ライキラさんが見た炎と同じように苛烈なものなのだろうか。

「笑いながら、仲間を殺していったよ……『だからなに？』と言ってな……！　情けねー……俺は怯えて逃げることしかできなかった。それで逃げて逃げて力尽きて、もう死ぬのかと思ったときに……ミミノに救われた」
「……生きるために死力を尽くすことは、情けないとは、僕は思い

ません」

ライキラさんは僕を見て、小さく笑った。

悲しい笑顔だと、思った。

「レイジよ……俺に、リグラ王国を滅ぼすことは無理だとしても、なにか一矢報いなきゃならねーんだ。だったら俺は……あの冷血野郎を許してはおけねえ」

ぎりぎり、と音がした。

ライキラさんの手が握りしめられ、そこから血が垂れてきた。

「ハーフエルフの天銀級冒険者、クリスタ＝ラ＝クリスタ。あいつだけは必ず俺が殺す」

＊　魔導飛行船「天姫の居城」　＊

ごうんごうんと鳴る音が止むことはない。ゲッフェルト王国の上空1，０００メートルを魔導飛行船「天姫の居城」は飛んでいた。

巨大な船、というより丸みを帯びたボートのような形状で、巨大なプロペラと小型のプロペラを何十とぶん回して空を飛んでいる。

特殊な木材と鉄板を組み合わせたブラックボディは、夜にもかすかに青色の光を纏い、その存在を広く知らしめる。

最大乗員は５００人まで可能という大きさの巨体は、ゆっくりと、しかし確実に、一直線に、アッヘンバッハ公爵領領都を目指して進んでいた。

「……乗り慣れるとつまらんな」

「はっ？」
「最初こそ魔導飛行船は目新しいと思ったが、何度も乗ると飽きる。船内に娯楽がないのがなんともつまらん」
「そ、それは……申し訳ございません」
「なにが『天姫』だ。一国の姫どころか冒険者の私ですら満足しないぞ」
「は、はあ……」

大きな身体を縮こまらせているのは冒険者ギルドの幹部職員だった。
「天姫の居城」内にはラウンジがあり、食事や酒を楽しむことができる。
職員の正面、沈み込むようなソファに身体を預け、この世界では滅多にお目にかかれない透明なグラスで葡萄酒を飲んでいる――線の細い男。
身長は高く、そのせいで逆に線の細さが際立っている。
さらりとした金髪を肩の上で切りそろえており、その髪が耳を隠しているが人間よりもほんの少しとんがっている。
赤の三白眼は職員には向けられておらず、ただグラスを見つめていた。
葡萄酒の水面には天井――配管が剥き出しになっている無骨な天井からぶら下がる魔導ランプが映っている。
チッ、と男は舌打ちすると葡萄酒を飲み干した。この1杯で、庶民が1週間は暮らせるほどの価値があることを職員は知りつつ、お代わりのためにデキャンタを差し出してグラスに注ぐ。
この男が依頼ひとつでこの葡萄酒を何十樽と買えることもまた知っている。

「到着は何時だ」
「翌、早朝の予定でございます」

「鉱山に直接行くわけにはいかないのか？　領都から移動となると時間も掛かろう」
「新公爵閣下と挨拶をしていただかないことには……。魔導飛行船の離着陸は場所も決められておりますし、自由な飛行もできません」
「……ヒト種族は翼を手に入れたというのに、自ら翼を折るのか」
うんざりするように男は言うと、葡萄酒にはまったく手をつけずグラスを置いて立ち上がる。
「魔物はつまらん。ただ怒るだけ。泣き叫びもしなければ命乞いもしないからな……その点、大量の獣人を殺したときはたまらなかったな」
「……」
職員はすでに男から視線を逸らしていた。舌なめずりする男の股間がふくらんでいたからだ。
「寝る。着いたら起こせ」
「……承知しました」
言うと、男はソファに掛けていた薄手のローブを手に取って、去っていった。
「……あんなのが天銀級冒険者だっていうのだから、世も末だ」
職員は深々とため息を吐いたが、彼が次に考えたのは飲みさしの葡萄酒をどうするかということだった。
「天姫の居城」は着実に、アッヘンバッハ公爵領を目指して飛んでいた。

19（後書き）

役者がそろいつつあります。

この物語が「面白い」「続きが気になる」と思われましたら是非ブックマークをお願いします！

また←の広告の←にある★★★★★をタップすると書いている作者への「応援」となりますので、もしよろしければ評価を入れていただければありがたいです。

20

＊　六天鉱山　＊

鉱山にてアッヘンバッハ公爵が死亡し、鉱山奴隷が暴動を起こした――その報告を受け、状況把握のために先遣隊１００人が送り出された。

たかだか調査のために１００人もの人数を投下しなければならないほど六天鉱山はアッヘンバッハ公爵領――ひいてはキースグラン連邦にとって重要なものであり、さらにはこの世界において不可欠なものだと考えられている。

先遣隊の隊長は若くして抜擢された女性だったが、それは彼女の持つ【指揮術★★★】という天賦のおかげでもあった。この天賦があるおかげで彼女の指示は末端まで行き届き、部隊は規律を保つことができる。

だが、そんな彼女をもってしても、六天鉱山に近づくにつれて部隊に広がっていった不穏な空気を拭い去ることができなかった。

――あれは、バケモノだ……バケモノだ……。

――六天鉱山に近づいちゃならねえ……。

六天鉱山から少し離れた街で、暴動のあった日に鉱山にいたという冒険者から得た情報は断片的だった。彼らは震えて、まともに話せなかったのだ。

鉱山は冒険者にも開かれており、レアな天賦を発見すれば高く買い取ってもらえるために一攫千金を狙った冒険者がよく訪れていた。

そんな彼らは鉱山に対して熱意はあったが、逆に言えば忠誠心な

どまるでないので暴動が起きると一目散に逃げ出した。
ただ――問題は、暴動そのものではなく、その後に出現したという「バケモノ」だ。

「竜、だと言うの？」
「はっ。ほぼすべての冒険者がそのように言っております。夜間に出現したためにシルエットしか見ていないようですが……」

情報収集に当たった部下の報告は、そのすべてが「竜」の存在を示していた。

「数年に1頭、討伐されるかどうかという竜がここに現れたのならば……大変なこと。鉱山兵の情報が得られないのが歯がゆい」

鉱山兵は鉱山を守る兵であるために、鉱山から離れることができない。その上、魔導通信の機器が破壊されたせいか鉱山からの連絡は途絶え、逃げ延びた冒険者からしか情報を得ることができないのが現状だ。
途中の街では確保された逃亡奴隷から話を聞いたが、奴隷はほとんどなにも見ていなかった。逃げるので精一杯だったということらしい。

「それにしても、ひとりも連絡要員が来ないというのはおかしい」

通信が途切れても馬がある、馬がなくとも足がある。
だというのに鉱山兵とはまったく出会わないのは奇妙なことだった。

「最悪の想像は……鉱山を守るためのギリギリの兵力しか残っていないということかしら。……いいえ、ここで私が弱気になってはだ

めね。鉱山の麓の街に期待しましょう」

隊長はそこに期待を掛けていたが――その期待はすぐに裏切られることになる。

「――なっ、なによ、これは……」

街があったとおぼしき場所は、灰燼に帰していた。

家々の燃えた跡、いまだ立ち上る黒煙、崩れた防壁――それにあちこちに落ちていた人の残骸。

部下が嘔吐しそうになり、隊長は、「全員、警戒せよ！」と命令を下すことで持ちこたえた。スキルによって力を与えられた隊員は街に散らばって生存者を探した。千人程度のこの街で、残っていたのは１００人程度だった――彼らはなんとか難を逃れた町長の屋敷に避難していたのだ。

――あれは竜だった。

――もうここから離れたい。でも母が脚にケガをして……。

――光が降り注いだ。世界の終わりだと思った。

――街が燃えたんだ……なにもできなかった……。

茫然自失の住民たちに話を聞いた。やはり竜が出たのだ――それも空を飛べるような個体が。

だがここにも鉱山兵はおらず、街の人たちも見ていないという。

「逃亡奴隷についての報告は？　特に星６つの天賦珠玉の行方を知りたい」

鉱山の操業停止は間違いなく、さらには復旧にも時間は掛かることがほぼ確定だ。それは痛いが、星６つの天賦珠玉【影王魔剣術（シャドウキング）★

★★★★★】さえ見つかれば面目を保つことができる。
部下たちは全員、首を横に振った。情報はなかった。

「……結局のところ、鉱山に行くしかないということね……鉱山兵に聞かなければなにもわからないわ」

隊長は３０人を連絡要員、治安維持要員として街に残し、自分を含め７０人で鉱山へと向かうことを決めた。
だが、この決定が「最悪」を導き出すとはこのときの誰にもわからないことだった。
隊長たちは壊滅状態の街で野営をし――それはレイジがライキラとともに夜の街を歩いていた夜だ――翌朝、鉱山へ向けて進発する。
大変な道のりだった。
天賦珠玉を産出する六天鉱山と麓の街とは当然、路面は整備されていた。だというのにあちこちがえぐれ、木々は薙ぎ倒されて道に飛び出していた。
焼け焦げ、もはや動かない鉱山兵も見つけた。その数が１０を超えたところで隊長たちは遺体の搬送を断念した。今は鉱山の状況確認を先にすべきだという判断だ。
深い森が切れ、鉱山の姿が見えてきたが――かつて隊長が一度だけ見た鉱山とは様相を変えていた。

「削れてる……？」

山としてこんもりとしていた鉱山は、ちょうど包丁でも差し入れたように左右に分断されていた。地表のあちこちは超高熱にさらされたせいでガラス状に変色している。
人の気配は、なかった。獣の気配すらも。
隊長たちは最大限の警戒をしながら鉱山の入口に立った。そこからは大空洞内、壁面住居を含めて広がる建物群を見ることができる

――はずだった。

そのほぼすべてが崩壊し、がれきが押しつぶし、あるいは燃えた跡になっていた。鉱山兵や奴隷の死体があちこちに転がっており、肉の焼けるニオイを放っていた。

数人の隊員が嘔吐したが隊長は彼らを鼓舞する指示を出さなかった。

出せなかった。

大空洞――すでに天井の穴は大きく広がり、崩壊しているために空洞と呼べるのかはわからないが――このエリアの中心部に、巨大な、黄色い塊があったからだ。

その体表には領兵が持つ盾よりも大きい鱗があり、ぬらりとした光沢と、表面を覆うゆらゆらした光――魔力が通っていた。

身体はずんぐりむっくりしており、背中にはハリネズミのごとき針が何百何千と生えている。尻尾は身体をくるりと囲むように巻いていた。

羽が畳まれている。広げればこの大空洞を優に超えるほどの巨大な羽だ。その羽が隠しているのが巨大な頭だった。

「――――」

誰しもが言葉を失っていた。

その黄色い塊は、造形があまりにも整っており、ある種の完成された美しささえ感じさせた。

だが隊員たちを襲っていた感情は――恐怖。

太古の昔に人間が、動物として生きていたころに持っていた、圧倒的強者を前に動けなくなるという、恐怖だ。

ぱちり。

羽の向こうで瞳が開かれた。羽に隠れて見えないはずなのに、こ

こにいる誰しもが「目が開いた」と気がついたのは不思議なことだった。
黄色の頭が持ち上げられ、部隊を睥睨する。
丸い、金色の目は、それ自身が巨大な宝玉のようでもあった。
口は左右にぱっくりと開かれ、並ぶ歯の一本一本は一抱えもあるほどに太い。

《――不愉快である――》

声は発せられていない。もしも聞こえていたら音圧で吹き飛ばされていただろう。
ただ、思念が、直接頭に響いてきた。

《――強欲なる人の子よ。我が住処をこれ以上荒らすというか――》

隊長は、ハッとした。
「竜」は――これが正真正銘「竜」なのかは知らなかったが、これが「竜」でなければなにが「竜」なのかと思ってしまうほどにすんなりと「竜」だと認識した――知性を持ち、対話をしようとしている。
そして竜は怒っている。理由は一切不明だが、原因は「鉱山採掘」であること、あるいは「隊長たちが押し寄せてきた」ことだ。
怒りの代償が周囲に広がるこの有様だ。

（奮い立て、私！！！！）

隊長は自分自身に【指揮術】を掛け、きっ、と竜を見据えた。

「違います！　我らは様子を確認に来ただけです！　もしも去れというのならばこのまま去りましょう！」

その反論を聞いたのか聞かないのか、竜は頭をもたげ、上空を見やった。
羽が、広げられる。
「わあああああ――――」
その1回の羽ばたきで隊長含め全員が吹き飛ばされ、転がった。
《――あれで懲りぬのならば、さらなる恐怖を見せねばならぬ――》
起き上がった隊長は、すでに竜が空高くに上っているのを見た。
そうして羽を震わせるとどこかへと飛んでいき、すぐに視界から消える。
隊長は、自分が命拾いしたという幸運に心から感謝しながらも、次の瞬間には悪寒に身体を震わせた。
「ま、マズイ……マズイマズイマズイ！」
「隊長、大丈夫ですか」
「あの竜はさらに攻撃を仕掛ける気よ！」
自分たちがここに来たばかりに――。
「地図、地図を出して！」
「は、はい、こちらに」
「――なんてこと……！！」
さらには竜の飛び去った方角を確認して隊長は愕然とする。
それは、領都のある方角――近隣でもっとも人口の多い場所だった。

「全員！　長距離通信の魔道具を探して！　動ける者は全員よ！　負傷者の治療は後回し！　早く！！」

その「指示」はもはや「指示」とは言えないほどに悲痛な叫びだった。

「そうしないと領都が滅ぶわ！！」

だが、隊員たちは大急ぎでがれきをかき分け、鉱山兵の駐屯地、冒険者ギルドの出張所を漁った。

１時間後、長距離通信の魔道具は冒険者ギルドの出張所で無事に見つかった。鉱山兵のものは完全に破損しており動く様子がなかった。

そしてその３０分後には、無事魔道具を起動し、領都冒険者ギルドに向けて通信を送った。

『六天鉱山より緊急通信。鉱山は壊滅。竜が領都を目指している。大至急、防衛準備を整えられたし』

20（後書き）

今日も夕方にまた更新します。

「面白い」「続きが気になる」「竜はレアな焼き加減で」と思われましたら是非ブックマークをお願いします！

←にある★をタップすると★の数に応じて「応援」ができますので、是非ともそちらもお願いします～。続ける作者のモチベーションにつながりますので！

21

目が覚めたときには、頭がぼーっとしていた。原因ははっきりしている。昨晩聞いた、ライキラさんの話がショッキングだったからだ……。

「おっせーぞレイジ」
「あ、おはようございます……」

エントランスロビーに行くとライキラさんはいつもどおりで、僕はいちばん最後のようだ。

「寝癖ついてるべな」
「あ、すみません……」
「どしたの？　ぽーっとして」
「あ、なんでもないです……」

ミミノさんが小さな櫛で僕の髪をすいてくれる。
癒されるゥ～……じゃなかった、僕は僕でちゃんとしなきゃなぁ……。

「いだっ！？」

とか思ってたら目の前に星が飛んだ。頭にゲンコツを振り下ろされたのだ。

「しゃきっとしろやレイジ。今日はもうここを発つんだぞ」
「あ、は、はいっ」

ライキラさんを涙目で見る僕は、これがライキラさんからのメッセージなのだと気がついた。――いっちょまえに気にしてんじゃねーよ、っていう。でも叩くことはないよね？

「んだよ？　なんか文句あんのか」
「……いえ、別に」
「？　いつの間にレイジくんとライキラは仲良くなったんだ？」

ミミノさんに聞かれ、

「仲良くなってねーよ！」
「仲がいいかと言われると……ちょっと」
「あ！？　んだテメー、俺を遠ざけようとしてんのか？」
「仲良くして欲しいんですか？」
「なわけねーだろ！　なに言ってんだテメー」
「めんどくさっ」
「んだと！？」
「あっはっはっは、仲良しだべな～」

僕らのやりとりを見ていたミミノさんが笑いだし、ノンさんは微笑ましい顔で見守り、ダンテスさんは苦笑いしつつ、

「ほら、そうと決まればさっさと行動するぞ。俺とノンは役所に行って出国許可証をもらってくる。ミミノは――」
「調味料の補充だけしてくる」
「そうだったな。ライキラとレイジはどうする？」
「俺は別になんでもいいけどよ……」
「僕はまた冒険者ギルドに行っていいですか？」
「んだよ、また訓練場か？」

「はい！」
「もの好きだなぁ」

呆れたように言いながらもライキラさんは僕についてきてくれると言ってくれた。

ダンテスさんたちと別れ、僕らは冒険者ギルドへ向かう。

朝の領都はにぎやかだ。売り物なのか、荷車を引く人、大きなカゴを抱えている人、いそいそと早足でどこかへ向かう人。

たった1日で冒険者ギルドの場所を把握したのか、ライキラさんはすいすいと裏通りを選んでいく。すごいな。僕なら完全に道に迷ってる。「ひとりで行けます」とか言わないでほんとによかった。

「あ、子どもだ」

裏通りで、大きな壺に溜まった、雨水らしいものをのぞき込んでいる子どもが3人ほどいるのを見かけた。

「はっ、テメーも子（ガキ）どもだろーが」
「あ、そういうのいいんで」
「なんかやたら生意気になったな！？」

ライキラさんが驚愕しているのがちょっと面白い。僕らは子どもたちの横を通り抜ける――どこの世界でも小さい子たちは裏通りで遊んだりするもんなんだな、とか思って……。

え。
いや。
え？
ちょっと待って待って待って。

「待って君たちぃぃぃっぃぃぃぃ！！」

「ひっ」

僕が鬼の形相で駆け寄ったものだから子どもたちはびっくりして逃げ出していく。

「お、おい、レイジ！　なにやってんだよテメー！　あんなふうに迫ったらダメだろうが！」

「あ、えっと、その」

「まずはちゃんと自己紹介して、それから『いっしょにあーそーぼー』だろ」

そっちかよ。って違うよ、そこじゃないんだよ僕が気にしてるのは。

「これ……」

僕は壺にちらりと見えていた、あるものが気になっていたのだ。

「……やっぱり」

そこには、白くてうねうねしたミミズのようなもの……というかミミズの一種なんじゃないだろうか？　日本のドブにもいた、イトミミズみたいなヤツだ。あるいはゴカイと言ってもいい。

それが、いたのだ。

「あ？　んだよ……あのガキどもはこれを見てたのか」

「ライキラさん、これがなにか知ってますか？」

「さあな。気色悪い生き物の一種……ってなにやってんだよレイジ！？」

僕は腕を突っ込んで、その白ミミズを取り出していた。

「こんなところで見つけられるなんて……」

それは【森羅万象】が教えてくれた素材。

ダンテスさんの石化を解くために必要な、3種類のうちの1つだった。

ライキラさんは、僕が大事そうに白ミミズを革袋に移したのを見てぎょっとした顔をしていた。僕とライキラさんの距離がほんの少し離れた（物理的にも心理的にも）。だけれどなにも聞いてこないのは、昨日、僕がウコンモドキを売ったことで「なんかの薬になるのか？　聞きたくもねー」くらいに思ってくれているからだろう。

僕はウッキウキだった。これであと1種類、素材が手に入ればダンテスさんの石化を治せるのだ！　ちなみに白ミミズに「生命樹の葉」を食べさせる必要があるようで、革袋の中で今ごろ食べてくれているだろう。さっき入れたときにハムハムしていたので。

その後は死んでても大丈夫っぽいので袋の中で放置しておくことにする……うん、僕もちょっと気持ち悪いなって思ってた。

「あの～ライキラさん、あんまり期待しないで聞きますけど」

「お前な、それが質問する人間の態度かよ……」

「『深みのある銀色の金属』ってなにかあるか知ってます？」

「あ？　ミスリルのことかよ」

「え！？」

ちょっ、マジで？　もう答え出てるの！？

これはダンテスさんの石化解除は目の前なのでは……！？

「それそれそれそれ！　ミスリル！　ファンタジー物質！　あるんですか！？　ていうか銀色なんですね！？」
「なに？　ファンタジーってなんだよ？」
「あ、いえ、そこに突っ込まないでいただけると助かります。それでミスリルって」
「……お前ほんと変なこと言うよな。まあ、いいけどよ……ミスリルはミスリルだ。ミスリル鉱山からほんの少しだけ採掘できる金属で、目玉が飛び出るほど高価い。純銀よりも深みのある銀色、って感じだな」
「なんとかして手に入れたいです！　どうやったらいいですか！？」
「無理」
「え……」
「ミスリルの取り扱いは国が管理してて、一般への売り出しはない。勝手に手に入れたら重罪だし、そもそも数が少ないから裏のマーケットにも出回らん」
「えぇ……」

僕は愕然とする。
ダンテスさんの治療まで目の前だと思ったのに……そりゃそうだよね。ラッキーが2回続いて僕はちょっと調子に乗っていたのかもしれない。
ああ、残念だなぁ……どうにかして少しだけでも手に入らないものかな、ミスリル。まあ、必要な素材がミスリルで決定したわけじゃないんだけど。

21（後書き）

イトミミズってみんな知ってるんだろうか……。子どものころ、近所のドブによくいたんですけど。

「面白い」「続きが気になる」と思われましたら是非是非ブックマークをお願いします。

←にある広告のさらに←に、★がありますのでこれをタップいただけると評価ポイントが入ります。作者にとっても「応援」となりますので是非、本作を評価していただければ幸いです。

明日も2回更新の予定です。

22（前書き）

本日も朝夕の2回更新です。

22

ギルドに入ると――昨日よりも多くの冒険者がいた。しかし彼らはライキラさんに嫌悪の視線を向けることもなく、仲間内での話に夢中になっていた。

――俺も見たぞ、マジでかかった。
――だいぶ朝早くだったんだろ？
――一度乗ってみてえよなあ。

僕はカウンターへ向かい、女性の職員さんに訓練場を見学していいかとたずねた。すると、

「それは構いませんが、今日は誰も使ってませんね」
「そうなんですか？」
「はい。訓練官のヨーゼフさんは午前は休むとご自宅から連絡があり――」

二日酔いですね、わかります。

「――他の冒険者たちは朝からあの調子ですからねえ。見ました？　魔導飛行船が来たらしいんですよ。日の出のすぐ後くらいだったみたいで、私は寝てて見られませんでした。今は公爵閣下のお城に置いてあるそうです」
「ひ、飛行船！？」

そんなもの、あるの！？　全然知らなかった。見たこともないし。

「そうなんですよ。キースグラン連邦でも五指に余るほどしかないらしいんですけれど、ゲッフェルト陛下が所有されている『天姫の居城』がこの領都に来ているんです」
「へぇー。王様が乗っているんですか？」
「いえいえ、違いますよ。なんでも冒険者ギルドも関係しているみたいで、ギルドマスターが朝から呼ばれて……」
「君」
ムスッとした顔のサブマスターが現れた。
「無駄口を叩いているヒマはあるのかね？」
「あ、す、すみません……というわけで、訓練場の見学はご自由にどうぞ」
「ありがとうございます」
もうちょっと聞いてみたかったけれど、いまだににらみを利かしているサブマスターがいるので僕はおとなしく退散することにした。するとサブマスターは奥から別の職員に呼ばれて、いそいそと入っていく。最初から出てこなければよかったのに、まったくもう。
「ずいぶん話し込んでたじゃねーか」
「あ、はい。そうなんですよ……サブマスターが来なければもっと聞けたのに」
「ああ、あのいけ好かねークソ野郎か」
うわあ、直球。
「お？　レイジ、訓練場に行くんじゃねーのか？」
「それがどうも今日は誰も使ってないみたいで……」

本気で残念すぎる。天賦を学べるチャンスなんだけどなぁ……仕方ない、ここではもうあきらめて、実践する方向でがんばっていこう。天賦を身につけるのだ！

「んじゃとりあえず、ダンテスのオッサンがこっちに来るのを待つか」

「はい」

「俺のほうも面白い話を聞けたぜ」

ギルド内の隅っこに移動しながらライキラさんが話してくれる。目立たないところで待ちながらも聞き耳を立ててたみたいだ。

「魔導飛行船のことですか？」

「ん？　いや、そうじゃねー」

あれ、違うんだ。

「なんでも、街道でモンスターに襲われてた商隊をふらっと現れた子どもが助けたらしいんだ」

「助けた？　子どもが？」

「それがよ、今まで誰も見たことがないような魔法だって話さ。八道魔法は知ってるな？」

「天賦珠玉『魔法特性』に分類される、８種類の魔法ですよね。ミミノさんの花魔法とか」

「そうそう。レアな２つが【光魔法】と【闇魔法】だろ？　俺はどっちも見たことがねーんだが……」

なんだかライキラさんが機嫌良く話してくれる。細マッチョツンデレ獣人がついにデレ期に入ったのだろうか？

「どうも闇系統っぽいスキルだったそうだ。商隊を襲っていたのは上半身が竜人、下半身が馬っつうリザードケンタウルスだったんだが……その竜の硬い鱗も一撃でスパッだよ」
「……ちょっと、待ってください」
僕はその話を聞いて、うなじがぞわりとするような感じを覚えた。
「もしかしてそれは、剣のような黒い斬撃が……モンスターを斬ったということですか？」
「おお、そのとおり。なんだよ、お前もギルド職員からその話聞いてたのかよ」
「――――」
僕は知っている。その黒い斬撃を。
ラルクだ。
それは、ラルクだ！
「ライキラさん！　誰が言ってました、それ！？　詳しい人を教えてください！」
「お、おい、どうしたんだよ、急に――」
僕がライキラさんに詰め寄ったときだ。
「――冒険者たちよ、聞け！」
サブマスターがいつの間にか奥からまたこちら側へと現れていた。
その顔は真っ青に青ざめ、手にした紙がぶるぶると震えている。
あまりに異常を感じさせるその様子に冒険者たちは会話を止め、サブマスターの言葉を聞き漏らすまいとする。

「六天鉱山より緊急の通信が入った！『竜』が領都へ向けて飛来している！　今よりギルドは非常召集を掛け、全冒険者に、『竜』に対抗するための防衛出動を要請する！」

冒険者ギルド内は蜂の巣をつついたような騒ぎになった。こっそりギルドから出ていく人、サブマスターや他の職員に詰め寄る人（あまりに情報が足りなさすぎて）、仲間内で憶測を話し合う人、泰然自若として構えている人（そういう人たちは上等でピカピカの鎧を着た上級冒険者だ）。

ライキラさんに、ラルクのことを聞くどころじゃなくなってしまった……。

「おいおい、こりゃなんの騒ぎだ？」

とそこへやってきたのがダンテスさんだ。出国許可証の発行は昨日すでにお願いしていたものを受け取っただけらしく、すぐにギルドへとやってきたようだ。

「『竜』……？」

話を聞いたダンテスさんが眉をひそめる。

「ああ。どう思うよ、オッサン」

「六天鉱山で奴隷が暴動を起こしたという話は耳にしていたが、竜という話は聞いていないな。だが魔導通信があったのならばほんとうのこと、だとは思うが……明らかに情報が足りない」

ダンテスさんは腕組みして考え込むようにし、それから僕と視線

が合うと気まずそうに逸らした。

「……ダンテスさん、僕は」

「レイジ、言わなくていい」

即座にそう言ってくれる。ああ、こんな浮き足立つような場面になってもこの人たちはなんて優しいんだろう。ライキラさんだって「鉱山」「竜」と聞いて僕にたずねることだってできたはずだ。だけれどなにも言わなかった。ノンさんは僕の後ろに立ってその両手で僕をそっと抱きしめてくれる。

鉱山からそう離れていない森の中にいた僕。手には奴隷を示す入れ墨。

僕が鉱山から逃げてきたことは――明らかなのに。

「いえ、話します。僕は『竜』らしきものを見ました」

だから、今、危険が迫っているのならここで話さなければいけない。

サブマスターは「竜」だと言った。僕は「巨大な鳥」のように感じたけれど。

僕は夢中で、鉱山上空に出現した「竜」らしきものについて話した。最初こそ気遣わしげな顔をしていたダンテスさんたちだったけれど、話の内容が、のっぴきならないものだとわかると真剣な顔で聞いていてくれた。

「――というわけです。光の雨のようなものが降った後にはまったく姿を見ていません」

しん、と静まり返っていた。

気がつけばダンテスさんだけでなく他の冒険者たちも僕の話に聞

き耳を立てていた。
最初に反応したのはサブマスターだった。
「君。今の話がほんとうだったら、君は鉱山から逃亡してきた奴隷だという……」
「おいおい、こりゃとんでもねえことになったじゃねえか」
サブマスターの言葉を遮って入ってきたのは、
「ヨーゼフ！」
スキンヘッドに筋骨隆々の訓練官、その人だった。ダンテスさんを見るとにやりと口の端をゆがめて片手を挙げる。ダンテスさんも片手を挙げて「昨日はごちそうになったな」「バカ。俺が誘ったんだから当然だろう」と軽口を交わしながら手と手をパシンと合わせた。

23

「――ヨーゼフだ」
「――ヨーゼフって『消えぬ光剣』のか!?」
「――知らないのかよ、ここの訓練官だぞ」
「――ヨーゼフと話してるあのデカイのは何者だ?」

ギルド内がざわついている。それくらいヨーゼフさんの名前は知られているようだ。そのヨーゼフさんは僕に近づくと頭をくしゃっとなでてくれた――「お前の作ったっていう酔い覚ましもらったぜ？　レイコンっていったか。ありゃ効いたわ」――ってウコンモドキ汁飲んだんですか!?

「おいサブマス。この坊主の話を聞く限り、鉱山に出現したのは竜で確定だろう。領都の防衛は陸上モンスターには強いが、飛行モンスターにゃ弱い。ましてや相手は竜だ。住民を避難させるのが先だ。早く冒険者たちに指示を出せ」
「……城壁で防衛ラインを築いて撃退すればいいのではありませんか?」
「バカ言え。竜なんてのは最低サイズでもこのギルドの建物並にデカイんだぞ。弓を撃ち込んだところで弾かれるだけだ。――ここにいるヤツの中で、星４つ以上の天賦持ちはいねえか?」

すると3人ほど手が挙がった。しかし1点に特化した星４つではなく、複数の魔法や術が使えるものだった。ひとりは【四元魔法】で、鉱山で食堂のおばちゃんが使ったヤツだ……おばちゃんは今も逃げているんだろうか。
【四元魔法】は火・土・風・水の４種の魔法を使えるようになる天

賦のことで、それぞれの威力は星2つの【火魔法★★】と変わらないらしい。

「というわけだ。サブマス、冒険者に防衛戦術を期待するな。むしろ俺たちは領民の避難誘導に当たったほうがいい。こういうときに悪知恵を働かせる火事場泥棒が絶対に出るからな。防衛については本職の領兵に頼むべきだろう」

「……領兵は当てになりません」

「なんでだ？」

「六天鉱山奪還に向けてすでに本隊が動いています。今、領都に残っているのは最低限の警備兵しかいませんよ」

「おいおい……そいつぁ」

さすがにこれはヨーゼフさんも予想していなかったらしい。ぽりぽりと後頭部をかきながら天井を見上げる。

「……まいったな。俺たちが気張って戦うしか、ねえみてえだな」

すると冒険者たちから「無理だ」やら「竜なんて見たこともないぞ」やらの声が上がる。

戦力が、もはや冒険者にしか期待できないのであればここにいる人間で命を懸けなければならないということだ。

ランクの低い冒険者の腰が引けるのは当然のことだろう。

「まあ、待て、待て」

とそこへ、いちばん上等そうな赤い金属鎧を着た男が両手でジェスチャーしながら立ち上がった。

「アンタ、かつて純金級（ゴールドランク）だった『消えぬ光剣』ヨーゼフだな？　こ

こで訓練官をやってるとは知らなかった」
「お前は？」
「俺はパーティー『永久の一番星』のリーダーをやっているオスカーだ。ま、巷じゃ俺のことを『赤の彗星』なんて呼ぶヤツもいるがな？　俺たちは全員、先月灰銀級（シルバーランク）に上がった」

オスカー、と名乗った男は白い歯を見せてうさんくさく笑う。髪の色は鎧と同じ赤で、やけに日に焼けていた。そして懐からギルド証をチラッ、チラッ、と見せる。「灰銀級」というだけあってそのプレートは銀色である。【森羅万象】によると「銀製」らしい。
それにしても「永久の一番星」って。小学生並のネーミングセンスじゃない？
そんな彼でも仲間たちとともに全員灰銀級……なんだからすごいよな。パーティーメンバーは6人ほどいて、その中に【四元魔法】の人も含まれていた。ネーミングセンスと実力は関係ないのだ。

「――『赤の彗星』ってなんだ？」
「――知らん。オスカーが名乗ってる」
「――星なんか小さいのに、太陽じゃダメなのか？」

冒険者たちがこそこそツッコんでいるが、オスカーはそれが聞こえているらしく頬がひくひくしている。これは「定着してないのに勝手に二つ名を自分でつけちゃった」感じか。ひたすらに痛い。

「実力ある、現役の冒険者パーティーがいるのならば心強い」

だけれどダンテスさんは純粋に感謝の念を表していた。ダンテスさんを見ると、僕の心はなんて曇り、腐ってしまったんだろうと思っちゃうよね……。ライキラさん、あなたも反省して。「永久の一番星」って聞いた瞬間「ぶふっ」て笑ってたでしょ？

「そういうアンタは？　ヨーゼフと親しいみたいだけど」
「……俺は、身体が満足に動かんからな。頭数に入れないでくれ」
「なにを言ってる！『硬銀の大盾』がいてくれれば鬼に金棒だぞ。昨日の訓練場での動きも見たが、お前はまだまだ第一線で戦える」
ヨーゼフさんがダンテスさんを持ち上げるが、オスカーは二つ名がついているダンテスさんが気にくわないようで露骨に顔をしかめる。
「まあ、いいさ。身体が動かないのは事実なんだろ？　それじゃあ、どこに来るかもわからない竜とどう戦うってんだ。アンタは戦力外だ」
オスカーの質問はもっともだった。領都は広い。冒険者が散ってしまうと戦力が薄くなってしまう。
「それが難点だな……。坊主の言葉を信じるなら、竜は空から攻撃もできるわけだ」
「だろう？　俺が言いたいのはな、命を捨てるなんてのは簡単に言えるが、無駄死にするのはまっぴらゴメンだということだ」
オスカーの言葉に冒険者たちは「そうだそうだ」と同調する。
だけど僕は――ヨーゼフさんの言葉にふと違和感を覚えた。そうだ。僕はなにかを見落としているんじゃ……？
「サブマス。ギルドマスターはなんて言ってる？　どうしてここにいない？」
「それが朝から新公爵閣下からのお呼び出しがありまして……」
「新公爵って、なあ。まだ公爵閣下の亡骸さえ回収できていないん

だろうが」
「順序はともかく、お呼び出しがあればうかがわねばなりません。すでにこの通信内容については新公爵閣下へと連絡してあります」
僕が見た竜は、夜だった。あまりに遠くて姿はシルエットしかわからなかった……。きっと竜もまた僕なんて見えなかっただろう。
今から思い返すと、鉱山で感じていた謎の地響きは竜の仕業だったのかもしれない。
「……そうだ」
竜が放った攻撃は鉱山の周辺に落ちているようだった。少なくとも、僕がその後見かけた街では竜の攻撃の爪痕なんてものはなかったわけだ。森にも落ちてはいない。
それなのに――どうして竜は領都を目指すんだ？
「……ダンテスさん、おかしいですよ」
「どうした、レイジ？」
「竜は領都方面に飛んだ、ってことですけど、その連絡が正しいとしても竜はどうやって領都の方角を――人間にとって攻撃を受けたらもっとも被害が出る場所を、領都だと考えて、領都の場所を把握し、こちらへと向かってくるんですか？」
「……む。どういう意味だ？」
「簡単に言えば、竜は『どうやって』領都の場所を見つけ出したんでしょうか？　少なくとも過去に竜が、この辺りで発見されたなんて記録もないわけでしょう？　鉱山の地下に眠っていた竜が空へ飛びだして、いきなり領都を発見することはできないんじゃないですか？」
「……」

ダンテスさんは考え込む。

鉱山からここ、領都まではかなりの距離がある。魔導通信というのがどういうのかはわからないけれど、仮にそれがメールやモールス信号的なものだとして、鉱山から連絡したのなら――連絡してきた人は「竜が領都に向かった」と信じるなにかがあったんだ。

つまり、竜には知性があると考えたほうがいい。

「レイジ。つまりお前が言いたいのは……竜にはなんらかの感覚器があって、人間が密集している場所を探し出す能力を持っているということだな？」

「はい」

僕はうなずいた。

「おそらく、ですけど、竜はここにいる領民が鉱山にゆかりのある人間たちだからこそ見つけられるんだと思います」

「ゆかり？」

「領都にいる人たちは、鉱山のものを身につけているじゃないですか」

あっ、とダンテスさんだけじゃなく、冒険者たちも声を上げた。

「竜は、鉱山から出土した天賦珠玉を感知する能力があるんじゃないですか？」

23（後書き）

本作を読んで「面白い」「続きが気になる」と思われましたら是非ブックマークをお願いします。
また←の広告のさらに←に★があり、タップすると作品評価になりますので是非ご協力をお願いします！　評価に応じてポイントが入り、ポイントが上がるとランキングに影響があります。
そしてランキングが上がると多くの人の目に留まります。
なるべく多くの方に本作を読んでいただきたいので、是非正当な評価をお願いします！

24（前書き）

ごめんなさい！　今日は1話だけかも（土日のほうが忙しいというパパの鑑）

24

僕が言ったことは仮説に過ぎない。だけれど他に有力な案もないので僕の仮説は採用された――サブマスターは「そんな子どもの言うことなんて」と最後まで渋っていたけれども、「じゃあ他にアイディアがあるのか？　もちろんアンタが責任を取るんだろうな？」とヨーゼフさんに押し切られていた。

六天鉱山から出土した天賦珠玉は領都に運ばれ、領都で仕分けされるらしい。竜が、人間の取り込んだ天賦珠玉まで感知できるのかはわからなかったけれど、大量に天賦珠玉がある場所をとりあえず押さえておくのがいいだろうということで、「天賦管理局」というそのものずばりのお役所へと冒険者が向かう。

そこは石造りの3階建てで、味も素っ気もない建物だったけれど窓には鉄格子が嵌められていたりとなかなか物々しい雰囲気はあった。

入口を領兵が守っており、ヨーゼフさんが「竜が接近している！　ここが狙われる可能性が高い！」と告げるが彼らはヨーゼフさんの言葉を一笑に付した。

「なに寝ぼけてやがる」

「そういや甥っ子が領都の中でも蛇を見たと言っていたな。大方蛇でも竜と見間違えたか？」

「はっはっ、違いない」

まったくこちらの言うことを信用しない領兵たちに冒険者は殺気立つけれど、ヨーゼフさんは懇々と説得しようとしていた。

ギルドマスターやサブマスターがこういうときにいてくれればありがたいのだけれど、マスターは不在だし、サブマスターは「マス

ター不在時にギルドを預かるのは私の仕事です」とかなんとか理由をつけて戦場になるかもしれない場所へ行くのを嫌がった。
見え透いた嘘だよね。

「……ダンテスさん、ミミノさんは大丈夫ですかね？」

ミミノさんとは結局合流できていない。こんな事態になっているとは思っていないだろうし。

「ミミノならどうとでもするだろう。ギルドに行けば、俺たちがここにいることもわかるだろうしな。あいつはちっこいが賢くすばしこい」

賢くすばしこい、という表現は確かにミミノさんにはぴったりのような気がした。

「にしても、ヨーゼフはなかなか説得できんようだな……このままだと他の冒険者が先にしびれを切らすぞ」

すでにヨーゼフさんの背後にいる冒険者たちは、「こんなヤツら守る価値ある？」とか「今のうち逃げるか」とか不穏な話し合いをしている。
ライキラさんもイライラしながら言った。

「つーかよ、悠長なことやってる場合かよ。大体竜ってのはいつ来るんだ？」
「それはわからん。竜に聞け」
「俺は竜なんぞに会いたくねーんだよ」
「俺たちもタイミングが悪かったな。そしてヨーゼフもまた貧乏くじを引いた。アイツ、冒険者を辞めてこの街に根を下ろしてから、

若い嫁さんと結婚したんだとさ。結婚したばかりで散々のろけられたよ」
「死ぬほどどうでもいい情報サンキューな、ダンテスのオッサン」
「それを延々聞かされた俺に同情してくれてもいいぞ」
「アンタめちゃくちゃ酒臭かったもんなぁ」
そんなことをダンテスさんと話している。

（竜がいつ来るか、か……）

僕が鉱山を出て、森を迷いながらこの領都にやってきた。確か掛かった日数は7日くらいか。
森を進むスピードは遅いので、大体1日に進んだ距離は30キロメートルもないだろう。で、一直線に領都に向かったわけではないだろうから、鉱山と領都は200キロメートルを切るくらいか。
それで、魔導通信が届いたのは……えーっと、1時間くらい前かな？
鳥の時速ってどれくらいだっけ？
竜って飛ぶの速いのかな？
速かったとしたら……時速70キロとしても、3時間で到着する計算！？
竜が飛んでから即座に魔導通信をしたのか？　通信の魔道具って持ち歩けるの？　もしそこでもたもたしていたら残りの時間は1時間とか、もっと少ない……！？

「……ラ、ライキラさん、ダンテスさん」
「あ？」
「どうした、レイジ」
「もしかしたら、もう、竜はすぐそこまで来ているかも……しれません」

「んだと!?」
「なんだって!?」
「誰か屋根の上に僕を上げられませんか!?　高いところで確認したいです!」

ダンテスさんはきょろきょろと周囲を見やり、

「ヨーゼフ!」
「……ちょっと待て、ダンテス。今彼らを説得しているところだ」
「いいからこっちへ来い!　緊急事態だ!」
「!」

ヨーゼフさんがのしのしとこちらへやってくる。

「ヨーゼフ、レイジの右側を持て、俺が左側だ」

ん?

「あれをやるのか?」
「そうだ。ゴブリンの大群を倒したときのあれだ」
「あのときは爆薬をくくりつけたゴブリンの死体を大群の中へ放り込んだが、今回はレイジを投げるってことか」

いやちょっと待って!?　今なんか不穏な言葉を聞いたけど!?
がしっ、と僕の肩と腰ヒモを左右からつかまれる。

「レイジ、上を見ろ。3階にだけ外に出る通路がある。そこに鉄ハシゴがあるだろ?　あそこを上れ」
「いや、ちょっ」
「3、2、1――」

僕は、飛(fly)んだ。

「う、わあああああっ！？」

すごい、人って飛べるんだ。ていうか棒高跳びとかやってる人ってこんなのを毎日体験するんだ。僕にはできない。というか二度としたくない。

抗うことのできない力によって放り上げられた僕は浮遊感を覚え、あっという間に目の前には3階に張りだした通路があった。

「ひっ」

鉄の手すりにしがみつくと、手入れされていないからだろう、赤さびがぼろぼろと落ちる。やばいやばいやばい、折れる折れる折れる！

僕は必死で這い上がり、通路の内側へと入り込んだ。ありがとう、【腕力強化】……君がなければ僕はそのまま落ちて、もう一度放り投げられるところだった。

「――貴様ら、なにを勝手なことを！」

「――状況確認が先だ！」

下では領兵とヨーゼフさんが言い争っている。領兵のひとりが建物内に急いで入った――ということは僕が狙いですね、わかります！

ああ、もうこんなときに大笑いしているライキラさんと、ぐっ、と親指を立てるノンさんが恨めしい！

僕はすぐに鉄ばしごにしがみついて屋上へと上った。

屋上は傾斜のついた屋根になっていて、こちらもあまり手入れされていないのか、粘土瓦の表面にはほこりが積もっていた。
僕は足を滑らせないようにしながら屋根に立ち、周囲を見回す。3階建て以上の建物は周囲にほとんどなくてかなり広範囲を見回すことができる。領都を囲う城壁の向こうには森林が広がり、さらに向こうには山の稜線も確認できた。
あの大きい建物は公爵の城か？　うわ、確かに飛行船っぽいヤツが城に停泊してる――ってそんなの見てる場合じゃなかった！
ええと、鉱山、鉱山、鉱山ってどっちだっけ……！？

「こら、小僧！　降りてこい！」

もう来たの！？　領兵が3階の通路に出てきた。

「ちょっと待って！　すぐ降りますから！　確認するだけ――」
「いったいなにを確認するんだ！　いいか、お前のやってることは立派な犯罪なんだぞ！」
「――いた」
「今すぐ降りれば注意だけで済ませてやる。放り込んだのは悪い大人だということにしてもいい。それに……なんだって？」
「いました」

僕は、唖然とした。

「竜が、いました」

その竜は一直線に、こちらへ向かっている――のは間違いない。
黄色い身体に巨大な羽。
僕は、自分の記憶にある夜空のシルエットと、今飛んでいるシルエットが一致するのを感じた。

だけれど――あんなに、大きかっただろうか？

「来ました！！　黄色の竜！　一直線にこちらへと向かっています！！！」

25（前書き）

行けそうなので更新します。

25

僕が屋根から身を乗り出して叫ぶと、ハッとした顔で全員が見上げてきた。

「レイジ！！！　到着予想時間は！！！」

「あと数分もないです！！！！！」

「！？」

速い。速すぎる。あの速度は時速で１００キロを優に超えているだろう。見ていたくない。だけれど見るのが僕の仕事だ。

「冒険者どもォォォ！！！　住民を避難させろ！！！」

ヨーゼフさんの声で冒険者たちは我に返り、「おうっ」と返事して動き出した。

「領兵！　建物内の職員を避難させろ！」

「し、しかし……建物にいた方が安全なんじゃないか？」

「レイジ！　竜の大きさは！？」

「この建物よりはるかに大きいです！」

「クソッタレ！！　――聞いたか！　ここにいても踏み潰されるだけだ！」

「なっ！？」

「武器を持たねぇやつにできることは逃げることだけだ！！　急げ！」

「だ、だが領都は広い……」

「ここがいちばんあぶねえんだよ！！　いいからさっさとしろ！！」

「くっ……わかった！！」

おお、ヨーゼフさんが強引に押し切った！

こうなると領兵の動きも早かった。建物内に飛び込むと職員の人たちに声をかけ始めている。

「え……？　お、俺はどうしたら……」

3階の外側通路にいる領兵と目が合った。

「えぇっと……とりあえず中の方と合流したほうがいいのでは……？」

「そ、そうしよう。お前も早く降りてくるように」

僕は屋根の上へと戻った。

うわ、どんどん近づいてきてる。

すでに竜は領都の外壁を飛び越えようというところだった。

だけれどそこで身体を傾け、ぐるりと旋回を始める――外壁で警戒に当たっていた領兵は大騒ぎを始めていた。

（っていうか、これって……）

僕はある、最悪の予想を思いついてしまう。

竜が領都の外側から、あの夜に見たような遠距離攻撃を領都に向けて放ったらどうなるだろう？　むしろそうなるのが妥当なんじゃ？　だって、竜に知性があるのなら、とりあえず遠くから様子見でぶっ放すよね……？

「な、なにか気を惹かなきゃ！　なにか、なにか、えーっとえっとえっと……」

竜は天賦珠玉を感知できるという前提。
竜はどんな天賦珠玉に興味を示す？

「あ……」

もしかして、星の数が多い天賦珠玉なら竜にも感じ取れるんじゃ？
そうこうしているうちに竜の周囲の空気が歪みだしたように見えた。魔法でも使うのか？

「ええい、迷ってるヒマはない！」

僕は自分の胸に手を当て、【森羅万象】の天賦珠玉を強くイメージした。ずるり、と身体の中心部から力をごっそり抜かれるような感覚――違う、これは、ほんとに、僕の身体から力が抜けてるんだ……！

真っ黒な天賦珠玉が僕の胸からせり出してくる。僕は【森羅万象】の力を失う――と同時に、今まで学習してきたスキルがすべて消え去っていく。

（ちくしょー……僕はスキルを利用してるつもりが、スキルなしじゃ生きられないようになってたんじゃ……？）

屋根の上で膝をついた僕の手には、真っ黒な、そしてその中心には虹色の光があって渦を巻くように回転している天賦珠玉があった。

《オオオオオオオオオ……》

竜の咆吼が聞こえてきた。
ああ、どうやら僕の推測はドンピシャだったみたいだ。竜はこっ

ちへと顔を向けている。いや、僕を……いや、【森羅万象】の天賦珠玉をじっと見つめている。

バサッ、という羽ばたきで、竜はまっすぐに飛び始めた。今までためらっていた外壁への侵入を難なくやってのけ、羽ばたくたびにどんどん加速してこちらへ飛来する。

「やっべ、逃げなきゃ！」

僕は【森羅万象】を身体に取り込んだ。と同時に身体を包んでいた倦怠感が霧が晴れるように消え、全能感が満ちてくる。ああ、クセになるこの感じ！　でも絶対クセにしたらダメだこれ。スキルを使っても、スキルに振り回されたら絶対ダメだ。

ありがたいことに【森羅万象】を自分の身体に戻したら、学習していた天賦はすべて戻った。

僕は【疾走術】を使って屋根を走り、一気に飛んだ。隣の建物は2階建てなのでそこの屋根に両手両足をついて着地する。すぐそこにダンテスさんたちが見える。

「来ます！！」

ダンテスさんは「なにが」も「どうやって」も聞かなかった。

「わかった！！」

ああ、僕は信頼されている。たった数日の付き合いでしかないのに、この人はもう……いい人過ぎるでしょ。

ただ、僕が感動している時間的余裕なんてなかった。

《オオオオオオ！！！！！！！！》

間近で聞こえた雷鳴のごとき咆吼が迫り、とてつもない質量の生き物が「天賦珠玉局」の殺風景な建物に激突する。建物は石造りであるというのに、まるでブロックを崩すかのように石壁の破片が吹っ飛んでいく。

「うわあああ！？」

2階の屋根にいた僕は、その衝撃波と暴風によって吹き飛ばされ屋根から落ちた。やばっ――痛みを確信したのだけれど、僕の身体は地面に激突はせずに誰かに受け止められた。

「よくやった、クソガキ」

すさまじいスピードで走っていたライキラさんは、僕を抱き止めたあとに急ブレーキ。

そして僕を下ろしながら――その目は一直線に、がれきと化した建物の上に君臨するバケモノに向けられていて――こう言った。

「あとは俺たちの出番だ。あの竜をブチ殺す」

竜の存在は圧倒的だった。建物を踏み潰し、ひとつだけでは飽き足らないとばかりに隣2つの建物も破壊し、そこに君臨していた。

魔力がたゆたう黄色い鱗の表面にはこのハードランディングによる傷はなにひとつついていない。

周囲は叫び声に包まれていた。大声を上げて逃げ出す人がほとんどで、腰が抜けた人やその場で泣き出す人もいる。

冒険者のうち、半数は完全に戦意喪失していた。ぽかんと、青ざめた顔で竜を眺めているだけだ。

だけれどそんな彼らの先頭にいる2人は違った。

「戦えねえヤツは領民の避難を助けろ！」

「領兵は今すぐ応援を呼べ！」

両手で持つにしても大きすぎる両手斧（バトルアックス）を構えたヨーゼフさんと、その横に立つ鉄板のごとき大剣を持つダンテスさんだ。

「……っとによ、本気でお前は大盾でなく大剣なんだな？」

「石化で動きが鈍いと言っただろう。武器と盾と両方は持てないからな」

「しょうがねえか」

「ああ、まったく、しようがない」

ふたりは竜から一瞬たりとも視線を外していない。地上に降り立った竜は、目の前のふたりが敵だと認識したのかじっと見据えている。

「行くぞ、大盾の！」

「オオッ！」

ヨーゼフさんが右に走り、ダンテスさんは左だ。身体の動きが鈍いとはいっても、ダンテスさんは僕がスキルありで本気で走るよりもずっと速く動けるから恐ろしい。

《――ッ――》

「！！」

「！！」

竜の口にカッと光が点る。その瞬間、ヨーゼフさんは前へと跳んだ。直後に黄色の炎が竜の口から吐き出され、ヨーゼフさんがついさっきまで今いた場所を焼いていく。その炎は薙ぎ払うように、反対側にいたダンテスさんへと向けられる。

「お父さん！」

ノンさんの悲痛な叫び声が聞こえるが、ダンテスさんは地面に大剣を突き立てるとそれをつっかえ棒にしてひらりと炎の薙ぎ払いをかわす。

すごい……。あれでダンテスさん、軽業系の天賦を持っていないっていうんだからね。持ち前の運動神経だけで乗り切るんだもんな。

「チッ、そう簡単には近寄らせてくんねえな！」

ヨーゼフさんが悪態を吐きながら竜から距離を取る。その竜は、ヨーゼフさんにもダンテスさんにも興味がないように、足元を見た。そこにあるのは崩壊した天賦管理局の建物だ。ん……？　がれきの中になんだか光るものがあるけど、あれは……天賦珠玉？

「……まさか」

竜は口を開くと、フゥッと息を吐き出した。それは火炎の息吹ではなくてキラキラとした金色の吐息だった。それは天賦珠玉に染みこんでいくと、パンッ、と破裂するように珠玉が割れていく。

「げっ！　ありゃ星４つの赤じゃねえか！？　もったいねえ！」

「あっちは青がいくつか割れたぞ！」

冒険者たちが悲鳴にも似た叫び声を上げる。「赤」だの「青」だ

のいうのは天賦珠玉の特性に応じた色だ。「身体特性」は「赤」だし「魔法特性」は「青」、「ユニーク特性」は虹色である。

僕は天賦珠玉が割れるとき、ほわんとした魔力に似たエネルギーが宙に消えるのを見た――それは僕が【視覚強化】を持っているせいでよく見えたのかもしれない。

天賦珠玉を割った竜は、それからぐるりと周囲を見回す。なにかを探すように。なにを探している？　……って、はい、竜がこちらを見て顔を止めました。

そうだよね。僕ですよね!?　さっき屋根の上で煽ったの僕ですもんね!?　レアな天賦珠玉を破壊するつもりなら、僕を狙いますよね!?　持ってないけど！　もう身体に入ってますけどぉお！

25（後書き）

もしよろしければブックマーク、←の★評価、よろしくお願いします！（海鮮スープラーメンよりもあっさりとしたお願い）

26

「こっちだ、レイジ！」

ライキラさんが僕の腕をつかんで引っ張る。すさまじい勢いでふたりで横に転げていくと、直後には僕らがいた場所を一直線に炎が駈け抜けていく。日が出ている午前中だというのにさらに明るくなった直後、目が、明るさの変化について行けずに暗くなったように感じられる。

炎が焼いた石畳の地面は赤々としており、一部がどろりと溶けていた。

（これ、人間が食らったら一瞬で炭化してしまうのでは……）

僕はあわてて立ち上がろうとして――膝から崩れ落ちた。

「あ、あれ……？」

力が……入らない？

関節が壊れたかのように動かない。

（なんで、どうして!?　これってもしかして……怖い、から……？）

僕はようやく思い知った。

今までの僕は、この出来事をどこか他人事のように考えていたのかもしれない。竜は災厄の象徴だけれど、僕には関係なく、強い誰かが戦って倒すのだろうと。それは僕の近くで行われるかもしれな

いけれど、僕が関与することはない。僕は転生者だし、手伝いはするけれど、この世界のことはこちらの住人ががんばればいい――。

屋根の上で竜を煽ったときにも心のどこかにそんな思いがあったんだ。だからあんなに大胆な行動もできた。

でも、竜は、完全に僕を殺す気で炎を吐いた。

このとき初めて僕は、竜が現実のもので、その殺意が僕に向いたことを知ったんだ。

「走れ！　また来るぞ、レイジ！」

「……」

「あとはオッサンや俺たちに任せて逃げとけ！　……おい、聞いてんのか！？」

僕は足が震えて立ち上がれなかった。

竜がもう一度口を開く――ところへ、

「おらぁぁっ！」

ヨーゼフさんが近づいて両手斧を振り下ろしていた。その一撃は竜の鱗にめりこむと、青白い火花を上げた。

「――クッソかてえ！　本気の一撃ぶち込んだのに、かすり傷か！」

「鱗の魔力を散らすんだ、ヨーゼフ！」

「どうやって！」

「魔法をありったけ撃ち込め！」

ヨーゼフさんとダンテスさんのやりとりを聞いた、魔法を使える冒険者たちが一斉に魔法を放つ。

赤、青、黄色といった様々な魔法が竜へと直撃する。それらが傷を与えることはなかったけれど、鱗にまとわりついていた魔力は消

えて黄色の鱗があらわになる。
武器を手にした冒険者たちが殺到し、魔力の消えた場所へと斬り掛かる。すると鱗は、持ち前の硬度によっていくつもの攻撃を弾き返したけれど、いくつかは鱗を割って竜の体表から赤い血が垂れた。

「立って、レイジくん」
「あ……」

僕は両脇を抱えられて立ち上がらされていた。僕の後頭部に当たるやわらかな膨らみは、ふだんならばドキドキしたのだろうけれど、今はそんなことを考えている余裕もなくて。
振り返ると、ノンさんが真剣な表情で口を開く。

「ライキラさん、レイジくんは私が」
「頼んだ」

向こうでは竜が煩わしそうに身体を揺すると、尻尾を巻くように振り回し、冒険者たちをはね飛ばす。ヨーゼフさんはひらりとジャンプし、ダンテスさんは大剣を盾のようにナナメに立てて、尻尾の一撃を逸らして耐えた。
……あのふたりは次元が違う。
灰銀級になったという「永久の一番星」のメンバーも攻撃に加わっていた。他の冒険者たちよりは頭ひとつ抜きんでて強かったけれど、ヨーゼフさんたちにはかなわない。

「レイジくん、避難しましょう」

ライキラさんがジャンプする――その跳躍力は信じられないほどで、2メートルくらい跳んだと思うと竜の後ろ足を踏み台にしてまたジャンプ。

「オラァッ！」

炎を吐こうとしていた竜の顔を横から蹴り飛ばし、炎は不発となった。

だけれど、自動車ほどに大きな顔だ。ぎろりとにらみ、ライキラさんをターゲットとする――。

「レイジくん！」

肩を揺すぶられる。ノンさんが、いつもおっとりとしているノンさんが緊張をみなぎらせている。

「私たちは逃げましょう。ここにいても邪魔なだけですから」

「……はい」

そうだ。僕はここにいてもただの足手まとい。むしろ僕をかばってダンテスさんがケガをするなんてこともあるかもしれない。

戦闘現場に背を向けて、僕はノンさんとともに走り出した。

ノンさんは聖職者として働いていた人だけれど、この世界の聖職者は体力があってナンボみたいなところもあるので【森羅万象】でズルしている僕と同じかそれ以上には走れる。

周囲を見回すと、建物の窓は昼だというのに閉じられているのは中に避難しているからだろうか？　中に逃げ込むよりも遠くに離れたほうがいいと思うのだけれど、それを促す余裕も僕にはない。

非常時を報せるものなのだろう、ピリリリリリリという笛の音があちこちで聞こえる。通りを走って逃げている人たちを領兵が誘導している。

――なにが起こったんだ。

――家よりデカイバケモノだ。
――どこに逃げりゃいいんだよ。
――知るか。なるべく離れろって。

青い顔で走っている人たちも多く、僕らはそこに紛れることになる。

「……レイジくん、よく聞いてください」

そこで足を止めたノンさんは、膝を折って僕と同じ目線になると僕の両肩をつかんだ。

「ここをまっすぐ行って、2つ目の交差点で右に行くと冒険者ギルドがあります。曲がったらずっと真っ直ぐ。いっしょに来たから、わかるでしょう？」
「……ノンさんは？」

それを言うということはノンさんとはここで別れるということに他ならない。

「私は戻ります。多くの人が傷ついているでしょうから、私のやれることをやります」
「でもっ」
「レイジくんはよくがんばってくれましたね。ここからは、大人の仕事です」

ノンさんはにっこりと笑ってみせた。

（なにが――大人だ）

ノンさんは僕が転生する前と同じ１６歳だ。冒険者ギルドが１０歳から登録できるように、この世界では１０歳から働くのはわりとよくあることで、１２歳ともなればふつうに働いて毎月給金をもらう。

１６歳ともなれば立派な大人だ。お酒を飲んでも誰も文句を言わない。

（ノンさんが大人なら、僕だって大人だ）

そう言ったところで今信じてはくれないだろうし、ノンさんと違って僕が戦闘現場に戻ったところでなにができるのかということもある。

でも。

それでもさ。

ノンさん、僕の肩をつかむあなたの手が震えてるじゃないか。

「僕も行きます」

言うと、ノンさんはハッと息を呑んだ。

でも、彼女は、

「ダメです」

僕を引き寄せてぎゅっと抱きしめた。今までいちばん苦しいほどの抱擁だ。

「ひとつだけ言わせてください。私は、レイジくんが来てくれてよかったと思っていました……でもそれはレイジくんが考えているような理由ではないのです」

「……理由？」

「お父さん、ほんとうは石化の治療をあきらめていたんです。光天騎士王国のトップレベルの回復魔法使いでも治せるかどうかは難しいと、診断されていましたから」

「……」

それは、そんな気がしていた。

ダンテスさんはどこか死ぬことを当然のものとして受け入れているように感じたことがあったからだ。今回の竜騒ぎでも、なんのためらいもなく立ち向かっていった。ヨーゼフさんみたいにこの街に守りたいものがあるとかそういうのじゃないのに。戦う理由なんてないのに。

「お父さんは、レイジくんが来てからというもの生き生きしていました。『あいつは物覚えがいい。教え甲斐がある』なんて言っていたんですよ？　私は同じようにうれしかったんです。レイジくんがいることで、お父さんが『生きる理由』を見つけてくれた気がして」

僕から身体を離したノンさんは、目尻に涙を浮かべていた。ああ――そうか。ノンさんもまた「覚悟」をしたのだ。戦闘現場に戻り治療を行うということ。それはいつ何時自分もまた死ぬかわからない場所に戻るということ……。

「ごめんなさい、レイジくん。私はあなたを利用していたんです」

「……これからももっと利用してください」

ノンさんは立ち上がった。

「2つ目の交差点で右です。いいですね？」

僕の言葉には、返事をくれなかった。

彼女は走り出した。ノンさんは向かったのだ、ダンテスさんが生き延びる可能性をほんの少しでも高めるために。

「冒険者ギルドで待っていますから！　ずっと、ずっとみんなを待ってますからね！！」

僕は自分で自分を殴ってやりたかった。それしか言えない自分に。

27（前書き）

ごめんなさい、ちょっと短いです（なかなか切りのいいところがない……！）

27

戻ったってやれることなんてない。
戻ったって足手まといになるだけ。
……それは全部、戦わないための言い訳だ。
今の僕なら、魔力枯渇という危険はあるけれど、1、2発は魔法を撃てる。陰から狙撃するようなことだってできるだろう。それで、わずかでも竜の注意を逸らすことはできるはずだ。
でも、足が、どうしてもそちらへ向かないのだ。

（転生者だって、星10のスキルを手に入れたって、他人の天賦を学習できたって……）

僕はとぼとぼと歩き出した。必死で走って逃げる人々の中で、僕だけ歩いていた。

（……勇気がなければ、なにもできない）

僕が思い返したのは鉱山でのことだ。
剣を抜いた公爵と、殺されようとしている僕の間に割って入った——僕の姉。
ラルクならどうするだろう。
——あーあ、やってらんねーよ、なんて言って逃げるだろうか？
——ふざけやがって、少しくらいやり返さなきゃ気が済まねーな、なんて言って悪知恵を働かせるだろうか？

「会いたい……会いたいよ、ラルク……」

頬がすーすーと冷たかった。僕はいつしか泣いていた。なんて情けない。なんて愚かなんだろう。そう思っても僕の足は戦闘現場から離れていくのだからいよいよもってどうしようもない。

２つ目の交差点は大きな交差点だった。ここを右に曲がれば冒険者ギルドだ。

最後の、分岐点だ。

ここを曲がれば僕はきっともう二度と後ろを振り返らない。

「早く逃げろ、立ち止まったっていいことなんて一個もねーよ――弟くん」

声を聞いた。

ハッ、として立ち止まった僕は周囲を見回した。

だけれどそこにいたのは逃げ出そうとしてごった返す人々だけだった。荷物を抱えて走る人、ぶつかってケンカになる人、仲裁のために走る領兵――。

いるわけがない。

今聞こえたのはただの幻聴だ。

「……だよね。僕が聞きたい言葉を、自分で聞いただけだ」

冒険者パーティー「銀の天秤」がどうして命を懸けてまで戦うのか、僕にはわからなかった。最初から長く生きるつもりはなかった？「拾われた」恩を返すため？　父を少しでも生きながらえさせるため？

あるいは――冒険者としての務めだから？

「義務」や「使命」と言えば聞こえはいいし、甘美な余韻に浸ることもできるだろう。

でもなんだか、ほんとうのところは……理由なんてないのかもしれないと今になれば思えた。

そこに敵がいるから、脅威があるから、倒せば得られる名誉があるから、冒険者は勝手に身体が動くのではないだろうか。
明らかに勝ち目がなさそうな戦いであっても、あんな、見映えにばかりこだわってそうな「永久の一番星」ですら逃げ出さずに戦っているのは、難しいことなんて考えていないからじゃないだろうか？

「だらだら歩いたってダメだ。やるなら走らなきゃ」

僕は服の袖で目元をこすった。
前が見えなくて邪魔な涙を消すために。
最高にダサイ僕を拭い去るために。

「考えるのは止めた」

そして僕は、振り返った。

「今、行きます。僕も『銀の天秤』のメンバーだから」

息を吸って身体をかがめ、一気に走り出す。【疾走術】のスキルが自然と発動し、僕の身体は前へ前へと押し出される。
人混みを縫うように避けていくとだんだん人の密度はなくなって、がらんとした通りに出た。
僕は、今できる全速力で駈けた。

少しの時間離れただけで、こうも状況が変わっているとは……。
建物の崩壊エリアは拡大し、ところどころで火事が起きている。
近場でやっていた屋台が燃え、隣の花屋さんにまで火が移っている。

「重傷者は戦線離脱です！　軽傷だけすぐに治します！　こちらへ！」
「回復魔法使いか？　助かる。足をやられた……」
「こっちは右手だ。剣が握れねぇ」
「チクショウ、なんなんだよこいつはよお……」

物陰で野戦病院のように治療を行っているのがノンさんだった。
周囲には数人の冒険者がいて、治療を待っている。

「ライキラ！　近づき過ぎだ！」
「じゃなきゃ当たんねーだろーがよ！」
「お前がケガをしたら一気に崩れるんだ、自重しろ！」
「チッ……！」

最前線では、ライキラさんが右に左に跳んで竜を翻弄し、隙ができると一気に冒険者たちが突っ込んで攻撃をしている。
竜の身体のあちこちには傷がついていて、血が流れていた。

（そうか、バカ正直に正面から攻撃を受け止める必要はないのか）

ライキラさんは回避型のタンクといったところだろうか。

「あいつ、すげえ」
「何者だよ」
「『硬銀の大盾』のパーティーメンバーだとか」
「獣人半端ねえな」

こうなるとヒト種族も獣人も関係ないらしく、正直な称賛が冒険者の間から送られている。

だけれど、ライキラさんだって余裕綽々で攻撃をかわしているわけではなかった。
【森羅万象】がなくとも【視覚強化】で十分わかる、ライキラさんが全身に汗をかいて息が上がってきているのが。

「くっ」

着地で失敗したライキラさんはその場に転げた。そこを見逃す竜ではなく、真上からビタンと尻尾が振り下ろされる――のをぎりぎりで回避する。
だけれどすでに竜の口は、炎を吐く準備が整っていた。

「やばっ――」

炎が放たれる――直前。

ぽんっ。

と竜の鼻先に花が咲いた。
僕が花屋さんから拝借してきた枝を投げ、【花魔法】で咲かせたのだった。
竜はわずかな時間、ぽかんとした。
それは、純金級冒険者、灰銀級冒険者たちにとっては十分過ぎる隙だった。

「おらあああああああッ！」
「おおおおおおおッ！」

ヨーゼフさんの振り下ろした両手斧が傷ついていた竜の尻尾を途中から断ち切り、ダンテスさんの大剣が傷口から竜の体内にめり込

んだ。

《ヴォオオオオオオオオオ！！！！》

咆吼が、音圧となって近くにいた冒険者を吹き飛ばし、がれきすらも転がっていく。僕はとっさに建物の陰に隠れたけれど、隠れた先にはライキラさんがいた。

「てめっ、レイジ！　なんで戻ってきた！」

「あだっ」

ゲンコツを頭に食らった――次の瞬間、ライキラさんの太い腕が僕の頭を抱え込んだ。

「助かった、サンキューな」

「……はい」

汗をかいて体毛がびちょびちょの腕だったけれど、ライキラさんは確かに生きている。僕がなにもしなくとも逃げられたかもしれなかったけどね。それでも感謝されるのはうれしい。

28

ふー……魔力をゴッソリ持っていかれたけど、なんとかなったな。

「今のはレイジか！？」

「は、はいっ」

「よくやった！」

離れた場所でヨーゼフさんとともに竜に相対しているダンテスさんは短く褒めてくれた。

落ち着いて見ると、ヨーゼフさんもダンテスさんもぼろぼろだ。身体中に傷がついていて、装備もあちこちが焦げたり破壊されたりしている。

「問題はこっからだぜ……」

「はい」

冒険者たちも最初にいた半分未満になり、残っているメンバーも傷つき、疲労困憊だ。

だからこそ初めて与えた大打撃で一気に倒したい――と思うところだけれど、

「手負いの獣こそ恐ろしいんだ」

「銀の天秤」で狩りをしていたときに、ライキラさんは何度も言っていたしダンテスさんもそれにはうなずいていた。

竜だって今まで冒険者を舐めた戦い方をしていたわけじゃない。

ただケガすることを恐れず、なりふり構わず攻撃されていたらとっ

くに冒険者は全滅していただろう。
その危険が、あるのだ。

「どうする……ん？」

ライキラさんがふと、通りの向こうへと視線をやった。同時に、わっ、と冒険者たちが歓声を上げる。
３０を超える騎馬を先頭に、１００人以上の領兵が小走りにやってきたのだ。援軍だ。

「ったく、ようやくかよ……連中、偉そうにしているわりに仕事がおせーんだよ」

毒舌ながらもライキラさんは喜びを隠しきれないようだった。
領兵と共同戦線を張ってもいいし、冒険者は後方へ下がってもいい。
いずれにせよ僕らの全滅の危機は回避されたのだ。

「よかった……」

僕もまた、心の底からホッとしてそうつぶやいた――安心していられたのは騎馬の先頭にいる人物を目にするまでだ。

「……竜相手にこれほど苦戦するのか。ここには雑魚しかおらんな」

さらりとした金髪をなびかせた男は、ヒト種族にしては肌がだいぶ白く、そして耳がややとんがっていた。
他の領兵とは明らかに違う装備品で、極上の布を使ったマントを羽織り、まるで貴族のようなきらびやかな服を着ていた。必要ないと言わんばかりに鎧なんて身につけていなかった。

「よろしくお願いいたします」
「ふん」

あごひげを蓄えた渋い顔をした男の人が頭を下げると、金髪の彼は馬から下りててくてくと歩いてくる。
その存在感に、誰しもが目を奪われていた――竜でさえも。

「――あれギルドマスターじゃねえか」
「――ってことはあの金髪イケメンは冒険者か？」

そんな冒険者たちの声が聞こえてきた。

「竜だな。間違いない。だが……なんだ、お前は？　しゃべらんのか」

《……お前は、エルフ……？　なぜエルフがここにいる》

突如頭の中に響いてきた言葉に、全員がぎょっとした。
竜が、しゃべる……？
意思の疎通ができる相手なのか？

《……エルフが手出しをするな。古き盟約に従い、我は人間に罰を与えるだけ……》

盟約？　盟約ってなんだ？

《……む？》

その瞬間、竜の動きが止まった。

《……なるほど、高レベルの【火魔法】に【魔力量増大】。だがお前のスキルは2つ、閉じられている……お前は混血児（まざりもの）だな？》

その瞬間、エルフ――ハーフエルフの鼻の頭にシワが寄った。

「今なんと言った？」

《……図星か。交わってはならぬ人と交わった結果生まれた、悲しき混血児（あいのこ）よ。咎人（とがびと）としてスキルホルダーを2つつぶされ、エルフの里を追放されたか。だがエルフにも情けがあったと見える。それほど希少な天賦珠玉をお前に与えるとはな……》

「しゃべらんのかと思えば、ずいぶんとしゃべる竜のようだ。だがお前は2つ勘違いをしている」

《……勘違いだと？》

「1つ、私は追放などされていない。自らの意志で、あの、停滞したゴミ溜めのようなエルフの里を抜け出したのだ。もう1つ」

ハーフエルフは右手を開いて竜へと突きつけた。

「私はお前のような、世界に縛られた下等生物が対等に話せる相手ではない。死ね」

その右手に集まったのは強い光。ぐるぐると高速で渦巻く炎は、次の瞬間すさまじい速度で竜へ向かって飛んで行く。

竜は顔をひねってかわしたが、胴体の一部に着弾したそれは大爆発を起こした。

「う、わあああああ！？」

起きた爆風で冒険者たちがはね飛ばされる。建物の陰にいた僕は幸い無事で、その後の動きをすぐに見ることができた。

カッ、と竜が炎を吐いたけれど、ハーフエルフはすさまじい速度でナナメに飛んだ。

（なにあのスピード！？）

竜が言うには――というか竜って天賦の「鑑定」みたいなことができるのか？　――ハーフエルフには2つの天賦しかないという。だというのにあの速度で飛べるのは……。

空へ跳んだハーフエルフに竜の前足の一撃。それを、慣性の法則を無視した軌道でハーフエルフがかわす。

「ハアアアッ！」

ハーフエルフの手からほとばしった炎は5発の連弾だった。それらは竜の身体に着弾して爆風が彼を襲うが、マントをはためかせ、まるで風を操るように流れていく。

グルル、と唸った竜が半分になった尻尾を振るうが、ハーフエルフはまたも軌道を無視した移動でそれをかわす。

（なんで？　どうやってあれをかわしてる？　彼が使えるのは【火魔法】だけ……そうか、魔法でいいのか！）

僕はようやく察した。【火魔法】の爆発を使って身体を動かしているのだ、それも自分はケガをしないように。

なんという魔力操作だろう。竜の言うことが正しいのだとしたら、

彼は【魔力操作】の天賦を持っていないことになる。

（僕にもできるか……？　できる、かもしれない。ちょっとは火傷くらいするかもしれないけど）

ハーフエルフは特別頑丈なブーツを履いているようだ。そこに【火魔法】を仕掛けて爆発によって移動している。

竜の言うことは正しそうだと僕は思い始めていた。【魔力量増大】の天賦――ミミノさんが以前言っていたけれど、めちゃくちゃレアな天賦らしい。

【森羅万象】はそのレアな天賦すら学習しているようだった。僕は自分の身体にじわりじわりと魔力が満ちていくのを感じていた。

「すっげぇ、あれが天銀級冒険者かよ！」

「次元が違いすぎる」

「『紅蓮の竜殺し』様、さすが！」

近くで戦いを見守っていた冒険者の声が聞こえてきた。

天銀級！　あれが！

納得だよ……たったひとりであの竜を手玉にとってるんだもんな。竜の鱗を魔力がまた覆い始めていたのだけれど、それを吹っ飛ばして直接ダメージを与えられるほどの魔法の威力があるんだから。

「それだけか？　相変わらず竜は鈍重だ。つまらん」

酷薄な笑みを浮かべるハーフエルフは、そう言って両手を天に掲げる――そこに巨大な炎が出現する。

「やっちまえ！　クリスタさん！」

ハーフエルフを知っていたらしい冒険者のひとりが叫んだ。
そうか、あの人はクリスタというのか。天銀級冒険者で、ハーフエルフで、クリスタ……。
……え？

――レイジよ……俺に、リグラ王国を滅ぼすことは無理だとしても、なにか一矢報いなきゃならねーんだ。だったら俺は……あの冷血野郎を許してはおけねえ。

そう言ったのは、誰だったか。

――ハーフエルフの天銀級冒険者、クリスタ＝ラ＝クリスタ。あいつだけは必ず俺が殺す。

僕は背後を振り返った。
そこにいたはずのライキラさんは、いつの間にかいなくなっていた――。

29（前書き）

残酷な表現があります。

29

「これで終わり」

いつの間にかクリスタの掲げていた火球は、自動車3台分ほどにまでなっていた。

竜は息も絶え絶えという感じで、ぐったりとしている。

「全員逃げろ！　巻き添えを食うぞ！」

ダンテスさんの声に僕はハッとする。これを叩きつけたら、確かに竜を倒せるかもしれないけれど僕らにだって被害が出る。

クリスタは冒険者や領兵の避難なんてまるで気にせず、竜に向かってその火球を放り投げる――瞬間、

「竜が！」

目を開いた。

カッ、と口から放射された炎はこれまでの何倍もの威力で――なんと竜自身の身体を前方へと突っ込ませたのだ。

「なに！」

それはクリスタがやっていたことと同じ、爆発による加速だ。だけれどなんのコントロールもなされていない爆発ならば当然、竜だって無事では済まない。

だというのに竜はその賭けに出た。

手負いの獣は恐ろしい――僕らが注意に注意を重ねてきたこと。

竜の身体は、クリスタが放ったばかりの大火球に激突する。当然起きる大爆発は竜もろともクリスタを包み込む――。

カッ、ととてつもない光がほとばしった。

衝撃波が走り、爆炎が領都を燃やす。

大爆発の直前に、僕は建物からさらに距離を稼いで離れていた。だというのに爆炎と爆風は建物と建物の間を伝い、僕の身体をすくい上げる。

「うわっ、たっ！？」

引火はしなかったものの爆風によって吹き飛ばされた僕は、５メートルくらい飛んでから石畳に激突。ゴロゴロゴロッと転がった。

痛い……手足がバラバラになったんじゃないかっていうくらいの痛みと、ジンジンするような麻痺を全身で感じる。僕はほんのわずかに回復魔法を発動させ――できる限り魔力を残しておきたかったからだ、重傷者を治療したほうがいいから――のろのろと立ち上がった。

耳が、キーンとして音を拾わない。鼓膜が破れたわけではないだろうけれど一時的に耳が利かなくなっていた。

石畳にはがれきが飛散していて煙と砂埃のせいで見通しは悪かった。僕がさっきまで隠れていた建物は半壊していた。

その建物をぐるり回って、戦闘のあった場所へ戻ってきた僕は――言葉を失った。

直径３０メートルほどに渡ってクレーター状にえぐられ、地面が露出していた。

崩れた建物でわずかに残った壁面に、血反吐のようにへばりついているのは冒険者か、あるいは領兵の死体だろうか――見ても吐くだけだろうから僕はそちらを努めて見ないようにした。

離れた場所にはがれきが山のように積み上がっており、喉を反らせて竜が倒れている。鱗のほとんどは剥がれ落ち、その身体は血ま

みれだった。

「くっ、この、下等生物が……！」

僕はどきりとした。

耳がようやく音を拾い始めたと思うと、そんな言葉を耳にしたからだ。

声が聞こえてきたのは上空からだ。見上げると、ボロボロのマントをはためかせ、服も半分焼け落ち血だらけの肌を露出させたクリスタが落ちてくるのだ。

ボッ、と小さい【火魔法】を起動して着地の衝撃を和らげると、彼は地面に降り立った。瞬間、がくりと地面に膝をついた。髪も焦げ、顔も煤だらけ。もとの怜悧な美貌はどこにもなかった。

「はぁ、はぁ、はぁっ……最後の最後で自爆とは、ますますもって理解しがたい……！　竜など滅びてしまえばいいのだ！」

悪態を吐きながらクリスタはよろりと立ち上がると、倒れて動かない竜の前へ進む。

「まったく手こずらせて……私は『紅蓮の竜殺し』だぞ！　このっ、この！」

振り上げた足で、竜の巨大な腹を蹴る。ただ壁を蹴っているだけにしか見えないけれど、クリスタにとっては相手が無反応であってもいいんだろう、ただの腹いせなのだから。

「ふー……領兵はどこだ？　まったく、この程度の戦闘でいなくなるとは、情けないことこの上ない。私は二度と、こんな田舎での仕事を請けんぞ……は？」

そのときクリスタの身体はぴたりと止まった。
僕はその一部始終を見ていたけれど、声を上げることすらかなわなかった。
なぜなら、彼の動きはあまりに速く、そして僕もまったく予想していなかったことだったからだ。

「見つけたぜぇ……クリスタ＝ラ＝クリスタァ……！！」

クリスタのお腹を串刺しにして、1本の腕が生えていた。
毛むくじゃらのその腕は――ついさっき、僕の頭を抱え込んで「サンキューな」と言ってくれたライキラさんのものだった。
物陰に潜んでいたらしいライキラさんは、この瞬間をずっと待ち続けていたんだろう。クリスタが竜を倒すのを。そして慢心し、油断するのを。
仲間の仇を討つチャンスを――。

「ごぼっ」

クリスタの口から血があふれ出る。【森羅万象】を通して見なくとも、もはやクリスタは死の数歩手前であることは明らかだった。

「ライキラさん！！」

だけれど僕は叫んでいた。
ライキラさんがやってしまったことを咎めるためじゃない。
僕の【森羅万象】はもうひとつのことも報せてくれていたからだ。

「レイジ……俺は」
「竜はまだ生きてます――」

僕を見たライキラさんの顔は、なんて言ったらいいだろう。間違いを指摘されて戸惑う少年のようでもあり、やらなければならない勤めをすべて果たした修行僧のようでもあり――なぜだろう、救いを求める罪人のようですらあった。

竜の前足が、ライキラさんとクリスタの身体をふたつまとめて引きちぎり、ふたりの上半身は吹っ飛んだ。

僕は叫び出したかった。どうすればこのバカみたいな悲劇を避けられたのか、自問自答したかった。誰かの胸にすがりついて泣き出したかった。

でも僕はそのどれもできなかった。

「い、や……」

がらがらがらと、がれきを崩して起き上がった竜は、

「いやあああああああっ！！」

最も近くにやってきていたハーフリングを見た。

その人は、買い物帰りなのだろう、両手にいっぱいのカゴを持っていた。保存の利く食材や、香辛料の入った瓶が積まれている。これからの旅路に必要なものがめいっぱい詰まっていたのだ。

だけれど彼女は――ミミノさんはそれを取り落とし、叫んだ。ライキラさんの最期を目の当たりにしてしまったショックで。

竜の気を惹くには十分過ぎた。

ミミノさんは竜にも気づけないで、頭を抱えてしゃがみ込む。竜の口が開いても、その奥に光が集まっても気づかない。

ミミノさんが、焼かれてしまう。

「う、おおおおおおおおお！！」

僕は走り出した。【疾走術】では間に合わない。でもこれを助走として、【火魔法】を足元で爆発させると信じられない加速が生まれる。周囲の景色が溶けたと思うと目の前にはもう竜の顔があった。これを、自由自在にやってのけたのだから天銀級冒険者はすごい。

「だあああ！！！！！！！！！」

僕の動きはライキラさんが見せた動きの完璧なコピーだった。蹴りが、竜の顔にめり込んで、さらには追い打ちで仕掛けた【火魔法】が自動車サイズのその顔を向こうへと吹き飛ばす。

僕の足に、ヒビが入ったらしいと【森羅万象】が教えてくれる。

《……お前は、屋根の上にいた……？》

体力は、ほぼ限界だ。魔力も今のでほとんど使い切った。

「ミミノさん……ミミノさん！」

「……レイジくん？」

「お願いです。逃げてください。あなただけでも、お願いだから……」

僕は彼女の前で、両手を広げた。こんな薄い身体で守り切れるわけもないことはわかっている。でも、それでも、やらなければならなかった。

「だ、ダメだべな、レイジくん！　君が逃げ――」

「竜はあともう少しで倒せると、援軍に伝えてください」

最後に残っていた魔力を使って【火魔法】を発動させた。ボンッ、という音とともにミミノさんが吹っ飛んで、僕の身体は逆に――竜のほうへと転がった。

「レイジくん――――！！！！！」

「離れて、ミミノさん！」

ノンさんの声が聞こえた。近くに、いたのかな。ミミノさんを押さえてくれたのなら万々歳だ。

正真正銘、もうすっからかんだ。

だけれど僕はやりきった。

《……お前の身体に星１０の天賦が……？　いや、構うものか。ここで息絶えよ、小さく、勇敢な者よ……》

竜が口を開いたときには、僕の意識は闇に落ちていた。

やりきったのだ。

きっと、僕の最期は笑顔を浮かべていたに違いない。

30

＊　＊

暗いところにひとりでいた。
あ、そうか、僕は死んだんだっけ……。
それならここは天国？　地獄？　ていうか、死後の世界ってあるわけ？
いや、あるか。
なきゃ僕は異世界転生なんてしないもんな。
ということはまさか、ここで出会うのは……定番の神様！？
神様、お願いです。
できることなら次の世界では黒髪黒目が嫌われない世界で……。

――アンタの黒髪と黒目、あたしは好きだなぁ。

できることなら最初からチート的なスキルも欲しくて……。

――あっ、いいのいいの。今度レイジくんになにか天賦珠玉を買ってやるから、な？　スキルがなくても気にする必要はないっ！

ああ……なんてこったい。
僕はもう、自分に課せられてたマイナスを克服できていたんじゃないか……。
すばらしい人たちとの出会いで。

「ダンテスさん、ありがとう。ノンさん、ありがとう。ミミノさん、

ありがとう。ライキラさん……あんなふうに死んじゃうなんて、バカだよ。でも、ありがとう……」

そして、

「……ラルク。一度くらい、『お姉ちゃん』って呼べばよかったな……」

生きたい。

僕はこの世界で生きていたかった。もっともっと長く「銀の天秤」の人たちと冒険したかった。ラルクを、自慢の姉だと言って紹介したかった。

――弟くん。

契約魔術によってゆがめられていた世界でも、ラルクはラルクだった。

魔術が解けてもラルクに対する想いは変わらなかった。

――まだこんなところで死ぬなよ。

イタズラっぽく笑って僕の額をこづいた彼女の笑顔は、僕の知っているラルクそのものだった――。

＊　＊

「……？　……？？」

目を開けた僕が見たのは、薄暗い天井だった。どうやらベッドに寝かされているらしく、ああ、死後の世界にもベッドがあるんだな……なんてぼんやり考えて横を見ると、

「!?」

ベッドに上半身を載せて突っ伏している――居眠りしているミミノさんがそこにはいたのだった。

なんで？　なんでミミノさんが？　まさかミミノさんも死んで――。

「っつう!?」

身体を起こした僕は服を着ておらず、あちこちが痛むのを感じた。肘や手の甲にも傷薬が塗られていた――けれども全体的には軽傷で、【森羅万象】によると足の骨に入っていたヒビも治っているらしい。

「……ん、レイジ、くん……？」

眠そうに身体を起こしたミミノさんに僕は、

「お、おはようございます……？」

「レイジくん!!」

するとミミノさんが僕にがばりと抱きついてきた。

「わたっ、とっ――いだぁっ!?」

「だ、大丈夫だべな？　痛いか？　痛いよな？」

「あ、いえ、びっくりしただけで痛みはそこまでは……ていうかここ、もしかして宿ですか？」

もしかしなくとも見覚えがある場所だった。３つ並んだベッドは僕しか横たわっていないけれども。

「そうだよ、そうだよ……！」

僕がしっかり受け答えできるとわかったからか、あわてて離れたミミノさんの大きな目にぶわっと涙が浮かんだ。それがぽろぽろとこぼれ出すまでには秒も必要なかった。

「そうだよ……助かったんだよ……！」

「……ミミノ、さん」

僕は再度、抱きしめられたけれど――その速度はゆっくりとしたものだった。

「助かったんだよ、レイジくん。レイジくん。レイジくん！　だけど、もう二度とあんな怖いことしないって約束して……お願いだから……！」

温かい。

ミミノさんの身体は温かくて、お風呂に入っていないのか彼女の身体のにおいがした。

あんなこと、とは、ミミノさんを逃がすためにやったことだろう。

ミミノさんからすればライキラさんの死を見た直後に、僕が捨て身の攻撃を仕掛けたのだからそれはもう驚いたことだろう。寿命が縮むほどに。

「ごめんなさい、ミミノさん……ミミノさんが危ないと思ったら身体が勝手に動いて……」

「わたしの、ため？」

そっと身体を離したミミノさんは、涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔だった。

「ぷっ。ひどい顔」

僕は枕元に転がっていた手ぬぐいを拾い上げるとそれでミミノさんの顔を拭く。

「ちょっ、止めっ。だ、大丈夫だべな！　もう！　たまにレイジくんはわたしより年上みたいな振る舞いするんだから！」

前世の１６歳＋今世の１０歳と考えればミミノさんより年上かもしれないけどね。とはいえこっちで記憶がよみがえったのはついこの間だから、実質的には１６歳か。

ミミノさんは僕から手ぬぐいを奪って僕に背を向けつつ顔をごしごしとこすっていた。

「……ミミノさん、僕はどうして助かったんですか？　それに、ノンさんとダンテスさんは？」

その隙に、いちばん聞きたかったことを聞いた。

「ノンは隣の部屋でダンテスの治療をしてる。わたしはよく知らないんだけど、大爆発があって、そのときにダンテスは身を挺して多くの人たちを守ったらしくてな……火傷がひどいべな」

あのときの、クリスタの大規模【火魔法】と竜の衝突のことだろうか。

ダンテスさんはそんなときにも仲間を守ったんだ……ほんとうにすごい人だ。

「火傷の治療に集中したいからって、ノンがつきっきりで【回復魔法】を使ってる。あ、レイジくんにも最初に魔法を使ったよ。だから大きなケガはないと思うけど……」

「はい、ありがとうございます。それで、僕が助かったのはどうしてですか？　僕、竜の真下にいましたよね」

「うん……」

ミミノさんは、顔をしかめてむむむと唸った。

「その、な、わたしにもよくわからないんだ」

「……よく、わからない？」

あのときの竜は僕を殺す気満々だったはずだ。気が変わって逃げたということはないだろう。

僕はミミノさんの次の言葉を待った。

「突然、空中に斬撃みたいなのが現れたんだ……それはとても大きくて、真っ黒だった。斬撃が命中すると、竜の首は見事に断ち切られたんだよ」

ミミノさんは「隣の部屋の様子を見てくるな。日が出てきたらなにか食べるもの買ってくる」と言って部屋を出て行ったけれど僕は呆然としていた。

「空中に、斬撃……？」

しかも、

「黒い、斬撃……？」

僕の脳裏に浮かんだ可能性はたったひとつ。

ラルクだ。

ラルクが、いたんだ。

僕が戦闘現場に背を向けて交差点でおろおろしていたときにも――ラルクはいたんじゃないか？　そして僕のことをそばで見守っていてくれたんじゃないか？

どうして声を掛けてくれなかったのか、とは思うけれど、それは僕が「銀の天秤」のメンバーといっしょにいたからかもしれない。

ラルクはまだ、近くにいるんじゃないか？

31

「行かなきゃ……」

日を追えば追うほどラルクは離れていってしまう気がした。僕が安心安全に暮らして行けそうだとわかったら見守る意味だってなくなるし。

「ラルク……！」

僕は上着を引っ張り出して袖を通した。ミミノさんが僕のために繕ってくれた服は、あちこちほつれてぼろぼろだったけれど問題なく着ていける。

隣の部屋からはミミノさんとノンさんの話し声が聞こえた。【聴覚強化】のおかげかもしれない。ふたりとも明るい調子なので、ダンテスさんも大丈夫なんだろう。

でも今僕が外に行くと言ったら止められることは間違いないので、【疾走術】で足音を殺して外へと出た——日の出直前の暗い空がそこにはあった。

僕は半日以上眠っていたんだろうか？　そう考えるとお腹が空いているけれど、今はそれどころじゃない。

宿の周囲を確認する。誰もいない。無人の通りを走っていくと、ときおり、市場に仕入れに出かけるような人たちがいた。昨日、あんなに大きな事件があったというのに街は今日もいつもどおり動き出そうとしているのが、なんだか不思議で、僕だけ悪い夢を見ていたかのような気持ちになった。

だけれど夢なんかじゃない、現実なんだと気がつかされたのは戦闘現場が近くなってきてからだ。

漂ってきた煙のニオイは、広範囲に渡っているみたいだ。石造りの建物が多くて大火事にはならなかったけれども確かに近辺は黒く焼けている場所が多かった。

戦闘現場に近づくにつれて――僕が一度は逃げ出そうと通ったあの通りを歩いて行くにつれて、胸の鼓動がどんどん早くなる。

ラルクは戦闘現場にいた。それは間違いない。だけど戦闘が起きたのは昨日で、今もラルクがその場所にいる可能性は限りなく低い――それでも、他に調べられる場所がない。

領兵がひとり、突っ立っていた。あくびをかみ殺している。たぶん、戦闘現場の警備なんだろう――「天賦管理局」の建物が崩壊し、まだそこには天賦珠玉が残っているかもしれないし。

でもたったひとりで突っ立っているだけならいくらでもすり抜けられる。僕は足音を殺して、物陰を伝いながら領兵の警備を通り抜けた。

「あ……」

角を曲がるとすぐそこが戦闘現場だった。いまだくすぶる白煙ががれきの中から立ち上り、肉の焦げたようなニオイが混じっていて気持ち悪さが込み上げてくる。

我慢、我慢だ……。

僕は周囲を見渡す。だけれど――やっぱりこんなところにラルクがいるはずもない。

「ダメか……」

竜の死体も、ライキラさんやクリスタの身体もなかった。運び出された後なんだろう。

大量の血が流れている場所が竜の死んだ場所だと思われ、僕はそこへと歩いていった。

「ん……」

そのとき僕は、1個の石が気になった。瓦くらいの大きさで、平べったい。他のがれきは血をかぶっているのに、その石だけは血の上に置かれてあった。

持ち上げてひっくり返す――そこには、石をえぐるようにして文字が書かれてあった。

『いつかどこかで』

短すぎるし、下手くそな文字だった。

そう言えば彼女は僕がヒンガ老人にちょっとした文字を教わったりしていたのに、勉強するのを嫌がって、ほとんど文字が書けなかったっけ。

「ラルク……やっぱりここに、いたんだね……」

胸が詰まって涙がこぼれそうになるのを、ぐっとこらえた。僕がここで泣いてはいけない。だって僕は、彼女が差し出してくれた救いの手を拒否したじゃないか。

それなのに勝手に、ラルクのことを思って泣いたりしたらあまりにも自分勝手だ。

わかったよ。

ラルク。

いつかどこかで会おう、きっと……。僕らはたったふたりの姉弟なんだから。

「――ここにいたのか？　星6つの所持者が」

そのとき僕の耳が、何者かの話し声をとらえた。
ハッとして周囲を見回し、物陰へと走り隠れる。
すると数人の領兵と、一見して上官とわかる人物が話しながらやってきた。

「――間違いないと思われます。見たことのない黒い剣のスキルでした。公爵閣下死亡後に鉱山長に対して使用されたスキルと同等と思われます」

ラルクのことだ。彼らはラルクを探してるのか？　星６つなんていう希少なスキルだから？

「――ふむ……鉱山兵の生き残りはなく、鉱山からの報せはわずかであったはずだが」
「――優先順位を考えて報告をしてくれたのでしょう。いえ、あるいは、それほどその天賦が衝撃的だったか……」
「――十分にあり得るな。それと昨日、城門から上がってきた目撃情報だが……黒髪黒目の奴隷がほんとうにいたと？」
「――はい。冒険者の奴隷だということで通したそうです。鉱山奴隷の記録では、星６つを使った奴隷『ラルク』と、黒髪黒目の奴隷『名無し』の２名しか子どもの奴隷はいませんでした。この２名が逃亡後に交友関係があることは十分に考えられます」

僕の心臓はどくんどくんとうるさいほどに鼓動を刻んでいた。
もう、そこまで調べられているんだ。

「――わかった。まずはここの捜索だ、なんらかの奴隷の痕跡が残っていないかを徹底的に探せ。私は冒険者ギルドに掛け合って黒髪黒目の奴隷についてたずねてみよう」

マズイ。ギルドを調べられたら「銀の天秤」にまでたどり着くのは時間の問題だ。髪の色こそ変えているけれど、目は黒のまま。染髪剤なんてすぐにバレる。

（……みんなには迷惑を掛けられない）

僕が自分の事情を全部話したら「いっしょに逃げよう」と言ってくれるかもしれない。でも、ダンテスさんは大ケガで治療中なのだ。すぐには動けないだろう。

逃げるなら、今日中だ。領都の出入りが封鎖される前に。

行かなきゃ――と歩き出そうとした僕は、視界の隅に高価そうな布の切れ端を見た。それがクリスタのマントの一部だということもすぐにはわかったけれど、それ以上に気になったのは……布が覆っていた銀色の光だった。

「これって……！？」

近くに行って、僕は気がついた。

上半身を斬り飛ばされたクリスタ。そのときいっしょにこれもちぎれて飛んでいたんだろう。

天銀級の冒険者登録証は、深みのある銀色を保ちながら夜明けの空を映していた。

（これが、天銀（ミスリル）なんだ、これが……！）

どこをどう通って走ってきたのか、僕は気がつけば宿に戻ってきていた。手に握りしめていた冒険者証は僕の手汗でベトベトになっていて、誰かに見られてはマズイとハッとしてポケットに突っ込ん

だ。

部屋に戻ると、誰もいなかった。ミミノさんがいないことが気になりながらも僕はテーブルに冒険者証を置いた。

『冒険者ギルド　キースグラン連邦ゲッフェルト王国王都冒険者ギルド発行

氏名：クリスタ＝ラ＝クリスタ

ランク：天銀

パーティー：―

本登録証は上記の者の所属を冒険者ギルドが証明するものである。また上記の者が通行する際、各国関係各所に速やかなる許可を要請するものである。』

プレートの表面にそう彫られていた。ミスリルが特殊なのか、文字の部分がほんのりと青白く発光していた。

文字だけ見るとまるでパスポートだな……。あちこちを移動する冒険者だから必要な効力なんだろうか。

ミスリルそのものの流通を国が管理している以上、このギルド登録証に使われているミスリルもまた勝手に持ち出していいものではけっしてないだろう。

でも、僕は自分で確保した。

――紅葉のような葉っぱで先っぽがさらに5つに分かれている。（生命樹の葉）

――すごく深みのある銀色の金属。（ミスリル）

――ミミズのようなうねうねしている生き物。（白ミミズ）

これが最後の素材だからだ。

「ええと、白ミミズ、白ミミズ……」

僕は上着の置かれてあった場所に、身につけていた道具袋を発見する。これもボロボロになっていたけれどまだ使える。生命樹の葉と白ミミズの入っていた革袋を取り出す。

「ん……？」

袋を開けると、中はねっちょりとねばねばの糸を引いていた。【森羅万象】によると、これは生命樹の葉を食べた白ミミズの吐き出した粘液らしい。マジかよ。キモすぎる。

とはいえ四の五の言ってられず、しかも【森羅万象】大先生によると問題ないようなので、僕はギルド登録証をテーブルに置くと革袋の中身を逆さまにする――どろーっと粘っこい塊が落ちてくる。ゆーっくりとした速度で塊が登録証に載っかる。

と、

「え」

その部分から黒く変色してミスリル全体が黒く染まっていく。

「こ、これでいい、の？　うーん、大丈夫みたいだね……」

【森羅万象】では、これこそが薬なのだと。ダンテスさんの石化を治す薬なのだという確信があった。

「……」

僕は無言で登録証に手を伸ばした。おっかなびっくり触ってみると、金属のはずのそれは、まるで濡らした厚紙のように柔らかくなっており、くるりとねばねばを巻いた。世界一食べたくない巻き寿

司の完成だ。まあ、食べる必要はないんだけど。
ほんとにミスリルはファンタジー物質だなぁ……金属なのかそうでないのかよくわからなくなってきたよ。
隣の部屋をノックするが、返事がない。鍵は掛かっておらずドアを開けると――ツンとした薬のニオイが漂っていた。長椅子に寝そべったノンさんは薄手の毛布を掛けて目を閉じており、深い眠りに就いていた。
ベッドには包帯を巻かれたダンテスさんが横たわっていた。

32

「これは、ひどい……」

顔や右半身に深い火傷があった。だけれど左半身は石化のせいで逆になんの影響もないようだった。完全な石化ではないのだけれど火傷には強いのかな。

左半身が剥き出しになっているのは僕にとって好都合だ。

「……ん、レイジ、か……？」

幻でも見るかのようにダンテスさんの目がさまよっている。

「はい。石化に効く薬を作ったので少し塗らせてください」

「……すまん、よく聞こえん。なんと言った……？　頭がぼうっとしてな……」

「大丈夫です。寝ていてください。寝るのがいちばんです」

ごめんなさい、ダンテスさん。僕が今から塗ろうとしている薬の内容はちょっと言えません……。人がいいダンテスさんは受け入れてくれると思うんだけど、人間、知らずに済むならそのほうがよかったってこと結構あるじゃない……？

ダンテスさんも睡眠を欲していたのだろう、やがてまたすーすーと寝息を立て始めた。僕はベッドに乗っかると、ダンテスさんの肌に目がけて変色したミスリルをこすりつけた。

「！」

灰色じみた肌に黒い色がツーとついたと思うと、ほんのりとした光を放った。見た目は、真っ黒だ。だけれど【森羅万象】を通せば石化が回復したことがわかる。

ダンテスさんたちは石化を「呪い」と言っていたけれど、これはやっぱり「毒」なのだ。だからこそダンテスさんは天賦【免疫強化】でしのぐことができているわけで。

毒さえ取り除くことさえできれば、ダンテスさんの石化は回復する。

「よかった……」

鼻の奥がツンとした。

僕は、知っている。ダンテスさんが底抜けに善人であることを。冒険者として生きていく道を断たれて、表には出さないながらも死に場所を探していたことを。

そんなダンテスさんの娘のノンさんが、お父さんの思いを知りながらも必死で生きる道を探していたことを――。

（このふたりが報われない世の中なんて、おかしいもんな）

僕は必死で薬を塗りたくった。石化している部分がなくなるまで塗るのに、ものの１０分もあれば事足りた。

【森羅万象】で何度も確認する――問題なし。石化毒はすべてなくなっている。ダンテスさんの呼吸も安定して、火傷さえ持ちこたえれば今後は快方に向かうだろう。いや、石化毒のために奪われていた生命力があるのだから、火傷だってすぐに治るはずだ。

このミスリルを残しておくのは非常に危険なので、持ち去っておきたかった。

僕は隣の部屋に戻り、自分の荷物をまとめる。とはいっても小さな道具袋に入るものがすべてだ。あとはダンテスさんにもらったお

小遣いの残額と、ウコンモドキを売って得たお金だけ。

「……行こう」

これ以上、ここに留まればみんなに迷惑を掛ける。

だから、僕は行く。

行かなきゃいけない。

前を向いて行かなきゃ――。

「……行きたくない」

前向きな気持ちになんてなれるわけもなかった。せっかく石化が治ったダンテスさんの、本気の動きを見てみたかった。ダンテスさんが治ったら教会に戻らなきゃいけないのかもしれないけれど、ノンさんの喜んだ顔だって見たかった。それに――ライキラさんが死んでしまった悲しみを残して、ミミノさんを置いていきたくなんてなかった。

「レイジくん？」

僕は注意が散漫になって気づけなかった。部屋の入口に、ミミノさんが戻ってきていたのだ。

「どこに行ってたんだべな。ベッドにいなかったから焦って外まで探しに行っ、ちゃっ、た……」

僕のひどい顔を見て、だろうか、あるいは僕の格好を見て、だろうか――ミミノさんがハッとした顔をする。

「……わたし、今すごく、イヤな予感がしたんだ……そんなわけ、

ないべな？　レイジくんが出て行くなんてこと、ないべな……？」

僕は今すぐこの場ですべてを打ち明けたい衝動に駆られた。
だけれど、それはできない。きっとミミノさんは僕を守ると言ってくれるだろう。でもそれは破滅への道でしかないのだから。
「銀の天秤」は僕のことをなにも知らずに保護しただけ。そして今日、勝手にいなくなるだけだ。

「ごめんなさい、ミミノさん。僕はもう行きます」
「……！」

ミミノさんはなにかを言おうとして、口を閉じた。ぎゅううと言いたい言葉を全部呑み込むために力一杯口を閉じた。

「――でもいつか、帰ってきます」

これだけは言わなきゃいけないと思った。

「僕は『銀の天秤』のメンバーだから」
「！！」

ミミノさんの横を通り抜ける。口を閉じて涙を浮かべながらも、けっしてこぼすまいとこらえていた。

「……約束、だからね……？」

部屋から出た僕の背中に、ミミノさんの声が聞こえた。

「約束します……必ず戻ってきます。だから」

僕は決意を込めて、まるで怒鳴るように告げた。

「今は、行きます！」

僕は走り出した。宿を出たときにミミノさんが泣く声を聞いた。
でももう振り返っちゃいけないのだと思って、信じて、走った。
そうだ。これは永遠の別れなんかじゃない。僕は一時的にパーティーを離れるだけなんだ。
いつか帰る。
きっと帰る。
そのときにはもっと強くなった僕がいるはずなんだ。
もらった恩を、たくさんの温かな思いを、返すために僕は絶対に「銀の天秤」へ帰る――。
朝日はすでに昇っており、領都は一日の活動を始めていた。

とにかく今すぐ領都を出るべきだった。ヒンガ老人が「値がつかぬ」と言っていた天賦【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】だ。なんとしてでもラルクを生きて捕らえて天賦珠玉を引っこ抜くだろう。
ラルクにつながる手がかりはほとんどなく、いちばん有力なのが僕だ。だから、とにかく、今は領都を出るのが最優先だ。
幸いお金はある。乗合馬車とかはあるんだろうか……？

「おっ」

数人に道をたずねると馬車の停留所にたどりついた。そこは大きな円形の土地になっていて、どこそこ行きと書かれた看板のそば、馬車が何台も停まっている。
どうしよう。どこへ行こうか。国境を越えるのは難しいんだっけ

？　だとするととりあえず隣町とかか……？

「おい」
「ひゃん！？」

首根っこをつかまれた僕は変な声が出た。
そこにいたのは、まったく予想もしなかった人物――「永久の一番星」のリーダーであるオスカーだ。
うさんくさい笑顔は今日は浮かべず、しかめっ面をしていた。

「あ、あの……？　なにか？」
「お前、『硬銀の大盾』んとこのガキだよな？」
「はあ」
「ちっと来い」
「ええっ！？」

首根っこを引っ張られ、建物の陰に連れて行かれた。

「な、なんですか急に！　人を呼びますよ」
「それは止めろ。というか困るのはお前だぞ」
「……ど、どういうことですか」

もしかしてアレか？　ミスリル盗んだことがバレた？　しかもその証拠品は僕の道具袋にはいってるんだよ……世界一食べたくない巻き寿司になった状態だけど。

「朝イチで領兵が冒険者ギルドに飛んできた。冒険者パーティーが連れている黒髪黒目のガキを探してるってよ」
「……」
「お前のことだよな？」

早い。向こうの動きが早すぎる。僕は冷や汗をだらだらかいた。

「な、なんのことでしょうねえ……？」

「アホ、俺様まで疑ってんじゃねーよ。お前を領兵に突き出すつもりならとっくにロープでぐるぐる巻きにしてるところだ」

確かに。

「ということは、オスカーさんは……」

「ここにいるってことは、領都から出たいんだろ？　だから俺が、お前を逃がす」

おおお、まさかの協力者!?

「で、でもなんで……」

「うちのパーティーメンバーが、あのクソッタレ【火魔法】の爆発に巻き込まれかけたところを『硬銀の大盾』に命を救われた。恩返しくらいしなきゃ、男が廃るだろうがよ」

ほんとうは宿に報せるくらいのつもりだったんだけどな、とぼやくように言ってから、

「領都の城門は全部領兵が監視してるぞ。連中、すでに髪の色は黒じゃない可能性も頭に入れて黒目だけチェックしてる」

「げげっ!?」

ヤバイヤバイ！　どうなってんのよこの国の情報網！　そんなに行動が早いんなら竜と戦うときにももっと活躍してよ！

「……その顔を見るに、お前、そこまで考えてなかったな？　馬車なんぞに乗ってみろ。狭い客室で逃げ場もねーぞ」
「あ、危なかった……。でも出入り口が使えないなら僕はここに残るしかないですか？」
「いや、領都の外に出すくらいはしてやる」
「どうやって……」
オスカーは――オスカーさんは笑って見せた。
「ついてきな。『蛇（じゃ）の道は蛇（へび）』ってな」
相変わらずの、うさんくさい笑顔だった。

33

連れて行かれたのはダンテスさんが僕を連れては絶対にやってこないような場所――つまるところ歓楽街だった。ライキラさんは一度連れてってくれたけど、あそこよりももっと猥雑な場所だ。

ただし今は朝。

ケバケバしいピンク色の看板は、午前の太陽の下で見るとあちこち塗装が剥がれていて情けない。酔っ払いが建物の陰で眠っている――死んでないよね？　大丈夫だよね？

「こっちだ」

「ひぇっ」

「……情けねえ声を出すなよ」

その裏路地に入ると、石畳ですらなくなっていた。薄暗く、鼻が曲がるようなニオイが充満していて、何色かわからない水たまりが広がっていたりする。絶対に踏まないよう、僕は地面をにらみつけながら歩いた。

「見えるか？　そこに領都の城壁がある。この辺は城壁に近いし、上水道がないからな、領都でもいちばん安い土地ってわけよ」

「はあ……」

「で、こういう場所だからこそ、お上（かみ）の目を逃れて商売するヤツが出てくるってわけだ。そのうちのひとつが、『塀くぐり』」

「『塀くぐり』」

「城壁の一部をぶっ壊して、そこを通してくれるんだわな」

なるほど……密入国の手引きみたいなものか。

「……ってお前、全然驚かねえのな」
「い、いやー、びっくりだなー、そんな危険なことをやってる人がいるなんてー」
「『なるほどね』みたいな顔した後にクソみてえな小芝居挟むんじゃねえよ。こっちに来い」

城壁のそばまで行くと、木製の小屋がひとつあって、その前に5人ほどたむろしていた。
全員が男で、全員がパイプタバコを吸っていた。わかりやすいほどのチンピラたちである。

「おや、オスカーの旦那。またお出かけかい？」
「まあな。だが今日は俺じゃねえ、このガキを通してやれ」

どん、と背中を押して前へと出ると、彼らは首をかしげるようにして僕を見た。

「このガキを？」
「今そう言っただろ。いくらだ？」
「はあ……子どもでも安くはしねえですよ。いつもどおり連邦金貨3枚で」

連邦金貨3枚!?　30万円!?

「ちっ、ガメつい野郎どもだ。ほらよ」
「ってオスカーさん！　お金まで!?」
「ガキが金の心配なんてすんな。仲間の命を救われた金額として考えたら爆安だろうが……っつうか、お前はここを出た後のことを心配しろ」

「うっ、確かに」
「ここから光天騎士王国の国境を越えるのは難しい。道はひとつしかねえし、関所も厳重だ。だが逆にキースグラン連邦内の移動は相当緩いからそっちのほうがいいだろうな。領兵どもはしばらくは領都内を探すだろうし」
「……わかりました。ほんとうに、いろいろとありがとうございます」
「もう行け」

ひらひらと手を振るとオスカーさんは去っていく。
僕は……最後の最後までダンテスさんに助けられたんだなと思った。僕は石化毒の治療で恩を返せたような気持ちだったけれど、またひとつ恩ができた。
つまり、またひとつ「銀の天秤」に戻る理由ができたってことだ。

「そんじゃあ坊主、こっから行け。――お～いゼリィ、客人が通るから案内しろ」

適当に取り付けただけの扉を開くと、そこには明かりがまったくなく、後ろで扉が閉じられると細く射し込んでいる光にホコリだけが浮いていた。

「へいへい、まったく。人使いが荒いんだよなぁ……っと、客人。こっちですぜ」
「……」
「どうしやした、客人？」

ゼリィ、と呼ばれた人は――獣人は怪訝な声で聞いてくる。

「ああ、足元が見えやせんか？　そんじゃちょっとだけランプを点

けましょうか……ほいっと」

ボッ、と魔導ランプの明かりが点ると、その人の姿が浮かび上がった。

「……」

「……」

僕もゼリィさんも、お互いをぽかんとして見つめていた。

僕はこの人を見かけたことがある。ライキラさんが夜に、この人にお金を渡していた。

そしてこの人も僕のことを知っているのだろう。ライキラさんを街中で見かけたときに、そのそばに僕がいたから。

「こいつぁ……驚いた。ライキラの若旦那のとこにいた坊ちゃんじゃないですかい」

僕も驚いた。

てっきり男の人だと思っていたのに――この人、女性だったんだ。

ライキラさんよりも背は低いけれど、すらりとした身長に、しっかりとした筋肉がバランスよくついている。

赤茶けた色のショートヘアの上には、ぴょこんと2つのネコミミ。

シャツの袖を折って肘までまくり上げているが、そこには毛がいっぱい生えている。

下半身はぴったりとした布地のパンツにロングブーツだった。

軽装に見えるけれど隙がない立ち姿だ。

「あなたは、ライキラさんと同じ傭兵団だった方ですね？」

「ありゃ、そんなことまで若旦那は話しましたか。坊ちゃん、だいぶ信頼されているようですねえ、若旦那から」

「はい。信頼して……くれました」

僕の言い方に気がついたのか、ゼリィさんは疑うような目になった。

「……坊ちゃん、なにかやらかしたんで？」

僕は無言で首を横に振った。

「ライキラさんは、亡くなりました」

それから僕らの間には沈黙が訪れた。そうしてしばらくしてから、ゼリィさんの手から魔導ランプが落ちてガチャンと音を立てた。火を点しているわけではない魔導ランプはいまだ光を失うことはなかった――外から「ゼリィ！　てめえランプ壊してねえだろうなあ！」と怒鳴り声が聞こえ、扉が開かれ、「あ、まだ客人がいらしたのか……。おいゼリィ、さっさとご案内しろ」とだけ言われると扉は閉められた。

僕はそれからゼリィさんにライキラさんの最期について話した――僕が逃げる理由や僕自身のことについてはぼかしながらだけれど。

ゼリィさんは話を聞きながら、難しい顔で狭くて細い通路を案内してくれた。すでにそこは城壁の内部で、外側に出るところでは耳を澄ませて周囲を確認してから慎重な手つきで城壁の岩を外していく。その岩はうすく削られていて、内側にだけ取っ手がついている代物だ。僕らが通り抜けるとゼリィさんは手際よく元通りにした。

傍目には、他の城壁とは違いがまったくわからなかった。

１０メートル離れたところに背の高い草の生えた茂みがあって、

そこに入れと言われた。中には獣道ができていて通っていくと街道に出られるらしい。ただいくつも分岐があって、初見なら必ず迷うんだそうだ。

「……若旦那は、そうですかッ……最期はあのクリスタをブチ殺しましたかッ……」

ゼリィさんは僕を案内しながら、泣いていた。僕が見ているのも気にせず泣きに泣いていた。

彼女は彼女で傭兵団の生き残りとしてクリスタになんとか一矢報いたいとはずっと思っていたようだ。ただ、向こうは天銀級の冒険者で、こちらは――油断していたとはいえ――数十人いても手も足も出なかった相手だ。報復したいという願いはほとんどあきらめていたらしい。

確かに、あんなに自由自在に空を移動して、【火魔法】を撃ちまくれる相手に勝つ方法なんてそうそうないだろう。

折った袖でごしごしと目元を拭ったゼリィさんは、僕を振り返る。髪と同じ赤茶色の猫目が僕を見つめた。

「ここをまっすぐ行くと、街道に出ます。……坊ちゃん、あーしに、あなたさまの護衛をさせてはもらえませんかね？」

「え、護衛……？」

「へい。『闇牙傭兵団』は、あーしにとって家族でした。あんなに居心地のいい場所はなかった。それがなくなって……絶望のどん底で、日銭を稼ぐのにもヒーヒー言っているときに、同じくなんとかかんとか生き延びてらした若旦那を見かけた。目を見ればわかりましたよ。若旦那は、クリスタの野郎に復讐するという願いを捨ててなかった。そうして見事それを果たした……」

「……」

――でも、死んだら意味がないじゃないか。

僕はそう言いたかった。でも……仲間を殺された人たちにとっては復讐こそがすべてだったのかもしれない。そう思うと言えなかった。

「まあ、死んだら元も子もないっすけど」

「ちょっ！？　僕、遠慮して言わなかったんですけど！？」

「あーしは猫系獣人なのでさばさばしてるとか、そーゆーとこありますよね」

シリアスな空気はどこへやら。ゼリィさんは涙に濡れた目でにこにこしていた。

「でもね、坊ちゃん。死んでたあーしの心に、確かに火が点ったんすわ。若旦那の生き様を聞いて、あーしもなんかしなきゃっていてもたってもいられなくなった。ここでレイジさんに会ったのはなにかの縁でしょう。是非その旅路、ごいっしょさせてはくださいませんか」

「……でも」

「さっきの話、ちらっと聞こえましたけど、あーしなら光天騎士王国でもクルヴァーン聖王国でもどこでも案内できますよ！　こー見えて、あーしは世界を股に掛けた『闇牙傭兵団』の偵察担当だったんすから」

ここに来るまでに、オスカーさんに――ダンテスさんに助けられ、そしてまたここでゼリィさんに――ライキラさんに助けられようとしている。

「ふふ」

「……レイジさん？」

僕はどうあっても「銀の天秤」のメンバーなんだ。仲間が差し出した救いの手なら、気にせず受け取るべきだよね？

「わかりました。こちらこそ、よろしくお願いします」

「やったぁっ！」

ぴょん、と跳ねたゼリィさんはパチンと指を鳴らした。

「そうと決まれば善は急げっすね。行きましょう！」

僕はゼリィさんの案内に従って歩き出す。

まるでライキラさんに導かれているような気がした。いや、きっとそのとおりなんだ。ライキラさんだけじゃなくて、ダンテスさんにノンさん、それにミミノさんに導かれて僕は道を歩いている。

それだけじゃない。

多くの人が踏んだ場所が道になるように、僕が歩いているのは、多くの人々によって導かれてきた場所なんだ。

今ごろミミノさんはダンテスさんに話をしているだろうか。ダンテスさんの身体が治ったことには気づいただろうか。ノンさんは喜んでくれただろうか。

（ライキラさん、あなたは――他のすべてをなげうってでも仇を取りたかったんですね）

僕にはそれほどの気持ちは……わかりません。

いいことだったのか、悪いことだったのかどうかすらわかりません。

ただ僕は、あなたが最後に見せてくれたあの「やりきった」顔を

忘れないでしょう。そしてあのときあなたが僕に、なにかを言おうとした言葉の続きを……ずっと考えてしまうでしょう。

喪に服すこともできず、離れていく僕を許してください。

まあ、ライキラさんのことだからきっと「さっさと行け。喪なんて飯の種にもなりゃしねー」とか言うんでしょうね……。

「……坊ちゃん、どうしたんすか？　なんか吹っ切れたような顔になってますけど」

「いえ、なんでもないんです。あの、それより『坊ちゃん』って止めてもらえませんか？」

「いや坊ちゃんは坊ちゃんっしょ？　しょーがないっすよね」

「しょうがなくないです！」

「しょーがないしょーがない。ナハハハ」

「あ、これなに言ってもダメなヤツだ……そう言えばライキラさんはどうして『若旦那』なんですか？」

「ああ、『闇牙傭兵団』の団長の甥っ子なんすよ、若旦那は」

「へー」

「おっ、興味がありやすか？　それなら傭兵団のこと語っちゃいますよー！　話が長いって言っても聞きませんからね！」

「あはは、是非、お願いします。旅は長いんだし」

僕はこれからどこへ行くべきかもまだわかっていなかった。

でもわかっていることだってある。

この旅は長い、ということだ。

まったく予想もしなかった旅の道連れができてしまったけれども。

やがて茂みの獣道が途切れると広大な草原へと出る。

向こうには街道が、海原のような草原を断ち切って伸びている――その向こうになにが待っているのかは、行ってみなければわからない。

（だったら、行ってみるだけだ。僕は「銀の天秤」のメンバーの冒険者なんだから）

背中に柔らかな追い風を受けて僕は歩き出した。

33（後書き）

ここで1章は終わりです。お付き合いいただきありがとうございました。
後日談、キャラクター一覧がこの後に追加される予定です。

皆様に1つ、お願いです。

本作を読んで「面白かった」と思われましたら、是非とも←の広告のさらに←にある★★★★★をタップして、作品の評価をお願いいたします。
これで作品にポイントが入り、ランキングにも大きく影響します。
ランキングによって新しい読者さんが本作に出会うことができるので是非ともご協力をお願いいたします！（何点付けるかは任意ですよ～）

1日2回更新はかなりしんどかったので、「ちょっとは応援してやるか」くらいのお気持ちでまったく構いません！
皆様が思っている以上にずっとずっとずっと、この評価ポイントはこの上ない「応援」となりますので。

後日談（前）（前書き）

長くなりましたので前編後編です。

後日談（前）

どれくらい時間が経っていたのか、ミミノにははっきりとはわからなかった。レイジが出て行って――あんな小さな子が決然とした顔で別れを告げて出て行って、彼を止めることができない自分が情けなくて、苦しそうな彼を助けられない自分が歯がゆくて、そしてなにより彼はきっと自分たちのことを、なにか、気遣って出て行ったことがどうしようもなくつらかった。

お父さん！　という叫びにも似た声が隣の部屋から聞こえてきて、ミミノはハッとした。涙に濡れた顔を手ぬぐいでごしごしと拭くと――それはさっきレイジが自分の顔を拭いてくれたのと同じものだったことに気づいてまた胸がきゅっと苦しくなったけれど――すぐに隣の部屋、ダンテスとノンのいる部屋へと急ぐ。

「どうしたの？　まさかダンテスの容態が……え？」

火傷の状況が悪化したのでは――と思いながらドアを開いたミミノは、絶句した。

「……見てくれ、ミミノ。これを」

部屋の木窓は開かれており光が射し込んでいる。床に反射した柔らかな光が照らしていたダンテスの肌は――以前のようなくすんだ色ではなかった。

血の通う肉体になっていたのだ。

「目が覚めたらお父さんの肌が黒くなっていて、あわてて拭いたらこうなってて……」

呆然とした顔でいたノンだったが、

「つまり、えっと……？　石化が治ったということだべな？」

「そうなる。身体はまったく問題なく動くし、いつになく気分は爽快だ……健康体というのはこういうことを言うのか。まあ、火傷はまだ治りきっていないがな」

呆然と横で、ミミノとダンテスの言葉を聞いたノンは、

「お父さん……」

はらはらと涙をこぼした。

「お父さん、お父さん……お父さん、お父さん、お父さん～～～～」

「泣くな、ノン。……今までつらい思いをさせてすまなかったな……」

「うわぁぁぁぁぁあああんん！」

子どものように泣きじゃくって、ダンテスが彼女の頭を抱え込むように抱きしめる。

ミミノは目を瞬かせる。ノンが、こんなふうに泣くなんて。

（きっと、わたしの知らないところでノンは苦しんでいたんだ……）

当然と言えば当然だ。１６歳の女の子。教会という戒律の厳しいところにいるとはいえ、仲間内でのおしゃべりやちょっとした休日の買い物を楽しみたいという年齢じゃないか。

それが、父が半身石化し、放っておくと死ぬという状況に直面する――ダンテスとノンはふたりきりの家族で、ノンが献身的にダン

テスを治療しているのを当然ミミノだって知っていた。
だけれどミミノはいつしか、ノンは「できた子」で、「しっかり者」なのだと思っていた。思い込んでいた。ちゃんと彼女の苦しみを見ようともせず。

（わたしは……バカだった。レイジくんがなにに苦しんでいたのかも聞かなかった。「いつか話してくれる」とか勝手に思って。ライキラだってそう。アイツがあんな死に方をしたのも……）

ライキラの死の瞬間を思い出し、心が締めつけられたように痛くなる。

「ミミノ、今までありがとう」

ダンテスにそう言われ、我に返る。

「お前にも……多くの苦労を掛けたな」
「ううん。いいべな。同じパーティーメンバーなんだから……。それよりダンテスはどうして急に治ったんだ？」
「……」

ダンテスは難しい顔をする――ノンが泣き止んでダンテスの顔をのぞき込む。

「どう、したの？　お父さん……」
「……おそらく、だが、何時くらいかはわからないがレイジがこの部屋にいた」
「レイジくんが！？」
「レイジが俺の石化を解いてくれたのだと思う」

しん、と静まり返る室内。ダンテスは夜に起きたことを思い出そうとしながら続ける。

「……意識がもうろうとして覚えていないのだが、確かに『薬』がどうのと言っていた気がするんだ。ミミノ、レイジはどこだ？」

「……」

「ミミノ……？」

口に出したくなかった。言葉にしなければまだ現実を見ないでいてもいいような気がして。

でも、仲間にウソはつけない。

ミミノは重い口を開いた。

「レイジくんは、出て行ったべな」

「……どういうことだ？」

「出て行かなきゃいけないから、出て行くって……」

「ッ！　アイツ……！」

「ちょっとお父さん！　まだ立ち上がらないで！」

ダンテスがベッドから降りようとしたのをあわててノンが止める。

「止めるな、ノン。俺はな、レイジから小遣いの無心をされたことを思い出した。なにか欲しいものがあると言っていたんだ……今になって俺はようやくわかった」

「レイジくんが欲しかったもの？」

「ミミノ、お前もギルドで見ただろう。類い希なる薬草の知識、そしてあの謙虚な態度。アイツが欲しいものと言ったらひとつしか思いつかない――石化の治療薬だ」

「へ！？　石化の呪いは薬じゃ治らないべな！？」

「アイツはそうじゃないことを知っていたんだよ。そして実際に俺

は治った」
「あ――」
ミミノは思い出す。レイジは薬草の市場で「生命樹の葉」を欲しがった。
あれが石化の治療薬につながったのか？
「だ、だけどそれなら、レイジくんだって最初からそう言ってくれるんじゃ……」
「確信がなかったのかもしれん。ギルドで薬草を卸したときにもどこか挙動不審だったろう。アイツの薬草の知識は相当に偏っている」
確かに、レイジは明らかに薬草の相場や傷薬のシステムを知らなかった。
不思議なところが多い少年だった。
知識は豊富で物腰も柔らかく、立ち居振る舞いも落ち着いている。まるでどこかの貴族の子のようだが、出自はどうやら奴隷のようだった。
「俺の推測は……レイジは、俺の石化を治すために危ない橋を渡ったんだ。たとえば禁制の品に手を出したとかな」
「そ、そんな、レイジくんが……」
「露見した場合、『銀の天秤』に迷惑が掛かるかもしれないと考えた。あるいはすでにバレたのかもしれないな。だから急いで出て行った……。ノン、俺はレイジを探しにいくぞ。こんな大恩を受けたままにしておけるか。アイツが縛り首になるのなら俺が代わりになってやる」
「……お父さん。わかりました」
ノンが表情を引き締め、【回復魔法】を発動させる。ノンの魔力

も枯渇気味だったのだろう、つらそうに大きくふぅーっと息を吐いた。その額には汗が浮かんでいる。

「お父さん、これで少しは動けます。でも、昨日死にかけたってことを忘れないで。あと縛り首は全力で回避すること」

「ありがとう、ノン。お前は俺の自慢の娘だ」

「……その娘を悲しませるようなことは、もうしないでください」

昨日、身体を張って冒険者たちを守ったことを言っているのだろう。

「すまない。……ミミノ、お前も行くか？」

「行きたい、けど……わたしはレイジくんを止められなかった」

あのとき全力で止めていれば今わたわたすることにはならなかった。

だけれど、ミミノはどうしてもレイジを止められなかった。彼の強い意志を感じ、竜の討伐戦でなにもできなかった、むしろ命を救われた自分がなにを言えるのかと気後れしてしまった。

「ふっ」

ダンテスは小さくわらった。

「バカだな、ミミノは。一度挑んでダメだったら、もう一度挑めばいいじゃないか。俺たち冒険者は自由が信条だ」

「自由……」

「そう、自由だ」

「……うん、そうだべな。わたしなんだか弱気になってた」

ぱしん、と両手で頬を叩いた。
ミミノの腹が決まった。レイジを、なんとしてでも連れ戻す。
だって、

「レイジは、わたしたちの仲間だもんな」

後日談（後）（前書き）

まとまらなくて長くなりました……。

後日談（後）

そうしてふたりは宿の外へと出た。領都を離れるのに使いそうな馬車の停留所にはレイジらしき姿はなかったが、御者のひとりが「子どもなら見たぞ」と言う。

「『高価そうな鎧を着た冒険者ふうの男に連れられていった』……？」

話を聞くと、どうやらそういうことのようだった。思い当たるのは「永久の一番星」のオスカーだ。

ふたりは冒険者ギルドに向かう――と、向こうから「永久の一番星」の「四元」魔法使いがやってくるところだった。神経質そうな彼女は、しかつめらしい顔をしながらも開口一番、

「……昨日はあなたに助けられたわ。感謝します」

ぺこりと頭を下げた。

「いや、いい。同じモンスターと戦っているときはかばい合うのは当然だ。それよりうちのパーティーにいた子どもを見なかったか？」

「ちょうど私も――私たちも『銀の天秤』を探していました。少年のことについてです」

ダンテスとミミノは顔を見合わせた。

冒険者ギルドに到着するまでに、魔法使いはあらましを説明してくれた。ミミノは、レイジが追われている相手が領兵だということを初めて知った――やはり「銀の天秤」に迷惑を掛けたくないから

彼は出て行ったのだ。
魔法使いは言った。

「冒険者ギルドで待っていればリーダーのオスカーも戻ってくると思います。ただ……」
「ただ？」
「……だいぶ、うるさいですよ」

彼女が言ったことはほんとうだった。冒険者ギルドは、朝だというのに通りにまでその喧噪が聞こえてくる。
なにが行われているのかミミノにはすぐに思い当たった。
追悼、である。
死と隣り合わせの冒険者にとって仲間の死は――言い方は悪いが「よく起きる」こと。
そのたびに立ち止まってはいられないので、彼らはその日は「追悼」する。酒を飲み、杯を重ねて死んだ冒険者の話をする。そして翌日からまた新たな一歩を踏み出す。
とはいえふつう、冒険者ギルドは酒を飲む場所ではない。よほどの戦果があったときか、よほどの犠牲が出たときだけ、ギルドが酒を出す。
昨日の激闘は多くの犠牲者を生んだ。だからさぞかしギルドでの酒盛りは荒れたことだろう――とミミノは想像する。大体、一晩明けた今もってなおギルドからは強烈な酒のニオイと喧噪が漂い出ているのだから。

「『硬銀の大盾』が来ましたよ」

入りながら魔法使いが言うと、即座にギルド内は静まり返った。
その直後、

――うおおおおおおおお！！！！！

とんでもない声が上がった。

「もう身体は大丈夫なのか！？」

「『大盾』の、アンタがいなきゃ俺は死んでたぜ……」

「英雄の到着だ。もう1杯飲むぞ！」

「バカ、来る前から次の1杯頼んでたじゃねーか」

むさ苦しく、さらには昨日の戦いそのままで汚れや軽傷もそのままの男たちがわらわらとやってきてダンテスを連れ去っていく。

「あ、火傷は完治してないから無理矢理飲ませるんじゃないべな～」

ミミノが声を掛けると「おう」と野太い返事が聞こえた。

見たところ、オスカーはいない。彼が戻ってくるまでここで待つしかないだろう。

やれやれ、男ってやつはどうしてこうすぐにお酒に結びつけるのかね――なんて思っていたミミノだったが、その反面、彼らの元気がどこか空元気であるようにも感じられた。

無理して陽気に振る舞わなければ心がくじけてしまうほどに、竜や、その後のクリスタとの戦闘がもたらした災禍の爪痕は深い。

「来たのか、『銀の天秤』」

「ヨーゼフさん」

昨日、竜が討伐されたあとにケガ人の治療のために駆け回っていたのがこのヨーゼフで、ミミノはそのときヨーゼフと再会していた。

過去にヨーゼフとダンテスが戦ったゴブリン掃討戦ではミミノもダンテスのパーティーメンバーとして参加していたので面識はあった。

ミミノは、ヨーゼフの目元が赤いことに気づいた。この街に根を張っていたヨーゼフは多くの知り合いを亡くしたのだろうとミミノは察した。

「……この街を、守れてよかったですね」

「まあ、な……湿っぽいことは飲んで終わりにしようと思ってたんだがな、『大盾』を見たらまた飲みたくなっちまった」

「すみません、まだ火傷が残っているので……」

「ああ、ああ、わかってる。仲間を守った英雄に無理矢理飲ませたりはしねえよ」

ヨーゼフはミミノに、喧噪から外れたテーブルのイスを勧めた。

「ヨーゼフさん。実はウチのパーティーにいた――」

「ああ、ちょっと待ってくれ。先に伝えることを伝えておきたい」

伝えること？　とミミノは首をかしげた。ヨーゼフが自分たちになにを伝えるというのか。

「実はな、『銀の天秤』には報奨金が支払われることになった」

「竜の討伐ですか」

「ああ。鱗はかなりの部分がダメになっちまったが、そもそも図体がデカイからな、それなりの鱗が素材として売れるだろう。他に、牙や目玉はほとんどそのまま残っているし、それに大量の食肉、高級な薬剤に使われる内臓がごっそりとれた。今回参加した冒険者や、死んだ冒険者の遺族にも報奨金が支払われるが、アンタたちは討伐戦で大戦果を上げた。おそらく連邦金貨で数百枚は行く」

レイジが聞いたら「数千万円！？」とひっくり返ったであろう数字だ。

「そんなに……」
「アンタたちだけ特別扱いってわけじゃないから、遠慮せずに受け取ってくれ。サブマスターはな、見た目の通りせこせこしたクソ野郎なんだが、こういう駆け引きとなると生き生きする。公爵家にかなりの金額をふっかけたんだ。まあ、領兵は役に立たず、天銀級冒険者のクリスタ＝ラ＝クリスタが相討ち同然で殺したようなもんだからなあ。ギルドの損害のほうがよほどデカイから当然っちゃ当然だ」
「……」
「なんだなんだ？　せっかく大金が手に入るっていうのにシケたツラしてんなあ」
「いえ……わたしは、なにもできなかったから」
「……アンタは、最後の最後で来たんだったか。仲間も死んだんだろ？　大変だったな」
「あの、竜の討伐についてはどうなっているんだべな？　わたしは黒い剣みたいなのが竜を斬ったように見えましたけど」
「それなんだよ」

ぐっと身を乗り出してヨーゼフは声を潜める。

「……朝から領兵が、アンタんとこの坊主を探して回ってる」

うなずいて、ミミノは、レイジがいなくなったことを話した。そして今彼を探していることも。

「あの坊主はなにをやらかしたんだ？　大体、身のこなしからしてちょっとふつうじゃねえとは思っていたが……すまねえな、そんなこと聞いたって答えるわけがねえな」
「はい。でもレイジくんはわたしの仲間です」

ミミノははっきりと言った。「仲間」という言葉はすんなりと響いた。ヨーゼフとしても、見た目が小さな子どもでも、訓練場で見せた剣の振り下ろし、竜に立ち向かっていった動き、そのどちらも第一線の冒険者と比べて遜色がないものだと思っていた。

「――ガキなら無事だ」

座るふたりの頭の上から、声が降ってきた。

驚いて顔を上げると、そこにあったのはうさんくさい笑顔だった。

「オスカー？　お前、どこほっつき歩いてたんだ」

「そ、それよりオスカーさん！　レイジくんのこと知ってるべな！？」

「ああ。アイツはもう領都を出た。うまいことやっといた」

「お前が手引きしたのか」

オスカーの背後にいたのはダンテスだ。ギルドに入ってきたオスカーに気がついてやってきたのかもしれない。

「……まあな。借りは返すのが俺の流儀だ」

「手間を掛けたな、ありがとう」

ダンテスが頭を下げると、ミミノがイスから立ち上がる。

「ちょっとダンテス！？　なんで『ありがとう』だべな！？　レイジくんを探してたのに、わたしたち――」

「ミミノ、声が大きい」

ダンテスが目配せしたその先、大通りに領兵がいてギルド内の様

子をうかがっている。
レイジを追っているのは領兵――その事実がのしかかってきて、ミミノは血の気が引く。

「……で、でも、ダンテスが変なことを言うから……」
「レイジは自分が追われていることを知っていた。そして一刻も早く領都を出ようとしていたんだ。そうだろう、オスカー？」
「ああ。あのガキ、小さいくせに頭が回るのな。恐ろしいヤツだぜ」
「レイジは俺たちが考えているよりもずっと賢いのかもしれない。そんなレイジがすぐにも領都を出て行ったのなら、それなりの理由があるのだろう」
「でも……」
「ミミノ。これは俺の責任だ」

ミミノは一瞬、言葉を失った。
今までに見たどんなダンテスの顔より、苦しそうだったのだ。

「レイジは話したかったのかもしれない。レイジがすべてを話してくれたら俺たちはアイツを全力でサポートすると言っただろう」
「当然だべな」
「だが、俺が火傷を負っていたからレイジはなにも話せなかったんだ。逆の立場だったら俺だってそうする。今の俺は長距離移動もできないし、足手まといだからな……」
「そんな――」
「これは事実だ、ミミノ。俺のせいでアイツをひとりで旅立たせてしまったんだ」

すでに立っているだけでも相当つらそうなダンテスは、イスに手をついていて、身体を支えていた。

「だがな、ミミノ。俺はすべてに絶望したわけじゃない」

思えば、ここまでダンテスが饒舌になるのは初めてのことかもしれないとミミノは思った。

それだけにレイジのことが気がかりなのだ。

熱に浮かされたようにダンテスはオスカーを見やる。

「オスカーが手引きしてくれたおかげで領都を出たのなら、レイジの行き先を推測することもできる」

「あのガキには、光天騎士王国は止めとけって言っといたぞ。連邦内なら通行しやすいからそっちにしろって」

「いいぞ。広い領都を探すより、俺が早く傷を治して街道を追いかけたほうが追いつける可能性がある」

「ちょ、ちょっと待ってダンテス。あなたが治った以上、ノンを教会に戻さなきゃいけないし、それに……」

ミミノが言い淀むと、ダンテスは小さく笑った。

「ノンはしばらくついてこさせるさ。石化がそう簡単に治るわけないことくらい教会だって百も承知だ」

「えっ!?　教会をだますってこと!?」

「ちょ、ちょっと待て『大盾』の。まさか石化が治ったのか……!?」

「見ろ」

ダンテスはヨーゼフの目の前で左手をグーパーして見せた。

「そんな……どうやって」

「レイジが治してくれた。あの子は俺たちの知らない薬の存在を知っていたんだ。最初俺は、レイジが追われているのは禁制の品にで

も手を出したせいじゃないかと思ったんだが違うようだ。となると、逃亡奴隷であることが追われている理由かもしれん」

ダンテスの推測に、ヨーゼフもオスカーもなにも言わなかった。否定をしないということは肯定だということだ。

ダンテスはミミノに視線を向ける。

「ミミノ。俺はレイジに救われた。同じように、お前にも救われた」

「……わたしにも？」

「ああ。石化になり、そのまま死ぬのだと思っていた俺をお前は見捨てなかった。ノンといっしょにここまで来てくれた」

「でも、助けてくれたのはレイジくんで――」

「そのレイジを助けたのはお前じゃないか。だから、お前がいてくれたからこそ、俺は生きている。生きていける。これからの未来に希望を持っていられる」

「……うん」

「だから今度は、お前がワガママを言え。教会にちょっと待ってもらうことくらいたいした問題じゃないさ。俺は全力でお前をサポートしよう」

その言葉に、ミミノの胸が熱くなる。

ダンテスとパーティーメンバーでいられることが、たまらなく誇らしく感じられた。

「ダンテス。わたしレイジくんを追いたい。あんなお別れじゃイヤだべな。レイジくんが奴隷だっていうなら、あの子の身柄を買い戻してあげたい！」

ミミノが言うとダンテスはしっかりとうなずいた。

「ああ。お前の思いはしっかり受け取った。レイジを追おう」
「うん！」

すでにふたりの中で、レイジはパーティーの一員なのだ。たった数日いっしょにいただけだけれど、ともに竜との戦いに身を投じ、ミミノの危機を助け、ダンテスの石化を解いた。

（わたしたちは、返せないくらいの恩をレイジくんに感じてるんだ）

それは奇しくも――レイジが考えていたことと同じだった。

ふたりはギルドに安置されていたライキラの亡骸に接し、最後のお別れをした。ライキラは、冒険者の共同墓地に葬られるということだった。

その別れは、新たな出発の始まりでもあった。

この日、竜の出現と討伐に関する情報は長距離魔導通信を通じて各国に届けられた。天銀級冒険者クリスタ＝ラ＝クリスタの死についても。

表向きは「相討ち」でクリスタが討伐したことになっているが、次期公爵であるダニエル＝アッヘンバッハや、連邦のトップであるゲッフェルト王たちは真相を知っていた。

「星６つの【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】は竜すら一撃で殺す」天賦である――。

彼らは血眼になって逃亡奴隷ラルクを探した。だが、その行方は杳として知れなかった。もうひとりの奴隷「名無し」もまた領都から煙のように消えてしまった。

冒険者パーティー「銀の天秤」はダンテスの傷が癒えるまで3日を要したが、「仲間を探す」という目的のもと、新たな旅に出ることになる。

そして――4年の月日が流れた。

後日談（後）（後書き）

行くぜ、新章！

でも明日は登場人物紹介を挟ませてください。
明後日から新章予定です。

前々回の後書きでブックマーク＆★の評価での応援をお願いしましたが、おかげさまで日間1位になれました。ほんとうにありがとうございます。
今作では初めての1位で（最高2位だったので）、めっちゃうれしいです。
引き続きがんばります。

オバスキ・キャラクター表（1章終了時点）（前書き）

1章に登場するキャラクターたちです。ライキラのスキルだけネタバレしていますが、2章入って早い段階で書くつもりなのでここに載せておきます。（忘れてたらすみません）

オバスキ・キャラクター表（1章終了時点）

★レイジ
黒髪黒目―１０歳―ヒト種族―男
前世は日本人の転生者。１６歳の時学校帰りに事故死した。
【森羅万象（ワールド・ルーラー）１０】

★ラルク
金髪紫目―１３歳―ヒト種族―女
レイジと同じ境遇で、鉱山奴隷として働いていた少女。
【腕力強化１・スタミナ強化１・影王魔剣術（シャドウキング）６】

★ミミノ
飴色髪青目―２０歳―ハーフリング―女
「銀の天秤」のメンバーで、薬師。ハーフリングは薬に関して独自の知見を持っている。
見た目は子どもだが、それはハーフリングの特性。中身は大人。
困っている人を見かけると放っておけない。
【魔力強化１・魔法適性強化１・魔力操作１・花魔法２・土魔法２・生活魔法（コンビニエント）１】

★ダンテス
緑髪緑目―３５歳―ヒト種族―男
「銀の天秤」の大剣使いだが、元々は大盾を操り「硬銀の大盾」なんて二つ名もあった。
左半身（特に腕、から首の下にかけて）石化が進んでいる。興奮するとよくしゃべる。
ノンの父で、奥さんの話はあまりしたがらないのでミミノもよく

知らない。
【腕力強化１・背筋力強化１・腹筋力強化１・手先が器用１・大剣術２・免疫強化２】

★ノン
緑髪緑目―１６歳―ヒト種族―女
にこにことおっとりしているが、なにを考えているのかよくわからないタイプ。
そのため、油断は禁物だ。
教会で修道女としてお勤めしていたが父の石化を知り、治療の旅に出ることになった。
胸の大きさは包容力の表れ。
【神感強化１・祈祷術１・回復魔法２・補助魔法２・神聖魔法２】

★ライキラ
濃灰髪灰目―１８歳―狼系獣人―男
滅びた「闇牙傭兵団」の生き残りで、いつか、仇である天銀級冒険者クリスタ＝ラ＝クリスタを殺そうと思っていた。
チンピラ感があるのは傭兵団の雰囲気がそんな感じだったので。
【柔軟性１・身体強化３・嗅覚強化１・スタミナ強化１・疾走術２】

★ヒンガ老人
白髪灰目―？歳―ヒト種族―男
六天鉱山で奴隷たちに争いが起きたときに仲裁役のようなことをやっていた老人。
博覧強記で多くのことをレイジに教えてくれた。
孫娘の名前は「ルルシャ」。

★ヨーゼフ
スキンヘッド灰目―３５歳―ヒト種族―男

ムキムキの冒険者ギルド訓練官。
かつては「消えぬ光剣」という二つ名を持っていた。そのときの武器は細剣（レイピア）だったが、大型モンスターにレイピアは適さないので両手斧（バトルアックス）で戦った。
「銀の天秤」の前身パーティーにおいて、ダンテス、ミミノはヨーゼフとともに戦ったことがある。

★オスカー
赤髪赤目―27歳―ヒト種族―男
上等な鎧を装備した灰銀級冒険者。「永久の一番星」というパーティーのリーダー。
先ず形から入るタイプ。
メンバーに、「四元魔法（火土風水）」を使える魔法使いがいる。仲間の力で灰銀級にまでランクアップしたのではという疑惑はあるが、結構強いし、仲間からは慕われているようだ。

★クリスタ＝ラ＝クリスタ
金髪赤目―？歳―ハーフエルフ―男
天銀級冒険者で、「紅蓮の竜殺し」と呼ばれる。
単身で行動しているが、彼の操る魔法は一軍に匹敵するほど。「アッヘンバッハ公爵領領都竜討伐戦」にて戦死。
【火魔法4・魔力量増大2】（残2枠は呪いのために使えない）

★ゼリィ
赤茶髪黄目―18歳―猫系獣人―女
「闇牙傭兵団」の生き残りでライキラを見かけると金をたかっていた。本人は偵察系と言っていたが実力は不明。

★ドミトリー＝フォン＝アッヘンバッハ
アッヘンバッハ公爵領を治める公爵。鉱山にて死亡。

★ダニエル＝アッヘンバッハ
ドミトリーの長男で、順当に行けば公爵領を継ぐことになる。

★ゲッフェルト王
キースグラン連邦政府の最高長官でもある権力者。連邦の首都ヴァルハラにいる。

オバスキ・キャラクター表（1章終了時点）（後書き）

2章は明日から開始します。絶賛プロット練り込み中……（とか言いながら大体行き当たりばったりで書いてるんですけども）。

1（前書き）

第2章もできる限り朝夕の2回更新の予定です。

1

――ナメられているのは最初からわかっていた。

「今日いちばんの下役をお見せしろということでお出ししましたが、なにか気に障りましたかな？」

気に障ったか障っていないかで言えば、最初から障りっぱなしだった。

内臓でも病んでいるのか肌に黄疸が出ているこのデブ野郎は、侮蔑の色を隠そうともせずに「最低ランク」の商品を「最高級の品」だと言い放った。

芋虫のような手指には多くの指輪を嵌めて、首に巻いたスカーフには金糸で刺繍が施されてあった。どこまでも悪趣味。

いるんだよね、こういう手合いは、どこの世界にも。「人は見た目が９割」だなんていうけれどこれでも僕の着ている服は最上級のシルクを使ったものだし、植物油でなでつけられた青灰色の髪につけた髪飾りも最上級の品だ。パリッとしたダークスーツ姿の僕は――この世界にスーツがあったことが驚きなんだけど――侮られる隙なんてない。

……年齢以外は。

いやさ、この４年で身長も一気に伸びて今じゃ１６０センチだよ。まるで今まで小さかった分を取り戻そうとでもするかのように伸びた。連れ合いの猫系獣人ゼリィには「なんだか竹みたいっすねー。ナハハハ」とか笑われたほどには伸びた。そしていまだ平均身長とは言わないけど明らかに小さいということはないと思う。

だけど問題があるとするならやっぱり顔なんだよね。

顔が年齢相当、１４歳の顔なんだ。こういう手合いは「見た目」

で――そこには「見た目年齢」も含まれるワケで――判断してくる。

――なんだガキかよ。金持ってそうだし、ちょっくら引っかけてやるか。

ってね。

「わたくしの目には、病人とケガ人しかいないように見えますわ」

立っている僕の前で、ふかふかのイスに座っているお嬢様が――ナメられるなら僕よりもお嬢様のほうだと思う、なんせ彼女はまだ12歳だ――扇子をぺしぺしと自分の手のひらに叩きながら言う。

お嬢様が着ているドレスは彼女の瞳と同じ緋色で、スカートにつけられた見事なひだはトップクラスの職人によるものだ。流れるような明るい金髪にまぶされたラメは黄金の川に沈む宝石のようでもあった。このラメ、なんと使い捨てである。これだけでこのお嬢様が信じられないくらいのお金を持っていることがわかるし、しかもこんなデブ野郎に会いに来ている時点で、退屈な日常にちょっとしたスパイスを求めていることだってわかる。

誰だってわかる。

そう、だからナメられる――世間知らずのお嬢様を騙すくらい簡単だ、と。

右から左に流れる前髪の下、こぼれそうなほどに大きいお嬢様の緋色の瞳は、今、わずかに怒りに染まっている。僕はなるたけその瞳を見ないようにしている。彼女の目は、魔性の目だ。見た者を虜にするほどに美しい。

「そうですかな？　ではこのあといっしょに食事でもしながら下役の話をしましょうかな？」

ほら。デブ野郎がやに下がっている。最初はバカにし、次に騙そうとし、今はこの少女を――ロリど真ん中のお嬢様を――どうにかしてやろうと思っているのだから救えない。

だけれど、このデブ野郎がどうしようもないバカ者なのかと言えばそういうことでもない。これはふつうの反応だ。むしろデブ野郎はがんばったほうかもしれない。

僕とお嬢様がいるここは、クルヴァーン聖王国の聖都クルヴァーニュにある「人材斡旋所」のうちのひとつだ。

人材斡旋、である。ふつうに考えると「働き手の足りないお店に、人を派遣してくれる」ような場所だ。

だけどここの所長は見ての通りデブ野郎でしかもコイツは相当な金持ちだ。室内の装飾もワインレッドの絨毯に巨大なシャンデリアがぶら下がっていて――好きかどうかや趣味の善し悪しは別として――お金が掛かっている。

人材斡旋でそこまで儲けられるのか？

その答えは――この部屋の壁際にあるスペース、一段高い小上がりのような場所、そこに並んでいる男女だ。

手錠を嵌められ、足にも鎖が巻かれてある。上下ともに服は着ておらずスッポンポン。お嬢様の言ったとおり、腕がなかったり、明らかに病気だったり、身体がただれていたりと――五体満足の健康体じゃなかった。こんなところに素っ裸で立たせるよりも病院に入れたほうがいい。もちろん、そんなことしてくれないくらいにはこの世界での命は軽くて安いんだけどね。

「この人たちが『下役』だとおっしゃる……？」

お嬢様はひっそりと眉根を寄せる。そうしているぶんには、憂いを帯びた、とんでもない美少女だ。

「下役」――ふつうの意味ならば「部下」とか「配下」という意味の言葉。

だけれど、素っ裸で並べられている時点で「部下」や「配下」のはずがない。

詰まるところ「奴隷」の隠語だった。

ここ、クルヴァーン聖王国では「奴隷」の取引や所有が違法であるため「下役」なんていう言葉で売り買いされ、契約魔術で縛り上げる。それが「奴隷」となにが違うのか。

「ま、大商会のお嬢さんには少々刺激が強かったようですな。言うなればコイツらは奴隷ですわ」

デブ野郎はパチンと指を鳴らした。

部屋の扉が開くと、ぞろぞろと屈強な男たちが現れた。よかった、さすがに今度は洋服どころか鎧を身につけている。これで全裸集団（フルチン・オン・パレード）だったらさすがにお嬢様のお目汚しで彼女のパパから大目玉を食らうところだ。

「ふむ。この人たちも――」

ヒト種族、獣人、魚人、ドワーフ……種族はバラバラだが、誰しもが「腕に自信あり」という顔をしていた。

そして左手に、腕輪のように入れ墨の痕――。

僕は思わず自分の左手をさすった。

「無論、奴隷ですな」

「これはあなたの所有？」

「当然でしょう。さあ、今から『気が変わって帰る』はナシですぞ」

デブ野郎は舌なめずりしてお嬢様をつま先から頭のてっぺんまで

舐め回すように見る。
　これだけの男を用意してお嬢様を半ば脅迫している……手籠めにしようというのだろう。
　まあ、確かに、お嬢様は「公平調和商会」なんていうありもしない商会の所属を名乗ったのだし、聞き知らぬ名前だとなればこの聖都にはない商会――ちょっとばかし消息が途絶えたとしてもどうにかこうにかもみ消せると思ったのだろう。僕以外のお供もいないしね。
　それにこの美貌だ。ロリということをのぞけばデブ野郎の気持ちもちょっとだけわかる。ほんのちょっとだよ。
　でもせめてあと5年は待った方がいいとは思うけどね。

「ええ……気が変わるなんてあり得ないわ」

　お嬢様は、冬の夜のように底冷えするような声を発した。

「こいつは真っ黒なのだわ。クルヴァーン聖王法典第17条『聖王国民の権利』侵害に該当します」
「……は？」

　デブ野郎はきょとんとし、それから不意に顔を赤くする。

「お前……ただの箱入り娘かと思ったら、最近ウワサになっていた『奴隷商潰し』か！？」

　おお。
　いつの間にか「奴隷商潰し」なんていうそのものずばり直球過ぎる二つ名みたいなのがついていたなんて。

「はん！　拍子抜けだな！　ウワサの『奴隷商潰し』がこんなガキ

で、しかもお供がこれまたガキ」

ガキガキ言うな。それで傷つく１４歳もいるんですよ。

ちなみに僕の前にいる１２歳は内心ブチ切れているはずだ。子ども扱いをなにより嫌う、難しいお年頃なので。

「お前らは大方とんでもない天賦持ちなんだろうけどな、あいにくこの部屋は天賦が使えない魔術を掛けている空間だ。そっちがその気ならこっちだって手加減しねえ。――おい！　お前ら、このお嬢ちゃんを捕らえな！」

デブ野郎が言うと、「へい」と奴隷たちは一斉に返事をした。

「……レイジ」

「はい」

「わたくしを、守るのだわ」

その瞬間――取り囲む男たちの身体は僕らを中心に放射状に吹っ飛んだ。その巨体は壁に激突し、あるいは棚をへし折って並んでいた蒸留酒の瓶を破壊する。さらには入口の重厚なドアをぶち破って外へと飛んでいった。

「……え？」

デブ野郎は今目の前で起きたことに思考がついていかないようだった。

魔法の制御があまく、僕の前髪が乱れたのでそれを直しながら僕は口を開いた。

「これまでつぶしてきた奴隷商は大小合わせて５つ」

指を広げてデブ野郎に突き出した。

「その全部が、応接室には天賦禁止の魔術を施していたよ。なんで自分のところだけ特別だと思っちゃうんだろうね？」

「いや、そんな、えっ……？」

「天賦がなくったって魔法は使えるんだ。みんな、天賦に頼りすぎなんだよ……おやすみ」

僕はデブ野郎に近づくと手をかざした。脂ぎった顔を触りたくはなかったけれども、触らないと発動できないので仕方なく触る。

僕が放った【闇魔法】によってデブ野郎は落ちるように眠りに落ちた。

「終わった？」

「終わりましたよ」

「それじゃ、衛兵を呼ぶのだわ！」

「はいはい」

僕は開かれた窓から手を出して手のひらを天に向けた。そこに現れた炎の鳥は、夕闇の聖都上空を飛んでいく。あと数分もすれば衛兵の宿舎にたどりつき、これまでどおり衛兵隊長がこの商館へ突入してくれることだろう。

目を覚ましたデブ野郎はなんと抗弁するだろうか？　むしろ被害者ヅラをして――これまでの奴隷商と同じ反応だ――自分は少女と少年に襲われたと言うのかもしれない。

だけど彼はそこで初めて知るのだ。その少女が何者なのかを。

「行きましょう、エヴァお嬢様。お父様が――伯爵閣下がお待ちですよ」

僕はスィリーズ伯爵令嬢であるお嬢様とともに商館を出た。
建物の陰でこちらの様子をうかがっていた、フードの獣人、ゼリィに小さくうなずくと彼女は手をひらひらとさせて闇に溶けるように姿を消す。

（そう言えば）

なんで――こんなことやることになっちゃったんだっけな。
ああ、そうそう。
ちょうど1年前、僕が伯爵の命を助けたのがすべてのきっかけだったっけ。

1（後書き）

前話のキャラクター紹介にてクリスタが抜けていましたのでこちらに書いておきます。
まあたいした情報ではないです（言い切った）。

★クリスタ＝ラ＝クリスタ
金髪赤目―？歳―ハーフエルフ―男
天銀級冒険者で、「紅蓮の竜殺し」と呼ばれる。
単身で行動しているが、彼の操る魔法は一軍に匹敵するほど。「アッヘンバッハ公爵領領都竜討伐戦」にて戦死。
【火魔法４・魔力量増大２】（残２枠は呪いのために使えない）

2

回想しようと思ったけれど、伯爵、ヴィクトル＝ドゥ＝スィリーズの命を救ったという出来事はさほどドラマチックではなかった。僕が「あ、そう言えば」なんて思い返す程度の記憶だ。

そんなことより、猫系獣人のゼリィさんが意外と活躍してくれたんだよね！　それがよかったです、はい。

アッヘンバッハ公爵領の領都を抜け出た僕は、ゼリィさんの手引きで光天騎士王国へと向かった。関所は確かに一か所しかなかったんだけれど、裏稼業の人が通る怪しげな裏ルートがあって、ゼリィさんはそんな裏技っぽいことを使って国境越えをした。

ちなみにこれをやるのに、お金が少々掛かる。その「少々」すらゼリィさんは手持ちがなかったので、領都で小銭を稼ぎながらしのいでいたそうだ。

光天騎士王国は騎士王が治める国で、軍隊がものすごく強化されているせいで冒険者の活躍できる場がほとんどなかったので素通りした。

その先にあるのが、クルヴァーン聖王国。

ここはヒト種族だろうと獣人だろうと関係なく暮らしている国だ。とても活気があり、一方で流れ者による犯罪も多い。いろいろな意味で懐が深い国だと僕は思う。

あと、

「聖王の威光はあまねく国中を照らす」

だとか、

「聖王は万物を平安に治むる」

だとか、聖王上げがすごい。
僕は聖王都クルヴァーニュで、当面は冒険者登録をして天賦【森羅万象（ルド・ルーラー）】を磨いていくつもりだった――んだけども。

「冒険者になって、他の冒険者が戦ってるところとか見てみたい？　無理無理無理無理～、みんな自分の手の内は明かさないっすよ。ましてや坊ちゃんはなりが小さいっすからねぇ～、誰もパーティーになんて入れたくないだろうし。なんならあーしが冒険者で稼ぎますから、坊ちゃんは手堅いところで働いたらどうっすか？」

なんてゼリィさんが言うものだから、ぐぬぬと歯噛みしながらも「確かに……」とうなずかざるを得ないところもあったので、ゼリィさんの意見を採用した。
ここまできてもゼリィさんは僕についてくる気らしい。まあ、別にいいんだけど。なれなれしくてたまに鬱陶しい以外は悪い人じゃないし。
僕はと言えば、「聖王騎士団第１８隊の掃除係」という名誉ある職にありついた。なにを掃除するのかって話だけど、精強で鳴る聖王騎士団はとにかく訓練が厳しい。騎士たちは寮に戻ると泥のように眠り、たまの休みは、お金だけはあるので街で大騒ぎするという生活をしていた。

部屋がクッソ汚かった。
あと洗濯物も異常に溜まってた。

僕は【水魔法】【火魔法】【風魔法】を組み合わせて騎士たちの部屋をピカピカにした。洗濯もそう。雨は少ないけれど、降り出すと１週間は止まないという特殊な気候の聖都で、僕は室内乾燥をすることができたので大いに喜ばれた。

騎士たちは部屋がピカピカになるとチップをはずんでくれるし、しかも時間があれば騎士の訓練の見学もできて、学習できる天賦が溜まる溜まる……。

ああ、伯爵との出会いはもう少し先だよ。

ともあれ僕は１０歳にして「伝説の掃除夫」なんていう謎の二つ名をもらい、騎士たちに重宝され、お湯を出せるから食堂の調理場ではおばちゃんたちに重宝され、騎士の武具を修理する鍛冶工房もキレイにしたので出入りのドワーフたちからも重宝された。

聖都は広いので休日は観光したり、美味しいものを食べに出かけたりした。

なんていうか、聖都ライフをエンジョイしすぎだろ僕、って感じではあったね。同年代が近くにいなかったので友だちはできなかったけど。

僕のウワサは他の騎士隊にも鳴り響き、いくつもの隊を渡り歩いて掃除しまくって、変な話、騎士並の給金をもらえるようになってしまった。とはいえお金は副産物で、僕としては合法的に魔法の練習ができることで自分の中で積み重なっていく熟練度合いがうれしかった。魔力量もどんどん増えていった――けれどそれはクリスタ＝ラ＝クリスタを見て学習した【魔力量増大】の天賦を徐々に使いこなせるようになっていっただけのようだ。

僕は密かにトレーニングも続けた。身につけた天賦は使い込まなければ使いこなせない。そこで編み出したのが「【森羅万象】を解除して天賦を使うこと」だった。

【森羅万象】を外すと学習した天賦はすべて使えなくなるのだけれど、その記憶は頭に残っている。だから記憶を引っ張り出しながらその通りに身体を動かして熟練値を上げていくのだ。そうすると不

思議なことに【森羅万象】を戻したときに天賦への理解が深まっている感じがした。

これのおかげで僕は天賦を無効化されても戦えるようになったというわけ。

さあ、そんな掃除夫ライフでお金を貯め、むしろ「あーし冒険者として稼ぎますわ～ナハハハハ」とか言っていたゼリィさんが博打にドハマリして借金まみれになり、僕が肩代わりして貯金が吹っ飛んだりしつつ3年が経っていた。

いい加減、僕も自分で行動する頃合いかと思っていた。

今は動きがわからないけれど、僕は「姉」のラルクにもう一度会いたいと思っていた。

それと、僕にいろいろなことを教えてくれたヒンガ老人の孫娘ルルシャに、会えるなら会いたいと思っていた。

それには大都市を周りながら情報を集めるべきだ。

とかなんとか考えていた矢先のこと、春先の深夜、聖都を走る馬車と護衛の騎馬が数騎あった。僕は家々の屋根の上を飛び移りながら【疾走術】と【跳躍術】の練習をしていたところ、その馬車が突然ゴウッと燃え始めた。

御者があわてて馬を停め、中にいた貴族らしき人物――まあ、これがスィリーズ伯爵だったんだけど――を救助する。だけど、そこまでだった。

飛来する矢が御者を貫くと彼は倒れ、馬車を囲んでいた騎士たちも次々に倒れる。

（うまいな。矢が黒く塗られてあるから、かわしにくいんだ）

僕は襲撃者の知恵に感心しつつ、どうしようかと迷っていた。

（これは助けるべきなんだろうか？　でも、あの貴族がどんな人かもわからないし……。ひょっとしたら極悪人かもしれない）

これもまた後に、スィリーズ伯爵が「極悪人」というより「性悪男」だと判明するのだけれども、それはさておき僕は状況を観察していた。

ただひとり伯爵が燃える馬車を背に残ると、５人の暗殺者が半円状にぐるりと囲んだ。黒服に目元だけをのぞかせたマスクをつけている暗殺者たちは、なにかを伯爵に告げている。

「――覚悟は……依頼主……なるべく苦痛を感じさせて……」

僕が【聴覚強化】で耳を澄ませると、そんな物騒な言葉が聞こえてきた。

これは確実に殺されるヤツだな。でも、貴族は泰然自若としてまったく怯んだ様子もない。

僕はその貴族をじっと見つめる。

ふわりとした金髪は暗い夜道であっても美しく、憂いを帯びた赤い瞳は男の僕が見てもハッとするほどに美しい。

年齢は２０代後半だろうか。

（ああ、この人は……死ぬことをなんとも思っちゃいない）

そのとき僕が思ったのは、竜を前に、仇である天銀級冒険者を殺し、本人もまた竜によって引き裂かれて死んだライキラさんのことだった。

3

気づけば僕の身体は動いていた。
屋根から飛び降り、音も立てずに裏路地に着地する。【視覚強化】【夜目】【聴覚強化】【嗅覚強化】を駆使しても他に人の気配はないので、暗殺者は5人で全部だと見て間違いない。
この貴族が極悪人かどうかは知らないけれど、なんとなくそうしたほうがいいような「気がした」だけではある。

「まずは1本目、これはお前によって滅ぼされたヌーグ子爵のぶんだ」
「うぐっ」

暗殺者が手にしているのは十字弓（クロスボウ）だ。携帯しやすく命中率も高い。
矢が放たれると、貴族の左手に突き刺さり手のひらを貫通した。
痛みに顔をゆがめたが相変わらず貴族は感情を見せない。

「……ふん。『冷血卿』に流れる血も同じ赤か」

次の矢をつがえるというとき、僕はすでに彼らの背後１０メートルの距離にいた。
突然現れた僕に貴族は当然気づいていただろうけれど、表情を変えるどころか視線すら向けなかった。
……すごい人だな。
問題は、ここからどうやって5人を倒すか。一手でもミスればプロの暗殺者ならば逃げたり僕を迎撃する前に、まず貴族を殺すだろう。そうなれば僕がのこのこ出てきた意味はない。
人を無力化するのに巨大な魔法は必要ない。ましてや暗殺者と貴

族の距離が近い今、大魔法を使ったら貴族まで巻き添えにしてしまうだろう。
僕は手をグーにして、1から順に数えるようにした。

（ひぃ、ふぅ、みぃ……）

指の先端に現れたのはピンポン球大の黒い岩石だ。【土魔法】の初歩の初歩である「ストーンバレット」とかいう魔法なのだけれど、それはあくまで1つを出現させて飛ばす場合だ。
それに本来、出現する岩石は灰色。黒にしたのは暗殺者のやり方を真似したのである。

（よぉ、いつ）

5本指すべてに出現させて出現を維持するのは並大抵の魔法コントロールではできない。ベテラン魔法使いでも3つが限度と言われている。

「っ！」

それを見た貴族が初めて驚きを顔に表した。

（ああ、なるほど。驚くとそういう顔をするんだね。人間味がない人かと思ったけどそんなことはなくてよかった――）

でもね、顔色を変えたらそりゃ気づかれますよ。

「ん……！？　まさか援軍が――ぶぎゃっ」

僕は即座に5つのストーンバレットを放った。それらは目算通り、

まるで吸い込まれるように暗殺者たちの後頭部に激突して彼らを昏倒させる。

この技、実は【火魔法】でやって「五指爆炎弾（フィンガー・フレア・ボムズ）」ってやりたかったんだけどね。この世界じゃ誰も知らないし、ましてや日本にいたときですら僕の周りには知っている人はいなかったと思われる。「ダイの大冒険」は最高だよ。

「……」

一瞬で暗殺者を沈黙させた僕に、貴族は呆然としていた。

うーむ、近くで見ると恐ろしいほどのイケメン。

対して僕は、トレーニングでやぶけてもいいように、つぎはぎだらけの布の服に、首には手ぬぐいをぶら下げているというその日暮らしスタイル。

目の黒さだけ無視してもらえれば、髪の毛の青灰色はこの世界ではよくあるものだから気にも留められないだろう。ちなみに青灰色なのは、ミミノさんに教わった染髪剤をこっちで手に入る素材で作ったところ、こんな色に変わったというだけのことだ。

「君は何者ですか」

声までイケボと来ている。神は二物を与えずって言葉はウソなんだね。

「通りすがりの掃除夫ですよ。ああ、お仲間は全員麻痺毒で動けないだけのようですから命に別状はなさそうですよ。襲撃者のほうは……たぶん1時間くらいは目が覚めないでしょうけど一応腕だけ縛っておきますね」

【森羅万象】によると倒れている騎士も御者も問題ないということ

だった。ちなみにこの騎士は、僕が掃除夫として出入りしている聖王騎士団の人ではなかった。こちらの貴族が直接雇用している騎士だろうと思われた。

僕は手際よく暗殺者のマスクを剥ぎ取り、後ろ手にしてその布で縛り上げた。

「それじゃ、僕はこれで」

見返りも礼の言葉もなにも要らない。僕はさっさとこの場を後にしようと思っていた。

夜中とはいえそろそろ付近の住民も気がつくだろうし、取り調べなんて受けていたら明日の朝からの掃除が滞ってしまう。

……というのは建前で。

（なんかこの人、怖っ）

殺される直前になっても感情を揺らさず、今もなお僕をじっと見ている。

この人のそばにいるのはよくない気がしたのだ。

「君は、何者ですか」

さっきと同じ質問が繰り返された。

「通りすがりの掃除夫ですよ。では」

なんか言わないと永久に同じ質問を繰り返されそうな気がして、僕はそれだけ告げるとさっさと逃げ出した。本気で走ったからついてはこられないだろう――。

というわけで、こと救出シーンに関してはさほどドラマチックじゃないのだ。
問題はこの次だ。
それから数日した昼下がり、僕は聖王騎士団第１８隊寮の寮監から呼び出された。

「おお、掃除少年、わざわざ呼び出してすまなかったね」

ちょびひげ、小太りという人の良さそうな寮監は僕に告げる。

「スィリーズ伯爵閣下が君に『掃除』を依頼したいそうだ」

貴族が僕に掃除を？

「『伝説の掃除夫』の勇名は貴族社会にも轟いているのかな。ははは」
「ああ、そういう……ことなんてあります？」
「あるだろうね。ここにいる騎士たちの大半は貴族の血縁者だよ。彼らが実家に帰ったときに君の話をしたとしたら、十分にあり得るさ」
「はあ、そういうものですかね」

詰まるところ僕は油断していたというわけだ。
で、掃除夫の格好で出かけていくと「美術館かな？」と思ってしまうほどの巨大なお屋敷を案内されて、数日前に助けた貴族がそこにいた。
大きな一枚ガラスを何枚も使ったバルコニーは明るい。これほど均質な薄さで、混じりけや気泡の入っていないガラスを手に入れるのに一体いくらつかったのだろう？　白のテーブルとイス、緋色のクッションに座り、優雅にお茶を飲みながら書類に目を通していた

伯爵はまるで一枚の絵のようだった。まあ、その背後に2人の騎士が直立不動で待機しているし、僕の後ろにも3人の騎士がいるんだけどね。あ、伯爵の後ろのひとりは襲撃されたときにいた騎士だ。

聖王騎士団とは違い、貴族が独自に雇っている騎士は見た目が違う。聖王の象徴である目が覚めるような明るいブルーは聖王騎士団が使う。こちらの騎士たちは緋色のマントに白く塗られた金属鎧を身につけていた。あの夜はつけていなかったのに今はつけている…

…ということは、あの襲撃で警戒度を高めているってこと？

機械で製造しているわけではないのですべての装備品が一点物のハンドメイドというこの世の中で、これだけのものをそろえられるのだからこちらのお貴族様はとんでもないお金持ちということだろう。

もちろん聖王騎士団の装備はさらにお金が掛かってるんだけど、あれは税金で造ってる。

伯爵は僕に気がつくと薄い唇を開いた。

「先日は命を救ってくれてありがとう。感謝します」

「……なんのことでしょうか？」

僕はと言えば、あの少ない情報だけで僕にたどり着いたこの人を、警戒しない理由がなかった。

「お掃除の依頼を、ということで来ました。見たところお屋敷の中はピカピカですし、お庭の木々も見事に剪定されています。騎士様たちの鎧も美しく整っているので僕の出番はないようですね」

「娘の護衛を頼みたいのですよ」

おっとぉ、まったく話が噛み合わないぞぉ？

4

「閣下。それは……」

と騎士のひとりが苦々しそうに言うと、伯爵本人は、「黙っていなさい」と冷たく告げる。

その間に僕は逃げ場の確認をする。なにかあったらあの窓ガラスを割って逃げよう……そしてもう貴族を助けたりして面倒ごとになんて巻き込まれないんだ……そうしよう……。

「遠い目になっているところ、すまないが、こちらも急いでいましてね。私が死ぬと、娘も危ういのです。貴族社会の荒波に11歳の娘がもまれて生きていけるはずがありません」

「なるほど？　では掃除の必要はないということですね？」

「娘の敵を掃除してください」

誰がうまいことを言えと。

「レイジさん。調べましたがあなたの経歴はまったくわからない。3年前に聖王国に入国し、現在は聖王騎士団の掃除夫として活躍……まあ、掃除夫の活躍というのが意味不明ですが。一度、ゼリィという冒険者の借金を肩代わりしてますね？」

この数日でそこまで調べられるんだな。驚くっていうか感心っていうかむしろ引いた。

「……ここまで話しても沈黙を保ちますか。あなたは私が考えていた以上の人物のようです」

いや、引いてるだけです。妙なところで僕の株が上がっているのが怖い。

「お前たち、全員下がってください」
「しかし」
「命令です」
「……はっ」

騎士たちは僕を憎々しげににらみつけながらバルコニーを出て行った。先に出ていきたいのは僕のほうなんだけども。

金属鎧がこすれてガチャガチャ歩くたびに音が鳴ったが、彼らがいなくなるとそれはそれで静寂が耳に痛い。

「……あの、なんなんですか、急に？　ちょっとついていけないんですが」
「私は一度死んだようなものです。わかりますか？　聖都でも油断していなかったはずなのに、知らず知らず気が緩んでいたのでしょう。大失態です」
「四六時中警戒しっぱなしなんてのはできませんよ」
「あなたほどの強者でもそう思いますか？」
「……僕はたいして強くありません」

これは正直にそう思う。僕の力は【森羅万象】によってもたらされたものだ。

ほんとうの強さとは、極限の状態でわかる。ダンテスさんとか強かったなぁ……ぎりぎりのぎりぎりでも仲間を守るんだもん。石化状態が解けたダンテスさんはもっと強くなってるんだろうな。

「謙遜、ということではないようですね。むしろ好ましく思います」

「伯爵様が掃除夫にそんな言葉を使わないでください」
「あなたはなにが必要ですか？　娘の護衛を引き受けてくださるのでしたら、あらゆる条件を呑みましょう」

あらゆる条件、という言葉が引っかかった。
実のところ僕がやるべきこと――ラルクの消息を探すこと、ルルシャという人物を探すこと、この2つは、一般個人がやるには限度があるのだ。
大都市を回って冒険者ギルドで聞き込みをやるくらいしか今のところ思いついてない。住民票のデータベースなんてものは存在していないし、教会が記録している出生録だって公開されていない。

（でも、貴族なら？）

伯爵、というのは――このクルヴァーン聖王国に貴族が何人いるのかは知らないけれど、それでも伯爵ならばかなりの地位だろう。聖都にこんなに大きい家を構えているのだし。
護衛か……。
この人自身を守るのは難しいかもな、という気がしていた。だってこの人はきっと、いろんなところに行くよね？　場合によっては聖王様に会ったりするかも。そんなところに僕みたいな少年がくっついていくわけにはいかないだろうし、逆に警戒されそうだ。
では娘さんなら？

（11歳って言ってたっけ。それなら僕と2つ違いか。いっしょにいてもおかしくはないよね……ていうかこの人ってもしかして10代でパパに！？）

どうでもいいところに驚いていると、

「どうでしょうか？　悩んでいるということは脈があるということですか？」

この人はもう、僕が命を救った人間だと信じているし、これ以上誤魔化すのは無理だな……。

多少の危険ならば護衛もできると思うけどなぁ。

「……ちなみにお嬢さんの危険度はどれくらいですか？」

「私に比べれば半分以下でしょう。私が死ねば娘は淘汰されるだけだと敵対貴族は考えるでしょうし」

それなら、まあ、悪くはないのだろうか。

「伯爵。護衛ということですが、たった一度あなたの命を救った僕をどうしてそこまで信用するのですか」

「あの場にいた騎士たちよりもあなたひとりのほうが役に立ったのです。その事実で十分ではありませんか」

「大切な娘さんを任せる理由としては弱いように思いますよ」

「この聖都で命を狙われるほどには逼迫しています。平時ならば、なるほど、得体の知れない人物を娘のそばにつけたりはしませんが、この状況であればためらう必要はありません。それにあなたは見た目が子どもだ。娘のそばにいても怪しまれないという点で非常に都合がいいのです」

なるほど。僕にデメリットはあまりなさそうだ。

「……わかりました。引き受けましょう」

「ありがとうございます」

にこりとした伯爵だったけれど、特に笑っている感じがしないの

が不思議だった。
確か「冷血卿」とか言われていたっけ。誰だよそんな不敬なニックネームつけたヤツ。ぴったり過ぎる。

「ただし」

僕は指を3本立てて伯爵に突きつける。

「僕からの条件は3つあります」
「聞きましょう」
「1つ、星5つ以上の天賦珠玉に関する情報が手に入ったら教えて欲しいです」
「……天賦珠玉」

意外だったのか、伯爵は目を瞬かせた。
ラルクの名前は出さないほうがいいかなと思った。彼女はキースグラン連邦内では指名手配されてそうだしね。「星6つ」と限定せずに「5つ以上」と幅を持たせたのは僕の目的をできる限り知られないようにすることだ。

「2つ、僕は『ルルシャ』という女性を探しています。年齢はわかりませんが、多分僕と同じくらいで、あと魔法の才能があります。伯爵の力を使ってその人を探してください」
「ふむ……その方はレイジさんの、なんなのですか？」
「あ、別に肉親とか仇討ちの類じゃないですよ。ルルシャさんのお祖父さんから伝言を受け取っているのでそれを伝えたいだけです」
「ほう」

伯爵の笑みが深くなり、そこにわずかに――僕じゃなきゃ見逃しちゃうねっていうくらいだけれど、感情が現れたように感じられた。

「あなたは面白い人ですね。ふつう、雇用条件決めや駆け引きというのは自分の利益のために行うものですよ」
「僕にとって十分利益なんですよ……いや、利益というか、やらなきゃいけないこと、かな……？」
「その２つの条件はもちろん呑みましょう。人捜しは得意な分野ですから」

そうだろうね。僕の情報をたった数日で結構調べたんだもの。だから僕だって護衛を引き受けてもいいかなって思ったんだ。
伯爵は身を乗り出して肘をテーブルに載せた。ギッ、と小さくテーブルが軋んだ。そのとき一瞬眉根が寄っていた――ああ、そうかこの人、手を矢で貫かれていたっけ。
【回復魔法】で傷はすぐに塞げても、破損した神経部分などは早々治らないらしく痛みはしばらく残るのだ。
軽傷ならきれいに治せるんだけど。

「レイジさん、３つ目の条件を聞きましょう」

4（後書き）

皆様のおかげで月間総合で8位にまで上がり、「小説家になろう」トップページ載ることができました。
ありがとうございます！
引き続きオバスキをお楽しみください。

5

「……3つ目は、今言った2つの内容に関して、誠実に情報収集に努め、僕の質問にはすべて正直に答えること。そしてこれを契約魔術によって縛ること」

これが一番の難題だろうと思っていた。

契約魔術は、僕が奴隷として鉱山にいたときに掛けられていた魔術だ。

お互いの納得があれば多岐にわたって相手の行動を縛ることができるし、鉱山奴隷なんかは天賦を取得できないようにすることさえできた。もちろん、天賦を発動させないことだってできるだろう。

そんな魔術を、貴族という地位にある人間が呑むのか――僕は平民だ。しかも、下流の。

思わず左手首の辺りを僕はさすっていた。

ここに入れ墨は――もう、ないのに。ヨモギモドキを塗り続けたおかげでだんだん薄れ、およそ1年で完全に見えなくなったのだ。

「いいでしょう、呑みましょう」

「え、いいんですか？」

「構いませんよ。契約に背いた場合は私の行動自由は奪われ、秘密金庫の解錠方法をあなたにだけ伝えるようにしましょう」

「い、いや、そこまでは……」

「私は一度死んだようなものだと言ったでしょう？　それに、これくらいしなければ契約魔術なんて意味がありません。いいですか、レイジさん。あなたに頼みたい護衛とは、今の条件など温すぎるような環境なのです」

「……なるほど」

「あとひとつ、重要な条件が抜けていますよ」
「なんですか？」
伯爵はため息を吐いた。そして呆れたような顔でこう言った。
「給金の額です」
「あ、そうでしたね」
ふつうはそこがいちばん大事だよね……。
ここは強気にふっかけてみるかな。
「では、給金は月に金貨2枚とし、衣食住は伯爵家のほうで手配してください」
金貨2枚はおよそ４０万円。衣食住を出してもらって４０万円とかめちゃくちゃ好待遇のはずだ。
ふふん、どうですか、伯爵。僕だって強気に出るんですよ。
「はぁ……」
あれ？　伯爵が額に手を当ててうなだれている？
「衣食住がこちら持ちなのは当然です。給金は年額で聖金貨3枚、それを月割りとします」
「へ……？」
聖金貨、って確か……金貨２５枚分だよね……？
それが3枚。
年俸せんごひゃくまんえん！？

「雇用は年間契約とし、毎年継続可否を見直しましょう。また護衛として娘のそばにつく以上、最低限の貴族社会の知識や礼儀作法を学んでもらいます。いいですね？」
「は、はい……」
「では、今日からこの屋敷に住んでください。聖王騎士団には私から連絡しておきます」
「は、はい……」

あれよあれよという間に、すべて決まっていた。
これがお貴族様の駆け引き……！

そんなこんなで僕はエヴァお嬢様の「護衛」として雇われることになった。
初めてお嬢様に会ったとき、こんなに可愛らしい人が世の中にいるのかというショックに襲われた。貴族という贅沢な環境が生み出した可憐な生き物だと思った。街中には絶対に存在しない温室栽培のひとつぶウン万円のイチゴみたいなものだ。
僕の驚きなんて知らず、お嬢様は最初からお嬢様だった。

「レイジは強いの？」

自己紹介が終わったあとの最初の言葉がこれで、僕は「そこそこ」とだけ答えると、

「ならお父様の騎士と戦ってみせるのだわ！」

次に出た言葉がこれだからね。「遠慮します」「できかねます」「お断りします」「やりません」「いやです」「絶対いや」とまで

順を追って拒否したのだけれどお嬢様は聞いてくれなかった。最終的には騎士側も乗り気で――騎士の中には深夜の襲撃は僕が手引きをしたんじゃないかとか言い出す人もいたので――伯爵邸の中庭で手合わせを行うことになってしまった。

敷地は高い壁で覆われていて、外から中をのぞき見ることはできない。だけれど3階建て以上の建物ならば当然壁より高いので、屋根に上れば見ることができる。

僕は離れた建物の屋根に、怪しげな影を見つけたので――あとでその建物の場所を報告させられた――伯爵に許可をもらって中庭の四隅でたき火を行い、煙を【風魔法】で循環させて大きな目隠しを作り上げた。

中庭は足元が芝生で、長さも均一でキレイに刈られている。ふだんは点在しているテーブルとイスは1セットを残して撤去され、代わりに騎士たちがぞろぞろと庭を埋め尽くす。

使用人たちも「なんだなんだ」と見に来たものだから屋敷の人間大集合である。

「全員、ちゃんと見届けてください」

伯爵はどうしてお嬢様といっしょに、1つだけ残ったテーブルセットでお茶をしているのかな?

「私はスィリーズ家武官筆頭マクシム＝デュポンである!」

眉の太い、ちりちり髪の毛の男性が名乗りを上げた。

一般市民は家名なんて持たないけれど、貴族は当然として、貴族が認めた人間は家名を持つ……らしい。らしい、というのは僕の旅の連れ合いであるゼリィさんは全然そういうことに興味がないから知識が怪しいのだ。

マクシムさんは30代前半という人物で、後頭部が薄くなってい

るのを気にしているムキムキマッチョだ。金属鎧にマントという騎士としての標準装備で武器は大剣だった。

一方の僕は、支給されたダークスーツに緋色のヒモを襟に通したポーラータイ。留め具は伯爵家の家紋である三日月に2本の剣が彫り込まれている。

「あ、レイジです。よろしくお願いします」

「……その軽装でよいのか？」

「動きやすいほうが僕向きなので……」

「そうか、ならばよい」

マクシムさんの偉いところは僕が13歳の子どもだというのに一切手加減せず、しかも油断していないところだった。

「では始めよ」

伯爵が、開始の合図をした。

「どりゃあああ！」

でも――遅い。踏み込みから大剣の振りまで、半身が動かなかったダンテスさんよりわずかに遅いくらいだもの。こう思うとダンテスさんってすごかったんだな。

「うわあ、すごいぃ」

僕はぎりぎりのところでかわしていく。なんとか穏便に済まそうと思っているのだけれど、ちらりとテーブルを見やると伯爵が「真面目にやれ」という顔でにらみつけてきた。怖いよ冷血卿。隣にいるお嬢様を見なよ。ハラハラした顔でハンカチをぎゅっと握りしめ

ているじゃないか。

「お父様、ごめんなさい。今すぐ試合を止めましょう。これではレイジが死んでしまいます」

「大丈夫です、エヴァ。むしろちゃんと見なさい。あと5秒で終わりますよ。5、4……」

はい、あと「5秒で終わらせろ」ということですね。わかります。

「3」

「ぬうん！」

縦に振り下ろされた大剣を僕は身体半分ひねってかわすと、剣は地面にめり込んだ。キャァ、という悲鳴はメイドさんたちから上がったものと、芝生を管理する庭師から上がったものとの2種類があった。

「2」

「失礼しまーす」

僕はマクシムさんの懐に飛び込んだ。

その接近を易々と許すマクシムさんでもない。すぐに剣から手を離すとプロテクターのついた腕を振ってパンチを見舞ってくる。

「1」

僕はそのパンチを両手で――もろに受け止めた。

う、すっげぇ力……。

僕の身体は人形でも放り投げるように横へと吹っ飛ばされる。お嬢様が甲高い叫び声を上げる――のだが、僕は両手を地面に突いて

側転してキレイに着地した。

「いっつう……しびれたしびれた」

「……」

マクシムさんはきょとんとした顔で僕を見ていたけれど、その顔のまま横へと倒れ、動かなくなった。

5（後書き）

保育園の登園自粛により、我が家は今大混乱です（車に避難して在宅ワーク）。

6

それからというもの、マクシムさんは僕のことを「すさまじい武芸の達人。きっと幼いころから厳しく育てられたのであろう」と大声で言うようになり、他の騎士たちも、気に入らないようながらも表だってなにか言ってくることはなくなった。

「あの護衛、【闇魔法】に、あれだけ早い発動が可能なら【魔力操作】か【魔法適性強化】は持っているよな」

「煙をかき混ぜてたのは【風魔法】だろ？」

「なんでも伯爵閣下を救ったときには【土魔法】を使ったらしい」

「おいおいおい、そうしたらマクシム様の攻撃をかわしたのはなんだっていうんだ？　天賦のホルダー数が全然足りないぞ」

そんなことを真剣な顔で議論している騎士たちもいた。

あんまり派手にいろんな魔法を使うと勘ぐられるのかもね……それは面倒だな。

ちなみに身体の動きがよくなったのは、実はライキラさんのおかげだった。というのもゼリィさんがライキラさんの天賦について教えてくれて、

「若旦那は、傭兵団の団長からめちゃくちゃレアな天賦珠玉をもらってましたからねー。なんと【身体強化★★★】ですよ。身体全体の筋力を底上げするなんていうあの天賦珠玉、どっから持ってきたんすかねえ……」

ライキラさんの動きが、ひとつひとつを強化する天賦珠玉によるものではなく、【四元魔法】のように一気に全部を高められるもの

だと認識した瞬間、僕の【森羅万象】が学習した。
おかげで僕の動きは数段階上へとレベルアップした。
また、ライキラさんに助けてもらった……それはライキラさんの「形見分け」だと思っておこう。

「レイジ！」

マクシムさんとの試合は、お嬢様にも大きく影響を与えた。
お嬢様は僕をレイジレイジと呼んでそばにいるように言ってきた。
僕は最初、この温室栽培最高級イチゴ姫との距離をどうすべきか困っていたけれど、向こうからぐいぐい詰めてくる。
エヴァお嬢様の近くには同年代の人間がいなかった。
学校なんてものはなくて、貴族は家庭教師を雇うのが一般的だ。
その家庭教師は引退した文官や貴族ばかりなのでおじいさんやおばあさんばかり。たまに会う同年齢のお友だちと言えば父の付き合いで連れて行かれる社交界のダンスパーティーやお茶会、それに夜会だ。

「同い年くらいの子どもたちは、わたくしを怖がって近寄ってくれないの」

家庭教師によるお勉強の休憩時間に、ムスッとした顔でお嬢様は言った。

「お嬢様が美しいからですか？」
「そんなわけないのだわ！　もう、レイジまでわたくしをバカにする！」
「いやまあ結構本心なんですけど……」
「え！？」

赤い顔でわたわたするお嬢様は「冷血卿」に比べてはるかに人間味があって可愛らしい――あ、「怖がられる」ってそういうことか。

「そ、そんな、わたくしが美しいなんてこと……」

「伯爵閣下が怖いから皆さん近寄ってこないということですか？」

「え、ええ、そうなのだわ。でもそうじゃなくて、わたくしが聞きたいのはあなたがわたくしを、その美し――」

「それじゃしょうがないですね。いつかいいお友だちが見つかりますよ」

「……レイジ？」

「それじゃ勉強の続きをしましょうか。先生、お願いします」

僕は「冷血卿」なんて呼ばれる伯爵の娘に産まれたお嬢様に同情する一方、なぜかこの日は残りずっとお嬢様が非常に不機嫌だったのが解せなかった。

その「冷血卿」は多くの人間の恨みを買っているらしかった。

ただ、理由を聞けばなんてことはない、「恨み」は「恨み」でも「逆恨み」の類だ。

「……私が襲撃された理由ですか？　そうですね、エヴァの護衛にも必要だから教えましょう」

１０日に１回、伯爵とは個別に会う時間を設けてもらっている。

それは伯爵の「人捜し」の進捗を確認するのと、僕から伯爵にお嬢様の状況を説明するためだった。

「私は聖王の直下の組織『祭壇管理庁』の『長官特別補佐官』という任を受けております」

おっと、よくわからない組織が出てきたぞ？

「……レイジさんは聖王騎士団にいたのに、そういうことはあまり詳しくないのですね。まあ、いずれわかるでしょう。簡単に言えば『聖王の懐刀』だったということです」
「『長官の懐刀』ではなく？」
「はい。細かいことは省きますが、クルヴァーン聖王国には天賦珠玉を産出する『一天祭壇（ファーストアルター）』があることを知っていますね？」
「！」

世界で８つの、天賦珠玉を産出する場所。
僕が奴隷として働いていた「六天鉱山（シックスマイン）」もそのうちのひとつだ。
「一天祭壇」はその名の通り祭壇で、日々大量の天賦珠玉が、光とともに祭壇上に現れるらしい。
鉱山で採掘するよりもはるかに効率的だ。その他の産出場所も「海底」「氷河」「溶岩」と採取が難しい場所が多いことを考えると「祭壇」にポンッと（いや効果音は知らないけど）出てくるクルヴァーン聖王国は労せずして天賦珠玉を大量に獲得できる。
この世界では、天賦珠玉が軍事力に直結する。
クルヴァーン聖王国が大国のひとつになっているのも「一天祭壇」の恩恵によるところが非常に大きい。

「最初、私はレイジさんが祭壇のことを知りたくて近づいてきた可能性を考えましたが、どうやら違うようですね。あなたが知りたがった情報は『星５つ以上』の天賦珠玉に関することでしょう？」
「はい。星５つ以上の天賦珠玉が出現した、オークションに掛けられた、そんな情報があればなんでもいいので教えて欲しいんです」
「年に数回くらいしか耳に入りませんがね……」
「それでも構いません」

伯爵は小さくうなずいた。

「レイジさん。私は聖王の勅命を受けて祭壇に関するあらゆることを調べています。ここ数年、祭壇から出現する天賦珠玉の星の数が落ちており、それを調査していました」
「星の数が落ちる……？」
「星３つ以上の出現数が明らかに減ったんですよ。こうなると考えられるのはたったひとつ、身内の人間が横流しをしているということ」
「裏切り……ですか？」
「本人は裏切っているつもりはなく、単に金に困っていただけという感じでしたがね。直近の１年でようやく横流しの事実を発見し、関連している貴族を全員捕らえ、処刑しました」

ヒッ。
処刑て。

「そ、そんな重罪なんですか」

僕は少々寒気を感じながら伯爵と相対していた。伯爵は淡々と、まるで報告書を読むように告げているけれどもそのすべては伯爵が指示し、実行したことだ。
表向きは「横領」や「贈賄」、それに「奴隷の所有」などの違法事実を積み重ねて――伯爵曰く「祭壇に手をつけるような輩が、その他の部分で潔白であるはずがありません」とのことで――処刑に追い込んだそうだ。
祭壇は絶対不可侵。
その祭壇が汚されているなどという情報が漏れては困ると聖王に釘を刺され、責任追及はすべて伯爵ひとりの責任で行ったのだとか。
それで、ついたあだ名が「冷血卿」。
伯爵の命を狙った襲撃者には、このとき処刑された貴族の関係者

が背後にいるらしい。

「えーっと……伯爵閣下」

「なんでしょう、レイジさん」

「聖王に釘を刺されたような重大事を、なぜ僕にさらっと明かしたのです？」

「……」

「……」

ずるいよね、この人。にっこり笑って流すんだもん。

「護衛の依頼を出すときに、その辺も話しておくのが筋なんじゃないですかね……」

「聞かれませんでしたので」

聞けるか！　想像できるわけないじゃない、そんなこと！

まあ、伯爵だってまだ護衛になると決まったわけじゃない僕にべらべら話すわけにはいかなかっただろうけどさ！

「ところでレイジさん。こちらが『ルルシャ』さんに関する情報です。これまでどおり、該当しそうな人物は発見されていません」

僕は紙に書かれた報告書を受け取る。「ルルシャ」だけでなく「ルルーシャ」「ルルシ」などの似た名前についても調べてくれている。

伯爵は「冷血卿」だなんてあだ名がついていても、僕と接するときはとても丁寧で、誠実――のように感じられた。契約魔術もちゃんと結んでくれたし。

その後、僕がお嬢様に関する報告を上げる。それを聞いているときだけは伯爵もかすかに楽しそうにするのだった。

それが、いつもの「報告会」だ。
様相が変わったのは――今から1か月ほど前。
つまるところ僕とお嬢様が「奴隷商潰し」なんてことを始めることになったきっかけでもある。

7

お嬢様は、お嬢様だ。

彼女の母であり伯爵の奥様のことについては他の誰に聞いても「聞かぬが花ということもあります」なんてふうにかわされてしまうので、おそらく亡くなったんじゃないかと僕は思うのだけれど、お嬢様はお嬢様として屋敷のみんなに愛されて育っているから母親についてなにか言うのを聞いたことがない。

「レイジ！」

「目の前にいます。そう大きい声で呼ばないでください」

「わたくしは幸せものだわ。お屋敷のみんなはわたくしに親切だし、あなたのような強い護衛もいる」

「ありがたき幸せ。そのお気持ちだけで我々は満足ですので、それ以上は……」

「わたくしは自分の幸せをみんなに分け与えるべきだと思うのだわ！」

お嬢様はお嬢様なので人の話を最後まで聞いてくれないことがある。いや、聞くときは聞いてくれているのだけれど、僕が「早くこの話終わらないかな？　あるいは僕の関係ないところで進めてくれないかな？」と思っているときには大抵聞いてくれない。

以前は「屋根の上に登ってみたいのだわ！」と言い、僕が７回ほど断っても折れてくれないので仕方なく抱きかかえて屋根に登った。その景色はすばらしかったけれど、夜に冷血卿に呼び出されて無言の笑顔で１５分見つめられることになるとわかっていたら景色なんて見たくはなかった。冷血卿は娘のことになると親馬鹿を発揮するようだ。

他にも「街に出て市井の暮らしを見てみたいのだわ！」と言い、はいはいよくあるお嬢様ムーブですね、と思いつつ半ば僕もあきらめ１２回ほど断ったがやはり折れてくれず、ボロ布のような服を買ってきてお嬢様の美しい髪も帽子だかズタ袋だかわからない布製品に突っ込んで街を案内した。結果、どうせ止められるだろうから黙って出て行こう、と考えた僕の行動は裏目に出た。帰宅すると捜索隊が結成されており間一髪で聖都警備隊に連絡されずに済んで、お嬢様の変わり果てた姿にメイドたちは声なき悲鳴を上げて（２人が卒倒し）、僕は伯爵の私室に深夜まで閉じ込められて「護衛とは？」について熱い議論を戦わせることになった。伯爵の考えでは「護衛とは危険から遠ざけること」であり僕の考えでは「親の育て方に問題がある」だ。ふたりの意見は交わらなかったけれど、僕は僕で捜索隊のリーダーに任命されていたマクシムさんの悲壮感に満ちた表情を思い出すと、伯爵はともかく、屋敷の皆さんを悲しませないようにはしなきゃと反省した。

「お嬢様、お金をばらまくということですか」

幸せのお裾分けなんてできるわけがない。でも大半の人間はお金をもらえれば喜ぶ。

「レイジ、それは違うのだわ。お金では解決できない問題こそわたくしたちが解決しなければならないの。つまり、構造的な問題よ！」

構造的な問題とはすなわち、貴族が平民より明らかな優位に立っていることとか、税金の額は領主が一方的に決められることとか、田舎のほうにいけば領主が花嫁の処女を奪える「初夜権」みたいなものがあることとか、だろうか。

そういった内容は家庭教師から教わった。

僕が護衛についてからしばらくして家庭教師が追加され、貴族と

して必要な知識――政治や行政、法律のことなんかの勉強が始まった。

でもそれらはあくまで、「お嬢様はこれらを利用する立場ですからね」という権力者側の視点で教えられていたはずだ。

誰だ、お嬢様に平民側からの視点を教え、「もっと公平にならなきゃ！」なんていう使命感を植えつけたのは……。

「わたくしはレイジを見ていて気がついたの。レイジは家庭教師の先生と対等に話をし、勉強しているでしょう。そう、わたくしよりも進んで勉強に取り組んでいることもあるわ。機会さえ与えられれば貴族平民問わず、学び、力を身につけることはできるのだわ！」

「……」

どうやら僕のせいのようです。

「いやお嬢様、あの、僕は……」

前世があるとか言えたら簡単なんだけどな～！　言ったところで信じてもらえる可能性は低いし、証明するにしても【森羅万象】の天賦珠玉を出すのもアレだしな～！

「レイジ、それ以上言わなくて大丈夫なのだわ」

「お嬢様……」

「あなたの思いはわたくしと同じ。そういうことよね！」

やっぱりなにも通じてないよな～！

「レイジ、お父様のところに行くわ！」

「へ……？」

伯爵のところ？　厄介ごとが起きる未来しか見えないのだけど？

「お父様にお願いして、この聖都に広がっているという違法奴隷を撲滅するのだわ！」

聖王陛下は「奴隷制度」について強く「禁止」の方針を打ち出している。みんなそれこそが「聖王様のお優しさ」とか言っているけれど、僕は違うように感じていた。

この国は「一天祭壇」によって支えられている。豊富な天賦珠玉は国民に行き渡り、種族による差別もないので多くの移民がやってくる。

そこで、もしも「奴隷」を許可してしまえば多くの国民が奴隷になってしまうだろう。なんせ無一文で聖都にやってくる者なんてざらにいるからだ。奴隷はお金持ちの所有物となり、お金持ちは合法的に兵力を持つこともできる。それは特権階級である貴族からすると怖い存在になるだろう。

とはいえ――借金まみれの者も多く、奴隷として最終的に「自分を売る」こともできなければ金貸しは取りっぱぐれてしまう。

そこで登場したのが「下役」だ。

契約魔術によって縛ることで、奴隷と何ら変わりなく扱うことができる。

もちろん、表向きは「奴隷禁止！」を謳っている聖都でそんな商売をおおっぴらにはできないのでこそこそやることになり、爆発的な奴隷増加という事態にはなっていない。

（日本でのパ●ンコみたいだな）

最初聞いたとき僕はそう思い、お嬢様は、

「実質的に奴隷であるのなら、聖王陛下の意向に背くことになるのだわ！」

とお怒りだった。

僕は、この「下役」制度があることで金貸しの金利が上がらずに済むし、物として売り買いできる奴隷とは違って、主従の1対1の契約魔術でしか縛れない「下役」は、資産的な価値は低くなる。むしろ、借金で首が回らなくなった国民にとってのセーフティネットの側面もあるんじゃないかと熱弁を振るったけれど、もちろんお嬢様は聞いてはくれなかった。まあね、「法律には違反してる可能性が濃厚だけどこれは必要悪！」なんて言って「そうね！」なんて折れてくれるお嬢様だったら僕だってそこまで苦労はしない。

お嬢様が気にかけたのは、年端も行かない幼い子たちが、親の借金のために「下役」として提供されてしまっている――ということだった。

契約魔術で縛ればなんでもできる。

なんでも、だ。

「下役」とはつまり「下の世話も役目」という意味も掛けているらしく、処女の女の子は「下役」として高い金額がつく……そんなことを聞いてしまえば正義感超特急のお嬢様を止めることなんてできはしない。

（とはいえ、奴隷商に乗り込んで「奴隷扱ってます」と口にしたらその奴隷商をお取り潰しにする、なんていう「正気か？」と疑ってしまうような提案を伯爵が呑むわけはないと思うけど）

お嬢様にもほんのかすかな「正気」が残っていてよかったなと思うことには、事前に伯爵に相談するとお嬢様が言い出したことだった。

伯爵は死ぬほど忙しそうな毎日を送っているけれど、お嬢様にだけは甘いので、お嬢様の提案を聞く時間が設けられた。
ふんふんと一通り聞いた伯爵は、いつものとおりなんの感情も浮かべずにこう言った。

「わかったよ、エヴァ。違法性が高いと思われる『人材斡旋所』のリストを用意するので、そこを当たってみるといい」
「ありがとうございます、お父様！」

そのときの僕の顔と言ったらワ●ピースでウソ●プがビックリしたときの顔よりもひどかったと思われる。
エェ、許可ぁ？　許可出ちゃうのぉ？
僕の魂の叫びが届いたのか、あるいは完璧に僕の考えなど黙殺しているのか、伯爵は、

「レイジさん、護衛の任務、よろしくお願いします」

だなんて言ったのだ。

8

そうして今に至る。

本日６つ目の奴隷商をつぶしてきて、伯爵邸に戻ってきたところだ。

「今日も問題なく奴隷商を制圧しましたわ！」

勢いよくお嬢様が報告すると、伯爵はうっすらと笑みを浮かべて、

「そうか。よかったね」

とだけ答える。これはいつもと同じやりとりだった。

ただいつもと違うのは、この後、１０日に１回の伯爵との「報告会」があることだ。これから食事だというお嬢様は執事長のセバスに連れて行かれた。

執務室には僕と伯爵のふたりだけが残される。

壁面には木目の見事な板が打たれており、その広く長い一枚板はたかだか部屋の壁だというのにやたらとお金が掛かっていることをうかがわせる。絵や壺なんていう美術品はない、シンプルな部屋だというのに僕はプレッシャーを感じる。

伯爵はいつもどおりの報告書を取り出しながら言った。

「残念ながらルルシャという方の――」

ルルシャさん捜索、それに星５つ以上の天賦珠玉に関するめぼしい情報はなかった。契約魔術で縛られているので伯爵がウソを吐いているということはないと思う。

伯爵の報告が終わると、僕は、「奴隷商潰し」という名前が一人歩きしているということを告げた。だけれど伯爵は、相変わらず抑揚のない調子で「そうですか」と言ったきりだった。

「……伯爵、こんなのおかしいでしょう？　人材斡旋所を一方的につぶして回ったら社会がおかしくなります」

「面白いことを言いますね、レイジさんは。あなたはこの聖都すべてを把握しているのですか？」

「ちょっと経済のことを考えればわかることでしょうし、聡明なあなたがそこに気づかないはずもありません」

「レイジさんは特殊な知識をお持ちのようですね」

「誤魔化さないでください。伯爵、これまで僕らが向かった人材斡旋所ですが、衛兵の捜査はどうなっていますか」

すると伯爵はすでに用意していたのか、5件の捜査報告書を僕に差し出した。この世界では植物紙も流通しているけれど品質にムラがあり、印刷技術はイマイチなのですべて手書きだ。

……書類の右肩に「部外持ち出し厳禁」という文字があるんですが？

「きちんと許可を得て持ってきていますよ？」

僕の質問を先回りするように伯爵は言った。

書類にざっと目を通すと、所長たちは「奴隷同様の扱いが違法だとはわかっていたが、この仕事は必要悪だという認識だった」「人材を奴隷と呼んでしまったことについて深く謝罪する」と申し合わせたように供述していた。また、「スィリーズ伯爵家のご令嬢だとは知らなかった」とも。

（……確かに、必要悪だから今まで許可されてたんだよな。本人た

ちが「奴隷」だと言っちゃってるから僕らは無力化して衛兵に突き出してきたわけだけど）

ため息が思わず出る。

人材斡旋所をつぶして回っても、「身売りしたい」というニーズがなくならない限り、第二第三の人材斡旋所が出てくるだけだろう。今度はもっと狡猾に立ち回るヤツらが。

僕とお嬢様がやっていることは徒労に過ぎないのだ……もしかしたら伯爵は、そこまでわかっていて好きにやらせているのか？　お嬢様の気の済むように、と。

書類から目を上げると伯爵はじっと僕を見つめていた。

……なんだろう、この目は。興味津々？　いや、なにか探るような……。

もともと感情に乏しい顔をしている人だからわかりにくいんだよね。

「閣下。もしやあなたは、お嬢様に好きにやらせることで――」

「レイジさん。護衛に関する質問には答えますが、父娘関係の質問は受け付けませんよ？」

むう……。

「それなら奴隷商の取り調べに同席したいのですが」

「……構いません。衛兵の詰め所に一筆書きましょう」

およっ、簡単に許可が出た。

僕はなんだか居心地の悪さを感じながら伯爵の執務室を後にした――なにかを見逃しているような、気持ちの悪さを感じていた。

（ゼリィさんに連絡しておこう）

奴隷商潰しのときには陰ながら見守ってくれているゼリィさんは、ふだんは冒険者として活動している。この聖都に来て４年になるので情報屋もいくつか知っているようだ。

彼女に、人材斡旋所のことを軽く探ってもらおう。

お嬢様のスケジュールは、勉強と教養、奴隷商潰しと多岐に渡るけれど今日はこれまでになかった用事があった。

伯爵に連れられてではなく、お嬢様自身が来賓として出席する夜会だ。

今までは伯爵の「添え物」だったお嬢様も、１２歳となり、貴族の一員として貴族社会に顔を出すことになる。

聖王陛下主催の「新芽と新月の晩餐会」は、今年１２歳になる貴族の少年少女を集めて行われる。学校の入学式や卒業式がないこの世界では、貴族の親たちにとって「新芽と新月の晩餐会」は、子どもの初の、そして最後の晴れ舞台だけあって裕福な貴族は１年以上前からドレスを発注し、貧乏貴族であっても借金までしてドレスを借りてくる。

娘の場合はドレスだが、息子の場合は腰に吊る宝剣だ。

きらびやかで装飾過多の武器ではあるが、本物の刃がついている正真正銘の殺傷能力がある剣である。それを身につけることで「大人」としての第一歩を歩むことになる。

朝から屋敷内の空気は浮ついていた。

「すごいわぁ……」

「なんて美しい」

メイドたちがうっとりしている。

2年前からスケジュールを確保した一流のデザイナーと、一流の針子に仕立てさせたお嬢様のドレスがテーブルに広げられていた。

薄紅色の布地を使ったこのドレスは、キースグラン連邦ゲッフェルト王国直轄領にある「ハイエルフの森」――そこで紡がれているサード・シルクをベースにしている。

「ハイエルフの森」は天賦珠玉を産出する「三天森林（サードフォレスト）」を擁する大森林地帯で、ごく限られたルートでしか取引を行っていない。

高濃度の魔力がこめられたサード・シルクは、色を付けるのにも時間が掛かるのだが、そこはスィリーズ伯爵がなんとかしたらしい。

貴族ってすごい。

ちなみに今の知識は僕が聞きもしないのにメイドたちが教えてくれた。

「お嬢様の湯浴みが終わりましたわ」

「ではドレスをお持ちしましょう」

「はい、ただいま」

続きの部屋のドアがうっすらと開き、ちらりとエヴァお嬢様の姿が見えた。柔らかなバスローブに身を包んだお嬢様は白い肌をほてらせているが、身体とは裏腹に、表情は強ばっていた。あのお嬢様でも緊張するのだな……なんて僕が思っていると、

「レイジさん」

「あ、はい。なんですか？」

メイド長が僕をじろりとにらんだ。

「これからお嬢様は晩餐会に向けた準備がございます」

「ええ。もちろん知っています」

「……では？」

「……『では』？」
「のぞきでもするつもりですか！　出て行ってください！」
僕はあわてて部屋を飛びだした。それはそうだ。いくら護衛とは言え、お嬢様の着替えやお化粧を見ていていいわけではない。
こういうときは部屋の外で待機するのがふつうだ。
……どうやら僕もちょっと浮かれているらしい。まあね、晩餐会とかね、どんな食べ物が出たりするのかとか気になるしね。
廊下に出ると、邸内でもごっつい鎧を脱がない――伯爵の襲撃以来、警戒度を高めているらしい――マクシムさんがいた。
「おお、レイジ。探していたぞ」

9

「僕を……ですか？」
「お前、今日の晩餐会は武器の携帯が認められていないがどうするつもりだ？」
マクシムさんの質問の意図がわからず、僕は首をかしげた。
「そもそも僕は武器をふだんから持っていませんけど」
「そうなのか！？　そうか……お前は魔法と近接戦闘が主体だったものな……」
魔法と接近戦だけをやっているわけではないのだけど、これで武器まで扱ったら明らかに天賦の数がおかしくなるので黙っている。
「僕以外の護衛もたくさんいるんですよね？　襲撃なんてないと思いますが」
晩餐会の出席は、１２歳になる本人と護衛１名だけとなっていた。護衛は武器の携帯は不可だけれど、魔法を使えれば問題ないし、武器がなくとも戦えるような手練れだっていっぱいいるだろう。
「いや、問題はそこじゃなくてな。気になるのは令息方の宝剣なんだ」
「？　だったらなおさら大丈夫じゃないですか？　この晩餐会後に天賦珠玉を与えられるんでしょう？」
この国の貴族は１２歳になって聖王主催の夜会に出席し、「大人」

になったと認められると、天賦珠玉を与えられる。
詳しいシステムは僕は知らないけれど、「一天祭壇」から産出する天賦珠玉のうち、レアなものは貴族がほぼ独占しているらしい。貴族が使わないぶんがギルドや市民に降りてくるのだとか。
お嬢様は今日の晩餐会後に、スィリーズ伯爵から天賦珠玉が与えられるはずだ。なんの天賦なのかは僕もお嬢様本人も知らない。
逆に言うと、今日、宝剣を持っている12歳男子たちは天賦ナシということになる。
だったら恐るるに足らずなのでは？

「いやいや！　宝剣に施されている魔術は相当なものだというぞ」
「魔術……ですか？」
「ん、知らんのか？　俺の大剣にも威力が上がる魔術がこめられている」
「そうなんですか！？」

詳しく聞いてみると、マクシムさんと僕が手合わせをしたときは模擬剣なので、魔術が入っていなかったそうだ。実戦では威力ゴリゴリの大剣を使うという――今この場では持っていないけど。さすがに邸宅内で大剣を持ち歩くのは物々しすぎるから。

「どんな魔術が適用できるんですか？」
「そうだな……。切れ味が増したり、衝撃を増やしたりするのはもちろん、多少なら伸ばすこともできる。あるいは装備している者の筋力をアップさせたり、スタミナをアップさせたりだな。もちろん限度はあるぞ。大体星1つの天賦と同じくらいならいけるはずだ」
「ほー……」
「防具にももちろん付与できるが、金属でないとダメだな」
「ということはその鎧にも？」
「そのとおり……と言いたいところだが、鎧までは無理だな」

「無理？」
「お金が掛かりすぎるのだ」
「へええ」

僕は感心した。
クルヴァーン聖王国の伯爵が擁する、筆頭武官が、半身石化状態のダンテスさんより弱いっていうのはおかしいなとは正直思ってた。
魔術なんていう補助があるんだね。マクシムさんはその補助を使う前提での戦い方を身につけてるってことか。
いやでも、模擬剣でもかなりのパワーファイターだったよね……？　あれに補助がついたらどうなるんだ……？

（……素手で受け止めちゃいけないヤツだよね、きっと）

僕は手合わせでマクシムさんの攻撃を受け止めたことを思い出した。
補助マシマシのマクシムさんのパンチだったらどうなってたことか。

「貴族本人や、騎士でなければ装備できないものだよ。冒険者でも一流の者は魔術を施した武具を持っていると聞いたことはあるが」
「全身を魔術で固めたらとんでもない金額になりそうですね」
「聖金貨１００枚は超えるであろうな。それでも命の金額だと思えば安い、そんな人間はこれを使う」

５億円超えの装備か……家に飾っておいたほうがよさそうだけど。

「ともかく、だ。今まで持ったことのない宝剣などを手にした貴族の子息が浮ついた気持ちで剣を抜かぬとも限らぬ。十分気をつけてくれ」

「わかりました。ご忠告、ありがとうございます」
「会場の外には我らもいるからな」
マクシムさんは片手を挙げて去っていった。
武具魔術か。気をつけておこう……。

お嬢様の準備がなかなか終わらず僕は廊下であくびをかみ殺していたが、夕闇が迫るころにようやく部屋の扉が開いた。
メイド長が僕をじろりと見る。
「レイジさん。くれぐれも失礼なことを言わないように」
「僕が軽率なことを言う男に見えますか」
「無自覚で言うから男の子は怖いんです」
メイド長（三十路）から見れば僕なんて子どもなんだよね。
「ちゃんとお嬢様を褒めること。あなたがいちばん最初にドレスアップしたお嬢様を見る男の人なんですよ」
「承知」
「かといって棒読みでもダメですし、ストレートな褒め言葉もよくありません」
「……」
なんか注文が多くないですかね？
「レイジさん。今日はお嬢様にとって非常に重要な日なのです。あなたも協力をお願いしますよ」
「……はい」

メイド長は手を伸ばすと傾いていたポーラータイのエンブレムを直してくれた。

「黙っていればあなたも美男子ですからね。晩餐会では余計なことを言わないように」

「わかりました」

美男子だって。初めて言われたな。

メイド長に続いて部屋へと入ると――その中心にはお嬢様がイスに座っていた。

「――レイジ？」

振り向いたお嬢様を見て、僕は絶句した。

いつもより入念に梳(くしけず)られた金髪は光沢を放っている。ラメはついておらず、だからこそその金髪の美しさが際立っている。

肩を出すタイプのドレスなのでお嬢様の華奢な肩が露出していて、肌理の細かく白い肌がそこには現れていた。

意志をはっきりと口に出す、気が強そうにも見えるお嬢様の顔は、薄化粧を施し、薄紅色のドレスに合わせた口紅が塗られていた。

アイラインはお嬢様の瞳を際立たせており――直視すると僕ですら「ヤバイ」と思ってしまう彼女の魔性の目が、僕を見据えていた。

「お、お嬢様……」

少女を一歩脱却し、大人の世界に足を踏み入れようとしているお嬢様は、なまめかしいまでの色気を放っている。僕は頭がくらくらした。

「絶世の美女」という言葉がある。

その語源は「絶世独立」というものであり、これは漢書の中にある一節から来ている。

「絶世而独立」――世に並ぶ者のなく、孤高の存在（美）である。

そのあとにはこう続く。

「一顧傾人城」――ひとたび振り返れば城を傾ける。
「再顧傾人国」――ふたたび振り返れば国を傾ける。

僕は寒気すら覚えた。お嬢様がこのまま成長すれば彼女を争って国が傾くことさえあるのではないか、と。

10

「レイジ、これ、おかしくない？　わたくし、お化粧は初めてだから……」

「――まったく問題ありません。ですが、くれぐれも晩餐会で流し目などはなさいませんよう。明日から婚約申し込みの書状が山のように届くことになりますから」

「え？　もう、レイジまでそんなこと言うんだから！」

照れくさそうにお嬢様は言ったが、そこにいつもの勢いの良さはなくてどこか照れていた。散々、メイドたちから褒められまくっていたのだろう。

化粧や着付けを担当していたメイドは誇らしげに腕組みしている。プロ級である。

（いやほんと、流し目というか視線すら向けないで欲しいよ……）

スィリーズ家の「目」は、あまりにも特殊なのだ。

緋色の瞳には「魔性」が宿る。

これは――高位貴族たちには知れ渡っているが下位貴族では知らない者もいるらしい。僕は伯爵から聞く前から【森羅万象】でわかっていたけれども。

伯爵本人が持つ目は、魔力を通すことで相手のウソを判別できる「審理の魔瞳」。

お嬢様が持つ目は、魔力を通すことで相手の戦闘意欲を向上させる「鼓舞の魔瞳」。

天賦珠玉という、それさえあれば誰でも魔法が使えてしまう存在があるからこそさほど注目はされないが、スィリーズ家の血筋にはこういった特別な「魔瞳」、緋色の目が現れるのだった。

聖王陛下がスィリーズ伯爵を「懐刀」にするのは「審理の魔瞳」があるからという側面はきっとあるのだろう。逆に言うと「嘘発見器」的なものが天賦では再現できない……あるいはものすごく難しいか希少だということになる。

もちろんこういった魔瞳は、人口全体で見れば極めて少ない数だと聞いたけど――それでも使いようによってはとんでもなく有用なものであることは確実だった。僕は伯爵にウソをつけないわけだしね……。

すると玄関が騒がしくなったのを【聴覚強化】で鍛えられた僕の耳がとらえた。

日の出とともに出かけ、日が暮れる前に帰ってきたことのない伯爵が、今日ばかりはお嬢様のおめかしが終わったタイミングで帰ってきたのだ。

メイドや執事たちが一斉に頭を下げ、僕もそれに倣って頭を下げていると伯爵はお嬢様のところへ歩いていく。

「エヴァ。今日は楽しんでくるといい」

「……はい」

え、それだけ？　ここはこう、もうちょっと褒めるところでしょ。ただし「棒読み」はダメだし「ストレート過ぎる言い方」もダメだよ？

「……レイジさん、ちょっと」

頭を下げていた僕の表情は見えなかったはずなのに伯爵に呼ばれ

た。ぎくりとして顔を上げ、来い来いと手招きされて部屋の隅へと向かう――全員が僕らの背中を見つめているのを感じる。

「……なにか？」

「……娘の機嫌が少々悪いようです。あなたがなにかしでかしたのですか？」

ちょっとちょっと僕のせいですか？

「……いいえ？　僕の振る舞いには心当たりがありませんね」

「……残念ながらそれは真実のようですね」

そこで「審理の魔瞳」を使わないでよ！

「……ではいったい娘はどうしたというのです？」

「……さあ。護衛の仕事には含まれませんので」

「……娘の心の健康を守るのも護衛の仕事でしょう」

初めて聞いたよそんなこと。護衛の守備範囲が広すぎる。

……まあ、お嬢様が心配そうな顔をしているから答えを教えてあげましょう。

「……ちゃんと褒めてあげてください」

「……褒める？」

「……お嬢様、着飾って美しくなったでしょう？」

すると伯爵は、白皙の美しい顔をかしげる。

「……そのような当然のことを口に出すのですか？」

これは親馬鹿なのか、本気なのか、冗談なのか、判断に困るところだ。

「……閣下は女心がわからないと言われませんか？」

「……相手がウソを吐いているかどうかはわかるので、望むものを差し上げたことは何度もありますよ」

「審理の魔瞳」が有能過ぎる。

「……『望むもの』が有形ではなく無形の言葉であることも多々あるのです。騙されたと思ってドレスアップしたお嬢様を褒めてあげてください」

「……」

目に魔力が宿りました。はい。「審理の魔瞳」をそんなことに使わないように。

「……わかりました」

納得した伯爵はくるりときびすを返すとお嬢様のところへと戻っていく。この人の本性が、間が抜けているのか冷血なのか親馬鹿なのかという究極の三択の答えがわからないけれど、この人の動作がいちいち絵になるのがズルイと思う。転生するならイケメン伯爵になりたかった。いや、護衛の苦労を考えたらそうはなりたくないな……。

「エヴァ。君のために仕立てたドレスは、君が持つ本来の美しさに比べれば引き立て役に過ぎないけれど、改めて君の美しさがわかったよ。君はスィリーズ家自慢の娘だ」

「あ、あわわわ」

褒められ慣れていないお嬢様はあわあわしていた。助けを求めるように僕へと視線を送ってくるので、うなずいて差し上げると、頬を紅潮させて伯爵へと「ありがとうございます」と返していた。

うんうん、いい感じじゃないか。お嬢様が今僕に助けを求めたことで、伯爵が僕に不機嫌そうな顔を向けていることをのぞけば。

先ほどの究極の三択は、今のところ3番の「親馬鹿」が有力候補です。

お嬢様を晩餐会の会場へと運ぶのは伯爵家の馬車だった。こういった「ハレの日」に使うための馬車は各貴族が用意しておくもののようで、スィリーズ家のものは「魔瞳」を象徴するような緋色の布が張られた馬車だった。巨大な車輪は鉄製でピカピカに磨かれており、屋根の上に載せられた金色のオブジェは、三日月に剣が2本――スィリーズ家の家紋である。

魔導ランプが4か所吊り下げられ、温かなオレンジ色の光を放っていた。

「レイジも乗りなさい」

「……はい」

シンプルながら豪華――そんなインパクトのある馬車に少々気後れしていた僕は、お嬢様の言葉に背中を押されるように馬車へと向かった。

マクシムさんが僕に「目を通しておくように」と今日の晩餐会の出席者一覧を渡してきた。今日の今日まで参加ができるかどうかわからない貴族もいるので、配布が当日になるらしい。なんと迷惑な。こちとら上流階級とは無縁な庶民派護衛なんですよ！

マクシムさんも含む、騎馬が１０騎、馬車を取り囲んでいる。小窓を開いて外を眺める。いつもは貴族御用達の商人馬車や荷運びでにぎやかな通りも、今日は静かだ。今日が貴族たちにとって重要な日だということは一般国民にも知れ渡っており、出入りが制限されている。

こういうイベント時には、国民にも施しが行われるらしい。お金を渡す、ということではなくて大規模な工事の発注や大量の物資調達など、購入を通じてお金が行き渡るような仕組みだ。工事はともかく物資は購入してもあぶれてしまう。それらは教会を通じて孤児院や貧しい人々に配られるのだという。

（意外とちゃんとしてるんだよね……聖王の統治は。それでもお金が足りない人が出るから、奴隷まがいの身売りのニーズは減らない）

原因はいくつかあると思う。ひとつは、この国は貧富の差が激しい。多少国が施しをしたところで埋まるようなものではないのだ。

貴族という特権階級が美味しいポジションを全部押さえているのが最初にあって、次にその貴族にぶら下がる商人たちが大金持ちになる。貴族にぶら下がって成り上がろうなんていう人たちが「公平無私」であることなんてほぼあり得ないので、貧乏人からお金をむしるようなことも平気でやる。

（お嬢様は「構造的な問題」って言ったけど……まさしくその通り。でも、やっていることは「奴隷商潰し」なら意味がない。まあ、そこまで言うのは護衛の仕事じゃないから言わないけどね）

11

伯爵邸のある辺りは高級住宅街なので、信じられないくらい長い塀が続いていたりする。ただここが「聖都の中心」なのかと言われると、少し違う。

聖都の中心に「一天祭壇」も含む「聖王宮」があって、ここに聖王は住んでいる。

聖王宮に入れるのはごく少数で、スィリーズ伯爵も年に数回しか入らないと言っていた（それでも貴族の中では相当に多いほうだという）。

中心から年輪のように壁で区切られており、「1の壁」から「8の壁」まで存在していた。「8の壁」はもちろん城壁で外敵の侵入を防ぐものなのだけれど、聖都は多くの人を集めるので「8の壁」の外にも多くの家が建っている。

この聖王宮を囲う「1の壁」があり、外側にはクルヴァーン聖王国の政を行う「議場」や、各種「中央官庁」、それに「枢密教会」がある。ふだん、伯爵が通っているのはここで、「第1聖区」と呼ばれている。中心に「聖王宮」、そこから数えて1番目だから「第1聖区」というわけだ。

（日本で言う霞ヶ関だな）

「2の壁」の外側に「聖都中央教会」があってここが聖都で最も大きく、信仰の篤い場所だと言われていた。「枢密教会」は貴族たちの専用で、そんなに大きくはないらしい――まあ、祭壇から天賦珠玉がポンッと出てくるような（何度も言うけど効果音があるかどうかは知らない）国で、神に祈ってもしょうがないよね。誰しもが祈りたい祭壇は天賦珠玉をポンッと出すために厳重に管理されていて

近寄れないわけだし。

今日行くのは、「2の壁」と「3の壁」の間、「第2聖区」聖都中央教会の近くにある晩餐会会場だ。伯爵の居住地も同じエリアなので「壁」を抜ける必要はない。ちなみに聖王騎士団の寮や練兵場は「第3聖区」にあり、一般でも富裕層はここに住むことができる。この外から「第4街区」と呼び名が変わるあたり、貴族たちの優越意識がうかがわれる。

僕がスィリーズ伯爵を助けたのも第4街区だった。伯爵は自宅に帰るところだったんだろうけど、どうして第4街区なんかにいたんだろうか？　まあ、人の恨みを買うようなヤバそうな仕事をしている人なので、あまり理由を聞きたいとは思わないけど……。

「レイジ、どうしたの？　なにか黄昏れているわ」

「黄昏れ……いやそんなことないですよ？」

「なにを考えていたの？」

考え事はいろいろあるけれど、「今のお嬢様を直視したくないので外を見ていた」というのが正直なところだ。そこそこ広いが部屋よりははるかに狭いところに向かい合わせで座っている僕とお嬢様。いくら魔力をこめなければ「魔瞳」が発動しないとは言え、やはりスィリーズ家の目は魔性の目だ。見てるとドキドキしてしまう。おかしいな、僕にはロリコン趣味はないのに。

「あっ、わかった」

「ハズレです」

「まだ言ってないのだわ！？」

「どうせ『昔のことを思い出していた』とか言うんでしょう？」

「……」

「アタリですね」

「ズルをしたのだわ！」

「相手の心を読めるズルがあるのなら僕だって欲しいですよ」

まあ、それに近い「魔瞳」を伯爵は持っているけどね。

僕は他愛のない会話をお嬢様と続けた。彼女の心に少々余裕がないことには気づいていたから。

浮き足立つお屋敷、ふだん口にしない褒め言葉を口にした父。今日が「特別」なのだと言われていても実際に体験してみるまではわからないのが人間というものだ。

僕と話すことで心が落ち着くのならそれでいいし。

（……僕がいつまでいっしょにいられるかもわからないしね）

スィリーズ伯爵は、契約魔術のこともあってしっかりと人捜しをしてくれている。ラルクのこと、ルルシャさんのこと、どちらが先に情報が出てくるかはわからないけれど、どちらかがわかったら僕はお嬢様の元を離れて会いに行かなければいけないだろう。

「レイジは今日の出席者を見た？」

「あ、そう言えばそんなものをもらいましたね」

僕は手にしていた、つるりとした手触りの植物紙を見やった。全部で２２人……こんなにいるんだな。お嬢様の名前は上からかぞえて６番目に書いてあった。

（それより上は、と……）

厄介そうなところはチェックしておこう、と僕はお嬢様より上を見た。

★聖王子クルヴシュラト

★公爵家：ルイ＝ロズィエ
★公爵家：エタン＝エベーニュ
☆侯爵家：シャルロット＝フレーズ
☆辺境伯家：ミラ＝ミュール

黒星が男子、白星が女子らしい。

「……なるほど」
「なにが『なるほど』なの？」
「名前だけ見ても、毛ほども興味が湧かないことがよくわかりました」

率直に言うと、お嬢様は一瞬きょとんとしてから、声を上げて笑い出した。

「お嬢様……？」
「あははははっ、あはっ、も、もう、レイジったら、そんなこと思っても口にしたらダメなのだわ！」
「はあ……そんなに笑うところですか？」
「それはそうよ！　だって、この大国クルヴァーンの中枢にいる貴族の子どもたちで、しかも筆頭には聖王子様がいらっしゃって――」
「いらっしゃって？」
「……」
「？」
「……ううん、いいわ。わたくしも見るの止めるわ」

お嬢様は手をひらりと振って窓から外を見た。
僕は、お嬢様がなにに反応してどこに心変わりしたのかがよくわからなかった。

「ねえ、レイジ。知ってる？」
「なにをですか」
「わたくし今日、お父様に褒められたのだわ」
「……知ってますけど？」
「すごくうれしい！」

そうして僕を見たお嬢様の笑顔は、色気があるわけでも「魔瞳」の妖しげな輝きがあるわけでもなくて――ただ純粋に子どもらしいきらきらとしたものだった。

不思議なことにそんな笑顔のほうが僕の胸には、染み入るように響いたのだった。

「……はい、よく存じ上げております。よかったですね、お嬢様」
「うん！」

お嬢様と僕を乗せた馬車は、ゆったりとした速度で晩餐会会場へと向かう――。

＊　エヴァ＝スィリーズ　＊

うちの護衛は変だ。絶対に変だ。

まず若い。「こいつは若いのになかなか筋がよくて」とマクシム騎士隊長が褒める騎士だって２０歳以上ばかりで、若くても１８歳がいいところ。

なのにわたくしの護衛は１４歳だ。

しかも着任当時は13歳だった。
しかも騎士隊長に手合わせで勝ってしまった。

うちの護衛は変だ。絶対に変だ。

わたくしが知らないような知識を持っている。もちろん2歳年上だからそのぶんの経験はあると思うけれど、それでも、貴族としての教育を受けていない人間であるにもかかわらず社会や経済、政治に関する質問を家庭教師の先生にぶつけては先生に驚かれている。
年齢詐称？
ううん、見た目通りの年齢なの。

うちの護衛は変だ。絶対に変だ。

ふつう、聖王国の高位貴族が集まるような晩餐会に出席するというなら緊張するはずなのにそういうのがまったくない。緊張しているわたくしがバカみたい。わたくしに、歯が浮くような台詞を平気な顔で吐いたりする。
それに……聖王子様が出席するというのに、あの、聖王陛下のご子息である聖王子様が出席するというのに！　全然！　光栄に思わないの！　聖王陛下にはわたくしだってお目通りしたことがないし、聖王子様にだって、今回出席されるクルヴシュラト様が第3子なのだけれど、第1聖王子様と第1聖王女様にはわたくしだって一度だけお目に掛かったことがある程度。
こんな光栄、この国の民なら絶対に感激して涙を流すはずなのに！
なのに！
ウチの護衛は！
ちょっとお使いにでも行きます、みたいな顔をしているの！　むしろわたくしが頼んでこっそり市井に連れ出してもらったときのほうが緊張していたわ！

でもね。
わたくしはそのとき、ハッとしたの。
わたくしが目指していたのは、レイジのような国民が……「お貴族様がいるから」とかしこまったりしない、みんなが公平平等に暮らせるような社会だったのに、って。
知らず知らず貴族社会の「常識」に、わたくし自身が縛られてしまっていたのだわ……。
レイジはそこに気づいて、態度をもって示してくれた。
それなら、主であるわたくしもレイジに応えなくては――。

「お嬢様、着いたようです。まず、僕が降りてエスコートしますからね」
「ええ、お願いするわ」

レイジは、体重がないんじゃないかっていうくらい身軽に馬車から降りる。ほら、靴底が地面についても音が鳴らないの。おかしいわ。
空に残る夕空はほんのわずかで、星が瞬いていた。今日は新月だからいつもより夜の闇が深いのよ。
馬車の外にあったのは、晩餐会の会場――邸宅まるごとひとつを会場としている場所。
馬車寄せのスペースのそこかしこにキャンドルが置かれてあって、魔導ランプよりも温かく、だけれど目にはきらりと感じられる光を放っている。
多くの馬車がすでに到着し、護衛の騎士たちも馬から降りてわたくしが出てくるのを待っていた。
すぅ……。

さあ、ここからが第一歩。
わたくしが、貴族として――公正で公平な社会を目指す貴族として踏み出す第一歩。

「お嬢様、どうぞ」

とっても変で、とっても頼りになる護衛のレイジが手を差し伸べてくれた。
わたくしはその手を取ったの。

この夜にすべてが変わってしまうことも知らずに。

12

別世界だな、というのが正直なところだった。

もちろん伯爵のお屋敷が非常にお金の掛かっているところだとはわかっていたし、お嬢様のドレスが信じられないくらい高額であることも知っている。

問題は、単発で見るくらいなら「おお～、すごい」くらいの感想で済むのに……集団になると。

「ドウェル伯爵家ご令嬢ジュリエット様、ご到着！」

「レミー伯爵家ご令息リュカ様、ご到着！」

「ブリオン伯爵家ご令嬢アリス様、ご到着！」

邸宅の入口までは磨かれた大理石の階段になっていて、ひとりが通るたびに召使いがモップのようなものでササッと拭いていくために常にピッカピカの状態だった。

金の把手がついた両開きの扉の横で、テノールを利かせたいい声の召使いが「ご到着」を告げている。２２回もやらなきゃいけないんだから彼も大変だよね。

お嬢様とは違う、キンキラキンの宝飾に身を包んだご令嬢や、これでもかというくらい――ひょっとしたらＬＥＤでも仕込んであるのかもしれない――まばゆい光を放つ鎧を着込んだ護衛がいっしょに邸宅へと入っていく。

こんなのがあと２０セットはあるんだぞと思うと「おお～、すごい」ではなく「ヤバ……」という感じで引いてしまう僕です。

ちなみに今まであまり気にしていなかった装備品のステータスだけれど、マクシムさんに武具魔術のことを聞いてから【森羅万象】でじっと見るようにしている。

（武器は持ってないけど鎧は……「輝き増強」？「汚れ落とし」？バカなの？）

むしろ「ＬＥＤ内蔵」がなくてよかったまである。ＬＥＤは魔術的な明るさだよね……あれで低電力なんだから信じられないよ。

「あとは頼むぞ、レイジ」
「はい、承りました」

現実逃避してＬＥＤのことを考えていた僕にマクシムさんが話しかけてきたので、僕は力強くうなずいておいた。鎧を着ていない護衛は僕だけのようで、なおかつ年齢も身長も一回りくらい皆さんより下というのが気になるので、力強く返しておかねばならない。

入場は到着順ではなく、案内の係の人がいちいち呼びに来た。

「お嬢様、足元にお気を付けて」
「ええ。行くわよ、レイジ」
「……」
「どうしたの？」
「いえ、別に」

なんだか吹っ切れた感じのお嬢様に少々面食らいながら、僕はお嬢様のすぐ後ろに立って階段を上がっていく。僕が通り過ぎるとササッと拭かれた……これはこれで「お前バッチィ」と言われているような気もする。

「……スィリーズ伯爵家ご令嬢エヴァ様、ご到着！」

お嬢様を見た呼び出し係（テノールさん）が声を上げたけれど、一瞬間が空いたの

は彼がお嬢様を見たからだ。
わかる。わかるよ。化粧してドレスアップしたお嬢様がいきなり目の前に現れたら僕だって悲鳴を上げかねない。むしろぐっとこらえたあなたを褒めてあげたい。
「スィリーズ家」という言葉はなにか特別な力でも持っているのだろうか、ざわざわとしていた邸内が静かになったのだ。
エントランスに入るとほんのちょっとしたスペースがあって、すぐに晩餐会の会場につながっていた。そのほんのちょっとしたスペースで武器を検(あらた)められるのだが、もちろん僕はなにも持っていない。

（……天賦無効の魔術が掛かってるな）

だけれど不思議な感覚だった。ある一定の天賦だけが無効になっていて、残りは大丈夫なような……たとえば僕の【森羅万象】は問題ないのだけれど、【腕力強化】のような天賦は無効にされている感じがある。
こういうふうに天賦を限定して使えなくすることができるんだね。
戦闘系の天賦を選んで使えなくし、一方で会場内の召使いたちが働くのに必要な天賦は使えるようにしてあるってことか。

（でも【森羅万象】なんて使える人はいないだろうからともかく、【影王魔剣術】とかの特殊なものは使えちゃうよね……まあ、知らない天賦はどうしようもないか）

聖王騎士団の制服を着た人が――あいにく僕が部屋の掃除に行った人じゃなかった――僕を見てきょとんとしたが、「その服でいいのか？」と直球で聞いてきたので「はい」と即答し、お嬢様とともに晩餐会の会場に入った。

（おぉ……）

天井が高く、巨大なシャンデリアがぶら下がっている。富豪が殺されるミステリーに出てきそうな……というレベルよりはるかに大きい。自動車2台分くらいはあるんじゃないか？

シャンデリアの周囲には小さなシャンデリアが8つぶら下がっていて……というか「小さな」って言ったけどこれで十分過ぎるほど大きい。

円卓は小さなシャンデリアの下に4卓置かれてあって、中央の巨大シャンデリアの下はダンススペースにでもなっているのか、なにもなかった。

大理石の床は、その石の色によって場所が分けられてあり、中央には巨大な青い円が描かれてある……っていうか青い大理石なんてないよな。あそこだけ違う石だわ。

とはいえこういった場所でキョロキョロするなというのはメイド長や執事長に釘を刺されまくっていて丑の刻参りの藁人形もかくやというほどだ。僕は視線をあちこちに向けたりはしない。

むしろ、すでに着席している貴族のお子様や護衛の人たちがこっちをガン見してきた。

「――あれがスィリーズ家の……」

「――うわあ、カワイイ」

「――あのドレス地味じゃなくて？　わたくしのほうが勝ってますわよね？」

どういうふうにお嬢様のことが伝わってるんだろうね。

いやまあどっちかっていうと、冷血卿の娘が来たって感じなのかな。

僕は【聴覚強化】があるからいろいろ聞こえたけど、お嬢様は聞こえなかったのか――あるいは煩わしい視線は無視できる鋼のメンタル持ちだったのか、案内の召使いに従ってすいすいと進んでいく。

通りすがりに各テーブルの人々を観察したけれど、エルフがいて、ドワーフがいて、獣人がいる。なるほど、多くの種族を受け入れている国家だけはあるな。

いちばん奥のテーブルは6人席だった。

お嬢様がいちばん最初に着座したので空席は5つ。

はは～ん、なるほど？　これは「偉い人は最後に来る」っていうヤツだな？

「ミュール辺境伯家ご令嬢ミラ様、ご到着！」

渋い茶色の髪の毛をアップにした少女が現れた。目元にはそばかすがあって、化粧があれば消せるはずなのだけれど【森羅万象】が僕に「あの子はノーメイク」と囁いてくる。要らない情報ありがとう！

肌の大部分を隠すような銀色のドレスは、他のご令嬢と比べるとデザイン的に古さを感じさせたが、それをバカにするような声はひそひそ声ですら聞こえない。

なぜか？

すごいのがついてるからね、護衛。灰色の熊の毛皮を頭からかぶったバーサーカーみたいなのがついてきた。そこまで要る？「辺境」アピールなの？

ちなみに伯爵家の中ではスィリーズ家がいちばん家格が上のようだ。伯爵ではお嬢様が最後に入るように言われたし。

辺境伯家は同じ伯爵ながら、辺境に領地があり、そこに軍を持つことを許されている。辺境で危険がいっぱいだからだ。だから、伯爵よりも家格が上――ただし中央の政治には関われない。

ミラ様は奥のテーブルにやってくると、うちのお嬢様を見て、はたと足を止めた。

「ひぃゅ～～～～」

……今なんて？

「か、か、か、かわっ、かわいっ、かわっ」

「落ち着きなさい、ミラ。挨拶はあとだ」

「ひゃい……」

ぽーっとした顔でミラ様は引かれたイスに座ると、その間もずっとお嬢様を見つめていた。

護衛のバーサーカーはどんなプロテインを飲めばそんな筋肉がつくのかというくらい盛り上がった身体をしていたけれど、ミラ様を見つめる視線は穏やかだった。

「フレーズ侯爵家ご令嬢シャルロット様、ご到着！」

今度は違った意味でざわついた。ストロベリーブロンドの長い髪を縦ロールで巻いている正真正銘のお嬢様が現れたのだ。フリフリのフリッフリのドレスに身を包んだ彼女は、幼い顔にはミスマッチに過ぎる厚化粧をしていて、どう見ても「顔採用」という水色ヘアーのなよっとしたイケメン護衛を引き連れてこのテーブルまでやってきた。

「……わぉ」

イケメン護衛はお嬢様を見て目を見開いた。が、それとは対照的にシャルロット様は敵対心たっぷりの視線をお嬢様に向け、それから次にミラ様へと向けた。

「あぁ～ら、相変わらず野暮ったい服ですこと」

「かわ、かわわぁ～……」

だけどミラ様は相変わらずウチのお嬢様を見てぽーっとしている。

「……」

嫌みを完璧に無視されたシャルロット様はぷるぷるしていたが、

「フン！」と顔を逸らすとイスに座った。

「エベーニュ公爵家ご令息エタン様、ご到着！」

おお、聖王の血筋が入っている公爵家か――と思ってそちらを見た僕は、ハッとした。

エタン様は、パーマの掛かった飴色の髪の毛がふんわりとしていて、その幾筋かを複雑に編み込んで左のこめかみに垂らしていた。

そこには宝石で作られたビーズも含まれている。

着ている服こそ燕尾服のような礼服だけれど、その手首に見えるのは色とりどりの糸を使ったミサンガだ。

そしてエタン様の後ろにいる護衛は――鎧を装備しているものの護衛にしては他の誰よりも小さくて、僕よりも少し小さいくらいの女性だった。エタン様と同じ飴色の髪は長く、後ろで縛ってある。首をぐるりと巻いた、腰までのショートマントはカラフルな刺繍で彩られてあった。

「……ハーフリング？」

12（後書き）

この小説が気に入りましたら是非とも「ブックマーク」をよろしくお願いします！

また、下の広告のさらに下に★★★★★があるかと思います。
こちらをタップすると「評価」となり作品にポイントが入り「応援」することができます。
ログインしていればどなたでもできますので、是非とも応援よろしくお願いいたします。
皆様が思っているよりもずっとずっと、作者にとっては追い風となりますので！

おかげさまで「小説家になろう」トップページに表示されるようになりました。
ほんとうにありがとうございます。

13

エタン様はハーフリングなのか――。

僕が思わずつぶやくと、それを耳にしたお嬢様が、

「そうなのだわ。エベーニュ公爵家はハーフリングの血が色濃く入っているの」

エタン様はこのテーブルにやってくると、全員を見回してにこりと微笑んだ。優しそうな子だ……彼の青い目が、僕にある人を想起させる。

（……ミミノさん、元気かなぁ）

僕がふとノスタルジーに浸っていると、エタン様の護衛が僕を警戒するように見ているのに気がついた。彼女の瞳の色は琥珀色だ。

大丈夫ですよ、僕は人畜無害ですよ……とアピールしたいところだけれど、確かに圧倒的に年齢が低い僕が全然武装していないのは逆に怪しくしか見えないか。

見た目年齢だけならその護衛さんも僕に負けず劣らず若く見えるけれど、ミミノさんの例を考えるに僕より年上なんだろうな。

それはそうと……エタン様が来てからすごく華やかな香りがする。なにかわからないけれど花を使った香水だ。

「ロズィエ公爵家ご令息ルイ様、ご到着！」

入口に目を向けた僕は――思わず目を疑った。

そこにいた少年は、金髪に赤い目というお嬢様と同じ組み合わせ

パターンの少年だったのだ。
ただ残念ながら【森羅万象】によるとその目は魔瞳ではなく、単に赤いだけのようだ。それに髪の毛は茶色を脱色して金髪にしているらしい。

（なーんだ……って）

ルイ様の背後にいた護衛に、僕は驚いた。
見たことがある。聖王騎士団第2隊長アルテュール様だ。２０代半ばで第2隊の隊長にまで昇格した人物で、親が貴族のボンボンだとか聞いたことがあるけど……。
鳶色の髪をさらりと片方に流し、彫りの深い目元には灰色の瞳。冷たくも感じられるその目を周囲に投げ、護衛の質を値踏みしているかのようだ。
だけど護衛対象のルイ様は勝手にずかずかと歩いてこのテーブルにやってくると……なぜか自分の席ではなくエヴァお嬢様の横にやってきた。

「おい、スィリーズ家の娘」

人差し指を突きつけてこう言った。

「お前を俺の婚約者にしてやる。明日、挨拶しにうちまで来い。父上に紹介してやるから」

心拍数の上昇、耳は赤く、声は震えている。ああ、なるほどね。
この少年はお嬢様をどこかで見たことがあって、髪の色をわざわざあわせた上で晩餐会（ここ）をプロポーズの場として選んだわけか。

「なるほどなるほど。健気な少年の恋心なんですねえ……」
「いっでええええ!?」

僕は【森羅万象】でわかる情報でこの少年が、素直になれないただの生意気な子どもだということはよくわかっていたけれども、とりあえず少年の腕を後ろにねじりあげた。

「お、お前ッ!?　なにをする！　俺にこんなことをしてただで済むとは――」
「僕はお嬢様の護衛なので、お嬢様に迫る危険は排除するよう言われています」
「なんだと!?」

この少年は危険。きっと伯爵閣下もそう判断するはず。
婚約とやらが既成事実になってしまったらお嬢様の人生にも影響が出てしまうからね。
まあ、こんなことやっていることをメイド長や執事長が知ったら卒倒してしまうだろうけど、ここでなにもせず放っておいたら親馬鹿……失礼、伯爵閣下がブチ切れると思われる。「あなたは護衛ではありませんでしたか?」とか言って。
僕が「やらかした」だけなら最悪僕だけ姿をくらませばなんとかなるだろう。ここまで身体を張ったんだから伯爵だって僕のために星5つ以上天賦（ラルク）とルルシャさん捜しを続けてくれるはずだし。
……たぶん。
それくらいやってくれますよね、伯爵?

「なにをしている!」

聖王騎士団第2隊長のアルテュール様が走ってくるけれど、その

速度はゆっくりだ。ここは天賦無効になっているから身のこなしがイマイチなのかもしれない。いけませんね……聖王騎士ともあろう者がそんな様子では。

「アルテュール！　早くコイツを殺せ！」
「……今手元に武器はありません。ん、お前は……？」

アルテュール様は僕に気がついたのかふと動きを停めると、

「騎士団の掃除係ではないか。なぜこんなところにいる」
「スィリーズ家の護衛となりました」
「護衛！？　その御方が誰かわかっているのか？　すぐに放せ！」

アルテュール様が接近してきたので僕は少年を盾にして防ぐ。金属鎧を着込んだ天賦なしの騎士なんて動きが鈍すぎるからこれくらいで難なくかわせる。
むしろ天賦なしの力比べになったら負けてしまいそうだ。魔法を使えば別だけど。

「アルテュールッ！」
「は、はっ。しかしこの、動くな！」

いやなこった。少年を中心にぐるぐると僕は回転して接近をかわしていると、

「……レイジ、もういい加減に止めなさい」
「はい」

お嬢様の声で僕はパッと手を離した。
目が回ったらしい少年は足元をふらつかせながらアルテュール様

に倒れ込んだ。

「お前……このようなことをしてただで済むと、思うなよ……」

「――ルイ様」

お嬢様はイスから降りて少年の前へとやってきた。

会場中の注目を集めたお嬢様は、口元を歪ませて妖艶な笑みを浮かべた。

「わたくしたちは本日をもって、一人前の貴族となるのです。レディーの関心を惹くにはいささか性急に過ぎるように存じますわ」

そうして少年に近寄って、ハンカチでその口元をぬぐってやった――ちょっとよだれが出ていたからね。

「さあ、席につかれてくださいませ。聖王子様がいらっしゃいますわ」

優雅に席へと戻ったお嬢様をぽーっと見つめるルイ少年。相変わらずぽーっとしているミラ様もいるけど。

ああ、これはやりましたわ。撃ち抜きましたわ。いたいけな少年の心にさらに追い打ちしましたわ。淡い恋心がガチ恋になっちゃいましたよ、お嬢様。

「……レイジ、あとでお説教よ」

お嬢様が小声でそんなことを言ったけれど、僕は聞かないフリをした。

僕のせいではない。

「……聖王子クルヴシュラト様、ご到着！　……ッ！？」

騒ぎが落ち着いたからか最後の呼び出しが聞こえた。なんか変な声がしなかったか？

さらに会場全体がざわっ、としたと思うと、悲鳴に近い歓声が上がった。

「？」

入口を僕も見やったけれど、多くの貴族の子女が立ち上がっている。なんだなんだ？　王子様が来ることはみんな知っていたんじゃないのか？

入ってきたのは、明るい水色の髪を短く切った少年で、活発そうな髪型とは裏腹に目元は優しげだった。アクアマリンをはめ込んだような美しく大きな瞳は「女装させたら男を狂わせるぞ……」とかどうでもいいことを僕に思わせる。

着ている服が面白い。水色の帯の入ったローブというか、着物というか、羽織りというか、そんな感じの宗教服のようなものだったのだ。あれが王族の出で立ちなのだろうか？　あと、額には孫悟空がつけていそうな金色の輪っか――「緊箍児（きんこじ）」っていうんだけどこの世界の人は知らんよね――サークレットをつけている。

……うん。

つまりあれを着ているってことは王族の証ってことなんだよね？

僕の錯覚か、クルヴシュラト様の後ろにも、同じ服を着た大柄な男がいるんだよね。

「も、も、もしや……」

ガタッ、と音を立ててエヴァお嬢様も立ち上がり、ぽーっとしていたルイ少年とミラ様も今ばかりは驚愕に顔を染めて入口を凝視し

ていた。
　クルヴシュラト様とおなじヘアスタイルと服装なのだけれど、女の子のようなクルヴシュラト様とは違って身体全体ががっしりとしていて、控えめに言えばゴリラで、大げさに言えば動く石像で、まつげたっぷりのお茶目な目と意志の強そうな眉、あごひげがもみあげとつながっているのはクルヴシュラト様と真逆だ。
　服装が同じでなければ、同じ王族だなんて僕は思わない。

「あの御方は」

　お嬢様が呆然と言った。

「聖王陛下」

と。

14

クルヴァーン聖王国の聖王は、幼少期こそ名前が与えられているけれど一度即位すると「聖王」となり、名前を捨てる。そして死ぬまで「聖王」を名乗るのだそうだ。

特徴は透き通るような水色の髪と目。この色は「聖水色（せいすいしょく）」と呼ばれ、子を成す相手がどんな種族であってもこの組み合わせになるか、あるいは相手の遺伝を完全に受け継ぐかのどちらからしい。

ある意味これも、魔瞳と同じ特殊な遺伝なんだろう。

「聖水色」は男女ともに発現するために、女性が王となることも十分あり得る。ただし、「聖水色」が発現しない場合は「聖王子」「聖王女」と呼ばれることなく王家の親族として生きていくことになる――その場合は「公爵家」を名乗ることもできない。「聖水色」を持つ者だけが公爵家になる。もちろん、「聖水色」は途中で途絶えるわけだし、途絶えると先祖返りは起きないという。だからエベーニュ家は公爵家ながらハーフリングの家系なのだろう。

――「聖水色」は聖王国にとって特別な色であり、また最も貴き色であるのです。

家庭教師の先生はそう言っていた。

「――本物の聖王陛下！？」

「――どうしてこんなところに」

「――聖王子様のお付き添いなのか！？」

ざわつきは最高潮だ。

だが僕のいるテーブル――会場内ではいちばん位の高い場所――

にいる子どもたちはその場に片膝を突いて頭を垂れ、僕ら護衛もまたそれに倣った。

続いて他のテーブルでも同じことが起きると、広い会場は沈黙に包まれ、全員が頭を垂れることとなった。

外ではわずかな残照も途絶え、新月の夜にふさわしい闇が満ちている。

だけれど会場内は煌々としたシャンデリアが光を投げている。

こつ、こつ、と足音がして聖王子と聖王の足音ふたりぶんがこちらに迫ってくる。

すごい。なんていうかオーラがすごい。「頭が高いぞ」と「黒子のバスケ」の赤司くんに言われたらきっとこんな感じなんだろうな、って……ああ、この世界にいる誰ともわかり合えないのがつらい！

「あ、あの。皆、顔を上げましょう。我もまた皆と同じ晩餐会の参加者でありますから」

堅苦しい言葉遣いと言い慣れなさと、聖王子本人の幼い声とが入り交じってとんでもないミスマッチが聞こえてくる。

でも、誰も顔を上げない。しんと静まり返った会場内に「あわわ……」という聖王子のかわいそうな声が聞こえてくる。

「――聞こえなかったのか、お前ら。顔を上げろ」

ガラスがあったら震わせそうな重低音が響くと、真っ先に公爵家の2人と侯爵家の1人が顔を上げた。ああ、顔を上げていいんだなと思ってお嬢様や僕、その他の人たちも一斉に顔を上げる。

言ったのは確認するまでもない、聖王本人だ。

直視するとこれまたオーラがすごい。なんか輝いて見える。え、魔力なの？　ダダ漏れなの？　やばくない、聖王？

「すまねえな。俺が来ると言ったら大混乱になるだろうからあえて伏せて置いたんだ。俺はクルヴシュラトの護衛だ。そう思っておいてくれ」

言わずに来ても大混乱ですが？

みんなそう思っているだろうけど言えない。だって相手は聖王だもん。

クルヴシュラト様はみんなが起き上がったことで明らかにホッとした様子。僕らのいるテーブルまでやってくるとイスに腰を下ろした。

で、聖王はクルヴシュラト様の後ろに仁王立ちし、テーブルにいる面々を見渡した――ってマジで護衛扱いなんですか？　いいんですか？　みんな座るに座れなくて所在なさげに突っ立ってますよ？

「……陛下、ご冗談もほどほどになされい」

灰色の熊がしゃべったァァァァ！　と思ったらミラ様の後ろにいたバーサーカーだった。なーんだバーサーカーがしゃべったのか、だったら安心安心。

なわけない。

護衛がいきなりしゃべるとかマズイ。とてもまずい。

「なんだぁ？　お前だって我が子かわいさに自ら護衛を買って出たんだろうがよ、ミュール辺境伯閣下」

聖王が眉根を上げながらじろりと見やる……ってバーサーカーは辺境伯本人だったの!?

これにはさすがのお嬢様や公爵家の令息たちもびっくりしている。

なんだよなんだよ、ってことは護衛本人がＶＩＰっていうケースは他にもあるんじゃないの？　ルイ少年の護衛はアルテュール様で

身元がはっきりしているし、シャルロット様の護衛のイケメンは……と言うと、ぽかーんと口を開けてイケメンが台無しになっているのでこれは大丈夫そう。護衛としては大丈夫かどうか定かではない。

で、エタン様の護衛のハーフリングさんは……うん、こっちをじろじろ見てるね。思うところは同じか。僕にはなんの秘密もないですよ、びっくり箱じゃないですよ、という意味をこめて両手をちょっと挙げて首を横に振った。それが通じたのか「うむ」ってうなずかれた。「うむ」ってなによ「うむ」って。

「ならば我らは護衛の役に徹しましょうぞ」

「ああ、俺もそのつもりだ……おいお前ら、いつまで立ってんだ。さっさと座れ」

どこの護衛が「さっさと座れ」なんて客に言うんだか。

だけどまぁ、権力者というのはこういうものかもしれないな。下々の気持ちなんてわからないのである。

気がつくと、会場の隅に楽隊が出てきて音楽を奏で始めている。ヴァイオリンによく似た弦楽器で、会話を邪魔せず耳にしていて心地よい音楽だ。屋敷の召使いが聖王にイスを持ってきて勧め、聖王は「どこの護衛が座るんだよ」と言って断り、召使いを青ざめさせている。ほらね、下々の気持ちなんてわからないんだよ。

いよいよ晩餐会が始まるのだろう。式次第のようなものがテーブルに置かれてあり、料理のメニュー名と、会の途中に主催からの挨拶があるという。主催は、高位貴族が行うことになっているようでルイ少年の実家であるロズィエ公爵家の名前が書かれてあった。

もしや公爵本人が来るの？　当主がさらに追加されるの？　聖王だけでなく辺境伯本人がいるということを知って他のテーブルでは息苦しそうな子がちらほらいるんだけど、彼らに呼吸をさせる気はないんですかね。

「え、ええと、今年12歳となった皆様、初めまして。我がクルヴシュラトであります。後ろの聖……護衛についてはあまり気になさいませんよう」

誰も口を利いてなかったからね、聖王子様ががんばって会話の口火を切ったぞ。でも聖王を気にするなって言われても無理だぞ。

「クルヴシュラト様、お久しゅうございます」
「ああ、ルイ。久しぶり」

ふたりは面識があるのだろうか、なんとなく気安い会話をしている。

「ん？　髪の色を変えたの？」
「！？　え、ええ、こ、これはですね……気分で」

痛いところを突っ込まれてルイ少年が冷や汗をかきながらエヴァお嬢様を気にしている。クルヴシュラト様もそれに気づいたのか、エヴァお嬢様へと視線を向け――固まった。

「――聖王子クルヴシュラト様、お初にお目に掛かりますわ。わたくし、スィリーズ伯爵家長女、エヴァと申しますわ」

イスに座っているので小さく頭を下げたお嬢様だったが、クルヴシュラト様はお嬢様に目が釘付けとなっていた。

「？　クルヴシュラト様、どうなさいました？」
「……あ、あわわ、あの、その……お名前を聞いても？」
「ですからエヴァ＝スィリーズでございますわ」
「そ、そうか！　エヴァスィリーズというんですね、ちょっと長い

名前だな。どこの家なのかな――あいてっ！？」

聖王がクルヴシュラト様の頭にゲンコツを落としていた。いやいや、護衛が護衛対象に危害を加えるなよ。

「落ち着け、クルヴシュラト。嬢ちゃんは……そうか、ヴィクトルの娘かよ」

「はい。聖王陛下におかれましては我がスィリーズ家に大いなる光を――」

「止めろ止めろ、そういうのはいい！」

聖王に話しかけられたお嬢様は、イスから降りてひざまずき、頭を垂れたのだけれど――それを遮ったのは聖王本人だ。

「座れ座れ。今日はお前らが主役なんだ」

主役より目立つ存在がそれを言うなというのは多くの人が思ったに違いない。

「……ありがたき幸せに存じますわ」

お嬢様がイスに戻ると食前酒が運ばれてきた。

テーブルには白の皿と、鏡のように磨かれた純銀製のフォークやナイフが並ぶ。テーブル中央にはなにもなく、ここには大皿に盛られた料理が運ばれてくることになる。

食前酒は様々に色づいたグラスで、入っている飲み物はリンゴを発酵させたシードルのようなものだ。シードルよりも甘みが強い。

お嬢様は、食前酒にほんの少しだけ口をつけてグラスを戻した。その一挙手一投足を見つめてぽーっとしているルイ少年とミラ様。

微笑ましいことだ。護衛にもちょっとは食べさせてくれないかな

ぁ、そんなことないだろうなぁ、なんて僕が思っていると聖王が口を開いた。

「ときにヴィクトルの娘、お前婚約はまだか？」

15

聖王は自分のペースで話を進めているけど、他の3名の自己紹介がまだっぽいけどいいんですかね。

お嬢様も少々そこが気になるようだったけれど聖王に質問されれば答えるしかない。

「はい。それらは本日の晩餐会以降に決めていこうと父とは話しておりますわ」

「そうか。それならクルヴシュラトなんかはどうだ？」

「ごぼっ！？」

いきなり言われたクルヴシュラト様が食前酒にむせている。そりゃ驚くよね。天気でもたずねるくらいの気軽さで自分の婚約の話が進んだら。

いやしかしお嬢様、「流し目するな」と僕は言ったけれどこの短時間でルイ少年とクルヴシュラト様のふたりの心を奪うとかヤバイ。お嬢様にはきっとそんな気なんてなかったとは思うけれども。

「お父――聖王陛下！　なにを言われるのですか！？」

「今日はお前の妃を決める場でもあるとあらかじめ言っておいただろう？」

妃。

第2聖王子の。

離れたテーブルに座っていたはずのご令嬢たちが一斉に反応した。全員聞き耳立ててたもんね。他のテーブルは沈黙の食卓になってるよ。

「そ、それは我が自分で考えていいと聖王陛下もおっしゃって……」
「お前の様子を見ていたら、こりゃ決まるまで何日掛かるかわからねえなと思ってよ」
「だからと言ってこんな性急な！」
「なんだよ、ヴィクトルの娘は不満か？」
「そ、そそそ、そういうことを申し上げているのでは……」

聖王親子がやいのやいのやっている間、ルイ少年がきりきりきりきりと歯ぎしりしながら僕を見ていた。

――おい護衛。お前の主が危険だぞ。排除しろや。

目は口ほどに物を言う。
ああ、なるほど。さすがの公爵家でも聖王子の婚約者になったら手出しができないよね。
ルイ少年の思いがしっかり伝わってきた。
僕はそっぽを向いて無視した。

「てめっ、なに無視して――」
「クルヴシュラト様！　わたくし、フレーズ侯爵家のシャルロットと申しますの！　お初にお目に掛かりますわ！」

すかさず自己アピールにシャルロット様が前のめりになると、

「父がこうも口やかましいと、子どもがかわいそうですのぉ……」

灰色熊がしゃべったァァァ！　じゃなかった、辺境伯（バーサーカー）だった。

「あ？　そりゃ俺に言ってんのか、辺境伯」

「自覚があるのなら黙っていたらどうですか、護衛殿？」
「俺が呼び出してもなんのかんの理由付けて聖都に来なかったお前が、娘のためにわざわざ場違いな熊の毛皮着て忍び込んできやがって。小うるさい親なのはどっちだ？」
「主役は子ども、どの口が言いましたかな？」
「あ？　やんのかお前」
「お？　久々に陛下と手合わせならば乗りますぞ。血がたぎる」

ゴリラと熊が半歩の距離で腕組みして向き合っている。
かたや魔力がダダ漏れの聖王、かたや灰色熊の辺境伯。ここから始まるバーリトゥード？　……いや、僕も突然現れた人たちのキャラが濃すぎて混乱しているらしい。クルヴシュラト様は頭を抱えて突っ伏してるし、同じく辺境伯の娘のミラ様も頭を抱えて突っ伏してるし、完全に話題を持ってかれたシャルロット様は涙目だし。
ハーフリングのエタン様の「え？」というきょとんとした顔を見るとホッとする。そうだよね。それがふつうの反応だよね。同じ「え？」でも「え、これから戦うの？　マジ？　見たい！」って感じで目をキラキラさせているルイ少年はちょっと反省しようね。
晩餐会は波乱とともに幕を開けたのだった。

「――なるほど、ではスィリーズ家はあえて領地をお持ちではないのですね」
「ええ、そうですわ。お父様は常日頃から『領地を持つことは多くの責任を伴い、責任を果たすには多くの時間を要する』とおっしゃいますわ。スィリーズ家は古くより聖都にて国全体のために尽くすことを是として活動してきましたの」
「そのお考えは大変立派だと思います」
「いえ……エタン様のエベーニュ家のように、特産品を作り、国を

栄えさせることもまた重要なことです」
「ウチはまだまだ――」
「昨年新たな香料の開発が成功したと聞き及んでおりますわ。すばらしいことです」
「いや、参りましたね。そこまでご存じとは」
エタン様とウチのお嬢様が和やかに会話している。お嬢様、ちゃんと家庭教師の授業が身についているじゃないですか、よかった――となんだか親心のようにほっこりする僕である。
クルヴシュラト様とミラ様は、護衛同士（パパ）がバチバチ視線で火花を散らしているのでハラハラし、先ほど発言しようとして失敗したシャルロット様は出てくる料理をヤケ食いしていた。
ルイ少年はお嬢様と話したそうな顔をしているが、聖王の「婚約」発言が気になっているのか、あるいは全然話についていけないのか、黙って食事をしている。もぐもぐしつつお嬢様の顔をちらりと見ては「ハァ～ッ」なんてため息を吐いている。恋する少年かよ。ああ、そのものずばり恋する少年だった。
「せっかく同い年なのです。私たちで友誼を結びませんか」
エタン様が全員へ向けて言った。
他のメンバーが気が気じゃないのを見て気を遣ったんだろう。偉すぎない、この子……？　ハーフリングはいい人しかいないのかよ……。
「すばらしい提案かと思いますわ！」
そこへシャルロット様が割って入る。
「友誼を結ぶって具体的になにするんだよ、エタン」

ルイ少年がようやく言った。気安く呼んでいるあたり、ルイ少年とエタン様はだいぶ親交があるみたいだ。

「そうだね……たとえば、私は領地にいる期間が長いので、私が聖都に来たときに集まってくれるとうれしいな」

「自分のためか」

「いいじゃないか。聖都にいる間、ヒマなんだもの。気軽に会えるのなんてルイくらいだし」

「俺で十分じゃないのかよ、そこは」

「毎日遊んでくれるのかい？」

「げーっ、絶対イヤだね」

「まあまあまあまあ、おふたりともとても仲良しでいらっしゃるのね！」

シャルロット様が割って入った。確かに仲が良さそうではあるけど、ルイ少年とエタン様とか絶対に反りが合わなさそうだ。

「ところでその友好の輪には、もちろんクルヴシュラト様も……？」

シャルロット様の本題、というか関心はそこにあったらしい。水を向けられたクルヴシュラト様はあわてて振り返り、父の表情を確認する。聖王はにやりとして小さくうなずいた。

「わ、我も是非とも参加したいと思う！」

勢い込んで言うクルヴシュラト様がカワイイ。どうしてこんな優しそうな子が、ゴリラみたいな聖王から産まれたんですかね……。

クルヴシュラト様は言うだけ言ってみんなの反応を確認する。そしてその視線はエヴァお嬢様のところで止まった。お嬢様が首をか

しげながら、

「――わたくしもよろしいのですか？」

「スィリーズ家は遠慮なさったほうがよろしいのではなくて？」

シャルロット様が食い気味に言うと、クルヴシュラト様があわてる。

「ど、どうしてエヴァ嬢を仲間はずれにするのだ、シャルロット嬢」

「それは……クルヴシュラト様。恐れながらわたくしの口からは申し上げられませんわ。ただ『スィリーズ家は貴族社会に軋轢をもたらす』とだけ……」

シャルロット様は、そうして意味深な笑みを浮かべるのだった。

16

エヴァお嬢様のテーブルにいる面々は、「伯爵」よりも上位の家の人たちだ。お嬢様が今まで出会ってきた人たち――それはおそらく大半が伯爵よりも下位の家の子たちだから、お嬢様はこうも正面から誰かの悪意に接したことはなかったのだろう。

（心拍数の上昇、皮膚の発汗、体温の上昇……お嬢様、テンパってるな）

【森羅万象】でお嬢様を確認するとそんな情報が返ってきた。まあ、わざわざ確認するまでもなかったかもしれない。お嬢様の表情はしっかり凍りついてる。

「……スィリーズ家が、貴族社会に軋轢を……ですって？」

ことさら丁寧であろうとしたお嬢様の声はむしろ冷え冷えとして、僕が「血は争えない」と思うほどに伯爵閣下のそれを思い起こさせた。

シャルロット様は息を呑んでたじろいたが、すぐに前のめりになると、

「え、ええ、そうですわ！　伯爵位でありながら領地を持たず、中央政治に関わるその姿は『好んで争いを待つ武器商人』とも呼ばれていることを知らないとは言わせません――」

「シャルロット嬢！」

声を上げたのは、クルヴシュラト様だった。呼応したかのように

楽隊の音楽が途切れ、しん、と静まり返る。

「……そのような口さがない者らの悪口（あっこう）を、フレーズ家の令嬢ともあろう方が信じていると……？」

きっとクルヴシュラト様は見た目だけじゃなく心根も優しいんだろうな……って僕は思った。声音は震えているし、怒っているのか、あるいは大声を上げてしまった自分と周囲の反応を恐れているのかはわからなかったけれど――それでもクルヴシュラト様がエヴァお嬢様のことを気遣って発言したことは事実だ。

クルヴシュラト様の後ろに立っている聖王は、わずかに口角を上げていた。僕は見ていたけれど、クルヴシュラト様が言わなかったら聖王がなにかを言っていただろう。

とはいえ、一度吐いた言葉を呑み込んでなかったことにはできない。シャルロット様ははるかに格上の聖王子様に怯みながらも言った。

「恐れながら、クルヴシュラト様……スィリーズ伯爵が多くの貴族を処刑台に送り込んだことは事実でございましょう？　結果、多くの領地で流通が滞り、貴族たちは私財を投じて混乱収拾に当たらねばなりませんでしたわ。もちろん、領地を持たない貴族には関係なかったことでしょうが」

おお、そんなことがあったのか。

でも伯爵は「一天祭壇」のために行動し、ひいては国全体のために汚れ役を買って出たんだよなあ……それを言わずに自分たちの被害だけを言うのはどうなんだろうね。

（あ、そうか、伯爵が「祭壇管理庁」の「長官特別補佐官」だってことは一部の貴族以外に秘密で……伯爵が貴族たちの汚職を摘発し

たのも「公金横領」や「脱税」、「贈賄」なんていう「一天祭壇」とは関係ない罪状なんだよな。それもこれも「一天祭壇」が「汚されていない」という体面を保つために）

シャルロット様は侯爵家だけど、知らないのかな？　いや、当主は当然知っているだろうけど、他の人には言っていないのかも。

「さらには混乱に乗じて流通を操り、大金を儲けた貴族もいたとか？」

……。

はい、ウチの伯爵ならやりかねないですね。そもそも混乱を起こしている側なんだから、その後になにが起きるのかも予測しやすいし。

そういうことやるから「冷血卿」に磨きが掛かるんですよ、伯爵……。

「……お父様。シャルロット嬢の言葉は……」

あわてたクルヴシュラト様の口調が、ふだんのものに戻ってしまっている。そんな気弱な姿は庇護欲をそそるんだけど――それはまあさておき、聖王は難しい顔をして黙り込んでしまった。

（表じゃ言えない、ってヤツかぁ……）

伯爵をかばって真実を話せば「一天祭壇」に泥を塗るし、シャルロット様の言葉に乗れば汚れ役を買って出ている忠臣（スィリーズ）を裏切ることになる。

「……ある一面においては事実を語っているな」

聖王の言葉に、パァッと表情を輝かせたシャルロット様だったけれど、

「だが政を行うものは、物事には両面があるということを知らなければならん」

「両面、ですか……？」

きょとんとするクルヴシュラト様の頭を聖王がくしゃくしゃとなでた。

「お前たちは貴族社会に足を踏み入れたばかりだ。これから天賦珠玉を選び、多くのことを学び、時に戦い、時に失敗し、時に喜び、時に苦しみながらも――貴き血を持って生まれた以上はその宿命と戦わねばならん。――シャルロット嬢」

「は、はいっ」

聖王に直接名を呼ばれたシャルロット様は背筋を伸ばした。

「あまりウワサ話に振り回されるな……その話はフレーズのオッサンに聞いたことではないんだろ？　それじゃあ、帰って同じ話をしてやれ……それであいつがなにを言うか、一言漏らさず聞いて心に刻め」

「は、はい……？」

「俺からはこれ以上言えねえよ。それにお前たちはそんな争いをしている場合じゃ――」

「――聖王陛下。護衛がいささか話しすぎかと」

「……そうだな」

熊の辺境伯に言われ、聖王は腕組みをしてツーンと黙ってしまっ

た。

「？」

お嬢様たちはなんだか不完全燃焼のままで終わった会話にもやもやしているようだが、そこで楽隊が新たな音楽を奏で始め、次の大皿料理が運ばれてくることとなった。

他のテーブルでもちらほらと会話が始まりだしたけれど、お嬢様は難しい顔で黙っていた。伯爵は「冷血卿」の側面についてなにも教えていなかったのだろうか？　いや、さすがになにも言わないということはないと思うんだけど……。

エタン様の提案「友誼を結ぼう」はなんだかんだ流れてしまい、そこへ辺境伯の娘であるミラ様がようやくエンジンが掛かってきたのか言葉を発した。

「それにしても美味しい料理がいっぱいです。わたくしの領地ではなかなか食べられないものばかりで……」

会話が始まったことにホッとしたクルヴシュラト様がそれに乗る。

「今日の料理はロズィエ家が手配したのだよ。ねえ、ルイ？」

「あ、はい。……お口に合ったのなら幸いです」

ルイ少年は、さっきまでの俺様風を吹かすのを止めたのか、やたらしおらしくなってそう言った。お嬢様のこと――というかスィリーズ伯爵家の裏を知って驚いた、あるいはショックだったのだろうか？

「ミュール辺境伯領はどんなところなのかな？」

「はい。とっても田舎です。広い牧草地帯と、農場、それに山岳地

帯には古代人の残したダンジョンが多く眠っていて、冒険者の往来が活発です」

ダンジョン！

なんという心躍る響き。僕が知ってるダンジョンは奴隷として働いていた「六天鉱山」だけど、あれとはまた全然違うんだろうなぁ……どんなところなんだろう。

17

クルヴシュラト様は笑顔をますます深めてミラ様に聞く。

「聖都に来るのは初めて？」

「初めてです！！」

大きな声だったので他のテーブルの会話がピタリと止まった。それに気づいたミラ様が真っ赤になってもじもじする。

「す、すみません……」

「あなたねぇ、ちゃんと教育くらい受けてきたんでしょう？『礼儀作法の時間が退屈だ』って何度もわたくしに手紙をしてきたじゃない。それが身についてなければ退屈もなおさら意味がなくなってしまうわ」

「うう、そうだよねえ」

おや、シャルロット様とミラ様は意外に親密だったのかな？　そうなってくるとなおさらウチのお嬢様だけぼっちじゃないか。

「……」

ほら、捨てられた子犬みたいな目でぷるぷるしてる。こう見えてお嬢様は結構な「かまってちゃん」だからなぁ……。

クルヴシュラト様は微笑ましそうに言った。

「はは、それくらい聖都は印象深かったのかな、ミラ嬢には」

「とっても……。こんな豪華なパーティーも初めてですし、聖王子

様や聖王陛下、それにこんなキレイなお嬢様に出会えるなんて……」

ぽーっとした目でお嬢様を見てくるミラ様。その視線がどういう意味なのかがわからず、お嬢様は目を瞬かせている。

「ミラ。エヴァ様に一度我が領に遊びに来ていただいたらどうだ？」

「で、でもパパ、ウチに来てもつまらないよ……」

パパ？

灰色熊の毛皮をかぶった辺境伯は、娘にはパパと呼ばせているのですか？

「聖都にずっとお住まいの方だったら外に出たいかもしれんぞ」

「そ、そうかな……？　あ、あのエヴァ様！」

意を決したようにミラ様がお嬢様を見る。

「よろしければ、こっ、今度、ミュール辺境伯領まで一度遊びに来ませんか！？」

まるで初めてのデートを申し込む中学生だ。

突然の申し込みに、お嬢様が固まってしまう。今までこんなふうに誘ってもらったことがないからだと思う。お嬢様は困ったように僕を見上げるので、小さくうなずいて返すと表情を輝かせて、

「喜んでうかがうのだわ！」

と、今まで猫をかぶっていたことも忘れて、答えた。

ミラ様は面食らったようだったけれど、お嬢様が喜んでいるのを見て彼女もまたうれしそうにきゃいきゃいと領地の話をしている―

―うんうん、よかったねえ、お嬢様。ようやくお友だちができそうだ。お願いだからお友だちを「奴隷商潰し」なんかに同行させないようにねえ。

（ん？）

そのとき聖王と辺境伯がアイコンタクトをしているのを僕は見た。

（……なんだろ？）

さっきまで火花バチバチだったふたりがこのタイミングでアイコンタクト？

そう言えばさっきも聖王がなにか言いかけたのを辺境伯が止めたような……。

「おお……」

「美味そうだな」

「これはなかなか」

僕の考えは、テーブルに着座している男子陣の言葉と、暴力的な香りによって遮られた。

召使いが4人がかりで、御神輿でも担ぐように運んできたのは鳥の丸焼き――鶏のような格好だけれどその大きさは確かに御神輿ほどもあった。

表面は照りが出るように焼かれ、色とりどりの香辛料がまぶされていた。漂ってくるスパイシーな香りが……ヤバイ……僕のお腹が鳴きそう……。

長い柄によって担がれてきた丸焼きは、さすがにお客の頭上を飛び越えることはなくて、筋骨隆々の召使いがテーブルのそばに待機しており、長い2本のナイフを突き刺すとひとりで持ち上げてテー

ブルへと移した。
　クルヴシュラト様や公爵家の令息たちは見慣れているのか「なんのことはない」という顔だったけれど、お嬢様はびっくりしているし、他のテーブルでは小さな拍手まで起きていた。天賦なしでこの筋肉はすごいなぁ。
　取り分けをする給仕人がやってきて、マジックハンドのように長い柄のついたナイフとフォークを、巧みに使って肉を切っていく。腹の中には野菜と穀物がぎっしり詰められており、そこからは鮮烈なハーブの香りが漂ってきた。
　すでにお客の皿には5種類のソースが用意されており、好みに応じてそれらをつけて食べるのだろう。いや、ほんと、僕のぶんはないんですか？　ない？　そうですか……。
　この食事がメインディッシュみたいなもので、食べ終わった頃合いでロズィエ公爵からの挨拶があるみたいだ。それから中央のぽっかりと空いているスペースでダンスがあるはずで――エタン様は淡々としているけど、ルイ少年はちらりちらりとウチのお嬢様を見ているな。誘いたいんだろうなあ。
　クルヴシュラト様は……と、

「わぁ……」

　ソースを見て小さく声を上げた。好きなソースでもあるのかな。

（――え？）

　僕が彼の視線の先にあったソースを【森羅万象】を通して見た――それはお嬢様のソースと見た目はまったく同じだったけれど――ときだった。

　パンッ、と乾いた破裂音がした。

それはまるで海外ドラマで見た拳銃の発砲音でもあった。小さいけれど人をハッとさせる音。音が聞こえたほうを見ると、中央に吊されていた巨大なシャンデリアが一斉にその火を消していった。

パンパンパンッ。

続いて発生した音は各テーブルの上部に吊されているシャンデリアの火が消えていく合図でもあった。

「――なに？」
「――なんだよこれ」
「――怖い」

子息たちが怯えた声を上げるのも無理はない、会場内は唐突に闇に包まれたからだ。ただふたり、聖王子クルヴシュラトと聖王だけがほんのりと明るく光っていた――それが「聖水色」の魔力だった。

なにかのイベント？　それともシャンデリアの故障？　――故障はあり得ない。なぜならシャンデリアはロウソクを灯しているので魔道具や機械の類ではないのだ。一斉に消えるということは「外部からの干渉」があったということになる。

僕は「夜目」を使って素早く会場にいる召使いたちを確認する――あわてている。

つまりこれは、イベントではない。

トラブル。

いや――。

パリンッ、と音が鳴ったのは会場の窓ガラスが割れた音だった。６つの黒い影が会場内に侵入してくる。僕は即座に【火魔法】を５つ展開して周囲に明かりを発生させる。こういうときに【光魔法】

があればもっと簡単に明るくできるんだろうけど……【光魔法】だけは見たことがない。
身体が急激にだるくなる。魔力を消費したからだ。【魔力量増大】の天賦を使えないここでは、僕が使える魔法は限られる。

「侵入者だッ！！」

僕が叫ぶ前にハーフリングの護衛さんが鋭い声で叫んでいた。彼女はすでにエタン様を守るように彼の前に立ちふさがっている。
侵入者はこの暗さでも問題ないのか、テーブルの間をすり抜けてこちらへと迫っていた――ふつうに考えるなら最も高位の人物が狙われるのが襲撃だ。
つまりこれは暗殺のための襲撃。
狙いは聖王？　いや、聖王が来ることは予定されていなかった。
ならば聖王子――。

「お嬢様。戦いの許可を」
「許します。レイジ、全員を守るのだわ！」

まったく、うちのお嬢様は人使いが荒い。

18

＊　護衛：レレノア　＊

ハーフリングは薬師としての存在感を高めているが、腕っ節はとなるとその小柄な体格からもあまりよいとは言えない。
ましてや女性で腕が立つ――ともなればなおさら希有だ。
レレノアはその「希有」だった。クルヴァーン聖王国におけるエベーニュ公爵家の遠縁に生まれたが、貴族としての暮らしとは無縁に育った。田舎のハーフリング集落には多くの薬師がいて、生まれた子どもたちも薬師としての教育を受ける。半分ほどは村に残り、残りは村の外に出るのが昔からの習慣だった。

だけれど、レレノアは違った。

彼女は魔法の能力が極めて高かった――それこそ天賦珠玉を与えられなくとも【花魔法】と【土魔法】を使えるほどには。
レレノアは薬師としての道ではなく、魔法を使う道を選んだ。そんな彼女はエベーニュ公爵家の目に留まり、本家へと呼び出され――やがてエベーニュ公爵家の騎士として働くことになる。
そんな彼女は【花魔法★★★】と【土魔法★★★】というレアリティの高い星３つの天賦珠玉を与えられ、魔法の才に磨きをかけ、さらには腕っ節でも他の種族に負けないよう徹底的に叩き込まれた。
そう。「新芽と新月の晩餐会」の会場のように天賦が使えない場所でも戦えるように――。

（今のは、なんだべな……！？）

レレノアは驚愕していた。

最初こそ「なんでこんなところに子どもの護衛が……？」といぶかっていた。スィリーズ伯爵家と言えば押しも押されぬ中央の重鎮だし、当主が「冷血卿」などという物騒な名前でも呼ばれている。当主には敵が多く最近は暗殺されかけたということも聞いている。

だというのに、娘のエヴァにつけた護衛が、子ども？

ハーフリングやホビット、ドワーフと言った低身長の種族ならばわかるが、どう見てもあの護衛はヒト種族だった。顔もまだまだあどけなさが残る――１０代前半なのではないかとレレノアは見当をつけていた。

剣の達人という感じもなく、あるいは冷酷無比な軍人というふうでもない。エヴァの友だちのように見えた。

（なるほどな。エヴァ様が不安にならないようにと、心理的な「守り」を優先したべな）

レレノアはそう結論づけた。つまりエヴァの護衛はいざというとき役には立たないと。

なぜそこまで考えなければならなかったのかと言えば、この会場に聖王子が出席し、あまつさえ気が張るというのにさらには聖王まで出席したからだ。

万が一のことが起きればこの国が揺らいでしまう。自分の主を守るのが最優先だとしても、余裕があれば「聖王陛下を守れ」とエタンは自分に命じるだろう。

護衛とは、起こりうるあらゆる事態を想定し、あらかじめ優先順位をつけておかねばならないのだ。

そしてその「万が一」が起きた。

暗闇の中でまずレレノアはエタンの居場所を把握し、襲撃者とエタンを結ぶ線上に身体を張って立った。

「レレノア」

「お静かに。暗闇で逃げるのは危険です。明るさが戻ったら逃走経路を確認します」

エタンがスッ、と自分の持っていた宝剣を差し出した。だがレレノアは首を横に振る。

「これはエタン様がご自身を守るのにお使いください」

暗闇にぼうっと浮かび上がる聖王子と聖王のふたり――これでは襲撃者にとっても「いい的」となってしまう。

だが次の瞬間、レレノアが驚愕したことが起きた。

空中に5つの炎が突然現れたのだ。

それを発生させたのは――レレノアが「役に立たない」と判断したあの少年だった。少年の周囲に炎が浮遊しているのでまず間違いないだろう。

（そんな……!?　天賦が使えないこの状況で即座に5つの【火魔法】を発動!?）

幼いころから魔法の才能に恵まれていたレレノアであっても【花魔法】と【土魔法】に限り3つの発動が限度だろう。むしろ3つを展開できるという、他の騎士よりも明らかに抜きんでた能力のおかげでエタンの護衛に抜擢されたほどなのだから。

（【火魔法】の天才――）

レレノアは納得する。こういった天才児はごくごく少数ながらも突然変異的に生まれてくる。見た目は少年で、訓練されているふうはないけれども、彼だからこそ「冷血卿」が娘の護衛につけるのだ――そうレレノアは納得した。

（ならば戦闘は素人のはず。明るさが確保されればこちらの仕事！）

次にレレノアはそう判断し、聖王騎士団のアルテュールへと視線を向ける。彼も、親の後ろ盾で騎士隊長の座に就いたという側面はあるが、それだけで騎士隊長になれるほど甘い職務ではない。こういった有事になにをなすべきかくらいは頭にある――おそらくレレノアと同じ判断をして、彼もまたこちらを見ていた。

ふたりはともにうなずき合い、

「エタン様、ここでお待ちを」

「気をつけて」

襲撃者へと向けて走り出す――ときだった。

エヴァが、護衛に命令した。

「レイジ、全員を守るのだわ！」

その直後、レレノアが見ていたはずの護衛の姿が――消えた。

＊　レイジ　＊

天賦珠玉（スキルオーブ）は人に天賦（スキル）を与える。
これがこの世界の常識だけれど、多くの人が誤解していることがある――と僕は常々思っていた。
天賦がなくとも「天賦と同等の力」を発揮することができるのだ。
たとえば天賦がなくとも魔法を使えるように、天賦がなくとも剣の達人になれるように。
あくまでも天賦は、途中の過程をすっとばして達人の域に達することができるだけの代物だ。

（戦闘音が3つ。残り3人は真っ直ぐにこちらに向かっている）

各テーブルで1人ずつ、襲撃者と戦闘が行われているようだ。応戦しているのは……護衛だな。イスから落ちて腰が抜けている子どもや、金切り声を上げている子どももいる。
僕は【火魔法】で灯した明かりをその場に残し、身体を低くすると【疾走術】を使って走り出した。襲撃者は僕に注目していたようで、彼らの呼吸に動揺が見られる――【森羅万象】が教えてくれる。それはそうだろうね。突然僕が消えたように見えたろうから。
中央の広々としたスペースを突っ切ってくる3人は、天賦がないせいか動きが遅い。僕はぐるりと弧を描くように走り、彼らの横に迫った。

「！」

薄闇の中で僕に気がついたようだけれど、それじゃ遅い。僕はもう襲撃者の目の前にいたからね。
聖騎士の訓練で学んだ【拳術】で襲撃者の横っ腹にフックをめり

込ませる。

「がはっ」

黒衣に身を包んだ襲撃者は一瞬、肺の中の空気をすべて吐き出してしまう。そのわずかな時間で十分だ。次のパンチはアゴに見舞う。アゴの先端はボクシングでも「チン」と言われる急所があり、ここを殴られると意識が飛ぶ。

ひとりめが倒れたのに気がついたのか、襲撃者2人は僕にターゲットを切り替えた。腰に佩いていたショートソードを抜き放つと、黒く塗られた刀身は薄闇に溶けて見づらい。

（あ～、手が痛いぃぃぃ）

黒衣の下に鎖帷子（チェーンメイル）を着ていたようで、僕の拳が泣いている。節約モードの魔力量で【回復魔法】を発動し、拳を癒す。

さて、残りは2人。

「――シッ」

手前のひとりが突きを放ってくる。

その速度は、一般人から見たら格段に早いのだけれど天賦アリの聖王騎士団訓練を見まくってきた僕からすると――なんとも遅い。

だけれど僕は、その突きに違和感を覚えた。

（え……その突き方って、まさに聖王騎士団の「型」じゃない？）

19

構えこそ違うけれど、放たれたショートソードの突きは聖王騎士団そのものだ。
一瞬その驚きに思考を持って行かれ、回避がわずかに遅れ、僕の腕を切り裂かれる。

「～～～～っく」

いっつうう……。傷口がジンジンする。出血量はたいしたことないけど、【回復魔法】で簡単に傷を塞いでおく。
もう怒ったぞ――って、

「――シッ」

危なっ。
次のもうひとりが眼前に迫っていた。
ひらりと身をかわすが、さらにさっきの1人目が体勢を立て直し次の突きを放ってきた。

（むう）

回避には成功したけど僕の体勢がぐらりとゆらぎ――目元だけしか出していない襲撃者だけれども目だけでわかる――明らかにニヤリとした。
追撃が来る。バランスを崩した人間には不可避の一撃が。

「――なんてね」

揺らいだ上体から僕の拳が襲撃者のこめかみにヒットする。ここもまた急所のひとつだ。瞳の焦点が合わなくなると、襲撃者はその場に崩れ落ちる。

「なっ……！？」

3人目があわてている。ふふふ、まさかあそこで反撃が来るとは思うまい。

実はこれも天賦のひとつで【ケンカ術】という。どんなに体勢が悪くとも攻撃の威力が落ちないという便利な天賦だ。

詰まるところ体幹を強化し、身体の柔軟性を上げれば【ケンカ術】を再現できる。ちなみにこの天賦は酔っ払ったゼリィさんを回収しに酒場に行ったとき、そこでケンカしていたごろつきが持っていた。

「！！」

襲撃者はこれ以上僕の相手をするには分が悪いと判断したのか、背を向けて走り出そうとして――足になにかを引っかけて転んだ。それはもう見事な前のめりの転び方で、ショートソードが落ちて床を滑っていった。

その先にいたのはハーフリングの護衛さん――襲撃者の足元にツタが絡みついているところを見るに、テーブルに飾られていた花を抜いて投げ、【花魔法】を発動させたのだろう。

そこをアルテュール様が走ってきて襲撃者を縛り上げる。

僕は、襲撃者の後頭部に向かって弾き飛ばそうと思っていた【土魔法】ストーンバレット用の魔力を消した。

（なるほど……会場にあるものはなんでも使わなきゃな）

僕は残りのテーブルに視線を送る。1つはすでに鎮圧されていたが、残り2つは分が悪いと判断したのか逃げ出したあとだった。

「……」

魔導ランプを手にした、それぞれの家の騎士たちが駈け込んでくる。不意に会場内は明るくなったが――僕の心の違和感は拭えなかった。

（どうして「逃げた」んだ……？　暗殺任務なら死を覚悟してターゲットを暗殺するべく動くものじゃないか？　それに……聖王騎士団で訓練された者の動き……まさか裏切り？　確かに、襲撃者が聖王騎士団であるのならこの会場まで忍び込めたことの説明がつくけど……）

僕はお嬢様のいるテーブルを見やった。僕の発動した【火魔法】がちょうど消えたタイミングだったけれどそこにはもう多くの騎士が集まって――マクシムさんもいた――お嬢様たちを保護しているところだった。

クルヴシュラト様は明らかにホッとした顔をしており、辺境伯はミラ様を抱きしめている。

そして聖王は、

（……見てるな、僕を）

ただじっと見つめていた。

「――君、すごいべな」

「え？」

不意に横から声がして、目をやるとそこにはハーフリングの護衛さんがいた。

「魔法の天才かと思ったけど、近接戦もそこそこやれるみたいだな。ただ今度からこういう荒事は他の護衛に任せるべな。魔法を使えるだけで十分なサポートになるから」

「あ――」

そうか、僕がかわしきれなかったあれを「こいつ魔法はすごいけど近接戦はダメだな」って見られたってことか――じゃなくて！

「これ、傷薬。ウチの特製だから塗っとけばすぐ治るべな」

「あ、ありがとうございます……」

小さな木箱に入った傷薬を渡され――じゃなくて！

「あのっ、あなたは――」

今「べな」って！「べな」って言った！　ミミノさんと同郷の人!?

……と思ったのだけれど、すでにハーフリングの護衛さんはエタン様のところへ戻っていた。そうだ――僕も護衛なのだから戻らなきゃ。

でもあとで機会があったら聞いてみよう。ミミノさん、それに「銀の天秤」のみんななにしてるかな……。落ち着いたら連絡を取ろうと思ったんだけど、国を超えちゃうと簡単に連絡なんてできないしまして相手が冒険者だったりするとどこにいるかもわからないしね。

「お嬢様、離れてしまってすみません」

「いいえ、よくやったのだわ！」

僕を待っていたお嬢様は手を伸ばしてくるが、僕は背筋を伸ばしてそれを避けた。いや、なんで？　なんでこのタイミングで頭なでようとか思ったの？　ひょいひょいと伸ばされてくる手をかわしていると、

「――皆の者、騒がせたな！」

突然聖王が大きな声を上げた。

ふと見ると、遅れて到着した聖王騎士によって襲撃者の気付けが行われている。

（え？　これってまさか……）

僕はイヤな予感がした。そしてこういうときにこそイヤな予感は当たる。

聖王は楽しそうにこう宣言するのだった。

「実は今の襲撃は、余興である！」

しん……と静まり返る会場内、ぽかんとする貴族の子女たち。

起き上がった襲撃者が黒衣を剥ぎ取って顔を出すと――そこには悪事など行いそうもない青年の顔があった。

ああ、やっぱりそういうことか……。

「これから一人前の貴族として最初の一歩を踏み出す諸君らに、貴族社会の厳しさを知ってもらうために行った！　襲撃されることだって十分にあるのだ！　そのとき、諸君らの護衛は真に頼れる者か？　あるいは護衛は武器を持っていないがここにいる男子諸君は武

器を持っている。それを使おうと思ったか？　いずれにせよ、こういった極限の状況でこそ人の本性は現れる！　今日の自分が情けなかったのならば、明日誇れる自分になるよう精進せよ！！」

わっはっはっは、と聖王は笑っているけれど、「余興」扱いで襲撃された側としてはたまったものじゃない。放心している貴族の子女はたくさんいたし、どっと疲れたような護衛も多かった。

余興というか、これは洗礼なのでは……。

これからさきもっと厳しい社会が待っているのだぞ、なんていう。

僕はこれからのお嬢様の未来を思うと、心配と同情とがないまぜになった複雑な思いに囚われた。

「――なぁんだ、余興だったのだわ。それならレイジの動きは満点ね！」

「いえ、余興だと気づけるポイントもあったのに、むしろ大立ち回りしてしまって恥ずかしい限りです」

襲撃者は聖王騎士といっしょに退場して行くが、まだ警戒しているのかそっちをこわごわ眺めている人も多かった。この余興、刺激が強すぎるだろ。

会場の壁際に魔道具の投光器が置かれ、その光が天井に反射すると会場内は明るくなった。

「気づけるポイントがあった……の？」

とお嬢様がきょとんとすると、

「おい、スィリーズ家の護衛。お前、なにに気づいてた？」

聖王からも直々に質問を受けてしまった。

どうしよう、こういうときに護衛が発言してもいいのだろうか？
テーブルの全員がこっちを見てるし。

20

「レイジ、いいのだわ。答えて」

聖王始め、高位の貴族家に見つめられた僕が困っていると、お嬢様が助け船を出してくれた。

「はっ。――まず聖王陛下と辺境伯閣下のアイコンタクトが気になりました。おふたりがこの会に参加することはお二方ご自身も知らなかったご様子でしたが、逆におふたりはこの『余興』についてはあらかじめ情報がおありだったのでしょう。あるいはこれほどの余興ですから、各家の当主様にだけは連絡があったのではありませんか？　聖王陛下は辺境伯閣下の身に危険がないよう――もちろんこの『余興』も十分危険がない予定だったとは思いますが、念のため確認されたのではないでしょうか」

「……」

うおぉ、灰色熊がこっちをじっと見つめてくる。

「それともうひとつは、シャンデリアのキャンドルが消えたことです」

「……なぜそれがおかしい？」

「私が襲撃者なら、シャンデリアを切って落とします。そうしたほうがより混乱を招きます。『余興』のためにシャンデリアを落とすにはお金が掛かりすぎるし、割れたガラス片が要らぬケガを招くこともあるでしょう」

「うむむ……」

「他には」

「まだあるのか！？」
「ええ。襲撃者の剣筋が明らかに聖王騎士団のものでしたし、また暗殺者がターゲットを放って逃げることはあり得ませんし、まあ、これらは事前に気づけないところではありますが。あとは、自分は事前には知りませんでしたが、暗闇で聖王陛下と聖王子様は光を放っていました。事前にこれを知っていたならクロスボウなどで狙撃するでしょう。あるいは逃走前に剣を投げつけるくらいはするはずです」
「いやちょっと待て。ターゲットが俺たちではない可能性もあるだろう」
「聖王陛下はそうかもしれませんが、聖王子様はターゲットだと思います」
「なぜだ？　襲撃者の多くがこちらのテーブルに向かってきたからか？」
「いいえ」
僕が指差したのは――テーブルの上。
美味しそうにクルヴシュラト様が見つめていた5つのソースの皿だ。
「聖王子様のソースにだけ、毒が混ぜられていますから」
【森羅万象】は今も確かに、そのソースは「人体に極めて有害」という情報を送ってきている。
その言葉を聞いた聖王は――顔から表情が抜け落ちた。
（……ん？　毒皿も「余興」の一種だと思ってたけど、それはおかしいな。毒殺を防ぐのは余興にもなんにもならない。クルヴシュラト様が死んだふりをして反応を見るとかは余興としてあり得るけど、それでも毒をわざわざ入れる必要はないだろうし）

そんなことを考えていたら、

「おい、護衛」

「はっ」

「ここに毒があるってのはマジなのか？」

「はい。確実かと」

そのとき僕は否応なく気づかされた。

聖王の顔が憤怒に染まっている――つまりその「毒」は「予想外」。

誰かが本気で、聖王子様を殺そうとしていたのだと。

護衛の朝は早い。

たとえ前日に聖王子殺害未遂が起きて夜遅くまで取り調べに付き合わされ、その後に雇い主の伯爵に事情を説明しなければならずようやく眠れたのが深夜だったとしても護衛の朝は早い。

屋敷の使用人は寮のようなものが用意されているのだけれど、護衛の僕は個室を与えられている。ベッドから出て行くとたらいに【生活魔法（コンビニエント）】で水を出して顔を洗う。少々ひんやりするくらいの水で気持ちがいい。

まともな鏡なんてないので、鉄製の板をピカピカにした鏡で髪の生え際をチェック。毛髪量の確認じゃないよ？　しばらくは染髪剤を使わなくて大丈夫そうだ。寝癖もない。あとはササッと着替えれば準備完了。

「おはようございます」

「おはようございます」

すでに何人ものメイドや執事が活動を始めている。まだ日の出の時間だというのに玄関ホールはバタバタしている気配があった。

「あとはよろしくお願いします」

「いってらっしゃいませ」

大勢の使用人が頭を下げて、伯爵と執事長が出て行くのを見送る。

……伯爵、僕の報告を聞いてから寝て、今出かけるってことはほとんど寝てないんじゃないかな。あるいは一睡もしていないとか？

――明日は大変なことになりますよ……。

「新芽と新月の晩餐会」の報告は、「余興」については軽く触れ、その後の「毒殺未遂」について多くの時間を使った。伯爵は僕が見聞きした情報をすべてメモにとっていた。というのも今日、伯爵は聖王に呼び出され「人間ウソ発見器」なので犯人のあぶり出しを命じられるのはほぼ確実だという。

（ご愁傷様。がんばってください）

心の中で同情し、馬車に乗って屋敷の敷地を出て行く伯爵を僕は窓越しに眺めていた。東の空は薄曇りで、今日は晴れ間も少なそうだった。

僕は僕でお嬢様の今日のスケジュールを確認したり、食事を取ったりとしているとお嬢様が起床したという報せが入る。

「おはようございます、お嬢様」

「おはよう、レイジ」

朝食のテーブルでお嬢様と今日の予定について確認する。お嬢様はひとりで食事をし、僕はテーブルを挟んで向かいに立っている。

相変わらずの美しい見た目と所作で、食事をしているだけだというのに絵になるのだから美男美女は得だなぁとかそんなことを僕は思っている。

「――以上が本日のご予定です」

「レイジ、昨日はどうだったの？　わたくし、先に帰ったでしょう」

「取り調べに付き合ってだいぶ遅くなりましたね。伯爵は僕の帰りを待っていてくださったようで……」

「むう、お父様ばかりずるいのだわ。わたくしは早く寝ろとみんなに言われて」

「別に優しさから待っていてくださったわけではないと思いますけど。それより変な夢を見たりしませんでしたか？　怖い思いをして」

「子ども扱いをしないの、いい？　それに怖くなんかなかったもの。レイジがいれば安全だと思っていたし」

「……それはそれは、過分なお言葉です」

お嬢様、僕のことを信頼しすぎなのでは。僕なんてすぐそこにいた灰色熊が乱心を起こしたらどうしようってびくびくしてたよ。あんな毛皮かぶってる人間、まともじゃないよ。

「それで犯人は誰だったの？」

「まだ見つかっていません」

「ええ？　レイジがいるのに？」

「……僕はお嬢様の護衛で、ただの毒の発見者です」

「それはそうだけれど、昨日、レイジが襲撃者を制圧して、それから聖王陛下や聖王子様に向かってお話ししていた姿はみんなすっかり感心していたのだわ！」

お嬢様が目をキラキラさせて言う。

「エヴァお嬢様。今のお話は初耳でございますね」

おっとぉ。執事長がメガネの位置をずらしながら食いついてきたぞぉ？

（お嬢様黙って！　黙って！　しー！）

伯爵への報告に執事長も同席してたけど、自分の手柄自慢みたいになりそうなところは省いたんだよね……あと聖王としゃべったとか知れたら、聖王の熱烈な狂信者（ファン）の執事長が嫉妬の炎をメラメラ燃やすことはわかりきっていたし。

「どうしたのだわ、レイジ？　まさか報告していないの？」

「しましたよ！　必要十分にしましたよ！　あ、そうだ、今日僕はお嬢様の護衛からは外れますので騎士の誰かがついてくれます」

「――え？」

途端にお嬢様の表情がくもった。

「前に話していたのですが、お嬢様と僕とでいくつか潰し……解放した『奴隷商』について、尋問に僕が同席することを許されています。それが本日実施されるようで」

「そう、なの……」

どうしたんだろう。「それならわたくしも連れて行くのだわ！」みたいに言われることは覚悟していたけど（そのときは執事長の力も借りて全力で拒否するつもりだった）、こんな反応は……。

「――お嬢様は不安を感じておいでです」

ヒッ、メイド長!?　いきなり僕の耳元で囁かないで！

メイド長はするすると音も立てずに後ろ足で下がると、入口そばの定位置に立った。この人もしや隠密なのでは……？　でもメイド長の動きを見た後に訓練してみても、それっぽい天賦は得られなかったんだよね……。

（不安、か）

それはそうだよな。お嬢様だって12歳の女の子だ。

僕がいたから「怖くなかった」というのは、逆に言えば僕がいなければ「怖い」になるのかもしれない。

「……お嬢様、なるべく早く戻りますから」

「ほんと……？」

叱られた女の子みたいな顔をしないで、お嬢様。

こんなところ伯爵（親バカ）に見られたら僕、どうなるかわかりませんよ？

ただでさえ「てめぇはなにを泣かしてんだよぉ？」って目で執事長とメイド長からにらまれてますからね？

「ほんとうです」

「約束できる？」

「約束しましょう」

僕は右手を伏せて差し出し、人差し指と中指をくっつけた。これは「二言はありません」、つまり「指切りげんまん」みたいなものだし、ある意味で「誓い」にも似ている。

「……わかったのだわ。わたくしは、今日はミラ様にお手紙を書きます」

「ええ、そうしてください」

お嬢様の小さな手が僕の二本指をぎゅっと握りしめた。

温かく柔らかい手だった。

21

「奴隷商」の尋問が行われるのは衛兵の駐屯所だった。そこには留置場が併設されているので、一時的にそこに犯罪者の身柄が預けられ、審理ののちに判決が下りる。公平公正な審理や弁護士、それに上告なんてものは存在しない。貴族のように高位の人物への犯罪容疑はまた違うのだけれど、その場合は聖王と貴族たちが裁くことになる。

尋問室は狭く、小さなイスと小さな窓がひとつあるだけだった。足元は地面が剥き出しで砂がまいてある。

でっぷりとした「奴隷商」は尋問室に僕が入っていくとぎょっとした顔をした。

「お、俺に暴力を振るったらどうなるかわかってんのか！？」

「落ち着け。俺たちはお前に暴力を振るったりはしないさ……」

一連の「奴隷商潰し」でお世話になっている衛兵隊長は、よく日に焼けた渋いオッサンだった。

「……お前が正直に、俺たちの質問に答えている間は、な？」

しっかりと脅しつけている。「奴隷商」はびくりと震える。

衛兵隊長は「じゃ、あとは自由にどうぞ」と壁際に退いて、僕は「奴隷商」の正面に立った。木板に紙を載せた書記がスタンバイしている。

「じゃあ、僕からいくつか質問を――」

「俺たちは法律に則って『人材斡旋所』を経営している。そりゃあ、

口が滑って『奴隷』なんて言葉を使ってしまったが、それはただの間違いだ。あと貴族のお嬢様にたいして礼儀がなっていなかったのはしょうがないだろ。お前たちだって最初はありもしねぇ商会の名前を名乗ったんだから」

「……」

僕は内心で「うーん」と唸ってしまった。

（他の「奴隷商」と同じ証言内容じゃないか……伯爵から教わったのとほぼまったく同じだ。……ん？　待てよ……）

ふと、そこに違和感を覚えたことで一連の出来事を思い返す。

伯爵はお嬢様の言い出した「奴隷商潰し」について快諾した。あのときこそ、それは「親バカだなぁ……護衛のこっちの身にもなってくれよ」くらいにしか思わなかったけれど、よくよく考えたらおかしくはないだろうか？

（伯爵だって「本音と建前」くらい当然知っている。「人材斡旋所」という必要悪を1つずつつぶしても、聖王都の経済や社会にほとんど影響がないこともだ）

むしろ逆恨みされ、お嬢様が関係者から襲撃される恐れだってある。

そういった「逆恨みからの襲撃」なんていうのは、伯爵自身がいちばん痛い目に遭ってわかっているはずなのに。

（用意されていた「人材斡旋所」のリスト。取り調べでの「同じ証言内容」。……これってもしや）

僕はある仮説に行き当たった。こう考えれば、今起きていること

のつじつまが合う、ある仮説に。
だけれど一度そうだと思うと、それ以外に答えが思いつかないくらいには腑に落ちた。
衛兵隊長が「聞かれたことだけ答えりゃいいんだよ」とどやしつけているが、僕はそれを手で制して言った。
「ええと、では改めて僕から質問をするよ。いいかい？」
「はんっ。ガキ相手になにを答えろってんだよ」
「この商売を始めたのはいつから？」
「……へ？」

予想外だったのか、きょとんとする。太ったオッサンがきょとんとしてもたいして可愛くないということを僕は知った。
「この商売を始めたのは、いつから？　と聞いたんだ」
「え、ええと……もう15年になるわいな」
「場所は聖王都でずっと？」
「そうだ」
「競合他社と比べて自分の会社の強みはあるか？」
「……どこも『人材斡旋所』なんて同じ仕事だ――と言いたいところだが、うちは貴族様とのパイプが太いからな。扱う金額がデカイ」

へっへっ、と誇らしげに笑っている。
「刑罰が下っても同じ商売をまたやるか？」
「それは……まあ、俺の天賦はそういうもんだし……」
「【隷属権能（スレイブマスター）★★★】か？」
「そうだ。でもこの仕事は違法じゃないんだぜ？」
「わかってる。それじゃ最後の質問だ」

僕は言った。

「スィリーズ伯爵から、いくらもらった？」

「ッ！！！？？？」

……驚愕したオッサンもまた、たいして可愛くはないのだなと僕は知った。

そしてその一方で、僕は自分の立てた仮説が正しそうだとも思ったのだった。

尋問を終えると、僕はその足でゼリィさんのところをたずねた。彼女には彼女で、別途ラルクやルルシャさんのことを追ってもらっている。

ゼリィさんは、僕とラルクのことを知る数少ない人物だ――お酒に酔って醜態をさらすのがどうしようもない欠点だけど。

ゼリィさんは午前中は大体寝ているので、今日も行ったらやっぱり寝ていた。そこで報告を聞いて――冒険者ギルドのほうでも星５つ以上の情報などは出ていないらしく、今日も収穫はなかった。まあ、スィリーズ伯爵だって情報をつかんでいないんだもんね……気長に探すしかないだろうか。

「そう言えば」

ゼリィさんはしっかり施錠できる宿の個室に寝起きしている。狭い部屋だけど、「寝るだけの部屋なんで広さなんて必要ありませんや」と以前言っていた――のに、どうして酒瓶が転がっているんですかね……。

「冒険者パーティーを指定して手紙を送ったりはできるんですか？」
「……あー、『銀の天秤』っすかね？」
「よくわかりましたね」
「だって坊ちゃん、他に知り合いいないっしょ？」
「……」

それはそうだけども。まるで「友だちいないっしょ？」と言われているような気がして切ない。

ゼリィさんは僕が出してあげた水を使ってぱしゃぱしゃと顔を洗っている。猫が顔を洗うと雨が降るんだっけ？　確かに今日は曇ってるけども。

「手紙を送ることはできますけど、まず国境を越えて手紙を送るのは非常に面倒でめちゃくちゃお金が掛かりますわな」
「ですよね……」
「ただ、ギルド間で荷物のやりとりはやってますからね、そこに乗せれば確実性は増します」
「そうなんだ」

ゼリィさんによると、ギルド間で必要な書類の輸送が発生したり、ギルド職員の転勤に応じて「配達」や「護衛」の依頼が出されることがあるようだ。

「その報酬っていったら！　こりゃもう目ン玉飛び出るくらい安いんすよ！　しかも指名されて断ったらギルド内の評価下げられますからね。受けざるを得ないんですわ。高ランクの冒険者だってこれにゃあ逆らえない。カーッ、思い出したら腹が立ってきた。これは昼から飲むしかない」
「ダメ人間になったら見捨てますよ？」
「……えへへ、坊ちゃぁん、冗談に決まってるじゃないっすかぁ。

これでもあーし、『働き者ゼリィ』ってギルドじゃ評判ですよ？」

ゼリィさんの借金は僕が肩代わりしただけじゃなくて、今もお小遣いあげてるからね。

今年２０歳になるっていういい大人が、１４歳に媚びている図は正直どうかと思う。この人放っておいたらどんどんダメになりそう。

「ちなみに『飲み助ゼリィ』って二つ名は耳にしましたけど」

「よぉーし、そんなこと言ったヤツはこの手で八つ裂きにしてやりましょうね！　さ！　坊ちゃん！　誰が言ったのか教えてくだせぇ！」

「言ったのは僕なんですが、僕を八つ裂きにするんですか？」

「坊ちゃぁん……八つ裂きなんて冗談、ゼリィのカワイイ冗談に決まってるじゃないですかぁ……へへへ……」

すぱーんすぱーんと拳を打ちつけていた手を、そのまま揉み手に切り替えたスムーズさがもうほんとダメ。

「とまあおふざけは大概にしておきますけど……どちらにしろ『銀の天秤』の居場所がわからなければ手紙なんて出せませんよね……」

「急にどうしたんすか？　恋しくなっちゃったんですかい？」

「あ、ええと、そうですね。そんなところです」

昨日の晩餐会でエタン様の護衛のハーフリングさんが言った言葉のせいだった。ミミノさん、どうしてるかなぁと。それに勝手に出て行った僕の事情を、今ならある程度説明できるとも思うし。

「坊ちゃん」

「ん？」

「……伯爵のところにはいつまで世話になるおつもりで？」

「急にどうしたの」
「いえなんだか、胸がざわつきましてね。坊ちゃんになにかあったんじゃないかなって」
「……」
勘が鋭い。
僕は少し迷ったけれど、ゼリィさんに昨日のことを包み隠さず話すことにした。ふんふん、と聞いていたゼリィさんは話が終わるとこう言った。
「坊ちゃん、お気を付けください。この世でなにが怖いって、ドラゴンでもなけりゃ天銀級の冒険者でもないんです」
「え……」
「権力を持ってるヤツが一等怖いんです」
僕はハッとした。
確かに、そうだ。彼女のいた「闇牙傭兵団」は天銀級冒険者クリスタにめちゃくちゃにされたけれど、ライキラさんは隙を突いてクリスタを倒した。
だけれどそんな彼らを動かしていたのは権力者たちだ。
「伯爵だって権力持ちでしょうが、それ以上に強い権力だってあります。とにかく気をつけてください。坊ちゃんが毒殺犯に仕立て上げられることだって、ありえるんですよ」
「そんなバカな」
「もし仮に伯爵が、エヴァお嬢様に嫌疑を掛けられたとしたら――坊ちゃんに濡れ衣を着せるでしょう？」
「……」
「『審理の魔瞳』を持つ伯爵なら、できないことじゃぁありやせん」
「……そう、ですね」

そのとおりだと思った。僕はいつしか、お嬢様に信頼を寄せられることで伯爵にも信頼を寄せすぎていたのかもしれない。

「肝に銘じておきます」

「お願いしやす。あと……これ」

ゼリィさんは手を差し出した。けど、そこにはなにも乗ってない。

「ん？」

「えへへ……坊ちゃぁん」

「……」

ゼリィさんがダメな大人の目をしていた。そう、僕は「生活費がもう底をついちゃってるんですよぉ……」と言われて数枚の銀貨を手渡した。……ゼリィさんはダメな人だけど、お金を渡す僕もダメなんだよね……。

「さて、と……それじゃそろそろ行きます」

お昼をどこかで済ませてから、お屋敷に戻ろう。

僕はスィリーズ伯爵邸に向けて歩き出した。伯爵にはいろいろと聞かなければいけないことがある。今の僕に心の緩みは、ない。

21（後書き）

緊迫した世の中に一服の清涼剤！！！　猫系獣人ゼリィさん！！！！

22（前書き）

※晩餐会会場に天賦無効がかかっていて【森羅万象】を使えるのはおかしいというツッコミ、すみませんようやく確認しました。これだと楽隊の人たちも演奏できなくなっちゃうし、おかしくなりますね。

こちら、以下のように文言を「11話」に追加しています。

――

だけれど不思議な感覚だった。ある一定の天賦だけが無効になっていて、残りは大丈夫なような……たとえば僕の【森羅万象】は問題ないのだけれど、【腕力強化】のような天賦は無効にされている感じがある。

こういうふうに天賦を限定して使えなくすることができるんだね。戦闘系の天賦を選んで使えなくし、一方で会場内の召使いたちが働くのに必要な天賦は使えるようにしてあるってことか。

（でも【森羅万象】なんて使える人はいないだろうからともかく、【影王魔剣術】とかの特殊なものは使えちゃうよね……まあ、知らない天賦はどうしようもないか）

――

22

伯爵邸に戻ったのは3時に近くなっていた。伯爵が帰ってくるのは日没後……昨日、あんなことがあったのなら夜遅くでもおかしくはないと思う。執事長に、僕が会いたがっていることを伝えておいてもらおう。

と思っていたら、

「戻りましたか」

「え？」

玄関ホールには伯爵が立っていたのだ。

「レイジ！」

「お嬢様――わたっ」

突進してきたお嬢様に抱きつかれ、僕はたたらを踏んだけれど上体のバネには自信があるのでそれをぐっとこらえた。

「ど、どうしましたか……？」

「早く帰ってくると言っていたのだわ！　それなのに、こんな時間に……」

「あ」

心配を掛けていたのか？　いや、違う、お嬢様は不安がっていたじゃないか……だというのに僕はのんびりとお昼を食べたりして。

（ああ、なにやってるんだ僕は……）

伯爵のことで頭がいっぱいで、お嬢様のことを忘れていたなんて。

「……申し訳ありません、お嬢様。今日はおやすみになるまで残りの時間ずっといっしょにいますから」

「ほんとう……？」

「もちろんです」

だから、この抱きしめる手を緩めて欲しいんです……執事長が今まで見たこともないような鬼の形相でこちらを見ているしメイド長が馬用のムチを手に取って――ってどこから持ってきたのそれ！？

「レイジさん」

そして伯爵が永久凍土のような目をしている！

「落ち着いて、伯爵、落ち着いて……」

「ええ、わかっています。私は落ち着いていますよ？　昨日、あれほどのトラブルがあったというのに外をほっつき歩いている護衛にどのように物の道理を説くべきかを考えるほどにはね……」

お説教コース決定！

「そ、それよりもそちらの御方は……」

僕は伯爵の横に立っている、ひょろりとした男性に目が行った。貴族、というより文官風の男性で、それなりに上等そうな茶色の上着を着ている。

ただ肌の色は青黒く、髪の毛は逆立つ銀髪だ。目元にかけたメガネの向こうは猫のような金色の目。

ヒト種族じゃないっぽい。

「やあ、これは面白いものを見られました。スィリーズ伯爵閣下も、人の親であったということでしょうか」

「……スペキュラ2等書記官、そのように貴族を茶化すものではありませんよ」

「お気を害されたのでしたら、申し訳ございません」

伯爵に対して気安い感じで話しかけているあたり、書記官と言いつつも結構な重役なんだろうか？

僕がわからないでいると、

「エヴァ、レイジさん、私の部屋へ」

伯爵がそう言った。

１０日に１度の報告会がある伯爵の執務室には、僕、お嬢様、伯爵、スペキュラさん、そして執事長の５人がいた。執事長は部屋の出入り口に立っているのであくまでも「話を見守る」というつもりなのだろうか。

（この人は、なんなんだろう）

僕がスペキュラさんを見ると、向こうもこちらを見ていた。

「初めまして、レイジさん。王都内政庁にて書記官を務めております、スペキュラと申します」

「初めまして。スィリーズ家でエヴァお嬢様の護衛を務めております。レイジです」

「ふむ……」

「？」

そのときスペキュラさんの目が眇められたように感じられた。なんだろう……こちらを探るような視線だ。

「……伯爵、レイジさんの護衛のスタイルはいつもと変わりないのですか？」

「はい」

「そうですか。ではこちらをどうぞ」

なんだなんだ？

スペキュラさんは何事かを手元の紙に書きつけて伯爵に渡した。伯爵はそれを受け取ると、秀麗な眉をひっそりと寄せて、小さくうなずいた。

「ではこれで」

「え、もう行かれるんですか？」

「私の仕事は終わりましたので」

スペキュラさんは立ち上がると、執事長に一礼して部屋を出て行く――と同時に執事長もまた彼とともに出て行った。

「なんだったんですの、お父様」

「……」

伯爵は、スペキュラさんの残した紙を見つめていたが、僕らにそれを見せながらこう言った。

「スペキュラ2等書記官は、王都内政庁でも極めて希有な天賦を与えられているんです」

紙にはこう書かれてあった。

――天賦ナシ。

「天賦【オーブ視★★】は、見た相手の天賦を知ることができます。彼のレベルでは星の数まではわかりませんがね……つい今し方、レイジさんの天賦を確認してもらいました」

「お父様!?　なぜそのようなことを――」

驚き、責めるような口調ながらもお嬢様はハッとする。

「レイジ、あなたは……」

「はい。僕は天賦をひとつもつけておりません」

正直に話した。

（あっぶね～～～～～！　そういう天賦がもしかしたらあるんじゃないかなって気はしてたんだ！）

伯爵は護衛の契約をしてから、一度も僕に天賦の確認をしていない。伯爵への襲撃者を退けたあれだけ動ければ十分とでも思っていたのか、別の思惑があるのかはわからないし、あるいはマクシムさんとの手合わせで【闇魔法】を使ったことから「魔法系だろう」と見当をつけていたのかもしれない。

でも、昨日の一件で、僕が毒入り皿を見抜いたことを知った伯爵は、僕がなんらかの特殊な天賦を持っていると考えたに違いない。その天賦はひょっとしたら伯爵やお嬢様に害をなすためのものではないのか……と疑ってもおかしくはない。伯爵はお嬢様のことに関してはめちゃくちゃ慎重だから。

（念のため、ほんとのほんとに念のためだったけど【森羅万象】を外しておいてよかった……）

伯爵には「審理の魔瞳」がある。だから僕は「天賦を持っていない」ではなく「天賦をつけていない」と答えた。

油断しなかった僕の勝利だ。

「申し訳ありません、レイジさん。あなたのことをなにか疑っていたわけではありません」

「いえ、お気持ちはわかります。念のため、ということでしょう？」

「はい。それに一方でわかったこともありました――きっとレイジさんが知らないことでしょう」

「僕の知らないこと……？」

「天賦珠玉を使わないで魔法を使えるようになった者は、魔法の発動が早かったり、通常とは違う魔法の使い勝手ができたりと、様々な利点があるようです。もちろん、そのぶん習得難度の高さというデメリットはあるのですが」

「――魔法の発動」

「はい。マクシムとの手合わせで【闇魔法】の『夢魔の祈り（プレイング・ナイトメア）』を使ったでしょう？　あの発動があまりに早かったことは、これで説明がつきます」

「……もしかして、伯爵はあのときから僕が魔法系の天賦を持っていないのではないかとにらんでいたのですか？」

伯爵は、似合いもしないにっこりとした笑みを浮かべた。

「まさか、なにも天賦を持っていないとは思いませんでしたがね……なにか理由があるのですか？」

「いいえ。つけなくとも今のところは問題なく生きていけているので、どうしようもなくなったらつけます」

これは正直な部分でもあった。【森羅万象】でなんとかなっている今、16枠あるホルダーのうち、残りの6枠は空いたままだ。どうしようもなくなったとき、6枠を使いたいとは思っている。

「お父様、昨日の暗殺未遂事件のことでなにかわかったことはあるのですか？」

「そうだね。聖王子クルヴシュラト様の皿から毒物が発見された件は、あの毒はレイジさんが入れたものではないかと言う貴族もいたよ」

あ～。

そりゃ、そうだわな。

あの瞬間で僕以外の誰も気づいていなかったものね……。

「そんな！？　レイジが毒を入れるわけありませんわ！」

「お嬢様、落ち着いてください。伯爵、魔瞳を使ってください。僕は毒なんて盛ってませんよ」

「……はい、確認しました」

発動の瞬間はきらりと一瞬目が光るんだな。

伯爵はどこかのタイミングで僕が「真犯人かどうか」を確認するつもりだったのだろう、魔瞳の発動までがあまりにスムーズだった。

逆に言えば、今日はここまで一度も魔瞳を使っていなかったってことか。意外と信用されているのかな、僕？　……いや、そう思わせる作戦だったりして。

22（後書き）

体調崩していて昨日から更新できておりませんでした（ストックがほんとにないことを露呈していくスタイル）。

活動報告で温かいコメントをくださった、乞食様、マハ様、ｓｔ０１ｎ様、カズや様、フェイ様、ワタル様、輝臨様、だんな様、極楽とんぼ様、あーー様、火之様、蒼緋のニケ様、Ｂｅｃｋｅｓ様、ココアミ様、プクプク様、こうしゅん様、こはにぃ様、Ｋｏｈａ様、ほんとうにありがとうございました。

正直「活動報告なんて誰も見てないやろ！」とか思っててマジですみません。めっちゃ励まされました。今後もがんばります。だけどさすがに1日2回更新はそろそろ無理かもって正直思ってます！！！　明日で連載開始から1か月なのでそこは最初の目標だったのでがんばります！！！

23

「でも、許せないのだわ！　レイジが疑われるなんて！　大体、クルヴシュラト様とお目に掛かったのも昨日が初めてだというのに……」

「エヴァ。貴族には様々なことがある」

ふう、と伯爵はため息を吐いて、

「お前に与える天賦珠玉は、1月後になってしまった」

「1月後……？　伯爵がお嬢様にこの家で与えるようなものではないのですか？」

僕の質問に、

「そうです。『新芽と新月の晩餐会』に出席していた12歳の子女が、再度一堂に会して聖王陛下の前でひとりずつ天賦珠玉が与えられます」

「えっ――」

「用意するのは親ですがね。そこで天賦も公表されるので、各貴族の現在の力がどれほどあるのかもわかるというわけです」

「天賦珠玉を手に入れるのも貴族の腕だと……」

「はい。……エヴァ、なんの天賦珠玉がもらえるのか知りたいかい？」

伯爵の問いに、お嬢様は目を瞬かせた。

「いえ、1月後にわかるのでしたら焦りませんわ。それよりもクルヴシュラト様の暗殺未遂事件と、これからの聖王宮の動きが気になっています」

真顔でうなずいた伯爵は、にっこりとした笑顔よりよほど感情があらわになっている――そんなふうに思うくらいには僕はこの伯爵との距離の取り方がわかってきた。

（お嬢様、今のは百点満点の回答ですよ）

貴族は、得られるものがあるときに焦ってはならない。貴族は、私事より公事を優先すべき。

家庭教師の教えだけれど、お嬢様にはその教えがきちんと身についているようだ。

「聖王陛下は、クルヴシュラト様の毒殺未遂の犯人が判明するまでは、天賦珠玉の授与式を延期すると仰せでした。しかしながらそのために領地から出てきている貴族も多く、1月の延期ということでまとまったのです。聖王陛下は、犯人が1度の失敗ではあきらめることなく、再度暗殺が行われるとお考えですね」

伯爵は今日、聖王に連れられて聖都に集まっている要人たちと面会し、毒殺未遂について「審理の魔瞳」を使うよう強いられたようだ。

第1聖王子、第1聖王女を始め、高位貴族の当主たちもだ。

ちなみに、聖王子のソース皿に毒を盛ったとおぼしき召使いは行方をくらませているそうな。高位の貴族がその者を匿った場合、見つけるのはとても難しいらしく、それならば当主本人を「審理の魔瞳」で判別したほうが早い――ということらしい。

「それはとんでもない軋轢を生むのでは……」
「ええ。私が『審理の魔瞳』を持っていることをほとんど全員知っていますからね。にらみ殺されるかと思いましたよ。全員、ウソは吐いていませんでしたね」

しれっと言っているけど、それってとんでもないストレスなんじゃないだろうか。

聖王はそれほどまでにクルヴシュラト様のことを大事に思っている……ってことか？　いや、それはともかくとして、こんなことやってるっていう内容はすぐに伝わるよな。そうなったら、

「伯爵――」
「レイジさん、護衛に関する話はあとでしましょう」

伯爵が襲撃される可能性がまた高まるということ。
伯爵は当然それを理解しているのだ――だけれど、お嬢様に聞かせたくなくて「あとで」と言った。

「お父様。レイジ。わたくしはもう一人前の貴族となりましたわ。わたくしにも関わることであれば教えてくださいませ」

それをお嬢様はよしとしなかった。
いや、今までは伯爵の言うとおりにしてきたのだと思う。「お前は聞かなくていい」と言われれば「はい」と答えていたし、「奴隷商潰し」だって伯爵が「止めなさい」と言えば止めていた可能性が高い。

「エヴァ、お前はまだ……いえ、そうでしたね」

伯爵の口調が、変わった。

「ではあなたも、一人前のレディーとして扱います」
「！　はい」

お嬢様も伯爵の切り替えに気がついたのだろう、背筋を伸ばして伯爵の顔を見つめる――先ほどと同じ感情を表さない顔のように見えるけれど、その実、丁寧な言葉とは裏腹に遠慮のない言葉が出てきているように僕には感じられた。

「まず私が殺される可能性が高くなりました」
「ッ……はい。それはお父様が聖王陛下とともに尋問を続けると、いずれ犯人にたどり着くからですね？」
「そのとおりです。聖王子様を害する動機は、王族や貴族以外にありませんからね。聖王陛下は確度の高い人物から当たっていったのでしょう」
「確度の高い……？　第１聖王子と第１聖王女は聖王位継承権は上位なのですから、関係ないのではありませんか？」
「これは未確認の情報ですが、『祭壇管理庁』の上層部がざわついています。私のように内部犯罪をとりしまる人間には触れられないところで、なにか特別なことがあったのでしょう」

特別なこと？
僕とお嬢様が黙ってその先をうながすと、伯爵は言った。

「……星５つ以上の天賦珠玉が『一天祭壇』から出現したということです。そしてそれは、聖王子クルヴシュラト様に与えられることになります」
「！」
「！！」

星5つ以上の天賦珠玉！　それは確かに、とんでもない価値になりそうだ。

星4つまでなら成功した商人や一攫千金した冒険者が手に入れたりすることもある。だけれど5つとなるとガクンと数が減る。

「クルヴァーン聖王国が管理している星5つ以上の天賦珠玉は、7つしかありません。1つは【聖剣術（ホーリーソード）★★★★★★】で聖王騎士団の第1隊長――つまり騎士団長が代々受け継ぎます。もっとも使い手が死んでしまっては天賦珠玉は消えてしまうので、騎士団長が前線に出ることはないのですがね。名誉職とも言えます」

そうなのか！　だから3年くらい聖王騎士団に出入りした僕も、騎士団長を見ることもなかったんだな。

「【剣術★★★★★】はロズィエ公爵家が管理しています。あそこの騎士隊は剣術に凝っていますからね。ただこの天賦珠玉は騎士には与えず、当主だけが使えるとしています」

ルイ少年の家か。剣術に凝っている割りに、アルテュール様を護衛にしてるのはどうなのかな。いや、聖王騎士団の中では強いほうだからいいのか。

「【英雄指揮術★★★★★★】はリス公爵家、【神秘調合★★★★★★】はエベーニュ公爵家」

リスは知らないけど、エベーニュはエタン様のところだ。ハーフリングで調合系の天賦珠玉とか強い。

「【竜剣術★★★★★】はルシエル公爵家。ここは『剣聖オーギュスタン』を擁する公爵家で、6大公爵家の中でもいちばんの武闘派

ですね……そして第1聖王子の後ろ盾でもあります」

「6大公爵家」、あるいは「6大公家」とは、聖水色を失った公爵家ながらその他の部分で頭角を現し、今もなお公爵家を名乗っている家、らしい。

たとえばクルヴシュラト様が聖王にならずに公爵と叙せられた場合、クルヴシュラト様の子に聖水色が現れなければ、娶った奥さんの家へと入ることになる。公爵家は1代で消えてしまうのだ。

だけれど聖水色を持つ子を産んでいる間は公爵家でいられるし、その間に、押しも押されもせぬ殊勲を上げれば――戦争で大勝利するとか、大発明をするとか、いろいろ――聖水色を失っても公爵家として残ることができる。

その結果、聖水色を失っても残った公爵家が6つ。6大公爵家となる。

「そして、【魔力強化★★★★★】はラメール公爵家に、【祈祷術★★★★★】はモンターニュ伯爵家にあります」

「最後は伯爵家なんですね」

「はい。6大公爵家のうちリビエレ公爵家は、海運に非常に強いのですが星5つ以上の天賦珠玉を持っていません。その点で他の公爵家に負けていると考えている節があり、喉から手が出るほど星5つ以上の天賦珠玉を欲しがっているでしょうね」

「……もしクルヴシュラト様が亡くなっていたら、新たに出現したかもしれない星5つ以上の天賦珠玉はどうなるのですか？」

「聖王陛下ご自身が使うか、第1聖王子、第1聖王女が使うか……」

「そのお三方はどんな天賦珠玉を？」

伯爵は人差し指を立てて左右に振った。

「当然、秘密ですよ。聖王家の極秘事項です」

「なるほど……」

いざというときの守りだってある。自身の手札を公開する必要はないしね。

「スペキュラ2等書記官だって聖王家の天賦珠玉を勝手に見たことがバレたら、即座に処刑です」

「……なるほど」

ほんとうのほんとうにシークレットらしい。

そうなると【オーブ視】の天賦がちょっと欲しくなってしまう。さっき【森羅万象】をつけたままで、あえてスペキュラさんのスキルを受けてみてもよかったかな？

……いや、やっぱり僕の【森羅万象】も大概極秘だわな。

「あるいはそのまま、第3聖王子に引き継がれるか、ですね。第3聖王子は現在10歳ですがすでに結婚相手が決まっており、それはリビエレ公爵家の方です」

23（後書き）

嗚呼坂レテ様、かきくけ虎龍様からレビューをいただいていました。
ありがとうございます。
本作品のページ上部「レビュー」から遷移できますので、こちらも
是非お読みくださいませ。

24

……それはもう決まりなのでは？　犯人はリビエレ公爵！

「ですが、本日リビエレ公爵と面談しましたが、公爵がウソを吐いているという決定的な場面には出会えませんでした」

「え……そうなんですか？　でも確かに、答え方を間違えなければウソを吐かずに済みますしね」

「どういうこと、レイジ？」

お嬢様が首をかしげるので、

「たとえば、リビエレ公爵が黒幕だったとしても『私は毒を盛っていません』と言えばそれはウソではないんです。実際に毒を入れたのは召使いですから」

「あ……」

「レイジさんの言うとおりです。さすが、あなたは知恵の回りが早いようだ」

伯爵、それは褒めてますよね？「悪知恵働くね」って意味じゃないですよね？

「もちろんそこも踏まえた上で、聖王陛下はいろいろと話をされましたが――もとより私は、リビエレ公爵が黒幕だというのは無理があると思っています」

「え……そうなんですか？」

「そもそも星５つ以上の天賦珠玉が出た――かもしれないという情報は、ほぼ出回っていませんからね」

あ、そうか。
捜査は振り出しに戻ったな……（渋い声の中年刑事風イメージ）。
「今日の面談はほんとうに疲れましたよ」
イスの背にもたれて伯爵が長く息を吐く。
「お父様、お茶を持ってきてもらいましょう」
「ええ、そうしてください」
エヴァがベルを鳴らしてメイドを呼び、お茶を淹れてもらう。
とりあえず伯爵の話が終わったところで――今度は僕の番だ。伯爵にはきいておかなければいけないことがある。
「――疲れたのは、高位の方々に『審理の魔瞳』を使ったというそれだけではありません」
メイドが去り、僕が切り出す直前に、伯爵はティーカップを手にしてそんなことを言い出した。
「魔瞳を使ってもいいが、その代わりに……と代償を要求されました」
「代償――もしや」
僕はお嬢様を見る。彼女を嫁に寄越せという申し立てではないだろうか？
やりかねない！　ルイ少年とか、パパに泣きつきそうだもん！
「そうです」

にこやかにうなずいて――うさんくさい笑顔だ――伯爵は言った。

「レイジさんをくれと」

「やっぱり！　お嬢様――え」

僕？

「はい、あなたです」

僕？　なにが？

横を見ると、お嬢様も「当然なのだわ」という顔をしている。

「聖王騎士団第2隊長よりも素早く動き、エベーニュ家のエタン様、護衛ですら気づかなかった毒物を見抜く。しかも天賦ナシで！　まあ、天賦がないことは私も今日知りましたが、【観察眼】などの天賦を持っている厨房の人間すら見抜けなかった毒物を見抜いたあなたを、欲しがるのは当然ではありませんか？」

「……」

マジで。言われてみると、それはそうなの？　いや、どうなんだろう、僕はまだ14歳なんだけども。

「……レイジ、あなたは他家に行ってしまうの？」

お嬢様の手が、僕の服の裾にそっと添えられた。

（――ああ、今日はお嬢様を不安にさせないと思ったばかりなのに）

僕はすぐににこやかな笑みを浮かべた。

「行くわけありませんよ」
「ほんとう？」
「ええ」
「……エヴァ、レイジさんの笑顔はうさんくさいですが、話している内容はほんとうのようです」

伯爵ゥ！　さらっと「審理の魔瞳」を発動しないでよォ！

「ですが、これから先、あなたも気をつけたほうがいいと思いますよ。今日は剣聖もいましたが、レイジさんの話を聞いて目を輝かせていましたから」

うわー、聞きたくなかったなー、その情報。
いや、でも待てよ？　剣聖なんて呼ばれている人が訓練しているところを見学できたら、【竜剣術】を学べるのでは……？

（……ダメだ。止めておこう。こういうときに欲をかくと失敗する。僕はもう油断しないんだ）

僕はお嬢様へもう一度言う。

「今のところ、僕と伯爵の利害は一致していますからね。ここを離れる理由はありません」
「利害……？　レイジはお父様に雇われているだけではないの？」
「そう言えばお嬢様に話していませんでしたっけ。僕は『星５つ以上の天賦珠玉に関する新しいニュース』と『ルルシャという人物を探す』という２点を伯爵にお願いしているんです」

すると、伯爵が額に手を当てた。

「……レイジさん、その内容は極秘なのでは？」
「いや別に、どうってことないですよ。むしろ大々的に広めてくださってもＯＫです」
「……極秘なのだと思っていたので、気を遣って調査していましたよ」

僕は伯爵にもにっこり笑って見せた。

「聞かれませんでしたので」

以前そう言われた仕返しである。

「わたくしも耳に挟んだらレイジに教えるのだわ！」
「ありがとうございます。一人前の貴族となったお嬢様にも期待しましょう」
「任せるのだわ！」

お嬢様はドンと薄い胸を叩いた。

「わたくしも、レイジと同じ目線で話せるようにがんばるのだわ！　まずは――お父様」
「なんですか、エヴァ」
「今までいろいろとお膳立てありがとうございましたわ。わたくしとレイジが向かった『人材斡旋所』の件、すべてお父様の息が掛かった組織でしたのね？」

ブホッ、と思わず僕はお茶を噴き出しそうになった。
いや。伯爵！　なんで僕をにらむんですか！？　違いますよ、お嬢様に吹き込んでませんよ！

まあ――僕が今から言おうとしていたことでしたけど。

「……エヴァ、どういうことですか」

「お父様、今日一日わたくしは考えましたの。とても多くのことを。物事というのは往々にしてうまくいかないことがほとんどなのですわ。昨日の――聖王陛下のお考えになった『余興』は、一見うまくいきましたけれど、その後、クルヴシュラト様のソース皿から毒が発見されたことで晩餐会そのものは失敗となりました」

ああ――なんてことだろう。

お嬢様の横顔を見て、僕は驚きのあまり言葉も出なかった。

僕は、お嬢様を見誤っていたのかもしれない。

お嬢様は「護るべき存在」で「今日はとても悲しんでおられた」なんて。

「わたくしは、すべての聖王国民が生きる自由を与えられるような社会を望んでいます。ですがその一方で、国民の生活を大きく左右する天賦珠玉でも、突出して価値のある天賦珠玉については本日お父様にお話を聞くまでなにも知りませんでしたわ。調べることも、聞くこともできる立場でしたのに。心のどこかで、『貴族が持っているのでしょう』という程度の認識でしかありませんでした――それこそが、わたくしが取りやめるべき『当然のような貴族の優越』だというのに」

お嬢様はもう、ほんとうに、一人前のレディーなんだ。

自分の足によって立ち、自分の頭で考えているんだ。

「わたくしの、いつしか凝り固まっていた考えですら直すことは難しいのに、『人材斡旋所』を訪れ、『奴隷』と思わず口走った所長を逮捕せしめ、彼らに罰を与える――たった1度ならまだしも、6

度も続けて簡単に成功しているのはやはりおかしいと言わざるを得ません」

「……だから、私が手配しているのだと？」

お嬢様は、「冷血卿」とも呼ばれる父の真剣な顔を見ても怯まず、うなずいた。

「わたくしは今日一日考えました。レイジがいなくて……彼がいなくなったらどうしようと心がくじけそうになったとき、レイジはレイジで戦っているのではないかと思ったんです。わたくしを守るために戦ってくれるレイジならば、たったひとりでいるときにもその時間を無駄にしないだろうと思ったんです。そうしてわたくしもまた考えた結論が、今お話ししたことです」

一人前の貴族となる「新芽と新月の晩餐会」からたった1日。その短い時間でお嬢様は、ほんとうに一人前のレディーになったのだ。

きっかけが僕だというのなら――なんて誇らしいことだろう。

見た目の美しさは関係ない。背筋を伸ばした彼女の姿は、話した内容とその姿勢は美しいと僕は思った。

――これから天賦珠玉を選び、多くのことを学び、時に戦い、時に失敗し、時に喜び、時に苦しみながらも――貴き血を持って生まれた以上はその宿命と戦わねばならん。

貴族について聖王はそう言った。

お嬢様は、やはり貴族なのだ。その振る舞いこそが貴族であるというのならば、お嬢様こそ貴族なのだ。

24（後書き）

投稿からちょうど1か月が経ちました。1日2回更新で1か月はやるぞ！　と決意してなんとか達成ーーの直前で体調を崩すという大誤算が発生し、へこたれていると皆様に温かいコメントをいただいて、さらには本日付で「小説家になろう」のトップページのナンバーワン（月間ランキング1位）に押し上げていただけました。

今日の更新内容にあるレイジくんがお嬢様を見て「成長したな……」と感じたように、私もまたオバスキが勝手に歩き出して独り立ちしていったような妙な感慨を受けました。

思えば、私の勤め先は2月末から在宅勤務が始まり、3時間弱の通勤時間は全部小説書けるじゃんとなって、既存シリーズをつらつらやっていました。あのころは4月には元の生活に戻るだろうと、漠然とした思いがあって、だというのに3月中旬になっても状況が好転するどころか悪くなる一方で。

そんなときに自分になにができるのかなと。

小説書くしかないじゃんね。

オバスキのベースとなるスキル枠のアイディアは1年以上前からあったんですが、書くタイミングがなくてアイディアを書き留めておくＥｖｅｒｎｏｔｅの中で死蔵されていました（まあそんなアイディアは他にも大量にあるんですけど）。

ちょっとダークな入りだし、全然今の「なろう」の流行とは違うけれど、でも逆に流行は他の作家さんも書いてくれているので流行ってないものを読みたい人向けに書けばいいかと。

ストックなしでスタートし、序盤はぐいぐい書けるので少し余裕が

できたりしたのですが、基本的には毎日2回更新という自分の目標と戦いながらここまで来たという感じです。

何度も書いていますが、皆様の応援、読んでもらえてるなぁという実感があってこそなんとかかんとかやってこられました。まだ体調は本調子ではないのですが、引き続き更新は進めていきたいと思っているので今後とも読んでやってください。

コロナ禍が早く終息し、元の世の中に戻りますように。

はい！　長々とスミマセンでした。もしよろしければ「ブックマーク」と、下にある★をタップ（クリック）して評価をお願いします。評価は作者の応援になります。本作のみならず、他の作品でも、もちろん完結済みの作品でも評価を入れていただけると作者の励みになりますので、是非よろしくお願いします。

読み手の皆様が思っている以上に、大きな応援となりますので！

そして次回は皆さんお待たせしました、あの人が再登場です！

25

＊　エヴァ＝スィリーズ　＊

エヴァにとってレイジの紹介のされ方はあまりにも突然で、「私の命を救った少年だ」と父が言わなければ、彼を護衛として迎え入れることはなかったろう。

父はただひとりの家族だった。父が時折怖い目をすることがあるのを知っていたけれど、それが自分に向けられたことはなかった。

そんな父を救ったのだから――エヴァにとってレイジはとても重要性の高い人物だった。最初から。

ワガママを言ってレイジを試してみたことも何度もある。だけれどレイジはそれにすべて応えてきた。

国民が等しく生きる権利を――と考えるようになったのもレイジに感化されてのことだ。エヴァは当然知らなかったことだけれど、日本という国の考えを持っているレイジの思考内容は、この世界ではまったく異質で、そして刺激的なものだった。

――もしレイジがいなくなったら。

レイジが思っている以上に、晩餐会の翌日、一日エヴァのそばを離れたことは大きかった。

それこそ、彼女の考えを大きく変えてしまうほどに。

「お嬢様、今日はどちらへ？」

毎日の始めに、レイジが聞きに来る。
忙しい貴族ならば数か月先のスケジュールまで決まっているのだけれど――それこそエヴァの父のように――エヴァはまだそれほどでもない。
だけれど今日は予定があった。
「今日は、晩餐会のみんなとお茶会があるのだわ！」
父に、「人材斡旋所」でのことを問い詰めた日、父は自分を「一人前」だと認めてくれた。どうやらあの「人材斡旋所」の件は最終的にエヴァが真相にたどり着くだろうと考えた上で、やったことのようだった。
なぜなら父は最後に、
――親の手を借りずに歩けなければ、貴族社会では生きていけません。ましてやこれほどわかりやすい「余興」は性悪の貴族たちが最も好むところだからです。
と言ったからだ。わざわざ「余興」を「性悪」なんて言ったあたりが聖王に対するチクリとした毒のような気がするけれどエヴァはそれには触れなかった。
父はエヴァに、自由な外出と交友を許可したのだ。
「承知しました」
レイジは、今まで通りの距離で接してくれている。特になにも変わらない。
エヴァは自ら進んで晩餐会のテーブルメンバー――ルイ、エタン、シャルロット、ミラと関わることに決めた。クルヴシュラトだけは「危険があるから」と聖王が外出許可を出さないという。聖王がそ

こまでクルヴシュラトを可愛がっていることを他の貴族たちも知ることとなった。
天賦珠玉の授与式が終わるまではルイたちも聖王都から離れられない。ミラとは、お茶会だけでなく手紙のやりとりもしている。
（まずは自分の状況と、貴族社会の現状を知らなければいけないのだわ）
エヴァ＝スィリーズ、12歳は、自分の大いなる夢の実現に向けて着実に一歩ずつ歩んでいくのだった。

＊　護衛：レレノア　＊

エベーニュ公爵家は6大公爵家のひとつであり、聖王都第2聖区の中でも、第1聖区へと通じる門に最も近い場所にその邸宅があった。200年前の聖王が病に倒れたときに、その病の特効薬を作り、さらには蔓延していた流行病をも封じ込めた功績で聖水色を失っても公爵家を続けることを許されている。
ただその領地は聖王都からはるか遠く、当主エベーニュ公が聖王都にいるのは1年の4分の1程度で、今回の聖王子暗殺未遂騒動で滞在期間が延びてしまったことから公務のスケジュール調整で屋敷はずっとバタバタしていた。
「さて――……久しぶりの休暇だべな」
レレノアは第5街区にいた。町並みは整っていて、道をゆく人た

ちの装いにも余裕がある。第6街区から治安の悪化が始まり、裏通りが歩けなくなる。第7街区は大通り以外の石畳がない。その外側は王都外だ。

ふだんはエタンの護衛についているのできっちりとした正装なのだが、あれは堅苦しくていけないとレレノアは思っている。田舎で生まれ育ったレレノアは、今着ているようなゆったりとした服、それに鉱石を通した両手のミサンガなどがないと落ち着かない。

この格好をすると、「第2聖区だとさすがにみっともないから馬車に乗ってけ」と屋敷の人に言われ、第4街区までは馬車で送られてしまうのがなんとも切ないところなのだけれど。

（ハーフリングはこういう格好してナンボだってのになー、みんな都会でお高く止まっちゃってるべな）

レレノアはふらふらと歩きながら、屋台で見つけたパスタを買い食いしている。麺のパスタではなく、四角いラザニアの生地を半分にしたような三角形のパスタだ。木の器に入った香辛料たっぷりのトマトスープの中に浮かんでおり、スプーンで食べると酸味と刺激とが口の中に弾け、ぷるんとしたパスタの食感がなんとも楽しい。

「おっちゃん、美味しかったべな！」

「おう、キレイに食ってくれたじゃねえか、ハーフリングの姉ちゃん」

護衛をやっていれば買い食いだってできやしない。

それから数軒の屋台をハシゴしてお腹がこなれてくると、レレノアはようやく目的地へとやってきた。

「ひっさしぶりだべなー」

3階建てで石造り、1階は開かれた大扉――これはよそでも同じパターンとなっている冒険者ギルドの特徴だった。

とはいえ内部の様相はそれなりに違い、クルヴァーン聖王国は木材が他国よりも高価であるために石材で固めた柱が中央に立っていて威圧感がある。

冒険者ギルドがあるのはここ第5街区と第7街区で、第5街区のギルドは貴族家からの発注を受けることもあるために上級の冒険者が多い。一応、第3聖区にも冒険者ギルドの支所はあるのだが、そちらは一般の冒険者は入れずギルドの職員だけが駐在して貴族家とのやりとりを行う。

（ほ～、しばらく見ないうちに立派な装備の連中が増えたべな～）

モンスター素材を使っているのだろう、ぴかぴかの赤い鎧を着た男や、業物らしい刀剣を背中に2本背負っている女剣士、かなりの魔力が籠もっていそうなロッドを持った魔法使いもいる。

それらのすべてがヒト種族ではなく、ドワーフ、狐系獣人、それに銀髪に青黒い肌というダークエルフだった――レイジは知らなかったが、スペキュラ2等書記官もダークエルフである。

冒険者は実力社会なので、特に種族の壁なく活躍できる者は活躍できるようになっている。一方で計算高く、魔力適性もそこそこ高いようなヒト種族はギルド職員に多い。クルヴァーン聖王国は種族偏見がまったくないので――なにしろ聖王本人が「聖水色」という特殊な特徴を持ったヒト種族であることから、なんの違和感もなく多くの人種が共存していた。

「レレノア！」

ぼんやりと冒険者たちを眺めていたレレノアに声を掛けたのは、

「お～、ミミノ！　久しぶりだべなー！」

彼女と同じハーフリングである女薬師だった。

25（後書き）

ａｌｉｃｅ様からもレビューをいただいていました。ありがとうございます！

レビューって書くの、結構抵抗ありますよね……ありがたやありがたや。

26

＊　護衛：レレノア　＊

ハーフリングにはいくつか特徴があったが、その色彩感覚についてはわかりやすい特徴と言えるだろう。

ミミノは、袖口が鮮やかなオレンジのローブを羽織っており、肩から提げているバッグもまた銀糸と緋色の糸を使った刺繍がなされていた。描かれているのは大輪の華で、死者をよみがえらせるという伝説がある「呼冥花」だった。

飴色の長い髪を複雑に結っており、厚めに垂らした前髪は右の目元に掛かるように流れている。大きな青い目は、久しぶりに会ったレレノアから見ても、

「ミミノは全然変わらないなぁ～」

冒険者ギルドからほど近い、オープンテラスのカフェへ移動したレレノアとミミノは、クルヴァーン聖王国名産のオレンジを使った果実水を頼むと、改めて向き合った。

「レレノアも変わらないべな～。むしろ何年か前に会ったときと同じ服なのでは……」

「そ、それは言わない約束でしょうが！　普段からかしこまったものばかり着せられてなぁ」

「ああ、護衛の仕事」

「そそ」

「今日はいいの？」
「今日はね、ウチのお坊ちゃまがお客を招いてお茶会してるから、大丈夫さ。遊びに行くときはいっしょについていかなきゃいけないけどねえ……最近、仲のいいお友だちができたもんで、毎日出ずっぱりだったのよ」
「大変だねぇ」
「タイミングよかったよ。明日から3日間は身動き取れなかったから。お坊ちゃまへの天賦珠玉の授与式があるんだけど、そのリハーサルとか護衛の確認とかうるさくてうるさくて」
「天賦珠玉の授与？　そんなのやるの？」
「まあ、ね……いろいろあったべなぁ」

レレノアは遠い目をする。
聖王都滞在が長引いてしまったが、それもあと3日――天賦珠玉の授与式までだ。
注文したジュースが届く。レレノアが一口飲んでみると、オレンジだけでなくいくつかの果実をまぜているようだ。
ガラスのコップなんてものは存在しないので、出てくるのは銅製のゴブレットだ。魔道具かなにかを使ってあらかじめ冷やしておいたのだろう、ジュースが喉を滑り落ちると爽やかな香りが鼻に抜ける。今後も使おう、とレレノアが思うくらいには気に入った。
ちなみに言えば、この店は一般店としてはグレードが高い。お値段も高い。グレードが下がると、コップは木のコップになるし、屋台で飲むなら水筒持参だ。

「急にミミノから連絡が来たから驚いたべな。ごめんな、返事が遅れて。お坊ちゃまの御用事で聖王都に来てたから、領地の手紙が転送されるまで時間掛かっちまってな」
「ううん、いいべな。こっちも国境がうるさかったから聖王都に来るまでだいぶ日数掛かったし」

「光天騎士王国との国境か？　なにかあったか？」
「あ、そっちからじゃないんだよね。冒険者ギルドの依頼でレフ魔導帝国まで行ってたんだ」
「ええ？　あんなところに行っていたの？」
レレノアが驚くのも無理はない。
魔導帝国と呼ばれるその国は、魔術の研究に関して相当に進んでおり、各国に提供されている魔導飛行船の技術などでも世界最先端ではあるのだが――とにかく排他的なのだ。国民全員が同じレフ種族という種で構成されていて、爬虫類がベースとなっている獣人だった。緑や茶色の肌に、金色の目――光が当たるとこの目は反射する。
また「天賦珠玉を使えない」という特殊な事情もあり、入国を著しく制限している。他種族が入れる場所も相当に限られている秘密国家でもあった。
「いやー、初めて行ったけど面白いところだったべな。あらゆることに魔道具が使われててな――あ、これお土産」
「お」
テーブルに置かれたのは金属の立方体だった。なんだろう、と手にしてみると、レレノアの手のひらにすっぽりと収まるくらいのサイズで、ずっしり重い。
と思っていると、ヴヴヴと震えた。
「ひっ」
あわてて放すとテーブルにコトンと音を立てて転がり、止まる。
「な、なにこれ！？　生きてる！？」

「あはは、違うべな。よく見てて」

震えながらその四角い物体はコロンコロンと転がり、やがて一点を軸に立ち上がるとくるくるくると回転を始めた。

「……なにこれ？」

「うん。回るだけのオモチャだ」

しばらくすると、コロンとまたテーブルに転がって沈黙した。

「……なにに使うの？」

「回るだけのオモチャだよ。なんでも、魔道具の研究で作っていたらできあがった副産物……あるいはただの失敗作？　だから安かったよ」

「そ、そう……」

薄気味悪そうにレレノアは手を伸ばしたが、

「あつっ」

「あ、ゴメン。しばらくは触れないくらい熱くなってるから」

「……」

これはミミノからの嫌がらせなのだろうか？　と一瞬悩んでしまうレレノアである。

「えーっと……それで、こんなのを渡しに来たんじゃないんだべな？　なにか相談したいことがあるって手紙にはあったけど」

「あ、うん――」

ミミノはそれまでにこにことしていた表情を、すっと引き締めた。

「実は、人を捜して欲しいんだ」
「人捜し？」
「そう。忙しいのはわかっているんだけど、時間があるときでいいから」
「そりゃ、まあ、従姉妹のお願いとあれば聞くけど……」

レレノアはミミノの従姉妹だ。
同じ里の出身で、ミミノは旅の薬師として里を出て、レレノアは護衛として召し抱えられた。

「でもミミノさ、そんなの、私みたいな護衛には――」
「実はね」

ミミノはレレノアの言葉を一度手を広げて遮って、こう続ける。
探している人物はヒト種族で、黒髪に黒目。さらには特殊な教育を受けている可能性があるということ。つまり貴族階級に食い込んでいることもあり得る――逆に冒険者としての可能性はミミノが探れるが、貴族のほうはミミノは完全に門外漢なので誰かに頼りたかった。
天賦珠玉がなくとも魔法を使える才能があり、身のこなしも少年にしては相当に熟練している。

（……天賦珠玉がなくとも魔法を使える、少年？）

そのときレレノアの脳裏に閃いたのは、「新芽と新月の晩餐会」での出来事だ。あれからおよそ1月ほどが経っている。
あのときにいた護衛……エヴァ＝スィリーズの護衛だった人物は、その後も何度かお茶会で顔を合わせているが、護衛同士で話をしたりはしないので結局名前もわからない。なんでも、エベーニュ家の

当主が「あの子欲しい」と言っていたようだが、エタンの護衛である自分にまで情報が下りてくることもほとんどない。

（確かに、彼なら条件に合う。彼は青髪で色は違うけど……土地によっては黒髪黒目は迫害対象だって言うし、髪を染めていてもおかしくない。私だって気づかなかった毒物を見抜いたし……観察とか洞察とか、そういったタイプの、高位の天賦を持っているのかなって思ってたけど……）

すると、ミミノがじっとレレノアを見ているのに気づいた。

「レレノア、もしかして心当たりある？」

ずずいと身を乗り出すミミノに。

「……へぇ～、ほぉ～？」

「な、なんだべな、レレノア。その気持ち悪い目」

「気持ち悪い言うな！？　いやさ、ミミノはその少年が気になってるんだな？　片想い？」

「んなっ！？　そ、そういうんじゃないべな！　からかわないで！」

「と言いながら顔真っ赤だべな」

「ち、ちち違っ、レイジくんはわたしより小っこいんだぞ！？　こう、なでなでしてむしろ守ってあげる対象っていうか……でも守られちゃったっていうか……」

「あれ、そうなの？」

レレノアは、ふむ、と思う。エヴァの護衛はそこそこ身長があったはずで、自分とほぼ同じ身長のミミノよりも確実に大きいはずだ。

「と、とにかく、もしそういう人の情報を耳に挟んだら教えて欲し

いんだ！」
「わかったわかった。落ち着いて」
まだ頬が赤いミミノを見ながら、レレノアは小さくため息を吐いた。
この従姉妹にようやく遅い春が来たのかと思ったが、そうではないらしい。探しているのはもっと小さい男の子――その情報が４年前のそれだということを伝えなかったのはミミノの最大のミスなのだが――だというのだから、先が思いやられる。
（恋だの愛だのする前に、お母さんになるつもりかね？）
とまあ、レレノアも他人の心配をするより前に、なんの出会いもない自分の心配をするべきではあるのだが――。
（……あれ、でもスィリーズ家のお嬢様は確か、あの護衛のことを「レイジ」と呼んだっけ……？　どうだったっけ？）
今、不確かな情報で期待させても仕方がないので、あとで他の護衛仲間にも聞いてみようと思うレレノアだった。

26（後書き）

私の別著作「学園騎士のレベルアップ！」をご覧の皆様は朗報です。双葉社「がうがうモンスター」にてコミカライズ版の第2話が公開されました。是非ご覧くださいませ！

27

エベーニュ家のお茶会を終えたお嬢様はご機嫌で、同じ馬車に乗っている僕の質問にもすんなりと答えてくれた。

「お嬢様、今日のお茶会はことのほか楽しかったようですね」
「そうなの。エタン様のお考えはエベーニュ公爵家として……ハーフリングの薬剤に関する知識と生産力によっていることがよくわかったし、ミラ様の辺境伯領はやはり軍事を中心にお考えということもよくわかったのだわ。この国には、政治に影響力を持つ公爵家だけで6、家格は一段下がるものの純粋な家臣としての貴族家ではトップの侯爵家が4、独自の軍事力を持つ辺境伯家が4、我がスィリーズ家含む伯爵家が20もあるのよ。子爵と男爵家は合わせたら3桁にも上る。それを数字ではわかっていても実体験ではわからなかったもの。皆様とお話ができてよかったわ」
「ロズィエ家のルイ様とバルコニーにおいででしたね」

お茶会の途中、ルイ少年とお嬢様がふたりきりでバルコニーに出たことがあった。そのときルイ少年はなにかを熱弁して、お嬢様も熱心に聞いているように見えたのだが。

「ふふん、レイジ、よくぞ聞いたのだわ」
「おや。それも『楽しかった』ことの1つなんですね？」
「ルイ様もわたくしの思想に共感してくださったのだわ！」
「……今なんと？」

なんだか不穏なワードが聞こえたんだけど……。

「わたくしは、ルイ様にも理想を話したのだわ。すべての国民が等しく幸福を手に入れられる社会の実現。これは、権力を持っている貴族側からしか動きを起こせないこと。『一天祭壇』より生まれる、つまり神のお与えになる天賦珠玉を貴族が独占しているのはどうなのでしょうかと以前お伝えしたのだわ」

「……お嬢様、その話、他のところではけっしてなさいませんよう」

「もちろんよ。貴族とは言え聖王陛下の治世を批判するようなことは厳に慎まねばならないのだわ。『聖王陛下の威光はあまねく国中を照らす』のよ」

お嬢様はわかっている……わかっているんだよね？　大丈夫だよね？

「レイジ、そんなに心配そうにしないで」

むすっとした顔になるお嬢様。そんな顔をしても可愛らしいのだから美形はずるい。

「あなたを信用しているからここまで話すのよ！　ルイ様も、『剣に誓って誰にも言わない』とおっしゃったからすべてお話ししたのだわ」

「へえ……」

武人が剣に誓うということ、特に、剣術にこだわりのあるロズィエ家のルイ少年が剣に誓ったのならばかなりの覚悟ということなのだろう。……まあ、僕から見ると「恋する少年」にしか見えないのだけど。

「それにね、レイジ。先ほどわたくしも言ったのだわ。これだけ多様な種族がいる聖王国をどうやって束ねていくのか……とてもシン

プルな答えなのよ」
「聖王陛下と貴族ですね」
「……正解。すぐに当ててしまってつまらないのだわ」

お嬢様がまたふくれている。
この国は多様性を受け入れている。だから種族による壁がない。
とはいえ、ひとつにまとまるためのシステムが必要で――それが強力な上下社会、貴族による統治だ。
そして強烈な象徴である聖王。
お嬢様が「不公平」と考えている貴族社会は必要なシステムとして存在していると僕は思っている。もちろん暗愚な貴族が希少な天賦珠玉を独占していたらそれは問題だけどね。お嬢様やエタン様、最初こそどうかと思ったけどルイ少年やミラ様、シャルロット様はしっかりと勉強をしているようだ。
権利には義務がつきもの……とはよく言ったものだよ。
その義務の最たる者が聖王で、聖王が唯一無二の頂点で、とてつもない権力を持っているわけだ。「聖王陛下が命じるのであれば仕方ない」と思わせるとんでもなく強い存在になっている。だからこそ「聖水色」なんていうシンボルにもこだわっているのだろうし。

「祭壇管理庁を所管するロズィエ家にいるからこそ、ルイ様も天賦珠玉をもっと市井に流してもいいとお考えのようよ」
「あれ。ロズィエ家が祭壇管理庁のトップなんですか？」
「当主様がそうだと聞いたわ」

じゃあ、伯爵の上司がルイ少年のお父さんか。
これ、ルイ少年に求婚されたら伯爵は断れないんじゃないかな……いや、所属が必要だから入っているだけで実際に上下関係なんてないのかな？

（いやぁ、しかし、６大公爵家を取り込むとは……末恐ろしい）

ふと気づいて僕はたずねた。

「そう言えばルイ様にご兄弟は？」

「弟と妹がたくさんいると言っていたのだわ」

おっとぉ、跡取り息子かよ……。

大丈夫かなぁ。まあ、そこは僕が心配することじゃないか。

絶対どこかで伯爵の横槍が入る気がしてならないよ。

「……レイジ。あの、ね、３日後にはわたくしは天賦珠玉をいただくわ」

なんだかもじもじしながらお嬢様が言う。

「そうですね。おめでとうございます」

よくわからないその態度に、首をかしげながらも僕はとりあえず祝福しておく。

きっとどこの貴族家も、その話で盛り上がっているんだろうな。

「ねぇ、パパ～、なんの天賦珠玉をくれるの？」「ははは、ナイショにしておかなきゃいけない決まりなんだよ」「やだよ、教えてよ～」「まだダメだって」――みたいな。１２歳だからもっと大人びてるか。

とはいえ伯爵だって、顔には出さないけどお嬢様をめちゃくちゃ大事にしてるから、きっととんでもないお金を使って用意していると思うんだよね。

「お父様がくださるのは、きっと希少性の高い、さらには『貴族』

が使うにふさわしいようなものだと思うの」
「ええ。スィリーズ伯爵は、きっとすばらしいものをご用意されていることでしょう」
「だからね」
「はい」
「レイジには……わたくしがあげるのだわ」
「……え？」

僕に、あげる？　なにを？
――まさか、天賦珠玉を？

「わたくしがあなたにふさわしい、天賦珠玉を与えるのよ！　喜びなさい！」
「――――」

あ、ああ～、そういうことか。お嬢様、僕に「プレゼント」をしたいと。
だからこんなに恥ずかしがってるのね。もじもじしてるのね。
僕は――あいにく１６歳＋こっちの世界でさらに４年も経験しているので２０歳くらいの精神年齢ではあるのだけれど、なんだかお嬢様を見てほっこりした気持ちになった。

「ありがたき幸せです、お嬢様」
「……ほんとにうれしがってる？」
「もちろん」

耳を赤くしたお嬢様が、うかがうようにこちらをチラ見するので、僕はにっこりと微笑んだ。

「そ。期待していていいのだわ」

お嬢様は改めて僕から視線を外し、そっぽを向きながらも――うれしくてたまらないような、そんな顔だった。

28

お嬢様への天賦珠玉の授与式が2日後へと迫っていたけれど、クルヴシュラト様の毒殺未遂事件については一向に進展がなかったようだ。

授与式のために集まっている貴族たちは当然のことながら「新芽と新月の晩餐会」から1カ月もの間、聖王都に滞在を余儀なくされている。これ以上の引き延ばしはできないので、授与式は予定通り行われる――というように伯爵から連絡があった。

とはいえ、

（――雨か……）

お嬢様が僕に、天賦珠玉をあげるという約束をしてくれた日の夜から雨が降り始めていた。明後日の授与式には晴れればいいのだけれど。

授与式は、晩餐会とは装いが違うけれど、同等、あるいはそれ以上に力を入れて着飾って出席するのが「貴族の義務」であるというので朝からお嬢様はメイド長や、伯爵の遠縁に当たるおばさま方とともにドレスや装飾品、髪型についての検討会を行っている。

「着いたぞ、降りよう」

「はい」

僕は僕で、スィリーズ家騎士隊長のマクシムさんとともに、授与式当日の護衛に関する打ち合わせで第1聖区にやってきている。このエリアに入るのは初めてだ。昼だというのに分厚い雨雲が広がっていて、薄暗いのが残念だけれど。

第1聖区は国の中枢機関が集まっている場所だ。道は広くて、キッチリと切られてはめ込まれた石畳にはゴミひとつ落ちていない。雨が、轍で磨り減った石畳に跳ねている。

僕らが向かったのは「祭壇管理庁」の建物だった。白の石材による3階建ての建築物で、入口には大きな庇が出ており、馬車を降りた僕らは先に到着している各家の護衛たちの後ろに着いた。

（みんな結構な年齢だなぁ）

若くても20代後半くらいか、ほとんどは40を超えているだろう。騎士らしい、動きやすい制服に腰には剣を吊っている。稀にショートロッドを持っている人もいるので魔法使いもいるようだ。

男女や人種はまちまちであるあたり、クルヴァーン聖王国の多様性がうかがわれる。

僕みたいな10代はまずいない——人種によっては見た目と年齢が全然違ったりするのでなんとも言えないところはあるけどね。

「——これはこれは、グイネ子爵家も？　今年は授与式の対象ではないでしょう？」

「——ええ、今年は聖王子様がいらっしゃるので、時間を都合しましてな」

「——そういった貴族家が多いようですな。1月の猶予があったおかげで、国中から高貴な方々がいらっしゃる。この人出は第1聖王子様のころよりも上でしょうな」

「——やはり晩餐会の……」

「——あまり大きな声では話されるな」

「——そうですな……それにしてもクルヴシュラト様はどのような天賦珠玉を得られるのかな」

各貴族家の騎士隊長たちは、「祭壇管理庁」の1階にある大会議

室へと通される。
　まるで宴会でもできそうなほどに広いそこには、１０を超える円卓が置かれてある。貴族位に応じた場所へとそれぞれがなんとなく座っているようで、僕はマクシムさんに連れられて、伯爵家の騎士たちが座るテーブルへとやってきた。

（どこもかしこも同じ話題だ）

　今年の授与式は近年まれに見るほどに貴族たちが聖王都に集まっている。
　晩餐会での毒殺未遂事件はすでにすべての貴族が知っている――むしろこのタイミングで聖王都に来ないと「なにか後ろ暗いところがあるのでは？」と疑われかねないのでこぞってやってきているらしい。
　そして、クルヴシュラト様に与えられるという天賦珠玉の話題である。

（特殊な天賦珠玉だ……という情報は出回っていないみたいだ。やっぱり伯爵が言ったとおり、「祭壇管理庁」の中でも限られた人しか知らないらしい）

　漏れ聞こえた情報の中で、現在の聖王は先代聖王から【即興演奏★★★★】という天賦珠玉をもらったらしい。今の聖王がこの天賦珠玉を使っているのかと言えば、絶対に使っていないだろう。あくまでも今回の授与式は、聖王としての威厳や貴族としての家格を示すためのものだ。先代聖王は、「芸術に明るい聖王になって欲しい」という思いをこめてその天賦珠玉を授けたのだとか。
　そしてクルヴシュラト様の兄姉である第１聖王女は【神聖魔法★★★★】を、第１聖王子は【二刀剣術★★★★】を授けられたという。「芸術に明るい聖王」にはならなかったようだ。

第1聖王女の【神聖魔法】というのがくせ者で、これが【人魔法】――他者の感情を左右したり自身の精神を強化するもの――などであれば「他者の上に立つ者」という意味になる。だけれど【神聖魔法】はアンデッドモンスターとの戦闘や、穢れた場所の浄化などに使われるものであり、言うなれば教会の上位者が持つようなもの。

つまり聖王から「お前は後継者から外す」というメッセージではないかと、皆思っているのだ。

……という知識はすべて伯爵からの受け売りだけどね。

ちなみに【火魔法】や【水魔法】といった八道魔法は青色の天賦珠玉である「魔法特性」に属し、【神聖魔法】や【人魔法】、【回復魔法】といった類は白の天賦珠玉「神秘特性」に属する。ひとまとめにして「神秘魔法」と呼ぶ人もいる。

（今の聖王や聖王子たちがどんなスキル構成なのかは誰も知らない……と）

まあ、国のトップになるのなら、実際に剣を持って戦うわけじゃないからもっとこう頭を使う系の天賦とか、身体が健康になるような天賦を選ぶよね。

「え、皆様。お集まりくださり誠にありがとうございます。え、静粛にお願いいたします」

壇上に上がった人物を見て、僕はぎくりとした。

そこにいたのは――巨大な白ウサギだったのだ。

いや、ウサギ系獣人……なのか？　巨大なウサギが祭祀帽をかぶり、マントを羽織っているようにしか見えないんだけど。

肩からベルトを掛けていて、そこに道具ポーチやロッドホルダーがあったりするのがマントの向こうに見えた。

その彼――彼？――は、抱えていた分厚い紙束を、お付きの人（

そちらはヒト種族）とともにサイドテーブルに載せると話し出した。

「わたくしめは『祭壇管理庁』特級祭司であります、エル＝グ＝ラルンでございます。え、お久しぶりでございます。え、初めましての方は初めまして」

ぺこりと頭を下げるエルさん。

（ユーチューバーの動画始めの挨拶みたい）

マクシムさんがこそっと教えてくれたところによると、祭司としては相当のベテランで、先代聖王の授与式のころにはすでに特級祭司だったという。何歳なんだよ、とみんなが思っているがそれは永遠の秘密なんだとか。

分厚い紙束から各家に1枚ずつ、明日の授与式のスケジュールと細かい決めごとが書かれた内容が配られた。印刷技術がいまいち進んでいないこの世界では【書術】なんていう技術革新を遅らせるために作ったのかと思ってしまう天賦も存在するのである。配られている数十枚の紙ならば、数時間で筆写してしまうのだろう。

（授与式の会場は、聖王宮に付随する「一天祭壇」前の祭祀場で行われると……げっ、入場できるのは授与される当人と、その両親、いない場合は後見人のみか）

会場の警備はすべて聖王騎士団第1隊、騎士団長率いる精鋭チームでのみ行うと。実のところ、聖王宮の警備は第1隊の管轄なので他に任せられないんだろう。まあ……聖王国の中心の中の中心なんだから、そんなところに誰か侵入してたら目も当てられないけど。

（……ん）

ふと目を上げると、エルさんのいる壇上に近い円卓――つまりいちばん高位の貴族家騎士がいる場所から視線を感じた。

（あれは、エタン様の護衛の？）

ハーフリングの護衛さんが僕をじっと見ていた。

「あ」

にこり、と微笑んで手を振ってくる。よくわからないのでぺこりと頭を下げておいた。護衛として見なければふつうに美人さんなので、手を振られて悪い気持ちなんてまったくしない。

そう言えば、あの護衛さんは見た目的に２０代前半なんだよな、きっと……若いなあ。僕が言うことじゃないか。

29

護衛の打ち合わせが終わると早々に僕らは引き上げた。急使が来て、伯爵に呼び出されたのが理由だ。

エタン様の護衛さんがどうして僕なんかに手を振ったのかが気になっていたけれども、打ち合わせの時間が終了するとともに向こうもすぐに引き上げていたので話しかけるチャンスもない。

屋敷に戻ると、伯爵が難しい顔をしていた。

「マクシム隊長、レイジさん。打ち合わせ、ご苦労様です」

「とんでもないことです。職務でございます」

伯爵の前でマクシムさんは跪くけれど、僕が突っ立ったままなのはいつものことだった。雇われてはいるけど忠誠を誓っているわけではないからね……。

今日の打ち合わせに関する報告をすると、僕だけ残るように言われてマクシムさんは部屋を出て行った。

珍しく執事長もいない……なんだろう。

「レイジさん、今日は急ぎ話しておかなければならないことが2つあります」

「急ぎ……明後日の授与式のことですか？」

「いえ。……関係はしていますが、直接的にはそうではありません」

「？」

わからないでいる僕に、伯爵は「審理の魔瞳」を一度光らせた。

「レイジさん、この目についてはどこまでご存じですか？」

「はい。魔力を通すと特殊な力を発揮する瞳、ですよね。血筋によって親から子に受け継がれるもので、親が持っていなくとも先祖返りで発現することもあります。ただ聖王家の『聖水色』のように先祖返りが発生しないものもある……と」
「そのとおりです。エヴァの魔瞳については私が話しましたね？」
「はい。『鼓舞の魔瞳』ですね」

目が合った者の戦闘意欲をかき立てるようなものだったはず。実際に使ったところを見たことはないのでどれほど効果があるのかは【森羅万象】でもわからない。
だけどお嬢様なら、そんな魔瞳を使わなくとも男どもの戦闘意欲をかき立てることくらい朝飯前な気がするね……あと数年経って美人に成長したらさ。

「その魔瞳がどうしました？」
「先ほど発動しました」
「発動……前からできましたよね」
「できることはできましたが、効果は微弱で、さらには魔力を大きく消耗するものだったんです。というのも、さる高名な封印術師に依頼して魔瞳を封印しておりましたから」
「封印？」

どういうことだろう、初耳だ。【森羅万象】ならばその封印くらいわかりそうなものだけれど――僕は何度もお嬢様の目を見てきたわけだし。
いや、ひょっとしたら目には封印の術式を掛けていないのかもしれない。体内の魔力供給部分とかだったら、かなり慎重に見なければ【森羅万象】だってわからないだろう。

「……エヴァの母親については話したことがありませんでしたね」

伯爵が重苦しい口調で言う。――聞きたくないな、と正直に思った。このタイミングでお嬢様の母親の話なんて。

でも、きっとそれは必要なことなのだろう。伯爵はムダを最も嫌うから。僕が、今このタイミングで、お嬢様の母親の話を聞かなければならないと伯爵は判断したんだ。

「エヴァの魔力量は一般的なヒト種族と比べると極めて多いのです」

「え」

そうと感じたことはなかった。もちろんお嬢様が魔法を使っているのを見たわけではないのだけれど。

それでも、冒険者ギルドにいるような歴戦の魔法使いとか、聖王騎士団所属のベテラン魔法使いなんていう人たちは、漏れ出すほどの魔力を持っていて、それは【森羅万象】ではっきりと感じ取れる。

「その魔力は、生まれて間もないエヴァの魔瞳を起動させるには十分なものでした。制御できない魔力が魔瞳に流れた結果――彼女は最も近くにいた人間の、戦闘意欲をかき立ててしまった」

まさか――それは。

推測を口にしたくはなかった。この話の先にある、苦い結末につながることはわかりきっていたからだ。

「……お母様、ですか」

伯爵はうなずいた。今までに「報告会」で何度も伯爵とはふたりきりで話をしたことがあった――何度も伯爵がうなずく姿を見てきた。だけれど今日のそれは、見たことがないほどに疲れ切っていて、やりきれない怒りをたたえていて、そして悲しげだった。

「アデールは……妻は、『鼓舞の魔瞳』によって意識を失うほどに混乱し、診察に来た医師に殴りかかったのです。その際、赤ん坊だったエヴァを放り出してしまった。幸い医師は軽傷でしたが、エヴァは腕の骨を折ったのです」
「それは……不幸な事故でしたね」
「そう。事故です。誰が悪いわけでもありません。私のように魔瞳を持つ者は魔瞳からの影響を受けませんし、エヴァは魔力を使い切ったせいで気絶するように眠っていました。……ですが、妻は我に返ると取り乱しました」

伯爵は一回言葉を切り、それから――イヤなことは一気にすべて話してしまおうといわんばかりに言った。

「妻は立派な女性でした。ですから自分自身を許せず、屋敷を出て行ったのです」
「そんな……伯爵は呼び戻さなかったんですか？」
「何度も呼びましたよ。ですが、封印術によって彼女の魔瞳が安定したと言っても、戻ってくることはありませんでした」
「今回の天賦珠玉の授与式に呼ぶのはいかがですか」
「……それができればよかったのですが」

ああ、そういうことか――。
伯爵が力なく首を横に振ったので、僕は理解した。
もう、彼女はこの世にいないのだと。

「……実家に戻った妻は産後であったこともあり大きく体調を崩したようです。それから3年後に、亡くなりました。最後の最後までエヴァにしてしまった仕打ちを悔やんでいたようです。これならば貴族の力を使ってでも、無理矢理にでも呼び戻すべきでした――す

べては後の祭りでしたね」
「相手は家格が下の貴族家だったのですか？」
「いいえ。平民ですよ」

純粋な驚きが、僕を襲った。伯爵ほど完璧に貴族社会を渡り歩ける人が、平民の奥さんを持っていただなんて。

「私は平民の家へ貴族家の人員を差し向けることで起きる無用な混乱を避けたくて、アデールが自主的に戻ってくることを促していましたが、それが失敗だったんです。……エヴァには、妻の身分のことを話したことは一度もありませんでした。だからエヴァが『平民も貴族も平等な社会』なんて言い出したときには息が止まるかと思いましたよ。そんな社会であったのなら、アデールを救えたんじゃないか、と責められた気がしましてね……もちろんただの、思い過ごしですが……」

伯爵は笑った――こんなに寂しい笑顔を僕は見たことがなかった。

30

雨が窓を打っている。
重い沈黙があった。
でも、それに引きずられるわけにはいかない。

「……この話、お嬢様は」

伯爵はゆっくりと首を左右に振った。
知らないということか。それでいいと僕も思う。知ったところで無意味な罪悪感を植えつけるだけになってしまうし。

「今のお嬢様はどんなご様子ですか？」
「魔瞳が発動した結果、私の親族があてられてしまいましてね。ドレスの色で揉めていたところだったのでそばにいたメイド長に殴りかかったそうです」
「だ、大丈夫だったんですか」
「むろんです。メイド長はあれでも護身術の心得がありますからね。――ですが魔力を使い果たしたことと、いきなり豹変した人間に驚いたこととで、エヴァは寝込んでしまいました」

僕はホッとした。最悪の事態の中でもマシな部類の着地をしたらしい。

「では、お嬢様をどうしたらいいのでしょうか」
「封印はいずれ解けるときが来るとその術師は言っていました。それまでに魔力をコントロールできるようになればいいだろうと。ですが封印関連の技能者は非常に少なく、1日2日で探すことはでき

ません」

伯爵はテーブルの上に小さな革袋を置いた。こんもりとした球状のフォルムに、僕は見覚えがあった――とても。

「明後日の天賦珠玉授与式で、これを贈るつもりでした」

中から出てきたのは青色の光を――不思議なことに温かく感じられる光――たたえた天賦珠玉だった。その光は強く、戸外が雨のせいで薄暗いこともあって室内を明るく照らし出す。

そこに見える文字は【魔力操作★★★★】というもの。

「エヴァが魔力のコントロールに慣れてきたら星を落としていき、最終的にはなくても、あるいは星1つの【魔力操作】で済ませられるようになってもらうつもりです」

そうか。ちゃんと対応策はあったんだな……天賦珠玉で済むのなら伯爵の財力なら難しくないだろうし。星4つの【魔力操作】はかなりレアだとは思うけど。

そのとき僕は、ハッとする。

「……『新芽と新月の晩餐会』の翌日に授与式が行われていれば封印のことなんて気にする必要はなかったんですね」

だとしたら、それは……僕のせいだ。

「レイジさん、あなたはクルヴシュラト様の命を救ったのです。誰も責めたりはしませんよ。今日のことだって特にケガ人が出たわけではありません」

「しかし……」

「それでも気にしてしまうのでしたら、頼みがあります」

伯爵はにこりと微笑んだ――うわあ、いい笑顔だ。これは僕はうまく誘導されたな。

「授与式までに天賦珠玉を与えることは許されません。ですが、このままエヴァを放置はできないので、彼女の魔力を限界まで抜き出す魔道具を使います」

伯爵が執務机に置いたのは、銀色に、緑色の宝石が5つ埋め込まれたブレスレットだった。

「これがその？」

「はい。魔力を吸収し、吸収すると緑色が青色に変わっていきます。かなりの魔力容量があるので明日明後日ならば問題なく貯めておけるでしょう……が、問題はエヴァ本人です。魔力が欠乏するのは肉体的にキツイですからね」

「ああ……」

僕も魔力切れでぶっ倒れた経験があるのでよくわかる。

「ただでさえ緊張を強いられるこの時期に、肉体もつらいということになります。ですからレイジさんには彼女のそばにいてやって欲しいのです」

「それはもう、言われなくとも」

僕が即答すると、伯爵は首を横に振った。

「あなたが思っている以上に、エヴァはあなたを頼りとしているのですよ」

そう……なのかな？　それはうれしいような、気恥ずかしいような。

「わかりました。それではお嬢様の護衛に行きたいと思います」
「よろしくお願いします」

立ち上がり、部屋を出て行こうと思った僕はふと気がついた。

「そうだ。伯爵は2つ、僕に話すことがあるとおっしゃっていませんでしたか？」
「ああ――そうですね。忘れていました」

なんでもない、というような口調で伯爵は言った。

「クルヴシュラト様に授けられる天賦珠玉ですが、どうやら星7つ以上の可能性が濃厚です」
「へえ……」

なんですって？
7つ!?

「どうしました？　レイジさんがそれほど知りたい情報でしたか？」
「い、いえ、で、でも、7つなんて聞いたことがなくて……」
「私もありません。ですがそれはあなたが探している天賦珠玉ではないのでしょう？」
「それは――……はい、そうですね」
「レイジさんはなにかしらの天賦珠玉に心当たりがあって、その情報を知りたいのだと見受けられました。ですので、未知の星7つ以上の天賦珠玉については興味がないのだろうなと」

怖いなぁ。そこまで伯爵は考えているんだな。

「興味はありますよ。興味は」

「星7つ以上でも？」

「星7つ以上でも」

なんなら9つ以上でもいいよ。

「そうですか？　わかりました。ではくれぐれもエヴァのこと、よろしくお願いします」

「はい」

僕は一礼すると伯爵の部屋を出て、お嬢様の寝室へと向かった。

スィリーズ家の主治医によると、お嬢様はぐっすり眠っているということなので僕は室内に入る許可をもらってお嬢様のベッドサイドまでやってきた。

日中だというのに外は暗く、雨が窓ガラスを伝って落ちていく。枕元の小さな魔導ランプが優しい光を室内に投げていた。

小さなイスを持ってきてベッドの横に腰を下ろした。ほんとうならこんなところにまで護衛の僕が来ていいものではないのだけれど、伯爵が許可をしていたようで、部屋の隅にはメイドさんが2人いるけれども僕は眠っているお嬢様と向き合った。

（……まさかこんな形で、お嬢様のお母様について知ることになるとは思わなかったな）

もしも過去を知ったら、お嬢様はひどく胸を痛めるだろう。自分の魔瞳が実の母を殺したとすら考えるかもしれない――そんなことはけっしてないのに。

（僕が寄り添うことでお嬢様の力になれるのなら、僕は喜んで力を貸そう。もちろんラルクやルルシャさんを捜さなければいけないけど、お嬢様が【魔力操作】に慣れるまでいっしょに過ごす程度なら問題ないはずだ。僕の【森羅万象】があればアドバイスができるかもしれないし）

僕の手には伯爵から渡された魔道具――アクセサリのようにも見えるブレスレットがあった。【森羅万象】を通して見ると、手に接する面に多くの魔術式が書き込まれているのが見える。

僕にはその術式が、お嬢様を縛る鎖のように見えたのだった。

（……伯爵があそこまでプライベートな事情を話してくれたのは、僕を買ってるから……だけでなく、同情心を惹こうとしているんだよなあ。あの人、そういうところあるもんなあ）

もちろん、そんなことを聞いたら「私はレイジさんを信用しているから話すのです。そのようにとられるとは心外です」くらいは眉ひとつ動かさずに言うのだろうけど。

31

「……ん、ここは……」

小さな声が聞こえた。

「お目覚めですか、お嬢様！」

「ちょっと待ってください」

やってくるメイドさんたちを僕は手で制した――魔道具を見せながら。

「……レイジ？」

【森羅万象】で見ると、魔力は欠乏状態からわずかに回復していた。それ以外は健康のようだ。

「眠りに落ちる前、なにがあったか覚えていますか？」

「……」

しばらくの沈黙の後、お嬢様はうなずいた。

「あれがお嬢様の魔瞳です。今は魔力が足りていないので発動はしませんが、発動を抑えるためにこの魔道具をつけていただきたいです」

「……そのブレスレットを？　レイジがわたくしにくれるの？」

「僕ではなく伯爵からの贈り物ですよ？　僕が贈るならもっと安いものになりますし、デザインももっとかわいいものにします」

これはブレスレットと呼ぶには少々無骨なデザインではあった。

「……ふふ、いつかレイジからプレゼントされてみたいものだわ」

「お嬢様におねだりされてはかないませんね。考えておきましょう」

「……」

「……お嬢様、どうしました？」

僕がたずねると、

「レイジがやけに優しいのだわ。……もしかしてわたくし、とてもひどい状態だったの？」

鋭いなぁ、親子して。

「いいえ、僕がいない間に起きたことなので、ちょっとだけ良心の呵責を感じているだけです。――手を」

僕はお嬢様の左手に魔道具を付けた。

「……ん、んん」

お嬢様が顔をしかめる。

「気持ち悪いですか？」

「ええ、少し……でもこれくらいなら大丈夫――」

僕はお嬢様の手からブレスレットを取り外し、メイドさんたちに

声を掛ける。

「どなたか裁縫に使う針を持ってきてください」

「……針を？　レイジ、どうするの？」

「調整します」

ややあってメイドさんが持ってきてくれた針は、１０センチ強の長い針だった。僕は魔導ランプの下にブレスレットを置き、その裏面をじっと見つめる。

（頼むぞ、【森羅万象】に【手先が器用】）

針を裏面に当てると、力を込めてギイイとひっかいた。

「レイジ！？　それは魔道具なのだわ！　そんなことをしたら壊れて――」

「問題ありません。できました」

お嬢様に残る魔力量をわずかに増やす調整は、さほど難しいことではなかった。お嬢様は恐る恐るといったふうに左手を差し出し、僕はそこにブレスレットをつける。

「……どうですか？」

「さっきよりもずっと楽なのだわ！」

お嬢様の喜び方が大きい。それはきっと――さっきの状態だとかなり身体に負荷があったのだろうと思われる。

（やせ我慢する人だもんなぁ、お嬢様……）

とりあえずこれで、授与式を乗り越えよう。

＊　天賦珠玉授与式前日：ロズィエ家邸宅　＊

恋する少年の心は浮き立っていた――それも無理はない。恋する相手と数日と置かずに明日また会えるからだ。

「ご機嫌ですね、ルイ様は」

ロズィエ家の邸宅は6大公爵家と同じ並びにあるのだが、大きさで言えばダントツだった。それはロズィエ家が与えられている公爵領は聖王都クルヴァーニュと隣接しており、ロズィエ家の人間は気軽に往復するために、邸宅が大きい方がなにかと都合がよかったからだ。

そんな邸宅ではあったけれど、それでも中に入れる人間は限られている。招かれる貴族といってもごく一握りで、ロズィエ家主催のお茶会は邸宅とは別棟で行われるからだ。

中にいるのはロズィエ本家の人間はもちろん、深い縁故のある人物――聖王騎士団第2隊隊長のアルテュールがそうだった。

「わかるかい、アルテュール」

ルイは本家で、アルテュールは分家なので、相手がいくら年上でいくら聖王騎士団の隊長であろうと、ルイのほうが立場は上だった。

「当てましょうか？　エヴァ嬢のことをお考えなのでしょう」

「――ッ!?　そ、そんなにわかりやすかったか？」
「そりゃもう」
やれやれとばかりにアルテュールが両手を挙げる。
「ルイ様が望めば、スィリーズ伯爵も文句は言わないでしょう」
「……」
「ルイ様？」
窓の外と同じ、雨雲のように少年の表情は暗くなった。
「エヴァ嬢は、俺よりもずっと賢い」
「ルイ様も勉強なさればよろしいでしょう。あなたには才能がある」
「それだけではない……聖王陛下がおっしゃっていた」
――今日はお前の妃を決める場でもあるとあらかじめ言っておいただろう？
いくら6大公爵家であっても、聖王子が相手であればかなうはずもない。
あの日以来、クルヴシュラトは聖王宮から出ることを許されていないようで、エヴァとは会っていないはず――その間に自分が彼女との仲を進展させたい、とルイは焦っているところがあった。
「聖王陛下が、なんですって？」
「――いや、いいんだ」
クルヴシュラトはなにも思っていないかもしれない。
恋敵ではないのかもしれない。
だとしたらひとりで勝手にやきもきしていることになる――ルイ

は、公爵家の人間として弱みを見せてはならないと教えられてきたこともあり、アルテュールにはそれ以上言わなかった。

「大体な、アルテュール。お前が悪いんだぞ。なにが『意中の女性には強気で行け』だ。最初の印象は最悪だったとエヴァ嬢に言われたんだからな」

「それはさすがに相手を見てくださいよ。スィリーズ家ですよ。『冷血卿』のお嬢様にそんな強気で行くなんて思いもしませんでしたよ。あれがエヴァ嬢ではなくシャルロット嬢相手だったら、今ごろ結婚式の日取りを話し合ってるころですよ」

「……そんなにスィリーズ伯爵は怖いのか？」

「話は聞いているでしょう？」

ルイはうなずいた。

だが貴族社会の常で、「話は半分で聞け」と言われて育てられてきた。

「すごいんですよ、彼が処刑台に送り込んだ貴族の数は歴代最高でしょうね」

「そんなに……」

「喜んでるのは予算庁の役人だけです。貴族に払う俸給が大幅に減りましたからね。他の貴族は次に狙われるのは自分かと戦々恐々としていますよ。大丈夫なのは辺境伯以上の――もちろんロズィエ家も含む貴族家だけです」

「どうして我らは問題ないんだ？　スィリーズ伯爵とて、難癖をつけているわけではないんだろ？」

「それはまあ……。でも伯爵の力では、調査できる範囲が限られていますからね」

「……」

「どうしました、ルイ様。ムスッとした顔をして」

「……貴族位によって不正が免れている可能性があるというのは、公平じゃないな」

ほう、とアルテュールの片眉が上がる。

「それはエヴァ嬢の受け売りで？」

「ち、違う。俺が考えたことだ」

「まあ、いいじゃありませんか……なにもかも急には変わりませんよ。スィリーズ伯爵が汚職貴族を処刑したことだって、急激な変化なんです」

「……そう、なのか？　だがお前の言い方だと、高位の貴族が黒幕だった場合は、多くの低位貴族が死んでもただの『トカゲの尻尾切り』に過ぎないということだろう」

ふむ、とアルテュールが今度は唸る――うちのお坊ちゃまはだいぶ目の付け所が貴族らしくなってきたな、と。

（扱いづらいのは、面倒だな）

アルテュールは笑顔を浮かべた。

「であれば、ルイ様が力を持てばよろしいのです」

「……俺が？」

「はい。ルイ様は公爵家。あなた様であれば多くの改革をなせるでしょう」

「それは確かに……」

「力というのは権力だけではありません。文官を従えるには知恵が必要ですが、これはあなた様が文官のトップにつけば簡単です。一方で武官は、上官がいくら偉くとも上官自身に武力がなければ従いません。ルイ様、剣の稽古をしていますか？」

「うっ、さ、最近は少し……やっていなかったな」
「それはいけません。今日はあいにくの雨ですが、晴れてからは私が稽古をつけましょう。剣の腕が立つと評判になれば武官からの見る目も変わります」
「なるほど、武力か」
「それは、エヴァ嬢にはできず、ルイ様にしかできないことです。剣を大事になさってください。ここは『剣のロズィエ家』なのですから」
「わかったよ、アルテュール」

ぎゅう、と拳を握りしめるルイを見て、うんうんとアルテュールはうなずいた――ところへ、部屋のドアが開いた。

「――アルテュール殿、ここにいたのか」
「これは、ロズィエ公爵」

ソファに座っていたアルテュールは、ドアが開いて公爵が入ってくると大急ぎで起立して服の裾を伸ばした。
気の強そうなルイの面影がある公爵は、でっぷりとしてはいるが肥満というほどではなく、富裕層の年相応の肥え方をしていた。
オールバックにした髪には白髪が交じっており、まだ４０代後半ながら貫禄が出ている。

（……ん？　だいぶ顔色が悪いな）

すぐにアルテュールが気がつくほどに公爵の顔は青ざめている。

「ルイ。アルテュール殿を借りるぞ。明日の授与式の警備について話がある」
「わかりました、父上」

「ではこちらへ」
「はっ」

公爵に手招きされ、アルテュールは廊下へと出る。
――おかしいな、とすぐに感じた。

（明日の警備は騎士団長の第1隊の管轄だ。私が出る幕などないのだが……それは公爵閣下の顔色の悪さとなにか関係が？）

おかしいときにおかしいとすぐに感じ取れるからこそ、アルテュールは第2隊長にまで上り詰めることができたのだった。

32

＊　天賦珠玉授与式前日：エベーニュ家邸宅　＊

エタンの護衛であるレレノアは、主であるエタンのトレーニングを眺めていた。邸宅内にある訓練場で、雨でも剣の稽古や筋力トレーニングが可能になっている。

「――よし、ここまでとしましょう」

「ハァ、ハァッ、は、はい、ありがとう……」

汗だくのエタンに対して、稽古の相手は獣人で、身長は2メートル近い。ハーフリングは大陸全体で見ると少数なので、ハーフリングと稽古をしていた場合、実戦では勝手が違うことが多くなってしまう。体格差がある相手との戦い方を学ぶことが稽古の目的でもあった。

タオルで顔を拭いているエタンに、水差しの水を注いでレレノアは差し出した。銀製のコップを受け取ったエタンは一気にそれをあおると、

「ふぅ――」

と気持ちよさそうに息を吐いた。

「精が出ますね、エタン様」

レレノアは、主であるエタンが相手の場合は敬語を崩さない。

「ええ。私もいよいよ天賦珠玉をもらえますからね」

「どんな天賦珠玉なんでしょうねえ。私も楽しみですよ……まだ当主様からは聞いていないのですか？」

とそこへ、

「――それは言うわけにはいかんだろうな」

甲高い声が割って入った。

その声の主が誰なのか気がついたレレノアは、すぐにその場に膝をついた。

「これは、当主様……」

きらびやかな衣服も、ハーフリングという小柄な身体にはあまり似合っていない。それでも外向きのアピールできちんと着込まなければいけないのが貴族だった。

エタン同様、飴色の髪の毛を長く伸ばし、複雑に編んでいる。いくつもの輝きはビーズではなく本物の宝石だ。

顔は、ヒト種族で言うところの２０代くらいの童顔なのだが、ちょびひげが生えているのがなんともまたアンバランスではあった。

当主であるエベーニュ公は、エタンとともに訓練場の長椅子に腰を下ろした。ぞろぞろとお付きの人や護衛たちもやってきたので周囲が急に手狭に感じられる――それでもまだ、全員がハーフリングなので窮屈さは多少マシなのだが。

「お父様、今日はお早いお戻りですね」

「ん？　うん……そうだな。ロズィエ家が会議をすっぽかしたせい

で時間がぽっかりと空いてしまったんだよ。夕方からまた別の会議があるから登城するがな」
「ロズィエ家が？　お父様との会議を投げ出すというのはかなり珍しいことなのではありませんか」
「うん……」
むむむ、と眉根を寄せて考えるようにしていたエベーニュ公は、
「なんだかね、不穏なものを感じるんだよ……。ルシエル公爵家の『剣聖』が遠征中だというのがなんとも間が悪いね」
と言った。
それは公爵家当主が言うにはあいまいで、具体的なものではなかったけれども誰もそれを否定しない。自然とともに生きるハーフリングたちは、己の直感というものをとても大事にする。
とはいえ、「剣聖」不在であることに言及するほど不穏なにかがあるというのか――。
「『一天祭壇』に、なにかがあったのかもしれないね……」
聞いていた誰しもがハッとする。
クルヴァーン聖王国の中枢にして、土台。聖王家と同じく――いや、場合によっては聖王家以上に――絶対不可侵の存在。
それが「一天祭壇」だ。
「……お父様、ロズィエ公爵は『祭壇管理庁』の長官でいらっしゃいますね」
「彼が我を失うとしたら、それくらいしかないだろう。少なくとも他国から侵略を受けたとしても６大公爵の誰ひとりとして取り乱したりはしないのだから」

＊　天賦珠玉授与式前日：聖王宮　＊

「――こんなことがあってたまるかッ！！」

大音声は、美しい青色に染められた窓ガラスを震わせた。

天然石を切り出して、磨きに磨き込んだテーブルはどっしりとした重厚感と、高級感を兼ね備えていた。だがそこに載せられてあったのは真新しい植物紙数枚の報告書と、羊皮紙による古めかしい書物、それに木簡による巻物が数点だ。

聖王が手を振ると、報告書が宙に舞った。ついでに吹っ飛んだ分厚い書物はテーブルを滑って端から飛びだしていったのだが――祭祀服を着た神官が悲鳴を上げながら飛びついてキャッチし、事なきを得た。

「え、聖王陛下。あの書物は極めて貴重なものでございますゆえ、乱暴に扱いませんよう……」

「うるせえ、ウサ公がッ！　てめえはここの祭司だろうが！　なんとかしろや！」

「え、ですから、特級祭司として申し上げておりますとおり、かの天賦珠玉の解析は完了し――」

「聞きたくねえ！」

聖王はイスで身体を小さくすると、頭を抱えて震えだした。大の大人が――それも一国のトップがこれほどまでに無防備に、感情的に振る舞っているとは国民の誰もが思わないだろう。

聖王宮は、聖王が住む場所として建てられてあるのだが、一方で「一天祭壇」を祀るための場所でもあり、護持するための場所でもある。そのために宮殿全体が、神殿のような造りになっている。

「神霊を呼び込む」という目的でドアや窓は一切なく、開放的だ。寝室だけは暖かく造られてあったが、その他の場所――たとえば今、特級祭司のエルがいる応接の間などは、廊下から丸見えとなっていた。

とはいえ聖王宮に人気は少なく、庭師や掃除係がいたとしても気配を殺して聖王たちの目に触れないよう働くことを心がけているし、彼らは契約魔術によって守秘義務を課せられているので問題はない。

エルは、感情をうかがわせない巨大なウサギは、震える聖王へと近寄るとその腕にそっと触れた。フサフサした毛の温かさを感じたのか聖王が涙に濡れた目をエルへと向ける。

「……あの天賦珠玉が、今代の聖王陛下の治世時に出現したというのは、え、僭越ながら『運命』ではないかと存じます。え、この難局を乗り越えしとき、先代、先々代の聖王陛下が呼ばれることもなかった『英雄』の文字が、あなた様の名に贈られることでしょう」

「エル……」

聖王は力なく、その手を押しのけた。

「……俺は聖王としてやらなければならねえんだな……？」

「え、そのとおりでございます」

聖王は力なく、目元をぬぐった。

「……俺は人でなしのクソ野郎だな……？」

「え、誰もそのようには思いますまい。国民のひとりに至るまで、誰も」

聖王は力なく、首を横に振った。

「……俺は、英雄になんざなりたくねえんだよ……」

それにはエルも、答えなかった。

「一月前は……ただの浮かれた父親だったってのによ」

沈黙が続いた。エルも、ついてきている数人の祭司もじっと息を殺していた。

「――エル」

聖王が立ち上がった。

「今から明日の式場に向かう。最終確認だ。付き合え」

「はっ」

そこには、大国クルヴァーンを率いる唯一無二の国王、聖王としての姿だけがあった。先ほどまで見せていた情けない姿はなりを潜め、威厳があり、強さと優しさを兼ね備えた王としての聖王がいたのだった。

例年にない厳重な警戒態勢と、例年にない多くの貴族が集まった聖王都クルヴァーニュ。

雨は夜半に降り止んだ。

そして、天賦珠玉授与式の当日がやってくる。

33（前書き）

ランキングの日間、週間、月間のすべてで1位で目を疑いました。
なにげに週間1位は初めて（だと思います）ですね……。
応援ありがとうございます！　引き続きがんばりますので、お付き合いのほどお願いいたします。

33

授与式の当日となった。

この日は、それまでの雨が止んでウソのように快晴だ。

昨日一日、お嬢様はお屋敷に籠もっていた。ブレスレットをつけていても健康そうに振る舞うお嬢様を見て伯爵は目を細めたが――僕はなにも言わなかった。おそらく僕がブレスレットをいじったことはメイドさんからの報告が上がっていると思うけれど、それについては聞かなかったことにしているみたいだ。結果オーライということなのだろう。

「こんなに朝早くから始まってるんですね」

日の出の1時間前に起こされた僕はあくびをかみ殺していた――日の出と言っても雲のせいでいつ日が出たかもわからないのだけれど。

僕の問いに、メイド長は、

「クルヴァーン聖王国は聖王陛下主催の神事が多く執り行われます。神事はとにかく時間が掛かるものです。これからはお嬢様も参加されることになるので、レイジさんも慣れてもらわなければなりませんよ」

「うぅむ……」

慣れたくない。というか慣れるほど参加したくない。

「新芽と新月の晩餐会」のようなイベントと、今回の授与式のような神事はまったく種類が異なるもののようだ。

天賦珠玉は神からの贈り物であり、人民を代表して聖王が受け取

る。聖王はそれを人民に配布する――その人民を代表しているのが貴族であるということなのだ。

クルヴァーン聖王国の建国は1千年以上さかのぼる。建国してからの風習だということで、今の世の中には合わないような古式ゆかしい儀式が残っている。

「おはようございます、お嬢様――」

日の出前から湯浴みを3回していたというお嬢様が日の出とともに出てきた。「日が出たときには身体をすべてきれいにしておかなければいけない」みたいなルールがあるようだ。僕ですらお湯で身体を拭いて、身だしなみを整えていたくらいだから。

お嬢様が着ている服は、目にも鮮やかな淡い黄緑――若芽色をしていた。

大きな一枚布を合わせただけのシンプルな服に見える。そう、ギリシャ神話の彫刻なんかが着ているキトンだ。ただしっかりした布の質感と、腰に巻いている茶色い革紐の光沢は、「ああ、すごくお金掛かってるんだろうな……」と相変わらず思わせてくれる。

その上に空色のショールを羽織っているお嬢様は、僕の前世の知識も相まって、神話の世界からそっと抜け出してきた登場人物のようにも見えた。

「……着慣れないのだわ」

「よくお似合いですよ」

「ほんとうはアクセサリを身につけてはいけないらしいのだけれど、腕の魔道具については特別に許可を得たんですって」

飾り気のないスタイルは、これもまた伝統のものなのだろう。「飾り気がないからこそ、どのような布地、染め方をするのかが腕の見せ所なんですよ」とメイド長が鼻息を荒くしている。

……そこに「鼓舞の魔瞳」が掛かったら、そりゃ暴力沙汰（ケンカ）になるんでしょうねぇ……。

その後、髪を結い上げられたお嬢様は、ほっそりとしたうなじを見せる、まさに少女から大人へ少しずつ階段を上っているのを見せつけるかのような姿となった。

「行くのだわ、レイジ」

「はっ」

まだ午前8時にもならない時間だというのに、僕はお嬢様とともにお屋敷を出た。伯爵はとっくに聖王宮入りしているというのだから、今日という日がいかに特別なのかがわかる。

馬車に乗って第3聖区を走っていくと、いつもよりも多くの馬車の音を聞いた。お嬢様が「寒い」と言うので馬車の窓を閉め切っていたので、どこの家の馬車なのかはわからない。

「お嬢様、体調はいかがですか」

「今のところは問題ないわ。でも……一日がかりの神事だというでしょう？　ちょっと不安があるのだわ」

「今日一日の辛抱です」

「ええ……そう思って乗り切るしかないのね。……でも、あなたが魔道具を調整してくれたからこれでもだいぶ楽なのよ……」

馬車がゴトンと石に乗り上げ、僕はお嬢様の言葉を半分聞きそびれた。

「え？　なんとおっしゃいました？」

「なんでもないのだわ。――レイジ、わたくしが出てくるまで、いい子にして待っているのよ」

お嬢様は、まるで母親が子どもに諭すようにそう言った。

僕は、お嬢様を乗せた馬車が城門を通っていくのを見つめていた。昨晩までの雨で濡れた石畳には、ところどころ水が溜まっている。今日の天気ならば昼までには石畳もほとんど乾くだろう。

馬車とて、聖王宮のある区画に入ってすぐの停車場で止められ、お嬢様はそこから歩いて会場へと向かうようだ。

（大丈夫かな……）

不安は不安だけれど、中には伯爵もいるので僕はおとなしく待つしかない。

第1聖区と聖王宮を隔てる城壁は、これまでのどの城壁よりも低く、そして薄いようだった。高さは3メートルほどしかないだろう。城壁はくすんだ金色だったのも、これまでの城壁とは明らかに違う。さらにはそこに、絵が描かれてあるのだ。

（……竜と人が肩を並べて歩いてる……いや、獣人みたいにも見えるけど……）

竜は、僕が以前遭遇したことのある竜とよく似ていた。人のほうは、耳が長いところがエルフっぽさを残しつつ、そのくせ尻尾が生えている。

絵は、壁画のように単純化されているし、開かれているせいでナナメからしか見えなくて、その種族がなにか、といった細かいところはよくわからなかった。

城門は馬車が1台ギリギリ通れる程度で、1台馬車が入ると、向こうから1台が出てくるような形だった。つまるところ今日の授与

式に参加する貴族が多すぎて渋滞を起こしているのである。

「ええい、ワシは降りるぞ。いちいち待っとれんわ」

「んもー、お父様、強引よ！」

渋滞を待ちきれず、後方で馬車を降りた人物があった。

貴族特有のきらびやかな服は着ているものの、中の人物は貴族らしからぬ風体だった。

たてがみのような髪は赤く、長く、後ろに垂れている。信じられないくらい分厚い胸板の持ち主で、軽自動車くらい持ち上げそうな筋肉が衣服の向こうに感じられる。

日焼けした顔に、わしゃわしゃの眉毛の下、獣のように鋭い眼光。頬にはバッテンの傷痕があった。どう見ても尋常な人生を送ってきていない御方である。

馬車から降りたその人は、僕に視線を止めた。

「――ほう、あのときの小僧か」

いえ、当方はあなた様のように凶悪なお顔は存じ上げませんが……。

「お父様、ったら、んもー！」

その後に降りてきた人物は、誰あろう、ミラ様だった。

ということは……この人はミュール辺境伯！？　っかー、なるほどー、そりゃわからないよねー、素顔見たのが初めてだからねー。

そんなどうでもいいことを思いつつ、僕は殊勲に頭を垂れて歩道を横にずれた。

のしのしという足音が近づいてくるが、ミラ様が「お父様、歩いてるのなんて私たちだけじゃないの。恥ずかしいよ」と言っている

が辺境伯はすべて無視している。強い。
デカイ靴と分厚い太ももが僕の前で止まった。
「お主、スィリーズ家の護衛だな？」
「……はっ」
「顔を見せてくれ」
言われて僕は顔を上げた。
……おお、ミラ様は薄紅色の服だ。様式はお嬢様と同じだなぁ…
…素朴で可愛らしい。
「どうだ。辺境伯領に来る気はないか？」
「……と、おっしゃいますと」
「そのままの意味だ。聖王都など退屈だろう。我が領地は面白いぞ。
腕利きも多いし、モンスターも凶暴だ。戦争だって起きるかもしれ
ん。腕試しには絶好の場所だ」
えーっと。
これはスカウトされてるんですかね……？　まったく食指が動か
ないのですが……？
「申し訳ありませんが、自分には荷が重いようです」
「そうか？　まあ、ここに残るのもそれはそれで構わぬだろう……
今日はなんだか血が騒ぐ」
血が騒ぐ？　こんなにいい天気なのになあ……。
「あ、エヴァ様の護衛さん、おはようございます！」
「おはようございます、ミラ様。本日のお召し物も、とてもよくお
似合いですね」

ミラ様は最初こそお嬢様相手にテンパっていたけれど、手紙の交換を始め、何度か会ううちにかなり気安い間柄になったようだ。

「うふふ……これ、お母様が授与式に着たときのものらしいんですよ。すごいでしょう」

「それはそれは。きっとお喜びでしょう」

「うん！　今は療養でお屋敷にいるけど、すごくウキウキでこれを出してくれたのよ」

「――ミラ、行くぞ」

「あ、お父様、待ってよ！　んもー、自分勝手なんだよね。じゃあね！」

小さく手を振ってミラ様は辺境伯について行かれた。ウチのお嬢様も、ミラ様のお母様のことを言っていたな……身体があまりよくなくて辺境伯領から出られないとかなんとか。

それでも、実の娘が自分と同じ服を着て、晴れの舞台に臨むのならば――それはきっと晴れ晴れしいことなんだろうな。

今日の天気みたいに。

（……とはいえ、警戒はしておこう。ゼリィさんからの連絡だと、街に変化はないみたいだから、きっと何かあるとしたら第３聖区より内側……貴族たちの動向だ）

辺境伯の言ったことが少しだけ気になった。

クルヴシュラト様の毒殺未遂犯の黒幕もわからない今、警戒するに越したことはないだろう。

貴族の馬車と、護衛の騎馬とでごった返す第１聖区を眺めながら僕はそう思った。

34

＊　エヴァ＝スィリーズ　＊

聖王宮に入るのは初めてだったし、第1聖区までとは明らかに違う雰囲気にエヴァは圧倒された。建物の数は極限まで少なく、ひとつひとつの間には緑がこんもりと茂っている。まるで森に迷い込んだかのような感覚さえあった。

湧き水を流している小川があちこちにあり、それを渡るための仰々しいまでにしっかりとした石橋を渡っていく。

今日、天賦珠玉を授与される12歳の子女が集められた控え室は、木々を縫って進んだ先の四阿（あずまや）だった。

「エヴァ嬢！」

聖王宮に勤める神官に連れられてやってきたエヴァに気がついたのはルイだ。彼もエヴァと似たり寄ったりの服装ではあったが、使われている布地が明るい黄色であることと、腰には宝剣が吊ってあることが違う。男子は宝剣を持ち込むことが許されており、剣は神事でも使用されるとのことだ。

四阿とは言ってもそこそこに広く、長椅子がいくつも置かれ、知り合い同士らしい少年少女が集まって会話をしていた。

「ルイ様、おはようございますわ」

「おはよう。――そ、その、お前はなにを着ても似合うな」

「ありがとうございます」

エヴァは優雅に一礼した。
初対面のときこそ無礼極まりない態度だったルイも、2回目に会うときにはぶっきらぼうながらそれなりに丁寧な態度になっていた。
「そのブレスレットは……？　装飾品としては少々、無骨なようだが」
ブレスレットの宝石は、5つある緑色の宝石のうち、2つが青くなっていた。あと3つぶんの吸収余力がある。
「特別に許可を得てつけさせていただいておりますわ。ところで、他の皆様は――」
「なあ、ちょっと話さないか」
エタンやシャルロットはすでに来ていたが、彼らが相手をしていたのは聖王子クルヴシュラトだった。クルヴシュラトも今日、天賦珠玉を与えられるので同じ控え室にいるということだろう。
クルヴシュラトの周囲にはエタン、シャルロット以外にも多くの子女が集まっているのだが、エヴァが入ってきたことに気づいたらしい彼は「あ」と口を開けたが、ルイに連れられ四阿の隅にエヴァが向かってしまうともの言いたげな口を閉ざした。
「――ルイ様、わたくし、クルヴシュラト様にご挨拶を……」
「それは、後でもいいじゃないか」
いつになく強めの口調に――初対面のときの強引さをエヴァは思い出す――エヴァは渋々従い、ルイの隣に腰を下ろす。
（レイジがいればきっと、間に割って入ってくれたのだろうけど）

あいにく彼はいないし、自分は体調がさほどよくない。

「エヴァ嬢、俺は聖王騎士団のアルテュール隊長の指導の下、剣の稽古を始めることになったんだ。俺はきっと強くなる。真面目に取り組むし、なんせアルテュールが直接教えてくれるんだからな」

「……さようですか」

「貴族には勉強も必要だが、一方で武力も必要だ。貴族本人が剣を振れなければ強い武人などついてこないだろう。現に、聖王陛下は槍の達人だそうな」

それはアルテュールの受け売りだったので、エヴァにはあまり響かなかった。そもそも貴族の当主が強くなければいけないとはエヴァ自身も思っていないし、彼女の父であるスィリーズ伯爵もそれほど強いとは言えないだろうし。

とはいえ、聖王の名前を出されると否定しづらいので黙っている。

「俺は強くなる。だからお前はもっと勉強をがんばれ」

「……はい、それはがんばっておりますが」

「お前に足りない武力は、俺が補えばいいじゃないか」

「？」

疑問符を浮かべて首をかしげるエヴァだったが、それもそのはずで、ルイは自分の中で勝手に完結している理論を勝手気ままに話しているだけなのだ。

相手が全然話についてきていないというのにルイは、

（首をかしげているエヴァもまた美しいな……）

などと思っている。

「ん？　……エヴァ嬢、なんだか顔色が優れないな」

そこで初めてルイは、エヴァの顔色に思いやる余裕ができたようだ。

「……少し体調が優れませんで」

「それはよくないな。どれ」

ルイは腰の革紐で吊っていた宝剣を、鞘ごと取り外してエヴァに差し出した。

「これを持っているといい。多くの武具魔術を施した剣なのだが、俺もこれを持っているとあまり疲れないようだ」

「ですが、このような大切なものを――」

「お、お前なら持っていてくれても構わない」

半ば押しつけるように手渡された宝剣は、エヴァの両手を――冷え切っていた両手をじんわりと温めてくれるようだった。確かにこれは心地よい感覚がある。

きっと相当な値打ちものだ。こんなものを持たされては困るというのが正直なところではあったのだけれど、

（温かくて、なんだか眠く……）

壁際のイスで、背中が壁についていたのでエヴァは眠気に襲われた。ちょうどそこへやってきたミラが、ルイに話しかけたので誰もエヴァを気にしなかったこともある。

「……エヴァ様？」

「しっ、体調が優れないらしい。少しの間なら休ませてやろう」

気がつけばうつらうつらしていたエヴァを、ふたりはそっとしておいた。ルイもミラも、心根は優しかった。

ちりーん……ちりーん……。

それからしばらくして小さな鈴の音が近づいてくると、四阿の少年少女はざわつき始めた。

「――ウサギだ」
「――ほんとだ、ウサギがいる」
「――おい、あれは特級祭司のエル様だぞ」

見た目はウサギながら、今日は空色の――聖水色のマントを羽織ったエルが多くの祭司を引き連れて歩いてきた。

「え、皆様。お待たせいたしました。これから授与式の会場にご案内しますが、お履きものはこちらですべて脱いでいただきますよう、え、なにとぞよろしくお願いいたします」

靴を脱げ、と言ったエル本人はもちろん裸足で――そもそもウサギではあるのだが――エルが引き連れている祭司たちも全員裸足だった。

貴族の子どもたちは難色を示したが、真っ先にクルヴシュラトが靴を脱ぐと、次々と脱ぎ始めた。

「え、こちらの冠を頭にお載せください。魔除けの青柊の葉でございます」

エルのマントによく似た空色の葉――自然界にこんな色の葉があることを、ハーフリングのエタンをのぞくここにいる貴族の子どもたちは知らなかった。その茎を編んだ葉の冠をかぶせてもらう。

「――エヴァ様、行きましょ！　起きるお時間ですよ」

エヴァがハッとして目を開けると、にこやかに笑っているミラの顔があった。

「あ……わ、わたくし」

「なんでも靴を脱がなきゃいけないみたいです。私、もう脱いじゃいました」

「そう――」

ミラに促されるまま靴を脱ぎ、ほっそりとした足を地面につけると、ひんやりとした感触が伝わってきた。向こうでは森を歩き出した少年少女たちの「ひゃあ」だの「痛い」だのいう声がにぎやかに聞こえてくる。

「大丈夫か、エヴァ嬢」

「はい。先ほどよりずっとよくなりました――こちら、お返しします」

エヴァは宝剣をルイに戻すと、彼に言った言葉に偽りはなく、しっかりした歩調で歩き出した。

「そうか、それならよかった――って俺を置いていくなよ！？」

さっさと進んでしまうミラとエヴァを追いかけるルイだったが、

――パキッ。

そのとき追いかける向こうで小さな音が鳴ったことに、気がついた。

なにか硬質なものが割れるようなそんな音だった。

「……気のせいか？」

ルイは知らなかった――宝剣に掛けられている武具魔術のすべてを。

そのなかに、「魔法力回復」という、魔術が込められていたことを。

彼が立ち去ったその足元に、青色の宝石の欠片が転がっていた。

35

＊　エヴァ＝スィリーズ　＊

屋根のない巨大な神殿だった――森の小径を抜けた先は。
ウサギに連れられた少年少女のひとかたまりの中に、エヴァもいた。目の前には5段ほどの階段があり、２０メートルほどの広さで石柱が奥へと並んで立っている。石柱が支えるべき屋根はなく、そこには広く青い空が広がっていた。
足元は、土から石の感触へと変わる。巨大な岩を切って造った、ひとつひとつが大きな石畳が続いている。石柱と石柱の間には初代聖王から始まる代々の聖王の石像があった。
ぱらぱらぱらと小さな拍手が聞こえる。石柱の向こう、イスが用意されてあり、貴族たちが並んで座っているのだ。少年少女たちの親もそこにはいるが、彼らはふだんどおりの貴族らしい格好だった。
貴族が多すぎてスィリーズ伯爵の姿は見えなかったが、そのどこかにいるのは間違いないと思われた。

（なんだか現実感がないのだわ――）

つるりとした足元が映すのは青色の空だ。まるで自分が空中を歩いているかのようにさえ感じられる。
進む先はまた階段があり、階段の踊り場には聖王が座るイスがあった。
そして見上げたいちばん上にあったのは――灰色にくすんだ、祭壇。

（あれが「一天祭壇」……！）

なんの変哲もないただの石の台にしか見えなかった。だがその周囲は魔術を込めたらしい宝石をはめ込んだロッドが等間隔に床に突き立っていて、煙のような青色の魔力が祭壇を囲んでいる。チカッ、と小さな光が祭壇に点るのが時折見える。それこそがまさに天賦珠玉が生まれる光なのだけれど、下から見上げる形ではよくわからなかった。

「え、皆様、ここで止まってください」

エルに言われ、エヴァたちは立ち止まった。

聖王に見下ろされ、多くの貴族に注視され、全員が居心地悪そうにしている。

エルや神官たちは一礼するとそこから立ち去っていく。

「――古来より、成人となった臣民に、神から天賦珠玉を贈られる日は『晴れる』とそう決まっている」

イスから立ち上がった聖王は、エルと同じ聖水色のマントを羽織り、身長ほどもある金色の錫杖を手に持っていた。

「古式に従い、そなたらに神の祝福を与える」

シャラン、と錫杖が振られる。

「まずはそなたらが、天賦珠玉を受け入れる余地のある『無垢の者』であるかどうかを確認する」

エヴァは足元がほんのり光を放ったのに気がついた――すると、

「えっ、えっ、なにこれ!?」

獣人の少女の足元が、血塗られたように赤くなっている。小さな叫び声とともに、彼女の周囲にぽっかりと空間ができた。神官たちがすぐさま駈け寄ってくると、少女を連れて去っていく。

「や、やだ！　なにこれ!?」

「――せ、聖王陛下！　娘は、生まれて間もないころに重い病気に罹り、その際、【免疫強化】の天賦を一時的に与えただけです！　治ったらすぐに取り外しました！」

声を上げたのは娘の父だろう。母とともに顔を青ざめさせている。

「黙れ」

だが聖王の眼光で黙らされると、そこにも神官がやってきてふたりを神殿から連れ出していく。

それほどまでに厳しいチェックがあることをエヴァも知らなかった。ただ父が「天賦珠玉を与えるのは授与式の後です。それは絶対です」と言われていただけだった。

獣人の少女が歩いた足跡は、血に濡れたように残っていて、みんな薄気味悪そうにそれを見ていた。

「……天賦は本来、人に1度しか与えられない。これをゆめゆめ忘れるな」

聖王の声は、心から絞り出すようにさえ聞こえてきた。青ざめた少年少女たちは何人もがコクコクとうなずいている。

（そんなの、おかしいのだわ）

しかしエヴァが感じていたのは「疑問」だった。

人に1度しか与えられない？

それならばなぜ、聖王騎士団の騎士団長は【聖剣術（ホーリーソード）】なんていうレアな天賦を代々受け継いでいく？　なぜ、6大公爵家のうち5家は家宝のように大事にとっておく？

（建前に過ぎないのだわ。でも……聖王陛下は、なぜか本音を話しているようにも感じられる……）

先ほど聖王が言ったとおり「無垢の者」――今までに一度も天賦珠玉を使ったことがないと、確認する術はあるのだろう。

（なにか、意味があるの？「無垢の者」でなければならないことに意味が？　でも今日の神事についてそんな話は一度も聞かなかった）

ちらりと横を見ると、ミラも眉をひそめている。こんなことになるとは、当然知らなかったのだろう。やはりミラも聞かされていないと見える。

（お父様……）

目で父を探すがやはり見つからなかった。もしかしたらここにはいないのでは――と思いつつ、

（……レイジ）

心によぎった不安をなくしたくて、頼れる、ちょっと変わり者の

護衛の名前を心で呼んだ。
無意識に左手のブレスレットに手を伸ばし、

（――え）

そこに、あるはずの宝石が欠けていることに気がついた。

（どう、して……！？）

見れば、５つある宝石はすべて青色に染まっていた――つまりもうこれ以上、魔力は吸収できないという表示だった。
どくん、どくん、と動悸が速まる。先ほど、四阿で少し眠って体調が戻ったと思ったのは間違いで――ブレスレットが限界を超えたせいで破損し、体内の魔力量が戻りだしただけだったのだ。

「……どうした、エヴァ嬢」
「！」

心配そうに顔をのぞき込んだルイは、エヴァの瞳を真正面から見てしまった。
未制御の、特別な瞳を。
と、そのとき、ワァッという拍手が沸き起こった。聖王がこれから天賦珠玉の授与を始めると言ったせいだろう。

「ル、ルイ様……」
「――エヴァ嬢、なにも心配は要らない」

頭を振り向けた先、彼の視線の先には聖王の姿があった。

「まずは聖王子クルヴシュラト、そなたに天賦珠玉を授ける」
「はい」

澄んだ声で返事をした彼は、まだ声変わりもしていなかった。可愛らしく、女の子のようにも見える可愛らしい姿に頬を染めたのは、少女だけでなく少年も多かった。

だが、聖王だけは苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。その後の言葉が出てこないので貴族たちがざわつきだしたが、

「……こたび、聖王子クルヴシュラトに授けられたものは……今年出現した星８つの天賦珠玉となる」

その衝撃的な一言に、ざわつきはどよめきとなり、はっきりと言葉を伴って「なんだって」と思わず言ってしまう貴族もあった。

星８つの天賦珠玉は前代未聞で、この世の者には使えない星９つ以上の天賦珠玉は貴族たちも知っていたが、最大でも星７つまでしか誰も聞いたことがなかった。しかもその星７つは戦乱で失われ、現存する天賦珠玉は星６つが最高のはずだ。

「……」

聖王はただじっと、厳しい表情でクルヴシュラトを見つめている。どよめきを注意することもなく。クルヴシュラト本人も、そんな天賦珠玉を授けられるとは思っていなかったのだろう――戸惑いながらも父である聖王を見返している。

「お待ちください、聖王」

だがそこへ、手を挙げた人物があった。

「星８つという希少極まりない天賦珠玉を、ただ血筋だけで授けられるというのはいかがなものか。天賦珠玉の内容を考え、才能が合致するのならその他の者が手に入れるチャンスがあってもいいのではありませんか」

燃えるような瞳で――闘争意欲をかき立てられたような目で、ルイが「待った」を掛けたのだ。

36

＊　エタン＝エベーニュ　＊

「――あれは？」
「――ロズィエ公爵家のルイ様ではありませんか」
「――どういうことでしょう」
「――あれではまるで――」

観覧に来ていた貴族たちが動揺し、口々に疑問を口にする。
ルイの姿はまったくの予想外で、彼らからすると今のルイの発言は――。

――まるで聖王陛下を批判しているようではないか。

と見えるのだった。
クルヴァーン聖王国で聖王に異を唱えることは、表向き許されない。もちろんそれは聖王の圧倒的な独裁を許すということではなく、統治のシステムとして「聖王は絶対」と見せることで多様な種族が集まるこの国のシンボルとして利用しているのである。
だから聖王に間違いがあったときは、６大公爵家経由で注意が行くか、あるいは陰でそれとなく聖王の耳に入れるのだ。そして聖王は臣下からの忠言を聞き入れるだけの分別を持っている。
ゆえに、これほど公の場での――しかも神事という「聖王国」ならではの儀式の途中で聖王のやり方に注文を付けるということは、あり得ない事態ではあった。

神官たちが、儀式を妨げかねない異物を排除するために動き出そうとした。

「神官、待て！」

それを止めたのは、他ならぬ聖王だった。

「……お前は、ロズィエ家の子だな」

「はっ。ですが、自分がどこの家の子であるかは関係ありません！　平等な機会を創り出すために――」

「いや、お前がロズィエ家であることがなにより重要だ」

「恐れながら陛下！」

「黙れ！」

貴族席から声を上げたのはロズィエ家の当主だ。だが聖王はそれを一喝して黙らせる。

「――ルイ、ルイッ！　どういうつもりだよ！　授与式をぶち壊す気か！？」

一方のルイのそばでも少年少女たちがざわざわしていた。

同じ６大公爵家であるハーフリングのエタンがルイの腕をつかんだが、エタンよりも体格のいいルイは無理矢理その手を振りほどく。

「俺に触るなッ！」

「ルイ……？」

今までにない強力な拒絶にエタンはハッとする。彼の目は怒りに濁っていた。

「エヴァ様！」

ミラの声が聞こえ、そちらを見ると彼女に抱きかかえられて今にも気を失いそうなエヴァがいた。

（おかしい――これは、おかしい！）

今日はエヴァと話してはいなかったが、ここにやってくるまでに何度か視界には入っていた。そのときのエヴァはふつうに歩いていたはずだ。

（あれは魔力の欠乏症……？　それに左手につけているのは魔道具……？）

なにかを話そうと口を動かしているが、ミラは聞き取れないらしい。

「ルイ＝ロズィエよ。ならばそなたが受け入れるか、星８つの天賦珠玉を。受け入れるだけの覚悟と、適性があるというのなら！」

聖王がとんでもない言葉を発し、貴族席がさらにざわつく。

「陛下！　お止めください！　ルイ、今すぐ下がれ！　命令だ！」

「え、陛下。それは無理筋でございます」

ロズィエ家当主が悲痛な声で叫び、聖王の横からエルが出てきた。

（なに？　なんなんだ？　星８つの天賦珠玉とはいったいなんなんだ？）

エタンは自分の父を貴族席で見つけるが、厳しい顔をして黙っているだけだった。どうやら父はなにも知らないらしい――いや正確に言えば、ロズィエ家当主だけがなんらかの事情を知っているのだ。

「俺は本気だ、エル。ロズィエ家は公爵家。聖王家の血を引く家でもある」

「え、陛下、いにしえより伝わるは、『《聖王色》を持ち《無垢の者》に星8つの天賦珠玉を与う』ということでございます」

「血筋で見るなら公爵家は立派な聖王家の流れだ」

「え、詭弁でございます」

「黙れ！　これは俺が言い出したことではない、ロズィエ家が言い出したことだ！」

「ち、違います！　ルイが勘違いしただけで――ルイ！　今すぐ謝れ！」

「――受け入れます。星8つの天賦珠玉とやら、自分が扱い切れれば今のやり方を変える第一歩になるということでしょう？」

「ルイィィイ！」

父の叫び声を無視し、ルイは聖王しか見ていなかった。

（異常だ。ルイもおかしいし、聖王陛下もおかしい。なんなんだ、これは――）

エタンは、聖王の目がいつもの威厳のあるそれではなく――なにかすがるものを見つけたような、一縷の望みをかけるような、そんな追い詰められた者の目であることに気がついた。

ただひとり、なにが起きているのかよくわからないというふうに、ぽかーんとしているクルヴシュラトだけが、逆に常識人のように感じられた。

「天賦珠玉を持ってこい、エル！！」
「……聖王陛下」
「エル！！」
「……」

ウサギの特級祭司は、眉間にシワを寄せていたが、

「……天賦珠玉を用意しなさい」

神官に声を掛けると、自らがそれを運ぶつもりなのか石段を降りていく。

「ああ、ルイ……バカ者めが……」

両手で顔を覆って崩れ落ちるロズィエ家当主と、「いったいなにが？」「星８つの天賦珠玉は過去に聖王家に？」とひそひそと話をする貴族たち。

一方の、この問題を引き起こした本人であるルイは、誇らしげに胸を張っていた。

やがてエルが、聖黄色の布を張った盆に、それを載せて戻ってくる。

「なっ――」

エタンは絶句する。

今まで見た天賦珠玉よりも二回りほど大きいのだ。

本来の天賦珠玉はピンポン球程度の大きさであるのだが、エルが持ってきたものは野球ボールほどはある。

さらには色だ。

虹色を含んでいるので「ユニーク特性」であることは間違いない。

だがその中央にはどす黒く渦巻く点がいくつも点在しており、放たれる光も赤青黄色とめまぐるしく変わるのである。

（あんな……禍々しい天賦珠玉、見たことがない）

ぶるりとエタンは震えた。恐怖を感じたのはエタンだけではない、すぐそばにいる貴族の子女たちは顔を青ざめさせていた。

遠すぎて文字が見えない。いったいなんという名の天賦なのか。

「ルイ＝ロズィエ、ここへ」

「はっ」

ルイは平然とした顔で歩き出す。

「ルイ！」

「放せ」

腕をつかんだが、やはり振り払われる。それだけでなくルイは、エタンを一顧だにしなかった――まるで眼中にないとでも言うかのように。

（――友だちじゃなかったのか？）

離れていく距離が、心の距離のように思われた。

ルイは集団を離れて聖王に近づいていく。階段を上っていく。もう、届かない。もう誰も、ルイを振り向かせることはできない。

「……そなたは、己に覚悟と適性があると言うのだな？」

まただ、とエタンは思う。また、聖王は「適性」という言葉を使

った。天賦珠玉は強制的にスキルを覚えさせるものだから適性もなにもない。もちろん、魔力をほとんど持たない者に魔法の天賦を与えても意味はないのだが――それでも「覚えられない」ということはない。

「あります」

ルイは迷わなかった。

「さればこの天賦珠玉【雋エ縺?刈迚イ★★★★★★★★★】をそなたに与える」

天賦の名を――聞いたのに、靄が掛かったように言葉としては耳に残らなかった。ただそのワードに含まれている、不吉で、不穏で、不可思議な響きだけはその場にいるすべての者が感じ取れた。

ルイは手を伸ばし、天賦珠玉を手に取った。

そして天賦珠玉を空へと掲げる――その天賦を取得するために。

世界が闇に包まれた。

37

第1聖区にある護衛の詰め所は多くの護衛でごった返していた。
「こんなところが控え室でいいのかなぁ」と思うくらいには立派な一一華やかな外向けの宴会場みたいな大広間に、数百人という護衛がいる。
テーブルには水差しや果実水（ジュース）の入ったピッチャーが置かれてあって自由に飲んでもいいことになっている。壁際にずらりと並ぶイスを適当に持ってきて、車座になっている護衛チームなんてのもいた。
ここに来てから1時間はもう経っているだろう。マクシムさんたちは集まって休憩しているけれど、僕はふらふらと護衛たちを観察しながら時間をつぶしていた。
聖王騎士団のようにきっちりしている制服なんてものはなく、マクシム隊長のように各家の騎士ならばそこそこまとまって見ることはできるけど、中には「え、この人、本気で護衛？」と二度見してしまうような人もいる。
いや、だって、赤髪でモヒカンなんだよ？

「ここの飲み物は美味いねヒャッハ」

とか言ってるのが聞こえてきて鼻水出るかと思った。「ヒャッハ」って語尾なの？　方言？　汚物の消毒係？

「スィリーズ家の護衛さん」
「ヒャッハ！？」

いきなり肩に手を置かれて思わず「ヒャッハ」が出てしまった。
鼻水も少し出たのであわててポケットからハンカチを出して拭う。

「ヒャッハ……？」
「あ、な、ななんですか！？」

振り返るとそこにいたのはエタン様の護衛さん――ハーフリングの護衛さんだった。
晩餐会のときと同じ鎧を身につけており、背にはエベーニュ家の紋章を刺繍したマントを羽織っている。
６大公爵家は他の貴族家とは一線を画すような、お金の掛かった装備をしているのですぐにわかる。正直めっちゃカッコイイです。

（ハーフリングの女性を見るとミミノさんを思い出すなぁ……）

と僕はそんなことを思っていた。

「私、エベーニュ家の護衛のレレノアだべな。名前を聞いても？」
「あ――はい、僕はレイジです。ご存じのとおりスィリーズ家で護衛をしています」
「ほーん、うんうん、君はやっぱりレイジくんなんだべな～」

ん？　そう言えばこの人、打ち合わせのときも僕に手を振ってくれたっけ。
どこかで会った……わけはないよな。ハーフリングの人だったらミミノさんのこともあるから絶対覚えてるし。そもそも【森羅万象】をつけてるときだったら忘れることもできないし。

「もしかして僕のことを知っているんですか？」
「うん。実はな――」

と言いかけたときだ。

フッ、と停電みたいに室内が暗くなった。全員が全員天井を見上げたけれど、まだ朝の時間帯なので魔導ランプは使っていない。外からの自然光頼りなのだ。

すぐにまた明るくなったけれど――つまり今、この瞬間に空が暗くなったということ。

「今のなんだったべな……ん、レイジくん、どうした？」

「……イヤな予感がします」

あまりに不自然な暗さだった。今日は昨日までの雨がウソのように晴れているはず。だから、巨大な雨雲が太陽を覆った――ということは考えられない。

胸がざわりとする。

そう言えば、バーサーカーの辺境伯閣下も言っていたっけ……。

――今日はなんだか血が騒ぐ。

野生の勘というのは当たるのだ。それが、命に関わることならなおさらだ。

僕が窓際に駈けていくと、同じように窓から外を確認している護衛が数人いた。そのうちのひとりがアルテュール様だ。

「アルテュール様、今のは？」

「……」

僕が声を掛けると、外をにらみつけながら黙っているアルテュール様。視線の先は聖王宮だ。

「なにかお心当たりが？」

「……いや、まさかそんな……」

「アルテュール様！」

僕の声にハッとなるアルテュール様は、ようやく声を掛けているのが僕だということを認識した。

「お、お前は掃除係の――」

「もしかして聖王宮でなにかあったんですか？」

「どうしたんだべな」

レレノアさんが後からやってくるが、アルテュール様は口元に手を当てるだけで情報を出してくれない。

今日は天賦珠玉の授与式があるだけだ。神事だというけど、毎年やっているものだし、なにか特別なことが起きるようなものならウチの伯爵だって事前に教えてくれるだろう。

（――特別なこと？）

こと、ではないが、特別なものならある。

――クルヴシュラト様に授けられる天賦珠玉ですが、どうやら星7つ以上の可能性が濃厚です。

特別な天賦珠玉。

僕は星6つの天賦珠玉がどれほど強力なものなのかを知っている――「六天鉱山」でラルクが振るっていたあの力。瀕死だったとはいえ竜の首を一刀のもとに斬り落とす力。

それが星7つ以上だったら？

「アルテュール様……もしや、クルヴシュラト様に授けられる天賦珠玉ですか」

「!?」

傍目にもわかるほどにアルテュール様が驚愕の表情をする。

「お、お前、なぜそれを……」

「なんだべな？　クルヴシュラト様はどんな天賦珠玉を与えられるんだ？」

「……いや、クルヴシュラト様が受け取れば問題なく済むはずだ。あれはそうして解決するものであると……」

「ちょ、ちょっと待ってください。クルヴシュラト様が特別な天賦珠玉を受け取ればなにが起きるんですか？　今のような暗さが？」

「それはわからない……」

ずずん、と地響きがした。

「……」

「……」

「……」

さすがに護衛たちも異常を察知してざわつき始める。僕は、アルテュール様、レレノアさんと視線を交わす。

「――アルテュール様、なにが起きるかわからないのですね」

「あ、ああ……」

「ならば、今、不測の事態でトラブルが起きている可能性もありますね？」

「それは……」

視線を泳がせたアルテュールだったが、

「……あり得る」

そうして彼は、きっ、と顔を護衛たちへと向けた。

「みんな、聞いてくれ！　俺は聖王騎士団第2隊隊長のアルテュールだ！」

ざわついていた会場内はぴたりと音が止んだ。

「詳しくはまだ言えないが、今日の天賦珠玉授与式でなんらかの問題が起きた可能性がある。それは聖王陛下とクルヴシュラト様が押さえ込む予定のものだが、予断を許さない。すぐに行動に移れるようにしてくれ！」

え。

いや、ちょっと待って。

「――アルテュール様、なんですかその『押さえ込む』って」

「いや……今のは失言だ、忘れてくれ」

「なにか、ヤバイものが出てくるかもしれないとわかっていたってことですか？」

僕の言葉に護衛たちがざわざわする。

「そんなことはない。そんなことにはならないはずだ」

「今の暗くなった外、それに地響き、明らかになにかヤバイことが起きてるじゃないですか！」

と言ったときだ。

ドォン……。

遠くで、なにかが破壊される音が聞こえた。

（方角は聖王宮）

そのときには僕は走り出していた。

「あ、待て、掃除係！」

待つわけがない。僕は空いている窓から外へと飛び出すと、聖王宮への最短ルートを考える。

「こっちだべな」

「レレノアさん！？」

すると僕の直後に出てきたレレノアさんが手招きする。

ふたりで走り出す。

建物の陰から出ると――すぐそこに聖王宮と第１聖区を区切る壁があった。

「あれを！」

聖王宮の敷地内に、半球状の闇が出現していた。

遠近感がわかりづらいが大きさは巨大なショッピングモールくらいはあるだろう。高さも５０メートルはある。

それが「異常事態」ではないと断じる理由はなにひとつなかった。

38

（お嬢様、無事でいてくださいよ……！！）

僕は第1聖区と聖王宮とを隔てる城門に向かって走り出す。

「レイジ、くんっ、第1騎士隊とは、私が、話すべなっ」

全速力で走りながらレレノアさんが僕にそう言った。

確かに城門は聖王騎士団の人たちが固めている。

なにをやってるんだよ。今、なにかが起きてるだろ！　こっちじゃなく、アンタたちの後ろで！

「必要ないです」

「え」

僕は、自分の身体が学習した多くの天賦を呼び覚ます。【腕力強化】、【背筋力強化】、【腹筋力強化】、極めつけは【身体強化】を使っての【疾走術】だ。

「えええっ！？」

ぐん、とレレノアさんと差がつくのを感じる。僕の身体が風になって、一気に城門までの距離を縮める。

「おい、お前はどこの護衛――」

「止まれ止まれ、ここからは通せない――」

身を低くし、【瞬発力強化】と【跳躍術】で石畳を蹴った。

「えええええ!?」

僕はレレノアさんの絶叫を後ろに残し、城門を軽々と飛び越えて向こう側に着地する。

（【回復魔法】）

あまりに無茶をしたので筋繊維が悲鳴を上げているが、それを魔法で治す。

人気のない聖王宮を走り出す。半球状の暗闇目指して。

（あれはなんだ？　あの中にお嬢様がいるんだよな？　まだ――）

僕が思い出したのは、アッヘンバッハ公爵領の領都で竜と戦ったときのこと。

戦う力を持たなかった僕はノンさんに連れられて戦場を後にした。

あのとき僕に、今と同じ力があれば多くの人死にを出さずに済んだかもしれない。

ライキラさんだって死なずに済んだかもしれない。

（――まだ、間に合うかもしれない。間に合わせる！）

すぐそこに闇のドームが迫っている。中へとそのまま入るべきか、あるいはなにか別の手段が――。

「！！」

僕はそのとき、ドーム前にたたずむ人影を発見した。

＊　エヴァ＝スィリーズ　＊

視界が暗転したのは自分が気を失ったからなのだとエヴァは最初、思った。だけれどすぐに、視覚以外の感覚が正常であることに気がつく。自分を抱きしめているミラの温かさ、誰かの大声、風に乗ってやってくる――焦げ付くようなニオイ。

「聖王陛下、これはなんですか！？」

暗闇の中で明るいものは限られていた。すぐそばにいた聖王子クルヴシュラトの身体からあふれる聖水色の輝き、石段の上で仁王立ちしている聖王も持っている同じ光。

目を凝らすと、聖王の横にはより強い闇があって、そこから黒い霧が噴出しているようだった。

「うおおおおおお！　鎮まれ！！」

聖王の太い両腕が錫杖を力一杯、強い闇に目がけて振り下ろした。その闇がいた場所は、先ほどまでルイが立っていた場所だ。

（ルイ様は……？）

考えたくない、イヤな想像がエヴァの脳裏をよぎる。

それはつまり。

あの闇が、ルイなのではないか、という。

闇はするりと身体を引いてかわしたが、周囲の闇の濃さは――この空間に充満している闇はわずかに和らいだように感じられた。

「――ごめんなさい、もう大丈夫」

「エヴァ様!?　平気ですか」

「はい……ただ、わたくしの目は見ないでくださいませ」

魔力が戻ってきたエヴァはミラの顔をつとめて見ないようにしながら身体を起こした。

ここでなにが起きているのか、きちんと理解できている人間は聖王とエル、それにロズィエ公爵くらいだろうと思われた。

（わたくしの魔瞳がルイ様を……）

ルイの強気過ぎる行動は、明らかに自分の「鼓舞の魔瞳」が原因だということはわかっていた。

胸が苦しいほどに痛い。

後悔が、重荷のようにのしかかってくる。

「エル！　これはどういうことだ!!」

「え、聖王陛下……公爵家では、かの天賦珠玉を受け入れるのに、力不足であったということでしょう」

「だがこんなことになるとはお前は言わなかったぞ!!」

「は……。過去の聖王は、皆、聖水色を持つ『無垢の者』に天賦珠玉を与えておりましたから……」

聖水色。

無垢の者。

その2つがキーになっているのだ。

ルイは聖水色を持たなかった――だけれど、天賦珠玉を取り込ん

だだけでいったいなにが起きたというのか。

『……クキ、コ……カカカカカカカカ……！！』

乾いた嗤い声が響いた。

嗤ったのは、闇だ。闇であってルイではない――エヴァはそう信じ込もうとした。

背筋をなでられるようなぞわりとした感覚に、エヴァの肌が粟立つ。

「ルイィィィイ！！」

ロズィエ公爵の絶叫が聞こえ、観覧に来ていた貴族たちが立ち上がり、逃げていく気配がある。

「――な、なんだこれは。壁になっていて進めない！」

「――騎士団！　剣を振れ！」

逃げることもできないようだ。剣を振るう音も聞こえたが、小さな火花とともに跳ね返されている。

（そう、ここは聖王騎士団第1隊が警護に当たっている。だから大丈夫、大丈夫）

自分に言い聞かせるようにエヴァは胸に手を当てる。

『哀レナ。逃ゲルコトハ適ワヌ』

感情を見せない声が、闇から聞こえてくる。

「黙れ。お前は死ね――騎士団長！！」
「はっ」
「斬れ！！」
「はっ」

どこから現れたのか、この闇でも見える3つめの光が現れた――それは聖王騎士団第1隊隊長にして騎士団長、その人である。
抜かれた剣の色は金色。
刀身が鱗粉のように光をまき散らしている。

「あれが【聖剣術】――！！」

誰かが興奮したように叫んだ。
星6つの、この国でも最高峰の武力だ。
光が、厳のような武人を照らし出す。【聖剣術】の天賦珠玉を失うわけにはいかないために、騎士団長は前線に行くことはなく「名誉職」などと言われることもあるが、騎士団長が弱いわけでは到底ない。
武人として修練を積み、先代騎士団長と聖王のふたりが認めた者が後継者となる。
金属鎧（プレート・メイル）を着込んだ騎士団長は、マントをなびかせながら光の剣を振り下ろした。

「あっ――」

瞬間、目を開けていられないほどの光が闇を切り裂いていく。足元が揺れてエヴァは尻餅をつく。誰かが悲鳴を上げている。
その衝撃が収まったとき――視界がぼんやりとして正常な視力が戻るまでにわずかな時間が必要だった。
まだ闇は去っていなかった。

「……ごぼっ」

騎士団長が、剣によって腹を貫かれていた。
その剣は宝剣だった。
ロズィエ公爵が息子ルイのために贈った宝剣だ。

（やっぱり、あれは……）

エヴァは思い知ってしまう。あの、人の形を取った闇の塊がルイなのだと。
騎士団長がその場に倒れ伏し、動かなくなった。

39

＊　エヴァ＝スィリーズ　＊

倒れ伏した騎士団長の背中から、ポワ、と虹色の光が浮かんでくる――それは天賦珠玉の光だ。【聖剣術】の光だ。
闇が手を伸ばし、光を絡め取ると、小さく硬質な音を立てて光は散って消えた。

「あぁ――……」

誰かがため息ともつかない声を漏らす。この国最高の天賦珠玉が今、消え去ったのだ。

（どうしてこんなことに）

いったいなにを間違えてこうなったのか。
自分がなにか致命的な失敗をしてしまったのか。
ただすべての歯車が少しずつ間違えて、この結果を生んだのか。

――エヴァ嬢。

ぐいぐいと距離を詰めてくる、犬のような少年だった。
それが今はあんな姿に変わってしまっている――その残虐な事実にエヴァは目を背けたかった。

「ミラ、ここか」
「――お父様!?」
すぐそこへ、巨大な気配がやってきていた。
ミラの父である辺境伯だ。
「暗くて足元が見えねえな」
「こ、これはいったいなんなんですか！」
「俺が知るわけねえだろ。ただ、状況はよくねえな」
「どうするの……？」
「とりあえず武器が必要だ――おい、誰か剣を貸せ。ん、まあぼちぼちだな」
近くにいた貴族の男子から剣を巻き上げたらしい辺境伯は、
「距離を取るぞ、とにかく離れろ。あのバケモノの相手は陛下とエルに任せるしかねえ」
「――しかし、辺境伯閣下。臣下の我々が逃げてもいいのでしょうか」
エタンが聞いている。
「勇敢なのは結構だが、戦う力を身につけてから言うもんだ。それにお前たちの仕事はクルヴシュラト様をお守りすることだ」
そう、ここにも聖王子がいる。エタンはハッとしたように、
「そのとおりです。失礼しました。――クルヴシュラト様、なるべく離れましょう」
「……」

「我々になにかできることはありません」
「そう……でしょうか？」
「えっ？」

そのとき優しげなクルヴシュラトの表情が引き締まった。

「……あの天賦珠玉は、我が授かるはずのものでした。であれば我ならばなにかできることがあるのではないでしょうか？」
「そ、それは……」

誰にもわからないが、あり得るかもしれないと思わせるには十分な内容だ。

『ソノ通リダ』

いつの間に――距離を詰められていたのか。石段を降りたことさえわからなかった。
聖王子の５メートル先に闇がいた。

（また、このニオイ……！）

暗闇だというのに、闇はなお暗く感じられる。そこから生ぬるい風が吹いてきて、焦げ臭いニオイが周囲に充満した。

『古ノ盟約ニ従ワナカッタノハ、其方ラダ』

「盟約」、などという言葉にエヴァは聞き覚えがない。
だが向こうはその「盟約」とやらに重きを置いているらしい。

『代償ハ大キイ。先ホドノ天賦珠玉ハ盟約不履行ニヨリ消滅サセタ』

先ほどの天賦珠玉――それは【聖剣術】のことだろう。

星６つの天賦珠玉が、長年に渡って受け継がれてきた希少中の希少である天賦珠玉が、騎士団長の死とともにいともたやすく消し去られたのだ。

物言わなくなった騎士団長のそばで、聖王が膝をついている。自信満々で尊厳の塊であったようなこの国のトップが、うちひしがれている。【聖剣術】が効かなかったこと、それに騎士団長の死が心にこたえたのだろう。

だが、

『マダ足ラヌ。其方――盟約ヲ負イシ一族ダナ。嗚呼、嗚呼、嗚呼……同胞ガ叫ンデイル、聞コエルカ、其方ガ美味ソウダト、叫ンデイル……』

闇が、クルヴシュラトへと歩き出そうとしたとき、聖王は弾かれたように立ち上がった。

「クルヴシュラトに手を出すなァァァ！」

ぶん投げた錫杖が闇の後頭部目がけて飛んでいく。振り返った闇はその錫杖を受け止めると、ビリッと鈍い金色の電撃が周囲に跳ねた。

「貴様らは、聖王家の血を未来永劫吸い続ける気か！！」

がらん、がらがら、と錫杖が転がっていく。

『下ラヌ。ナラバ盟約ナド破棄スルガヨイ』

「望むところ――」

「陛下！　お待ちください！」

エルが後ろから聖王に抱きついてその場に留める。

「かの世界の者どもの罠です！　連中は、盟約の破棄こそ最も望むこと！！」

「盟約に縛られてるからこちらの攻撃が、聖剣が弾かれたんだろうが！　盟約を盾にして連中はああやって好き勝手やっているんだぞ！　すべての枷がなくなれば、我が聖王騎士団が裏の世界の連中など滅ぼしてくれる！」

「陛下！！　あなた様は我が子かわいさに、思考が曇っているのです！！」

「うるせえ！！　かりそめの命しか持たぬ貴様になにがわかる！」

エルは突き飛ばされ、背後にごろんと転がった。

『盟約ヲ、破棄スルノダト宣言セヨ』

「ああ、そんなもんいくらでもしてやる――俺は、クルヴァーン聖王国の王として」

なにか、マズイ。

今目の前でよくないことが行われようとしている。

エヴァは震える喉に力を込める。

止めなければ！

「だ、ダメ――ッ！？」

闇がこちらを見ていた――いや、そこにあったのはルイの顔だった。生気のないルイの顔が闇に浮かび上がってエヴァを見ていた。

「なぜお前はそこにいる」「なぜお前は俺の背中を押した」「なぜ

お前は生きている」――そんなふうに言われた気がして、エヴァの勇気が急速にしぼんだ。

（わたくしでは、ダメなのだわ。わたくしには、なにもできないのだわ。わたくしなんて、結局は貴族という身分がなければなにもできないただの子ども――）

恐怖に胸を衝かれ、エヴァはその場にへなりと、座り込んでしまった。

ついに、聖王はその言葉を発した。

「盟約など破棄してやるッ！！」

けれど、エヴァは心に叫ぶ。

（助けて。助けて。助けて、レイジ！！）

そして、闇が嗤った。

『ソノ言葉、聞キ入レ――』

だが最後まで闇が言い切ることはなかった。

ガラスが割れるような大きな音とともに、光が射し込んだのだ。

「うおおおおおおっしゃあああああ！！　割れた割れた割れた！　クッソ硬いんだよも～～～！！」

そこにいたのは、

「……ああ」

今エヴァが、最も切望し、来て欲しいと願っていた――頼れる護衛だった。

「レイジ！」

40

闇のドームの中、射し込んだ光は一筋の道のように美しい床面を照らし出す。神殿のような造りになっているそこにいたのは――人の形をした闇と、キトンのような服を着た少年少女だった。

レイジ、とお嬢様が呼んでくれたのを僕の耳はとらえていた。へたりこんだ、お嬢様のまつげが涙に濡れていた。

「……ウチのお嬢様になにをした？」

その闇が、まともじゃないことくらいわかる。だけど一方で、この騒ぎを引き起こしたのがその闇だということも明らかだった。【森羅万象】は、その闇をなんらかの「生き物」だと判断しているが、一般的な生き物とは違うようだ。詳しいことは僕の知識が追いつかないのでわからない。

「レイジさん」

僕の後ろからスィリーズ伯爵が現れる。

このドームの手前で出会ったのが伯爵だった。伯爵はこの授与式に参加せず――貴族や神官たちが一斉にいなくなるのを見計らって、聖王宮内で調べ物していたと言っていた。クルヴシュラト様に与えられる天賦珠玉について調べておきたかったらしい――おかげで伯爵はこの闇のドームに取り込まれることなく済んだのだけれど。

魔法や素手では破壊できなかったこのドームも、伯爵が持ってきた「石」でなら破壊できた。今その石は僕の手にあり――その色は階段の上にある祭壇とよく似ている。

あれが「一天祭壇」か。

で、この手の石も祭壇絡みのなにか……。

（なんかいろいろ隠されてるっぽいけど）

今はなにより、

『侵入者ダト……？　ッ、其方ハ！？』

「侵入者はそっちでしょうが……ね！！」

僕は地面を蹴って走り、人型の闇との距離を一気に詰める。

「おおおおお！！」

石を握りしめた僕の右拳が、人型の腹に突き刺さる。

『ゴボッ、ガッ』

闇は何度もバウンドして吹っ飛んでいく。

「――攻撃が通じる！？」

「――【聖剣術】すら効かなかったのに！」

「――あれは何者だ」

観覧席にいるらしい貴族たちがざわざわしているけれど、そんなことよりやることがある。

怒りを――お嬢様を泣かせたクソッタレをぶん殴ったことで少々収まった怒りを抑えて、僕は首だけ振り返る。

「お嬢様、お待たせしました」

できるだけ安心させたくて微笑みかけると――お嬢様の目にはみるみる涙があふれそうになった。
お嬢様は、貴族だと言っても12歳だ。
いきなりこんな闇に閉じ込められたりしたら、そりゃ怖いよな。
それなのにお嬢様は涙をこぼさないギリギリのところで踏ん張った。

「……レイジ」
「はい」
「わたくしを――わたくしたち全員を、守るのだわ」

やはり、ウチのお嬢様は人使いが荒い。
僕以外に聖王騎士団だっているはずなのに――というか騎士団はなにをやってるんだよ、なにを――全員を守れ、ときた。
だけど、

「承知しました」

自分だけでなく、みんなを救いたがるお嬢様は嫌いじゃない。

『ナゼ、此処ニイルノダ、災厄ノ子ヨ……！』

吹っ飛んだというのに何事もなかったように立ち上がった闇が叫ぶ。「災厄の子」って僕のこと？　ん？　……あ、もしかして黒髪黒目のこと？　ええぇ……あんな得体の知れない闇にも僕は忌み嫌われてるわけ？

『サレド、盟約破棄ハ成ッタ』

身体からどんどん闇が噴出する。光は僕が開けて入ってきた一か所のみ。

『ヴァアアアアアアアアアアア！！！！！！』

耳をつんざくような絶叫とともに、闇の右腕がろくろ首のように伸びていく――向かう先はクルヴシュラト様だ。

「シッ」

僕はすかさずその前に身体を滑り込ませ、石で手を弾いた。

『グウッ』

やっぱりこの石は効くんだな。伯爵がこっそり持ってきただけはある。っと、今度は左手が飛んでくる――、

「ふんぬ！」

辺境伯が剣を振ってそれを斬り飛ばした。

「ふぅむ……ふつうに剣は通るようだが。どう思う、スィリーズ」

辺境伯が問うたのは、いつの間にか、ぬるりとこちらへやってきていたスィリーズ伯爵だ。

「盟約に縛られているこの空間は、本来、調停者――あのバケモノに攻撃は通用しないはずです。ですがレイジさんが希少な聖遺物を使ってこじ開けた穴のせいで、盟約は不完全のようです」

「ちょっとちょっと伯爵!?　なに、さらっと僕がやらかしたみたいなふうに言ってるんですか!?　あとワケわからないワードが多すぎます!」
「ちゃんと説明しますよ……生きて帰れたら、ですがね」
「むむ……」
「そういうことだ。行くぞ、小僧――他の者はあの穴から外へと逃げよ!」

辺境伯が走り出したので僕もそれに続いた。後ろでは、子どもたちがワァッと光射すほうへと走っていくのが聞こえる。

「ぬおらあああああ!」
『小癪ナ』

辺境伯の肉体に比べるとやたら心細く見える宝剣は、無数の斬撃となって闇を――伯爵に言わせると「調停者」を襲う。
それを調停者はすさまじいスピードでさばいていく。

（全部かわすのかよ）

だけど、

「こっちがお留守だぞ、っと」

僕は石で調停者の背中を思い切り殴る。

『ッグウ……』
「追撃はこちら――」

左手の指先にはそれぞれ火の玉が出現する。これで一気に【火魔

法】５連発だ。

『助けてくれ、助けてくれェッ……』

「うおあ！？」

ビ、ビビった、いきなり調停者の背中にルイ少年の顔が現れるんだもん。

『ギャア！！』

あんまり驚いたから【火魔法】を手加減なしでぶっ放してしまった。調停者が火だるまになって転げている。

「ルイ様ぁ――！！　クソ、バケモノめ！　ルイ様をそんなふうに使って！」

「……小僧、貴様はなかなか鬼畜だの」

一応善人ぶって言ってみたけど、辺境伯には通じなかった。

僕は【森羅万象】ですでにわかっていた。あのルイ少年はニセモノだと。本物のルイ少年はあの闇の奥底にあって――もう、死んでいる。

「さて……それでは聖王陛下、なにが起きているのかご説明願おうか」

辺境伯が階段の上を見やると、呆然とした聖王と、その横に巨大なウサギのエルさんがいた。

「――俺は……」

「え、聖王陛下は非常によろしくない決断をされました。それこそ

が盟約の破棄です。え、かの世界とこの世界をつなぐ盟約が破棄されれば、多くの闇の者どもがこの世界を、え、侵攻するでしょう」

……なんですって？

41

いや、今、え？　急にいろんな情報が入ってきて頭がパンクしそうなんだが？

「意味不明だ。そんで、俺たちはどうすりゃいいんだ」

辺境伯も僕と同じで理解できていないようだけど、さらっと流してしまった。

その割り切り、まさに武人。確かに今ここであれこれ考えている余裕はないんだけど。

「破棄は、いまだ成立しておりません。え、かの調停者をこの場で葬ることが最優先です」

「――辺境伯！　立ち上がりますよ！」

僕は向こうの暗がりで、調停者がゆらりと立ち上がるのを見た。

「じゃあ、徹底的にぶっつぶしゃいいんだな」

「え、さようでございます」

「よし――そんじゃ小僧、もうちっと共闘と行くぞ」

僕はうなずいた。

もとよりそのつもりだからね。

「……後は」

ちらり、と辺境伯は後ろを見やる。

そこにいたのは呆然としている聖王だ。

「目ェ覚まさねェかグレンジードッッッ！！！！！！！」

その大声は、音の波となって聖王を揺らした。

「一度や二度の間違いで膝ァつくな！！　お前は、お前こそが、この国のテッペンだろうがァッ！！！！」

あまりにうるさくて僕は耳を塞いでいたけれど、聖王の目には――光が戻りつつあった。

「……俺が、この国の」

ほろりと、一筋の涙が頬を伝った。

聖王は拳で目元を拭う。

「懐かしい名前で呼ぶんじゃねえよ……」

「……お前が、昔を忘れちまったようだからだろうが」

グレンジードは、聖王が昔持っていた名前なのか。聖王に即位すると同時に名前はなくなるから。

辺境伯はそのころから聖王とは友人だったんだ。

「俺が、聖王だ」

「そうだ。お前が聖王だ」

「俺が、この国を率いるのだ」

「そうだ。お前がこの国の指導者だ」

僕は、それまで聖王という人間を見誤っていたのかもしれない。

人間味があって、おおらかで、クルヴシュラト様を可愛がる。そんな「よき父」としての側面しか見ていなかった。
だけれど今の聖王はどうだろう。

「――エル、あのバケモノを殺すにはどうしたらいい」

調停者が純粋なる闇だとしたら、聖王が身に纏っている空気は――殺気は、人が持つ原罪の闇。あらゆる破倫さえも厭わない、君主としての傲岸不遜。立ちふさがるものをすべて蹴散らす血塗られた覇道。
負の感情を煮詰めたような気配に、僕は思わず気圧されたのだった。

「これを」

エルさんが差し出したのは古ぼけた小さなナイフだった。

「調停者の身体に突き立ててください」
「わかった。――行くぞ、辺境伯、それに小僧」

すっかり僕も、頭数に入っているようだ。

「この国にケンカを売ったことを、バケモノに後悔させてやる」

復活した聖王は圧倒的だった。調停者へとためらいなく踏み込んで行くと、ナイフを振るうどころかパンチの連打をお見舞いしていく。調停者は明らかにナイフを警戒しているのでパンチが面白いように決まっていく。

そして転がっていた金色の錫杖をつかみ上げると片手でぶん回して調停者の身体にめり込ませると、調停者は「く」の字になって飛んでいった。

『ヌアアア！』

転がった調停者の身体から何本もの腕が生えて襲いかかってくるが、その巨体に見合わぬ軽いステップですべてをかわしていく。いくつかの攻撃が地面をえぐり、床を割った。

その間に辺境伯が叫ぶ。

「聖王騎士団！　お前らじゃあ話にならん！　貴族の避難を支援しろ！」

「し、しかし――」

「バカ野郎、言うことを聞け！」

聖王騎士団の動きは精彩を欠いていた。一応第1隊は精鋭ぞろいのはずではあるのだけれど――あそこに倒れている、すでに亡くなっているであろう騎士団長の死がこたえたのかもしれない。いずれにせよ「これが国のトップ？　武闘派トップではなくて？」と思ってしまうほどにキレッキレの聖王にはついていけなさそうだ。

「辺境伯！　今日は見学か！？」

「――フッ、戯れ言を」

聖王に挑発され、辺境伯が聖王と調停者との戦いに割って入る。

「どらあああああ！！」

「ふぉあああああ！！」

う、うわぁお……巨体に挟まれてボコボコにされる調停者がかわいそうに見えるほどだ。このふたりなら竜相手にもイイ線いけるんじゃないだろうか。

「ッ！」

そのとき【森羅万象】が闇の中で魔力が膨張するのを捉えた。

「反撃が来ます！！」

すかさず聖王と辺境伯は調停者から距離を取る――その直後、ボンッ、という音とともに無数の黒い針が、ウニのように展開した。

『下劣デ脆弱ナ世界ノ民ガ……調子ニ乗ルナァァァ！』

針が全方向に射出される。聖王は錫杖を回転させて吹き飛ばし、辺境伯は宝剣で斬って捨てる。僕は、いまだ避難中の貴族たちの前へと飛んで【風魔法】で射線を変えて当たらないようにする。

パッと見るに、スィリーズ伯爵がお嬢様を連れて行ってくれたようだ。

『盟約ハスデニ破棄サレタノダ、後戻リハデキヌ！！』

「いいや、破棄はしてねえな……お前が破棄を宣言する直前に、あの小僧がここに穴を開けた。もうここは、こっちの世界だ。裏の世界との『中間地点』ではなくなっている」

『ヌ、ヌヌ、ヌヌヌ……！！』

「そして現にお前は『盟約の束縛』を失い、俺たちの攻撃に苦しめられている」

『ヌヌウ！！』

「さっさと裏の世界へと帰れ！！」

聖王が踏み込んで錫杖を振り下ろす――瞬間、

『盟約ヲ軽ンジルナ』

調停者の両手が錫杖をつかむ。金色が、どんどん黒に侵食されていく。

「聖王――！！　気をつけてくだされ！　まだなにか隠し持っていそうですぞ！」

「大丈夫だ。どうせこれで終わりだ！！」

膠着しているのかと思ったら、聖王は半身を滑らしてナイフを調停者の胸に突き立てる。

『グヌウ』

「死にくされ！！」

ナイフが白の閃光を発し、調停者の闇を切り裂いていく。

大気が震え、地面が揺れる。

倒したのか――と思ったのだけれど、僕の【森羅万象】は見た目とは違う、ネガティブな観測をしていた。

「陛下、離れてください！」

「あん？　コイツはもう死ぬ――」

「いいから！！」

僕は【疾走術】で突っ込むと聖王の身体にタックルするように突き飛ばす。

ふたりでもんどり打って転がっていくと、

「て、てめぇっ、いい度胸じゃねえか。この俺様を倒すたぁ」
「伏せて！！」
いまだに元気な聖王の頭をつかんで、僕は地面に伏せさせる。
『闇ヨ、門ヲ開ケ。光ヨ、道ヲ開ケ』
光に耐えかねたように、調停者の身体が小さな破片になって燃え上がる紙片のように中空に消えていく。だけれど、それと同時に火の玉のような黒い塊が身体に渦巻いている。
その塊はギュルルルルと高速回転しており、発射準備を整えているかのようだった。
「あ――」
それは避難しようとしている貴族の最後尾だった。聖王騎士団に追い立てられるように逃げていく彼らへとその塊は向いていると【森羅万象】が分析する。
ドームからの出口には聖王騎士団だけでなく、遅れてやってきた護衛たちの姿もあった。
（ミミノさん――）
一瞬、見間違えた。
レレノアさんも避難誘導に協力している。もしこの塊が直撃したらどうなる？【森羅万象】によればその塊は、超がつくほどの高エネルギー塊であるという。
人の身体など、木っ端微塵になる。

「っく！！」

無理な体勢から僕は走り出す。

黒い塊が飛び出す――。

――わたくしたち全員を、守るのだわ。

お嬢様のオーダーは、「全員を守る」だ。

ここで、それを思い出すかよ、僕！！

「うおおおおおおお！！」

スピードが足りない。無意識に【補助魔法】を使用してスピードを上乗せする。僕は手に持った石を、黒い塊の側面に叩きつける。

それは刹那の出来事だ。

ギギギと音がして石が火花を散らすのさえスローモーションに見えた。

ヒビが入って砕け散った石。

黒い塊を止めることはできなかった。

それでも――向かう先は変わった。

貴族たちが集中する場所の１０メートルほど横に飛翔したそれはドームを易々と突き破ると衝撃波が円形に広がってドームを破壊していき、さらには近くの騎士を吹っ飛ばす。

塊は聖王宮へと飛び出すと木をえぐり、砂埃を舞い上げ、第１聖区とを区切る「１の壁」に到達。

それすらも易々と貫通するや、第１聖区最大の建物である聖王議会の中央階段をえぐり、突っ切り、「２の壁」に衝突――したところでエネルギーが爆発的に増大し、外側へ向かって派手に吹っ飛んだ。

「なん、なんだ、あれは……」

ドン、という音と、震動が僕らのところまでやってくる。

聖王が、塊の通り過ぎていった一直線の道をにらんでいる。

すでに調停者の痕跡は残っておらず――そこには冷たくなったルイ少年が横たわっているだけだった。

ドームの頂点から闇が引いていき、ものの数秒で周囲は明るくなっていく。

「終わったのか……？」

「――いいえ」

僕の【視覚強化】が捕捉しているのは立ち上る闇の気配。

「まだ、続きがあるようです」

41（後書き）

昨日ラジオ聞いてたら「外出しないゴールデンウィークになりそうですが、こんなのは一生に一度だけにしたいですね」って言ってて、ああ、なんだかそのとおりだなぁとか思いました。

みんな家にこもってて偉い。みんなでお互いを褒め称えるべきだと思う。みんな偉い。こもってて偉い。強制力ないのにこんなにみんなこもってるんだもんな、ほんとにすごいことですよ。

42

黒いエネルギー塊は爆発したようだったけれど、まだその場に残っている――距離がありすぎて【森羅万象】でもそれ以上の情報がわからないのだけれど。

このまま放置はできない。

石でぶん殴った右手は、砕け散った細かい欠片が突き刺さって血が出ているので、それを【生活魔法（コンビニエント）】で水を出して洗い流し――ああああ痛い痛い痛いよおおおお――【回復魔法】で傷を治す。ああ、石がなくなっちゃったけど……伯爵がなんとかしてくれるよね……？

「陛下、辺境伯閣下、お二方はこちらにお残りください」

「お前は行くのか？」

「はっ」

「それ以上は騎士団の仕事だろう」

「……お嬢様が『全員守れ』とおっしゃったので」

僕の答えは間違っていたのだろうか、聖王は口元をゆがめて獰猛な笑みを浮かべた。

「これを持っていけ」

投げて寄越されたのはエルさんが聖王に手渡した、あの古びたナイフだ。片刃で刀身は反っているが、刃は研がれていない、祭祀用のものだ。

【森羅万象】によるととてつもなく古いものだとわかる。

それ以外は、なんてことのない骨董品に見えるけど。

「――では、行ってまいります」
「ああ」

聖王がうなずき、辺境伯が小さく手を挙げた。僕はちらりとルイ少年の亡骸に視線を投げ、それから走り出した。入れ替わりに、聖王騎士団が聖王たちのところへとやってくる。

（――あの男の子が死ぬなんて）

お嬢様の護衛でお茶会に出てもいたので、何度もルイ少年とは顔を合わせてきた。僕がお嬢様の護衛で、お嬢様と四六時中いることに対して嫉妬の炎をめらめら燃やしていた――そんな、いわゆるふつうの少年だ。

（こんなところで死んでいいはずがない）

ナイフを握りしめる。
あの黒いエネルギー、跡形もなく消滅させてやる。

＊　聖王　＊

駈け寄ってきた騎士たちが心配そうに声を掛けてくるが、それを鬱陶しげに手で追い散らした聖王は、すぐそこに立っていた盟友へと顔を向ける。

「……辺境伯、なにを考えてる」

ミュール辺境伯の貴族服もあちこちがちぎれ、血が流れている。かわし損ねた調停者の攻撃のせいだろう。袖の付け根がやぶれているのは無理に動いたせいだろうが。

「あの速度で射出された物体に、あの少年は攻撃を加えましたな」

「……ああ」

「陛下にはできますか？」

「できるわけがねえだろ」

ふたりですらあのエネルギー塊は目で追うのがせいぜいで、受け止めるならまだしも横から攻撃を当てるなんていう芸当はできるはずがないというのが正直なところだった。

「ふーむ……うちのミラの婿になってはくれぬかな……」

「なにっ！？　お前、まさか辺境伯領にあの小僧を囲うつもりか！？」

「我が領では腕利きがいくらいても足りませんからな」

「それなら聖王都だろうが。ここが聖王国の首都だぞ」

「なるほど――【聖剣術】が失われたとわかれば、動き出す者もあるかもしれませんな」

聖王は右手をこめかみに当てる。

「……それを言うなよ。クソッ。頭が痛てぇことばかりだ」

辺境伯はそんな聖王を見てクツクツと声を殺して笑う。

「笑い事じゃねえぞ。国が混乱すりゃお前の領地だって余波が行く」

「ええ。ですが、頭の痛いことばかりでもありますまい」

「あん？」
「ご覧なされ」

辺境伯が指したのは、神殿の敷地から離れた場所に避難していた貴族と、今日の授与式の主役であった少年少女だ。
親に抱きすくめられている子、泣いて頭をなでられている子、それにレイジの雇い主であるスィリーズ伯爵は娘のエヴァになにかを話しているところだった――それが【魔力操作】の天賦珠玉を与えているところであるとはさすがの聖王にも想像できないことだった。
それよりも聖王の目にはクルヴシュラトとミラがこちらへ駈けてくるのが見えた。

「なんとかあの子らは守れました」
「……それは、まあ、そうだな」

ふう、と聖王は小さく息を吐いた。

「辺境伯」
「はっ」
「……俺がまた迷ったら、この頬を張り飛ばしてでも、正しい道に戻してくれ」

熊のように大きな辺境伯だったが、それを聞いて見せた笑顔は――まるで少年のようだった。

「目一杯殴るから、覚悟しとけよ。グレンジード」

ふたりはコツンと、右拳同士をぶつけ合った。

＊　＊

僕は聖王宮を飛び出すと、第1聖区へと入った。エネルギー塊によってえぐられた場所に何人かの官吏が集まっている。その痕跡を追っていくと、「2の壁」へとたどり着いた。

「これは……！」

周囲数十メートルに渡って壁が崩壊していた。どこかはわからないが貴族家の屋敷がもろに被害を受けており、屋敷も半壊し、広大な庭にがれきが散らばっている。

砂埃が舞って視界が悪い。助けを求める呼び声と、泣き声とが聞こえてくる。

（……チクショウ）

あの場でエネルギー塊の方向を変えられたのはよかったけれど、その結果、ケガをした――あるいは亡くなった人もいるかもしれない。そう思うと僕の心に墨を落としたようなもやもやが広がっていく。

「な、なんだこれは」

背後からやってきた声には聞き覚えがあった。

「――君は、掃除係くん？」

聖王騎士団第2隊を引き連れたアルテュール様がそこにいた。

「ナイスタイミングです。そこの屋敷が崩れてケガ人が出ているようで、騎士団の皆様の力が必要です！」

「なにっ。ここは――リビエレ家のお屋敷じゃないか！」

リビエレ家は6大公爵家のひとつだったはずだ。

「みんな聞いたか。救助活動に入るぞ！」

これはありがたい。こういうときには人手がとにかく重要だからね。

ふと、アルテュール様がルイ少年の護衛だったことを思い出したけれど、僕はなにも言わなかった。今言っても仕方のないことだ。

その間に僕は、いまだ感じられる黒いエネルギーのある方向――広い庭のど真ん中へと向かう。

手入れのされた芝生の庭は広く、植え込みが点在していた。今は土砂やがれきをかぶっていて見事な植栽は見る影もないけれど。

その中央に、それはあった。

（……禍々しい）

そこにすっくと立っている、黒い炎のようなエネルギー。僕の身長よりもずっと大きく、高さは3メートルほど、横幅は2メートルほどだった。

僕が古ぼけたナイフを握りしめた――とき、炎の向こうに巨大な影が見えた。

42（後書き）

ヒナプロさんにお問い合わせ送ったらめっちゃ丁寧な返信があって恐縮しきりです。
あちら様もリモートワークでがんばってるんですね。私もがんばります。

それと超合菌様にレビューをいただきました。ありがとうございます！　私もレイジくん好きです。ていうか登場キャラクターは全体的に大好きです。

43

（や、ばっ――）

そう思った瞬間には、僕は右に飛んでいた。ゴウッ、とすさまじい風圧とともに巨大で、気味が悪いほどに長いなにかが横を通り過ぎていく。僕は風に吹き飛ばされて転がった。まるで真横を新幹線が通り過ぎたかのようだ。

長い。

長い長い長い。

まだ続くのかよ！　終わりが見えないその身体は、蛇だ。

すでに顔ははるか遠くにあり、体表はびっしりと青を含んだ暗褐色の鱗。身体の大きさはちょうど電車と同じ太さ。

そしてなんとも言えない焦げ臭さがあたりに漂う。

（環の蛇（ウロボロス）……！）

自分で自分の尾を食う、いにしえより地球の各地で伝わってきた存在。

その環から「死」と「再生」を想像させる。

だがこの蛇は、今も身体がどんどん出てきている。身体が小さくなるような気配がまったくない。

「でやあああああ！」

起き上がった僕は、黒く揺らめく炎のような門へと向かうと手にした古びたナイフを叩きつけた。その刀身から青色の光がほとばしり、僕の手には細かい振動とともに刀身にヒビが入っていく感触が

伝わってくる。

（もってくれぇぇぇぇ！）

エルさんはこれを使えば調停者を倒せると言っていた。僕にはまだまだわからないことばかりだけれど、このウロボロスは、調停者は、この世界のものではない存在なのだろう。闇のドームを壊すのもスィリーズ伯爵が持ってきた石を使わなければならなかった。ふつうの武器では干渉できないような、仕組みがあるのだ。

ナイフを持つ手が熱くなってくる。火をつかんでいるような感じさえする。今日、僕の右手は酷使しすぎだ。

だけどそれは長くは続かなかった。ある瞬間で、いきなり黒い炎が収縮するとウロボロスの胴体を締め上げたのだ。

『――ッギィェエエエエエ』

絶叫が遠くから聞こえてくる。

ウソだろ……もうあんなに遠くまで行ったのか。あっちって、第3聖区なんて余裕で通り越して第4街区か、下手したら第5街区まで行ってるぞ。

ぎちぎちぎちと胴体を締め上げる黒い炎は、やがてバスケットゴールほどの大きさにまでなると一気に縮んで蛇の胴体をぶち切った。

「うがぁっ」

黒い体液が噴射され、僕は飛びのいたものの身体の半分にはびっしり掛かってしまう。生臭い。気持ち悪い。

びたんびたんとのたうっている蛇の胴体は、そのサイズでやられてしまうと周囲の庭を掘り起こし、地響きを伴う。

「な、何事だ！」

血相を変えてアルテュール様がやってくる。

「ええと、あの――なんていうか」

「モンスターがこんなところに！？」

「そう、それ！　モンスターです！　とりあえず誰も近づかせないでください！」

「そもそもこれじゃあ近づけないだろう！」

「確かに！」

僕は走り出す。

「どこに行く！？」

「頭を叩きに！」

蛇の胴体はまだ生きている。遠目に見ると、身体は貴族の屋敷の塀を乗り越え、隣の建物にしなだれかかり、さらにははるか向こうにまで続いている。こんなのが暴れたら大惨事だ。

なんとしてでも早く、制圧しなければならない。

あのクソ調停者、こんな置き土産しやがって……！

「お嬢様、『全員守れ』の対象は、ほんとに全員なんですかねえ！？」

こんなにデカくなってしまっては、さすがにこれ以上の犠牲が出ても僕にはどうしようもないんじゃないかと思う。

でも、それでも、お嬢様は――僕にきっと期待するだろう。

僕なら、護衛のレイジなら、死力を尽くすんでしょうと。

「これ、もう呪縛だよな……！」

僕は刀身が焦げて、今にも折れそうなナイフを胸ポケットにしまって全速力で駈ける。数々の筋力強化系天賦に、今回は【補助魔法】も追加だ。継続して【回復魔法】もかけ続けないと僕の肉体はばらばらになりそうだ。

蛇の頭へと至るショートカットは、当然蛇の胴体をたどること。僕は胴体の上を走って走って走って、「３の壁」を越えて「４の壁」を越えて「５の壁」を越えた。中には半壊している家もあったけれど、それを助ける余裕は今、ない。

「くっ……やっぱり……」

第５街区は庶民の街だ。

貴族街に比べればずっと耐久度の落ちる建物だし、しかも密集している。

ウロボロスの頭は、人出の多い大通りのど真ん中に落ち、身体は数十という家々を踏み潰していた。

そこここで泣き叫ぶ声が聞こえ、悲鳴とともに逃げ惑う人たちがいる。

大混乱だ。

『ギイイエエエエエエエ』

そこで初めてウロボロスの顔をはっきり見た。

鎌首をもたげた頭は、そこらの家々よりもずっと高いところにある。

鱗と同じ色の皮に覆われ、赤の目が６つ。ぎざぎざとした角が４本生えている。口は大きく無数の鋭い歯が生えており、しゅるると長い舌を出していた。

「ひっ」

腰を抜かした女性と、抱きかかえた子どもがいる。ウロボロスは明らかに彼女たちをターゲットにしていた。

「――これ以上は、やらせない！」

僕はウロボロスの胴体を走り、跳躍、その勢いで身体を一回転させる。

学習済みの【蹴術】は身体に染みつくほど訓練した。

「うおおおおッ！」

ローリングソバットがウロボロスの後頭部に直撃する。むちゃくちゃ、硬い。足には骨が砕けるような感覚が伝わってくるけれど、それを即座に【回復魔法】で治癒。

ウロボロスは突如として走った衝撃に、前のめりに倒れる。通りに出ていた果物の屋台と串焼きの屋台を2つつぶした。

「立てる？　早く逃げて」

「ひっ」

狙われていた女性と子どものところに近寄ると、怯えられた。ああ……まあ、確かに僕の服は結構ボロボロだし、血も流したし、なによりウロボロスの体液が身体半分覆ってるしね。

（あー……ラルクが助けてくれたとき、僕も怯えて逃げちゃったんだよなー……）

４年前のほろ苦い記憶を思い出したけれど、４年も経つと後悔は残っているものの、なんだか懐かしささえ感じた。
女性が子どもを連れて逃げたのを横目で見つつ、僕は声を上げる。

「皆さん、できる限り遠くへ逃げてください！！　このバケモノは第２聖区からここまで胴体があるんです！　ちょっとやそっと離れるだけだとすぐに追いつかれます！」

僕の脅しは利いたのか、人々がワァッと声を上げて逃げていく。

「で……まあ、僕にロックオンするよね」

ウロボロスはゆっくりと、顔を持ち上げ、僕を見下ろす。
完璧に僕を敵だと認識したらしい。

（……どうする）

僕は考える。これほど大きな敵を相手に有効な攻撃手段はなにかあるか？　武器が欲しいけど取りに行くような余裕は――。

「え」

ひゅんひゅんと回転して僕の手元に飛んできたのは１本のショートソードだ。投げてきた方角を見ると、建物の陰でゼリィさんが小さく手を振っている。
くう～～、やるじゃん、ゼリィさん！　これで賭け事にさえ手を出さなければ最高なんだけど！　あと部屋の掃除もちゃんとして！
お風呂にも入ってください！　お酒も飲み過ぎないで！　ああ、ダメだ、悪口しか出てこなくなっちゃう！

（ゼリィさんには警戒をお願いしてたからな）

今日の天賦珠玉授与式でなにかが起きるかもしれないから、なにが起きても対応できるようにねと無茶振りしておいたんだ。で、こんな騒ぎが起きたから僕の武器を持ってきてくれたんだろう。

この剣は今まで訓練や実戦で使用してきたもので、僕の手になじむ。

（あとは……どこまでやれるか、だっ！）

僕が剣を手にした直後、ウロボロスは顔を突っ込ませてくる。早っ。あのバカデカイ図体で、気づけば目と鼻の先に迫ってるとかアリかよ！

横に転がって攻撃を避けつつ、立ち上がりざまショートソードで斬りつける。

浅い。

あと相変わらず硬い。

「っ！？」

顔が通り過ぎたので油断していた。胴体がうねって僕の身体に衝突する。

ふわりと宙に浮く感覚のあと、地面に叩きつけられて転がった。

「いっつう……」

ぎりぎりで後ろに跳んでいたのでショックを軽減できたけど、ダメージは残る。

これは厄介だ。今までこんなサイズの蛇と戦ったことがないから、どんな動きが来るか予想もできない。

かといって時間を掛ければ、蛇が周囲の建物を破壊するだろう――なにせ寝返りを打つだけで家の1つや2つ、簡単に破壊できる大きさなのだから。

なるべく、短期決戦。

（だけどどうする――僕ひとりでできるのか？　大体この武器で本気で斬りつけたら折れるぞ。でも手加減していたら致命傷を与えられない……）

となれば、折れる覚悟で一撃を見舞うしかない。

（チャンスは1回、多くて2回）

ピリッ、とした緊張感に身を包まれる。

（どうする……なんとかして隙を作りたいけど、魔力の残量が心許ない。僕ひとりじゃフェイントを掛けても難しい……なにか、なにか手はないか？）

そのとき、だ。

足音が聞こえたんだ。

僕の耳は【聴覚強化】によって小さな音もかなり拾える。さらには【森羅万象】のせいで、一度覚えたことは忘れられない。

近づいてくる3人の足音は、僕が知っているものだった――いや、正確には少しだけ記憶と違った。それはそうだろう、歩いている場所、靴が違えば音だって変わる。

それに、なにより。

4年も経ってしまっては。

「……巨大なモンスターが出たと聞いて来てみれば、まさかこんな

形での再会とはな」

ずしりとしたメイスに、その巨体を隠すほどの大盾を持ったその冒険者は、「硬銀の大盾」だなんて二つ名まで持っているダンテスさんだ。

「やっぱりこの街で会えるような気がしていたんです。神は導いてくれますから」

すっかり大人の女性になりつつあって、さらには――ま、まさか、また胸が大きくなってしまわれたのでは……と思わずその胸元を凝視したくなる修道女姿のその人は、ノンさんだ。

「……レイジくん、だべな？」

そして、3人目は。

「はい、僕です」

4年経ってもちっとも変わらない。彼女の背は伸びていないから僕が追い越してしまって――可愛らしい顔をくしゃくしゃにして、泣き出しそうなのを必死に我慢しているその人は。

「言いたいこと、話したいこと、いっぱいあるんだからな！」

「はい」

「だけど、今はこいつを倒すんだべな？」

「はい。協力、お願いします」

ミミノさんは。

「レイジくんがそう言うなら、もー、しょうがないなあ！」

４年振りにあってもやっぱりミミノさんだった。
僕はもう、ウロボロスには負ける気がしなかった。

44

「来ます！」

ウロボロスは新たにやってきた3人も敵だと認識したのか、その大きな口を開いて一気に噛みつこうとする。

「ノン、ミミノ、距離を取れ！」
「はい」
「もっちろん！」

ノンさんとミミノさんが後ろへと回避行動に移るが、ダンテスさんはウロボロスへとむしろ一歩踏み込んだ。

「ふんっ」

がぶりと噛みつかれる直前、今度はバックステップ。
上手い。
距離の目算が狂ったウロボロスの口は空を切った。

「ぬおおおお！」

ダンテスさんの右手にあったのはメイスだ。太い鉄の棒、その先の打撃部は鋼板が花びらのように開いている。
いつ使用されたのか、ノンさんの【補助魔法】によってダンテスさんの身体能力が数段アップしていた。
ウロボロスの鼻先に振り下ろされたメイスは、僕のショートソードでは浅い傷しかつけられなかったその鱗を破壊し、めり込み、地

面に叩きつける。

《カアアアア！！》

ウロボロスは鼻先から血をまき散らし、声なき声を上げてゴロゴロと転がる。

通りの家々に激突していくつかが半壊し、いくつかの壁が陥没する。

（つっよ……）

巨大なモンスターに対してためらいなく踏み込んで行き、それをフェイントとして一撃を見舞う。攻撃の思い切りの良さ、そしてその威力は――。

（明らかに４年前より強くなってる！）

ダンテスさんなんて４０手前だよね！？　なんでパワーアップしてるの！？　ふつう体力が落ちていくもんじゃないの！？

僕の驚きに気づいたのか、ダンテスさんがにやりとする。

「４年もあったんだぞ。お前だって相応に強くなったんだろう？」

「……はい」

それはそうだ。４年という歳月は誰にも平等に流れている。

僕だって負けてはいない。

「ダンテスさん、ウロボロスの隙を作るので、少しだけ拘束してもらえますか？」

「任された」

どうやって、とも、なぜ、とも聞かれない。
ただうなずき、請け負ってくれる。
僕に対して絶対の信頼を置いてくれているんだ――それがうれしかった。

「動き出しました！」

ウロボロスはダンテスさんに怒りの目を向けており、その目に魔力が込められるのを【森羅万象】が確認する。

（先手はこっちだっての！）

僕は即座に【火魔法】を右手で放ち、左手で【風魔法】を加える。
殺傷能力はない炎だけれど、火勢は大きく、ウロボロスが驚いて身体を引く。

「……レイジ、お前今２つの魔法を同時に――」
「こっちからも仕掛けます！」

僕はウロボロスの頭の反対側へと走る。６つも目があるのでさすがに捕捉されてしまっている。

「おっと」

闇の塊が高速で飛来する。１発、２発、３発――【闇魔法】だ。
ステップを踏んでかわすと、闇の塊は石畳に触れるや爆発を起こす。
飛んできたがれきと砂埃で視界が悪くなる。そこへウロボロスの巨顔が迫ってくる。

「来ると――思った！」

ウロボロスは巨大な獣だ。その一方で多少の知恵が働く。火に怯え、敵を認識し、魔法を使う。

であれば、多少の策を弄することくらいはわかりきっていた。

（【水魔法】！）

残った魔力のほとんどを使って僕は魔法を発動させる。

【水魔法】はその名の通り水を操る魔法であり――一方で、【火魔法】と対極にある低温を扱うこともできる。人によってはこれを「氷魔法」と呼ぶらしいけれど、「氷魔法」という天賦珠玉は存在しない。

地面に両手を突いた僕の目の前に、分厚い氷壁が3枚現れる。

僕の体内から急速に魔力が枯渇していくのがわかる。

これで止める。

【森羅万象】によるといけるはずだ。

これでウロボロスを止める――。

「げっ、マジで！？」

ウロボロスはまだ奥の手を隠していた。【闇魔法】が発動してウロボロスの巨体を包み込む。

1枚目を簡単に破ったウロボロスは2枚目も減速しつつも破り、3枚目の壁に衝突し――ベキ、ベキベキベキ、とヒビが入ると氷壁はあっけなく崩れてしまう――。

（ヤッバ）

このままだと衝突する。僕が回避行動に移ろうとしたときだ。

ひゅるるる――。

小さな壺が飛んできた。緑色の釉薬で焼かれた陶器の壺は、崩れた氷壁に当たると砕け、紫色の燐光をまき散らす。

「――へ？」

動画の早戻しを見ているかのようだった。3枚の氷壁がもう一度現れて――ウロボロスを包み込むように展開する。

『グ、ゴゴ、アアア……』

まるで首輪のように氷壁に包まれたウロボロスは身動きが取れなくなる。

「ぬっふふふ、わたしの調合した秘薬『魔法複製薬（デュープ・ポーション）』はどうだべな？」

離れた場所で投擲を決めたミミノさんがドヤ顔で腕組みしている。すごい。かわいい。

ていうか、一度発動した魔法を再現するアイテムってこと？　なにそれ、聞いたこともない。

「レイジ……動きが止まったようだが」

「はい。ウロボロスがどうかはわかりませんが、変温動物は体温変化に弱いですから」

「？　なんだそれは」

ダンテスさんが首をかしげている。

「あー、まあ、また今度説明します」

ウロボロスが変温動物なのかどうかはわからなかったけれど、蛇とよく似た姿形であるということは蛇の特性も引き継いでいる可能性が高い。弱点は低温じゃないかと僕は思ったのだ。

「とりあえず、ダンテスさんに拘束してもらう必要は――」

「油断しないで！　まだ動いてる！」

ノンさんの鋭い声にハッとする。僕らの目の前にあった顔が、寒さのせいで緩慢な動きになっていたので油断していた。

ぐぐぐと持ち上げられた胴体は、まるでそびえ立つ大木のようになってこちらへ倒れてくる。

「むん！！」

メイスから手を離したダンテスさんが、僕の前へと滑り込んで両手で大盾を構える。車が衝突したかのような音が走り、

「ぬおおおおッ！！」

いなすように僕らの横へと胴体を弾き降ろす。地面が揺れて砂埃が舞う。

「レイジ！　早くトドメを！！」

「――はい！」

すでに僕はウロボロスの頭頂部に飛び乗っていた。魔力が枯渇気味で視界がぐらりと揺れるのをぐっとこらえる。

ショートソードを逆手に持ち、高々と掲げた。

「神のご加護を！」

そこへノンさんが、【補助魔法】をかけてくれる。【回復魔法】や【補助魔法】と言った「神秘特性」の魔法は相手に触れることでいちばん効力を発揮し、距離を置くとどんどんその力は薄れていく。今、僕とノンさんの距離は１５メートルほども離れているというのに、魔法が届いたということに僕は驚いた。

それはまるで、空から神の使いが降りてきたかのような幻想的な光景で――実際に光が降り注ぎ、僕の身体に力がみなぎる。

（これ、なんか別の魔法も混じってる！）

【補助魔法】でこんなエフェクトがつくなんて聞いたこともない――ノンさんもノンさんで、なにか新しい技を身につけているのだ。

「でやァッ！！」

僕は切っ先を、ウロボロスの６つの目の眉間に突き刺した。刀身の半分ほどめり込んだところで止まりかけ、そこを全身の筋肉で無理矢理ねじ込んでいく。

「どっせえええええええい！！！！」

ずぶ、ずぶぶぶ、と剣が刺さっていくと――バキン、と固いものを割るような感触があった。

するとウロボロスの身体が一瞬硬直したと思うと、力が抜けてその場に倒れていく。

「あ……」

ウロボロスから飛び降りた僕は、ダンテスさんのすぐ横に着地する。蛇の巨体は、急速にその鱗が色あせていくと思うと、ちりちりと灰になって空へと舞い上がっていく。

「え、ちょっ、消えちゃうの？」

僕の身体に染みついていた体液もまた急速にパサパサになり白く変わっていく。

「倒した、ということか？」

「た、たぶん……」

【森羅万象】でももはやウロボロスに生命反応はない。

風が吹くとますますその勢いは早くなり――呆然と見守っている間にウロボロスの身体は半分以上が消えていくこととなった。

だけれど、そこには黒光りする巨大な骨だけが残った。まるで化石の標本のようなそれは、第2聖区からここまでをひとつなぎにする黒い線路のようでもあった。

ウロボロスの頭骨には僕の剣が突き刺さったままで、そこには赤色の宝玉が真っ二つになっていた。

聖王都の脅威は去った……と言ってもいいだろう。

45

手が伸びてきて、僕の頭に載せられた。

「大きくなったな。４年も経てば当然か」

「……ダンテスさん」

動かなくなったウロボロスの骨の前で、ダンテスさんが僕の頭をくしゃくしゃとやる。

「レイジくん！」

「うおあ」

横から、タックルするようにしがみついてきたのはミミノさんだ。いくら僕のほうが背が大きくなったとは言っても、ミミノさんとは少ししか違わない。

「もう、もうっ、捜したんだぞ！　ずっとずっとずっと！」

「す、すみません……僕もいろいろあって」

ミミノさんたちにはなにも告げられないままお別れとなっていた。もちろん僕だってそんな恩知らずな真似をするのはイヤだったけれど、あのときはそうせざるを得なかった……ラルクのことがあったから。

クルヴァーン聖王国での星６つ天賦珠玉の扱いを考えるに、ラルクが手にした【影王魔剣術】はとてつもない価値を持っているものだろう。

はー……今ごろラルクはなにしてるのかな。

ともあれ、キースグラン連邦は今でも【影王魔剣術】の天賦珠玉を追っているだろうし、「銀の天秤」のみんなには変に情報を明かすわけにはいかなかったのだ。僕やラルクとグルだと思われたら迷惑を掛けてしまうから。

「今はなにをしてるべな？　服は上等っぽいし――あ、ケガは！？　ケガはしてない！？　血がついてるじゃない！　ノン、すぐに【回復魔法】――あだっ」

後ろからやってきたノンさんがミミノさんの頭にチョップをくれていた。

「レイジくんは血こそ流してますけど、外傷はないようですよ。ね？」

「あ、はい――」

「うふふふ。【回復魔法】まで使えちゃうんですかねえ。すごいですねえ、レイジくんはこの４年でいったいどこまで成長したのか……うふふふ」

ノンさんの笑い方が怖い！

「――あそこだ！」

「――もう戦闘終わってねえか？」

「――マジだ。なんだよあのデケエ骨は！」

通りの向こうから多くの武装した冒険者たちが駈けつけてくる。すでに戦闘終了だとわかると、ガッカリしたような、骨の巨大さを見てホッとしたような顔だ。

「お前らが仕留めたのか？」

腰に二振りの剣を佩いた冒険者に聞かれ、ダンテスさんは鷹揚にうなずいた。

「なんだよ、抜け駆けはずりぃぞ！」

「ったくヨソ者がよぉ」

彼らはこの街の冒険者らしく、「銀の天秤」が倒してしまったことを妬んでいるみたいだった。

（いやいや、抜け駆けって言ったって、ダンテスさんクラスじゃないとまともに戦うことだってできないでしょうに……）

僕が少々ムッとしていると、ダンテスさんが、

「俺たちはすぐに飛びだしてきてしまったが、ふつう、冒険者はギルドに1回集まって行動するからな。それに市民の避難を最優先にするし」

と教えてくれた。

「でもどうしてダンテスさんたちはこんなに早く？」

「ノンが『今すぐ行きましょう』って強く言ったからな……こいつは、こういうときの勘が鋭いんだ」

「うふふふ」

その笑い方怖いですノンさん。

「一一隊長、バケモノは沈黙しているようです」

「一一なんだと！？」

今度は逆の通りから馬を走らせてきたのは５０騎からなる聖王騎士団だった。
今度は見知った顔があるな――あれはたぶん、第１１隊だ。
「全体停まれ！！」
馬上から僕らと、冒険者たちを見下ろして第１１隊隊長が言う。
「これを倒したのはお前たちか」
「ああ、そう――」
「これは冒険者ギルドの手柄だ！」
さっきダンテスさんに話しかけてきた男がそんなことを言い出す。
「騎士団があとから来て自分たちの手柄にするんじゃねえぞ！」
すると「そうだそうだ」と他の冒険者たちも声をそろえる。
「ほんとうにお前たちが倒したのか？　これほど巨大なモンスターを？」
「そうだっつってんだろ。騎士団は引っ込んでろ」
「引っ込むわけがないだろうが。この巨大蛇は第２聖区から破壊してここまで来ているのだぞ。我らが素材を引き取る」
「なんだと！？　バカを言え、これは冒険者の取り分だ！」
「一度、騎士団が接収し、それから公平に分配すると言っているのだ」
「ピンハネするだろうが！」
「なにを。黙って言わせておけば！」

やいのやいのと言い合いが始まっている。

「……」

僕はと言えば、それを冷めた目で見ていた。なんだか疲れがドッと噴き出してきたというのが本音だ。まあ、そりゃそうだよね。緊張の糸が張り詰め続けてたし、多くの人の命が掛かって――もちろん僕の命すら危ういところもあった戦いだったわけで。

それを、誰の手柄がどうとか、心底どうでもよかった。

「ミミノさん、ダンテスさん、ノンさん。まだこの街に滞在しているんですよね？　僕、今スィリーズ伯爵家にお世話になっているので、一度戻らないといけません」

「そうなの？　伯爵家？　はぁ～、レイジくんてばすごいところにいるんだねえ」

「レイジ。俺たちは『銀橘亭』という宿にいる。必ず連絡してくれよ――お前から受けた恩を返すまでは死なないと決めたんだからな」

ダンテスさんが右手で左肩をパシンと叩く。戦っているのを見てわかったけれど、石化は完全に治っているようだ。

「じゃあ、また後日」

「必ず連絡してよね、レイジくん！」

「そうですよ。お父さんなんてレイジくんに再会できたらアレをしてやろうコレをしてやろうってずっと言い続けてたんですから」

「……それを本人の前で言うのか、娘よ」

なんだかそこまで言われてしまうとこっちもこそばゆい。

僕は騎士団と冒険者たちが言い争っているのを横目に、骨だけになったウロボロスの頭に飛び乗るとショートソードを引き抜いた。

「うん……？　お前は、掃除係ではないのか？」

隊長が僕に気がついた。

「はい」

「まさかとは思うが、お前がこの巨大蛇にトドメを？」

「は――」

「――そんなワケねえだろ！　ガキだぞ、こいつは。俺は遠目に見たが、とんでもなくデカイ蛇だった」

横から冒険者が口を挟んでくる。

やれやれ――この剣も酷使しちゃったし、新調しないとかな……とか思いつつ、剣を鞘に戻して僕は飛び降りた。

「それじゃ、また」

「ああ」

「まただべな」

「必ず連絡してくださいね～。前科があるので疑ってますよ～」

「あははは……」

ノンさんにはかなわないな、と思いながら僕は「銀の天秤」に背を向けた。

それから、第2聖区の伯爵邸に戻るのにだいぶ時間が掛かってしまった。ノンさんの【補助魔法】が切れたのも手伝って、身体に疲労と気怠さが押し寄せたのだ。戦いのせいで僕の見た目はだいぶぼろぼろになっていたし、伯爵家の人間だとわかる証明であるポーラ

ータイの留め具を落としてしまっていた。
なんと助けてくれたのはゼリィさんである。ゼリィさんは僕が落としたのをめざとく見つけ、拾っておいてくれたらしい。「これで貸し借りなしっすね！」とか言っていたのだけど、さすがに借金の額と比べたらたいしたことはないんですがね？　それでも1割くらいは減らしてあげてもいいかなと思えるほどには僕も疲れ切っていた。あとウロボロス戦で全然手伝ってくれなかったよねと聞いたら「あんな超人と怪物の戦いに割って入るほど命知らずじゃないっす！」といい笑顔で言われた。
伯爵邸に戻ると、すでにお嬢様は在宅だった。僕の姿を見て小さく叫んだお嬢様はあわてて駆け寄ってきた。僕は正直に、死力を尽くしたけれど、全員を守れずごめんなさい、と伝えた。それを聞いたお嬢様は、目から涙をぽろぽろとこぼして――調停者との戦いのときにも懸命にこらえていたのに、そのときばかりは涙をこぼして――僕の頬を両手でつかんだ。
「わたくしはバカな主なのだわ」
お嬢様の手は柔らかくて、すべすべしてて、温かい。
「愚かな指示を出してあなたを死なせるところだったのね」
僕は否定したかった。お嬢様は12歳にしては信じられないくらい賢いし、気丈で、カッコイイ。それに僕だってイヤだったら断るし、お嬢様のために働くのは、今は、結構楽しい。だけれど僕はだいぶ疲れていたし、つかまれたほっぺたが温かくて気持ちよくて――そのまま眠りに落ちてしまったんだ。ああ、お嬢様、魔瞳は大丈夫なんだろうか、とか、そんなことを考えながら。
……僕が眠っている間に第1聖区と聖王宮で、もう1つ大きな騒

動が起きていることも知らずに。

46

目が覚めると真っ暗だった。僕に与えられている私室は、手狭ながらも、室内で遊べる娯楽なんてものがほとんどないこの世界では十分な広さだった。

窓から射し込む光はか細く、ああ、「新芽と新月の晩餐会」からほぼ1月だから、新月前後なんだよな……そりゃ夜は暗いわ。

「お腹空いたな……」

「……それならなにか用意させるのだわ」

「そうですか？　ありがとうございま――」

薄暗い中にその人の姿を確認して僕は「ひっ」と情けない声を上げてしまった。

「おおおおおおおお嬢様!?」

「なにをそんなに驚いているの？　わたくしが主であなたが護衛。そばにいるのは当然でしょう？」

「あ……」

僕はお嬢様の目の下に、べったりとくまができているのに気がついた。【森羅万象】を使うまでもなく、お嬢様が僕のベッドサイドで看病――見守っていてくれたことがわかる。

僕の服は寝間着になっているし、誰かが着替えさせてくれたんだろう。身体もスッキリしているから汚れも拭ってくれたに違いない。ところどころ【回復魔法】で回復しきれなかった場所には包帯も巻かれている。

「左手首のここの包帯、お嬢様が巻いてくれたんでしょう？」
「どうしてわかるの！？　あっ、巻き方が下手くそだとか思っているんでしょう！」
「執事長やメイドたちは？」
「下がらせましたわ。護衛はあなたひとりだけですもの」

護衛は身体を張るのが仕事だ。少なくとも僕はそう思っているし、お嬢様の命を守るためなら「なんでもする」というのが僕に与えられた任務だろう。

これは仕事だ。僕はちゃんと対価をもらっている。

だけど一方でお嬢様の気持ちもわかる。僕だって、僕を護衛してくれている人が、僕のために大ケガを負ったら全力で看病するだろう――ただその感覚が、庶民的なものだというだけで。

伯爵家の令嬢が、護衛のためにここまでがんばるというのはやはり異常だ。

いや……お嬢様の感情が細やかで優しくできている、ということなのだろう。

「お嬢様……魔力をコントロールできているようですね」
「ええ……お父様が、【魔力操作】の天賦珠玉をくださったの。こんな状況では授与式はまた延期だろうからって。これで文句を言う貴族がいたら懲らしめてやるって」
「はは……」

伯爵はいつから授与式では別行動をしていたのだろう――僕はそんなことをふと思った。あのときの伯爵の行動は、2手も3手も先を読んでいたように感じられる。

「ルイ様は……どうなったのかしら」

お嬢様が、恐る恐るというふうに聞いてきた。そうか、お嬢様はその顛末を聞かずに伯爵邸まで戻ってきたんだな。

「亡くなりました」

「！」

びくり、と身体を震わせたお嬢様だったけれど、それから静かに目を閉じた。

「……そう、なの」

「はい」

「わたくしの『鼓舞の魔瞳』を見てから、ルイ様は行動がおかしくなったの」

そうか、そういうことか。お嬢様はルイ様の死を、自分のせいだと思っているのか。

気にしなくていい、とか、あなたのせいじゃない、とか、言おうと思えば言えるけれど、僕は言わなかった。お嬢様にそんなうわべだけの言葉が意味があるとは思えなかったし、なにより僕だってあの場でなにが起きていたのかは知らなかったわけだし。

僕が着いたときにはもう……。

「レイジ……？」

「……」

もう、ルイ少年は死んでいた。

僕は自分の手のひらを見る。僕がすくいとれる命の数は限られていて、僕にできることには限りがある。

前世の16年と、記憶が戻ってからの4年、それなりの人生経験を積んだつもりになっていたけれど――全然、足りないよ。心が潰

物石みたいに重くなって、僕をぎゅうぎゅうつぶしてくる。
でもきっと、

「お嬢様」

お嬢様は、12歳にして、僕と同じ思いに苛まれている。

「お嬢様はその魔瞳を使いこなせる人物になってください」
「！」

「鼓舞の魔瞳」はコントロールできなければ暴走するが、コントロールできるようになればとてつもなく有用だ。
たとえば演説の前のスピーカーを励ますこともできる。たとえば大舞台の前の演奏者の不安を消すことができる。たとえばプロポーズを考える恋人の背中を押せる。
もちろん……戦争に利用することだってできる。

「わたくしは……使い方を間違ったのね」
「違います」
「いえ、きっとそうよ。でなければルイ様は――」
「ルイ様は、なにがあっても、絶対に『エヴァ嬢のせい』だなんて言いませんよ。それこそ死んでも言わない」

僕は確信していた。あのルイ少年が、見栄っ張りで、ワガママな――ごくふつうの男の子が好きな女の子のせいになんてするもんか。

「でも……この目がなければ」
「お嬢様、それは違います。その目は生まれ持っているものでしょう？　人は自分の生まれを否定はできない。でも生きる道は選べる」

僕は前髪をまくってみせた。小さく【火魔法】で火を点すと、ちょうど髪の付け根が見える。
そこは――そろそろ染髪料を使わなければなと思うほどには、黒い。

「僕の髪は黒いんです。そのせいで忌み嫌われ、親に捨てられました」
「――――！！」

お嬢様が目を見開いて悲痛な表情を浮かべる。
違うよ、お嬢様。僕はあなたの同情が欲しかったわけじゃない。

「でも今は毎日を楽しく過ごせています。それは僕が、スィリーズ伯爵に雇われることを自分で選んで、お嬢様と時間を過ごすことを決めたからです」
「……わたくしと？」
「はい。ですから、すべてはこれからです。これからどうするかです。使い方さえ間違えなければ『審理の魔瞳』よりもずっと、多くの人に役立てることができます」
「……お父様よりも？」
「はい。伯爵は――」

そうと言ったことは一度もなかったけれど、あの人は「審理の魔瞳」のせいで聖王からは重宝されたけれど、多くの人から嫌われることになった――そのことを、一度や二度は恨んでいるに違いない。
彼がウソを見抜く以上。心許せる友人を作ることだってままならないに違いないから。

「……お父様は、すごい方なのだわ」

ぽつりと言ったお嬢様の双肩には、スィリーズ家の当主として伯爵の後を継がなければいけないという重荷が掛かっている。
膝の上に置かれた手が、落ち着きなく開いたり閉じたりしている。

「なら、止めちゃいますか」
「――え？」
「伯爵家をなくせばいいんです。もともと領地もない貴族家ですから、ここで働いている人たちに十分なお金を渡し、爵位を返上すればお嬢様は自由です。改めて勉強して官吏を目指してもいいし、街で商売だってできるし、なんなら優雅に暮らして長い余生を過ごすこともできるし、反対に危険がお望みなら冒険者という道だってある。それだって選択肢はあなたにあるんですよ。どうします？　お嬢様が望むなら僕はこの国からだってあなたを連れだしてみせましょう」

46（後書き）

またレビューをいただきました。トシ様、ありがとうございます！

47

僕は、どうも伯爵は、お嬢様による爵位返上も見越しているのではないかという気がしていた。

人材斡旋所潰しのこともそうだし、お嬢様が街を散策したいと行ったときに好きにやらせてくれたこともそう、今回の天賦珠玉授与だって授与式をブッチしてもいいだなんて発想は――あまりに貴族社会の軽視だ。

つまり伯爵は、貴族としての立場よりも、お嬢様が人間的に成長することを優先している――いや、あまりに先を急いでいる感じがある。

（伯爵は去年のあの日、襲撃を受けて僕が救ったときに、もう、今生をあきらめたのかもしれない。次に襲撃があったらもう助からないかもしれない。であれば1日でも早く、お嬢様が自分の足によって立てるようになって欲しいとそう願っているんだ）

そんな話、一度も聞いたことはないけどね。

まあ、あの人は言わないだろうね。

（言わなければ言わないで、伯爵がもしも亡くなったときに僕は絶対「伯爵を守れなかった」って自責するもんな……そうしたら「お嬢様が大人になるまではそばについています」とか絶対言い出すもんなー！　僕！　伯爵はそこまで見通してそうなんだよなー！）

この世界、単なる武力だけでは強い弱いがわからないことが多すぎる。貴族怖い。正確には頭のいい貴族怖い。誰だよあの伯爵に権力持たせたの……。

「……レイジ」

僕がつらつらと考えていたら、お嬢様もお嬢様でいろいろと考えていたようだ。

「わたくしはスィリーズ伯爵の娘。その道をまっとうするのだわ」
「……そうですか」
「貴族でなければできないことは多いでしょう？　そのすべてをやり遂げてから自由になるのでも遅くはないから」

そう言い切ったお嬢様に迷いはなかった。両手をぎゅっと、膝の上で握りしめていた。

「そ、それでレイジ……」
「はい？」
「わたくしは、あ、あなたにも、今後も……その、ずっとついてきて欲し――」

ぐぅー。

僕の腹がすごい音を立てた。

「……」
「……」

いや、しょうがないよね？　朝からずっとなにも食べてないし、なんだかんだ身体を動かしたり血を流したりしたしね！？　だからお嬢様、そんな、ある一定の性癖を持つ人には「ご褒美」と思われがちな軽蔑視線を僕に送らないでよ！

「はあ……目覚めて最初の言葉が、空腹だったのだわ」
「ははははは……すみません」
「今から料理人になにか作らせるわ」
「いえ、大丈夫です。僕が厨房に行ってパンでも勝手に食べますよ」
「そう……」
「……それよりお嬢様、さっきなにか言いかけてませんでした？　お腹の音がすごくて後半聞き取れなかったんですが」
「！！」

するとお嬢様は、この暗い室内でもはっきりとわかるくらい赤くなると、

「わたくしも寝るのだわ！」

急に立ち上がって大きな声を上げた。

「そ、そうですか？　それじゃ部屋まで送ります――」
「要らないわ！　ひとりで行くの！」
「えぇ……」

護衛は僕ひとりとか、護衛は主のそばにいるもの、とか言ってなかったっけ……。

なんかよくわからないけどぷりぷりしたお嬢様は部屋を出て行ってしまわれたので、僕はその後に続いて部屋を出て厨房へと向かった。パンは残っていなかったけれど、青リンゴっぽい果実だけは大量にあった。

「……ってこれ、僕が鉱山から逃げ出したときに森でかじってたあの青リンゴっぽいアレじゃん」

なんだか懐かしい気持ちになりながら青リンゴっぽいアレをたらふく食べた。みずみずしくて酸味が効いていて、僕はすっかり目が覚めた。

（……僕は卑怯だ）

いつか僕はお嬢様の前を去る。なぜなら僕にはやらなければいけないことがあるから。

（選択肢はあるとか言いながら、あんなふうに言われてお嬢様が「じゃあ逃げる」なんて言わないことくらいわかっていた……）

僕はいなくなってしまうから、僕もまた彼女に、自分の足で立ってもらうように無意識のうちに仕向けていたのだ。

お嬢様の護衛でずっといられたら、どんなに楽だろう。

あるいは僕のやるべきことが全部終わったらここに帰ってこようか。

（……今は、それを考えるときじゃないな）

ラルクとルルシャさんの情報が入るまでは聖王都にいることになると思う。「銀の天秤」のみんなとの再会はうれしいけれど、今すぐいっしょに行動はできないだろうし。

（考えなきゃいけないことがいっぱいだ）

僕は青リンゴっぽいアレをかじった。

夜明けが近いのが、空気の変化で感じられた。

スィリーズ伯爵は夜明けとともに帰ってきて、そしてすぐに僕を執務室に呼んだ。

入っていくと執事長は席を外すように促され、室内には伯爵と僕のふたりきりだ。伯爵は昨日の授与式で使ったきらびやかな服を着たままで、その格好で一晩を過ごしたものと思われる。見た目からして疲れ切っているけれど、そんな姿でもイケメンはまた違った角度の魅力を醸し出すのだからズルイと思います。

「まずはレイジさん、昨日はお疲れ様でした」

「伯爵も。なんだか大変だったみたいですね」

「大変……。そうですね、大変でしたね」

応接スペースにはソファが向き合って置かれており、伯爵は珍しくぐったりと背もたれに身体をもたせていた。

「レイジさんも聞きたいことは多いと思いますが、急ぎの話から先に伝えましょう」

「はい」

「今日の正午過ぎに、レイジさんは聖王宮へ召喚されました。私もいっしょに行くので、準備をお願いします」

「僕が……聖王宮にですか？」

「あの闇のドームのこと、星８つの天賦珠玉、調停者のこと――つまり昨日起きたことのすべてについて強力な守秘義務が課されます」

「それはまあ、そうでしょうね」

「最悪、聖王都から二度と出させないというような、契約魔術が施される可能性もあります」

「なんですって！？」

腰を浮かせた僕だったけれど、逆の立場になって考えればそれは

そうかもしれない。
　昨日のあれやこれやは考えるまでもないくらいにクルヴァーン聖王都の機密中の機密だろうし。

「そのようなことがないよう私も努力しますが、どうなるかは予断を許しません」
「……どうしてですか」
「なにがですか？　契約魔術の必要性については賢いレイジさんならばわかるでしょう」
「どうして伯爵は僕にそんな情報を与えたんですか？　今この瞬間に逃亡を企てる可能性だってあるでしょう」
「正直な予想を言えば、５０％の確率でレイジさんは午前中に聖王都を発つだろうと思います」
「じゃあ、どうして――」
「聖王陛下もそのようにお考えのようでした。だから半日の猶予をくださったのでしょう」
「……陛下も？」

　僕は頭がこんがらがってくる。聖王は僕を呼び出す。一方で僕が逃げるかもしれないと思っている。来て欲しければ時間の余裕なんかなくして「すぐに来い」で済むじゃないか。

「あなたにそれだけの恩を感じているのでしょう」
「恩……ですか」
「調停者を食い止めたのはあなたの功績です」
「聖王陛下も十分強かったでしょう？」
「あれは理（ことわり）を破壊したからです。――順番が前後しますがその話をしましょう」

　伯爵は小さく咳払いをした。

「あの闇のドームはこちらの世界と、我々が『裏の世界』と呼んでいる世界との中間地点に当たるものです。あのドームを作ることで『裏の世界』からこちらに干渉ができるようになると聞きました。あのドームは理によってこちらの世界の者も、『裏の世界』の者も互いに攻撃できないようになっています」

「え？　調停者はどうなんですか？」

「調停者だけは例外で、『盟約』に従う限りのあらゆる行為を認められている――と、私も昨晩初めて聞きましたよ」

伯爵も知らなかったほどのトップシークレットなんだ。

「レイジさんがあれを割ってくださったおかげで、理が崩れ、聖王陛下の攻撃も通じるようになったということでした」

「あの石はなんだったんですか？」

僕がドームに着いたとき、スィリーズ伯爵は石を叩きつけて割ろうとしていた。

「私も詳しくは知りませんが、『一天祭壇』ができたのと同じ時代の石だそうです。聖王宮の資料庫に大事に大事にしまってありましたよ」

その「大事に大事にしまって」あった石を盗み出したんですね？　とは聞けなかった。伯爵、にっこり笑って僕を見てるんだもん。聞くなっていう顔だよこれは。

「数千年の昔……我々が『神聖古代』と呼んでいる時代の話です。『一天祭壇』を所有する聖王家一族にはある『盟約』が課された。それが星８つの天賦珠玉です」

48

「星８つの天賦珠玉は――ほんとうに、あったんですね」
「はい。私も見てはいませんがね」

伯爵は神殿で起きたことをすべて教えてくれた。
ああ……そりゃ、お嬢様はルイ少年の死を自分のせいだと思うよな。

「星８つの天賦珠玉は聖王家の者を、天賦珠玉を得ていない無垢の者を捧げるために必要だったもののようです。なんのために捧げるのかはわかりませんが、これまでの文献では、およそ１００年から３００年に１度、あの天賦珠玉が現れたようです。その天賦珠玉を与えられた聖王家の者は漏れなく姿を消しています。『裏の世界』に旅立ったと考えられていますね」
「……聖王陛下は、クルヴシュラト様が死ぬのを嫌がってルイ様に授けたんですか？」
「そういう側面がないとは言えないでしょう」

ふざけてる。
そんなことのためにお嬢様が悲しんでいるのもさらにバカバカしい。

「しかしながら、聖王陛下だけを責めることはできません」
「ッ！　なぜですか！？　死ぬ可能性の高い毒薬を授けたようなものでしょう！」
「ルイ様が立候補しなければクルヴシュラト様に授けられるはずでした。陛下は授与式の始まる前日までこれでいいのかと悩み、それ

でも授ける決心をしたと聞きました」
「でも！」
「ルイ様は『機会は平等でなければいけない』と陛下に伝えたそうです。それほどに高邁な正論をぶつけられたら心が揺らぎますよ――それが親というものです」
「……」
僕は両手を握りしめた。
他にどうにもならなかったのか？　どうしてこんなことになってる？
ルイ少年は「死ぬ」とわかっていたら断っただろうか？　――いや「裏の世界」に行くだけだと説明されていたら、ルイ少年なら天賦珠玉を進んで受け入れたかもしれない。
「聖王家はこの国の中心であり、強大な権力があります。ですが一方でそれに伴う非情な義務も受け入れているのです」
「……僕の功績は、せっかく助かったクルヴシュラト様の命を守ったということですか」
「レイジさん」
伯爵の咎めるような口調に、僕は右拳を太ももに叩きつけた。
「……すみません。クソみたいな言い分でした。忘れてください」
僕だって、自分の都合を優先して動いてばかりだというのに――お嬢様にも事情のすべてを伝えたわけでもないのに、聖人君子ヅラをするわけにはいかないじゃないか。
「いいえ、忘れませんよ」

僕がほとほと自分自身に嫌気が差しているというのに、伯爵は大真面目な顔で――ほんのりと笑みさえ浮かべながら、そう言ったのだ。

「ようやくあなたも、人間らしいところを見せてくれたのだなとうれしく思いました。あなたと話していると、どうも14歳ではなく一人前の大人のように感じてしまいます。ですがあなたにも人間らしいところがどうやらある」

「……それをあなたが言いますか？」

「私に流れている血は氷のように冷たいらしいので、私にそういった感情を求めるのは筋違いかもしれませんね。……ともあれ、聖王陛下は罰せられるわけではありませんが、今後あの御方には多くの困難が待ち受けています」

「困難？」

「1つは、時間を置かずにまた星8つの天賦珠玉が現れる可能性があります。私も初めて知りましたが、一般市民はなるべく早くに天賦珠玉を子どもに与えるというのに貴族が12歳まで待つというのは、『無垢』である期間を12年、作り出すためのようです。その間に次の子ができていればよし、できていなければその聖水色を持つ子はなんのかんの理由をつけて天賦珠玉を使わずに『無垢』で居続けなければならないと」

「授与式というものは、他の貴族がそれに付き合わされていたということですか」

「カムフラージュ的なものかもしれませんね……これらに関しては秘密があまりにも多いので。いずれにせよ、星8つの天賦珠玉がどんな意味を持つのかは、エルさんも知らないのか、あるいは隠されているのかはわかりませんが――今時点で私は知りません。星8つの天賦珠玉が再度現れたときに、クルヴシュラト様の弟君である第3聖王子にそれを与えなければならないのです」

「そう……ですか」

悲しみの連鎖は続く、ということか。

「前回の星８つの天賦珠玉が２５０年も前だったので、当時を知る人間がおらず、しかも文字も読めないことからその意味を確認するのに時間が掛かったようでした」

「いったい、『裏の世界』とやらにとってなんの意味があるんでしょうね……」

「……聖王陛下は、あなたが聖王宮にやってきたらそのあたりについても話されるかもしれませんね。『盟約』と呼ばれるものがなんなのかについても」

盟約。

確か、竜も言っていた言葉。

「聖王陛下に訪れる困難はあともう１つ大きなものがあります」

伯爵は続けて言った。

「あの巨大蛇、いましたね。あれが第２聖区の邸宅を破壊したのですが知っていますか？」

「あ……はい。そこに行きましたから。確かリビエレ家とか……」

アルテュール様がそう言っていた気がする。

「そうです。そのリビエレ家が半壊し、倒れた壁に挟まれ、死んでいた男が問題でした」

「被害者……ってことですよね？　問題？」

「はい。今回に関しては被害者ですが、１か月前は加害者でした」

1か月前――というと「新芽と深緑の晩餐会」？

「その男こそ、クルヴシュラト様のソース皿に毒を盛った男だったんです」

驚く僕に、伯爵は重ねて言った。

「6大公爵家の1つ、リビエレ家がクルヴシュラト様の暗殺を企てた可能性が極めて濃厚であり、リビエレ公爵家のお取り潰しについて今議論が行われています。リビエレ家はこれに異を唱え、公爵家の騎士を集めており非常にピリピリした状況……つまるところいつ内戦が始まってもおかしくない状況です」

聖王宮に行くべきか、行かざるべきか。

スィリーズ伯爵は「仮眠します」と言って自室に引っ込んでしまった――これはつまり「逃げるなら今」と言っているようなものだ。

ここまで事情を知ってしまった僕を聖王は手放さないだろうと伯爵は予想した。一方で恩義も感じているから、逃げるのならば仕方がないとも。

これから起きるであろう混乱――6大公爵家のお取り潰しなんかを含めて、僕がここに残るメリットってなんだ？

（契約魔術を結ぶ代わりに莫大なお金が手に入る、とか？）

そんなものは要らない。僕が必要としているのは当面生きていくお金くらいだ。

（あとは『盟約』に関する情報）

情報には興味があるけれど、それは絶対に必要なものじゃない。この世界でも「ごく一部」の要人だけが知っていれば済む――僕は「その他大多数」のほうでいい。明らかに面倒ごとに巻き込まれそうだし。

（つまりメリットなんて皆無ってことだよな）

反対にデメリットが大きい。契約魔術を結ばされて聖王都から出られなくなったら、僕はラルクやルルシャさんを捜すこともできなくなる。今後、聖王にまつわる多くの面倒ごとをやらされる可能性も高い。

「……メリットとデメリットで考えたら、答えなんて1つだよね」

僕は自室から出ると、屋敷の外へと出た。門番に挨拶をして「用事で買い出しに」と告げる。

そのまま第2聖区、第3聖区、第4街区と通り抜け、第5街区へとたどり着いた。

目当ての場所へは何度も道を聞かなければならなかったけれど、スマホやナビなんてないこの世界では当然のことで、道行く人たちはほとんどが快く教えてくれる。

「ここか」

僕の前にあるのは石造りの4階建ての建物。細く、奥行きがあるタイプであり――あまりこの辺では見かけないタイプの建築物だと言えた。冒険者パーティー「銀の天秤」が宿泊する「銀橘亭」という宿は。

「『銀』ってついてるってだけで、ここを選んでそう」

色つきのガラスに木の模様が描かれている入口のドアを開くと、カランコロンとベルの音が鳴った。

48（後書き）

Ｓｉｍｏｎさんからレビューをいただいていました。ありがとうございます！　ていうか英語じゃん！　ベネズエラの人じゃん！　だいぶ日本のローカルネタ入れてるんだけど通じてるんですかね……？

Ｈｉ　Ｓｉｍｏｎ，
Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｒｅｖｉｅｗ.
Ｉ'ｍ　ｈａｐｐｙ　ｔｏ　ｈｅａｒ　ｔｈａｔ　ｙｏｕ　ｈａｖｅ　ｆｕｎ　ｔｏ　ｒｅａｄ　ｍｙ　ｓｔｏｒｙ!

49

「お久しぶりです、ほんとうに……」
「こちらこそ。全然連絡も取れずにすみませんでした」

「銀橘亭」にいたのはノンさんだけだった。ベッドと荷物を置けばいっぱい、みたいな部屋らしいので僕はノンさんとともに近場のカフェへとやってきた。こぢんまりとしていて、店内は木製のテーブルとイスで統一されており、木の温もりが感じられるようなお店だった。
僕はジュースを頼み、ノンさんはミルクで煮出したお茶を頼んだ。

「いろいろと積もる話はありますが……とりあえずお父さんとミミノさんは冒険者ギルドに行っています」
「ギルドに？」
「昨日の巨大蛇の取り分について揉めているので……」

冒険者たちは「住人の避難が最優先なのに、ヨソ者の冒険者が抜け駆けして倒してしまった」と言っているらしい。悪いことにはウロボロスとの戦いについては他の冒険者がほとんどちゃんと見ていないので「弱ってるのをサクッと倒しやがって」とか思われているのだ。
一方で騎士団は一度騎士団で死体を接収し、使える部分を確認してからまとまったお金に替え、しかるべき金額をギルドに渡すと主張している。冒険者ギルドからすれば、お金をちょろまかされそうだからイヤだと真っ向から対立している。
結果、死体は手つかずで残っている。

「もしもレイジくんが来て入れ違いになったら困るので、私だけ残っていたというわけです」
「そうなんですね……僕としてはあの死体をどうしようと、なんでもいいんですが」
「うふふ、ダメですよ、レイジくん。お金のことはきっちりしないと。お父さんは『俺たちがヨソ者だからとナメた口利いてくるヤツらには、一度わからせてやる必要があるよな』と言って、意気揚々と出かけていきましたから」
「あ、ははは……」

ダンテスさん、怖えー。

「ミミノさんのほうが意気込みがすごかったですけどね。『レイジくんの報酬、たんまりと搾り取ってくるべな』って言って……厳重に封印していた毒薬も持ち出そうとしていたので、それは止めましたが」

もっと怖い人がいた！

「……それより、皆さんはどうして聖王都に？」
「直近までレフ魔導帝国に行っていまして、そこで護衛依頼を受けて聖王都まで来たんです。私はいまだに教会からは『父の治療の旅』と思われているんですけれど、もう冒険者として活動している時間のほうが長くなってしまいましたね。レイジくんはどうしてこちらに？」
「僕は――」

ざっくりと、この４年間のことを話した。
ライキラさんと同じ傭兵団にいたゼリィさんの手引きでアッヘンバッハ公爵領を出たこと、聖王騎士団の掃除夫として働いていたこ

と、スィリーズ伯爵を襲撃から守り伯爵家で雇われるようになったこと。
授与式に関することは話せなかったけれども。
「そうですか……レイジくんもいろいろな経験をしたんですね」
「はい。……すみません、急にいなくなってしまって」
「レイジくんにもなにか事情があったんだろうとは思っていましたから、それは責めませんよ。もちろん、お父さんの身体を治してくれたことの感謝を伝えなきゃとは思いましたが……」
「うっ」
あの治療法については、天銀（ミスリル）を使っちゃったんだよな……だからこれは言えないんだよな……。
「特別な秘薬、というか、偶然できてしまった薬というか……」
「調合方法を聞こうとは思っていませんから安心してください。でも、お礼はさせてください。きっと金銭では買えないようなものだと思いますが」
「い、いや、大丈夫です」
身を乗り出したノンさんの胸が、ずっしりとテーブルに載っている。ちょっと、アレです、１４歳の身体には刺激が強いです。
「？　どうしてそっぽを向くんですか？」
「と、ともかく――お礼は僕を『銀の天秤』に入れてくれるということでどうですか？」
「！」
ノンさんの表情がパァッと明るくなった。

「もちろんです！　それだけじゃ全然足りないと思いますが――」
「同じパーティーメンバーなら、助け合うのは当然でしょう」
「……レイジさん」
感動したように目を潤ませてノンさんが両手を胸の前で組んでいる。
「いや、感謝したいのはこっちですよ。あのとき森の中で僕を保護してくれて、みんなが全力で僕を助けてくれたじゃないですか……」
あのときミミノさんが、ダンテスさんが、ノンさんが、ライキラさんがいなかったら、今の僕はないと思う。仮に生き延びていたとしても、心がささくれ立ってもっと危険な世界に身を置いていたんじゃないかなって思うんだ。
「……僕は『六天鉱山』で働いていた鉱山奴隷で、契約魔術が解けたのをいいことに逃げ出したんです。アッヘンバッハ公爵領にいては追われることは確実で、あの竜の襲撃で僕の姿が衛兵にバレてしまったんです」
「だから急いで逃げなければいけなかった……それが４年前の真相ですか？」
「僕と関わったことで『銀の天秤』には迷惑を掛けられませんでしたから」
ラルクが手に入れた星６つの天賦珠玉がいちばんの原因ではあるけれど、それは言わなくとも同じだった。
聞いたノンさんはそっと目を閉じてなにか考えているようだった。こうしているとほんとうに敬虔な修道女というふうに見える。いや、実際にそうなんだと思うけど。

「……私たちは、レイジくんの力になりたいです」
「４年前に、十分過ぎるほどに力になってくれました」
「それでは足りません。あなたはお父さんの身体を治してくれただけでなく、心も治してくれたのですから。高位の聖職者による魔法で治療を受けても、きっとお父さんの心までは治らなかった。あなたがいてくれたから、お父さんは今でも前線に立って戦うことができるんです。想像できますか？　私は、レイジくんがいなくなってから１日たりともあなたの無事を祈らない日はありませんでした。毎朝、目が覚めてから神に祈ったのです」
「ノンさん……」

差し伸べられた手が、テーブルの上にあった僕の両手をつかむ。ノンさんの手は温かくて――お嬢様のそれとは違う、大人の女性の手だった。

ノンさんは、僕なんかのことを祈っていてくれたんだ。その事実が胸に染み入ると、鼻の奥がツンとして涙が出てきそうになる。僕は【森羅万象】の力で強くなった気になっていた。それは僕の力なのだと。でも――きっとそうじゃない。こうしてノンさんが祈っていてくれたことも、きっと、僕に影響があったはずだ。絶対にそうだ。他の誰が信じなくとも僕は信じる――ノンさんが祈りは届くと信じてくれたように。

「ノンさん……僕の話を聞いてくれますか？」

その温かさに泣きそうになりながら、僕は声を震わせないようにするのが精一杯だった。

それから僕は一気にすべてを話した。授与式で起きたこと。聖王が僕を召喚していること。ここから逃げ出さなければ――「また」逃げ出さなければいけないこと。

ハイレベルの機密に位置するような内容も僕はノンさんに話した

――話してしまった。一通り話が終わると僕はその場にどろどろに溶け出してしまいそうなほどに疲れ切っていた。その間ずっと、ノンさんは僕の手を握り続けていた。

僕が気恥ずかしくなって手を離すと、少しだけノンさんは残念そうな顔をした――と思うのは僕の願望だろうか？

「……レイジくん、がんばりましたね。私はあなたのことを誇りに思います」

「ありがとう、ございます」

ああ、ダメだよ、ノンさん。そんなこと言われたら僕は泣いてしまう。

「はあ……それにしても、こんなにレイジくんががんばっているのに、冒険者ギルドも騎士団も、自分たちの利益のことばかり言うなんて、呆れて物も言えませんね……」

「……ノンさん、ごめんなさい。知る必要のないことを教えてしまって」

「そんなことはありません。私も教会に身を置く者として、聞いてよかったと思える部分もあります。――それはさておいて、レイジくん」

「はい」

「これは損得で動くことではありません」

「……はい」

ノンさんはズルイ。心の奥にすっと入り込んでくる。

メリット、デメリットで言ったら僕は「逃げた」ほうがいいだろう。でも――物事のすべてがメリット、デメリットだけでは判断できない。

「これほどまでがんばったあなたが、どうして逃げなければいけないのですか。胸を張って聖王に会いに行けばいいのです。あなたが逃げなければいけない理由なんてなにひとつありません。それにレイジくんは、伯爵家のお嬢様をとても大事に考えているんでしょう？　こんなふうなお別れは絶対にダメです」

「……はい」

そのとおりだと僕は思った。お嬢様のことを思えば僕には「逃げる」なんて選択肢は最初からあり得ない。伯爵はお嬢様のことは言わなかったけれど、あれは伯爵なりの優しさ――というより公平（フェアネス）さなんだろう。僕がフラットに判断できるように、という。

それに「こんなふうなお別れ」がツライものであることは僕もノンさんも4年前に経験済みだ。

「でも、もしも契約魔術を迫られたらどうしますか？」

それがいちばんの不安要素だった。戦闘よりなにより、契約魔術のほうが恐ろしい――僕は鉱山でそれをイヤと言うほど思い知った。

「契約魔術に関しては、ひとつ対策方法があります」

ノンさんは人差し指をピンと立てた。

「教会にいる人間でも、あまり知られていない方法ですけれどね」

うふふ、と笑うノンさんは――やっぱりちょっと怖い。

４９（後書き）

かるさんさんにもレビューをいただきました。ありがとうございます！

２章もいよいよ佳境、なのか、どうかは、まだちょっとわかりませんが（考えている展開はありますが、キャラクターの動きを思うと先行き不透明です）、引き続きお楽しみください。

あ。あと本日５／６いっぱいまで、各種電子書籍ストアで書籍版「察知されない最強職（ルール・ブレイカー）」１巻が無料で配信されています。

未読の方はもちろん、Ｗｅｂ版から大幅に改稿しているのでＷｅｂ版既読の方にもお勧めですので是非読んでみてくださいね～。

50

伯爵が目覚めたというので、遅めの朝食を取っているところへ僕は出向いた。お嬢様はまだ眠っているので僕は自由時間みたいなところがある。

今朝焼いたばかりのパンはバターの香りが立っていて美味しそうだ。伯爵はコケモモのジャムを塗って食べている。頭を使う人は糖分を欲するのだろうか、伯爵は朝のお茶にも多めのハチミツを入れて飲む。

結構糖分を摂取しているはずなのに、伯爵はまったく太る気配がない。

「――レイジさん、いたのですか」

食堂に入ってきた僕に、伯爵は驚いたようだった。

「いますよ。正午に、聖王宮に行くのでしょう？」

僕が答えると、伯爵は目を見開き、それから横にいる執事長に目配せした。執事長もある程度事情を知っているってことかな。

「伯爵こそ、体調はいかがですか」

「万全からはほど遠いですが、今、ベッドで眠っていられるほどの状況ではありませんので」

伯爵は食事をさっさと終わらせると身だしなみを整えた。正午まであと1時間という時間になって出発の準備が整う。

「レイジ！」

僕と伯爵がお屋敷の玄関で合流すると、吹き抜けの2階廊下からお嬢様が現れた。お嬢様も寝起きのようだけれど、服は着替えて髪は簡単に櫛を通している。パジャマで出てくるわけにはいかないのが貴族なんだよね。

「お嬢様、お目覚めでしたか」
「レイジ、どこに行くの？」

階段から降りてきたお嬢様の瞳が不安そうに揺れる。

「伯爵とともに聖王宮に向かいます。昨日の始末に関する報告を行います」
「あ……」
「僕は、あのあと巨大蛇とも戦いましたから、その話をしなければいけません」

お嬢様の「鼓舞の魔瞳」とルイ少年のことではない、という意味を込めて先んじてすべて話してしまうと、お嬢様は小さくうなずいた。

「そう、ね……それはとても重要なことなのだわ」
「はい。ですのでお嬢様、本日はお屋敷にいらしてください」
「ええ……」
「エヴァ。君が心配することはなにもないよ。私は貴族としての務めを、レイジさんは護衛としての務めを果たすだけだから」
「……はい、わかりましたわ」
「いい子だ」

伯爵はお嬢様の頭を軽くなでると、

「行きましょう」

「はい」

僕とともに屋敷を出た。

ちらりと振り返ると、玄関でお嬢様がいつまでもこちらを見送っていた。

「……娘に好かれたものですね、レイジさん」

馬車に乗り込むとそんなことを言われた。横に執事長がいるので話しにくい話題は止めてください、伯爵。

僕らを乗せた馬車が第1聖区に入ると、急に雰囲気が物々しくなった。

「スィリーズ閣下、どちらまで？」

入ってすぐのところで聖王騎士団に止められた。馬車が通れないよう、柵によるバリケードまで組まれている。

スィリーズ伯爵ならばほとんど顔パスで通れるはずなのに――毎日登庁して仕事をしているのだから当然だけれど――今日はこうして行き先をたずねられるのだ。

「聖王宮まで。陛下に呼ばれています」

「……少々お待ちを」

聖王騎士団がなにか確認を始めている。

開かれた馬車の窓から外を見ると、あちこちに騎士団がおり、ふだんならば仕事のためにやってきているはずの官吏の姿は見えなか

った。

「確認が取れました。聖王宮での御用事が済みましたら再度こちらにお越しください」

許可が出て、馬車は進んでいく。

「……伯爵。これってリビエレ公爵家のことが影響しているんですか？」

「はい。リビエレ家当主を始め、全員が第2聖区にあるお屋敷での待機を命じられていますが、リビエレ家と縁のある家々が手勢を集めているようです。表向きは『自衛のため』と言っていますがね」

「そんなこと、自ら怪しいと言っているようなものじゃないですか。というか、兵力を集めることが許されているんですか？」

「『自衛』と言われてしまえば仕方ないですね。さらにリビエレ家は公爵家ですから……幸いなことにリビエレ家の領地は聖王都からかなり遠いので、ここにはほとんど兵力がないということでしょう。つながりのある貴族たちも多くが捕縛されましたし」

「え？」

「――ああ、レイジさんには言っていませんでしたか。リビエレ家の派閥が、『一天祭壇』の天賦珠玉横流しに関わっていたんですよ」

それはスィリーズ伯爵が「冷血卿」だなんて呼ばれることにもなったきっかけだ。伯爵は「一天祭壇」から出現する天賦珠玉が、貴族によって秘密裏に抜き取られ、横流しされているのではないか……と疑い、調査し、多くの貴族を処刑台に送り込んだ。

（リビエレ家の派閥がそれに関わっていた……？　さらに、リビエレ家はクルヴシュラト様の暗殺を計画した……？）

僕はなんだか、もやもやするのを感じた。なんだろう。僕はなにかを見落としているような……。

「聖王宮に入りますよ」

伯爵の言葉にハッとする。

第1聖区での取り調べを思えばあっけないほど簡単に聖王宮へと入る。こちらは、そもそも訪ねてくる人が少ないので伯爵、というか僕の来訪はみんな知っていたんだろう。

馬車から降りると、僕と伯爵の2人だけが解放感のある入口から宮殿内部へと入る。

石造りの宮殿は、ところどころに水路があって静かな水音が常に聞こえている。日本の古い建築のように襖のような木戸が各部屋への入口になっていて、その木戸は淡い水色――聖水色に塗られていた。

殺風景ともいえるほどのがらんとした部屋の中央に、大きなテーブルとイスが置かれてあった。

「質素な部屋でしょう」

「そ、そうですね」

「聖王家は古い生活様式をそのまま引き継いでいるんです」

「なるほど……不便そうですね」

「不便極まりないでしょうね」

王として生まれても、贅沢ができるわけではないんだな……。

座って待つこと数分、聖王が1人の神官と特級祭司のエルさんを連れて現れた。

「来ないかと思ったぞ――ああ、いい。座ってくれ」

僕と伯爵が席を立って礼を取ると、聖王はそう言いながらさっさとイスに座ってしまう。僕もイスに座りながら向こうの様子をうかがった。

聖王は、この1日で何年も年を取ってしまったのではないかと思うほどにやつれていた。ぶっきらぼうな物言いや、王としての威厳は相変わらずあるけれど、どこか空元気のようにも感じられる。

ウサギのエルさんと神官は後ろに控えている。ウサギの顔色は正直よくわからない。

「さて、まずはスィリーズ家の護衛、レイジと言ったな」

「はい」

「ありがとう。お前の働きに感謝する」

率直な言葉だった。だけど、

「いえ、僕はスィリーズ家との契約に従って行動したまでです」

この人のために働いたのではない。

「……あくまでも伯爵（ヴィクトル）のために動いたのだと、そう言うのだな？」

「正確にはお嬢様のためです。こちら、お返しします」

僕は胸ポケットに忍ばせていたナイフを差し出した。そう言えばここに至るまでボディーチェックとかなかったのだけれど、セキュリティとか大丈夫なんだろうか？　それほどまでに伯爵への信頼が厚いということか？

「……そうか。おい、これを保管庫に戻せ」

神官のひとりがうなずくと、ナイフを持って部屋を出て行った。

「お前の行動が伯爵家のためであったとしても、内容は国家のためとなった。これからお前に対する褒賞の話をしたい」
「はい」
「まず昨日の勇気ある行動を讃え、聖金貨1枚を贈呈する」
聖金貨1枚。およそ500万円ぶんくらいの価値だ。そんなもんかな、と思う気持ちと、僕の年俸が聖金貨3枚だと考えると少ないのかなと思う気持ちとがある。
「……なんだ、『少ない』って顔してるな？」
「い、いえ、そんなことは……」
「それほどまでに高い給金を出してるのか、ヴィクトル」
「優秀な人材には高い報酬を出すのが当然ですよ、陛下」
「チッ。だから俺はもっと高くしろって言ったんだ。だが、出納係が渋くてな……聖金貨1枚でも過去を見れば大盤振る舞いなんだと」
「過去にこれほどの大事件が聖王都で起きたことはありませんからな。戦争で活躍したとなれば話はまた変わりますが」
伯爵がそんなことを言って返すと聖王はますます苦い顔をした。いや、ね？　僕だって「そんなもんかな」とも思ってるんですよ？　なんか僕が強欲みたいになってませんか？
「とりあえず褒賞は褒賞だ、受け取ってくれ」
「もちろんです」
お金があって困ることはない。
「それと、俺はこれから別の会議に出る。後の話はエルに任せる」
「……そうなのですか？」

伯爵がたずねると、聖王は苦い顔のままでうなずいた。

「リビエレ家のことを話さなきゃならんだろうが。ウチの子どもらや王族、他の公爵家も集めている。ヴィクトル、お前は俺といっしょに来い」

「しかし――」

「来い」

「……はっ。レイジさん、すみませんがこういうことなので、帰りは問題ないと思いますが」

「大丈夫です」

聖王相手にあれこれ話すのより、エルさん相手のほうがいくらか気が楽だ。

というか聖王としては、僕についてはあまり警戒心を持っていないのだろうか？　それともスィリーズ伯爵がいるうちは僕は味方だと考えている？

ちらりと見ると伯爵は複雑そうな顔だった。これは、自分の読みが外れたことによる焦りみたいなものがある。僕のことをそこまで正確に、聖王に伝えていなかったってことだろう。

「ああ、レイジとやら。一応な」

立ち上がりながら聖王は言った。

「この話については契約魔術を結ばせてもらう。なに、守秘義務みたいなものだと思ってくれ」

来た、と思った。やはり契約魔術だ。

51

聖王と伯爵が連れ立って出て行くと、部屋には僕とエルさんが残された。エルさんは「え、よっこいせ」とか言って聖王が座っていたイスに座った。なかなか図太い人……ウサギのようである。

「え、まずはこちらの契約をご確認ください」

テーブルの上をつつーと滑らされてきたのは、契約魔術の紙だった。

――レイジくん。契約魔術を行うには3つ、確認してください。

僕はノンさんに聞いた言葉を思い出す。

（1点目は、紙。これは植物紙だ）

――羊皮紙は効力が高く、「魔術抜け」をするのにも非常に高い難度があります。植物紙は比較的「魔術抜け」がしやすくなるのでこちらのほうがよいです。

ノンさんの「魔術抜け」という言葉にも現れているとおり、教えてもらったのは「契約魔術」を「すり抜ける」方法だった。

（2点目は、契約術式）

――契約魔術を使える人間が直接行うのではなく、紙に魔術を施したものを行う場合は、契約魔術そのものが成立しない場合もある

ほどに効果が低くなります。

今回は紙に直接魔術が記されている。

（3点目は、契約方式）

――一般的に使われている契約魔術は、国家が認めた書式によるもの、教会が認めた書式によるもの、各ギルドで独自に使われているもの、個人が開発したものと4種類あります。前者の2種は古くから使われているもので、契約魔術が執行される範囲を制限できる抜け道もまた研究されています。

この紙は、クルヴァーン聖王国の書式だった。

（ノンさん、やりましたよ！　ほぼ理想的な契約魔術です！）

これならば契約魔術を結んだ後に、教会のツテを使って解除することができる――と僕が思っていると、

「え、たいした中身はありませんが、そんなに気になるようでしたら契約しなくても構いません」

「……へ？」

「所詮、秘密を守らせるような契約は、え、いくらでも漏れが生じますから。え、人の口に戸は立てられぬものです」

「……」

ノンさん。紙が回収されました。

ノンさん。教えていただいたことはムダだったようです……。

「……い、いいんですか？」

「国の体裁上、必要というだけです」

さらさらとエルさんが書面に僕の名前を書き入れる。ぱぁっ、と光って術式が発動した。

「え、それにこの程度の契約魔術は、『魔術抜け』と呼ばれる方法も存在しますからな。興味があれば、え、ご教示しますが」

「け、結構です……」

むしろ向こうから「魔術抜け」の話を振ってきたよ！　冷や汗が出てきた。

「そうですか？」

なんでちょっと残念そうな顔してるんだよ！　あ、ウサギなのに表情がちょっとわかるようになってきたぞ。

「ていうか、いいんですか？　昨日のことって結構ヤバイことでしょう」

「え、そうですな。むしろわたくしめとしてはこの内容が広まったほうが、え、いいと思っております」

「そう……なんですか？」

「さようで。秘密を続けることに、え、さほど意味はありませぬ。聖王家が神秘的に見えるという程度でしょう。それよりも、え、天賦珠玉に関する知識が正しく広まったほうが、世界的に見れば利益かと存じます」

話のスケールが大きい。

「僕が知りたいことは、教えてもらえるということですか？」

「え、わたくしめの知る限りであれば」
「じゃあ、『裏の世界』ってなんですか？　あと『盟約』って？」
「『裏の世界』はこちらから見て『裏』と言っているだけです。え、この世界の裏側に存在しているまったく同じ世界だと言われていますな。『盟約』は『裏の世界』と取り決めた『天賦珠玉』に関するルールだそうです」

いきなりさらっと答えが出てきた。答えを聞いたのにさっぱりわからない。

「すみません……よくわかりません」
「え、もとより、『裏の世界』については現在は観測できませぬ。太古の昔には行き来があったようですが、その往来を止めるために世界をつなぐ門を閉ざしました」

門。

あの調停者が言っていた――「闇ヨ、門ヲ開ケ。光ヨ、道ヲ開ケ」と。

「ウロボロス……巨大蛇が出てきたあれが門ですか」
「え、そうです。環の蛇（ウロボロス）とは面白い表現ですな。採用しましょう」

服のポケットから取り出された紙束にさらさらとエルさんが書きつけている。なにかに採用されたらしい。恥ずかしい。

そう言えばさっき、聖王はウロボロスの話はしなかったな。報告がまだ届いてないんだろうか。

「今は『盟約』があるために、簡単に行き来はできませぬ。え、ただし調停者だけはそれが可能です」
「調停者、というのは……もしかして竜もそうですか？」

「おや、よくご存じで。え、竜がこちらの世界の調停者です」
「竜は、盟約に従って人間に罰を与えるとかなんとか言っていました」
「おや、竜とも話を？」
ヤバイ、言い過ぎた。僕はあわてて口を閉ざしたけれど、エルさんは僕の様子なんて気にせず楽しそうに言った。
「え、非常に珍しい経験をなされましたな。竜はふだんは人里離れた場所におり、盟約が守られているかを見守っていると言われています」
「そこでまた『盟約』ですか」
「はい。『盟約』にはいくつかの内容があると言われていますが、え、天賦珠玉を取り過ぎるなとか……」
「取り過ぎるな？」
ウサギはうなずいた。
「天賦珠玉は『神が与えたもの』……ですが一方で『循環するもの』でもあると考えています。え、そう言っているのは聖王宮ではわたくしめだけですがね。こちらの世界で消えた天賦珠玉は、『裏の世界』に行き、『裏の世界』で消えた天賦珠玉はこちらの世界に来るのではないかと」
「――――」
ぽかんとしてしまった。そんなこと、思いもしなかったけれど、確かに植物のようにぽこぽこ生えてくるっていうのも変な話だよな。
いや、でも循環するのなら総量に限界があるということ？　人口が爆発したら天賦珠玉をもらえない人も増える？

「え、混乱させてしまいましたな」
「少し……」
「これは、実はわたくしめの発案ではないのです。『盟約』と『裏の世界』に関する古文書解読、及び『天賦珠玉』研究の第一人者であられたヒンガ博士という方が提唱したものです。もう、20年以上も前の論文でございましたな……」
「――――」
その単語はあまりにも、突然僕の前に現れた。
「今、誰、とおっしゃいました……？」
僕の声はかすれていた。
「キースグラン連邦『フォルシャ王国の頭脳』と呼ばれていたヒンガ博士のことですかな？」
と、こともなげにエルさんは言った。
「連邦内で争いがあり、王国は壊滅しました。その際に、行方不明になったはずです……え、残念ながら亡くなられたようです」

52

僕の脳裏に浮かぶのは、鉱山の粗末な小屋にいる――孤独ながらも知性を漂わせる老人の姿だ。

死の直前にも、僕の幸せを願ってくれた。

公爵の父の、失態の尻拭いをしてやったとか言っていた。王国崩壊後にアッヘンバッハ公爵領に流れてきていたのだ。

（でも――そうなると、ヒンガ老人の最期の言葉って……？）

あのとき僕は【森羅万象】をつけていたのではっきりとその言葉を覚えている。

――この身は、罰を受けるためにあり。死ぬことでは償えぬ罪を犯したゆえ。されど、今際にて日の光を浴びるほどの僥倖に浴した。天地を統べる万能の神よ、願わくばこの忌み子に祝福を授けよ……。

ヒンガ老人はなにか「罪」を犯した？　それは天賦珠玉に関するなにか？　あるいはフォルシャ王国壊滅につながること？

たぶん……「忌み子」というのは黒髪黒目のことだろうけど。

そんなことを考え込んでいると、エルさんは続けて言った。

「え、わたくしめは聖王に無理を言って、調査団を派遣してもらい、ヒンガ博士の著作を集めました。ほとんど残っておりませんでしたが、それらを写し、残りは血縁の方にお渡ししました。え、ヒンガ博士の論文はこれまでの常識を覆すものが多く、興味を持っていただけたのならうれしいですな」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

今、聞き捨てならないことをエルさんが言った。

「ヒンガ老人の血縁の方って！？」

「老人、ではなく、博士、ですぞ。え、まあ、レイジさんから見れば老人かもしれませんが」

「す、すみません、言葉を間違えました。ヒンガ博士に血縁の方が？」

「さようです。レフ魔導帝国という変わった国がありまして。え、そちらに娘さんが嫁がれていましてな」

ヒンガ老人の娘さんは、フォルシャ王国の壊滅時には海外にいたのだ。だから、難を逃れた。

「今もその娘さんはレフ魔導帝国に？」

「さあ、そこまでは……なにせ１０年、いや、１５年も前のことですからな。もし著作が見たいのでしたらここ聖王宮にも写しがございますが」

「……いえ、本物のほうを見てみたいです。その娘さんの連絡先を教えてくれませんか！？」

「構いませんよ。え、その方はエマとおっしゃいまして、旦那様がレフ魔導帝国の上級官吏でしたな。確か娘さんがひとりいらっしゃったはずです」

ルルシャさんだ。

ピンと来たけれど、僕はそれ以上言うのは不審がられるだろうから――もう十分怪しかったかもしれないけれど――黙っていた。

思わぬ収穫を得た僕は、ひとり、お屋敷へと帰った。

＊　特級祭司エル　＊

座ったままじっと動かない大きなウサギの背後にふらりと現れたのは、６大公爵家のひとりであるエベーニュ家当主、その人だった。

「……エル様、レイジ殿は帰られましたか？」

「え、お帰りです」

「なにをお考えでしたか？『災厄の子』についてですか？」

当主がするりと横に座ると、そちらに視線も向けずにエルは言った。

「……さようです。レイジさんが『災厄の子』であることはほぼ間違いないと思うのですが……この目で見ても、確信が持てません。彼からは、え、邪気が感じられません」

「文献にある内容が事実であれば、『災厄の子』は黒髪黒目であり、強大な力を持つと。一国すら滅ぼすこともあるということでしたが……レイジ殿は青い髪ですな」

「髪の色は変えられます。え、染髪剤を使っているでしょう――少なくとも黒髪黒目であることで、不利益を被ることがあると知っているということです」

「ただのファッションかもしれません」

「これは！　エベーニュ家当主ともあろう方が、え、そのような意味のない仮定をなさる」

「可能性はすべてつぶしておかねば気が済まないのですよ。ではエル様はあの少年が『災厄の子』であると？」

「……え、そうとは言い切れません」

「なぜ？」

「……」

「確証が持てたら、この場にてけりをつけるよう聖王はおっしゃっていたのに……つまり見逃しましたね？」

スッ、と当主が手を挙げると、庭に潜んでいた二桁の黒装束が立ち上がり、音もなく消えていった。当主の護衛ではなく、聖王宮の衛兵でももちろんない、暗殺に特化した者たちだ。

「え、確証はありませんでした」

「……」

口元はうっすらと笑っているのに、このハーフリングの瞳は恐ろしいほどに冷たかった。

エルはエルで、レイジが元は黒髪だったのだろうと思っている。調停者もまた「災厄の子」について口走っていた。「災厄の子」は殺すべし。それは国の上層部では当然の常識だった。

だけれど、エルは、そうはしなかった。

久しぶりにヒンガ博士の話ができて楽しかった？　エベーニュ家当主に言ったとおり、邪気を感じなかった？

（……いえ、我らを救うのに命を懸けた少年を、どうして傷つけられましょうや）

エルはそう考えている。だけれどそれは口にしない。貴族家の当主にそんな話をしたら鼻で笑われ、「ならばこちらで始末をしておきます」と言われるだけだろうから。

いや――そんな「きれい事」だけではない。

（調停者と戦ったあの力は、「理」の「外」にあるもの。あの力が聖王国に向いたとしたら……）

かつての文献には「災厄の子」がやがて本物の「災厄」となって多くの人々を殺したという歴史的事実が数多く記されている。その脅威は、「盟約」によってそれなりにコントロールされている「裏の世界」と比べ、はるかに恐ろしいものだ。

でも、それでも――とエルは思う。

（子どものうちに殺された「災厄の子」はほんとうに「災厄」だったのでしょうか？　え、大切に育てれば、この世界に貢献できたのでは？）

その仮定は、もちろん「意味のない仮定」だ。口に出せばエルの首が危うくなるような危険思想でもある。

つまるところ、ヒンガ博士の論文がその発想に近い。過去に起きた悲惨な事実があったとしても、人の可能性を見誤ってはならないと――子どものうちに殺してしまえば「災厄」にならないのなら、さっさと殺すに限る、と考える貴族とは真逆のそれだった。

「え、かの少年は、問題ありません」

「……まあ、そのように聖王陛下にはお伝えしましょう」

ぱち、ぱち、と目を瞬かせるウサギに、動揺は見られない。

「それよりも当主。リビエレ家の問題はよろしいのですか？」

「問題ないでしょう。すでに物証があがっており、聖王陛下もすでに動いておられる。なにより『冷血卿』がついている。よかったですね、エル様。あなたが大事に大事にしている『一天祭壇』を穢した大罪人がついに裁かれますよ」

「……え、そのようですね」

エルが返事をすると、エベーニュ家当主は立ち上がった。彼が部

屋を出て行くと、急に圧力から解放されたような気がしてエルは小さく息を吐いた。

僕がスィリーズ家のお屋敷に戻ると、なんとお嬢様は玄関ホールで待っていてくれた。こともあろうに、そこにテーブルを運ばせてお茶をしつつ本を読んで……いやいや、急な来客とかあったらどうするの!?　みたいな感じではあったけれど、

「レイジ！　よく戻ったのだわ！」

その後ろに犬の尻尾がちぎれんばかりに振られているのを幻視してしまうような歓迎ぶりに、注意することもできなかったよ……。これ、伯爵が知ったら怒るよな。「はしたない」とか言って。次には「ずいぶん娘に好かれましたね（2度目）」が来るに違いない。

ともあれ、僕はお嬢様といっしょに部屋へと移った。もちろん、玄関のテーブルは撤去させて。

「それで……聖王宮ではなにがあったの？」

「気になりますか？」

「当然よ！　レイジはわたくしの……」

言いかけたお嬢様は視線を逸らしつつ、

「た、大切な護衛なのですから」

お嬢様、護衛を大切にされても困るんですが。いや粗末にされるよりはいいですけど。

「そう長くはいませんでしたし、巨大蛇のことも聞かれませんでし

たね。ああ、一応昨日の功績で聖金貨1枚をいただくことになりました。それよりも聖王陛下はリビエレ家のことで忙しいようです」

「盟約」や「裏の世界」のことは伯爵が必要と判断したら本人から話すだろう。ヒンガ老人の――ルルシャさんのことは、話さなければいけないのだけれど、昨日あんなごたごたがあってすぐに話すことはできないと僕は思った。

もう少し、時間を置いてからだ。

「リビエレ家……？」

「はい」

それについては話しても問題ないだろうから、僕はお嬢様にこれまでの経緯と含めて話をした。一応、僕が知っている情報のすべてを。

「……」

お嬢様は、その可愛らしい眉をゆがめてじっと考え込んだ。

「……レイジ」

ややあって、お嬢様は言った。

「……わたくしの思いつきを聞いてもらえる？」

お嬢様の表情は青ざめていた――僕は数分後、その理由を知ることになる。

お嬢様は、やはりお嬢様だった。

貴き血を――本人はそれを嫌がるところもあったけれど――持っ

て生まれ、そして知識を与えられ、なによりも公明正大な精神を身につけた。
たとえそれが、父を傷つけかねないことであっても。

日中はちょくちょく、屋根の上から周囲の状況を確認したけれど、クーデターのようなものは起きていない。むしろ静かすぎて怖いと僕は思った。
伯爵が帰宅したのは夜もかなり遅い時間になってからだった。
僕だけでなくお嬢様までもが伯爵の帰りを待っていたことに、伯爵はその切れ長の瞳を細めた。

「……どういうことですか？」
「まずはお帰りなさいませ、お父様」
「ありがとうございます、エヴァ。今日は寝不足の上、少々神経を使ったので、早く寝たいと思っていましたが……そうはいかないようですね」
「お父様がお疲れであることは重々承知しておりますが、どうしても確認したいことがございますの」
「わかりました。セバス、お前ももう少し付き合ってください」
「はっ……」

執事（セバス）長は僕をじろりとにらんだ。伯爵の健康を損ねるような真似をする人間は味方であっても容赦はしないのがこの人だからね。
玄関ホールにいたメイドや他の執事たちははらはらした顔をしていた――彼らにはなにも説明していないので、この緊迫した空気に驚いている。

「それと、マクシム隊長も同席するように、お願いします」

「はっ」

伯爵の護衛で登庁していたマクシム隊長も来ることになった。

そうなると伯爵の私室は手狭で、来客用の応接室に僕らは向かった。

向かい合うソファに座ったのは伯爵とお嬢様のふたりで、執事長とマクシム隊長は伯爵の後ろに、僕はお嬢様の後ろに立つ。なるほど、伯爵は目に見えるほど疲れ切っているようだ――だけれどこちらも、この話を1日でも先延ばしにできないと考えている。

明日、なにが起きるかもわからないからだ。

「お父様、リビエレ家についてはどうなりましたか？」

「……」

伯爵はお嬢様の斜め後ろにいる僕をじろりと見る。

（そうですよ？　教えたのは僕ですよ？　でもこれはお嬢様が知っていてもいい情報じゃないですか）

そうしていたのはほんのわずかな時間で、伯爵は何事もなかったかのようにこう言った。

「クルヴシュラト様の暗殺未遂疑惑、それと『一天祭壇』に関わる神官を買収し、星の多い天賦珠玉を横流しした罪により、リビエレ家は聖王陛下のコントロール下に置かれることとなりました。かの家の当主は最後まで抵抗し、他の公爵家もフォローしようとしましたが、お屋敷の捜索の結果、神官買収の証拠が出てきました。言い逃れはもはやできません。巨大蛇様々ですね。まあ、早々に聖王騎士団が討伐してくれなかったら被害が拡大して、リビエレ家どころではなかったかもしれませんが」

「……騎士団が討伐？」

その言葉の一部に、僕は引っかかった。

「ええ。そう聞いていますが……現に騎士団が巨大蛇の残骸を接収していますし」

そうなのか。冒険者ギルドは騎士団との争いに負けたのかな。

「……なにかありますか、レイジさん？」

僕は無言で首を横に振った。ウロボロスのことは今は問題にしていない。

するとお嬢様が、

「お父様、『クルヴシュラト様の暗殺未遂』と『天賦珠玉の横流し』の２つに関しては、別々の事件です」

「……それはそうですね。ですがそれが？」

「黒幕も違うということです。お父様は無意識に『暗殺未遂疑惑』と『天賦珠玉を横流しした罪』と２つの言葉を分けてお使いでしたね」

このとき――初めて、伯爵の顔に動揺が表れた。

目が、見開かれたのだ。

「なにも意識せず聞いていれば、ともにリビエレ家が行ったものと考えてしまいますわ。クルヴシュラト様のソース皿に毒を盛った犯人が、死体となってリビエレ家で発見されたこと。そしてその結果、捜査の手が入って神官買収の証拠が見つかったこと……この２つがつながっているのでなおさらそうです。ですが、２つの事件は違い

ますし、実際に関係がなかったものとわたくしは思っています」

お嬢様は淡々と語る。それは、言葉に感情をのせるまいとしているようだった。

「お父様はクルヴシュラト様の暗殺未遂が、リビエレ家の手によるものではないと知っていたのでしょう？　ですから、無意識に『疑惑』という言葉になったのです。なぜならば、お父様が、毒殺未遂事件の黒幕だからです」

少女の黎明（後書き）

次話はお察しのとおり「父の冷血」で、本日１８時に更新予定です。

父の冷血

お嬢様が父の罪を暴いたあと、耳に痛いほどの沈黙が訪れた。伯爵は先ほど以降は驚きを見せずにただお嬢様を見守るように腕を組み、執事長は難しい顔で目をつぶり、マクシム隊長はわかりやすいほどにあんぐりと口を開けていた。

沈黙を破ったのはもちろん、お嬢様だ。

「お父様はリビエレ家が天賦珠玉の横流しの黒幕だとわかっていましたが、手を出せずにいましたわ。いくら『審理の魔瞳』を持っていたとしても相手のウソを証明できるのはお父様だけです。伯爵位より下位の貴族家には強く出られても、上位、この国有数の公爵家には手出しができません。ですからお父様は最初に、クルヴシュラト様の毒殺未遂を計画しました。――マクシム隊長」

お嬢様が急に声を掛けたので、隊長は「は、はい」と甲高い声で反応した。

「先ほど聞いたところレイジは知らないということでしたが、あなたはお父様から『新芽と新月の晩餐会』に行く際、なんらかの薬を持たされていたのではありませんか？」

「え、あ、はい、『万が一にもないがあらゆる毒に効く万能薬で、倒れる者がいたら呑ませるように』って――あっ」

正解（ビンゴ）だったようだけれど、「余計なことを言うな」とばかりに執事長ににらまれたマクシム隊長は口元を押さえている。

「お父様としてはエベーニュ家のエタン様か、エタン様の護衛のど

ちらかが毒を見破ることを想定していたのでしょう。万が一、クルヴシュラト様が毒を呑んでしまったとしても、マクシム隊長が治すことができますわ。ですがその場合、マクシム隊長の行動はあまりに怪しくなってしまうのでその後の行動が制限されてしまいます……そして同様に、レイジが毒を見破ったことでお父様の行動は同じように制限されてしまいましたわ」

毒を見破る、毒を治すというのは、なににもまして「お前が犯人だろ」と言われてしまう諸刃の剣だ。ゆえに、伯爵の次の一手はほとぼりが冷めるまで待つしかない――1月くらいは。

「毒を盛った男はすぐに……殺してしまったのでしょう？　その男を冷凍魔道具で保存しておけば肉体を保たせることができます。ほんとうは、エベーニュ家に毒を見破ってもらい、お父様がリビエレ家で男の姿を目撃した、などと言い、リビエレ家で男の死体が発見されれば大手を振ってリビエレ家の捜索をする――そういう予定だったのでしょう。男の死体はお父様が確保しているのですから、いくらでも証拠をねつ造できますわ。お父様はリビエレ家が天賦珠玉横流しについて、黒幕である確信を持っていて、調べれば証拠が出ることも知っていたのですね？」

ウロボロスが暴れたのは伯爵にとって奇貨だった。天賦珠玉の授与式の後にでもやろうと思っていたんじゃないだろうか？　伯爵はなによりも、お嬢様に天賦珠玉を与えることを優先しなければならなくなっていたし。

伯爵にはマクシム隊長以外の手の者がいるに違いない。今日、聖王宮でエルさんと話していたときにも外には多くの者が息を殺して潜んでいたしね。あえて言わなかったけど。

屋敷が破壊されたどさくさに紛れ込んで、損壊が進んだ遺体が置かれてあっても不自然さは少なくなる。

「見事な推理です」

伯爵は――穏やかに笑った。

否定も肯定もしなかった。

「もう……すっかり貴族なのですね」

「……お父様の教育のたまものですわ」

「いえ――」

伯爵はちらりと僕を見た。

「……エヴァが、必死で考えなければならないことを覚えたのでしょう。誰かさんのせいでね」

僕ですかね。違いますよね？

「伯爵、僕も一点聞きたかったのですが」

「なんでしょうか。誰かさん」

やっぱり僕ですか？

「……ええと、天賦珠玉の授与式でなにかが起きることは、伯爵は知らなかったんですよね？　でも伯爵は、授与式に参加していなかった。それはなぜですか」

「ああ、簡単なことです。授与式には多くの神官が出向きますからね。リビエレ家に天賦珠玉を横流ししていた神官の私室を調べられるチャンスだったんです。リビエレ家と内通していた密書を発見しましたよ――文面にはその密書は『すぐに破棄しろ』と書いてありましたが、リビエレ家に裏切られないためにも、神官としても持っ

ておきたかったのでしょう」

なるほど。神官を調べるのに授与式はベストな環境だったのか。伯爵には授与式を待つ理由があったんだな……。

「その後、闇のドームが出現したので、私は異常を察知してなにか武器になりそうなものを探して、たまたま見つけた石を持っていったのです。あの石には特別な力があると前々から評判でしたから」

まあ、結局のところ伯爵の細腕では破壊できなかったので、僕が代わりに壊すことになったのだけれど。

「伯爵、なぜその神官はリビエレ家に天賦珠玉を渡したりしたんですか。大罪でしょう？」

「それも簡単なことです。お金ですよ。……エヴァも心しておくように。世の中の大半はお金で片がつきます。そして人々はお金によって身を持ち崩し、人生を狂わせるのです」

お嬢様と伯爵の視線がぶつかり合う。

今、お嬢様がなにを考えているのかはわからない。僕にこの推測を――そしておそらく真実を――打ち明けてくれたときには、今にも倒れそうなほどに青ざめていた。だけれど今、お嬢様は覚悟を決めた顔をしている。

「お父様。不正をただすためにお父様もまた不正に手を染めたのですか。人の命を奪ってまで」

こんな言葉をお嬢様に吐かせなければいけなかったのか――僕は何度も自問自答した。僕だって伯爵の行動がおかしいことにうっすら気づいていたし、どこかもやもやした疑念を抱えていた。でも、

僕より先にお嬢様が気がついてしまった。僕がお嬢様に余計なことを話さなければ、伯爵はきっとキレイなウソで誤魔化しただろう。

まだお嬢様は12歳だ。

いくら「大人」になったとはいえ、なってすぐに「大人」の汚さを見せ、義務を負わせなければいけないのか。

(僕がもう少し賢かったら、お嬢様が気がつくこともなかった)

それでも――お嬢様は後になって、数か月か数年かはわからないけれど――自分で真相にたどり着いて、伯爵にこうして正面から疑問を呈したのではないかと僕は思うのだけれど。

本音を言えば。

僕の見えないところで、知らないところで、聞こえないところで、やって欲しかった。

それが僕の偽らざる気持ちだった。

こんなの、つらすぎる。

「……毒を盛った男は、もともと処刑されるはずの男でした。天賦珠玉の横流しに関わっていた貴族家の男で、なぜか捕まらずに逃げおおせました。男は自分の罪を理解しており、その咎が、自分の金で贅沢をさせていた妻や子どもにも及ぶとわかっていました」

伯爵はそこで言葉を切った。

きっと伯爵は取引を持ちかけたのだろう……お前が命を差し出せば、妻子は不問に付すと。

「お父様、罪は法によって裁かれなければなりませんわ」

「そのとおりです。きっとリビエレ家も裁かれましょう」

ああ……この人はお嬢様を「大人扱い」すると決めたのだ。それ

は言葉遣いからも明らかだ。
そして「大人」として扱う以上は、もうけっして本心を見せないと決めていたのに違いない。
たとえ、たったふたりしかいない父娘であったとしても。

「……」

お嬢様の横顔がゆがんでいた。泣きたいのをこらえているような顔だった。
お嬢様は、伯爵がすべてを話してくれるのだと期待していたのだろう。だから正面きって話をしたのだ。
僕はそれは「分の悪い賭け」だと感じていたし、残念ながらその予感は的中したというわけだ。

「エヴァ。誰しもが認める『正義』は存在しません。あなたが『不正』と信じて叩きつぶした人材斡旋所も、身を売ってでもお金を手にしたい人にとっては『正義』だったんです」
「口先だけの詭弁で誤魔化さないでください」
「あなたは今回、自分で動いてどんな『真実』を知りましたか？すべてはレイジさんから聞いた『情報』でしかないでしょう？」
「それは……」
「レイジさんがウソを吐いている可能性は？」
「――ッ！？」

びくりとしたお嬢様が、怯えたように僕を見る。

（……伯爵、それはないでしょうよ）

今回のことは、ある意味で「親子ゲンカ」なのだと思っていた。
お嬢様が怒り、伯爵が許しを乞う。そんなふうに簡単に収まったら

どれほどよかっただろう。
僕だって伯爵の立場を理解している。伯爵は、真にこの国を思うからこそ、この国の中枢である「一天祭壇」の不正をなんとしてでも排除するべきだと思ったのだ――自分が罪に手を染めてでも。
でも、そのことと、僕とお嬢様の関係性はまったくの無関係だ。僕を巻き込むのなら、僕にだって考えがある。

「伯爵。今日をもってスィリーズ家の護衛としての任務を降ります。契約期間中のことですので給金はすべてお返しします」
「!?」

お嬢様が今度は驚きに顔を染める。

「だから、僕とスィリーズ家との関わりはもはやなくなり、利害関係が消失しました。――お嬢様、僕はなにひとつあなたにウソを吐いていません。今朝、あなたに告白した僕の秘密を知っているでしょう?」

伯爵は、僕とお嬢様の仲をどうしたいのだろうか。こんな言葉だけで壊すことができるとでも? ――いや、他にももっと意味が?

「……ごめんなさい、レイジ。取り乱したわたくしが悪いのだわ。あなたがウソを吐くはずなんてないもの。だから、護衛を辞めるなんて言わないで」
「そうですよ、レイジさん。あなたが護衛を辞めたら、あなたの望むものも手に入らないでしょう?」
「いえ、伯爵。今日ひとつ手に入れました」
「……なんですって?」

エルさんとの会話については伯爵も知らないはずだから、虚を突

かれたような伯爵の顔を見られて正直少々気分がよかった。

「だからどのみち……そう遠くないうちにはここを離れる必要があったのです」

「……レイジ、どういうこと？」

「お嬢様、これはまた後で話します」

「……」

お嬢様は「納得できない」という顔をしていたが、

「きっとよ」

と最後は納得してくれた。

だけれど、

「それは、ある意味で都合がよかったのかもしれませんね」

お嬢様の納得を壊しかねないことを伯爵は口にした。

「どういう意味でしょうか」

僕はこのときこそ――ほんとうの意味で「冷血卿」とはなんなのか、その本領を知ることになる。

「6大公爵家というのはなかなか厄介で、証拠が出そろってもなんのかんのと言って反抗するのです。そのために聖王陛下が出張ってもそう簡単にはお取り潰しとはなりません。ましてや今回のことは、私が――たかだか伯爵家がだいぶ出張りましたから、リビエレ家以外の公爵家からも反発が強いのです」

「……いったい、なんの話ですか？」

「つまるところ、なんらかの形で『痛み分け』のような形……見せしめのようなものが必要なのです。それが、たとえば、活躍した英雄の身柄であったりですね」

伯爵は、僕が今まで見てきたなかでいちばんの――爽やかな笑顔を浮かべた。

「時に、レイジさん。あなたは私に隠していることがありますね？」

ぞわりと僕の背筋になにかが這ったような感じさえあった。

そうだったのか……伯爵はもう僕の秘密を知っているのだ。僕が本来、黒髪黒目であることを。

「エベーニュ公爵家が、黒髪黒目の『災厄の子』を我が家が飼っているというふうに言っています。そしてあなたを差し出すのならば、我が伯爵家の落ち度は見なかったことにしよう、と……確かにあなたが、もう、護衛でないのならば、守る理由もなくなりますね？」

そのとき、窓の向こう、こんなに夜も遅いというのに多くの人々が騒ぎ立てる気配があった。

「ふむ……明日の昼にしてくれと話したのに、なんとも気の早いことです。エベーニュ公爵家の手勢がやってきたのでしょう」

もう、話はついていたのか。伯爵とエベーニュ公爵家との間には。

この人は一体、何手先まで読んでいるのか。お嬢様に糾弾されることを知っていた？　いや、知らずとも、もしかしたらこの人は――。

（自分からお嬢様に告白するつもりだった？）

それだけの覚悟をもっていたのなら、伯爵からすればお嬢様が自ら真相を見抜いたことはむしろ――喜びだったのか？

「エヴァ、レイジさん。あなたがたはどうしますか？　今もってなお『正義』を叫びますか？　それとも『不正』を知りつつ『大義』をなすための手伝いをしますか？」

それはつまり、伯爵はお嬢様と僕に「仲間になれ」と言っているのだ。そうすれば――僕を守ってやると。

悪意の真意は懇意の中に

【聴覚強化】によって僕の耳が屋外での喧噪を聞きつける。かなりの人数……3桁は行っているかもしれない。それほどの数がお屋敷の門に集まっているようだ。今はマクシム隊長の部下である騎士たちが対応しているが、向こうが本気を出せばすぐにも破られるだろう。

エタン様のエベーニュ公爵家が、それほどまでに黒髪黒目を敵視しているというのは完全に想定外だった。今日の話し合いの着地点は、伯爵が折れず、お嬢様はふてくされるものの、結局はふたりしかいない父娘なのだからどこかで折り合いをつけてくれるだろう――という楽観的なものだったのだ。

だけれど伯爵はその先に向けてすでに動き出していた。いや、僕のせいで事態が動いてしまった。どうしてバレたのか？　あのときの調停者の言動か……。

「お父様！　あまりにもひどいのではありませんか！？　お父様はレイジに命を救われ、昨日だってレイジがいなければ多くの者が……！」

「いいんですよ、お嬢様。その辺で」

「でも！」

「お嬢様が怒ってくれたという事実だけでうれしいです」

僕が本心から思ってそう言うと、お嬢様は悲しげに僕を見た。

（ほんとうに、それだけでうれしい）

味方がいる。心から信頼できる味方がいる。

それがどれほどまでに勇気づけてくれるか。
伯爵……あなたは知らないでしょう？

「レイジさん、ずいぶんと余裕がありますね」
「ええ。先ほど言いましたよね。僕はもうこの伯爵家とはなんの関係もないと」
「……つまり、今すぐ出て行くと？　あそこにいるのはエベーニュ公爵家の手練れたちですよ」

伯爵が眉をひそめたのは、僕が自分の実力をおごっていると思ったからだろうか。
ああ、まあ、伯爵の前で本気で戦ったところを見せたことはなかったけれど。

「伯爵。僕が知りたかった2つの情報……あなたは手に入れることができませんでしたね。いや、星8つの天賦珠玉についてはかすってはいますが、僕が望んだものではなかった」
「なにが言いたいのですか？」
「僕にとってその2つの情報は、ほんとうに必要だったんです。ここに残って、伯爵家の栄光に守ってもらうことも、分不相応に高い給金をいただくことも、そんなものは要らないんです」
「！」
「あなたはとても賢くて、予言者のように先を読むことができるけれど、ひとつ読み違えましたね。僕は、この国の未来になんてさほど価値を感じていません。自分がのびのびと生きていける場所が他にあるのなら、僕はこの国を去るだけです」
「……なんの未練もないと？」
「ありますよ。でもその未練は、お嬢様ただひとりです」

僕はソファを回って、お嬢様のすぐそばに立った。

「お嬢様。僕といっしょに行きませんか？　世界は広いです――すべてを見て回るには一生をかけても足りないくらいです」

お嬢様の目が見開かれた。

差し出した僕の手を見つめ、それから僕の顔を見る。

伯爵は――なにも言わなかった。むしろ執事長とマクシム隊長がうろたえている。

伯爵は、お嬢様が大事ではないのか――違う。伯爵は自分の身を滅ぼしてもお嬢様を守りたいと思うくらいの親バカだ。では、どうして止めに入らないのか。

「……行くわ」

お嬢様が手を取り、立ち上がったとき、伯爵の無表情が崩れた。

「な、なんだって……？」

伯爵は、お嬢様が手を取らないと知っていたのだ。だというのにそれが間違っていたために、驚いている。

「伯爵。今日、伯爵が留守であった間に教会へ行きました」

「……な、なにを……？」

「お嬢様と伯爵が交わした契約魔術を解除したのです」

「！？」

あの眉目秀麗な伯爵が顔をゆがめている。執事長やマクシム隊長も「わからない」という顔をしていた。

「……その様子では伯爵本人しかご存じなかったようですね」

お嬢様に契約魔術が掛けられているのではないか――と僕が疑ったのは、今日が初めてだった。それはお嬢様が僕の話を聞いて、伯爵のことを疑った際に、あまりにお嬢様の体調が悪そうだったからだ。

お嬢様は、実の父を裏切ったりできないような契約魔術を掛けられているのではないか――そう考えた僕はお嬢様とともに教会へと向かった。

そこで初めて、ノンさんから教わったノウハウが役に立った。

教会では、お金を払うと罪や穢れを祓うという儀式を行うことができる。裸になって聖水で沐浴をするのだが、沐浴の手順が特定の契約魔術を解くプロセスに非常に近いらしい。その際に、高い魔力を体内で循環させると、解かれてしまう契約魔術が多いのだそうだ――そんなことを知っている教会関係者は限られているとノンさんは言っていたけれど。

お嬢様は多くの魔力量を持っていて、しかも【魔力操作★★★★】なんていう天賦もあったので簡単に魔術が解除された。

独特な形式の魔術や、魔術師本人が媒介になるようなものは解除できないということだったけれど、お嬢様の場合は違ったらしい。

伯爵が驚愕の表情のまま腰を浮かせる。

「エヴァ、ならば、お前は……！」

「はい、お父様。すべてを思い出しました……わたくしが、お母様を殺してしまったのですね」

なぜ伯爵が契約魔術を使ったのか。

それはお嬢様が母の死について、当時お屋敷にいた執事から偶然聞いてしまったせいらしい。その記憶を封印し、家族仲を二度と壊さないために使ったのが契約魔術だった。記憶を封印するだけでなく父を裏切らない、娘を裏切らない、といったことを書いていたの

だろう。ただ問題は、「本人が裏切ったと感じたかどうか」が重要で、伯爵がお嬢様にいろいろな秘密を持つことは「娘のためを思った」ことなのでセーフで、お嬢様が伯爵を疑ったことは「父を疑うことは裏切りかもしれない」とお嬢様自身が感じてしまったために契約魔術が働いた。

母の死の事実を思い出したお嬢様は――そのときは取り乱さなかった。淡々としていて、沐浴から戻ってきたばかりのときは最初、特に変わったところも見えなくて契約魔術なんてものはなかったのかなとさえ僕は思った。

だけれどお屋敷の自室に戻ってからお嬢様はすべてを僕に打ち明け、僕にすがりついて泣いた。泣くだけ泣いたあとは、「もう大丈夫なのだわ」と言って笑ってみせた。

――実は、お母様が亡くなったのはわたくしの「鼓舞の魔瞳」が原因なのでは、と疑っていたから。

お嬢様は薄々勘づいていたのだ。

「違う！　お前はなにひとつ悪くない！」

そして伯爵にとって、いちばんの弱点がお嬢様だった。

「わたくしは大丈夫です。ちゃんと自分の罪にも向き合うことができますから。それよりも……わたくしもお父様も、お互いに依存することを止めるときが来たのですわ。わたくしは親離れを、お父様は子離れをしなければいけないのです。あんな魔術に頼らずとも、スィリーズ家の者ならば己の足で立ち、そして歩いていくことができますから」

「だが、だが、お前がこの家を出て行く必要なんて！」

「……レイジ、行くのだわ」

「はい」

僕はお嬢様とともに伯爵に背を向ける。

「エヴァ、エヴァ――――！！」

伯爵の悲痛な声が耳に痛い。立ち上がって追いかけてこようとする伯爵に、僕は殺気を放った――伯爵はその場にくずおれ、マクシム隊長も怯んだ。

伯爵はなにより、お嬢様のことが大事だった。

お嬢様の成長を――父を疑うということさえ「娘の成長」だと受け入れていた伯爵は、お嬢様が心底の部分では絶対に父を裏切らないと信じていた。

契約魔術があったから。

でも、お嬢様はそれを乗り越えたんだ。

そして僕らは部屋を出た。

「……レイジ」

「はい」

「お父様のしたことは、間違っていたの？」

伯爵はこの国のために尽くし、お嬢様のために尽くした。

たとえそれが周囲から見て「悪」だと思われることでも、伯爵にとっては真に正しいことだった。

僕は、伯爵を恨んだりはしない。嫌いになりもしない。むしろ、

（なんて不器用な人なんだろう）

と、同情さえ抱いた。

僕が、あの人をもっと頼って、その庇護下に入ることが伯爵にと

ってすばらしいことだった。だからあんなふうに脅迫まがいのことを言ってきた。
でもそれは僕にとっては悪意にすら見えることだった。
その真意が、僕を守りたいという懇意によるものだとしても。

「間違っていませんよ。あなたのお父様はとても立派な方です」

僕は断言した。

「では」

お嬢様は重ねてたずねる。
僕らは玄関ホールにたどりつく。外での騒ぎに怯えたメイドや執事たちがいる。
僕はお嬢様のために外へと通じる扉を開けた。

「わたくしのしたことは間違っていた？」

薄い月の夜は暗く、スィリーズ家の騎士たちが集まり、多くの魔導ランプが門までのアプローチを照らしていた。
門の向こうには百人ほどの武装兵が集まっていて、あちらもあちらで魔導ランプが光を灯していた。

「いいえ」

僕は断言した。

「あなたが間違ったことをしたなら、僕は全力で止めます」

「……そう」

僕とお嬢様が歩き出すと、それに気づいた騎士たちが制止の声を掛けてくるが、無視してどんどん前へと進んでいく。

「――ここにレイジという護衛がいるべな。彼を出してくれれば済む話だ」

「――こんな夜更けに来ること自体が非常識でしょう」

門のところではレレノアさんと騎士とが押し問答をしている。近づいてきた僕らに気がついた彼らは、ハッとする。レレノアさんは――苦しそうに顔をゆがめた。

「レイジ……手を」

「はい」

僕はお嬢様の手を握った。信じられないくらい冷たかった。無理をしているんだな、不安なんだな……せめて僕の体温が伝わればいい。

お嬢様は僕を引っ張るようにして前へ前へと進んでいく。門から数歩のところで立ち止まる。

「レイジ」

「はい」

「あなたは……伯爵家を出たわたくしでも、護衛してくれるの？」

「喜んで」

「そう……。あなたたち、門を開けなさい」

「しかし、エヴァ様」

「わたくしの命令です。門を開きなさい」

「……わ、わかりました」

お嬢様の言葉に、戸惑いながらも騎士たちが門を開いた。

向こうには油断なく僕を見ている武装兵がいる。スィリーズ伯爵家の騎士たちよりも練度が低そうだけれど、ヒト種族だけでなくハーフリングも多く混じっていた。

「エヴァお嬢様、どうぞそちらにいるレイジ殿をお引き渡しください。伯爵にはこの旨、お伝え済みでございます」

レレノアさんが膝をついて申し出た。

「レイジはもはや伯爵家とは関係がなくなったのだわ」
「そうですか……ならばなおさら問題はありませんね」
「レイジを連れていってどうするの？」
「……それは言えません」
「殺すの？」
「ッ」

レレノアさんがピクリとした。……殺すのかよ。怖いな。というかあっさり人の生き死にを決めてくれるよね。

「渡すわけにはいかないわ。レイジはわたくしにとって、とても大切な……護衛（ひと）だから」
「しかしッ！」
「レイジ」
「はい」

お嬢様は振り返って僕を見上げた。その目に光が点る――それは温かな感情だ。僕の心を熱くし、戦う意欲を湧き上がらせる。
ああ、これが「鼓舞の魔瞳」か。コントロールされた魔瞳のなんと心地いいことだろう。
でもお嬢様。

それをかけていただかなくとも、僕には十分、戦う意欲がありましたよ。

「ここにいる全員を倒せる？」

お嬢様の無邪気な質問に、レレノアさんはぎょっとして、武装兵たちは殺気立った。

「本気を出せば、問題ありません」

それは客観的な事実だ。この世界では１００人の黒鉄（アイアン）級冒険者よりも、１人の純金（ゴールド）級冒険者のほうが強い。

それほどに、天賦の差が大きい。

つまるところ、目の前の武装兵が全員で掛かってもウロボロスを止めることはできなかっただろうと僕は確信している。

「――レイジくん、君はそんなことを言って……」

レレノアさんが僕を落ち着かせるように言ってきたけれど、それは無駄だ。

「本気を出しなさい、レイジ」

お嬢様のオーダーはいつだってシンプルだ。

「道を開くのだわ」

そしていつだって、人使いが少々荒い――まあ、今日ばかりは、

「承知しました、お嬢様」

僕も暴れたい気分だから、ちょうどいい。

53

僕がお嬢様を下がらせて、一歩前に出たのでレレノアさんが警戒して腰の剣に手を伸ばす。

「……レイジくん、私は君の知り合いだからここに来るよう当主様から言われたんだ。『連れてきて欲しい』とだけ命令されているので、その後はどうなるかはわからないべな。だけど、ここで君が抵抗するのならこちらにも考えがある」

「知り合いだからといって僕に剣を向けたら手加減はしないのでそのつもりで」

レレノアさんの鼻の頭にシワが寄る。

「エベーニュ公爵家をなめているようなら、その認識を改めるべな！　ここには聖王都のエベーニュ家を守る――」

「警告はしましたよ」

「――んなッ！？」

僕は門から外へ一歩踏み出し、次の瞬間にはレレノアさんの身体が宙を舞った。その身体に【風魔法】を撃ち込んだことに何人が気づいたろうか？

「あとその話し方は……大切な仲間を思い出すので、あまり聞きたくありません」

相手がハーフリングの女性で、ミミノさんと同じ話し方となると変に戦いづらい。だから、最初に対処できたのはよかったかもしれ

ない。これで気絶したろうから、しばらくは起きないだろうし。
いきなりの攻撃に驚いたのか一瞬、武装兵たちが呆ける。

（隙を晒してどうする？　僕がお嬢様の護衛をやっているときはいつだって気を抜かなかったよ）

僕は【疾走術】で駈け出すと武装兵の間をすり抜けつつ【風魔法】を連発する。

「がっ」
「ぐう！？」
「ぬあああっ」

７人ほどが吹っ飛んで、８人目が盾を使って魔法を止める。止めた瞬間に盾がボウッと光ったのはあれは武具魔術だろうか？

「ぐぬっ。おい、武器を取れ！　構えろ！　攻撃されているぞ！」
「なんて卑怯なヤツだ！」

１人相手にこの人数で押し寄せてきたのに「卑怯」とは恐れ入る――僕を中心にドーナツ状の空間ができた。

（押しつぶさないで距離を取るとか、人数差があるのになにやってるんだ？　もっと卑怯な戦い方を見せてやろうか？）

僕が次に【闇魔法】を発動させると、右手に５つ、左手に５つの計１０個の闇の弾が現れる。

「盾持ちが魔法を止めろ！　来るぞ！」

武装兵が入れ替わって盾を持った者が前へとやってくるけれど、僕はそんなもの気にせず、１０個の闇の弾を放射。

「盾を構えろ！　……ぬっ！？」

僕は人を狙ったりはしない。狙ったのは、

「わあ！？　なんだこれ！」

「暗いぞ！」

魔導ランプだ。次々に闇の弾を発射して魔導ランプの周囲にまとわりつかせる。これは殺傷能力はないが、光を遮断するだけの魔法だ。さらに言えば剣で斬ろうと手ではたこうと数分という時間が経たない限りは解除されない。

途端に、周囲は深夜の暗さに包まれる。

「――フッ」

僕は盾を構えた武装兵へと走る。気配を感じたのか盾を構えた彼らに向かって跳躍し、その頭を踏んづけて後方へと飛び込む。

この暗さがあっても僕には天賦【夜目】がある。向こうにも１、２、３……３人ほど【夜目】持ちがいるようだけれど、それじゃ全然少ないよ。

「ぐご」

「がふっ」

「っ！？」

手当たり次第に【風魔法】を打ち込み、鎧を着ていない相手にはパンチやキックをお見舞いする。【風魔法】はいい。痕跡が残らな

いし、光らないし、強力な風圧は鎧の上からでもダメージを与えられる。

「あそこへ撃て！　多少の巻き添えは構うな！」

魔法使いがいるようで、その人へと【夜目】持ちが指示を出した。突き出された魔法使いの両手に、回転する炎が現れて周囲が唐突に明るくなる。

「撃てェ！」

僕はとっさに地面に手を触れ【土魔法】を発動する。石畳を割ってついでに武装兵を2人ほど吹き飛ばしながら土壁が現れ、炎の弾を粉砕した。

「んなっ！？【土魔法】まで使えるのか！？」

「いくつ使えるんだよ！」

土壁はいい目くらましになった。僕はその隙に【夜目】持ちに接近して【風魔法】で気絶させ、次に魔法使いを殴って沈めていく。魔法使い全員沈め終わるころには暗がりで同士討ちまで始まっている――人数差を生かした戦い方とかもうちょっと考えろよ。

「クソッ！　こいつは何発魔法撃てるんだよ！？」

「撃たせておけ！　どうせそろそろ魔力切れ――ごふっ」

言いかけのところ悪いけど、【風魔法】で吹っ飛ばした。

「ふう、半分は減らしたかな」

魔導ランプを覆っていた【闇魔法】が解除され――ほとんどが地面に投げ出されていたので地面周辺が明るくなる。

僕の周囲には死屍累々という感じで武装兵が倒れている。殺すのではなく気絶させる前提で魔法を撃っているのでさほど魔力の消費は激しくない。これはお嬢様の星４つ【魔力操作】も学習したみたいだな……。僕の体内を流れる魔力が、完璧に制御できる感じがある。

僕はハンカチをポケットから取り出し、額を拭った。少し汗をかいた。

「残り半分」

ハンカチをしまってから、親指から順に【闇魔法】を発動させていき、合計１０の闇の弾を出現させる。

「最後まで遊んでくれるんだろ？」

にこりと笑って一歩進むと「ひぃっ」と叫んだ武装兵が後じさる。ほとんどの武装兵が顔を青ざめさせ、手にした武器も震えていた。

「――その騒ぎ、待てェッ！」

とそこへ、馬の蹄鉄が石畳を叩く音が聞こえてきた。僕の【聴覚強化】がかすかに足音をとらえたあたりで声も飛んできたので、どれほどデカイ声なんだよっていう話だ。

ふだん目にする馬よりも、一回り大きい。筋骨隆々といったふうの青い毛並みの馬だったけれども、それ以上に、馬にまたがる人物のほうが目立ってしまって仕方がない。

灰色熊の毛皮をかぶった巨漢。背中には１００キロを優に超えそうなほどのどっしりした両手斧（バトルアックス）を担いでいる。

「辺境伯……」

ここにきて厄介な人が来た。辺境伯は、ここにいる武装兵が束になっても到底かなわないほどには強いだろう。

僕がにらみつけると、武装兵から１０メートルほど離れたところで馬を停めた。

「戦闘を停めろ、今すぐだ。俺はミュール辺境伯、こいつの意味は全員わかるな？」

辺境伯が腰にぶら下げていた、青色に輝く勾玉のようなものを取り出した。

「せ、聖王陛下の全権委任紋章！？」

武装兵たちがざわつく。どうやら、聖王の代理で来ている――とかそういう意味のようだ。

「わかったらさっさと剣を引け！！　どのみちそこの小僧はお前らの手に負える相手じゃねぇんだよ！　あと戻ったら、エベーニュのちんちくりんに伝えておけよ、今回の抜け駆けは許されねぇぞってな！」

53（後書き）

ｈｉｒｏｍｕｇｉｃｈａさんにもレビューをいただきました。ありがとうございます！

あと前話でちょうど１００話だったようです。タイトル回収で１００話達成とか奇跡かな？（奇跡と書いて「ぐうぜん」と読む）

そんなわけで皆様にひとつお願いです。

もし本作を読んで「面白い」と思われましたら、是非、ログインして「ブックマーク」をお願いします。ブックマーク機能便利ですよ！

それとこのページ下部に「★」をつけての「評価」機能がありますので、こちらも是非ともお願いいたします。皆様が思っている以上に、作者が書き続ける原動力となりますので。

２章はあと少しで完結となりますが（たぶん）、また少しお付き合いくださいませ。

54（前書き）

今日は2番目の子の誕生日なので夕方は更新できないかも……できるかも……。

54

辺境伯が大声で叫ぶと、武装兵たちは倒れた仲間を引き起こし、あるいは気絶から目覚めさせてすごすごと引き返していく。

「レイジ！」

それまで見守っていてくれたお嬢様が走ってきて僕に抱きついてきた。

「レイジ、無事？　わたくし、レイジが勝つって言っても、やっぱり、怖くて……」

「言ったとおりでしょう。全力を出せば負けることなんてないですよ――まあ、石畳を破壊したりしたので、それは直してもらう必要がありますがね」

お嬢様が震えているのを感じ、僕はその背中をそっとなでる――けれど辺境伯への警戒も忘れない。

「くっくっく。止めろ、その目は。俺が戦いたくなっちまうだろうが」

「……僕の行く手に立ちふさがるというのなら、そちらが望まなくても排除しますよ？」

「たまらねえな、お前は！　調停者と戦っているのを見てもすげえと思ったが、底が知れねえよ！」

辺境伯は馬から降りると、バトルアックスを地面に置いて――がらんがらんとやかましい音を立てて――こちらへと歩いてきた。

「……悪かったな、エベーニュ家が余計なことをしちまってな。なんかありゃ、お前の代わりに俺が戦うつもりだったがその必要もなかったな」
「あなたが？　どういうことですか？」
「正式に聖王からの謝罪を伝えに来た」
僕は首を横に振った。
「要りません。もう、僕は聖王都を、クルヴァーン聖王国を離れるので」
「……そうだったのか」
辺境伯は厳しい表情で瞳を閉じた。
「この国はバカをやったってことだな……調停者と戦い、多くの命を救ったお前を、このように扱って」
「いえ、国のことは関係ありませんよ。僕にはやらなければいけないことがあるというだけですから。――行きましょう、お嬢様」
「……ええ」
敵でないのならばそれでいい。僕はお嬢様の手を取って辺境伯の横を通り抜けていく。
「ちょっと待て。お前、まさか――エヴァ嬢を連れていくつもりか？」
「……だったら？　あの凶悪な武器を振り回し、僕の前に立ちふさがるのですか？」
「おいおい、ケンカっ早いにもほどがあるぞ。必要のないケンカは売るな。買うな。俺はスィリーズ伯爵家にどうこう思うところはな

い。ただの確認だ」
「そう……ですね」
僕の中で、まだ戦いの興奮が冷めていないのかもしれなかった。
落ち着かなきゃ――これじゃあ、狂犬だ。
「わたくしはレイジとともに行くと決めましたの。ごきげんよう、辺境伯」
お嬢様が、貴族の令嬢らしくスカートの裾をつまんで礼をすると、伯爵は難しい顔ながらうなずいて応えた。
「小僧……いや、レイジ」
辺境伯は腰のベルトに差していた短剣を鞘ごと引き抜くとこちらに放った。あわててそれを受け取る。
３０センチほどの鞘には虹色の貝殻をはめ込んだ装飾があり、値打ちもののようだった。刃を抜くと、凍えるように白い刀身が現れる。
「……これは？　天銀（ミスリル）を含有しているようですが」
「そこまでわかるのならちょうどいい。餞別だよ、くれてやる」
「いただけません、こんな高価な物を」
「いいんだ、俺はお前が気に入った。そんな男が丸腰で外を歩いてると思ったら、情けなくてよ。あと、こいつはお前がもらうはずだった金だ」
革袋が放られてきて、それを受け取るとじゃらりと硬い金貨の音がした。きっと、聖王が僕に与えると言っていた褒賞の聖金貨のことだろう。ただ、今辺境伯が言った「もらうはずだった褒賞」は建

前で、辺境伯は僕が手ぶらで出て行こうとしているのを見て――まるで追い出されるようにここにいる僕を、そのまま行かせるのに忍びないからという理由でこれをくれたのではないだろうか。

「……わかりました。いただきます」

僕は革袋を懐にしまい、短剣を左手に握りしめた。

この人は、この人だけは、多くの貴族の中でなんの魂胆もなく僕に接してくれる。きっと僕が黒髪黒目であることも知っているんだろう――聖王の名代のように来ている以上は。だというのにこうして送り出してくれるのだから、もらわないと失礼だと思ったんだ。

……いや、でも、それも演技で僕を騙そうとしていたら……？

もしそうだったら今後の人生で二度と貴族は信用しなくなるな……。

「達者でな。あと、気が向いたらうちの領地に遊びに来いよ。あの誘いは俺が死ぬまで有効だからな。わはははは」

豪胆に笑う辺境伯に一礼し、僕らは歩き出す。ざわついていたスィリーズ家の騎士たちが追いかけてこようとしていたけれど、それを辺境伯が止めてくれた。「男の旅立ちにつまらねえことするんじゃねえ」だって。男前だなぁ……見た目さえバーサーカーでなければ尊敬できるんだけど……。

だんだんとスィリーズ伯爵家から離れていく。

僕はお嬢様と手をつないだまま、「第2聖区」を歩いていく。

魔導ランプによる街灯がぽつりぽつりと立っているけれど、通行人なんていない。ここはこの国でも超上流の人々が住まうところだから。

思えばこの通りを、馬車以外で歩くことなんてお嬢様は今までなかったんじゃないだろうか？　あー、いや、あったな。僕とお忍びで平民の町並みを見に行ったときとかね。

「……静かね」
「ええ、真夜中ですからね……」
家々は消灯していて、人の気配も感じない。
世界には僕とお嬢様しかいないような気さえした。
「レイジは、どこで生まれたの？」
お嬢様が不意にそんな疑問を口にした。
「……田舎の町でしたよ。大きな川が流れていて、その周囲に田んぼが広がっていました。毎日田んぼの横を通って学校に通っていましたね」
不思議なことに僕の答えは、僕の日本での記憶だった。
「田んぼ？　学校？」
「田んぼは特定の穀物を作る畑のことです。学校は……この国には職業訓練学校が平民のためにありますが、僕が通っていたのは一般教養を学ぶようなところです」
「レイジは、貴族家の出身なの？」
「ふふっ」
思わず笑ってしまった。地方都市の公務員だった父が貴族だったらと思うと、笑ってしまうのはしょうがないよね。
「貴族ではありませんよ。平凡な家庭でした……でも居心地は悪くなかった」

僕は鉱山で前世の記憶を思い出したけれど、不思議と今までノスタルジーや、ホームシックのようなものに掛かったことはなかった。それは、僕が前世でちゃんと死んだからかもしれないし、あるいはこちらの世界で生きてきた期間も長かったせいかもしれないし、はたまたなんだか記憶が遠く感じられたせいかもしれない。

でも今は――日本での暮らしが無性に恋しくて。

あのなにもなかった街を、お嬢様といっしょに歩いてみたいと思った。

「レイジ、それじゃあ――」

お嬢様はそれからあれこれ質問してきた。ここまでプライベートを掘られたのは初めてだったかもしれない。好きな食べ物。読んで面白かった本。印象に残っている人……。

でも、そんな時間にも終わりは来るのだ。

僕らの目の前に現れたのは「第2聖区」と「第3聖区」を仕切る「3の壁」だ。ひときわ大きい魔導ランプが取り付けられ、出入りする人々を監視している衛兵がいる。

こんな夜更けに何事かと衛兵が近づいてきたので、僕は伯爵家の紋章を差し出して下がらせる。もう伯爵家の人間ではない僕だけど、伯爵から「返せ」とは言われていないので、まぁ構わないだろう。

遅い時間なので「3の壁」の門は閉ざされていたけれど、僕らが出るというのでわざわざ開いてくれた。門が開くと「第3聖区」の闇が広がり、冷たい風が吹いてきた。

「お嬢様」

僕は言った。

「ここで……お別れです」

お嬢様はびくりとして僕を見上げた。

「……え？」

55（前書き）

アトイナ様にもレビューをいただきました。ありがとうございます。
それと、おたおめコメントもありがとうございました（プレゼントをもらって兄弟でキャッキャ遊んでいる間にこれを書いています）。
コロナの今回こそ兄弟がいてよかったなと思ったことはありません。

55

魔導ランプの明かりは冷たい、と僕はいつも思っている。自然の炎や、魔法による光よりも、魔術が生み出す明かりは一定で冷たい。そんな光も、お嬢様の緋色の瞳に映じれば、極上の輝きに見えるのだから不思議だ。

その目に映る僕は、優しげな笑顔――だと思う。少なくとも僕は、必死の努力で笑顔を浮かべているのだから。

「どういう、こと……？」

「言葉のとおりですよ、お嬢様。ここから先は歩む道が違います。僕はこの壁の外へ、あなたはこの壁の内側に留まってください――これまでと同様に」

「冗談でもそんなことを言わないで！」

「冗談でも、ウソでも、虚勢でもありません。お嬢様、ここまでお見送りありがとうございました……あなたに見送っていただいたというだけで、これから先の人生も明るくなりそうな、そんな予感さえします」

「レイジ、どうして……どうしてそんなひどいことを言うの？」

青ざめ、震えるお嬢様をここで突き放す行為は確かに「ひどい」ことだろう。

でも、それでも、僕が決断して実行しなければならないことだ。だって、お嬢様に決断させるほうがよほど「ひどい」のだから。

「お嬢様、ずっと後ろを気にしてらしたでしょう？　伯爵がひとり……たったひとり残されたお屋敷を」

「……そんなことは……」

「いいんです、僕の勘違いかもしれない。それでいいんです。そして僕が勝手に決定し、あなたには『家に帰る』という選択をしていただくだけです」

「……」

「……お嬢様、伯爵とあなたはたったふたりの父娘です。今日はいろいろなことが……いや、『新芽と新月の晩餐会』があったあの日から、ほんとうにいろいろなことが起きました。だから、今のあなたにはすべてを消化できるような心の余裕がありません。当然です。それはあなたが子どもだからではなく、大人だって戸惑うようなことばかりでした」

僕は膝を折り、お嬢様と視線を合わせる。

うつむき加減のお嬢様の瞳に、涙がじわりと滲んでいる。

うっすら勘づいていたのだろう、お嬢様は。自分自身が戻らなければ伯爵がどうなってしまうか——あんなふうに取り乱した伯爵を救ってあげられるのは他に誰もいないのだ。

「いいんです。今は、伯爵のところに帰ってあげてください。伯爵は喜びますよ」

「……でも、そうしたら、レイジは……レイジがひとりになってしまうわ……」

「僕はお嬢様よりもずっと大人ですから」

「たった2つしか違わないのに……？」

「はい。その2つの年の差が、ものを言うんです」

それはさすがにウソだけれど、今さらお嬢様に僕が転生者であることを明かしても意味がない。

「お嬢様、僕は言いましたよね。この世界は広くて、一生をかけても回りきれないほどだって。でも逆に、一生ってのは結構長いんで

すよ。お嬢様が伯爵といっしょに時間を過ごして、大人になってもなお――それでも出て行きたいのなら、この国を出てください。それからでも遅くはないんです。十分に多くの国を回れるほどには一生は長い。だから、お嬢様、泣かないで……これは最後の別れじゃないんです」

ついにぽろぽろと泣き出したお嬢様の頭を僕はなでてあげる。

伯爵のところに帰るのは、今しかない……今戻らなかったら、お嬢様と伯爵の父娘の絆はきっと修復不可能になってしまう。

「……レイジ、わた、わたくしはっ、あなたとずっといっしょにいたかったの……！　あなたが、どうして行かなければいけないの……！？」

「僕が話した秘密のとおりです。伯爵は僕を守ると言いましたが、それはあまりに問題を過小評価しているのだと思います。だから、僕はこれ以上伯爵のところにはとどまれません。それにお嬢様、僕は追い出されるのではなくて、自分から進んでこの国を出るんです――その理由は、次に会ったときにお話ししましょう」

「イヤよ！　ひとりで行くだなんて許さないのだわ！」

「ごめんなさい、お嬢様」

「謝らないで！」

「……今までで一番難しい命令（オーダー）ですね。気をつけましょう。――さあ、お嬢様。お迎えも来たようですよ」

ハッとしてお嬢様が振り返った先に、マクシム隊長が馬を飛ばしてくる。僕らに気づき、僕の視線とお嬢様の泣き顔に気がついて、離れた場所で馬を下りた。

あの人は脳みそまで筋肉っぽく見えて意外と気が利く。まあ、そんな人じゃないとスィリーズ伯爵のところで働けないよね。

「ほんとうに……これが最後のお別れではないのね？」
「はい、もちろんです」

お嬢様は賢い。ほんとうは戻るべきであることはわかっていた。ただ、感情がついてこなかっただけで。

だから僕が背中を押してあげればいいのだ。僕はハンカチを出して――さっき汗をふいてしまったハンカチだけれどこれしかないので仕方がない――お嬢様の目元を拭った。

「……レイジのニオイがする」
「恐縮です」
「わたくしとの約束、覚えている？」
「はい。天賦珠玉をくださるという約束ですね？」

覚えているとも。

――わたくしがあなたにふさわしい、天賦珠玉を与えるのよ！喜びなさい！

まるで、プレゼントをするような口調ではなかったあのことだ。そして、僕が喜んで見せるとお嬢様はうれしそうにしていたっけ。ずいぶん昔のことのようにさえ感じられる。

「きっとあげるのだわ。だから、必ずもう一度わたくしの前に姿を現しなさい」
「はい」

僕は右手で拳を作り、心臓に当てた。

「お嬢様のために、スキルホルダーは空けておきましょう」

「……約束よ」
「はい、約束です」

お嬢様が右手を伏せ、人差し指と中指をくっつけて差し出した。
僕は心臓から離した手でそれを握る。お嬢様の手は、すっかり温かくなっていた。
僕は立ち上がる。
お嬢様が僕を見上げている。
ああ――この人はなんて美しいのだろう。
今までで一番美しいと僕は思った。
賢く、強く、しなやかで、優しく、誰も持っていない彼女だけの魅力を持っている。

「……」
「……」

無言で背を向けて歩き出す。お嬢様は動かず、ただじっと僕の背中を見つめている。
ぽたり、となにか滴が地面に落ちる音を、僕の耳が拾った。嗚咽をかみ殺すような音も。

（……僕が、泣いているのか……）

もう、作り笑いをする必要もない。お嬢様に僕の顔はもう、見えていないのだから。
僕の目から一筋涙がこぼれると、あとはもう壊れた水道のようにだらだらと涙が流れてきた。こんな情けない顔は見せられなかったから、ここまで我慢できた僕はがんばったほうだと思う。
お嬢様がそう望んでくれたように。
僕もお嬢様のそばにいたかった。

日に日に成長していく彼女の姿を、いちばんそばで見守っていたかった。

でも、だからこそ、

「今は、さよならです、お嬢様……」

僕は涙の流れるままに、死んだように沈黙する街を通り抜けていった。

56

「あー……泣いた。久々に泣いた」

「第3聖区」を通り抜けるあたりになってようやく感情が落ち着いてきた僕は、ポケットからハンカチを取り出して目元を拭ってから、あ、これお嬢様の涙を拭いたヤツやん……って気づいてなんだかもやっとした気持ちになった。ハンカチはしまった。

伯爵家の紋章を使って「第4街区」へ入ったところで、

「ゼリィさん、いるんでしょ？」

「あちゃー、気づいてたんですか？　坊ちゃんも人が悪い」

建物の影からぬるりと出てきたのは、僕の旅の連れ合いでもあるギャンブル狂いのネコ獣人ゼリィさんだ。

昨日からのあれやこれやで、ゼリィさんも警戒していてくれたみたいだ。四六時中僕を監視するような面倒なことをする人じゃないからね。今日はほんとに特別だったんだろう。

「のぞき見してるゼリィさんのほうが人が悪い……っていうか趣味が悪いでしょ。ていうかよく『第3聖区』まで入れましたね」

「これくらいならちょちょいのちょいで入れちゃいますよ。さすがに『第2聖区』はヤバイので行きませんけどね」

「ヤバイ警備体制？」

「バレたときにヤバイって意味です。入るのはまぁ」

「……」

この国の警備体制ってザルなの？　それともゼリィさんがすごい

の？

「……なんです、坊ちゃん？」

きょとんと首をかしげているゼリィさん。……うーん、やっぱりこの国の警備体制がザルってほうがありそうだなあ……。

「今なんか失礼なこと考えてません？」

「僕がゼリィさんについて考えているときは大抵失礼ですよ」

「なぬっ！？　聞き捨てなりませんねえ！　坊ちゃんだって失恋したばっかのくせに！」

「は、はあ！？　失恋ってなに！？」

「失恋でしょう！　身分違いの実らぬ恋に身を焦がし、結局はお別れする――なんてわっかりやすすぎる恋物語によく出てくるヤツっすよ！」

「はぁ～……違うんですよねえ。お嬢様は、こう、ね……愛でて育てる対象なんだよね……誰にも邪魔されず、自由で、なんていうか救われてなきゃあダメなんだ……独りで、静かで、豊かで……」

「……」

ゼリィさんがドン引きしている！？

さすがにこの世界で「孤独のグルメ」ネタを振る僕が悪いのだけど。

「ゴ、ゴホン。とりあえずそれは冗談として、ともかくお嬢様とはそういうんじゃないですよ。またどこかで会えるでしょうし」

「そうですかぁ？　それにしても坊ちゃん、どうしてそんなに自分を追い込むんですか」

「ゼリィさんには事情をあまり説明してないはずですけど……」

「どーせ黒髪黒目がバレて逃げてきたとかじゃないんですか？」

「……」

なんでわかるの？　女の勘？

「……ゼ、ゼリィさんが思っている以上に、これはリスキーみたいなんです。エベーニュ公爵家が１００人くらいの手勢を僕を捕まえるためだけに寄越してきたくらいですし」

「ゲッ、マジっすか。じゃあいっしょにいるあーしもヤバイんでは！？」

「そうですね。むしろひとりで放置しておいたら、あなた借金で身動き取れなくなるでしょ？」

「だいじょーぶっすよ！　次は勝ちやすから！」

ダメなヤツの発想ですわ。これはクズですわ。

僕は脱力しながらも今日の経緯をざっくり説明した。

「ふぅ～ん、てゆーかですね、坊ちゃん」

「はい」

「あーし気になるんですけど……最初からお嬢様を帰す気だったんなら、最初から連れてこなければよかったのでは？」

「ああ、はい。そう来ましたか」

「伯爵が気の毒に感じましたぜ、今の話聞いてて」

「実際、一度は痛い目に遭わせないとダメだなとは思ったんで……それはそれでいいんです」

「ゲッ。坊ちゃん、鬼っすわ……」

ゼリィさんがすごいしかめ面をした。

「そのぶんお嬢様を傷つけてしまったかもしれない、というのは気にしてますよ……僕だって」

「そこまで伯爵のことを気にかけてるのなら、坊ちゃんも伯爵家に残ったらよかったんじゃ」
「さっきも言ったとおりです。伯爵家は公爵家には勝てませんよ。聖王陛下は僕に肩入れしてくれたみたいですけど、僕が思っている以上に黒髪黒目ってことは――なんか『災厄の子』とか言われましたけど、貴族の世界ではタブーらしくて。伯爵はお嬢様のことで頭がいっぱいな人なので、僕のリスクまではあまり考えていなかったようですね。エベーニュ公爵家があれだけ拒否反応を示したのなら、他にも追随するところはあるでしょうし」
　他ならぬゼリィさんが言っていた――「権力を持ってるヤツが一等怖いんです」と。
　あれはほんとうにそのとおりだったね。
「そっかぁ～。じゃあ、国を出ましょうか」
「ですね」
　ゼリィさんの口調はどこまでも軽い。それくらい身軽でいたほうが、この世界では生きやすいのかもしれないな。
　僕らが「第６街区」まで出て行ったころには、夜も白々と明け始めていた。ゼリィさんの宿に行ったら、死ぬほど散らかっていたので片付けは宿の人にお願いしてお金をかなり多めに渡してきた。僕の私物は伯爵邸にはなく、この部屋にあるリュックひとつぶんの荷物だけがすべてだった。伯爵邸の荷物は伯爵からもらった手つかずの給金くらいのもので、あれは「返す」と言ったので置きっぱなしでいい。
　この、護衛のためにいただいた服は……処分しておくかな。さっきの戦闘であちこちちょっとほつれてるし。
「ちなみに先立（カネ）つものはありますんで？」

「……うん、まぁ」

バーサーカー――もとい、辺境伯からいただいた革袋を開いてみると、大金貨が４枚と、金貨が１０枚近く入っていた。貴族ってふだんからこんなに現金を持ち歩いてるの？　ていうか革袋自体がすべすべしててめちゃくちゃ高級感あるんだけど？

大金貨４枚と金貨５枚で聖金貨１枚と同じ価値なので、色を付けてもらったことになる。

聖王国まで流れてくるときに着ていた服は丈も足りなくなっていたけれど、僕はそれに袖を通した。服はまた新調すればいい。

外套を羽織り、リュックを背負う。辺境伯からもらった短剣は鞘が派手なので、懐にしまっておく。

「なんだか４年前に戻ったみたいですね」

宿を出て僕が言うと、朝日に目を細めていたゼリィさんが振り返り、ニカッと笑う。

「な～に言ってんすか。すっかり男前になっちまいましたよ、坊ちゃんは！」

「……じゃあいい加減、『坊ちゃん』呼びは止めてくださいよ？」

「坊ちゃんはいつまでも坊ちゃんでいいんですぜ～」

ゼリィさんが手を伸ばしてきて僕の頭をくしゃくしゃっとやる。

見てろよ、いつか背だって追い抜いてやるからな。

「そんじゃ、坊ちゃん。このまま聖王都を出るんですか？」

「ううん、さすがにこれで出て行ったら怒られるよ」

僕は苦笑して、ゼリィさんに最初の目的地を告げる。

宿屋「銀橘亭」だ。
さすがの「銀の天秤」パーティーもこの時間はまだまだ寝ているだろう――あちこちの家から炊煙が立ち上り、聖王都クルヴァーニュの1日が始まろうとしているのを僕は感じていた。

57

「銀橘亭」へとやってきた僕は、朝食の買い出しに行こうとしていたダンテスさんと出会った。

「よう、思いのほか早く来たな？　ん、そっちのは……」

ダンテスさんの様子がほんとうにふだん通りだったことに僕はなんだかホッとするのを感じながら、ゼリィさんを紹介した。

「こちらはゼリィさん。ライキラさんと同じ『闇牙傭兵団』に在籍していた獣人で、僕といっしょにキースグラン連邦脱出に付き合ってくれた人です」

「どもーっす」

「ライキラの……」

ダンテスさんはなにか考えるように眉根を寄せたが、すぐにまた笑顔に戻った。

「とりあえず一度宿に戻るか。驚くぞ、ミミノもノンも。レイジが来るのは早くても5日とか10日後だろうと思っていたからな。お貴族様のスケジュールはなんとも遅くてかなわん」

「え、一応昨日も来たんですが……」

「ノンは『あの様子ではしばらく無理でしょうね』と言っていたんだ」

なるほど、ノンさんは僕が伯爵家で働く道を選ぶと思っていたんだな。

僕らが「銀橘亭」へと入り、ダンテスさんたちが泊まっているらしい部屋へと向かう。なんでも女性ふたりとダンテスさんとで別の部屋に分かれているのだとか。ノンさんと同じ部屋じゃないのかな、と思ったけれど「……親父はイヤなんだとさ……」と寂しげに言われたのでそれ以上突っ込んではいけない話題なのだと僕は知った。

ダンテスさんは僕に人差し指を立てて「しーっ」とウインクしてから、女性部屋をノックする。

「――誰？」

「俺だ。ちょっと開けてくれ」

「――お父さん？　ずいぶん早いじゃないですか」

キィ、とうっすらドアが開くと、ダンテスさんは顔だけ部屋に突っ込んで、

「おお、実はまだ買い出しは済んでなくてな……そこで誰に会ったと思う？」

冗談めかして言った言葉に、ミミノさんとノンさんが息を呑む気配がある。

「――とか言ってお父さん。先月みたいにほんとうにしょうもない『飲み友だち』だったりしたら本気で怒りますよ」

「――禁酒一カ月じゃ温いべな」

ダンテスさん、なにやってるんだよ……。

「坊ちゃんが石化を解いた方でしょう？　元気になったせいで悪さまでするようになったクチですねぇ。まったく、しょーもな」

それをゼリィさんが言いますかね？　酔っ払って路上で寝てたこともありましたよね、あなた？

「こ、今度は冗談じゃない。正真正銘、俺たちの仲間――フゴッ」

ダンテスさんが突き飛ばされて、ドアがバァンッと開いた。

「「レイジくん！？」」

ミミノさんとノンさんのふたりが飛びだしてきた。

「よく来てくれたなぁ！　うわあ、それ、わたしが繕ってあげた服じゃないの！」

「え、え、レイジくん、もしかして伯爵家を辞めちゃったんですか？」

「はい」

わーわー言いながら僕をぺたぺた触ったりしてくる。

僕は笑顔で――このふたりのこんな様子を見たら、笑顔にならないわけがなくて。

「これからまたご厄介になります」

と言ったのだ。

それから僕たちは一度宿を出て、屋台で朝食を買ってから広場のベンチで食事をしながら話をした。

僕の事情はほとんど洗いざらい全部話したので――お嬢様との「

約束」とかは話してないけど――1時間以上掛かってしまった。

「……なんというか、その、大変だったな……」

ダンテスさんが絞り出すように言った。

「ええ、まあ。でも結構楽しかったですよ」

「大変じゃ済まない、あまりにもひどいべな!?　この国の貴族は、恩を仇で返すようなヤツしかいないの――もごっ」

「はい、はい、ミミノさん、ちょっとお静かにお願いしますね～。公衆の面前で貴族批判とかトラブルしか生みませんからね～」

憤るミミノさんの背後からノンさんが口を押さえつける。ノンさんグッジョブ。

「それじゃ、今日中に聖王都を出るか。長居するだけ面倒ばかりだろ」

「え……でも、お父さん。ギルドで受けてた依頼がいくつかありますけど」

「キャンセルだ」

「……そうですね」

冒険者ギルドの依頼ってキャンセルできるものなんだろうか。僕がちらりとゼリィさんを見ると、

「皆様方は確か『銀の天秤』の方々ですよね？『純金級（ゴールド）』の」

「ああ」

「それじゃあ、依頼のキャンセルペナルティはかなり重いんじゃあないんですかい」

え、そうなの!?　ていうか、

「『純金級』!?」

「そうなんだよ。レイジには言ってなかったが、ランクが1つ上がってな……まあペナルティで下がるだろうが、構わん」

「そんな……」

「どのみち昨日、ギルドで暴れてペナルティ食らうのは確定だったからな」

なにやったんですか、ダンテスさん……。アレですか、ノンさんが言ってた「俺たちがヨソ者だからとナメた口利いてくるヤツらには、一度わからせてやる必要があるよな」っていうヤツですか!?

「ちなみに灰銀以下は全勝で、ここの『純金級』とは引き分けだった。いやあ、やっぱ強ぇヤツはいるもんだな!」

「ダンテスさん……なんだか脳筋化してませんか?」

「そうなんです。レイジくんにはお父さんをこんなふうにした責任を取ってもらわないと」

「僕ですか!?」

「そうだべな。レイジくんのせいだべな」

「ミミノさんまで!?」

話は脱線したけれど、みんな、依頼のキャンセルについては「しょうがないな〜」って感じらしい。

「ありがたいけど、申し訳ないです……」

「いいんだべな。レイジくんもいてようやく『銀の天秤』になるんだからな!」

そうかなぁ。そこまでしてもらっていいのかなぁ。

なんだか厚遇されすぎていてうれしいやら申し訳ないやら。
もじもじしている僕の横で、ダンテスさんが、
「それはそうと、アンタは『隠密猫』と呼ばれるゼリィさんか？」
「えっ」
ゼ、ゼリィさんにそんな二つ名が……！？
「ぬっふっふっふ。坊ちゃん、驚きましたか？　なんとあーしは、二つ名を持つ――」
「めっちゃカッコ悪い！」
「なんですとぉー！？」
ゼリィさんが驚愕してるけど、「隠密猫」ですよ。カッコ悪いでしょ。どっちかっていうと猫カフェにいる特定の猫につけられたあだ名みたいな感じでしょ。ゆるキャラの部類でしょ。
「と、とりあえず……坊ちゃんは早いとここの聖王都を出てったほうがいいってのは、あーしも同意見っすわ……」
なんだかダメージを受けているゼリィさんだけど、そう落ち込まないでよ。二つ名なんてなくったってゼリィさんの能力の高さと、人間的にダメな部分は僕がちゃんとわかってるから。
「そうと決まれば行動開始だ」
僕のせいで予定が大幅に変わってしまうというのに、ダンテスさんはそんなものを感じさせないくらい明るい声で言った。
「レイジ、そんな顔をするな。俺は今、猛烈に幸せなんだよ。身体

も健康そのもので、ひとり娘と、長い仲間だった薬師と、それに大恩人であるお前と旅ができるんだ。これ以上を望んだらバチが当たるってもんだ」

「……ダンテスさん」

ああ、寝ていないせいかもしれない。僕はなんだか泣きたい気持ちになった。

人の温かさに僕は何度も救われた。そしてその温かさの多くは、この「銀の天秤」のメンバーからもらっている。

僕は少しでも返せているのだろうか？

石化の回復はできたけれど、ミミノさんにはなにもできていないんじゃないか？

僕は、ルルシャさんに会いにレフ魔導帝国へと行きたい。その次にはラルクを探そう。そうしたらそのときは――「銀の天秤」のみんなといっしょにやりたいことを探すんだ。

「……ってそう言えば、ゼリィさんもついてくる、でいいの？」

「そんなぁ、ひどいっすよ坊ちゃん！　あーしはどこまでもついていきやすぜ！」

ゼリィさんが言うと、すすすとミミノさんが僕の横に来た。

「獣人さんを差別するわけじゃないけどな、この獣人さんはなんだか教育的に悪い気がするべな。レイジくん、あまりこの人の考えを真似てはダメだべな」

「ちょっ、差別じゃないっすか、それは！？」

「大丈夫です。むしろこの人に僕がいろいろと学ばせるつもりです」

「坊ちゃん！？　あーし、結構がんばってますけどね！？」

「『借金』」

「ウッ……」

お腹が痛いような格好でじりりと後じさるゼリィさんを見て僕は笑った。ミミノさんも笑っていた。ノンさんはきょとんとしていて、ダンテスさんがなにか耳打ちを――きっと冒険者によくある身の持ち崩し方みたいな内容を――ささやいていた。

それから僕らは宿に戻って荷物をまとめ、それから冒険者ギルドに向かった。ギルドに入るとダンテスさんを見た冒険者たちが青い顔をして壁際まで逃げていく……いったい全体ほんとになにをやったんですか、ダンテスさん……。

ギルド職員がため息交じりに依頼キャンセルを処理しつつ「銀の天秤」の「灰銀級」降格を告げる。だけれどダンテスさんもミミノさんもノンさんもどこ吹く風という顔だった。そこでレフ魔導帝国へと書簡を運ぶ依頼を請け負う――その依頼がないと、入国できないほどに制限の掛かっているところらしい。全然知らなかった。

ギルドを出れば、あとは馬車を探して聖王都を出るだけだった。僕の追っ手などは掛かっていなかったけれど、馬車に乗り込むときには視線を感じた。エベーニュ公爵家の手の者か、あるいは別の者か。それも、聖王都を出た後には感じなくなったのだけれど。

馬車での旅は長い。僕らはいろいろなことを話した。

ダンテスさんは「出会いも蛇なら、再会も蛇だな」と笑った。

ノンさんはやはり【光魔法】を習得していたらしく、教会としては使い手――適性を持っている人間が少ない【光魔法】なので、なんとしてでもノンさんを手放すつもりはないらしかった。

そのノンさんからは「あんなにぽんぽんと魔法を発動し、なおか

つ属性の大幅に異なる2種類の魔法を同時に放つなんておかしいのですが？」とまで言われた。

ミミノさんは「レイジくんだから不思議じゃないべな」と大真面目に言われた。ミミノさんに親バカの片鱗が見えます。

ウロボロス戦でミミノさんが使ってくれた「魔法複製薬（デュープ・ポーション）」はやはり相当に希少な素材を使いまくってできたものらしく、なにかあったときの最終兵器に残しておいたものなんだとか。「また作らなくちゃなぁ～」とちっとも残念そうでもなく、むしろ楽しそうに言っているので、いいのだろうか……？

ウロボロスの素材については聖王騎士団がほとんどを接収したようだけれど、いくらかは冒険者ギルドも持ち帰っていたようで、さらにはダンテスさんが、僕がショートソードで砕いた、ウロボロスの頭にあった宝玉のようなものを持ち帰っていた。「戦利品がこれだけってのも寂しいけどなぁ、まあ、ないよりはいいだろうさ」と笑っているけれど、【森羅万象】で見ると、なんだかとてつもない魔力が封じ込まれているようなんだよね……おいおい見ていきましょう。

話しても、話しても、話しても話題は尽きなかった。僕のことだけでなく、「銀の天秤」の4年間もかなり濃いものだったみたいだ。残念ながら、ラルクや【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★★】に関する情報はなかったようだけれど。

はるかに遠くから見えていた巨大都市、聖王都クルヴァーニュの姿も見えなくなり、それからまた何日も何日も僕らは馬車に揺られた。

多くの街を過ぎていくたびに、ささくれだっていた僕の心が少し

ずつ落ち着いていくのを感じる。
僕は聖王都でいろいろなことを間違え、あるいは正しいことができた。後悔していることもあるけれど、ひとつひとつをちゃんと胸にしまって前を向く。
きっとお嬢様もそうしているはずだ。
（……お嬢様、また会いましょう）
僕らが見上げる空は同じ空だ。同じ星が瞬き、同じ雲が流れる。
きっとまた会える。
そのときにはお嬢様も立派なレディーになっているだろうか？
あるいは無茶振りをするお嬢様のままだろうか？
見た目は変わるだろうけれど、根っこの部分は変わらなければいいなと僕は思った。
お嬢様ならば、きっと、変わらないに違いない。
僕らは一路、魔術と技術の国「レフ魔導帝国」へと向かう――そこで僕の旅の目的のひとつである、ルルシャさんに会うために。
地面から立ち上る熱気混じりの風が馬車に吹き込んでくる。
季節はそろそろ夏になろうとしていた。

57（後書き）

これにて第2章本編は終わりで、レイジの視点外の後日談を挟んでから第3章へと移ります。

なぜかわかりませんがレビューをいっぱいいただいていました。恐縮です……じゃなくて、ありがとうございます！

後日談（前）

＊　聖王宮　＊

報告を一通り聞いた聖王は、腕組みをして天を仰いだ。
ここは聖王宮の謁見の間ではあるが、堅苦しいような場所ではなくて応接間のように丸テーブルが置かれてあった。「堅苦しい」ほうの謁見の間は、「第１聖区」に存在する。聖王宮に入れるのはあくまでも聖王国の者だけだった。
謁見の間にいるのは聖王の他に聖王子クルヴシュラト、ミュール辺境伯だけだ。辺境伯は相変わらず灰色熊の毛皮をかぶっている。

「するってぇと、なにか……？　俺たちは、天賦珠玉授与式で現れた調停者を追い払う手伝いをし、大量に人死にが出るかもしれないという事態を防ぎ、なおかつ――巨大蛇を討ち取ったという男を、こともあろうに！　黒髪黒目だっつう理由だけで！　捕まえて殺そうとし、さらには返り討ちに遭い、聖王都から出て行くのを指をくわえて見送ったっていうのか！？」
「さようですな」

聖王の怒声に動じることもなく、灰色熊が応える。

「エベーニュのバカはなにを考えてそんなことをした！！　それに、聖王騎士団もだ！！　連絡の手違いとはいえ、自分たちで討伐したと吹聴したのか！？」
「功を焦り、冒険者ギルドに全部持って行かれたくないという気持

ちから、とりあえず事実と違うとわかっていても自分たちに利益があるよう主張してしまう……まるで騎士ではなく、貴族のようですな。『これは手違い』、『虚偽の報告はしていない』、『すべては国のため』、などと言うところもまるで同じ」

「辺境伯！　皮肉は要らねえ！」

「皮肉ではなく事実でしょうが」

「だったらそのクソくだらねえ事実を垂れ流す口を閉じろ！　なんの意味もねぇ！」

「ちょ、ちょっと……お父様、落ち着いてください」

クルヴシュラトが間に入ると、聖王も多少は落ち着いたらしくカップに入った水を飲んだ。

「ああ、クソッ、リビエレ公を追及してる場合じゃなかったってことか……」

「ふぅむ……公爵家のほうは、いかがですかな」

「……うむ、うまくねぇな。エベーニュ公がかなりリビエレ公に肩入れしている。スィリーズ伯が持ってきた証拠が気にくわないらしい」

「スィリーズ伯の『審理の魔瞳』は使いどころが難しいと」

「そうだ。しかもあの護衛……レイジ、と言ったか。あいつがスィリーズ伯のところにいたのもまた問題をこじれさせている。だがまぁ、時間の問題だ。落としどころをどこにするか探っているだけさ」

「落としどころですか」

「ああ……エベーニュ公だってほぼほぼ真っ黒のリビエレ公をかばいきれるわけがねぇことくらいわかってる。だが、このまま放っといたらスィリーズ伯がのし上がることになり、エベーニュ公は『英雄を殺そうとした』なんて悪いウワサまで立てられる。今のうちにキャンキャン吠えて、スィリーズ伯の正当性を下げておきたいんだろうよ」

「……」

それは「悪いウワサ」などではなく「事実」では、と辺境伯も思わないでもなかったが、「事実」が「真実」とは限らないのが貴族社会だ。

「挙げ句の果てには、『ルシエル公爵家の剣聖オーギュスタンがいれば今回の被害はもっと小さくなった』とルシエル公まで槍玉に挙げられたな」

「まあ、エベーニュ公とルシエル公はもともと仲がよろしくないですからな。……さて、陛下。それでは自分はこれにて失礼します」

「うむ……もう、領地に帰るのだな？　ミュール辺境伯、変わらぬ忠誠に感謝する」

「はっ」

「お主の叱咤を、二度と忘れぬ」

「……お戯れを」

辺境伯は凶悪な面相でニッと笑ってから、立ち上がると部屋を辞した。

「聖王陛下、辺境伯の『叱咤』とは……」

クルヴシュラトにたずねられた聖王は、

「……お前にも友が必要だな。信頼し、すべてを任せられる友を」

それはまるで自分に言い聞かせているかのようだった。

これから聖王には多くの問題が待ち構えている。特に、天賦珠玉授与式で起きたことを貴族たちにどう説明するかというのは悩ましいところではあった――結局のところは、すべてありのままに話す

しかないと腹をくくってはいるのだけれど。
ただそれを説明するということは、とりもなおさずクルヴシュラトの命を捧げることを嫌った聖王の「罪」を認めるということだ。そしてルイが死んだロズィエ家とどう向き合うかを考えなければならない――ロズィエ家は「子が勝手にしたこと」とは言っていたが、内心では納得できていないに違いない。
これが、6大公爵家の1つであるリビエレ家の取り潰しと絡んでくるので大混乱は避けられない。

「クルヴシュラト、お前から見て兄と姉はどうだ？」
「お兄様とお姉様ですか？　お二方ともとても立派です。きっとお兄様は、次期聖王となりすばらしい御代となることでしょう――あっ、い、今のお父様、じゃなかった、聖王陛下が悪いということではありませんよ！」
「わかっている」

聖王は目を細めてクルヴシュラトの頭をなでた。
父としての感情が判断を狂わせた。そして混乱を招いた。
それでもなお――今もなお、父としての自分を捨てることができない。

「……さあ、聖王としての仕事が残っている。俺は行く」
「はい。行ってらっしゃいませ、陛下」

聖王は立ち上がると、肩で風を切って謁見の間を出て行く――それをクルヴシュラトは頭を下げて送った。

「……」

しばらくして顔を上げたクルヴシュラトの表情は曇っていた。

彼もまたわかっていた。自分が助かり、ルイが――友になれるかもしれなかった少年が死んだことを。

なにも事情がわからず、気がつけばあんな事態になっていた。本来は自分が死んでいたかもしれないと思うとぞっとする反面、どうして自分が生き残ってしまったのかという自責の念にも駆られる。

死こそが聖王家の務めならば、果たすべきだったのだと。

「……エヴァ嬢は、どうしているだろうか……」

クルヴシュラトはそのとき、あの美しい少女を思い出していた。父の懐刀であるスィリーズ伯の娘であり、大きな被害を防いだ「英雄」を護衛としていた。

授与式ではひどく体調が悪そうだったけれど――。

「……」

クルヴシュラトは首を横に振った。彼女の存在に惹かれているのはわかっていたけれど、そんなことをしていい立場ではない。

（ほんとうは我が死ななければならなかったのだ）

ならば。

「残りの命を、国のために尽くさなければならないですね……」

12歳の少年に、悲痛な覚悟を強いるほどに今回の事件は暗い影を聖王宮に落としていた。

後日談（後）

＊　シャルロット＝フレーズ　＊

フレーズ侯爵家は、目立たない。
貴族社会において侯爵家ともなれば高位に違いないのだけれど、フレーズ家はとことん目立たなかった。
舞踏会ではダンスに誘われず、お茶会に参加しても話を振られず――その後の手紙などで「フレーズ家の方は参加されなかったようで、お会いできずに残念です」などと書かれるのだから始末が悪い。
ゆえに、侯爵家令嬢であるシャルロットは幼いころからこう心に決めていた。

「私は私！　貴族社会で花開くのよ！」

笑い方も研究した。

「おほほほ！」

しかし入れ知恵しているメイドのセンスが古すぎたせいか、

「お嬢様、手の甲をアゴに当て、高らかに『お～っほっほっほっほ』です！」
「お～っほっほっほ！」
「もう一度！」
「お～っほっほっほ！」

「すばらしいですわ！　次はお化粧です！」

どんどん間違った方向へと傾いていった。化粧をし、ストロベリーブロンドの髪を縦ロールに巻いたりもした。

ただ悪目立ちはするので、貴族の子どもたちが集まっても、

「あらぁ？　あなたってばどうしてそんなに野暮ったい服を着ているのかしら？」

（本音：ウチに遊びに来てくれれば上等な服を見繕ってあげるのに！）

高圧的な物言いに、みんなドン引きだった。

そんな中、唯一残ったのが、

「うちにはこんなものしかないから。辺境には商人も来ないんだぁ」

ミュール辺境伯家のミラだった。

ミラは辺境でのびのび育てられたのでキラキラしたものに弱い。

子どもなのに化粧をしているミスマッチ極まりないシャルロットでさえミラにはキラキラして見えた。

「そ、そうなの、それはお気の毒……じゃなかった。お～っほっほっほ！　ならばフレーズ家の御用商人を辺境伯家に向かわせますわ！」

「えっ、いいのぉ！？」

「それくらいたやすいことですわ！」

高笑いしていたのはシャルロットだけで、この話を後日聞いた御用商人は顔色を青ざめさせた。それほどまでにミュール辺境伯領は遠いのである。しかし、

「は、イヤなのか？　まさかウチの娘をウソつきにする気ではあるまいな？」

シャルロットを目に入れても痛くないほどに可愛がっているフレーズ侯爵にメンチを切られ、御用商人は泣く泣く辺境伯領に通うこととなった。

このことが、辺境伯領に新たな商品流通をもたらし、その後の冒険者流入とダンジョン攻略による大発展時代を導くのだが――それはまた何年も後のお話。

そんなシャルロットの、「大人デビュー戦」である「新芽と新月の晩餐会」は――彼女的には「大失敗」に終わった。

「――目立てなかった！」

なんか恐ろしい覆面が攻め込んでくるし、次には毒がなんとか言って、保護されるように会場から連れ出されるし、

「クルヴシュラト様とほとんどお話もできなかった！」

シャルロットは泣いた。化粧が崩れるほど泣いた。

だがチャンスはまだあった。その後にお茶会が開かれたのだ――クルヴシュラトは来なかったけれど。それでも、公爵家とつながりが持てるのはよかった。なにせ6大公爵家はこの聖王国で絶大な権力を持っており――そのせいで公爵家の下にある侯爵家は目立たないのだが――彼らといっしょにいれば、自分もまた目立てるではないか。

「ぬぬう……」

しかし、問題は――明らかに自分より目立っている存在、スィリーズ伯爵家の令嬢エヴァがいることだ。

「……あの女より私が目立つにはどうしたら……」

「どうしたのですか、シャルロット嬢？」

「みにゃあ！？」

変な声を上げてしまった。

そこにいたのは、彼女の数少ない友人であるミラである。

「お、驚かさないでくださいまし！」

「ごめんごめん」

ぽへ～と笑うミラを見て、ため息ひとつ。この子は脳天気でだんだん自分とのやりとりでも遠慮がなくなってきている。さらにはエヴァ嬢に一目惚れして――深い愛情ではないとシャルロットは信じたいけれどこの大好きっぷりを見ていると自信がなくなってくる――すわ敵かと警戒しつつある。

「あなたねえ、もうちょっとしっかりしなさいな。あなたのお父様はもう辺境伯領に帰ったのでしょう？　あなたひとりで立っていても全ッ然目立たなくてよ！」

「あ、パパのこと知ってたの？　ありがとう、心配してくれて！　でも私、ひとりでも強いから！」

「そういう心配じゃなくってよ！　あなたの家の、これ以上ない悪目立ちしてる辺境のシンボルがいないことを言っているの！」

「あはは。シャルロット様がパパのこと褒めてたって言っておくね」

「褒めてなくってよ！」

話が通じなくてイライラしてくるシャルロットである。

「……授与式のショックとか残ってないみたいだね」

ぽつりとミラが言った言葉は、シャルロットには聞こえていなかったようだ。

天賦珠玉授与式で起きた事件は、参加した子どもたちにショックを与えていた。今年の授与式は行われなくなったので子どもたちは各家でそれぞれ天賦珠玉を受け取っていた。

ちなみにミラは【近接格闘術★★★★】で、シャルロットは【美髪★★★】である。親の趣味がよくわかる。【美髪】はレア中のレア天賦珠玉であり、他国から取り寄せているあたり、フレーズ侯爵の親バカっぷりがうかがえる。おかげでシャルロットのストロベリーブロンドは今日もつやっつやで、縦ロールはびよんびよんだ。

「ん、あれは？」

ふたりが今いるのは、「第1聖区」内の会議棟にあるロビーだった。先日の天賦珠玉授与式でなにが起きたのか――それにウワサでは6大公爵家にも異変があったらしく、その内容の発表が行われる。子どもたちが本来聞くべきことではなかったが、授与式に関しては当事者なので、シャルロットたちが呼ばれている。

シャルロットが気づいたのは、会議棟の廊下の先、柱の陰になっている場所にいたスィリーズ家令嬢のエヴァと、おそらく当主のヴィクトルのふたりだ。

「あっ、エヴァ様。話しかけましょ――もごっ」

「お黙り。こっそりと進みましょう」

「えぇ……盗み聞きをするの？」

「言い方。私たちは足音を立てずに歩いていたらたまたまお話が耳

に入ってしまうだけよ」
「それを盗み聞きって言うんじゃ……」
幸いシャルロットとミラの護衛たちは数人で話に盛り上がっている。腹立たしいほどに護衛たちは仲がいい。顔採用のシャルロットの護衛はなよっとしているが、話し上手なので他の護衛たちもワハハと笑っている。
エヴァのほうへと進んでいくと、声が聞こえてきた。
「――お父様。それでは『災厄の子』に関する記述は何百年も……特徴は『黒髪黒目』ということなんですね？」
「――ああ。過去に滅びた国もあり……」
「――わかりました。ありがとうございます」
「――引き続き調べよう。それでいいかい？」
「――はい、もちろんですわ。――あら？」
シャルロットとミラに気づいたエヴァが、こちらを向いてふわりと笑う。
「っ！」
それは、女性のシャルロットが見ても思わずドキリとしてしまうような笑顔だった。無論のこと、ミラはぽーっとして、「かわ、か、かわわ……」と語彙レベルが1歳児にまで落ちている。
（ななんなのよも～～～～！　いきなり大人びちゃっても～～～～！　も、もしかして想い人でもできたのではなくって……！？　でなければこんなふうに大人びたりすることはなくってよ！！）
父と小さく別れを告げたエヴァはこちらに歩いてくるが、スィリ

ーズ伯は名残惜しそうな顔をしつつも離れていった。仕事もできる（らしい）、さらには美形の父がいるというのもまたシャルロットのジェラシーポイントである。

「ごきげんよう、エヴァ様」
「ごきげんよう、シャルロット様、ミラ様」
「かわ……」
「それはそうとエヴァ様」

ミラがこんなんなってるのはいつものことなので、スルー耐性がついているふたりである。

「ずいぶん雰囲気が変わりましたのね？」
「？　……そう、ですか？」
「もしや想い人でもできたのではなくって！？」

ずばり切り込んで、動揺する顔のひとつでもおがんでやろうと思ったシャルロットだったが――案に反してエヴァは小さく、困ったように微笑むだけだった。

「……そんなふうに言えたら、よろしかったのですけれど。わたくしではまだまだ、あの方の横に立つには足りませんわ」

それは、「想い人がいる」と認めたも同然の発言だったけれど、それ以上にエヴァが「足りない」だなんて言ったことにシャルロットは驚いた。

とそこへ、チリンチリン、と小さなベルが鳴った。

『――お集まりの皆様、これより聖王陛下名代による説明が行われます。室内へといらっしゃいますよう御願い申し上げます』

何人もの神官が現れ、ベルを鳴らしながら貴族たちを誘導していく。

「あら、時間のようですね。それでは皆さん行きましょう」

「あ、は、はい……あら、エヴァ様」

そこでシャルロットは気づいた。彼女の護衛についているのはガチムチのオッサン――マクシム隊長である。

「護衛が変わりましたのね」

するとエヴァは、今度はとてもいい笑顔でこう応えたのだった。

「はい。――今のところは、ですが」

この日、貴族たちに説明された内容は彼らのみならず聖王国全土に激震をもたらした。

聖王家の義務――人身御供をしていたという過去が明らかになった。

次に今代の聖王がその座を降りることとなり、今後はグレンジード公を名乗るとした。次の聖王は第1聖王女が継ぐことがきまり、第1聖王子以下の王子たちは王位継承権をこれまでどおり保持しつつ、第1聖王女に子ができるまでは聖王子を名乗り続ける。

最後に、6大公爵家の一角であるリビエレ公爵家の取り潰しが決

まった。しかしながらその所領はあまりに広く、一度聖王家直轄としつつもゆくゆくは領地を持たない貴族に分配されるとした。リビエレ公が「公爵家廃止」を求めたという理由が説明されたが、これをまともに受け取る貴族はいなかった。公爵家の人間は市井の人となる。海運で事業を興したので、その事業はリビエレ家が引き継ぐようだ。ただし、現在１０歳の第３聖王子との婚姻は破棄されたので多くの貴族がこれはチャンスとばかりに聖王家へ売り込みを始めた。

その筆頭が、シャルロット＝フレーズ本人なのだが――この恋（？）が実るかどうかは、定かではない。

後日談（後）（後書き）

シャルロットちゃんはバカワイイ（真相）。

というわけで、これにて第2章が完結となりました。
いかがでしたでしょうか？
「面白かった！」「レイジの今後の成長も見たい！」「お嬢様と再会するところまでは死んでも続けろ」と思われましたら、是非本ページの下にあります★から「評価」をお願いいたします。
★は作家の、更新のモチベーションとなりますので是非ともお願いいたします。
（これは本作に限らず、大抵の作者様はそうだと思いますので、★を気軽につけていくのが文化になればいいなと思っています）

次話で第2章の登場人物を挟んで、それから第3章に入る予定です。

第3章は「黒き空賊は月下に笑う」――レフ魔導帝国編でお会いしましょう。

オバスキ・キャラクター表（2章終了時点）（前書き）

ちょっと表記揺れとかあります（聴覚強化・聴力強化等……）。知覚に関しては今後「視覚」「聴覚」で統一したいと思います。
その他いろいろ見落としがあったりしつつ急いで直したりしつつしていますが、抜本的に直すことは時間掛かりすぎるので勘弁してください……！　誤字で報告いただいたものは適用しています。報告ほんとありがとうございます。

あと、前回のキャラ紹介同様若干の今後のネタバレっぽいのが含まれていますがたいしたものではありません。
特性ごとの天賦珠玉の色分けについては、そう言えば書いてなかったような書いていたような記憶があやふやでしたので、いい機会なので全部出しました。

オバスキ・キャラクター表（2章終了時点）

■レイジ

黒髪黒目―１４歳―ヒト種族―男

前世は日本人の転生者。１６歳の時学校帰りに事故死した。

【森羅万象（ワールド・ルーラー）１０】

習得天賦：

《身体特性：赤色の天賦珠玉》

―【腕力強化★】【背筋力強化★】【腹筋力強化★】【脚力強化★】【握力強化★】【柔軟性強化★】【瞬発力強化★】【スタミナ強化★】

―【免疫強化★★】―【身体強化★★★】

《技能特性：緑色の天賦珠玉》

―【手先が器用★】

―【剣術★★】【槍術★★】【斧術★★】【弓術★★】【短剣術★★】【近接格闘術★★】【蹴術★★】【盾術★★】【大盾術★★】【疾走術★★】【跳躍術★★】【硬化術★★】【大剣術★★】【拳術★★】【ケンカ術★★】

―【曲射術★★★】【舞踏剣術★★★】

―【竜槍術★★★★】

《感覚特性：黄色の天賦珠玉》

―【視覚強化★】【聴覚強化★】【嗅覚強化★】

―【夜目★★】

《魔法特性：青色の天賦珠玉》

―【魔力強化★】【魔法適性強化★】

―【水魔法★★】【風魔法★★】【土魔法★★】【花魔法★★】【雷魔法★★】【闇魔法★★】【光魔法★★】【魔力量増大★★】

―【火魔法★★★★★】【魔力操作★★★★★】
《神秘特性：白色の天賦珠玉》
―【祈祷術★】
―【回復魔法★★】【補助魔法★★】
《知能特性：紫色の天賦珠玉》
※こちらはほとんどが【森羅万象】の下位互換なので学習できていない状況です。
《オーブ強化：黒色の天賦珠玉（極めて希少）》
―【オーブ着脱★★★★★】
《ユニーク特性：虹色の天賦珠玉》
―【生活魔法★】

■エヴァ＝スィリーズ
金髪緋目―３１歳―ヒト種族―女
スィリーズ伯爵家の令嬢。「鼓舞の魔瞳」の持ち主。
【魔力操作４】

■ヴィクトル＝ドゥ＝スィリーズ
金髪緋目―３１歳―ヒト種族―男
スィリーズ伯爵家当主。「審理の魔瞳」の持ち主。奥方は病没しており、名はアデール。

■貴族
ルイ＝ロズィエ：茶髪赤目―１２歳―ヒト種族―男―６大公爵家
エタン＝エベーニュ：飴色髪―１２歳―ハーフリング―男―６大公爵家
シャルロット＝フレーズ：ストロベリーブロンド髪―１２歳―ヒト種族―女―侯爵家
ミラ＝ミュール：渋茶髪―１２歳―ヒト種族―女―辺境伯家
ミュール辺境伯：渋茶髪―３９歳―ヒト種族―男―辺境伯家当主

■聖王家

聖王：聖水色（明るい水色）髪目―３８歳―ヒト種族―男―【竜槍術★★★★】

クルヴシュラト：聖水色（明るい水色）髪目―１２歳―ヒト種族―男

■護衛たち

レレノア：飴色髪―２３歳―ハーフリング―女―エベーニュ家護衛団第２隊長

アルテュール：鳶色髪灰色目―２４歳―ヒト種族―男―聖王騎士

■ミミノ

飴色髪青目―２４歳―ハーフリング―女

相変わらず困った人を放っておけない。

■ノン

緑髪緑目―２０歳―ヒト種族―女

押しの強さに磨きが掛かり、【光魔法】を新たに「師匠」から習った。

■ダンテス

緑髪緑目―３９歳―ヒト種族―男

つよい。

■ゼリィ

赤茶髪黄目―２２歳―猫系獣人―女

隠密猫。

■その他

マクシム隊長：スィリーズ家の騎士をまとめている。脳筋のいい人。

執事長：スィリーズ家のために尽くしている人。伯爵の絶対的な味方。

■星６つ・星５つの天賦珠玉保持家

【聖剣術（ホーリーソード）★★★★★★】：聖王騎士団長（第１隊長）―消失

【剣術★★★★★★】：ロズィエ家―６大公爵家

【竜剣術★★★★★★】：ルシエル家―６大公爵家―剣聖オーギュスタン

【魔力強化★★★★★★】：ラメール家―６大公爵家

【神秘調合★★★★★★】：エベーニュ家―６大公爵家

【英雄指揮術★★★★★★】：リス家―６大公爵家

【祈祷術★★★★★★】：モンターニュ伯爵家

オバスキ・キャラクター表（2章終了時点）（後書き）

それと重要なお知らせですが……。

数日休みます！！！！！

なにを隠そう第3章の構想がまったく練れていないのですね。とりあえず舞台と大筋は決まっていますが、掘り下げが全然できていないので、そこからです（初歩の初歩かよ……）。

それと並行して進めている、進めなければいけなかった、書籍版ルール・ブレイカーの原稿がなかなか進まず（一応進めてはいますが頭の中がオバスキでかなり占められている状態でしたので……共感いただけるかわからないのですが、第2章のタイトル回収の回あたりは、1日前に考えていた内容を翌日には違う形でアップする、みたいなことをやっていて、「そっちのほうが絶対面白い！」と私が確信してしまったせいなんですが、ともあれそのせいで人間として生きていくリソースの大半を作品に持って行かれました。私は幸せ者です）……そんなわけで他の原稿をやります。没入してガーッと書きます。そうすると、あら不思議、すぐ終わる！（作者は死ぬ）

その分、3章は面白くします。

なんたって……ね！　もう、ね！　わかるでしょ、サブタイトル見ればね！

いや、そんなこと言ってつまらなくなったらどうしよう（情緒不安定）。ここまで読んでくださった方が、喜ぶ展開であることは間違いないとは思うのですが。

1日でも早く更新再開できるようにがんばりますので、皆様も3密

を避けてお過ごしください。いつになったらコロナは終わるのやら……早く喫茶店作家に戻りたいです。マイカー作家は腰を痛めるのじゃよ……。

1（前書き）

お待たせしました。新章開幕です。予定とちょっとだけ章題が変わりました。

1

「レイジッ！　あとは頼むぞ！」
「任されました！」

森の奥深くを茶色い巨体が走っていく。巨大猪（ギガボア）と呼ばれるそいつは、２tトラックほども大きくて、少々の木々ならば薙ぎ倒して走っていく。
毛並みは「美」からはほど遠く、ヌタ場でごろごろしていたせいだろう、あちこちに泥がこびりついている。その毛は針金のように硬いので派手に樹木にぶつかっても抜けやしない。
そのギガボアが疾走する正面にいるのは――僕だ。

「ここは……」

両手を前に突きだし、【風魔法】で巨大な空気玉を作り出す。

「通さないぞぉぉおおおい！」

それをぶっ放すや真っ直ぐギガボアの眉間にヒットさせる。

『ブモオオオオオ！！』

歩調が崩れたギガボアが前のめりにスッ転ぶと、その巨体がローリングしながら僕へと飛んできた。
これは、アレだ。アクション映画でよくある、カーチェイスの最後に車が横転して飛んでいくアレだ。

「よっ」

僕は半身を反らしてぎりぎりのところでかわすと、またも【風魔法】で空気のベッドを作り出してギガボアを優しく受け止める。さらには【土魔法】も追加で発動して土も柔らかくすれば巨体だって受け止められる――ハードランディングをしたらギガボアの肉がめちゃくちゃになっちゃうからね。

『フゴッ！！　フゴゴッ！！』

「おっと、まだ気絶もしてないかぁ……頑丈過ぎるな、っと」

転んだときに足を折ったらしく、それに柔らかい土のせいで起き上がれないギガボアが大暴れしていて簡単には近寄れないのだけれど、そこは魔法の出番だ。【土魔法】で錐のように先端の尖った石を出現させ、それを先ほど【風魔法】で強打した眉間へと撃ち込む。

『フゴッ……ォォォ……』

それで、ギガボアは絶命した。

身体がピクピクしているのは死後硬直だろう――これだけサイズがでかいと「ピクピク」じゃなくて「ドシンドシン」なんだけどな。

「おーい……仕留めた、のか……？」

恐る恐る、という声が聞こえてくるので僕は手を挙げた。

「仕留めましたよ！　こっちです、ムゲさん！」

すると、ドッドッドッドッというエンジン音を響かせながらムゲさんがやってきた。

そんな音を出しているのはラーメン屋台を一回り小さくしたくらいの金属製の車体だ。車輪は鉄製で４つついており、車体は錆の浮いた黒鉄製。

煙突から黒煙を吐きながら、人間が歩くよりも少し早いくらいの速度で進む。

ただ――人間を載せるためのものではなく、車体のほとんどがエンジンだ。ムゲさんは後部にある立場に突っ立って、操縦しながらやってくる。

「おおッ、でっかいねえ」

ムゲさんが金色の目を瞬かせる。まるで猫のように瞳孔が縦に開いており、体表は黄土色にまだらな茶色の紋様が入っている。

トカゲを彷彿とさせる亜人の彼は、レフ魔導帝国の国民だ。

「ウチの猫チャンでこれを運べるかなぁ？」

「やるだけやってみましょう。ダメそうなら内臓を出して軽くしますし」

「いやいや！　臓物を食いたいってリクエストも多いのよ～、がんばってみますよ。な、猫チャン」

その錆の浮いた黒い蒸気自動車が「猫チャン」らしく、ムゲさんは可愛がっている。日によって機嫌の善し悪しがあるというが、僕にはもちろんわからない。

上下革製のツナギを着たムゲさんが降りてくるが、その背中に尻尾はない。猫チャンに繋いだ鎖をギガボアに巻きつけて猫チャンを動かすと、ヒィヒィ言いながらも猫チャンは動き出した。

「機嫌は悪いけど猫チャンがんばってるね！」

「そ、そうですか……？」

それから15分ほどかけて森を抜ける――と、そこにはまばらな草原が広がっていてところどころに赤茶けた大地が露出していた。
照りつける太陽がぎらりと暑い。気候的には初夏のはずだけど、真夏のような暑さがある。日陰に入れば湿気も少ないから涼しいんだけどね……日陰なんてどこにもないね。
草原に走る幅広の道に、50人からなる隊商（キャラバン）が休憩中で、僕らが向かうのもそちらだ。隊商には蒸気自動車などはなく、何台もの巨大馬車が連なっているだけだった。
離れたところから僕と同じパーティー「銀の天秤」のメンバーであるダンテスさんも出てきてこちらに手を振っている。

「――なんだあのギガボアは」
「――でっかいなあ！　あれを仕留めたんだからえらいもんだ」
「――今夜は美味い肉が食えそうだ」

キャラバンの人たちの喜ぶ声が聞こえてきた。

「レイジくん～、こっちだべな」
「あ、はい」

僕はパーティーメンバーのミミノさんとノンさんを見つけてそちらへと向かった。
ミミノさんもノンさんもパラソルの下で一息吐いているようだった。僕とダンテスさんが戻るとお茶を出してくれる。
ぐいっと飲み干すと、温めの薬草茶が美味しく感じられる。
ああ、一仕事した後のお茶は最高だなぁ。

「……麦酒（エール）を飲（や）りてえなぁ」

ぼそっとダンテスさんが言ったけれど、

「それは次の町まで我慢しないとですね」

「むしろお父さんはしばらくお酒飲まないでください。稼いだお金もどんどん酒代に消えて行っちゃうんですから」

「い、いや、それはまぁ……石化が抜けてからというもの酒が美味すぎて仕方ないんだよ。つまりレイジのせいだな」

ナゼ。

「お父さん……また石化しますか？」

「じょ、冗談だよ、なっ、レイジ？」

「僕に振らないでくださいよ……」

ダンテスさんがどんどんダメ男になっていく気がする。

まあ、ウチの筆頭ダメ冒険者のゼリィさんは馬車の中で寝てるんだけどね。昨日も夜遅くまでキャラバンの人たちとバクチをやって勝ったの負けたの言っていたから。事実としては僕への借金が増えていく一方なので、「勝ったの負けたの」ではなく「負けたの負けたの」である。そろそろ締めつけないといけないかもしれないねぇ……。

「それにあのギガボアは結構いい金になるんじゃないか？」

休憩時間に狩りをして小金を稼ぐのが僕らの日課だったけれど、今日はあんな大物を仕留められたのでラッキーだった。

期待を込めてダンテスさんが言うと、

「レイジさん、ダンテスさん、ギガボアの査定をしましょ」

ムゲさんがやってきて、僕らはそちらへと向かった――。

レフ魔導帝国は、光天騎士王国、クルヴァーン聖王国、未開の地「カニオン」に挟まれた小さな土地にあるが、三方を急峻な山に囲まれているので外敵の侵入を防いできた。

天賦珠玉を使えない特殊な人種であるレフ人は爬虫類系の亜人だ。この世界では当たり前の天賦珠玉を使えないせいで、過去に何度も迫害の対象になっており、結果、彼らはこの狭い土地に閉じこもって生きてきた。

裏を返すと、僕らのようなヨソ者はなかなか入れないということであり――数少ないレフ人との接点であるキャラバンと遭遇し、親しくなれたのはツイていた。

いくら排他的と言っても他国と商売をするのは悪くないことだし、外に出ているレフ人はコミュニケーション能力が高い。

「えっ、こんなに……いいんですか？」

「いいよいいよ～。ここからなら帝国まですぐだし、帝国内ではギガボアなんて出ないから、新鮮な肉は高く売れますしねぇ」

僕とダンテスさんの前に積まれた金貨はレフ帝国で流通している帝国金貨で、１枚あたり５万円ほどの価値があるはずだ。これだけで１００枚近くはある。

「……エールッ！」

ダンテスさんが横でガッツポーズしている。いやぁ……ノンさんがこのうちのいくらを分けてくれるんですかねぇ……。

「『銀の天秤』さんは冒険者ギルドの仕事が終わったらすぐに帝国を出るんです？」
「いえ、実は会いたい人がいて……申請を出してみようかと」
「そっかそっか。最近は帝国内の人との面会もスムーズだから、うまく会えるといいですねえ」
「ありがとうございます」
「いやはや、このギガボアを仕留めたお手並みは見事でした」
「猫チャンは？」
「あっちで寝てますよ」

馬車の裏手に沈黙している蒸気自動車があった。
レフ魔導帝国は石炭での蒸気機関を始め、魔石を使った動力発明が非常に進んでいる。世界に流通している魔導飛行船もほとんどがレフ製なのだ。
僕らはテーブルに載せられた金貨を受け取り、ミミノさんたちのところへと戻った。案の定、ダンテスさんの分け前はノンさんに回収され、しょんぼりしている重戦士がひとり。

（もう少しで到着か）

クルヴァーン聖王国の首都、聖王都クルヴァーニュを出てから15日。あと2日ほどで聖王国とレフ魔導帝国の国境だ。
かつて僕が鉱山奴隷として働いていたときに、僕に無償で知識を授けてくれた――この世界で「恩師」と呼んでいいヒンガ老人。ヒンガ老人が死の直前に僕に託してくれたのが、老人の奥歯に仕込まれていた「燐熒魔石（りんけい）」。
老人はこれがあれば、孫娘であるルルシャさんに会えると言っていた――あるいは売ってくれてもいいとも。
僕は、その後もいろいろあったけれど、ルルシャさんに会うこと、会ってヒンガ老人の最期を伝えてあげることを2つの目標のうちの

1つとしていた。もう1つの目標は同じ鉱山奴隷で僕の姉であるラルクに会うことだ。

ルルシャさんがレフ魔導帝国にいることはクルヴァーン聖王国でつかんだ情報だ。帝国内のどこにいて、どんな状況なのかはわからないけれど……幸いにも帝国は狭いので見つけるのはそう難しいことではない、はず。

（……ヒンガ老人のことを話すのは憂鬱だけど、それでも）

あの人は、六天鉱山（シックスマイン）で僕にだけ看取られ、亡くなった。僕以外の誰かにもきちんとあの人が生きたことを伝えるべきだと思うのだ。なんせ、聖王国のエル祭司（ウサギ）からすると「『盟約』と『裏の世界』に関する古文書解読、及び『天賦珠玉』研究の第一人者」であり、今は滅びた「フォルシャ王国の頭脳」であるヒンガ老人――博士だ。

「――レイジくん、そろそろ出発だべなー」

「あ、はーい」

ミミノさんに呼ばれて、僕は馬車へと乗り込む。

さあ、行こう。新たな土地へ！

1（後書き）

休養中にもレビューをいただいていたようで、ほんとうにありがとうございます。本ページ上部「レビュー」から見に行けますので皆様もどうぞ。
小説を書かれている人もいらっしゃいますから、同じ作品を読んでる人ですので趣味が合うかもしれませんよ……！（かも、しれない、ですけどね！）

更新頻度については1日1回ペースをめどに考えています。
（まだ在宅勤務中ではありますが、出勤日も発生してきてるんですよね……まだ緊急事態宣言出てるのにねぇ）

というわけで！　引き続き「オバスキ」をよろしくお願いします。
ブックマーク、それにページ下部に★をつける評価もあるので是非こちらもお願いします！

2

ずいぶんと殺風景なところだな……というのが第一印象だった。
ムゲさんとは別れ、外国人である僕らがやってきたのは、見上げるほどに高い壁に囲まれた――学校のグラウンドほどの広さの場所。
中央にちょっとした広場があって、１０にも満たないほどの建物が並んでいるだけだった。その建物というのも石造りの平屋で、ちんまりしている。
レフ魔導帝国で外国人が入れるのはここまで……ということのようだ。
だけれど人の数はそこそこいる。１００人近くはいるんじゃないだろうか？　ほとんど全部が冒険者ふうの武装をしている。レフ人ではないから中には入れないだろうに、こんな狭い場所でなにか仕事があるんだろうか？

「ギルドに届け物は終わったぞ」

ダンテスさんが戻ってきた。
１０人も入ったらいっぱいになりそうな冒険者ギルドの窓口に、書簡を届けるのが今回僕たちの受けた仕事だった。

「ほら、レイジ」

僕はダンテスさんから冒険者ギルド証を受け取る。ここに来るまでに発行しておいたものだ――よく考えたら僕がこの世界で手にした初めての身分証明書だな。

『冒険者ギルド　クルヴァーン聖王国アルザーニュ市冒険者ギルド

発行
　氏名：レイジ
　ランク：青銅
　パーティー：銀の天秤
　本登録証は上記の者の所属を冒険者ギルドが証明するものである。また上記の者が通行する際、各国関係各所に速やかなる許可を要請するものである。』

　なりたての僕は青銅級（ブロンズ）だ。ダンテスさんたちは灰銀級（シルバー）なので――先日降格したので――そこに追いつくのはずいぶん先だろう。ただ、それでも、みんなと同じパーティー名が刻まれたギルド証を持っているのはうれしい。
　ちなみにゼリィさんもパーティーに入った。すでに黒鉄級（アイアン）の彼女は灰銀の1つ下で僕の2つ上だ。「坊ちゃん、あーしのこと先輩って呼んでいいんすよ～？」とウザ絡みをしてきたことを僕は忘れない。
　そのゼリィさんはここに着くなり散歩に出かけてしまったのでここにはいないのだけれど。

「……中はちょっと妙な雰囲気だったな」
「妙な？　なにがあったんだべな」
「それは――っと、その前にレイジの用件を済ませながらにしよう」

　僕は帝国内にいるルルシャさんに会うのが目的なのだ。帝国民への面会受付は違う建物で行われていて、そこも混み合っている――行列ができていて建物の外に10人くらい並んでいた。
　ここにいるのは冒険者じゃなくて商人風の人たちだった。

「なんでこんなところに冒険者が集まってるのかって話なんだがな……どうやら、帝国内に入る冒険者を募集しているらしい」

列の最後尾についたところでダンテスさんが話し始めた。

「え？　入れるんですか？」

「ああ。詳しくは聞かなかった。俺たちはレイジの面会を優先させなきゃいけなかったからな」

ダンテスさんがそう言うと、ミミノさんとノンさんが、

「ウチらも一度入ったけど、あれも偶然、そういうギルドの依頼を受けたからだったしなぁ」

「そうですね。他の方にもずいぶんとうらやましがられましたね」

ダンテスさんたちは以前ここに来ていて、ギルドの依頼で帝国内に入っている。帝国内に入れるのは珍しいようだけれど、とはいえゼロじゃない。

ただこんなにも多くの冒険者が殺到する――というのはなかなかないんだろう。

「これだけの人員を集めるということは……大がかりな討伐とかですかね？」

と、僕が言ったときだった。

「――お前、まさかダンテスか？」

不意にそんな声が掛かった。

ダンテスさんがハッとしてそちらを見ると、そこには7人の冒険者パーティーらしき一団がいた。

声を掛けてきたのは赤茶けた髪をオールバックにしている冒険者

だった。年齢は２０代の後半だろうか？　上背があって、身につけている鎧は簡素な金属プロテクターに、モンスターの革をあわせて利用したものだ。
　なにより目を惹くのがマントだ。明るい黄色のマントはまったく色あせたような様子もない新品そのものといった感じで、他のメンバーも同じものをつけている。

「レオン……？」
「そうだよ！　おい、なんだよ石化が治ったのか？　マジかよ。どうやったんだ？」

　レオンと呼ばれた男は人なつっこそうな目……と言えば聞こえがいいが、どこか厚かましさに近いなれなれしさでダンテスさんの左腕をぽんぽんと叩いている。
　ダンテスさんは――複雑そうな表情だった。

「――おっ、そっちの小っこいのはミミノか？　いや～……ははは。お前らがつるんでいたとはなぁ。……ミミノ、お前がうちのパーティーから盗んでった金のことは忘れてねえぞ。さすがはハーフリングだ、金に汚ねぇ」

　途端にレオンは瞳を吊り上げてにらみつけてきた――ってちょっと待って。「盗んだ」ってなに？　ミミノさんがそんなことするわけないだろ。
　ミミノさんは、僕が今までに見たことのないような厳しい表情で、目には怒りの炎を灯らせてレオンを見返していた。

「盗んだ！？　よくもまぁそんなことが言えるべな！　それならアンタたちはダンテスの未来を『盗んだ』んだろうに！」
「――ミミノさん、落ち着いてください」

ノンさんがミミノさんの前に入り、僕もまたその横に並ぶ。

「そうですよ、ミミノさん。あなたが興奮する必要なんてありません……ところでなんですかこの失礼な男は。一発殴っていいですか？」

「――ちょっ、レイジくん!?　あなたまでなにを言うんですか？」

ノンさんがあわてていると、レオンとかいう男は目を瞬かせたあと、

「……くっくっく、あっはははははは！　笑わせるじゃねえか、このガキ。なんなんだ、ミミノ。こんな狂犬みたいなガキをはべらして護衛にでもしてるのか？　そんなものが俺たちに通じるわけがないだろ。お前らは知らないだろうが、純金級冒険者になったんだ――俺たち『黄金旅団』はな！」

ああ、見えてきた。わかってきた。

この男なんだな。過去にダンテスさんが守った仲間であり、そのとき石化したダンテスさんを捨てた仲間でもあるヤツは。

黄色のマントを身につけた者のうち、3人がわからないという顔をしていたが、残り3人は――怒っているような、後ろめたいような、いろいろな感情を入り交じらせた顔をしていた。

「ダンテス……お前が完治してるんならちょうどいい。俺の下へ戻れよ。お前の盾の扱いはしびれるほど上手かった。今うちは7人だが、これから純金級をもっと増やしてトップクラスのパーティーになるつもりだ。お前ならついてこられるだろ？」

「……レオン」

ふう、とため息を吐いたダンテスさんは言った。

「ミミノに謝れ」

「……は？」

「ミミノがパーティーの金を盗んだというのなら『パーティーメンバーの負傷はパーティーの金から出す』と決めていたあのルールはなんだったんだ？　ミミノは俺の治療のために、パーティーの金どころか自分の貯金まで全部出してくれた。それでも足りなくて借金まですることになったがな」

「そりゃぁよ……お前がパーティーを抜けたんだ。そしたら『パーティーメンバーの負傷』じゃないだろ？」

「石化に掛かった俺はどのみちなにもできずに死ぬだけだと思っていたからな。みんなの足手まといになりたくなかった」

「だったら――」

「――だけどそんな俺のところに、たったひとり残ってくれたミミノが……俺にとってどれだけ心強く、ありがたい存在だったかわかるか？　だからミミノに暴言を叩くヤツは、誰であろうと俺は許さん」

「！」

ダンテスさんの身体から発せられた炎のような闘気に、即座にレオンは距離を取る。その反応の早さは腐っても純金級冒険者か。

「それに、お前は間違ってる」

ダンテスさんは僕の横にやってきて、僕の肩に手を置いた。

「お前がバカにしたこの子……レイジは、俺よりも強い」

「……なに？」

疑わしそうににらみつけてくるレオン。
いや、ダンテスさん？　さすがにそれはないんじゃないですか？　僕だってダンテスさんの鉄壁を破るの、無理だと思ってますけど？　あなた反則的に硬いでしょ？

「――見た目だけで侮るのは悪い癖だと過去に何度も言ったはずだがな。変わってはいないようだ……お前の成長などたかが知れる」
「ダンテス……お前、俺をコケにしてただで済むと思ってんのか……！」
「はい、そこまで」

とそこへ、黄色のマントのひとり――すらりとした背の、フードを目深にかぶった女性が間に入ってきた。
ダンテスさんとのいさかいを「わからない」という顔をしていた側の人だ。

「こんなところまで、ケンカをするために来たわけじゃないでしょ？　リーダー、余計なトラブルはごめんよ」
「……チッ」

舌打ちするとレオンは僕らに背を向けた。

「覚えてろよ、ダンテス。俺たちはお前なんかの手が届かないところに行くんだからな」

という捨て台詞とともに。
仲裁に入ったフードの女性は、ちらりと僕を見た――その目はエメラルドグリーンで、興味津々という目だったけれどもすぐにレオンについていってしまった。

3

レフ魔導帝国内に居住するレフ人との面会申請はあっけなく終わった。ヒンガ老人の娘であるエマさん、そして孫娘のルルシャさんの名前を書いて、提出して、終わりだ。あとは向こうで帝国内に連絡をし、本人が会いたいと言ったら面会の予定日を、会いたくないと言ったらその旨を教えてくれる。

朝7時に掲示板に申請結果が掲出されるのでそれを待てということだった。

ちなみに窓口の担当者はレフ人で、鼻にちょこんとのったメガネの向こうにはこちらを探るような目があった。同じレフ人でも――正直数人並んだら見分けがつかないと僕は思う――ムゲさんとはだいぶ印象が違うなと思った。

この日の夜、僕らは広場で野営をした。中央に巨大なかがり火が焚かれ、その周囲には冒険者たちが三々五々集まってきて毛布にくるまって寝たり、酒盛りをしたりしていた。小さな宿はあったけれどこの人数を収容できるはずもない。

火であぶった干し肉をかじりながら、ダンテスさんはレオンと「黄金旅団」について話してくれた。

「ま、とりたてて珍しい話じゃねえけどな――」

農村では食っていけないからと、あるいは一攫千金を求めた若者が都市部へとやってきた。だがそこでも仕事は取り合いで、腕っ節に自信のある者は冒険者になる。

ダンテスさんの場合は早くに奥さんを流行病で亡くし、娘のノンさんを教会に預けて自分は手っ取り早く稼げる冒険者の道を選んだ。

「手堅く堅実に……そんなことばっかり考えて立ち回っていたらいつの間にかガッチガチの防御職（タンク）になっちまってな」

冒険者ギルドではいろんな人との出会いと別れを繰り返し、だんだん固定のパーティーになっていく。

「俺が後衛をしっかり守り、レオンや他の近接戦闘職が前に出るという感じだった」

「いや～、あのころからダンテスの安定感はすごかったべな」

僕はふと疑問を抱いた。

「そのときのパーティー名が『黄金旅団』だったんですか」

「ああ……。リーダーはレオンでな。あいつは一攫千金や吟遊詩人に歌われるような冒険者に憧れていたんだ。それでつけた名前が『黄金旅団』だ。気宇壮大だろう」

「カッコだけだべな」

ふん、とミミノさんが鼻を鳴らす。

この広場のどこかに彼らもいるかもしれないけれど、少なくとも僕らのところからは見えなかったし改めて探す気もない。

「ああいうのは狙ってやるもんじゃないべな。むしろ英雄になれる素質を持った冒険者ってのは少ないんだ。レイジくんみたいな人はそう多くないさ」

「……はい？」

なぜそこで僕が？

「ミミノさん、それは言わない約束だったでしょう」
「あっ……」
「いやいや、ノンさん、ミミノさん、なんの話ですか？」

ミミノさんが両手を口に当てて首を横に振ってるけど、そんなアピールしてもダメです。

「はぁ、レイジは気にするだろうから黙っておけと言ったのは俺なんだ」
「ダンテスさんが？　ていうかなんの話です？」
「お前、巨大蛇（ウロボロス）と戦ったときのこと、覚えてるか」
「もちろんですよ」

あれで久々に「銀の天秤」のメンバーと再会できたわけだし。忘れるはずもないよね。

「倒したときのことは？」

ダンテスさんが横のリュックをごそごそやって、そこからウロボロスの珠――真っ二つに割れてるヤツを取り出した。結局あれを倒したときの取り分ってこれしかなかったんだよね。めっちゃ魔力が籠もってるからなにかに使えそうではあるんだけど。

「僕がウロボロスの頭に上ってショートソードを突き立てたことですか？　覚えてますよ」

あのせいでショートソードはガタが来てしまって、移動中に鍛冶屋に売り払った。今の僕の主力武器（メインウェポン）はミュール辺境伯（あるいはバーサーカーともいう）からもらった短刀である。鞘が目立つので包帯でぐるぐる巻きにしてるけど。

この短刀、多少無理な使い方をしても刃こぼれひとつしない、とんでもない業物である。売ったらいくらになるんだろう？　売らないけど。ていうか天銀（ミスリル）が使われてるから勝手に売れないのでは……？　ミスリルの流通って国が管理してるんじゃなかったっけ。

「そう、アレだ。あのとき、お前光ってただろ」

「ノンさんが掛けてくれた【光魔法】ですよね」

ノンさんがうなずいた。邪悪な者に対して特別な効果を発揮する、補助魔法に近い効果があったらしい。

「アレがあまりに目立っていてな……まるで『おとぎ話の英雄によるバケモノ討伐』みたいだと」

「は？」

「俺が翌日冒険者ギルドに行ったときに吟遊詩人から話を聞かれたんだ。どうもそいつも遠目で現場を見ていたらしく」

「吟遊詩人？　なんかすごくイヤな予感がしますけど」

「お前がウロボロスを倒したところを歌にしたいんだと熱っぽく言われた」

「……」

なんですって？

「い、いや、俺は断ったんだ。目立ちたくて冒険者をやっているわけじゃないしな？　だけどあまりにしつこいし、『街を救った英雄をみんな知りたがっています』と言われれば、俺のことじゃなく、他ならぬレイジのことだから――」

「つまりダンテスは、レイジくんのことを売って、自分のことは歌うなと念を押して詳細を教えたべな」

「ダンテスさん!?」

「ミミノっ！　お前だって自分のことは歌って欲しくないって言ってたじゃねえか！？」
「それはレイジくんと同じ気持ちだ。あの吟遊詩人からわたしが聞かれて答えたわけではないからな」
「お前だってあのとき横にいたじゃないかよ！」

ふたりでやいのやいの言い合ってるが、僕は恥ずかしくてその場をのたうち回りたかった。いや、すでにのたうち回っていた。両手で顔を隠しながら。
恥ずかしすぎる！
僕、絶縁状みたいに叩きつけて聖王都を出て行ったのに街では僕のことが歌われてる！　これ絶対、スィリーズ伯爵は耳にしてにんまりするよね！？　で、どっかで再会したらちくちく言われるんだ！

「『街を救った英雄様』……ぷぷっ、ぷぷぷぷぷぷ！」
「ゼリィさん！？」

両手を顔からどかすと僕をのぞき込んで、死ぬほどいやらしい顔して笑っている猫獣人がいた。

「……ゼリィさん、僕にそんなこと言って――」

「借金」と言おうとした矢先、僕のお腹の上に、かがり火の光を映じたキラキラした貨幣が何枚も落ちてきた。

「な、な……」
「うぷぷぷ。坊ちゃぁん……このあーしを、いつまでも借金奴隷として夜な夜な好き勝手できると思ったら大間違い――」
「このバカ猫！　どこから盗んできたんですか！　返してきなさい！」

「――あーしがお金持ってきたら強盗扱いですか!?　違いますよ！　合法的に賭博で手に入れたんですよ！」

賭博は合法じゃないから。この世界でも私的な賭博は一応違法だから。

あとなに勝手に「夜な夜な好き勝手できる」とかウソついてんの？　虚言癖？　聖職者（ノンさん）が不穏な表情でこちらをにらんでいるのですが？　ここに来るまで毎日いっしょだったから僕がそんなことしてないのわかりますよね？

「あっちで冒険者向けの賭場が開かれてましてね、そこで生意気な黄色マントのオールバックがいたもんで、ちょいと締め上げてきましたよ」

「……ゼリィさん」

僕はゼリィさんの肩に手を載せた――ゼリィさんはビクッと身体を震わせた。

「え、い、いや、あーしなんかまたやらかしましたか!?」

「――それはグッジョブ」

僕が親指を立てて見せると、ダンテスさん、ミミノさん、ノンさんの3人も親指を立てた。

ちなみに、ゼリィさんが持ってきたのは銀貨ばかりで借金全体の半分にもならなかった。

翌日――広場で目が覚めた僕は【生活魔法（コンビニエント）】で水を出して顔を洗い、ミミノさんといっしょに食事を作った。雑貨店でヤギのミルク

を買ってきたから、それでパンがゆだ。宿はなくとも壁の向こうはレフ魔導帝国なので、雑貨店の品揃えは豊富である。
食事を終えると僕はひとりで面会申請の建物へと向かった。

「……え？」

僕の申請については結果が通知されていた。

『エマ氏……死亡のため面会不可。ルルシャ氏……当局指示により面会不可』

僕はしばらく固まった。
「死亡」についてはショックだったけれど、そういう可能性もないとは言えないと思っていた。
だけど「当局指示」って。
なんだよこれは……？
面会申請所の職員に聞いても「こちらでは関知していない。申請部署と調査部署は別だから」と取り付く島もない。「当局」とやらが「どこの局」なのかもわからないという。
憤懣やるかたなしという感じではあったけれど、これ以上聞いても埒が明かないと、とりあえず広場に戻った。
するとそちらもそちらで動きがあった。冒険者ギルドに顔を出していたダンテスさんがこんなことを言ったのだ。

「実はな、中に戻ったムゲさんから俺たち宛で指名の依頼が出ていたんだ。依頼内容は、帝国内での素材採取手伝い……どうだ、やるか？」

ここにいても面会を受け付けてもらえない。ヒンガ老人の遺した「燐焚（りんけい）魔石」を見せることも考えたけれど、面会申請部署に見せて

も意味がないよな。
それなら、中に入ればなにかがわかるかもしれない。

「やりたいです」

僕は一も二もなくそう言っていた。

4

「……帝国内での行動は制限されます。この腕輪を必ずつけてけして外さないでください。また帝国外に出るときにはこの腕輪を必ず返却してください。もしもそのまま国外に出た場合は非常に大きな警報が鳴ります。腕輪の貸与についてはギルド証に記載され、返却時にその情報は消去されます」

レフ人から渡された腕輪は蝶番が一か所についていて、カチャンと装着するとカギを使わなければ開けられないような代物だった。

見た目は銀色の腕輪だけれど、腕に触れる部分に魔術が刻まれているのを【森羅万象】で確認する。

（……これＧＰＳみたいな機能だ。あと装着者の、なんだろう、感情や生命反応を記録している？）

スマートウォッチを僕は連想したが、いくつかの機能に限ってはそれよりもずっと高性能だ。

すごいな。こんなものを開発しているなんて。

（……でもなんか、情報取られるのは気分悪いな）

僕は腕に包帯を巻いて、その上から腕輪を留めた。

「ではこちらに」

冒険者ギルドの職員、と言うよりも、学者と呼びたくなるような老齢のレフ人は、まるで濃紺のローブを羽織っていた。アゴから伸

びているヒゲは真っ白なのは彼が老齢であることを示しているのだろう――ヒゲがあるんだなぁ、と僕はどうでもいいところに感動した。

僕らはそびえ立つ巨大な壁の前にいた。そこには鉄扉が設置されていて、レフ人の警備兵が5人ほどいてそこを守っている。馬車が悠々通れそうなトンネルが口を開けていた。

警備兵に警戒されながら僕ら「銀の天秤」パーティーは中へと入る。

トンネルの長さは50メートルほどで、魔導ランプが5メートル間隔でついていた。

（風が……）

向こうから、乾いた風が吹いてくる。

光がまぶしくて僕は目を細める。

「……ようこそ、レフ魔導帝国へ」

ギルド職員は出口で振り返ると、言った。

――声を上げそうになった。

左右に赤茶けた絶壁が広がっており、その絶壁はぐるりと向こうまでずっと続いている。

絶壁に囲まれた土地がレフ魔導帝国なのだ。

空には数十という魔導飛行船が飛んでいるが、人を乗せているのではなくものを運んでいるみたいだ。

建物は5階建て以上のものが多くて、赤茶けた絶壁から出てきた土に混ぜ物をして固めているのだろう、全体的に赤黒いものばかりだった。

各国では希少品の窓ガラスもここでは一般品なのか、ふんだんに使われて太陽光を反射している。
そして――舗装された地面を行き交うのは馬車ではなく、自動車だ。

「蒸気機関じゃない……これは魔術で動いているのか……」
「ほう、よくご存じですな。魔導（マギ）エンジンによる6輪自動車は帝国民の足となっております。――あちらからお迎えが来たようです」

学者のようなギルド職員が指差したほうから、「お～い」と手を振りながらムゲさんが「猫チャン」に乗ってやってきた。
……うん、他の帝国民は猫チャンを見て眉をひそめてるな。蒸気機関の自動車は他に走ってないし――あっ、猫チャンが機嫌を悪くしてエンストしてる。

「……ま、くれぐれも問題は起こさないでください。では」

学者のような冒険者ギルドの職員は、すいーっと視線を逸らすとトンネルを戻っていった。
僕らはムゲさんのところへ近寄った――。

「いやぁ～、助かりました。ダンテスさんは力持ちだねぇ」

結局その後、うんともすんとも言わなくなった猫チャンをダンテスさんが押すことになった。だいぶ周囲の視線が痛かったけれども、ともかく僕らはムゲさんの経営している商店へとやってきた。
街の中でもかなり外縁に位置するこの商店は、裏手に巨大な倉庫があって、そこに猫チャンや石炭、それに商品が置かれてあった。

ここまで来ると道も舗装されていないし、木や草も生え放題だ。そして絶壁がすぐ近くに見える。

（あそこ……崖に穴あけてるんだな）

絶壁の上にクレーンが設置されていて、荷物や人間を上り下りさせているのが見えた。そういった光景は絶壁のあちこちにある。壁の真ん中に穴が空いているのでその中になにかがあるんだろう。貯蔵庫とか？　なんだろうね……この土地が限られているから崖を利用しているのかな。いや、それだったら地上に穴を掘ればいいんだよな……。

「それよりムゲさん、今回俺たちを呼んだのは？」

倉庫内に古びたテーブルがあり、僕らはそこに小さなイスを置いて座った。ムゲさんがピッチャーに氷と水を入れて持ってきてくれる――鉄製のピッチャーはびっしりと汗をかいていて、ダンテスさんが鉄のコップにそれを注ぐと駈けつけ3杯一気に飲んだ。

「……ギガボアを売ったんですが、信じられないくらい値が上がっていたんですよ」

「？　それならよかったじゃないですか」

「ええ、よかったはよかったんですが――あ、ちなみにダンテスさんから買いたいたわけではないですよ？」

「わかってますって」

律儀に弁解するムゲさんにダンテスさんが苦笑いする。ムゲさんも氷水で喉を湿らせて続けた――レフ人は体温調節が爬虫類同様にうまくないのだろう、こうして水分摂取がどうしても必要なようだ。

「私らがキャラバンで出払っている間に、大きな事件が起きていたんです」
「事件」
「はい――国の戦略兵器である魔導飛行船『月下美人』が盗まれたんですよ」
「ほう……？」

ダンテスさんが眉根を上げて僕らを見るけれど、僕も正直反応に困った。そんな話をするためにわざわざムゲさんはギルドに手数料を払って僕らをここに呼んだのかと。

「魔導飛行船の中でも最新式でして、その銀色の船体はなまめかしくも美しく、特に完成後のデモンストレーションで行われた夜間飛行では船を眺めて酒を飲むというのが流行ったほどです」
「そんなたいそうなものが盗まれた、と。それで――そろそろ本題に入っていただけませんか？」
「……これを奪った者は盗賊団のようですが、それはさておき、皇帝陛下はこのことを大層お怒りで……勅命がくだったのだそうです」

――「月下美人」を超える技術を搭載した新たな飛行船を作れ。

「レフ魔導帝国の技術開発が９つのダンジョンによってもたらされていることは知っていますか？」
「ダンジョン？」

ダンテスさんも初耳のようだ。
ムゲさんが言うには、帝国で使われている魔導技術は、ダンジョンで発見される魔導アイテムを模倣したり解析したりして研究を進めているらしい。

そのダンジョンは9つ。

「溺愛の迷宮」　○　攻略完了
「憎悪の迷宮」　△　攻略中
「崇拝の迷宮」　○　攻略完了
「悲嘆の迷宮」　○　攻略完了
「憤怒の迷宮」　×　崩落
「狂気の迷宮」　△　攻略中
「渇望の迷宮」　×　未発見
「同情の迷宮」　△　攻略中
「畏怖の迷宮」　△　攻略中

「これらは総称して『九情の迷宮』と呼ばれ、この国を囲う絶壁――『レフの絶壁』内に存在しています」

僕は「あっ」と声を上げた。

「だから崖に穴が空いているんですか？」

「もちろんダンジョン攻略のための穴もありますね。ただ穴の多くは我らの主食である『マイカ茸』の栽培のために使われていますよ」

レフ人の主食がキノコだということを僕は初めて知った。

ただそれは栽培しやすいから主食になっているだけで、ムゲさんはふつうにパンや肉が好きなのだとか。

「『憎悪』『狂気』『同情』『畏怖』の4迷宮を一気に進めることになりました。そのためには帝国内の戦力だけでは足りずに、外部から冒険者を募ったのです。大金を積んで」

「それが、外にいた多くの冒険者か」

ダンテスさんが言うと、ムゲさんがうなずく。

「この４迷宮はそれぞれ『迷宮攻略局』の『攻略１課』から『攻略４課』が対応して進めるようになったらしいのですが……そこで、レイジさん」

「なんですか？」

「あなたの会いたがっていた方の名前はなんとおっしゃいましたか？」

「――――」

僕はハッとした。

ヒンガ老人の娘さんはすでに亡くなり、孫娘は「当局指示」により面会ができない。

その「当局」とやらが――公務で手一杯の状態であれば、面会などやっている場合ではないのではないか。

「ルルシャさんです」

するとムゲさんは、

「その方は、ヒト種族とレフ人とのハーフ……ですね？」

「はい」

「やはり」

言いながら納得するようにうなずいた。

「『迷宮攻略局攻略４課』の課長が、ヒト種族とのハーフで……ルルシャさんと言う方だと聞きました。現在、『畏怖の迷宮』内にいらっしゃるそうです」

4（後書き）

というわけで3章はダンジョン攻略です。

5

レフ人であり、レフ魔導帝国の外にも隊商（キャラバン）で商売に出かけるムゲさん。彼からの僕らへの提案は、

「攻略課が入っている迷宮（ダンジョン）には、レフ人の入場が認められているんです。いっしょに入りませんか？」

というものだった。

ムゲさんは攻略課の取りこぼした魔道具が手に入るかもしれないし、僕らは――というより僕はルルシャさんに会えるかもしれない、というところで利害が一致する。

実のところ迷宮攻略はかなり危険が伴うために、ルルシャさんが生きて帰ってこられるかどうかは誰にもわからないのだそうだ。ここでチャンスを逃したら、僕は後悔するだろう。ダンテスさんたちもうなずいてくれたので、

「是非、やらせてください」

と僕は申し出た。

それからムゲさんは迷宮に入る申請を行うので、僕らは今日1日帝国内で情報を集めることになった。ダンジョン、と一口に言ってもどんなものかわからないし。

レフ人向けの冒険者ギルドもあり、そこで情報を集められるだろうとムゲさんは言っていた。

「それじゃあ、また夜に～」

レフ人以外が帝国に足を踏み入れることがあまりないので宿泊施設はほとんどないのだそうだ。だから、夜はここの倉庫に泊めてもらうことになった。

帝国民は１０万人を超えているはずなのになぁ……ここまで鎖国ができるものなんだな。

僕らがまず向かったのは冒険者ギルドだ。１階には受付があるだけで依頼の掲出なんてものはなかった。レフ人の冒険者は数が少ない上に国民の要望はすべて国に提出するようになっているようで、あくまでも外のギルドと中をつなぐためだけの組織のようだ。

迷宮も冒険者が入るためのものではなく、国が所有している。

「ああ……今回の大規模攻略に参加される方ですか」

受付で話を聞くと、女性らしいギルド職員は――まつげが長くて線が細いので女性なのではないかと僕は見当をつけた――納得したようにうなずいた。

「いくつもの商会が名乗りを上げてますよ。『外』に集まっている冒険者たちは私どもが各地のギルドに通達し、それを商会が雇い上げる形となっています。ちょうど今ごろ入国が始まっているんじゃないですかね」

「迷宮に関する資料はないのか？」

ダンテスさんがたずねると職員は首をかしげた。

「すでに商会には資料を渡していますが……」

「すまんが、俺たちは個人的な知り合いで雇ってもらったんだ。その商会も今日、攻略の申請を出すことになっている」

「ああ、オンボロ商会の――」

「なんだって？」
「……コホン。なんでもございませんわ。こちらに写しがあるので差し上げます」
失言をしたふうの職員にダンテスさんが圧を掛けたおかげなのか、すんなりと資料を手に入れることができた。
でも「オンボロ商会」ってなんだよ。
確かにムゲさんは猫チャンみたいな壊れかけの蒸気自動車を使っているし、この街には猫チャンみたいな自動車はまったく見かけないけど、それで誰かに迷惑を掛けたわけではあるまいし……。ダンテスさんはにこやかにしながらも、職員から書類を受け取るときは一回にらみつけてた。「ひっ」て職員ものけぞってたし。
ギルドを出た僕たちだったけど「オンボロ商会」の話はあちこちで聞くことになった。
食事をすればその食堂で「どこから来たの？　誰のところにいるの？」と聞かれるし、なんなら街を歩いているだけでもうムゲさんが僕らを雇ったことが知られていた。そのたびに出てくる単語が「オンボロ商会」だ。ウワサが広まるの早すぎない？
ああ……こんなとき【聴覚強化】は要らないなって思うよ。
ちなみに食事は、味付けが濃いキノコでした。

「ここが魔道具ショップ？」
一度帝国に来たことがあるみんなが次に連れてきてくれたのは、通りに面したショーウインドウにマネキンのような人形を置いて、そこに鎧を着せているような店舗だった。鈍い金色の、トゲが痛そうな鎧だったり、丸みを帯びたプロテクターで全体的に流線型のフォルムになる鎧だったり、今までの街では見たことがない個性的なものがそろっている。
僕とゼリィさんは初めてなのできょろきょろしてしまう。

「いらっしゃい――……」

ガッチリとした体格の店主は新聞を読んでいたらしく黒縁の眼鏡を掛けていた。入ってきた僕たちを見て眼鏡を置いて立ち上がる。

（この国には印刷技術がもうあるんだよな……）

新聞もそうだし、先ほど渡してもらった迷宮の資料もそう。どちらも機械による印刷物だった。そんな魔道具も迷宮から発見されるのだろうか。

「アンタたち、前に来たことがあるな？」

「覚えていてもらえましたか」

「はん。ここにゃレフ人以外ほとんどいねぇからよ。それくらいの知恵はあるってもんだ」

「レフ人が知恵のことを言うと皮肉に聞こえますよ。世界に冠たる魔導大国でしょう」

ダンテスさんが軽口で応じているあたり、なかなか気のいい店主のようだった。

その隙に店内に飾られている武器を見ていく。

魔導ランプがふんだんに使われた店内は明るく、清潔だった。鉄製のラックに置かれた武器は剣や斧なんていうものではない――かなり変わったものばかりだ。

篭手に装着された爪。そこにはバネが仕込まれており、射出することもできるようだ。

巨大な棍だが先端に穴がいくつも空いている。これも魔道具が仕込まれており炎を吹くのだとか。

鎧にも魔道具が仕込んである。耐熱耐寒といったわかりやすいも

のから、体当たりするタイミングで金属が変形してトゲが出るようなものも。
あとは――ジャンク品？　木箱に用途不明の小さな金属部品が山と積まれている。
「珍しいかい、坊や」
熱心に見ている僕に店主が話しかけてきた。
「『外』にはないようなものばかりだろう？　このあたりのな、『武器』と『防具』があいまいなものはな、天賦の影響を受けないんだ」
天賦は能力を人間に与えるが、一方でその性能以外のものには影響がない。【槍術】を持っていても「棍」を振り回す助けにはならないのだ。
「――なるほど、レフ人は天賦珠玉を使えないから」
「そう。そこを魔道具に頼る。逆に言やぁ、武器も防具も発想の自由が利くってわけよ」
店主が説明してくれる。
「このバネ式の武器はいちばん単純だな。ものによっちゃ天賦が反応するらしいが、俺はよく知らねぇ。この手の品は『鋼鉄武装（スチールギア）』という」
次に手にしたのは、ほんのり青白く光っている盾だった。
「こいつはゴリッゴリに魔術を仕込んであってな、攻撃されたとき

に反発力が働くようになっている。だから天賦からすると『盾』とは認められんそうだ。こいつは『魔導武装（マジックギア）』って名前で呼ばれてる」

盾を戻した店主は、ぽん、と両手を打ちつける。

「で、ここにはないが……こういった魔術の参考にしたのが『九情の迷宮』で見つかる武具だな。解析不能なものが多くて困るんだが、俺たち魔道具製作者（マギクラフト）の創作の種ってわけさ。それらは『英雄武装（ヒロイックギア）』という」

「『英雄武装』……」

「そんなもんを見つけちまったら、大変なことだぞ。新発明につながるかもしれん代物だからな、皇帝陛下が直々に買い上げる。望めば魔導飛行船だって手に入る……」

店主はそこまで言ってから、にやりと笑って見せた。

「……が、『九情の迷宮』はそんなに優しくはない。一攫千金を夢見た迷宮攻略隊（おろかもの）が押し寄せ、これまでに数千数万という死体があの迷宮には眠っているんだからな」

獰猛な笑顔だった。

僕らが夕方にムゲさんの商会に戻ると、ムゲさんはニコニコと笑顔で迎えてくれた。どうやらあちらの申請も問題がなかったようで、明日からの迷宮入りが決まった。

「……ええっと、それで中に入るとですね。私の同業者がいっぱいいると思うんですよ。そこで少々イヤな思いをさせてしまうかも…

…」
「大丈夫です。俺たちは冒険者であなたは依頼主だ。だから――」
「――『オンボロ商会』」

僕がぽつりと言うと、ムゲさんもダンテスさんもハッとする。

「レイジ！」
「い、いや、いいんですよ。それはそれで事実ですし……」
「違いますよ、ムゲさん。そんな事実は――事実でなくしましょうよ」

僕は冒険者ギルドでもらった資料をぺしぺしと指で弾いた。

「レイジ？　どうしたんだ、お前ちょっと変だぞ」
「ダンテスさん、ミミノさん、ノンさん――僕はムゲさんに恩があります。旅路でいっしょになっただけの僕を気にかけて、ルルシャさんの情報まで仕入れてくださった。だから、恩返しをしたいです」
「――そうか。そういうことか」

ダンテスさんがにやりとし、ミミノさんとノンさんはうなずいた。

「だから、今回の迷宮探査で目標にしませんか――ムゲさんのために『英雄武装』にも匹敵する戦利品を得ることを」
「えええ！？　そ、それはさすがに無理ですよ！」

とムゲさんだけは反対だったけれど、

「いいじゃないか。俺もムゲさんのことを悪く言われるのはイラついていたんだ」
「そうだべな。冒険者だもん、夢はでっかくだ」

「ご褒美が出るならこの帝国内に教会を設置させてもらえますかね？」

「坊ちゃん、あーしは！？」

若干１名、名前を呼ばれなかったことで焦っている人がいるけれど、みんな賛成のようだ。

「ムゲさん、そんなわけで……せっかく迷宮に行くのですから、楽しんでいきましょう」

僕がムゲさんににっこりと笑って見せると、ムゲさんは――ちょっとだけ、僕らに依頼を出したことを後悔したような、そんな顔をしていた。

戦利品の取り分は、雇い主にして迷宮に入る機会提供者のムゲさんが５０％、僕ら「銀の天秤」が５０％となった。

6

「九情の迷宮」は太古の昔にこの地に居を構えていた大魔導師（ウォーロック）であるラ＝フィーツァが造り出した。その存在が長きに渡って誰の目にも触れなかったのは、この場所は土地も痩せ、未開の地に近く、目を付けた者がほとんどいなかったからだ。

レフ人がこの土地に入ったのが今から５００年ほど前であり、当初は細々と暮らしていた彼らも、迷宮を発見し、そこで魔道具が得られるとわかると攻略を加速した。

統率するリーダーが優れていたようで、彼は魔道具を利用し、ある程度まで集団全体の生活水準が上がってから他国と取引を始めたらしい――それも迷宮産のものを売るのではなく自分たちで製造したものを。

それほどまでに迷宮産のものは高度な魔道具で、国力が整わないうちに攻め込まれたりしたらたまらないという判断だったのだろう。

結果――今のような鎖国体制ができあがった。

（ラ＝フィーツァについての情報はほとんどないな）

僕は【森羅万象】のおかげで一度目にしたものは忘れないので、冒険者ギルドでもらった資料を思い返しながら冒険の準備を調える。

武器は辺境伯からもらった短刀、それにナックルグローブと鉄板を仕込んだブーツだ。迷宮に出現するのはモンスターと、ラ＝フィーツァが造り出した自動人形（オートマトン）の２種類だ。モンスターは長年手つかずの洞窟に勝手に発生するらしく、倒すと魔石を得られる。魔石は魔道具を動かすバッテリーのようなものなのであるだけ売れる。

問題はオートマトンのほうで、こちらは各部に高度な魔道具が仕込まれているので「なるべく壊さずに無力化したい」ということだ。

だったら、僕は無手で戦ってみようかなと。
革製のナックルグローブは手の甲に鋼板が仕込んであり、肘までをガードすることもできる。
それ以外にも昨日訪れた魔道具ショップで、ワゴンセールになっていた魔道具をいくつか買った。そのうちの1つはハンドスピナーみたいにくるくる回転する四角い金属で、最後は熱せられて熱くなるという謎の魔道具だ。以前、ミミノさんも買ったらしい。
昨晩は【森羅万象】を使いながら魔道具をいじってひとりで遊んでしまった。これは無限に暇つぶしできるかもしれない……。

「レイジくん、できたべな」
「おっ、ついに完成ですか」

ミミノさんが、持ってきてくれたのは甚兵衛のように上下で分かれた服だ。ただ、袖と裾は紐で縛って動きやすくなっている。
色はベージュをベースに、臙脂や黄緑といった明るめの色が幾筋も組み合わさっている。自然魔術師（ドルイド）の伝統衣装にミミノさんが工夫してくれたらしい。ミミノさんの服はハーフリングの文化なのかと思ったけれど、ドルイドのほうが強いみたいだ。

「おお……涼しくてちょうどいいです」
「よかった。動きにくいところはないか？」
「はい！」

僕が「銀の天秤」に戻ったとき、4年前にもらった服をまだ持っていたことを喜んでくれたミミノさんは、今回もどうしても自分で僕の服を仕立てると言ったのだ。

「いくつかの魔術を仕込んであるからな。ちょっとしたほつれは植物が本来持っている回復力で戻るべな。それに頑丈さを増して、温

度調整機能と、魔法抵抗と……」
「え……なんかすごいことになってないですか？」
「装備は冒険者の命だからな！」

それは確かにそうですけども。
なんかちょっと派手な服、くらいに思っててスミマセン。

「……ミミノさん、４年間で貯めたお金、相当注ぎ込みましたもんねぇ？」
「ちょっ、ノン！？」
「そうなんですか！？　ダメですよ、受け取れないですよ！　あ、これ代わりに使います？　野蛮人がくれた短刀なんですけど……」
「いいっていいって！　パーティーメンバーのもので、しかも装備品なんだから、お金を使うのは当然だべな。それに、わたしが好きでやってることで……って待って？　野蛮人ってなに？」
「いやぁ、それはいろいろありまして……」

なんか話が逸れた。

「いや～、愛されてますねぇ、坊ちゃん」
「ゼリィさんが来ると話がややこしくなるからおとなしくミルクでも飲んでて？」
「最近扱いほんと雑ですよね！？　一昨日は『グッジョブ』って言ってくれたのに！」

そうこうしているうちに出発の時間となった。
朝食を取り、みんな準備は万端だ。僕らの持ち物はそもそも旅の身の上だったのでそこまで多くなく、猫チャンに小さな荷車をつけてそこに載せてもらうことになった。

「戦利品が増えたら荷物は持ってもらうことになりますけどね」

ムゲさんが冗談めかして言ったので、

「もちろん、猫チャンが運べないくらいは持って帰りましょう」

ダンテスさんが力強く返した。

「畏怖の迷宮」の入口はムゲさんの商会から絶壁沿いに1時間ほど進んだところにあった。

垂直にレールが走っており、太いワイヤーで吊られた床板が引き上げられるようになっている――いわゆるエレベーターだ。

あくびをかみ殺していたレフ人の警備兵に、ムゲさんが話しかけ、僕らもこれを使う。エレベーターとは言っても大きさは巨大で、僕ら全員と猫チャンが乗ってもまだまだ余裕があった。

「おおっ、動いた！」

自分の立っている地面が動き出したのでダンテスさんが喜んでいる――のだけれど、ミミノさんが僕の腕にしがみついてきた。

「……ミミノさん？」

「ちょ、ちょっと、上に着くまでこうさせて欲しいべな」

「もちろん大丈夫ですよ」

これは高所恐怖症というやつか。

壁面のレールは滑車が噛まされているのでシャーッといい音を立ててエレベーターは上がっていく。やがて地上15メートルくらい

のところで止まった。
僕ら全員が、そこから伸びている歩道に降りると、ムゲさんが下に手を振った。エレベーターは下がっていった。

「ここから……迷宮の入口に向かいます」

ムゲさんの声は少々強ばっていた。
さすがに――今まで「外」の世界で隊商をしていたとしても、これがビジネスチャンスだとわかっていても、命の危険が段違いだと感じているのかもしれない。
ぽっこりと空いた洞窟は暗く、日光も逆なので光はない。猫チャンの前に魔導ランプを引っかけ、ノンさんも1つ魔導ランプを持って僕らは前に進む。
洞窟の幅は広いので誰かが前からやってきても問題なくすれ違えるだろう――今のところそんな気配はなかったけれど。

「あれが迷宮です」

歩くこと数十秒、向かう先に青白い光が見えてきた。
その入口は見上げるほどに大きく、そしてなんとも悪趣味だった。
左右に埋め込まれた半球が光を放っており、その入口を照らし出していた。
つるりとした壁面には継ぎ目が一切ない。
入口は……あまりにも巨大な「人の顔」だった。
精巧に削り出された顔が大きく口を開けていた。そこに入れということなのだろう。
顔は、なんと言ったらいいか……苦しそうな、恐ろしそうな、そんな顔だ。
なんともイヤなことには口の端からちょろちょろと水がこぼれている。これは【森羅万象】によれば地下水らしい。わざわざこんな

ところに水を引いているのだろうか――ヨダレを表現するために？
言葉を失ってじっと見つめている僕らに、ムゲさんが言った。

「各迷宮の入口はすべて顔なんですよ……ここはヒト種族がモチーフのようですがね。あの目をよく見ると『畏怖』と書いてあるでしょう？　それがこの迷宮の名前です」

瞳孔の部分に確かに「畏怖」と書かれてある。畏怖している人間の顔ってことか。

「……皆さん、どうします？　引き返すなら――」
「もちろん、行こう」

こういうときのダンテスさんは決断が早い。

「すでに攻略チームが中にいるんだろう？　だったらなおのこと、恐れる必要はないさ」

そのとおりだと僕も思った。
ダンテスさんが先頭に、次に僕がノンさんの魔導ランプを受け取って続いた。
いちばん後ろを猫チャンがシュンシュンシュンシュンと音を立てながらゆっくりとやってくる――僕らは人の顔に呑まれるように、ダンジョンへと足を踏み入れた。

7

『迷宮は人の心に入り込み、支配する』

――そう、冒険者ギルドから手渡された資料には書かれてあった。それぞれ感情の名前がつく迷宮は、その感情を「支配」するように影響を及ぼしてくるらしい。

そして僕らが帝国内に入る際、手渡されたＧＰＳ付きの腕輪は装着者の感情を確認する。あの腕輪が赤く光ったら「要注意」らしい。感情が暴走して精神（こころ）が壊れてしまう一歩手前らしいからだ。

その感情の支配の仕方は迷宮によって違う。トラップが発動するもの、気がつくと影響を及ぼしているもの、無理にその感情を発動させないと通れない場所……様々だ。

「しかしキレイですね、ここは……」

驚くほどに広く、そして整然としているというのが第一印象だった。壁はつるりとしていてセメント的なもので固めたものだとわかる。３、４人が並んでも問題ないほどの通路はほんのりと明るさを持っている――それは「ダンジョン」の特徴でもある。【森羅万象】で確認すると、わずかな魔力が循環しているのがわかった。

ただ明るさはあまり十分ではなく、引き続き魔導ランプは点けたままだ。

（――そう言えば「六天鉱山」にいたときもこれくらいの明るさだったな。今は天賦【夜目】があるから気にならないけど……あのと

きは「こんなもんだ」って思ってたんだよな）

暗い、と僕が不平を言うと決まってラルクは「こんなもんだ」って言ったっけ。１３歳にしてだいぶ達観した子だったよな、ラルクは。

「ムゲさん。迷宮攻略課はいつごろ入ったんだべな？」
「確か、５日かそこらだったと思いますよ」

ミミノさんとムゲさんの会話が聞こえてきたけれど、僕の【聴覚強化】で性能の上がった耳は違う音もとらえた――空気の流れる音だ。

「――ダンテスさん、その先に広い場所があります」
「ふむ。では俺とレイジ、ゼリィの３人で先行しよう。ミミノたちはゆっくりついてきてくれ」

入口を入ってすぐなのでバックアタックは警戒しなくてもいいだろう。

５０メートルほど進むと、そこはぽっかりと開いた場所になっていた。ゆったりと下っていく坂道になっていて、左右には剣や盾、杖といったものを持つ巨大な石像が並んでいる。

石像は僕らをにらみつけるようにしていた。

「……なにもないように見えるな。どうだ？」
「はい、ないですね」
「うんうん。なにもないっすねえ」

ただのこけおどしなんだろうか？　でも、

「……なにもないはないんですが、血のニオイがします」
「そうか。罠があるのかもしれないな。気をつけよう」

後ろからミミノさんたちもやってきたので合流して進む。だけれど案に反してここにはなにもなく――気づけばその広い空間も終わってまた閉じた通路になった。

最初と同じ通路になったけれど、その道は緩やかに曲がったりしつつ下っていくようだった。途中、いくつかの分岐路に遭遇した。ひとつずつ確認しながら進んだが、場所によっては祭壇のようなものもあって、ただそこにはなにも遺されていなかった――先行者が回収したのだろう。

進むこと3時間。1回休憩をしたきりなのでそろそろ次の休憩を、と思っていると、

「――この先から人の話し声が聞こえます」
「ふむ、他の冒険者か、あるいは迷宮攻略課か」

競争相手ではあるが、敵ではない。だから「人がいる」というのは逆に言えば「安全」の証拠であるとも言える。

やがて巨大な立方体のホールへと僕らはやってきた。

とにかく広い。このホールの一辺は１００メートルくらいあるんじゃないだろうか。

「おお……」

道は真っ直ぐ、反対側の出口に続いていて、左右にはかがり火が焚かれてある。中央は円形のステージになっていてそこに１０人ほどの姿が見えた。

かがり火の向こう側には地面がなく、底の知れない暗闇が広がっている。風が吹き上げてくるのを感じてぞわりとした。

「あん？　俺たち以外にも冒険者がいんのかよ――……って」

なんという不運か、そこにいたのは「黄金旅団」のレオン率いる一行だったのだ。

「……」

「……」

ダンテスさんとレオンがしばらくにらみ合っていたが、

「――ここでもめ事はごめんよ」

「わぁってるよ」

先日と同じ、フードのスレンダー女性が言ってレオンは引き下がった。

円形のステージの端へと彼らが向かったので、僕らは反対側に行って座る。

向こうの人数が多いなと思ったら、「黄金旅団」を雇ったらしき商人がいた。その商人はてらてらとした光沢のある服を着ていて、魔導エンジンで動いているらしきフォークリフトみたいな乗り物に乗っていた。

その商人は同じレフ人を2人連れてこちらへ――ムゲさんのところへとやってきた。

「おいおい『オンボロ商会』じゃないか。ダメだろう、お前みたいな貧乏商会が迷宮に入ってきたりしたら」

「……」

「……」

座って休んでいた僕とダンテスさんが立ち上がろうとすると、ムゲさんが「おふたりは座っていてください」と言う。

「迷宮は誰にでも開かれてるだろう？　とやかく言われる筋合いはない」

「生意気な……。この迷宮は我らが帝国の生命線なんだぞ？　それを、『外』につながってるお前みたいなヤツが来ると迷惑だということだ。わからんのか？『内』で商売できないお前をみんな邪魔だと思っているんだ」

「そんなことは――」

「――外から食料品を輸入しなければ生きていけないくせになにを言ってるんですか、この気色悪い服を着たレフ人は」

「レイジさん！？」

僕が口を挟むとは思わなかったのだろう、ムゲさんがぎょっとする。話しかけてきた成金ふう商人はぽかんとしたが、すぐに目を血走らせると、

「こ、こ、こんのガキィ～……今なんて――」

「何度でも言いますよ。ここは世界の魔導産業の中心地かもしれないけど、逆に言えばそれだけ。農耕には適していないし牧畜も盛んじゃない。あなたの言う『外』がなければ成り立たないんですよ。危険を冒して『外』から様々な品を――あなたが着ている服の素材だって『外』から来たものです。それを運んでくれるムゲさんに感謝こそすれ、文句を言う筋合いなんてないでしょうが」

「輸出入は魔導飛行船がある！　こんなオンボロ蒸気エンジンでタラタラやってる商会になんざ頼みはしないね！」

「それなら最初から話しかけてくる必要もないし、『外』とのつながりをどうこう言う必要もないでしょうに」

「なんなんだこの無礼なガキは！」

「ま、まあまあ、落ち着いて」

なんか逆にムゲさんが間に入ってなだめる役に回っている。

「ムゲさんもですよ。言わなきゃいけないときにはちゃんと言わなきゃ。あなたの仕事は誇るべき仕事じゃないですか」

「……誇るべき、仕事」

ムゲさんがぽつりと言ったあとに言葉を失っていると、

「坊ちゃん、暇つぶしに口げんかも結構ですけど、そこまでにしてください」

ゼリィさんが迷宮の奥を見据えて立ち上がった。

「――なにか、来ますよ」

「！」

僕もダンテスさんも弾かれたように立ち上がり、向こうでは「黄金旅団」も一斉に立ち上がり、レオンが叫ぶ。

「おい雇い主！　さっさとこっちに来い！　奥からなんか来るぞ！！」

「ひ、ひぃっ」

趣味の悪い商人たちが走っていくのと同時に、通路の向こうからどどどどと音を立てて黄金色の巨体が現れた。

両足の代わりに直径2メートルほどの車輪が2つあり、うまくバランスを取って上体を支えている。

腕は4本で、そのすべてが槍のように尖っている。

頭はなく、胴体の中心に三角形を描いて3つの宝玉が埋め込まれてあった――宝玉が僕らをにらみつけたように感じた。

『――侵入者、発見――』

機械的な音声が響き渡った。

自動人形（オートマトン）。

その巨体は前のめりになると車輪を回転させて動き出した。

ぎゃりぎゃりと車輪が地面を噛んで火花を散らせる。

「ミミノ、ノン、ふたりはムゲさんと避難」

「わかったべな」

「はい」

「レイジ、ゼリィ、俺たちはアレを――下に落とすぞ」

なるほど、かがり火が点々と配置されてなんとなく防壁のようになってはいるものの、あんなデカイのが突っ込んだらあっという間に落ちるだろう。

「了解です――でもいけそうだったら腕の1本くらいは折ります」

戦利品戦利品。

「無茶するなよ」

「さすが坊ちゃん。あーしは応援してますね！」

ゼリィさんは後でシメると心に誓った。

「来るぞ！」

こちらだけでなく「黄金旅団」も準備は万端のようだ。レオンが先頭に立って、フードの女性は雇い主のレフ人を避難させている。

オートマトンが中央に飛び出してきた――。

『――畏怖セヨ――』

直後、僕は地面に這いつくばりたい欲求に支配され、全員の腕輪が赤い光を発した。

7（後書き）

「面白い」「主人公たちにがんばって欲しい」と思われましたら是非、下にある「★」をタップして「評価」をお願いします。あと「ブックマーク」してもらえるととてもうれしいです。
作者の書き続けるモチベーションになりますので、よろしくお願いします。

8

ヤバイ、怖い、危険だ、恐ろしい、どうする――身体が物理的に前に倒れていく。

脳の中心がしびれるように冷たくなり、全身が震える。だというのに毛穴という毛穴から汗が噴き出して呼吸が苦しくなった。

（【森羅万象】【森羅万象】【森羅万象】【森羅万象】【森羅万象】【森羅万象】！　先生出番だよ先生！！）

無理矢理【森羅万象】に集中すると頭を支配していた恐怖心が薄れていった。

たった一言「畏怖セヨ」だけでここにいる全員が這いつくばろうとしている。僕だけじゃない、気合いで踏ん張ってるダンテスさんはともかく、ゼリィさんなんてスライディング土下座状態だ。

むこうの「黄金旅団」パーティーも同様だったけれど、避難中のミミノさんやムゲさんたちは大丈夫みたいだ。

（距離か）

だけどどんな仕組みで、恐怖心を植えつけたりできるんだ？

「こ、な、くそおおおお！」

ギィンッ、と大きな音がしたのはダンテスさんが突っ込んできたオートマトンの槍を大盾で受け止めたからだ。

ダンテスさんの顔が歪んでいる。汗も噴き出している。確かにオートマトンの巨体から繰り出される槍の攻撃は重いだろうけれどそ

れくらいサクッといなせるはずだ――ふだんのダンテスさんなら。

（なんなんだ、この精神異常攻撃は）

僕は【森羅万象】によってこの現象が魔術――あるいは魔法によって起こされたものだと知る。僕とダンテスさんはだいぶマシだけど額を床にこすりつけたままのゼリィさんは腕輪の光がますます赤くなっていく。

（どうしたらいいんだ？）

倒すしかないのは間違いない。でも、僕の動きだってふだんよりも半減している。

――と、そこへ、

「撃てェ！」

ドン、ドンッと2発の【火魔法】がオートマトンの背中で爆発した。「黄金旅団」の魔法使いが撃ったのだ。

オートマトンからかなり距離を取っている「黄金旅団」は僕らよりだいぶ状況が良さそうだ。

魔法か――確かに今は、戦利品をどうこう言える状況じゃない。

（今はこの場を切り抜ける！）

僕は拳を自分の頬に叩きつけた。

怖くない怖くない怖くない怖くない！

あの日、鉱山が崩落した日――姉の手を取らなかったことのほうが、僕にとってよほどの恐怖だ。

もうあんな恐ろしさは二度も味わいたくないし、味わわない。

こんな機械が繰り出したニセモノの恐怖になんて負けるものか。

『――侵入者――』

左右の車輪を逆に回転させてその場でUターンしたオートマトンが今度は「黄金旅団」へとターゲットを変えた――こちらに背を向けた。

「人間様をナメるなよ、機械ッ！」

僕は右手の指1つ1つに【火魔法】を、左手の指には【風魔法】を展開。

これをやると魔力をごっそりもってかれるんだけど――出し惜しみはナシだ。

「『火炎嵐（フレイムトルネード）』」

両手から発せられる5筋の炎と5筋の風が折り重なり、混じり合い、巨大な火炎の竜巻となってオートマトンに襲いかかる。

この魔法の名前は、過去にそういう名前で魔法を使っていた人がいたらしくミミノさんに教えてもらった。

『――侵入者……――』

炎が止むと車輪が止まり、上体だけをこちらに振り向ける。

その身体は煤で真っ黒だが溶解するほどの温度はない。

僕の前へとダンテスさんが盾を構えて割って入る――まだこのオートマトンは動くのか？

パキンッ。

そのときオートマトンの胴体に埋め込まれていた宝玉にヒビが入り、割れた。３つのうち２つはすでに割れており、最後の１つが割れたらしい。

すると周囲に満ちていた「畏怖」の感情が一気に消えていくのを感じた。

オートマトンは前のめりに倒れると大きな音を立てた。加熱により劣化したのか、腕がもげて転がっていき、そのうちの１本はステージから滑り落ちて奈落に消えた。

「ふー……ヤバイですね」

「あ、ああ……。ヤバかったな。まさかこんな攻撃だとは……レイジは大丈夫か？　ゼリィは？」

「ハッ。あ、あーしはなにを！？」

僕が肩で息を吐き、ダンテスさんが警戒しつつオートマトンへと近寄っていく。ゼリィさんはキョロキョロしているから元気そうだ――一応、後で、精神状態がまともかどうか確認したほうがいいかもしれない。いや、そもそも異常な人だからどうしよう……？

「大丈夫だ。もう動かない」

ダンテスさんがオートマトンを蹴っ飛ばして確認した。ようやくこれで戦闘終了のようだ。

問題が起きたのは成金ふう商人が戻ってきてからだ。

「最初の魔法は私の雇った『黄金旅団』によるものだ！　だからこのオートマトンは我らが引き取る」

などと言い出したのだ。

これはアレですね。売ってるんですよね、ケンカを。商人だけに。

買いましょう。そちらの言い値で買いましょう。

「……レイジさん、ここは私が」

僕が腕まくりして出て行こうとするとムゲさんが前に立った。

「誰がどう見てもこのオートマトンを倒したのはレイジさんの一撃によるものです」

「最初に当てたのはこちらだろう！」

「そうだとしても、その攻撃でさえダンテスさんが盾で防いで敵を引きつけていたからこそ。あなたは『取引の神』に誓って、この戦利品があなたのものだと主張できますか？」

「ぐっ……」

おお、ムゲさんが主張してる！「取引の神」って、そう言えば前にミミノさんが冒険者ギルドの人とやりとりしてたなぁ。

――取引の神は公正に見ておられる。

――売り手よし買い手よしの取引。

こんな言葉を交わすのだ。

「そこまでにしな……雇い主さんよ」

間に入ったのは、まさかのレオンだった。

「確かにこのオートマトンはあのガキの魔法でぶっ壊れた」
「チッ――お前たちの働きが悪いからだぞ！　替えなどいくらでもいるのだ、次はきびきび働くんだな」
ツバを吐いて去っていく趣味の悪い商人。うーわー、柄も悪いな。
「お前が仲裁に入るとは思わなかったぞ」
「おいおい、俺をなんだと思ってんだよダンテス……つうかなんだよさっきの魔法は！　うちのエミリーが……ああ、魔法使いだが、びびって腰抜かしたぞ。お前、何発の魔法を混ぜたんだ？」
レオンがこっちを見る。
「何発って、そりゃ指は１０本しかないから、１０でしょ」
「マジかよ……てっきり斥候タイプの天賦持ちかと思ってたが、その格好で魔法使いとはねえ――いや、今日はどう見てもドルイドだな。でもドルイドが【火魔法】……？」
レオンは首をかしげながら離れていく。僕の後ろではミミノさんが「むっふー。レイジくんを見たか」となんかドヤ顔してるのがカワイイ。この人は年上だけどやっぱり小っこいままだからカワイイんだよなぁ。
それからムゲさんはオートマトンを精査して、使えそうな魔道具がないかを選別している。その間に「黄金旅団」たちは先へと進んでいった。
「――でも、あのオートマトンが使った魔法？　は、なんだったんでしょう」

休憩は継続なのでノンさんが切り出した。

「お父さんたち、急に動きが鈍くなりましたよね？」

「お前は問題なかったのか？」

「いえ……背筋がぞくっとしたような気がしました。あれは光天騎士王国の大聖堂で神の存在を感知したときの感覚に似ていましたわ」

神……畏怖の感情だから、神を感じるのに近いのかもしれない。ていうかノンさん、神様見つけたの？

「レイジはどう思う？」

「まだわかりません……けど、離れていれば効力が落ちるようですので、次戦うときは距離を取りながらですね」

「あんなふうに敵が魔法っぽいものを使ってくるケースは資料には書かれていなかったな。だがここはダンジョン、なんでもアリだ。気を引き締めていこう」

みんなうなずいた――だけど僕は内心で首をかしげていた。

ダンジョンだからなんでもアリというのはほんとうなのだろうか？　僕は他にダンジョンと言えば「六天鉱山」しか知らないけど、あそこはあそこで「ルール」があった。

（この感情を湧き上がらせるものも、なにか仕組みがあるはずだ）

僕は【森羅万象】でその仕組みを解き明かしたいと思うようになった。

9

それにしても――あんなオートマトンを相手に、帝国のレフ人たちはどうやって戦ったのだろうか。レフ人は天賦珠玉が使えないらしいので、戦い方はかなり武器に頼ることになるはずだ。

一度見てみたいな。

「ダンテスさん、この先にはなにもいないようです」

「よし。では進もう」

僕らは大空洞を抜けて先の通路へと移っていた。道は右へと大きくカーブしている。

先ほど出現したオートマトンはどこから出てきたのか。先行する迷宮攻略課が取りこぼしたのか？　猫チャンの荷台には、ムゲさんによってバラされたオートマトンの部品が載っている――鋼板などは必要なく、中の魔道具部分だけを取り外してあった。そうなると戦利品はバケツで1杯ぶんくらい。少ないなぁ……と正直言えば僕は思ったけど、ムゲさんはほくほく顔だった。希少な部位でもあったのかな？

「……ん？」

そのときゼリィさんが小さく声を上げた。

「どうしました？」

「んん……なんか空気が変わったような。気のせいかもしれないっす」

「……注意して進みましょう」

「それがいい」

ダンテスさんもうなずいて僕らはいっそう注意を払うようにしたけれど、特になにも起きずその先１００メートルほどで、次の部屋があった。

「……おいおい、こいつぁ」

ダンテスさんの横で僕も光を掲げる……と、そこは広い一本道だった。

「入口と同じだな……石像の下り坂だ」

左右には武器を持った石像が並んでいて、入口とは見た感じまったく同じように下り坂になっている。

「同じように見えますが、持っている武器が違いますね」

「……なんだって？」

「入口は剣、盾、杖、斧、槍、槌の順番で、それがローテーションでした。でもここは、剣、曲刀、斧、ナイフ、槍、大ばさみの順番です」

「よく覚えてるな！」

ダンテスさんたちには【森羅万象】の完全記憶についてまだ話してなかったっけ。

「ゼリィさん、なにかニオイますか？　あるいは変な音とか」

僕が話を振ると、ゼリィさんは珍しく集中した顔ですんすんと鼻を動かす。

「……油のニオイがしやすね」
「これ、油なの？」
確かに僕の鼻にもわずかに饐えたようなニオイが感じられていた。ごく、かすかに。
「相当に古いですけどねえ……」
「罠か？」
ダンテスさんの問いに、僕もゼリィさんも即答はできなかった。わからない、というのが正直なところだ。
「ダンテスさん、【火魔法】を撃っておきますか？」
「ん？　ガスの確認とやらか？」
地球では過去に、「坑道のカナリア」という話がある。カゴにカナリアを入れて坑夫が進んでいったという、実際にあった話だ。長く使われていない坑道には酸素が少なかったり、一酸化炭素や毒性のあるガスが充満していることもある。人間よりもカナリアのほうが先に毒ガスで死ぬので検知器として役に立ったのだ。
実はこれ、「六天鉱山」でも深いところに潜る冒険者は小鳥を持ち運んでいたこともあった。
「ダンジョンは酸素が循環するから問題ないと思うが……それに先行している迷宮攻略課がいるんだろう」
「ええ……」
それはそうなのだ。先行者がいるので、やる意味は極めて薄い。でも僕は――なんだか、やったほうがいいような気がしていた。

この感覚はなんなんだろう。【森羅万象】でもなんでもない、ただのイヤな予感でしかないのだけれど。

「魔力に余裕があるならやってみるべな。奥のほうは薄暗くて見えないし」

ミミノさんがそう言ってくれたので、僕はうなずいて【火魔法】を放った。

それは野球ボール大の火球で、シュルルルと回転しながら奥へ奥へと飛んでいく。その周囲だけが明るくなって通り過ぎていく。

石像が続いている……武器のパターンは同じ……構えが少し違う……？　武器の色も……？

最後は向こう側の出口の壁に当たって消えた。

「ずっと同じみたいだな」

ダンテスさんが言い、ミミノさんもうなずいた。

同じ、ではない。完全に同じではないのだ。わずかな変化は確かにあった。

だけどそれがなんなんだ？

僕は【森羅万象】で今見た内容を思い返す。構え、武器の色が違う。ただ棒立ちしている手前から、武器を振り下ろそうとしている向こう。武器の色は、滑らかな光沢が出ているといった感じだろうか……。

（ここは『畏怖の迷宮』……畏怖……武器……石像……あー、わからん）

スィリーズ伯爵くらい頭の回転が速ければなにかに気づいたのかもしれないけど、あいにく僕には思いつかなかった。

「よし、では行くぞ」

ダンテスさんが先頭に立ち、僕らは通路へと足を踏み入れた。

石像に見下ろされながら通路を進んでいく。緩やかな下り坂、というのがまたなんともイヤらしい感じだ。下り坂だとブレーキを掛けながら進まなくちゃいけないし、一方でせき立てられるような気持ちもある。先に進め、先に進めと。

ゼリィさんも納得できないような、でも仕方ないような、そんな感じで歩いている。僕とゼリィさんがぴりぴりしているせいか、誰も言葉を発せず――猫チャンの噴く蒸気のシュンシュンという音だけが聞こえていた。

（……畏怖……武器……石像……武器は入口の通路とは違ったな。なんでだ？）

最初は、剣、盾、杖、斧、槍、槌。

ここは、剣、曲刀、斧、ナイフ、槍、大ばさみ。

大ばさみ、なんていう武器かどうか怪しいのも入っている。３つは共通で３つは違う。なんで違うんだろう……。

（そうか。刃だ）

この通路にある武器６種類は、すべて「刃」がついているものばかりだ。

だけど、それが……？

（刃、刃、刃――油、ということは罠がある……？）

ここは緩やかな下り坂。

「あ――」

僕は気がついて振り返った。
音はしなかった。油が塗られていたからだろう。
でも――空を切る音だけは消すことはできない。
僕のすぐ後に、ゼリィさんも振り返った。耳のいいゼリィさんもこの音をとらえたのだ。
つまり「刃が空を切る音」を。

「伏せてッ！！」

僕らは上ばかり見ていた。石像だけが入口と違うのだから当然だ。
だから通り過ぎるまで気づかなかった。
下り坂に仕込まれた射出口。
1メートル以上もある円形の刃が回転しながら、こちらへ飛来していた。

「くっ」

僕らはともかく、ムゲさんはきょとんとして反応が遅い。僕はすぐに飛びだしてムゲさんを猫チャンの運転席から引きずり下ろした。

「うわあ！？」

まさに間一髪。
僕の髪の毛の数本を斬って刃は飛んでいく。猫チャンの煙突を斬り落としてもなお勢いは衰えずに。
それを見たダンテスさんは、構えようとしていた盾を下ろしてあわてて伏せた。まともに受けたら盾もえぐられそうな勢いだ。

刃は僕らを通り過ぎていき、出口の上部にある切れ込みへと吸い込まれるように消えていった。

マジかよ……収納まで計算されてるのかよ……。

「ふぅ……」

全身からどっと汗が出た。

「……待って。これって」

一難去って、僕は気づく。僕らは地面に這いつくばったような姿勢だったのだ――まるで、はるか雲の上の立場の者に出会ったときのように、あるいは「神」のような存在を目の前にしたかのように。

そう、畏怖のあまり、ひれ伏したような姿だった。

9（後書き）

メロンさんにレビューをいただきました。ありがとうございます。
今作はめっちゃレビューをいっぱいいただけてうれしい限りです……。
レビューじゃなくとも、ブックマーク&ページ下部にある★からの評価で十分作者への応援となります！

１０（前書き）

左行式さんにレビューをいただきました。ありがとうございます。
各話タイトルを考えるの、結構大変なんすよ……（マジ顔）。

10

完全にやられた。ぎりぎりで気がつけたからよかったものの、完全に裏をかかれた気分だ。

石像のほうに気を取られ、でも罠は足元にあるなんて……。「刃」というのは「ヒント」のようで、そのものがミスリードするための「仕掛け」だったんだ。

「かわせたからよかった」とか「全員無傷だからＯＫ」とは思えない。

ミスったら一撃死がある――それがダンジョンなんだと僕はこのとき思い知った。

「前方から1体、機械の反応があります。僕が先行して魔法を撃ちます！」

敵が近づく前に。「畏怖」の感情をぶつけられる前に。

僕は先制攻撃でこれまでに3体のオートマトンを片づけた。そのたびに「火炎嵐」を使っていったけれどもこれは必要経費だ。

休憩時間になって――僕は壁に身体を預けて深い息を吐いた。

魔力残量はかなり厳しい。でも、命の危険と天秤に掛けたらケチってはいられない。

「レイジくん」

その僕の目の前に、コップが現れた。

「そう怖い顔をしないでください」

ノンさんが僕にコップを差し出した。そこに入っていたのは黒糖を水で割ったものに、岩塩を少々入れた飲み物だった。スポーツドリンクみたいなものであり冒険者が好んで飲むものだった。

口にすると――甘さと、しょっぱさのバランスが絶妙で、身体の疲れが溶けていくように感じられる。

「ありがとうございます。……僕はそんなに変な顔をしていましたか？」

「……」

にっこりと笑ってノンさんは僕の隣に座った。ここは円形の小部屋で、壁にはレフ人が大昔に使っていた古代言語が彫られており、ムゲさんが少しでも解読できないかと読もうとしている。ダンテスさんとミミノさんは離れたところでおしゃべりをして、ゼリィさんは短い時間でも居眠りだ。

「あのトラップ以降、目立って危険なものはありませんでしたよ」

「……」

「レイジくんが、すごく気を配ってくれて、途中で出てきたオートマトンも全部倒してくれましたけど――そのためにレイジくんが神経を磨り減らし過ぎるのはよくありません」

「すみません……気をつけます。いざというときに集中力がなかったら困りますものね」

「違います」

え、違うの――と思っている僕の頬にノンさんの両手が添えられた。

「私たちはパーティーです。レイジくんの悩みは私の悩みです。神はこう、聖人に告げました。『迷えるときは隣人に話せ。たとえそ

れが未熟な者だとしても』と。だから私にも相談してください――たとえ力不足で役に立たなかったとしても、それでも相談して欲しいのです」

あ……。

（温かい）

ノンさんの両手から温かさが伝わってくる。

そうだ。

僕は「銀の天秤」のパーティーメンバーだ。だというのに僕はひとりですべてをなんとかしようとしていた。

（――自惚れていた）

【森羅万象】という力を手に入れて、僕は自分がなんでもできるのだと思っていた。魔法も、戦闘も――なんでもだ。だからここのトラップを読めなかったことにイラ立ち、必要以上に気を遣って迷宮を進むハメになっている。

思えば、街中でムゲさんをバカにされて怒ったことも、「黄金旅団」のレオンがダンテスさんに話しかけてきて腹が立ったことも――たとえそれが僕の心の根っこから来る感情なのだとしても、僕はちょっと怒りに感情が振れすぎていた。

言い替えれば、僕は調子に乗っていたんだ。

「あ……ご、ごめんなさい……」

恥ずかしかった。自分の力でもない【森羅万象】で手に入れた力で強くなった気になっていた。

ほんとうの強さは――目に見える武力じゃない。

――さよなら、弟くん――。

「六天鉱山」で暴動が起きたあの日、僕は姉（ラルク）の手を取らなかった。
あれから4年以上が経って僕はどうなった？
強くなったのか？
あの日のラルクの手を取れるくらいに？

（違う。まだまだだ）

ダンテスさんのような、いかなる強敵が現れても怯まない心もなければ、ミミノさんのような、誰しもを受け入れる心の広さもなく、ノンさんのような、すべてをなげうってでも家族のために尽くすような献身的な心もない。

「――レイジくん？」

目の奥がじわりと滲んだのを、ぐっと歯を食いしばってこらえる。
悔しかった。自分の未熟さを思い知った気がして。
僕はノンさんの手を握って下ろす。バカか、僕は。なにを勝手に思い知って勝手に悔しがって勝手に泣きたくなってるんだ。そんなことやってるヒマがあるなら、今持ってる情報を全部吐き出してみんなに相談するべきじゃないか。

「ありがとうございます、ノンさん。目が覚めました」
「そんな――」

戸惑うようにしていたノンさんだったけれど、

「――ほんとうにレイジくんは、1を聞いて10を知ってしまうん

ですね……なんだか寂しいです。私はこれでも迷える子羊を導く聖職者なんですよ？」

少しだけ残念そうに笑って見せた。

「いえ！　ノンさんには教えてもらってばっかりです。ほんとうにありがたいです」

「いえいえ。私なんて……私が言えることだって聖書の言葉の引用ばかりですから」

「いえ！　それだってすばらしいことだと思います。こういうときにとっさに聖書の言葉を言えるということはノンさんがそれだけ勉強しているということですし」

「いえいえ。たいした勉強ではありませんし、これくらいの知識は初歩的なものです」

「いえ！　そういうふうに謙遜できるところも――」

「――ゴホン」

咳払いが聞こえたとき、僕らの隣にダンテスさんが立っていた。

「レイジ。うちの娘とずいぶん仲が良さそうだな？」

「え……？」

気づけば僕はノンさんと、膝同士がくっつくほどの距離で話していたし、なによりノンさんの手を握ったままだった。

「そういうのは、父である俺を通してからにして欲しいがなぁ？同じパーティーメンバーだとしてもな？」

ひいいっ！？　ダンテスさんの額に青筋が！？

そうだった、この人は娘（ノン）さんのことになると見境がなくなるんだ

った！

「お父さん。パーティーメンバーが仲良くしてもなんの問題もないでしょう？」

「ダメだべな、ノン。レイジくんと仲良くするならこのわたしを倒してからにするべな！」

今度はミミノさんが腕組みして立ちふさがる！

「ちょ、ちょっと待ってください、ね？　ふたりとも落ち着いて――」

僕が次になにを言うべきか考えながらとりあえず時間稼ぎをしようとすると、

「くっ」

「ぷっ」

ダンテスさんとミミノさんが一斉に噴き出した。

「わははは、すまんすまん。そんなにあわてるな。ちょっとからかっただけじゃないか」

「あはははは、ごめんね、ふたりとも。わたしとダンテスを抜きに、なんか大事な話をしてるっぽかったからズルイなって思っただけだべな」

「も、もう、ふたりとも……」

一気に脱力してノンさんの肩ががっくり下がる。

なんだ、からかわれてたのか――そんな気はしてたけど。ほんとだよ。わかってたよ、僕は。うん。ダンテスさんだけはちょっと目

がマジだった気がするけど。うん。

「……それはそうと、皆さんにも意見を聞きたいんですが」

僕は今、疑問に思っていることをすべて話そうと決めた。

ここに来るまでに先行している迷宮攻略課と出会わない――どころか痕跡ひとつ見当たらないこと。

先ほどいっしょになったレオンたちとも出会わなくなったこと。

ゼリィさんが「空気が変わった」と言ったこと。

そして――「畏怖セヨ」という言葉だけで僕らの感情をコントロールした、あのオートマトンのカラクリ。

これらはバラバラな要素のようだし、ダンテスさんの言ったとおり「それがダンジョンってもんだ」と言ってしまえばそれまでなのかもしれない。

だけど、僕はそうじゃないと思っている。

あらゆる現象には理由がある。

そして僕は、1つの仮説を立てたんだ。

「僕らは冒険者です。一方で僕らはパーティーです。このダンジョンも、つまりそういうことなのではないかと」

僕が言うと、途中から起きていたらしいゼリィさんがごろんとこちらを見て、「わけがわからん」という感じで顔をしかめた。

１０（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。
皆さんあまり興味ないかもしれませんが（作者にとってはかなりの関心事なんですが）、地味に四半期ランキングの１位まであともうちょっとというところまで来ていました。
ブックマーク・下にある★をタップしての評価でたまるポイントですが、今まで書いてきた中でもここまで来たのは初めてです。
今話でレイジくんがまた少し成長したように、作品も成長しているんだなと。
応援ありがとうございます。ほんとに書き続ける支えになっております。

11

＊　レフ魔導帝国皇帝　＊

絶壁に囲まれた狭い土地――それがレフ魔導帝国の領土だ。
そこにレフ人は暮らしているが、居住可能な土地が狭いために高層建築の技術が発達した。この世界ではあまり見られない5階以上の建物がこれほど多く、一般市民も利用できているのはレフ魔導帝国ならではだ。
帝国のトップである皇帝が住んでいるのも街中にあった。さすがに広大な敷地を確保し、高い城壁があるとはいえ、他の国の王城のおもむきとはまったく違う。
レイジが見たら「地方都市の土地持ちの家みたい」とでも言っただろうか。
広い庭園の中央に、9階建てのビルがある。ビル、とは言っても高さより横幅のほうが広いのだが。
その9階が皇帝の住処だった。

「――以上が迷宮攻略1課から3課までの攻略状況です。いずれも迷宮に手こずっている様子がうかがえます。ただし迷宮攻略4課からだけは、報告がございません」

窓のない部屋で、ひとりのレフ人が報告を終えた。天井にファンが回っていて換気がされている。
壁面に張られた緋色の壁紙は柔らかく、防音効果も高い。
長い会議デスクの末席にちょこんと報告者が座ると、デスクに座

っているレフ人たちが一斉に口を開いた。

「なんだなんだ。４課は手を抜いているのか」
「とはいえ1課から3課もうまくいっていなかろうに」
「所詮はヒト種族とのあいの子だ」
「あれは天賦が使えるから推されたのではないのか？」
「いや、４課長は天賦を使えないと聞いているが……」
「そう言っておけば失敗したときに言い訳が効くからだろう」
「天賦などに頼らずとも魔導武装（マジックギア）があれば攻略ができる。それを証明するための今回では？」
「冒険者を外から呼び寄せておいて今さらなにを」

ざわざわとしているが、ここにいるのは帝国内でも重鎮ばかりだ。行政を司る長たちである。
ただひとり肩身が狭そうにしている太った男は迷宮管理局の局長だった。

「――静かに。皇帝陛下が発言されます」

報告者と対になるいちばん奥には、９の階段が作られてあり、そのいちばん上に座っている老人こそが帝国皇帝だった。
どこか着物に似た赤い上着には金糸の刺繍がびっしりとされている。ただの鉄でできた肘置きに頬杖をついていた帝国皇帝は、眠そうな目を室内へと向けた。

「ルルシャの抜擢は他ならぬ余が行ったことじゃ。不満があるのかえ」

室内は水を打ったように静まり返っている。

「ないならよい。しかし4課の報告がないことは気に掛かる――今回は多くの商会が参加を希望しておったはずじゃが、そちらはどうじゃ」
「おい、どうなってる」
促され、報告者が再度立ち上がる。
「5の商会が同行していますが、特に変化はございません。……あ、いえ、昨日付でもう1件申請がありましたので6の商会ですね」
「昨日付？」
皇帝が不機嫌そうに眉根を寄せたので報告者はあわてる。
今回の大規模攻略は、1月以上も前に発表されたことだ。発表直後に名だたる商会からの申し込みが殺到し、すぐにも攻略1課から3課までの同行枠は埋まった。4課はルルシャが――ヒト種族との血が混じった課長が率いていることから人気がなく、最後まで同行枠は余っていた。
「そ、それが、キャラバンで長く帝国から離れていたという理由でして……」
皇帝がアゴに伸びているひげをしごいている。金色の瞳はレフ人特有のものだが、肌の色は人によって様々だ。皇帝は黄土色に黒のまだらというニシキヘビに近い見た目だった。
「……その者が外部とつながっているという可能性はどうだえ？」
皇帝の言葉を聞いて、会議に参加しているレフ人たちがハッとする。
皇帝が言っているのは盗まれた魔導飛行船の話だ。2月ほど前に

盗まれた「月下美人」は、今もなお捜索の手が緩んでいない。追う側も同じ魔導飛行船を使っているが、速度では「月下美人」にかなわず、とっくに国境を越えてしまったのだろうと見られている。

帝国内に居住しているレフ人は、全員、「帝国民基礎情報台帳」という制度によって管理されている。すべての帝国民が出入国を調べられ、今では「月下美人」の盗みは外国人によるものと判断されている――大体、盗みの際に魔法のようなものを使われているのでほぼ確実ではあったのだが。

とは言っても、である。

さすがに、たかだかキャラバンの商人が「月下美人」を盗むのに加担したとは考えられないのだが、会議に参加しているメンバーは皇帝の機嫌取りに余念がない。

「可能性はございますな。さすが陛下、ご慧眼」

「おい。そのような怪しげな者を今回の攻略に同行させるとは何事か！」

「すぐに『畏怖の迷宮』を調査しましょうぞ」

「キャラバンとは気づきませんでしたな」

わかりやすい阿諛追従を聞いているのか、いないのか、皇帝は目を細めてから小さく手を挙げる――それだけで室内は静まり返る。

「『月下美人』は我が父である先代皇帝から申し送りもされた、我らレフ人にとって悲願ともなる最先端の高速魔導飛行船じゃ。これを超えるものを造り出すめどをつけるのが今回の攻略作戦ではあるが、『月下美人』を取り戻すことも絶対に必要じゃ。わかっておるな？」

「はっ！」

応諾の声が唱和する。

「各々が全力を尽くせ。さすれば光明が見えるはずだえ。――行くがよい」
「はっ！」

会議室からぞろぞろと参加者が出ていった。それを見送った皇帝は、深い深いため息を吐いた。

「……局長、攻略はうまくいくかえ？」

皇帝の身の回りを世話する者以外にただひとり残ったのは迷宮攻略課の上長である迷宮管理局長だった。
この太ったレフ人はおどおどと視線をさまよわせながら、

「わ、わかりません。しかしルルシャはきっとやってくれるかと存じます」
「そうかえ。もうよい、下がれ」
「は、はっ」

あたふたと出て行く局長に、皇帝は再度深いため息を吐いた。

「……陛下、あのような者になぜ重要な管理局をお任せするのですか」

皇帝の身の回りを世話し、秘書としての役割も持っている女性がたずねる。

「血筋だえ。仕方なかろう」
「……血筋、ですか」

あの局長の父は魔道具製作者（マギクラフト）を集めた商会の中でも帝国で5本の指に入る大商会の長だった。魔道具が帝国の行く末を左右する――そうである以上、新たな発明をし、多くの魔道具を造り出せる商会が力を持つのは当然のことだった。

それは時に、皇帝の力をもしのぐ。

「ルルシャとて同じことだえ」

ルルシャの父、カールは、迷宮とは関係なかったが魔道具の取引を仕切る部署のトップだった。外国との交渉にはめっぽう強く――その関係で、ヒト種族の嫁を連れてきたときには多くのレフ人が驚いたものだったが。

ルルシャは、カールとよく比べられた。さらには見た目はほとんどヒト種族、中身はレフ人――つまり、天賦が使えない、ということでこの国では悪いところ取りのような状態だった。

だからこそ、と皇帝は期待している。すでに亡くなったカールは今でも話題に上る。ルルシャはイヤと言うほど父の話を聞いてきたはずだ。それを乗り越えようとする闘志は、難題を解決するのに必要なものだと皇帝は考えたのだ。

（……それはあなた様も、同じことなのでしょうに）

秘書のレフ人は恭しく頭を垂れながらもそう思っていた。

魔導飛行船を初めて完成させた先々代。先代はその飛行船を外国に売ることで帝国に大きな財をもたらした。

今代の皇帝は目立った業績がなく、「先代が育てたマイカ茸の原木を使っているだけ」などと言われている。原木があればまたキノコは生えてくる。新たな原木を探すことこそが皇帝の仕事なのに――。

＊　ルルシャ　＊

「魔導弓構えッ！！　……撃てェーッ！！」

ボウガンを構えた兵士が一斉に矢を射出する。

「命中！！」

天井が見えないほどの大ホールにいたのは、キャタピラを搭載した巨大なオートマトンだ。キャタピラを回転させてこちらへと突っ込んで来る。

身体は猪を模しているが当然車体は金属製であり毛皮などはついていない。ついているのは触れた者を傷つけるトゲ針だけだった。

放たれた矢はオートマトンに突き刺さる。矢羽根の後ろにはワイヤーがついておりそれは兵士の手元にまでつながっていた。

「魔導雷電（マギ・ライトニング）発動ッ！」

ワイヤーは弁当箱程度の箱から出ており、兵士は箱についたボタンを押すと前方へと放り捨てた。直後、青白い電撃がワイヤーを伝ってオートマトンを感電させる。耳に痛いような破裂音が響くが、その効果はてきめんだった。

キイイイイと甲高い音とともに猪の内部から煙が噴出する――だがキャタピラの勢いは止まらず突っ込んで来る。

「散開！　散開ーッ！！」

兵士たちは逃げ出したが数人が猪に引っかかり、吹っ飛ばされた。迷宮の壁面に激突したオートマトンは衝撃で跳ね返ってきたが――もはや動かなかった。

「……止まったか」

「課長！　危険です、近づかないでください！」

制止の声は聞かず、彼女はオートマトンの巨体へと近づいていく。深い青色の髪は無造作に後ろで束ねられている。硬い布地でできたツナギを着て、身体に巻きつけたベルトには工具が装着されている。

書類仕事をするようにはまったく見えない、工場の現場に毎日出ていそうな出で立ちの彼女こそが、迷宮攻略第４課長のルルシャだった。

年は１８歳。瞳は、祖父と同じ琥珀色だ。

「沈黙している、か……」

彼女のつぶやきに答えたのは、そばにやってきた迷宮攻略課のメンバーの女性だ――ルルシャ以外はすべてがレフ人だった。

「はい。ですが、魔導雷電を使ってしまったので、中の魔術は焼き切れているでしょうね」

「仕方ないだろう。あれを使わなければ、犠牲者が出ていた……いや、すでに何人もケガ人がいる」

背後ではついてきている商人たちが騒いでいた。

「――これじゃ使い物にならん！」

「――おいおい、ケガしてくず鉄を拾うだけでは割に合わんな」
「――どうせケガをするのは兵士だけだろうが」
「――時間の無駄だったか」

彼らは迷宮攻略課が戦った戦利品を、その場で買い取っている。オートマトンを無傷で捕獲できればそれはもう高値がつくが、そんなことはできやしない。無傷ということは、オートマトンは稼働しているからだ。

オートマトンとて弱点はある。それは「電気」だ。魔術で動くオートマトンは、魔術効率のいい金属を使用しておりその金属は電気を通す。そうすると魔術は焼き切れ、オートマトンは沈黙する。だが希少な触媒や魔石も壊れるので手に入るのは金属塊だけになってしまう。金属塊はたいした金額にはならない。

「課長、問題はこれだけではないです」
「なんだい」
「……魔導雷電の残量がありません」

聞いて、ルルシャは舌打ちする。

「いったい、後方支援はどうなっているんだ!?　何度も報告と、援助要請を送っただろう!?」

迷宮攻略チーム１００名を率い、迷宮に入ってから１０日が過ぎたが、一向に外界からの返事がなかった。食料や水は十分だが想定以上に触媒を消費している。

魔導武装（マジックギア）は誰にでも使え、強力だが、触媒を消費する。

「撤退か……」

ギリッ、とルルシャが歯噛みをしたときだ。

「課長！！　敵です！」

今いちばん聞きたくない情報を、偵察兵が持って戻ってきた。

12（前書き）

本日は朝夕の2回更新です。

12

ムゲさんも戻ってきたので――ちなみに壁に書かれていた文字は、詩の一節だったようでかなり難解のようだった――僕は改めてこのダンジョンに入ってから疑問に思っていることを全員に説明した（ゼリィさんがもう一眠りしようとしていたのでデコピンした）。

「そこまではわかった。それで、レイジ。冒険者とパーティーの関係が……ダンジョンも同じとかなんとか言ってなかったか？」

「はい」

僕はダンテスさんにうなずきながら、

「『ダンジョンだからなんでもアリ』という考えは止めましょう。この『畏怖の迷宮』はラ＝フィーツァという人物が造り出した人造ダンジョンです。ここで起きている事象にはすべて原因があり、仕掛けがあるのです」

「それとパーティーがどんな関係がある？」

「オートマトンとダンジョンの関係がそれなんだと僕は気づいたんです」

僕は説明する。

「オートマトンは魔術で動きます。一方でダンジョンには魔力が循環しています。一般的なダンジョンは破損を修復しますよね」

「ああ。どんな仕組みかはわからないが……」

「循環している魔力が修復しているのでしょう。それ以外に考えられるのは『ダンジョンが一種のモンスターである』という考えです

が――」
「あ、それはダンジョン研究家の中でも異端って言われてる人が提唱してる説だべな」
ミミノさんが言う。そんなこと考えてる人もやっぱりいるんだなあ。でも、「異端」か。
「――とりあえず今回は、モンスターかどうかは考えないでおきます。そこはさほど重要ではないので。重要なのは、ダンジョンに魔力が循環していて、オートマトンを製造したのがダンジョンを製造したのと同じ人物だということです」
「それはまあ、同じだろうが……同じだとなんなんだ？」
「その人の立場になって考えてみたんです。僕がダンジョンを造るのなら、オートマトンにダンジョンの魔力を利用させるだろうなって」
ダンジョンの壁面にある魔力は個別に見ると薄いものだけれど、全体で見るととてつもなく膨大で、これは循環している。なんなら空気中にも満ちている。
だからこそモンスターも自然発生するらしいのだけれど、それはともかく。
「僕がダンジョンを設計するのなら、ダンジョンそのものに仕掛けを施しておいて、自由にオートマトンにそれを使わせるってことです」
「あ！」
ミミノさんが腰を浮かせた。
「『畏怖』の感情を引き起こすトラップを使ってるってことだべな

！？」
「正解です」
「トラップ！？」

ムゲさんが驚いたように声を上げる。

「でも、オートマトンが使ったというあれは魔法の類なのではありませんか？」
「魔法でもないとは言えませんが、今までオートマトンを調査して、体内にそういった魔法――魔術を仕込んでいる痕跡はあったんですか？」

逆に聞くと、うーん、とムゲさんは首をひねってから、

「ない……ですが、でもオートマトンが感情を引き起こしてきたこと自体が初めてなんですよね」
「ああ、それは確かに。でも、ダンジョンを利用したほうが圧倒的に簡単なんですよ」
「簡単？」
「息を吸って吐くだけでも僕らの中にダンジョンの魔力が蓄積します。それを利用して、ダンジョンにいる人物の感情をコントロールするんです。最初から魔力が体内に入っているんですからね、外から魔法を掛けるよりもずっと簡単ですよ」

天賦珠玉の中で「神秘特性」という種類がある。これは「八道魔法」からは外れる種類の魔法で、【回復魔法】や【補助魔法】などがその中でも有名だ。
だけれどマイナーなところで【魂魄魔法】や【人魔法】なんてのもある。【人魔法】はまさに、「他者の感情に働きかける」ことができるのだ。

ちなみに今まで、僕もこの2つの天賦珠玉は見たことがないけどね。その使い手も知らない。

だけど、魔法として存在するのなら、魔術で再現することも不可能ではない。

「裏を返すと、オートマトンはトラップが仕込まれた場所でしか感情を惹起する戦い方ができません」

僕らが通ってきたステージのような場所。ああいうわかりやすいところにトラップが仕掛けられているのだろう――僕は最初、オートマトンとの「距離」が重要なのかと思ったけれど、トラップの有無が重要なのだ。

「トラップにさえ引っかからなければ感情に振り回されることもないと思います。まあ、推測ですけどね」

「推測とはいえ、どれくらいの確率でそれがアタリだと思ってるんだ？」

「……8割は確実かと」

「それはもう断言と言っていいレベルだぞ」

ダンテスさんが苦笑する。

「いえ、検証してみるまでは。……でもこのダンジョン自体がトラップになっているという傍証はあるんですよ。僕らがここに来るまで、『黄金旅団』以外に遭遇していませんし、その彼らにも追いついていない。それどころか先行しているはずの迷宮攻略課や『黄金旅団』の痕跡すらないんですよ」

「……言われてみるとそうだな」

「ゼリィさん。さっき言いましたよね？　途中で空気が変わったって」

「あ、そんなこともありやしたね。でも気のせいかなって思ってましたけど」
「僕はそうは思いません。おそらく『黄金旅団』が通った道と、僕らが通った道は違うんです」
するとダンテスさんが首をひねる。
「おい……それはおかしくないか？　あれからはここまで一本道だったぞ」
「はい。なので、ダンジョンがいくつかのルートを用意しているんでしょう。そして他の侵入者が見ていない隙にすり替えるんです」
「なんだって！？」
「この継ぎ目のない通路を見てください」
僕は地面に触れる。この小部屋の壁は違うけれど、地面は他と同じ、モルタルやセメントのような手触りだ。
「タイルや石畳にすると、通路を曲げたりするときにはめ込んだタイルがずれることもありますが、このようにさらりとした素材であればつないだり離したりができるでしょう。なんらかの条件で流体化できるものであるという前提ですが」
「そ、そんな素材あるんだべな？」
ミミノさんが驚いている。
「あるようですよ。ここの地面は特定の魔力を流すと水のように溶けるようですし」
僕が【森羅万象】に質問すると、そんな回答があった。ただ漠然と見るだけでは教えてくれないのでこちらも考えなきゃいけないん

だよね。
　その特定の魔力とやらがぼんやりしていて再現不可能なのが痛いけども。

「そうなると『ダンジョンそのものがトラップである』ということも真実味を帯びてくるでしょう？　他にもありますよ。下り坂で刃が飛んできて、あれが回収されましたね。おかしいと思いませんか？　何百年と経っている建物でいまだにああいう物理トラップが生きてるんですもん」
「それは油が効いているから……いや、油も数年、あるいは数十年でダメになるよな」
「そうなんです、ダンテスさん。でも古いながらも油は使われているようでした。あれは誰かが補充しているんでしょうか？」

　迷宮を作ったラ＝フィーツァの末裔が帝国内にいる可能性もちょっと考えたのだ。

「その可能性は捨てきれませんが、この狭い帝国でそんな目立つことを何百年も続けられないと思うんですよね。それよりも、なんらかの方法で油を精製し直して何百年も保たせる仕組みを持たせているのではと考えた方がしっくりくるんです。回収された刃といい、ここには一度使ったトラップを再利用する循環（エコ）システムができているんです」
「そんな……ことが可能なのか？」
「これだけの迷宮を作った人物ですからね。知性で解決できることならばほとんど解決しているんじゃないかと思うんです。――というわけで、ダンジョンそのものが高度に設計されている以上、オートマトンもまたダンジョンの性能を十分に生かして行動しているんだろうなと結論づけたわけです……それもこれもノンさんのヒントのおかげですけど」

「私の、ですか？」

僕もパーティーの一員だと言ってくれた。

僕の悩みも自分の悩みだと言ってくれた。

それがヒントになったんだ――オートマトンもまたダンジョンの一部なのだ、っていう。

ちょっと照れくさいから言わないけど。

13

「まあ……ともかくそんなわけです。――って、どうしたんです、ムゲさん？」

僕が一通り考えたことを話すとムゲさんが呆然としていた。

「そ、そ、それはほんとうですか？　ほんとうのほんとうのほんとう？」

「ええまあ。魔術を解析しないと裏付けにはなりませんが……でも、あらかじめ体内に魔力を仕込んでおくくらいのトラップでなければ、あんな簡単に感情を変えることなんてできませんし、ほぼ確実ですよ」

「それってすごい発見ですよ！？」

「……え？」

興奮したふうのムゲさんが身を乗り出して僕の両肩をつかんだ。

「今まで迷宮攻略で失敗が多かった場所は、全部、感情に負けてるんですよ！　レイジさんの推測が正しいなら、止まっていた攻略箇所が一気に前進しますよ！！」

「いや、でも……気づかなかったんですか？」

「わかりませんが、今のレイジさんの話みたいなことは聞いたことがありません。みんな感情をどうやって克服するかばかり考えてましたから」

「……そうか」

僕は気がついた。

確かに、僕の発想は現代の地球人が持っていたものに近いかもしれない。科学的な発想だ。
それは魔法があるこの世界の人には縁遠い発想だったりする。
だけどそれ以上に重要な要因があると僕は気がついた。

「天賦……ですね」

レフ人は天賦を持たない。だから【人魔法】のことなんて知らないに違いない――僕だってヒンガ老人がチラッと言ったことを覚えているに過ぎないのだから。
「九情迷宮」がもたらした魔道具はレフ人に富をもたらしたけれど、一方で、天賦を使えないレフ人が愚直にこのダンジョンを攻略しなければいけない、というのはなにかの皮肉のように僕には思えた。

「そう言えば……なぜレフ人は天賦を使えないのですか？」
「それがわからないのですよ。そりゃね、やっぱり興味はあるもんですから私もいろいろと試してみたんですが……」

しょんぼりしてムゲさんは言った。
どうも、ムゲさんは帝国の外で天賦珠玉を買って、自分でも何度も取り込もうとしたことがあったらしい。だけどすべてうまくいかなかった。

「こんなだから『呪われた種族』だなんて言われるんだよね～。あー、やだやだ」

ムゲさんは肩をすくめておどけて言うが、僕は他人事には思えなかった。

（『忌み子』、『災厄の子』……僕も同じだ）

黒髪黒目というだけで迫害されるのだ。
前髪をつまんでみる。今はミミノさんたっての希望により中心がオレンジっぽい金髪になっている。「またおそろいだべな！」って言われたけどミミノさんは飴色なんだよなぁ。

「ま、そんなことはともかく！」

パン、とムゲさんは手を叩いた。

「それで、『銀の天秤』の皆さん。私はこれでも結構稼げた感じですがどうします？」
「え？　稼げたんですか？　魔法で結構焼いちゃったんですけど……」
「車輪の駆動部が残っていますし、割れた魔石もそれなりの金額で売れますよ。魔導雷電を使えば簡単に倒せるんですけどねえ、それやっちゃうと魔術部分が全部飛んでしまいますし」
「ああ」

迷宮攻略課はそういう武器も持っているとは僕も聞いていた。
確かに、機械が相手なら電気なんだよなぁ……。
ただ【雷魔法】は使い勝手が悪くて有名だった。撃ってもコントロールできないし。まあ槍とか持ってる相手なら避雷針みたいになって当てやすいけども。
近接戦で直接触って撃ち込めばいけるか？
でもなあ。消費魔力に比べて威力が弱いっていう特徴もあるんだよな。
今までは「火炎嵐」で始末してきたけど、他の方法も考えてみようか。【花魔法】で縛る？　でも植物がないしなぁ……。
――そんなことを考えていたら、

「うっひっひ。キャラバンで何ヶ月も回るより今日1日のほうが稼ぎが美味しいんですもんね～、こりゃ迷宮はやめられませんな」

あ、これはよくない。

ムゲさんの目が金貨になってしまっている。

「……ええ、ですがこれは賭博と同じようなもの。賭けているのは命という名のチップですからね」

だけど僕が言う前に、にっこりとノンさんが言うと、

「は、はい……」

ムゲさんはおとなしくうなずいた。わかったんですね、ムゲさん。ノンさんは怖いんですよ。

「――だがムゲさんよ。もしアンタが戻りたいというのならここで引き返すぞ。俺たちは護衛の依頼を受けているわけだしな」

依頼料はさほどでもないけれど、魔道具の売却益は折半だ。それでもムゲさんがここまで言うのだからかなりの高額になっているのだろう。

「そうですねえ……レイジさんはどう思います？」

「え、僕ですか？」

「ええ、ええ。先ほどの見事な推測、あれを思いつくということは今後の見通しもお考えでしょ？　教えて教えて～！」

「……」

チャラくなってきたムゲさんがちょっとウザイ。

「……そうですね。トラップについては検証したいので進みたい気持ちはあります」

「ならば、行きましょう！　私、今回の探索でもっと利益を上げて、長年の夢だった店の改装をするのです！」

うーん、なんかそれってフラグっぽいから止めて欲しいんですが……。

「よっしゃ！　あーしもここでガツンと金儲けして、坊ちゃんへの借金を全部返しちゃいますよ！」

ゼリィさんが飛び上がった。うーん、着実に失敗する方向に行ってる気がするぞ！

＊　ルルシャ　＊

「敵、全滅です……」

「倒しきったか」

ルルシャはその場に座り込みそうになった。

魔導雷電をすべて使うはめにはなったが、なんとか追加のオートマトンを撃退することができたところだった。

予想外に多くのオートマトンが投入されており、こちらの負傷者もかなりの数に上った。

これは撤退か、と天を仰いだ。

（甘かったな……）

正直、魔導武装でなんとかなる――と思っていた。

「畏怖の迷宮」を攻略できてしまうかもしれない。補給さえしっかりしていれば――とも思っていた。

それがどうだろう。触媒が尽きてしまえばできることなどなにもない。

「――ふー、やれやれ。やっと終わったか」

「――生きた心地がしませんでしたな」

「――そちらは冒険者に守ってもらってるからマシだろう？」

ついてきている商会のレフ人たちがああだこうだ言っているがそれに構っている余裕はルルシャにはなかった。

「負傷者の治療！　急げ！　各班の班長は動ける人数を確認しろ！」

「課長、戦利品は……」

「そんなもの、商会に任せておけ」

見渡す限り無傷な戦闘員はおらず、煙を上げているオートマトンがあちこちに転がっていた。確認するまでもなくこれ以上の戦闘続行は不可能だろう。

だが――あきらめきれない。

（こんなふうに終わってしまうのか。これが迷宮か。いや、補給さえあれば。いや、戦闘に慣れていないメンバーが。いや、采配のミスだったか？　いや……）

頭の中をとりとめのない考えがぐるぐる回る。

「課長、敵です！」

「なんだと……」

また追加の敵――さすがに絶望が心に忍び寄ってくるが、通路の向こうから現れたオートマトンを見て小さく息をついた。

それは、今まで見たどのオートマトンよりも小さかったのである。

これまでは動物タイプのオートマトンばかりが出現していた。それらは単純に突っ込んで来るタイプで「なにが『畏怖の迷宮』か。ここは動物園か」くらいに思っていたのだ。

「特殊な形だが……小さいな。雷電魔導の残数は！？」

「あと１２です」

「それなら仕留められるな」

ホッ、と小さく息を吐いた。

今回現れたのは――大きさこそ１メートル半程度のものだったが、槍のような腕が４本、頭はなく、胴体の中心に三角形を描いて３つの宝玉が埋め込まれてあるタイプだった。

「よし、片づけるぞ」

ルルシャは動ける戦闘員に向かって片手を挙げた。

『……』

キイイインと宝玉が光ったのには気がつかなかった――それが悪夢の始まりなのだとは思いも寄らなかった。

13（後書き）

四半期ランキング1位となりました。ありがとうございます！
ほんとうに多くの方にお読みいただけてうれしいです。
今後ともオバスキをよろしくお願いします。

14

＊　ルルシャ　＊

こんなオートマトンがいるという話は聞いていなかった――少なくとも、「迷宮攻略課」という立場で閲覧できるあらゆる迷宮関連記録を読み込んだが、そこには書かれていなかった。

『畏怖セヨ』――そう、オートマトンが言葉を発するだけでこの場にいる全員が跪いてしまったのだ。

（な、なんなんだ、これは……）

ルルシャは呆然としていた。

腕が４本生えているだけの、ちょっと変わったオートマトンなのだと思っていたのに、言葉ひとつで全員がひれ伏し、動けなかった。

湧き上がる感情に理性が戸惑っている。身体の芯から凍えるような震えが止まらない。

キリキリと音を立てて車輪が回転し、迷宮攻略メンバーの前にやってくる。

そして槍のように尖った腕を、ひれ伏したメンバーの頭上にかざした。

「や、止め……」

３つの宝玉がシグナルでも送るように複雑に瞬いた。突き出された腕はメンバーの腹を貫いた。

「ひぐぅっ！？　あ、あ、あ……あああ」

貫通した。槍が引き抜かれると血があふれ出す。腹を押さえ、痛みに苦しみながら転がるメンバーは涙に濡れた目でオートマトンを見上げていた。叫び出したいに違いない。わめきたいはずだ。だけれどそれをこらえて、震えて見上げている。これが勇敢な自分の部下だというのか。

次々にオートマトンは仲間を突き刺していく。腹だったり、腕だったり、腿だったりするが、顔や身体の中心部は狙っていない――まるで殺すつもりがないかのように。

「あ、ああ……」

ルルシャは気づいた。

（『畏怖』の感情を与えようとしているんだ……。死んでしまえば感情は湧かない）

殺さず、傷つけるだけ。それによって恐怖を植えつけ、ひいてはこのダンジョンに対する「畏怖」を引きだそうとしているのだ。

とはいえ治療もせずに放置しておいたらやがてケガで死んでしまう。

「ひっ」

１００人以上いるホールで、すでに半数が刺され、血を流し、うめいている。そして今オートマトンはルルシャの目の前へとやってきた。

オートマトンの身体に埋め込まれた宝玉が瞬く。それがなにを意

味しているのか、ルルシャにはわからない。
そしてオートマトンはルルシャへと槍を突き出した――。

「『火炎嵐（フレイムトルネード）』」

ルルシャはそんな声を聞いた――自分たちの後方の道から。
業火の竜巻がオートマトンを真横から襲った。
突然のことではあったが、オートマトンは上体をずらして魔法を避ける。
魔法だ。この国ではほぼ見ることのない魔法だ。だがこれが初歩的なものではない高度な魔法だということはルルシャにもわかる。

「外しました！　距離がちょっと遠いです！」

だというのにその声は若く、老練な魔法使いという感じではまったくない。

「突入ッ！！！！」

渋い男の声が響き渡ると、数人が大ホールへと入ってくるのが聞こえた。
だがオートマトンは突然の攻撃にもあわてたりはしない。３つの宝玉がチカチカと点滅し、新たな侵入者に即応する。

「だ、ダメ――」

誰かが助けようとしてくれている。それはありがたい。だけれど、この敵は違う。ただのモンスターではない。このままではミイラ取りがミイラになる。

『――畏怖セヨ――』

間に合わなかった。

「畏怖畏怖畏怖畏怖うるっさいんッスよ！」

え？　とルルシャは目を疑った。ネコミミの獣人が跳び蹴りをオートマトンに食らわせたのである。オートマトンの上体は大きく傾いだが、足元は車輪なので安定感がある。

「おおおおおおおッ！」

突入の号令を掛けた男がその反対側に滑り込んでおり、凶悪なメイスを振りかぶる。オートマトンは４本の腕でこれを防御しようとしたが、メイスは腕をたたき折った。

「ナイスです、ダンテスさん！」

最後に聞こえたのは少年の声だった。メイスによる衝撃で後退するオートマトンへと近づき――その疾駆は音もなく――人間離れした跳躍力でオートマトンの懐へと潜り込んだ。

そこから先は、まるで戦闘とはかけ離れたような動きだった。

骨董品を愛でるような手つきで、ナイフの切っ先を宝玉の１つに差し込むと、いともたやすくそれを抜き取った。

キイィィィイイイ――――……。

甲高い音が聞こえ、その後、オートマトンは沈黙する。

「倒した……の……？」

今のはなんだったのか。この者どもは――レフ人とは明らかに違うので冒険者？　――いったい何者なのか。

「ミミノさん、ノンさん！　クリアです！　すぐに負傷者の治療を！」

「了解だべな！」

「はい！」

彼らの行動に、ルルシャもハッとする。

「そ、そうだ――動けるものは負傷者の治療を！　止血を急げ！！」

＊　＊

僕らの到着はギリギリだったようだ。数人、意識不明の重傷者は出たものの死亡者はいなかった。

「いや……ほんとうに助かった。ありがとう。オートマトンの討伐だけでなく負傷者の治療まで……」

責任者らしい女性が、僕らに頭を下げてくれた。

僕は彼女の瞳に琥珀色があるのを確認して――ヒンガ老人と同じ色の目を確認して、僕はたずねる。

「あなたはもしかしてルルシャさんですか？」

「ああ、そのとおり。攻略第４課のルルシャだ。だが、これだけの負傷者が出てしまえば攻略は続けられないな……一度全員で帰還することとする」

やっぱり、そうだ。この人がルルシャさん。ヒンガ老人のお孫さん。

ああ、どこかヒンガ老人の面影がある――理性的な顔立ちといい。

「あの、実はあなたにお話がっ」

「すまない。話をしたいのは山々だが、一刻も早くここを出て部下の治療に当たりたい」

「あ……」

言われてみればそのとおりだ。ルルシャさんは申し訳なさそうな顔で、

「……戻って落ち着いたら時間を作ろう。それでいいかね？」

「はい……もちろんです。それで構いません」

「帰りは俺たちも手伝おう」

ダンテスさんもそう言ってくれた。

１００人を超える団体の撤退、さらには負傷者もいるために準備からなにから時間が掛かる。

その間にムゲさんは、僕らが倒したオートマトンを「買い取りたい」と他の商会の人たちに言われて交渉に当たっていた――その商会の人たちは、今までもムゲさんのことを「オンボロ商会」と呼んでいた商人たちのようで、ムゲさんは鼻息も荒く腕まくりして行った。

「それでは、お譲りすることは構わないですが、競りかオークショ

ンにしましょうか？」
「いやいや、ムゲさんよ。ぼったくる気かい？　アンタんとこは後から来たんだぞ」
「ほう。では全員死ぬのを待ってから入ればよかったと？」
「ぐぬ……で、では、入札１回のみのオークション形式としよう」
「そうしましょう。それぞれ紙に価格を書いて私にください。あ、金額の相談はもちろんしたらダメですよ！　今すぐこの場で書く！　書かないなら勝負から降りたということにしますからね！」

なんだか商売人としてたくましくなったムゲさんが仕切っている。

「……ぐっ……オンボロ商会のくせに」
「……我慢しろ。あのオートマトン、とんでもない性能だったろ」
「……これは莫大な価値がある」

ぶつぶつ言ってるのを【聴覚強化】によって高められた僕の耳が拾っている。
しばらくして、ひとつの商会が大喜びでバンザイし、他の商会ががっくりしているのが見えた。かなりの額を積んだようで、支払いは帝国に戻ってからということになったそうだ。

「い、い、い、いいんですかね！？　すすすんごい額ですよこれ！？」

さっきまでカッコよく振る舞っていたムゲさんは、戻ってくるなり緊張の糸が切れたみたいだった。

「落ち着きな、ムゲさん。まあ、あんなオートマトン見たら、大金積んでも欲しくなるわな」
「で、で、でも帝国金貨１０００枚って！？」

えーっと……帝国金貨は1枚30～50万円くらいの価値だったはずだ。ということは……3億円以上!?　うはー、確かにそれはすごいな。

倒したオートマトンは、ここに来るまで見た10数体と比べて小型ではあったけれど、腕を折った以外にはほぼ無傷である。聞けば、「感情トラップ」を使ってくるオートマトンと遭遇したのは初めてだったようで――初めてで、すわ全滅かという恐怖を覚えた後となれば大金を積んででもあのオートマトンを欲しくなるのは仕方ないけどね。

（でもなぁ、オートマトンだけで「感情」をコントロールできるわけじゃないんだよな）

猫チャンの荷台に積まれている素材はさほど多くない。目のような宝玉は魔石として高値で売れるようなので全部回収しているが、それ以外の魔術部分は一度ムゲさんが全部バラしてみて、「たいしたことないですね」と言っていた。

商会の人たちは大事そうにオートマトンを積み込んでいた。

「ダンテス、レイジくん、この薬を服んでおくべな」

「もう時間ですか？」

「余裕はあるけど、帰る途中で切れたらシャレにならないしな～」

ミミノさんが渡してくれたのは「魔力中和剤」という薬で、体内の魔力を調整する効果がある。「感情トラップ」がダンジョンに循環する魔力を使っているという僕の推測が正しければ、体内に吸い込んでいる魔力を中和してしまえば「感情トラップ」は効かないわけで、実際これは正しかった。4本槍のオートマトンが繰り出す「感情トラップ」を無効化することができたのだ。

他のトラップが出てきたらまた違う方法を試さなきゃいけないとは思うけどね。

ちなみに「魔力中和剤」は魔力を溜め込みすぎて魔力酔いが起きたときに服むためのもので、一般的な薬ではないという――それでもミミノさんは手持ちの薬草を組み合わせて作ってしまった。

ウチのパーティーメンバーはほんとすごい（身内びいき）。

僕らがどうやってあのオートマトンの攻撃を無効化したのかという質問は誰からもされなかった。とりあえず今は安全に撤退するのが最優先だからだろう。

ミミノさんの治療薬もノンさんの魔力も限りがあるので、全員分応急処置をするのが精一杯だったしね。

その後、オートマトンとの戦闘はなく、「畏怖の迷宮」から外に出ることができた――ちょうど丸1日経っていたようで、朝日を浴びながら、傷ついたメンバーがエレベーターで下ろされていく。

「ではな、『銀の天秤』よ。またこちらから連絡する――ほんとうに助かった」

ルルシャさんは僕らに頭を下げると、颯爽と去っていった。

でも、それから1日経っても2日経ってもルルシャさんから連絡はなかった。

15

「遅い……丸2日経って、なんの連絡もないってさすがにおかしいですよね」
「遅い……丸2日経って、なんの入金もないってさすがにおかしいですよね」

僕とムゲさんは同時にそんなことを言った。
ここはムゲさんの商会にある倉庫で、僕らはそこに寝起きさせてもらっていた。鉄パイプで組んだ寝台に藁をかぶせただけのベッドは質素極まりないものだったけれど、冒険者からすればベッドがあるだけで御の字。ドアがあってさらにはカギも掛けられるのだからこれ以上ない待遇である。
スィリーズ伯爵邸のベッドが恋しいときもあるにはあるけどね。

「えっと……レイジくんのはルルシャさんからの連絡で、ムゲさんのはオートマトンを売ったお金のことだべな？」
「「はい」」

またハモった。
ここには僕、ムゲさん、ミミノさんの3人しかいない。
ダンテスさんとノンさんは、迷宮攻略がないなら街をぶらぶらしてくると出かけ、ゼリィさんはとなりの部屋で寝てる。どうやら昨晩は帝国内の賭場に行っていたらしいけど……ムゲさんいわく「賭場なんてないんですけどねぇ？」と首をかしげていたのが解せないところではある。
まあ、ろくでもないところに行ってるんだろう。確信があるね。

それはともかく、

「迷宮攻略の報告をしたり負傷者の治療の手配をしたりっていうのはわかるんですけど、もう3日目ですよ。どうしたのかなぁ……忘れてるとか？」

「いや～。どうだべな。一応、わたしらは命の恩人だし、そこまで無碍にはされないと思うんだけど」

「……ムゲさん。迷宮攻略課に連絡を取る方法ってあります？」

「ええ、ありますよ、もちろん。行ってみましょうか？」

「是非」

ルルシャさんが忙しいのはわかるけど、僕だってせっかくここまでやってきたんだ。早めに会って話をしたい。

「ムゲさんのほうはどうします？　購入した商会に行ってみますか？」

「迷宮管理局――ああ、迷宮攻略課の入ってる組織ですが、その建物までご案内したら私も自分で行ってみますわ」

「でも帝国金貨1，000枚なんて大金だから、すぐには払えないとかそういうオチではないんですかね」

「いんや～。落札したあの商会は新進気鋭で伸びてきてる商会ですから、お金がないことはないと思いますよ！　1課ではなく4課を狙ってついてきたあたりも、作戦だと思いますし」

「どういうことです？」

「そのあたりは歩きながらにしましょうか。時は金なり時は金なり」

コップの水をぐびりと飲んで、ムゲさんは立ち上がった。

こっちの世界にも「タイム・イズ・マネー」の格言があるんだな。

ムゲさんが言うには、迷宮攻略1課から3課までは老舗や大商会が軒並み同行を希望しており、ヒト種族とのハーフであるルルシャさん率いる4課は人気がなかった。逆に言えば4課にはライバルが少なく、希少な戦利品（オートマトン）を手に入れた場合に確保できる可能性が高いと。

「実際、金貨1，000枚を積んでもいいと思えるほどのものが出たわけですしねえ」

ムゲさんは他人事のように言ったが、

「あの、ムゲさん？　なんだかその商会、お金を払わないんじゃないかっていう気がしてきたんですけど」

「ロロロ商会がですか？」

ロロロ商会ってすごい名前だな。日本語で書いたらロ（ろ）なのか口（くち）なのか□（しかく）なのかわからないな。

「あの場には他の商会もいました。ここで払わないなんてなったら商人の名折れですよ。それは心配しなくても大丈夫でしょう」

「そう……ですかね？」

「ああ、迷宮攻略局はあちらです」

猫チャンは置いてきたので僕ら3人は道をてくてく歩いている。照りつける陽射しが強い。レフ人はみんな白や砂色といった明るい色のフードをかぶって日光を防いでいた。

たどり着いた黒っぽい建物は、味も素っ気もない四角い形をしており、見るからに「お役所」感が漂っている。

正面入口には「迷宮管理局」の看板があった。

「それじゃ、私はロロロ商会に行ってきますね。もし身元の照会が必要だったら私の名前を出してください」
「ありがとうございます」

ムゲさんが手を振って行ってしまった。
僕はミミノさんとともに迷宮管理局へと入る。建物の内部は日陰だからなのか、あるいは冷房みたいなものがあるのかひんやりとしていた。
プロテクターと、腰に警棒、右手に金属の短槍を身につけた警備員が2人近づいてくるが、僕はルルシャさんに会いたいこと、会って時間を取ってもらう約束はしてある旨を伝えると、2人は顔を見合わせた。

「……上に確認するので、あっちで待っていてくれ」

来客用のロビー、と言うにはあまりに小さい、10人分のイスが置かれてあるだけのスペースを指差された。観葉植物もなければ絵が掛けられているわけでもない、ほんとうに殺風景な場所――まるで留置場のようなところだった。
窓から光が射し込んでおり、外は忙しなく行き交うレフ人の姿が見える。
レフ人はほんとうによく働く。歩く速度も早いし、朝から晩まで仕事をしている。「賭場なんてない」とムゲさんが言ったのは、レフ人の気質もあるのかもしれない。

「……なあ、レイジくん。ルルシャさんと会うのにわたしもついてきてよかったのかな」

なかなか警備員が戻ってこないなと思っていると、ミミノさんが

たずねてきた。

「全然問題ないですよ。ルルシャさんは僕の恩人のお孫さんというだけですし」

「え!?　そ、そうなの？」

「あ……僕、言ってませんでしたっけ？」

そう言えば話してなかった気がする。というか「銀の天秤」のみんなは優しすぎて、僕が鉱山にいたときの話とか聞いてこないんだよね。だから僕もヒンガ老人のことを話そびれたというか……いやいやいや、待てよ。ということはなんの事情も知らないのに、僕が「ルルシャという人に会いたいんです」と言ったからというそれだけで、みんなここまでついてきてくれたのか。

（底抜けのお人好したちだ）

失敗した。ここまで信用してくれているのに僕は「銀の天秤」のメンバーになったうれしさと、みんなといっしょに旅ができる楽しさで浮かれていたのかもしれない。

帰ったらダンテスさんとノンさんにも話そう。

「僕が鉱山にいたころ、世の中のことをいろいろと教えてくれた方がいるんです。その方のお孫さんなんですよ」

「そう……なんだ。ごめんな、詮索するつもりはなくて――」

「い、いやいや、ミミノさん、こんなの詮索だなんて思わないですよ。それに、鉱山にいたときのことは……あまりいい思い出ではないですけど、それでも僕はあそこに行かなければ死んでいたので」

自分を売らなければ親に殺されていた。髪の色が黒く、目の色が黒いというそれだけで。

ミミノさんはハッとした顔をしていたけど、僕は努めて明るく、

「過ぎたことです。今、僕はミミノさんたちと冒険ができて幸せなので、なにもつらくはないんですよ」

そう言った。

それから僕はヒンガ老人のことを話した。鉱山で教わった様々なことを。ミミノさんは相槌を打ちながら、たまに薬草の話になると「そんなに詳しい人だったんだべな？」と驚いていた。ハーフリングの薬師にして専門家のミミノさんからしてもヒンガ老人の知識は卓越していたみたいだ。

時間を忘れて話していたけど――僕はふと妙な音を聞いて話を止めた。

「ん、どうしたんだ、レイジくん。そう言えば警備員が戻ってくるのが遅いべな」

「……ミミノさん」

僕の強化された耳がなくとも、わかるだろう――外を歩く人がいなくなっていることは。

窓の外の通行人が途絶えているのだ。

そしてこの建物に出入りする人もいない。

耳を澄ます。かすかに、金属のこすれる音が複数、聞こえた。

「この建物ごと、武装集団に包囲されているようです。考えたくはありませんが、狙いは僕らの可能性が……高いです」

ルルシャさんに会いに来ただけなのに、どういうことだ？

16

気がつけば受付の人もおらず、1階は無人となっていた。受付の奥にある扉を進めばこの階で働く人はいるのだろうけれど、そちらもみんな息を潜めているようだ。

不気味な沈黙の中、ひとりのでっぷりしたレフ人が建物の入口に現れた。

ハッとしてミミノさんが立ち上がるが、僕は彼女の前に立ち、いつでも短刀を抜けるようにした。

「フゥン、君（チミ）たちが『銀の天秤』のメンバー？」

暗い黄土色一色の肌はなぜかぬらりとしており、異常なまでに太った体型は爬虫類ではなくカエルを思わせる――しかもヒキガエルだ。

着ているシャツのボタンは外され、フードをはぐとフゥフゥと荒い息を吐いている。口には一本の箸のような棒をくわえていたが、それを口から取ると、腰のベルトにぶら下げた金属製の壺に突っ込んで、粘り気のあるもの――【森羅万象】によると「水飴」ということだった――を取り出してしゃぶっている。

「チュパッ。ぼくはね、渉外局の副局長のアバだ。ルルシャ課長のことで話を聞きたい。それとチミたちが、ぼくの従兄弟がやってる『ロロロ商会』に対して詐欺を働いたとも聞いたから、それについても申し開きがあるなら聞こうか。チュパッ」

「すみません、ツッコミどころが多くてなにから言えばいいですかね？　とりあえず最初に誤解を解いておくと、まず詐欺なんてしてません」

「金貨1千枚をだまし取られたって商会長が言ってたけど？　チュパッ」
「は……？　僕らが倒したオートマトンをその金額で買い取りたいと言ったのは向こうのほうですよ？」
「チュパッ。そうなの？　じゃあ、少々厄介なことになるね。訴訟かな」

どこか他人事みたいにアバというヒキガエルっぽいレフ人は言うけれど、こっちとしては冗談じゃない。というかロロロ商会に行ったムゲさん、大丈夫かな。

「……で、僕らを大人数で取り囲んだのはルルシャさんに関わることですか？」
「チュパッ」

棒を引っ張り出してもう一度水飴をつけた。

「そう。そっちが本題だ。彼女には『国家反逆罪』の疑いがかけられている。君たちにも話を聞きたいので、抵抗せずについてきてもらいたい」

アバは水飴をしゃぶると、チュパッ、と音を立てた。

ムゲさんのことが心配だったけれど、下手に暴れても嫌疑が深まるだけだと判断し、僕らはアバに連れられて2ブロック先にある渉外局へと向かった。

案の定、建物の外には武装した警備兵が１００人以上詰めかけており、その外側には一般市民が何事かと遠巻きに見ていた。まるで

僕らが本物のテロリストみたいな演出だった。
　渉外局は迷宮管理局とは違い、外壁にタイルを貼り、テラス席があったり、屋根を支える支柱に彫刻をあしらったりと瀟洒な外観になっていた。
　僕らがなにも言わないせいか、アバも終始無言で僕らを渉外局へと連れてきた。
　警備兵は中まで入ってこないらしい。広々としたロビーを抜けて、応接室らしい部屋へとやってきた。
　ここに来て初めて見た観葉植物は、鉢に植えられたこんもりとした木だった。それが3つほど距離を置いて配置されている。
　籐で編まれた長椅子に座ると、向かいにアバも腰を下ろした。

「チミらとルルシャ課長の関係は？」
「ルルシャさんのお母様との知り合いです」
「……チミはだいぶ若く見えるけどね？」
「フォルシャ王国の生き残りは結束が固いんですよ」

　僕は直感的に「ヒンガ老人のことは隠したほうがいいのではないか」と思った。老人はなにか罪を犯して六天鉱山に来た、みたいなことを言っていたし……エル司祭はヒンガ老人を「優れた研究者」くらいにしか言っていなかったけれど。

「それよりルルシャさんが反逆罪というのは？　なぜ渉外局が――名前から察するに諸外国との折衝をする部署ですよね。そこのあなたが僕らのところに？」
「おっと言葉には気をつけたまえよ、チミィ。チュパッ。もしぼくが通りがからなかったら、保安チームに捕まってたところだよ？」
「それはどうも」

　こっちだって素直に捕まる気なんてさらさらないけどね。

「ではなぜあなたは首を突っ込もうと思ったんですか？」

僕は警戒心ばりばりで聞いた。ムゲさんがトラブッてる可能性の高いロロロ商会とつながっている人だもんな。

「……ま、僕のことはどうでもいいでしょ。問題は国家反逆罪のほうじゃないの？」

少々乱暴な手つきで、水飴のおかわりを追加ししゃぶるアバ。

「チュパッ。彼女は国から預かっている攻略チームを自分の都合のためだけに利用した疑惑をかけられている。なにせ迷宮に潜ってから一度も、義務づけられている定期報告を寄越さず、多くの人員を失ったからな」

「……彼女はそんな、無謀な人材には見えませんけれど」

「それはチミが知り合いだからだろう？」

「……」

「武力を渡して、その後行方がわからなければ誰だって警戒するものだよ、チミィ」

違和感。

僕はルルシャさんにようやく出会えて――もちろんヒンガ老人のお孫さんだというのもあるけれど、ルルシャさんは迷宮攻略をしっかりやろうとしていたし、国家に弓引くために迷宮にいたとは到底思えなかった。彼女は部下の治療を最優先していたし。

（……最初からルルシャさんを排除するための迷宮行きだったとか？　いや、そんな面倒なことをふつうはしないよな……。だったら、何者かが彼女を陥れるために疑惑をミスリードしている？）

後者のほうが俄然、ありそうだった。
だけど今はそんな陰謀論を確かめている場合じゃない。ルルシャさんを助けなきゃ。

「アバさん……でしたね？　ルルシャさんの疑惑を晴らすにはどういう方法がありますか」
「ふむ……」

チュパッ、と音を立てて棒を口から引き抜いた。

「彼女は定期連絡を欠かしていないと言っているらしいぞ。だが、報告に出したという者も行方が知れない。たかだか1人ではなく、7人だ。その誰かでも見つかればまた風向きは変わるかもしれないが……時間はあまり残されていないねえ。国家反逆罪の立件と裁判は早いからね。最短で5日。長くとも10日で刑は執行される……」

棒にはもう、水飴は残っていなかった。

「死刑だよ、チミィ」

ぺろりと唇を舐めたアバの舌は細く、不気味だった。

17

＊　ルルシャ　＊

細く硬い寝台に、トイレが1つ。それだけがルルシャのいる独房のすべてだった。「国家反逆罪」などというまったく身に覚えのない罪状。取り調べでは洗いざらいすべてを話したのだが――ここにこうして閉じ込められ、外部との唯一の出入り口である鉄扉は閉ざされたままだった。

「いったいなんだというのだ……」

最初の1日こそ悔しさや不安で眠れなかったものの、2日目は迷宮攻略の疲れが一気に出て1日中眠っていた。そして3日目の今は、自分の置かれた状況を冷静に考える余裕が出てきた。

自分の活躍を望まぬ人々がいることはわかっていた。だけれど、自分が努力するのは自分のためではなく他でもないこの帝国のためだ。迷宮攻略で結果を出せば理解してもらえると――信じていた。

「……それがこのザマか」

部下たちと話をしたいと申し出たがそれも断られた。聞けば、部下とルルシャはすでに結託しているために証言の信憑性が低い、などと言われた。取り調べを行った官吏はルルシャが「連絡員など送っていない。戦力を我が物にしようとした反逆者」と信じ込んでいた。なので「連絡を送ったという証拠を出せ」と言って譲らなかっ

た。

定期連絡、援助を求める連絡員を送ったのだがその7人すべてが行方不明という。中には、ルルシャを一一女で、ヒト種族とのハーフである彼女を嫌う者もいたが、全員が全員、連絡が取れないというのはおかしい。

「何者かが連れ去ったか……？　迷宮内で行方不明になったというのは考えにくい。道はさほど複雑ではなかったし、私が撤退するときにはなにもなかった」

ため息が出る。自分をここに閉じ込めておくよりも先にやらなければいけないことがあるだろうに。連絡員の、7人の命が掛かっているのに。

「……あるいは7人全員が買収され、私が死んだ後に出てくる、か？」

自嘲めいた笑いがこぼれる。あり得る、と思ってしまった。こんなところに閉じ込められた今となっては。

怒り、悔しさ、悲しみ、徒労感、絶望、不安……様々な感情がないまぜになり、ルルシャは寝台に突っ伏して顔を覆った。感情に流されて涙が出てきたが、声を上げるのは歯を食いしばってこらえた。外には看守がいる。自分の反応を誰かに報告していないとも限らない。自分を陥れて、にんまりしているようなヤツらの喜ぶことをしたくはない。

せめてもの矜持だった。

「それにしても……礼のひとつもきちんとできなかったな」

30分も耐えていると心が落ち着いてきた。

そうすると今度は、自分を助けてくれた人たちのことを思い出した。

窮地を助けにきてくれた冒険者たち。少年が自分になにか話があると言っていたが――この調子では聞くこともできなさそうだ。

「あのオートマトンが仕掛けてきた感情攻撃をどうやって切り抜けたのだろうな。実に興味深い。純粋なヒト種族には効かないのか？　いや、それなら商会の雇った冒険者だって効かないはずだろうに……いや……」

ルルシャはぶつぶつと考え始めた。陰謀をあれこれ考えるよりも迷宮を考察しているほうがずっと性に合っている――。

ガチャリ、鉄扉のカギが開く音で我に返った。

薄く開けられた扉の向こう、看守のレフ人が顔を出してぶっきらぼうに言った。

「出ろ。面会者だ」

面会者……？　この大罪を犯した自分に？

一瞬、あの少年かと思ったけれど、異邦人が会えるわけもないだろう。

とはいえ独房に長々滞在していたい気分ではまったくないのでルルシャはそこを出た。腕に手錠を掛けられると、潔白なのに自分が悪いことをしたような気持ちになってくるのに辟易した。

面会室はこれもまた殺風景な一部屋だったが、独房の3倍くらいは大きかった。そこに座っている人物を見てルルシャはハッとして跪く。

「アナスタシア殿下！　なぜこちらに！？」

レモン色のドレスはこの国ではなかなか見かけることのない布地で仕立てられており、彼女が特別な人物であることを示している。

だが、なによりも目立つのは――滑らかで白い肌だ。その肌によく合うプラチナブロンドの髪はさらりとしており、ダイヤモンドをちりばめた金の髪留めが後ろに留められてある。

髪からひょっこり出ている長い耳は、彼女がエルフ種族であることを示している――しかもエルフの頂点に立つハイエルフだ。

切れ長の瞳はサファイアブルーの輝きで、瞳そのものがひとつの宝石のようでもある。

健康的なピンクの唇はにこりとしていたが、そこから言葉が出てくることはなかった。

彼女の喉には、呪印の書かれた包帯が巻かれてあり、そこだけが異様なまでの存在感を放っている。

『立ってください』

その場に跪こうとしたルルシャに、アナスタシアはメモ紙を見せた――彼女は言葉を発することができないのだ。

「しかし……」

『いいのです。こちらに座ってください』

速筆ながら流麗な筆記を見せると、これ以上書かせることも不敬だと感じたルルシャはアナスタシアの対面に座った。

アナスタシアは看守を手招きすると、その手に小さな金貨を握らせた。看守が口元をほころばせながら部屋を出て行くと、部屋にはアナスタシアとルルシャのふたりきりになった。

「……いいのでしょうか？」

出て行った看守を気にしてルルシャが言うと、アナスタシアはにこりとして首を左右に振った。いい、ということだろう。

どのみちこの手錠には逃亡防止の魔術が仕込まれている。無理矢理解錠しようとしたり、この建物から出ようとしたりした瞬間、爆発するような代物だ。

『あなたが反逆罪だなんて信じられません』

「もちろん潔白です！」

ルルシャはそこまで問われていないのに、アナスタシアに取り調べで話した内容をもう一度伝える。話し続けていて気がつく。自分はこんなにも誰かに信じてもらいたかったのだと。

『私からもあなたの無実を皇帝陛下に伝えます』

「……ありがとうございます」

込み上げてくる感情をこらえる。今日は心が大きく揺れて情緒不安定になっている自分を自覚していた。

アナスタシアの言葉がうれしかった。たとえ――彼女が、地位のある人間でありながらこの国ではほとんど発言権がないのだとしても。

ハイエルフの王族である彼女は、エルフ種族にとっては当然重要人物である。だが彼女は幼いころ、エルフの森を訪れた筋の悪い魔導師によって呪いを掛けられ、声を失った。今も呪いは生きており、呪印によってそれを封じ込めている。

ハイエルフに「声」はとても重要なものだ。

森の奥での祭祀に肉声は必要不可欠であり、多くのエルフが従う

のもその祭祀が――森の恵みを確かなものとする祭祀があるからこそだ。

アナスタシアはハイエルフ種族ながら、ハイエルフとしていちばん重要な器官を失ってしまった。

他のエルフの目もある。ハイエルフとして働けない者には、王族として優雅な暮らしをさせられないと判断された。かといってハイエルフがエルフに混じって暮らすことも体裁が悪い。

エルフの森の王は、アナスタシアを輸出することにした。

「美の至宝」とも言われる種族、ハイエルフだ。エルフの森で生きていけなくとも、どこぞの国に差し出す価値があると判断されたのだ。

そうしてアナスタシアはレフ魔導帝国に贈られ――引き替えに魔導飛行船1艇がエルフの森に贈られた――。

これがルルシャの聞いたすべてだった。

彼女がこの国に来て1年。今、14歳となる彼女はこれからますます美しく育っていくだろう。

――ハイエルフとしては役に立てませんでしたが、魔導飛行船ならばエルフたちを豊かにしてくれることと思います。

初めて会ったとき、アナスタシアはそう書いてから寂しそうに笑った。

アナスタシアは丁重に迎え入れられ、国の行事があるときには皇帝の近くにいるように言われた。ヒト種族と同じ程度の寿命であるレフ人に比べ、ハイエルフは長命だ。そのため今の皇帝は彼女を妻にするのではなく、ハイエルフの皇女のまま、まるで「装飾品」のように扱っていた。

そんなアナスタシアと、帝国内では「腫れ物」のように扱われているルルシャとはどこか気があった。

「私は死刑になっても、殿下が幸せを見つけられるようお祈りしております」

『悲しいことを言わないでください』

『他には誰かここに？』

「この状況を覆すことは難しいようです。私の味方は少ないですから……。渉外局のアバ副局長も一度ここに来ましたが、彼は私の父をライバル視していたので、私がなにをしたのかを根掘り葉掘り聞いて去っていきました。今ごろ喜んでいることでしょう」

『私にできることはなにかありませんか？』

「お気持ちだけでもうれしいです。……そうだ。もしものことがあったら、『畏怖の迷宮』で私のチームを救ってくれた『銀の天秤』という冒険者たちに礼を伝えてはくださいませんか？」

冒険者？　というふうにアナスタシアは首をかしげる。

それだけで多くの男が胸を撃ち抜かれるだろうという可愛らしさだった。

「私になにか伝えたい話があったようですが、今はこのような身分です……。殿下にお頼みするようなことではないのですが」

『遠慮しないで』

ふたりの会話はこの後も続いた。

それは、ルルシャにとって心休まる時間だった。

17（後書き）

遊帝さんにレビューをいただきました。ありがとうございます！

18

僕とミミノさんは渉外局の建物を出るとロロロ商会へと急ぐことにした。

だけど、そんな僕らの行く道を向こうからやってきたのは――まさにそのムゲさんだった。

「んもー！　聞いてくださいよ！」

荒ぶっているムゲさんをなだめつつ、とにもかくにもムゲさんの商会へと戻り、ダンテスさん、ノンさんとも合流した。

戻って早々、人差し指で、着ているツナギの膝の部分を指差す。そこは赤くべたりと汚れていた。

「ロロロ商会に行ったら、これですよ、これ！　いきなりトマト投げつけてきやがったんですよ！『詐欺師に払う金はびた一文ない』とか言って！　アイツら、金を払う前にオートマトンの中身を確認したに違いないですよ」

「や、でも、暴力を振るわれたりとかではなくてよかったです」

「トマトをムダにするのは暴力みたいなものですよ！」

「え？」

話を聞いてみるとムゲさんが怒っているのは服を汚されたことではなく、食べ物を粗末に扱ったこと、らしい。この閉ざされた帝国では食料が限られており、主食のキノコはたっぷりあるものの野菜などは嗜好品なんだとか。

ムゲさんがキャラバンで取り扱うのも干し肉や野菜が中心だから、それを揶揄してトマトを投げつけてきたようだ。

「でも、お金を払う前に分解するなんてのはずるいんじゃない？」

ミミノさんが聞くと、ムゲさんは大いにうなずく。

「そのとおりです。商売人の風上にも置けませんよ。こうなったら出るべきところに出なきゃいけませんなあ……ぬっふふふ……」

ムゲさんの目に暗い炎が灯っている。

「えーと、それで？　レイジたちのほうはどうだったんだ？」

「それが――ダンテスさんにもお願いしなきゃいけないようです」

「お願い？」

僕はアバから聞いたことを話した。ルルシャさんが反逆罪で疑われていること、定期連絡を怠っていなかったという証拠が必要なこと。

「ふむ……なんだか、きな臭いな」

「僕もそう思います。でも今、そこを突いてもどうにもなりませんし。とにかく急いで連絡員を探さないと。ルルシャさんが定期連絡をしていたという物証が、なによりも確実な証拠になるでしょう。……僕はもう一度『畏怖の迷宮』に潜りたいです」

「レイジは連絡員がまだ迷宮にいると思っているのか？　どうしてだ」

可能性は2つに1つだ。連絡員は迷宮の外にいるのか、中にいるのか。

でも僕は中にいるような気がしていた。

仮にルルシャさんをはめようとしている勢力があったとして、迷

宮から出てきた連絡員全員に声を掛けて身柄を匿うような、面倒なことをするだろうか？　やるにしてもあまりに迂遠な方法だし、「連絡不備」だけで「国家反逆罪」にはならない。もしルルシャさんがふつうに迷宮から出てきて、戦力を国に返還していればここまで大きな問題にならなかった。

「国家反逆罪」なんていう罪状をなすりつけられたのは、オートマトン相手に敗北を喫して戦力をいたずらに損耗したこととセットなんだ。攻略失敗の責任を取らせ、ルルシャさんを疎んじる人々がこの機に乗じて彼女を徹底的に排除しようと仕組んだのだと考えるとしっくりくる。

ならば。

連絡員たちは何らかの理由でまだ迷宮内にいるはずだ。

「でも、迷宮にもう一度入ることはできるんでしょうか？　ムゲさん」

「できますよ。現に、他の商会でまだ迷宮に潜ってるところもあるでしょう」

「あっ」

そう言えば「黄金旅団」はあの後見てない。まだ潜っているのか。

僕らは話し合い、明日また「畏怖の迷宮」を探索することにした。

ゼリィさんの夜のバクチ（おたのしみ）は、今日は遠慮してもらおう。

翌朝早くから僕らは行動した。

徹夜明けらしいムゲさんは猫チャンの荷台で眠っており、僕が代わりに猫チャンを運転することになった。ムゲさんはオートマトンから取り外した魔術をいくつか猫チャンに組み込んだらしく、

「スーパー猫チャンになりましたよ！」

と胸を張っていた。蒸気機関以外に魔石による補助動力も加わり、回転力（トルク）が向上したらしい――けれど僕には違いがよくわからなかった。

猫チャンの運転は意外と楽しく、猫チャンは相変わらずのろのろと走った。

エレベーターで崖を上がり、「畏怖の迷宮」入口へ。相変わらずミミノさんは高いところが怖いらしく、僕の腕にしがみついてきた。だんだん遠慮がなくなってませんかね？　いや、全然嫌ではないんですけども。

入口の人の顔のところにやってきて――僕は思い出した。

「そうだ……血のニオイ」

「どうした、レイジ」

前回入るとき、この先にある並ぶ石像で血のニオイを感じたことを僕は思い出したのだ。

「ゼリィさん、感じますか？」

「ん～、あーしはこっちのほうがいいですけど、まあ、ちょいとニオイましたね」

ゼリィさんは、こっち、と言うときにネコミミをぴんっと指で弾いた。

「……坊ちゃん、なにか聞こえますよ」

「！」

ゼリィさんに言われて僕も気がついた。入口の向こうでくぐもっ

たうめき声が聞こえるのだ――助けてと救いを求めるような。

「ムゲさんはここで待っていてください！」

僕らが急いで入口へと――薄気味悪い人の口へと飛び込むと、並ぶ石像の奥の方に倒れている人影があった。

「大丈夫ですか！」

遠目にもわかるかなりの出血量。そしてその人物が背中につけているマントは、黄色だ。「黄金旅団」のメンバーだ。

僕らに気づいたのだろう、顔を上げたのはフードを目深にかぶったスレンダーな女性だった。苦しげな表情で、彼女が口を開く――

「うえ」と。

うえ？

「上！」

僕らは女性に駆け寄っていく途中だった。見上げたそこに並ぶのは武器を持った石像だ。

それらは石像のはずだった。

だというのに、瞳がすべてこちらを向いていたのだ。

「攻撃来ます！」

ダンジョンそのものが「道順を変える」なんていうふざけた真似をしてくるのだから、それは、確かに、当然のことだった。

石像が動くことくらいは。

握りしめた剣を、槍を、槌を振り下ろしてくる。僕は急ブレーキを踏んで、

「ミミノさん、ロープを！」
「はいよ！」

ミミノさんが懐から放ったのはツタでできたロープ。僕は１０の【花魔法】を展開してロープを１０本に枝分かれさせて武器を持つ石像の腕に絡みつかせる。
だけど停められるのは４体がせいぜい。

「ほいっと」

先行していたゼリィさんは左右から振り下ろされる槍と杖をひらりとかわし、倒れた女性へと向かう。

「ぬおおおおお！」

僕らの後ろ、ノンさんをかばいながらダンテスさんは、盾で押しつぶそうとしてくる石像を同じく盾で弾いてかわし、槍の一撃はメイスで受け止めつつ流す。

「駈け抜けろレイジ！」
「はい！」

入口に近かったダンテスさんはノンさんとともに引き返し、僕の視線の先ではゼリィさんが倒れていた女性を引きずるように通路を抜け出すところだった。
ブチブチッ、という音が聞こえたのは僕が【花魔法】で飛ばしたロープを、石像がバカ力で引きちぎろうとしているからだろう。

「ミミノさん、失礼」

「え――わっ！？」

僕はミミノさんの身体に手を回すと、お姫様抱っこして走り出す。

【補助魔法】で身体能力をアップさせたこともあって重さは気にならない。

走り出すと、ゼリィさんがかわした槍と杖が再度振り下ろされたけれど、それを跳んでかわした。護衛時代にダンスの練習もさせられていたことがここでは役に立った。もちろん、お嬢様を抱っこしてダンスするなんてことはなかったけれど。

僕とミミノさんは奥の通路へと滑り込んだ。

19

ミミノさんの持っている治療薬の効果はすさまじかった。お腹を貫かれていた女性の傷がみるみる塞がった――らしい。らしい、というのは一応男性である僕は「後ろを見ているべな」「そうですよ坊ちゃん。まだ早いです」とミミノさん、ゼリィさんに言われて、「黄金旅団」の女性を治療するところは見ていない。

「助かり、ました……ありがとうございます……」

僕が振り返るころには、女性の身体には包帯が巻かれ終わり、服も直されてあった。青い顔で、その額には汗がびっしょりだったので僕も【回復魔法】で回復を手伝った。とはいえ流した血は戻らないので、しばらくは安静にしなければならないだろう。

「レイジくん、ちょっと」

ちょいちょいと呼ばれて僕はミミノさんとともに通路の奥へと少し離れた。

「えー、こほん。さっきのは緊急避難だったから仕方ないとしても……」

「さっきの？」

僕が首をかしげると、ミミノさんは頬を染めて言う――あ、これ怒ってるヤツ？

「わたしをっ、その、だ、抱きかかえたことだべな！」

「す、すみません。急いでたから……」
「そう。それは、別に、うん、まあ、急なことだししょうがないし、ていうか別にイヤだからとかそういうことではなくて。わたしが相手ならいいんだよ？　いつでもね？　でも、ああいうことをほいほいとそこらの女性にやったらダメなんだべな」
「……ミミノさん？」

ん？　怒ってるんだよね……？　違うの？　教えて、【森羅万象】さん！

血行がよくなり、心拍数が高く、体温も上がっている――やっぱり怒ってるってことかな？

「とにかくっ、わたしが言いたいのは――」

じっ、とミミノさんが僕を見つめた。

「……レイジくん、やけに手慣れてたべな？」
「そうですか？　そんなことないですよ」
「ほんとかなぁ。この４年間でなにがあったのか疑わしいなあ」
「な、なにもないですって！」

じとーっと見てくるミミノさんをどう説得しようかと思っていると、

「――坊ちゃーん、ミミノさーん、あんまし長居してる余裕はないと思いやすけどねえ」

ゼリィさんに、あのゼリィさんに正論を吐かれてしまった。

僕とミミノさんは顔を見合わせ――あ、ミミノさんはまったく納得できてない顔だ――助けた女性のところへと戻った。

彼女はゼリィさんの手を借りて上体を起こしていた。

「それでレオンはどうしたべな？」

「……トラップに引っかかってちりぢりになってしまったんです」

彼女が言うには、「黄金旅団」と彼らを雇った商会のレフ人たちは大部屋へとたどり着いた。そこはそれまでの殺風景なダンジョンとは違い、カラフルに塗られた「岩」が9つ配置されていたという。

床の中央には「神の御前である。畏怖を捧げよ」と書かれてあり、その意味がわからないまま岩を調べていると――離れた場所でレオンが、「岩に宝石が埋まってるぞ！」と叫んだ。確かによく見ると、塗られた塗料に紛れてこぶし大のガーネットが見えた。

だが彼女がそれを手にする前に、床が消えた。

落ちていく寸前、周囲を見ると、半数が岩に群がっており床に吸い込まれ、残りは部屋の中央で呆然としていたのだという。

「……私は死を覚悟しましたが、穴は違う通路につながっていて、身体を打ちつける程度のケガと、武器を紛失しただけで済みました。落ちてきたはずの穴は塞がったのか見えなくなっていましたが、その通路は迷宮の入口に近い場所だと見覚えがありましたので、まずは助けを呼ぶために戻ろうとしたんです」

「そうしたらここで、石像に襲われた、ってことだべな？」

「はい……。入ったときにはなにもなかったので油断していました」

「……妙ですね」

僕は気がついた。

「僕らは迷宮攻略4課といっしょに戻ってきましたが、そのときには石像が動いたりしなかったですよね？」

「そう言えばそうですねえ。あーしが索敵しながら戻ってきました

けど、なにか動いたような感じもなかったっすね」
「レイジくん、あそこになんか書いてあるべな」
この通路から石像の通路へとつながる場所の天井付近に、文字が書かれていた。そこはちょうど魔導ランプの明かりも届きにくいほどの距離であり、今まで気づかなかったのだ。
『独りを畏れよ』
そのものずばり、ということか。
「ここをひとりで通るとトラップが発動する……ということですね。石像が動くんでしょう。……いや、待てよ。そうか！」
「どうした、レイジくん？」
「ルルシャさんが送ったはずの連絡員ですよ！　連絡させるだけなら2人や3人ではなく、足の早い1人を送りますよね？　その人がなにも知らずにここに来たら――」
「あっ。石像が動く！」
「連絡員は、ここで石像に襲われたんです。そして彼らは……7人全員が亡くなったのでしょう」
それはつらい予想ではあった。だけれど、調べなければならない。
「……坊ちゃん。そしたら遺体はどこに？」
「どこかに隠されている、あるいは迷宮内に取り込まれているのか……調べてみる必要がありますね。その前に、まずはあなた――ええと」
「私はポリーナ。『黄金旅団』のメンバーで……」

僕らが助けた彼女は、かぶっていたフードを外した。
そこにあったのは美しい金色の髪と、ぴょんと飛び出た長い耳。

「エルフ種族の、弓使いです」

エルフは美男美女ぞろいだというけれど、ほんとうにそうだなと思った。ただ、どこか近寄りがたいような雰囲気があって、ポリーナさんは遠くから眺めているのがいいタイプの美女だなと。

僕、ミミノさん、ゼリィさん、ポリーナさんと4人いるのでトラップは発動しなかった。石像をくまなく探したけれど――ポリーナさんはびくびくしながら、上をしきりに気にしていたけど――特に変わったところは見当たらない。

「ん」

僕が石像を縛るのに使ったロープはちぎれていたけれど、そのうちの1本が石像の背後、壁際に張りついているように見えた。上のほうは魔導ランプの光が届かなくて薄暗い。

「ちょっと石像に上ってみます」
「えっ……」

ポリーナさんが「こいつ正気か？」という顔で見てきたけれど、トラップはトラップ。発動していなければただの石像だ。
まあ、そこまでダンジョンを信用していいのかっていう話もあるけどね。
僕は落ちていたロープを拾い上げて【花魔法】で伸ばし、石像の首に巻きつけた。それを伝って上っていくと、壁面の上部が引っ込

んでいるのが見えた。まるで部屋にあるロフトみたいな空間があるのだ。

奥がどれほど深いのか、見えない。四つん這いになればいけるな……「六天鉱山」の狸穴で鍛えた僕ならば。ちっともうれしくない自慢だな。

「ミミノさん！　奥があるようなので見てきます！」

「――ちょっ、レイジくん!?　無茶するんじゃないべな!?」

僕は石像から隙間に飛び移った。立つのは厳しいけど、這って進むのはまったく問題ないな。

発光するダンジョンのわずかな光を頼りに目を凝らす。

そこはわずかな傾斜になっていて、下り坂だ。すんすんと嗅ぐとやはり血のニオイがした。

「……でも血は残っていない」

ダンジョンの表面が血を吸うんだろうか。そう言えばホコリも溜まっていないから、有機物を食べるバクテリアみたいなのがいるとか……？

地面についていた手のひらを見た。なにもついてない。なんか不気味だ。

とりあえず進んでみるか……。

「――あれは」

ちょっと進むと、１０メートルほど先に行き止まりの壁が見えた。そこは崖のように下に穴が空いている。革製のバッグのようなものが落ちていた――見覚えが、ある。

迷宮攻略課の人たちが使っていた、肩掛けのバッグだ。

そう気づいたとき、ずるり、とバッグのベルトが崖の下から引っ張られるような動きをした。あの下はどうなってるんだ？　ほんのちょっとした段差になっていてそこに落ちるだけ――なんて思うほど僕は楽観主義者じゃない。

ハッとした。

ダストシュートだ。ゴミを捨てる場所なんだ。そしてダンジョンは一箇所にゴミを集めて――まさか、食事でもしているのか？

このダンジョン全体にエコシステムがあるのなら、このダンジョンそのものが生きていると考えてもおかしくない？

「――くっ」

またもずるりとバッグが動いた。

僕は両手を後ろに向けるとその場に這いつくばった。

そして手に【火魔法】を発動する――。

「行っけえええええ！」

魔法を放つという行為は考えれば考えるほど難しい。物理法則には作用と反作用があるはずだけれど魔法には適用されない。【風魔法】をジェット噴射のように使いたくとも反作用はないので、身体は前に進まないのだ。

だから天銀級冒険者のハーフエルフ、クリスタは【火魔法】を使い、身体のすぐそばで爆風を起こして推進力を得ていた。

狭い隙間が真昼のように明るくなる。

爆発とともに僕の身体が前へと突っ込んで行く――バッグに手が届く。

と思った瞬間、するりと、何者かが引っ張ったようにバッグが崖下に消えた。

「あきらめるか――っての！」

勢いづいている僕の身体は正面の壁に衝突しそうになるが、そこに右手を突いた。僕の真下には底なしの空間があって、僕くらいならば簡単に呑み込みそうだ。

あった。

バッグが。

僕は左手を伸ばし、バッグをつかむ。引っ張る。手応え――そこにいるのは誰だ？

壁から右手を離した僕の身体が宙に浮く。そのまま【火魔法】を発動する。

ダストシュート内が明るくなった。

20

魔力によって生まれた炎が照らし出したのは――黒い、ぷるんとした物体だった。それはおそらく「スライム」だとか、そんなふうに呼ばれている生き物だろう。

そいつらが――ダストシュート内にみっちりと存在し、うごめいていたのだ。

ぞわわわわっ、と僕の肌が粟立った。

バッグをつかんでいたスライムは、つかむそばから溶かしているようだった。

その向こう――はるか下のほうには、迷宮攻略課の人たちの制服や装備品の残骸が見えた。

【火魔法】が爆発し、バッグを取り込もうとしていたスライムを焼いて爆風を起こす。僕の身体が浮いて天井に叩きつけられる――くそっ、スライムに気を取られて制御に失敗した。

それでもなんとか崖のところに手を突いて、身体を這い上がらせる。ぞぞぞぞと足元から音がして、僕の足に触手を伸ばしているスライムの音が聞こえている。

「ぬおおおっ！」

僕はごろごろごろんと狭いスペースに身体を転がした。上体を起こしてダストシュートを見やると――そこは相変わらずの沈黙だった。

「……な、なんなんだよ、アレ」

こっちまで来られないのか？　とにかくどっと疲れた。

僕はバッグを戦利品として抱え、斜面を登り直して石像のところへと戻ったのだった。

僕らは一度「畏怖の迷宮」を出た。

案の定、バッグは迷宮攻略４課の連絡員が持っていたものであり――中には攻略に関する報告と、援助を求める内容が書かれた紙が入っていた。

「畏怖の迷宮」に入ってから1時間も経っていないので、エレベーターを動かしている警備員には怪訝な顔をされながら、それでも僕らと、戦利品であるバッグ、それにポリーナさんは一度ムゲさんの商会へと向かうことにした。

「黄金旅団」を雇った商会がどこにあるのかポリーナさんも知らないようだったし、彼女も少し休む必要がある。

「……アレは？」

ムゲさんの商会の前――商会と言っても大きな倉庫と、小屋みたいに小さな家があるだけなのだけれど、そこにぴかぴかに磨かれた魔導エンジンで走る自動車が停められてあった。

その黒い自動車は直線的でエッジが効いているフォルムをしていた。まるで地球にもあったジウジアーロデザインを彷彿とさせる……そんなデザインの名前を運転免許も取れなかった僕がなぜ知っているのかと言えば、芸人が司会を務める愛車紹介のテレビ番組を見たことがあったからだ。【森羅万象】のせいなのか、前世の些細なことまで思い出せるようになっている。

それはさておき、街を走るどの自動車よりも明らかに高級であるそんな車が停まっていることは、ただごとじゃない。

誰が切り出すでもなく、距離を置いて僕らが立ち止まると――助

手席のドアが開いて執事服を着たレフ人が現れた。ガッチリとした体格で、今まで見てきたレフ人の中でもダントツにデカイ。

「貴様らがこの商会主のムゲと、ムゲの雇った冒険者か？」

厳密に言えばポリーナさんが違うけれど、ダンテスさんが「そうだ」と短く答えた。

その執事は汚らしいものでも見るような顔をして、後部座席に顔を近づける。車内にカーテンが引かれているので中は見えなかったが、声はしっかり聞こえた。

「――ほんとうに会われるのですか。どう見てもあなた様が会うべきではないみすぼらしい格好ですぞ」

するとカーテンを割って紙切れが差し出されて窓ガラスに貼り付けられた。

執事が邪魔でなにが書いてあるのか見えないが、執事がそれを読んで反応する。

「――しかし、あなた様を守ることを皇帝陛下から厳命されております」

また紙切れ。

「――しかしですな。財布から金貨を出して強盗の前を歩く必要もないでしょう？」

また紙切れ――今度は、ぺしっ、と強めに窓ガラスに貼り付けられた。

「――しかしながら、あなた様がそのような結論に至ったのはルルシャの入れ知恵でしょう。それは易々とは受け入れられません……」

僕は思わずこう言っていた。

「ルルシャさんのお知り合いですか？」

執事はよりいっそう嫌悪感をあらわにして、

「……盗み聞きとは、ますますもって礼儀のなっていないヒト種族だ。殿下、引き返しましょう」

バンッ、と音がして扉が開くと――それは予想していなかったのか――執事がびくりとした。

扉の上に、紙切れが差し出され、それを受け取った執事は苦々しい顔をしつつ引き下がった。

車から降りてきたのは爽やかで鮮やかなレモン色のドレスを着た少女だった。少女を見たダンテスさんがあんぐりと口を開け、あくびをかみ殺していたゼリィさんがぎょっとするほどには――美しいエルフだった。

「こちらはエルフを統べるハイエルフの王族でおられるアナスタシア殿下でいらっしゃる。くれぐれも無礼を働くなよ」

執事がにらみつけるように言ってきたけれど、たぶん、誰も聞いていなかった。それほどまでに彼女は美しかったのだ。

「――アナスタシア様！！」

だけれどそんな驚きの空気を破った人がいた――ポリーナさんだ。

フードを外した彼女は数歩前に出るとその場に跪く。アナスタシア殿下もポリーナさんを知っていたのか、驚いたように目を見開きながら、しかし悲しそうな顔をした――。

ムゲさんの商会の倉庫に、映画に出てくるお姫様のようなエルフがいるというのはなんともアンバランスなことだった。僕らは彼女がどうして帝国にいるのかという詳しいことは知らされず、ただ「声を出せないために筆談する」ということだけを執事から教えられた――アナスタシア殿下の首には薄いグリーンのスカーフが巻かれてあった。腑に落ちない点はあったし、その下には包帯のようなものがうっすら見えたけれど、たぶん突っ込んで聞いてはいけないことなんだろう。

筆談が始まった。ポリーナさんがなにか言いたそうなことがあったけれど、アナスタシア殿下の用事のほうが先だ。

殿下はあらかじめ内容を記した紙を持ってきていてくれて――ルルシャさんが僕らに感謝していたこと。それに、僕がルルシャさんにするべき話を代わりに聞いてくださるということが書かれていた。

（この人は、信用できるのか？）

僕は正直答えが出ていなかった――持ち帰った迷宮攻略課のバッグをどうするか、という。これがルルシャさんの状況をよくするための一手になり得るだろうことはわかっていたのだけれど、ではバッグを誰に渡すべきかという問題があったのだ。

『あなたの話を聞かせてください。きっとルルシャに伝えます』

流麗な筆致で書かれていた紙を差し出したアナスタシア殿下は驚

くほど美しく――ポリーナさんは「近寄りがたい美人」とか思ったけれど、殿下はまた別格の美しさだと思った。

エヴァお嬢様も美しかったけれど――そう思うとこの世界にはびっくりするほどきれいな人がいっぱいいるんだな――お嬢様は男を惑わすタイプの美しさだ。アナスタシア殿下はすべてが完成された、「ウソみたいな」、あるいは「芸術品のような」美しさだった。

「……殿下にお話ししたいのですが、ふたりきりで話すことはできるでしょうか？」

僕は思いきったことを口にした。きっとこのバッグは殿下に渡したほうがいい。殿下ならば、ルルシャさんのために一介の冒険者である僕なんかの話を聞きに来てくれた人ならば、悪いようにはしないはずだ。

だけど、

「ふざけるなッ！　この冒険者風情が！！」

問題はこの執事だった。殿下を大切に扱っているふうには見えるのだけれど、どこか殿下をコントロールしようとしている――誰か偉い人の影がちらつくのだ。それが皇帝なのか誰なのかはわからないけど。

「お前のようなヒト種族が直接アナスタシア殿下と話ができるということだけでも類い希なる幸運であるというのに！！」

執事は激昂して、今にも殴りかかってきそうだった――いや、執事はいつだって冷静沈着じゃなきゃダメなんだが？　この国の執事教育はどうなってるの？　この人だけちょっと変なの？

頭痛をこらえるように額に手を当て、ふう、と小さく息を吐いた

殿下は片手を挙げて執事を黙らせる。

『理由を聞いても？』

「とてもプライベートな話だからです。この話は、命運をともにする僕のパーティーメンバーにも話していないことです」

僕が言うと、ダンテスさんたちがうんうんとうなずいたのは説得力があったようだ。僕が話し忘れていたことがこんなところで役に立つとは。ミミノさんにはちらっと話したけどね。

『ならば執事の目の届くところで、筆談をしましょう』

なるほど。それなら話の内容を聞かれることもなく、殿下の安全もある程度確保できると。僕はそれでいいと答えると「銀の天秤」メンバーと、ムゲさん、ポリーナさんは倉庫の入口へと向かう。殿下が執事を見ると、顔を赤く染めてぎりぎりと歯ぎしりしていたが、殿下が折れないとわかったのだろう、

「5分だけです！　そしてこのことは皇帝陛下に報告申し上げますからな！」

のっしのっしと倉庫の入口まで下がった。

全員との距離が15メートルほど空いたのを確認したところで殿下はペンと紙切れをこちらに差し出した。にっこりとした彼女からは「急ぎましょう」という意志を感じる。

僕は早速ペンを借りてこう記した。

『ルルシャさんが迷宮で定期報告を行っていたという証拠を発見しました。しかるべきところに提出してください』

アナスタシア殿下の表情が、固まった。

２０（後書き）

３章も２０話まで参りました。
いつものお願いです。ページ下部には★をつけて評価できる機能がありますので、是非こちらのご協力をお願いいたします！　作者が更新し続けるモチベーションとなる、いちばん手軽な「応援」となります！

あと私の別の作品である「学園騎士のレベルアップ！」のコミカライズが双葉社がうがうモンスターで進んでおります。ニコニコ漫画にも遅れながら公開されていますのでよろしければこちらもどうぞ～。

21

＊　レフ魔導帝国皇帝　＊

帝国皇帝が、ハイエルフ王族からの贈り物であるアナスタシアと面会するのは久しぶりのことだった。しかも、それがアナスタシアから求めたものであるとすれば初めてのことだ。

余人を介さないふたりきりの部屋は、皇帝の私室だった。老齢となった皇帝は外国の美術品を集めることが趣味となり、広い部屋の壁には掛かりきらないほどの絵が飾られ、棚には陶芸品が並んでいる。

それら美術品は、この機械と魔術の国、レフ魔導帝国において「最も必要のないもの」と言われるものではあった。

「……ルルシャの話であろうと思っていたが、まさかこんなものを持ってくるとはな」

テーブルに置かれてあったのは迷宮攻略課に支給されている肩掛けのバッグだ。そのベルト部分は溶けていたが、中身は無事。

そう、アナスタシアはこのバッグを一足飛びに皇帝のところまで持ってきたのだ。

『これでルルシャは解放されますね？』

差し出されたメモ紙に皇帝は指を乗せた――しわがれた指の爪は割れていた。

「お前にはなんの欲望もないのだと思っておった。この魔導帝国の盛衰を間近で眺め、ハイエルフとしての長い長い寿命を終えるものだとな。だが……お前にも欲望（それ）があったか」

「……」

「不満か？　物言わぬ見せ物としてここにいる生活が？」

淡々と言う皇帝の考えが読めない。質問に答える代わりに、アナスタシアはこう書いた。

『このバッグを託した少年が書いたものです』

もう1枚、メモが差し出される――それはレイジがアナスタシアへと書いたメッセージだった。

『これでダメなら他の証拠を探します。結果を教えてください』

もしもこのバッグが証拠として「足りない」と言われても。

まだ、あきらめないというのだ。彼は。

こうして皇帝に直接会うことができるアナスタシアですら「ルルシャを助けることはできないかもしれない」と思っていたのに。

「欲望」と言われればそうかもしれない。

あの少年の行動は、美術品のように扱われている――この部屋に並ぶ絵画と同列である――アナスタシアの、冷め切った心に、確かに、火を点した。

たとえそれが針の先のように小さな火であったとしても。

暗闇では千里の先からでも見える火なのだ。

「……何者だ？」

様子が変わったアナスタシアを警戒するように、皇帝がたずねる。

『ルルシャの血縁者の知人であると。それ以上は、わかりません。申し訳ありません』

「フッ。言葉を発せられぬお前に、諜報としての能力は期待しておらぬ」

皇帝は話しながら立ち上がると、アナスタシアの後ろに回った。彼女に巻かれているスカーフを取り外すと――そこには呪印の書かれた包帯が現れる。

「お前は鳥かごの鳥だえ。だがさえずることもできぬ哀れな鳥よ」

皇帝の指がその呪印の上を這うと――ボゥと青白く呪印が光を発した。

アナスタシアは瞳を閉じ、膝の上で両手を握りしめる。

「なぜルルシャの解放を望む？　エルフの森ではなにもできなんだが、このトカゲの国ならばできると思うたか？」

「……」

「お前が考えるほどにトカゲはたやすく謀れんぞ？」

皇帝はその手を離すと、自分のイスへと戻った。

「バッグは渉外局のアバに調べさせる。……徹底的にな」

「！」

「その間にルルシャが殺されることはなかろう。だが、仮に牢獄から出たとしてもルルシャに戻る場所はないぞ。崩壊した迷宮攻略４課を、あやつに任せたいと思う者はおるまいて」

皇帝の指は、1枚の紙切れを指した。

「……ルルシャの信頼する者が『畏怖の迷宮』を完全攻略し、その栄誉を無償で捧げようと思うのならばまた別だろうが」

それは――レイジの書いた紙だった。

＊　ルルシャ　＊

ルルシャの独房に面会者が現れ、てっきりそれはアナスタシアなのだろうと思っていたのだが――当てが、外れた。

面会室のイスは一般的なサイズなのだが彼が座るとまるで子供用なのかと思えるほどに小さく見える――面会者はアバだった。

面食らったルルシャが入口に立ち止まると、アバは口から水飴をなめていた棒を出して、

「チュパッ。君、君。看守くん。下がってくれたまえ」

「……しかしながらアバ殿。拘留者が暴れることもあり得るので……」

「ぼくは渉外のエキスパートだよ？　拘留者が我を忘れて怒るほどに挑発するなんてあり得ない」

「……しかしですね、これは任務で」

「ぼくだって任務でここにいるんだが？　それともなにか？　ぼくが遊びに来たように見えるのかい？　チュパッ」

水飴をなめることもきっと任務の一環なのでしょうね、とルルシャは言いかけたが、それは看守も同じ気持ちだったろう。看守は不承不承うなずくと部屋を出て行った。けして任務に忠実とは言いがたい看守ではあったけれど、金貨以外で彼を追い払う方法があることを知りルルシャは少々驚いた。

ルルシャが席に着くなりアバは切り出した。

「君の責任問題は2つ。1つは迷宮攻略の大失敗により、優秀な攻略課員を大きく損耗したこと。1つは連絡不備により著しく中央政府の不信を招き、起こりうる危険としてクーデターの可能性が指摘され、軍部が準備をするハメになったこと」

「ちょっと待ってください。1つ目は私の責任ですし、潔く認めることができます。しかし2つ目は――」

「ちゃんと連絡をしていた、と君は言っていたねえ。チュパッ」

次の水飴を巻き取りながらアバは言う。

「その点について再調査するよう、ぼくに命令が下った。皇帝陛下から、直接ね」

「……なんですって？」

「そう怖い顔をするものじゃあないさ。ぼくだってやりたくてやるんじゃない、命令だからさ。これでも忙しい身だからね。ああ、もちろん渉外局長に比べればキノコの原木の観察日記を書けるくらいにはヒマだがね？」

放っておけばバンバン生えてくる、レフ人の主食であるマイカ茸。生育環境を整えるのは骨が折れるが、その後は特にやることもないので「ヒマ」のたとえでそういう言い回しがされることがあった。

「私の父を揶揄したいのならばすればいいでしょう。ですが、私の

忠誠心を疑うことはあまりに無意味です。いい業者を紹介するのでキノコの原木でも眺めていてください」

つっけんどんにルルシャが言い返すと、アバは喉の奥でくつくつと笑った。

「業者については今度聞くことにしよう。ぼくはどうも、渉外の仕事に向いていないようでね」

「……はあ？」

「少なくとも君の父上がやってのけたようなことを、ぼくはできそうもない。いやはや、簡単なことだと思ったんだけどな」

「私の父を愚弄するのなら――」

「ああ、いや、そうじゃない」

アバは今度はあわてて手を振った。

「それはそうと。皇帝陛下を『再調査』にまで動かしたのはアナスタシア殿下だよ」

「やはり……そうですか」

「暗い顔をしているが、そこは喜ぶべきところでは？　あの御方がここまで気にかけるのは君くらいだ」

「私のせいで殿下が苦労されるのであれば、それは喜ぶことではないでしょう」

「殿下は苦労していないさ。苦労したのは冒険者のほうだろう――」

「冒険者？」

「おっと言い過ぎたな」

口を塞ぐ代わりに水飴のついた棒を口に突っ込んだ。

とそこへ、看守が入ってきた。

「そろそろお時間です」
「チュパッ。え、もう？　というか制限時間なんてなかったんじゃないの？」
「面会者を長居させるなという命令が下っておりますので。これも任務です」
「ああ、そう……」

アナスタシアとの面会に比べれば半分未満の時間だった。
面会時間を長引かせるのに重要なアイテムは「金貨」なのだけれど、アバはそこに気づかないらしい。
それを教えるほどルルシャと彼は仲良しではない――最後の言葉は気になっていたけれど。

「アバ副局長」

看守に促され、立ち上がりながらルルシャは言った。

「渉外にはあまり向いていないようですね？」

看守が袖の下を要求していることくらいわかれ、という意味を込めた。
ルルシャが看守に連れられ部屋を出て行くと、部屋にはひとり、アバが残された。
ぽかーんとしたアバは、つぶやいた。

「……やっぱり、向いてないか。カール前局長みたいに、種族外の女性に振り向いてもらうことすらできないんだもんなぁ……。チュパッ」

水飴をしゃぶりながらアバは、目の前の――種族外の女性が座っ

ていた空間を見つめていた。

22

ムゲさんの商会に届いた2通の書状を前に、僕らは額を突き合わせていた。

1通は、召喚状である。「ロロロ商会」と「ムゲ商会」（ムゲさんの商会名はそのものずばりなのだ）との間で、帝国金貨1，000枚の商談について証言の食い違いが生じており、その内容を質すということだった。

実質的な訴訟である。盗っ人猛々しくもロロロ商会が訴え出たのだ。彼らは示談に応じることもやぶさかではないという内容まで付記されていた。

そしてもう1通は、アナスタシア殿下から送られてきた封書である。閲覧妨害の魔術と、封を解いたことがわかる魔術の両方が掛けられた厳重なもので、僕らが受け取ったときには中を見られた形跡はなかった。

『皇帝陛下にバッグをお渡ししました。陛下は再調査を約束してくださいましたが、問題は、仮に潔白であることがわかったとしてもルルシャは元のポジションには戻れないだろうということです。多くの仲間を失い、攻略が失敗したので。ですが、あなたの働きには大いに感謝しています。今の私に自由になる資産はありませんが、あなたに報いるために私の髪を一房お送りします。魔術触媒として使用すること、あるいは売ることを許可します』

これは……厳重に隠さなければいけない内容であることは確かだった。「ハイエルフ王族の髪!?」ってミミノさんが素っ頓狂な声を上げて数分は固まって動かなかったからね。

エルフたちを率いるハイエルフは特殊な魔力を持っており、これ

は他に替えが効かないらしい。特にエルフの古い魔道具などを動かすときにハイエルフの髪は有用であるという。

また、いろいろなものを蒐集する好事家というものも存在し、彼らに売ればどれほどの値がつくのかわからないのだそうだ。そもそも相場が存在しない世界だし。

でも……僕はそのどちらも使う気になれなかった。

この世界は、現代日本に比べればはるかに装飾品や化粧品が劣っている。裏を返すと素材の良さというか、自らの肉体を誇っているようなところがある。それはそれでいい。だけど問題は——女の人にとってやっぱり「髪」というのはとてつもなく重要なものなんだ。アナスタシア殿下の、あの完璧に整った髪を切ってしまったということが僕の心に鉛のように沈んでいった。

こんなものを、望んでいたわけではないのに。

僕はただルルシャさんに会って、ヒンガ老人の話をしたかっただけなのに。

（それに……この痕跡）

もうひとつ気になっていた。アナスタシア殿下はこの紙に書かれた内容の一番最後に、ペンを置いたけれど離したような——なにか書こうとして止めたような跡があったのだ。

アナスタシア殿下はふだんから筆談をしているので、とても字が上手だ。そこまでの内容も何の淀みもなくすらすらと書かれてあったのに、最後の最後で書き損じ？　と思ったのだ。

「——それで、ムゲさんはどうする？」

ダンテスさんが切り出した。

僕らは相変わらず商会の倉庫に集まっていて、ピッチャーから冷水を注いで回って飲んでいる。暑い。日陰だと結構マシなんだけど、

それでも少し動くと汗が噴き出る。

「そりゃあもう戦いますよ！『畏怖の迷宮』から持ち帰った部品を売っ払って訴訟弁護人を雇うお金も手に入りましたからね！」

シュシュッ、とムゲさんはシャドウボクシングをやるみたいにパンチを繰り出している。やる気満々だなぁ。

ムゲさんが言ったとおり「畏怖の迷宮」から持ち帰ったもののうち、猫チャンのバージョンアップに使った部品以外は売却済みとなっている。

手に入ったのは帝国金貨８枚と少々。僕らはそのうち４枚をもらった――ムゲさんは猫チャンに使ったぶんは自分で負担すると言ったんだけど、ダンテスさんがこう言ったんだ。

――猫チャンだってパーティーメンバーだろう？

だから、彼（彼女？）にも取り分はある、という意味だ。

それを聞いたムゲさんはちょっと目を潤ませてたよね。ダンテスさん、こういうときはカッコいいなぁ……お酒さえ飲まなければ……。

ともあれ、ムゲさんの手元には２００万円くらいは入ったので、１回の訴訟を戦うくらいのお金にはなるのだそうだ。まあ、訴訟に勝ったら金貨１，０００枚だし、そりゃやる気になるよねえ。

「ダンテスさんたちはどうしますんで？」

「ウチは――どうする、レイジ」

「……」

僕はアナスタシア殿下からの手紙をじっと見つめていた。

書き損じ。いや、書こうとして、書かなかったことがあるのか…

…？

（アナスタシア殿下はルルシャさんのために動いてくれたから、味方だと考えていいはずだ。でも、殿下は僕らに対して負い目を感じているふうだった……）

王族なんだからもっと横柄でいいはずなのに、あの人は思いやりをちゃんと持てるのだ。

「ムゲさん。アナスタシア殿下に会うことって――」

「いやあ、できませんよ！　できないできない！　私らだって遠目で拝見することだってほとんど無理なんですからねえ。迷宮管理局に顔を出すのとはわけが違いますよ」

「……」

殿下が封書を寄越してくれたのは直接会えないから、か。執事を怒らせて無理をした感じあったもんな。

（それじゃあ、なにを書こうとしたんだろう……。ルルシャさんの悪い未来？　いや、もうそれは書かれてあるもんな。僕らに負担があるような頼み事？　僕らにできることなんて――）

ハッ、とする。

「そうか……迷宮か」

「レイジくん？　どうしたべな？」

ミミノさんが僕の顔をのぞきこんでくるけど、僕は言うべきか言わないべきか、迷った。

（いや――ここで迷うなよ、僕。決めたじゃないか。僕は「銀の天秤」のパーティーメンバー。みんなに相談し、ちゃんと頼るって）

意を決して、口を開く。

「……アナスタシア殿下は、僕らに『畏怖の迷宮』の完全攻略を望んでいるんじゃありませんか？」

ダンテスさんが片眉を上げ、ミミノさんもビックリしたように目を見開く。

「どうしてそう思うのですか？」

ノンさんに聞かれ、

「……ルルシャさんの攻略失敗は確かに大きく、この国で生きていくにはかなり大変なことになると思います。これを帳消しにするには、迷宮攻略を成功させるしかないです。でも、彼女に攻略チームが与えられることは、もはやないでしょう。だから……」

「……代わりに私たちが攻略し、それがルルシャさんのおかげだったと証言する……ということですか？」

「はい……かなり無理筋の提案なので、アナスタシア殿下は書けなかったんだと思います」

僕が言うとみんな考え込むように黙り込んだ。

珍しいことに最初に口を開いたのは、

「坊ちゃん。そこまでやる必要があるんですかね？」

ゼリィさんだった。

「もう、十分じゃないですか。ていうか反逆罪とかいうのがあーしにはワケわかんねーっすけど、それはともかく命を救ったんでしょ？　これ以上をルルシャさんも望んでないでしょ。坊ちゃんが会って話をするのならそれで十分じゃないですか」

「それは……」

その通りだと思った。

でも、そんなふうに考えられるのはゼリィさんが各国を渡り歩けるからなんだよね……。

ルルシャさんはこの国で生まれ、育った。そんな人が、これから先ずっと多くの人たちから「アイツは仲間を多く殺した」と思われながら過ごす。それは――とんでもなく苦しい人生だ。

日本で生まれ育った僕にはわかる。「海外に行けばいいじゃん？」と言われても、そう簡単なことじゃない――いや、実際にはやってみたら意外とできたりするのだけど、この国で生きていこうと願い、この国のためを思って働いてきたルルシャさんにそれを言うのは酷なことだと思うのだ。

ただでさえルルシャさんは、レフ人と自分の違いに悩んできたのだろうし。

「おいおい、レイジもゼリィもそんなに深刻に考えるなよ。というかゼリィもそういうことが言えるんだな？」

重い沈黙を破るように、ダンテスさんがパンパンと手を叩いた。

「ちょっとちょっとダンテスの旦那、あーしはこれでも傭兵団時代は『謀略猫』と呼ばれてましてね……」

「それはともかく」

ダンテスさんがゼリィさんの発言をぶった切る。

「物事はシンプルだ。いいか、俺たちの前には未踏破の迷宮があり、しかも俺たちには入る権利がある。挑戦したいかどうか、それだけだろ？　俺たちは冒険者なんだ。その後のことは知ったことかよ」

それを聞いて――僕は目の前の霧が晴れていくように感じられた。

僕たちは冒険者。

そうだった。そんな単純なことも忘れていた。

「ダンテスさん、僕は――」

「わかった、わかった。レイジはちょっと待て。ミミノはどうだ？」

「ん～。わたしはダンジョンの魔術がちょっと気になるから調べてみたいべな」

くるくると、立てた人差し指を回しながらミミノさんが言う。

「ノンは？」

「私はもちろん行きたいです。だって、いつ教会に引っ張り戻されるかわかりませんもの。冒険はできるときにしておかなきゃ」

胸の前でパンと手を合わせて微笑んだ。

「ゼリィさんは？」

「……降参っすよ。そんなこと言われちゃぁ、挑戦しない理由なんてどこにもないでしょうに」

肩をすくめて見せるゼリィさんは、「してやられた」って顔をしながらもイヤそうではなかった。

最後にダンテスさんは、

「決まりだな？　……まあ俺も、『黄金旅団』の連中が気になっていないと言ったらウソになるんだよな」

レオンたち「黄金旅団」はいまだ迷宮内だ。食料は十分あるとポリーナさんは言っていて、彼女は救助隊を出せないか迷宮管理局に掛け合うと言っていて、ここにはいない。

ポリーナさんは血を流しすぎたこともあって数日は動けないから、ムゲさんについていてもらうのがいいかもしれない。彼女の宿泊場所の問題もあるし、腕の立つ人がいるだけでもムゲさんは安心できるだろう。

「くぅっ、猫チャンはレイジさんに託します……！」

ムゲさんは猫チャンを動かすのに必要な起動キー――カギではなくて魔石のはめ込まれたプレート――を僕に渡した。

「ありがとうございます、皆さん……！　ムゲさん、猫チャンの荷台いっぱいに戦利品詰め込んで戻ってきますから！」

「期待してますよ！　自分が行かずに戦利品が手に入るなんてボロ儲けですわ！」

ニカッとムゲさんは笑ってみせた。

「よし、そんじゃ準備して出発すっか」

「だべな～」

「そうですね」

「りょーかいっす」

ダンテスさんの言葉に、僕はうなずいた。

「はい！」

こうして僕ら「銀の天秤」の、3回目の「畏怖の迷宮」挑戦が始まった。

23

「行ったぞ、レイジ！」
「はい！」

ダンテスさんが3体のオートマトンを引きつけようとしたけれど、その横から1体が抜け出してきた。ハリネズミ型のオートマトンは「人形」と言うよりも「戦車」のようだ。
毛を逆立てて突っ込んで来るそこへ、僕は枝を投げつけ【花魔法】を放つ。「六節木」という変わった名前のこの枝は、成長させると多くのフシを持って伸びていく。
つまり、車輪に絡ませるのにうってつけと言うわけだ。
ギギギギッと車輪を床にこすりつけながらハリネズミは横倒しに倒れると、ごろごろと転がって行き、壁に針が突き刺さって停まる。腹を晒したハリネズミが、虚空へ向けて残りの車輪をカラララと回転させる。無力化一丁上がり。

「ぬおおおおッ！」

針や突進など大盾で受け止め、かわし、ダンテスさんはハリネズミの鼻っ面にメイスを振り下ろした。多少針に引っかかってもこの凶悪な鉄塊には関係ない。すべてを破壊し、ハリネズミの鼻っ柱をへし折るとやがてオートマトンはその動きを停める。

「これは無理、無理っすよ～！」
「ゼリィさん、顔を狙って！」
「無理っすわ～！」

近距離で戦うにしてもダンテスさんのように重量のある武器を持っていないゼリィさんはひょいひょいとハリネズミから逃げ回っていた。無理無理言いながら余裕はありそうなので放っておいても大丈夫そうだけれど、アレが最後の1匹なので僕は【土魔法】で礫弾を発射するとハリネズミの顔を破壊し、停める。

「ふーっ、終わったか。オートマトンは生き物じゃないからな、なかなか扱いが難しい」

ダンテスさんが息を吐いた。

「いえ、最初の一撃をダンテスさんが押さえてくれるだけでかなり楽ですよ。観察する余裕ができますし」

「そうか？　それならいいが」

僕らは3度目の「畏怖の迷宮」に取りかかっていた。ダンジョンに入ってからすでに1日が経過しているのだけれど、

「……しかし、敵が多いべな？」

オートマトンから、原動力となっている魔石を取り外しながらミミノさんが言う。

戦闘に遭遇するのは1時間に1回ほどだけれど、出現数は1体から5体で、平均すれば3体くらい。「畏怖セヨ」を言ってくるのも紛れているけれど多くは動物型だ。

「モンスターも出現するはずですけど、出てこないですね」

「そうだなぁ。なんだか他の迷宮とは趣が違う感じもするべな」

僕らが事前に読み込んでいた他の迷宮の資料は、もちろん迷宮の

仕様をすべて書いているというわけではないだろうけれど、大がかりな仕掛けやトラップ、オートマトンについては書かれてあっても「畏怖の迷宮」には当てはまらないものが多かった。

迷宮によって個性が違う、というのは大いにありそうだ。

「レイジ、全部で何体倒した？」

「そうですね……戦闘回数は１１回、合計討伐数は３５体になります」

僕が運転する猫チャンの荷台には、ムゲさんから「是非ともここはむしってきてください！」とお願いされていた、希少な部品が積まれている。魔石、可動部分の魔術、少量使用されている天銀（ミスリル）である。

オートマトンの表皮をめくると内側にミスリルが含有されている場所がある。それはパッと見ではわからないけれどエンジニアが調べればすぐに判明するし、僕には【森羅万象】があるので見分けがつく。

ムゲさんがとりあえず売却して得た利益のうち、ほとんどが魔石とミスリルだった。

「……そうか、やはり多いな」

ダンテスさんはむっつりとして黙り込んだ。

なにを考えているのか――たぶんだけど、わかる。「黄金旅団」のことだろう。これだけオートマトンとの遭遇頻度が高いとなると、ちりぢりになった彼らが個別で戦って撃破していける数はそう多くない。ポリーナさん救出から丸２日以上経っている今、何人が、レオンさんは、生き残っているのかどうか。

「剥ぎ取り終わったべな、ダンテス」

「わかった。レイジ、魔力はどうだ？」
「問題ありません」
「よし、先へ進もう」

僕らは通路を進んでいく。小部屋があるとオートマトンが出現する合図と言ってもいいくらいには通路に出てこない。狭ければ狭いで戦い方はあるのだけれど、狭いところに出てこないならそっちのほうがいい。

次にたどり着いた空間はこれまでとは趣が違った。

「……行き止まり？」

三方を壁に囲まれた大部屋だった。

「行き止まり、と言えばそうかもしれませんけど……」
「趣味悪いっすねえ」

のんびりとゼリィさんが言ったほどには、確かに「趣味が悪い」と言えそうな場所ではあった。

正面に巨大な灰色の顔。右にも顔。左にも顔。３つの顔があった——入口と同じ立体造形となっているのだ。

顔は相変わらず大きく、見上げるほど。すべて口も瞳も閉じられていたがその造形はヒト種族のそれだった。

「……なにか唇に書いてありますね」

魔導ランプを掲げたノンさんが言った。近づいていくと——ぬらりとした上唇に文字が刻まれてあった。

『畏れることなく財貨を求める者』

ただ、それだけだ。

「……」

僕らは顔を見合わせる。なんだか意味がわからないが、ポリーナさんが言うには色とりどりの岩石を調べていたら床が抜けたらしいので僕らも不用意には近寄らない。

「……皆さん、とりあえず離れずいっしょに行動するというのはどうでしょうか？」

ノンさんの提案はすんなりと受け入れられた。

左右の顔も調べてみると、同じく上唇に文字が書かれてあった。

右は、

『畏れとともに真実を求める者』

左は、

『畏れ、生を懇願する者』

とあった。

「……」

僕らは一度部屋の入口まで戻ることにした――ここにはオートマトンも出ず、トラップも、今のところはないようだったからだ。

「最後の分岐はどれくらい戻ることになるんだったか」

ダンテスさんが言ったので、ノンさんが、

「道は平坦、戦闘込みで歩いて2時間ほどですから、走れば30分も掛からないでしょう。ただ、道がそのままだという保証はありませんわね」

簡単にマッピングしている紙と、ゼンマイ式の懐中時計を出して言った。ダンジョン攻略に必需品である。ちなみにゼンマイ時計は1日経つと数分くるう程度の精度らしいけれど、それくらいは許容範囲だ。

「わかった。……それじゃ、問題はあの『顔』だな？」

「レイジくん、なんだと思う、あれ」

ミミノさんに聞かれ、

「唇にだけ濃い魔力が漂ってましたから、あそこに手を触れるとなにかが発動するんだと思います」

「なにか、ってなんだべな」

「口が開いて次の通路が開けるんじゃないですかね」

それは推測に過ぎなかったけれど、魔力の循環を見るにあの顔は動く。

「……この迷宮を作ったヤツは頭がイカれてるな」

ダンテスさんがため息を吐きながら言ったけれど、もちろんそれには大賛成だったし、なんなら最初の迷宮挑戦のときからみんな思っていたことではあった。再認識したに過ぎない。

「どれを選ぶ？」

そう、問題はそこだ。

「そりゃ金でしょう！」

いきなりテンションが上がったゼリィさん。

「『畏れ』の単語が気になるべな。それをのぞけば、やっぱり『真実』って言葉に惹かれるなぁ」

冒険者というよりどっちかというと学者気質のミミノさん。

「危険が少ないところから行くのがよろしいのでは」

安全第一のノンさん。

「見事に分かれたな。俺の意見はさておき……レイジ、お前は？」

「僕は……」

多数決になりそうな雰囲気だった。すでに答えた3人と、ダンテスさんが僕を見る。

少し迷って、答えた。

「左。『畏れ、生を懇願する者』ですかね」

24

僕が左のルートを伝えたとき、わずかに、ダンテスさんの瞳に安堵が横切ったように見えた。

……やっぱり「黄金旅団」のことが気になっているんだな。ちりぢりになった冒険者がこの部屋に来たら、間違いなく左のルートを選ぶはずだし。

「それでいいのか、レイジ？」

「はい」

最短での攻略を考えると「真実」っていうのを選ぶべきなのかもしれないけど、「迷宮攻略」イコール「真実」とは誰も言ってないんだよね。それに「財貨」の選択肢は「畏怖の迷宮」で「畏れることなく」というのは相当に怪しい気がする。

左のルート「生を懇願する」は無難な選択肢であるとも言える。

ダンテスさんはうなずくと、

「俺の意見も左だった。正面と右も気になるが、ともかく、一度左を確認してみようか」

反対意見はなかった。あ、ゼリィさんだけは眉をハの字にしていたけどね。

僕らは再度、巨大な顔の前に立った。

ダンテスさんが盾を構え、ゼリィさんが短剣を抜く。ノンさんとミミノさんは後方待機だ。

「じゃ、触りますよ」

身軽な僕かゼリィさんがタッチする役目なんだけど、僕には【森羅万象】があるので異変を察知しやすい。

ダンジョンに満ちている魔力を感じながら巨大な顔の唇へと手を伸ばす。ミミノさんの「魔力中和剤」も服んでいる。大丈夫。大丈夫なはずだ……。

文字が刻まれた表面に触れる。

……けど、なにも起きない。冷たく硬い感触があるだけだった。ぬらりとしているのに乾いているな。

じゃあ、下だろうか？

下唇に指先を触れた――瞬間。

「！？」

がばりと口が開いたのだ。

『キャハハハハハハハハハハ！』

バックステップで離れる。耳障りな甲高い笑い声が聞こえる。

「構えろ、ゼリィ！」

ダンテスさんが鋭く叫んでゼリィさんが腰を落とす。僕もダンテスさんの横で短刀を引き抜いた。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

笑い声はすぐに止んで、その後は痛いほどの静寂が訪れた。
巨大顔の口はぽっかりと開いて、人ひとりが通れるほどの通路が空いているが、先は暗くて見えない。

「……これだけ、か？」
「そのようですね……魔力的な変化はないようですし」
「ふぃ～。驚かすんだもんなあ、もう」

ゼリィさんが肩をすくめながら言うけれど、

「ゼリィ、まだ警戒を解くな」
「あいあいさー」

盾を構えたダンテスさんがそろりそろりと顔へと近づいていく。
口の中は真っ暗闇だ。

「ノン、明かりを」
「はい」

横からノンさんが魔導ランプをかざす――と、

「！？　レオン！？」

ダンテスさんが叫んだ。
口の中――10メートルほど進んだ先は行き止まりで、そこにレオンが座り込んでいたのだ。

レオンは衰弱しきっていたものの外傷はなかった。手持ちの水は昨日で切れて、およそ1日間は水すら飲めなかったようだ。

ミミノさんの【生活魔法】で水を出してそれを飲ませる。ふやかせたパンを貪るように食べると、いきなり立ち上がると走り出した――ああ、わかる、わかるよ……トイレだよね……。

このトイレという問題はかなり切実ではある。天然洞窟ではないダンジョンは、魔力が循環していることと関係しているのかしないのか、有機物が取り込まれていくためにそのあたりでトイレをしても大丈夫という特徴がある。

うん……「六天鉱山」にいたときはラルクも僕も物陰でこっそりやったよなぁ……。

この「畏怖の迷宮」もおそらくそうで、僕らは離れた通路でひっそりとやるようにしているし、たまに左右がポカッと空いているような通路もあるのでそこで済ませる。女性陣は特に大変だ。冒険者は膀胱炎との戦いだ、って以前ダンテスさんが真顔で言ってたのもわかる。

「ふ～～、マジで死ぬかと思ったぜ」

すっきりした顔でレオンが戻ってきたが、足取りはふらついている。

顔に囲まれた部屋で、どっかりと座ったレオンへミミノさんが言う。

「この貸しは大きいべな」

「あ？　俺だってお前がパーティーの金を持ち出したこと、忘れてねえぞ」

「ダンテスの石化を見捨てたレオンが言うことじゃない」

「あんときはあんときだ。大体ダンテスのほうが頼ってこなかった

――」
「もういい。止めろ、ふたりとも」
ダンテスさんは怒っているふうはまったくなく、ただただ呆れたように言った。
「レオンはそれだけ話せれば十分元気だな。ミミノもすぐに噛みつくな。もう、同じパーティーの仲間じゃないんだぞ」
「……」
「……」
ふたりは黙りこくった。
かつてパーティーを組んでいたときのことを思い出したのだろうか？
そう言えば、以前、アッヘンバッハ公爵領の領都冒険者ギルドで、訓練官のヨーゼフさんが言ってたな。ダンテスさんたちとゴブリン退治をしたって。そのときにもレオンはいたのだろうか。
「……これで貸し借りナシのチャラ、縁もゆかりもない赤の他人になりましょうってことかよ。ダンテス」
「そうは言っていない。だが、俺たちの歩む道は違ってしまったんだ。そうだろう？」
「俺は変わってねえ。変わったのはお前だ」
「そうかもしれん。石化がじわじわと身体を蝕んでいるときにはいろいろと人生について考えたものだからな……」
ダンテスさんがしんみりと言う。
僕は――ダンテスさんが言ったことを今でも覚えている。それは【森羅万象】があるから完璧に記憶している、ということではなくて、心に深く印象づけられたという意味で。

――だから俺は、ノンはもちろん、こんな旅に付き合ってくれたミミノにもできる限り尽くしたい。なにかの縁だからライキラやお前にも惜しみなく知識を与えるし、なにかあれば命を懸けても守ってやりたいと思う。……もしそうなっても気にしないで欲しい。それは、俺のワガママなんだ。生きているうちになにか、爪痕を残したいと……そう思っているだけだからな。

聞いたとき、僕はこの人が「死を覚悟しているんだ」と思った。結果として石化から救うことができたけれど、あのときのダンテスさんが日々、どんなことを考えているのか推測はできても聞くことまではできなかった。

ヨーゼフさんと飲みに行った夜も、ヨーゼフさんと飲める最後のお酒だと思っていたのだろうか。

わからない。

でも、ダンテスさんはきっと変わっていないんだと思う。石化に侵される前からずっと責任感があって、誰かを守れる人だった。

「それは――悪かったよ。俺だってお前がどうなってるか、心配したことは一度や二度じゃねえよ」

「そうなのか？　お前のことだ。てっきり俺みたいなむさ苦しいオッサンじゃなく、若い女の子をパーティーに入れて喜んでいるのかと思っていた」

「おいおい！　そりゃあ言い過ぎだろうよ！？　俺が目指してるのは冒険者としての頂点だけだっての！」

「ふっ、冗談さ。それより――ここに来るまでなにがあったか教えてくれるんだろうな？」

「それは構わないが」

レオンは苦虫をかみつぶしたような顔をした。

「聞いてもおもしれえ話じゃねえぞ。俺たちはトラップに掛かったんだ……」

それは僕らも知っている情報だったので、ダンテスさんがうなずきながら言いかける。

「ああ。色とりどりの岩――」

「――あとは裏切りだな」

裏切り……？

「ん？　ダンテス、なんでお前があのワケわからん岩のトラップを知ってんだ」

「いや、それは――その前に『裏切り』とはなんだ？」

「裏切りは裏切りだ。俺らはトラップに引っかかった。それだけならしようがねえ、マヌケってことになるが、これでも純金級（ゴールド・ランク）の冒険者だぞ。落とし穴ごときの多少のトラップくらいじゃびくともしねえよ。だけど――メンバーのひとりが、トラップに掛かった仲間たちを助けようとしている俺たちにオートマトンを連れてきたんだ」

「なんだと？」

違う。僕らが知っている話と。

「アイツは最初、ミスって通路の奥にいたオートマトンに見つかった、みたいな顔をしていたが、俺は見ていた。アイツは俺たちがトラップに掛かった後に、わざわざ通路を進んで連れてきたんだ。大体、落とし穴に落ちかけた仲間を引っ張り上げている俺たちを手伝おうともせず奥へ行くって時点でどうかしてるだろ？　その後の戦闘で数人が落とし穴に落ち、俺もそのクチだ。残りの仲間と雇い主

たちがどうなってるかはわからん」

確かに――レオンの言うことも一理ある。

性格はともかく、純金級という冒険者の中でもトップクラスの彼らが、足元に穴が空いたくらいで半壊するようなことがあるのかと。

トラップの確認だって慎重に行うはずだ。

レオンは言った。

「おかしいと思ってたんだ。パーティーに誘った当初はまったく俺たちなんて眼中になかったくせに、俺たちがレフ魔導帝国行きを決めた瞬間、『仲間に入れてくれ』と来たもんだ。だからエルフってヤツは信用ならねえ」

「……おい、レオン。裏切ったのはもしかして……」

ダンテスさんが、聞いた。

「ポリーナ、なのか？」

レオンは驚いたように眉を上げ、こう言った――なんで知ってるんだ、と。

25

エルフのポリーナさんは「黄金旅団」の中でも少々浮いた存在だった。加入して日が浅いことはもちろん、エルフの森以外ではなかなか見かけない種族でもあり、その美貌もまた特徴だった。

彼女は自身の見た目を晒してもろくなことがないことをよく知っていたので――誘拐されそうになった経験は何度もある――常にフードで顔を隠していたようだ。

「……アナスタシア殿下」

ポリーナさんは、ムゲさんの商会前で「アナスタシア様」と呼びかけ、跪いた。殿下のほうはポリーナさんを見て悲しそうな顔をしていたけど――ふたりがあらかじめ顔見知りだったことは疑いない。

僕はそれよりもルルシャさんのことで頭がいっぱいだったから、それ以上は気にもしなかったけれど。

「あぁ？　なに殿下だって？」

「アナスタシア殿下だ。ハイエルフの王族で、この帝国にいらっしゃるそうだぞ」

ダンテスさんが言うと、レオンは目を丸くする。

「なんだ？　するってーと、ポリーナにとって俺たちゃそのアナ殿下に会うための踏み台だったってワケかよ？　だからって裏切ることはねえだろうよ」

「詳しいことはわからんが、そうでもしないとアナスタシア殿下に会いに行くことも難しいとでも思ったのではないか？」

「ううむ……」
「……どーせレオンあたりがポリーナさんにちょっかい出したんだべな。それで手ひどく裏切られたんだ」
「ちっげーよバカハーフリング。俺じゃなくてポリーナにちょっかい出してたのは盾役の……ってそれはいいんだ。ともかく、ポリーナは無事で街に戻ってるってことか？」
「無事ではなかったべな。あと一歩間違ってたら彼女も死んでたな」
「マジかよ」

ミミノさんの言葉にレオンがまた驚いたようにのけぞる。いちいちオーバーリアクションな人だ。

「ムゲさんは大丈夫でしょうか」

ぽつりとノンさんが言った。

「たぶんですけど、ポリーナさんの目的がアナスタシア殿下ならムゲさんは問題ない――というかほっとかれるんじゃないですかね。どうしても必要な護衛というわけではないので、ムゲさんになにかあることはないと思います。ただ、早めに帰ったほうがいいですね」
「そうだな」

僕の言葉にダンテスさんがうなずくと、

「それじゃあ、進むか、戻るかの2択だ。進む場合は正面と、右と、どっちの顔を選ぶかという問題がある」
「財貨っすよ！」
「そりゃお前財宝だろ！」

ゼリィさんとレオンのふたりがほぼ同時に手を挙げる。いや、レ

オン氏？　いっしょについてくる気満々ですか？

「おいおい、ダンテス。お前んとこのパーティーにも話がわかるヤツがいる……」

ぽんぽんとゼリィさんの肩を叩きながらレオンが凍りついた。

「あああああああ！　お前！　バクチでイカサマやりやがった猫獣人じゃねえか！」

「はぁ～？　バクチにイカサマもへったくれもないんですけどぉ～？　勝ったあーしが強くて、負けたアンタが弱いだけでは？」

「てめっ！」

「ナハハハ」

そう言えば帝国に入る前にそんなことやってたっけ。

レオンが手を伸ばすとひらりと跳んでゼリィさんがかわしている。

ふらついてるレオンがゼリィさんを捕まえられることはないだろう。

「うるさい、レオン。ゼリィもからかうな。お前たちの意見は今回は聞かないからな」

「ちょっ、ダンテス！」

「そんなぁ！」

「……戻るという選択肢はどうだ？」

ダンテスさんに聞かれ、

「ポリーナさんがなにを考えているのかわかりませんが、ムゲさんに危険がある可能性は低いので、今は進みたい……と僕は思っています」

「わたしもそれでいいべな」

「はい。私もです」

ミミノさんとノンさんも同意してくれる。

「じゃあ、次に開けるのは……」

右の「真実」にチャレンジすることになった。

レオンを放置していくことはさすがに寝覚めが悪いので、彼もついてくることとなった。戦闘には協力するがその代わり報酬の取り分はナシ――と伝えるとめちゃくちゃブーたれたのだけれど、「じゃあひとりで帰れ」とダンテスさんに言われ、「それなら働きに応じて金をくれ！　あと『黄金旅団』を見つける手伝いをしてくれ！」と粘る粘る。

交渉が長引いても時間の無駄なので、「戦闘には協力する」、「仲間を見つけたらそっちに合流する」、「がんばったらご褒美」というふわっとした条件でまとまった。

これで後になって「ご褒美が足りない」とか言い出したら、ほんともうね、許さないよ？　ゼリィさんをけしかけてお尻の毛までむしってやる。

「それじゃ、触ります」

僕は右の顔、『畏れとともに真実を求める者』と上唇に書かれた顔の前に立った。

ダンテスさんとゼリィさんは先ほどと同じように警戒したけれど、レオンは腕組みして突っ立っていた。

彼の武器は長剣で、僕の身長ほどもある細身の剣を背負っていた。

穴に落ちても武器は絶対に手放さなかったらしい。
僕は手を伸ばし下唇に触れ、そのまま背後に跳んだ。

『……』

さっきは笑い声が聞こえたけれど、今度は――にんまりと、唇をゆがめ、目尻が下がった。相変わらず薄気味悪い顔だ。
すると、顔がずるずると壁面上をスライドしていく。上へと。そこにぽっかりと通路が現れた。

「続いているみたいです」

さっきのどん詰まりの場所とは違って、こっちは通路が奥へと続いているのが見える。

「あんな暗がりに閉じ込められるのはごめんだぜ……」

レオンはぼそっと言った。穴に落ち、オートマトンに追われたレオンはこの部屋にたどり着き、必死の思いで「左」の顔を触ったらしい。そして命からがら飛び込んだそこは、どん詰まり。それでもオートマトンの追撃はかわせた――ということらしい。
それはともかく、僕らは先へと進むことにした。
長い通路はカーブしつつゆるやかな上りの坂道となっている。

「……坊ちゃん」
「ええ。空気が変わりましたね」

これまでのひんやりとした――ここは地中なので夏だというのに涼しささえ感じられた――空気から、湿気が抜けた感じがある。それに壁面の雰囲気もおかしい。今までの、コンクリやモルタル感の

あったものから岩石をくりぬいた地形へと変わっていったのだ。それと同時にダンジョンの特徴でもある壁面の発光が消え、暗闇を、魔導ランプの明かりを頼りに進むこととなった。

風が向こうから吹いてくる。暑さを感じる風――外気が。まさか外に出るのだろうか？　こんな中途半端な場所で？

「わ……」

そこは岩をくりぬいてできた天然の踊り場のような場所だった。天井は低く、向こう側に通路が続いているが、右手は崖になっていた。

かすかな光が天から差し込んでいる。ホコリが舞っているのが光に見えた。

「なんだここは……」

巨大な空間だった。崖の下も、先も、見えない。ただ静かな大空洞がそこにはあった。

（そう言えば……こんな場所が「六天鉱山」にもあったっけ）

あのときは崖の下を見ると冒険者が戦っているのが見えたんだ。派手な魔法を使っていて、僕にはそんなもの縁はないなと思っていたのに。

「お客さんがいるようだぜ」

レオンに言われるまで気づかなかった。そいつらは踊り場側の壁面に擬態するように張りついていたのだ。

体長は2メートルほどの、黒い肌。オオサンショウウオを彷彿と

させるのだけれど、

「なんだべな、あの顔は……」

顔の部分に顔がなく、３センチほどの触手がうごめいているだけだった。

鈍重そうだが、問題はその数だ。

１００匹ほどはいるだろうか。

「坊ちゃん。崖のほうにもいますぜ」

「え」

ぞろり、と這い上がってきた触手ヤモリが崖から顔を出した。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

僕らは顔を見合わせると、

「向こうまで走れ！」

ダンテスさんの号令で反対側の通路入口目指して走り出した。

同時に、触手ヤモリが一斉に飛びかかってくる。

26

「ミミノ、ノン、奥へ！」

ダンテスさんが2人の後ろを走り、一番最後をノロノロとついていくのは猫チャンに乗っている僕だ。

ノンさんとミミノさんが次の通路へと飛び込んだ直後、触手ヤモリの最初の1匹が僕へと飛びかかってきた。

その鼻面に【火魔法】をひとつぶつけると、ギイイだかジイイだかわからない声とともに地面に落ちてじたばたした。

「うげっ、きったねぇなあ」

いつの間にかレオンも長剣を抜いており、なでるように振り抜くとヤモリの胴体は真っ二つになって転がって行く。その身体からは長い腸と、胃袋からだろうか石ころがごろりと出てきた。岩を食べてるのか？

それにしても、レオンの剣はすごい。走ってくる触手ヤモリの脳天をぷつりと突き刺すと、踊るような足取りで飛んできた1匹を斬って捨てる。

一連の流れはまるでダンスでも踊っているようで――これが純金級の強さかと僕は知った。

もちろん武器の強さもある。体内に石があろうと叩き斬ってしまう業物の長剣だ。ミスリルは含まれていないようだけれど、ただの金属ではないみたいだ。

「レイジ、急げ！」

「猫チャンはがんばってますよ！」

僕は【火魔法】をばらまきながら、まるで放火魔にでもなった気分で進んでいく。さすがに火をぶつけられると学習したのか猫チャンを遠巻きに見つめる触手ヤモリの群れ。

ダンテスさんが通路の入口に立って盾を構えたので、その横をすり抜けて僕が猫チャンとともに通路へ入っていく。

「ウオオオオオッ！」

ダンテスさんがメイスを振り下ろし、地面に叩きつける。数匹がその衝撃でひっくり返り、地響きが走って壁の触手ヤモリも落ちた。

「ダンテスさん、通路塞ぎますか？」

「奥へ進んでみて、追ってくるようなら頼む！」

「了解！」

僕が【土魔法】を使えば壁を造り出すことができるけれど、そうするとなにかあって後退するときに邪魔になる。

通路はすでに自然の洞窟からダンジョンへと戻っており、しばらく様子を見ていたけれど触手ヤモリはこっちまで追っては来なかった。

「ふー……なんなんだよありゃ。っつうかその車なんだよ。遅すぎだろ」

半笑いでレオンが言ってきたので、僕は両手に１０の火の玉を出現させた。

「お、おいおい、冗談だよ冗談！　ダンテス、このガキおっかねえぞ！」

「言っただろう？　レイジは俺より強いぞと」

僕がダンテスさんより強いかはだいぶ怪しいし、そんなことどうでもいいのだけれど、レオンにその言葉は効いたらしく僕から距離を取るように逃げていった。僕はともかく、猫チャンをバカにするなら許さん。

「壁になんか書いてありやすぜ」

先頭を進むゼリィさんが最初に気がついた。

それはまるで展覧会の絵のように、壁面にちょっとした線画と、下には文字が書かれてある。

最初の絵は背を向け合うふたりの女性……だろうか？　文字のほうは読めなかった。古代語らしいんだけど、そういうの、学んだことがないんだよな。

（……でもよくよく考えたら【森羅万象】で記憶はすべてできるんだから、古代語も解読しようと思えばできるようになるんだろうか。ムゲさんは少し読めていたし、戻ったら聞いてみよう）

そんなことを思いながら絵を見ていく。

２つ目の絵は８つの丸が等間隔に並び、それが２セットあるので１６個の丸だ。

次は扉を通り抜ける男。

次は思い悩む男。

次は９つの扉。

次は９つの扉が、開いているように見える。

最後は、最初の２人の女性が今度は向き合い、伸ばした手と手が触れ合っていた。

「ワケわからん」

ダンテスさんがきっぱり言った。そうですね。僕もワケわかんないです。

ここにいる誰もが古代語を読めないのでただ絵を流し見しただけとなってしまった。

「う〜ん……『真実』に期待してたんだけど、これじゃあどうしようもないべな」

「ミミノさん、ここの内容を写したりします？」

「うんにゃ。オートマトンの秘密とかじゃなくて、なんか歴史とかに見えるからわたしには役に立たなそうな知識だべな」

確かに。

結局、これが「唇」に書いてあった「真実」なのかはわからなかった。

それから僕らは迷宮を進んだ。レオンのぶんの食費が掛かってしまったけれどももともと1週間以上は滞在できる保存食を用意していたし、【生活魔法】の水があればさらに1週間は生き延びられるだろう。

過去の迷宮は踏破するのに最短で3日、最長でも5日程度の長さだった。

懐中時計が夜間を示したら寝る時間だ。見張りを立てるのは森と変わらず、僕らは見張りのローテーションを立てて眠っていた。

「――そうは言うが……ダンテス、俺は……」

「――お前は昔から……それで今の……」

目が覚めたのは夜半で、僕が見張りに交代する時間だった。離れた場所でダンテスさんとレオンがなにかを話しているのが聞こえる。【聴覚強化】があっても聞こえないので、かなり小さな声なのだろう。

「くぁ……ダンテスさん？」

わざとあくびをして声を掛けると、

「……交代の時間か」

「そうですよ」

するとレオンは離れていって寝転がった。

「……」

ダンテスさんとなにを話していたんだろうか。

また「黄金旅団」に戻れって？　さすがにそれはないと思うけど。

朝の時間になって僕らは探索を再開した。感情攻撃を仕掛けてくるオートマトンが出てきたのでレオンにも「魔力中和剤」を服ませる。「こんなもん持ってたのかよ！？」となんだか納得できないような顔をしていたけれど、これはズルでもなんでもなくて、分析と調合のたまものだ。

その日も多くのオートマトンを倒し、時折出現する自然発生したモンスターを倒した。

鬼火（デーモンファイア）、亡霊（レイス）といった不死（アンデッド）モンスターはノンさんの【神聖魔法】で浄化された。

僕がダストシュートで見たスライムもいた。通路を透明な粘膜で

塞いでしまっていたので【火魔法】で全部焼き尽くすと、異臭が漂ってゼリィさんが涙目になっていた。

そんなこんなで「畏怖の迷宮」を進み、トラップらしいトラップもその後は出合わないまま、夕暮れどき――僕らには時間なんて空腹以外に感じられないけれど――その大部屋へとたどり着いた。

「……敵は見当たらないっすね」

斥候として先に向かっていたゼリィさんが戻ってくる。大部屋はかなりの広さで、向こう側が暗がりに沈んで見えないほどだった。いや、うっすらと霧が漂っていて暗さを増しているのだ。【森羅万象】によればそれは毒性のないただの霧だった。

「よし、ならば行く――」

「でもちょっと待って欲しいっすね」

ダンテスさんの言葉を珍しくゼリィさんが遮った。

「？　どうしてだ？」

「トラップかどうか、あーしには判断がつかないことがありやすから、坊ちゃんを連れてふたりでもう一度見ておきたいっす」

「……全員ではダメなのか？」

ダンテスさんがゼリィさんに注意深くたずねる。ゼリィさんは人柄が人柄だから、人間的な信頼はないに等しいんだよな。

でもほんと、どういう意味だろう？　ゼリィさんがそんなことを言うなんて。

「おいおい！　まさかお前、お宝を見つけてそのガキとふたりで独り占めしようって魂胆じゃねーだろーな！」

「レオン、お前は黙っていろ」
「黙ってられるかよ。こいつはバクチでイカサマして俺をハメたことがあるんだぞ」
「バクチと迷宮探索じゃ違うっつーの、そんなこともわかんないからアンタはバクチで負けるんすよ」
「なにを!?」
「止めろ、ふたりとも」

ゼリィさんもゼリィさんで煽り返すものだから、ダンテスさんが間に入った。

「……レイジはどうする」

困ったダンテスさんが僕に聞いてくる。
僕はゼリィさんの真意を探ろうとして彼女の顔を見やった――「？　なんですか坊ちゃん？　やだなぁ、あーしの身体はもう坊ちゃんのものじゃないですかぁ」とか気持ち悪いことを言ってくる。この猫獣人は邪悪認定。

「とりあえず様子を見るだけ様子を見てきますよ。どのみち僕の目的は財宝でもなんでもなくて、ここを踏破することなんで」
「ふーむ……それもそうだな。じゃあ、ふたりで見てきてくれ」
「おいダンテス！」

レオンが吠えていたけれど、その間に僕は猫チャンから降りてミミノさんに託し――猫チャンに乗りたがっていたミミノさんは嬉々として乗り込んだ――ゼリィさんについて前に進む。
霧の中を進んでいくと向こうで大声を上げているはずのレオンの声まで聞こえなくなってきた。おかしいな……この霧はただの霧のはずなんだけど。魔力の循環で音を消すような仕掛けでもできてい

るんだろうか。

「坊ちゃん」

横を歩くゼリィさんが言葉を発したのは聞こえた。

「なんですか？」

「レオンは信用できないですぜ」

立ち止まった僕を、ゼリィさんが見下ろす。僕がいかに成長期で背が伸びたのだとしても、ゼリィさんのほうがまだまだ高い。

「わかっていますよ」

僕は答えた。

「レオンはウソを吐いていますからね」

27

レオンが吐いたウソは簡単なものだった。ポリーナさんが「通路を進んでオートマトンを連れてきた」というその1点だ。

まずオートマトンは通路に発生しない。通路から現れる場合もあるけれど、それは部屋に入り、ある一定の場所まで行くと勝手に向こうから出てくるのだ。僕の勘違いもあるかもしれないと思って今日1日は黙っていたけれど例外はなかった。

だからレオンが言ったように通路にいたオートマトンを連れてきたというのはおかしいのだ。

「ほぉ～。あーしはただ単に、あの男がうさんくせーなーって思ってただけでしたけど」

「まあ、それも必要な直感かもしれませんけどね。僕が最初に思ったのはみんながトラップに掛かったのを見て、よし、敵を連れてこよう！　なんて思わないだろうなってところでした。もし思ったとしても部屋を抜け出して通路に入ってまで連れてくるかって話で」

「そう言われれば確かに……。でもポリーナさんがパーティーを全滅させたいと思ったらやるんじゃないですか？」

「そこそこの距離を進んで、通路の先の次の部屋まで行かなきゃオートマトンはいないんですよ。いるかどうかもわからないし。そんな時間掛けてたら、『黄金旅団』も落とし穴から復帰してるでしょう。第一、ポリーナさんがパーティーを全滅させるという動機がないですよね。殺したいほど憎んでたって感じの人でもなかったし」

「じゃ、レオンはなんでウソを？」

「それは……」

パッと思いつく可能性は2つ。

１つ目は単純に、「落とし穴に落ちた」ということが恥ずかしくてそう言ったか。でもそれだと、ポリーナさんを槍玉に挙げる意味がない。後でポリーナさんに遭遇したときに要らぬ摩擦を生むことになる。

２つ目は同情を惹こうとしたか。ポリーナさんの言葉が正しければ半数程度は落とし穴に落ちたので、レオンもそれに含まれる。「裏切られた。助けて欲しい」と言えばケンカした「銀の天秤」も同情して保護してくれると思った。

なんだか２つ目のほうがしっくりくるな。

でも……。

「坊ちゃん？」

「あ、いえ、なんでもないです。わからないですね。あとで本人に聞いてみましょうか？」

「ナハハハ。『お前のウソはバレバレだ』って言ったらレオンはびっくりするでしょうね～」

「……」

僕は２つ目の可能性を考えつつ、なにか違うような気もしていたけれど、それはわからなかった。

「坊ちゃん、見て欲しいのはこの先です」

ゼリィさんはレオンのことを話すとすっきりしたのか、先を進み始めた。

魔導ランプの明かりも霧に遮られていたけれど、向こう側の壁が見えてきた――壁、確かに、壁だ。

「なっ……」

僕は唖然とした。
これは、ゼリィさんが判断に困るのもわかる。
目の前にそびえ立つ、高さがわからないほどの壁。
光が照らしだしたそこにあったのは――数十という、「人の顔」だった。
苦しみ、嘆き、悲しみ、絶叫するような人の顔が並んでいる。まるで生きているかのような色をしていて、【森羅万象】がなければそこに本物の人が埋まっているのだと思ったに違いない。
顔はあまりにもリアルだった。
そこにある顔はレフ人が多かったけれど、それだけではなかった。

「『黄金旅団』の人たち……」

ちらりと見ただけでも僕は覚えている。
5人のヒト種族の顔は確かに「黄金旅団」のメンバーだった。泣いている女性、苦悶にうめく男性、畏れるように顔をゆがめる男性、観念して目を閉じる女性、憎しみの目を向ける女性――。

「こんなん、いきなり見たら卒倒しますよねぇ」

どくん、どくん、どくん、と心臓が早鐘を打つ。
なんだ。この強烈な違和感は。なんなんだ。
僕はなにを見落としているんだ。

「……坊ちゃん？　どうしました？」

そのヒト種族の顔の近くには、一度は見たことのあるレフ人の顔があった。他種族だからみんな似ているように感じられるけれど、この顔は見たことがある気がした。
そうだ――この人は、「黄金旅団」を雇ったレフ人だ。

「坊ちゃん。顔、真っ青っすよ！？」

なんでだ？　なんでここに全員いる？

ポリーナさんとレオンをのぞく全員がここにいる。

これは一種のトラップなのかもしれない。いや、トラップの一環であることは間違いないだろう。だけど顔を模写するような真似ができるならレオンやポリーナさん、それに僕らの顔があったっておかしくないではないか。

（そう、か……）

僕は気がついた。

この顔が意味するところに。

「――なんだこりゃあ！？」

そのとき背後から声が聞こえた――ここにいるはずのない、レオンの声だった。

「おい、レオン！　お前どういうつもりだ。ここは偵察をゼリィとレイジに任せる、と……」

ぽかんとするダンテスさんはレオンを追ってきたに違いない。どうせダンテスさんが止めるのも構わず抜け駆けしてきたのだ。

だけどさすがのレオンも、ダンテスさんも、この壁には――そう、この「畏怖の壁」には思わず足を止めた。

「ダンテスさん、この壁は――」

僕は言いかけて、気がついた。
レオンの顔が驚きから一転し、こわばり、殺気立ったのだ。
彼は、長剣を抜くと、

「――ダンテスさん、避けて！」

横にいたダンテスさんの腹部に剣を突き刺した。

「レ、レオン……」
「――まさかこんなところでバレるとはな」

あ――。
そうだ、レオンにはわかったのだ。
ここにある顔は、すべてが死に顔（デスマスク）なのだと。
なぜなら、「黄金旅団」のメンバー、商会の雇い主が死んだところを彼は目撃したから。
いや――たぶん、彼が殺したのだ。

「レオンンンンンンン！！」

とっさに身を引いたダンテスさんから剣が抜かれ、血が噴き出す。
レオンは長剣を上段から斬りつけたが、体勢を崩しつつもダンテスさんは大盾でその一撃を受ける。
火花が散って甲高い音が響き渡る。

「――ちょっ、敵か！？」
「お父さん！？」

最悪のタイミングだ。ミミノさんとノンさんが霧の向こうから現れる。猫チャンの速度に合わせたせいでふたりは遅れてきたのだろ

う。

僕はいつでも魔法を飛ばせるように両手に【火魔法】を展開していたけれど、ダンテスさんとの距離が近すぎて撃てなかった。

レオンの口元がいびつに歪むと、彼はノンさんへと走りその背後から片手でノンさんの首を締め上げる。突然のことにノンさんは反応できない。

「っ！？　な、なん……」

「お前ら動くなよ！　そこのガキ！　お前は魔法を消せ！」

「……」

両手の魔法を解除すると、レオンは小さく安堵の息を吐いたようだった。

「レオン！？　どういうことだべな！　ダンテスを斬ったのはお前か！！」

「動くんじゃねえ、ミミノ！　治療のために動いたら、ダンテスの娘の首と胴体がオサラバすることになるぜ！」

「お、お、お前はッ！　わたしたちになんの恨みが！？」

「恨みなんかはねえが、アレが出てきちゃどうしようもねえ」

ミミノさんはレオンの視線を追い、壁を見やり――そこに「黄金旅団」のメンバーを見つけて凍りつく。

「ジャ、ジャスティン、シンシア、それにマーフィーの顔が……！？」

その3人はきっとかつてミミノさん、ダンテスさんとパーティーを組んでいたメンバーなのだろう。

「3人は……いや、『黄金旅団』は俺とポリーナを残して全員死んだ」

28

レオンは僕らを油断なく見回しながら言う。

「ポリーナはトラップに引っかかったあと、いなくなっちまったが、他のメンバーとは後で合流できた……だけどそんときにゃ、ジャスティンはすでに死んでいた。そこをオートマトンに襲われ、壊滅状態になった」

「それならそうと……言えばよかっただろうが……！　ぐっ」

「ダンテス！」

「おっとミミノ、お前も動くんじゃねえよ」

ダンテスさんはお腹を押さえたまま動けない状態だった。傷が心配だ。早く治してあげたい。

だけどレオンはノンさんを盾にして一分の隙もない。

あれだけ密着されると魔法での遠距離攻撃ができない……高レベルの【魔力操作】があったとしても精密射撃のような魔法は使えないのだ。

「問題はその後さ。俺は――自分の命を守ることだけが精一杯だった。大なり小なり傷だらけだった仲間を置いて、さらには雇い主である商会の連中をオートマトンに押しつけて逃げた」

「なに！？」

「お前は、また仲間を見捨てたの！？」

「うるせえ！　あの状況で！　心を恐怖に支配されて！　まともに戦えるワケがねえだろうが！」

そうか――トラップによるパーティー分断と負傷、そこにオート

マトンが感情攻撃を仕掛けてきたのなら、いくら熟練の冒険者とはいってもひとたまりもなかっただろう。

「猫獣人。それにガキも、お前らは先にここに来て気づいたんだろ――ここにある顔は、この迷宮で死んだヤツらだってことを」

「……」

レオンが死を看取り、あるいは死んだだろうと推測した人たちの顔がここにあるということは、やはり――この壁の顔はデスマスクなのだ。

なんという趣味の悪さだ。

胸が、ムカムカする。

「お前らはいいよなあ？　偉大なる薬師様のハーフリングがオートマトンの攻撃を無効化してくれたんだからよッ！　こんな便利なもん隠しもってやがって！」

「うっ……」

締め上げられたノンさんが苦しそうな声を上げると、

「ノンにひどいことするな！」

「うるせえミミノ！　おい、ダンテス、なんだよその目は。お前が俺の誘いを受けて『黄金旅団』に戻ってりゃこうはならなかったかもしんねーんだぞ！？　俺がべらべらとこっちの事情をここで話してやったのは、お前にも責任を感じさせたかったからだよ！　お前が！『硬銀の大盾』ダンテスがいりゃあ、オートマトンだって蹴散らせた！」

「……」

口から一筋の血を流し、ダンテスさんはレオンをにらみつけてい

る。その額には汗がびっしょりで、傷がかなり重いことを感じさせる。

（――坊ちゃん、どうしやす）

小声で、僕にしか聞こえない音量でゼリィさんが聞いてくる。

（レオンは錯乱してる。とりあえず話に乗るフリをして隙をうかがう――）

僕がそれに答えていると、

「おい、ガキ！　猫獣人！　てめえらは壁に向かって歩け！」

「……なんだって？」

「なんだって、だと？　ああ、これだからバカガキの相手はイヤなんだ。わからないのか。ここは明らかにダンジョンの最奥だろ？　だが、『九情の迷宮』の最奥には特大のトラップがある――それを作動させろ」

確かに資料には、「九情の迷宮」のいちばん最後にはその迷宮内で最も大がかりなトラップが仕掛けられてあるとあった。

それを乗り越えさえすれば迷宮の踏破となる――その場所になにがあるのかは書かれていなかったが、きっとなんらかの魔道具があるに違いないと僕は思っていた。

レオンはここが、最後の関門なのだと考えている。

そして乗り越えるための人柱として僕らを使おうとしているんだ。

「……ダメ、です……」

ノンさんが声を上げようとしたが、レオンは締め上げをキツくす

る。レオンの腕にしがみつき、ぶら下がるようになっているノンさんの顔が赤さを通り越して黒みが出てきた。

「行くな、レイジ……ゼリィ……お前らは……」

ダンテスさんもまた気を失ってその場に倒れた。見れば地面におびただしい量の血が流れている。

「バカめ、ダンテス……俺は昨晩言ったろうが。俺をパーティーに入れろってよ。それを袖にしたのはお前だぜ」

ああ、レオンは――この恥知らずの男は、ダンテスさんにそんな話を持ちかけていたのか。自分がやったことは隠し、ダンテスさんの懐に入ってしまえば守ってもらえると思ったに違いない。

だけどダンテスさんは受け入れなかった。

ダンテスさんなら「まずはパーティーメンバーを探そう」と言うはずだ。仲間がちりぢりという状態でパーティーを移る「不義理」を許すはずがない。

「レオン」

頭にくる。腹が立つ。ムカつく。いろんな言葉があるけれど――僕の心は凪いだ海のように静かだった。

怒りはあるのだけれど、僕は悲しかったのだ。

「お前の言うとおり、僕とゼリィさんがあの壁を調べる。だから先にミミノさんにダンテスさんの傷の治療をさせてくれ。この出血量は命に関わる」

こんな男のためにダンテスさんは石化毒を受けたのだ。そして死

に場所を探して旅をして――それにミミノさんが付き合い、ノンさんもつらい気持ちを押し殺して付き従った。
こんな男のために。
だからこそライキラさんや僕が「銀の天秤」に拾われる結果につながったとも言えるのだから――運命ってのは、複雑で、残酷で、悲しい。

「……」

レオンが猜疑心に満ちた瞳でこちらを見つめる。一度、他人を裏切った人間はすべてを疑ってしまうようになるのか。
僕はレオンの返事なんて待つつもりはなかった。

「ミミノさん、お願いします。――ゼリィさん、行きましょう」
「わ、わかったべな」
「へーい」

言うだけ言ってレオンに背を向けると、「チッ、生意気なガキだ」と吐き捨てるような声が聞こえてきた。
ゼリィさんが僕の横に並んでくる。

「どーするんすか、坊ちゃん。ここがマジもんの最後なら、すごいトラップがあるんでしょ？　あーし、トラップがあるとわかってるところに突っ込むのなんてイヤですよ」
「大丈夫ですよ」
「ほんとにぃ……？」
「大丈夫大丈夫」
「坊ちゃん、なんの根拠もないっすね！？」

失礼な。「大丈夫」とは1ミリも思ってないけど薄っぺらな根拠

はあるんだぞ。
　これまで踏破された迷宮は「溺愛」「崇拝」「悲嘆」の3種類だ。
その最後のトラップについては細かく描写されている。
「溺愛の迷宮」の最終トラップは、ただ一言こう書かれてあった。

――愛を示せ。

と。
　明らかにわかりやすく一段高い場所が用意されてあり、そこでなにかしろということだったのだ。
　様々な試みがなされた。求愛する、愛を囁く、抱きしめる、キスをする……そのたびに「判定」が行われた。段がすさまじい勢いで降下して挑戦者は帰らぬ人となったり、天井から針が降ってきたり。失敗はすなわち「死」だった。ぎりぎりでかわした人もいたっぽいけど、明らかに迷宮は殺しに来ていた。
　最終的な正解は、簡単だ。愛の原始的な形である「性行為（セックス）」である。しかも当時、迷宮攻略チームは男のレフ人しかいなかったので……つまり、その、ＢＬ案件である。レフ人のＢＬ案件とか業が深すぎる（一部の帝国女子にウケたらしいけど）。

「崇拝の迷宮」の最終トラップは「9体の神像」だった。
　この世界の神はいろんな信仰があるのだけれど、ノンさんが入職した教会の信じる「神」は人格を与えられておらず、過去の聖人像は飾られてあるものの神様は抽象的な存在となっている。
　だけど「崇拝の迷宮」は、ヒト種族を始め、レフ人、エルフ、ドワーフ、獣人……と9種の種族の像が立っていた。
　この像に額（ぬか）ずくことが「答え」だったらしい。問題は崇拝する順番で、順番を間違えると額ずいた頭に槍や岩石が降ってくるという凶悪仕様だった。多くの犠牲者を出しながら、1つずつパターンを試し、正解に至った。

「悲嘆の迷宮」は円形の部屋の中央に、固定の杯のようなものが置かれてあった。杯の模写も付属していたけれど、見た目は優勝カップのような形をしていて、側面には嘆き悲しむ人の顔が彫られていた。

「杯になにかを満たすのか」ということはすぐにピンとくるだろう。そして「悲嘆」なのだから答えは「涙」なのだろうとも。

問題は杯の大きさはワイン樽が入るほどで、さらには中央に小さな穴が空いていて、涙をこぼし入れるたびにそこに吸われていったということだ。

塩水を入れてみたら、部屋が密閉され、足元から水が入ってきて溺死させられたとか。

かといってワイン樽を満たすほどの涙を流すには、何千人とそこにやってきて泣く必要がある。迷宮内の移動は危険を伴うために、さすがにそれは最終手段だった。

解決方法はわりと単純で、まず国内で涙を「回収」して、容器に移した。それを集めて迷宮内に運び入れ、注いだのだという。それこそ何千人というレフ人の涙が注がれると異様なニオイが漂ったけれど、踏破の道は開かれた。

（つまり、もし仮にここが「畏怖の迷宮」の最奥ならば「畏怖」を示すことで道が開けるはずだ。でも……「畏怖」を示すってどうすればいいんだろうな）

なんらかのアクションを起こさなければトラップは発動しないので、調べるだけならとりあえず「大丈夫」のはずだった。

「――ダンテス、傷は塞がったべな！　気をしっかり持て！」

後ろではミミノさんがダンテスさんの治療を始めたのが聞こえる。

だけどその向こうにいるであろうレオンの声はほとんど聞こえなかった。

そうか、ここは霧が発生してて音が聞こえにくいんだよな……。

（ん……霧？）

そのとき僕は、得体の知れない寒気に襲われた。

なぜこの部屋に霧が発生しているのか。その霧はただの霧なのに視界だけでなく音も遮断しているのか。

ハッとして振り返る。

レオンの姿はうっすらとしか見えない。

さらに後ろともなれば闇に沈んでいるのだ――その闇に。

巨大な影が音もなく現れた。

28（後書き）

この物語を読んで「面白い」「続きが気になる」と思われましたら、是非ブックマークと評価をお願いします。
ブックマークと評価は作者が書き続ける原動力となります。
本作に限らず、「ブックマークはしないかな～」と思われましても、是非評価は入れていただければ幸いです。みんなで広げよう評価の輪（古い）。

29

それは見上げるほどに巨大な戦車だった。６つの車輪を持って動き、台座の上には兵器がある。ただしその姿は僕の知る「仏像」を思わせた。

金色の三面六臂。

正面にレフ人の顔、右にヒト種族の顔、左にドワーフの顔だろうか。

腕の１本ずつもすべて違う。ほっそりした腕、毛むくじゃらの腕、太い腕、羽を纏った腕、虫のような腕、爪の長い腕。そのそれぞれが剣、盾、杖、斧、槍、槌を持っている。

胴体部分は布を模した金属で覆われ、胸にはいくつかの宝玉らしきものが確認できる。

その巨体自体がとてつもない質量を持つ兵器となりうるというのに、そこに武器まで付随しているのだ。

まさに、「止められぬ巨獣（ジャガーノート）」と言えるだろう。

「ノンさん！　後ろ！！」

僕は声の限り叫んだけれど、その声は届かない――霧が邪魔をして。レオンは僕が振り返り、怒鳴ったことでこちらを警戒し、長剣の切っ先をこちらに向けた。

あのバカ！　どうしてすぐ後ろに迫ってるのに気づかないんだよ！？

僕は、パッと見ではわからない【風魔法】を両手に１ずつ展開して放つ。ゴウッと風を切って霧を散らす――「後ろだ！」と僕が叫ぶと、レオンではなくミミノさんが気がついた。

「レオン、敵だべな！」
「あ――？」

すでにジャガーノートは武器を振りかぶっていた。
レオンはそれを呆けた顔で見上げている。こんなところに敵がいるとはひとつも思わなかったかのように。
剣は――それを剣と呼んでいいのかためらわれるほどに巨大な金属塊は、レオンを、彼が拘束するノンさんを切り裂く。

「あ……」

その瞬間、真横から黒い影が飛んできてふたりもろとも突き飛ばした。
誰もいない空間に振り下ろされた剣は地面を割って、数十センチめり込んだ。

「ゼリィさん！」

僕ですら気づかなかった。ゼリィさんは異常を感知してすでに向こうに戻っていたんだ。
すごい。すごい！　今回のことで僕の中でゼリィさんの株が爆上がりだよ！
だけど助けてもらったというのに、レオンはゼリィさんを蹴飛ばして起き上がる。

「てめっ、なにしやがる！」
「いっだぁ～～～！？　それはこっちのセリフだっつーの！　あーしだってお前なんぞ切り裂かれて死ねって思ってたけどノンさんがいたから助けたんだよ！　ノンさん！　ノンさーん！」
「う……」

強い力で絞められていたせいだろう、ノンさんは失神寸前だ。

「ゼリィさん！　離れて！」

「りょーかいっす！」

僕は走り出し、【火魔法】と【風魔法】を組み合わせた「火炎嵐（フレイムトルネード）」を放つが、まだ距離があったことと、ジャガーノートが手にした盾であっけなく火炎は散らされた。

だけどそれで十分だ。レオンの手から離れたノンさんを抱きかかえてゼリィさんは走り出したし、すでにミミノさんも猫チャンの荷台に載っていたあれやこれやを全部出して代わりにダンテスさんを載せて動き出している。

そしてジャガーノートの注意はこちらへと向いた。

キリキリキリと音がして首が回転している。ヒト種族の顔が――憤怒の形相がこちらへと向いた。

（さて、と……どうしよ）

これだけの巨大な敵を相手にしたのはウロボロス以来だなと思う。あのときはひとりでは結局やりきれず、ダンテスさんたちが助けてくれたからなんとかなった。

今はダンテスさんたちは、動けない。

レオンの手助けも望めないだろう。むしろ邪魔さえしてくれなければ御の字だ。

「！！」

ゆらりとジャガーノートの上体が揺れたと思うと、ギャリギャリギャリと車輪が地面を噛んで巨大な質量がこちらに迫ってくる。

「く、そっ！」

横に跳んだけれど間に合わず、【火魔法】の爆風を使ってブーストをかける。ただこの緊急脱出策は安全性に欠けるんだ。僕の身体は空中でバランスを崩し、地面に叩きつけられて転がる。

だけど、あのジャガーノートとガチンコファイトするよりははるかにマシだ。ジャガーノートは「顔」の並ぶ壁面に激突する。いくつもの「顔」が吹っ飛び、壁が崩れたけれど、ジャガーノート自身は砂山を崩したほどの抵抗すら感じずバックして出てくる。

マジかー……あんなのどうすりゃいいんだよ。

僕は打ち身になってそうな右肩に【回復魔法】を使いながら立ち上がる。【火魔法】を遠距離から何発も撃ち込みながら霧の中へと逃げる――だけど、

「くっ」

ジャガーノートは盾を掲げ、一直線に僕へと突っ込んで来る。【火魔法】の軌道を曲げて追尾ミサイルのように撃ち込んでいるというのに、霧の中でもこちらが見えるように一直線だ。

だけど円を描きながら走っていたので今度は【火魔法】ブーストで飛んで逃げる必要はなかった。

次は【土魔法】で足元を崩してみるが、そんなもののともせずにジャガーノートは乗り越えてくる。

（どうする、どうする。【花魔法】でツタ？　いや、そんなのじゃ止まらない。駆動部になにか詰まらせるとか……いや、車輪の向こうはガッチリ鋼板でガードされてる）

それなら――と、僕は【雷魔法】を放ってみた。

これはあまり使いたくなかったんだけど。

「ッ！」

僕の右手が青白く光り、電撃がジャガーノートへと飛んでいく。
避雷針のように槍へと吸い込まれていく――が、胴体の中央にある宝玉がチカチカと光ってそれをすべて吸い込んでしまった。

「くっそー……やっぱ対策済みか」

【雷魔法】の欠点は2つある。1つは、雷の飛んでいく方向をほとんど制御できないことだ。ただそれは今回、敵が巨大な金属なので問題はなかった。
もう1つの欠点は――術者にも電撃が返ってくるということ。強い電撃であればあるほど返ってくる威力は高く、僕の腕もあちこちが火傷していた。

（魔法は吸い込まれるって考えたほうがいいな……）

鬼ごっこを再開し、【回復魔法】で治療しながら僕は再度考え直す。
こちらの体力も、魔力も有限だ。どうにかしてケリをつけなければこちらがバテる。いや、先に退路を確保してもらったほうが……。

「――坊ちゃん！　聞こえてますか！」
「聞こえてる！」

霧の向こうでゼリィさんの声が聞こえ、僕はそちらに方向転換しながら声を発する。

「この部屋の入口が塞がってます！　ってゆーか、レオンが塞いで逃げました！！」
「！？」
「あーしが逃げ道確認しようと走ったら、先にレオンが逃げ込んでて！　そしたらなんかスイッチでもあったみたいで、上と下から扉が出てきて閉まっちゃったんですよ！」
あんの野郎……マジでろくなことしないな！
「ノンさんは！？」
「回復してます！」
「ダンテスさんの治療に回ってください！」
「坊ちゃんは！？」
僕は――僕は、
「……こいつを倒すしかないみたいですね」
僕の背後まで迫っていたジャガーノートが槍を突き出してくるのを跳んでかわすと反対側の腕にあった斧が横薙ぎに放たれ、ごろりと床面を転がって回避する。
ジャガーノートの背後を取った、という次の瞬間には車輪の左右が逆回転してその場でターンする。
巨体で素早く、小回りも利く。
厄介極まりない相手だ。
「後先考えるのは止めた。全力でぶっ壊す」

30

ここは「畏怖の迷宮」だから「畏怖」を示すことで扉が開かれるのかもしれない。

だけど気になることがあった。

このホールが迷宮の最奥だという保証はどこにもないし、さらにはオートマトンが出現して大暴れしているんだ。

もしもここが最奥で、オートマトンが課題なのだとしたらこれを破壊することには意味があるだろう。畏怖がどうのこうのは後で考えればいい。

もしもここが最奥ではないのなら、いずれにせよオートマトンをどうにかしないと先に進めない。人型っぽいオートマトンなのに感情攻撃を使ってこないのが気に掛かるけれど、そろそろミミノさんの「魔力中和剤」も切れそうなのでむしろこちらとしては都合がいい。

僕は右手に全魔力を集中させ、【火魔法】を発動させる。

白い炎がすさまじい光を放つ。

（【火魔法】は盾で塞ぎ、【雷魔法】は盾で防げず直撃したものの、魔法自体は宝玉が吸収した）

これが意味するところは、

（おそらく、宝玉の吸収量には限界があるということ）

宝玉が無尽蔵に吸収できるのなら魔法を防ぐ必要はないんだし。

それなら、盾で防ぎきれないほどの魔法をぶちこめばいい。【雷魔法】はこちらにも跳ね返ってくるし【森羅万象】で学習したのも

星2つまでだから、今僕が使える最大魔法は天銀級冒険者クリスタ＝ラ＝クリスタが使っていた【火魔法★★★★】だ。
最大火力を実戦に投入するのは初めてだ。テストで撃ってみるにしても場所を選ぶような代物だからね。
だけど、
「お前相手なら手加減は要らないっ！！」
右手を突き出し、左手で肘を支える。煌々と燃え上がる白い炎をジャガーノートへ向けて射出。
「魔法発動による反動」は本来発生しないのだけれど、「魔法を発動させること」の身体への負担はある。
これほどの魔力を込めた一撃は、僕の右手を震わせ、炎が巻き込んだ突風が湧き起こり僕の服の裾を、髪を、はためかせる。
真正面にいたジャガーノートは当然、盾でこれを防ぐ――。
ドンッ。
空間が歪み、衝撃波が僕の身体にも伝わってくる。周囲は閃光弾を撃ったように明るくなり、霧が蒸発して気流が発生し、ジャガーノート周辺の空気が渦を巻く。
白い炎は盾の着弾点を赤く染め上げると、合金を溶解させ、貫き、ジャガーノートの胴体――人間で言うヘソのあたりへと迫った。【火魔法】を魔力へと変換して、胸元の宝玉が吸い込んでいく過程が【森羅万象】を通して見える。
だけれどそれは中断させられることとなる。
魔法の高熱によるものか、あるいは魔力を吸収しきれなくなったのか、宝玉表面にぴしりとヒビが走った直後、パンッと割れて弾けた。
いよっしゃあ！

「！！」

でもジャガーノートはそこで終わらなかった。左手に持った槌を腹に叩きつけるとむりやり【火魔法】を散らしたのだ。

まだ身体は動くと言わんばかりに剣を振り回し、槍を振り下ろす。僕の魔力はほとんどカラッポで、身体は休息を求めている。

（倒しきれなかった……！）

敵の動きは明らかに鈍くなっていたけれど、それでも止まる気配がない。

あと一歩。

もう一歩で倒せそうな気がするのに……！

動け僕の身体！

「くうっ」

なんとか一撃をかわして、横に転がり、よろりと立ち上がる。すでにジャガーノートは次の行動に移っている。

（……ん？）

ジャガーノートの動きがおかしいことに僕は気がついた。盾で身体をかばいながら攻撃してくるのだけれど、そのかばい方が――変なのだ。

ふつうならば【火魔法】の直撃したところを守る。だけど、盾が守っているのは身体の中心より少し上なのだ。

宝玉を守っているのか？

いや、宝玉は割れた――ではなにを守っている？

（魔法を吸収する仕組みはなくなった。だけど、ジャガーノートはまだ動いている……もしかして）

ジャガーノートの命綱は、内燃機関。魔導エンジンがあるであろう機関部。あるいはその魔力を供給している魔石などの魔力タンクだ。

三面六臂であるところは一般的な人間とは違うけれど、それ以外の細かい可動部分、たとえば関節や指の動きは人間のそれと同じだ。

もしかしたら、魔力タンクは心臓部分にあるのでは？

だから盾が守っている？

「って、落ち着いて考える時間も――やばっ！？」

ジャガーノートの連撃をかわしていく途中だった。

足元を滑らせて僕の身体がナナメになった。

腕をついて跳ねて回避したけれど、危なかった。膝が笑い始めている。これ以上、長時間の戦闘は僕がもたない。

（心臓を攻撃するにはどうしたらいい？　短刀を投げるか？　でも外したら――この濃い霧の中じゃ探すのすら危ない。ゼリィさんに助けてもらう？　今、できそうなのはそれくらいしか……）

無意識のうちに腰の革袋に手を伸ばした僕は、ある固い手触りに気がついた。

もしや、これが使えるのでは……。

「くっ」

回避が一瞬遅れ、剣先が服の袖にかするとちぎれて飛んだ。

迷っていられるほど僕に余裕はない。
やるしかない。
敵はオートマトン。驚きや隙を作ることは難しい。それなら、直球勝負だ。

「そおれッ！！」

僕はクルヴァーン聖王国でミュール辺境伯からもらった短刀を握りしめ、投擲した。その狙いは――下腹部、【火魔法】を当てた場所だ。ジャガーノートは盾でしっかりとそれを防ぎ、短刀は弾かれて横に跳んでいった。
教科書通りというか、コンピューター的というか。「こうきたらこう対応する」というのがわかるようなはっきりとした動きだ。
つまり、盾で防御している間は他の場所が空くのだ。

かこん。

小さな音が鳴ったのはジャガーノートの口だった。金属同士がぶつかる乾いた音。取っててよかった【曲射術★★★】――まさかこんなところで役に立つとは。
ぴくり、とジャガーノートが反応したようだった。
人間を模している身体ならば、口から内燃機関につながっている可能性があると僕は思っていた。いや、つながっていなくても問題ないのだ。先ほどの【火魔法】を放ってわかったことは、ジャガーノートを構成する金属の融点はさほど高くないということ。
つまり、熱いものを――熱くなるものを放り込めば溶かして進むのではないかと思ったのだ。
僕が投げたのは魔導ショップのワゴンセールに入っていた、ハンドスピナーのようなもの。
くるくると回転するが最後には発熱して手に持てなくなるような

もの。
僕がそれを改造して、可燃物を載せれば発火するほどまで熱量を高めた――オモチャだった。……

「わっ、たっ、わ！？」

ジャガーノートは狂ったように武器を振り回してきた。ぐるんぐるんと台車上で回転して乱暴な竜巻のようにもなっている。
その口からはもうもうと黒煙が上がっており、やがて、

「！？」

カッ、と3つの口から、目から、光がほとばしると、腕が関節から取れてバラバラに落ちていき、熱暴走によって胴体上部が赤く膨れ上がる――。

「やばっ、爆発します！」

誰か――特にゼリィさん――が近くにいる可能性は少なかったけれど、僕はそう叫ぶと逃げ出した。
オレンジ色の炎とともに爆発したジャガーノートから、金属片が飛んでくるので僕は前のめりに飛んで転がって頭を抱えた。
少し離れただけだというのに霧のかかった向こう、ジャガーノートはメラメラと炎を上げて燃えていた。

「た、倒した……？」

その炎は黄色かったと思えば青くなり、次の瞬間には赤くなりと様々な色になっていた――変なガスが出てなきゃいいけど。
しぶとかったなぁ……ほんとに、こいつは。

ずずずずず……。

地響きとともに地面が揺れた。僕は次の敵かと思って警戒したけれど特に次の動きはない。

「驚かさないでよ……」

僕は疲れた身体を引きずってダンテスさんたちのいるであろう方向へ歩いていく。

短刀を拾うのも、オートマトンから使えそうなものを剥ぎ取るのも後だ。ていうかなにかまともな部分は残ってるのかな……あんなデカイ武器なんて金属の塊だから、使い道はあるだろうけど二束三文だよな……。

「あ……」

緊張の糸が切れたせいか、あるいは魔力の極端な欠乏によるものか――僕の足がぐにゃんぐにゃんとして力が入らなくなったと思うと、僕は前のめりに倒れてしまい――。

そのまま気を失った。

31

「――その器とって。スパイス足らないなら入れるべな」
「――酒があれば最高なんだが……」
「――お父さん、こんな状況でお酒飲んだら傷口にさわるでしょ」
「――じょ、冗談だって」
「――ん？　坊ちゃんが目覚めやしたね」

もわんもわんと声が聞こえていたけど、ゼリィさんの声で意識がはっきりと覚醒する。目を開けるとそこには、

「レイジくん！」

飛びついてきたミミノさんがいて――放り出された汁物の入った器をダンテスさんが器用にキャッチしていた。

「意識はあるな？　この指は何本に見える？」
「い、1本……」
「他になにか具合の悪いところは？」
「いえ、別になにも――うっ」

身体を起こすのをミミノさんの細い腕が支えてくれる。頭がくらっときて痛みが走ったけれど、

「大丈夫！？」
「あ、はい。いつもの魔力切れの症状ですね」
「よかった……」

ノンさんがやってきて僕の額に手を当ててくれる。そこがほんのり黄金色に光り、魔力がじんわりと伝わってくる――頭痛はかなり楽になった。

「な、なんですか、これ？」

「【光魔法】で魔力を分け与えることができるんです――消費魔力に対して付与魔力量が少ないので、緊急時にしか使えませんけど」

そんな魔法もあるんだな。すごいな、【光魔法】。研究したらいろいろなことができそう――と思っていると、

「レイジくん」

ミミノさんに両頬をつままれた。

「ひ、ひゃい」

「レイジくんが強いのはわかっているけど、全部ひとりで、魔法で、やろうとしちゃダメなんだべな！」

僕とジャガーノートとの戦いは霧に閉ざされて見えていなかったはずだけれど、強力な魔法を発動するときには魔力の気配が充満するのでそれでわかったのかもしれない。

「……す、すひまへん……」

「強い魔法を撃つならわたしの『魔法複製薬（デュープ・ポーション）』だってあるんだから！」

「あ」

ヤバイ。その存在をすっかり忘れてた。

ミミノさんの秘密兵器であるその薬剤は、一度構成された魔法を

魔力消費なしでもう1発撃てるというとんでもない代物だ。
　これがあれば、確かに、【火魔法】2連発でジャガーノートは沈黙させられただろう。
　忘れてた――というより、この存在は考えないようにしてたんだよな……。だってこれ、めっちゃ高価な素材を使うし、それに……。

「レイジくん。まさかとは思うけど、高価い薬だから使いたくないとか思ってるんじゃないべな？　しかもわたしのポケットマネーで作ってるからとか？」
「うっ」
「だ～～め～～～～！」
「い、いひゃひゃひゃひゃ！？」
「ミミノ、その辺にしておけ」

　ダンテスさんが止めに入ってくれたけれど、「坊ちゃんのほっぺた、そんなに伸びるんですね」とか言って笑っていたゼリィさんは許さない。

「レイジ。いくら金を積んでも命には替えられない」
「……はい」

　頬をさする。【回復魔法】を使う魔力はなかったし、この痛みはミミノさんが僕を心配して感じていた心の痛みなのだと思うと――いや、きっともっと心配してくれたに違いない――痛みをちゃんと感じなきゃと思う。

「ミミノはレイジに『魔法複製薬（デュープ・ポーション）』を渡しておいたらどうだ」
「そうするべな」

　ぽいっ、と投げられた小さなビンを、僕はあわてて受け取った。

危なっ！　これ1つで金貨が飛ぶっていうのに……。
……ミミノさん、「こんなのたいしたことない」って言いたくて、投げて見せたんだろうな。

「ミミノさん、ごめんなさい」
「……いいんだ。ほんとはわかってるから。今回のことはわたしとダンテスが悪い」
「え？」
「ミミノの言うとおりだ。これは、レオンを警戒しきれなかった俺がいちばん悪い。ノンにもつらい思いをさせた」

ダンテスさんは悲痛な表情を浮かべた。

「レオンのあの剣は出血を促す魔術が仕込まれてあって……俺はなにもできなかった。すまない、レイジ」
「違いますよ、ダンテスさん。ミミノさん。いちばん悪いのはレオンです。おふたりがそんなふうに悲しそうな顔をする必要はないんです」
「レイジ……」
「レイジくん……」
「それよりご飯の準備ができてたんですか？　めっちゃお腹空いてたんで早く食べたいです」

僕が言うと、ノンさんがふわりと笑った。

「そうですね。さ、お父さん、ミミノさん、冷めてしまう前に食べてしまいましょう」
「……わかった」
「ん……」

大鍋に穀物や野菜、干し肉や干し魚を入れて煮込んだ食事だった。ミミノさんこだわりのスパイスが効いていて、パァッと鼻に抜ける爽やかな香りと、ぴりっとくる辛さが美味しい。

ミミノさんが僕の横にちょこんと座ってご飯を食べ始めた。さっき叱られたのは僕だというのに、なんだか今はミミノさんが叱られたみたいになってて――僕よりも年下みたいにしょんぼりしていた。ダンテスさんはダンテスさんで、いつも以上にご飯を食べた。

きっと、レオンのことで思うところがあるんだろう。

でもふたりは悪くないんだから、そんなに悩まないで欲しい。そう言いたいけれど、言ったところでしようがないよな……僕が当事者なわけではないんだから。

短刀はゼリィさんが拾ってくれていて、ジャガーノートからはいくつかマシな魔術部分を抜き取れたらしい。ムゲさんが喜ぶといいな。

そうして食事が終わろうとしていたとき、僕はふと思い出した。

「そう言えばさっき、地面が揺れませんでしたか？」

「それ、それですよ坊ちゃん！　今は霧で見えませんけど、あーしが見回ってみたところ、なんと『顔』が並んでた壁に通路ができてたんです！」

やっぱりジャガーノートを倒すことがきっかけだったってことだろうか。

そそくさと食器を片づける。早くその通路とやらを確認したい気持ちに駆られるけれど、荷物と装備のチェックが先だ――けれど。

「……霧が薄まってませんか？」

もう戦闘がないせいなのか、明らかに視界が遠くまで開けていた。僕はちらりと「顔」のあった壁面を見て――ドキリとした。確か

に壁の中央に一筋の切れ目が発生していて、それは奥へ続く通路のようになっていた。
そこに誰かがいたのだ。

「レオン！？」
「えっ」

人影はするりと中へと入っていってしまったけれど、確かに誰かがいた。そして見えた後ろ姿の――黄色のマントは、「黄金旅団」のものだ。

「……あの野郎」

だいぶ血液を失ったはずのダンテスさんは、食事のおかげか、血色が戻っている。額に青筋を立てたその表情に僕は思わず「ひぇっ」と声が出てしまった。
ダンテスさんが、マジギレしてる……！　この迫力、ヤバすぎる。獰猛な獣すら突進を躊躇するほどだよ。

「ゼリィ、先行してあのバカを止めろ！！」
「りょーかい！」

しなやかなバネを活かしてゼリィさんが走り出す。だけど彼女は壁面通路の前で動けなくなったように立ち止まった。

「どうした！」
「そ、それが……」

通路まで遅れてたどり着いた僕らは、１５メートルほど先にレオンを見つけた。彼の向こう側は行き止まりになっていたけれど壁面

に何かが書いてあるようだった。
そしてレオンの目の前にはレバーのようなものが左の壁から出ている。

「ご苦労さん、ダンテス！　あんなバケモノ相手によくやるぜ！」
「レオン！！　お前！！」
「おっと動くなよ。このレバーを引けば、『ひとりだけ』『迷宮の深淵にたどり着く』んだそうだ。お前らには世話になったからな、最後にちょっとだけおしゃべりしてやろうと思った俺の優しさをフイにするんじゃねーよ」

レオンは勝ち誇ったように笑った。
あのレバーを引けばなにかが起きる、ということがあの先の壁に書いてあるのか？

（……なんだろう、これは）

僕の胸がざわざわした。
これは猛烈にヤバイという気がしたのだ。
根拠なんてない。
ただそう感じたんだ――こんな壁にデスマスクを並べたような場所の奥に、まともなものがあるわけがないって。

32（前書き）

★★★★★注意★★★★★★★

残酷な表現がありますので、苦手な方は本話を読まないようにしてくださいませ。

次話まで飛ばしても大丈夫な感じにしますので。

32

「……レオン、こっちに戻れ。そこになにが書いてあるのかは知らんが、きちんと調べなければならん」
「おいおいダンテス、バカなこと言うんじゃねえ。どうせ戻ったらその物騒な武器でバカッと俺の頭を割る気だろ？」
「そんなことはしねえよ。お前とは違う」
「ハッ！」

吐き捨てるようにレオンは、

「言うに事欠いて『お前とは違う』かよ！　お前は昔っからそうだ、説教くせーし、パーティーやみんなのためを思ってみたいなツラしてるけど、結局は後先考えずその場その場でいいカッコしたいだけだろうが！　お前の勝手な正義感で、依頼料をまけてやったことが何度あった？　忌々しいゴブリンの集団を倒したときだって、お前は勝手に『貧乏な村から金は取れんだろう』とか言って金をもらわなかった！」
「あれは……その後に、冒険者ギルドから十分な報酬をもらっただろうが」
「それは！　俺が！　この俺が！　ギルドに交渉したからだろ！　だってえのに、周りの冒険者どもはお前ばっかり褒め称える！　金をもらうことのなにが悪い？　上を目指すことのなにが悪い？　ダンテス、俺はお前が石化に掛かってほんとうによかったと思ったんだよ。お前がいなくなって俺はハッピー、お前は英雄気取りで死ねてハッピーだった」
「お、俺は……そんな」

ダンテスさんが喉に草でも絡みついてしまったかのように言葉が出てこなくなる。

さすがに、その言い草はなんだと僕は思った。

だけど僕はなにも言えなかった――なぜなら、僕は、僕の隣にいる人の気配に鳥肌が立ったからだ。

「2度も、私の父に命を救われた人の言葉とは思えませんね」

ノンさんの声はいつもどおり落ち着いていた。そしてその言葉の裏に、信じがたいほどの怒りが滲んでいる。

怖い。ふだん穏やかな人が怒っているからこそ怖い。怖くてそっちを見られない。

「英雄気取り？　だからなんです。あなたはその英雄気取りにメデューサから、そしてこの迷宮で2度も命を救われたのでしょう。そんな相手に刃を突き立てた時点で、あなたのような人間の言葉など聞くに耐えないのです」

「なっ――お前はダンテスの娘だからそんなことが言えるんだ！」

「私は教会に身を置く者。父の娘である前に、神の子です。『恩には感謝をもって報い、憎しみには慈愛をもって報いよ』と聖書にもあります。父は教会の人間ではありませんが、聖書の教えを地で行く人間です。あなたがどれほどのクソ野郎であったとしても、父はあなたに慈愛をもって接するでしょう」

「う、う……う、うるせえ！！　説教はまっぴらだと言っただろうが！」

僕はこのときレオンの異常に気がついた。

彼はこれほど追い詰められたような、狂気的な声を上げる男だったろうか？

もっと剽軽で、フワフワしていて、軽佻浮薄を絵に描いたような

男だったはずだ。

（あ――）

さっき感じたここのヤバさの正体が、わかった。

「――ミミノさん、僕らは魔力中和剤が切れています。今すぐ出せますか？」

「えっ？　あれはあっちの荷物の中に――」

ミミノさんが、先ほど僕らが食事を終え、出しっぱなしになっている荷物を指したときだった。

「レオン、一度こっちに戻れ！」

レオンがレバーにかけた手に力を込めようとしていた。

「ダンテス。お前はそこで指をくわえて見てろ。このダンジョンを踏破するのは俺だ。俺が、ここの英雄になるんだ！」

レバーが下ろされた。

僕はこのとき――どうするべきだったのか。

レオンは笑い、ダンテスさんは青白い顔をゆがめ、ノンさんはじっとレオンを見つめ、ゼリィさんは警戒し、ミミノさんはまだ向こうの荷物を指差したままで。

上から、はるか上から、まるで神がお告げでも与えるように声が振ってきた。

『――畏怖セヨ――』

心臓をわしづかみにされ、頭を上から押さえつけられたように感じられる。恐怖、というのはこういうものなのだと思い知らされる。

よろめいて地面に手を突いた。呼吸が苦しい。視界が赤く染まる。最初のオートマトンとの戦闘でやられた感情攻撃よりも、ずっとキツイ。

「!?」

僕は通路の先を見た。レオンもまた頭を抱えてうずくまっている。だけどその後ろ、なにか文字が書かれていた壁面のところにぽっかりと通路が――四つん這いならなんとか通れそうな通路が空いていたのだ。

だけどレオンは気づいていない。レオンだけでなく、僕らは全員この場から動けなかった。

ずずん、と地響きがした。

それはジャガーノートを倒したときに聞こえたそれと「同じ」だった。

つまり「同じ」ことが起きる――「顔」の埋まっている壁が、動き出す。細い通路を閉じようと、動いていく。

「レオ、ン……！　壁が動いてる！」

僕は声を振り絞る。ハッとして顔を上げたレオンは涙と鼻水でぐちゃぐちゃの顔だった。そして自分の身になにが起きようとしているのか理解した。

だというのに彼は動けなかった。まるで怯える小動物のようにイ

ヤイヤと首を横に振るだけだった。

「動け……動けって！　死ぬぞ！？」

「レオン、こっちへ来い……！」

ダンテスさんも異常に気づいて声を上げる。１メートル幅ほどあった通路は、すでに７０センチほどまで狭まっている。

「立ち上がれ！　レオン！」

「……た、助け……」

だけどレオンは動けない。こちらから動こうにも、足がすくんでしまっている――ああ、クソ、クソ、クソ！「魔力中和剤」を飲んでれば、あと少しだけ準備の時間が取れればこんなことにはならなかったのに！

「ミミノさん、ツタはありますか！？」

「！」

真っ青な顔で震えていたミミノさんは僕の言葉で気がついたらしい、腰の道具袋からツタを取り出すと通路へ向け、【花魔法】を発動する。ひゅるると伸びたツタは、レオンのすぐ手前に落ちた。

「ダ、ダンテス、引っ張るべな……！」

「レオン！」

レオンは自分の前に落ちてきたツタをすがりつくようにつかんだ。たとえ刃を向けられても、たとえ裏切られても、たとえツバを吐かれても、ダンテスさんもミミノさんもレオンを助けることに一切の躊躇はなかった。

極限の状況で人は本性を現す。
僕は、この人たちと同じパーティーでよかったと心底思う。

「行くぞ！」

通路幅はすでに５０センチほどになっている。レオンは横倒しに倒れ、必死でツタにしがみついている。
恐怖の余韻はまだ残っている。足は震え、手に力が入らない。それでも――「助ける」という意志で、恐怖を乗り越える。
僕もダンテスさんに加わってツタを引っ張る。引っ張る。引っ張る。
あと５メートル。４メートル。３メートル。２メートル。
幅は３０センチほどしかない。
でも、間に合う――顔を上げたレオンの目に希望の光が点った。

「あ――」

レオンの上から
どろりとした粘性の物体が、バケツでぶちまけられたように降ってきた。

「あああああああああああああああ！？」

ツタが切れて僕とダンテスさんは後ろにひっくり返った。
スライム――。
レオンを包み込み、服を溶かし、肌を溶かし、煙が上がる。
声が途絶える。
通路が閉じていく。
音もなく。
幅が１０センチを切るともう中は見えなくなった。

「……」

ぴたりと、通路は閉じられた。まるでそこに通路なんてなかったかのように。

少しだけはみ出たスライムはどこに隙間があるのか、すすすと壁へと吸い込まれて消えた。

33（前書き）

前話をスキップした方へのあらすじですが、レオンがトラップに掛かって死亡しました。スライムもいました。

それと「残酷な描写あり」のチェックをＯＮにしました。Ｒ１５は元々入れていたんですが、忘れてました……わりと序盤から残酷な描写がありましたね。反省。

33

重苦しい空気の中、座り込んでいた。
特にダンテスさんとミミノさんの落ち込み方が重くて、僕はなんて声を掛けていいかわからなかった。
仕方がなかった。僕らは全力を尽くした。そんなこと――言われるまでもなくわかっているだろう。
ノンさんは残っていた食器を片づけたりと黙々と作業をしていた。ゼリィさんは完全に霧の晴れたこの大広間をあちこち調べて回っている。

「……俺は、レオンが英雄になりたいと思っているのだと……アイツから見たら、俺のほうが英雄気取りだったんだな」

ぽつりと、ダンテスさんは言った。

「助けてやったのに剣をぶっ刺しやがって……でも、アイツが謝ってくれたら、誠心誠意謝るなら、許してやるかと思ってたんだ……。昨晩な、レオンはもう一度『黄金旅団』に戻ってくれと俺に言ったんだ」

そうだったのか。てっきり「銀の天秤」に入れてくれ、ということかと思ったのに……自分のところに戻れなんて、ブレないな、レオンは。

「はっきり断ったんだが、あのときからなんだかおかしいとは思ってた。……レオンは、仲間を見捨てたと言っていたが、俺は、もしかしたらレオンは、仲間を殺したんじゃねえかと思うんだ……」

「……殺した？」
「あの感情に作用するトラップで、たとえば恐怖のあまり仲間を斬ってしまった……とかな」
ない、とは言い切れない。
むしろあり得ると僕も思った。

「だから、レオンはこの壁で……ジャスティンやシンシア、マーフィーの顔を見て……焦った。自分の悪事が、露見したとでも思ったのかもしれん……」

ノンさんがコップに水を注いでダンテスさんに差し出した。ダンテスさんは黙ってそれを口に含む。すると、

「……わたっ、わたしは、レオンを許せないべな……！」

しゃっくりをするようにミミノさんが言った。

「絶対、絶対、謝られたって、許したくなかった……！　だっ、だけど、どうしてかわからないんだけど、涙が……涙が、出て……」

鼻をすすって、ぽろぽろと泣き出すミミノさん。手の甲でぬぐってもぬぐってもあふれる涙が止まらない。
ノンさんが僕を見てうなずいた――慰めろ、ということなんだろうか。こういうとき、どうしたらいいんだろう。
僕はミミノさんの横に行って、おっかなびっくり頭をなでた。年上の女性にすることじゃない気がしたんだけど、なんだかそれしか思いつかなかったんだ。

「……う、ううぅ、子ども扱いするなぁ！」

ごめんなさい、と言おうと思ったけれど、それより先にミミノさんは僕の身体に抱きついて声を上げた。

「うわぁぁあああぁぁぁぁ……ぁぁぁああああああ……」

悲しくて悲しくてしょうがないというようにミミノさんが泣いた。見ればダンテスさんの鼻も赤くなっていた。

ふたりにとってレオンは、かつての仲間で、今の敵で、生死をともにしたパーティーメンバーで……駈け出しのころにいっしょだったからこそ、彼の死に心が揺さぶられるのだろう。

少なくとも、こんなところで死んで欲しくないとふたりが思うほどには――レオンの存在は大きかったんだ。

僕はしばらくの間、ミミノさんの頭をなでていた。

ミミノさんの気持ちが落ち着くまでは。

「……恥ずかしいところ見せちゃったな」

【生活魔法（コンビニエント）】で水を出して、それで顔を洗ったミミノさんがそう言った。目を赤くしてまぶたが腫れぼったいけれど、それくらいで、もう大丈夫だとのことだった。

ダンテスさんもすでに気持ちを持ち直して、準備運動をしている。

「いえ……それじゃあ、これからどうしましょうか」

「坊ちゃん」

戻ってきたゼリィさんが「顔」の壁を指差すと――そこに新しく1つの「顔」が浮かび上がっていた。

近くで確認するまでもない、レオンの「顔」だった。

「……」

みんながそれを見上げ、無言だった。

「……僕は、絶対に『畏怖の迷宮』を踏破（クリア）したいと思いました。この悪趣味なダンジョンを乗り越えたいって」

「奇遇だな。俺もだよ」

ダンテスさんの声は落ち着いていたけれど、闘志を感じさせた。

そして、まるで僕らの再出発を待っていたかのように「顔」の壁が左右に開いて――通路が、レオンが挟まれた通路が再度現れた。

「……こりゃあ、入ってこいってことか？」

「推測でしかないんですけど、このトラップが最後のトラップなんじゃないでしょうか？」

レオンはジャガーノートが最後の関門だと思っていたみたいだけど。

「そうかもしれん。だが違うかもしれん」

「ですね。まだ先があると思っておいたほうがいいのかも」

「調べるぞ」

ダンテスさんが真っ先にそちらへと向かい、僕らはそれに続いた。

通路内は狭いのでひとりずつ入ることにする。調査は、身体が小さく動きの早い僕が適任だ。

僕の身体にツタのロープを巻きつけ、

「異常があったらお前の反応を待たずに引っ張るからな」

とダンテスさんは警戒心たっぷりに言った。

これは、冗談でも「あっ！」とか言ったらロケットのように引っ張り出されそうだな……。

ともかく中に入ってみる。

気味が悪いくらいに中はキレイで、なんの痕跡も残っていなかった。誰かがいた痕跡も。誰かが死んだ痕跡も。誰かの遺物もなにひとつ残っていなかった。

ダストシュートにいたスライムと同じなんだな……ここで罠に掛かった者を掃除するのが役目なんだ。

金属や衣服の繊維まですべて溶かしきるにはあまりに短い時間だ。ここで溶かしたと言うより、どこかへ運び去ったんだろう。奥……は突き当たりに壁がある。となると上か？

「どうした、レイジ？」

「……上に穴がありますね。そこにレオンは引っ張り上げられたんじゃないかと」

「……」

１０メートル以上高いところだ。

「なにか残ったものがないか……」

言いかけたダンテスさんは、

「いや、いい。あそこまで上がるのは相当の手間だ。ここを切り抜けることに集中しよう」

「……わかりました」

僕は注意深く奥へと進む。レバーには手を触れないようにして通り過ぎる。かこん、と小さい音が足元で鳴ってギクリとしたけれど、なにも起きなかった。

ふー……なんだよ、もう。

そして僕は壁に書かれた文章の前にやってきた。

『後ろのレバーを引き、畏怖を乗り越えればただひとり迷宮の深淵にたどり着く』

レオンが言ったそのままだった。僕は一度戻って書かれていた内容をみんなに伝えた。

それから、レバーを引いたあとに突き当たりの壁に通路ができていたことも。

つまりレバーを引いてトラップを発動させることと、奥へ進む通路を出現させることはセットなんだ。

僕らが先に進むには、レバーを引くしかない。

あるいは引き返すか……。でも、ここに至るまでの道はすべて確認済みなんだよな。戻るとなるとレオンと再会した場所まで戻ることになる。

「僕は行くべきだと思います」

「危険だべな」

「あまりに危険だと思います」

反対はミミノさんとノンさんだ。

「……」

ダンテスさんはじっと悩んでいる。

「戻って財宝を手に入れるルートに行きましょう！」

目を金貨にしているのはゼリィさんだ。

意見が割れた。

「ダンテスはどう思うべな？　これ、行くなら身軽なレイジくんってことになるけど」

ミミノさんが意見を振ると――ダンテスさんは、ようやく口を開いた。

「……レイジを危険な目に遭わせるわけにはいかない」

34

ダンテスさんの言葉に僕は驚いた。
そんな。
このトラップを攻略しなきゃ、迷宮の制覇なんてできっこないのに。

「ダンテスさん、僕は――」
「待て、まだ途中だ。……危険があるかどうかしっかり調べよう。たとえばレバーを引いてみるならここからでもできるんじゃないか？　なにも確認せず奥の通路に飛び込むよりマシだろう」
「あ」

なるほど、それはそのとおりだ……僕はこのダンジョンを進むことにばかり意識が行っていたみたいだ。

「すみません……そのとおりです」
「いや、謝る必要はないさ。俺だってレオンのことで頭が冷えたんだ。アレがなければお前と同じように考えていたかもしれん……とりあえずやってみろ、ってな」
「一度でも通路の向こうが見えたらいいんですが、暗くてよく見えませんでした。トラップ発動からの、【火魔法】がいいかもしれないですね」

僕は【森羅万象】で記憶したものは忘れないという特技があるけれど、この通路はダンジョンの明かりの影響があるはずなのに暗くなっていて、突き当たりの壁の文字すら僕の【視覚強化】でも読めないくらいだ。

「レイジ、【火魔法】はあと何発撃てる？」
「……2、3発がせいぜいですね。しかも撃ったらすっからかんになって倒れるかもしれません」
「だろうな。仕方ない、一度ここで休憩だ。仮眠をとろう。俺も身体が少々しんどい」

僕の魔力とダンテスさんの身体を休ませるために改めて休憩となった。
ゼリィさん、ミミノさん、ノンさんの女性陣が交代で見張りをするからと僕とダンテスさんはしっかり眠るように言われた。
ジャガーノートとの戦いからここまで、思っていたよりもずっと僕らは消耗していたのかもしれない――目を閉じて数秒で僕は眠りに落ちた。

★　ゼリィ・ミミノ・ノン　★

「……寝ましたか？」
「ぐっすりっすね～。坊ちゃん、なんか大人びてるから勘違いしがちですけど、これでもまだ１４歳ですから。肉体はまだ仕上がってないっす」
「そうなんだよな……いつの間にかレイジくんに頼り切りだったりしてるときもあって、反省してるべな」
「ふふ。ミミノさんをよしよししてるときのレイジくんはまだまだ頼りがいはなさそうでしたよ」
「ふえっ！？　あ、あれは、その……」
「いやいや、仲間が死んで泣くのは当然っすよ。たとえ憎しみ合った仲だとしてもねえ……」
「ゼリィさんはライキラさんと同じ傭兵団でしたものね」
「ええ。若旦那は最後にこんないいパーティーの人たちといっしょ

だったんだなって思えて、あーしもうれしかったですよ……」
「……」
「……」
「……なんかしんみりしちまいましたね。さ、おふたりも寝てください。最初はあーしが見張りやりやすから」
「うん。そうさせてもらうべな」
「ありがとうございます、ゼリィさん」

「……お礼を言いたいのは、あーしのほうっすよ。みんな人がよすぎるんだ。冒険者なのに優しすぎるんすよ……」

★

目が覚めると、魔力は8割がた戻っていた。5時間くらいは寝ていたみたいだ。
トラップの検証作業を開始する。レバーは真下に引くタイプなので、正面からロープを引っ張っても下げることができない。
だからジャガーノートの残骸を地面に置き、そこにロープを回す。

「ん……」

ジャガーノートの残骸を置こうとしたとき、かたん、とやはり床が沈み込むのを感じた。これ、もしかして重量を検知してるのかな？　ここに立たなきゃレバーを引けない仕組みなのか。
残骸だけでは重量が足らず、床面はそのままだった。試しにロープを引いてみるとレバーは動かない。残骸を増やして床を沈み込ませると――。

『――畏怖セヨ――』

声が降ってくる。「魔力中和剤」を服用しているのに胸の奥をつかまれるような恐怖に近い感覚に襲われた。みんな苦しそうに顔をしかめている。

ここのトラップ、威力が強めになってるのか。

「通路が動いたぞ！」

ダンテスさんが言ったとおり、地響きとともに通路が閉まっていく。突き当たりの壁面には低いながらも新しい通路が確かにできていた。

僕は腹ばいになり右手を突き出し【火魔法】を発動、正面に飛ばす。火の玉が地面すれすれを、狭まっていく通路をすり抜け新しい通路へと吸い込まれていく。

「！」

数メートル先で通路の四角い枠が消えた。広い空間に出たのだ。さらに１０メートルほど進んで火の玉は壁面にぶつかって弾けた。その空間は部屋のようだった。小さな柱のようなものが見えたけれど、細かいところまではわからない。

「顔」で埋め尽くされた壁面は、閉じられた。

「み、見たか！？　向こうは部屋だったな！」

「！？」

耳元で声がしたんだけど、いつの間にかミミノさんが僕のすぐ隣で同じ格好をして向こうを見ていた。

「部屋だったのか？　俺はそこまで見えなかったな」
「お父さん、そろそろ目が悪くなってきましたしね」
「確かに部屋っぽいところがありやしたよ」

僕の後ろではダンテスさん、ノンさん、ゼリィさんがしゃがんでいた。
結論としては、やはりトラップを発動してあの細い通路を四つん這いで行かなきゃいけないってことだろう。ダンテスさんは装備品を全部外せばいけるかもしれないけど、さすがに無理で、ゼリィさんとノンさんはぎりぎり。

「僕、行きたいです」

そうなるとやっぱり僕の出番だ。

「……わたしのほうが小さいんだけど、でも、適任かどうかで言えばやっぱりレイジくんなんだよなぁ……」

ミミノさんが複雑そうな、切なそうな顔をする。

「レイジ……心苦しいが頼んでもいいか？」
「心苦しく思う必要なんてないです。それを言うなら、僕だってダンテスさんが盾で守ってくれるたびに申し訳なく思わなくちゃいけないじゃないですか」
「それは……」

むう、と眉根を寄せたダンテスさんは「最近はお前、守らせてもくれんじゃないか」と渋い顔で言った。確かに。戦闘になると僕はゼリィさんといっしょに遊撃するしね。

「だから、行かせてください」

最終的にはダンテスさんも折れて、僕はひとり、通路が再度開いた後のレバーのところまでやってきた。「……成長した男の子の父親の気持ちがわかるぜ……」とかなんとかぶつぶつ言ってたけど。

なにかあっても大丈夫なように改めて腰にはツタを巻いた。「魔力中和剤」の効力も続いている。

先ほど置いておいたジャガーノートの残骸はきれいさっぱりなくなっている。

「行きます」

僕の足元の床はすでに沈んでおり、レバーに手を添えた。

みんなが注目するなか、レバーを下ろす――瞬間、僕は気がついた。

レバーの表面に赤い線が1本と黒い線が2本、浮かび上がっている。

その赤がなんらかの反応で黒に切り替わった。

（3本の黒……もとは3本の赤だった？　赤が黒になる。もう赤には戻らない？　もしかして）

これは、「残り回数」なのか？

すべて黒になったら……どうなる？　もうチャレンジできなくなる？

（いや、このダンジョンの性質を考えると――循環（エコ）システムができている。もう二度とチャレンジできないということは考えにくい――

―）

考えられるのは、そこまでだった。

『――畏怖セヨ――』

「ッ！？」

僕は上からのしかかってくるような重圧に膝をついた。

なんで。確かにここのトラップはこれまでの感情攻撃よりもキツかったけれど、「魔力中和剤」を服めばなんとかなるはずだった。

「！」

目の前にある床を見て気がつく。

沈み込む床。

ただレバーを引くためのスイッチに、こんなものを作るだろうか？

（この床にも魔術が掛けられてるんだ）

空気中を伝って仕掛けてくる魔術だけでなく、床からも直接魔術が発動する。

二重の仕組みになっているのだ――。

「レイジ！？」

汗が噴き出した。身体が震える。

腰のロープがピンと張る。

「――大丈夫！」

負けるか。
こんなトラップに、負けるか。
ミミノさんの作った「魔力中和剤」だぞ。
膝に力を入れる。
行け、行け、行け、行け！　立ち上がれ、僕！

「うおおおおおっ！」

背筋を伸ばし、僕は叫んだ。

「ダンテスさん！」

通路は７０センチほどまで閉まっている。
僕の視界には心配そうな顔のみんなと――その背後に、霧が発生するのが見えていた。

「後ろ、気をつけて……！」

僕は通路の奥へと走り出す。ヘッドスライディングをするように、低い穴へと滑り込む。
ここでは振り返ることもできない。だけど声なら、まだ、届く……！

「敵が来ます！！」

そう、３本の黒い線を赤に戻すには、もう一度この通路を開くギミックをこなさなければいけない。
このダンジョンの循環システムなら、新しいオートマトンを再製造したとしても不思議はない。

ダンテスさんたちのいる大部屋に、ジャガーノートがもう一度出現する可能性は――極めて高いのだ。

35（前書き）

ちょっと短いです（土日は忙しいので……）。

35

★　大広間　★

レイジの残した言葉にハッとしたダンテスが振り返ったときには、すでにゼリィが武器である短剣を抜いて身構えていた。
煙のように湧き出た霧はまだまだ薄かったが、これからどんどん濃くなっていくことはわかっている。なんといってもその濃い霧は経験済みだ。
高い天井からワイヤーに吊されするすると降りてきたジャガーノートはあまりに滑稽ではあるけれど、その強さを知るダンテスたちが笑うことはなかった。

「こりゃまた……面倒な置き土産だな」

レイジがどのようにジャガーノートの再出現を知ったのかはわからなかったが、わかっていることもある。
レイジが戻るまでに耐え忍ばなければならないということだ。

（これはヤバイっすわ～……あーしが引きつけてみんなを向こうの通路に戻すことを考えなきゃ……）

とゼリィが考えていたときだった。

「年を取って感じたのは、体力の衰えもそうだが、回復が遅いということだ」

すでに太く重い鉄塊であるメイスを右手に持ち、左手には大盾を

構え、ダンテスが歩いていく。
その正面にはジャガーノートが着地し、するするとワイヤーだけが天井の穴へと引っ張り込まれていく。

「だが、悪いことばかりじゃあねえ。立ち回りはこなれたもんだし、なにより、狡猾になる……」

チカチカッ、とジャガーノートの胸の宝石が点滅した――前回倒した個体とほとんど同じタイプのようだ。

「……デケェ化け物の倒し方ってヤツを見せてやらぁな」

ジャガーノートの車輪が回転し、ダンテスへと迫る。
ダンテスは腰を下ろしてそれを迎え撃つ――。

★

通路が完全に閉じられると向こうの音はなにひとつ聞こえてこなくなった。
ジャガーノートは出てきたのだろうか――出てきた、と考えておいたほうがいい。この迷宮は僕らの考える最悪の、ほんの少し先を行くのだ。

「行こう」

僕のいる狭苦しい換気口みたいな通路は閉じられていなかったので、匍匐前進で進んでいく。この先を確認し、なるべく早く向こうに戻るのが僕のなすべきことだ。

不意に周囲が広くなり、僕は立ち上がった。
そこは薄暗い小部屋だった――7、8メートル四方しかなく、出口の扉もないのがすぐにわかった。
部屋の中央には腰の高さほどもある円柱状の祭壇のようなものがあった。
祭壇の上には書見台のようにナナメになった石板が置かれ、文字が刻まれていた――その文字は青白く発光しており、ちりちりと燐光のようなものを上へと飛ばしていた。
その発光物がこの部屋の明かりのすべてだった。
石板に近づこうとして、ぎょっとする。
石板の向こう側、壁面上部に――顔があったのだ。僕の顔だ。苦しそうにしながらも正面を見据えているその顔は、たぶんでしかないのだけど、さっき僕がレバーを引いたときの顔だ。
（ほんとうはそこで、僕の「畏怖」が刻まれるはずだったってことか……？）
わからない。推測に過ぎない。
ほんとうにこの迷宮は悪趣味だ。
僕は改めて石板に近づき、その文字を目で追った。
「……よ、読めない」
ダメだこれ。ちょっとイヤな予感はしてたんだけど、壁画みたいなのに書かれていたものと同じ古代語で、僕には読めなかった。あー、もう、こんなことなら勉強してからくるんだった！
頭を抱えてうずくまろうとした――そのときだ。
『念のため、と思っておったが、まさか文字も読めぬ輩がここまでたどり着くとは思わんかったぞ。その意外性よりも、むしろ念には

念を入れて文字を読めぬ者に備えた我の偉大さを尊ぶべきであろうな』

「！？」

しゃがれた声が聞こえてきて僕は石板から飛びのき、腰の短刀を引き抜いた。

『我が名はラ＝フィーツァ……フィーツァ家門の者。名はとうに捨てた』

「ラ＝フィーツァ……この迷宮を造りし者！」

音声だけが流れている。先ほどの言葉から察するに、ここの部屋については石板で解説があるけれど、文字を読めない者のために音声ガイドがあるということか。

『石碑に手のひらを載せよ』

音声は、それで止まった。あの、発光する文字の石碑に手を載せろということなのか。

（……怪しい）

これが罠ではないという可能性はどこにある？　石板の最初の文言が「手のひらを載せろ」なのかもしれないけど……。

「……クソッ、迷ってる時間はないか」

前の部屋でジャガーノートと戦っているであろうダンテスさんた

ちのことを考えると、とりあえずやってみるしかない。どのみち他に調べられる場所もないのだ。

運を天に任せ、僕は石板に手を載せた――。

視界が、弾けた。

すべてが白くなって光の粒が僕の身体を灼く。

熱を感じない。ただただ僕の身体が燃えるように感じられたのだ。

これが「情報」の奔流なのだと気づいたときには、僕は、自分がこの迷宮のあらゆる場所をみることができることに気がついていた。

長い通路、いくつもの罠、迷宮に仕込まれているオートマトン、挑戦者を消化しオートマトンに変換する循環システム――。

（ああ、すごい……ダンテスさんが圧倒している）

ジャガーノートの巨体をダンテスさんは盾で軽々といなし、メイスで時折反撃していた。なんとこの短時間でジャガーノートの腕を1本折っている。僕が急ぐ必要なんてないというふうにすら思える。

僕は思考の腕を伸ばし、ジャガーノートをつまみ上げる――スイッチをオフにする。

ジャガーノートがぴたりと動きを停止したからダンテスさんたちが警戒心たっぷりに観察している。

これで、ここは大丈夫だ。

（ん……）

僕はそのとき、通り過ぎた大空洞が気に掛かった。ダンジョンから一度外に出て、大量の触手ヤモリに襲われた場所だ。

そこはダンジョン外に当たるので鮮明な映像は確認できない。だけど――僕は空洞に巨大なシルエットを見た。

触手ヤモリに襲われた僕らは急いでいてそっちを確認する余裕があまりなかったのだ。
でなければ、絶対に気づいている。
それくらいに巨大で、特徴的なシルエットだ。

（銀色の流線型、まるで、船みたいな……）

飛行船であることを疑う理由はなかった。
そしてその、ノイズ混じりの映像ですら美しさがわかる姿が――レフ魔導帝国の至宝にして、盗まれた魔導飛行船「月下美人」であることも。

36

★　レフ魔導帝国　★

夜更けではあったが、まだ多少なりとも人が起きている時間帯だ。
花火のような光が、地中を割って空へ上がる。青、赤、黄色と様々な色を混ぜ込んだその光は、「畏怖の迷宮」の上空へ高々と舞い上がると、パァッと光を散らして爆ぜた。
その爆発は連鎖し、大輪の光の花が空へと咲く。
色とりどりの光がレフ魔導帝国の町並みに降り注ぐ。
これを見たレフ人たちはあわてて家の外へ飛び出し、光が踊る崖の上を呆然と見つめていた。

「……まさか」

帝国皇帝もまた、就寝前でひとり、自室にこもっていた。
その光が窓から射し込むとあわてて窓辺へ駈け寄り、窓を左右に開く。

「攻略したのか！？　この方角は……『畏怖の迷宮』」

進行中の４つの迷宮攻略のうち、早々にリタイアが決まった「畏怖の迷宮」。もちろん本命は迷宮攻略１課から３課までであり、皇帝としても落胆はするもののそれは予想範囲内ではあった。
だというのに。

「クッ、ククックククッ……ワハハハハハハハハ！　面白くなってきたではないか！　さあ、攻略したという者の顔を拝むとするかえ」

夜という時間であるにも関わらず、帝国内はにわかに騒然とし始めた。

★

僕が大部屋に戻るとすでに霧は消えていて、ジャガーノートは停止し、その胸から宝玉をゼリィさんが抜き出しているところだった。

「レイジくん！」

出てすぐそばで待っていてくれたのはミミノさんで、僕の両腕をつかむと、

「大丈夫だべな！？　なにもなかったのか！？」

あちこちに触れて無事を確認した。心配されているのはありがたいと思う反面、信頼されていないのかな……子ども扱いなのかな……と少々不安にもなる。これって贅沢な悩みかなあ。

「レイジ。もしやあのオートマトンを止めたのはお前か？」

「はい。実は――」

ダンテスさんたちがやってきたので、僕は向こうで見たものについて話す。

石板がこの迷宮のコントロールを握っているようで、それを使えば自由に迷宮内をいじれること。

つまり外へのショートカット出口をつくることも可能であること。

「月下美人」らしき飛行船があったこと。
そしてもうひとつは、花火のような光が空に上がったこと――これはどうやら迷宮踏破の印らしく、冒険者ギルドでもらった資料にも簡単に触れられていた。

「だから僕らが迷宮を踏破したことは外にも知られているはずだと思われます。時刻は夜遅いので、実際にどうこうなるのは朝になってからという感じだと思いますが」
「わかった」

僕はみんなを奥の部屋へと案内した。
ジャガーノートとの戦いについて聞くと、ダンテスさんは無傷で、時間は掛かるが1つずつ腕をつぶせば勝てたかもしれない、体力はしんどいけど、と言っていた……この人はやっぱり化け物では？
みんなに石板に触れてもらってみて、不思議なことが起こった。

「なんだ？　なんも起こらねえぞ」
「さっぱり反応ゼロっすね」

石板が無反応だったダンテスさんとゼリィさん。

「うぅ……なんだか、頭の中に大量の情報を詰め込まれた感じだべな……」
「ちょっと気持ち悪いですね……でも、これは魔術に関する知識なんでしょうか？　意味不明のことばかりです」

反応はあったけれど、よくわからないというミミノさんとノンさん。
結局のところ、ダンジョン構成をいじったりするのは僕にしかできないということだった。

「なんでレイジくんだけなんだべな？」
「どうでしょう……最初に触ったから？」
「まあ、なんでも構わんだろう。とりあえず帰ろう。帰って酒を飲みたい」

ダンテスさんの言葉には全員賛成だった。お酒はともかくね。
僕は大部屋から入口までつなぐショートカットの通路を造ることにした。石板に手を触れると頭の中に「畏怖の迷宮」の全体マップみたいなものが思い浮かぶので、そこに手を加えていく。
魔力の消費は一切ない。ただ、ダンジョン全体の魔力の貯蓄量みたいなものがあって、これが目減りしていくのは感じられた。

「……あの壁の『顔』はどうしますか？　消すこともできるみたいですけど」

趣味が悪いこと極まりないデスマスクの壁。
みんなが無言になったけれど、ミミノさんが、

「残しておく必要があると思う。後で調査が入ったときに、誰が亡くなったのかがわかるから……」
「……そうですね、わかりました」

僕はそこはいじらなかった。
大部屋に出て、沈黙したジャガーノートの横を通り過ぎる。

「坊ちゃん坊ちゃん。ここにある魔石の類を全部集めてから帰るってのはどうですか？」
「……そろそろゼリィさんが思いつく頃合いだとは思いました」
「まさかの予想済み!?　で、でもいいじゃないですかぁ。それこ

そが最初にダンジョンを攻略した人の特権でしょ」

どうするんだ、という感じでダンテスさんが見てくる。

冒険者的には「アリ」っていう発想なのかな。

「このダンジョンは奇跡的なバランスで保っているんです。なので、大量に魔石や宝玉を吐き出した場合、最悪は崩落しますね」

「……だ、そうだ。残念だな、ゼリィ」

「ええ～！」

「あのでっかいオートマトンの宝玉、取っただろ？　それで我慢しろ」

「うう……」

ゼリィさんの耳と尻尾がしょんぼりしている。

もちろん僕はウソは吐いていない。一方で、バランスが崩れないぎりぎりまで搾取することも可能は可能だ――でもそれはしないほうがいいんじゃないかと思ったんだ。

クリアした状態そのままで、レフ魔導帝国に引き渡す。

そうであればアナスタシア殿下もルルシャさん救出のために動きやすいだろうから。

（ダンジョンを自由自在に操る技術か……確かにそんな知識がもたらされれば、魔道具の技術革新につながりそうだよな。そうやってレフ魔導帝国は進歩してきたんだろう）

魔導飛行船の技術とかも他のダンジョンにあったんだろうなあ……。

僕はふと、大空洞にあった「月下美人」のことを思い出した。あれについても報告したほうがいいんだろうか……いや、でもここで言ったら「お前らさては空賊とグルか？」と疑われそうだよな。

ダンジョンのコントロールを握ったら発見はたやすいわけだし、あとは帝国の人に任せよう――。

そんなことをつらつらと考えながら、僕らは新たにできた通路を進んでいく。

行きはあんなに時間が掛かったのに、帰りは2時間程度歩くだけだった。最終的な高低差もあまりなく、僕らは入口にあった「顔」の横までやってきた。……このダンジョンはなにからなにまで「顔」づくしだったな。

（あれ以降、ラ＝フィーツァのメッセージらしきものはなかったけど、結局このダンジョンはなんなんだろう。なにを目的に造ったんだ？）

考えを巡らそうと思ったけれど、うまくいかなかった。

なんだか頭がふわふわするのだ。石板から一気に情報が入ってきたせいで処理が追いついていないのかもしれない。これでも【森羅万象】大先生の補助があるから頭の回転はよくなってるはずなんだけどな……ん？　そうか？　もしかしたら【森羅万象】があるからダンジョンのコントロールができるところまで情報を把握できたのかな？

「――は？」

先頭を行くダンテスさんの、呆けたような声が聞こえてきた。

すでにダンジョンを出て、僕らは崖を削った洞窟を進んでいるところだった。この先にエレベーターがあって、下にいけるんだけど――。

「――出てきたぞ！」

時刻としては夜中もいいところだというのに、巨大な投光器が置かれ、多くの人たちが集まっていたのだ。

「――アイツらが攻略したのか？　ヒト種族じゃないか！」

「――次はどんな技術が？」

「――くれ！　発見した魔道具を売ってくれ！　言い値で買う！」

そして僕らの姿を見るなり、歓声のような、怒号のようなどよめきと、そして拍手が湧き起こったのだった。

36（後書き）

雨の月曜ですがようやくダンジョンクリア。長かった。3章的には中盤です。

というわけで恒例のお願いです。
もし「面白かった」「続きが読みたい」と思われましたら下にある★から作品評価をお願いします！
また「ブックマーク」もしていただければとてもうれしいです。
評価とブックマークが、作者にとっての「応援」となりますので。

37

ムゲさんに会って報告するどころじゃなかった。

エレベーターで降りていった僕らは、完全武装したレフ魔導帝国の軍隊に囲まれた。彼らは手に手にふつうの武器ではなく、魔道具が仕込まれた「魔導武装（マジックギア）」を装備していた。槍なんだけど、金属でできた柄の部分に魔術が仕込まれている。

「眠ってたのに叩き起こされて、すわ敵国でも攻めてきたかと思ったら……君たちが迷宮を攻略するとは思わなかったよ。チュパッ」

投光器――魔導ランプと原理は同じだけれど高価な魔石を突っ込んで光量を上げたそれが照らし出したのは、水飴を舐めているアバだった。

武装兵に囲まれてこっちも警戒したのだけれど、話したことのある人が来てくれたのはありがたい。

ダンテスさんが僕を見たので一歩前に出る。

「あの花火を見たからここに来たんですね？」

「『花火』？　ああ、打ち上がった『祝福魔光』のことか。『火』の『花』とは面白いことを言うねえ。……ちなみにぼくは寝てた」

「そうですか。ともかく、僕らはお察しの通り『畏怖の迷宮』を踏破しました」

ワァッ、と声が上がった。みんなダンジョンクリアを知ってたから来たんじゃないの？　とは思いつつも、実際に言葉で聞くのはまた趣があるんだろう。

僕の言葉を必死でメモってる人が数人いるんだけど、もしかして

新聞記者の方ですか。

（そうか――それなら）

僕は思いついて、言葉を接いだ。

「迷宮攻略４課、ルルシャさんのおかげです」

「！」

アバがぎょっとした顔をしたけれど、記者っぽい人たちは夢中で手元の紙に書きつけつつ、

「すみません！　聞きたいのですが、迷宮攻略課と連携を取っていたのですか！？」

「はい。僕らの成功はルルシャさんのおかげと言っても過言ではありません」

おおっ、とまた違う種類のどよめきが起こる。みんな驚いた顔をしていた。

「ちょ、ちょっと待って欲しい。記者の質問は明日またしようか。君たちも疲れているだろうから、ぼくが手配した場所で休んでいただきたいんだ」

「それは……構いませんが。雇い主のムゲさんにも連絡をしたいです」

「――あなた方はヒト種族のようですが、誰に雇われたと？」

新聞記者が身を乗り出して質問してくる。

「僕らは冒険者パーティー『銀の天秤』で、リーダーはこちらのダ

ンテス。そして『ムゲ商会』の商会主に雇われて帝国入りをしています。非常に仕事ができ、また実直で絶対にウソを吐かないタイプの商会主です――」

「ちょ、ちょっとちょっと！」

とそこへアバが割り込んできた。

ここぞとばかりにムゲさんを褒めておいて新聞記事にでもなれば、「ロロロ商会」との訴訟にも影響するのではないかと思ったのだ。

「質問は終わりと、言いましたけどね？」

怒りの込められた目でアバが僕を見てきたけれど、僕はよくわからないというフリをしておいた。

それから僕らは用意されていた魔導自動車に乗せられた。猫チャンとは比べるべくもないほどに立派で大きくしっかりとした造りで一分の隙もなく、比べるべくもないほどに愛嬌がなかった。

猫チャンは帝国兵士が責任をもって届けると言っていたので任せることにした。一応、荷台に載っているものはアバ立ち会いのもと、リストを作ってあとで盗まれたりしないかをチェックできるようにして。

この国、治安が悪いわけじゃないんだけど、ムゲさんがあまりに軽んじられ過ぎてるんだよね……。猫チャンを見た帝国兵士は眉をひそめていたし。

魔導自動車は揺れも少なく、あっという間に帝国の中心部へと到着した。

そこは――ハッとするほどに広く、しかも平屋だった。土地のないこの国で平屋というのはそれだけで贅沢だということがわかる。

入口には小さな人造の川が流れていて、玉砂利の敷かれた庭園には魔導ランプが埋め込まれ、夜中明かりが確保されている。金箔の張られた門をくぐると、ドレスを着た女性が――残念なことにレフ

人なので美醜はわからないのだけど――現れた。

「『迎賓館』へようこそ。歓迎いたしますわ」

迎賓館ときたものだ。

「……俺たちは冒険者だ。もっと安宿でいいんだが」

「そうは行かないでしょう。なに、礼儀作法などはありませんのでおくつろぎを」

アバはしれっとした顔で言ったけれど、ここに来て水飴を舐めていないところから察するにやっぱり礼儀作法は必要なんじゃないかと思われる。

「今からでも眠っていただいたほうがよいかと思いますな。目が覚めれば皇帝陛下との謁見がありますから」

アバはにやりとした。

皇帝との謁見！

ダンテスさんは目を白黒させミミノさんは甲高い声で「ひぃー」と叫びノンさんは徹頭徹尾聞かなかった振りでやり過ごそうとしゼリィさんは一足先に逃げ出そうとしたので僕は彼女の尻尾をつかんだ。

「無理だ。俺は、そういう堅っ苦しいところが昔っから無理なんだ」

宿――迎賓館の一室に通され、鎧を脱いだところでダンテスさんが顔を手で覆った。

意外なところでダンテスさんの弱点的なところを見てしまったかもしれない。

ちなみにミミノさん、ノンさん、ゼリィさんの3人はお風呂に行っている。ここには大浴場があるらしくて……うん、大浴場があるところに僕が行くと間違いが起きる可能性があるからね、ここは自重しないとね？

「ダンテスさん……それなら僕に任せてもらえませんか？」

「……レイジに？」

「僕は貴族家で護衛として働いてましたから、礼儀作法についても叩き込まれています」

「だが……いや、それが最善なのはわかるが、しかしレイジひとりに……」

僕を信用していないのではなく、僕ひとりに任せるのが悪いと思ってくれているのが伝わってきて、思わず僕は口元が緩んでしまう。

「大丈夫ですよ。適材適所でしょ？　ダンテスさんにはお願いしたいこともあるので」

「なんだ、そのお願いしたいことってのは」

「ムゲさんの様子を見てきて欲しいんです。僕らが街を離れて4日になります。ポリーナさんがなにか行動していないかとか、訴訟がどうなっているのかとかですね」

「……なるほど、そっちの面倒ごともあったな」

あごをさすりながら考えていたダンテスさんだったけれど、

「わかった。それじゃあ、皇帝との面通しはお前に任せる」

面通し、って。容疑者の顔を目撃者に見せるって意味じゃないか。

確かにダンテスさんは皇帝に会わせちゃいけない気がするな。

「ただ、１つ条件がある」

ダンテスさんはピンと人差し指を立てた。

「ノンも連れて行け」

★　アナスタシア　★

皇帝の住む建物の隣の区画には、迎賓館によく似た平屋の建造物があった。レフ魔導帝国ならではの直線を多用した幾何学的な形状ながら、落ち着きを感じさせるように木材や植栽が配置されている。

諸外国からやってきた賓客が長期に渡って逗留するところであるが、しばらく前からこの場所は高貴なエルフの貸し切りとなっていた。

「……！」

レフ人の侍女からその報告を受けて、アナスタシアは思わず立ち上がった。

人差し指を立てて、お礼をするようにぺこぺこと倒す。「もう一度言って」という意味だ。

「はい。皇帝陛下からのお言葉です。本日１０時より冒険者との謁見を行うと。理由は『畏怖の迷宮』攻略完了を讃えるためです。そこにはアナスタシア殿下も同席いただきたいということでした」

「……」

昨晩すでに眠っていたアナスタシアは打ち上がった花火も、その後の騒ぎも知らなかった。

侍女の話を聞いてしばらく呆然としていたけれど、

「で、殿下！？」

次に気づいたときには、自分の瞳から一筋の涙がこぼれていた。

（……あの方は、危険を冒してルルシャが無罪である証拠のバッグを見つけてきてくださった。しかも、それを私に託し、足りなければまた探すとまで言って……私はあの方の期待に応えられなかったのに……）

バッグを皇帝に手渡し、皇帝は再調査を約束した。だがその調査はアバに一任され、その後はどうなっているのかアナスタシアには知らされていない。

（どうしてわかったのでしょうか……）

皇帝はアナスタシアにひとつの可能性を示唆した。それは、ルルシャと親しい者が――つまりは「銀の天秤」が「畏怖の迷宮」攻略に成功すればルルシャは元の通りこの帝国で生きていくこともできるだろうと。いや、それどころか出世の道もあるぞと。

でもそんなことを、あの少年に言うことはできなかった。皇帝に言われたように自分は「籠の鳥」だ。なんの権力も持たず、さえずることすらできず、ただ髪を切ってあの少年に渡すことしかできない。これ以上を望むのは厚顔無恥だと思った――。

（ほんとうは書きたかった。ルルシャのために力を貸してください

と。でもできなくて……それを、あの方は、気がついた？　どうやって……）

それは長い長い暗闇の中にいたアナスタシアにとって、まばゆいほどの希望の光だった。星明かりのような小さな瞬きは、この国で出会った多くの親切な人たちによってもたらされた。だけれど、これほどまでに、強い輝きを放つ報せをもたらされたのは初めてのことだった。

すべてをあきらめていたアナスタシアの乾いた心に、今、ぽつりと、雨が降り始めた。

（……会いに行きましょう。今、私にできることは、あの方に――レイジさんに誠心誠意を尽くして感謝申し上げることだけですから）

はらはらと涙を流すアナスタシアに、あわてふためき助けを呼ぶ侍女だけれど、アナスタシアはぐいと涙を手の甲で拭いた。

「で、殿下……？」

アナスタシアは手元の紙を引き寄せると書きつけた。

『謁見に参加します。完璧な支度をお願いします』

ほっ、としたように侍女は動き出した。アナスタシアはこの日、過去に贈り物として受け取りながらも一度として出すことがなかったきらびやかなドレスに初めて袖を通し、ハイエルフの王族であることを証明するエルフの森で作られたティアラを身につけた。

それは――いつも彼女を見慣れている侍女が息を呑むほどの、存在感と美しさだった。

その装いがたったひとりの少年に会うためだということを知る者

は誰もいない。

37（後書き）

和葉空さんにレビューをいただきました！　ありがとうございます！
これまでにも多くのレビューをいただいております。レビューは本ページの上部「レビュー」から見られますので、作品共々是非読んでみてくださいね～。

38

翌早朝から僕は起きて、迎賓館の方々にいろいろと無理をお願いした。つまり、皇帝に会うための身支度を整えたかったのである。迎賓館で働く人々にとってそれはたいして無理なお願いではなかったようで快く引き受けてもらえた。

髪を切ってもらい、ミミノさん特製の整髪料を使う。謁見用の上等な服をレンタルしている店はないかと聞くと、迎賓館にすでにあるという。しかも無料！　う～ん、いいところに泊めてもらっちゃったな。

「ほぉ～……お前、まったく冒険者には見えねえぞ」

「それは褒め言葉ですか？」

「もちろんさ」

僕の支度が終わると、ダンテスさんはニカッと笑った。

着ている服は燕尾服にフォルムは似ているものの、色合いはダークレッドにパターンが刺繍されているような……なんというか、だいぶ前衛的なもので、でもそれはレフ人の伝統工芸である陶芸によくあるパターンなのだそうだ。

（久しぶりの正装モードだ。こういうのは意気込みで呑まれたら負けだからな）

この謁見が意味するところはわかっている。おそらく、僕らの情報は伝わっているから皇帝もそのつもりだ。

つまりルルシャさんをさっさと解放しろというアピールの場なのだ。

皇帝だけでなく多くの上級官吏や有力者も出席するだろう。言葉を間違えれば僕らの功績も奉仕活動（ボランティア）にされかねない――クルヴァーン聖王国での貴族のやりとりではよくそういうことがあったからね。アイツらマジで腹が黒い。

「わあっ、レイジくんカッコイイべな！」

「お、いいじゃないっすか、坊ちゃん。こういうのを馬子にも衣装って言うんですよね」

ミミノさんには若干照れくさい笑顔で「ありがとうございます」と応えながら、ドヤ顔で言ってきたゼリィさんには跳び蹴りを入れた。ふーむ、この服、跳び蹴りを入れるのに動きにくさはまったくないな。なかなかの出来だ。

「むふふ、でもなぁ、レイジくん。君がエスコートするノンはもっとすごいぞ」

「え？」

すると扉が開いて隣室からノンさんが現れた。

ひらりとしたオレンジ色のドレスはノンさんの若い生命力をそのまま表すように鮮やかで、フリルの細かい刺繍や、ところどころに縫い付けられた小さな宝石のきらめきも、どこからどう見ても貴族の女性というふうだった。

ふだん聖職者としての服しか見ていなかったので――これは、なんというか、まったくもって意外性というか、

「うおおおおおんんん！」

「うわぁ！？」

いきなり横で大型犬が吠えたかと思ったらダンテスさんだった。

「キレイだ、キレイだぞ、ノンっ！　お、俺はっ、お前に、そんな格好をさせてやることが今まで、全然できなくてっ……！」

どうやら娘があんまりキレイでびっくりし、さらにはこれまで父親らしいことができなかったことを今さら思い出して泣き出したらしい。

「お父さん、教会に入ったらこんな格好ふつうできませんから。お父さんだけでなく、どこの修道女の父親もみんな同じです」

冷静なノンさんのツッコミが鋭すぎる。

（それにしても――化粧映えするんだなぁ……）

長い髪も結われ、銀製の髪飾りをつけている。

冒険をしていればまったく施すことのない化粧もうっすらとされていて、それが、ノンさんを大人びて見せていた――ああ、そう言えばノンさんももう２０歳だもんなぁ……。

「ど、どうですか？　レイジくん……いっしょにいて不自然ではないかしら……」

恥じらう姿もすばらしいです。ごちそうさまでした。

「完璧です」

「そ、そうですか？」

「完璧です」

「でもこういった服には慣れてなくて……お父さんは私を晴れ舞台に一度くらいは、みたいに思ってたみたいですけど」

「完璧です」
「……レイジくん？」
「完璧です」
「坊ちゃん、壊れたオートマトンみたいになってますよ――ふぎゃあっ！？」

完璧以外に言うことがないのだから完璧だと言ってなにが悪い。
僕はゼリィさんに跳び蹴りを入れた。

「……ではダンテスさん、ミミノさん、ムゲさんのことはお願いします」
「そっちもがんばれよ。ノンのことは頼んだ」
「任せてな～！」
「ちょっ、坊ちゃん、あーしは！？」

ゼリィさんはなぁ……調子に乗らなければまともなところもあるんだけどなぁ……。

それはそうと、僕とノンさんはダンテスさんたちを送り出し、こちらはこちらで魔導自動車に乗って皇宮――と言えばいいのだろうか、皇帝が住んでいるというビルへと向かった。

巨大な敷地周辺には多くの自動車が停まっていて、たぶんだけど僕らの謁見のために集まってきた人たちだよね。さらにはなんだなんだと市民も集まってくるものだから警備兵が総出で交通整理を行っていた。

そこへ到着したのがひときわ立派な僕らの乗る車だ。

「すごい人だかりですね……」
「大丈夫ですよ、ノンさん。こういうのは堂々としていればみんな

疑問に思わないものです」
「そ、そうですか？」
珍しく不安そうなノンさんに僕はそう言った。実は今僕が言ったのは単なる思いつきではなくて、クルヴァーン聖王国にいたときにスィリーズ伯爵が教えてくれたことだった。
――目上の貴族や大勢の前に出たときに緊張しない方法ですか？　君はなにものにも動じないような顔をしているのに、そんな細かいことを気にするんですね。いいですか、秘訣は堂々としていることですよ――。
なんだか伯爵とのやりとりもずいぶん前のことみたいに感じられるから不思議だ。
そう言えば伯爵はお嬢様と仲直りできたかな？　できないわけないか。親バカだもんな。むしろ最初からケンカになってない気もする。
「着きました。お降りください」
運転手が外からドアを開けてくれるので、僕が先に降りる――と、おおっ、というどよめきが聞こえてきた。
「行きましょう、ノンさん。――ノンさん？」
「……ちょ、ちょっと待ってもらえますか？　急に怖くなってしまって……」
それはそうだよね。縁もゆかりもない国の皇帝にこれから会うっていうだけでもプレッシャーなのに、これほどの群衆に囲まれてたら。

僕は自動車の中に手を差し入れた。

「行きましょう、お嬢様。エスコートいたします」

「！」

「こう見えてもそれなりに経験がございますので」

うさんくさい護衛スマイルを浮かべながら僕が言うと、おずおずとノンさんは僕の手に手を重ねた。

柔らかくすべやかな手を誘導するように、彼女を外へと誘う。すると先ほどとは違うどよめきが起きた。

「――うわっ、めっちゃ美人が出てきたぞ」

「――なんだなんだ？　ヒト種族じゃないか……でもきれいな人だな」

「――ありゃどこかのお姫様か？」

ふふふ、ノンさんに視線が集まってる集まってる。どうだ、うちのノンさんはすごいだろう？

僕は以前エヴァお嬢様をエスコートしたように、ノンさんの前に立って歩を進めていく。

昨晩の新聞記者たちもいて、次々に質問を投げてきたけれどなにをどこまで言っていいのかわからないので答えられない。警備兵が彼らを食い止めていた。

まるでアカデミー賞授賞式のレッドカーペットか。ここは異世界で足元は舗装路だけどね。

敷地内まではさすがに群衆も入ってこず、アバが僕らを出迎える。

「よく来てくれた。ん、全員ではないのかな」

「僕らふたりだけです。問題はないでしょう？」

「まあ、構わないよ」

歩いて建物へ入ると、広々としたロビーは2階まで吹き抜けになっていて、金粉で幾何学的な模様を描いた朱塗りの柱が林立していた。うーん、悪趣味。

アバは皇帝と謁見するときの注意事項みたいなものを説明しつつ、合間合間に「おかげで寝てない」とか「水飴も持って入れないんだよここは」とか愚痴を挟むのを忘れなかった。僕は僕でそういった愚痴は黙殺し、足元に段差があるときとか足元が滑りやすそうなときとかノンさんをエスコートするのに余念がない。

ノンさんはお化粧しているのもあるけれど、顔が青を通り過ぎて白くなっていく。

「やっぱり、これから皇帝陛下の御前に参らなければならないのですよね……？」

と蚊の鳴くような声で言うので、

「大丈夫ですよ、ノンさん。僕が全部話すので、ノンさんはそこにいてくだされば。もし今後教会に戻っても、祝典や重要な儀式に参加することもあるでしょう。その予行演習だと思ってください。ノンさんは美人だから、そこにいるだけで存在感が出ます。美貌も武器です」

と言葉を尽くして褒め称えると、僕の手に載せられた手に力が込められ、

「……泣き言を言いました、すみません。私もがんばりますね」

血色の戻った顔でそう言った――。

「でも、女性に『美人』だの連発するのはよろしくありませんよ。勘違いする人だっているんですからね」

と、たしなめるように付け加えて。

いや、本心なんだけど……まぁノンさんに元気が出てきたからいいか。

「こちらで待機を」

やがて僕らは2階の奥にある一室へとやってきた。そこは待合室のように狭く、小さなイスがあるだけだった。腰を下ろして待っていると、分厚い両開きのドアの向こうに、多くの人が入ってくる気配がある。謁見の準備か。

しばらくして、アバのところに係員がひとりやってきて彼に耳打ちする――水飴を舐められないせいで親指をしゃぶっている彼を見てぎょっとした顔をしてたけどね。

「……では時間なので、謁見が始まる。ここから先は君たちだけで行くので、くれぐれも粗相のないように」

「ええ、まあ、努力しましょう」

粗相がどうのというのを冒険者に求められてもねえ。

僕はノンさんを見て、ノンさんが僕に力強くうなずく。僕らはイスから立ち上がり、両開きのドアの前に立った。

さて、と。

皇帝がなにを言ってくるかだな。僕としてはとりあえずルルシャさんを解放してもらうように働きかけるだけだけど。

こっちの考えもしなかった面倒ごとがなければいいなぁ……。

『――「畏怖の迷宮」攻略者、冒険者パーティー「銀の天秤」が到

着いたしました』

そんな声とともにドアが開かれる――待合室とは比べものにならないほどのまばゆい光が、奔流となってこちらまで射し込んできた。

39

天井からぶら下がっている色とりどりのクリスタルをちりばめたシャンデリアは、光源が魔導ランプの仕組みのようだった。壁にも小ぶりながら同じ仕組みの明かりがいくつも配置されているので、この室内はサングラスが必要なほどにまぶしい。

というか左右に居並ぶ、やたら高価そうな着物を羽織ったレフ人たちはみんなサングラスをつけている。

「……早く前へ進め」

扉の横に立っていた文官らしき男に言われ、ああ、これはそういうことかと合点がいった。

入った時点で豪華さを見せつけて、どちらが上かをはっきり示そうというのだろう。

ノンさんがまぶしさに歩きにくそうだったので、僕はひそかに【闇魔法】を発動する。

「！」

ノンさんの視界はこれで見やすくなっただろう。【闇魔法】には相手の視界を暗くして見えづらくするものがあるからね。

瞳孔を狭めるとかそういうのではなくて、身体に触れる光量を下げるような魔法だから、日焼け止めにも使える。

「おい、早く前へ――」

僕とノンさんがすっすっと歩き出したので、文官は言葉を失った。

サングラスなどせずとも問題ないところを見せつけるように、僕はノンさんの手を引き、胸を張って歩いていく。

黒い床面に敷かれた真紅の絨毯は僕らの足音を消してくれる。

その先に数段の段差があり、魔物の革で作られたクッションを載せた鋼鉄のイスが置かれてあった。

座っているのがこの国の最高権力者、皇帝なのだろう。

（……一筋縄ではいかない感じだな）

肘置きに頬杖をついている老齢のレフ人は、鼻の上にちょこんとサングラスを載せ、面白いものでも見るかのように僕らを見つめていた。僕らを眺めているレフ人たちは、明るさをものともしない僕らに面白くなさそうな顔をする人も多かったんだけど、皇帝は違う。

（あっ）

僕は皇帝の右後ろに座っているひとりの女性に気がついた。

アナスタシア殿下だ。

うわぁ……なんだあのドレスは。きらめく銀色の糸を使って織り込まれ、淡く優しいピンク色――この世界にはないだろう言葉、鴇色（トキ）――の差し色がある。

頭に載せられたティアラは精巧な造りで、頭から落ちるだけで壊れそうなほどに華奢ですらあった。

そして首には相変わらずスカーフを巻いていた。

うっすら唇に紅を引いたアナスタシア殿下は、以前見たときにびっくりするくらい整った顔だと思っていたけれど、今はそこに――魔性が含まれている。男を魅惑するような魔性だ。

残念なことには彼女もサングラスをつけなければいけないほどにここはまぶしく、そのせいで殿下の魅力は8割減くらいになっている。誰だよあのサングラス選んだの。ダグラス・マッカーサー元帥

かよ。

「……」

僕と目が合った殿下は、パァッと表情を輝かせ、膝の上で小さく手を振ってみせた。なにそれかわいい。ていうかこんな親しみやすい感じの人だったっけ？

「そこにて止まれ」

皇帝と僕らの間に立っているレフ人女性が――先ほどの文官よりも上等な服を着ている秘書っぽい人が――そう言い、僕とノンさんは足を止めた。

ふたりしてその場に片膝をつき、頭を垂れる。

「面を上げよ」

しゃがれた声が聞こえた――それが皇帝の肉声だった。

僕の視線と皇帝の視線が交差する。

さあ、取引の始まりだ。

「『畏怖の迷宮』を攻略したようだな」

僕はちらりと秘書を見ると、彼女は動いたか動かないかぎりぎり判別がつく程度の角度でうなずいた。

「仰せの通りです」

なるたけ背伸びした渋い声を出そうと思ったけれど、無理だった。１４歳には１４歳の分相応の声というものがあるんだよね……。

「迷宮はこれから帝国が接収する。代わりにお前たちには十分な報酬をやろう」
「ありがとうございます」
「話は以上だ」
ひらりと手のひらを振って「帰れ」という意味を示した皇帝に、
「恐れながら1点確認したきことがございます。迷宮攻略4課にも報酬は与えられるのでしょうか？」
僕がたずねるとレフ人たちがざわめいた。
いやいや、こんな短い話をするためにわざわざ来たんじゃないんですよ、こっちは。そりゃあ偉い人たちは時間があまっているかもしれませんけど、冒険者は1日働かなければ1日ぶんのお金が入ってこないような商売ですからねえ。ここに来た目的はしっかり果たしますよ。
レフ人たちのざわめきは「戸惑い」だった。なんで冒険者ごときが（しかもヒト種族が）迷宮攻略課を気にするのかという。
「そのようなことは我らが帝国内で決めること！　冒険者風情が弁えよ！」
秘書がヒステリックに声を上げると、
「よい」
皇帝は、さっきは「帰れ」と振った手を、今度は「待て」と開いて見せた。

「なぜそのようなことを気にするのだえ？」
「……我々の迷宮攻略は、迷宮攻略４課の手助けがあったからこそでございます。攻略の栄誉を我らで独占するのはあまりにも傲慢な振る舞いであるかと存じます」
「そのような報告は受けておらなんだが」
ちらり、と皇帝が視線を向けると、離れた場所に控えていた男があわててぶんぶんと首を横に振った。あれが局長か。仕事できなさそうなヤツだなあ。
「なれば、それについてはこちらで調べ、追って沙汰する」
「――私どもは４課に恩があればこそ、行方不明となっていた４課の連絡員が掛かってしまった即死のトラップから、通信用のバッグをなんとか奪還できたのでございます。きっとそのバッグの中には我らとの接触についても書かれているかもしれませんね」
さらにざわめきが大きくなる。
あのバッグ、ちゃんと調べたんだろうな？　闇に葬ったりしてないよな？　というアピールである。
「……」
皇帝の瞳が細められる。なにを考えているのかは不明だ。
「バッグについては調査済みだ。――アバを呼べ」
すると謁見の間の向こうに控えていたアバが連れ出される。水飴不足の禁断症状が出ているアバは目を何度も瞬かせ、服の裾をつかんで離してを繰り返しながら「一体何事か」という顔でこちらにやってきた。

え、アバが調査してたの？
それってヤバくない？　この人、明らかに僕らと仲良しこよしする気ない人じゃん！

「アバよ、迷宮攻略４課の通信バッグの中身について調査は済んでおったな」
「は？　あ、は、はい！　調査は済んでおります」
「内容をここで話せ」
「はっ」

アバは「ほんとに言っていいの？」みたいな顔をしていたけれど、さっさと言えとばかりに皇帝がにらみつける。
まさかここでウソ吐いたりしないよな……大丈夫か？　ここでルルシャさんに不利なことを言われたら、もう取り返しがつかないぞ。
しくじったかも。
ここで証言を引き出すところまで持っていかなくてもよかったんだ。
あとでアナスタシア殿下にお願いするとかすれば――。

「調査した内容を申し上げます。――攻略は順調とは言いがたく、物資も不足していることから救援を求めておりました。また数日間に渡って連絡を取っているのに本局から返信がないことに対しても不満を述べていました」

お。
おお？
アバさん、もしかしてちゃんと調べてくれてたの？　てっきり「ロロロ商会」の回し者でいけ好かない甘味中毒者だと思ってたよ！
ごめんなさい！
その報告を聞いた、さっきの仕事ができなさそうなレフ人が、

「ほ、本局からの返信!?　元々なにも連絡など来ていなかったぞ！」
「局長。それはわかっておる」
皇帝が言うと、仕事ができなさそうな――迷宮管理局の局長は口を閉じてもごもごした。
「連絡員は即死トラップに掛かって死んだ。だから連絡が途絶えていたと余らも考えたのは仕方のないことであろう。迷宮攻略４課の課長は任務に忠実であり、連絡がなかったと勘違いした局長を責めることもできぬ――そういうことだな、『銀の天秤』のレイジよ」
「！」
名前まで把握されていたのか、と思わず僕が身体を強ばらせていると、皇帝はにやりとして、
「ルルシャのことはこれで手打ちよ。あやつは今後も４課の課長として戻し、今後も働いてもらおう。これは余の決定ぞ」
他ならぬ皇帝の宣言に、居並ぶレフ人たちは「おおっ」と声を上げた。
あ、あれ？
これってもしかして――解決したんじゃない？
マジか。マジで？
僕がノンさんを見ると、ノンさんもにっこりと微笑んでうなずいてくれた。
「……！」

向こうではアナスタシア殿下が突然のことに目を瞬かせ、それから僕を見て、泣きそうな顔で笑ってみせた。いやほんと、殿下のサングラスさえなければ僕もうるっときたかもしれない。

「ときに、レイジよ」

これで万事解決か――と思っていた僕に、皇帝は言った。

「クルヴァーン聖王国の国難を救った英雄が、我が国で迷宮を踏破した。お前は一体なにを企んでおる？」

その一言で僕の身体は凍りつき、冬の夜のような静けさがこの場に訪れた。

40

いや、いやいやいや、なんでなんで!?　なんでクルヴァーン聖王国から来たってこと知ってるの!?　ていうか「国難」って話がだいぶ大きくなってるんですけど!

ちょっと待て、落ち着け僕。向こうが情報網をしっかり持ってて、僕のことを調べ上げたとしてもやましいことなんて……。

スィリーズ伯爵家のお嬢様の誘拐未遂。

エベーニュ公爵家の１００人と交戦（道路破壊のオマケつき）。

あぁ～～出がけにやらかしただけでも、やましいところがあるぅ～～!!

「――クッ」

僕がなんと答えるべきか頭の中でぐるぐるぐるぐる考えていると、

「クハハハハハッ！　なんだえ、その顔は。はぐらかすにせよ、認めるにせよ、そのような動揺は見せぬものよ。それではあたかも『そこは自分の弱点』と言っているようなものぞ。クハハハハハ」

皇帝は手すりをバンバン叩きながら笑っている。

その様子にきょとんとしたのは僕だけじゃない。斜め後ろにいるアナスタシア殿下も、秘書っぽい人も、居並ぶ偉そうな人たちも虚を突かれたように皇帝を見ていた。

「ああ、笑ったぞ。笑った笑った――そう、構えるでない。今のは

ちょっとした意趣返しと、かま掛けよ。お前が腹に一物抱えておるのなら、揺さぶりをかければなにか出るだろうと思っておったが――はてさて、ただの１４の子どもであるようだえ。安心もするが……いや、それはよかろう」

「……」

「さあ、これで話は終わりよ。下がれ」

どうするべきか、迷った。どうやって僕のことを知ったのかとか、クルヴァーン聖王国になにか言われているのかとか、気になることはいっぱいだ。だけどここは黙って下がるのが得策だろう。

すでにアバなんてじりじりと後ずさりしてるし。

僕とノンさんは立ち上がり、深々と一礼して謁見の間を出た――。

「つっかれたぁ～～～～～～」

気の抜けないやりとりが終わり、魔導自動車で迎賓館に戻り、僕とダンテスさんの部屋に戻ったところでようやく心が緩んで一気に疲れが出た。ばふっ、とベッドにダイブする。迷宮での疲れも残っているのに、そこに加えて皇帝との謁見だからめちゃくちゃしんどかったよ……。

「お疲れ様でした、レイジくん。精神安定の【回復魔法】を掛けましょうか？」

「お願いできますか……？　ていうかノンさんこそ大丈夫でした？」

「最初のまぶしさにはびっくりしましたけれど、あとはレイジくんが全部やってくれましたから――ではこちらにどうぞ」

ベッドに座ったノンさんは、膝をぽんぽんと叩いた。

「……？」

膝？　膝がなんですか？

「ここに頭を載せてください」

「へ！？」

がばりと跳ね起きる。いや、膝枕？　膝枕ですか？

「さ、早く。ここに頭を載せていただくのがいちばん効き目があるんですよ」

精神を安定させるという【回復魔法】への期待はあるし、しかしながら明らかにその場はノンさんの太ももであって、もしこんなことをやっているのが露見したら彼女の父であるダンテスさんからヤクザキックされるという恐怖が襲いかかってくる。

かといって断るのも――。

「あっ……やっぱり私の膝に頭を載せるなんてイヤですかね……？」

うおおお罪悪感が仕事をしすぎるぅ！　あとノンさん、その上目遣いは反則ですよ！　あなた今、いつもはしないメイクまでしてるんですからね！？

「そ、そそ、そんなことはありません、整髪料がドレスについてしまっては申し訳ないと……」

「そう言えばそうですね。手ぬぐいを敷きましょう。さ、どうぞ」

僕が放った土俵際いっぱいの言い逃れは手ぬぐい一枚によって封

殺され、あれよあれよと言う間に僕はノンさんの膝に頭を載せられた。

ダンテスさん、これは不可抗力です。ノンさんからの申し出だったし、僕は抵抗をしました。ですがこの誘惑は抗いがたく――じゃなかった、その場の雰囲気がそうさせてしまったのです。

ふわん。

というのが最初の感触だった。次に感じたのはめっちゃいいニオイする……。そしてノンさんの膝は柔らかくて、温かくて、僕の目の前には――ノンさんの大きなふたつの胸が――。

「あ、あああ……」

「では精神安定の魔法を掛けますね」

精神が安定するわけあるかァ！

人間、徹夜を続けたりとか、極度の疲労が与えられると、一時的に興奮状態になったりするものだけれど今の僕はまさにそれだ。この興奮は疲労のせいであって他になにか要因があるわけではけっしてない。僕の名誉と、ダンテスさんの心の平穏のために申し添えておきます。

「ああ、あああああ、あ……あっ……」

ノンさんの手が僕の胸と頭頂部に当てられ、魔力が通っていくと、すぅぅぅ――と急速に心が落ち着いていくのを感じた。

「あうぅ？」

すごい……興奮が消え去っていく。

これが、母性なの……？　ママに甘えたい気持ちなの……？

「……どうですか」
「しゅごいでしゅ」
「うふふ、赤ちゃんみたいですよ」

ママァ！

「こちらです、殿下」

そんなとき、いきなり僕らの部屋の扉がガチャリと開いて、そこにはマッカーサー元帥のサングラスを外したアナスタシア殿下が立っていた。

「あ」
「あ」
「あ」

膝枕されている僕らと、殿下の視線が交差した。

「……と、いうわけで、精神安定の魔法を掛けてもらっていたんですよ。ほんとにほんとです。なにもやましいことはありません」

なんだかわからないけど、めちゃくちゃ言い訳がましい感じで僕はアナスタシア殿下に弁明していた。いやさ、殿下は僕らを見て目を見開いただけだったけど、彼女についてきたいけ好かない執事っぽいレフ人――ムゲさんの商会にもついてきてた人――が目を吊り上げて、「伝統ある迎賓館で乳繰り合うとは何事かッッ！」なんて叫んできて大騒ぎになったんだよ……「乳繰り合う」て。今どきそんな言葉使う人いるのか、ってくらい時代後れの言葉で、ノンさん

から「『乳繰り合う』とはどのような意味ですか？」なんておっとり聞かれてめちゃくちゃ困ったんだが？

それはさておき、せっかく来てくれたアナスタシア殿下も不機嫌になってツーンと横を向いちゃうし、ノンさんは善意の塊なのできょとんとしたままだし、結局弁明するのは僕の仕事というわけです、はい。

「……まあ、偉大なる皇帝陛下に拝謁できることは名誉であることながら、貴様のようなヒト種族にとっては精神面に深刻なダメージがあることも理解はできる」

と、ほんとに理解してるのかどうか怪しいことを言ったためんどくさい執事。ふー、とアナスタシア殿下はため息を吐いて執事にメモ紙を書いて見せた。

「！？」

執事はピキリと固まったけれど、殿下が何度もメモ紙をつんつんと指してみせると歯ぎしりしながら部屋を出て行った。ちらりと見えた感じ、僕らは迷宮を踏破した英雄であり失礼は許さない、部屋を出て行って、みたいなことが書いてあった。

殿下強い。

「ええと、それで……殿下はわざわざルルシャさんのことでこちらに？」

部屋にいるのは殿下と、殿下の味方らしい従者が離れたところに立っていて、あとは僕とノンさんだけだった。

殿下はにこやかにうなずいた。

『ほんとうにありがとうございます。でもどうして、ここまでしてくださったんですか？』

その質問に答えるに当たっては少し迷った。

でも、

「……殿下から手紙をいただいたからです」

僕は正直に話した。届いた手紙の最後に、ペンを置いた後に離したような痕跡があったこと。そこから推測したのは――殿下はルルシャさんを助けたいけれど、僕らにこれ以上の働きをお願いすることができなかったのではないかということだ。

なんだか恩着せがましい気がした。でも、正直に話さなければ話さないで、信用されないような気がしたんだ。この人は数少ないルルシャさんの味方なのだから、少なくとも僕は誠実でいたい。

「もちろん、ただの推測に過ぎませんでした……でもバッグをお渡しして、それだけで『後は任せた』じゃ、僕の心も済みませんでしたし、なにより迷宮攻略はルルシャさんを助けるための後押しになるだろうとは思っていたので――それでチャレンジしたんです」

「……」

アナスタシア殿下は呆然として僕を見ている。

「……あの、殿下？　もしかして僕らのしたことは、差し出がましかったですか？」

「……」

「殿下！？」

僕は思わず叫んでしまった。殿下の両目から涙がこぼれたからだ。

40（後書き）

ノンさんに膝枕されたい、ノンさんにあやされたい、ノンさんにバブゥしたい、というしょうがない僕チャンたちは本作の「ブックマーク」＆「評価」をポチッとよろしくお願いします。

ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ
ポチポチポチポチポチポチポチポチポチポチ

41（前書き）

前話ではたくさんのポチポチありがとうございました。正直者め！

41

★　アナスタシア　★

――不吉な子だ。どうして我がハイエルフの王族からこのような子が生まれたのか。

――おお、涙を流すでない。その涙が穢れていたらどうする。

泣くことすら許されなかった。

声を発することができなくとも、無言で涙を流すことはできる。だというのにアナスタシアの父は、母は、兄弟は、泣くことすら許さなかった。

（声を出せない私の思いを、この方は余さずくみ取ってくださった）

「なにを考えているのかわからない」「声が出ないだけでこれほど不気味だとは」「きっと我らを呪わしく思っているのだろう」――そんな心ない言葉をぶつけられ、いつしかアナスタシアは自らの心を閉ざしていった。

声の出せないハイエルフなんて、エルフの森においてはなんの価値もない。

であれば自分の思いなんて価値はないのだ――と。

（これは、奇跡なのでしょうか）

それだけにこの少年が、たった1度会っただけの少年が、押し殺していた自分の思いに気づいてくれたというのは奇跡としか言いよ

うがなかった。

「す、すみません。僕がなにか気に障ることをしましたか？」

「……」

涙で濡れた顔を拭く前に、アナスタシアは自分の思いを紙にしたためたかった。

だけれどなにを書いていいのかわからなかった。

この少年に、強く心を揺り動かされた。初めはバッグを持ってきてくれたとき。どれほどこの少年はルルシャのことが大事なのだろうと思った。

でもそれはあくまでもルルシャと少年の関係の話でしかなかった。自分を信じ、バッグを託してくれたことはうれしかったけれど――どちらかと言えばルルシャのためにがんばりたいという気持ちが勝っていた。

（でも、今回は）

自分のことを考えてくれた。

そのせいで危険さえも冒してくれた。

『どうして』

と書き出して、なにをやっているのだろうかとぐしゃぐしゃに書きつぶした。

（私が、この方の、これ以上の負担になることは許されない……）

あふれようとする思いにフタをする。今まで何度も何度もやってきたこと。

アナスタシアは走り寄ってきた侍女が顔を丁寧に拭うのに任せた。拭い終わったとき――彼女の心に立っていたさざ波も、静かになった。

『感極まり、お見苦しい姿をお見せしたことをお詫びいたします。このたびのこと、誠に感謝申し上げます。私にできることはあまりないのですが、必ずあなた方に褒賞を授けたいと存じます』

書けた。完璧な文章だ。

これでこの少年に報いることができる。冒険者が定住しづらいこの国に長居することはきっとないのだろうけれど、後で褒賞を贈れば自分がやれることはすべてやったことになる。

ちくり、と小さな痛みが胸に走った。

（……なに、この痛みは？）

やれることをやった自分に感じた痛み？　違う。

この国の冒険者に対する扱いの悪さ？　もちろん違う。

（……この方が、近いうちにこの国を出て行くということ……）

もう一度ちくり、と小さな痛みが胸に走った。

一度その痛みを自覚してしまうと、この人ともっと話したい、この人のことをもっと知りたい、そんな欲望が首をもたげる。

「……」

少年は、レイジは、じっとアナスタシアを見つめていた。

なにか？　という意味を込めて――なるたけ平静を装って――小首をかしげて見せた。今まで生きてきて、この仕草をすればあらゆ

る男は頬を染めてうつむくのが常だった。それはレフ人においても同じだった。反応しないのは明らかな老齢の男だけだ。

「……殿下、紙を拝借」

だというのに少年は、違った。

先日、筆談したときのようにアナスタシアの紙を借りるとそこになにか言葉を書きつけ、きっちり折ってすぐに中身を見えないようにした。

（……なんでしょう？）

困惑するアナスタシアにそれを差し出すと、

「おひとりのときに、目を通していただけますか」

と言った。彼の行動は予想外だったのだろう、冒険者仲間であるノンもまたきょとんとしていた。

「このたびは類い希なる幸運が重なり、迷宮を踏破することができました。皇帝陛下へのお目通りもかない、さらには陛下直々に褒賞を賜るなどすでに我らはもらいすぎです。アナスタシア殿下からの贈り物は謹んでご辞退申し上げます」

「っ……」

レイジはうっすらと笑みを浮かべてそう言った。

きっと気を遣ってくれたのだ。その日その日を生きているという冒険者が報酬を辞退するなんて、それくらいしか理由が思い当たらない。

悔しい。なにもできない自分が歯がゆい。冒険者であるあなたに

財貨を与えることくらい簡単なのよ、と言いたいけれど、アナスタシアは「簡単ではない」ことを知っている。

（私は、籠の鳥……さえずることすらできない鳥）

悲しみが押し寄せてきて、また涙がこぼれそうになった。

「あ、あの、殿下？　要らないというわけではなくてですね――」

レイジが弁明を言うけれど、また彼に気を遣わせている自分がたまらなく惨めに感じられた。

「……殿下、そろそろ次のご予定ですぞ」

廊下から、執事が顔を出して言った。

自室に戻るまでのことはあまり覚えていない。アナスタシアの涙の痕跡を見て執事が怒り狂い、それを侍女がなだめていた。また彼に迷惑を掛けてしまった。

レイジのことばかり考えていた。

あの膝枕をしていた女性はレイジと恋仲なのだろうか？

あるいは他のパーティーメンバーと？

年齢はいくつなのだろう？

類い希な洞察力と、明らかに高等教育を受けたように見えるけれど、どこの出身なのか？

ルルシャとの関係は？

（……あ）

いい加減、ドレスを脱いで部屋着に戻ったアナスタシアは侍女が出て行ったところでようやく気がついた。

手に握りしめていた、レイジの書きつけ。

ハッとして周囲を見るが部屋には誰もいない。そそくさと文机に移ってその紙を開いた――いったいなにが書いてあるのか。

実は欲しいものがあったとか？　皇帝陛下の悪口？　だったら面白いけれど、さすがにそれはないか――もしかして、自分への恋文とか……。

ドキドキしながら紙を開いたアナスタシアは、その文面に目を通していきながら――思わず呼吸することも忘れた。

『殿下のスカーフの向こう、包帯に書かれた魔術は声封じですね？　拝見するに殿下は声を発すると火魔法が発動する特異体質のようです。しかしながらこれは魔術ではなく魔力操作のトレーニングでも制御が可能です。もし必要があれば、ご案内が可能です』

数秒。

いや、十秒以上――アナスタシアは呼吸を忘れた。

「……ぁ、そ……」

声を出そうとして、魔術によって声が出ないことを思い出す。そしてほんのわずか発した声ですら身体の周囲に火の粉と、炎の揺らぎが出現してしまい、自分自身が――森に住むエルフとしては致命的な「火」に愛された特異体質であることを思い知らされる。

生まれてすぐに声を封じられ、幼いころにイラ立って包帯を外して魔法を使い――大木を何本も焼き尽くしたこともあった。

だけれどこれは秘中の秘。

直系の家族しか知らないこと。

対外的には「魔導師に呪われた」ということにしてある。声封じの魔術も幾重にもカムフラージュがしてあり、さらには上にスカーフを巻いていることでまず見破られるはずがない。

もちろん、ルルシャや皇帝も知らないのだ。

（どうして）

その疑問と同時に、

（私が、この体質を克服できる……？）

不意に訪れた希望の光に、奇跡のような強烈な光に、アナスタシアの心は強く揺り動かされた。

トクン、トクン、トクン、と動き出した鼓動は、いくつもの複雑な感情によって彩られていた。だけれどその感情がもたらした色彩は鮮やかで甘く、アナスタシアを陶然とさせるには十分だったのだ。

42

「うふふ」

アナスタシア殿下がお帰りになってから、なんだかノンさんがおかしい。

「うふふ」

含み笑いをしながら僕をちらりと見てくるのだ。

いつもの冒険装束に戻った僕らは、ミミノさんたちに合流すべく迎賓館を後にした。もう……こんな豪華なところで寝泊まりできることは一生掛かってもないかもなぁ。そう思うと名残惜しい気持ちもあるのだけど、でもここでは熟睡できない貧乏性でもあるので気分を切り替えさっさと出る。

「うふふ」

「……あのー、ノンさん？」

「うふ。なんですか？」

「その笑いはなんなんですか……？」

強い日射しが照りつける街を歩く。すっかり夏の陽射しで、なるべく日陰を選んで歩いていくと、レフ人も当然日陰を選ぶので、異邦人である僕らが気を利かせて日向にどくようにしている。

するとレフ人は「おっ、こりゃどうも」というふうに顔を上げるのだけど、僕らがヒト種族だとわかると怪訝な顔をしてまたぐったりとうつむくのだった。

やっぱり汗腺ないのかな？　変温動物？　とかどうでもいいこと

を思う。

「そりゃぁ、もう！　レイジくんも隅に置けませんねぇと思ったら、お姉さんうれしくて」

「えぇ……？」

なんか妙なこと言い出したぞ。

「先ほどアナスタシア殿下にお渡ししたの、恋文でしょう？」

「……」

なんか妙なこと言い出したぞ！？

「憧れる気持ちはわかりますよ。高貴な御方で、しかも気さく。レイジくんのやってくれたことに感謝もしてくださっています。でもねぇ、やっぱりこういうのは身分の差というのがあってですねぇ……あっ、でもでも、身分の差を超える恋っていうのもいいですよね！」

「あのちょっと？」

「うんうん！　私は応援します！」

私設応援団宣言をされましても。

「あのぅ、猛烈に勘違いされているようなので一応訂正しますが――」

「あっ、ミミノさんが聞いたらどう思うかしら……もしかしたらジェラシーしちゃうかも……？」

「余計なこと言わないでくださいねほんと！？」

僕はそれからあわててノンさんの勘違いを正した。アナスタシア

殿下にお渡しした内容は、殿下の体調に関わることであることを。
殿下の特異体質については実は初めてムゲさんの商会で会ったときにわかっていたのだけれど、こちらから切り出すものでもないだろうと思っていた。
今回はスカーフが薄めで、そこに透けて見えた魔術の内容がなんだかちぐはぐだったので、僕は異変に気がついた。

――もしかしたらこの人、無理矢理言葉を使わないようにすることで体質を封じ込めているのでは？

と思ったのだ。
僕も【森羅万象】がそういう診断を下してなお、殿下の体質はとんでもなく珍しいなと思った。身体の細胞のひとつひとつが【火魔法】に最適化されている――とでも言えばいいのか、言葉のように外側へとなにかを伝えようとすると、それが炎になって現れるのだ。
さらにはハイエルフの王族だからか、とてつもない魔力を持っていた。
殿下が本気で【火魔法】を使ったらとんでもないことになるぞという予感があった。
ただ、その体質は魔力操作系のトレーニングを積むことで制御できるようになるはずだ。僕はそれを、スィリーズ伯爵が「審理の魔瞳」をコントロールしていることで確認しているし、エヴァお嬢様も【魔力操作★★★★】を手に入れてから、目に見えて「鼓舞の魔瞳」をコントロールできるようになった。

「ふぅ～ん、体調、ですか……」

ノンさんはいまだ疑っている。

「とにかく、殿下にそんな思いはありませんって」

「でもすごくキレイな方でしたよね」
「それはまあ――」
「ほら！」
「ほら、じゃありません」
「でも」
「でも、も要りません。それを言うならノンさんだってキレイですよ」
「……え？」
「あんなにドレスアップして、メイクもして、もともと優しい美人だと思っていましたけど、それが磨かれて輝きを増したな、というか」
「……」
「ああ、難しいですね、言葉にするのは。とにかくノンさんも負けないくらい魅力的でしたし――ってどうしました、ノンさん？」
「……そ、そんなことを言って年上をからかうものではありません！」
「本心なんですけど……」
「ほら、早く行きましょう。ほらほら！」
「あ、ちょっと」

つかつかとノンさんは前を歩いて行ってしまった。
その肌は真っ赤で――【森羅万象】は「急な体温上昇による作用」と解説してくれた。

ムゲさんの商会にやってきたころには僕もノンさんもうっすら汗をかいていた。ムゲさんも、「銀の天秤」のみんなも商会にいた。
「よお、そっちはどうだった？」

ダンテスさんの気軽い声かけに、ノンさんは唇を尖らせたまま横を向いてしまったので僕が説明をすることになった。

うん……アナスタシア殿下に渡したメモ紙についてははしょったけどね。変に勘違いされると変なことになるし（経験談）。

「そちらはどうでした？　ポリーナさんは？」

「ポリーナは、俺たちが合流したら『務めは果たしたので自分の用事を済ませたい』と言ってどこかに行っちまったよ。『黄金旅団』の話もしてなかったんだがな……」

どこかに行った？　この国の中でレフ人以外の行動は相当制限されると思うんだけど。

大丈夫かな。

「ムゲさんのほうは本人に話してもらったほうがいいだろ。なっ、ムゲさん」

「はい」

ピッチャーから注いだ水をがぶがぶと飲んだムゲさんはニコーッと笑った。めちゃくちゃにっこりしている。トカゲ顔のレフ人が笑うとこんなふうになるのか……と驚くくらいの笑顔だ。

「示談になりました！」

「……示談？　ってことは――」

「はい、帝国金貨１，０００枚に、迷惑料で５０枚上乗せですよ！」

ムゲさんがダンテスさんの手を借りて足元のカバンをテーブルの上にドンと置くと、じゃららっという硬貨の音が聞こえた。中には目もくらむほどの金貨がぎっしりと詰まっていた。めっちゃ重そう。

「すごい！　でも、『ロロロ商会』も急に態度が変わりましたね？」
「それもこれも全部皆さんのおかげです」

ムゲさんは相変わらずのニコニコ顔で説明してくれる。
僕らが「畏怖の迷宮」を踏破したことはその日のうちに有力商会には伝わり、今日の朝一番でムゲさんは「ロロロ商会」から示談の申し出を受けたのだそうだ。
迷宮踏破の英雄を囲っている商会と事を構えることは、商売において百害あって一利なし。さらには厚かましくも、僕らの持ち帰った戦利品を売って欲しいとまで言ってきた。

「それは……なんというか、商魂たくましいというか」
「あっははは。そうですねぇ、でもわかりやすくていいでしょ？」

確かに。変なプライドやしがらみでがんじがらめになっている貴族が繰り出す権謀術数に比べればはるかにわかりやすい。

「というわけで、金貨５００枚は皆さんのものです！　迷惑料も、実際は皆さんが解決してくださったことですからすべてもらってください。帝国金貨５５０枚を差し上げます」

ムゲさんは日本円で1億5千万円から2億円ほども価値のある金貨を、僕らに分けると言った――例えそれが正当な報酬で、迷惑料が全体から見ると少額だとしても、大金には違いない。

「……と言いたいところですが、実は商会同士の取引には税金が発生するのです。１０％の税金が引かれますので……金貨４９５枚となります」

小さなオチまでついてきた。

43

「酒だ！　極上の酒を買おう！　いいか、酒と言えばイルフェスト皇国の『酒呑村』というところがあってだな、そこで金を積めば世界のあらゆる酒を買えるという……」

「新しい調合器具、希少な霊薬……なんでも買えるべな!?　そしたら全薬師憧れの『神薬』にチャレンジもできる！」

「ちょ、ちょっとふたりとも、興奮しているところ申し訳ないですが、このような降って湧いたような大金は、やはり身に過ぎたものではありませんか？　ここはやはり浄財するべきではないかと思います。なんと教会はいつ行っても寄付を受け付けていて……」

「ちょーっと待ってくださいよぉ！　ここはあーしが一肌脱ぎますぜ……今ある金貨を5倍にすれば、なんと！　全員の夢が叶うって寸法ですわ！」

「「「それはダメ」」」

「なんでっ!?」

みんながわいのわいのとお金の使い道について話しているのを、ムゲさんも楽しそうに見ていた。

「すみませんでした、ムゲさん。ほんとうは『英雄武装（ヒロイックギア）』でも見つけてくるつもりだったんですけど、そういうのはどこにもなくて」

「え？　あはは！　そんなものまで本気で狙っていたんですか。いや～、冒険者さんはすごいですね。それより迷宮のいちばん奥にはなにがあったんですか？」

ムゲさんに聞かれ、僕はありのままを話した。

この話をするのは、そう言えば初めてだな……不思議なことに誰

も聞いてこないんだもんな。
　迷宮の話がトップシークレットだから公の場では聞けない、と言うより、「お前なんぞに聞くまでもなくウチの精鋭たちが調査するから余計な先入観は植えつけないでくれ」というようなレフ人のプライドみたいなのが感じられた。

「ほぉ……コントロール型の魔道具、ですか。それ自体が『英雄武装』並みに価値があるもののようですねえ」
「やっぱりそう思います？」
「まあ、持ってくるわけにはいきませんな」
「『畏怖の迷宮』はどうなるんでしょう。僕らもいつまでも待ってなきゃいけないってことはないですよね？」
「迷宮管理局の研究チームが派遣されて徹底的に調べることになりますね。利用価値は割とすぐにわかるのではないでしょうか？　そこから報奨金を算出することになるのだと思いますよ。いやあ、きっとすごい金額ですよ、うらやましいなあ」

　ムゲさんはしきりに「うらやましい」と言っていたけれど、あくまでも僕らはムゲさんに雇われているので報奨金は折半のつもりだ。今から言っても遠慮されそうなので、もらえる日が来るまでは黙っておこう。

　僕らは、国から連絡があるまで休息を取ることになった。これが1日や2日で済むのか、もっと掛かるのかはわからなかったけれど、久しぶりに羽を伸ばせるというわけだ。
　ムゲさんからもらった報酬からお小遣いを分けて、残りの大金の使い道はまた時間を置いて検討しようということになった。
　ミミノさんは魔道具店や薬局を回ってここでしか手に入らないも

のを探すと言っていた。
ノンさんは帝国内にも少ないながら教会があるので、ひとつひとつ回ってくると言っていた。
ゼリィさんはどこで聞きつけるのか賭場に行っているようだ。蛇の道は蛇だ。
ムゲさんは、僕らが持って帰ってきたジャガーノートの宝玉や、その他魔道具の鑑定を進めている。帝国中の商会から「なんでもいいから売ってくれ」とオファーが来ており「いくらで売りつけてやりますかねぇ……いや、これはオークションに……むふふふ」と笑いが止まらないようだった。

（……ルルシャさんはいつ解放されるのかな）

皇帝はルルシャさんの待遇を元に戻すと言っていたけれど、今日の今日で僕らに会いに来ることもないだろう。
だから、ぶらりと街を散歩していた僕は、ルルシャさんにどう話そうかということや、ヒンガ老人のこと、いなくなったポリーナさんのことなんかを考えていた。
絶壁には燃えるような夕陽が落ちており、この鉄の街を赤々と照らしていた。
涼しくなるとレフ人も活動的になるのか、昼よりも多くの人たちが街を歩いている。
僕は裏通りをふらりと歩きながら――この国は極めて治安がいい――一軒のバーらしき店を見つけた。カウンターしかないウナギの寝床のようなバーだったけれど、外に面した小窓には機械人形のオモチャが置かれたりしていて、窓を通して僕は見知った人影を見つけたのだ。

（ダンテスさんだ）

中に入ろう、と思った僕は、足を止めた。スツールに腰を下ろし、背中を丸め、まるで大事なものを愛でるように――あるいは痛みをこらえるように、小さなショットグラスを手にし、琥珀色の液体をちびりちびりと舐めているダンテスさんは、僕の知っているダンテスさんじゃなかった。

悲しくて、苦しくて、たまらないというように見えたのだ。

（やっぱり……）

ノンさんのドレス姿を見て大げさに喜んでいたのも、ムゲさんから大金をもらい「酒を買う！」なんてはしゃいでいたのも、それは苦しさの裏返しなのではないかと僕は思っていた。

レオンが死んだことの。

他の、かつての仲間が死んだことの。

（そうっとしておこう）

僕は店を通り過ぎた。僕なんかが邪魔をしちゃ悪いと思った。僕と出会う前の思い出に浸る時間も必要じゃないかと。

「……」

立ち止まった。向こうから歩いてきたレフ人が、いきなり立ち止まった僕に驚いたように横をすり抜けていく。

（……そうじゃないだろ、僕）

パーティーメンバーなんだ。僕らは同じパーティーなんだ。古いも新しいも関係ない。

苦しんでいるのなら手を差し伸べるのが仲間じゃないか。それで、

ひとりでいたいと言うのならそうしてあげればいい。

（まだまだダメだな、僕は。勝手に考えて勝手に結論づけて、なにもかもわかったふりをして……【森羅万象】があるせいかもしれないけどさ）

ほんとうに優秀だからね、この星１０の天賦珠玉は。でもすぐに自分がいちばん正しいと勘違いしたくなるのが困りものだ。

僕はバーに戻ると、この街では珍しい木製のドアを押し開けた。からからん、と乾いたベルの音が鳴った。この早い時間にダンテスさん以外の客はおらず、レフ人のバーテンダーは僕のような子どもが入ってきたことに驚きつつもヒト種族だとわかるとダンテスさんの連れなのだろうと察したようだ。

僕は無言でダンテスさんの隣に座った。

「……レイジか」

「付き合いますよ」

背伸びして言ってみると――なんせ日本で学生をやっていたときにはビールすら飲んだこともなかったからね――ダンテスさんはびっくりした顔をしてから、ふっ、と表情を和らげた。

「今日は長くなるぞ」

「明日もお休みですから」

「違いない」

ダンテスさんは僕のために、アルコール度数の低い、ミルクで割ったお酒を頼んでくれた。この国に限らず自分で稼いだ金で飲むのならお酒の年齢制限はない。ただ、見た目明らかにお金持ちのボンボンが酒場に入ってきたりするとつまみ出されるけど。

２つの人生で初めて飲むお酒は――柔らかくて甘く、そのくせむせるような苦しさがあった。

「……僕、初めて飲みました。お酒」

「そうか？　それもそうか。レイジは大人びているから、たまに年を忘れてしまうんだ。１４歳だったか」

「はい」

「……それから1年だな、俺が出会ったときのレオンの年は」

１５歳のレオンと、ダンテスさんは出会ったらしい。

それからダンテスさんはいろんな話をしてくれた。

駈け出しの冒険者だったときのことを。依頼を達成していくに従って増えていく仲間、よくなっていく装備、広がる世界のことを。

失敗したことばかり覚えているものさ――今となっては笑い話となったこともおもしろおかしく話してくれ、僕も、お酒の勢いもあるのだろうか、声を上げて笑ってしまった。

お店にはレフ人のお客が入ってきたり出て行ったりと回転し、しばらくすると、

「やっぱり飲んでたべな。な？　ダンテスはこういう裏通りの、通好みみたいなバーにいるんだ」

「まあ、レイジくんも」

ミミノさんとノンさんもやってきて、４人で話は盛り上がった。

バーテンダーは「こいつらずいぶん長くいるな」という顔をしていたけれど、ダンテスさんが高価（たか）いお酒を頼むので放っておいてくれたのがありがたかった。

ゼリィさん？　もちろんこなかったよ。

でも――僕は気づいていた。１時間おきにゼリィさんが店の前を通りがかってこちらの様子を確認してくれていたことを。まあ、ミ

ミノさんとノンさんが合流してからは来なくなったんだけどね――きっと賭場に行ったんだ。それって、ほんとうにゼリィさんらしいなと僕は思う。

日付が変わって、閉店する時間になるまで僕らはいろんな話をした。まだまだ知らないことがいっぱいあるんだということを知った。そしてこれからもっとたくさん知りたいとも。

44

目が覚めると頭がガンガンした。ヤバイ、風邪ひいたかも……とか思いながら身体を起こすと【森羅万象】先生による診断で「二日酔い」であることが判明。

マジですか。これが二日酔い……最悪の気分だ。

ベッドから降りると足がふらつく。

ムゲさんの倉庫内は通気性抜群なのでもはやほとんど外と同じである。夏の、朝のひんやりとした空気を吸い込むと多少は気分がすっきりした。

「ん……」

部屋を出るとテーブル代わりに使っている作業台があり、そこに陶器のビンが置かれてあった。ミミノさんの手書きのメモで、「二日酔いの薬」と書かれてあった。……ありがとうございます。いただきます。ビンが2本あるということは残りはダンテスさんの分ですね、わかります。僕の背後からとんでもないいびきが聞こえてくるもんね。

ビンの中身をぐいっと飲むと、ハチミツで甘くして誤魔化そうとしたけれど誤魔化しきれない苦みとえぐみが口の中に残った。水でも飲もうかと【生活魔法】を使おうとして、せっかくだから井戸を使うかと思い立って倉庫を出た。

朝焼けが、商会周辺の荒れた土地を照らしている。ムゲさんの住居兼仕事場兼商店である母屋はこの倉庫に負けず劣らず掘っ立て小屋なのだけど、そこは沈黙していた。僕らが帰ってきた夜遅くにも明かりが点いていたんだけどね。

「ん？　そう言えばどうやって帰ってきたんだっけ……記憶があいまいだぞ」

昨日の帰り道が思い出せない。その事実に僕は――テンションが上がった。

だって、【森羅万象】は忘れることができないんだもの！　そうそう、忘れるってこんな感じだった、って思い出したらうれしくなったんだ。正確には「忘れた」んじゃなくて酔いのせいで「記憶しなかった」んだろうけど。

白い幹が特徴の大樹があり、井戸はその下にあった。

ポンプ式の井戸は帝国内に普及しており、なんなら上水道下水道もあるのだけれどムゲさんの住んでいるここに水道を通すほど豊かではないようだ。

僕はポンプを押して水を出す。シャアアと流れ出た水に手を浸すとキンとするほどの冷たさを感じる。じゃぶじゃぶと顔を洗うと一気に気持ちがよくなった。水をすくってうがいをして、2回水を飲んだところで出てくる水も止まった。

手ぬぐいを忘れたことに気づいたけど、【風魔法】と【火魔法】で温めれば問題ない。お手製ドライヤーである。ぶおおお、と前髪を吹き上げるように顔を乾かしていると、

「あー……それは、なんだ？」

そこにひとりの女性が立っていた。

「――――」

細長い布をぐるりと巻く、サリーのような衣服に、フード付きのショールを合わせている。

この国では珍しいヒト種族――の見た目に、僕は思いがけず言葉

が出なかった。

「すまないな。なるべく早くお礼を言いに来たくて……こんな時間に来てしまった」

ルルシャさんは、困ったように笑った。

あわてて部屋に戻った僕は着替え（だってパジャマに使っているボロ着だったから）、倉庫内に戻った。ルルシャさんにはイスに座ってもらい、僕はいつものようにピッチャーに水を入れて差し出す。

「す、すみません、お見苦しいところを見せました……」

「なにを言うんだ。私の命を救ってくれた君に、見苦しいだのそんなこと思うはずがないだろう」

「いえ、それとこれとは違うというか――と、とりあえず、ご無事でなによりです」

改めてルルシャさんを見ると、迷宮内で見たときと変わりない。疲れているような感じはあるけれどね、迷宮にいたときだって極度の緊張で疲れてたんだろうし。

「ああ……」

ルルシャさんは、少し戸惑うように、

「……その、助けてもらって言うのもおかしな話なのだが、どうして君はそこまでしてくれるんだ？」

「え？」

「私とは迷宮で会ったのが初対面だろう？　私に話したいことがある、と言っていたが……それと関係が？」
「あ……そうですよね。確かに、見ず知らずの人間から過ぎた親切を受けると疑わしいですよね」
「い、いや、もちろん感謝はしているのだが――」
「もちろんお話しします。そのために僕はこの国に来たのですから。……でもその前に」

僕はふだん持ち歩いている道具バッグから革袋を取り出した。
そこに入っていたのは小指の爪よりも小さいけれど、確かに青色に光る小さな鉱石だ。
鉱石を取り出す僕の手が震えていた――僕は緊張していた。

「！」

ルルシャさんの目が見開かれる。

「これは燐燧（りんけい）魔石ではないか？」
「ご存じでしたか」
「あ、ああ……母の遺品にもあったから」
「僕はよく知らないのですが、特殊なものなのでしょうか」
「……そうだね。今はもうないフォルシャ王国の、さる鉱山でのみ少量採れたという記録が残っている。魔力に対する反応が極めて特徴的で……」
「流した魔力を3から4倍に増幅して返すようですね」

実際に試したわけではないけれど【森羅万象】で僕は知っていた。
【森羅万象】では産地まではわからないからね。
でも、そうか……フォルシャ王国のものだったのか。
それはヒンガ老人の出身地だ。

「そのとおり。これが大量に採れれば魔術の革命が起きると言われていたんだけれどね、あいにく他に採れる場所もなく、鉱山もほどなく枯渇したと聞いたよ。……これはどこで？」

ルルシャさんに問われ、僕は居住まいを正した。

「あなたのお祖父様、ヒンガ様に僕は大変お世話になりました。そして、ヒンガ様の最期を看取りました。お祖父様がどのような方だったかを、お孫さんであるルルシャさんにお伝えするのは僕の責務だと思い、ここまで来たんです」

ついに、この日がやってきた。ルルシャさんにヒンガさんのことを話すという僕の最大のミッションの1つを、今、ようやく果たすことができる。

それから僕は一気に話した。

どうしても避けては通れないところなので、まずは自分が鉱山奴隷であったこと。

そこでの生活がどんなものだったか。

ヒンガ老人が全員のまとめ役のような立場であったこと。

毎晩、この世界の知識を教えてもらったこと。

鉱山が崩壊し、ヒンガ老人が巻き込まれたこと。

そして、老人の最期の言葉を――一言一句過たず、僕は告げた。

――もしもワシの孫に会うことがあれば、ワシは最後まで誰を恨むことなく死んだと伝えてくれんか。

――お孫さん、ですか。

――名をルルシャという。ワシに似ず、利発で、可愛らしい女の子だったな……。

自分の名前が出てきたところで、ルルシャさんの目が見開かれた。
ルルシャさんは幼いころに会ったきりで、その後ヒンガ老人がどこでなにをしていたのかまったく知らなかったようで、僕の話を聞きながら鼻と耳が赤くなっていた。

「……すばらしい方でした。なにも持たないただの奴隷だった僕に、この世界を生きていくための武器となる知識を授けてくださいました。見返りなんて、僕が出せるはずもないことはわかっていたでしょうに。だから、僕はあの人が最後に望んだことを叶えたかった……」

話しながら、感情が込み上げてきた。
ああ、ダメだ。ルルシャさんがこらえているのに、僕のほうが先に泣いてしまう。

「ヒンガ様は、ご自身を振り返りながらも、ぼ、僕のことを祝福してくださいました」

今でも、あのときの言葉が耳元によみがえるような気がする。
今でも、あのときの祝福が僕の背中を押してくれる気がする。

――この身は、罰を受けるためにあり。死ぬことでは償えぬ罪を犯したゆえ。されど、今際にて日の光を浴びるほどの僥倖に浴した。天地を統べる万能の神よ、願わくばこの忌み子に祝福を授けよ……。

今でも、僕の黒髪をなでてくれたあのシワだらけの手を頭に感じることができる。

――レイジ、お前の人生に幸多からんことを願う。

ようやく、ここまで来られた。ルルシャさんに、ヒンガ老人のことを伝えることができた。

僕は濡れた目元を拳でこすりながら、自分の身体が軽くなるのを感じていた。

目の前に、ハンカチが差し出された。ルルシャさんのものだ。

「……バカだな、君は。私の家族のために、『畏怖の迷宮』を踏破するなんて」

微笑みながら、ルルシャさんの右目からも一筋の涙がこぼれた。

「でも、ありがとう……。お祖父様のことを聞けて、とてもうれしいよ」

それから僕らはしばらく、沈黙の時間を過ごした。

ヒンガ老人を思うには必要な時間だった――というのもあるし、いつの間にか途絶えていたダンテスさんのいびきや、ミミノさんたちの部屋に続く扉の向こうでも鼻をするような音が聞こえていたから、みんなが落ち着く時間も必要だと僕は思ったのだ。

話せて、よかった。ほんとうによかった。

４５（前書き）

今日は出社しなければいけないので短いです。
しかしもう２０２０年が半分終わったってマジ……？

45

それから僕はルルシャさんといろいろな話をした。ヒンガ老人のことはもちろん、ルルシャさんがどう過ごしてきたかということを。ミミノさんやノンさん、ダンテスさんも出てきて朝食を取りながら話をした。ゼリィさんは寝てた。

ルルシャさんがヒンガ老人と会ったのはほんとうに小さかったころで、それ以降はまったく会わなかったのだという。というよりヒンガ老人の行方が知れなくなった。

当時はいまだフォルシャ王国があり、ルルシャさんの母も健在だった。その後の動乱で王国はなくなり、ヒンガ老人とも連絡が取れなくなった——ということらしい。

「……いろいろな話を聞けて楽しかった。まだしばらく帝国にはいるのかい？」

ルルシャさんに聞かれ、僕はダンテスさんを見た。

「そうだな。次の目的地が決まるまでは……といったところか。ただそう長くはないと思う」

「ルルシャさんも、もう少しゆっくりしていけばいいじゃないですか」

「それがそうもいかないんだ。今日から職場復帰だからな」

どうやら迷宮攻略４課の立て直しをしなければならないらしい。それでも、ルルシャさんの表情は明るかった。迷宮攻略課に戻れることがそんなにもうれしいのかな——と思っていたのだけれど、お父さんもお母さんもいないこの国で、自分の居場所があるというこ

とがいちばんうれしいようだ。
お昼前に、ルルシャさんは帰っていった。

「……強い人だなぁ。わたしなら、しばらく休みたいって言うべな」

ぽつりとミミノさんが言った。
心が強いだけで、大丈夫かなと心配になる。
【森羅万象】で彼女の身体を見て気づいたことがあったのだ。レフ人とヒト種族のハーフである彼女は、天賦珠玉を使えないようだ。でも見た目はヒト種族なので、この国ではやはり特別な存在だ。これからも多くの困難が待ち受けるのだろう――。

（でも、理解者もいる）

ルルシャさんがここにいる間ずっと、離れた物陰からこっちを見ていた人影があった。その人は去っていくルルシャさんの前へと回り込むように去っていったから、話しかけるか、あるいは見守るだけのつもりだったのだろう。

（なにを心配してたんだか……僕らがルルシャさんを傷つけるわけもないのに。いや、もしかしたらルルシャさんが帝国から出て行くのを心配してたのかな）

その人は――アバは、最初こそ「ロロロ商会」の回し者かと思ったけれど、常に公平に判断してくれる人なのだと今は理解している。水飴をチュパチュパしているのはどうかと思うけどね。
ルルシャさんとアバがどういう人生の交わり方をするのかはわからないけれどそれもまた平坦な道ではないだろう――なにせルルシャさんのお父さんは、アバのかつての上司で、この国の英雄みたいな人なのだから。

一躍有名人に、そして大金持ちになったムゲさんの護衛のためにダンテスさんがついていると言い、ミミノさんは使い切った薬剤の調合をするという。ノンさんも教会ボランティアに出かけたので僕はひとり倉庫にこもった。ゼリィさんはさっき起きてきてどこかに消えた。

「畏怖の迷宮」で見た石板の内容を書き写しておこうと思ったのだ。

言語の習得は記憶だけではできないので、だったら、古語を読める人を紹介してもらって解読してもらったほうが早い。解読したところでなんの役にも立たないかもしれないけれど、遺跡に残されたメッセージを読める……となったらちょっとはワクワクするじゃないか？

紙とペンを用意してさらさらと書き写しながら、手が勝手に動くことに気がついた。どこかで【書術★】みたいな天賦を学習していたのかもしれない。きちんと観察していれば勝手に学習しているけど、自分で使ってみなければわからないというのは【森羅万象】のもどかしいところだ。

（そう言えば、アナスタシア殿下はどうしてるかな）

特異体質のことを記したメモを渡したのは昨日だ。もしも殿下が、自分の体質を克服できたらすばらしいことだと思う――喉の、ものものしい包帯を取ることができるんだし。

（どんな声なんだろう）

きっと鈴を転がすような可愛らしい声なんだろうなぁ。いや、ハスキーヴォイスでも魅力的かもしれない。ギャップ萌えと言うヤツ

である。
　というか何歳なんだ？　見た目は僕と同じかそれより小さいくらいだけど、でもエルフ種族って長命なんだよなぁ――。
　そんなことを考えながらすべて書き上げた僕は、だいぶ熱中していたらしい。

「――おい、冒険者」
「わあ！？」

　部屋の入口に立っていたのは誰あろう、アナスタシア殿下の執事だ。あの感じ悪い人である。

「殿下がお呼びである。ついてこい」
「いやちょっとちょっと、勝手に入ってきてなんですかあなた！」
「なんだ、アナスタシア殿下のご依頼を聞けないのか？　それならそれで構わん。身の程知らずにも貴様が断ったとお伝えするだけだ。いやはや、害虫を遠ざけられてよかったよかった――」
「……行きます」
「なんだ？　なにか言ったか？」
「行きますって！　もう！」

　殿下直々の依頼だったら、たぶん、特異体質のことを聞きたいのだろう。
　それなら直接会って、いろいろと教えてあげたい。いくらこの感じ悪い人が腹立たしくとも……ていうかたぶんこの人、殿下の体質のこと知らないんだろうな。

「？　なんだ、貴様。こちらをじろじろ見て」
「いいえ。別に。ただあなた、殿下がどうして僕を呼ぶのか知らないんだろうなって」

「！？」

図星だったらしい。少しだけ気分がすっきりしたぞ。

「さっさと来い！」

「あ、ちょっと！　ああ、どうしよう、道具袋だけでいいか、持ち物」

書き終わった古語と絵もそのままに、僕は執事にくっついて倉庫を飛びだした。

46

バルコニーの白く塗られたイスに座っていたアナスタシア殿下は、僕が来たのを認めると腰を浮かせて表情をパァッと輝かせた。う～ん、子犬かな？　黙っていればびっくりするほどの美少女で、喜んだ顔は年相応の可愛らしさとか無敵過ぎる。気をつけないとその辺にいる男どもはころっといっちゃうね。

「……」

いや、そばに立っていたレフ人の侍女3人がほぅとため息を吐いているあたり、男だけでなく女にも刺さるらしい。しかも人種の壁を軽々と乗り越えるとは。

僕がその場で片膝をつこうとすると、わたわたして両手を振り上げる。スカートめくりするような動作で。「立て」ということだろう。

『急にお呼び立てして申し訳ありません』

すでに書かれていたメモ紙を差し出され、

「とんでもありません。礼服などは持っておりませんのでこのような格好で申し訳ありません」

殿下に勧められ、僕はテーブルを挟んで隣に座った。背中を建物に向け、お互いナナメに向かい合うようなスタイルである。こうすると筆談しやすいのだろう、いちいち紙を回転させなくていいし。

ここは殿下の住んでいるところらしく、広々とした緑の庭はこの

街では非常にめずらしいものだ。背の高い建物からはこちらが見えているだろうけれど、一番近いところでも１００メートルほどは離れている。

「それでご用件は……」

侍女がお茶を注いで出してくれる。ハーブの香りがするお茶で、すっきりとした清涼感を覚える。氷を落としてあるので夏にぴったりだ。

ここは2階部分がせり出したその下にあるので、日陰であり、吹き抜ける風は涼しい。今日は水色のドレスを着ている殿下もまた涼しげだ。

『魔力操作についてうかがいたいのです』

殿下は、今日はスカーフをしていない。触媒入りのインクで魔術式を書いた包帯を喉に巻いている。

「それは、そのぅ……」

僕はちらりと侍女たちを見た。僕の背後5メートルの位置には執事もいる。

殿下はこくりとうなずいて侍女たちを手で追いやると、僕に紙とペンを差し出した。筆談で、ということだろう。僕らの背中で彼らからは見えないだろうし。

（やっぱり、特異体質のことは秘密なのか……？）

僕が迷っていると、殿下はわずかに周囲を気にしながらひとつのメモ紙をちらりと見せた。

『私の喉は、邪な魔法使いによって呪いを掛けられ、発声できなくなったということになっています。その建前でこの国に寄越されることになりました』

その紙はすぐに閉じられたが、僕は内容を頭に刻んだ。

うなずいて、殿下には答えとした。

『【魔力操作】は体内の魔力をコントロールする天賦で、魔法を上手に使えない人にとって非常に恩恵のあるものです。【魔力操作】の天賦珠玉を手に入れるのが殿下の問題を解決する近道だと思います』

しばらくの沈黙の後、

『私にはもう、天賦珠玉を受け入れる余地（ホルダー）はありません』

『天賦珠玉を入れ替えてはいかがでしょうか？』

声を出すと【火魔法】を乱発してしまうという問題を解決できるのなら、他の天賦は犠牲にしてもいいんじゃないだろうか。

殿下はしばらく目をつぶってから、

『私の天賦は、私という「贈り物」の一部として認識されており、勝手に外したり破壊することは許されていません。また、天賦の内容は秘中の秘なので、オーブ着脱を生業とする者を呼ぶこともできません』

僕はそれを見て、お腹の中心が重くなったように感じられた。

（「贈り物」って……）

人を物扱いするのか、ハイエルフは。

僕の様子の変化に気づいた殿下は続けてこう書いた。

『エルフは森に暮らしています。森の大敵は火。ゆえに、生まれたときから火を使う私は「呪われた子」だったのです』

「！」

そういうことか。エルフにとって忌むべき象徴である「火」を殿下はその身に宿しているから……「忌み子」なのだ。

（僕といっしょだ）

ただ黒髪黒目であるというだけで実の親に殺されそうになった僕と、同じだ。

僕はふと思い返す。

初めて出会った「天銀級（ミスリル・クラス）」冒険者のクリスタ＝ラ＝クリスタはエルフと人との間で生まれたハーフエルフだった。

彼が使ったのは【火魔法】だ。そしてこう言っていた。

――私は追放などされていない。自らの意志で、あの、停滞したゴミダメのようなエルフの里を抜け出したのだ。

エルフの里を抜け出すときに彼が選んだ武器は、エルフの嫌う【火魔法】だったというわけか。

エルフのいる森には天賦珠玉を産出する「三天森林（サードフォレスト）」がある。もしエルフがそこで星の数の多い天賦珠玉【火魔法】を見つけても、誰も使わないのだろう。だからクリスタも手に入れることができた

のかもしれない。推測に過ぎないけれど。

（この世界は、あまりにも偏見に満ちている）

今さらながらに思い知らされた。

『殿下。僕に秘密を話してくださったということは、信頼していただいているということですよね？　殿下の天賦珠玉を、僕が外してもいいでしょうか』

「！？」

殿下の身体が、強ばった。

『僕には天賦珠玉を抜き出す能力があります』

僕は――僕自身の秘密に、【森羅万象】につながることを殿下に明かしていた。僕にも通じる境遇である殿下が、アナスタシアという人が、笑顔で暮らせるようになるのならなにかしてあげたいと――そう思ったのだ。

47

★　ムゲ　★

「くぁ～～今日だけで一年分の来客がありましたよ……」

くてーとテーブルに伸びているのは商会主のムゲだった。その彼の目の前に、コツ、とカップが置かれる。つんとする果実の香りがするので、ジュースを入れてきてくれたのだろう。

外はもう暗くなっていたが、室内は蒸し暑い――まるで今日一日の熱気を閉じ込めているかのように。

「こりゃ、すんません、ノンさん」

「いえいえ。お疲れのようですし、【回復魔法】を掛けておきましょうね。身体をほぐすものなので害はありませんよ」

「いやはやうれしいですねえ」

「うふふ。これも護衛任務のうちですから」

「ダメですよ、条件を引き上げようとしたって！」

笑いながらムゲは言いつつ、カップからジュースを飲んだ。甘すぎず、冷たい飲料が一日の疲れをほぐしてくれる。ノンがムゲの後ろに回って両肩に手を置いて【回復魔法】を使うと、じわりじわりと疲れが染み出していくように感じられた。日本人が温泉に浸かるときの「あ〜ぁ〜〜生き返るゥ〜〜！」というヤツだ。

「あ〜ぁ〜〜」

ムゲも思わず声が出た。

「あれ、そう言えばダンテスさんは……」

「父は私が帰ってきたので入れ替わりで出て行きましたわ」

はー、と娘のノンがため息を吐いているあたり、ダンテスは酒場にでも繰り出したのだろう。

種族の垣根を越えて誰とでも仲良くなれる男ではあるが、「憎悪の迷宮」「狂気の迷宮」「同情の迷宮」に同行しているパーティーのいくつかが街に戻ってきているという情報もあり、冒険者仲間と情報交換をしに行ったという側面もあった。

もちろん、「酒が好き」というのがいちばんなのだが。

「今日は何組くらいお客様が？」

「そうですねぇ……２０数組だとは思うんですが、数えてはいませんな」

「そんなに」

「それだけ、『銀の天秤』の皆さんが持ってきてくださった戦利品に価値があるということですわ。あっはっは」

今日の来客はすべて、「畏怖の迷宮」から持ち帰った魔術・機関部分や素材の買い取り希望者である。

一通りの希望を聞いて、あとはムゲが差配するつもりだった。

日中はこうして来客があるので、ムゲの自由時間は今から、ということになる。

「今日も徹夜で調べませんとな！　売り物を私が把握していないなんて、笑い事にもなりません。あっはっは」

「……もう、ムゲさんも無理をしてはいけませんよ？　私は先に休

みますので、なにかあったらすぐにお知らせください」
「はい。ありがとうございます！　……あ、そう言えばレイジさんはいますか？」
「レイジくん、ですか？　見ていないような……なにかご用ですか？」
「ああ、いえ、いいんです。たいしたことではないので」

ノンが去ったあと、ムゲはしばらく書類整理をしていたが、ふとレイジのことが気になった。実は彼に任せておいた猫チャンにいくつか修復箇所があり、迷宮内で直してくれたらしい。もしも彼が魔道具に詳しいのなら、戦利品の分析にも協力してもらえないか――と思ったのだ。

「レイジさ～ん」

冒険者パーティーに貸している倉庫へと行き、男子部屋へと入ったムゲ。だがそこにはレイジも、ダンテスもいなかった。

「こんな遅い時間まで、レイジさんも夜遊びですか？　――ん？」

ムゲはふと、テーブルの上に置かれていた紙に気がついた。
それはレイジが「畏怖の迷宮」内で見た石版の写しだ。

「んん？　これ、レイジさんが書いたんですかね……どれどれ、ええと、なんだっけな。これ、これ。難しい単語だな……こうか？『原初、世界は1つであり、2つに分かたれた』……？」

内容に目を通していくムゲの手が――震えた。

最初の絵は背を向け合うふたりの女性――『原初、世界は1つで

あり、２つに分かたれた』。
２つ目の絵は８つの丸が等間隔に並び、それが２セットあるために１６個の丸となっている――『天賦は２つの世界で１つ、偏ることがあってはならない』。
次は扉を通り抜ける男――『偉大なる魔法使いは、世界を超えた』。

「『偉大なる魔法使い』……『九情の迷宮』を作ったラ＝フィーツァは自分のことをそう呼んでいたはず。ラ＝フィーツァは世界を超えた。世界を超えた。世界を超えた……？　ラ＝フィーツァは別の世界の人間だった……？」

次は思い悩む男。
次は９つの扉。
次は９つの扉が、開いているように見える。
最後の絵は、最初の２人の女性が今度は向き合い、伸ばした手と手が触れ合っていた。

「ちゃ、ちゃんと調べたほうがいいのでは！？　これは『畏怖の迷宮』のものですよね……！？」

ムゲは部屋を飛び出すと、寝ようとしていたノンと、すでに眠っていたミミノを起こした。ゼリィはいなかった。
この、レイジの残したメモの重要性を話しながら、３人はムゲの母屋に保管されている簡易版の古代語の辞書を引っ張り出して内容の解読に当たった。

★　「畏怖の迷宮」　★

「九情の迷宮」を研究する専門チームは、「畏怖の迷宮」の最奥の調査に当たっていた。趣味の悪い「デスマスクの壁」を抜けた先にその部屋はあり、最重要事項として石碑の調査に当たっていた。

「ふーむ、この石碑が、魔術に関する情報をもたらしてくれているようだが」

「どうも不完全ですね。断片的な情報だけが与えられている気がします」

「そうか？　私は、この言葉を解する能力が不足しているだけではないかという気がするが」

１０人を超えるチームは、狭い部屋でやいのやいの言い合っていた。

「あ、あのぅ……やはりここを踏破した冒険者の話もヒアリングしたほうがいいのではありませんか……？」

いちばん年若の、少年のように声の高い男性研究員が言ったが、

「バカ者。素人の意見など意味がない」

「ここのすばらしい魔術式を理解できるわけがないだろ、ヒト種族に」

「そんなことよりさっさと測量を続けろ」

取り付く島もない回答だった。

「は、はいぃ……」

その研究員は測量用具を持って狭い部屋を四つん這いで抜け出て行く。後ろでは、研究員たちが石碑の前でまたも議論を交わしていた。

「とりあえず解読できていない魔術式ですがいくつか実行してみましょう」

「やってみて、実証的に確認するということか？」

「そうです、そうです。今までそれで迷宮が崩壊したとかそういうことだってなかったでしょう」

「ふーむ、一理ある、か……」

細い通路を抜け出ると、議論の声はほとんど聞こえなくなった。研究員は「デスマスクの壁」を気味悪そうに見上げ、ぶるぶると首を横に振った。

「さて、仕事仕事……っと」

測量用具を持って進もうとしたそのとき、ごごごご……と迷宮全体が震えるような地響きがあった。

「！？　な、なに、これ……」

地響きはすぐに止んで、それ以降はなにも起きなかった。先輩の研究員が「おーい、そっちも揺れたか！？」と聞いていたがその程度のものだった。

彼らは迷宮に籠もっていたせいで知らなかった。

帝国を揺るがす大事件が、自分たちによって引き起こされたということを。

48

コツ、と窓に小さな石を当てる。それから10秒ほど待つと窓の向こう側――薄い布地のカーテンの向こうに人影が現れた。僕はもう一度コツ、コツ、コツ、と3回石を当てる。するとカーテンを開いて――アナスタシア殿下が現れた。

窓が開かれたので僕は滑り込むように中へと入る。

魔導ランプの明かりが寝室内を浮かび上がらせる。

殿下の寝室はムゲさんの倉庫と同じくらいの広さで、ひとりで眠るにはあまりにも巨大な天蓋付きのベッドが中央に鎮座していた。

『ドキドキします』

さらさらと殿下がメモ紙に書きつけた。

夜更けにアナスタシア殿下の部屋を訪れたのにはワケがある。殿下の天賦珠玉を取り出すためだ。これが露見したら僕の首は胴体とバイバイしなくちゃいけないのでフードを目深にかぶって口元には布きれを巻いた。どう見ても空き巣である。

ドキドキする、なんて言った殿下は、淡い水色の絹のようなワンピースを着ている。これが寝間着なんだろうか……住む世界が違いすぎる。迎賓館で僕が借りた礼服よりも高価そうなんだけど。

それだけに首に巻かれた包帯が痛々しく見えた。

「こちらが【魔力操作】の天賦珠玉です」

昼の会合の後、僕は天賦珠玉を買いに帝国内を走った。レフ人は天賦珠玉を使えないので売っていないのかと思ったら、雑貨屋にふつうに売られていた。いや、専門店でなく雑貨屋にあるあたり、ふ

つうじゃないのかもしれないけど。

星2つのものがなかったので、【魔力操作★】を2つ買ってきた。

「急ぎましょう」

僕が促すと殿下はこくりとうなずく。緊張しているのは、誰かに見つかったら大変だろうという緊張と、これから――うまく行けば声を発することができるかもしれないという緊張の2つがあるのだろう。

殿下の特異体質は声によって【火魔法】が自動的に発動してしまうこと。魔力を操作する技術が向上すれば魔法の発動を抑えられるはずだ。

これくらいはハイエルフの王族ならばすぐにわかりそうなものなんだけれど、それをしなかったのは【火魔法】がそれほどまでにエルフにとって禁忌だから……ということなのかもしれない。「【火魔法】に魅入られた王女」というのはあまりにも外聞が悪いのか。

（……今はそんなこと考えてる場合じゃないな。集中しよう）

部屋にあったイスに殿下を座らせる。【オーブ着脱】については何度か試したことがあるので問題ないはずだ。

「とりあえずすべての天賦珠玉を抜き出すことになります。よろしいですか？」

殿下は、自分になんの天賦珠玉があるのかは知らないのだという。それすらも教えてもらえないというのは……殿下の境遇を思うと心がざわつくけれど、今はそこに感情を引っ張られている場合ではない。

この世界には【オーブ視】みたいな天賦があるので、殿下のオー

ブがなんなのか帝国の皇帝も調べられたはずではある。
僕の問いに殿下はうなずいた。僕は殿下の前に回り、胸元に手を伸ばす――殿下がビクッと身体を震わせた。

「あ、す、すみません、ぶしつけに。その、ここに触れて天賦珠玉を抜き出しますので。僕に触られるのなんて気持ち悪いかもしれませんが、少しだけ我慢してください」
「……！」

殿下は顔を赤くして首を横にぶんぶんと振っていたけれど、背筋を伸ばして両手を膝に置いた。
……いや、ほんとね。夜更けに女性の部屋にやってきて、イスに座らせて、床に置いた魔導ランプの光が照らす中、胸を触ろうとしている。
これ、目撃されたら言い逃れできないヤツだよね？

（急ごう……）

こういうのはささっと終わらせるに限る。
僕は殿下の胸に右手を載せる――殿下の身体がぴくりと動いたけれど、それだけだった。
柔らかくてすべやかで、温かい肌の感触に僕がおののきながら天賦珠玉を抜き出すイメージを頭に思い浮かべる。

「……ッ、……！」

かすかに殿下の喉から声が漏れた。すると周囲にひらりと蝶が舞うように炎が浮き上がっては消えた。これが自動発動する【火魔法】か……こんなちょっとの声だけで。
僕の手には黒色の天賦珠玉が握られていた。そこには青白く光る

文字が浮かび上がっている。

【オーブ擬態★★★】

オーブ擬態？

なんだこれ。

とりあえず残りをすべて出さなきゃ。

次に出てきたのは赤色のオーブ――黒が「オーブ強化」であるのに対し、赤は「身体特性」だ。

【生殖途絶★】

オーブに浮かび上がる文字を見て僕は思わず言葉を失った。

なんだよ、これ……。

なんだよこれは！

【生殖途絶】――つまり殿下には子どもを産ませないということか？

（ああ――そういうことか）

最初に出た【オーブ擬態】は、おそらく【オーブ視】などを避けるためのものなのだろう。殿下の身体にどんな天賦珠玉があるのかを、真実を悟らせないために。

殿下は他国に贈られた。

そこで「子を成すな」という意味なのだ、この天賦は。

ハイエルフの王家には、殿下の、アナスタシアというひとりの少女の人生を、もてあそぶ権利があるというのか。ふざけるなよ。厄介な特異体質で生まれてきた彼女に、さらに重荷を背負わせることがハイエルフ王家の――家族のやることなのか？

「……？」

怒りに震える僕に、殿下はきょとんとした顔をする。
一度経験したことなので二度目は特に殿下は声を漏らすこともなかった。僕が持っている天賦珠玉はまだ見えていないはずだ。

「……今は、すべての天賦珠玉を抜き出します」

話をするのは後にしよう。僕は天賦珠玉を革袋に入れると、殿下の胸に手を伸ばした。
最後に出てきた天賦珠玉は極めて珍しい――青色の天賦珠玉、「魔法特性」のものだった。

【魔力伝播★★☆☆】

今まで見たことのない星のパターンだった。星は4つなのに、そのうち2つの星がカラッポのように見えるのだ。
正直なところホッとしていた。【短命】とか【不運】とかそんな天賦珠玉があるのではないかと思っていたからだ。
でも、

「ッ！？」

最後の天賦珠玉を抜き出した瞬間、殿下の身体から魔力が噴出し――それと同時に火の粉が周囲に舞う。
マズイ。【魔力伝播】というものは、なにか、殿下の魔力を封じ込めるようなものだったのか？
僕は【魔力操作★】をふたつ取り出し、

「これを！」

殿下に手渡すと、２つの天賦珠玉は殿下の身体に吸い込まれていった――と、奔流のような魔力は収まったように見えた。

「……どう、ですか？」

「……」

無言で僕を見てウンウンとうなずく殿下は、先ほどの魔力が暴走しそうな気配はなかった。

「少し、声を出してみましょう」

僕は手を伸ばし、殿下の首に巻かれていた包帯を外した。

「……」

「怖がらないで、大丈夫」

「！」

僕が殿下の手をそっと握ると、殿下は小さな口を開いた。

「あ……」

僕は初めて殿下の声を――思いがけず漏れてしまったような声ではなく、ちゃんと本人が発しようと思った声を聞いたのだ。

それは透き通った、クリスタルのように美しい声だった。

ちりり、と小さな火の粉が周囲を舞った。だけれど、それだけだった。

「！」

殿下は僕を見る。

僕はうなずく。

「訓練しましょう。もっと星の数の多い【魔力操作】の天賦珠玉があれば、きっと完璧にコントロールできますよ」

「――――」

殿下の瞳に涙が浮かぶ。そしてぽろぽろとこぼれる。

「～～～っ、～～～～～」

うれしくて泣いてしまうときでさえ、アナスタシア殿下は声を抑えている。

これまでの生活を想像すると、やりきれない気持ちになる。だけどこれからは違う。いつか好きなときに声を上げて笑い、歌だって歌える、そんな日が訪れるはずだ。

僕がそう――感じ、一仕事終えたと思ったときだった。

少し、油断していたのかもしれない。

いや油断していなくともこれはあまりに予想外だった。

パリンッとガラスが割れて何かが飛び込んで来た。それは僕の左肩に突き刺さった――毒が塗られている、麻痺毒が、そう【森羅万象】が警告してくれたけれど僕の身体から力が抜けていき、ついに前のめりに倒れてしまった。

「――アナスタシア様」

窓から入ってきたのは、エルフ。

「黄金旅団」のポリーナさんだった。

49（前書き）

短くてごめんなさい。

49

ヤバイ、身体の半分がしびれる。ずっしりと血の巡りが悪くなったような感覚で、僕は左半身を床に付けて倒れていた。

「賊め、殿下から離れろ！　――殿下！？　お離れください！」

アナスタシア殿下は僕を守るように覆いかぶさってきた。そうか、僕は今はこんな格好だから……。

「で、殿下……僕、知り合……顔を……」

舌がしびれて思うように話せない。ポリーナさんなら、これが誤解だとわかってくれるはずなのに。

いや――ちょっと待てよ。なんでポリーナさんがここに？

元々アナスタシア殿下を知っている感じはあったけれど……。

「殿下！」

つかつかと歩み寄るポリーナさんの気配と、ガラスが割れればさすがにわかるのか廊下もばたばたと音がする。乱暴なノックとともに「アナスタシア様、どうされましたか」という声。

これ、僕、結構ヤバイ状況では……？

「殿下、ハイエルフの貴き血を引く御方が、なぜこのような賊をかばうのですか」

「……」

魔法を使うか？　いや、麻痺のせいで魔力をうまく練ることができない。

手元に紙もペンもなく、文字を書けない殿下は僕をかばっている。そうだ、確か道具袋に体内の毒素を排出するような飲み薬があったはず。僕は右手を道具袋へと動かそうとする――ところへ、

「ッ！？」

手、踏まれた！　痛ってぇ～～！

「！」

殿下はポリーナさんの足に、タックルするように飛びつくけれどポリーナさんはするりと足を引いてかわした。

「で、殿下……？　いったいどうなさったのですか？　この者が、一体……？」

ポリーナさんは目元だけ見えている僕の顔を、ようやく見た。

「！？　まさか、お前は――」

気づいてくれたか。確かにここは薄暗くてよく見えないのはしょうがないけどさ……。

僕の黒目ならふつうわかるよね。

「殿下！　失礼します！」

ゴンッ、ゴンッ、という鈍い音が響いたと思うと、メリメリと部屋の扉が内側に割れて廊下の明るい光が射し込んだ。大槌でもって

無理に部屋を破壊したらしい。
ハッとしたポリーナさんはすごい速度で窓から逃げていく――ってちょっと待って待って待って！　僕を置いてかないでよ！？
完全武装したレフ人の兵士が3人、部屋に踏み込んで来る。大槌を軽々振り回すようなゴツイのもいる。強烈な魔導ランプの光が僕と殿下を照らし出す――。

「――ッ」

殿下がそのとき、口を開いた。
右手にボウッと炎が灯る。

（マズイ――それは、ダメだ）

まだまだ殿下は魔力のコントロールができない。ようやく【魔力操作】を手に入れたばかりだっていうのに、ここで【火魔法】を使ったら辺り一面火の海になる。
僕は右手を伸ばして殿下の口元を塞いで、引き寄せる。

「！？」

片手で殿下を、後ろから抱きしめるような格好になってしまったけれど、ここで殿下を人殺しにはできない。

「！？　！？　！？」

真っ赤になってわたわたしているアナスタシア殿下が可愛いけど、

「賊がァァァ！」
「殺せえええええ！」

「プルシャアアアア！」

兵士3人はブチきれてる――っていうか大槌振り回してるあの兵士がヤバイ。

僕は急いで道具袋に手を伸ばし、飲み薬を抜き取った。指先が狂って小さなビンが落ちてしまうけれど、殿下が気がついてくれた。

「薬ですか？」と目でたずねられ、僕はうなずく。殿下がフタを外して僕に薬を飲ませてくれる――体温が一気に上昇するような熱さを感じる。

「殿下、離れてください！」

兵士3人が殺到する。とりあえず、少しだけでも時間を稼げれば――薬が効いて僕も逃げられるはずだ。

「プルシャアアアア！」

いやでも無理かも!?　あの大槌振り回してるヤバイヤツ、僕を殺す気だよね!?

あと数メートルで到着してしまう。殿下が僕を抱きしめるようにしてかばってくれる。ああ、クソッ、どうしたら――。

ウィィィィイイイイイイイイイイイイ!!

その瞬間、耳に突き刺さるような警報が鳴り響いた。

僕の侵入がバレたのかと思ったけれど、ぎょっとした顔で兵士たちも止まったのでどうやら違う。

『緊急警報。帝都上空に所属不明の飛行船、武力攻撃事態の可能性あり。戦闘員は第1種警戒態勢に移行せよ。これは訓練ではない。

繰り返す――』

窓の向こう、レフ魔導帝国上空にサーチライトがいくつも光の手を伸ばした。

殿下の寝室に寝転んだ僕は、見た。

サーチライトが照らし出したのは銀色の流線型を持つ飛行船――「月下美人」だった。

「月下美人」の飛行は安定していなかった。ゆらりゆらりと揺れながら、砲台から火を放つ。

（――こっちに向かってるじゃないか！！）

巨大な火の玉は放物線を描いて壁の向こうに着弾すると屋敷中を揺るがすような震動とともに爆発した。

50

★　「月下美人」　★

サーチライトの光が舐めるように船体を照らしていく。
だが甲板は無人だ。というのも飛行中に甲板に出るのは強風に煽られ、ほぼ自殺行為なのですべての作業は船内でできるようになっている。

「お頭、やべえっすよ！　帝国の軍用飛行船がわんさか出てきやがった！　死体にたかるハエくらいいっぱいだ！」
「おめえ、そういうのはな『雲霞のごとく』って言うんだ。だが飛行船がそれほどの数あるとは思えねえから、あまり正確な例えではねえな……」
「言葉のお勉強やってる場合かよ！？」

広いコントロールルームは最低限の明かりしか点いておらず、薄赤い光に包まれていた。司令官シートが中央にあり、周囲には伝声管や各種船内機能を実行するためのコントロールパネルが存在していた。
正面の分厚い窓の向こうには夜空が広がっており、向きは未開の地「カニオン」に向いているので黒々とした大地しか見えない。
帝国があるのはその背後だ。

「どだい無理だったんだ！　こんなでっかい飛行船をたった5人で動かすなんて！」
「俺とお嬢は触っちゃいねえから、実質3人だな。カッカッカ、痛

快じゃねえか。おめえらは3人でこれほどの、未曾有の飛行船を操作したんだぞ」

「だから笑い事じゃねえって!?　どーすんだよ!　もう燃料はほとんどカラッポだぞ!」

「落ち着けや。俺らは空賊『満天かいな』だぞ。この大空を腕を広げてつかんでやるという意味だ」

「空賊になったのなんてお嬢が来てからの数か月だろうがよ!?　それまでは山賊だったじゃねえか!」

「山賊『山塞烈風』という名前も、いわんやグッドセンス」

「もうアンタの考えてることがわかんねえよ!?」

実のところ「月下美人」は帝国領内から逃げ去ったわけではなかった。その燃料がほとんど尽きかけていたために、不時着しようとした山陰に空洞を見つけ、緊急避難したのだ。

幸運にも追っ手をまくことができたようだが、問題は燃料をどうするかということである。食料は十分に備蓄されていたので5人程度ならば1か月どころか1年は保ちそう――腐りさえしなければ――だったが、魔道具に明るくない彼らは燃料をどのように見つければいいのかわからなかった。この大きな船内に予備燃料が隠されているのでは?　と考え、あちこちを捜索していたところへ起きたのが、大空洞の崩壊である。

「畏怖の迷宮」攻略後、帝国研究チームが最奥の小部屋で「実験」をした結果、迷宮に隣接する大空洞にも影響があって崩壊が始まったのだが――もちろん「満天かいな」の彼らが知るよしもない。さらには大空洞に棲み着いていた触手ヤモリの皆さんも知らない。ただ逃げ惑うだけだった。

ドォンッ……と船体が響くような音が聞こえてきた。

「撃ったのか?」

「あ、ああ……とりあえず威嚇射撃でもしとかねえと、すぐに追い

つかれそうだったから。ちゃんと広そうな空き地に落とすよう言っといたから大丈夫だ」
「そうか。なら安心だ」

その砲撃はアナスタシアの住む館の庭に落ちたものだった。

「で、お頭。お嬢は？　もし戦闘になったらお嬢の力が――」
「ダメだ。お嬢には戦わせねえ」

有無を言わせぬお頭の口調だった。

「それをやったらなんの意味もねえだろう。俺たちはお嬢に救われた。そんで今、お嬢が苦しんでる。お嬢を助けるために飛行船を手に入れようって話になったのに、お嬢に力を使わせたら、またあの黒い力がお嬢の身体を蝕むことになる」
「わかってる……わかってるけどよぉ」
「わかってるならどうにかしろい。おめえはこの飛行船唯一の技術者（エンジニア）じゃねえか。俺たちゃおめえに懸けてんだよ」
「～～～～」

男はガリガリと頭をかいて、

「わーった、わーりましたよ！　今やるべきは帝国からの脱出。最悪、燃料を使い切ることになるがそれでも俺たちが生き延びることを最優先にしますぜ！」
「それでいい」
「お頭はなにするんだ」
「俺か？　俺にやれることなんざねえから、この特等席で最高のショーでも眺めながら一杯引っかけ――」
「だったら砲手になって弾の一発でも撃ってくれよ！」

「……へいへい、人使いの荒れぇ部下だ」

肩を怒らせて去っていく男に続いて、お頭も立ち上がり、歩き出す。

「お嬢……負けんじゃねえぞ。天賦の副作用なんぞに」

つぶやくと、砲台のあるフロアへと向かった。

★

爆発の揺れで全員が動きを停めた。

「な、なんだ!?」

「敵襲!?」

「プシャア!?」

殿下の部屋に踏み込んできた兵士たちがあわてた表情を見せる。大槌を振り回してる大男は部署内でのコミュニケーションに問題はないのだろうかと僕は勝手な心配をしてしまう。

（動く――よしっ。さすがミミノさん！）

左半身はもう動くようになってきた。刺さった矢を抜きたかったけれど、手の届かない場所なのでこれはあきらめるしかない。

「あ、賊が動くぞ！」

「仕留めろ！」

兵士たちは僕を優先することにしたようで、再度襲いかかってくる――けれど、ここまで身体が動くようになれば魔法の行使も問題ない。

身体を巡る魔力を使って発動する「魔法」は、肉体に異常があると発動効率が著しく落ちる。ケガならさほどではないのだけれど、毒や病気はかなりキツイ。先ほどまでの状態なら発動できても暴走しそうだったのだ。

「殿下、目をつぶって」

「！」

走り寄る3人の兵士に向かって、僕はかなり高めの魔力を入れ込んで【光魔法】を放った。カッと室内が明るくなり――目をつぶったまぶたの裏でも感じられるほどの明るさで――兵士たちは叫び声を上げてよろめいた。

その隙に立ち上がった僕は、

「殿下。僕は行きます。外も危ないみたいなので安全なところに避難してください」

「……」

「殿下？」

手をつかんで離さない殿下は、なにか言いたげに僕を見つめていた。だけれど殿下は、口だけで「あ・り・が・と・う」と形を作って――僕の手を離した。

（なに？　なんなんだ？　殿下が、なんだか泣きそうな顔をしてる）

なにか大切なことを言いたいのに、言えない――そんなふうにさ

え見えた。

こういうとき【森羅万象】は役に立たないな。

いや……役に立たないのは、僕のほうか。殿下がなにを考えているのかまったく見当もつかないなんて。

「プルシャアアア！」

ヤバイ、大槌バーサーカーの視界が戻った。

僕はあわてて走り出し、一瞬迷ったけれど殿下の天賦珠玉を入れた革袋をつかむと自分の道具袋に突っ込んだ。

この天賦珠玉を殿下が見る必要はないと思うし、ここに残していったらいったいこれがなんなのかという話になりそうだからだ。

僕はポリーナさんが壊した窓から外へと飛び出した。

「うわあ……」

サーチライトに照らされた「月下美人」が逃げていき、それを追尾するようにいくつもの飛行船が、帝国中から飛び立っていくのが見えた。

『一般市民は屋外に出ることを禁止する。頑丈な屋根や建築物の中で待機すること――』

警報はいまだ鳴り響いていた。

50（後書き）

黒い力に苦しんでいる「お嬢」はいったい何者なんだ……。

正体がわかってしまった勘のいい人は、是非「ブックマーク」と、このページの下にある「評価」から★をつけてくださいませ～。

51

庭には巨大な穴が空いていて、土砂が飛び散り、黒煙が上がっていた。「月下美人」には相当に強力な砲弾を積んでいたようだ。

肩に刺さった矢については、近くの樹木に絡みついたツタに【花魔法】を掛け、矢をがっちり握らせた。で、力任せに抜いて（痛みのあまり涙が出て）、【回復魔法】とミミノさんの傷薬で応急処置をした。

ありがとう……ミミノさん。三度の飯より薬草が好きなミミノさんに今度なにかおもしろい薬草をおごります。

館の使用人や兵士たちが出てきて大騒ぎになっているので、僕は【疾走術】で足音を殺しながら庭の隅を走っていく――と、

「あなた……やっぱりレイジさん」

「！！」

上から声が降ってきた。見上げたそこにいたのはポリーナさんだ。館の高い塀の上で、弓に矢をつがえた状態で。

「アナスタシア殿下を襲うとは、どういうつもりですか」

「襲ってませんよ……正体がバレないようにこんな格好をしてるだけです」

「……」

きりきりと弓がしなっている。めっちゃ疑われてるなー……。

「僕は殿下に頼まれて『畏怖の迷宮』を攻略したんですよ？　今さら害するワケがないじゃないですか」

「それなればなぜこそこそと？」
「……それを話す前に、あなたは殿下の味方ですか？　敵ですか？　陰でこそこそしているのはあなたのほうでしょう」
サイレンが聞こえている。塀の向こうの建物でも人々が騒いでいるのが聞こえてきた。
程なくしてこのあたりにも人が来るだろう。そうなれば――え、そうなれば僕の逃げ場がなくない？
「レイジさん、あなたが殿下に手を出さないのならばそれでいい。しかし、次に近づくことがあったら容赦しない」
ポリーナさんは身を翻すとひらりと塀から飛び降りた。
……いやほんと、全然会話できない相手だったな。「確認せずに撃っちゃってごめんね！」くらい言ってくれてもいいのに。いやそんな軽い口調で言われたらイラッと来るけど。
「なんか、密命を帯びてる感じだよな……ポリーナさんって。『黄金旅団』のパーティーに潜入して入国するほどだし……ううむ」
ま、いいか。もう僕には関係ないし。
アナスタシア殿下はこれから魔力を使う練習をしていけばきっと問題なく生活できるようになる。それで十分で、僕がそこに関わる必要はもうないだろう。
（……さっきなにか、言おうとしてたけどな……）
なにを言おうとしてたんだろう。感謝かな……いや、もっと違う感じはしたけど……わからないな。

「わからないことは考えてもしょうがない」

僕は気を取り直して走り出す。敷地から脱出して街中に出るタイミングで盗賊スタイルを解除し、冒険者スタイルに戻る。右肩から出た血の跡があるけど暗いからまぁなんとかなるだろう。

「さて、ムゲさんの商会に帰らなきゃなあ……」

街中では人々が、突如現れた「月下美人」とそれを追う飛行船を見上げては興奮した口調で話している。

「がんばれ、帝国！」
「あれが『月下美人』かあ、すごいなあ」
「追いつくのかな？　追いつく？　どうかな？」

そんな喧噪を聞きながら僕は歩いて行く。いろんなことがあった一日だったけど、さすがにもう帰ってゆっくり眠りたい……そして明日の昼まで惰眠を貪るんだ……。

ふと見上げた空「月下美人」がちょうど真上を通り過ぎていく。その一室の窓ガラスに人影が――僕を見下ろしているように思えた。

「……？」

強化された視覚でも、向こうの部屋が暗くてよくはわからなかった。

だけれど――そこから目が離せなかった。

（……そこにいるのは）

ぺたりと、窓ガラスにつけられた白い手のひら。
僕はその手を、どこかで見たことがあった。

（なんでだろう。思い出せない……）

モヤがかかったように記憶が曖昧だった。例えるならば天の川を挟んだ織姫と彦星は、そこに相手がいるのがわかっているのに雨雲によって遮られお互いを確認できないような――。

「お、おい、ありゃあなんだ……？」

「月下美人」が通り過ぎたあと、戸惑ったような市民の声が聞こえてきた。
ちらりとそちらを見て――僕はぎくりとして立ちすくんだ。

「――マジかー。このタイミングで……」

それは、夜空へと伸びる一本の光。
僕ら以外の攻略チームが向かった「九情の迷宮」の1つが、ついに攻略完了となり、迷宮から光の柱が立ち上った瞬間だった。

★　レフ魔導帝国皇帝　★

「九情の迷宮」の攻略情報は日々、皇帝のもとに届けられていた。
「畏怖の迷宮」が望外の攻略成功で勢いづいていた帝国中枢は、攻略1課が数々のトラップをくぐり抜けて最後の試練らしき場所にまで到達しているという一報に、さらに盛り上がっていた。
今夜中には攻略完了するかもしれない、となると多くの閣僚が遅

い時間まで皇帝も臨席している会議室で、軽食と少量の酒を楽しんでいた。

「いやはや、攻略１課は何時頃に攻略完了しますかな」
「まさかの攻略成功が２つとなれば、今回は大成功でしょう」
「１課の成功は予想の範囲内とはいえ……」

元はと言えば攻略１課による「憎悪の迷宮」攻略を進めることが予定されており、そこへ「月下美人」が盗難されるという一大事件が起きたせいで、それを挽回するために一気に４迷宮の攻略となったのだ。

１つの攻略完了までに多くの犠牲が出ることはほぼ確実なので、皇帝とはいえおいそれとは攻略の号令を下せないのが「九情の迷宮」だった。

攻略１課には戦闘も、魔道具研究も、エース級の人材がそろっているので「憎悪の迷宮」攻略成功は確実視されていたが――まさか先に「畏怖の迷宮」が攻略されるとは、というのが閣僚たちの偽らざる心境だ。

そのさなか、「月下美人」が帝国上空に現れたものだから、会議室はにわかに作戦本部となった。

「ありったけの飛行船を出せ！　絶対に逃すな！　ただし町の上では撃つなよ！？」

帝国軍の大元帥がその場を仕切り、命令を下す。

すでに「月下美人」は帝国領から逃げ出そうとしており、帝国軍所有の飛行船がそれを追いかけるという局面になっていた。

「この際、足の速い商会の飛行船に先回りをさせてはいかがか」
「商会が承服しますかな」

「そこは無理矢理にでも徴発すればよろしい」
「いや、『月下美人』を奪還し、その栄光に浴するチャンスだと言い含めれば、喜んで差し出すでしょう」
「商会に『栄光』が通用しますか？『金』のほうがいいのでは？」
閣僚たちがああだこうだ言っていたが、
「『月下美人』奪還成功の暁には、最も活躍した商会に飛行船を1艇下げ渡すと伝えよ。それで動かぬ商会は放っておけ」
「はっ！」
皇帝が決断すると、大元帥が命令に書き換え、号令は帝国中に下った。
飛行船を持つような大型の商会には通信用の魔道具があるので、皇帝の名が署名された下知を見るや、すぐに飛行船を飛ばす商会がいくつも現れた。
帝国上空は、サーチライトの長い腕と、空飛ぶ船とが入り乱れるようになった。
「おお！　あの光は！」
そのときひとりが窓の外を指差して叫んだ。
「憎悪の迷宮」を攻略し終わった光が柱のごとく立ち上ったのだ。
ガタガタと全員が席を立ち、そちらを見やると、
「陛下」
ひとりの伝令が息せき切って駈け込んできた。興奮する閣僚をよそに、伝令は皇帝のそばへと寄ると小声で報告した。

「……アナスタシア殿下のお屋敷に砲弾が落ちたようです」
「なに？」
「殿下はご無事ですが、それと前後して賊が侵入したという報告もあがっていまして……お屋敷の使用人が混乱しているだけかもしれませんが」
ふむ、と皇帝はあごひげをしごいてから言った。
「……アナスタシアをこちらに連れて参れ。『月下美人』奪還と『憎悪の迷宮』攻略という2つの慶事が起きた今、あれをそばに立たせておくことに意味もあろうな」
皇帝の中では「月下美人」を取り返すこともまた決定事項なのだった。
深々とうなずき、伝令は会議室を出て行った。

51（後書き）

七夕なので。

52

★　「月下美人」　★

「お頭ァ！　なんか崖のほうが明るくなってますぜ！」
「うん？　そうか。あんなところにもライトがあるんじゃねえのか――おい、砲弾ってえのはこれでいいのか？」
「そりゃ酒樽です」
「なるほど。……ふうむ、トウキビの酒だな。なかなか寝かしてあってうめえ」
「なに飲んでんすか！？」
「俺にもくだせえ！」
「そういうことじゃねえだろ！？」

魔導飛行船「月下美人」の砲台では3人の空賊が大騒ぎしていた。
6門ある砲台を3人ですべて使うのは不可能だったが、「とりあえず最初の総攻撃くらいは派手にやろう」と6門すべてに砲弾を装填していた。
技術者である1人は操舵室で残りの燃料とにらめっこしながらどうやって帝国の猛追をかわしていくかについて頭を悩ませているはずだ。
そしてもうひとりの乗客――「お嬢」はまだ、部屋だ。

「っていうか、お頭。俺は話を聞いてもピンと来なかったんですがね、どうしてコイツを盗んだときにゃ逃げ切れたんですかい」
「ああ……この船にゃ『隠密迷彩（ステルス）』っつう魔道具――『英雄武装（ヒロイックギア）』が搭載されてるようでな、そいつを使ってみたと思いねえ。パァッ

と消えたように見えるってえ寸法よ」
「そんじゃ、また使えばいいんじゃねえですかい？」
「バカ野郎。できるんならしてらあな。燃費が死ぬほど悪くてよ、燃料をバカ食いするもんだから今使ったらほんの数分消えるだろうが、その後は真っ逆さまに地に落ちるぞ」
「ゲッ」

お頭に話を聞いていた、頭がつるっぱげの空賊が舌を突き出すと、

「お、お頭、崖に光が！」

もうひとりの出っ歯の空賊が叫ぶ。

「それはさっき聞いたってんだよ。耳にたこができらあな」
「違いますって！　別のとこです！」
「別のライトがあるのか？　そりゃ１基見たら３０基って言うからなあ」

するとハゲ空賊が、

「お頭、そりゃあ人類の敵、キッチンを守る母ちゃんの敵の『Ｇ』ですぜ」
「ああ、５基だったか」

わっはっは、とお頭が笑っていると、

「違いますってえ！　明らかに違う光なんですよお！」

出っ歯が叫ぶ。

「それが9本！　帝国を囲むように光の柱が！！」

★　「畏怖の迷宮」　★

一度揺れたと思った迷宮内は静まり返り、測量のために「デスマスクの壁」を測っていた研究員は一度、最奥の小部屋へと戻った。

「まったく、なんでこんな狭い通路を四つん這いでいかなきゃいけないんだろ……」

ぶつぶつ言いながら小部屋へ戻ると、ちょうど中の研究員たちも「休憩する」と大部屋へ出て行くところだった。

「君、見ていてもいいが勝手に触るのはやめたまえ」

「あっ、はい」

甲高い声で答えると、誰もいなくなった最奥の部屋を見渡した。

「狭いよなぁ……石板以外には特になにもないし……」

ふと、石板がちらちらと青白く光ったような気がした。

「……」

これでもいっぱしの研究員である。測量をするために研究チームに入ったのではない――測量だって大事な仕事であることはわかっているけれども。

「先輩たちが触ってみて実証検査とかやってたんだから、僕だっていいよね……？」

ちらちらともう一度石板が青白く光った。これは石板が「そうだね」と言っているかのようにも感じられた。「悪魔のささやき」と言ってもいいし、「人というものは自分の都合のいいように解釈する生き物だ」と言ってもいいだろう。

研究員は他のみんなが出て行った小さな穴を見やると、

「いよ～しっ」

両手を開いて閉じて、グーパーして、ぺろりと舌なめずりして石板に手を伸ばした――ときだった。

《――「憎悪の迷宮」の制御システム解除を確認。「九情の迷宮」は9分の5の過半に達し解除されたため、全体最適の後、「離界壁」の強制開口を執行します――》

青白い光とともに文字が宙に浮かんだ。それは古語で書かれてあったが研究員にはかろうじて読むことができた。

地面が揺れ始め、小刻みな振動からすさまじい縦揺れへと変化する。

「いだっ！？」

尻餅をついた研究員に、

「き、き、君ィ！　なにをしたんだね！？」

這いつくばりながら先輩研究員がやってくる。

「まだ、やってませんでしたよぉ～！？」

彼は涙目で叫んだ。

★　ムゲ商会　★

ミミノ、ノン、ムゲの3人は、解読が終わった文字――レイジが「畏怖の迷宮」の壁画を書き写したらしい内容を見つめていた。

ミミノは内心驚いていた。

レイジの知性には目を瞠るところがあると思っていたけれど、まさか一目見ただけの壁画の模写を完成させるとは。

（もしかしてレイジくんは、記憶に関する「天賦」を……？）

そう考えそうになって、首を横に振る。今はそれよりも、この内容だ。

「ムゲさん、ノン、この内容で間違いないんだべな？」

「ええ。古語に関してはミミノさんのほうが強いでしょう？　私は教会ですこし習ったきりですから」

ミミノはハーフリングの里で、薬品調合に関する書籍を読むのに必要だからと古語を習っていたために、ムゲよりも古語をよく読めた。ムゲの辞書も助けになった。

最初の絵は背を向け合うふたりの女性。

『原初、世界は1つであり、2つに分かたれた』

２つ目の絵は８つの丸が等間隔に並び、それが２セット、１６個の丸。
『天賦は２つの世界で１つ、偏ることがあってはならない』

３つ目の絵は扉を通り抜ける男
『偉大なる魔法使いは、世界を超えた』
この「偉大なる魔法使い」は「九情の迷宮」を作ったラ＝フィーツァのことだと考えられる。

４つ目の絵は思い悩む男。
『偉大なる魔法使いは、元の世界に戻る方法を考案した』

５つ目の絵は９つの扉。
『世界の理である数字は「８」。これを超える９の迷宮を造れば世界の理を超えることができるはずだ。「九情の迷宮」は長い年月を掛けて感情のエネルギーを溜め込む』

６つ目の絵は９つの扉が、開いている。
『「九情の迷宮」の過半を攻略すれば、９つすべての迷宮を解放する。それとともに溜め込んだエネルギーも解放される』

最後の絵は最初の２人の女性が今度は向き合い、伸ばした手と手が触れ合っていた。
『莫大なエネルギーは、２つの世界をもう一度つなげるだろう』

「２つの世界がつながる……って、レイジくんが前に言ってたな」

ミミノは、クルヴァーン聖王国で起きた混乱についてレイジからある程度の情報を教わっている。「裏の世界」と呼ばれる場所があ

り、そこからやってきた「調停者」との戦い、そして「調停者」が召喚したウロボロス――巨大な蛇とはミミノたちも戦った。

「ミミノさん、攻略した迷宮はすでに4つあります。そうなればあと1つで過半数を超えてしまいますよ」

「ちょ、ちょっと待ってください、おふたりさん。もうひとつの世界ってのに心当たりがおありなんで？　この国じゃ全然聞いたこともありませんよ！」

「帝国が把握せずにもう1つを攻略してしまったら危険じゃないか？　ムゲさん、誰かに報告してきたほうがいいべな」

「そ、それがいいと思います。夜も遅いですが、迷宮管理局の夜番はいるはずです。行ってみましょう」

ムゲは言って、紙をまとめて立ち上がる。

がちゃりと家のドアを開けると目の前に大男が立っていた。

「うわあああああ!?」

「ムゲさん!?」

「何者だべな!!　――ってダンテス!」

そこにいたのは呆然と突っ立っているダンテスだった。

「お、おい、アレを見ろ」

ダンテスが指差したのは――この建物の上、はるか遠くの上空だった。

そこにはすでに、9つの光の柱が立っていたのだ。

52（後書き）

5基ジョークはたまたまそういう発音だったという感じでひとつ。

53

夜だというのに帝国の市民は家から出て空を見上げていた。多くのサーチライトが「月下美人」を追い、のみならず多くの飛行船までもが空を駈ける。

そこへ、9つの光の柱が立ち上ったのだ。

光の柱は帝国を囲むようにぐるり、等間隔で屹立していた。

あまりにも非現実的な光景に人々はなにかのショーではないかといぶかった。

「……なんで星が見えないんだ……？」

僕は空がよく見える場所――付近でいちばん高い建物の屋上に上っていた。5階建ての屋上はなぜか物置になっており、テーブルやイス、工具や木材といったものが雑多に置かれてあった。

空に目を凝らすと、先ほど僕の真上を通っていった「月下美人」が1艇、すばらしい逃げ足を見せており、それを5艇ほどの飛行船が追いかけている。その他の飛行船は左右に展開して、もし仮に「月下美人」が旋回でもすれば追いつけるかもしれない――といった淡い期待でも持っているのか、あるいは追跡を半ばあきらめているのか、そんなふうに見えた。

だけど僕が気になったのは空だ。殿下の部屋に入る直前は、美しい星空が見えていたというのに今では夜空は真っ黒に塗りつぶされている。月も、霧でも掛かっているかのように光量が抑えられ、地上こそ街灯が明るいものの僕の立つ屋上は暗闇に沈んでいる。

（雲が出たのか？　でも、ここは年間を通じて雨期以外にほとんど雨が降らないはずなのに）

塗られたように黒い空の不気味さに思いを巡らしていると、その黒が渦を巻いたように見えた。目の錯覚かと思ったけれど、地上のほうで「空が！」なんて声が聞こえた。

メリメリ、メリメリメリメリメリメリメリメリメリメリメリ――。

「！？」

そのとき、音がした。生木を、時間を掛けてへし折っていくのに似た音だ。

まるでタチの悪いインフルエンザにでも罹ったような寒気を覚えた。

（【森羅万象】を通しているのに、あの渦の正体がわからないのはなんでだ――！？）

渦の中心に血のような赤い一点が生まれると、渦に沿って赤の色が流れていく。カメラの絞り羽根が開くように赤い点が広がると、大蛇の頭がにょろりと降りてきた。

1匹や2匹ではない。数百数千という大蛇だ。斑もいれば縞もいる。その大蛇たちは同じ場所から生えていて――イソギンチャクに似た幹のようなものが出てきた。

「キャアアアアアア！？」

地上は大パニックだ。

イソギンチャク――ヘビギンチャクは大きさにすれば「月下美人」を優に超える。そんなものが空から降りてくれば叫び声のひとつや

ふたつは当然出るだろうし、その見た目は、生理的な嫌悪を催させる――わざと嫌われる見た目になっているようにすら思われた。

「同じだ……」

気味の悪さを感じ、悪寒を覚えつつも僕はヘビギンチャクから目を離せなかった。

出てきたヘビギンチャクは【森羅万象】で分析することができたけれど、あまり意味がなかった。「生物である」とか「毒性の高い牙を持つ蛇」といった内容だったからだ。

それよりも、僕は直感したのだ。あのヘビギンチャクはウロボロスと同じなのだと。

「『裏の世界』のモンスターだ……！」

ハッとしてヘビギンチャクの周囲を見たけれど、「調停者」の姿は見えない。

安心する一方、なぜこんなことになったのかという疑問が起きる――。

「クソ、考えるのは後だな」

ヘビギンチャクの胴体はどこまで長いのか、数百メートルは伸びて地上すれすれまで迫ってきた。僕からは3キロほど離れた場所だ。

僕は【疾走術】を使って走り、建物の端で【跳躍術】を使ってジャンプ、隣の建物へ飛び移った。屋上を駈け、壁を蹴り、屋根を伝い、ヘビギンチャクへ向かう。

逃げることも考えたけれど、どうやら僕は「裏の世界」に縁があるらしい――そう思うと逃げ遅れた人の避難を助けたりくらいはできるかもしれない。

「え？　人？」

窓から顔を出していたレフ人の横を通り過ぎざま、

「頑丈なところに隠れていろ！」

僕は叫んだ。

眼下の道路はすでに悲鳴と混乱のるつぼになっており、パニックになった市民がヘビギンチャクから逃げようと押し合いへし合いしている。

『市民の皆様、未知の敵の出現を確認しております。できる限り遠くへ避難してください。１分後に、飛行船からの攻撃を行います』

軍用の飛行船が１艇、引き返してきて上空からアナウンスをすると、混乱に拍車が掛かった。

いきなり攻撃かよ！　と思ったけれど、すでに大蛇が数人のレフ人に噛みついて持ち上げている。犠牲が出ているのだ。

『避難を強く推奨します。頑丈な建物の中か、あるいは物陰に隠れ頭を出さないように。１０、９、８……』

カウントダウンが始まったころには、僕はヘビギンチャクから３００メートルほどのところにやってきていた。

ズンッ、とヘビギンチャクが建物を薙ぎ倒しながら地面に突っ込んだ。土埃がもうもうと上がり、僕の足場もぐらりと揺れる。

『……３、２、１』

飛行船の砲台から、3発の砲弾が発射される。それらは放物線を描いてヘビギンチャクの胴体にめり込むと、爆炎を上げた。ヘビギンチャクが身体をねじって嫌がるとますます多くの建物が倒れたが、それでも砲撃は効いているようだ。

「うぇぇえええええん！　うぇえええええええ――」

崩れた建物のそばで泣き声が聞こえ、僕はそちらに走った。立ち尽くして涙をこぼすままに泣いているレフ人の女の子がいた。

「どうしたの？」

「うえええええええええええ――」

ダメだ、泣きじゃくってて話にもならない――そのとき僕の耳が、がれきの中から聞こえるうめき声を拾った。

「中に誰かいるのか？」

「お、おがっ、おがあさん……」

女の子がようやく反応する。僕はうなずくと【土魔法】を発動して地面を隆起させると、がれきを押しのけ隙間を作る。中には足をケガした女性がいた。

「腕を！　持ち上げますよ！」

「――うっ、あ、ありがとう、ございます……」

「おがあざあああああん！」

僕が女性を引っ張り出すと女の子が抱きつく。足をケガしている――最低限の【回復魔法】で歩けることを確認するとすぐに避難するよう告げて僕はまた走り出した。

（ほんとうは完治させることもできたけれど、今は魔力を温存するべきだよな……）

それから3か所で逃げ遅れた市民を助け、４か所目の人はすでに亡くなっていた。

その間にも砲撃は続いており、ヘビギンチャクは飛行船を敵だと認めたらしい。巨大な身体をぐるんぐるんと振って飛行船に体当たりする。

「あっ」

精巧にできた模型に腕をぶつけたように、飛行船の胴体は破れ、金属と木材を散らばらせながら飛行船が落ちていく。僕から２００メートルほど離れた場所に落ち、建物を潰し、土埃とともに爆風を起こす。

「――……くそっ」

いったい何人が飛行船に乗っていて、何人が助かったのか。あるいは、全員――。

ぎりり、と音がした。それは僕の奥歯が鳴っていた。歯ぎしりのあまりそんな音が鳴ったのだ。

上空の飛行船は、すでに「月下美人」の追撃から、ヘビギンチャクへの対応へとシフトしている。砲台を備えた飛行船は旋回してこちらへ戻ってきており、砲撃を浴びせ始めた。商会の持ち物らしい、武装していない飛行船は逃げるように帝国上空を離れていく。

「ここもヤバイかも」

ヘビギンチャクがいくら大きな的だとしても砲撃を外すことだってある。現に今、外れた砲弾が近くの建物に落ちてきて、炎が噴き上がった。

僕も逃げるべきだ。

そう、思ったのに足がなかなか動かなかった。

「……クソ、クソ、クソ！」

ヘビギンチャクまでは数百メートルの距離だ。上空１００メートルくらいのところにいて、僕にはそこまで到達できる手段がない。

これほどの無法をされたというのに飛行船がなければなにもできないのか――。

悔しさが込み上げてくる。

上には上がいるとしても、僕は結構強くなったと思っていた。だというのにこれほどの巨大なモンスターを相手にするとあまりにも無力だ。【火魔法】や【風魔法】といった八道魔法はすべて射程距離外なのだ。一矢報いることすらできない。

「いや、待てよ……『一矢報いる』だけならできるか？」

レオンが裏切ったとき、アイツはノンさんを盾にした。そのとき僕は思ったのだ――精密射撃のような魔法ができればいいのにと。

確かに、針の穴を通すような魔法を使うことはできない。【魔力操作】だけでなくもっと別の天賦があればできそうな気はするんだけれど――ともかく、最小の魔法発動というのがまだ僕にはできないのだ。

でも、逆に最大の魔法を小さく圧縮することはできる。

「【火魔法】は風に煽られて消えてしまうから射程距離が短いけれど、たとえば高出力の【火魔法】を圧縮したら……行けるのでは？」

僕が頭に描いたのは、天銀級冒険者のクリスタ＝ラ＝クリスタが見せたような極大魔法だ。１発で竜の生命力を大幅に刈り取るようなあの魔法ならばヘビギンチャクにも通用する。

いや、クリスタくらい【火魔法】に通じていれば、爆風を使って空を飛ぶこともできる――僕にはまだまだそこまでの能力がない。正確に言えば能力はあるけれど、熟練が足りないのだ。

クリスタはまさに「一芸に秀でる者は多芸に通ず」を地で行く冒険者だった。逆になんでもできる僕はなんにもできない。

「……今は、『なんでもできる』ことを組み合わせて考えよう」

高出力の魔法を圧縮する、という方法は行けるはずだ。あとはどれくらいヘビギンチャクに接近できるか、だ――。

「！」

そのとき、僕は上空に黒々とした別の影を認めた。

「な、なんだ、あれ……」

それを「飛行船」と呼ぶにはあまりにも大きすぎた。

ムゲさんの倉庫を１０個載せてもまだあまりあるほどに巨大で、広い、飛行船――多くの小型飛行船がそこから飛び立っていく。

それはまさに空飛ぶ「空母」だった。

黒き空賊は月下に笑う。

★　アナスタシア　★

こんなものを隠し持っていたのか――それが、アナスタシアの率直な感想だった。

「どうだえ。これが帝国の誇る最終兵器、戦略飛行船『豊穣ノ空』よ」

皇帝は愉快そうに言って、アナスタシアを引き連れて空飛ぶ空母「豊穣ノ空」内部を歩いた。

突如として帝国上空に昏い闇が垂れ込め、血のように赤き空間から巨大で不気味な生き物が降りてきたというのに皇帝が落ち着き払っていたのはこんな戦略飛行船を持っていたからなのだろう。

「月下美人」が美しくも素早い飛行船ならば、「豊穣ノ空」は不格好ながらも大きくて強い飛行船だ。この飛行船を動かすのに必要な人員は最低でも１００人だという。

「『畏怖の迷宮』を攻略し『憎悪の迷宮』も攻略したと思えば、この有様。しかし裏を返せばこの『豊穣ノ空』の力を試す絶好の機会よ」

アナスタシアだけでなく多くの閣僚を引き連れた皇帝は、司令室の上部に位置する貴賓室にやってきた。司令室で多くの人々が働いているのを見下ろしつつ、前面に取り付けられた魔導強化ガラスを通してヘビギンチャクとの戦いがよく見える。

軍用飛行船による一斉砲撃でヘビギンチャクの胴体に、大蛇どもに、大量の炎が上がり、その巨体が嫌がるようにうねると閣僚たちの間から歓声が上がる。

皇帝は閣僚たちとここで「巨大モンスター討伐観戦」としゃれ込むつもりなのだ。アナスタシアがここに呼ばれたのは華やかさを加えるための、言わばただの「添え物」だ。

飛行船に乗ると言うことで、乗馬用にも使われるキュロットスカートにロングブーツ、それに防刃加工の施された上着を羽織っていた。喉には、念のため包帯をもう一度巻いて、その上からスカーフをつけたので他人から見て違和感はないはずだ。

（それにしても、なんなのでしょう……この感覚は）

アナスタシアはしかし、イヤな予感に襲われていた。確かにレフ魔導帝国の飛行船団はこの世界でも類い希なる武力であることは間違いない。砲台を備えた飛行船は４０に迫ろうかという数があり、弓矢でも放つように多くの砲弾を浴びせられる国は他にない。

「我が軍は最強ですな」

「世界一と言ってもいいでしょう」

興奮気味に閣僚たちは話す。

（でも……あのモンスターには効いていないのでは……？）

アナスタシアの予感の根っこにあるのはその疑問だ。紫色の体液をまき散らし、ぼとぼとと大蛇も地面に落ちているが、それでもいまだヘビギンチャクは生きているし大蛇の数も減ったようには見えない。

砲撃による黒煙が視界を遮り、見えづらいところはあるが、ヘビ

ギンチャクが瀕死のようにはまったく感じられないのだ。

キィィンン。

そのとき耳鳴りのような音が聞こえた。その場の人たちも怪訝な顔をしているのでアナスタシアだけに聞こえたわけではない。

すると、

「あっ、ヘビが落ちますぞ」

閣僚のひとりが指差して叫ぶと、確かに大量のヘビがぼとぼとヘビギンチャクから落ちていくのが見えた。落ちたヘビは、がれきに、建物に、絡まりながらうねうねと這っていく。

「ははは、これはあっけなく討伐が終わったのではありませんかな？」

「最後にヘビをまき散らすとは、迷惑この上ない」

「地上軍に連絡を取りましょう」

そんな言葉が交わされているが、アナスタシアにはどうしてもヘビギンチャクが――今となってはただの血まみれの巨大な幹が、まだ生きているように思われた。

「あの化け物を引きずり下ろしたい。天から生えているというのがどうも気に掛かる」

皇帝が当然の疑問を口にしたときだった。

ヘビギンチャクが、垂れ下がった、ヘビの抜けた頭を持ち上げてぐるりと飛行船団へと向いたのだ。

カッ――――――。

離れた場所で見ているアナスタシアですら、一瞬「目を灼かれた」のだと思ってしまうほどの強烈な光が発せられた。

上空ナナメにほとばしった光は１０を超える飛行船を巻き込み、雲を破り、空の彼方へと消えていった。

「い、今っ、なにがっ」

「目が痛い、目が」

「誰ぞ、陛下をお守りせよ！」

司令官室も、貴賓室も、いずれも大混乱に包まれた。

チカチカする瞳を開くと、アナスタシアが見たのはしおれるように垂れた巨大な幹だ。だがそれは地上へと降りていくと、自分が落とした大蛇の群れに突っ込んで、むしゃむしゃと食べ始めた。

そのおぞましい光景に、アナスタシアは吐き気を覚えた。

だが問題はしおれていた幹がだんだんと膨らみ始めたのである――あの大蛇を食って、自分の体力に変え始めたのだ。

「『豊穣ノ空』の主砲を出せェッ！」

皇帝が叫ぶと、階下の司令官が振り返る。

「し、しかし陛下。主砲のテスト運用はまだ終わっておらず……」

「多少外れたところで、あの巨体を削れれば問題はない。すぐにやれ！」

「はっ！」

乗組員が忙しく動き始めると、眼下に見える甲板がパカリと開いて、そこから巨大な砲塔がせり上がってきた。

砲身の表面に青白い紋様が浮かび上がっているのはこれが魔導砲だからだ。先ほどヘビギンチャクが見せたものと同じ、高エネルギーを射出するタイプの砲塔で、実弾を込めることはない。

「おっ……」

誰かが声を漏らしたのは、不意に周囲が暗くなり、非常灯の明かりのみとなったからだ。

『主砲稼働のため船内の魔導エネルギーの８５％を主砲に集中させます』

オペレーターのアナウンスが聞こえてくる。

『魔術制御システム問題なく稼働……主砲エネルギー充填１５％、正面巨大生物を砲撃対象としてロックオン。充填４０％、あと１５秒で砲撃可能』

主砲の砲身だけでなく、砲塔自身が青白い光を放っていく。

アナスタシアも、閣僚たちも、そして皇帝も主砲を見つめていた。

だがそれに気がついていたのは彼女たちだけではない。

「敵が気づいた！」

大蛇を漁っていたヘビギンチャクは、ハッ、としたように先端をこちらに向けた。今まではそこは見えていなかったが、ここにきてようやくわかる。

そこにはぽっかりと穴が空いており、突起のような白い歯が無数に生えていた。飲み込み、すりつぶして食べるためのものだろう。

穴の奥に、光が集まる――向こうもこちらを撃とうとしている。

「は、早く撃たんか！」

『あと5秒。4、3、2、1』

司令官が「撃てェッ！」と号令を下すと同時に、主砲が輝くと青白い光が、赤い天からぶら下がった幹目がけて発射される。

耳をつんざくような轟音が響き渡り、「豊穣ノ空」自身も、発射の衝撃で背後へと数メートル後じさる。

その結果、命中精度は下がり、幹の右半分に直撃して爆音を響かせる。

一方で、動いた結果、ヘビギンチャクが放ったエネルギー波は司令官室に直撃はしなかった。だが船体に大穴を開け、「豊穣ノ空」は転覆するかというほどに揺れる。

司令官室に叫び声が走る。

深刻な攻撃を受けたことによる警報が鳴り響く。

アナスタシアはすぐそこにあった手すりをつかんで必死にこらえる。

落ちるかもしれない、敵を倒せなかった、どうなるのか――そんな思考が千々に乱れ、だけれど彼女はそのとき、

（レイジさんはどこに……）

自分の特異体質を治そうと努力してくれ、しかもケガを負わせてしまった少年のことを思い出していた。

ポリーナの勘違いや、アナスタシアを守る兵士たちのせいでひどい目にあった彼は、それでもなおアナスタシアのことを心配してくれていた。

（レイジさんのためにも、こんなところで、死ぬわけには……いき

ません！）

カッと、目を見開いた彼女が見たのは、ナナメに傾いだ「豊穣ノ空」の向こう、半分ほどにちぎれた巨大な幹。

そして――なぜ、ここにいるのか。

混乱する軍用飛行船団をよそに、悠然とたたずむ銀色の美しい船体。

「月下美人」は幹を挟んで反対側にいた。

その甲板に――強風で危険だというのに――たたずむ、ひとりの姿。

（……女性が……？）

闇に紛れる空賊の証である黒のマントをはためかせ、その下にはただの「お嬢」ではない、すみれ色の戦闘服が現れる。強風が、後ろでひとつにまとめた長い金髪を流していく。

何者にも屈しないという紫色の瞳が見据えていたのは、ちぎれつつもぶら下がっている巨大なモンスター。

そのとき口を開いた少女の声を、もちろん、アナスタシアが聞くことはなかった。

――あーあ、こんなにぶっ壊しやがって……。

この状況ではあまりにも不似合いな表情を、少女は浮かべた――。

笑ったのだ。

不敵にも、不遜にも、不可解にも。

まるで目の前の存在などたいしたことないとでも言いたげに。

――死ね、デカブツ。

少女の手に握られていたのは闇のような黒い刃。

振り上げたその上空に出現したのは、竜の首さえも落とす「影王」の刃だ。

刃が落ちる。

それは神話や伝説で聞いたような光景だ。

巨人、と言うには足りない。まるで神が――闇の神が振り下ろした刃のようですらあった。

「影王」の刃が斬ったのはヘビギンチャクだけではなかったのだ。

空に広がる闇も、赤い血のような空間も切り裂き、そこに月が現れたのだから。

月光が射し込む中、ヘビギンチャクの巨体は地に落ち、天から生えている切り口からは豪雨のように体液が地面に降り注いだ――。

黒き空賊は月下に笑う。（後書き）

ついに再登場です。あと章題回収です。
「待ってた！」「今すぐレイジ来て！」「続き早よ！」と思われましたら是非「ブックマーク」と「評価」で応援をお願いします。

54

★　アナスタシア　★

（今のは、なに？）

あり得ない光景を目撃した。

「月下美人」の甲板に立った少女が右手をかざせば、黒く巨大な刃が現れ、空ごとモンスターを斬ったのだから。

『――危険です！　第1、第4、第5エンジンに損傷。浮力の維持がこれ以上できません！』

鳴り響く警報と、オペレーターの声に我に返る。

そうだ、今、自分はモンスターがどうのと言っていられる場合じゃない。

（墜落、する――）

たとえ帝国を襲ったモンスターを退けたとしても、ここで墜落して死んだりしたらなんの意味もない。

さらに、ここには皇帝を始め多くの閣僚が乗っている。彼らが全員死んだりしたら国は大混乱だ。

「陛下、緊急脱出ポッドへ！」

「急げ、陛下だけでも！！」

ふだんは、おべっかやゴマすりに余念のない閣僚たちだったけれど、この危機的状況では皇帝を最優先にした。そこに下心や思惑は一切ない。純粋に皇帝を慕い、助けたいという一心だ。

「豊穣ノ空」が傾いたときに皇帝は転んで身体を打ったらしく、ぐったりしている。その身体を複数の閣僚が支えて運んでいく。

『高度低下！　残り６００メートルです！』

「全エネルギーを浮力に回さんか！」

『すでに実行済みです！！』

「ぐぬう……ならば砲塔や砲弾を緊急射出しろ！」

『ッ！？　しかしそれでは帝国の街が……』

司令官の命令は、「豊穣ノ空」の重量を下げるために重いものをすべて捨てろと言っているのだ。

「周囲はほぼ焼け野原だ、構うな！！　それに、ここにおわすは皇帝陛下ぞ！！　やれぇえええ！！」

『は、はい！』

震動とともに金属音が伝わってくる。主砲や砲塔が「豊穣ノ空」から切り離され、落ちていく――。

『降下速度低減しています！　ですがこのまま不時着します！』

「陛下は！？」

「いまだこちらに……！」
「肉の壁を作れ、陛下を守れェー！！」

皇帝を中心に閣僚たちが集まったその姿は、まるで冬の夜に暖を取るために集まった小動物のようでもあった。
彼らは衝撃に備えた。
そして、アナスタシアも――。

（これが、最後に見る月かもしれない）

主砲が外され、落ちたせいで「豊穣ノ空」はバランスを崩して大きく傾いた。
そのときアナスタシアが見たのは、帝国の街だ。
あちこちから煙が立ち上り、周囲はがれきの山になっている。

「あ……」

思わず、声が出た。
彼女の周囲に炎の花びらが舞った。
そこにいたのだ。
ただひとり、がれきを蹴って、こちらへ走ってくる冒険者の姿が――レイジの姿が。

「あぁぁっ……！」

握りしめていた木製の手すりが燃えた。彼女の周囲が炎によって明るくなった。
思わず涙があふれた。
最後の最後で、彼の姿を目にすることができるなんてと神に感謝をした。

（生きる希望を与えてくれた。生きる意味を探してもいいと教えてくれた）

だけれど、自分はこのまま墜落する――。

（来ないで、レイジさん。そしてもしも私が死んでしまったら……ごめんなさい）

ぎゅう、と目をつぶったアナスタシアはそれを見ることがなかった。

レイジは両手を突き出し魔法を発動した――。

★

僕が引き返してくる「月下美人」に気がついたのは、まさにヘビギンチャクが大蛇を地面に放出している真っ最中だった。

（逃げていたはずの「月下美人」がなぜここに？）

頭の中は疑問符でいっぱいだ。

だけどそれを考えるよりも暴れ回る大蛇の対処が先だ。

１匹ずつは、図体が大きい割りに素早さはなく、倒すのは簡単だ。だけど問題は数だ。見渡す限りのヘビヘビヘビで、ヘビ嫌いが見たら卒倒すること間違いなし、ヘビなら食べるくらいには大丈夫な僕でも鳥肌が立った。夢に見そう。

「……は！？」

僕がヘビをどうこうするよりも前に、ヘビギンチャクがとんでもないエネルギー砲を放ち、そちらに今度は注意を持っていかれた。
圧縮して魔法を撃とう――とか思っていたのは僕なのに、ヘビギンチャクに先を越されたのだ！　マジかよ……モンスターのほうが僕より進んでるってどういうことなんだよ。

（「裏の世界」のモンスターはみんなこうなのか？）

「調停者」はもちろん、ウロボロスにヘビギンチャクはどれも強い。僕はこのヘビギンチャクが「裏の世界」の住人であることを確信していた。
生ぬるい風と焦げ臭いニオイ――それは「調停者」と戦ったときに感じたものと同じだったのだ。
いくつもの飛行船を葬ったヘビギンチャクは、植物が枯れるようにしおれたけれど、その後に大蛇を食い始めたのを見て僕の鳥肌は加速、蕁麻疹まで出そうになった。

「今が、チャンスか……！」

大蛇をかき分けて行けば直接ヘビギンチャクに魔法攻撃を当てられそうだと僕は思ったのだ。
そこへ、空母飛行船が砲塔を出して同じような威力の攻撃を放とうとする。

「あ――」

ヤバイ。ヘビギンチャクの口が空母飛行船を向いた。
カッ――と光が放たれるのと同時に、飛行船からも攻撃が行われる。

ヘビギンチャクがぶっ放したせいで周囲には衝撃波が走り、僕の身体は吹っ飛ばされてごろごろと転がる。

「いっててて……」

たいしたダメージはないけれどだいぶ距離を飛ばされた。

そしてそのときに見たのは、削れたヘビギンチャクと、腹に大穴をあけた空母の姿だ。

（なんだよ、これは……）

この世界に戦争というものがあるのなら、きっと、こんなふうに強大なエネルギー攻撃によるやりとりになるのだろう。

そのとき僕はなにができる？

星１０の天賦珠玉を手に入れたところで、たったひとり、生身の人間になにができる？

（自信、なくすよなぁ……）

でもぼんやりしているわけにはいかなかった。

巨大な飛行船は見る見る高度を下げていて不時着――最悪、墜落――まっしぐらだし、ヘビギンチャクはまだ生きているようなのだ。

そこへ、どんどん「月下美人」が接近していく。

（なんで……？　ヘビギンチャクは、まだ生きてるのに――）

僕はそのとき、飛行船の先端、船で言う船首に立つ人影に気がついた。

「あ――」

その人を、僕は見間違えるわけはない。
たとえ僕が【視覚強化】を持っていなかったのだとしても。
金髪をなびかせ、見たこともないすみれ色の戦闘服を着て――あれから４年が経っていたとしても。

「ああ……そうなのか」

その人が、今やろうとしていることも、「月下美人」が戻ってきた理由も、僕は理解した。
なにも持たず、なんの力もなかった僕に手を差し伸べてくれたように。
黒髪黒目を忌まれ、公爵に殺されかけたときに目の前に立ちふさがってくれたように。
彼女なら、たとえ自分の利益にならずとも、目の前にこんな巨大なモンスターを目にしてしまえば戻ってきてしまうのだ。
自らの危険など百も承知で、この、多大な人命を犠牲にしかねないモンスターを倒そうとして。

「ラルク……！！」

僕の姉。
僕の大切な人。
この世界で初めて僕に与えてくれた人。
そのラルクは、右手を天に掲げ星６つの天賦【影王魔剣術】を発動する。その笑顔は４年前といっしょだ。なにも変わらない。「お前、生意気だぞ」と僕に言ったときのように。
４年間で彼女も天賦の使い方が洗練されてきたのだろう、巨大な刃をいともたやすく操り、天を斬り、敵を斬り、大地まで斬った。
ヘビギンチャクから噴き出した血の雨が降り注ぐ――僕はラルク

が、気を失うように背後に倒れるのを見た。

「ラルクゥゥゥウウウウウウウウ！！」

声は届かない。届くわけもない。ちらりと見えたラルクの仲間が、彼女を運んでいく。

今すぐ追いかけなきゃ。ヘビギンチャクを倒した今、「月下美人」はすぐさま離脱するだろう。他の飛行船が戸惑っている今が、最大のチャンスなのだから。

「……っ」

僕は両手を握りしめた。

そして、ラルクに、姉に、背を向けた。

今僕がなすべきことはラルクを追いかけることじゃない。

「……できるか、どうか、わっかんないけどッ！！」

僕は走った。がれきを蹴って、地を蹴って、大蛇を蹴飛ばして走った。

落ちてくる空母。落ちてくる砲塔や砲弾。飛行船は「墜落」を予測して自重を少しでも減らそうと重荷を落としている。

あれだけのサイズならば相当数の乗組員がいるはずだ。

全員を救うのは無理かもしれない。

与えられる影響なんてほんのわずかかもしれない。

でも、それでも。

僕の魔法でひとりでも救えるのなら。

危険を冒し、自分の力を使い果たしてでもやり遂げたラルクのようになれるかもしれない。

「おおおおおおおおおおおお！！」

複数の魔法よりも１つの強力な魔法だ。

僕は着地点の数十メートル手前にたどり着くと、両手を前に突き出し、身体中の魔力を集中する。

「集まれ、突風ゥゥウゥゥウウウウ！！」

【風魔法】の扱いは難しい。空気、と言うより大気を操るこの魔法は形を持つわけでもなく、目に見えるわけでもなく、さらには散りやすい。

だけれどこのシチュエーションならば最高の力を発揮してくれるはずだ。

僕が発散した魔力に応じて周囲の大気が渦巻き、空気が圧縮されていく。僕の髪の毛が逆立ち、服がはためく。目を開けていられないほどになったころ――巨大な飛行船は地面までの距離が５０メートルほどになった。

「っくう……」

魔力をゴッソリ抜かれて気を失いそうになるが、ぎりぎりまで魔法をコントロールし、前方へと放った。

巨大な竜巻となった圧縮空気は落下地点へと入り込むと、押さえつけていた魔力がほどけると同時に周囲へと発散する。その圧力は地面をつぶし、飛行船を下から持ち上げる。みしみしみしと船底が音を立てている。

だけれど、足りない。僕ひとりの魔法では。

「……ミミノさんッ、使わせてもらいます！！」

僕は道具袋から、預かっていた魔法複製薬（デュープ・ポーション）を取り出すと、地面に叩きつけた。

ビンが割れ、中の液体が出ると同時に紫色の燐光が周囲に立ち上る。

先ほどの魔力がもう一度再構成される。

魔力は使わないけど、気を抜けば暴走しそうな魔法をコントロール……正確に、狙いを定めて、放つ！

「行っけえええええええええ！！」

突風は、同じように飛行船の下へと滑り込んでいく。

もう、船底から地面まで１０メートルもない。

圧縮空気が炸裂すると、船底が凹み、割れる音が響き渡る。飛行船の落下速度はどんどん遅くなっていく。

やがて――ごつん、と鈍い音がして――。

「や、やった……」

穴が空き、火を噴いている飛行船は、地面に着陸したのだった。

僕はその場にぶっ倒れた。安心といっしょに、強烈な眠気が襲ってくる。

（ラルクを、追わなきゃいけないのに……。僕だって、こんなにできるようになったんだよ、って言ったら、ラルクはどんな顔する……かな……他にも、いっぱい、いっぱい話したいことが……）

目を閉じた。

55

★　アナスタシア　★

アナスタシアは、２つの奇跡を見た。

１つ目の奇跡は「月下美人」に仁王立ちしていた少女が放った、天すら切り裂く斬撃だ。

２つ目の奇跡は――アナスタシアの知る少年、レイジが放った魔法だ。

「豊穣ノ空」の落下速度は速く、少なからぬ衝撃が船体に走るだろうことは全員が覚悟していた。身体が投げ出され、天井に叩きつけられることも十分にあり得た。シートベルトのような発想がない船内で安全なところはどこにもなく、アナスタシアもただ手すりをつかんで衝撃に備えるしかなかった。

（あの魔法は、レイジさんの……！）

船体が軋むような耳障りな音が響いていたが、それでも「豊穣ノ空」の落下は急ブレーキをかけたようにゆっくりとなり、最後はわずかな揺れとともに不時着に成功したのだ。

「き、奇跡だ！」

司令官が叫びながらバンザイし、通常の明かりが戻ってきた司令室には歓声が上がる。皇帝を守るように集まっていた閣僚たちも互いに抱き合いながら喜んでいる。

「――アナスタシアはいずこへ行った」

ふとそのとき、皇帝が言った言葉で閣僚たちはハッとする。先ほどまですぐそこにいて手すりをつかんでいたはずだったが、誰しもが皇帝を守ってうずくまっていたので彼女がどうなったのかは見ていない。

木製の手すりが焦げ、香ばしいニオイが漂っていた。

（はあ、はあ、はあ……！）

そのころアナスタシアは走っていた。

走っているときですら声を上げると【火魔法】が発動してしまうので、細心の注意が必要だ。

だがいつものドレスではなく今日はキュロットスカートにロングブーツなので、走ることには問題ないことは幸運だった。

（この先、ここだ――あれ、扉が閉じられている……？）

アナスタシアは狭い通路を走り抜け、自分が搭乗するときに使った入口へとやってきた。だがそこはもちろん閉ざされており、アナスタシアは肩で息をしながら途方に暮れた。こういうときにどうしていいかわからない。

鉄の扉にはドアノブのようなものはなく、本来それがある位置には鋼板が貼られてあった。ふと横を見ると壁面には「緊急脱出」の文字があり、「緊急時にのみ使用が許可されます。カバーを開け、レバーを引き、現れた鋼線を断ち切ってください。ただし緊急時以外に使用すると処罰されます」と書かれてあったので迷わずカバーを開いた。

レイジがいるのである。この飛行船を救ってくれたレイジがいるのである。しかも彼は極大魔法を2度も使った後に倒れるように気絶した。これを緊急と言わずになんとする――。

「！」

レバーを引くと、ドアノブのところに貼られた鋼板がスライドして鋼線が現れた――だがそれは予想以上に太く、直径5ミリほどのワイヤーだ。護身用に持っているナイフを叩きつけたがアナスタシアの細腕ではびくともしない。

「……」

アナスタシアは狭い通路をきょろきょろと見やり、誰も来ていないことを確認すると、ナイフをしまって右手の人差し指をワイヤーに触れた。

左手で喉の包帯をさするが、もうこの魔術は切れている。

「切れなさい」

できるだろう、という気がしていた。それもこれもすべてレイジがくれた【魔力操作】のおかげである――人差し指の先端に煌々と白い炎が現れ、超高温がワイヤーを溶かした。

「っ！」

ワイヤーは弾けるように切れてアナスタシアの指を切り、血が流れた。

目の前で、扉のロックが外れたようであり、ギィ、と数センチ外へと開いたのでアナスタシアは両手でそれを押した――。

「!?」

途端に扉が開き、身体が前のめりに飛び出す。そこは地上2メートルほどの高さでアナスタシアは無様にも地面に転げ落ちた。

痛い。肘やお尻を打った。ホコリっぽくて咳き込んでしまい声が漏れ、周囲にぽっ、ぽっ、と鬼火のような火が灯っては消えた。

（そんなことより、レイジさん！）

痛みをこらえて立ち上がったアナスタシアは、周囲を見てぎょっとした。

ここはがれきが積まれた場所だったはずだ。多くの建物が崩れたところでもある。だというのに辺りは一面更地になっていたのだ。

（強力な【風魔法】……！）

レイジがただ者ではないと思っていたけれど、これほどの魔法の使い手だとは知らなかった。

「豊穣ノ空」の船底からは何本もの支柱が出ており、見事に巨体を支えていた。これが、地上ががれきであったり、極端に速度がついていたら支柱は折れ、飛行船は横倒しになっていた。

それとて飛行船が全壊するよりはよほどマシで死者の数だって抑えられたはずだ――もちろん死者はゼロではなく、重軽傷者は数十人と出ただろう。

レイジの魔法が「豊穣ノ空」を、多くの乗組員の、そしてアナスタシアの命を救ったのだ。

「！」

アナスタシアは離れた場所で仰向けに倒れているレイジに気がついて走り出した。ここまで全力で走りまくっていて疲れてはいたけれど、レイジの頑張りに比べればたいしたことはないと思う。

（レイジさん、レイジさん、レイジさん！）

駈け寄りながらアナスタシアは、胸に湧き起こる感情に戸惑う。「感謝」がいちばん強い。「尊敬」や「親愛」ももちろんある。一方で「興味」といった思いも強い――これほどの人物はいったいどのようにして生まれ、ここに至ったのかという「興味」だ。

「――――」

近くに寄ってみてわかる。服はあちこちほつれ、汚れにまみれていた。ここに来るまで多くの人々を救ったことでついた汚れでありアナスタシアはもちろんそれを知らないのだけれど――「人助けをしてきたに違いない」と容易に想像がついた。

目をつぶったレイジは眠っているようで、その顔は満足そうだった。

アナスタシアはその場に膝をついて、彼の上半身を持ち上げる。その頭を抱きかかえるように持って、目元に掛かる前髪をどけてやる。

（レイジさん……）

温かくて、そのくせ頭がどうにかなってしまいそうな、狂おしい思いがアナスタシアの身体の中心から湧き上がる。

思えばすべてが演劇のようにドラマチックだった。

数少ない友人のルルシャを救うために現れた少年。

こちらの意図を読み取って、期待をはるかに超えて迷宮を攻略し

た。

のみならず、自分の体質を見抜いて紙に書かれたときには心臓が止まるかというほど驚いた。

夜にこっそりと会いに来てくれたときには同じ心臓が張り裂けそうなほどにドキドキした。

そして自分に生きる希望を与え、さっきは絶体絶命のピンチを救ってくれた。

（私は、わかっていました）

アナスタシアは、自分の心の内に生まれていた感情の正体を知っていた。

（あなたに、恋に落ちたのです）

★　アナスタシア　★

寝顔を見つめるアナスタシアの瞳は熱を帯び、だけれど穏やかな笑顔を浮かべていた。

（でも……私は、あなたに想いを打ち明けることはできません）

自分が勝手な想いに身を委ねたらどうなるのか――ハイエルフの王族として、「贈り物」として、今このレフ魔導帝国にいるアナスタシア。

立場くらいわかっている。

今から「冒険者になってレイジさんについていきたい」などと言っても、許されるはずもないことくらいは。

この想いは隠さなければならない。

だというのに身体は幸福感に包まれていた。

（一度も味わわずに、数百年という長い時を経て、ひっそりと死んでいくのが私の運命だと想っていましたから……私はとても、幸せです）

アナスタシアは顔を空へと向けた。

「！」

ヘビギンチャクは流す血もなくなり、だいぶしおれていたが、い

まだに空は血のような赤に染まっている。
そして、ぱらぱらとホコリのようなものが落ちてくる――いや、生き物だ。モンスターが落ちてくる。その数は数十や数百ではない、数千、あるいは一万を超える数だ。
羽を持つモンスター、動物型モンスター、粘液状のモンスター……様々いるが、どんどん空から降り注いでくる。
あの赤い空がなんなのか、アナスタシアはわからない。手がかりすらも彼女にはない。
ただ、あれらはこの世界に害をなす敵であり、放っておけばここまできて――最愛の人を傷つけられるということはわかる。

（レイジさん、少し休んでいてくださいね）

アナスタシアが見るに、あれだけの魔法を使ったレイジは魔力枯渇でしばらく動けない。であれば眠っていてもらうのがいちばんだろう。少しでも魔力が戻れば目を覚ますはずだ。
レイジの頭をもう一度地面に寝かせると、「ん……」と小さくうめくような声が聞こえ、アナスタシアは思わず笑みを漏らしてしまう。
寝顔も、声も、なんて可愛いのだろうと思えてしまうのだ。身体、心、仕草、すべてが愛おしい――それが「恋」なのだと知った。知識で知っているのと、自分が体験するのとは大違いだとアナスタシアは感じた。

（今なら私、なんでもできる気がします）

レイジを守るように立ったアナスタシアは、空の赤い大穴を見やる。
わずらわしい邪魔な包帯を外すと、風に吹かれて包帯はひらりと舞った。

空の赤に照らされたモンスターが巨大な飛行船に気づく。目を炯々と光らせた彼らは急降下しつつその先に立つアナスタシアとレイジを見て、獲物が愚かにもうろついている――そう考えたところで不思議はないだろう。

「この方には指一本、触れさせません」

手をかざしたアナスタシア。

そこからほとばしったのは炎の奔流だ。

猛禽類によく似た、しかしヘビの尻尾が生え、体長は3メートルはあろうかという鳥型のモンスターは炎を正面から浴びて即座に炭化し、落下した。

この突然の出来事にモンスターたちは急制動で翼を広げスピードを落とすが、第2射、3射、4射と炎が撃ち出されると過たず直撃して灼いていく。

「な、な、なんだあれは……！？　あれはアナスタシアか！？」

不時着で命が助かり、様子を見ようと広々とした「豊穣ノ空」の甲板に出てきたのは多くの閣僚と、飛行船兵士に守られた帝国皇帝だ。

彼女が魔法を使えることも、それが【火魔法】であったことも、誰も知らないことだった。

そのとき彼らは、この惨状が広がる街区にはふさわしくない――歌声を聞いた。

――古き森　浮かぶ油　燃え盛る命　焔のごとく
　神が降り　森に住まい　8色の葉　人に与う
――初めに木の神が　次に草の神が　最後に花の神が
　森を言祝ぎ　風を休め　雨を垂れ　陽を誘う

古代エルフ語で語られるこの物語は、そのものが魔力を帯びるという魔唱歌（チャント）だ。ハイエルフ王族が管理し、適切な場所で、適切なときに、適切な目的で歌われる。むしろそれ以外は歌うことを許されない秘中の秘だ。

本来ならばこの歌を通じて、森に恵みをもたらし、不浄を消す。ハイエルフの王族たちは生まれながらにして【花魔法】や【風魔法】、【水魔法】に【土魔法】といった森を育む魔法に適性が高かった。

ぽつ、ぽつ、とアナスタシアの周囲に現れた蛍の光のような炎は、すぐさま大きくなり、無数の光となってアナスタシアを包む。

彼女の服さえも燃え、逆立つ髪の毛も一部燃えるが、魔力の流れによって火は鎮火し、焦げ跡だけを残していく。

この歌を歌いたかった。

ハイエルフの王族として――家族のひとりとして。

だけれどアナスタシアにそれは許されなかった。彼女が歌えば森の嫌う火が荒ぶることが明々白々だったからだ。

（でも、今なら歌える。歌ってもいい。火傷だって怖くない。髪も、顔も、身体も、傷ついたって構わない。それで大切な人を、守れるのなら）

空を見上げる。

すでに月は傾き、血のような赤と、ちらりと星辰が見えるだけの不気味な空だ。

アナスタシアそのものが巨大な炎に包まれたそのとき、彼女は吠える。

「消えなさい！！　彼に害なすすべての邪悪な生き物よ！！」

それは膨大な魔力量を誇り、ハイエルフの王族に生まれながら忌

み嫌われる「炎」に愛された少女が、ついに自らの力に向き合い、それを正しく使えるようになった瞬間でもあった。

魔力を操り、魔法を構築し、魔道を歩む「魔導（メイガス）」がここに誕生した。

放たれた炎は幾筋にも分かれ、龍のように飛来する。

モンスターに当たるを幸いと燃やし尽くし、空へと飛んで行く。

ヘビギンチャクのしおれた身体にもめり込んで業火を噴き上げる。

空に広がる「赤」に突入するとその部分から波紋が広がるように炎が広がっていく。

「あ、あれが……アナスタシア、ハイエルフ王家の血だというのか……！？」

吹き荒れる焔による轟音の中、皇帝は初めて彼女の声を聞いた。

それはこの帝国の大敵を穿つ、尖鋭となる声だった。

「あれぞ、魔法の頂点に立つという『大魔導師（ウォーロック）』ではないのか……」

レフ人は天賦珠玉を使えない。「天賦で魔法を使う」という安易な道がなかったこともあり魔術による技術革新を国是とした。

だからこそ彼らは知らない。

魔法の持つほんとうの力を。

人が持つほんとうの可能性を。

「豊穣ノ空」の甲板で皇帝たちが次に見たのは、ガラスが割れるように赤い空にヒビが入り、砕け散っていくという幻想的な光景だった。

「……うっ」

そしてまさにそのとき、地面に寝かされていた少年が小さなうめ

き声とともに目を覚ました。

56

★

ハッ、と目を覚ましたときに感じたのは焦げ臭いニオイ、そして周囲に充満する濃厚な――魔力の気配だった。

僕の身体に残った魔力が少なかったせいもあって、頭がぐらんぐらんする、船酔いに似た感覚に襲われる。急いで道具袋から水薬を取り出すと――とりわけ頑丈なビンを使っていてよかった――栄養ドリンクのようにそれを飲み干した。ただし味はヤバイ。ほうれん草と小松菜が結婚してえぐみだけを抽出したようなマズさがある。

ミミノさん特製の「激・魔力回復薬」だ。ちなみに「激」は味の話ではなく効き目のほうだ。

「うえっ、げほっがはっ――」

むせながらも僕は、すぐそこに立ち尽くす少女の後ろ姿を見た。服のあちこちはすすけ、髪も焼けたのかところどころ不揃いで、露出した肌にも多くの火傷があって――アナスタシア殿下だ。

「殿下――」

なぜここに殿下が？　と疑問を口にする前に、殿下が振り返った。

「あぁ……よかった。目を覚まされたのですね」

ぽっ、ぽっ、と小さな炎が泡のように弾けただけだった。

初めてまともに聞いた殿下の言葉は、あまりにもか細く、あまりにも弱々しかった。

殿下が声を出せば【火魔法】が顕現する。それは変わりないのだけれどこれだけちゃんとしゃべっているのにほんのかすかにしか炎が出ないのは――。

「殿下！！」

僕は立ち上がり、走った。後ろに倒れそうになる殿下を両腕で抱き止める――殿下の体内にも残魔力はほとんどなかった。

あれだけ莫大な魔力量を誇った殿下が魔力切れ？　いったいなにが起きた？

「あ……」

見上げた僕は気がついた。

赤色の空が割れ、向こうにはこちらの世界の夜空が見えている。ぱらりぱらりと数が少ないながらも降っている黒い点はモンスターのようだ。

しおれたヘビギンチャクはいまだぶら下がっていたけれど――根元から、腐り落ちるように落ちてきた。いくらしおれているとはいえ、とんでもない質量だ。先端が地面に触れて血だまりを踏み潰すと、しなだれた残りの部分が落ちていき広範囲に渡ってまたも建物を破壊し、地響きとともにもうもうと砂煙を上げる。

ヘビギンチャクがちぎれた後には、残り少なくなった赤い空。ひび割れ、欠けた、ガラスの破片のような空だったけれど、そこで崩壊は踏みとどまった。

「ッ！！」

赤い空に、金色の巨大な目が現れた。
瞳孔が水平になっているために、金色の目の中心に、黒っぽく瞳を閉じているような、不思議な見え方になっている。ヤギの瞳孔と同じだ、と僕は直感する。
しかし目の大きいことと言ったら、その目のヤギがいたとしたらさっきのヘビギンチャクは、ヤギの足一本程度になってしまうだろう。

（来るな、来るな、来るな……）

僕はそれだけを念じていた。赤い空の広がりは止まっている。あの向こうに巨ヤギがいるのならば、あの赤い部分ではくぐり抜けることができないだろう。

ガンッ。

巨ヤギが、その隙間を通り抜けようと衝突したようだ。衝撃波が離れたここまでやってきて、僕は殿下を抱いたまま尻餅をついてしまう。

ガンッ。ガンッ。

目の前で巨大な鐘でも衝かれているような波動が響いてくる。
いや、それは鐘なのかもしれない。
この国の終焉を告げる鐘だ。
なんなんだよ、あの化け物は。あんなのが出てきたらこの国なんてすぐにも破壊されるじゃないか。
僕は殿下をかき抱き、せめて殿下だけでも守れないかと考えた。
「逃げる」一択しかない。だけど魔力不足の状態では走るどころか殿下を背負うこともままならない。

じっと待つしかない。ミミノさんの薬が効いて、じわじわと魔力は回復しつつあるのだから。

《ぉあああぁぉぉあああああえええええええええええ》

イラ立った巨ヤギが吠えた。ヤギの鳴く「めー」なんていうカワイイ鳴き声じゃない。

聞いた瞬間、全身に鳥肌が立ち、瞳孔が開いて、頭が真っ白になるような――恐怖を催させる声だ。

こちらに来られなくてイラ立っているのか、空を割れないことにイラ立っているのか、あるいは単に空腹で――僕らというエサを目の前にして「おあずけ」されていることにイラ立っているのか。

大丈夫、大丈夫だ。あの巨ヤギがこちらへ通ってくることはない。僕のなすべきは、今のうちに殿下を抱えて逃げることだ。

そう、思ったのは僕だけではなかった。

呆然と空を見上げていた飛行船の乗組員たちも動き出し、巨ヤギからは逃げるべきだと悟ったのか、急旋回して距離を置こうとしている。

「月下美人」を――ラルクのいるはずの船を探したけれど、すでに見える範囲のどこにもいなかった。さすがラルクの仲間だ。逃げ足はばっちりだ。……また、会えなかったけれど、「月下美人」に乗っていることがわかったのは十分な収穫だ。

僕の背後、巨大飛行船の人たちも、船から下りると遠くへと逃げていく。誰かが僕へ向かって叫んでいるが、早くこっちへ来い、ということなのだろう。

「今、行きま――」

背筋に、冷たい予感が走った。

《えええええげえええええええっ》

巨ヤギがなんらかの魔力を放った。空の隙間に干渉しようとしているのだ。光とともにもう一度空に亀裂が走る。

だが一方で、絶壁に立つ「九情の迷宮」の光の柱にも変化があった。より強烈な光が走り、空へと再度干渉する。

ふたつの、とてつもなく莫大な魔力と魔力がぶつかり、雷が轟き、爆発が起き、空間が裂け、空間が閉じ、新たな術式が発生しては破棄される。

耳が痛い、と思った。

可聴領域を超える音が鳴っている。それは低音を含むようになり爆音となって降り注ぐ。

「え……」

髪の毛が逆立つような感覚。

「ええ……？」

煙が、足元の石ころが、がれきが――浮いた。

「えええええええええええええ！？」

殿下を抱えた僕の身体まで宙に浮かび上がった。

吸い込まれていく。

空へと。

「伸びろ！」

僕は左腕で殿下を抱えつつ、右手で道具袋からロープを出して放

ると、わずかに回復した魔力で【花魔法】を発動、近くにあった建物の柱にしっかりと結びつけた。
これで、吸い込まれることはない――。

「はあっ!?」

甘かった。柱ごと、地面ごと、宙に浮いたのだ。
僕は殿下とともに空へと舞い上がる。
周囲には大量のがれきと、ときどき大蛇と、逃げ遅れた飛行船が2艇、浮かび上がっている。
空にはすでに巨ヤギはいなかった。巨ヤギがいた空間とはつながっていないのか、あるいは巨ヤギはいないのか。
吸い込まれていく。加速していく。
赤々とした空間へと。
僕は殿下を抱きしめることしかできなかった――せめてこの人だけでも無事でありますように。
せっかく、自分の特異体質との向き合い方に気づいたんだ。
がんばればふつうに話すことだってできるようになるはずだ。
ほんの少ししか声を聞いていない。
それも、切羽詰まったときの声だけだ。
殿下が笑えばきっと、鈴を転がしたような明るい声が聞けるはずなんだ。
せめてこの人だけでも――。

視界一面が真っ赤になり、僕の身体はまるで宙に投げ出されたような感覚に包まれた。

56（後書き）

第3章本編はここで終了となります。
後日譚を挟んで第4章です！

もし「面白かった」「もっと続きが読みたい」と思われましたら「ブックマーク」&「評価」をお願いします。「評価」はページ下部で★をつけることで可能です。
この「ブックマーク」や「評価」は皆さんが思っている以上に、ずっとずっと作者の応援になりますので、是非ともお願いします！

ＩＤを持っていない方は簡単にできますからＩＤ登録をどうぞ、へへへ（運営会社の回し者）。

後日譚（1）

★　六天鉱山　★

キースグラン連邦アッヘンバッハ公爵領にある「六天鉱山（シックスマイン）」は、４年前、奴隷の暴動と竜の襲撃により崩壊していたが、１年も経つと新たな奴隷、新たな冒険者たちによって再稼働していた。

これは領主による天賦珠玉の「買取額引き上げ」が行われたことが大きい。金のニオイを嗅ぎつけた冒険者や商人が集まり、今では以前よりも盛んに天賦珠玉の採掘が行われていた。

「美味いよ美味いよ、こんなに美味い串焼きは領都でも食えないよ～」

「手の空いている冒険者はいねえか！　明日から１０日間潜る！」

「奴隷ども、こっちへ来い。もたもたするな」

かつて鉱山の入口には巨大な空洞があり、天頂部分だけがぽっかりと穴を空けていたが、今は完全に崩れている。このひろいスペースに、いくつもの宿舎、いくつもの雑貨屋、飲食店、酒場、それに鍛冶や加工職人が店を構えている。

ただ、左右の絶壁は残っているので、

（まるで、追い込み漁だ……）

奴隷のひとりは空を見上げてそう思う。この奴隷は漁村で育ったので、網を左右に「く」の字を作るように張って、外からばしゃばしゃと蹴立てて魚を追い込む漁を経験していた。

ここにやってくる人々が、鉱山という穴に吸い込まれていくのが

どうしても、この奴隷には「追い込まれている」と感じられたのだ。
周囲を見ると、ぼんやりとした表情の少年少女の奴隷が多くいる。かつてここでは星の多い天賦珠玉を「狸穴」で発見し、そのため少年少女の奴隷を大量に動員していると聞いたことがある。

（星3つ以上なんて見たこともないけど……）

「六天鉱山」に来て日の浅いこの奴隷は、そう思う。日が浅いのに、漁村で真っ黒だった肌はすでに生白くなっている。日の光を見るのは夜明けと夕暮れどきだけで、後の時間は鉱山に潜っているのだから当然かもしれないが。

「――それはほんとうか？」
「――ああ。長距離通信でガセネタをふかすことはなかろうよ」
「――しかしなぁ……国をひとつ破壊するほどの巨大なモンスターなどと……」

頭がとんがった兜をかぶっている鉱山兵が話しているのが、奴隷の耳に聞こえてきた。

「――国ひとつったって、レフ魔導帝国は小国だし、半壊だ、半壊。ん、小国だと知らなかったのか？　まあ、飛行船を造っているような国は大国だと思うよな」
「――でも天賦珠玉とは関係ないんだろう？」
「――ああ、4年前の事件は天賦珠玉と竜がやらかしたことだからな……念のため、警戒しろってことで連絡してきたようだ」

奴隷にはわからない単語ばかりだったが、不穏な空気が流れていることだけはわかった。

（海が見たい）

仲間の奴隷たちは、死の危険もゼロではないがさほどなく、食事もきちんと支給されるこの環境を楽しんでいるようだ。

小遣いも与えられ、出店で買い食いすることも許されている。

食うや食わずの生活をしてきた少年少女にとってみれば、十分「恵まれている」と思えるらしい。

（潮の香りが恋しい……毎日毎日鬱陶しいとすら思ってたのに）

だけれどこの奴隷は、飽きるほど潜っていた海を恋しく思うのだった。

今日も「六天鉱山」は平穏無事に暮れていった。

★　キースグラン連邦　首都ヴァルハラ　★

痩せこけた老人を、押しつぶしそうなほどに重厚な赤のマントに、天銀の杖。

それこそが広大なキースグラン連邦を治める盟主、ゲッフェルト王だった。

星６つの天賦珠玉発見の吉報から、転じて「六天鉱山」の崩壊に天賦珠玉逸失という天国から地獄へのフリーフォールを経験したのは４年前。あれからゲッフェルト王はさらに痩せこけ、白いヒゲと眉毛が伸びた。

彼の死を願っている人間は多く、とりわけ王太子である彼の息子はすでに７０歳を超えているし孫もひ孫もいるような状況、実のと

ころ玄孫も妊娠中であることを考えると、王位継承者は行列をなしているようなものだが、

「たわけが！」

ゲッフェルト王は、今日も元気に部下を叱りつける。

「半壊したレフに攻め込んで従属させるなぞ、愚にもつかぬ献策をよくもまあ口にできよるな。いいか、あの国が重要なのは、国土ではなくその知識と、迷宮から発見された英雄武装（ヒロイックギア）じゃ」

「はっ……」

叱られた臣下は頭を垂れて引き下がる。

夏の陽射しが射し込むこの会議室は、冷房の魔道具が稼働しているので非常に過ごしやすい。

長い長いテーブルの左右には連邦の代表者が並び、お誕生日席にいる枯れ木のような王をじっと見つめている。早朝、レフ魔導帝国に巨大モンスターが出現したという初報が入り、今は詳報が続々と届いているところだ。

キースグラン連邦は連邦国家なので完全な一枚岩ではない。だがゲッフェルト王が所属国を掌握しているので、彼がいる限りは盤石だった。

ゆえに、

（まだまだ死ねん）

そう、ゲッフェルト王が思うのも無理はない。

「それで、『裏の世界』とつながったのはほぼ間違いないようじゃな？」

「さようですな。『調停者』はおらんようですから、『盟約』外の想定外（イレギュラー）ということになりましょう」

王の右隣に座っているのは、こちらも老人だが筋骨隆々である。そのくせ魔法使いが着ていそうな紫色のローブを羽織り、ヒゲはなく、頭は一点の曇りもない禿頭（とくとう）である。磨いた宝珠をはめ込んだようなドングリ眼をじろり、じろり、と周囲へ向ける。

ゲッフェルト王が若いころから信頼し、そばに置いている人物で、肩書きは「天賦大臣」である。貴族位もなく、しかし「天賦珠玉」というこの国の根幹を支える組織のトップに据えられている。

「……大臣よ、そんなことはあり得るのか？」

「ないことはないでしょう。天賦珠玉に関しては『盟約』がすべてですが、世界のすべてが天賦珠玉に限ってはおりません。『裏の世界』から、稀に、こちらに渡ってくる者も確認されております」

「『九情の迷宮』を造ったというラ＝フィーツァもそうだと？」

「計画的にか、偶発的にかはわかりませんが、状況を見るにそういうことでしょう。我らは『裏の世界』になぞ興味はありませんからな。ハッハッハッハ」

ドングリ眼を見開いて笑う大臣だが、居並ぶ誰も笑わなかった。

そもそもが「盟約」に関する情報は隠されており――それそのものがなんなのか知らない者も多く、また知ろうとすることすら許されていなかった。

こうして、王と側近だけが情報を独占している。

連邦代表者たちは「天賦珠玉に関することであろう」とは思っているものの、それ以上はわからないでいる。いったい、いつ、誰と交わした「盟約」なのかも知らない。

「レフ国上空からは大量のモンスターが降ってくる、というのはど

う見る」

報告では、巨大モンスターを一度退けたものの、その後上空の赤い空は固定され、今もなおモンスターがあふれているという。

「それは、王よ。簡単なことでしょう。『裏の世界』は滅びの危機にある」

「封鎖は可能か？」

「難しいでしょう。しかし不可能ではない。『九情の迷宮』とやらが２つの世界に『穴を空けた』仕掛けであるのなら、それを研究すれば『穴を塞ぐ』手立ても見えましょう」

「ふむ……その知識、欲しいな」

「ハッハッ、王ならばそう仰せだろうと思いましたぞ。知識は力ですからな」

ゲッフェルト王は、左を向いた。

「軍務卿。連邦の総司令官として、飛行船を使わずに騎兵を１０万集めるとしたら何日掛かる」

こちらは恰幅のいいカイゼルひげで、貴族位を持つ由緒正しい男だ。

「ふむむ……大急ぎとしても3か月以上は掛かりますぞ。これから実りの収穫期に入りますからな……」

「飛行船を使えば？」

「1か月あれば」

「うむ。ではそれでいくぞ」

ゲッフェルト王は、この日、早速レフ魔導帝国への軍事支援を決

めた。

後日譚（2）

★　クルヴァーン聖王国　スィリーズ伯爵邸　★

「審理の魔瞳」を持つスィリーズ伯爵が自宅に戻ったのは、日付も変わろうという夜遅い時間だった。

それでも屋敷で働く使用人たちは勢揃いして伯爵の帰りを出迎える。主である伯爵が誰よりも働いているというのに、自分たちが先に休むことは許されない――そんな思いで彼らも働いている。

「お父様、お帰りなさいませ」

出迎えの筆頭にいたのは、伯爵と同じ金髪と緋色の目を受け継いだひとり娘のエヴァだ。

今年、一人前の貴族として第一歩を踏み出す「新芽と新月の晩餐会」に参加し、今や押しも押されもせぬ立派な伯爵家令嬢として社交界に顔を出している。

その美しさと可憐さから、すでに多くの男性ファンがついていたが、フレーズ侯爵家のシャルロットがなかなか他の男を近づくことをさせなかった。

「エヴァ」

伯爵は最愛の娘の顔を見て少々口元をほころばせたけれど、

「……話があります。私の部屋へ――お茶は要りませんから、皆さ

んも休んでください」

すぐに表情を引き締めた。使用人たちが一斉に頭を垂れた。

「レフ魔導帝国の情勢はいかがですか」

伯爵の執務室に入ると、入口に執事長が立ち、廊下には筆頭武官のマクシムが護衛として立った。

貴族の令嬢として一段と立ち居振る舞いが落ち着いてきたエヴァが早速たずねると、伯爵はうなずいて応接ソファにふたりで座る。

レフ魔導帝国上空に巨大モンスターが出現してから、すでに１０日が経過している。

「現在、帝国はあらゆる物資を投入して空から降るモンスターを討伐しているそうです。しかしながらその戦況は悪く、レフは街を放棄せざるを得ない……と聞いています」

「国が、国土を失うということですか」

レフ魔導帝国の国土は、光天騎士王国、クルヴァーン聖王国、未開の地「カニオン」に挟まれた小さな土地だけだ。ここに街があり、ここにしか街はない。

「我が国と光天騎士王国とに接する巨大な関所を最終防衛ラインとして戦っているそうですが、すでに国民の８割方は関所を越え、難民と化しています。聖王陛下は、すべてのレフ人の受け入れを決定し、できうる限りの人道的支援を行うことを決定しました」

ほっ、とエヴァは胸をなで下ろす。

ここでレフを見捨てても、結局のところすぐにこちらに飛び火してくる問題だし、レフの魔導技術には目を瞠るべきものがある――

という損得勘定はあろうけれど、今は人として当然のことを当然なしていくという決定を喜ぶべきだろう。

つい先日、先代聖王がその聖王位を長女の第１聖王女に譲位し、グレンジード公爵を名乗るようになった。

第１聖王女はグレンジード公爵によく似た気質の、カラッと明るい好人物で、困っている人を見過ごせない「姐御肌」だ。

「キースグラン連邦は１０万の兵を提供するとレフ魔導帝国に申し出ました」

「１０万！　すさまじい数ですわ」

「ええ。聖王都の警備兵をそっくり出しても足りませんね。エヴァ、あなたはこれをどう見ます？」

スィリーズ伯爵はエヴァに、包み隠さず聖王国中枢で交わされている情報を与えるようになった。それはすなわち彼女を「対等」と認めていることであり、またそうすることでエヴァの才覚をどんどん伸ばそうとしている。

「……」

曲げた人差し指をあごに当て、じっと考えたエヴァは、

「そのまま領土を得よう、という考えはあまりにも浅はかでしょう」

「はい。私もそう思います。では連邦の狙いは？」

「恩を売ること、ですか？」

「それもあるでしょうね」

「では、魔導帝国の技術供与を望んでいる？」

教師が教え子の成長を見守るように伯爵はうっすら微笑んだ――伯爵はエヴァに対しては、このように感情を見せることが増えてき

た。

「よい回答です。ここでさらにもう一歩踏み込むことができればいっぱしの貴族になれますよ、エヴァ。――キースグラン連邦とレフとの間にはなにがありますか？」

「光天騎士王国ですわ」

「連邦と騎士王国との関係性についてはどれくらい知っていますか？」

「それは……ほとんど存じ上げません」

エヴァは外国単体ならともかく、外国同士についてはなにも知らないことに気づかされ悄然と肩を落とした。だがそれも無理からぬことで、１２歳の彼女が学んでいるのは一にも二にもまずは国内のこと。各貴族に関する知識ばかりだ。

「落ち込む必要はありません。知らなければこれから知ればよいのです」

「……はい」

「連邦は大国で、騎士王国はどちらかと言えば中規模から小規模国家と言えます。二国間の関係は良好とは言えませんが、さりとて悪いとも言えない。ただ今回、連邦がレフの技術を望み、１０万の兵士を出す以上は騎士王国を通ることは必須です」

「騎士王国と外交が発生します」

「そのとおり。これを機会に、連邦は騎士王国とも友好的な関係を結びたいと考えているのでしょう――強大な敵にともに当たる、というシチュエーションは、騎士道を重んじる騎士王国がいかにも好きそうなことですから」

「お父様、連邦は騎士王国との関係性を改善することにメリットを感じているのですか？」

「はい。キースグラン連邦の盟主ゲッフェルト王は高齢ですからね。

あと数年の命でしょう。自分が亡き後に騎士王国と問題が起きないよう手を打つつもりでしょう」

「たった数年」

「そう、数年です。もっとも、数年前にも同じことを言われていましたがね」

「まあ……」

父の語る言葉を一言も聞き漏らすまいと耳を傾けているエヴァに、伯爵の笑みはますます深くなる。

安心しているのだ。

これならばエヴァは大丈夫、自分がいつかいなくなっても貴族としてやっていけるだろう――と。

（レイジさんには感謝しなければなりませんね……）

自分が雇い、そして自分と敵対しながらも、最後は自分と娘のために身を引いてくれた少年のことを伯爵は思い返す。

だからこそこの話は娘に言わなければならない。

「エヴァ。最後にひとつ重要な情報があります」

「なんでしょうか」

エヴァは背筋を伸ばした。

「……今日入ってきた情報です。レフ魔導帝国にはハイエルフの王族であるアナスタシア殿下が滞在していらっしゃいます」

「ハイエルフ、ですか？」

「はい。キースグラン連邦内には天賦珠玉を産出する場所が2箇所あり、ひとつが『六天鉱山（シックスマイン）』でもうひとつがハイエルフやエルフの住む『三天森林（サードフォレスト）』です。アナスタシア殿下は、ハイエルフへの飛行

船提供の見返りに差し出されました」

見返り、という言葉にエヴァがひっそりと眉根を寄せる。

「そのアナスタシア殿下が、レフ魔導帝国上空に出現した空の亀裂に吸い込まれた……というのです」

「それは――どういうことなのでしょうか？　モンスターが出現するところに吸い込まれた……？」

「詳しくはわかりませんが、殿下のみならずがれきや飛行船も吸い込まれたということなので、強力な吸引が発生したことは間違いありません」

「不思議な現象ですね……殿下がご無事ならよろしいのですが」

「……エヴァ」

そこで伯爵はじっと娘を見つめた。

「実はそのとき、殿下の隣にひとりの冒険者がいた、という情報が上がってきています」

「……」

エヴァは動きを止め、父を見返した。

この場でわざわざ「冒険者」などと言った。

それは――もしや、という予感がエヴァの身体に走る。

「レイジさんが、アナスタシア殿下とともに空へと吸い込まれたそうです」

後日譚（3）

★　「銀の天秤」　★

飛行船が空から砲弾を降らせ、地上のモンスターを爆撃する。
砲弾の1発1発は威力が高く、ときに二桁というモンスターを一掃していくが、中には腕が吹っ飛ばされた程度で生き延びる個体もあった。
４本の腕を持つ竜人モンスター、一本角に電撃を溜め込んだカモシカ、異常な跳躍力を持つ毒蜘蛛……見たことのないモンスターが多かった。
最初こそ地上戦で応戦していたものの、今は巨大な関所があるのをいいことに、都市を封鎖する方向で方針がまとまりつつあった。
そうなると、どれだけの財産を運び出せるのかで帝国内は大混乱に陥った。国家が機能しているためにぎりぎりのところで火事場泥棒や暴動は発生しなかったものの、それでも国民はほとんどの財産を捨てざるを得ず――家具なんてもちろん運べないし銀行は停止しているので――不満と不安が充満していた。

「――ゼリィ、外はどうだ？」

テントに戻ってきたゼリィにダンテスがたずねると、ゼリィは首を横に振った。

「相変わらずっすね～。みんなどんよりした顔でうつむいてますよ」
「そうか……」
「仕方ないっすけどねえ」

そこは関所の外、本来ならば入国の手続きを行うための広場で、先日「銀の天秤」メンバーも一晩を過ごした場所だった。

ここにテントを張っていいのは兵士や冒険者で、いわば「武力」を持つ者だ。

大多数の一般市民はさらに外側で、国が急ごしらえで張った巨大テントに収容されている。国民全員が入るにはテントが足りず、野宿をしている者も相当にいた。

帝国から逃げ出すレフ人もいるにはいたが、元々鎖国を貫いてきた帝国で、外国にツテがある者も知識がある者も少なかった。

「今は夏だからまだいいが、冬になるとマズいな」

「この辺りは寒いんで？」

「結構冷えるぞ。このままテント生活を強いられたら凍死者が大量に出るだろう」

「うげっ」

冬までに事態は好転するのかどうか、ふたりにはまったく判断がつかなかった。

上空の「赤い亀裂」を――現在ではその亀裂を「レッドゲート（赤い門）」と呼んでいるが、レッドゲートをどうにかしないことには国家再建は成らない。

帝国は爆撃でモンスターを間引きながら、今なお光を放っている「九情の迷宮」に研究者を送り込んでいる。

「冒険者ギルドで聞いてきたが、朗報もあるぞ」

ダンテスは言った。

キースグラン連邦が１０万人の騎兵を出すと申し出、隣国のクルヴァーン聖王国が物資提供を申し出、必要とあらば帝国民を受け入

れると。光天騎士王国は「対応協議中」ということだ。

「へぇ～。聖王国っすか」

「なんでも辺境伯領が大規模な受け入れ準備をすでに始めているそうな。冬に間に合えば多くの命が助かるだろうな」

「あそこにいたのが、懐かしく感じやすねえ」

「俺たちはそう長く滞在していなかったが、ゼリィたちは４年くらいいたんだよな……」

その「ゼリィたち」という言い方で、ふたりはレイジのことを思い浮かべる。

彼が「空へと吸い込まれた」と聞いたのはすべてが終わってからのことだ。

レッドゲートがほぼ完全に固定化され、小型から中型までのモンスターが安定的に空から降ってくるようになった。多くのモンスターは落下の衝撃で死ぬのだが、逆に言えば生き延びるようなモンスターは危険極まりなかった。

当時、ダンテスは酒を飲んでいて、異変に気づいてから急いでムゲ商会へと戻った。そこにレイジはおらず、ミミノが「探しに行く」と言い張ったが「アイツならひとりでも確実に生き延びる」と無理矢理説得し、逃げ遅れた市民の救助に当たった。

夜が明けて、街の惨状がわかるようになったころ、レイジがアナスタシア殿下とともにレッドゲートへ吸い込まれたことを聞いた。

「……ダンテスさん、ミミノさんたちは？」

「あ、ああ……。ミミノとノンは、ムゲさんといっしょにルルシャさんとこさ」

「あーしらも行きましょうか」

「そうだな。しばらく駆り出されることもなさそうだし」

冒険者ギルドは関所の外に建物があったので問題なく機能しており、最初の数日は帝国内のモンスター討伐の依頼を次々に発行し、「銀の天秤」はレイジがひょっとしたらいるかもしれないというかすかな望みを胸に討伐を引き受けた。

だが見つからぬまま、もう15日が過ぎた。

討伐は飛行船による爆撃で効率的に済ませるようになり、帝国内は無人と化した。

皇帝は今、大穴の空いた「豊穣ノ空」をなんとかかんとか飛べるように直し、関所を越えたところまで飛ばして移し、ここを臨時拠点として国家運営を行っている。

「豊穣ノ空」近辺には国の機関が集中しており、天幕がいくつも立っていた。そのうちのひとつが「迷宮管理局」のもので、ルルシャの勤務先だ。

「どういうことだべな!?　レッドゲートを閉じたら、吸い込まれた人たちは戻れない！」

「しかし今のままでも、数か月もすれば劣悪な生活環境で死ぬレフ人が多く発生します」

「それはそうだけど、でも……！」

「ミミノさん、私だって悔しいです。なにもできない自分が」

「……」

ダンテスたちが天幕に入っていくと、ちょうどルルシャとミミノのふたりが声を荒げていたところだった。

ノンとムゲ、それになぜかいるアバの3人は離れたイスに座って、はらはらとふたりを見守っていた。

「――どうした？」

「ダンテス……」

目を赤くしたミミノが――あれからほとんど眠れていないらしい――言う。

帝国は「九情の迷宮」の研究成果をもって、一刻も早くレッドゲートを「閉じる」ことを決定したのだと。

「そうか……」

正直に言えば、ダンテスはそうなるのではないかと思っていた。レッドゲートが諸悪の根源ならば、あれを破壊する、あるいはなかったことにするのが手っ取り早い対処法だ。

だが帝国は、ハイエルフの王族であるアナスタシアと、軍用飛行船が2艇、吸い込まれている。無事に取り戻せるかはともかく、生死の確認くらいはするのではないかとダンテスは思っていた。このままレッドゲートを閉じれば、彼らを「見殺し」にしたと国民から見られる。

（それほど切羽詰まっているのか）

飛行船の燃料、砲弾、さらには食料。それらは数に限りがある。今の状況を維持できるのはあと何ヶ月か――いや、ひょっとしたらあと数日という状況なのか？　冒険者ギルドからの討伐依頼も、達成したぶんの報酬はまだもらっていない。「帝国から後日支払われる」ということで棚上げになっているのだ。おそらく現金もほとんどないのだろう。

「わたしは、わたしは……！　また、レイジくんを助けられなかった……！！」

ミミノの目に涙がにじむが、彼女は歯を食いしばって涙が流れ出ないようにこらえている。

ダンテスにはミミノの気持ちが痛いほどにわかる。

アッヘンバッハ公爵領の領都で、ミミノは竜との戦いで命を救われ、ダンテスは石化の危険から救われた。だがレイジは国に追われているからと、ダンテスたちに迷惑を掛けられないからと姿を消した。

あのとき、追いかけられなかったことを――いくら大ケガを負っていたからとはいえ、ダンテスは狂おしいほどに後悔した。

だからクルヴァーン聖王国で再会したときに、次に守るのはこちらの番だと思った。恩を返せるという喜びが心を満たしたのを感じた。

結局は、なかなか恩を返すチャンスもなく、むしろ「畏怖の迷宮」で古い仲間のレオンの裏切り、ジャガーノートとの戦いから救われるばかりだ。

そして今――レッドゲートに吸い込まれたレイジを助け出さずに、いつ恩を返すのか。

（！）

そのときダンテスはハッとした。

帝国はレッドゲートを閉じようとしている。それならば、いっそのこと先に――。

後日譚（4）

★　「銀の天秤」　★

ダンテスが口を開くよりも先に、ミミノが言った。

「……ダンテス。飛行船、手に入らないかな？」

「奇遇だな、ミミノ。俺も同じことを考えていた。レッドゲートに入ればいい」

ダンテスとミミノは視線を交わすと、同時にうなずいた。

「ダメです！！」

遮ったのはノンだ。

「ふたりともなにを考えてるんですか！？　バカなんですか！？　バカなんですね！？　そんなことしてレイジくんが喜ぶわけはないでしょう！」

「ノン。俺たちは本気だ。帝国がレッドゲートを閉じても、先に向こうに渡っちまえばこっちのもんだ」

「大体向こうに入ったとしてどうやってレイジくんを探すんですか！」

「……」

「……」

ダンテスとミミノは視線を交わすと、

「勘だな」
「ニオイとか」
「無策！！」

ノンが叫んだ。

「だからレイジくんに助けられてばかりなんですよ！！」
「おまっ……それを言われると、ぐうの音も出ないだろうが」
「ううん、レイジくん」

ミミノがまた泣きそうになって、歯を食いしばる。

「ちょ、ちょっと待ってください、3人とも。落ち着いて、ね？」

さすがにルルシャが間に入ると、それまで黙っていたアバが、

「チュパ。今の話で思いついた。レイジさんとアナスタシア殿下が無事かどうか、確認できないかな？　チュパ」

アバの持っている水飴はすでに底を尽いたので、棒だけをしゃぶっている。実は水飴を買う金はあるのだが、水飴とて食料のひとつだ。自分が無為に消費するよりも――無為に消費しているという自覚はあったらしいが――空腹の子どもたちに与えたほうがいいだろうと買わずにいる。
おかげで少々げっそりしている。が、標準体型まではまだ遠い。

「無事かどうかの、確認とはどういうことですかね」

ムゲがたずねる。

「チュパ。レッドゲートはどこかにつながってる。なら長距離通信の魔道具とかがあれば……」

「いや。レイジさんはそもそも長距離通信の魔道具なんて持っちゃいませんよ」

「そこをなんとかできないかね。チュパ」

「なんとかって……」

そのとき、ミミノが、

「あああああああああああああ！！」

叫んだ。すぐそばにいたダンテスの背筋がピンと伸び、ルルシャの瞳が焦点を失い、耳のいいゼリィが「フギャア！」と猫鳴きしてしまうほどには強烈な叫び声だった。

「これ！　これこれこれこれ！」

ミミノが指差したのは、入国のときに渡され、つけたままの腕輪だった。

――帝国内での行動は制限されます。この腕輪を必ずつけてけして外さないでください。また帝国外に出るときにはこの腕輪を必ず返却してください。もしもそのまま国外に出た場合は非常に大きな警報が鳴ります。腕輪の貸与についてはギルド証に記載され、返却時にその情報は消去されます。

「これって位置がわかるんじゃないか！？」

ルルシャの目の色が変わった。

「それは……確かに。微弱な魔力波動を出し続けているから、捕捉できるかもしれない。コレを管理しているのは――」

「ウチだね。渉外局だ。でも、冒険者ひとりを探すのに技術情報を明かしてくれるかはわからないよ……チュパ」

「そこをなんとかするのが渉外局副局長殿の腕の見せ所だろう？」

ルルシャに言われ、アバは舐めていた棒を上下に振る。

「チュパ。……もうひとつ、なにか後押しが欲しいな。できればアナスタシア殿下のことで。それなら十分交渉カードになり得る」

全員が考え込もうとしたときだ、

「あああああ――むごっ」

ミミノが叫ぼうとしたのでダンテスとゼリィのふたりがその口を押さえた。

「もごごもご、もごもご！」

「大声を出すなよ？　出さないなら手をどけてやる」

「もご！」

うんうんとうなずくミミノ。

「……不安しかないが」

「しょうがないっす」

渋々ふたりが離すと、ミミノは道具袋を漁りだした。

「これこれこれこれこれぇ！」

そして取り出したのは――一束の髪だ。

アナスタシアが「銀の天秤」へ、報酬の代わりとして贈ったもの。

「ハイエルフの髪は非常に特殊な魔力が含まれているべな！　この魔力と同じ波長の魔力を探すような魔道具が、あるんじゃないか！？」

ミミノは両手を広げた。

「ふつうならあり得ないけど、ここなら！　ここは、世界の魔道具の最先端、レフ魔導帝国じゃないか！？」

★　「月下美人」　★

レフ魔導帝国の最新鋭飛行船「月下美人」は、ヘビギンチャクの襲来というどさくさもあってなんとかかんとか逃げおおせることに成功した。しかし燃料の少なさはいかんともしがたく、未開の地「カニオン」に入ったところで――ほんの少しだけ踏み込んだところに崖を見つけ、そこに身を隠すように不時着していた。

「お頭ァ……お嬢の様子はどうっすか」

「ぐっすり眠ってらァな。騒がしくして起こすんじゃねえよ」

「こんなにデケェ飛行船に5人しかいないんすから、騒いだってた

いしてうるさかねーですよ」

「お嬢」の眠っている部屋の前、廊下にはちょっとしたスペースがあり小さなテーブルが置かれてあった。お頭ともうひとりは、保存食の干し肉と乾パンをかじりつつ、酒を飲む。軽発泡の小麦の醸造酒はしこたま食料庫に搭載されており、アルコール分も少ないので水代わりに飲んでいた。

「んで、帝国のほうはどうなってんだ」

「へえ。ひとっ走り見てきましたが、どうにもこうにも人っ子ひとりいませんや。帝国は街を放棄し、関所を城壁代わりに戦ってるようです」

「ほぉん……外敵を防ぐ関所が、内からの敵を防ぐことになっちまうとは、皮肉なもんだ」

お頭はぐびりと酒を一杯やる。

「……だが俺たちにゃぁ関係ねえ。俺らは、燃料問題にけりがついたらすぐに出発だ。じゃねえとお嬢の身体がもたねえ――」

「――誰の身体がもたないって？」

後日譚（5）

★　ラルク　★

お頭ともうひとりがハッとして振り返ると、部屋から半身を出した「お嬢」の――ラルクの姿があった。
戦闘服を脱いで、生成りの麻で作られたシャツとズボンというスタイルは、見た目が貧相でありつつ実際ラルク自身もげっそりとしていた。

「お嬢！　なに起きてきてんだ！　眠ってなきゃならねえでしょうが！」
「うっさい。あたしはまだまだ元気だ」

壁に手をつきながら歩いてくるラルクは額にびっしょりと汗をかいていた。

「……どこが元気なんですかい。俺らは心配しすぎて、そろそろ心臓が爆発しそうなんですよ。頼むから大人しくしててくださいや」
「バカ言うなよ。アンタたちがふがいなくて、結局あたしが出張らなきゃならなかったろーが」
「あんなデカイモンスター、無視すりゃよかったんだ。『ぶっつぶす』とか吠えたのはお嬢だろうが。わざわざ『月下美人』で引き返してまで、やることじゃあなかった」
「見過ごせねーだろ……倒せる力があるのに、放って逃げ出したりしたら……。そんなことしてるあたしを――」

弟くんに見せられないじゃないか、とごにょごにょ言ったのはお頭にももうひとりにも聞こえなかった。

「お嬢？」

「……なんでもない。そんで、アンタたちはここから逃げ出す気なんだろ？」

「そりゃそうだ。今こそチャンスだ。街に残ってる触媒をかき集めて燃料にすりゃあ、大海を渡って西の賢者とやらに会いに行ける。どんな病だって治すってえ賢者しか、もうお嬢を治す手段は残ってねえ」

「……」

「どん底にいる俺たちを、日の当たるところへ引っ張り上げてくれたのはアンタだ。希望を見せてくれたアンタを生かすためなら、俺たちゃこんな国が滅びることくれえ屁でもねえ」

「わかった。あたしのためだと言い張るんだな？」

「おう」

お頭ともうひとりは、力強くうなずいた。

「アンタたちの気持ちはうれしいよ。その思いもよーくわかった」

「お嬢……」

お頭がホッとした瞬間だった。

「そんなら、あたしはこの船を下りる」

「は！？　おい、なんだって？」

「あたしは、目の前に救える命があるんならそのためにこの力を使いたいんだ」

彼女の身体に、黒い影がするりと現れ、肌に吸い込まれるように消えていく。

ラルクの肌は白かった。それは病的なまでに。

「強大な力には代償が必要なのは仕方ない。長くはもたないかもしんねー。でもあたしは、ならばこそあたしは、誰かのためにこの力を使いたい――そう決めたんだ」

「お嬢！　なんでそんなに頑ななんだ！？　お嬢が、自分の幸せを願ったっていいだろ！」

「あたしは十分幸せだった」

「幸せになんて見えねえよ！　自分を犠牲にしてばっかのお嬢は！」

「いや、幸せだったんだ……あたしには、かけがえのない弟がいるからさ」

「弟？」

それは、初耳だった。

「アイツがいるからあたしはあたしでいられる。なにも持たなかったあたしたちだったけど、アイツはいつだって正しい道を歩もうとしてた。あたしはそれを横で眺めてるだけで――結局、こんな呪われた力を手に入れ、振り回してるだけ」

「呪われた力だなんて言うなよ……俺たちゃそれで、助かったんだ」

「……ああ。でもな、あたしは弟の真似をしてるだけなんだ。アイツならこうするだろう、アイツならこうはしないだろう、ってさ。だから――」

ラルクの手に黒い影が現れ、ラルクはそれを握りしめた。

「アイツは、あたしの自慢の弟は、きっとこの国を見捨てたりはしない。あたしが生きていく最後の日まで、弟に顔向けできないよう

な、つまんねー生き方はしないって決めたんだ」

４年前のあの日――「六天鉱山」で契約魔術から解放されたあの瞬間、ラルクは湧き上がる黒い感情に心を支配されかけた。

だが、彼女をつなぎ止めたのが、すぐ後ろにいた弟の存在だった。

――守ってあげなきゃ。あたしが。あたしが、こいつを！

ただその一心で手に入れた力。星６つの天賦【影王魔剣術】。

だというのにすぐにラルクは失敗をしてしまう――あまりに強大な力を手に入れた全能感で、人を殺しすぎたのだ。

そのせいで、弟を怯えさせてしまった。

失望させてしまった。

殴られるよりも、責められるよりも、その事実がなによりもラルクに衝撃を与えた。

そして逃げるように彼の前を去り――それでも気に掛かり、竜に襲われた街では彼を助けた。

だが、そのときには、弟のそばには仲間がいた。

頼りになりそうな仲間が。

もう、自分は必要ないのだと思った。

――なら、せめて、あたしは……弟くんに恥ずかしくない生き方をしよう。あたしがアイツを「自慢の弟」って思うのと同じく、アイツがあたしを「自慢の姉」って思ってくれるように。そして、いつかどこかで……。

竜を殺した場所に残したメッセージ。

弟が見てくれるとは思わなかった。だけれどそれくらいは残して去りたかった。

そのメッセージがあるから、胸を張って生きていける。

いつかどこかで、弟に再会したときに、立派な姉でいたいから。

（そのときはきっと、弟くんも立派になってるだろーな）

再会の日を想像するだけで心に小さな光が点り、温かくなる。

「アンタたちはどうする？　このまま逃げてもいいぞ」

「……んなことできるわけねえだろ。俺たちゃ、お嬢と一蓮托生さ」

「そう言うと思ったぜ」

ラルクは言った。

「『月下美人』を、レフに返還する。そんであたしは最前線に出る」

「お嬢！？」

「心配すんな、アンタたちが罪にならないようううまく立ち回ってやっから。大体あたしの能力を知ったら、なんも言えなくなるだろーから、それこそ大船に乗った気でいな」

「マジ……なんだな？　戻って戦うと言うんだな？」

「マジもマジ、大マジだよ。大体、『空賊』なんて言われてるあたしたちが、国を守る戦いに参加できるなんて――それこそ、カッコイイだろーが？」

にやりと笑って言い切ったラルクに、お頭は天を仰いで額に手を当て、もうひとりの手下は青い顔であわあわするだけだった。

翌日――美しい流線型を持った銀色の飛行船「月下美人」は、日の光を反射しつつレフ魔導帝国の上空を通過、関所近辺に姿を現した。

盗まれたはずの最新鋭飛行船は、あらゆる人々の予想とは違った形で国に戻ったのだった。

後日譚（5）（後書き）

第3章はこれにて終わりとなり、次話から第4章「離界盟約（ワールド・アライアンス）」が始まります。
お楽しみに！
（新章開始準備のため、数日お休みをいただきます）

というわけでいつものお願いです。
ここまでお読みいただき「面白かった」「続きが読みたい」と思われましたら「ブックマーク」をお願いします。
また、作者への応援もぜひお願いします！　応援は、ページ下部の「★」から「評価」を通じて応援が可能です。
（評価を入れると作品のポイントになります）

では次章でお会いしましょう。

1（前書き）

新章、始めました。

1

子どもひとりが身体をひねり、ごつごつする岩肌に服をこすりつけながらなんとか通れる坑道があって、これを鉱山夫たちは「狸穴（まみあな）」と呼んでいた。

僕はふとそんなことを思い出した。

狸穴は枝のように分かれているのだから、逆に言えば太い道を選んでいくと最後は根っこ――鉱山の入口にたどり着くという寸法だ。

――では、もしも逆に、根っこから上へと上っていくとしたら？　こっちが本流にいて、支流に行ったらどうなる？

僕はふとそんなことを考えた。

――いや、最後はすべてが支流になり、源流へとたどり着く。それなら迷う必要はない。

すべては同じ枝の先、葉のひとひらなのだ――。

★

目が覚めたのは、強烈な悪寒と吐き気に襲われたからだ。

次に頭の中が、刺すように痛んで頭を抱える。

「うっ、ぐ、ぐぐっ……！？」

目の前が赤い。いや、黒い。いや、青い。いや、なんだこれは…
…モザイク状になった多くの色がちかちかと瞬き、またも悪寒と吐き気に襲われる。
すると――僕の背中をさする手を感じた。
一所懸命にさする手のひらの温かさが、僕の正気をつなぎ止める。
カンダタが蜘蛛の糸を伝うように意識が浮上していく。

「――っはっ、はあっ、はっ、はぁっ……」

目の前にあったのは、

「――――」

精巧な作り物よりも整っているとすら感じられる、アナスタシア殿下の美貌だった。だけれど髪は乱れ、前髪は額に張りつき、頬には汚れがあった――それが人間味を感じさせ、より魅力的にすら見えるのだから不思議だった。
殿下はくしゃりと顔をゆがめると目尻に涙を浮かべ、僕の首に抱きついた。ふるふると震え、ふつうならば声を放って泣くような勢いだというのに彼女は声を殺している。

（ああ……そうだった。殿下は、声を出すと【火魔法】が発動してしまうんだっけ）

感極まっても「声を出さない」という枷に行動を縛られている殿下に、僕は強い同情心を感じる。でも今は――状況の把握が先だ。

「殿下、ありがとうございます。もう大丈夫です」

その身体を引き剥がしながら――「もうしばらくは抱きしめられ

ていてもいいんじゃない？」という誘惑には抗いがたかったけれど――僕は周囲を見回す。

「……ここは？」

雲が空を覆っていて、薄暗い。

どうやら僕らは森にいるようだったけれど、木々の生育は悪く下草もほとんど生えていなかった。

痩せこけた木々を見透かしてかなり遠くまで見えるけれど、羽虫が飛んでいるきりで他に生命反応は感じられなかった。

『私は魔法を使ったところまで覚えていますが』

殿下が指で――爪が磨かれた美しい指で地面に文字を書き出したので、僕はそれを留める。

「殿下、声を出しましょう」

でも、という顔をする。

「大丈夫です。【魔力操作】の天賦珠玉で、殿下はかなり魔力コントロールが上手になりました。毎日慣らしていけばふつうに話せるようになりますよ――もし火が多めに出ても、僕が【水魔法】で消せますから」

にこりと笑ってみせ、手のひらに水球を浮かべる。

「……あの」

ちりっ、と火花が散ったが、それだけだった。

その先をどうぞ、と僕は力強くうなずきかける。

「でっ、『殿下』ではなく、アナスタシアと呼んでくださいませ！」

ぼぼぼぼっ、と火球が飛んだので僕はあわてて水を放った。じゅわ～、と消える。

「……あの、殿下？」

「アナスタシア、ですっ」

ぼぼっ。じゅわっ。

「いえ、しかしですね」

「し、親しい者にはアーシャと呼んでもらいたいと、ずっと思っていたんですっ！」

ずぼぼぼぼじゅわわわわわわ。

やばい、なんかすごい火勢で僕の前髪がちょっと焼けたんだが。

「殿下、殿下、落ち着いて――」

「で、でも止まらないんです！」

「アーシャ！」

「！」

火が、止まった。

だけど殿下の顔はゆでだこのように真っ赤になって――僕の放った【水魔法】の蒸気ではなく彼女の頭頂部から湯気が立つと、

「あっ！？」

殿下は後ろにぶっ倒れた。

「目が覚めましたか？」

「！？」

起き上がった殿下はハッとして周囲を見回すけれど、そりゃあ、驚くよね。もう夜だし。

あれから殿下はぐっすりとお休みになって、この時間に至る。

「あ、そのままで。お茶を出しますから」

起き上がった殿下にはそこに座っていていただいて、僕は焚き火の上で舞っていた茶葉を集めて竹筒に入れた。【風魔法】を慣らしていくとこういうことができる。

殿下が眠っている間に、この竹や茶葉を僕は集めてきた。正確には「竹っぽい植物」と「茶葉っぽい葉っぱ」である。【森羅万象】で食用可能であることを確認できなければさすがにこんな危ないことはしないけどね。

【水魔法】や【生活魔法（コンビニエント）】があるので水には困らないけれど、どうせ飲むならお茶のほうがいい。

僕が手渡した竹筒からは香ばしい薫りが立ち上る。

「熱いので気をつけて……どうですか？」

「……」

口を付けてゆっくりと飲んだ殿下は、うんうんとうなずいた――僕は苦笑して、

「言葉を、話しましょう。さっきはちょっと暴走しましたけれど、どのみち避けては通れないことです」
「……とても、美味しいです」
小さな炎がちらり。水を使って消すまでもない。
「殿下のお口に合ったようでよかった」
「……」
おっとぉ、にらまれたぞ？
だけどとんでもない美少女ににらまれるというのもこれはこれで……と、僕の背筋に「これ以上踏み込んではいけない」という快感が走りそうになったところで正気に戻る。
「わかりました……では、アーシャと」
「……」
今度は顔を真っ赤にしてうつむいて、両手で竹筒をぎゅうと握りしめる。威厳を保とうとしているのに口元がニヤついてしょうがない――みたいな感じで。
（そんな可愛らしいことされたら僕の【火魔法】が暴走しそうなんだが）
とか思う次第です。
「で、でも、口調はこれで勘弁してください。敬語で話すのがクセになっていますから」
「わ、わかりましたわ」

ぼぼっ、と火の玉が現れたので、殿下――アーシャはあわてて口を閉じた。

「……レイジさん。ところでここはどこなのでしょう」

落ち着いたところで、そう言った。

「僕が覚えている限りをお話しします」

それから僕は、アーシャが気を失った後のことを話した。

空に現れた巨大なモンスター。

強力な魔力干渉と「九情の迷宮」の反応。

そして吸い込まれる僕らと飛行船。

僕は「狸穴」のことを思い出していたけれど、あれは空の赤に吸い込まれたときに見ていた世界だったのかもしれない。

不思議なことに殿下は――気がついたらここで目が覚め、すぐ隣に僕が倒れていたのだという。

その間のことはなにも覚えていないということだった。

僕は【森羅万象】のせいで忘れることができず、そのせいで気分が悪くなったのかもしれない。

「察するに、僕らは――」

見上げた木々の切れ間から夜空が見える。

変わらない星座がそこにはあった――そう、まったく変わらない星空なのだ。

「――『裏の世界』に来たようです」

2

痩せた森では食料になるものは少なく、一方でちょいちょい襲いかかってくるモンスターがいた。

餓えた野犬（ハングリー・ドッグ）、群れて襲ってくる大ガラス、寝ている僕らを狙って忍び寄る人食い芋虫（キラーワーム）。

この手のモンスターは、「表の世界」にもいたものだ。

感じる重力も、周囲の植生も、星の巡りも、なにもかもが同じ。

であればここが「裏の世界」――以前クルヴァーン聖王国で戦った「調停者」がやってきた世界だと考えたほうがいい。

僕はアーシャに、この世界について知っている情報を伝えていた。

――星８つの天賦珠玉は聖王家の者を、天賦珠玉を得ていない無垢の者を捧げるために必要だったもののようです。なんのために捧げるのかはわかりませんが、これまでの文献では、およそ１００年から３００年に１度、あの天賦珠玉が現れたようです。その天賦珠玉を与えられた聖王家の者は漏れなく姿を消しています。「裏の世界」に旅立ったと考えられていますね。

スィリーズ伯爵はそう、教えてくれた。

何百年もの昔に、こちらに旅立った聖王家の人がいるのだ。

――「裏の世界」はこちらから見て「裏」と言っているだけです。え、この世界の裏側に存在しているまったく同じ世界だと言われていますな。「盟約」は「裏の世界」と取り決めた「天賦珠玉」に関するルールだそうです。

ウサギの特級祭司エルさんがそう言っていた。

――え、もとより、「裏の世界」については現在は観測できませぬ。太古の昔には行き来があったようですが、その往来を止めるために世界をつなぐ門を閉ざしました。

行き来ができた、ということは僕らにとっては希望だ。

僕にとっては向こうからこっちにきたのは調停者だったり環の蛇（ウロボロス）だったりとろくな来客ではなかったけれど。

エルさんは「裏の世界」についてこんな推測をしていた。

――天賦珠玉は「神が与えたもの」……ですが一方で「循環するもの」でもあると考えています。え、そう言っているのは聖王宮ではわたくしめだけですがね。こちらの世界で消えた天賦珠玉は、「裏の世界」に行き、「裏の世界」で消えた天賦珠玉はこちらの世界に来るのではないかと。

その後、ヒンガ老人の名前を出されたのでそれ以上は聞かなかったのだ。

それがメチャクチャ悔やまれる……。いや、でもしょうがないよね!?　まさか自分が「裏の世界」に来るなんて思わないもんね!?

「レイジさん」

木々のまばらな森を歩きながらアーシャが言った。

話してみると僕らは同い年だということがわかり――エルフは２０歳過ぎに見た目が固定されて何百年も生きるようだけれど、今はアーシャも成長盛りなのだそうだ――僕だけ「アーシャ」呼びは気まずいから呼び捨てにして欲しいと言ったのだけれど、僕の敬語同様、アーシャも「さん」付けが抜けないらしい。

「水の気配がしますね」

慎重に言葉を発すれば火花が出ないほどまでにアーシャの【魔力操作】は上達していた。

アーシャは天賦こそなかったものの、森のエルフを統べるハイエルフとしての才覚なのか、どちらへ向かえば人里がありそうなのかを導いてくれた。

まあ、勘ということだけれども。

「表の世界」と同じ世界ならば、こちらにも人がいるだろうというのは僕の読みだ。

エルさんやヒンガ老人の考えが正しければ、「裏の世界」の天賦珠玉も消滅しなければ「表」へ循環せずに溜まってしまう一方のはずだし。

「小川ですね。小魚もいます」

３０分ほど歩いてせせらぎを発見して、僕はホッとした。水があれば１０日以上は生きていけるはずだが、あちこち歩き回る体力は無くなる。鉱山を抜け出したときにひもじい生活を経験してから、僕は二度と味わいたくないと思っていたのだ。

魚がいれば多少腹もふくれる。

「この先にさらに大きな水の気配がありますわ」

「行きましょう」

小川は小川のままだった。だけれど、木々が切れていきなり視界が開けた――そこに広がっていたのは、

「湖……？」

霧が立ち込める、薄暗い湖だった。
広く、静かで……風がそよいでさざ波が立っていた。
僕とアーシャは思わずその光景に見入った。まるで向こうには黄泉の世界でもあるような――そんな神性を感じたのだ。

「……見慣れぬ格好だぬ」

声を掛けられてぎょっとした。警戒していたはずなのに、ここまで近寄られるまで気づかなかった――湖に目を奪われていたからだ。
そこにいたのは、麻で織られたボロ布を羽織っていたレフ人――レフ人によく似た爬虫類タイプだけれど、その肌の色が白っぽい亜人だった。肌の色さえのぞけばその他の構成要素はレフ人とまったく同じだと【森羅万象】は分析していた。
年齢は不詳だが、落ち着いた物腰なのでとうに成人はしているだろう。

「地底人に、ダークエルフか？　ふうむ、それにしてはふたりとも肌の色がずいぶんと明るいぬ」
「……あなたはレフ人ですか？」
「レフ？　なんだぬ、それは」

やっぱりこちらは「裏の世界」なのだ。「レフ」についてこの人は知らない。
それよりも僕は、言葉が通じることに驚いていた。少々、謎の語尾がついているけど。

「いえ……僕はレイジと言います。こちらは――」
「アナスタシアですわ。あなた様のお名前をうかがっても？」

アーシャは火の粉ひとつ飛ばさず、慎重に言葉を発した。

「キミドリゴルンというんぬ」

……なんか妙な名前だな。いや、まあ、人の名前をどうこう言うのはよくないけど。

「ふうむ、察するに君らは、その肌の色から異端児だと見られ、故郷を追われたのだと見た」

「ええと実は――」

「いや、構わない、構わない。無理に詮索しようとは思わないんぬ。人には言いたくないことだってあろう。この我もまた、崇高なる研究に無理解の市民から逃れ、この霧白漣湖（むびゃくれんこ）のほとりで研究を進めているのだからぬ」

額に手を当て、「ぬり……」と悩ましげなため息を吐いているが、

「ぬ」って語尾、なんか変化するの？

この人アレかな。人の話を聞かないタイプかな？

「キミドリゴルンさん」

見た目は白いのに黄緑なんて言わなきゃいけないので僕の脳がちょっとバグりそうになる。

「なんだぬ？」

「町は……近くにあるのですか？」

「ある」

「ではそこまでの道を教えては――」

「なに？　我が崇高なる研究に興味があるんぬ？　そうか……しかしこの研究は本来門外不出。今日会ったばかりの者においそれと見せるワケにはいかないのだが、しかしどうしても見たいというのな

ら考えてもいいが……どういうつもりぬる？」

どういうつもりもなにもなく、町に行きたいだけです。

「そうか。どうしても見たいか」

「いやなにも言ってないです」

「こっちに来るぬら！」

やっぱり「ぬ」が変化してる！

ウッキウキでキミドリゴルンさんは僕らを先導して歩いていく。

僕とアーシャは顔を見合わせ、しかしとにもかくにも彼についていこうとうなずきあった。

僕らが出会った「裏の世界」の第一村人は、レフ人によく似た、ちょっとイカれた感じの研究者だったのだ。

3

キミドリゴルンさんが住んでいるのは湖畔にたたずむログハウスだった。

ウッドデッキにはテーブルセットとカウチがあり、湖にすぐ出られる小舟まで備えたなかなかしゃれた家だった。

正直――「変わり者の一軒家」「マッドな研究施設」ということで掘っ立て小屋、まさか洞窟……！？　だなんて想像を巡らせていた僕には驚きの住居だった。

「まあ、遠慮せず入るがいいぬる」

ちら、ちら、とこちらを見ながら勧めてくるキミドリゴルンさんは、どうやら僕らに来て欲しいようだ……いやさ、会ったばかりの人をそんな簡単に招き入れてもいいわけ？　むしろこっちのほうが警戒しちゃうよ。

ふつうならアーシャに先に入ってもらうのがエスコートの基本だけれど、なにがあるかわからないから警戒心バリバリで僕が先頭を切った。

「……ふつうだ」

思わず声に出た。

暖炉があって、ベッドがあって、４人掛けのテーブルがある。テーブルには、無骨ながらも銅製のポットやマグカップが置かれてあった。

すっきりしていて広く、清潔感がある。

ただ外よりも気温が高く、むわっとした蒸し暑さがあった。変な

ニオイはしないからいいのだけれど。

「さ、さあ、まずは食事にするかぬる？　身支度を整えるかぬる？　それとも――研究内容？」

新妻か。ご飯にする？　お風呂？　それとも、あ、た、し？　みたいな言い方するなや。もじもじそわそわするなや。

「すみませんが、僕らはまずはこのあたりの情勢について聞きたいのですが……」

「ふうむ。研究成果の情勢についてとな。熱心熱心、結構結構ぬら！」

「……」

アーシャ。僕は悪くない。だからそんな困ったような顔で僕を見ないでくれ。

「わかりました……うかがいましょう」

「ふううん！　では少々待ちたまえ！」

鼻息も荒く奥の扉から続きの部屋へと飛び込んで行ったキミドリゴルンさんは、すぐに一抱えの金属製魔道具を持って戻ってきた。

「見るぬら！」

ごろごろん、とテーブルの皿に置かれたのはふたつの卵だった。鶏卵Ｌサイズよりも二回りほど大きく、黄色い殻に紫色の水玉模様。ここが地球だったら「イースターエッグかな？」と思うだろう代物だ。

模様は若干違うけれど、見た目はほとんど同じ２つの卵である。

「これは？」
「チョチョリゲスの卵だぬ。知らないのか？」
知らなかったけれど、あまり知りたいとは思えなかった。【森羅万象】を通して見るとこの卵を産んだ鳥の姿も見えるのだけれど、首が3つに尻尾はミミズという、なかなかファンキーな見た目の鳥だった。ミミズ部分を地中に突っ込んで卵を産むらしい。卵は非常に栄養価は高いが、食べ過ぎると中毒症状を起こすとか。以上、今後役に立たないであろう無駄知識。
「これぞ我の研究成果たる魔道具だぬ」
「ふうむ？」
一抱えほどもある金属の土台は、先ほどテーブルに置かれたときの音を聞く限りめちゃくちゃ重そうだ。
中心には金属製の皿があり、左右に魔石をはめ込む穴があった。
「この卵を、ここに置く……すると」
ごと、と卵が置かれた瞬間、皿と土台とに、緻密に描き込まれた魔術回路が光とともに浮かび上がる。
「――――」
僕の横でアーシャが目を見開いた。
光が収まっていくと――さらに文字が浮かび上がっていた。
『生存』

と。

「？」

「？」

僕とアーシャが「？」を頭上に浮かべて視線をかわしていると、次の卵が載せられ、またも同じように魔術回路が発動した。

次に浮かんだ文字は、

『ゆで卵』

だった。

「ふっふっふ……ふはははははははははは！　どうだ！　驚いたぬら!?　これぞ完成形！　その卵がゆで卵かどうかを判別する魔道具、『ゆでたか（デッド・オア・アライブ）どうか判別君』なのだァッ！！」

キミドリゴルンさんが高笑いとともに。

両手を広げ。

声は狭いログハウスに響き渡り。

湖畔を伝ってきっと遠いところまで音は届き。

直後に、耳に痛いほどの静寂が舞い降りた。

「……あの、卵は平らなところに置いて回転させて、くるくると素早く回ればゆで卵、ゆったりもったり回れば生卵じゃないですか？」

僕が実演して見せると、２つの卵の回転は明らかに差があった。

もちろん、先ほどの魔道具の結果と同じだ。

「……」

キミドリゴルンさんは両手を広げたままの状態でカッと目を見開き、口を大きく開け、ヨダレをつぅぅと垂らしていた。

キミドリゴルンさんは無言で「ゆでたかどうか判別君」を片づけ、僕らにお茶を出してくれたあと、夕飯にとスクランブルエッグとゆで卵を出してくれた。主食は、イモをふかしてつぶしたもので、そこに塩を振る。

そんなものでもとても美味しくて、僕らはしっかりごちそうになってしまった。

「それで……君らはこの辺りのことを知りたいんだぬる？」

ようやくキミドリゴルンさんが言葉を発してくれた。

「あの、なんか、ごめんなさい……」

「いやッ！　いいよッ！　別にあの研究に2年も掛けたのに、とか、実家にお金借りたのに、とか我は思ってないからさッ！」

ツーンとそっぽを向いて言い放ったキミドリゴルンさんに掛ける言葉が見つからない。くそぅ、誰か、誰か、ゆで卵の判別方法くらい教えといてやれよ！　いや、人里離れたところで暮らしてるこの人に非があるんだったわ……もうどうしようもないじゃん。

「それで……我ら、竜人族の話だったぬ」

「竜人族、とおっしゃるんですか」

とアーシャがたずねると、

「？　君らの里でだって当然我らの話をしているだろう？　そんな常識すら教えてもらえなかったのかぬ？」

「うぅん……僕らはちょっと特殊な事情がありまして」

「……そうか。地底人とダークエルフは種族意識が強いぬる。苦労したんだな……」

なんか同情された。「まあ、2年に渡る研究を一瞬で粉々にされた我のほうがつらい思いをしたんぬれ」とか恨みがましく付け加えつつ。

「地底人やダークエルフよりも竜人族は数が多いぬ。おそらく今は、1万人を超えたんじゃないかな……」

「いっ、1万!?」

「ふはは。驚いたかぬる？　竜人族はモンスターとの戦いでも強く――」

「ちょ、ちょっと待ってください！」

僕は思わず大声を出していた。

「あの……確認ですが、その地底人、ダークエルフ、竜人族……以外の種族はどうなっていますか？」

するとキミドリゴルンさんはきょとんとして――それは僕のイヤな予感を裏打ちするかのような表情で――こう言ったのだ。

「それはもちろん、3種族しかいないだろう？　もう何百年も前に滅んだじゃないかぬ」

と。

4

僕らのいるこの世界が、「裏の世界」なのだとしたら、「表の世界」と同じ構成のはずだ。だから、なのかはわからないけれど、妙な語法はあるものの言葉もちゃんと通じている。

キミドリゴルンさんはそれからいくつかのことを教えてくれた。

天賦珠玉はあるが、数は非常に少なく、これを与えられるのは権力者や目覚ましい貢献を種族に対して行った者だけ。

天賦珠玉はダンジョンでのみ手に入る。

過去に大きな戦いがあってからは種族同士の交流はまったくなく、彼らの所在地はわかるものの、なにをしているのかは知らない。

大まかな地形は同じのようで、キミドリゴルンさんたち竜人族がいるのは「表の世界」で言うところの光天騎士王国内の南端で、クルヴァーン聖王国と国境を接している辺りのようだ。

「他の土地がどうなっているか？　そうだぬ……数年に一度は竜人都市近辺を偵察に出ているはずだが、どこもかしこも荒れ果てていてどうにもならないぬ」

「荒れ果てている……というのは土地が痩せていて人が住めないということですか？」

「それもあるが、結局のところモンスターが多い。竜人都市まで来るとモンスターは少ないが、北の果てにある断崖の地『カニオン』などはとてもとても、人の手に負えるモンスターではないぬり……」

「『カニオン』？」

「うむ。土地を荒廃させ、生き物を食らう邪悪な魔物の棲む地よ」

うんうんとキミドリゴルンさんがうなずいたが、僕が気になったのは「カニオン」とは

「表の世界」で言うところの「未開の地『カニオン』」と同一なのではということだ。

位置的にはおそらく同じものだ。

「ありがとうございます、キミドリゴルンさん。最後にひとつだけよろしいでしょうか？」

「なんだぬ」

「『裏の世界』や『表の世界』という言葉に聞き覚えは？」

「……ふうむ」

すると、キミドリゴルンさんはあごに手を当てて、

「……どこかで聞いたような……」

「！　ほんとうですか！？　どこでしょうか！」

「ちょっと待つぬ。もう少しでママが来る――」

「……ママ？」

「げほっ、ごほ、ごほん！　ち、違う！　家政婦、そう、家政婦が来るのだ！」

となんか下手くそな誤魔化し方をしていると、

「キミちゃ～ん！　今日のお夕飯持ってきたわよ！」

勢いよく扉が開かれ、そこにはピンクのエプロンを付けた竜人のおばさんが立っていた。

「……」
「……」

僕とアーシャが無言でキミドリゴルンさんを見ると、

「か、家政婦、だぬ……」

彼は覇気のない声で言った。

キミドリゴルンさんは毎日お母さんに料理を届けてもらい、家の掃除や洗濯などもしてもらっているらしい。町からここまでは歩いて３０分は掛かるというのに。

「……しかし、２年に及ぶ我が隠遁生活もそろそろ終わりを告げるべきときかも知れないぬ。研究にはめどがついたことだし」

ゆで卵の判別方法くらいで隠遁生活を送っていた――毎日料理を持ってきてもらうのが「隠遁」と言っていいのかは不明だけど――キミドリゴルンさんは、ログハウスを引き払おうかという意思をチラ見せした。

「あら～ん、キミちゃん、ようやく町に帰ってくるのぉ？」

おばさんは大喜びだった。

そりゃね、毎日ここに通うのは面倒だよね。

「でもキミちゃんががんばってるんだから、ママは応援してあげなきゃねぇ……」

母の愛だ……僕は前世の母を思い出し、アーシャは今まで受けてこられなかった幻の愛に思いを巡らし、思わず目頭が熱くなった。

「キミドリゴルンさん、きっとこの魔道具もなにかの役に立ちますよ！」

「そうですわ。2年間、ひとつのことに没頭できるというのは才能ですもの」

と僕らが力説すると、キミドリゴルンさんは、

「ま、まあな！　我が常ならぬ才を持っていることはわかっていたがぬら！　ふはははははは！」

と高笑いした。

よくわかっていないらしいおばさんは、それでも僕らがきっかけでキミドリゴルンさんが町に戻る決意をしたのだと気がつくと、

「あらあら、泊まるところもないのなら、それじゃあウチにおいでなさいな。ここは別荘だけど狭いから、今から行けば日が沈む前に着くわ」

ああ、ここ、別荘だったのね……と最後の最後にあまり必要としていない真相をバラした。

竜人族の町への道すがら、おばさんにも「裏の世界」について聞いてみると、おばさんは詳しくないが竜人族の長老衆に聞けばわかるかもしれないとのこと。こっちはありがたい情報だ。

森はいつしか途切れ、草原の広がる丘陵地帯に出る。

横から飛びだしてきたのは1メートルほどの個体、長く鋭い角が凶悪な一角ウサギだ。僕が魔法で対応しようと前へ出ると、おばさ

んは僕を手で制した。

「フンッ！」

ローキック一発で首をへし折り、１０メートルほど飛んで落ちた。

「あらあら、ウサギのお肉が手に入ってラッキーね」

このおばさん、侮ったらダメだと僕は真顔になった。

「レイジさん、あそこに城壁が見えますわ」

おばさんローキック事件のショックも覚めやらぬまま、僕はすぐに竜人都市の城壁を目にした。

高さは2メートルほどか、不揃いの石の壁が続いている。

西の空はわずかに雲が切れており、血のように赤い陽射しが城壁を照らし出している。

おばさんのように獲物を担いだ竜人のハンターたちが町へと戻っていく。その姿は「表の世界」の冒険者のそれとまったく同じだった。

城門の検問なんてなく、都市へと入るとそこは雑多な町だった。

屋台がいくつも出て香ばしくも美味しそうなニオイが流れている。

レフ人は魔術による技術革新で進んだ都市を設計していたから、なんだか、ふつうの地方都市に竜人があふれているのは僕の目にはものすごく新鮮に映った。

あと茸を食べてないしね、竜人は。

「こっちこっち～！　キミちゃんもほら、ちゃんと歩くぬら！」

「わ、わかっているぬ」

久々の町で挙動不審のキミドリゴルンさんだったが、母親に腕を引かれて恥ずかしがっている少年のようにしか見えなかった。
町全体はさほど大きくないにせよ、多くの竜人が密集して暮らしており、賑わいはすごい。だけど僕は、竜人以外の種族がまったくいないことに気がついていた。

（……ほんとうに、3種族しか残っていないのか）

僕の横を歩くアーシャもまた不安そうに眉根を寄せている。

「アーシャ、手を」
「……え!?」

迷子予防もあるけれど、僕らに向けられる刺すような視線がいくつもある。だから彼女を守る意味でも手をつないでおきたかった。
手を握ろうと左手を差し出すと、彼女の周囲に火の玉が浮かんでは消えた。

「迷うと困るから」
「は、は、はい……」
「？」

アーシャも恐る恐る手を出してきたが、やたら緊張しているのが伝わってきた。

（初めての「裏の世界」の町だし、彼女はもともと軟禁生活を送っていたようなものだしな）

その境遇に少し同情しつつ、僕は夕暮れの竜人都市を進んだ。

5

「これは……まあ、予想はちょっとだけしてたけど」

キミドリゴルンさんの実家は大変太かった。

竜人都市の中央に位置する豪邸がそれだったのだ。

3階建ての石造り、屋根はつややかな赤色の塗料が塗られてあって非常に目立つ。日が沈むとほんのり発光し、

「パパがどんなに酔っ払っても、遠くからでも家がわかってありがたいぬ、なんて言っちゃって、もう～」

おばさんはニコニコしながらそんなことを語った。

「お帰りなさいませ、お坊ちゃま！」

男女問わず屈強な竜人が勢揃いして頭を下げる。竜人は筋肉のつきがいいのか、ボディビルダーみたいな人もごろごろいるから驚きだ。

使用人は全員マッチョ。おばさんはマッチョじゃないけど蹴りで1メートルのウサギを瞬殺する。ここは世紀末。ユー・アー・ショック！

「ヒャッハー！」

ほら、モヒカンが出てきた――え、マジでモヒカンが出てきたんだけど。

頭髪はないからトサカがとんでもなく立ってるってだけではある

けど。

「奥様、今日はなかなか立派な一角ウサギでございますぬら！」
「キミちゃんが帰ってきたから今日は腕によりをかけてぬら！」
「ヒャッハー！」

汚物を消毒しそうな竜人は一角ウサギを受け取ると嬉々として厨房へと去っていった。もちろん彼もマッチョである。

そう言えばクルヴァーン聖王国でもヒャッハーが口癖の護衛がいた気がするけど、遠縁の方ですかね。

僕とアーシャは客室に通された。竜人は竜人都市に大多数が集まっているために町から町への行き来なんてものはほとんどなく、ホテルはもちろん、客室を持っている家とて非常に少ないそうだ。

「ごめんなさいねえ。ウチも手狭だから客室も1室しかないのよ……」

おばさんはそう言いながら目をキラッキラにしつつ「若いっていいわねえ」とか言っていたので、どうやらひどい誤解をしているらしい。アーシャ、お願いだから顔を赤くしないで。僕がやりづらくなるから……。

「――いろいろ気がついたところを情報交換しましょうか」

とにもかくにも落ち着いたところで僕はアーシャに切り出した。

「まずは僕からですが……建築様式やその他はあまり変わらないですね。言葉が同じというのがほんとうに大きいです」
「街中に書かれていた文字は私たちのものと同じではありますが、少し古い字体も見られましたわ」

「『まったく同じ』世界というのは、構成要素が同じで、歴史は違う……ということなんですかね」
「しかし2つの世界をつなげる方法などというのは、ハイエルフでも聞いたことがありません」
「そうだ――アーシャは『盟約』、『古き盟約』というものについてなにか聞いたことはありませんか？」

ふと僕はそのとき盟約について思い出した。
これまで、あまり深く関わらないようにしてきた盟約だけれど、2つの世界の話をするときに盟約は切っても切り離せない。

「『盟約』……はい、エルフの森に伝わる内容であれば知っています」

僕は首をかしげた。「エルフの森に伝わる内容」……というのはどういう意味だろう。盟約は何種類もあるのだろうか？
先を促すと、

「ハイエルフが管理するのは『天賦珠玉の盟約』です。内容はとてもシンプルで――」

★　天賦珠玉を取りすぎてはならない。

★　天賦珠玉は世界を構成する。

「この2条より成ると聞いております」

今まで触れてこなかった盟約に関する情報が、するっと教えられたことがなんとも不思議な感じがした。
天賦珠玉を取りすぎるな……か。「六天鉱山」の竜は天賦珠玉を

感知して破壊していたっけ。

「すごくシンプルですね。でもその内容って別に、盟約っていう感じがしないというか……」

「はい。私も聞いたときには不思議に思いました。これはハイエルフの王族にのみ伝わるものだそうです」

「ええと、なんでしたっけ。1つ目が――」

「はい。『天賦珠玉を取りすぎてはならない』です」

「ああ、そうそう……」

と言って、僕は唖然とした。

（なん、で……？）

盟約について思い返そうとすると、記憶がざらついておぼろげなものになってしまう。

だけど、それはおかしい。

僕は【森羅万象】によって忘れることができないのだ。

だというのにふわっとしたイメージは頭に残っているものの、一言一句は記憶に残っていない。

「レイジさん、どうしました？」

「あ、いや――大丈夫です。なんだか、頭に残らないので……」

「そう言えば、そうらしいです。『天賦珠玉の盟約』についてはハイエルフの王族だけが知ることで、エルフはもちろん、ハイエルフであっても王族以外は記憶できないのだとか」

「盟約がいったいなんのためにあるのかはわかりますか？」

「エルフの森には『三天森林（サードフォレスト）』があるので、その管理のために必要……というようにしか聞いていません。私が、もうちょっとまともだったら教えてもらえていたのかもしれませんが……」

アーシャは悲しそうに目を伏せた。
それはアーシャがエルフにとって禁忌である【火魔法】を発動してしまう特異体質のことを言っているのだろう。

「アーシャ。でも、おかげで僕はあなたに会うことができました。あなたに出会えたことは……僕にとってとてもすばらしいことだから、できれば悲しい顔をしないで欲しいです」
「あ……」

僕が言うと、アーシャは可愛らしい口を小さく開けて、それからすいっと視線を横に向けた。

「ズ、ズルイです……そんなふうに言われたら……私だってあなたに……とてもうれしくて……」

最後のほうがもにょもにょして【聴覚強化】でもよくは聞こえなかったけれど、最初の「ズルイ」だけはバッチリ聞こえた。
ズルイ……ズルイか。そうだよな。こんなふうに言われたら「お前になんぞ会いたくなかったよ」なんて言えないもんね……。
ふつうに考えて「裏の世界」なんていう場所に飛ばされて、「よかったわ～」なんて言えるわけもないよね……。

「ごめんなさいィィ！」
「え！？」

思いっきり頭を下げた僕にアーシャがびくりとする。

「調子に乗ってました！　アーシャの優しさにつけ込むつもりはなかったんです！　他意はなくて！　ちょっと雰囲気を明るくしよう

としただけなんです！」
「え？　え？」
「僕は屋敷の皆さんの様子を見てきます……アーシャはゆっくりしててください」
「あ、いや、え――」

調子に乗りすぎたことを反省しつつ、僕はアーシャをひとりにして休んでもらうことにした。アーシャは優しいから、休みたくとも僕がいたら気を遣っちゃうだろうし……。
僕は気が利く男になるのだ。

「レイジさん～～～！？」

閉じた扉の向こうでアーシャの声が聞こえたけれど、「大丈夫です。ごゆっくり！」と僕は告げて廊下を進んだ。
食事時に会ったアーシャは、なんだか不機嫌だった。……なぜだ？

6

「わっはっはっは！　そうかそうか、君たち地底人とダークエルフがキミドリゴルンをこの家に戻す後押しをしてくれたというわけぬら！　ありがとうありがとう！　是非ともゆっくりしていってくれたまえぬら！　ん？　しかし地底人にしては色が濃いし、ダークエルフにしては色が薄いぬ……？」

「あなた。そんな細かいことはいいじゃありませんか」

「確かに！　種族や肌の色など些細なことぬら！　わっはっはっは！」

キミドリゴルンさんのお父さんは、もちろん竜人族で、大柄で、大雑把な感じの人だった。下顎に一本の茶色の線が模様として入っているのが「チャーミングでしょ？　きゃっ」とおばさんが言っていたのだけれど、ごめんなさい、全然わからないです。

食卓に並べられた食事は思いのほか豪勢だった。

８０センチはありそうな川魚を煮込んだものに、ウサギのシチュー、山盛りのパン……田舎の豪邸メニューと言ったら失礼かもしれないけれど、荒廃しつつある世界でこれだけのものを出せるのならすごい。

（よくよく考えるとマッチョな人も多いから、食事には事欠かないんだろうか？）

そんなことを考えながら料理をいただく。魚は香草が効いてさっぱりしていて特に美味しかった。

「それでキミドリゴルンよ、この家に戻ったということは竜人軍に

戻る決断をしたというわけだぬ？」
「……そういうわけじゃないぬ」
「む？　ひとたび家を旅立つなら、研究成果が出るまで帰らないと言ったのは他ならぬお前だろう」
「成果は……出ないことも、なかったぬ……」
「おお、そうぬら！？　どれ、私に見せてみなさい！　どうした、キミドリゴルンよ！」
「そ、それは……」

冷や汗をかきかきキミドリゴルンさんが僕をチラリと見る。
……そうだよね。卵がゆでてあるかどうかを判別するキットを作ったなんて、僕が卵を回転させた後では言い出せないよね……。
なんかごめん！
でもここで意気揚々と出して、お父さんに「卵を回したらいいだろ」と言われるほうが地獄だよね？

「あなた。お客様の前ですよ」
「おお……そうであったぬ。この話はまた今度にしよう。――それでレイジくんと言ったぬる？　君は竜人軍に入るか？」

太い首をねじってキミドリパパが僕を見る。

「すみません、竜人軍というものもよくわかりません」
「おお！　そうかそうか。竜人軍は外敵からこの都市を守り、生きる竜人を守るための部隊だぬ。正規所属で１，０００人がいてな、モンスターを狩って肉を持ち帰るのがいちばんの仕事だ」

なるほど。１万人の都市に１，０００人が軍隊ってどういうこと？　と一瞬思ったけど、食肉生産の一次産業と、警察も含んでいるのなら十分納得できる。

「我らは日々、モンスターの生態を調査し、仮説と検証を繰り返し、最適なモンスター狩猟方法を編み出すべく研究しているぬら！」

僕は驚いた。

まさかこんなところで仮説と検証――いわゆるＰＤＣＡを回すような人たちに出会えるなんて。

竜人族は理知的な種族なのか？

「あなた。今の最新の狩猟方法を教えて差し上げたら？」

「おお、そうだな」

「えっ、いいんですか？」

思わず聞いてしまった。だって、最新の研究成果を初めて会った人に教えてもいいんですかと思っちゃうよね。

「構わん、構わん！　６年掛かった研究が先月実を結んでな――それは、こうだ」

キミドリパパは握り拳を持ち上げ、力こぶを作って見せた。

「頭を破壊すれば大抵のモンスターは倒せるんだぬ！」

わっはっはっは――と響く高笑い。

真顔になる僕。

どうしたらいいのでしょう、という顔をするアーシャ。どうしたらいいかなんて僕にもわからない。むしろ「大抵」から外れる、「頭を破壊」しても死なないモンスターがいることにびっくりだよ。

そう言えばキミドリゴルンさんの自信満々の「研究成果」がアレだったんだから、キミドリパパだってアレな可能性も十分考えられ

たんだよな……。

「で、竜人軍に入るか？」

今の流れでは入ろうとは思えないよね？

「えーっと、いえ……いつまで町にいるかもわからないので」

「ふうむ。町を出ても行くところはあるまい。秘境でふたりで暮らすのかぬ？　愛する者とふたりきりの生活か！　男の夢ではあるな！　わっはっはっは！」

キミドリパパ、止めて。アーシャが真っ赤になってうつむいてる。

「あ、あの！　そういう関係じゃないんですよ、僕たち」

あれ？　アーシャが唇を尖らせてそっぽを向いた？　どうして？

「あなた。暴走しすぎですよ」

「すまんすまん！　てっきり勘違いしておった！」

「これからふたりでじっくりと、ということでしょうぬ」

「おお。そうかそうか……」

なにがそうかそうかだ。

「ではやはり竜人軍に入るか？」

「入りませんて」

ぐいぐい来るな、この人！

「それよりうかがいたいんですが、『裏の世界』、『盟約』、とい

った言葉に聞き覚えはありませんか？」
「ふむ？　私は知らないが、竜人族長老会なら知っている者もいるかもしれんぬ」
「竜人族長老会」

なんだろう、その、知恵を持つ古老が集まってそうなワードは！
これは期待できるんじゃなかろうか。

「その長老の方々はどちらにいらっしゃるんでしょう？」
「長老会は今、竜人軍で研究に出ている」
「……はい？」
「あなた。一般の方に『研究』という概念はわかりにくいかもしれないぬ」
「おお、そうかそうか」

いや「研究」くらいわかるから。気になったのは「長老」が「軍」でなにしてるのかってことだから。

「つまるところ、長老たちは遠征中で、軍の最前線でモンスターを屠っておる！」

……長老会に寄せられた僕の期待は瓦解し始めた。

「いやはや、実はな、ここ数年獲れなくなっていたチョチョリゲスの群生地を見つけたんだぬ。これは全部漏らさず狩っておかねばなるまいということで遠征作戦が始まったのだ。私は公正なる『三叉交戦』によって留守番と決まってしまったが」
「『三叉交戦』……？」
「うむ。拳と、開いた手のひらと、二本指とがあって。『サンサンサンサのチッチッチー』というかけ声で……」

「ああ、もういいです。大体わかりました」

ジャンケンのことかよ！　なにちょっと小難しく「三叉交戦」とか言ってんの！

「それより、そのチョチョリゲスですが……鳥、なんですよね？　簡単に獲れるんですか？」

「うむ。飛べない鳥だから囲めば倒せる。肉は美味で卵は栄養たっぷりだぬ。しかし私が子どものころには毎日飽きるほど食べていたチョチョリゲスも、最近は見かけなくなってな。先日見つけた小規模な群れも、数か月ぶりだったぬ」

その卵は、キミドリゴルンが必要としていたからくれてやったが――と高笑いするキミドリパパ。

だけど僕は、すさまじくイヤな予感に襲われていた。

アーシャを見ると、彼女も同じ顔をしていた。

「初めてお会いしてこんなことを言うのは恐縮なんですが……」

とはいえ、言わずに済ませたらあまりに寝覚めが悪い。

「そのチョチョリゲス……絶滅しかけているのでは？」

7

僕の脳裏にあったのは、地球で絶滅したドードー鳥のことだ。

モーリシャス島にいたこの鳥は、飛べない鳥で警戒心も低く、しかも肉が美味いということで発見されるや乱獲された。人間が島に持ち込んだ犬や、船に乗っていたネズミが、地面に産み落とされた卵やヒナも食べてしまった。

結果、絶滅した。

確か日本でも魚のニシンで似たようなことをやっていたはずだ。北海道沖でニシンがあまりに簡単に獲れるものだから獲りまくり、漁獲量はピーク時の１％程度まで落ち込んだ。１９８０年代にニシンの数が戻る兆しもあったというのに、それもまた獲りまくり、ニシンの漁獲量はまたも低迷することになる。

獲れすぎていたころのニシンは食べきれるものではなく、肥料に変えたりしていたというのだから……人間というのは国を問わず欲望に突っ走ってしまう生き物なのだ。

「……寝てしまいましたか？　レイジさん」

「いえ、まだ起きています」

客間のベッドはアーシャに譲り、僕はソファにごろんと横になっていた。野宿に比べればソファで寝るなんて天国のようなものだけれど、それでも眠気よりも前に頭が冴えていた。

窓は開かれ、レースのカーテンが風になびいている。月明かりをはらんでふくらんでいるようにも見えた。

夜になれば気温が下がり、肌寒いほどだという。

「先ほどの話ですが、実はエルフの森でも同じようなことがあった

のです」
「エルフも……ですか？」
「エルフの森は大昔は、今の面積の3倍ほどはあったと聞いています。その森は豊かで、多くの果実を育みました。中でも金色に輝く黄金桃という果実はたいそうな美味で、万病に効いたのだとか。しかし成る木も限られ、その木の所有権を争って血が流れ……ハイエルフ王家が最終的には管理する、と決定されたころには木が何者かによって焼かれていました」

焼かれた、というのはただでさえショッキングな事件ではあるのだけれど、火を禁忌として考えるエルフにとってはなおさら衝撃だったろうことは想像に難くない。

「その後も、エルフの裏社会では黄金桃が取引されたという情報が流れることもありましたが、今ではすっかりウワサ話すらなくなっているということです」
「へぇ……その桃の木はもうないのでしょうか？」
「おそらく。取り合いをした結果、破損されたのではないかと……」

エルフは森の民として、さらには長寿の種族として、のんびりと温厚なイメージがあったのだけれど、今の話を聞くに人間と変わらないな。

僕らはそれからいくつか話をした。

昔話というより、これからどうするかということだ。

この世界に、モンスターだけでなく人がいたということはうれしい誤算だったけれど、僕らはなんとかして「表の世界」に帰りたい——。

「……チョチョリゲスだけでなく、ここでは言語を解する人もまた絶滅の危険に瀕しているのですね」

アーシャの言葉が印象的だった。

★

キミドリパパは僕を前線に連れて行くので、その話を長老たちにして欲しいと言った。でもそれは僕の話に緊急性を感じたからではなく、

「面白い推論だな！」

という、なんとも緊張感のない理由だったのだ。
僕としては放っておいて絶滅されてももやもやするので、

「それじゃあ、まあ、お邪魔します……」

と返事をした。
ちなみに僕を連れて前線に行くという話は竜人軍の中で揉めに揉めたそうだ。
揉めた理由は単純で、

「俺も行きたいぬ！」
「それなら私が行くべきぬらァ！」
「いやいや、ここはあたしが！」

みんな前線に行って「研究」したいらしい。
だけど他種族の「客人」である僕らが他ならぬキミドリパパに頼んだ――という一事をもってキミドリパパの前線行きが決まった。

「正直なところ、絶滅するとはまったく思えんが、これで前線に行

けるなら信じてみようぬら！　わっはっはっは」

キミドリパパが幼かったころに見たチョチョリゲスの大群は、今も彼の記憶の中で羽ばたいているのだろう。

だから怖いのだ。

人が、目先の利益だけで獲り続けると、あっという間に動物資源は枯渇する。

「なんで我もいっしょに行かねばならんぬれ……」

キミドリパパはキミドリゴルンさんも連れて行くことにした。竜人軍での経験を積ませてなし崩し的に竜人軍に就職させたい――とそんなふうに考えているらしい。

昨日の、研究成果発表会はうまいこと誤魔化したようだ。

「『ぬれ』などという軟弱な言葉は使うんじゃないぬ！」

「そんなのは我の勝手だし、先端の科学を行うには先端の言語を使う必要があるんぬ！」

あと謎の言葉の言い回しについてふたりで言い争っていた。

「まあまあ、パパとキミちゃんの親子ゲンカをこの家で見られる日が来るなんてねぇ……レイジさんとアーシャさんに感謝しなくっちゃぬ！」

それを見てほっこりしているキミドリママに僕は聞く。

「あのー……自分で言うのもなんですけど、僕とアーシャが種族の町から逃げてきたとお考えなんですよね？　信用しすぎというか、受け入れすぎでは……？」

「ええ、ええ、種族を超えた禁断の愛、でしょう！？」
「違います」
即答する僕の横でもアーシャが鼻の頭にシワを寄せている。
「ほら、アーシャもムッとした顔しているでしょう？」
「……」
アーシャはどうして僕をにらむのかな！？
「と、とにかくですね、こんなに受け入れられると思わなかったというか……」
「なぜですぬ？」
なぜ、と言われれば、こんなふうに単一種族でまとまっている町があったら、異物は警戒されるだろうし、なにより「表の世界」ではレフ魔導帝国が外国人に対してめちゃくちゃ警戒してたもんな。
「数少ない、この世界に生きる仲間じゃないの。受け入れないなんてないわよぉ」
「――――」
ま、まぶしい。キミドリママが聖母のごとき輝きを放っている…
…！
「わっはっはっは！　レイジくん、ウチのハニーに惚れるなよ！？」
いつの間にか親子ゲンカを終えていたキミドリパパが言ってきた。
惚れません。
さすがに竜人族、人妻、成人子持ちはハードルが高すぎる。

前線へ向かう移動方法は徒歩だった。
というより、ジョギングみたいなものだろうか。
竜人族は健脚で一日中駈けていられるのだという。馬に乗ったほうがもちろんスピードが出るものの、馬の数は少ないし、なにより足場の悪い森を突っ切るのに馬は向いていない。

「レ、レイ、レイジ、さんっ……！？」
「アーシャ、しゃべると舌噛むよ」

僕はともかく、アーシャに走らせるわけにはいかないのでお姫様抱っこで抱えていくことにした。腕が疲れたらおんぶに切り替える予定だ。
前を走るキミドリパパにくっついて、木々のまばらな森を飛ぶように駈けていく。

「キミドリゴルン！　遅いぬ！」
「はぁ、はぁっ、ぜえ、ぜぇっ……わ、我は、研究続きで、身体がなまって……はぁ、はぁっ」

キミドリゴルンさん、パパは鎧も身につけて、長槍まで担いでこのスピードなんだから、がんばってついてきてね。

「しかしレイジくん、君はなかなかにパワフルだな！　スタミナもあると見える！　どうだい！？　竜人軍に――」
「入らないです。というか僕は身体強化系の天賦を持っているので」

答えると、キミドリパパはぎょっとした顔で急ブレーキを掛けた。

「？　どうしました？」
「……あ、いや……」

パパにしては珍しく弱々しい口調だ。いや、声の調子が常にボリューム設定ＭＡＸだったから一般設定に戻っただけで弱々しく感じるだけで、実際にはふつうの声だ。
パパは再度走り出し、僕はまたそれについていく。

「……竜人族には、ほとんど天賦珠玉はないのだが――地底人の集落にはかなりの数があるということかぬ？」

あ……そういうことか。
こっちではダンジョンでのみ天賦珠玉が手に入る。
だから産出量は非常に少ない……と。

（でもこの世界に天賦珠玉が少ないのかと言えば、そんなことはないと思うんだよな）

クルヴァーン聖王国の特級祭司エルさん（年齢不詳・ウサギ）も、言っていた。
２つの世界では天賦珠玉が循環している、って。
それに２つの世界が同じならば、「一天祭壇」を初めとする８種類の天賦珠玉産出ポイントがあるはずだ。

（探してみるのはアリだけど、僕は天賦珠玉を取るためにここにいるわけじゃない。それにモンスターは「表の世界」よりずっと凶悪だ……安全無事に探せるとは限らない）

レフ魔導帝国の上空が割れたときに見えた巨大なモンスター。

あの化け物は、この世界のどこかにいるのだ。
とりあえず今は、地底人の集落についてはわからないと答えるしかないな。

「……すみません、隠しているつもりはなかったんですが、僕とアーシャは地底人やダークエルフ種族じゃないんです」
「わかっている」

え、わかってたの？

「そういう『設定』ということだぬ？」

全然わかってなかった。なに「どう？　気が利いているでしょ？」みたいな顔してるんですか？　違いますよ？

「ええと……いや、もういいや。とにかく、地底人の集落にどれくらい天賦珠玉があるかは僕にはわからないですね。ダンジョン以外の入手方法はないんですか？」
「大昔は森で見つけたと聞いたがぬ……その森もモンスターの手に落ちた」

僕の腕の中でアーシャがぴくりと動いた。
たぶん、だけど「三天森林（サードフォレスト）」だ。
やっぱりこの世界にも８種の、天賦珠玉を生み出す装置があるんだ。

（モンスターの勢力がどれくらい拡大しているのかはわからないけど、僕があっちの世界に帰る前に、どれか１つくらいは安全に、天賦珠玉を産出する場所を見つけてあげたほうがいいかもしれないな――）

そんなことを考えながら、僕らは先を急いだ。
半日ほどして、日が暮れようかというころ――僕らは竜人族の長老がいる前線へとたどり着いた。

8

チョチョリゲスの集団は崖の下に巣を作っており、そこに３０羽前後がいるらしい。巣から1キロほど離れた場所に、前線基地があった。

基地とは言っても竜人が集まってキャンプをしているだけなんだけど。

竜人は全部で５０人。長老は7人だ。

こんな森の中でよく見つけられるものだなと思っていると――「それくらいできんと、森で狩りなどできんぞ！」と快活にキミドリパパに言われた。

「赤の長老！」

「ぬろ……？　おお、どうしたんじゃい。お前には留守を任せたぬろ？」

長老は首に巻いたスカーフの色ごとに名前が違うらしく、赤、青、黄などいろいろいた。

他にもあごひげが伸びているのは長老だけなのでわかりやすい。

「実は――」

ここに来るに至った理由をキミドリパパが赤の長老に話していると、おやおやとばかりにほかの長老も集まってきた。それどころか竜人が全員集まってきて焚き火を中心に車座になっていた。

「ほお……色の濃い地底人と色の薄いダークエルフとはのお、珍しいぬろ」

ぬろ、という新たな語尾に僕が動揺していると、

「一度絶滅してしまえば取り返しはつかないということぬろ？」

「しかしなあ、目の前に鳥がいて食わんわけには……」

「とりあえず獲ってから考えるか」

「それだと意味がないから、客人はこうして急いでやってきたぬろ」

長老たちが話し合っているのを周囲の竜人たちは神妙な顔で聞いている。

僕とアーシャはヨソ者だというのに、誰もそのことで話の信憑性を疑っていない――なんだかそれが、不思議だった。

それから話し合いが行われたけれど平行線で、穀物をくたくたに煮込んだおかゆみたいな夕飯を挟んだ後も続いたけれど結論は出ない。

「絶滅という言葉の定義は？」

「卵を残せば絶滅にはならんのではないかぬ」

「しかし卵が美味い。ゆでた卵を丸かじりするのはやめられんぬ……ぷるんとした表面に、ぷつっと歯を立てたときの感触は……」

「お前が言うと卑猥な感じがする」

「卑猥という言葉の定義は？」

そんな感じで、この人たちは議論することが目的になってないか？　という気さえした。

「ふうむ、話はまとまらんぬろ。ではこうしよう。我が竜人都市に伝わる多様な意見を集約し、結論を導き出すシステム――」

緑の長老が切り出すと、周囲はしんと静まった。

そんな、多様な意見を尊重しつつ結論を出せるシステムがあるのか？

僕もまたドキドキしながら先を待つ。

「――勝ち抜き三叉交戦～～！」

はいジャンケンでした。

「うおっしゃあ！　勝ったァ！」

「ぬろろろろろろ」

「黄の長老が倒れたぬろ！？　貴様ら、若者のくせに年寄りを労らんぬろ！」

「世代交代は間近だぬ！」

「ぬれぇ……」

「ぬれとか言うな、バカタレ！　言葉の乱れは風紀の乱れぬろ！」

「老害は討つ！」

「老害と言ったヤツ、出てくるぬろ……この槍の錆にしてくれんぬ」

「紫の長老が切れたァ！」

大騒ぎだった。

あと「ぬれ」がＮＧワードだということはよくわかりました。

結局「狩る」「狩らない」でそれぞれが意見をはっきりさせ、勝ち抜きジャンケンをするという形であり――最後はなんと、

「まさかの親子対決……！？」

「狩る」派の最後の１人、キミドリパパと、「狩らない」派の最後の１人、キミドリゴルンさん（４連勝中）の戦いとなったのだ。

「『サンサンサンサのチッチッチー』」

日付も変わろうかという深夜、５０人の竜人族が合唱してるんだから、これもう頭がおかしくなってきそうだよね？

「っしゃあ！」

「ぬううううう！？」

大歓声が起きる。

なんと勝ったのは――。

「くっ……もはや父を超えたか、キミドリゴルン……」

キミドリゴルンさん（チョキ）だった。

「いや、よくよく考えてみたら我、無理矢理ついてこさせられただけで、正直どっちでもよかったわ」

静まり返る周囲、そして、

「っざけんなァー！」

「そのくせなんでそんなに『三叉交戦』強いんだぬ！」

「古来より勝ちたい勝ちたいと強く思う者はその欲望によって負けると言われている」

「人呼んで『物欲センサー』」

いやそれは違うから。

とはいえこれでまた意見がまとまらず、大騒ぎになる――というところで、

「長老！　長老ーッ！」

ひとりが周囲を指差して叫んだ。

「か、囲まれてます！」

気がつけば僕らは遠巻きに囲まれ――森の闇の中に、爛々と光る黄色の目がいくつもあったのだった。

「アーシャ、僕のそばに」

「は、はいっ」

彼女を守るようにしながら、竜人たちもあわてて武器を手に取る。

「くっくっく……このような結果になるのであれば、最初から『三叉交戦』など必要なかったぬろ」

と赤の長老が、巨大化した鉈のような剣を手に持つと、

「食うか食われるか。それならば食わねばなるまいて」

「正当防衛発動中！」

「これだけ騒いでおったら、気づかれるのは当然ぬろ」

「誰だ、最初に騒いだの」

「お前じゃ、緑の」

「いちばんノリノリじゃった青のに言われたくないぬろ」

長老たちも次々に武器を手にした。

そう――僕は天賦【夜目】【視覚強化】【森羅万象】によってすでに相手を把握している。

僕らを取り囲んでいるのは――、

『ピギャアアアアア！！』

――チョチョリゲスの集団だった。

いや、こいつらって囲めばすぐに捕まえられるとか言ってなかったっけ……？　いや、囲めば倒せる、か。むしろ囲まれてますよ？

「来るぞ！　迎撃ぬろぉ！！」

長老の声に、竜人たちは「オオッ」と地響きのような声を上げて立ち向かった。

9

チョチョリゲスは3つの頭とミミズの尻尾を持つ怪鳥だ。羽根の色は紫がかった青で、森の闇に溶けるけれど、竜人たちの焚き火が羽根にぬらりと光るのでそこまで見えにくいことはない。

「鳥目」なんていう言葉があるから「鳥は夜に活動できない」と思うかもしれない。

でも実際はそんなこともないと聞いたことがある。

でなければ夜行性のフクロウなんていないし、渡り鳥は天敵を避けるために夜に渡るし。

家禽の代表格である鶏が、視力が低く、夜にはまったく活動できないから「鳥目」という言葉ができたのだ――。

「囲め囲めェ！　囲んでボコれば勝てるぬらァ！」

「飛べねえくせに羽ばたいてんじゃねえぞァ！」

「獲りに行く手間が省けたぬ！」

黄色の目を光らせたチョチョリゲスは、羽根を開きながら突っ込んで来る。身の丈2メートル近いその存在が、羽根を広げると威嚇としては十分怖い。

「ひゃああ……」

アーシャが僕の腕をつかんで背中に隠れ、周囲にはボボボッと火球が浮いた。

「ぬりぃ……」

キミドリゴルンさんが僕の腕をつかんで背中に隠れようとしたところを、キミドリパパに捕まって前線に放り出されていた。

「キミドリゴルン！　かつては『天使の笑顔を浮かべし悪魔』と恐れられたお前の凶暴さを、ここでもう一度披露してみせよ！」
「パパ！　それって我が2歳の頃の話だぬ！？」
「2歳も20歳も変わらんぬ！」
「変わるってぇ！？　こんな武器を持たせないでくれぇ！」

金属バットから大量のトゲが生えたような凶悪な武器を持たされ、キミドリゴルンさんがブルブル震えている。
僕、ちょっとわかった。
彼はこういう体育会系のノリが無理なんだろうね……だから湖の畔でひっそり暮らしていたと。

「ぐああ！」
「気をつけろ！　イササカノルンがやられた！」

ちょっと覚えにくい感じの名前の竜人さんが、チョチョリゲスのクチバシに腕をえぐられ血を噴いていた。
うお……えげつないくらいに鋭いな、あのクチバシ。

「抜けたぞォ！　客人、気をつけるぬらァ！」

羽を広げた怪鳥がこちらに突っ込んで来る。

『ピギャアアアア！』

僕とアーシャまで10メートル。
確かに――僕の身長よりはずっと大きくて凶暴だ。

「だけど」

僕は右手をチョチョリゲスに掲げる。発動させるのは【土魔法】だ。

ラグビーボール大の岩石を魔力によって生み出し、【風魔法】で渦を作り回転させる。

「大きければ大きいほど、的として大きいってだけなんだよね」

パシュンともバヒュンとも言いがたい、空気の破裂音とともに岩石は射出される。弾丸のように回転しているのでその軌道は安定し、チョチョリゲスの中央の頭を吹っ飛ばす。

『ピ！？』

『ギャ！？』

左右の頭がぎょっとした顔をするけれど、

「今さら警戒しても遅い」

僕は右、左、と次々撃ち抜いた。首から血を噴きながらチョチョリゲスはそれでも走り続け、左へと緩やかにカーブしながら最後は足をもつれさせて転び、そこにあった焚き火に突っ込んで火の粉を上げた。

「客人がつえええええぞ！」

「これで我が竜人軍の勝率は９８％となったぬ」

「むしろ今まで負ける確率結構あったのかよ」

「残りの２％はなんなんだぬ」

竜人はざわざわしたけれど、それから30分ほども乱闘を続けてチョチョリゲスを倒し、十数羽が逃げていった。
僕ももっと参戦したかったけれど、すっかり怪鳥に怖じ気づいてしまったアーシャと、逃げてきたキミドリゴルンさんとを保護するのに手一杯で、それ以後は3発程度魔法を撃っただけで終わった。

「――獲物は全部でどうなったぬろ？」
「長老様、全部で8羽と、客人の落とした1羽だぬ」
「ふうむ。まあ、こんなものか……」
「手負いの1羽を狙って何人か追ってます」

戦闘が終了すると、あちこちで獲物を集めたりケガ人を救護したりとしている。

「終わったよ、ふたりとも」
「は、はい……申し訳ありません、レイジさん。お、驚いてしまって、結局なにもできませんでしたわ……」
「我も……」
「いや、まあ、突然だったししょうがないですよ。お茶を淹れるので飲んでください」

焚き火で沸いていたポットのお湯から、道具袋に入れてあった茶葉を使ってお茶を淹れる。ミミノさんからもらっていた茶葉で、残りは少ない。でも放っておいてもダメになるだけだから使ってしまったほうがいいだろう。

「ほう……」
「うまいぬ」

ちょこんと座ってお茶をすするアーシャが可愛くて正直直視できないのだけど、横にキミドリゴルンさんがいるから正気を保っていられる。

「……レイジはすごいぬ。さっきのは、魔法……だぬ？」
「はい。たまたまそういう天賦を得ているので」
「天賦珠玉なんて、竜人都市にいくつあるのか」

それほどまでのレアアイテムになってしまっているのだ、天賦珠玉は。

僕はせめて、負傷している人たちに【回復魔法】を掛けようかと思って立ち上がると、

「その腕輪が魔道具なのかと思っていたぬ」

僕の左腕にある腕輪を指差した。

「ああ……これはただのＧＰＳですよ」
「じーぴーえす……とはなんだぬ？」
「あはは。魔法を使うための魔道具ではないです」

僕はそう言うに留めた。キミドリゴルンさんが魔道具研究の道に進みたいのならば教えてあげるのもやぶさかではないのだけれど、今は治療が先だろう。

この腕輪は、レフ魔導帝国に入国するときにもらったまま、付けっぱなしだ。実は魔石の出力が下がっていたので、僕が魔力を込め直していたりする。

（もしかしたら……）

この腕輪から発信されている情報が、空の亀裂を超えて向こうの世界に届くかもしれない――そんなふうに望んでしまうのはさすがに無理があるだろうか？

でも日本でもＬＰＷＡみたいな規格があったし。

ＬＰＷＡ（Ｌｏｗ　Ｐｏｗｅｒ，　Ｗｉｄｅ　Ａｒｅａ）は少ない電力で、広範囲に電波を飛ばす規格……だったはずだ。公務員だった父が、自治体で取り入れる話がきてどうのと話していたことを思い出す。あのときほんの聞きかじった内容だと、広範囲に電波を飛ばすことはできるが、その分、伝達できる情報量は少ないんじゃなかったかな。

ガスの検針はＬＰＷＡが普及すればなくなるとかなんとか。

とはいえ、１００ｋｍ以上を飛ばせるなんてことはなくて、いいとこ数十キロ程度だったはずだけれど。

（魔力による情報伝達は大気や大地に満ちている魔力の質によって変わるみたいだな）

【森羅万象】で測定できる範囲では、この「裏の世界」は魔力濃度が高い。

魔道具が飛ばしている魔力波との相性がどこまでいいかはわからないけど、それでも魔力濃度が低いよりは高いほうがいい。

結果として、向こうの世界に腕輪の情報が伝わる可能性は――ほんの少し上がっているんじゃないだろうか？

「さて――僕、【回復魔法】を使えるので治療に協力します」

傷口を洗い流して包帯を巻こうとしている竜人に話しかける。

「いいのか、客人！」

「魔法を使えるなんて……」

「どれくらい治せる？」

縫わなければならないような傷に魔法を掛けていく。とりあえずの止血はできるけれど、断裂した細胞はすぐに治ったわけではないことを説明する。

物珍しさに指先が切れただけの人もやってきたけど、さすがにそれはお断りした。魔力は有限だからね。

「……」

その間、僕のそばでキミドリゴルンさんがじっと魔法発動の様子を見つめていた。

「このチョチョリゲスの量では、市民全員に肉が行き渡ることはないぬろ……」

「仕方あるまいて、赤の長老。せめて若者、子どもが食べられればそれでよかろうぬ」

「明るくなったら卵を回収しよう」

そんな話し声が聞こえてきた。

（さっきのチョチョリゲスは全部逃げたんだろうか……？　巣を放棄して？　卵が残ってるなら畜産を……いや、そう簡単にできないよな……）

チョチョリゲスという種がどれくらい残っているのかはわからないけれど、今から試行錯誤してチョチョリゲスを家畜として育てていくのは相当に難しい気がする。そもそも畜産の発想があるのかどうかわからないし。

だからといって、放っておいて増えるのを待つにしても、向こう

がこちらに気づいたら襲ってくる。
巣がいまだ機能しているのなら、放っておいて、個体数が増えたらまた狩りに来る……とかにしたほうがいいんじゃないかなぁ……。

「長老！　追跡チームが帰ってきたぬ！」

とかなんとか考えていると、森の奥から数人の竜人が戻ってきた。
チョチョリゲスの巨体を担いできているが、担がれているのは怪鳥だけじゃなかった。

「長老！　長老！　ケガ人だ！　重傷だぬ！」

気を失ったキミドリパパが運ばれてきたのだ。

9（後書き）

もしよろしければ本作品の「ブックマーク」＆ページ下部にある★から「評価」をお願いします！

それと本日、拙作「学園騎士のレベルアップ！」のコミカライズ５話が更新されていますので、そちらもご興味ある方は是非モンスターさんのＷｅｂサイトでごらんください！　ページ下部にリンクがあります。

ちなみにリエリィ登場回です（とても重要）。

10

「わっはっはっは！　参った参った。死んだふりからの反撃があるとはなあ」

竜人都市に戻ってきたキミドリパパは高らかに笑った。

いや……笑えないと思うんだけど、右手の指を3本ちぎられたら……。

でも当の本人は大いに笑っているし、

「あらまあ、大変ねえ。それじゃあパパ、もう槍は持てないじゃない。どうしましょ。お芋の皮むきはできる？」

帰りを出迎えてくれたキミドリママも平然としていた。

「……今日はご飯要らないから」

むしろキミドリゴルンさんがいちばんしょげ返って、部屋へと閉じこもってしまった。

キミドリパパはキミドリママやお屋敷の使用人に、遠征でなにが起きたのかを話している。チョチョリゲスの巣はまだ生きており、僕は巣を残して繁殖を待ったほうがいいと提案するとすんなり受け入れられた。

チョチョリゲスという怪鳥を10羽も担いで帰ってきたので、都市内はちょっとした騒ぎになっている。

英雄の凱旋帰国みたいな感じで。

でも――一方で、キミドリパパは重傷を負ったわけで。

「まあまあ、それじゃあレイジさんのおかげで傷を塞いでもらえたの？　よかったわねぇ～。ほら、何年前だったかしら、あなたの部下の方が傷口をそのままにしてたら化膿して、結局腕を切らなきゃいけなかったじゃない」

「そのとおり！　それがあったからヒヤッとしたのだがな、レイジくんがいてくれてほんとうに助かった！　魔法だぞ！？　すごいよな！　どうだ、レイジくん。竜人軍に――」

「あ、それは結構です」

「そうかそうか！　結構なことだろう！」

「違います。お断りしているんです」

「そうかそうか……」

そこでしょんぼりするのかよ！

僕は――お屋敷の使用人たちからもとても感謝された。旦那様のケガを治してくださってありがとうございます、と。

僕としては傷を塞ぐことしかできなくて、指を元に戻すことができないことを悔やんでいたのだけれど……そんなことはたいしたことではない、とでも言いたげな雰囲気だったのだ。

「食事までゆっくりしてくれたまえ！」

いくつも言いたいことはあったけれど、それを呑み込んだ。

僕とアーシャは交代で浴室に入り、汗と汚れを流した。なんとお屋敷の主であるキミドリパパよりも先に。

浴室と言ってもお湯を使って身体を拭くくらいのものだけど、それでもさっぱりした。

客室に戻ると窓が開いていて、夕暮れ時の竜人都市が見渡せた。どこにいるのか虫が鳴いている。ヒグラシのようでいて、最後に「キェッ」と鳴くのでどうにも武闘派な虫だ。

涼しい風が吹き込んで、窓辺にいるアーシャの髪を揺らした。

「レイジさん……私がいなければ、きっとレイジさんがキミドリゴルン様のお父様を追っていき、お父様がケガをなさることはなかったですよね……」

不意にアーシャが言った。

「アーシャ？」

「あのとき私がレイジさんにしがみついていたから、レイジさんの動きが制限されてしまいました……それが悔しくて、ずっと……」

うつむくアーシャの肩が震えている。

ああ……僕が後悔しているのと同様に、アーシャもまた後悔していたのだ。

部屋に籠もっているキミドリゴルンさんも、きっとそうなのだろう。

「アーシャ、僕は考えていたのですけれど……お屋敷の皆さんは明るいですよね」

「えっ……はい。そうですね」

「彼らにとってケガを負うことはたいしたことではなくて、ケガをしていて前線に立てなくなったのならば別のことをしたらいいと、心の底から思っているんだと思います。お芋の皮を剥くでもいいでしょう」

僕はいまだに日本で生きていたころの価値観に引きずられ、アーシャはハイエルフの王族として生きてきたことの価値観に引きずられている。

この世界に比べれば「表の世界」はなんと恵まれていたことだろう。

種の絶滅なんてものを考えられるのは、食に余裕があるからなのだ。

「生きていられることに比べれば、ケガなんて小さなことでしょう？」

「それは……そうかも、しれません」

「僕らはこの家に助けてもらった恩がありますから、向こうの世界に帰るめどが立つまでは、恩返しをしましょう」

「恩返し、ですか？　やはりモンスター討伐でしょうか」

「いやいや。アーシャにぴったりのことがあるじゃないですか」

「私に……？」

僕はにやりとしたが、そのとき部屋の扉がノックされた。

入ってきたのはキミドリゴルンさんだった。

「……レイジ、お願いがあるのだが、聞いてくれるかぬる？」

「いいですよ。協力しましょう」

「まだなにも言っていないぬ」

「魔道具についてもっと知りたいんでしょう？　あと、魔法の仕組みについても」

「！？　ど、ど、どうしてそれを……！？」

キミドリゴルンさんが部屋に籠もったのは、同じ後悔でも少し違ったのだろう。

あそこで勇敢に立ち向かった父や竜人たち、一方で僕はそういった動きをほとんどしなかったけれど、代わりに【回復魔法】でサポートをした。

竜人軍に入って切った張ったをやるのはキミドリゴルンさんには向いていない。だけれど彼には彼にしかできないことがなにかあるはず――そう考えたのではないかと思ったのだ。

このタイミングで「頼み事」と来れば、もうそれしかない。

「キミドリゴルンさんは、戦うことよりも、補佐することを選んだのですね？」

「……そこまで見透かされていたのか」

呆れたような顔をしていたのは、キミドリゴルンさんだけでなくアーシャもだった。

いやいや、ここで奮起しなければ男じゃないですよ。

「でもそれは明日からにしましょう。お腹が空きましたから」

夕食は、キミドリママとコックが腕によりを掛けて作ってくれたチョチョリゲス料理だった。僕が倒した1羽は竜人軍に寄付したのだけれど、せめて少しは持っていってくれと言われて引き取った部位があった。

客人におんぶに抱っこでは、竜人の沽券に関わる――とまで言われたらしょうがないよね。

「まあまあ、キミちゃんも来てくれたのね！」

食堂にキミドリゴルンさんが現れたのを見て、キミドリママがうれしそうに手を叩いた。

「さあ、今日は久々に酒樽を開けるんだぬら！」

ジョッキを持ったキミドリパパが興奮気味に言うと――いや、この人が興奮していないことのほうが少ないな――使用人が一抱えほどの樽を運んできた。

竜人都市では酒が高級品のようで、祝い事にしか飲まないらしい。

今日はチョチョリゲスを仕留めたことのお祝い――ということだったけれど、

「あの、魔法で傷が塞がっていても、お酒を飲むと痛んだり開いたりする可能性があるので今日は止したほうがいいと思います」

「おお！？　だが祝いの席だぬ！」

「あなた」

「おおっ……」

ゴゴゴゴゴと効果音でもつきそうな気配を漂わせながら現れたキミドリママがジョッキを取り上げると、すとん、と力なくキミドリパパは席についた。

お酒はまた今度、ということになり、酒樽はそのまま下げられていった。

「わっはっはっは！　レイジくん、どんなに強いモンスターと勇敢に戦おうとも、家庭内の強敵とは戦わないに限るぞ！」

そんな、格言みたいなことを言われましても。

ちなみに使用人の皆さんも交えた食事会は非常に盛り上がりました。チョチョリゲスの唐揚げは最高にジューシーで美味しかった。

１０（後書き）

小説家になろうとは関係ありませんが、来週８月７日に双葉文庫から新作が書き下ろしで発売されます。

「今宵はジビエを召し上がれ　～　函館のフレンチシェフは謎解きがお好き」

函館を舞台にしたキャラクター文芸です。ページ下部に紹介ページへのリンクを貼っておきますので、もしご興味ある方は夏の読書にいかがでしょうか？

※あと昨日告知した「学園騎士のレベルアップ！」コミカライズへのリンクがぶっ壊れてたので直しました。

11

翌日、僕はアーシャとともに「竜人族長老会」へと向かった。
向こうは【回復魔法】とチョチョリゲスの寄付へのお礼をしたく、こちらはようやく聞きたいことをいろいろ聞ける。
長老会が行われる場所は、木造で、円形の建物だった。入ってすぐの1室しかなく、イスが7脚横に並べてあった。
赤、青、黄……と7色の長老が座っている。面接会場みたいだなと一瞬思ったのはナイショだ。

「おお、よく来てくれたぬろ」

立ち上がってわらわらとやってきた長老たちにもみくちゃにされながらひとしきりの挨拶と感謝をされ、僕とアーシャはようやく7脚に向かい合わせの2脚のイスに座った。

「畜産についての話をしてもいいかね？　どうも、君にもなにか話があるようだが……」
「構いませんよ」
「実は過去に竜人都市でも畜産をしようという話はあったぬろ。だがそれが軌道に乗る前に、竜人都市は崩壊したんだ」
「……崩壊？」

いや、ここに竜人都市あるじゃないか、と思ったけれど、

「この1つ前の都市ぬろ」
「いや。2つ前ではなかったか？　1つ前は短かった」
「それだと40年前になるぬろ……いや、そうか、2つ前か」

長老たちがなにかそんなことを話している。

「あの、もしかして……この都市って何度も、その、崩壊しているのですか？」

「それはそうだ」

当然だろ、というふうにうなずいている。

「ああ――そう言えば地底人とダークエルフは同じところに長く住む習性があったな。彼らは樹上や山の中と、モンスターに攻め込まれにくいところに住んでいるからなあ……」

「竜人都市は過去に、モンスターと戦って……崩壊したということですか？」

「うむ。長くても５０年は保たない。短いと数年ぬろ。そうなると畜産をするよりも野生動物を狩ってきたほうがいいではないかという話になる」

僕は驚いて言葉を失った。

竜人都市、という名前があり、かなりの竜人が住んでいるのだから長い歴史があるのだと勝手に勘違いしていた。

（それほどにモンスターとの戦いは熾烈なんだ）

都市を破壊されてしまうほどには……。

「すみません……僕はそこまで知らずに、なにも知らずに、チョチョリゲスの絶滅の危機だとか、畜産の話だとか……してしまいました」

自分のあまりの無神経さに暗澹たる気持ちになりながら、僕は謝った。都市が破壊されているのに、そのたびに不死鳥のごとくよみがえっている彼らに、さらに「他の種の存続」まで気を配れというのは酷だ。

「いやいや、頭を下げなくてもいいぬろ。むしろ感謝しているんだ」
「感謝……ですか？」
「我らは食料とみれば獲り尽くしてきた。しかし巣を残しておきながら『間引く』ようにすれば安定的に肉を確保できる――それは簡易的ながらも畜産の発想ではないかぬ？」
「それは、そうかもしれませんが……」
「巣が見つかるとどうしても一網打尽にしてみたくなってなあ」

わはは、と笑う緑の長老に、他の長老たちもうなずいている。
僕の言ったことなど思いつきそうなものだ。でも彼らは明日にも都市が破壊されるかもしれないという危機的状況の中で、多くの食料を短時間で得る方向へと考えがどんどんシフトしていった。

「それは――多くの食料を仲間のために持ち帰りたいというのは当然のことかと思いますわ」

アーシャが言うと、紫の長老がにっこりとする。

「ああ。だが、我らも方針の転換があってもいいぬろ。いや、巣を維持しながら安定的に肉を得るという方法は、何度都市を破壊されたとしても、引っ越し先で使える方法ではないか？」

僕はさりげなく言われたこの一言に、心を震わせた。
この人たちは、都市の破壊すらも自然に起きうることの一部として受け入れている。

雨が降って芽が出るのと同じことだと。
大風が吹いて屋根が剥がれるのと同じことだと。
陽射しが降り注ぎ、月が昇るのと同じことだと。
モンスターに何度襲われても、その都度、方針を変え、考え方を変え、新しい発想を取り入れつつ、何度も何度も竜人都市を再建してきたのだ。

「もしこのような形の畜産について知識があれば、少しでも教えて欲しいぬろ」

長老たちは一斉に頭を下げる。
そして僕のような、違う種族の、見た目が明らかな子どもであったとしても、教えを請うことにためらいがないのだ。

「あ、頭を上げてください。僕らの知っていることなんてたいしたことではありませんが――」

すごい人たちだ、と思った。
昨日のキミドリパパや他のみんなの反応を見てもすごいと思ったけれど、長老たちはさらに人格者なのだと思った。
僕とアーシャはそれぞれ、畜産について知っていることをありのまま、すべて伝えた――。

話は盛り上がり、昼食を挟んで、改めて長老たちと向かい合った。
昼食はクレープというか、ナンというか、小麦粉の生地に野菜や肉をくるんだものだった。強烈な香りがする香辛料を使っているので食欲を刺激され、僕は1つお代わりしてしまったほどだ。

「さて、今度は君たちが聞きたいことを答えようと思うぬろ」

僕はアーシャと視線を交わし、うなずきあった。

信じてもらえるかはわからないけれど、正直にすべてを話してみようと思ったのだ。

「実は――」

僕は長老たちに洗いざらいすべてを話すことにした。

「表の世界」と「裏の世界」のこと。

こちらの世界へとやってきてしまったこと。

最初は半信半疑という感じだったが、ある一点に言及したときに長老たちの表情が変わった。

「……ちょっと待ってくれぬろ。君たちは空に吸い込まれたと言ったが、他にも同じように吸い込まれた者がいる……と？」

「ええ。大量のがれきに、軍用の飛行船が2艇は確認しました。ああ、飛行船というのは船によく似た形ですが家を数軒つなぎ合わせたくらいに大きいもので……」

すると長老たちの数人がひそひそと話をしている。

「……どうかしましたか？」

「ふむ」

青の長老がひげをしごきながら言った。

「実はな、先ほど我らも聞いたのだが、遠征に出ている間に反対方向の森の中で、巨大な船のようなものを発見したという情報が入ってきていたようなのだ」

「！」

思わず僕は腰を浮かせた。

「それは――飛行船だと思います」

飛行船があるのならば、空を移動できる。もしも向こうの世界に帰るには同じように空の亀裂に入らなければならないのなら、空を移動できるのは大きなアドバンテージだ。

それがなくとも、移動能力を確保できるだけですさまじいメリットになる。

「君の話を聞いている限り、そのようだぬろ。明日、偵察部隊を派遣する予定だよ」

「僕らも同行して構いませんか？」

「構わないが……」

青の長老は言葉を濁した。

「……その船のようなものはモンスターに襲われ、ほとんど破壊されていたようなのだ。見上げるほどに巨大なヤギである『森喰い山羊（フォレストイーター）』が現れたようでな……」

僕の脳裏に、記憶がよぎった。

空に走った亀裂の向こう――ヤギの目が僕らを見下ろしていた……。

11（後書き）

土日がいちばん忙しい。

12

「森喰い山羊（フォレストイーター）」の存在は竜人都市に長く伝わっているもので、幾度となく竜人は襲われ、住処を追われてきた――という。

「あのデカさよ！　初めて見たときは夢にまで見たものぬろ」
「また山羊の目が不気味でなあ」
「そうそう！」

しかし、長老たちはなぜか明るい口調でそんなことを言っているので、ビビった僕はなんだか毒気を抜かれたような格好だった。

「それでも……なにか得られるものがあるかもしれないので、飛行船を見に行きたいです。生き残った人がいるかもしれませんし」
「わかった」
「レイジさん。その、私も行きたいのですが……足を引っ張りそうですね」
「アーシャには残っていてもらったほうがいいと思います。僕はひとりなら、なかなかの逃げ足ですからね」
「……」

冗談めかして言ってみたものの、アーシャは少し悲しそうな顔をした。
昨日までの「遠征」で、僕の速度についていくことはできないと思ったのだろう。

（でもそんな顔をしないで欲しいな……。人にはできることとできないことがあるのだし）

僕は改めて長老たちに向き直る。

「それと、皆様のなかで『盟約』という言葉に聞き覚えはありませんか？　それは2つの世界をつなぐ約束事のようなのですが……」

すると長老たちが視線を交わし合った。

「ふうむ。実は長老会に伝わる『盟約』というものがあってな……我らはこれがなんなのか、わかっておらんのだ」

「わかっていない……？」

「最初から長老会に伝わっていたものではないのだ。先々代か、その前か、いずれにせよかなり以前のことぬろ。あれは確か――ドワーフ種族だったか？」

「うむ。ドワーフぬろ」

「ドワーフ種族がモンスターの襲撃によって全滅したときに、当時の長老会に参加していた7人が同じ夢を見たのだ」

夢？

僕が首をかしげていると、

「それは黒い人型のなにかが、長老たちを同じ夢に呼び寄せ、こう言った。『今から盟約を伝える。種族が続く間中は、これを受け継ぐように。ゆめゆめ忘れることなかれ。盟約こそがお前たちの存在を確かなものとするのだから』……」

黒い人型のなにか。

僕はそれに見覚えがある。

――『闇ヨ、門ヲ開ケ。光ヨ、道ヲ開ケ』

クルヴァーン聖王国の「一天祭壇」の前に現れた調停者。
ヤツが、竜人の祖先の夢に現れた……？

「その盟約の内容はどのように伝わっていますか？　もし差し支えなければ教えていただきたいのですが」
「うむ。伝えることは問題ない。祖先が聞いた内容は『盟約の構造』であったぬろ」
「『盟約の構造』……？」

――盟約は本条を含み8種から成る。
――盟約を成立せしむる要素は「天賦珠玉」と、「盟約者」と、「調停者」である。

盟約は8種類あるのか。
ハイエルフ王族に伝わっている内容は、天賦珠玉を採りすぎるなとかそういう内容だった。
それぞれの種族が、別々の内容を保持しているということなのか？

「長老会ではな、死亡やらなんやらで欠員が出ると、新たにひとりを加え、7人で運営するのだ。そのとき、不思議なことだが、新しい長老にもホレ……こんな模様が出る」

黄の長老が見せてくれたのは、手の甲だ。そこにはうっすらと文字のようなものが浮かび上がっている。

「これは全員に？」
「うむ。出る場所は様々だが……紫のなぞは悲惨ぬろ。なんとケツに出ておるのだからな！　わっはっはっは！」
「バカ者！　それは言わない約束ぬろ！」

紫の長老が怒るが、死ぬほど要らない情報をどうもありがとうございます。

（……つまり竜人族は長老7人が「盟約者」ということなんだろうか？　クルヴァーン聖王国は聖王が「盟約者」？　聖王はきっと、聖王色を持つ「無垢の者」を捧げる……みたいな盟約を負っているんじゃないだろうか。でも、あんまりちゃんとわかってる様子はなかったよな……）

竜人族の「盟約の構造」なんてものはただの情報でしかない。ハイエルフ王族の「天賦珠玉」に関する盟約も、強制力を持つものではなかった。まあ、エルフは「三天森林」からはあまり天賦珠玉を外に出さないらしいけど。

（今の話の流れからすると、ドワーフ種族に伝わっていた盟約が、滅亡と同時に竜人族に移ってきたということだよな？）

相変わらず、もう聞いた盟約の内容がぼんやりしてきている。メモに取ろうと思ったけれどうまく言葉が出てこずに書くことすらできなかった。

（盟約は各種族に伝えられるだけのもの、ということか……。でも８種類の盟約があるとして、竜人族、地底人、ダークエルフしかいないと言っていたよな？　残り５種の盟約はどうなったんだ）

わからないことばかりだった。

明日、飛行船への偵察部隊に同行することが決まり、僕らは長老会の建物を後にした。
時刻は15時くらいだろうか。ずいぶん長くいてしまったものだ。

「……」

アーシャの表情が暗いのは、やはり自分が「足手まとい」だと思っているからに違いない。
今こそ、あの話をするべきだな、と僕は思った。

「アーシャ、昨日言っていたことなんですけど」
「？」
「アーシャにぴったりの、やるべきことがあると話したじゃないですか」
「あ……そう言えば、そうでした。でも私にできることなどあるのでしょうか？」

自信をなくしたようなアーシャに僕は苦笑しつつ、

「ありますよ。たぶん、みんなからすごく喜ばれると思います。竜人都市が何度も崩壊してきたというのならなおさら……」
「？」

ますますわからない、というふうに首をかしげるアーシャ。

「僕、ちょっと長老たちにもう一度会ってきます。やっていいかどうか許可を取らないといけないので――」
「わ、私も行きます！　私になにかお仕事をくださるんですよね！？」
「仕事……うーん、そうですね。仕事です。ではいっしょに行きま

しょう」

長老会に戻ると、7人はまだ残っていて戻ってきた僕らに驚いていたけれど、僕の提案を聞くと「それは面白そうだ」と乗り気だった。

許可はあっけなく下りた。

僕は明日の朝から出てしまうので、下準備は今日中にやってしまわなければならない。

「つまり、それは我らがいちばん最初に試さなければならないぬろ！」

と乗り気どころかだいぶ前のめりな感じだったので、

「明日の朝からやりますので、是非来てください」

僕は苦笑しながら言った。

さあ――「魔法」を駆使しまくって作る、「大浴場計画」のスタートだ。

13

翌朝――眠い目をこすって僕はベッドを出た。昨日はだいぶ遅い時間まで起きていたから、正直寝不足だ……でもレフ魔導帝国の軍用飛行船を見に行かなきゃ。

身支度を整えて廊下に出ると、廊下の窓から外を凝視していたキミドリパパがハッとしてこちらを向いた。

「おおおいィ、レイジくんんんん！」

「おはようございます」

「ああ、おはよう――じゃなくてね！？　なんだぬ、あれは！？」

僕が寝不足だった理由は簡単だ。

「お屋敷の裏庭を『好きにしていい』という許可をいただいたので、『大浴場』を作らせてもらったんです。建築許可は長老会から……」

「大浴場！？　あれを一晩で！？」

正確には夕方から夜に掛けて、だけど。

僕とキミドリパパが外に出ていくと、すでにお屋敷の人たちが集まっていた。

２５メートルプールを２つ。ほんとうは形にもこだわりたかったんだけれど、さすがに時間がなかった。

【土魔法】で掘り返し、整形。アーシャの【火魔法】で超高温に焼き上げるとガラスのような照りが出た。闇の中、アーシャの魔力を練り上げた白色の炎が地面を焼いていく様は、「すごい」を超えて神秘的ですらあった。

階段が１つついていて、深さは６０センチ。左右の浴場はこれま

た【土魔法】で作り上げた土壁で目隠しがしてあるけれど、屋根まで作る余裕がなくて上からは丸見えだ。
【水魔法】で大量の水をぶち込んでおいて、水漏れや水の変色がないかを確認するために夜明けまで放置しておいた――というわけだった。

「おはようございます、レイジさん。お水はどうですか？」

僕とキミドリパパがお屋敷の人たちのところに混じると、後ろからアーシャが追ってきた。

「うん、ばっちり。水漏れも変色もないみたいだ」

排水用のための排水溝も準備してある。水は、町を縦横無尽に走っている側溝にそのまま流れ込む仕組みだ。

「ほおお！　こりゃすごいぬろ」
「これが『大浴場』か？　しかし水は冷たいぬろ」

いつの間にか7人の長老もやってきて、気がつけば水まで触っている。いや、まだ日の出という時間帯なんだが？　老人は朝が早いんですか？
そして種族のトップらしい長老が来たというのに誰も動じず、誰も歓待しないあたり、竜人族はさばさばしている。

「こ、これは……これが魔法の力なのか……！？」

キミドリゴルンさんも騒ぎを聞きつけて起きてきたらしい。

「いやいや、これからですよ」

「これから……？」
「はい。――アーシャ、僕はそろそろ行かないといけないので、一発お願いします」
「わかりましたわ」
アーシャがずずいと前に出ると、竜人たちは道を開けた。生まれ持った血、というのか、アーシャの所作にはなんだか迫力があるんだよね。
「これだとまだ、ただのプールです。まあ水浴びをするでもいいんですけどね。仕上げはアーシャの魔法です」
左のプールの前に立ったアーシャは、両手を前にかざした。
彼女が【火魔法】を行使するのに、格式張った魔法詠唱や溜めは必要ない。
ただ念じ、声を出せばいい。
「炎よ」
彼女の両手の先に現れたオレンジ色の炎は、朝日と同じ色だった。
この世に現れたことを喜ぶように、踊り、舞う。
炎はひゅるると放物線を描いてプールの中央に着水すると――一瞬で周囲の水が沸騰、蒸発、爆発する。
「うわっちっちい！？」
ここまで飛んできた飛沫が数人の竜人たちに当たった。僕はプールに手をつけて【水魔法】を発動し、水をかき混ぜる。
「1発じゃやっぱり温まりきらないね。あと3発くらいかな？」

「わかりましたわ」

ぽんぽんぽーんと【火魔法】が放り込まれた。竜人たちは警戒したけれど、僕も僕で【水魔法】で火球を押さえ込むように動かし、今度は飛沫は飛ばなかった。

「うん、ちょっと熱めだけどちょうどいいかも」

ゆらゆらとプールからはほんのりとした湯気が立っている。真冬だったらもわもわだったろう。

「レ、レイジ、これのすべてがお湯なのかぬ!?」

僕の隣でプールに手をつけていたキミドリゴルンさんが聞いてくるので、僕はうなずいた。

「はい。もともと温浴の習慣はなかったと聞いていますので、皆さんが気に入るといいんですが――」

「うひょっほう！　これは最高ぬろ！」

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」

「ジジイ、うるさいぬろ」

「あ、誰がジジイぬろォ……？」

「黄と紫の長老がやり合うぞォ！」

「外に出てやれ」

「然り」

「然り」

「然り」

いつの間にか長老たちがスッポンポンになって飛び込んでいた。

一応フンドシのような下着だけはつけてるけど。

お屋敷の女性使用人たちが「キャー」と悲鳴を上げる。いや、「ギャアアア」って感じか。見たくないものを見せるなという。

「レイジ、そんなに気持ちいいのか……？」

「ええ。僕は好きですけど――とりあえずキミドリゴルンさんも試してみてください。僕らが滞在している間はすぐにできるので、好評なようなら続けようかと」

熱い風呂に入るという風習があるらしい――そんな情報はあったようだ。ただ、この竜人都市ではさすがに贅沢なことだし、竜人族は爬虫類系であるのであまり温度変化を望まなかったようだ。

でも僕の知識では、ペットのトカゲに温浴を勧める人もいたのだ。温浴をすることで脱皮が促進されるし、皮がふやけて取れやすくなるという。

「おお、おおお〝お〟ッ！？　剥ける、鱗が剥けるぞォ！　こんな奥までェ！」

「赤のォ！　汚いことするんじゃないぬろ！　湯が汚れる！」

大はしゃぎの長老につられ、キミドリゴルンさんも入ると、キミドリパパやお屋敷の人たちも試しに入ってみてくれた。

こうなると朝からお風呂は大騒ぎだ。

で、

「……レイジさん、その、ねぇ？　催促するわけじゃあないんですよ？　でもねぇ、男の方ばっかりで、女の私たちが入れないってことはないんぬる？」

うふふふふ、と笑いながらも有無を言わせぬ迫力で迫ってくるキミドリママと、その背後にいる興味津々という顔の女性たち。

「も、もちろんです。もう片方は女性向けでしたので」

僕とアーシャは隣のプールも急いで温めると、女性たちに開放したのだった。

だいぶ、気に入ってくれたようであるのは間違いないだろう。

ふやけきった長老たちを置いて、僕は偵察チームへと合流し、飛行船がある場所へと向かった。

大浴場はアーシャにお任せだ。

今日一日で、おそらくお湯は真っ黒になるだろう。水の追加はがんばれば井戸からでも近くの小川からでもできる。

いちばんの問題である「加熱」はアーシャができる。

――がんばりますっ。

アーシャはやる気満々だった。

この竜人都市で僕とアーシャで銭湯でも開いたら大もうけできそうだなぁ。

風呂上がりのコーヒー牛乳とフルーツ牛乳を用意しなきゃね。いや、僕はコーラ派だけど。

「……しかし、長老たちは、その『大浴場』とやらに行ったきりで見送りにもこないとは」

偵察チームのリーダーが呆れたように言う。

僕らはかなりの速度で森を走り抜けていた。

「俺も気になるっすわ。戻ったら入りたいぬ！」
「アタシもアタシも」

チームの残りメンバーであるふたりも興味があるようだ。
浴場を追加してくれ、と言われたらどうしよう……。

「そう言えば、君は違う世界から来たようだぬ？」

走りながらリーダーに聞かれる。

「ええ……突拍子もない話に聞こえると思いますが」
「いや、あれほどの船を、森のど真ん中で見たら、そういうこともあり得ると考えてしまうぬ」

リーダーは遠目に、飛行船を確認している。そしてフォレストイーターも。

「子どもの頃に聞いた物語を思い出したぬ。この世界で生きることに嫌気が差した変わり者が、別の世界へと旅立つんだぬ……」
「そんな物語が？」
「うむ。『ラ＝フィーツァの旅』という名前だぬ。我らの祖先らしいがぬ」
「！？」

僕は思わず足を滑らせ、転びそうになった。

「大丈夫かぬ？」
「それ――その話！」

ラ＝フィーツァ。

それはレフ魔導帝国にあった「九情の迷宮」を作った男。

「詳しく教えてください……！！」

僕はリーダーに飛びつくようにして言った。

14

ラ＝フィーツァは「変わり者」だった。

――また種族が滅んだぬりぃ……。次は我らの番だ！

それが口癖で、常にみんなの不安を煽っていたので嫌われ者だった。

ラ＝フィーツァはひとり、旅に出た。

群れを離れた竜人は野垂れ死ぬしかなく、ラ＝フィーツァも例外ではなかった。

ラ＝フィーツァはダンジョンで死ぬことにした。

長い長いダンジョンの先で、ラ＝フィーツァは眠りに就いたのだ……。

★

「とまあ、こんな話だぬ」

偵察チームのリーダーが教えてくれた話は、役に立つような、立たないようなものだった。

僕らはいまだ森を走り続けている。竜人族のスタミナはすばらしく、【回復魔法】と【補助魔法】で僕がようやく食らいついているくらいだった。彼らは天賦を持っていないはずなのに……これが自然淘汰に耐えている竜人の底力か……！

「長老たちは、僕にそんな話はしてくれませんでした。というかこの話の最後も『別の世界へ旅立つ』という感じでもないですよね」
「でも、俺はそうとらえたんだぬ。そのほうが面白いぬ」
「な、なるほど……」
厳ついリーダーが目をキラキラさせている。
「竜人族に伝わる昔話は、ほとんどが実話だぬ。だからラ＝フィーツァは実在したと俺は考えているんぬ。でも長老たちはラ＝フィーツァが嫌いだぬ」
「どうして嫌いなんでしょう」
「『ぬり』を流行らしたからだぬ」
「……あの、『ぬ』とか『ぬり』とか『ぬろ』とかなんなんですか？『ぬれ』でキレてる人たちは見ましたけど」
「そこはフィーリングで感じて欲しいぬ。竜人らしく『ぬ』。ちょっと一杯やろうぜ、という親愛の『ぬる』。そして絶望の『ぬり』
……」
「ジジイの『ぬろ』」
「やっぱ若い竜人は『ぬれ』だよねー。老人はすぐ言葉の乱れがーとか言って怒るんだけど」
偵察チームのふたりがキャッキャしていると、リーダーは渋い顔をした。ああ、これはアレですね。「ぬれ」に対していい思いを持っていないんですね。
聞くだけ聞いたけど正直どうでもよくなってきた。
「今の『ラ＝フィーツァの旅』ですが、ラ＝フィーツァに同行した者はいたんですか？」
「それはいないぬ。いないからラ＝フィーツァなんだぬ。孤高の変質者がラ＝フィーツァだぬ」

すごい言われようだけど、彼は「表の世界」でひとつの国を富ませるまでの技術提供者になってますよ……。

「でもそれだとおかしいですよね。ラ＝フィーツァの最期を誰が看取って物語にしたんでしょうか？」

「たぶんだが、残った竜人たちの希望的観測ではないかと思われるんだぬ」

「……身も蓋もないですね」

「出てった仲間が成功していたら竜人都市にしがみついて生きていくのはつらいんだぬ」

辛辣な言葉だが、リーダーは「あっはっはっは」と笑っているのでオーケーらしい。

毎度思うけど、竜人たちはたくましい。

「そのラ＝フィーツァなんですが、たぶん僕がいた世界に来ているんですよ」

「なぬ！？　どうやってだぬ！？」

今度はリーダーがすっ転びそうになって、いや、すっ転んで、ごろごろ転がった勢いで飛び起きて走り続ける。おー、と拍手する若い竜人２名。

「それが知りたくて……。ラ＝フィーツァがどの辺りで消息を断ったか、なんてわからないですよね……」

「うーむ。正確な位置はわからないが、さほど遠くはないと思うんだぬ」

「え、どうしてですか？」

「竜人都市が移動していることは知っているのかぬ？」

僕はうなずいた。モンスターの攻撃から逃げるように、何度も何度も都市を再建していると。

「都市を置く場所はローテーションしているんだぬ。今の都市は、8代前の都市があった場所と同じで、遺構を利用しているんだぬ」

「そうだったんですか！？　それはすごい発想ですね」

「我ら竜人族は偉大なんだぬ」

胸を張っているリーダーの頭には枯れ葉が3枚へばりついている。

竜人都市は同じ跡地に移動しているのか……遊牧民みたいだな。

牧草がなくなったら家畜とともに集落が移動し、牧草がまた生えたころに戻ってくるという。

「もちろん、ラ＝フィーツァが長い長い旅の末にそちらの世界に移ったのならばそれはないと思うがぬ……でもひとりで、この森を歩くのはとんでもなく危険だぬ」

「僕もそう思います」

それに、ラ＝フィーツァは「表の世界」に移ってから「九情の迷宮」を作った。

年を取ってから作りだしたら完成の前に寿命がきてしまうだろう。

竜人の寿命はヒト種族とほとんど同じなので、いくつかある竜人都市の遺構からそこまで離れていない場所で、「表の世界」に移動した――そう考えるのは希望的に過ぎるだろうか？

いや、仮説として、検証してみる価値はあるはずだ。

（そう言えば、どうしてラ＝フィーツァは2つの世界をつなげる「九情の迷宮」を作ったのかな……まあ、なにか理由があったんだろうな）

俄然やる気が出てきた。ラ＝フィーツァが使ったシステムが残っているなら、僕とアーシャはすぐにも向こうの世界に戻れる。

「――そろそろ飛行船に到着する。一度休憩しよう」

リーダーの言葉に、我に返った。

僕らは軽食をとり、水を飲んで休憩することにした。

今の位置は、竜人都市から北東にだいぶ進んだところだ。「表の世界」で言うところのクルヴァーン聖王国の聖王都にほど近い場所に当たる。

（……お嬢様、今ごろなにしてるかな）

聖王国のエヴァお嬢様は、伯爵と仲直りはできたと思う。伯爵のほうはお嬢様が好き好き大好き超愛してるなので、お嬢様が受け入れればすぐにふたりの仲は元通りだ。

今ごろ伯爵とふたりで聖王国の中枢で貴族貴族しているのかな。

……あのふたりがタッグを組むとか、強すぎるのでは？

（それにラルクもなぁ……せっかく会えたのに）

飛行船の上に現れたラルク。彼女は【影王魔剣術（シャドウキング）】を使ってヘビギンチャクをたたっ切っていたっけ。

（……そう言えば、【森羅万象】でようやくあれを見たんだよな。僕も再現できるのかな）

最初に見たとき、ラルクは僕を守るために鉱山兵たちを【影王魔剣術】で倒してくれた。でもあのとき僕は【森羅万象】を持っていなかった。

次は竜を倒したときだ。でも僕は気を失っていた。

そして今回――。

「手から……黒い剣が――！？」

近くの木に向けて放ってみると、とてつもない量の魔力が抜け落ちていくのを僕は感じた。黒い斬撃はすぐそこの木を切り裂き、その先にある3本の木もまとめて斬り落とした。

「な！？　なんだぬ！？」

「うぎゃあ！？」

「ひえええ」

3人の竜人が焦った声を上げたけれど、

「ハッ、ハァッ、グ、ガハッ、ハァッ……」

僕は全身から汗が噴き出し、その場に両膝をついていた。

（な、なんなんだよこれ！？　むちゃくちゃ燃費が悪いじゃないか！　僕が天賦珠玉を使っていないから？　もちろん、それはあると思う。だけどそれにしても――）

ちくり、と胸の奥を刺すような痛みが走る。

（……魔力じゃない。生命力を使っても、この天賦は発動できるんだ……そういうことか、【森羅万象】先生）

ラルクに魔力があったとは思えない。あってもそこまで多くはないだろう。

だというのに彼女が、自在にこの天賦を操り、あまつさえヘビギンチャクのようなものを斬ることができたのは――。

「……命を、削っているのか？」

僕は、すぐにも「表の世界」に戻らなければならないと思った。

ラルクは、命を削ることを知っていてもなお、あの天賦を使うだろう。

自分のためじゃない。

弱い人を守るためだ――僕のような弱者を。

早く戻らなきゃ。

戻って、彼女の身体から【影王魔剣術】を抜かなければならない。

他の誰が言っても、ラルクはあの力を手放さないだろう。力があれば多くの人間を守れることを知ったラルクは。

（でも僕なら？）

僕ならラルクを説得できる。いや、絶対してみせる。

またひとつ、「表の世界」に一刻も早く戻る理由ができてしまった。

15

★　クルヴァーン聖王国　★

スィリーズ伯爵が屋敷に戻ると、すぐに娘のエヴァが駈け寄ってきた。駈ける、とは言っても咎められるギリギリの速度で、伯爵の前へとやってくるとスカートを持ち上げて一礼する。

「お父様。レフ魔導帝国の状況はいかがございますか」

娘の、狂おしいほどに焦りながらも、貴族としての礼儀はきちんとしようとする姿を微笑ましく思いつつも、一方でその思いの先にあるのは自分ではなくここにいない少年であることを知っているので複雑な感情もあった。

伯爵は娘と執事長とともに執務室へと移った。

「国境の町では難民となったレフ人の受け入れが始まっているようです。エベーニュ公爵家の公爵領にある町ですから、エベーニュ公爵は大急ぎで領地へと戻っていきました。レフ魔導帝国への軍の派遣は検討していなかったのですが、グレンジード公爵と、聖王騎士団第5隊から7隊と、騎兵1万を差し向けることに急遽決定しました」

「……」

エヴァはその話をじっと聞いていた。彼女が聞きたいのは他のことだろうけれど、貴族社会において重要なのは、

――新聖王陛下が、先代聖王であるグレンジード公爵に軍を授け、帝国に向かわせる。

という事実だ。

いまだに親子仲のよい聖王家で、父に頼った聖王という姿を見ることもできるし、一方では厄介者の先代を死地に追いやったのではとうがった見方をすることもできる。

（実際は、「腕がムズムズするんだよ！　俺は前線に行くぞ！」と先代聖王が駄々をこねて、配下の５００騎だけを引き連れていこうとするのをあわてて聖王陛下が止め、せめて軍を率いてくださいとお願いした……という感じですがね）

そのやりとりを直接目にしてしまったスィリーズ伯爵は内心でため息を吐く。

（とはいえそれは、「他国の問題に自国民を送り込んで死なせたらどうするのか」と悩んでいた聖王を見かねたグレンジード公爵が「自分の責任において」行くと言ったというふうに私には見えましたが。帝国を放置すれば「冷たい国王」だと見られ、首を突っ込んで痛い目に遭えば「失策」と陰口をたたかれる。就任されたばかりの聖王陛下には難しい局面でした）

貴族社会で伯爵がそんなふうにフォローしたところで、元々「聖王の懐刀」と思われているのであまり意味がないのも歯がゆい。この話はあっという間に貴族間に伝わり、向こう数か月の話題は事欠かないだろう。

するとエヴァが、

「その、お父様……アナスタシア殿下や、レイジのことは……」

いちばん聞きたかったであろうことを聞いてきた。
伯爵は首を横に振った。

「続報はありません」
「そう、ですか……」

悄然として肩を下げる娘を見ると、それだけで親の伯爵としてもつらい。
だが希望的な憶測を話しても意味がないし、エヴァも賢いのでただ喜ばせようとした憶測ならば見抜くだろう。

「……この話はしたくなかったのですが」

ため息交じりに、伯爵は言った。

「グレンジード公は、私の同行を望んでいます」
「――えっ、お父様の？」
「レフ魔導帝国や、すでに出兵を決め、動いているキースグラン連邦、光天騎士王国との折衝を行うに当たって、私がいたほうがなにかと便利なのでしょう」

伯爵の持つ「審理の魔瞳」は相手のウソを見抜くことができる。
凶悪なモンスターを前に、相手国を謀ろうと考える者はいない……と考えたいところではあるが、絶対にないとは言い切れない。
グレンジードは、背後から刺される危険を排除した上で行動したいと考えているのだろう。

「私は、行こうと思います」

伯爵はすでに承諾の返事をしていた。
屋敷を長期間空ける以上、エヴァに話さないわけにはいかない。
エヴァは考え込むようにしながら、

「……お父様は、断られるのかと思いましたわ」
「なぜですか」
「帝国を救うための行動は有意義ではあると思いますが、お父様は武官ではございません。外務卿や軍務卿とともに働いていたこともないではありませんか。であれば、今、交代されたばかりの新聖王陛下をおいて聖王都を離れることの不利益のほうが大きいです」
「それは、そのとおりですね」

伯爵は笑みを深める。そこまで考えることができるのであれば、貴族の娘としてはすでに及第点だ。今年13歳になるという少女であるというのに。

「ではどうして」
「それはですね……」

利益、不利益では考えなかった。いや、まったく考えなかったわけではなく、自動的に利益や不利益が頭に浮かんできた。
ただそれらを考慮しなかった。
伯爵は、グレンジード公爵の行動を見て思ったのだ。

（ああ、この人は娘の前でカッコつけたかったのだな）

と。
新聖王に助け船を出すとか、いろんな理由はあるにせよ、グレンジードの動機はたったひとつ、「娘の前でカッコつけたい」だけなのだとそのときはすんなり理解できたのだ。

――なあ、伯爵（ヴィクトル）よ。すまないが、お前もついてきてはくれねえか？

そう言われたときにすぐにうなずいてしまった。

だから、「どうして不利益があるのに行くのか」と問われれば、

「……エヴァ、私にはあなたがいるからです」

と、言わざるを得ないだろう。

娘はレイジの情報を手に入れたくて仕方がなくて、でも聖王都にいる以上はできることが限られている。

では前線ならどうか？

もっと違う情報が、新たな情報が、毎日入ってくるはずだ。

その情報を届ければ、娘はきっと喜ぶだろう。

「わたくしがいるから、ですか……？」

「はい」

つまるところ伯爵もまた、娘の前でカッコをつけたかったのだ。

「わかりましたわ！　つまり、わたくしも連れて行ってくださるのですね！？」

「はい――はい！？」

なんだか妙な伝わり方をしてしまった。

「いえ、エヴァ。そういうことでは――」

「ありがとうございます、お父様！　確かな情報は現場から手に入りますものね。わたくし、スィリーズ伯爵家のひとりとして恥ずかしくない振る舞いをいたしますわ！」

「……」
「……」

イスから降りて右手の握りこぶしを天に掲げていたエヴァは、

「も、申し訳ありません、言ったそばから、こんな……はしたない……ああ、もう、穴があったら入りたいとはこのことなのだわ……」

真っ赤になった両頬を手で押さえて小さくなった。

（……レイジさん、娘をこんなふうにした罪、償っていただきますよ……）

伯爵はひっそりと決意を固めたのであった。

16

休息後、偵察チームのリーダーを先頭に僕らは移動を再開した。
距離にして５０キロ以上は竜人都市から離れているだろう。
こんなところまで偵察し、地形を把握しているのだから偵察チームの能力の高さは正直すごいと思う。

「もうすぐだぬ」

リーダーがそう言ってから１５分後、僕の鼻は焦げたようなニオイを感じ取った。
雨が降ったらしく、森の中はムッとするような湿気と、清浄な緑の香りが立ちこめていた。
この辺りは木々も葉が濃く、どこか赤みを帯びた陽光が木漏れ日となって降り注いでいる。

「……飛行船だ」

木々が切れたところに――いや、へし折られ、無理矢理開かれた土地に横たわっていたのは僕があちらの世界で見た軍用飛行船そのものだった。
木々が折れているのはこの飛行船が不時着に失敗し、ハードランディングしたからだろう。
飛行船に使われた木材が焼け、黒々としていた。
そして船体に張られた鋼板や、窓ガラスの破片などは飛び散って、濡れた水滴が陽光を映じていた。
静かだった。
だけれどそこにあるのは、確かに破滅の痕跡だった。

「確かに、君の知っているものだったかぬ？」
「はい。あっちの世界の、レフ魔導帝国が所有している軍用飛行船に間違いありません。落ちている国旗がレフ魔導帝国のものですから」
「あの残骸が元はどんなもので、どんな技術が使われていたか君にはわかるのかぬ？」
「いえ――それよりも、生存者がいないか確認してもいいですか？　生き残った人は、確実にこの飛行船の関係者ですから」
「わかったぬ」

了承が得られるや、僕は残骸へ向けて飛び出していく。

「誰かいませんか！　僕はレフ魔導帝国に来ていた冒険者です！」

声を張り上げ、半壊し、ナナメになった船体の中にも声を掛けていく。
だけれど――誰の返事もなかった。
いや、おかしなところがあった。
血の流れた跡はあるというのに、死体がひとつもないのだ。

（どうしてだ？　もしや、モンスターに食われたとか……？　それにしたところで、骨ひとつ残っていないのはさすがにおかしいんじゃ……）

僕が首をかしげながら潜っていた飛行船から出て行ったときだった。

「！」

耳が――【聴覚強化】によって常人ならざる聴力を持っている僕の耳が捉えたのは、木材の軋むような音。それに弦が引かれぎりぎりまで伸びていく音だった。

――弓だ。

偵察チームは弓を持っていない。

ましてやレフ人たちは「鋼鉄武装（スチールギア）」などの兵器は使うが、腕力で引いて放つような原始的な弓矢は使わない。

ハッとして振り返ったそこへ、風を切って飛来する矢があった。

今まで見た中でも相当に速い。

魔法は間に合わない。

僕は半身をひねってそれをかわすと、矢は、僕の背後の船体に突き刺さってビィンと音を立てた。

「――・・・！」

「・・・――――！！」

太い木の枝に立っている。

人だ。草や枝でカムフラージュしたフードをかぶっている。

次の矢をつがえている――瞬間、僕はロケットのように走り出した。

「！？」

ジグザグに走って突っ込んで行く。敵の挙動に動揺が見える。

それでも矢の次弾は過たず僕へと飛来するので射手の腕はかなりのものだ。まあ、まとわせた【風魔法】で軌道を少しずらせば当たることはないのだけれど。

「マズいぞ」
「迎撃！」

僕が１０メートルの距離まで接近したときには、迷彩服（ギリースーツ）っぽい服装の敵がひらりひらりと５人ほど、上から降りてきた。弓を持った１人は上に残り、狙撃に徹するらしい。
まあ、させないけど。

「そらぁっ！」

僕は【補助魔法】と【身体強化】全開で地面を蹴ると、降りてきた彼らを軽々飛び越えて、木の枝に立つ射手へと迫った。
突然の跳躍に驚いた射手は――それは、青白い肌に赤い目の、ヒト種族に近い感じだった――あわてて弓をこちらに向けたけれど遅すぎる。
跳び蹴りを胸にくれてやると、敵は吹っ飛んで地面に落下、見事にバウンドした。

「ッ！　クソッタレ！」

敵のひとりが両手を開いてこちらに向ける――と、そこには岩石が現れる。

（え、【土魔法】？）

ぎゅるると回転したそれは、

「死にさらせェッ！」

すさまじい勢いで射出され、僕の頭目がけて突っ込んできた。

だけど――まあ、自分の魔法で慣れているわけで。

「んなァッ!?　かわしよったぞ!」

「なんなんだ、あいつは!　肌を黄色く塗りやがって!」

塗ってない塗ってない。

僕は距離を一気に詰めると、振りかぶってきた曲刀をかわし、膝蹴りを腹にめりこませた。

「ふぐおォッ!?」

次は、と……。

僕が残り4人へと視線を向けると、

「ひィッ」

4人とも後じさりして逃げようとする。

さて、どうするか――と思っていたときだ。

「おいィ、てめえ、こっちを見ろや!」

離れた場所から別の男の声が聞こえた。

「この男がどうなってもいいのか!　コラ!　あァッ!?」

「す、す、す、すみませんっす～～……」

偵察チームのメンバーのひとりが、後ろから羽交い締めにされていた。

しくじったな。ここだけじゃなく他にも敵がいたのか。

ちらりと見ると、曲刀を突きつけられた偵察チームのリーダーと、

もうひとりのメンバーの女性竜人は陰に潜んでいる。うまいな、見つかってない。

……いやむしろ君、どうして見つかったの？　偵察チームなのに……。

「武器を捨てろ、てめえ！」

「いや、最初から武器持ってませんけど」

「あァッ！？　口答えすんのかコラァ！」

「いや、事実……」

「黙れオラァ！」

ヤバイ、会話が通じない。アレか、山賊タイプか。

（この世界に3種族しか残っていないのなら……この人たち、たぶん「地底人」だよな）

地面にのびている敵を見ると、フードが外れて中の顔が見える。耳はヒト種族と同じで丸い。髪の毛はちりちりのブラウンだった。

「てめえは竜人の仲間か！？　この残骸は俺たちが先に見つけたんだよ！」

「……ここにいた方たちを連れていったのはあなたがたですね？」

「だったらなんなんだァ？　竜人ども、ここんとこ接点はまったくなかったが、いきなりこんなドデカいもんで攻め込んできやがって……どうなるかわかってンだろうな、おォ！？」

あ～～、そうか、レフ人は竜人にそっくりだから、竜人が巨大兵器を使って攻めてきたって思ってるのか。

「ん、ということはあなた方の集落はこの近くにあるんですか？」

「集落じゃねえ！　町だ！　ビッグシティだ！」

正解らしい。

「大体てめえ、知っててここまで来たんだろ！？」

「いや、僕らは――」

「いいから来い！　おい！　そいつをふん縛れ！」

「へい」

僕と相対していた４人は警戒しながら近づいてくる。

（どうしよう……とりあえずついていってみようかな。予定とはだいぶ違うけど、地底人にも独自の情報があるだろうし）

僕ひとりならどうとでもなるけど、偵察メンバーもいっしょだとちょっと面倒かもしれない。

「あのー。僕が人質になるので、彼を解放してもらえますか？」

「あァ！？　なに舐めたこと言ってンだ！　命令できんのはこっちだ！」

「命令じゃないです。交渉です」

「笑わせンな！　ボケ！　アホ！　バーカ！」

語彙がヤバイ。なにがヤバイって会話がヤバイ。僕の語彙までつられてヤバイ。

「わかりました……それじゃあ」

僕は右手を突き出した――曲刀を突きつけられている仲間へと。

「風よ」

即座に【風魔法】を発動し、突風を起こす。

「っく！？　おおおおお！？」

「ぎゃあ！」

ついでに【土魔法】も混ぜれば砂塵を巻き上げ目隠しになる。雨上がりでなければ地面の砂をそのまま使えたんだけどな。

羽交い締めから逃れた彼へと僕は告げる。

「逃げてください～」

「わ、わかったっす！」

目に砂が入ったのか、涙で目をしょぼしょぼさせていた偵察メンバーだけれどなんとか走り出す。あとはリーダーがうまく連れて行ってくれるだろう。

「お、追え！　逃がすな！」

「いや、面倒ごとが増えるので逃がしてやってください」

僕が再度魔法を使って煙幕を張ると、彼らはびくりとして立ち止まった。

「僕が代わりに人質になると言ったでしょう。ね？」

にっこりと、無害をアピールするために微笑んで見たのだけれど、地底人たちはぎょっとした顔で後じさりするのだった。

いやいや、ちゃんと縛ってください。そして僕を地底人の町へと連れてってくださいよ。

楽しみだ。

17

人質になれば相手の町へと潜り込める――そんなふうに考えていた時代が僕にもありました。

「えぇ……」

僕はひとりで突っ立っていた。飛行船の残骸の前で。

せっかく【花魔法】で自分の腕を縛って無害アピールしたというのに地底人っぽい皆さんは僕を放置して去っていった。

「……無事か？　いや、聞くだけ無駄だぬ……魔法を使えることは聞いていたが、あれほどとは思わなかったぬ」

偵察チームのリーダーが戻ってきた。

「さっきの人たち、地底人ですか？」

「そうだぬ。ここ１０年は見かけることもなかったが」

「じゃあ、ちょっと様子をうかがってくるので先に竜人都市に戻っててもらっていいですかね」

「いや、それは難しいだろう。地底人は姿を隠すのが非常に上手く、その集落がどこにあるのかも知られていないのだ」

「あ、それは多分大丈夫です」

「多分大丈夫、とはどういう意味だぬ？」

「どこに逃げていったか、方角はわかっていますから」

「……」

僕は大真面目に言ったのだけれど、リーダーは「また強がりを言

って……」みたいな顔をした。

「……竜人都市に、ひとりで戻れるのか？」

「それも大丈夫です」

僕の頭の中にはかなり正確に、竜人都市までのマップができている。まあ、一度見たものを忘れない【森羅万象】のおかげなんだけど。

「わかった……地底人がここを押さえていた以上、長居は危険だぬ。君も、くれぐれも無理はしないように」

「はい。ご忠告、ありがとうございます。そう時間はかけないつもりなので、アーシャには安心するよう伝えておいていただけますか？」

「構わないぬ。ほんとうなら無理にでも連れて帰るのだが……君は竜人ではないからな」

そう言い残して、偵察チームは帰っていった。一度地底人に捕まった彼はぺこぺこと謝りながら。ぎりぎりまで襲撃に気づかなかったのは僕も同じなので、あんまり自分を責めないでほしいけど。

「さて、と……」

僕もまた、【疾走術】を使って走り出した。

★

「――全員集まったかァ？」

「へえ、兄貴。ひとりも欠けておりません」
「ちゃァんとばらけたんだろうな？　ここで後つけられてました、じゃ、てめェら全員ブチ殺されっぞ」
「わ、わかってますって。大体あのガキ、自分で縄掛けたかと思ったらボケッと突っ立ったままでしたもんよ」
「よし、そんなら行くぞ」

すでに日は暮れかかっており、焚き火の炎が周囲を照らし出している。喉の奥で笑うような鳴き声の鳥がいたけれど地底人たちは誰も気にした様子もない。
森の中に流れていた川があり、そこには腰掛けるのにちょうどいいサイズの岩がいくつもあった。
１０人ほどいる中でボスらしい男が言うと、全員が「おう」と言って立ち上がった。

（いよいよ、ここから町に帰るんだな）

僕は木の枝の上で彼らを観察していた。
地底人が僕を置いて逃げ出した――とは言っても、森はどんなに気をつけて走っても足元に痕跡を残してしまう。さらには負傷者もいるのだから、彼らの逃走ルートは簡単に追うことができた。

（それもまあ、【森羅万象】のおかげではあるんだけどね）

この天賦を通して地面を見れば、どこを人間が走っていったのかなんてすぐにわかるのだ。
地底人たちは川をさかのぼっていく。

（この方向は、まさにクルヴァーン聖王国の聖王都に近づいてるんだなぁ）

山をひとつ越えれば聖王都は目と鼻の先、という場所だった。
川を上がるに従って道は急になっていくが、地底人は身軽に岩から岩へと飛び移っていく。月が昇ると白く冷たい岩の上にもぞもぞとした集団が移動しているのがよく見える。僕には【夜目】もあるので抜かりない。

（ん……川から外れるのか）

そこで彼らは木々もまばらな山の斜面へと分け入っていく。そこから走って15分ほどで立ち止まった。

（なんだ？　ただの急な斜面だけど――）

と思っていると、ボスが落ち葉の積もる斜面に手を突っ込んだ。落ち葉を巻き上げて、斜面が開く――いや、そこにドアがあったのだ。
吸い込まれるようにひとりずつ入っていき、最後にボスが入るとドアは閉じられた。

（おお……かなり精巧なカムフラージュだ）

目を凝らすと落ち葉を編み込んだ細い細い糸が見える。ドアを開け閉めしても大丈夫なようにしてあるのだろう。

（よくもまあ、ここまで隠せるものだな）

僕が木から下りて近づこうとしたときだ。

――ンメェェェェエエ……。

遠吠えのような声が聞こえた。

（……これは、あのデカ山羊か？「森喰い山羊（フォレストイーター）」って言ったっけ）

気にはなるけれど、戦わなくて済むのならそっちのほうがいい。

僕は斜面のドアへと近づいた。ドアノブらしき部分はさらに何重にもカムフラージュされていたが、問題なく開くことができた。

すでに地底人の集団はいない。

中から漂ってくるのは、ただ土のニオイだった。

暗い通路が奥へと続いている――いや、かすかに、足元が光っているのはヒカリゴケみたいなものがあるからだろうか？

（行こう）

僕はドアを閉じると、暗い道へと足を踏み入れた。

道幅は狭いが空気は常に通っているようで涼しささえ感じられた。

土の通路はやがて、岩盤をくりぬいた道へと変わる。道は緩やかなカーブを描いており、だんだんと明るくなってきた。

長さにして１００メートルはある。

僕は――ついにその場所へと出た。

「わ……」

思わず小さな声が出た。

そこに広がっていたのは巨大な空間だったのだから――東京ドーム何個分、みたいな表現があるけれど、ここには東京ドームが１つくらいは余裕で入るだろう。

天井にはいくつもの巨大な明かりが取り付けられており、それらは魔術で動いているようだ。

くりぬかれた岩盤からは地下水か、あるいは川の水かはわからないが、流れ出ており天から降り注いでいる。

水を受け止めた壺からはパイプが分岐していて各家庭へと配分されてあった。

（おいおい、これ、竜人都市よりは小さいけど、人口は多いんじゃないか？　竜人が最大なのかと思ってたよ……）

土地が狭いからか、石材と漆喰のようなものを組み合わせて作られた集合住宅が建ち並んでいる。四角いだけでなく、六角形や円形など、個性ある形だ。通路も立体的で、3階から出ている歩道が2つの集合住宅を突き抜けてその先5階につながっていたりもする。

申し合わせたように屋上ではキノコの栽培が行われていた。

（マイカ茸じゃないか。「表の世界」じゃレフ魔導帝国での主食だったのに、ここじゃ地底人の主食になってるのか）

通路を歩いている地底人たちはやたら白い肌に赤い目が特徴的だった。ただ髪の色は様々で、髪型も、男性の長髪や女性のアフロなど個性豊かだった。

着ている服は特殊な蜘蛛の糸を加工したもののようで、染色ができないせいで全員同じベージュ色の服ながら、色とりどりの鉱石を縫い付けてオシャレとしていた。

（そう言えばお腹空いたな……おっ、なんだあれ）

ドームの壁面や天井に取り付けられたファンが一斉に回転し始めた。ブウウウウという振動音が空間に満ちると、それを合図に家々

から炊事の煙が立ち上る。火を使っていい時間が決まっているのだろう。空気を吸い込むファンと、外気を吐き出すファンとで役割が分かれているのだ。

レフ魔導帝国とは違った形だが、かなり特殊な文明の進歩をしている。

（ここからレフ人を探すのはかなり厄介だな……）

僕は身を隠す場所を探し、夜更けまで待つことにした。

17（後書き）

地底都市はロマン

18

夜になるとほとんどの明かりが一斉に消える。個々の家がわずかに光を灯していたけれどそれだけで、月も星も見えないこの都市では、ドームの天井から吊された数少ない明かりだけがかすかな光源となっていた。僕の【夜目】でも結構キツイので、もはや外を歩いている地底人はいなかった。

「ふー……ようやく夜か」

１０階はあろうかという高層建築の屋上で僕は寝転がっていた。キノコの養殖は行われていたが、このマイカ茸は手間が掛からないので見回りに来る人もいない。

この地下都市は確かに広かったけれど、レフ人がいるかもしれない場所の目星をつけることはできた。

１つ目は、僕を襲った迷彩服の集団が入っていった建物。

２つ目は、この夜でも武装した見張りの地底人が立っている建物が２箇所。

「とりあえず１つずつ当たっていこうかな」

僕は【疾走術】を駆使して音もなく走り、建物の縁でジャンプする。両手両足で隣の建物に着地するとこちらも音がほとんど鳴らない――【跳躍術】の天賦はジャンプだけでなく着地にまでいい影響が出るようだ。

見張りの地底人は空なんて見上げないので、あっという間に１つ目の建物にやってきた。

他の建物よりも広々と土地を使っており、地上３階までは――地

底にあるのに「地上」とはこれいかに――四角く、4階以上はその上に増築でもしたかのような円塔が3階層立っていた。
隣の建物との間隔は狭い。馬車のような乗り物はまったくなく、台車のようなものがあっても人が牽いていた。

「『国軍警邏班』……」

字体は古かったがなんとか読めた。あの人たち、やたらガラが悪かったけど軍人だったのか……。
入口は両開きの木戸で、錠前が掛けられてあった。外側から掛けるタイプのものだから中には誰もいない……ということか。いや、レフ人を閉じ込めているのならこれでもいいか。
僕は灰色熊のバーサーカー……じゃなかった、ミュール辺境伯からもらった短刀を抜いた。刀身にミスリルを使用したこの短刀は、刃がほんのり白く輝く。
錠前の金属は、1センチほどの太さはあるがただの鉄だ。僕はそこに切っ先を押し当て、

「フッ」

力を込め、鉄を断ち切った。
錠前を無力化し、それを近くの段差に隠すと僕は木戸を開いて中へ入った。

「……」

暗く、湿った空気が漂ってくる。
だけれどそこに、感じたくなかったあるニオイを嗅ぎ取った。

「……死臭だ」

隠しようのない、人が死んだときに発せられるニオイだ。
広い廊下の正面に上り階段があり、左右に廊下が続いている。木戸が閉じられると完全な暗闇に沈み、人のいる気配はまったくない。
僕は【光魔法】で光源を頭の上に置いた。【火魔法】と違って熱を持たないし、ぶつかっても燃えたりしないのが便利だ。
行かなければいけない場所は、わかっている。
僕はニオイをたどって廊下を右へと進み、大部屋らしき場所へとやってきた。
引き戸を開くと――ムッとするような、吐き気を催すニオイが立ちこめる。

「これは……」

そこは確かに大部屋だった。しかし机も椅子もなにもなく、ただ広いだけの部屋だ。
むしろのようなものが敷かれ、僕も見覚えのあるレフ魔導帝国の軍服が目に飛び込んできた。
寝かされている死体は４５体。そのすべてがレフ人だった。

遺体の収容所、みたいなものはないんだろうな。だからとりあえず、あれを見つけてきた警邏班の建物に遺体を置いておいた……ということかもしれない。
僕は建物から外に出ると、新鮮――ではないけれど、いくぶんマシな空気を吸い込んだ。
死体の腐敗が進んでいたけれど、刃で斬られたような痕も、矢の刺さった痕もないと【森羅万象】は言うので、全員が墜落による死亡のようだった。

ホッとしたのは、地底人がレフ人を殺したのではなかったということ。

「……いきなり矢を撃ってくるような人たちだしな」

地底人が死体を運んだのはなぜだろうか？　僕には1つだけ「理由」に心当たりがある――食べるため、とかじゃないよ、もちろん。

僕はその「理由」が正しいのかどうかを確認するべく、次の建物へと向かった。

それは見張りの立っている建物で、豪華なものと質素なものとの2箇所があり、豪華なほうはお偉いさんがいるのかなと推測されるので質素なほうへと向かった。

「入口は1階に1箇所だけか。裏口という発想がなさそうだな……そもそも表通りも裏通りもないからか？」

近くに、静まり返った町で唯一と言っていいほど煌々とした明かりを灯している数軒の飲み屋があり、そこは都市の中の繁華街のようだ。僕が今から入ろうとしている建物まで喧噪が聞こえてくる。

「あ～あ、毎晩毎晩こうもうるさくっちゃァ、かなわねェよ」

「ほんとだよなァ。俺らも飲みに行きてェが、夜勤明けじゃ店も終わってンしよォ……」

「なんで『消灯後』にしか酒飲んじゃいけねーンだ？」

「知るか、ボケ」

見張りが話しているのが聞こえる……どうやらあの警邏班が格別ガラが悪いのかと思ったけれど、見張りもたいがいだった。

「……どうしようかな。窓から入るか、それとも上から……」

僕は建物を見上げる。5階建てであり、ここも屋上でマイカ茸を栽培していた。

「……上からだな」

遠回りにはなるが、他の建物を伝って屋上より上の高さまでやってくる。そして見張りのない屋上から侵入すれば――。

「！」

ジャンプする直前、気がついた。

屋上は確かにマイカ茸の栽培スペースしかないのだけれど、あちこちにロープが張り巡らせてある。引っかければ金属片にぶつかって大きな音が鳴るトラップ――「鳥威し（とりおど）」だ。「鳴子（なるこ）」ともいう。

「なるほど。上はトラップで侵入防止というわけか――よっ、と」

僕は改めて走り、跳んだ。

タネが割れてしまえば、ロープを避けるだけで問題はない。音もなく着地すると、屋上から5階へ入る入口へ向かう。もちろん細心の注意を払ってロープをまたいでいく。

入口扉は鉄扉だった。しかしカギの構造は単純で、内側に掛け金がついているだけだったからここでまた短刀の出番である。掛け金を断ち切ると、キィと蝶番が音を立てて扉が開く。

「……ここにいる、はず」

木戸を後ろ手に閉じる。呼吸を整えて暗闇に目を凝らす。

ここがなんの建物かは確認できなかったけど……多くの人間がい

る気配はある。
食べ物のニオイがするからね。それに、汗のようなニオイも。
階段を降りていく。５階に入ってすぐ、わかった。
並んでいるのは鉄扉の部屋だった。どれも同じ間取りで、扉の下部に、高さ１０センチ、横幅３０センチほどの小窓がついている。
扉の前に置かれてあったのは使用済みの食器――。

「……ここみたいだな」

この建物は、まるごとひとつ牢獄なのだ。
どこの部屋からだろう、高いびきが聞こえてきた。

18（後書き）

４章にはいってようやく緊張感が出てきました。
是非この作品への「ブックマーク」と「評価」をお願いいたします。
作者にとって書き続けるモチベーションになりますので！
「評価」はこのページの下部から★をつけることでできます。

19

「……中の人、起きていますか？　レフ人ですか？」
「！」

最初の扉に声を掛けると、運良く起きていたらしい人が近づいてきた。
食事を出し入れするための隙間からのぞき込んでみると、汚れたコンバットスーツと軍服のズボンが近づいてきた。

「君は？」
「レフ魔導帝国で活動していた冒険者です。そちらは？」
「私は帝国空軍第４飛行部隊の曹長だ」

最初から階級持ちの人とはツイてる。

「僕も空に吸い込まれたひとりですが、なんとか生き延び、他の生き残りを探しているところです」
「ここはどこなのだ？」
「……もうひとつの別世界、いわゆる『裏の世界』と呼ばれている場所です」
「なんだそれは」
「残念ですが説明している時間がありません。皆さんの状況を教えていただけますか？」
「……君は私たちを救う力があると？」
「可能性は提示できます」
「わかった」

この曹長は頭の切れる人なのだろう、すぐに決断して話してくれた。

生き残りは１３人、死者は４５人――その死者の数字は僕が見た死体の数と一致する。

飛行船は問題なく動いていたが、天を衝くほどの巨大な山羊ににらまれ、墜落させられたのだという。

フォレストイーターだ。

その後、墜落の衝撃で多くのレフ人が死に、生き残った者で救助作業に当たっていたところ地底人に囲まれたらしい。

「……連中は、抵抗すれば容赦なく攻撃を加えると言ったのだ。我らには多くの『魔導武装（マジックギア）』があり、十分戦えるはずだったが……副船長が命惜しさに降参すると言い出してな」

「副船長？」

「船長は墜落で亡くなったのだ。そして副船長が指揮を執っていたが……これが出来の悪いバカ者で、コネだけで入隊したのだ」

「ああ……」

レフ魔導帝国は小さな国だから、父親がお偉いさんとかだとコネ入隊なんてのも往々にしてあるんだろうな……。

「だが、敵にも明らかに強者がいた。ゆえに我らも戦っていたら死者は出ていただろう……」

「強者ですか」

「問題はその強者に、魔導武装が渡ってしまったということだ。脱走するにも、ヤツに見つかればただでは済まん」

「……その人物の特徴は？」

「紫の髪を後ろで縛った若い女だ。長いキセルのようなタバコを喫（の）んでおったが、目が、死んでおった。あれは何人も殺しすぎて、感覚の麻痺した目よ」

「わかりました。気をつけます。それで、ここには全員が？」
「おそらく１２人全員がいる」
「１２人？　さっき生き残りは１３人と……」
「……副船長は真っ先に命乞いをし、敵に媚びを売ってな。今は独房ではない場所で敵に取り入っておる」
「……」

ぎりぎりぎり、という歯ぎしりが聞こえてくる。めちゃくちゃ怒ってる。その気持ちはよくわかるけど……。

「皆さん、待遇は問題ないですか？　今すぐの脱出は難しいので、できれば準備して明日がいいのですが……もしもキツイようでしたら今日中にしたほうがいいと思います」
「飯は不味いが、マイカ茸なので耐えられる」
「……そ、そうですか」

僕にとって「飯は不味いけど白飯だから許す」みたいなものだろうか。

僕は自分のやってきた痕跡を思い返す。

警邏隊の入口のカギを破壊した。この建物の屋上の掛け金を破壊した。

前者はカギを回収してどこかに隠せば紛失したと思わせられるだろう。それ以外の痕跡は残していないし。

後者は細工して経年劣化した感じにすればなんとかなる。

「明日の晩にまた来ます」
「ああ……できれば副船長を見つけたらぶん殴っておいてくれないか。いや、見つけたら私がこの手でやりたいが」

いや、そんなことやったら僕がバレるから。

「！」

そのとき僕の鼻はタバコのニオイを嗅ぎ取った。
カツン、カツン、と階段を上る足音が聞こえる。

「……行け」

曹長も足音を聞いたのか、そう言った。

「はい」

僕は【疾走術】で足音を殺して階段へと戻る。このまま上がればすぐに屋上だ――けれど、魔が差した。上がってくるのが誰なのか、確認しておこうと思ったのだ。
もしも曹長の言う「強者」とやらがいるのなら、【森羅万象】で見ておいて損はない。
踊り場で息を潜める。
ここに明かりはないので、僕の身体は完全に闇と同化している。
【夜目】があっても見えるかどうかは怪しいほどの暗さだ。
足音が近づいてくる。
下に続く階段に、ポゥと明かりが差した。
その明かりは一定の光度を保っている――魔導ランプだ。
足音が近づいてくる。
ゆらりと紫煙が現れる。
すると――フードをかぶった地底人が階段に現れ、口元にくわえているのか長いキセルが伸びていた。

「……」

立ち止まった。
ジジ……とキセルの火が赤く光り、次に音もなく空気が吐かれる。
鼻から吐いたようだ。
一服のために立ち止まったのか……？
その地底人は残り2段を上りきると、独房の並ぶ廊下へと向かう。

「！」

いきなりこちらを振り返った。

「……」

危なかった。
油断して、顔を見てやろうと首を伸ばすところだった。
僕はできる限り最速で首を引っ込めた。身を守ろうとするカメよりも速かったと思う。
沈黙が降りる。
僕の鼻にタバコのニオイが届く。

（これは……）

すると足音が遠ざかっていくのが聞こえた。どうやら通路へと入っていったらしい。
なにが目的でこんな夜に独房へ向かったのか確認するべきだろうか？

（答えはノーだ）

まさか、殺すわけではあるまいと思う。念のため身を潜めていたけれど、静かなもので、ただ廊下を歩いているだけのようだった――

―その動きはまるで夢遊病者のそれだった。
僕はこっそりと屋上へと戻り、掛け金をぐちゃぐちゃにひしゃげさせてから外へと出た。
曹長があの地底人を「強者」だと言った理由がわかった気がした。なにかしらの天賦珠玉を与えられているはずだ。僕を狙撃してきた地底人も魔法を使っていたし、竜人都市と違ってここにはそれなりの数の天賦珠玉があると見て間違いない。
中でも、今の地底人は……おそらく曹長の言った「強者」である彼女は、星の数が多い天賦珠玉を持っている。
5つ、あるいは6つなんていう、特別なものを。

（あのタバコのニオイ……）

【森羅万象】によれば、あのタバコは――強烈な鎮痛作用を持つ。
僕が思い出したのは【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】を使ったときの痛みや苦しみ――それを和らげるためのタバコなのではないか、と思ったのだ。

20（前書き）

書き下ろし小説「今宵はジビエを召し上がれ」は双葉文庫より絶賛発売中です。

函館を舞台にした、ジビエ料理を主軸に据えたライトミステリです。

かわいいワンコも出てくるよ（重要）。

よろしければぜひ～。

20

★　地底都市ウルメ総本家　★

レイジが見つけた、見張りがある建物のもうひとつは、この地底都市で最大規模を誇る大きさだった。

とはいえ見た目としての荘厳さがあるのかというとそうではなく、八角形の土台にベースとなる5階建てがあり、そこにはてんでバラバラな建物が積み木のように載せられてあった。

その中枢にあるのがウルメ総本家の居住地だった。

地底都市のルールを決めるのが10人により構成される「都市評議会」であり、評議会長を代々務める家柄がウルメ家だと言えば、この都市での重要度がわかるだろう。

屋外は消灯している時間帯だというのに、この宅内は煌々とした明かりが灯っていた。複雑にカットされたガラスが、魔導ランプの明かりをきらびやかに反射する。室内はその光に負けず劣らず豪奢であったが、家具のデザインやカラーリングはあまりにちぐはぐだった。

たとえばシックなアーガイル模様の絨毯があると思えば、エスニック調の飾り棚があり、その横には鋼鉄製のテーブルが置かれてある。

なぜかと言えば――これらは先祖代々伝わるもので、戦乱時に奪い取ってきたものばかりだからだ。

「警邏隊がやられたって聞いたけど、アンタの報告には書いてなかったわよねえ」

部屋の主にして、ウルメ総本家の現当主サルメが言った。
質素な服を来ている都市住民とは違って、着せ替え人形でもなかなか見ないようなフリフリのワンピースに、両手にはメリケンサックになりそうなほどの宝石をつけたリングがずらり。
問題はその体格で、彼女が手にしている葡萄酒入りのゴブレットは本来なら1リットルが入るジョッキサイズなのに、まるで瓶ビールにつけあわせて出てくるコップに見えるほど――彼女の手、だけでなく、身体は大きい。
クッションを張った鋼鉄製のイス――左右に3人ずつがついて運ぶような代物だ――が、彼女がみじろぎするたびに悲鳴を上げるほどだった。
長い金髪はウェーブが掛かっているが、長年の暴食が祟ってか艶はなく、最近の悩みは薄くなってきた頭頂部というのが地底都市の評議長にして、ウルメ総本家の当主サルメなのだ。

「申し訳ありません。サルメ様のお耳に入れるほどのものではないかと思いまして」

がっちりした体躯と身のこなしは、どう見ても軍人である男が身体を折って頭を下げる。オールバックにした灰色髪から、一筋、はらりと目元に毛が垂れる。
その態度は礼儀正しくは見えるが、どこか慇懃無礼にも感じられる。

「アタシが知るべきかどうかはアタシが決めンのよォ！」

吹き出物によって凸凹になった頬を震わせてサルメが吠えると、身体を起こした男はじっと瞑目しつつ不満を受け止める。彫りの深い目元には地底人の特徴である赤い目があるが、目尻にはうっすら

シワがある。年の頃は４０に差し掛かったというところだろうか。
ヘビのような目でぎょろぎょろとにらみつけたサルメは、ゴブレットから酒を飲んだ。地底に生き、安全性は高いものの当然のことながらブドウの栽培などはできない地底人にとって、数少ない都市外のブドウ農園でできる酒は貴重品だ。しかしウルメ総本家では、その貴重品も湯水のごとく消費される。

「はっ。申し訳ありません。以降、ご報告する情報レベルを変更したいと存じます」
「元帥ィ……アタシが言いたいのはそういうことじゃないのよォ」

どう考えても「もっと情報を寄越せ」という話の筋だったはずだが、サルメがそう言うのだから、

「はっ。申し訳ありません」

と答えるしかない。たとえ男が、軍を統括する最高責任者の「元帥」であったとしても、地底都市の上意下達は徹底している。この目の前の女がヒエラルキーのトップであり、この女がそうだと言えば「はい」か「わかりました」か「すばらしい」しか言ってはいけないのだ。
黒いカラスがこの地底都市では白くなるなど日常茶飯事で、生まれてこの方軍事について学んだことなどないこの女が、軍の編成について口を出してきたことはこれまでに２１回あり、そのうち６回は大幅な組織変更だった。
元帥が、今に至るまで元帥でいられたのは、父が１０人しかいない評議会員の１人だからだ。だがそれもサルメの意に染まぬことがあればどうなるかわからない――それほどまでにウルメ総本家の意向は絶対だった。

「その腐った耳くそが詰まった耳をかっぽじってよォく聞きなさい。アタシが言いたいのはねェ……あの飛行船とやらを押収しようと言い出したバカのことよ。それさえなければ飛行船の再調査なんて必要なかったし、アンタが派遣した警邏隊が負けることもなかった。そうでしょ？」

「……」

「そうなのかッて聞いてンのよォ！」

ゴブレットがすさまじい勢いで飛んできて、元帥の左耳をかすめて背後の壁に激突した。ぶちまけられた葡萄酒は彼の軍服を汚した。

「……はっ、その通りでございます」

「それじゃァ、後はどう動けばいいかわかるわねェ？」

「はっ」

「それじゃ行きなさい。アンタを元帥にしてンのはこういうときにちゃっちゃと動かすためなンだから」

うー、よっこいせ、という声とともにサルメがイスから立ち上がると、どこからともなく4人の見目麗しい地底人が出てきて、

「サルメちゃん、もうお仕事終わりィ？」

「あっちでいいことしよーよ」

「俺さァ、ちょっと小遣い欲しいンだけど……」

「おいお前、そればっかじゃねーか」

にたにたしているサルメを囲みながら隣室へと消えていく。

「……」

元帥はポケットからハンカチを出すと軍服を拭いて、部屋を出た。

廊下に待機していたメイドたちが入れ替わりで入っていくと室内の掃除に掛かる――元帥に声を掛ける者も、その汚れた服に気がつく者もいない。いや、気がついているのに無視しているのだ。

（汚れたのは服ではなく、誇りだ）

元帥はため息すら出なかった。

警邏隊が負けたという事実を、あまりにもサルメは軽視している。いや、むしろ重要視されたくなかったから隠しておいたのだし、それをサルメに密告した何者かがいることも腹立たしいのだが、それはさておいても――警邏隊が負けたというのは由々しき事態である。

地底人にとってこの都市は外敵から守ってくれる秘密基地である一方、この場所がバレたら死活問題だ。なんせ、逃げ道は限られているのだから。

（だからこそ警邏隊には手練れを多く所属させている……）

この都市の安寧がそうさせるのか、怠け者が多く、やさぐれた半端者が人口の多数を占める地底人だったが、中でも自分の部下には選りすぐりの手練れを選んできたという自負が元帥にはある。

それが、負けたのだ。

話を聞けば、戦った相手はたったひとりらしい。

（そこまでサルメは知っているはずだ。だというのに、軍のてこ入れではなく、この敗北を政治に利用しようとしている）

サルメが元帥に命じたことは簡単で、「警邏隊を差し向けることを提案した評議会員を攻撃しろ」ということだ。

評議会は１０人いるが、ウルメ総本家派閥とそれ以外の派閥は拮抗している。それ以外が、一枚岩ではないのでウルメ総本家が非常

に強い権力を持ってはいるのだが、かといって独走は許されない状況になっている。
今回のことで、少しでも敵対派閥を削れればいいと、そうサルメは考えているのだ。

（戦乱から遠ざかった数十年で、これほどまでに内向きとなったのか……。竜人族の飛行船とやらはいい刺激になったと思ったのだが）

地底都市に漂う、異常なまでに強い「現状維持（このままでいいじゃん）バイアス」。
だが元帥は、どうしてもこのままでいいとは思えなかった。
だから多くの試行錯誤を繰り返している――サルメの妨害に遭いながら。

「おかえりなさい、元帥――ってどうしたんスか、その服！」
「あーあー、またあのオークがヒステリー起こしたんスね？」
「止めろ。どこにオークの密偵が潜んでるかわかんねーぞ」
「お前もオーク言ってんじゃねーか」

オーク、とはもちろんサルメのことだ。
軍の総本部には夜遅くまで部下が残っていて、仕事をこなしている。老若男女問わず、意欲と実力のある者を採用してきた元帥は、ここに来るとホッとする。

「――それで、今日の報告をしてくれ。ダークエルフとの戦線はどうなった？」

元帥が報告を促すと、ひとりの女軍人がうなずいた。

「はい。連中はやはり天賦珠玉が出てくる場所を押さえているようです。正面衝突は必至かと」

「そうか……」

元帥は歯噛みする。

彼が繰り返した「試行錯誤」の末、これぞと思ったものが――天賦珠玉だった。

ダンジョンからしか見つからないと言われていた天賦珠玉を、大量に発見したのだ。

だがそこにダークエルフが現れ、散発的な小競り合いが起きている。

このことはまだサルメは知らない。

21

★　地底都市国軍本部　★

元帥がテーブルに広げられた地図を見やると、そこには詳細な周辺地図が広がっていた。レイジが見れば、「クルヴァーン聖王国、光天騎士王国、レフ魔導帝国まで含んだ地図だ」と驚いたことだろう――それほどまでに精密だった。

地底人の特技として、太陽に当たらず地底に住み続けても問題ない体質もさることながら、直感的に地形を把握し、大地の特性を理解できる「感覚」もあった。

彼らは、大型モンスターによって刻々と変化させられる地形を把握し、それを種族の存続へと生かしていた。

「ダークエルフとの戦闘は昨日3回、本日は1回っす」
「うまく回避できているのだな」
「うす。出会い頭の事故のような戦闘は確実に減ってますね」
「よし」

ダークエルフとの戦いでは地底人が劣勢を強いられている――それほどまでに彼らは強かったからだ。

そのため地底人は地の利を生かし、なるべく戦わず、戦わざるを得ないときには奇襲を駆使した。

現状のところは一進一退の攻防と言えるだろう。

「お前の考えた作戦が的を射ているということだな、参謀殿？」

「そ、そんな、参謀殿なんて恥ずかしいっすわ～」

頭をかきながら手をぶんぶんと振ったのは「参謀」職に就いている若い女軍人だった。

彼女は毎夜毎夜酒場でオッサンを相手に謎かけをして「解けたら一発ヤラせてやる、解けなかったら一杯おごれ」と吹っかけ、処女を貫きながら酒をカッ食らっていたという女傑だ。

ウワサを聞きつけた元帥が彼女を直接スカウトしたのだ。

「さ、お次の報告は俺だよなあ？」

短い髪の毛をソフトモヒカンにしている３０代半ばという男が言った。

元帥とはいちばん付き合いの長い、百人の兵を預かる「百人長」だ。

「今日発見した天賦珠玉は、なんと、８個だぜ！」

「おお！」

百人長が布袋を広げると、そこには８個の天賦珠玉があった。

【心肺機能強化★】
【笛術★★】
【手先が器用★】
【雷魔法★★】
【握力強化★】
【握力強化★】
【皮革加工★★】
【嗅覚強化★】

なんとも言えないラインナップではあったが、

「すばらしい。魔法もあるではないか」

「かぶっちまってるのもありますけどねえ」

「いやいや、十分だ。お前たちが命を懸けて取ってきたこの天賦珠玉は有意義に使わねばな……」

残念なような、それでもやれることはやったと照れている百人長を励ましながらも元帥は、これらの天賦珠玉を誰に渡すかについて思いを巡らせている。

この百人長は元帥が軍で働き出して最初にできた部下だった。信頼度においてはここにいる中でもピカイチだろう。

「あの星６つの天賦珠玉、アレをサルメに取られたのが痛かったよなあ……」

百人長がぼやくように言った。

「ああ――最初にお前が発見した天賦珠玉か」

「おかげでスーちゃんがぶっ壊れちまったし……あのオークは余計なことしかしねえ」

スーちゃん、と言うのはサルメの遠縁に当たる軍属の少女だった。スーメリアという。

剣の腕が抜群で、将来的には百人長は間違いないと目されていたが、いかんせん性格がサルメとは徹底的に合わなかった。

一切おべっかを使わず、「サルメのおばさん、ちゃんと痩せなきゃダメだよ。長生きできないよ？」なんて言ったものだからその後１０日間はサルメの機嫌は直らず、葡萄酒の在庫が急速に減った。

「アレは……確か、【狂乱王剣舞（インセインブレイド）★★★★★★】と言ったか」
「ああ、そうそう、そんな名前でしたよねえ……。スーちゃんはアレで人が変わっちまった」
「……ひょっとしたらサルメは、知っていたのかもしれない。星の多い天賦珠玉は、人の手に余る力は、人を狂わせると……」

予感でしかなかったが、元帥にはそう思えてならなかった。
天賦珠玉は、つい最近になって多く見つけることができるようになったものの、それまでは貴重品だった。サルメは「【美肌】【美髪】という天賦珠玉を探してきなさいよォ！」と怒鳴り散らしていたくらいだ。
それが――百人長の発見した星６つの天賦珠玉。
まとまって発見できる場所を見つけたきっかけにもなったのだが、百人長の口の軽い部下が秘密を漏らして【狂乱王剣舞】の存在はサルメの知ることとなった。
貴重品、なおかつ星６つという代物だったのに、サルメはすぐさまスーメリアに与えてしまったのだ。

「確かにそうかもしんねえっすね。スーちゃん……ダークエルフを殺すのもためらいなくなっちまったし、模擬戦でも何人も殺しかけたけど表情ひとつ変えなくなっちまったもんな……」
「ああ。だが終わったことを嘆いていても仕方はない。スーメリアを救う手立てはあるかもしれない。天賦珠玉を抜き出すような天賦もあるというじゃないか」

天賦に関する知識は、地底都市にも伝わっているが、貴重品になってからが長く断片的な知識しかなかった。【オーブ破壊】、【オーブ着脱】のようなスキルについてはどのようなものなのか、ほとんど知られていない。

「我らにできることは、ダークエルフの目をかいくぐり、天賦珠玉をかき集めることだ。ひとつでも多く」

ぐっ、と元帥が拳を握りしめる――と。

「……元帥。でもこんなの、いつかはあのオークにバレるっすよ」

ひとりがぽつりと言った。

彼は警邏隊のルートを設計するチームのメンバーで、実質的な業務をすべてひとりでこなしている――警邏隊の中では「なにをするにもネガティブで、陰気な野郎」と思われていたが、そのうちに秘めたる熱い思いに気づいた元帥は、仲間内に引き込んだ。

ゆくゆくは警邏隊だけでなく国軍全体の行軍設計を任せたいと思っている――「設計士」である。

そんな彼は、根が悲観的なのは変わっていない。しかしそれは徹底的な現実主義に裏打ちされた悲観である。

設計士の彼の言葉を元帥は否定せず、むしろ噛みしめるようにうなずく。

「そのとおりだ。我ら軍属とて一枚岩ではないし、突然身体能力の上がった者が現れればいぶかしむ者も出るだろう。そして、サルメへ密告する者が現れる」

「では、どうするつもりっすか？」

「……まずは我らが強くならねばならん。いつ何時、天賦珠玉の独占が明るみに出てサルメが我らを糾弾しようとも、それを跳ね返すだけの武力があればいい」

「まさか――」

元帥は眉ひとつ動かさずに言った。

「戦力が十分になれば、サルメを追い落とし、我らが地底都市をコントロールする」

静かな言葉だった。しかし力強い――クーデター宣言だった。

聞いた3人は黙っていた。張り詰めた空気を感じ、興奮していたのか、あるいは恐れを抱いていたのか。

「……そう、固くなるな。明日や明後日のことではない」

「でも、元帥は僕らに明かしてくれたんすね」

設計士が鼻をすする。その目には涙が浮かんでいた。

「僕らを信じてくれて……うれしいっす」

「それはそうだ。いくら評議会員の父を持つ私とは言え、サルメの前では無力に等しい。私の武器はお前たちだ」

「元帥ぃー！」

「おいおい、泣かせること言うんじゃねえよお」

「うぅぅ」

集まって泣き出す部下に、元帥は困りながらも笑顔を浮かべた。

彼らとならば、この一大事も成るだろうとそう思ったのだ。

「さあ、さあ、まだ報告会は終わっていないぞ。次は竜人族の飛行船についてだ。竜人族を裏切った、副船長とやらの情報を教えてくれ――」

しかし元帥は気づいていなかった。

涙を浮かべた部下の中にひとり、内心でほくそ笑んでいる者がいることを。

22

僕は翌日1日掛けて、脱出のための準備を整えた。
食料が心許なかったので、痩せた森で食べられる木の実を集めていると、見知らぬモンスターをまたいくつも見かけた。

（もしかしたら「表の世界」にもいるのかもしれないよな）

緑色の甲殻を持った軍隊アリは僕の身体よりも大きい。
腕が4本あるテナガザルはすさまじい速度で木から木へと飛び移り、結局攻撃をしてくるでもなく僕を警戒しつつ遠ざかっていく。
【森羅万象】があるおかげで擬態を見破ることができた人食いキノコは毒性が高いので触らずに見送る。

（生態が全然違う）

日中は地底都市の周囲を確認し、「表の世界」では聖王都がある方角も一応見ておいた。
そこは――一面の荒れ地だった。
草すら生えない、土壌が露出した荒れ地には身を隠す場所がほとんどなく、毒の沼地が点在していた。

（このことをお嬢様に言っても、信じてもらえないだろうなあ）

僕は一通りの調査をしつつ、必要な物資も集めると地底都市へと戻った。
この都市は外界への出入りがほとんどないらしく、また地底都市が「絶対に見つからない」という自信でもあるのか見張りもないの

で、侵入がバレる心配もない。
ここで問題が1つ。
レフ人たちを逃がすための準備はおさおさ怠りなく完了した。あとはみんなの寝静まる頃合いを見計らって脱出作戦を決行するだけだ。
では問題とはなにかと言えば――副船長とやらが何者なのか、だ。捕まっていた曹長の話ではとんでもないクズ野郎みたいだけど。
僕はこの目で確認しておきたかった。だから、消灯前に戻り遠目で副船長が出てこないかを確認しようと思った。
わざと悪人の皮を被って仲間を助けるような好漢かもしれないじゃないか。
すると――いた。
消灯まであと30分というところで、地底人の軍人3人に囲まれるようにして外をぶらついているレフ人が。

「いっひっひっひ。いや、申し訳ありませんねえ！　こうして私めもお酒をいただけるなんて！」
「飛行船の技術を調べるのに、お前が必要なのは間違いねえからな。他の竜人は口が固くていけねえよ」
「あー！　アイツらは、もうね、堅物なんですよ、堅物！　頬でも2、3発張ってやればいいですよ！」
「お前は……いや、まあいいわ。お前がしゃべってくれんならそれでいい」
「いっひっひっひ！　楽しみだなあ、ここのお酒……」

わざと悪人の皮を被って仲間を助けるような……好漢……かも……しれない……よね？　可能性はゼロじゃないよね？
消灯時間になって僕は副船長含む4人が入っていった居酒屋へと向かう。炊事の時間が終わっているからだろう、煙突から煙は出ておらず、余熱で温めた食事を提供しているようだ。

「――わっはっは！　飲めや飲めや！」
「――おいおい姉ちゃんよお、こっちでいっしょに飲めや！」
「――てめえ、肩が当たったぞボケェ！」

……やたらハイテンション、というかガラの悪い声が聞こえてくるな。

僕はマイカ茸を栽培している屋上から屋根裏へ続くフタ扉を開いた。ハシゴを伝って下りると、床板の隙間からフロアの様子がよく見える。

さほど広くない店内に、所狭しとテーブルとイスが並べられている。酔っ払った地底人は見事なまでに肌が真っ赤になっていた。

剣呑な場の空気に気圧されたのか、副船長は縮こまるようにしながらも、それでもジョッキに注がれたお酒――おそらくエールらしきものを美味そうに飲んでいた。

「おう、副船長さんよ。お前、まァだ自分が『レフ魔導帝国』の出身だなんて言うのかィ？」

横に座った３０代半ばくらいの男が、腕を伸ばして副船長の肩を抱く。

「は、はあ……そのとおりでして」
「俺たちゃよォ、誰もそんな国のことなんざ知らねェンだ。まさか――俺のことナメくさってンじゃァねェだろうな？」
「ブホッ、そそそんな！」

エールを噴き出しながら副船長が首を横に振っているが、男の太い腕が副船長を拘束して離さない。

「他の搭乗員も私めと同じことを言ってますでしょ！？」
「そォなんだよ……そこが怪しい」
「へ！？」
「口裏合わせてンじゃね？」
「そんなことありませんよ！　勘弁してくださいよ、百人長様」

百人長……って確か、部下が１００人いる階級の人か。あのガラの悪い人――いやまあここにいる大半の地底人はガラが悪いんだけど――は結構な上官だ。

確かに、いっしょに来ている部下らしき2名は油断なく副船長が脱走しないよう確認してるもんな。

「だがなァ、証拠がねェ」
「証拠……証拠ですか」

副船長は暗い目で笑った。

「ではこうしたらどうでしょう？　搭乗員のうち1人を拷問に掛けてください。そうしたらウソか誠かわかるでしょう？」
「……おィ、お前なかなかおっかねェこと言うな？」
「ですがそうでもしなきゃ、私めの潔白は証明できませんからね。誰でもいいですよ。私めのことをバカにしていた連中ですからねえ……」

いや、いやいやいや、ダメでしょこの人！
なに簡単に仲間を売っちゃってるんだよ！
曹長だってあなたのことを嫌いながらも「ぶん殴る」くらいしか言わなかったのに――あなたは「拷問してもいい」だって？

（……この人は、ダメだ。寝返ったフリじゃない。仮に地底人がそ

の言葉を鵜呑みにしたら、ほんとうに誰か捕虜を拷問に掛けるかもしれないじゃないか。そうしたら傷が元で死ぬことだって十分あり得る）

僕はここで「ぶん殴る」どころか魔法をぶっ放したい欲求に駆られたけれど、ぐっとこらえた。

（それなら、こっちはこっちで12人の脱出計画を実行するだけだ。もう行こう）

これ以上ここにいたら、聞きたくないことまでいっぱい聞くことになりそうだ。

去ろうとした僕の耳に、百人長の言葉が聞こえた。

「お前さァ、自分が助かろうとしてるのはわかるし、こっちとしてはすっげェありがたいンだがなァ……いかんせん飛行船とやらの知識、足りねェンだよな。それじゃあ、あの方への手土産とするにゃァしょぼいンだよ」

副船長は首を縮めて恐縮していた。

「……やれやれ」

僕は、ハシゴを伝って屋上へと出た。

ほんとにもう、作戦を始める前からどっと疲れた気分だわ。

あの副船長がたったひとりここに残ってどういう扱いになるかはわからないけど、そこまで気にかける必要はない。

さあ、作戦実行だ。

22（後書き）

コミカライズ版「学園騎士のレベルアップ！」の第1巻が8月31日に発売されます～！　やったね。
内容が気になる方はこのページ下部にリンクがありますのでＷｅｂコミックでご覧いただけますよ。

23

体内時間では夜の0時を過ぎたころ、僕は行動を開始した。

レフ人たちの収監された独房がある建物の屋上にいる。さすがの居酒屋も店じまいのようで地底都市には静謐な空気が漂っていた。ここが地底人によって掘られる前の、山の内部に元々あった静寂を取り戻したかのように。

すでに独房に収監された12人全員に声を掛け、これから起きることの説明を終えていた。曹長が賛同したというのが大きく響き、僕を信用してくれたようだ。

（でも、問題が1つある）

逃走ルートを考えると、どうしても軍の建物の横を通らなければならない。そこには夜通し明かりがついており、12人もぞろぞろと連れて歩けば見つかる可能性が非常に高いのだ。

だから、僕は解決策を用意した。

（さあ、作戦開始ののろしを上げるぞ）

僕は巨大なドームの彼方をにらむ。僕が入ってきた出入り口の正反対に位置するそこには――巨大な倉庫があり、マイカ茸が大量に備蓄されていた。

マイカ茸は各建物の屋上で生産されていることからもわかるとおり、希少価値はない。だから倉庫の出入りは誰にでもでき、見張りもいない。

ただ問題はその隣に酒の貯蔵庫があったことだ。そちらは、マイカ茸がかわいそうになるほどしっかりと警備されていて、見張りこ

そないものの巨大な鉄扉は厳重にカギがかけられてあった。

（距離は２６０メートル。風はなし……ま、地下だから当然だ）

僕は右手に【火魔法】でバスケットボールほどの火球を生じさせる。直視するのもまばゆいほどの光が放たれ――即座に、マイカ茸倉庫へと右手を向けた。

（小さくなれ、小さくなれ、小さくなれ……）

火球はしゅるしゅると小さくなるが、その熱量はぐんと増す。

レフ魔導帝国の「畏怖の迷宮」で、ノンさんを人質に取られ、レオンを攻撃できなかったとき――僕は「精密射撃」のような魔法が使えたらと思った。

あれから試行錯誤を繰り返し、「精密」にはほど遠いものの、それでも【火魔法】の「長距離化」と「縮小」を実現することに成功したのだ。

火球は今や、ピンポン球ほどの大きさになった。

ぎゅるるるるとそれを回転させる。

「行け」

エヴァお嬢様から学んだ【魔力操作★★★★】は、僕の中でしっかりとその能力が息づいている。

これは体内の魔力を操作する、つまり魔法に込める魔力量を調整するための天賦なのだけれど、発動した魔法をコントロールすることにも使えると僕は気づいた。

射出された火球は僕の考え通り、ほぼ直線に――縮めて見ると螺旋を描いてマイカ茸の倉庫に飛来する。

そこには、僕が運び込んでおいた物資――可燃性の高い木材と枯

れ草とが積まれてあった。

カッ――。

真昼のような明るさが地底都市内を照らし出す――直後に、轟音が響き渡る。

その直後は轟音がウソであったかのように、静かに、炎が舐めるように倉庫を燃やしていく。だがしばらくすると家々に明かりが点いた。人々が起き出し、特に倉庫付近に住んでいる地底人は寝間着姿で通りに出てくると大声で騒いだ。

火事か、あるいは非常事態を告げる鐘が鳴り響く。

僕は、軍の建物から夜番らしい地底人兵士がぞろぞろと出て行くのを見て、ほくそ笑んだ。

（狙い通り！）

屋上から建物内に入っていく。まずは曹長の独房だ。

「――曹長、起きてください」

「起きている。今の騒ぎは君が？」

「はい。開けますよ」

僕は辺境伯からもらった天銀混じりの短刀で、カギをこじ開ける。ありがとう、バーサーカーっぽい辺境伯！　絶対、こんなふうに使うことは想定してなかったよな。

軋みながら鉄扉が開くと、汚れた軍服を着た曹長が出てきた。

「君が……？」

出てきた曹長は僕を見て驚いたようだった。

「どうしました」
「いや、すまん……その、思っていた以上に若かったのでな」
「ああ、自覚はあるので大丈夫です。急ぎましょう」

それから残りの１１人を全員独房から出した。この建物内に、駐屯している兵士は今日のところは２人しかいないらしく、２人とも居眠りをしていて――騒ぎが起きていることにも気づいていないようだった。

あのおっかない人はいないようでよかった。

「静かに。足元が暗いので気をつけて」

小声で注意を促す。

牢番の２人は入口脇の小部屋でイスに座って居眠りしている。魔導ランプのか細い明かりが、うっすら開いた扉から線を引いたように廊下へ差していた。

僕が先頭を進むと、曹長が後ろを振り向いて仲間たちにうなずきかけ、全員がそれに返した。

（……意外と音が鳴る）

たったひとりならば気にならないけれど、１２人にもなれば衣擦れの音とて耳障りだ。

みんなそれに気づいていたのだろう。さらり、さらり、と音を立てながら進んでいく。

曹長が、僕の横を抜けて外へと出た。２人目、３人目……。

８人目で、僕はぎょっとした。やたらぶるぶると震えた若い男で、明かりがこぼれ出ている場所にやってくると「ひっ」と喉の奥を鳴らして、なんと、そこをジャンプして越えようとしたのだ。

着地のときにバランスを崩し、上体が傾いた。

あ……。

全員の口がぽかんと開いた――とき、僕はするりと身体を滑り込ませて彼の身体を抱き止めた。

静けさ……の後。

ふぅぅぅというため息。

「あ、あの、わ、私、その」

「シッ」

僕が彼の口を手で塞ぐと、他のみんなも口元を手で押さえていた。

沈黙と同時に全員が牢番の小部屋へと視線を送る。

「……フゴッ、スピィ――」

起きなかったようだ。

建物を出ると、遠くから「襲撃か」「火事だよ」という声が聞こえてきた。この先は裏道を通り抜ければよく、軍の建物にも人気がないので問題はないだろう。

道案内が必要なところまで僕が先導して進む。

壁面に取り付けられた階段を上っていくと……外に通じる隠し扉がある。

「このまま真っ直ぐ進んでください。急いで」

僕は曹長を先頭に壁面の階段へと送り出した。最後に残ろうと思ったのは、さっきみたいに転んだりする人が出たら困るからだ。

8人目、ぶるぶる震えていた若い人は一心不乱で走っていく。大丈夫みたいだな。

そして12人目が過ぎ、さあ、僕も後を追おう――と思ったときだった。

「ッ!?」

こちらに向けられる殺気を感じた。

とっさに、短刀を振るうとギィンと音がしてなにかが跳ねて飛んで行った――なんだ!?　目で追うことすらできなかった。

刃をぶつけたときの重い衝撃に手が痺れるほど。

いったい何者が……なんて疑問を覚えることすらなかった。

こんなことができる人は、この地底都市にひとりしかいない。

「……」

フードをかぶり、口にキセルをくわえた女がそこに立っていたのだ。

その両手に、湾曲する曲刀を持っていた。二刀流だ。

24

★　火事現場・マイカ茸倉庫　★

深夜に突如として燃え上がった炎はしつこく燃えていたが鎮火されつつあった。

集まったのは軍属の者たちで、指揮に当たっているのは元帥その人だ。

消火活動を遠巻きに見ていた町の人たちは「なんだ、ただの火事か」と高みの見物の体である。

「ふむ……火勢の割にはあっけなく消火できたな。被害はどうだ？」

「聞いたところ、外壁が燃えたくらいで、中の備蓄にはさほど影響はなかったっつー話っすわ。ただ屋根は替えなきゃダメでしょうね」

「ただの失火で済んでよかったな」

「……失火、なんすかね……」

「どうした、参謀？」

元帥が話しかけていたのは、参謀の肩書きを持つ女軍人だった。

彼女はアゴに手を当ててうなっている。その姿は酒場で、酔っぱらいたちになにか面白い謎かけをしてやろうと知恵を絞っていたときとなんら変わらない。

「アタシは詳しくないんですがね、あの炎……失火と言うには燃え上がるのが早かったでしょう？」

「まあ、そうだな。燃料になりそうな木材も積んであったようだし、

そのせいじゃないのか」
「燃料が？　なんでこんなところに」
「わからん。気になるなら調べさせよう。なにせ燃料の不法投棄は犯罪――」
「いや、いや、そうじゃねーっすよ。こんなところに燃料置いといたらやべーってことくらい、子どもでもわかりますわ。日中は人通りがありますよね、ここ」

元帥はうなずいた。街の中でも外れにはあるが、まったく誰も通らない、というような道ではない。

「じゃあ、この燃料が置かれたのは今日か昨日とか、短い時間ってことっすよ」
「見つければ誰かが通報しているから、か？」

参謀はうなずいた。

「で、そいつが1日のうちに燃えた。こりゃァなんだかニオイますぜ」
「なにが言いたいのだ」
「……この燃料を使って、何者かが、なにかを成し遂げようとしたんじゃァないですか」
「なにかを？」
「街の中でおかしなことがなかったか聞きてェところっすね。百人長は？」
「アイツは例の竜人に酒を飲ませて、情報を聞き出してたはずだ。今ごろいびきかいて寝てる」
「ふーむ。それじゃ設計士……アイツが出てくるワケないか」
「ないな。消火活動なんてのはアイツの出る幕じゃない」
「もどかしいっすね～……情報さえありゃ、なにかつかめそうなん

ですが……」

そのとき彼らは遠くで、ドンッ、となにかの爆ぜる音を聞いた。

元帥と参謀が顔を見合わせる。

「今のは――」

「爆発。遠いっすね」

元帥は声を張り上げる。

「おい！　今の音を聞いた者はあるか!?　手の空いた者はそちらへ向かって異常を確認せよ!!」

声に反応した10人ほどが走り出す。見物の人垣をかき分けて進んでいく。

「なにがあるかわからんぞ！　皆、家にこもっておれ！」

元帥が叫ぶと、市民はぎょっとした顔で、いそいそと自分の家へと戻っていく。

「これでよし。参謀、行くぞ」

「はい。急ぎやしょう……どこの誰かは知らねーけど、こんな騒ぎ起こしたら警戒が高まっちまう」

ふたりは魔導ランプを片手に走り出した。

この期に及んでなお、ふたりとも――この騒ぎは都市内で誰かが起こしたものなのだと信じていた。それほどまでにこの都市の秘匿性へ、高い信頼を持っていたからだ。

★

「な、なん、なんですかね、あの人は……追っ手？」
「いやでもタバコなんか吸ってる――」
逃げ遅れた最後のレフ人たちが、呆然と、現れたフードの少女を見つめていたが、
「伏せて！」
僕は叫んで、握っていた短刀を振った。
彼女が無造作に剣を振り上げ、振り下ろした。それだけなのに僕らへ強力な斬撃が飛んできたのだ。
僕の刃が斬撃にぶち当たると、火花とともに斬撃を跳ね上げる。
それはドームの壁面上部へと飛んで行って、爆音とともに壁をえぐった。
「……」
剣で弾いたことに彼女は少し、驚いたような顔をしたけれどそれだけだった。
「走ってください！　走って！　早く上へ！」
「で、でも君は――」
「いいから！！　あなたたちを守って戦うのはキツイんです！！」
「ッ」
正直なところだった。短刀で弾くのにも限度がある――さっきの

1回で、刀身へ深刻なダメージが入った。これ、天銀を混ぜ込んだ刃だっていうのに！

レフの軍人は歯を食いしばると僕の背後、階段を上って外への連絡通路を駈けていく。

敵はそちらへ向けて斬撃を再度放ったけれど、僕は即座に【火魔法】を複数展開して斬撃にぶち当てた。爆音とともに周囲が明るくなる。

「くそっ……」

魔法で、止められなかった。

突き抜けた斬撃は、威力と方向を変えながら通路の上部へと直撃し、通路ががれきによってふさがれる。

いや……最初からこれが狙いだったのか？

僕を逃がさないための？

「……お前、誰」

彼女は、ようやく口を開いた。

その目にはなんの感情も浮かんでおらず、目元にはべったりとしたくまがあり、唇は乾燥しひび割れていた。

しゃがれた声は、老女のようですらあった。

「冒険者、レイジ」

はっきりと、彼女に聞こえるように言ってやった。

まさか答えが聞けるとは思っていなかったのか――先ほどよりも大きな驚きが彼女の瞳に浮かび、そして消えた。

底の見えない沼があらゆるものを呑み込むように。

「じゃあ、冒険はこれで終わり」

彼女は両手を振り上げ、またも無造作に振り下ろした。

強烈な二筋の斬撃が僕へと飛来する。

だけど、

「――かわしていいなら、これほど楽なものもない」

【疾走術】を使って左に走ると、僕が立っていた場所を通り抜けた斬撃は壁面をえぐって爆発した。

「……」

走る僕へと彼女はぶんぶんと剣を振るう。

僕がかわすと今度は倉庫らしき建物にあたり壁が内側に吹っ飛ぶ、地面がえぐれる、遠くへ飛んで行く――。

その間にも僕は【森羅万象】で彼女の攻撃を分析した。

（一筋の斬撃のように見えて、あの剣には無数の細かな斬撃が隠れている。それをまとめた一撃を振り下ろしているんだ。撃ち出す剣に負担はなく、その周囲に真空の膜があって、滑らかに斬撃が繰り出されている）

魔力的なものではなかった。

つまり、

（超希少な天賦珠玉による攻撃……！）

ラルクと同じ攻撃だ。

そうなると彼女の表情に人間性が失われていることも、声のしゃ

がれも、肌の荒れも、すべて――天賦のせいではないかと思われる。
僕はぐるりと彼女から等距離に走って一周し、元の位置へと戻った。
僕らの周囲には広大なながれきと広場ができていた。

「――うわ、スーメリアが戦ってるぞ！」
「――近づくな！　近づくな！　死ぬ！」

騒ぎを聞きつけた軍人が来たけれど、彼女――スーメリアと言うらしい――の能力を当然知っていて、こちらへは近づいてこない。
確かに……こんな能力があれば圧倒的な強さで誰も近づけないよな。
だけどそれがすべて、「いいこと」だとは僕は思わない。

「……」

近づくな、と言われたときに彼女の瞳には、確かに――僕が【夜目】と【視覚強化】を持っていなかったら絶対見逃していたけれど、悲しみが浮かんだのだ。
底なし沼の底からほんのわずかに浮かんでみせた、白い魚の背ビレのように。

「えーっと、君の名前を聞いていなかった」
「……」
「僕は名乗ったんだけど？」
「……聞いたところで、お前は死ぬ」

僕はもう、彼女を恐れない。
彼女は確かに強者だ。でもそれは天賦珠玉に裏打ちされた強さでしかないのだ。

彼女は年相応の心を持った女の子じゃないか。

「もう一度聞くよ、名前は？」

「……スーメリア」

根負けしたように彼女は言った。

「スーメリア、いい名前だね」

そして僕は彼女に告げる。

「君にとって不幸だったことは、２つある。その能力を誰も理解してくれなかったこと。そして君以上の能力を持った人に出会わなかったこと」

僕はもう、決めていた。彼女を救おうと。ラルクと同じように星６つの天賦珠玉を使っていたのなら、生命を削っている可能性が高い。

なんの代償もなく使える力なんてものは、この、天賦珠玉なんていうデタラメみたいな力がある世界においては、あり得ないのだ。

僕みたいにスキルホルダーが２倍あるようなイレギュラーでもない限り。

「君にとって幸運だったこともある」

楽しそうに力を振るっているのなら別だ。

でも彼女はひとつも楽しそうじゃないじゃないか。

「さっきの不幸だった２つを、僕なら両方ともクリアできる」

25

僕の言葉をただの戯れ言だと判断したのだろう、彼女が振り下ろす剣は速度を増した。

「速いなあ！　適当に振っているだけだったから、単に天賦を得ただけの人かと思ったけど、ちゃんと剣術できるんじゃないか！」

飛来する斬撃を飛び越え、くぐり抜け、横っ飛びでかわしながら僕が叫ぶと、

「っ！　うるさい！」

イラついたようにスーメリアの剣速は増す。
でも、それだけだ。
最初からかわすつもりで見ていればたいしたことはない。

「――うわあっ」
「――スーメリア！　バカかよ！？　こっちへ向けるんじゃねえよ！」

僕が走り回っているのでとばっちりが地底人たちへと向かったらしい。

「うるさい、黙れ、ハァッ、うるさい、ハァッ、ゼェ、黙れ、ハァッ、黙れ、黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！」

横薙ぎに振るわれた斬撃をひらりと飛んだ僕が着地するとき、

「！」

スーメリアは猛ダッシュでこちらへ突っ込んできた。

「アアアアアアアア！！」

大上段からの振り下ろしはなかなかの速度。

でもまあやっぱり、それだけだ。

コンパクトにまとまった曲刀の剣筋はなかなかよいけれど、僕だって、クルヴァーン聖王国のトップレベルである聖王騎士団の訓練をこの目で学習してきたのだ。

それなりの修羅場だってくぐってきたのだ。

「――うおっ、アイツすげえ！」

「――スーメリアっつったらあの、『剣の申し子』のスーメリアだろ？」

「――天賦がなくともつええって話だが、それをかわし続けるアイツは何者なんだよ……」

次々に繰り出される攻撃は、二刀流という特性もあって手数が非常に多い。

だけど見切ることは問題ない。彼女の手の長さ（リーチ）、踏み込み速度、リズム……僕はステップを踏むようにかわしていく。

「ハァッ、ハァ、ゼェ、ハァッ！」

「こんなものなの？　まだまだなんだろ！　本気出せよ！」

「！！」

苦しげなスーメリアはますます速度を上げる。僕は【舞踏剣術★

★★】という天賦を学んでいる。これはその名の通り、踊るように戦う剣技で、速度が上がれば上がるほど、僕のステップもキレを増す。

「――な、なんなんだこれは……」

「――俺らはなにを目撃してンだよ……？」

近寄れない地底人たちの呆れたような声が聞こえてきて、そこに、

「何事だ」「元帥！」なんていうやりとりまで混じってきた。

元帥――ということはお偉いさんが出てきたってことか。

（じゃあ、そろそろ終わりにしなきゃいけないかな――）

僕がスーメリアへと一歩踏み込もうかと思ったときだった。

「！！」

振り下ろされた右手の一撃を、半身を開いてかわした瞬間、剣がピタリと止まったのだ。

「フッ」

汗だくのスーメリアが笑った――いや、ほんのかすかに口の端をゆがめただけに過ぎなかったのだけれど、笑ったのだ。

「死ね！」

笑顔で言うにはその言葉はどうなの？　と言いたいところだけれど、左手の曲刀をこちらに向かって突き出す――そこには斬撃をのせてある。

この至近距離、斬撃ならば広範囲の攻撃が可能。僕は正面から受けなければいけない。
最初の1回以降、僕が剣で受けていないのに彼女は気づいているのだ。
もう、剣で受け止めることができないのだと。
そして魔法では受け止めきれないのだと。

（頭まで回るんだ。すごいな、この人――）

だけど、僕はさっき言った。
僕なら「両方クリアできる」と。
君の能力を理解し、君以上の能力を持っていると。

「僕だって使えるんだよ」

僕の振るった短刀には、無数の細かな斬撃がまとわりつき、それをひとつの塊として射出する。
それは寸分違わず、彼女と同じ斬撃だ。

「！？」

スーメリアの顔が驚愕に染まる――瞬間、斬撃同士が激突し、無数の爆薬が誘爆するかのように衝撃波が膨れ上がる。
耳元で風船を割られたような爆音とともに周囲の空気が震える。
だけど――そのときには僕らは１０メートル以上離れた場所にいた。

「ふう……」
「！？」

湧き起こった暴風が僕のフードを飛ばして顔が出てしまう。
僕の【花魔法】でツタを伸ばし、近くの廃墟――スーメリアが破壊した倉庫だけど――へと爆発の直前に移動した。
あの瞬間、虚を突かれたスーメリアは隙だらけになっていて、彼女の襟首をつかんでいっしょに避難するのは簡単だった。
なにがなんだかわからない――という彼女の頭を、僕は両手でがしっとつかんだ。

「覚悟しろ」

ハッ、と凍りついたスーメリアに、僕は全神経を集中させる。
僕は彼女の身体から引き抜くことをイメージする。
天賦珠玉を、抜くのだ。
つかんだ、と思った。あとはこれを引っこ抜くだけなのだと思った。
だけれど、

「あ、あああ、あああああああああああああ!?」

白目を向いて、大声を叫ぶ彼女の口からはよだれが垂れる。
固い。根を張った木を抜くように固い。

「がああああ!」

武器を取り落とし、僕の手首を両手でつかみ爪を立ててくる――めちゃくちゃ痛い。
めり、めりり、と少しずつ天賦珠玉が彼女の額から出てくる。
淀んだ水たまりに張った油膜のような、虹色の天賦珠玉だ。

（ごめん、我慢して）

心で謝り、僕はさらに引き抜く。
さっき、彼女の天賦を真似して斬撃を放ったとき――僕はこのデタラメな力の反動を感じ取った。
脳の中に、割り箸を突っ込まれたような鋭い痛みと強烈な不快感。
【森羅万象】によればそれは、「記憶の喪失」につながるものだという。
だけれど僕には【森羅万象】があり、「忘れられない」体質であるためにその反動と抗うことになって拒絶反応が起きていた。
もし【森羅万象】がなければ、単にふわっとした快感が与えられただけらしい――。

（人間性を喪失させる天賦は、害毒だ）

それで強くなったとして、いったいなにが残るのか。

「うおおおおおッ！」
「あああああああ！？」

僕は天賦珠玉を引っこ抜いた――そこには、【狂乱王剣舞（インセインブレイド）★★★★★★】と書かれてあった。
白目を剥いたスーメリアは前のめりに倒れ、僕は彼女を支えながら地面に横たえた。

25（後書き）

【問い】天賦珠玉【狂乱王剣舞★★★★★★】をどうするべきか？

ア）持って帰る
イ）壊す
ウ）自分で使う
エ）キミドリゴルンさんに使う

26（前書き）

天賦珠玉の抜き出しについて自分にしかやってない、とか書いてましたが他の人にもやってました。すみません、ただの作者の勘違いです。修正しておきます。

26

★　地底都市外郭　★

地底都市で生きて行くには多くの自由を捨てなければならない。
都市外を出歩く自由はもちろん、結婚の自由もほとんどなく、結婚相手は親や所属するコミュニティで決められた。
口にできる食事、飲める酒、娯楽も限られていた。
教育の幅も狭い。
さらには従わなければならない、暗黙のルールがいくつもある。

――ぶち壊したい。

それが、元帥が抱えてきた感情であり欲求だった。
この都市を動かす都市評議会員の一族であり、軍のトップを任されるという――この都市内では一握りの幸福に恵まれながらも、彼はここのルールを壊したかった。

――もう、限界だ。

恐るべきモンスターから逃れるように地底に隠れ住んだ祖先は、数百年前から起きていた種族間の抗争も悠々生き延びた。
地底人は他にいくつの種族があり、抗争の結果、滅んでいったのかを知らない。本来なら力を合わせてモンスターに対抗すべきなのでは？　と元帥は思ったのだけれど、彼が生まれたときには「世界に種族は3つしかなく、我々地底人、ダークエルフ、竜人だけだ」と教わった。

そしてもうひとつの重要な教え――「この世界には神がおり、神の声はウルメ総本家だけが聞くことができる」というもの。

他に誰も聞かないというのに、ウルメ総本家だけわかるとはどういうことか。しかも彼らはけっしてその内容を他言しないのだ。あのおぞましいサルメがそんな神秘性を盾に偉ぶっているのを見ると怖気が走った。それをいかにも恭しく受け入れ、さらにはおもねるように彼女に身体を売る若い男たちも不気味で仕方がなかった。

世界にたった3種族。

しかもそのうちの1種、我らが地底人のトップは頭がおかしい。いや、その周囲にいる我々ももうとうに狂ってしまっているのではないか……。

そう思うと――もう限界だと思えてしまうのだ。

だがこの都市を、社会を、壊すには「力」が要る。壊し、再生し、できることなら他種族と協調していくしか生き延びる道はない。

元帥はその「力」を天賦珠玉に見いだしていた――。

（あの少年は何者だ!?　いや、それよりも天賦珠玉を抜き取った!?）

スーメリアに与えられた星6つの天賦珠玉こそまさに、元帥の望んだ「力」だった。だが今夜の侵入者はスーメリアに打ち勝ち、さらには天賦珠玉を抜き取った。

禍々しくさえ見える天賦珠玉は、この暗い地底都市で光を放っている。

「お前は何者だ!?　それは我らのものだ!」

戦いが終わり、あっけにとられて動けない者が多い中、元帥が声を上げた。

暴風によって侵入者のフードは剥がれている。そこに現れた顔は、

１０代半ばかというくらいの、少年のものだった。

「……墜落した飛行船にいたレフ人を、一方的に捕まえたあなたたちが、なんの所有権を主張するのですか？」

ぎくり、とした。それは図星を指されたからではなく――彼が、「竜人」ではなく「レフ人」という先日まで聞いたこともなかった国の名前を、さも当然のように口にしたからだ。

そうか。この少年は警邏隊が襲撃して返り討ちに遭った少年か。

「君は……竜人たちの仲間なのか」

「彼らはレフ人です。あなたたちに不当に捕縛されるいわれはありません」

「だが君はこうして我らの都市へ不法侵入している」

「……都市だというのに侵入を不法だと言うのなら、門番でも置いたらいかがですか」

口の回るヤツだ、と元帥は忌々しく舌打ちをする。

地底都市に入るいくつかのルートに見張りを設置すべき、と１０年前に提案したのは他ならぬ元帥だったのだ。しかし実際に見張りを置いてみると、侵入しようとする者なんて現れず、「見張りは罰ゲーム」などと揶揄されるようになり見張りの担当は「本日も異常なし」という報告書だけ書いて見張りに立つことを止めた。

結果、元帥は自分の方針を撤回せざるを得なかった。

（見張りとは異常がないことを喜ぶべきものだというのに……！）

そう言ったのだが賛同者はほとんどいなかった。腹心の百人長ですら「まあ、ここが侵入されることはねえっすよ」と他の地底人同様、地底都市の秘匿性に異常なまでの信頼を見せていた。

「レフ人、とかいう人種はともかく、飛行船の墜落現場は我らの領土だ。そこでなにが起きたかを解明するのが我らの責務である」
「……それは、そうかもしれませんね。まあ、レフ人たちを独房に閉じ込めている時点で詭弁極まりないですけれど」
「ああ言えばこう言う！　お前こそ詭弁の塊ではないか！」

元帥が言うと、少年は小さく肩をすくめただけだった。
その仕草にもイラッとするが――参謀が横で囁いてくる。

「……元帥、もうちょっと時間を稼いでください。その隙に出口は全部封鎖します」

その手があった。
よし、行け――と言おうと思ったときだ。

「ああ、今から手勢を動かして出口を塞ぐとかは止めたほうがいいですよ。大体、この……スーメリアさんよりも強い人はいるんですか？」
「うぐっ……」

確かに、そうだ。スーメリアが敗れ、警邏隊の襲撃でも勝てなかった以上、ここで戦っても被害が拡大するしか道はない。

「……そうかもしれん」

であれば、どうするか。参謀が横目で聞いてくる。出口を塞ぐのか、どうするのかと。
元帥の脳内でめまぐるしく計算が始まる。
これだけいいように破壊され（たとえ壊したのがほとんどスーメ

リアなのだとしても）、捕虜は解放され、星６つの天賦珠玉まで奪われては――自分の元帥の解任は間違いない。いや、それで済めばまだマシだ。父の評議会員の席すらも、あのサルメは奪おうとするだろう。

「じゃあ、そこでじっとしていてください。僕は――」

「だが」

今、この瞬間、なにができるのか。

元帥は賭に出た。

「このままおめおめとお前を逃すわけにはいかない。我ら全員が命を懸けてお前を外に出さないよう行動する。何人死んでも構わん。最悪、出口すべてを破壊して生き埋めにする」

元帥の言葉に参謀が目を剥いた。

後方にいる軍人たちは「げっ、マジで言ってンのか」「無理。俺先に逃げるぞ」などと言っているが構わない。

「……あなた、正気ですか？　都市民全員の命で僕ひとりを殺すと？」

呆れたように少年は言ったが、ここで退いては元帥の賭けは失敗だ。

「そうだ。行け、参謀。今の内容を聞いたな？」

「は、はい……ほんとうによろしいのですね」

「構わん。すぐに行け――他の者は、ヤツを取り囲め！」

元帥の号令で、のろのろと動き出した軍人たちが遠巻きに少年を

囲む。

「はあ……わかりました。ここには無辜の市民もいるというのに、僕なんかのために犠牲にされたら寝覚めが悪いって話ですよ。なにをお望みですか？　あ、レフ人を返せというのはナシですよ」

勝った、と思った。

本気の本気で玉砕覚悟で突っ込ませるつもりなど元帥にはなかった。というより命令してもほとんどの部下は動かないだろう――それほどまでに地底人の軍隊は腐っている。

「レフ人とやらは構わん。私が主張するのは、墜落した飛行船とやらは我らの領土にあるものなので我らが接収すること」

「……うーん、僕は、まあ、構わないです」

「それと、天賦珠玉を返せ」

これが絶対の条件だった。

天賦珠玉さえ戻ってくれば失地回復になる。

被害と言えば都市外郭の破損くらいで、人的な被害が出たわけではない。

「ああ、そんなことですか？　元々返そうと思っていましたよ」

「――なんだと？」

「落とさないでくださいね」

少年はなんともないように、天賦珠玉を放った。それは放物線を描いて元帥の手元に落ちた。

これが――星６つの天賦珠玉……。

「ただ、ひとつ言っておきます」

呆けていた元帥へ、少年の声が響いた。

「その【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】を使うことは絶対に勧めません。というのも、天賦の使用により記憶の欠落が起きるからです。これが進むとやがて日常生活に支障を来し、死にいたる……と僕は考えます」

「な、なんだと……？」

「彼女を見て思い当たるフシがあるのでは？」

少年の足元に横たわっていたのはスーメリアだ。

スーメリアは、明るい少女だったというのに――確かにこの天賦を手に入れてから人が変わってしまった。

それが天賦使用による代償なのだとしたら？

「……まさか、そんなことが」

ぞっ、と背筋が冷たくなった。

いやしかし、と思い直す。だからこそこれは強いのではないか。それだけ強力な「力」なのではないか。自分が欲していたのはまさにこういうものなのではなかったか。

「条件はそれだけですね？　じゃあ、僕は行きますよ」

少年はすたすたと壁面に向かって歩いていく。そこの出入り口は塞がったはずなのだが、気にせず進んでいく以上、魔法の力でどうにかするつもりなのか。

囲むだけ囲んだ軍人は、びくびくしながら少年に道を開く。

これで、終わりだ。今夜の大騒動はこれで――と元帥が油断しかけたときだった。

「なァにボケッと突っ立ってンのよ!?　その侵入者を逃がしたら、この街で生きていけなくしてやっから覚悟しなァッ！」

いちばん聞きたくない声が、聞こえてきた。

大勢の付き人を連れたサルメが、のしのしと歩いてやってきたのだ。

全身から冷や汗が噴き出る。

この女だけは、こいつだけは、生理的な嫌悪が先に立って冷静な思考が保てなくなる。

「元帥ィ！　さっさと命じなさい！　あの野郎を止めろと！」

「し、しかし……やられたのです、スーメリアも」

「あァッ!?」

離れた場所で倒れたスーメリアを見て、サルメはペッとツバを吐く――それを受け止める、金色の痰壺を差し出す係もいるのだから頭がクラクラするような光景だ。

「そンじゃァ……アイツは星６つ以上の強さってことなの？」

「……はっ。とてつもない、実力の持ち主かと」

「……」

うなだれた元帥は、顔を上げられない。すぐそこまでやってきたサルメの顔からぴきぴきぷちとイヤな音が聞こえてくるのだ。何かがブチ切れたような音が。

「アタシがなにが嫌いってェ！　負けが大っ嫌いなんだよォォォ！　知らなかったか、元帥、このボケナスがァッ！」

「申し訳ありません」

這いつくばって謝りたい気持ちに駆られるが、ぎりぎりのところで踏ん張ったのは彼に最後に残ったわずかな矜持があったからだ。

「アンタに期待なんて最初からしてなかったけどよォ！　できねェことがあンならさっさと報告しろやァァッ！」

「申し訳ありませ――」

「どけェッ！！」

肩を突き飛ばされて元帥は横によろけた。サルメと、サルメの付き人がぞろぞろ進んでいく。その先にいるのは、ぽかんとした顔で立っている少年だ。

今、ここでなにが起きているのかわからないのだろう。

「この野郎が……アタシの街で好き勝手しくさった礼だ。ブッ殺してやらァッ！」

サルメは右手を掲げた。

「出てきなさいよォッ！　調停者！！　アンタの敵がここにいるわよォッ！」

その瞬間――地底都市にうっすらと差していた光源すらなくなり、周囲は墨で塗りつぶしたような闇の世界となった。

26（後書き）

多くのご回答ありがとうございました。
正解は「オ）返す」でした（湧き起こるブーイング）。
すみませんごめんなさい！
いやほんとすみません！
いろいろ書いていただいてありがとうございます！
（正直ほとんど反応もないだろうなァと思っていただけにびびりました）
次回もしこういう企画やるときは、「必ずその選択肢内に答えがある」ようにします。
なぜ返したのかについては次話で、その動機について語られます。
全然関係ないですがスーメリアの名前の由来はとあるゲームです。

本話の末尾で出てきてお久しぶりワード「調停者」さんも気になりますね。どうなる、次号！（まだ書いてない）

27

星６つの天賦珠玉を投げて返したとき――元帥と呼ばれていた男はきょとんとした顔をしていた。

（もともと返すつもりだったってのに）

僕は、スーメリアという人の命を救った……のだと思う。このまま【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】を使い続けたら、この人は死んでいた。知ってて使い続けていたのか、知らずに使い続けていたのかはわからないけれど、死ぬとわかっている人を放っておくことはさすがにできなかったのだ。

僕の目的はレフ人の解放。それだけだ。

竜人都市に比べれば地底都市には天賦があるようだったけれど、それでも他の人を見ている感じでは潤沢にあるとは思えない。

であれば【オーブ着脱★★★★】のようなレア天賦を持っている人はいないのではないかと僕は踏んだ。

いるならいるでいい。後々取り出すつもりだったのなら。

でも――いなかったのなら、スーメリアの死は近かった。

（せっかく命を助けたのに、死なれても困るしな……）

天賦珠玉を返さなかったらスーメリアはどうなっているかと言えば、だらだら生き延びるか、あるいは廃人の数歩手前の彼女は――もう「要らない」からと捨てられたかもしれない。この世界では食糧が逼迫しているのだ。

だけれど天賦珠玉が戻れば、彼女は役に立つ。

僕が与えた情報を確認するために彼女は生かされるだろう。そし

て今後、星６つという天賦珠玉をどう扱っていくかを考えるときに、生き証人であるスーメリアは必要不可欠な存在になる。
僕には、あんな凶悪な天賦は必要ない。

（ていうか、星６つ以上の天賦って危険なヤツばっかりじゃないか。もしかして、クルヴァーン聖王国の第１騎士団長が【聖剣術（ホーリーソード）★★★★★★】とかいうとんでもない天賦を代々引き継ぎながらも前線に出ないのは、副作用というか、使用の代償がハンパないからなのかな）

そんなことまで思いが至ったけれど、いずれにせよ僕の目的は果たされた。
まあ、周囲がぶっ壊れてがれきになっているけれど、それは僕のせいじゃない。
あとはレフ人を追って脱出するだけ――と思っていたら、悪の親玉みたいな女の地底人が出てきて、いきなりわめきだした。

「アンタに期待なんて最初からしてなかったけどよォ！　できねェことがあンならさっさと報告しろやァァッ！」

「申し訳ありません――」
「どけェッ！！」

危ない。元帥、転びそうになったけどこらえたな。手に天賦珠玉持ってるってのに……ていうか気づいてなさそうだけど。

「この野郎が……アタシの街で好き勝手しくさった礼だ。ブッ殺してやらァッ！」

スーメリアが最強カードじゃなかったのか？

そう思いつつも、僕は警戒する。

「出てきなさいよォッ！　調停者!!　アンタの敵がここにいるわよォッ！」

その瞬間、周囲が闇に包まれ――僕の思考回路も一瞬、止まった。

調停者――。

聖王都の「一天祭壇（ファーストアルター）」の前にいた存在。

ルイ少年を殺し、その身体を操った。

盟約がどうのとわめいて、最後はウロボロスを召喚して消えていった――。

「表の世界」の、竜と同じ存在。

黒の世界だが数人が持っていた魔導ランプの明かりは光を放つ。

動揺する人々が黒い影のように見える。

『……何用だ、盟約の一族よ』

上だ。

上空に、まるで足場があるかのように空中で腕組みして突っ立っている。

その身体は暗紫色の金属鎧に包まれ、隙間からは黒炎が噴き出している。

フルフェイスの兜は目の部分だけ穴が穿たれ、そこには赤い瞳がのぞいていた。

「言ったとおりよォ！　アンタの敵がそこにいる!!」

調停者を呼び出した女だけはこの状況を当然のものとして考えているようだった。彼女に付き従っている人たちは突然の出来事に驚いてあたふたしている。

僕も――ようやく、思考が戻ってきた。

そうだ。

ここは「裏の世界」。調停者の本拠地じゃないか。

『お前は、「災厄の子」……！？』

僕を見た調停者が、初めて動揺を声に表す。

「……その呼ばれ方、本気で頭にくるんで止めてくれるかな」

生まれてこの方、黒髪黒目でめちゃくちゃ苦労させられた。命の危険に遭った。親には育児放棄で殺されかけ、「六天鉱山（シックスマイン）」では公爵に斬られかけ、聖王国の６大公爵家のエベーニュ家からも追われた。

僕が一体なにをしたんだよ。

「こっちの世界じゃ、アンタは呼ばれてほいほい出てくるのか？向こうと違って口もよく回るようじゃないか」

明らかに、「一天祭壇」のときよりもふつうに話している。

『……盟約者よ、お前が我を呼び出していいのは、盟約に違反があったときだけだ』

僕をにらみつけながら、調停者は悪の親玉女に言う。

「そ、そいつは、このアタシの街をぶっ壊したンだよ！　星６つの

天賦持ちだって相手にならなかった――ズルをしたに決まってる！」

『盟約の違反はなかったということか？』

調停者が手を挙げると、闇のドームが解除されていく。

「だったらなんなのよォ！　アンタは盟約だのなんだのを勝手に押しつけるだけ押しつけて、こんなときに動かねェのかよ！？　アタシらが死んだら困るのはアンタだろォが！」

『困りはしない』

「なァッ！？」

『お前たちが死のうと、この世界から生物が絶滅しようと……それは世界の命運』

調停者は、悪の親玉女と話しながらも、僕から視線を外さなかった。

『だが、こやつは「災厄の子」。盟約とは関係がないが……』

調停者の身体から黒炎が噴き出した。

身体を翻した、と思った瞬間、とてつもない加速で僕の目の前へとやってきた。

振り下ろされた拳の一撃は天から下る稲妻のような速度。

バックステップでかわしながらも僕は【土魔法】で土壁を前へと展開する。

調停者の拳が地面に触れる――1メートルほど地面は凹み、衝撃波が周囲に走る。親玉女は仲間もろとも吹っ飛び、僕の土壁はもろ

くも崩れ去り、僕は両足で踏ん張ってこらえた。
爆音を聞いたのか、聞かなかったのか、キィーという高音が耳で鳴っていて、周囲の音を聞きづらい。

『関係はないのだが、排除に値する』

聞きづらくとも、聞こえたのは――やはり不愉快な言葉だった。
散々「災厄」だの呼ばれ、そして今は直接排除ときたものだ。
こいつはルイ少年を殺し、騎士団長を殺し、お嬢様の天賦珠玉授与式をメチャクチャにしただけでなく、イタチの最後っ屁のように召喚したウロボロスがいくつもの家を薙ぎ倒してくれたっけ。
あの後を知らないけれど、ケガをした人だっていたはずだ。家を建て直すのだって大金がかかったはずだ。
そんな迷惑を掛けたこと、まったく気にもしてないよな、アンタ？
ああ、さすがにね、いくら温厚な僕でもね。

「……性格的にこういう言葉は使わないんだけど、他に思いつかない」

人差し指を突きつけた。

「お前はぶちのめす」

さすがに本気でキレそうだ。

28

にらみ合っている時間は１０秒に満たなかった。
調停者が地面を蹴って走り出すとえぐれた大地がさらにえぐれた。

「――逃げろォ！」
「――巻き添えになっちまう！」
「――助けてくれェ！」

とうてい軍人とは思えない泣き言をわめきながら逃げていく地底人たち。
悪の親玉女は砂塵の向こうに埋もれていたけれど、それを気にしている余裕は僕にはない。

『シィィッ！』

目の前にやってきた調停者の右フックを屈んでかわすと、余裕をもっていたはずなのに後ろ髪が風圧で持って行かれそうになる。
続いてやってくる左ストレート――受け止めたら腕の骨は木っ端微塵だろう。

ギィンッ。

辺境伯からもらった短刀で斬り上げると、天銀を混ぜてあるにもかかわらず調停者の左腕を切ることはできず、上へと跳ね上げただけだった。

「じゃあこれは？」

物理攻撃が効かないなら――がら空きになった調停者の胸に手を伸ばすと、【雷魔法】をぶっ放す。

『ガッ、フッ』

電撃が調停者の身体を這って、青白い光を放つ。

制御しきれない電撃の一部が僕の左手を焼き、即座に【回復魔法】で治癒をする。

「――くっ」

即座に僕は背後に跳んだ。

調停者は倒れるどころか、右足でヤクザキックを放ってきたのだ。

いったん距離を取る。

シュウウウと黒炎の代わりに煙が噴いているが、調停者はこちらをにらみつけている。

（強い）

クルヴァーン聖王国で戦ったときよりもずっと強いと感じる。

あのときは聖王、辺境伯とが主体となってボコボコにしていたけれど、これほど機敏に動くことはなく、これほどタフでもなかった。

ルイ少年の身体を乗っ取っていたからなのか、あるいはこちらがホームグラウンドだからなのかはわからないけれど――。

（強さで言えば、やっぱり「竜」クラスだ）

「表の世界」の調停者が竜なのだという。では「裏の世界」の調停者は「調停者」以外の呼び名があるかもしれないけれど、それは僕

は知らない。
人型の、不気味な野郎ということしかわからない。
『……なんだ、その程度か』
右手を首に当て、ぐるりと頭を回す調停者。鎧の隙間からは煙がなりを潜めて新たにまた炎が噴き出した。
『その程度の魔法で調停者を倒せると思っていたのなら、滑稽を通り越して哀れ』
「……」
『動きはヒト種族よりもマシだが、所詮その程度――死ね』
調停者はまたも突っ込んで来る。パンチやキックは単純な軌道でかわすのはたやすい――だけれど、その単純な攻撃こそがいちばん厄介だった。
こちらに息を吐く時間を与えないのだ。
そして逃げ出す隙も見せない。
僕はと言えば、調停者の攻撃をかわしながら――【森羅万象】で分析していた。
（鎧はほぼ天銀でできている。特殊な加工で暗紫色になっている……硬度を飛躍的に上げるための加工だ。噴き出す黒炎はまさに生命力。鎧の向こうに筋肉や骨といった生物の痕跡は確認できない）
竜は、爬虫類に近い生き物だった。
では調停者は？
（こいつは――魔導生命体だ）

方向性としては「畏怖の迷宮」で戦ったジャガーノートのタイプだ。

それよりもはるかに高い知性を備え――命を持っているかのように行動できる。

ジャガーノートのそれとは造りが全然違うけれど、共通点もある。

（体内の核を潰せば、死ぬ）

いったいどのような仕組みで動いているのか。レフ魔導帝国ではジャガーノートみたいなものを「英雄武装（ヒロイックギア）」なんて呼ぶのだろうけれど、調停者はさらに上だ。

僕が【森羅万象（オーバーリミット）】で見てもどこまで理解できるか。

人智を越えたという点では、星９つ以上の天賦珠玉と同じかもしれない。

（でも何者かが作ったものであることには違いない）

調停者の蹴りをかわし、【風魔法】を使って距離を取ると――あっという間にまた接近してきてパンチを放ってくる。

『お前の攻撃は通じない。逃げるだけ逃げるがいい。こちらには一切の疲労はないのだからな』

「そんなヒントを与えていいのか？」

『災厄の子とて、ピンからキリまでいる。お前は非力なほうだったようだ』

「ああ、そう――」

僕は調停者の攻撃をかいくぐって、全身のバネと【補助魔法】による補正をかけた回し蹴りを放った。

調停者の腹に見事に決まった蹴りは、ヤツを吹っ飛ばし、がれき

の山に突っ込んで砂煙が立った。

「――それは、見くびられたもんだなあ」

『……おかしいぞ、お前。いくつの天賦を持っている？』

がれきを放り投げて立ち上がった調停者は、やはりこの程度では傷ひとつついていない。

あの装甲を打ち破るには、こちらにも天銀の武器が必要だ――まあ、無理ってことだ。

「さっさと来い。僕を排除するんじゃなかったのか？　それとも、天賦を１００個も２００個も持っていたら尻尾をまいて逃げるのか？」

『……』

我ながら安い挑発だった。

だけれど、調停者には効いた――こいつはほんとうに魔導生命体なのだろうか？　ふつうの生き物にしか感じられないけれど。

『死ね！！』

がれきを蹴って跳躍した調停者が、空から降ってくる。

それは自身の装甲を頼りにした行動だ。絶対に破られるはずがないと信じ切っているのだろう。

（戦闘能力は高くとも……）

僕は右手を掲げた。

こんなチャンス、逃すはずがない。

放ったのは――【火魔法】だ。
僕が学習した中で最も高いレベルの魔法、【火魔法★★★★】。
純粋な熱量だけを持った炎が湧き起こり、巨大な業火となって調停者を包み込む。

『バカめ、魔法は通じないと言った』

調停者は炎をかいくぐって迫る。

（……知性は低い）

僕は、にやりと笑った。

29

調停者の鎧が、いくら天銀（ミスリル）を使ったものであったとしても弱点はある。

天銀は、希少で、高価だ。

魔力との親和性が高く、加工の際に魔力を使うことで硬度を上げたり、魔法に対する抵抗を上げたりすることができる。

調停者の鎧は魔法を防ぎ、一般的な鋼よりもずっと硬いといういいとこどりで仕上げられていた。

（だけど――金属は、金属だ）

業火を突き破って出てきた調停者へ、僕は次の魔法を展開していた。【火魔法】と【風魔法】を混ぜた「火炎嵐（フレイムトルネード）」だ。

『クッ……』

いくら魔法を防いでも、面で襲いかかってくる風圧は物理的な現象だ。調停者は火炎の竜巻によって煽られ、向こうへと飛んでいく――が、くるりと一回転して着地した。

即座にこっちへ突っ込んで来る。

僕はもう一度、同じことを繰り返した。

フレイムトルネードの出力を押さえているので魔力の減りは問題ないけれど、それでもすでに半分以上は使っている。

『同じことを！』

調停者はフレイムトルネードを正面から受け、地面に伏せるよう

にして風を耐えきる。
僕との距離は２０メートルもない。

『今度こそ死ね』

魔法はやはり効かないのだろう。いや、正確に言えば、体内の核に影響がない限りどんな攻撃も意味がないのだ。
調停者は勝利を確信して突っ込んで来る。

「――待っていた」

もうすぐそこだ。
僕が展開できる魔法は、あと１つがいいところだろう――それをなににするかは決まっていた。

『むっ』

【水魔法】だ。
水だけでなく、氷すら出現させられるこの魔法で、僕は身体の前に分厚い氷壁を出現させる。

『こんなものが効くとでも？』

調停者は無造作に腕を振るって氷壁を破壊する。

『！？』

白い雪片となった氷壁が爆発するように吹っ飛んで、調停者の身体を覆う。
たった今まで何度も炎をかいくぐった鎧は、温泉代わりに高炉に

でも入ってきたのかというほどに温度が上がっていた。
その直後、バナナで釘を打てるほどの温度にまで下がった。
【水魔法】で出現させられる氷は、ただの氷じゃない。
氷を中心とした周囲の温度を氷点下へ下げることができるのだ――水を操る魔法でありながら、温度を下げる魔法でもあるからだ。
こびりついたような霜に覆われた調停者は面食らったように止まったが、

「燃えろ」

そこへ僕は、今できうる限り超高温の炎を出現させる。

『だから、魔法は効かな――』

高温と低温の行き来。しかも魔法を媒介にしているために、通常では考えられない環境を作り出すことができる。
天銀とて金属だ。
金属疲労は、当然発生するのだ。
鎧に亀裂が走った。

『――なに？』

端から欠け、胸の中央に大きなヒビが入る。
すでに僕はダメ押しの【土魔法】を用意していた。放たれた岩塊は呆然と突っ立っている調停者の胸に当たると、その部分が割れて砕けた。
そこに――金色の光を放つ核があった。

「見つけた」

ニィ、と笑った僕は、

『ッ！？』

たじろぐ調停者に、初めて動揺を見た。

今度は僕が突っ込んでいく番だ。あの核をつかめば僕の勝ちなのだから。

右手を伸ばすと、あわてた調停者が払ってくる。

こちらに出ていた左足を踏んづけて逃げられないようにして僕はローキックを放った。

パリン、とガラスでも割れるみたいな音がして大腿部の鎧が割れて黒炎が噴き出す。

『お前……！』

「武器がなくても割れるようになった。ゆで卵みたいなもんだな」

『くっ！』

調停者は全力で背後に跳んだ。

両手を天に突き出した――マズイ、と【森羅万象】が報せてくる。

不利を察知した調停者が次になにをするか？

逃走だ。

「うおおおっ！」

僕は背後に【火魔法】の爆発を起こし、ロケットジャンプで一気に距離を詰める。天銀級冒険者クリスタがやっていた魔法による移動の真似ごとは、実用レベルではあるもののまだまだ改良の余地がある――具体的には、僕の靴や服が焦げる。

『なに――がほっ』

勢いがつきすぎて、僕は調停者の顔面に膝蹴りをくれていた。
金属が割れる感触。
調停者はひっくり返るように地面に倒れた。
首から上が割れてまるで血のように黒炎が吐き出されていた。

「だぁっ！」

空いた胸に見える核を踏み抜こうと僕が足を振り下ろすと、ごろりと転がって調停者が逃げる。
２撃、３撃、と続けて踏み下ろしたのにそのすべてをごろごろとかわして逃げていき――ぴょんと腕で跳ねて距離をとられる。
僕は、追撃できなかった。
調停者が着地した場所――そこに転げていたのは、スーメリアさんだったからだ。

『……災厄の子よ、それ以上近づくならばこの地底人を殺す』

いよいよ調停者は、落ちるところまで落ちたらしい。
僕は――その姿に驚いたり恐れたりするのではなく――心の底から憤りを感じた。

「スーメリアさんを傷つけるな」

『……お前がそこにいればいい』

彼女は僕が天賦珠玉を抜いたあと、ここに転がされたままだったのだ。

誰からも助けられることもなく。
ちらりと周囲を見ても、がれきの陰でこっそりこちらをうかがっている地底人が数人いるものの、それだけで、みんな避難した後だった。
僕は――見誤っていたのかもしれない、地底人たちを。
スーメリアさんを死なせないために天賦珠玉を返したのに、彼女は簡単に見殺しにされようとしているのだから……。
調停者は先ほどと同様、両手を上へと掲げた。

『お前は必ず排除する。お前は……世界の敵だ』

彼の周囲を闇の球が覆っていく。
これで瞬間移動ができるのだろうか？
だいぶ余裕を見せている――つまり外側からの攻撃を弾くような防御壁でもあるのだろう。

「そうかよ」

僕は右手を差し出した。

「それじゃお前は、僕の敵だ」

闇の球が調停者の身体をすべて覆う直前――青白い粉のようなものが付着する。
僕は【花魔法】でそれを一気に増やす。

『なっ……！？』

ほとんどの建物の屋上で栽培しているのだ、マイカ茸を。
この都市のどこにでも胞子があふれている。

外から攻撃できないのなら、中から攻撃すればいい。
ぽこぽこぽこと生まれ、育ったマイカ茸は球の中でふくらんで、闇の球を内側から破壊する。
割れてしまった闇は、塵のように消えてしまう――。

「最後の最後まで、クソッタレだったね、お前」

球が剥がれ、無防備となった調停者の胸に――僕はすでに展開していた【土魔法】の弾丸を撃ち込んだ。
金色の光を放っていた核に岩がめり込むと、あっけなく核は砕け散った。

29（後書き）

本小説をお読みいただき、ありがとうございます。
もし「面白い」「もっとこの物語の先を読んでいきたい」と思われましたら、是非とも「ブックマーク」と「評価」をお願いいたします！
「評価」はページ下部にある★をクリックでできます。

「ブックマーク」と「評価」は作者が書き続けていくための応援となりますので、是非ともご協力よろしくお願いいたします。

３０（前書き）

いつの間にか２００話過ぎていました。

30

核が破壊された調停者が背後に倒れると、その身体からは、ビニールプールが決壊して水が抜けていくように黒炎がしぼんでいき、天銀の鎧までもがくしゃりと粉々になった。

「ふう……」

急に、静寂が押し寄せてきた。地面は穿たれ、建物は崩れ、砂塵が舞っている。空気の循環が外界よりも緩やかなのでいつまでも見通しは悪い。

僕は倒れたままのスーメリアへと歩み寄った。

（意識を失っている。体温が低い。見たところ、ろくに食事も取っていない……）

やはりあのまま【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】を使い続けていたら、遠からず彼女は死んでいたことだろう。

「――元帥とかいう人、そこにいるんでしょ」

手近な建物の陰に、先ほどの元帥の気配を感じていた。

少し待つと、ゆらりと姿を現した。

「い、今の戦いは……なんだったのだ？」

「僕だって調停者が呼び出されるなんて思いもしませんでしたよ。呼び出したあの……だいぶ太った、悪の親玉みたいな人は誰です？」

言い方が悪かったのか、元帥はぱちぱちと瞳を瞬かせたけれど、

「……ウルメ総本家の当主、サルメ様だ。地底都市の頂点におられる方と言えよう」

「つまり地底人の中でも盟約者ということですか」

「盟約者……神の言葉を聞ける人という意味か？」

「ああ、そちらではそういう認識なんですね」

盟約を神の言葉と判断するのか。

でも確かに、盟約なんてものを誰が考えたのかはわからない。世界2つを股に掛けるような内容を、世界に生きるだけの生命体が決められるものじゃないかもしれない。

そうなると、世界の外。

神様の出番か。

なるほど。

（それにしても盟約者が、調停者を呼べるってどういうことだよ……詳しく知りたいけど、今から聞きに行って教えてくれるものでもないだろうしなあ）

そんなことを思いながら僕は、

「……スーメリアはどうなりますか？」

「君が、彼女を気にするのか」

「せっかく命を救ったんですよ」

「彼女は……」

元帥は言い淀んだ。

それが答えだと僕は思った。

この人は、信用できるかどうかは別として、根が真面目なのだろ

う。だからサラッと適当なことを言ったりすることができないのだ。
つまりスーメリアの未来は不透明だということになる。いや、この体調を思うに、未来は暗そうだ。

「お、おい君！　彼女をどうするつもりだ！？」

僕がスーメリアを抱きかかえ、立ち上がったので元帥があわてたように言う。

「……僕のところにいるほうが、同族のあなたたちよりずっとマシでしょう？」
「そんな勝手をさせるか――」

言いかけた元帥へ、僕は視線を送る。
それ以上近づけば魔法を撃つぞ、という思いを込めて。

「っぐ……」

元帥は歯噛みすると、うなだれた。
僕はスーメリアを横抱きにして去っていく。外への出口は崩れていたけれど【土魔法】を使えば通ることくらいたやすい。同じように、もう一度崩しておくことも簡単だ。
尾行をつけたまま帰るような趣味は僕にはない。
暗い通路を抜けて行くと、外への扉は開かれたままだった。

「おお、冒険者！　無事だったか！？」

そこにはレフ人の曹長がいた。
他のレフ人は近場に隠れさせ、曹長だけは僕を待っていてくれたらしい。

「その人は――あの強き者か。だが、おかしいな。眠っているからか？　強そうな気配を感じない……」
「説明するのはちょっと時間が掛かるので、今は行きましょう」
「そうだ。どこへ行けばいい？」
僕はうなずいた。
「竜人都市へ。そこなら、皆さんを迎え入れてくれますから」

★　竜人都市　★

アナスタシアは戻ってきた偵察チームから飛行船のところでなにが起きたのかという一連の話を聞いて驚き、次にレイジならば当然だと思い、最後には猛烈な不安に襲われた。
レイジが強いことはわかっている。だけれど、こちらの世界では右も左もわからないような状況ではないか。
「うわっちっちぃ！？　これじゃ熱湯だぬ！」
レイジの置き土産である大浴場は竜人都市で話題になり、アナスタシアの仕事に「大浴場を沸かす」という項目が付け加えられた。
水は、小川から引いてきてあり、その工事は竜人総出で行われたために1日で済んだ。
翌る朝、偵察チームの報告を聞いたアナスタシアの火魔法は――加減がくるった。
ぐらぐらと煮えたぎる大浴場は地獄の釜のようになっており、冷や汗をかいた竜人たちがドン引きしながらアナスタシアを見ている。

「す、すみません、ちょっと失敗して……」
「いい、いい、かまわんぬろ。熱湯は、まだ水のままの女湯へと移して温めればいい。減ったぶん、小川から新しい水を引いて冷やそう」

赤の長老が言うと、竜人たちは動き出した。
今日も今日とて長老たちは勢揃いで、腰に手ぬぐいを巻いただけの姿だった。今日も今日とて湯に浸かる気満々である。
湯でふやけたおかげで、脱皮のときの皮の残りがぼろぼろと取れ、肌はつややかになり見た目の年齢が２０歳は若返ったと評判で――アナスタシアには竜人の年齢がよくわからなかったが――長老たちはだいぶ気に入っていた。
だが見た目を気にするのは男よりも女だ。女の竜人が率先して熱湯をたらいですくって女湯に移している。風呂に入りにきているのも女竜人のほうが圧倒的に多い。どれくらい多いかと言えば、２５メートルプールとほぼ同じサイズの浴場を十重二十重に囲んでいるのである。どんなのかしら、あらまあお隣の奥さんも、やあねえこれ以上若くなったら、あっはっはっは――と朝から騒がしいのである。
一回で入りきるはずがない。
むしろ全員入るなら水の量は半分でよかったのでは？　と思ってしまうアナスタシアである。大浴場のお湯があふれることは必至だ。
何杯、沸かさなければいけないのだろうか。
忙しい日になりそうだ――。

結果として「お風呂の子」とアナスタシアが呼ばれるようになったのは、無理からぬことだろう。レイジがいつ戻ってくるのか、続報がまったくなくて不安で不安で仕方なかったけれど、それでもやらなければいけない仕事があるのは気が紛れてよかった。

レイジの消息が途絶えてから3日。
大浴場の女湯は午前1回、午後2回、夕食後1回の4回制になった。女たちはおしゃべりが大好きで、大浴場が社交場になりつつあった。

「――まったく、狩りだ狩りだ言ってて家を空けるのが長い長いと思ってたら、わかるぬ？」
「――まさか、浮気？」
「――そーなのよぉ～～。街の外で逢い引きやってんぬ！　なに考えてんのよねえ」
「――男は首輪つけとかないとダメぬ」

そんな物騒な話題が、カラカラと明るい声で聞こえてくる。聞くつもりがなくとも温度管理のために浴場にちょいちょい行かなければいけないアナスタシアには、どうしても聞こえてきてしまうのだ。
しかも同じゴシップをいろんな竜人が口にするのである。「街の外で浮気」は女竜人たちの間でホットな話題らしかった。
またこの後も同じ話を聞くことになりそう……と、午後の2回目の浴場をアナスタシアが沸かしているところだった。

「アーシャ！　アーシャ！」

街に出ていたはずのキミドリゴルンが走ってきた。

「帰ってきたぬ！」

その一言で、理解した。
レイジのことだと。
アナスタシアは加減を間違えた【火魔法】をぶっ放してしまい、またしても地獄の釜をそこに作りだしてしまったが後ろも見ずに走

り出す。
街の入口に、人だかりができている。
「レイジさん！！」
声を放ったとき、感情が漏れて火球が４つほど宙に散った。
人だかりには竜人によく似たレフ人たちがいる。
そしてその中央にいたのは――レイジだ。
「アーシャ」
こちらに向かって手を挙げたレイジに、思わず涙ぐんでしまう。
走っていく足が止まりそうになり、だけれど早く会いたいから、話したいから、触れたいから――アナスタシアはもう一度走り出す。
「レイジさん、おかえりなさ――」
すぐそばまでやってきたアナスタシアが、言いかけて、言葉が途切れた。
レイジの横に、見知らぬ女の子がいて、彼女がレイジの服をぎゅうと握りしめていたからだ。
――男は首輪つけとかないとダメぬ。
女竜人の声が耳元で聞こえた。あっはっはっは……という笑い声とともに。

31

スーメリアは肉体に異常はなかったのだけれど、やはり脳へのダメージは深刻だった。

「ほれ、ほれ、いい子だから離れるんだぬろ。レイジは今から大浴場に水を入れて、新しい大浴場も作らなきゃならんのだ」

「や！」

「ほれ、ほれ、それまではあそこでヒマをこいているジジイどもと遊んでおいで。なに、見てくれは違うが、怖くはないぬろ」

「やー！」

赤の長老がスーメリアをあやそうとするのだけれど、彼女はいやいやをして僕の背中にしがみついたままだった。

魔法を使うのに危ないから離れていて、と言ったら、断られたのがつい先ほどのことである。

ブロンドの猫っ毛はあちこちで絡まり、結ばれてしまっていて、竜人都市に帰ってきた夜にはキミドリママが「もったいないねえ」と言いながらほどけそうもないところは切ってしまっていた。

二重まぶたに長いまつげのせいで赤い目はぱっちりしており、ひび割れてがさがさの唇や、荒れた肌がなければ年相応の可愛らしさだったんじゃないだろうか？　年齢は16歳か17歳くらいだと思うんだけど。

きりっとした美形のアーシャとは違って、全体的に柔らかく丸い印象を受ける。

今は地底人の服ではなくてキミドリゴルンさんの家にあった女性服をもらってそれに袖を通していた。ただ、竜人は尻尾があるのでお尻が空いており、そこは急遽縫われてある。

スーメリアはフードがないと落ち着かないようで、長めの手ぬぐいを頭からかぶっていた。

「スーメリアさん、私といっしょに遊びませんか？」

「……」

記憶の欠落のせいか、すっかり幼児返りしたスーメリアは、アーシャですら警戒している。

「……や」

「ど、どうしてですか」

拒否られて地味にショックっぽいアーシャ。

昨日、僕が竜人都市に帰ってきたときもなぜか驚いたような、ショックを受けたような顔だったっけ。スーメリアのことを説明すると、目に涙を浮かべ、「私でよければなんでも力になりますから……！」と言っていた。

「……あなた、てき」

「敵!?　敵じゃありませんよ～。ほ、ほーら、私、こんなふうに火の玉でお手玉できるだけのふつうのハイエルフですから～」

アーシャが火の玉でお手玉を始めたが、そのツッコミどころ満載の言葉に僕と、横にいたキミドリゴルンさんが真顔になる。

「と、とりあえずレイジ、そのままやれるか試してみたらどうだぬ？」

「わ、わかりました……あと大浴場増やすことがいつの間にか決まっているのですが」

「娯楽を与えてしまったお前が悪いぬ」

え、ええ～……。

僕は後ろにぴたりとくっついているスーメリアを気遣いながら、カラッポの大浴場に向け、魔法で水を放った。スーメリア、僕より背が低いとは言っても数センチしか違わないからなぁ……。

差し出された僕の両手から、放物線を描いてドドドドドと水が大浴場に注がれると、午前の陽射しが虹を作った。

「おお～」

すでに黒山の人だかりとなっている大浴場の周囲で、歓声が上がる。

実のところ僕がいない間は小川を使って貯水は事なきを得ていたらしいのだけれど、小川は生活に利用される資源でもあるので、こちらに水を回すと水が足りないところが出てきてトラブルにもなっていたようだ。

どうにかしなくちゃなぁ……僕らだってずっとここにいるわけにはいかないし。

「炎よ」

水が入れば、アーシャが【火魔法】で湯を沸かす。彼女の火力コントロールはもはや達人の領域で、あっという間に大浴場が適温になると、

「よっしゃぁああ！」

「行くぞぉ」

「たまらんぬろぉぉ」

「あっ、このクソジジイども！　アンタら、毎日毎日ずっと大浴場に入り浸りじゃないか！」

キミドリゴルンさんが、長老たちの無法を叱っているが、長老はどこ吹く風でほかほかのお湯にぷかぷかと浮かんでいた。くつろぎすぎだろ。

「まったく……ルールをちゃんと作らなければダメだぬ。きっちり設計して、都市民全員がローテーションで風呂に入れるように……」

ぶつぶつと言っているキミドリゴルンさんを見て、僕は気がついた。

「そうだ――キミドリゴルンさん。思いつきましたよ」

「ん、なんだぬ？」

「あなたにとても向いているお仕事です」

キミドリゴルンさんは「ゆで卵発見」という謎の研究を湖畔の別荘でひとりで続けていた。

それは無駄かもしれなかったけれど、狩猟によって食料を確保している竜人都市にはない特別な知識を彼にもたらした。

「我に向いている……仕事？」

たじろぐような、だけれどどこか期待したような目のキミドリゴルンさんに、僕はうなずいた。

「魔術を教えます。魔法がなくとも風呂に入れるようにしましょう！」

もう片方の大浴場に水を張り、竜人都市の他3箇所に大浴場を作るための下準備で【土魔法】を使いまくった。

その間、僕は知りうる限りの魔術に関する知識をキミドリゴルンさんに与えた。

魔術は魔法を再現するもので、魔力の代わりに触媒が必要になる。

それが、魔力を含んだ石、魔石だ。

これを使った道具が魔道具である。

水を出す魔道具、水を温める魔道具は初歩的な知識で作ることができる。

もちろん、井戸から汲んで風呂釜に水を張り、火で沸かすこともできるけれど、竜人たちが望んでいるのは風呂としての機能だけでなく、多くの人が集まる「社交の場」だ。

大浴場を作るには、魔道具が必須だった。

「――なるほど。モンスターの内臓にくっついている魔石も、持って帰ってきてもらうようにすれば燃料には事欠かないぬ」

「そうです。難しいことではありませんよね」

キミドリゴルンさんに説明した魔術の知識は初歩的なもので、それ以上は僕は知らない。初歩的なこの知識も【森羅万象】でこれまでに見てきた魔道具の回路を解析して得たものだった。

こんなことになるなら魔術の本でも読んでおけばよかった……！

「おお、レイジ殿」

大浴場工事と魔術レクチャーが終われば、今度はレフ人たちとともに竜人都市の代表者と会議だ。

働き過ぎな気がする。お昼も食べてないし。

「お腹空いた」

「うわあ！？」

忘れてた、スーメリアが背中に張りついたままだった。

「食事を用意しました。簡単なサンドイッチですが……」

会議場に着くとアーシャがバスケットを用意していてくれた。パンを切って食材を挟んだだけの、確かに簡単なサンドイッチではあったけれど、

「これ、アーシャが？」

「は、はい……初めて作ったので変かもしれませんが」

「そんなことないですよ。誰かにご飯を作ってもらうと、美味しいですよね」

甘辛いタレのついた肉が挟んである。僕がそれを口に運ぶと、後ろから手が伸びてきてスーメリアもサンドイッチにかぶりついていた。

「ス、スーメリアさん、お味はいかが……ですか？」

「ん」

もっもっもっもっ、と口を動かしてうなずいている。美味しいらしい。

「まあ。まあまあまあ！　もっと召し上がってくださいませ！」

アーシャの表情がぱぁっと明るくなった――どんな表情をしていてもアーシャは美形だけれど、やっぱり、笑った顔がいちばん可愛いな。

32

レフ人の見た目は竜人とほぼ同じなので、最初はやっぱり驚かれていた。だけれど彼らの存在こそが僕が来た「表の世界」の証明になるので、竜人たちも少しずつ「表の世界」を信じ始める人が出てきた。

まあ、裏とか表とか僕らが勝手に言ってることなので、竜人からしたらこの世界が表なのだろうけれど。

「では――いろいろと話を聞かせてもらおうかぬ」

会議場を仕切っているのはキミドリパパだった。

広々とした会議場だけれど、書記や役人っぽい竜人が数人いるきりで、あとは僕らとレフ人たちだけだった。

「あの……こういうときは長老が出てくるものではないのですか？」

「長老か……」

キミドリパパが遠い目をした。

「……あれ以来、一日中、浴場におってな。『老い先短い命、好きに使わせろ』と言われればなにも言えないんだぬ」

「なんか、ごめんなさい」

「いや、いや、構わんぬ！　そのうち飽きるだろうから、そのときには山ほど仕事をさせる予定だぬら！　わっはっはっは！」

キミドリパパが力強く笑う。

どうやら指を失いはしたものの、都市内での影響力が大きい人な

ので今後はまとめ役の仕事を任されるようだ。

「よし、それではいろいろと情報交換から始めようか」

レフ人の曹長は今やグループの代表のような立ち位置になっており、「裏の世界」に来てからのことを話してくれた。

キミドリパパは地底都市の状況が特に気になるらしく、熱心にたずねていた。

ほとんどは僕も知っていることだけれど、2艇あった飛行船のうちもう片方はすでに墜落したというのが新たな情報だった――悪い、情報だ。

ただやっぱり、僕らの興味はどうやって帰るか、だ。

「おそらくだが、向こうの世界とつながっている空の亀裂は、『未開の地カニオン』上空にあるものと思われる。しかし、レイジ殿と我々と、かなり離れた場所へ降り立ったのも不思議な話だが……」

「それについては僕も考えがあります。亀裂を通じての移動中ですが、自分たちで行き先を選択できるような感覚がありました。戻るときも同じようなことになるのではないかなと」

「選択、か……飛行船に乗っていたせいか、そういうことはなかったな。気づけば雲霞のごとく群がるモンスターのまっただ中にいて、夢中で逃げ延びていくとお化け山羊と遭遇して、叩き落とされたからな……」

「世界をつなげるメカニズムがよくわかりませんからね」

「なぜあのような現象が起きたのだろう？」

「光の柱が立った後に、空が割れましたよね。あの光は『九情の迷宮』から発せられていたのでラ＝フィーツァが2つの世界をつなげるシステムを作ったのではないかと思います」

「なんと……」

僕はそれから竜人都市で聞いた話をした。
ラ＝フィーツァは「裏の世界」の竜人で、何らかの方法で「表の世界」へと渡った。
その後、「九情の迷宮」を作った。

「ということは、ラ＝フィーツァが世界を渡るのに使った手段がある、と……？」
「はい。まだ使えるかどうかはわかりませんが、今から飛行船を使ってカニオンへ突入するよりも多少はマシかもしれません」

するとキミドリパパが、

「なんだ、君たちはこの街を出ていくつもりなのかぬ？　てっきり我が軍に入ってくれるものと」
「入りませんて」
「ではそちらの子はどうだぬ」

そちらの子――と指差されたのはスーメリアだった。
だけれど僕の陰に隠れるだけだった。

「まあ、ちゃんと話せるようになるには時間が掛かるかもしれません」
「そうか」

キミドリパパはうなずいたけれど――確かに、スーメリアをどうするかは考えなければいけないと思った。
会議が終わると夕食時で、キミドリパパとともにお屋敷に戻り、今日最後の浴場をオープンしてから食事をいただいた。するとスーメリアは船を漕いでいるのでベッドに寝かせてあげた。

（僕も今日は早く寝よう……なんか毎日めちゃくちゃ働いている気がするぞ）

だけれど食堂へと戻る途中、アーシャが僕を待っていた。

「少しだけ、お話ししませんか？」

月光が差し、アーシャを青白く照らす。

外から大浴場の声が遠い喧噪のように聞こえてくる。

僕はアーシャとともにお屋敷の庭へと出た。

「どうかしましたか？」

「――――」

すると僕の前にいたアーシャは振り返ると、僕を抱きしめた。

突然のことに立ちすくんだ僕は、次になにが起きたのか脳がパニックを起こす。

だけれど――彼女の身体が小さく震えていることに気がつくと、冷静さが降りてきた。

「……レイジさんが、帰ってこなかったらどうしよう、って思うと、怖くて……！」

そうか――待たせる身より待つ身のほうがつらいよな。

偵察チームに伝言をすれば大丈夫だろうと軽い気持ちだったけれど、考えてみればアーシャだって右も左もわからないこの竜人都市でたったひとりだった。

「ごめんなさい、アーシャ。でもあなたを連れて行くわけにはいかなくて……」

「……はい、わかっているのです」

そっ、と身体を離したアーシャは、ふわりと笑った。

「これは私のワガママだと、わかっているのです。早く帰ってきて欲しかったことも、無事を願ったことも、今、あなたを困らせたことも……」

帝国にいたときは、籠の鳥だったアーシャ。まるで大切な人形のように毎日手入れされていた髪もここではほこりと汗にまみれ、服もくたびれている。

でも彼女の中心にある、一本通った芯は、前も今も変わらないままだ。

崖に咲く一輪の花のように気高く、美しく、そして強い。

「あの……」

なんと言っていいかわからなかった。信じられないほどに強い自制心を持つ彼女が、今、烈しい感情をあらわにした。他ならぬ僕にだけそれを見せてくれた。

だというのに僕はなんと言っていいかわからず――次の言葉が出てこなかった。

「今日もお疲れでしょう、レイジさん。せめて夜はゆっくり休んでください」

アーシャは僕の横をすり抜けて、お屋敷へと戻った。

僕は――なにを言うべきだったのだろうか。

彼女を突き放したのだろうか。

彼女は、それでも満足したような顔をしていたと見えたのは僕の

勝手な思い込みなのだろうか。

「……わからないな」

空には月が掛かっている。

「表の世界」と同じ月が。

レフ魔導帝国でヘビギンチャクが出てきたときに――月光を浴びたラルクがいた。

今もラルクは、自分と同じように月を眺めているのだろうか。

そう思うと少しは気持ちが楽になり、一方で、なるべく早く「表の世界」に戻らなければという思いに駆られる。

「今は、帰る方法を探すのが先決だ」

33

★　レフ魔導帝国・レッドゲート最前線　★

今日、どこそこの有名冒険者が現れた。
今日、どこそこの有名冒険者が死んだ。
その情報は同じような頻度で毎日飛び込んで来ては流れていった。
「銀の天秤」のパーティーメンバー3人は、戦闘に出ることもあったが、多くの時間は後方で過ごした。ミミノとノンの能力がサポートに特化しており、ダンテスの筋力も陣地拡張の建築現場では重宝されたから――という理由が表向きのそれ。
実際は、

「で、できた、できましたよ！」

ダンテスが今日も、多くの冒険者のウワサ話を何本も耳にし、それと同じくらいの本数の丸太を担いで帰ってくると、アバの天幕からひょこっと顔を出したムゲが手で招いている。
いそいそと天幕へ入ると、ミミノとノン、それに天幕の持ち主であるアバに、ルルシャもいた。チームレイジが勢揃いである。
このアバの天幕は、彼の身分が高いこともあって広いものが与えられてあり、集まるにはちょうどよかった。最初こそアバは自分の寝床を隅にやられ、大きなテーブルに魔道具を運び込まれると眉をひそめたが、

「すまないな。恩に着る」

とルルシャが言うと、

「チュパ。いつまで使ってくれても構わないさ」

とイイ顔で返事をした。水飴がなくなってなおしゃぶっていた棒はだんだん細くなり、それに従いアバの体型も細くなっていった。今は長楊子をくわえているような見た目だ。

それで、そのアバの天幕でムゲが研究を進めていたのは――。

「この、銀の盆みたいなものが？」

テーブルに載せられてあったのは、25センチくらいの台座と、その上に載せられた平たく丸い、銀製の金属だった。

「はい、耳を澄ませてみてください」

「……」

顔を近づけると、ウウウウゥ、とかすかな音がした。

「なんだこれは」

「レイジさんに取り付けられた腕輪の発信です」

レイジの生存を確認するために、続けてきた研究がようやく形になった、ということなのだろう。

「この……音が？」

「微弱な波動を増幅しているので、内容まではわかりませんけど、発している情報を受け止めているのは間違いありません」

「昨日まではまったくできそうもない、みたいに言っていなかった

か？」
「いえ、いえ、正確には『なにかを受信しているがノイズが多すぎて判別できない』という状況で、増幅器である以上はノイズまで増幅してしまうんです。これは世界を越えたことによる弊害であることは間違いないのですが、こちらから持ち込んだ機器だけを判別するのは難しく――」
「すまん、なにを言っているのかさっぱりわからんから、その辺はいいや」
「――レイジくんといっしょに倒した、巨大蛇の割れた宝玉が役に立ったんだべな」

横からミミノが言った。
それは聖王都クルヴァーニュで、調停者が召喚したウロボロスのことだ。

「あんなものが？」
「うん。魔石を動力に使っていたんだけど、それがノイズを呼び寄せてたみたいでな。宝玉に切り替えたらうまくいってさ。宝玉はあっちの世界のものだろ？　だから、向こうのノイズをうまく吸い取ってくれたみたいなんだ」
「ふーん……全然わからん」
「とりあえず、この音が途切れない限りはレイジくんは生きてるってことだべな！　実証実験もしたからほぼ確実だ！」
「そうか」

ダンテスはうなずきながら、にんまりとした。
生きているに違いないとは思っていた。だけれどこうして証明されると、やはり安心する。

「この音がなぁ……」

もう一度耳を近づける。ウウウゥという音が聞こえてくる。同じようにミミノも、ノンも、耳を近づける――と、

「うお!?」
「わあ!?」
「きゃっ」

いきなり、ワァン、と大きく音が鳴ったので3人がのけぞった。

「な、なんだ?」
「おお、どうやらレイジさんがビックリしたか、なにかしたようですね」
「……」

するとノンが、

「なんだか、のぞき見をしているようですね……」

と、まっとうなことを言った。
結局この「レイジ探知機」は1日1回確認するくらいにして、あとはそっとしておこうということにまとまった。
そんなものをずっとここに置いておくのか……とアバは遠い目をしたが、ここで文句を言うほど野暮な男ではない。

「レイジが生きているということは、アナスタシア殿下もご存命である可能性が高い……そうだな?」

ダンテスが言うと、アバがうなずく。

「だけど、この話はすぐには陛下には届けない。タイミングを見計らいたいのだ」
「そうか。なかなか難しい案件だものな……」
アナスタシアが生きているとわかれば、皇帝は捜索隊を出す可能性がある。それがレイジの救出にもつながると考えたからこそ、この魔道具を作ったのだ。
だが、戦況が悪ければ、捜索どころではないだろう――タイミングを見計らう、というアバの考えはダンテスにも理解できる。
「今日の戦況はどうだった？」
ダンテスがたずねると、ルルシャが答えた。
「内部へはだいぶ入っていけるようになった。だが亀裂ぎりぎりのサイズのモンスターはかなり強力で……例の、『黒の空賊』に頼らざるを得ない状況だ」
「黒い刃を操る、謎の少女か……。『月下美人』を盗んだのもそいつなんだろう。信用できるのか？」
「信用するしかない、というところかな。アバでも会えないほど、接触は限られているのだろう？」
「……うん」
アバはうなずいた。
「彼女の名前も、素性もわからないんだな。ただ、皇帝陛下と、その側近数名、それに医者がよく呼ばれてるみたいで彼らは会ってるだろうねえ」
「医者？　体調でも悪いのか？　持病か？」
「そこもだんまりだ」

アバはくいくいと口元の長楊子を動かした。
その「黒の空賊」とやらはラルクのことなのだが、残念ながらここにいるメンバーとは接点がない。

「負傷者の復帰が遅れていて、明日の討伐は戦線を下げるみたいです」

とノンが言った。彼女は救護施設で働いているので、前線の情報が入ってくる。

「そうなのか？　ますます悪い話だな」
「でも、そこまで悪い話ばかりではないみたいだべな。わたしが補給隊から聞いた話だと、明日は大量の物資が届くみたいなんだ」
「援軍か！」

ミミノは笑顔でうなずいた。

「明日はクルヴァーン聖王国から援軍と物資が届くみたいなんだ。しかも、先代聖王が直接率いてくるそうだから、戦線の押し戻しには十分期待できるべな！」
「そりゃあ、すごいな！　先代聖王は槍の達人としても名高いぞ」

いつ止まるともわからない大量のモンスターが空から降ってくるようなこの帝国で、戦い続けるのはさすがにしんどい。
だが、人を集めて一気に討伐できる――そうなればレッドゲートの攻略にも期待が持てる。

「明日は、先代聖王も含めて皇帝陛下が会議をなさる。話の行方次第で、状況は大きく変わると思う」

アバは力強く言った。

33（後書き）

アバさんイケメン化計画（ただし爬虫類系）。

34

★　月下美人　★

涉外局副局長という肩書きを持つアバは、外国の要人が来訪したときの対応はもちろん、局長が皇帝に対して提案する際の草稿を整えるなど、事務方のトップに近い仕事をしていた。

夜更けに皇帝に呼び出されたのはすでに提出済みの、クルヴァーン聖王国に関する情報をまとめた書類、その内容についてだろう。

軍船として建造されたのだが、軍人が通るエリアと客人が搭乗するエリアとはくっきりと区別されている。

今、アバが歩いているのは緩やかなカーブを描いた廊下で、足元にはふかふかの絨毯が敷き詰められ、手すりの細工も精緻な「客人エリア」だ。

目的地近くになって立ち止まったアバは、長楊子を口から抜くと丁寧に胸ポケットにしまった。

アバの来訪に気づいた軍人が敬礼し、ドアを開くと――皇帝専用の会議室には皇帝を始め、皇帝の世話役兼秘書の女性、涉外局長、軍事局長、そして珍しく迷宮管理局の局長がいた。

「アバ、お前のまとめてくれた資料は、ようできておる」

「はっ、ありがたきお言葉であります」

「しかし……『元聖王』とやらがどれほどの力を持っているのかまでは、つかめぬのだな？」

「申し訳ありません」

アバが身体を折って頭を垂れると、

「よい。責めているのではない。勝手な推論を書かれるよりいくぶんマシよ……局長はどう見る？」

「さようですな。アバの分析が正しければ、『元』とは思わず、現聖王だと思って接せられるのがよろしかろうと存じます」

年かさの渉外局長は「アバの分析が正しければ」という言葉をわざわざ挟んで言った。

これでなにが起きても「アバの分析が間違っていた」と言える魔法の言葉である。

「……」

もちろんそんな局長の保身は今に始まったことではないので、アバは黙して語らない。

「つまり現聖王を送り込むほどに、クルヴァーンは我が国に関心があるということかえ？」

「どうだ、アバ」

「……はっ、さようです。聖王国の王位交代は謎が多くございます。高位貴族の放逐や処刑、さらには聖王都中枢で巨大モンスターが発生しました。見方としては先代聖王の失脚は責任を取ったものであり、クーデターのようなものは確認できません。先代聖王の実子である聖女王は先代聖王との仲も良く、他国へ追いやるような事情もありません。結果として、かなり高い関心を抱いていると見ることができます」

「ふむ……」

皇帝がぺらり、ぺらりと報告書類をたぐっている。突っ立ったま

まのアバと、座った局長たちがそれを見つめている。秘書だけは皇帝の後方で、なにかを熱心にメモしていた。

「……同行してくる聖王騎士団というのは強いのかえ？」

皇帝が質問し、渉外局長がうなずいたのでアバが口を開く。

「それはもう。武勇で鳴る先代聖王は騎士団の育成に心を砕いていましたからな」

「ウチの軍と比べてはどうじゃ？」

「比べものになりませんぞ！」

それまで黙っていた軍事局長が声を発した。

「我が軍は魔導武装（マジックギア）で装備を固めておりますからな！　天賦を持っているとしても他種族など相手になりませぬ！」

彼は軍部のトップなので、当然身内をひいき目で見ている。

「アバはどう見るのだえ？」

「……私は軍事の専門家ではございませんので」

「アバ」

うっすら笑みさえ浮かべていた皇帝は、不意に表情を消してアバを見据える。ごくり、とつばを呑んだアバは、

「一騎当千とは言えませんが、通常の戦士よりも当然高い能力を持っていますが、それよりも気にすべきは１万の騎兵かと存じます。この騎兵は聖王騎士団配下で動くことになりますが、彼らは個の強さよりも、集団戦を得意とします。我が帝国軍であっても、１万人

を相手にした白兵戦では勝てませぬ」
「……だ、そうだが？　どうじゃ、軍事局長」
「……」
ぎりぎりと歯ぎしりしてにらみつけてくる軍事局長を見て、勘弁して欲しいとアバは心底思う。正直に言わなければ皇帝ににらまれ、正直に言えば軍事局長がブチキレる。頼みの上司はフォローしてくれない。
「我が軍には空がある！　空から戦えば、聖王国軍など恐るるに足らず！」
聖王国は援軍を出してくれているのであって、戦争をする相手ではないのだが、そうまで吠えられてしまうと、「副局長」という一段低い立場からは――その一段は極めて高い段差なのだが――何も言えず、
「申し訳ありません」
とまた、頭を垂れるしかないのだった。
「軍事局長。敵軍はクルヴァーンではない」
「そ、それは……そのとおりでございました。失礼しました、皇帝陛下。帝国の弥栄を願うがばかりに……」
「よい」
「陛下のご慧眼には感服いたします」
下げた頭に、意味のない追従が聞こえてくる。
（いったいなんなのだ……こんなバカげた会話をしている余裕など

ないのに）

とアバが思っていると、

「アバよ、顔を上げよ。……なぜこんな話をするのか、と思ったであろ？」

「はっ。――い、いえ、そんな」

思わず同意してしまったアバがあわてて両手を振って否定すると、

「今、お前と軍事局長が言ったとおりよ」

「……は？　――あっ！」

きょとんとしたアバだったが、皇帝の思惑が読めた。

「聖王国の目的は飛行船、ですか。地上戦は強くとも、空は我らが圧倒する。であれば聖王国は諸外国から抜きんでるためにも飛行船が欲しい――喉から手が出るほど」

「そうじゃ。積極的に難民を受け入れているのも、我が帝国に恩を売って1艇でも多く飛行船を手に入れたいのと、あわよくば飛行船の技術者を引き込もうという肚だろう」

言われてみると単純なことだったが、実際に自分たちの知識や思い込みを言葉にしてみると、こんなにもしっくりくることはない。

（この方はすごい。先代や先々代の、帝国を発展させた陛下とよく比べられ、けなされることが多いが――この方のすごさはこうした人を動かす力だ。まさにこの帝国の危機に、いるべくしていた皇帝だ）

内心、アバは舌を巻いていた。

「――陛下のお心、理解できました。明日の協議ではいかにして、戦後の聖王国の要求を飛行船から遠ざけるかが焦点になるということですね」

「話が早くて助かるのう。じゃが、飛行船を渡すことはやぶさかではない」

「と、おっしゃいますと？」

「我らの技術は次に進むべきだということよ。『九情の迷宮』の解放。それにあの赤い亀裂（レッドゾーン）……飛行船を超えるなにかが眠っているとは思わぬか？　その話を聞くために、迷宮管理局の局長にもここに来てもらっているのだえ」

「！」

「飛行船など造っていくらでもくれてやってもよい。我らが常に、次世代の技術を手にできるのであればのう……」

不意に、アバの目に、皇帝の姿が大きく見えた。

この皇帝は、帝国存亡の危機に直面してなお――次を狙っている。

（このまま亡国の皇帝となるか、あるいは稀代の英雄となるのか）

自分の命運もまたこの老人とともにあるのだと自覚すると、抑えきれない震えが走った。

彼の理想を実現するのは彼自身ではなく、自分を含む側近たちなのだ。

身体を締めつけるような重責に、アバは今、気づいた。そして明日の聖王国との協議に対して湧き上がる闘争心にも――自分にこんな感情があるのだと驚くほどに、熱く、獰猛な思いだった。

35

★　月下美人　戦略会議室　★

レフ魔導帝国側の準備は万端、整っていた。クルヴァーン聖王国と光天騎士王国、さらにはキースグラン連邦の分析を終えた。

「隣人の苦しみを見捨てるは騎士ならず」と「プライド」を理由に支援してくれている光天騎士王国は明確な報酬を求めていない。

支援を表明しつつもなんのかの理由をつけながら支援量としてはまったく足りていないキースグラン連邦にもちゃんと一枚噛ませ、クルヴァーンへの牽制とするために、キースグラン代表には控え室で待ってもらい、いつでも登場してもらえる。

月下美人にあったイスの中でもとびきり上等なイスを2脚用意し――そのイスでラルクがうたた寝をしていたことなど知るよしもないのだが――片方に皇帝が座り、もう片方には元聖王を座らせるつもりだった。

皇帝のそばは重臣以外に、見た目からして一種異様な、古代の美術品のごとき金属装備である「英雄武装（ヒロイックギア）」を持たせた兵士を5人用意した。ちなみにこの英雄武装は理由不明で稼働しないもので、たんなるこけおどしに過ぎなかった。大体、稼働する英雄武装は武器として前線で大活躍中である。

「――クルヴァーン聖王国より、グレンジード公爵、スィリーズ伯爵がいらっしゃいました」

「うむ」

すべてはこの交渉のためだ。

いかにして彼らを使い、赤い亀裂（レッドゾーン）を攻略するか。こちらの思うように動いてもらうか。それが肝心だ。

開かれた両開きの扉は、まるでサロンにでも続きそうな造りだった。そこにのそっ、と現れたのは分厚い胸板を持つ、見上げるような大男だった。

髪の毛が、それ自体が発光しているかのような青であったことから彼が元聖王、グレンジード公爵であることがわかる。

「――公爵グレンジード。クルヴァーン聖王国女王陛下の命にて参上した」

「卿の来訪を心より歓迎する。さ、座られよ」

皇帝は自分と同じイスを勧めながら、その後ろに現れたスィリーズ伯爵と、どう見ても10代前半にしか見えない少女を見てぎょっとした。

髪の色と瞳の色から、親子であるようだが、いくら貴族家とは言え外交の場に子どもを連れてくるものか……？

しかも、少女の振る舞いの堂々としたこと。さらにはシックな瑠璃紺色のドレスを着た少女は、「ハイエルフの王族」という種族からして見た目抜群のアナスタシアを見慣れてきた皇帝ですら目を剥くほどに、整った顔立ちだった。

瞳はパチリとしているがあどけなさよりも知性を感じさせ、一分の隙もなく梳られた髪は顔の輪郭に合わせて内向きに流れている。健康的なピンクの唇は、うっすらと紅を引いてあるようだった。

「皇帝陛下、このイスに座ることは、少々よろしくないでしょうな」

近くまでやってきたグレンジードに言われ、皇帝はようやく我に返った。

「……と言うと？」
「陛下と同格に見られるのは、我が国としては避けたい。あくまでもこの私は、公爵、いち貴族に過ぎません」
「わかった」
この回答は予想されていたことなので、皇帝が合図をすると、一段グレードの下がったイスが運ばれてきた。
グレンジードは「元」聖王であるが、聖王と同じ扱いをされたくないと言っているのだ。どうも、本心のように皇帝からは見えた。
（見映えを気にするような男ではない、か）
グレンジードがどういう男なのか見極めることも、交渉を有利に進める上では必要だ。
皇帝が視線を、グレンジードの横にずらすとそれに気づいたように、
「同行しているのは、我が国にて内政実務を執るスィリーズ伯です」
「レフ魔導帝国皇帝陛下、以後お見知りおきを」
胸に手を当て腰を折るスィリーズ伯爵の後ろで、娘はその場に片膝を突いて頭を垂れた。
「公爵閣下。そちらの子は？」
「彼女はスィリーズ伯爵の娘、エヴァです。必要があって連れて参りました」
ニィ、とグレンジードは唇をゆがめた。

「その件は、追々話しましょう」

前線の状況について帝国側から説明があった。話をしているのはアバである。全体像から始まり、時系列に従って進む説明は淀みがなく、わずか5分という短い時間ながら、今ここでなにが起きているのかをグレンジードたちは正確に理解したことだろう。

「よくわかりました。……つい昨日まで暮らしていた場所が死地となり、戦闘行為をせねばならない。そのお心、察するにあまりあります」

目を伏せながら言ったグレンジードの言葉尻は震えていた。
それが真心から言われたのだとわかると、もう動かない英雄武装を抱えていた兵士の数人が目尻に涙をにじませた。いや、軍事局長はむせび泣いて鼻までかんでいた。

「聖王国はできうる限りの協力をいたしましょう。最終的なゴールはレッドゲートの封鎖かと考えますが、いかがか？」
「左様。今は近づくことすらかなわぬので、レッドゲートがどうなっているかの観測もできぬ。第1段階は戦線の押し上げ、第2段階は観測チームによる分析。第3段階はレッドゲート研究。第4段階は封鎖作戦……と、この4段階で考えておる」
「妥当なところかと存じます」

それからしばらく、戦線に関する細かな話が行われた。

「ところで――今、帝国はこのような状況ゆえ、国が回復するまでは貴国の厚情に対する御礼ができないものと思う」

「それはもちろん。この場でなにかしてくれなどと言うつもりはありませぬよ」

きっぱりとグレンジードは言った。

ということは、逆に言えば帝国が元の姿に戻ったときにいくら吹っかけられるかわかったものではない、ということだ。

「力強いお言葉、感謝する。しかし卿も、報酬の見込みなく戦闘に移ることはできぬでしょう。そこで提案だが……御礼は我が国最新鋭の船、この『月下美人』でいかがか？」

その言葉に、事前に話を知らされていなかった重臣があんぐりと口を開け、英雄武装を持っていた兵士のひとりが思わず武器を取り落とした。

「それは……ありがたいですが、よろしいのですか」

グレンジードからすれば、先に報酬の話をされ、さらにその内容が今までの帝国ならばけっして手離さないようなものなのだから、困惑するのも当然だ。

「あらかじめお約束することで、存分に武勇を振るっていただけるというのなら、これほど安いものはない。『月下美人』ひとつで国を取り戻せるのならば」

「なるほど……」

腕組みをしたグレンジードだったが、

「わかりました。では本国にはそのように連絡を入れます。反対することはないと思いますが」

「ありがたい」
「――実は、実際に戦闘を行ってから状況を知り、その上でご提案しようと思っていたのですが……1つ、こちらからもお願いがあります」
お願い、という言葉に皇帝は警戒した。
すでに聖王国に入り込んでいる国民の移住を認めよということか？　あるいは「月下美人」を動かすためのメカニックもつけろということか？
警戒とともに次の言葉を待つ。
「レッドゲートに接近し、中に入れるようでしたら、是非ともこの私を送り込んでいただきたい」
「……」
皇帝は聞き間違えたのかと思った。それほどまでに、わけのわからない申し出を受けたのである。
「今、なんと……？」
「『裏の世界』に渡れるようならば、渡りたいのです」
「……」
皇帝が、グレンジードの横にいる伯爵を見やると、眉目秀麗の伯爵が渋面を作っていた。
この公爵、本気だ。
「……いったい、なんのために？」
あまりにも予想外過ぎて、それしか聞けなかった。

「恩人を救うためです」

グレンジードはきっぱりと言い切った。

「そのために私は自ら最前線へと向かうことを決心し、ここに――我が軍の秘密兵器となりうる、エヴァを連れてきたのです」

そう言えば、この場には不釣り合いの少女がいたと皇帝は思い出す。

エヴァは父とは違い、グレンジードの言葉に苦々しい表情をするでも呆れるでもなく、熱心に話を聞いていた。

「その少女が、いったいなにを？」

さっきから自分が、バカのように、相手の言ったことを聞き返しているだけだと皇帝は気づきながらも、さすがにこの状況ではどうしようもなかった。

「彼女には天賦によらない特殊な力があります。『鼓舞の魔瞳』――これは、前線での戦いを非常に有利にする力がある」

「そして、わたくしもまた、グレンジード公爵と同じように、ある人を救いたいのです」

そこで初めて少女が口を開いた。

涼やかで、知性を含みながらも、「ある人」という言葉に熱が込められていた。

36

★　レフ魔導帝国・レッドゲート最前線　★

騎士団と1万人の騎兵、という援軍はレッドゲート最前線で戦っているレフ魔導帝国民、冒険者たちに大いなる安寧をもたらしたのだが、一方でこれだけ大規模な人員がやってくると大変な騒ぎになる。

なにせ人間だけでなく馬もいるのだ。

移動速度を優先させたために騎兵を運用した結果、最前線基地には収容しきれず、離れた丘にクルヴァーン聖王国軍は布陣することになった。

向かいの丘にはキースグラン連邦の先遣部隊3千人が布陣しており、これから9万7千人が追加されるのだから一帯の草木は馬に食い尽くされるかもしれない。

ちなみに光天騎士王国は1千人の派兵を予定していたが、支援規模が大規模になってくるとたった1千人で済ませるのは「沽券に関わる」ということでクルヴァーン聖王国と同数の1万人に増やすことが決まっていた。

「俺は戦争になんざ出たことがなかったからわからなかったが、こんだけ大規模にやるんだろうなあ……。そりゃ大量に人が死ぬわけだ」

1万を超える軍勢が陣地構築に当たっているのを遠目に眺めながらダンテスが言うと、ルルシャが応えるように、

「しかし、ありがたいことだ。戦力の多さは前線の押し上げに直結する」
「確かになあ。今は日中にぐいぐいモンスターを倒しまくっても、夜には引かなきゃならん。これが攻撃と、前線基地構築とが並行できると攻略は一気に進む」
「……」
「どうしたんだ？　難しい顔をして」
「……実はな、私にも出動命令が出た」
「ん？　アンタがか？　アンタ……前線で剣を振り回すのか？」

ダンテスの質問にルルシャは噴き出すように笑う。

「違うさ。私の仕事は迷宮攻略だ」
「なんで迷宮攻略の話が今出るんだよ」
「レッドゲートの出現に『九情の迷宮』が関わっていることは明らかだろう？　レイジさんが残してくれた『畏怖の迷宮』の壁画からもうかがえる。だから、我々は迷宮に侵入してレッドゲートをコントロールできないかの調査をするのだ」
「ははぁ……なるほど」
「できれば、『銀の天秤』にも来ていただきたいのだが……」
「そりゃ、構わないさ。なあ？」

同意を求めたのは、後ろから歩いてくる人物が誰なのかわかっていたからだ。

「もちろんだべな！」

ミミノだった。

「レッドゲートがコントロールできるようになれば、レイジくんを捜しにいける」
「ふふ。皆、レイジさんのことをほんとうに思っているのだな」
「レイジくんはダンテスやノンの恩人で、かけがえのない……」
言いかけたミミノだったが、
「仲間？　うーん、それだとちょっと足りない気がするべな」
「いいとこ、息子じゃないのか」
「そんなに年は離れてないもん！　姉弟くらいだべな！」
むすっとしてミミノが言い返すとダンテスが笑う。
「ははは、すまんすまん――ん、あっちは会議が終わったようだぞ」
指差したのは飛行船「月下美人」の甲板だった。
皇帝を始め、帝国の偉そうな人たちが群れている中にアバがいる。
その彼らとともに歩いているのが青色の髪が目立つグレンジード公爵、それに驚くほどの美男子であるスィリーズ伯爵だ。
「……なあ、レイジのこと、あそこの伯爵に伝えてやったほうがいいんじゃねえかな」
クルヴァーン聖王国でレイジがどんなことをしてきたのか、ダンテスたちは聞いていた。レイジの口から、伯爵の悪口が出てきたことは一度としてない。
きっと向こうも、レイジのことを聞きたがるのではないか、とダンテスは思ったのだ。
「絶対教えん」

即座にミミノは否定した。

「あんなに可愛くて賢くて健気なレイジくんを追い出したクルヴァーンの人間に、レイジくんのことなんてぜぇったい教えんもんね」

「おいおいミミノ……。レイジはあそこの伯爵のお嬢様のことは、めちゃくちゃ気にかけてたじゃねえか。ウワサじゃお嬢様も連れてきたようだぞ。アイツらもアイツらでレイジのこと気にしてここまで来たんじゃねえのか？」

「ヤダ！　ぜぇったい教えん！」

「あのなあ、ミミノ……」

「ヤダ！」

つーん、と腕組みしてそっぽを向いたミミノ。

ダンテスは「お嬢様」というワードを出した瞬間、ミミノの態度がさらに硬化したことに気づいていた。

（あ～……失言だったな）

レイジが気にかけていたのは伯爵家のお嬢様だ。そのお嬢様についてはレイジもべた褒めだった。

そんなときミミノはむすっとした顔をしていたのだ。

（ミミノからしたら、保護されるだけ保護されておいて、どうしてレイジを守ってやらなかったんだって思いなんだろうなあ、その「お嬢様」に対しても）

ミミノの思いもわかる。

だが、なんたってお嬢様は１２歳だ。

１２歳にそこまで求めてどうすると思う。言わないが。

（にしても、当のお嬢様が見当たらねえな）

甲板上に、少女の姿はなかった。

★　月下美人　客室　★

そのお嬢様はレフ人に案内され、客室へとやってきた。

彼女にも護衛の聖王騎士団の騎士がついてきていたが、彼にはここで待つように言い、ドアをノックしてから室内へと入った。

中にいたのは白衣を着たレフ人だった。初老の医者は、

「おや……ヒト種族の客人とは珍しいね。患者は今し方眠ったところだよ」

と言い残し、次の患者の診察へと向かった。

部屋に残ったのはエヴァと患者のふたりきりだった。

さほど広くはない室内で、ベッドの占める割合は大きい。眠っているのは――エヴァよりも5歳ほど年上の少女だった。

「この方が……今の前線を維持している、特別な天賦を持つ方……ラルクさん」

ふたりの、初めての出会いだった。

37

★　月下美人　客室　★

スィリーズ伯爵が集めた情報と先ほど会議で聞いた情報とは一致していた。

今のレッドゲート戦の戦線を維持しているのはたったひとりの少女、ラルクのおかげであると。

レッドゲートから落ちてくるモンスターはこちらの世界ではなかなか見ないほど強く、中には熟練の冒険者でもまったく歯が立たないようなヤツもいた。

そんな厄介な――「厄介」という言葉だけで片づけられないような強敵だが――相手を専門に戦っているのが、ラルクだ。

希少な天賦を持っており、彼女が凶暴なモンスターを討ち滅ぼすので戦線は維持されている。

（そんなふうには、見えないのだわ……）

寝息を立てている少女は痩せており、満足に食べていないのか肌の色も悪いようにエヴァには思えた。長い金髪もちゃんと手入れをすれば美しいはずなのに、もったいない――。

「！」

エヴァがそっと手を伸ばし、ラルクの目元に掛かっていた前髪をどけてやろうとしたときだった。

その手を、つかまれた。

「――アンタ、誰」

寝息を立てていたはずのラルクがきろりとエヴァをにらんでいた。

しかしエヴァはそれに恐ろしさを感じるのではなく、

（なんて美しい瞳）

そう思った。

紫水晶（アメシスト）を思わせる、輝きと深みのある紫色の瞳は大きく、長いまつげがどこか憂いを添えていた。

薄い唇から放たれた言葉の鋭さは、敵意を感じさせるものではなく、純粋な疑問を発しているのだとエヴァは理解した。

「わたくしはエヴァ＝スィリーズ。特別に許可を得てここにいますわ」

「許可ぁ？　あの皇帝が、アンタをここに寄越したっての？」

「はい」

偽りはなかった。

レフ魔導帝国にとってラルクは「月下美人」を盗んだにっくき空賊ではあるのだが、なんと返してくれたし、さらには最前線で戦うと立候補までしてくれた。

その戦果はすさまじく、ラルクは一躍、帝国にとってかけがえのない存在になっていた。

だからそう簡単に人を近づけはしないだろう――とラルクが考えるのは当然だ。

皇帝が許可を与えたのには理由がある。

ひとつはエヴァが見た目からして幼く、さらには貴族の娘であるので妙なことはしないだろうということ。

そしてもうひとつは――彼女が持つ特別な能力がゆえだった。

「ふーん……お子様にしか見えないけど、アンタも『やる』ってわけね」

ラルクはそう言うと、エヴァの手を離し、身体を起こした。

「おやすみになっていても構いませんわ」

「ジョーダンじゃないよ。知らねー女の子がいるっていうのに、高いびきかいてられるほど図太くないから。で？　アンタ、なにしにきたの？」

エヴァは、言葉を選んでこう言った。

「ラルク様のお話を聞きに」

「アタシの話だぁ？　はは～ん、帝国の皇帝は、アタシから天賦の秘密を聞き出すためにヒト種族のアンタを寄越したってことか。さすがレフ人。ずるい」

「そ、それは誤解です。わたくしはクルヴァーン聖王国から来ました。レッドゲートでの戦いに参加するためです」

「……アンタみたいな小さな子が？」

「これでも聖王国では一人前の貴族として活動していますわ」

「ふーん……。貴族ってよくわかんないわ」

ラルクは無条件でエヴァのことを信用したりはしないが、しかし警戒は多少解いてくれているようだった。

それはエヴァの狙いでもあった。

「でも、アンタみたいな小さい子を担ぎ出さなきゃいけないほど、聖王国って人材不足なの？」

あくまでもラルクはエヴァを「小さい子」扱いするようだ。

「いえ、わたくしの意思で参りました」

「なんで？　血なまぐさいことが好きそうには見えないけど」

「わたくしにとって、とても大切な人がここにいるからです」

エヴァは胸に手を当て、その人物のことを思い浮かべた。

考えるだけで胸が温かくなり、いてもたってもいられなくなるような人だ。

「……そうなのか。アンタも苦労してるんだね……」

一方のラルクは、「これは恋だな。しかも相手はレフ人かよ。種族を超えた恋はクソ大変だろうなぁ……しかも貴族だろ？　どうすんだよ。苦労人だなぁ」と思っている。

「その幸せな野郎はなんて名前なんだい？」

「はい。レイジと言いますわ」

「レイジ、か……いい名前じゃねえか」

「ラルク様は――」

「ラルク、でいいよ。貴族に『様』付けされると背中がむずがゆい」

「では……ラルクさんは、自主的にこの飛行船を返却し、自ら前線で戦っていると聞きましたわ。どうしてそのようなことに？」

「どうして、かぁ」

ふう、と小さく息を吐いたラルクは、狭い室内の壁へと視線を向けた。そこにはなにもなかったけれど、確かに彼女は特定の人物を思い浮かべていた。

「……弟がいるんだ」
「弟さん、ですか」
「アタシに似ないで出来がよくてさ……。アイツとは生き別れになっちまったけど、いつかどこかで会えると信じてる。もしもアイツが今この状況に直面したら、きっとできる限りの力を使ってなんとかするはずだ。だから――アタシもそうしたい。再会したときに、胸を張って、『自慢の姉』でいたいからさ」

ラルクの言葉はすべてがあけすけで、貴族世界に生きているエヴァにとっては新鮮だった。そんな彼女の言葉の中でも今の内容がいちばん、胸に響いた。

「……ラルクさんの活躍振りは帝国民全員が知っていますわ。弟さんは絶対に喜ばれると思います」
「そうかい？　へへ、照れるね……不思議だな、アンタには素直に話しちまう」

にっ、と笑って見せつつ照れくさそうに鼻の頭をかいたラルク。
ラルクを見ながらエヴァはエヴァで、「ラルクさんの弟さんは、ラルクさんに似て金髪で線が細く、紫色のキレイな瞳を持った人なんだろうなぁ」と思っている。

「ちなみに弟さんはなんというお名前なんですか？」
「名前？　ああ、そういや弟くんに名前はなかったな」
「……え？」

なんだかすさまじい答えが返ってきた。そのときエヴァはハッとする。どうやらラルクの強さはすさまじい肉体的な反動があるらしく、彼女は衰弱している。弱った彼女が見た幻影が「弟」なのではないか……？

でなければ「弟の名前がわからない」だなんてことはないはずだ。

「まあ、細かいことは気にすんなよ！」

「え、ええ、そうですね」

あははは、とラルクが笑い、ほほほほ、とエヴァが笑う。

「……アンタも、いろいろ大変だろうけど負けんなよ」

ラルクが言ったのは、「レフ人との恋は大変だろう」という意味だった。

「ありがとうございますわ。ラルクさんも……お、弟さんに早く会えるといいですね」

エヴァが言ったのは、「実在しない弟のためにがんばるなんて、どこまで健気な人なのだろう」という意味だった。

よもや。

同じ人のことを言っているとはふたりとも、思っていない。

「ラルクさん、わたくしにはひとつ能力があります」

「能力……天賦のことか？」

「いいえ。スィリーズ家に伝わる特殊な能力です。それはこの目なのですが」

人差し指でエヴァは緋色の瞳を指差した。

「『鼓舞の魔瞳』というものです。魔力を込めると、この目を見た者の戦闘意欲を高める能力があるのですが……最近わたくしも知ったのですが、もうひとつ付随する能力がありまして」

エヴァが「鼓舞の魔瞳」を扱えるようトレーニングを始めたのはつい最近だ。それは、レイジが「『鼓舞の魔瞳』は『審理の魔瞳』とは違い、多くの人に役立てる」と励ましてくれたというのも大きい。

【魔力操作★★★★】の天賦のおかげでコントロールできるようになった「鼓舞の魔瞳」は、新たな能力を開花させていた。

「魔法とは違う角度から、生命力を、魔力を、与えることができるのです。ラルクさんの肉体の衰弱が激しいと聞き、是非ともお役に立てないかと思い、参りました」

その能力があったからこそ、レフの皇帝も1対1でラルクと会ってもいいと請け合ったのだ。物は試しという言葉もある。

そして「鼓舞の魔瞳」の新たな力を使うには、相手との心の距離が近くなければならない。

だからエヴァは、ラルクと世間話をした。必要な世間話だったのだ。

「……ほんとかよ」

疑わしそうにラルクはエヴァを見る。

ラルクは、自分の不調を治すために「月下美人」を奪い、高名な医師の元へと飛ぼうと思っていたほどなのだ。

「信用できなくても構いませんわ。やるだけ、やってみませんか？」

エヴァの瞳は、ラルクの目とは違う美しさをたたえていた。

その瞳に引き寄せられるように――ラルクは、こくんとうなずいた。

37（後書き）

次話からレイジ側の視点に戻り、「裏の世界」の話が一気に進みます。

もしよろしければ、ページ下部の「★」から「評価」をお願いします！
また「ブックマーク」も是非。
作者が書き続けるモチベーションとなりますので～～～！

38

照りつける陽射しが厳しくて、まさに盛夏という感じだ。
どうやら「表の世界」も「裏の世界」も季節は同じらしい。
そんな状況だというのに熱い風呂に入りたがる竜人たちだったけれど、彼らは風呂で脱皮のときに残った鱗を取ることが目的になっているので――しかもそれはヒト種族の僕には想像もできないほど気持ちのいいものらしく――大浴場は連日大盛況だった。

「もう、風呂を知らなかったころには、戻れないぬろぉ……」

緑の長老がニタリと笑ったのを見て僕はひょっとしたらとんでもないものを彼らに教えてしまったのではないか……とそんなことを思った。いや、まあ、ただの風呂なんだけど。

「それじゃあ、思いつく限りいちばん古い居住区はここだということなんですね」

今日、僕は竜人都市の中でもいちばんの物知りである長老たちから改めて情報の聴き取りをしていた。ちなみに彼らは大浴場にぷかぷか浮いていて、僕は浴場の外でメモを取っている。
もう、取れる鱗なんて残っていないはずなのに長老たちは日々、大浴場にやってきた。
僕が知りたかったのはラ＝フィーツァの足跡だった。
彼がどうやって「表の世界」に渡ったのかを知りたかったのだ。
なので、大陸を転々としている竜人の居住区の中で、いちばん古い場所を教えてもらった――それはクルヴァーン聖王国の聖王都近辺だった。地底都市にも多少近い。

（でもなぁ……エルさんが言ってたことで気になることもあるんだよなあ）

聖王国の特級祭司であるウサギ、エルさんはこんなことを言っていた。

――え、もとより、『裏の世界』については現在は観測できませぬ。太古の昔には行き来があったようですが、その往来を止めるために世界をつなぐ門を閉ざしました。

太古の昔、がどれくらいかはわからないけれど、もしもそれがラ＝フィーツァの生きていた時代よりずっと前であることを願うしかない。

（大体「門を閉ざした」って誰が「門」を操ってるんだよ。神か。神だな）

魔法や天賦珠玉と言った、科学ではできないような要素がいっぱいあるこの世界だから、神様がいてもおかしくはない。「銀の天秤」のノンさんは教会に所属していて、教会は神を信奉しているはずだ。それが実在しているかはわからないけれど。

「スーメリアさん、せめてスプーンは使って食べてください」
「……」
「話しかけられたらお返事をお願いします」
「……」

キミドリパパのお屋敷の食卓では、素手で食事を食べるスーメリアにアーシャが注意をし、スーメリアがつんと無視していた。
どうもふたりの間はうまく行っていない。というより幼児返りしているスーメリアをどうするかという問題があるんだよな……。あのまま放っておいたら危ない気がして連れ出したけど、よくよく考えれば彼らの言い分もちゃんと聞いたほうがよかったかも。
でも先日聞いたところスーメリアには親がいないらしい。「もう死んだ」と無邪気に言われたのだ――逆に言えばそれを聞いたからこそアーシャがやる気を出してスーメリアを教育しようとしているフシがあるのだけど。

「まあ、まあ、ゆっくり学んでいけばいいんだぬ！」
「ええ、ええ、キミちゃんも手が掛からなくなったからぁ、寂しかったのよねぇ……」
キミドリパパとキミドリママが言ってくれた。

「――レイジくん、この街を出ようと決めたのかぬ？」
不意にたずねられ、僕はフォークを下ろした。
そうか、僕の雰囲気が違うことで悟られたのか。

「どういうことですか、レイジさん」
アーシャが戸惑ったようにし、スーメリアもきょろきょろした。

「はい、実はなるべく早く出ようかと。アーシャには食後に相談しようかと思っていました」
「目的地が決まったのかぬ？」

僕はうなずき、まずはいちばん古いという居住区に向かうことを伝えた。

そこになにか手がかりがあるかもしれない――ないという可能性のほうが高かったのだけれど、それでも他に可能性がまったくないので行ってみるしかないのだ。

「未開の地カニオン」に亀裂があるかもしれなかったが、そこの探索はラ＝フィーツァの足跡を調べてからだと思っていた。どう考えても危険がいっぱいだからね。

「そうなのですね……。あの、レイジさん。私もいっしょに――」

「もちろん、アーシャもいっしょに行きましょう」

不安そうだったアーシャの表情がパァッと明るくなる。

「は、はいっ！」

連れて行くことに危険はある。

だけど、あんなに寂しい思いをさせてしまった以上は、どうしようもない。

レフ人の曹長にも聞いてみよう。アーシャを絶対連れて行くなとは言わないと思うのだけれど。

「……」

スーメリアが僕を見ていた。

そう。彼女を連れて行くべきかどうかだけは迷っていた。

「……君は、この街にいるのが最善だぬ」

その先に回り込むようにキミドリパパが言うと、ハッとした顔でスーメリアが顔を上げた。彼女は自分から話すときには幼児語だったけれど、こちらの言葉は8割ほど理解できているようだった。

「いや」

はっきりと、なんの誤謬も発生しない否定の言葉をスーメリアは吐いた。

「彼にはなすべきことがあるんだぬ。それを見送るのが君の役目」
「いや」
「その気持ちは理解できる……」

キミドリパパは腕を組んで天井を見上げた。
これ以上、キミドリパパに言わせることはよくないと僕は思った。彼女を連れ出したのは僕で、そしてまたここに置いていこうとしているのも僕なのだ。

「スーメリア――」
「レイジさん」

僕を止めたのはキミドリママだった。小さく首を横に振った。言うな、というのだ。
なぜ？　僕が言わなければきっとスーメリアは納得しない。

「……街の外が危険であることは、スーメリア、君もよくわかっているだろう。レイジさんは自分で自分のことを守ることができるんだぬ。だが、君は」
「いやぁぁぁぁあああ！」

大声で遮ったスーメリアは立ち上がり、食べ物で汚れた指でアーシャを指差した。

「ん！　んー！」

きっと、アーシャだって同じだろうと言うのだ。スーメリアよりも年下のアーシャを連れていくのに、どうして自分を連れていかないのかと。

「彼女には覚悟があるんだぬ。彼女は、自分が足手まといだと思ったら自ら命を絶つ……そんな覚悟を持っている」

え。

アーシャは、そんなふうに思っていたのか？

思いがけないキミドリパパの重たい言葉に、僕はアーシャを見た。

アーシャは口元を引き結びなにも応えなかった。

「いや！　いやいやいや！　いやー！」

スーメリアはぼろぼろと涙をこぼしながら叫ぶと、食堂を飛び出していった。

彼女を連れ出してからここまで、あんなふうに取り乱したのを見たのは初めてだった。

しばらくしたら死にそうだった肌の色もよくなり、唇も艶を取り戻していた。天賦珠玉を抜いたおかげだというのは明らかで、記憶の障害は残っているものの、生活を送るにはなんの不自由もない。

それほどに回復していたのだ。

「……どうして、僕に言わせてくれなかったのですか？　僕が言えば、スーメリアは納得したでしょう」

思わずそう聞いていた。するとキミドリママが、

「そんなに背負わなくてもいいのよ……あなたもまだまだ、子どもなんだから」

ふとそのとき、キミドリママと僕の距離は離れていたというのに――頭をなでられたように錯覚した。

泣いた幼子に対して母が頭をなでるような感覚だった。

（まだまだ、子どもか……）

こうして子ども扱いされたのは、ずいぶん久しぶりだ。久しぶりすぎて、どんな顔をしていいのかわからなかった。

キミドリママは、僕がやったことに僕がケリをつける、そのことを「重荷を背負っている」と思ったのだ。

「スーメリアとの思い出は、とげとげしたものにしないほうがいいんだぬ。ここに残る我々はいくらでも、スーメリアと楽しい思い出を作れるのだからぬ。君たちは、後顧の憂いなく旅立ちなさい」

キミドリパパもまたそう言ってくれた。

「ありがとう……ございます」

その気遣いの温かさを感じながらも、それでも僕は「これでいいのだろうか」という気持ちでいっぱいだった。

39

レフ人の曹長たちに意見を聞くと、僕が「表の世界」に戻る手段を探すことは大歓迎だと言ってくれた。ただ、3人ほど体調を崩した者がいて、ついていくことができなさそうだという。

そのためにアーシャと僕の2人で行くのは危険だという意見だった。

とはいえ――僕らの意思が固いことがわかると、最後は納得してくれた。

「スーメリアはどうですか？」

その日の夜にお屋敷に戻ってキミドリママにたずねると、部屋にこもって出てこないらしい。

最悪、お別れもできないままかな……。

明日は早くから出発する予定だった。

「そう言えばキミドリゴルンさんもいませんね」

「あの子ねぇ。なんだかやりたいことが見つかったみたいで、あの子も部屋にこもりっぱなしなのぬ」

ああ、きっと魔術の開発だな――と僕が思っていると、

「湖畔でわけのわからない研究をしてたときと同じ感じなのよねぇ」

「……」

さすがに「ゆで卵判別機」よりはマシだと思うんだけど……。

「――レイジさん」

部屋で旅支度を進めているとアーシャが言った。

「どう……思いますか？　スーメリアちゃんのこと。私は……その、彼女も連れて行ったほうがいいと思うのです」

意外な発言だった。

スーメリアとアーシャは、お世辞にもうまくいっているとは言いがたかったのに、いっしょに行動すればケンカばかりになるだろう。

「……どうしてですか？」

「その……ひとりで残されることのさみしさはわかりますし、他の種族の町にたったひとりでいることのつらさもわかりますし……あ、で、でも、レイジさんがスーメリアちゃんを救ったことについては英断だったと思うのです。でも、その……ええっと」

両手をグーパーしてアーシャは口をあわあわしていたけれど、

「ご、ごめんなさい……なんだか、わかりません。頭がこんがらがってしまって……わたし、こんなふうに自分の思いを、複雑な考えを、口に出すことに慣れてなくて」

「――連れて行きましょうか」

「えっ」

「アーシャがそこまで言うのなら、スーメリアを連れていっても構わないと思います」

驚いたような顔をしていたアーシャは、一転して、じんわりとしたお湯に浸かったように微笑んだ。

「はいっ！」

だけど、

「――行かない」

部屋の入口から声がして、驚いて振り向くとそこにはスーメリアがいたのだった。

ドアを細く開けて、そこに彼女の赤い目が光っている。まるでホラー映画だけれど正体がわかっているので安心安心……じゃない。部屋にこもっているはずのスーメリアがどうして？　と思っていると、

「いっしょに行く」

ドアをバンッと開いてスーメリアは言った。たたたと走って僕の腕をつかむ。年齢的には彼女の方が上なのだけれど、明らかにその行動は幼児のようだった。

「……つもりだった」

「つもり？」

「ん」

こくり、と大きくうなずいたあと、

「でも、やめたの」

「どうして……？」

スーメリアはじぃっとアーシャを見つめた。

「……連れて行かれるの、や。行く、行かない。決める」

その言葉に打たれたように、アーシャの背筋が伸びた。

「自分で決めたかったのですね……」

他ならぬスーメリアが言うと、重みを感じた。

地底都市から勝手に連れ去ったのは僕だ。薄れ行く記憶の中で彼女がなにを考えていたのかはわからないし、過去になにがあったのかはわからない。ひょっとしたら天賦珠玉もまた勝手に与えられたものなのかもしれない。

彼女は、自分で自分の未来を選びたいのだ。

だから、周囲に決めて欲しくないのだ。

「……いいのですね、スーメリアちゃん」

「ん」

「もう、レイジさんとは会えないかも知れませんよ」

「んーん」

ふるふるとスーメリアは首を横に振ってから、アーシャを指差した。

「負けない」

「……え？　それはどういう――」

次にスーメリアがとった行動は完全に予想外だった。

僕の腕を引くと、頬に唇を当てたのだった。柔らかいけれど、いまだ少し荒れている感触とともに「ちゅっ」と小さな音が鳴った。

「な、な、な、な」

とアーシャが震え、

「レイジ」

スーメリアは僕の顔をつかんで自分の顔へと向けた。

「――また会う。会いに行く。ぜったい……」

そう言うと――それはまるで宣戦布告のような言い方で――たたたと走って部屋を出て行ったのだった。

ちゃんとドアを閉じないところも幼児のそれで、ギィ、と音が鳴ったまま中途半端な角度でドアは止まった。

「なあ～～～～～～～！？」

ボン、ボン、ボン、ボン、とアーシャの周囲で火の玉が爆ぜた。

僕とアーシャはふたり、早朝から竜人都市を出ることにした。

多くの竜人が見送りに来てくれて、中には泣いている人もいた……「これから大浴場ナシでどうやっていったらいいんだぬろぉ……」という長老たちだったけどね。

「レイジ！」

すると見送りの人垣をかき分けて、キミドリゴルンさんが出てきた。

しばらく見なかったなと思っていたのだけれど、服は汚れてくた

びれている。
そして手には水差しと、金属の箱のようなものを持っていた。
「――できたんですか？」
「試作品（プロトタイプ）だけどぬ」
水差しからじょろじょろと水を出すと、金属の箱に当たったそれは、ぷくぷくと気泡を発し、ほんのりとした湯気を立ち上らせた。
朝日に照らされたそれは黄金色の湯気だった。
「気をつけて……なんて言わなくても、大丈夫だろうけどぬ。言わせて欲しい。必ずまた会おうぬら！」
「はい」
両腕を広げたキミドリゴルンさんに抱きすくめられると、金属や触媒の混じった、陰気なニオイがした。
だけれどその力は確かな強さだった。
「いってきます！」
そうして僕とアーシャは竜人都市を出た。
目指すはラ＝フィーツァの足跡だ。
この大陸のどこかに、「表の世界」へと戻る道筋がきっと、ある。

39（後書き）

別途書いております拙作「学園騎士のレベルアップ！」のコミカライズ版が明日、発売となります。
こちらもよろしくお願いします～。

40

地底人の警邏ルートを外れ、聖王都クルヴァーニュのあった場所を目指すこと3日、僕とアーシャは長い森を抜けて平原に出た。
だけれどそこは、僕が以前見たとおり、荒れ果てた大地だ。
遠くからの見通しもいいために、僕とアーシャは夜になるのを待った。

「……どうして『表の世界』と、こうも違うのでしょう」

焚き火を見つめながらアーシャが言う。

「言葉は同じですが、世界そのものが違っているように私には感じられます」
「そう……ですね」

長い年月を掛けて様々な変化があったのだろう、としか言えない。
でもそもそも、どうして世界が2つに分かれる、なんてことになったのか。
神はいるのか。
疑問は尽きない。

「言葉だけが同じで、他のものすべてが違うのではないか……そんな気さえします」
「なるほど。では、今日は他にも同じものがあるかどうか確認できるかもしれませんね」
「どういうことですか？」
「僕はクルヴァーニュで『一天祭壇』を見たことがあります。それ

がこの世界にもあるのなら……と思いまして」

夕陽が沈み、僕はアーシャとともに行動を開始した。

月明かりの下、荒れ地を進む。足場は悪いのでゆっくりと進むしかない。

変わり映えのしない景色を進んでいくと、自分がどこを歩いているのかがわからなくなる。計算では明日の朝にならないくらいに、「一天祭壇」の場所に到着するはずなのだけれど……大きな岩や枯れ木があって見通しが完璧とは言えない。

「ん……」

そのとき僕は、足の裏に震動を感じた。

「！　アーシャ、逃げるよ！」

僕はアーシャの身体を横抱きに抱えるとダッシュした。

ドッ――と地面が爆発すると、土くれとともに巨大な何かが地中から飛び出した。

地面が隆起して僕の身体は前へと投げ出されるけれど、【風魔法】を使って空中で体勢を整え、着地に成功する。

振り返ると、そこには巨大なゴカイ、あるいはミミズ、あるいはシャクトリ虫のような管状の生き物がそびえ立っていた。

樹齢数百年という神木もかくやという太さ。

体表は柔らかそうだがイボがびっしりとあり、先端は口だけがあった。

吸い込み、すりつぶすための口なのだろう、歯は丸い石のようで開かれた口にびっしりと並んでいる。

『ピィイイイイイ！！』

ヨダレをまき散らしながら叫んだその姿に、アーシャが身体を強ばらせ、その視線が危うくなり――、

「アーシャ、今、気を失うのはマズイです」

「――ハッ」

僕が背中をトンと叩くと彼女が目覚めた。

「だ、大丈夫です……ごめんなさい」

「いや、あんなの見たらふつうはそういう反応になりますよ」

ここが砂漠ならサンドワームなんて呼ぶのだろうけれど、あいにく地面は固い大地だ。

言うなれば「土壌食い（ソイルワーム）」と言ったところか。

ソイルワームは自分の身体の使い道をよく理解している。最初の一撃で仕留められないとわかると、身体を傾けて一気に薙ぎ払ってきたのだ。

「【風魔法】」

だけれどそのスピードは今ひとつだ。巨体にまとわりついている気流も利用して、【風魔法】でブーストをかければジャンプしてかわすこともたやすい。

「にっ、逃げたっ、ほうが、よろしいのではありませんか！？」

「はい。そうしたいのですが」

アーシャの指摘は正しい。ソイルワームの身体は長さが決まっている以上、それよりも遠くに逃げれば追ってこられないはずだ。ク

ルヴァーン聖王国で僕が戦ったウロボロスとはワケが違う。
だけど――ことは単純じゃない。
ぼこり、ぼこり、とあちこちの地面で、何者かがうごめく気配があったのだ。

「アーシャ！　掴まって！」
「もう、とっくに！」
「行きます！」

だからと言ってここで1匹仕留めたところで意味はない。
ぶうううううんと振り回されたソイルワームの身体が、1周してまた戻ってくる。
アーシャが僕の首にしがみつき、それを左手で支えると僕の右手はフリーになった。
もう一度ジャンプして直撃をかわしつつ――ミュール辺境伯からもらった短刀をソイルワームに突き立てた。

「いよっ……とーい！」
「きゃあああああああっ！？」

短刀1本でソイルワームに乗っかるとすさまじい遠心力とともに高速で振り回される。
進行方向へと回っていくというところで短刀を抜くと、僕とアーシャは宙に投げ出された。

「きゃあああああああ――」

ぼっ、ぼっ、ぼっ、とアーシャの周囲に火の玉が現れては爆ぜていく。
僕らとともに火の玉が、暗い夜の中で放物線を描いていく。

地面が迫る。僕は【火魔法】で落下の衝撃を緩め、着地、と同時に【風魔法】で身体を前へと進める。

ドッ。

直後に僕が着地したすぐ横の地面からソイルワームが飛び出した。【身体強化】【跳躍術】【強化魔法】とのコンビネーションで僕の歩幅はすさまじく伸びているのだけれど、着地のたびにドッ、ドッ、ドッ、とソイルワームが飛び出してくる。

なんという地雷原。

「あっ、あっ、あっ、あっ」

アーシャは着地の衝撃とともに息と声を同時に吐き出すだけの存在になっていた。

だけど地雷原にも終わりは来る。

「ここまで！」

最後の跳躍は大ジャンプだ。

その先にはもう大地がないことがわかっている。

着地と同時に僕が踏みしめたのは――ひび割れているながらも、石畳だった。

遠目にはよく見えなかったけれど岩のように見えたのはがれきで、砂埃によって覆われていたけれどここは整備された道路だった。

風化が進んでいてそうは見えなくなっている。

はるか昔に遺棄された都市なのだ。

だけど、

「……お前たち、何者ダ？」

着地した僕の正面には１０人ほどの人影があった。
この世界にいるのは竜人、地底人、そして――。

「あなたたちが、ダークエルフですか」

初めての接触となる種族が、そこにはいた。

41

紫がかった肌の色に、エルフ同様長い耳。
髪は銀の直毛で、目は琥珀色。
うん、想像していたとおりの種族――ダークエルフだ。
でも、

「デカミミズが暴れとったから、どんな猛者がくるかと思ったのに……なんダ、ちびっこいのう！」
「そうダそうダ。なんだその筋肉は、飯食ってないのか」

想像外だったこともある。
どこか暗さを思わせる端正な面持ちは想像通りだったのだけれど、そのアゴから下。
ラグビー部かよというくらいの太い首。
プロテクターいらずの盛り上がった二の腕。
服など要らないとでも言いたいのかタンクトップのような衣服は胸元を隠しているだけで、シックスパックになった腹筋を見せつけている。
下半身もすごくて、競輪選手のように膨れ上がった大腿部はすさまじい蹴りを繰り出しそうだ。
問題は全員が、そうなのだということである。

（ダークエルフは、マッチョだった……！？）

内心の動悸を抑えながら、僕はアーシャを後ろに隠すようにして守る。
女だとわかると狙われたりと面倒があるかも知れないので、彼女

にはフードを目深にかぶるように言ってある。

「ここは……ダークエルフの集落なのですか？」

「集落？　なにを言っているんダ。お前たち地底人だってこのあたりを最近はうろついているダろう。……ん？」

光が足りないと思ったのか、リーダーらしき長身の男――2メートルくらいはある――2メートルのマッチョだ――が手に松明を取るとそこに【火魔法】で火を点けた。

天賦だ。

「お前……地底人にしては肌が黄色い。竜人にしては鱗がない。何なのダ？」

「ヒト種族ですよ。ごくごく一般的な――ただしこっちの世界では絶滅したはずの」

「……なにを言ってる？」

「僕らはここに用があるのです。できれば邪魔をしないでいただきたいのですが」

「……」

ダークエルフたちは目配せし合った。そして一箇所に集まると円になって額を突き合わせる。

「――アイツなに言ってんダ？」

「――わからん。ちょっと頭の痛い子かも」

「――ほっとく？」

「――ほっといたら野垂れ死ぬダろ」

「――でもデカミミズをかいくぐってきたんダろ」

「――とは言っても運がよかっただけかもしれないぞ」

「――んでどうするんダ。話が長引くから、ニンタとケッチが腹筋

とスクワットを始めた」
「――こらえ性のねえ野郎ダ」
「――言いながら腿上げしてんじゃないよ」
「――ああ、筋トレしたい」
「――わかる」
「――わかる」
「――わかる」

パッ、と円が崩れて、また2メートルがこっちにやってきた。

「協議の結果、夜も遅いしとりあえずウチに来たらどうかということになった」
「いやなんで!?」

思わずツッコミしちゃったよ。

「協議っていうか筋トレの話題でしたよね、後半！」
「なんダ、聞いていたのか……」
「照れるとこ？　視線逸らして鼻の下をこするとこかなここ？」
「敵対しなければ、別にいい。ついて来い」

それだけ言うとダークエルフたちは石畳を奥へと進んでいく。数人、ジャンピングスクワットしながらついていくんだけど誰もなにも言わない。

「……」
「……あの、レイジさん」
「ごめん、僕に聞かれてもわからないです」
「ですよね」

暗くてなにもできないのは事実なので、僕らはダークエルフたちの後についていくことにした。

夜明けまでの2時間ほど、仮眠ができた。魔法を使い、肉体も酷使しまくりだったので体力の回復をしたかったので仮眠ができてよかった。

空がうっすら明るくなっている。枝と枯れ葉を敷き詰めただけの寝床で身体を起こすと、うーん、と横の寝床ではアーシャが寝苦しそうにしている。

これまで最高級品のベッドしか使ってこなかったアーシャも、こちらの世界に来てからは野宿を経験している。

それでもまだまだ身体が慣れないのだろう、もう少し寝かせておくことにする。

僕が外へ出ると、そこは樹上３０メートルという高さだった。

チィチィチチチとうるさいほどにあちこちで鳥が鳴いている。

ツリーハウスなんていうシャレたものではなく、木材で簡単に組み上げられただけの小屋が、大木に鈴なりになっている。

なんの木かはわからない。樹皮はつるりとしているけれど、触ってみると小さな凸凹がある。枝を歩くにはちょうどいい。

樹齢……どれくらいなのだろう。直径１０メートルを超える大木が林立している。その数本を使ってダークエルフたちは暮らしていた。

小屋と小屋の間は十分な距離が取られてあって、トイレは決められた小屋があってそのまま地面に落とす。ダイナミックボットン便所だ。一箇所に集めることで、堆肥を作っているようだ。

命綱なんてものはなく、ロープが蜘蛛の巣のように渡されてあった。足を滑らせても地面に落ちる前にどこかに手を伸ばせ、ということらしい。

朝早くだというのに幾本かの枝ではコウモリのようにぶら下がったダークエルフが腹筋している。筋トレマニアめ、と思うものの、樹上から地面への上り下りを毎日やっていれば筋肉だってついてくるだろう。上り下りは縄ばしご、結び目つきロープ（コブ）のいずれかで、外敵に追われてもロープを回収してしまえば昇ってこられない。

（ダークエルフはこうして集落を守ってきたのか……。地底人とは発想が真逆だな）

高い木から周囲を見ようとしても、同じ高さの木がいくつもあるので遠くまでは見えない。

昨晩、ダークエルフと遭遇した遺跡からは走って３０分ほどの距離だ。

「起きたのか？　朝が早いな。そこで顔を洗うといい」

２メートルのダークエルフがトン、トン、と上から降りてきた。見ているこちらは冷や冷やするけれど、彼らの日常なのだろう。

雨水を集める小屋がいくつかあって、そこで水を汲んでは顔を洗う。

「では飯にしよう」

「いいんですか？」

「まあ、君は客人ダからな、今のところ」

「……」

今のところ、ね。確かにそうだ。

食事は一箇所に集まって食べるらしく、食堂になっている小屋へと僕は向かった。

早朝だからか、中には誰もいない。でも厨房では火を使っている

ようでもうもうと煙が立ち上っていた。

「早いねえ、ノック！　――あいや、そっちは地底人かい？　それにしちゃ顔が黄色いね」

「客人ダ。飯をくれ」

長細い小屋には10席ほどあり、厨房はそのいちばん奥だ。火を使っているのはダークエルフの女性で、やっぱりマッチョだった。

出てきた料理は、ふかしたイモに豆を煮たスープ、それに肉の塊だった。肉が一番デカい。広辞苑の半分くらいのサイズと言えばいいか、あるいはレンガを2つ重ねたくらい？

「……」

「どうした。毒など入れておらんぞ――おい！　毒を入れてないダろうな？」

「――失礼なこと言うな！」

オタマが飛んできて2メートルのダークエルフ――ノックさんの頭に当たった。カコン、といい音が鳴った。

「入っていないらしい」

「は、はあ……朝にこの量を食べてるんですか？」

「すまんな、夜はもっと豪勢ダから」

そういう意味ではないです。ていうか夜はもっと食べるのかよ。

僕はノックさんと同じように、スープをイモにかけてそれを食べる。

「！」

途端、燃え上がるような辛さが口いっぱいに広がる。
これは予想外！
そう言えば、こういうスパイシーな料理って転生してからあんまり食べてなかったなあ。

（ああ、ミミノさんの味付けを思い出す……）

「銀の天秤」で移動中にも、ミミノさんは野営飯でいろいろと味付けを工夫してくれたっけ。
スパイスが利いてておいしかったなぁ。
ミミノさん、どうしてるかなぁ……。

「むっ。泣くほどに辛かったか」
「え！？」

あわてて手をやると、目尻に涙が浮かんでいた。

「あ、ち、違います。美味しくて！」
「そうか？」
「はい」

僕がスプーンを使ってガツガツと食べ始めた――ときだった。
悲鳴が聞こえた。
その声の主がアーシャであることに僕はすぐに気がついた。
食堂から飛び出すと、僕らが寝ていた小屋の外、足を滑らせたのだろうアーシャが両手で枝にぶら下がっていた。

42

「お、お、起きて外に出たら、こ、こんな高いところだったので…
…お、お、驚いてしまって……」

僕の救助はなんとか間に合ってアーシャを助け出すと、寝床で借りていた小屋で彼女は四つん這いになって肩で大きく息をした。
どうやら昨晩ここに来たときには僕に背負われてうつらうつらしていたし、真っ暗だったのでどこにいたのか覚えていなかったらしい。
しばらく寝かせておいてあげようなんていう親切心が裏目に出てしまった。

「無事ダったのならよかったな。そっちの子も、いっしょに朝飯を食ってしま――」

後ろからやってきたノックさんがぽかん、とした。
アーシャは寝ていたので外套も脱いでいるしフードも外してある。つまりはこっちの世界にやってきたときの、キュロットスカートにロングブーツという姿だ。
だけどノックさんが見ていたのは彼女の顔。
種族。

「ハ、ハハ、ハ、ハイエルフ……」

人差し指でアーシャを指しながらその長躯は震え、

「ハイエルフェアェアアアアアア！」

筋肉で固められた全身を使って叫ぶと、僕とアーシャの髪は逆立ち、小屋の屋根と寝床に使われていた枝と枯れ葉が吹っ飛んだ。

耳がキーンとしたけど、僕は動いていた。

剣を手にし、右手に魔法をいつでも撃てるようにし、アーシャを隠すように立ちはだかる。

やっぱり、なにかあるかもしれないと思ったんだ。

ダークエルフとエルフは当然近縁種のはず。

この世界の歴史は知らないけれど、過去に接点や、いざこざがあってもなにひとつおかしくはない。

（飛び降りられるか？　アーシャを抱いて？）

セーフティーネットのように張り巡らせてあるロープを見やる。

いちばん下のロープは高さ１０メートルほどで、あそこに降りて、落下の勢いを殺せば【風魔法】や【火魔法】の併用で無傷で行けるはず――と僕がそこまで計算したときだ。

「ハハァッ！！」

驚愕から解けたノックさんは、その長い身体を折っていきなり――土下座した。

「こここここっこここここここっこここ」

鶏かな？

「こここのような場所へハイエルフの方がいらっしゃるとは思わず、こここここっこここここ」

やっぱり鶏かな？

「こここれまでの非礼をお許しいただきたく」

ノックさんが土下座しているのは枝の上だ。いかに太い枝で住民たちが踏みしめた場所だと言ってもせいぜい横幅は４０センチ程度の枝だ。

土下座なんてしたものだからバランスが崩れ、

「これより我らが族長を連れて参り、いえ、族長邸宅のほうが立派でございますので」

すーっ、と身体は横倒しになり、

「是非ともそちらにお越しいただきたく、伏して、伏してお願いいたしますァァァアアアアア！？」

「ノックさん！？」

そのまま落ちていった。

ジャンプ前のカエルみたいなポーズから、車に轢かれたあとのカエルみたいなポーズになって落ちていく。

あっ、僕が目星をつけていたいちばん下のロープに引っかかった。

ロープはたわんで、そのままぐるんと身体をひっくり返すとノックさんは地面へと墜落した。

砂埃が舞い上がる。

少しだけ遅れて、メシャッ、という音が聞こえた。

「し、死んだ……？」

僕とアーシャが恐る恐る小屋から顔を出してみると、

「いったいなにが起きたんダい！？」

食堂のお姉さんがやってきた。

「ハイエルフェアァァアアアア！？」

そしてアーシャを指差して叫ぶと、すさまじい勢いで土下座をし、

「こここっこここっこっこここ」

鶏の鳴き声を残しながら身体を傾けて落ちていく。

いちばん下のロープに引っかかると、ノックさんの横に落ちて砂埃をメシャッと上げた。

「おいおい、朝からなんの騒ぎダ！」

「客人、なにやらかした？」

「ノックの野郎をどうし――」

3人、ダークエルフがやってくると、

「「「ハイエルファァェァアアアアア！？」」」

そのままの勢いで3人は土下座をし、

「こここっこここっこここ」

「こっこここっこここっこ」

「こここここっこここけっこけっ」

おい3人目、鶏混じってる――じゃない。

「ちょっと待って待って！　待ってください！　身体を起こして！　落ちないで！？」

目の前で起きたことの衝撃からようやく僕も頭が正常になってきた。

だけど、少しだけ間に合わなかった。

彼らは土下座したまま落ちていったのである。

その後、僕はアーシャに外套とフードをかぶせてさらに追加されてきたダークエルフ5人を乗り切った。

「事情を説明するので、族長？　という人のところへ案内してください！　あとノックさんたちを助けて上げてください！」

とお願いした。

族長の住む邸宅は隣の木だったので、渡された2本のロープを使って伝っていく。基本は1本のロープを歩き、もう1本はバランスを崩したときに持つ用だった。

アーシャは「すみません、絶対無理です……」と言ったのでまた僕の背中にしがみついてもらった。

うん……これがノンさんだったりすると背中の感触を役得役得だなんて思えたかもしれないけれど、アーシャはね、そのね、発育が慎ましやかなのでね……。

ともあれ族長の邸宅――ちょっと大きめの小屋へとやってきた。

壁には、壁紙代わりなのか、原色を多めに使って染められた布が張られてあった。一段高いところにイスがあったのだけれど、その手前で地べたに初老のダークエルフが正座していた。初老、とは言

ってもすさまじいマッチョだ。正座しているその両足の筋肉がとても窮屈そうだ。

「こちらが客人ダ、族長」

そしてなぜかすでにノックさんがいる。あと厨房のお姉さんと、追加で落ちていった3人のダークエルフも。

全員ホコリまみれだったけれど、外傷はないみたいでホッとする。

「ぶ、無事だったんですか、ノックさん……」

「鍛えているからな」

フッ、と笑って見せたけど、頭の上に枯れ葉が1枚載ってますよ。

「そちらの御方が……口に出すのもはばかられる高貴な御方ダと聞きましたが」

族長が言うので、僕はアーシャのフードをとって見せた。

それを見た彼らは目を見開き、族長の邸宅内は水を打ったような静けさに包まれた。

そして邸宅の外からはメシャッという音が複数聞こえてきた。おい、のぞき見して木から落ちるなよ。

43

さらにまた落下者が続出しそうなので、小屋は完全に閉めきられた。松明の明かりだけでは薄暗いので僕が【光魔法】で明かりを点すと、

「ふうむ……地底人の君は、天賦を持っているのダね？」

と族長に聞かれる。

「そうですね。あと地底人ではないです」

「確かに。肌が黄色いようだ」

「……実は」

肌の黄色さは何度言われたかわからないけれど、もういい加減スルーして、僕はこれまでの経緯を説明した。

こちらの世界ではエルフやハイエルフは絶滅していたらしく、だからこそ「もうひとつの世界」という言葉はすんなりと受け入れられた。

「アーシャを見て、どうしてエルフではなくハイエルフだとわかったのですか？」

「見ればわかる」

「あの、だから……」

「どう見てもハイエルフ様ダ」

……この人たちも会話できない系かなぁ。竜人、地底人、ダークエルフと、なんかコミュニケーションがうまくない種族ばかりだ。

「では質問を変えますが、ハイエルフになぜ土下座を？」

この質問にはきちんと答えが返ってきた。

何百何千年もの昔から、エルフは様々な種族に分かれていた。

一般的な森の民であるエルフ。

夜間の行動を得意とし、身体的に恵まれたダークエルフ。

木と調和し、その生涯を樹上で終えるウッドエルフ。

逆に土と調和するフラワーエルフ。

精霊化したフェアリィ。

そしてすべてのエルフを統べるハイエルフ。

「ハイエルフ様の下、森を守り暮らしていたエルフたちは外敵の侵略にも負けなかった。しかし時が過ぎると他の種族がどんどん滅び、モンスターの侵攻が激しくなったのダ。形勢が悪くなると疑心暗鬼になる。森の中でも種族間の対立が深まり……我らダークエルフはモンスターを退けるべしと打って出ることを主張し、反対され、結果、我らだけで決行した」

「種族単独で、モンスター討伐を？」

「うむ。その時代には８頭の巨大種と呼ばれるモンスターがおってな、そのうちの一角が接近しており、それを倒したのダ。しかし被害は大きく、ダークエルフの数は大きく減った……そしてなにより長い戦いを経てエルフの森に戻ってみると、守り手が薄くなった森はモンスターの侵攻によって滅んでおった」

僕の横で、アーシャが息を呑んだ。

種族のために戦う道を選んだのに、戦っている間に種族が滅ぼされたなんて……。

「ハイエルフ様は森を捨て、退くことを最後まで提案されていたと

聞いておる。そうして新天地を探すべきダと。しかし我らの祖先はどれほど対立したとしても、エルフたちの住む森を捨てたくなかった。そこに、団結していたころの過去を夢見ていたのダろうな……」

族長は改めて、両手を床について頭を下げた。その額もまた床につけられてあった。

「ハイエルフ様。我らにとってあなた様は神聖不可侵。今度こそ間違えませぬ。我らダークエルフを、なにとぞ、なにとぞ、導いてくださいませんか」

アーシャには考える時間が必要で、そしてダークエルフたちにはハイエルフに慣れて、木から落ちないための慣れる時間が必要だった。

僕とアーシャは族長の家に残らせてもらい、扉だけは薄く開かれていた。そこからダークエルフがのぞき込んでは「ここっここここ」と言って崩れ落ち、次のダークエルフが来ては「ここっ」とやるを繰り返している。メチャクチャ忙しない。

「……どうしましょう、レイジさん」

アーシャも僕も扉の外が気にはなったけれど、とりあえず気にしても始まらないので無視することに決めた。

「僕もこんなことになるとは完全に予想外だったので、困惑しています。彼らはアーシャを神だと思っているようですね」

「神なんて……困ります」

「そうでしょうね」

見知らぬ人間に「ここで会ったが百年目」と斬り掛かられても困るが、「あなたこそ我らの王」と傅かれてもやっぱり困る。

「もし仮に僕らが『表の世界』に戻る方法を見つけたら、彼らはついてきたがるでしょうね……」

「どうしましょう」

「まあ、ついてきてもらったらいいんじゃないですか？」

「そんな簡単なことでは……」

「いえ、存外、簡単なことではありませんか？」

僕らは「表の世界」へ戻る方法を探していた。そして見つけたらレフ人のみんなといっしょに戻ろうと思っていた。

そうすれば「表の世界」も「裏の世界」も前の状態に戻る、と。

「ダークエルフも、地底人も、竜人も、全部連れて『表の世界』に行けばいいんです。この世界に留まれば、いつ滅びてもおかしくないんですから」

僕の提案を聞いて、アーシャが目を瞬かせている。

「でも……」

言いかけ、口を閉ざす。考えがまとまらないようだ。

「アーシャが責任を取ることではありませんよ。地底人や竜人たちは僕らの提案を聞いて、断るかもしれない。それはそれでいいんです。ダークエルフがついてきたいと言ったら、それだって彼らの責任です。――ノックさん」

僕が声を掛けると、薄く開かれた扉の向こうにヌッとノックさんの目が出てきた。

「呼んダか」

「あなたたちはアーシャ――ここにいるハイエルフのアナスタシアに、ついていきたいのでしょう？」

「無論のこと。願わくば、我らの命を捧げたい」

重いなぁ……そこまで聞きたかったわけじゃないんだけどなぁ。アーシャが身を固くしてるし。

「でもその願いっていうのは、あなたたちの希望であって、アーシャに強制するものではないんですよね？」

「無論のこと。我らは勝手にハイエルフ様を崇拝し、ハイエルフ様のためになるように行動したい」

「アーシャが『もうひとつの世界』に渡ったとしても？」

「無論のこと。……というかお前は、ハイエルフ様の御名を呼び捨てにしているよな？　何様ダ？」

今度はこっちに絡んできた。扱いが面倒すぎる。

「……アーシャ、とりあえず今はラ＝フィーツァの足跡を探そう。その間にゆっくり考えればいい」

「は、はい……そうですね」

アーシャは立ち上がり、扉を開いた。

「私はアナスタシア。ハイエルフの王族です。私を慕うのは、か、構いません。しかしこちらの――レイジさんに無礼は許しません」

アーシャが出てきて目を剥いた彼らだったが、次に僕をぎょろりと見た。

「ハイエルフ様。レイジという黄色い地底人は、何者なのですか」

「レイジさんは……わ、私の、大切な人です！」

アーシャが声を張り上げると、樹上には静けさが舞い降り、チチチと鳴く鳥の声だけが聞こえた。

ボッ、ボッ、とアーシャの周囲で火の玉が小さく爆ぜた。

「……ええと、言い間違いがあったようです。というわけで、僕はアーシャを大切に守る人です。つまり護衛です。よろしいですか？」

言葉を補ってあげると、ダークエルフたちが「ああ、なるほど」

「そういうことか」と納得したようにうなずいた。

だけどアーシャだけが濁った目で死んだような顔をしていた。

んん？　どうしてだ？

44

僕とアーシャはそれから族長、それに2メートル超えのノックさんとともに協議をした。

彼らはアーシャに従う。これは先祖代々に渡って申し送られてきた決定事項であるという。それほどまでに種族の崩壊は彼らにとって重い出来事だったのだろう。

ダークエルフの数は２１５人で、竜人、地底人と比べるとはるかに少なかった。

繁殖力が低いのだろう。そのぶん、彼らの寿命は長く、族長は御年７６０歳であるという。見た目は４０歳くらいにしか見えないんだけど。

「？　どうしましたか、レイジさん」

「あ、いえ……」

思わずマジマジとアーシャを見てしまった。彼女は１４歳で僕と同い年だけど、それは「見た目年齢」の話なのでは……とか思ってしまったのだ。

女性に年齢を聞くのはこの世界でもタブーである。

「ところで、族長は『盟約』についてなにかご存じですか？」

「ああ、もちろんダ。知りたいのならば教えよう」

ダークエルフ種族に伝わる盟約は、こうだった。

『盟約者の盟約』

盟約を結ぶ者は種族の頂点に立つ者である。

頂点が盟約を保存する。
盟約の破棄は調停者に対して宣言することで行われる。

「なるほど……」

盟約者と破棄に関する内容か。
確か、竜人に伝わる内容は、盟約の構造に関する内容だったな…
…【森羅万象】があっても記憶がもやーっとしてるんだから盟約に関する力、というか縛り、ってすごいよな。
盟約は「天賦珠玉」と「盟約者」と「調停者」から成り立つとかなんとか。
ダークエルフの知っている内容が「盟約者の盟約」なら「天賦珠玉の盟約」と「調停者の盟約」もあるってことか？
いや、「天賦珠玉の盟約」はすでに知っている。ハイエルフに伝わるものだ。

「アーシャ。確かハイエルフの王族に伝わる盟約が、『天賦珠玉の盟約』だったよね？」
「はい」

アーシャはそらんじてみせた。

『天賦珠玉の盟約』
天賦珠玉を取りすぎてはならない。
天賦珠玉は世界を構成する。

ならばどこかに「調停者の盟約」もあるはずだ。
それで４つになるわけか。全部で８条だから、半分だ。
盟約の破棄についてはクルヴァーン聖王国で、調停者と戦ったときに話が出てたっけ。

特級祭司のエルさんは、

――え、かの世界とこの世界をつなぐ盟約が破棄されれば、多くの闇の者どもがこの世界を、え、侵攻するでしょう。

と言っていたけれど――その「闇の者ども」って「裏の世界」のモンスターってことだよね？

つまり……2つの世界がくっつく、ということなんだろうか。

「レイジさん、どうしました？」

「いえ……仮にダークエルフの皆さんをあちらの世界に連れて行くとしても、この世界とあちらの世界とをつなげることはしないほうがいいだろうな、って……」

「裏の世界」のモンスターは「表の世界」と比べてはるかに強力だ。こんなのがやってきたら、「裏の世界」同様、「表の世界」の種族は衰退するだろう。

「もちろん、我らはついていきますぞォ！　のう、ノック！」

「はっ！　地の果てまでもつきまとう所存！」

いちいち言うことが物騒なんだよなぁ……腕立て伏せ始めるし。

「そう言えば……盟約と言えば」

腕立て伏せの途中でぴたりと止まり、族長が僕を見上げた。その姿勢すらも「筋肉に負荷が掛かってちょうどよい」なんて思っていそうでいやだ。

「ほれ、ノック。なんダったか……プンタが見つけたあの天賦珠玉

よ」
「ああ、ありましたね……ええと」
同じく腕立て伏せの途中でノックさんが記憶を呼び起こそうとする。立てばよくないかな？
「なんとか盟約という名前の天賦珠玉でしたね」
盟約、なんて名前がついている天賦珠玉があるのか？
天賦というのは行動や才能に関するもののはずだけど……。
そんな僕の疑問は、次の言葉で吹っ飛んだ。
「――なんせ星１２の天賦珠玉ですから、使えるものでもなし、持ち帰りもしませんでした」
プンタ、という名前のダークエルフはこの種族にあるまじき体型だった
緩みきった身体はまるで水風船で、握ればもちもちとした手触りであろうことは明らかだ。
頬は右と左にてろんとしたモチが垂れ、蜜でも塗ったように照り輝いていた。
腫れぼったいまぶたの下にはおどおどとした細い目があって、突然やってきたノックさんにひどく怯えていた。
「プンタ。話がある」
「ヒィッ！　ゆ、許してください、もう、腕立て伏せ５千回ダの腹筋１万回ダのは無理ですぅ！」

狭い小屋の奥へすっ飛んで逃げると、天然パーマの短髪を両手で抱えてうずくまってしまった。

「無理ではない。筋トレとは自分でやるかやらないかダ。あきらめたところで筋肉はそっぽを向く。お前が見つめている限り筋肉は――」

「あの、ノックさん、その辺で……」

放っておけば筋肉談義が延々続きそうだったのでなるべく早い段階で止めた。

「お、おお、そうダった……プンタ。こちらの客人方が話がある」

「話……？」

「最初から話があると言ったろうに」

アーシャを連れてきて土下座をされると面倒なのでここには僕ひとりで来ている。

プンタさんは幼児のようなあどけない顔を僕に向けると、幼児のように首をかしげた。

「星１２の天賦珠玉を見つけたということですが」

「あ……そのことですか。自分が狩場に連れてってもらうことはほとんどないんですけど、その日はなんかたまたま連れて行かれて」

狩場、というのはダークエルフたちが天賦珠玉を発見している場所だという。

この周辺、「表の世界」で言うところの聖王都クルヴァーニュ近辺だ。

天賦珠玉は１０個や２０個がまとまって置かれているらしく、それらを探し出して持ち帰るのが仕事だった。片手間でモンスターを

狩って食えそうな肉ならばそれも持って帰る。
なんで10個や20個が置かれているのかは「不明」ということで、しかもそんなものが見つかり出したのはここ数十年のことらしい。
その結果、地底人も同様に天賦珠玉を見つけ出し、彼らと接触して争いになることもしばしばあるそうだが――それはさておき、

「1つだけ転がっていたから、自分が拾ったんです。でも星12なんて天賦珠玉は誰も使えないから『要らない』だろうってなって」
「要らない、ですか……」
「その日は獲物が多くて。あ、肉のほうですけど。余裕があったらそっちを持っていこうってことになって――でも自分はなんだか気になって、わかるところに隠しておいたんです」
「隠した、ということは今行けばそこにあるんですか？」
「いえ、ありません」
「え？」
「別の場所に移したんです……」

するとプンタさんは両手の指と指をくっつけたり離したりしながら、ちら、ちら、とノックさんを見た。

「……ノックさん、なにかプンタさんは言いたいようですが、ノックさんが気になるようですね」
「気になる？　なぜダ」
「え、ええっとその……怒ったりしない？」
「怒るもなにも、聞いてみないとわからんダろうが！」
「ヒィッ！」

またもプンタさんが頭を抱えて震え出すので、僕はノックさんに手で「外へ出ている」よう促した。

ムスッ、とした顔ではあったけれどこれでは埒が明かないのはわかっているらしくノックさんは外へと出ていく。

（みんながみんな筋トレ好きじゃないし、みんながみんな体育会系気質じゃないってことがわからないのかなぁ……）

竜人都市のキミドリゴルンさんを僕は思い出していた。

竜人都市のために、社会のために竜人は尽くすべし、みたいな感覚にキミドリゴルンさんは慣れなかった。だから、狩りを断って逃げるように別荘で研究をしていた。

（そんな彼でも、自分の得意なことがみんなのためになるとわかれば喜んで力を発揮する）

竜人都市を出発するあの朝に、キミドリゴルンさんに見た力強さ。きっとプンタさんにもなにかあるんだろう――とは思うのだけれど。

「プンタさん、大丈夫です。ノックさんは出て行きましたよ」

「ほ、ほんとう……？」

恐る恐る顔を上げた彼に、僕はたずねる。

「その天賦珠玉はどこに移したんですか？　それに、その天賦珠玉の正確な名前を教えてもらえますか？」

「は、はい……」

プンタさんは小屋の外を見て、離れた枝の上でノックさんがジャンピングスクワットをしているのを確認し、つらそうに顔をゆがめる。

「……あの天賦珠玉は、赤とか緑とか、いろんな色に輝いていました」

いろいろな色に……。今まで見たことのないタイプだから、ユニーク特性で間違いがなさそうだ。

「その名前は」

プンタさんは言った。

「【離界盟約（ワールド・アライアンス）★★★★★★★★★★★★】」

45

天賦珠玉【離界盟約】を僕が「どうしても欲しい」と言うと、「では探しに行くか」と簡単にノックさんは請け合ってくれた。「どうせ使えないのに」という反応も覚悟していたんだけど。

だけど、「どこに隠したのか」を聞いて、表情を変えた。

「お、お前ッ、よりにもよって初夏鳥（ウイカチョウ）の卵に隠したダと!?　なにを考えている!」

「ヒィッ!」

怒鳴られたプンタさんは頭を抱えて小屋の隅に逃げていく。

「逃げるな!　あそこには近寄るなと何度も――」

「ちょ、ちょっと待ってください」

殴りかねない勢いのノックさんを押しとどめる。

「初夏鳥……ってなんなんですか?　僕は聞いたことがないのですが」

「……」

憤懣やるかたなし、という顔のノックさんだったが説明をしてくれた。

それでも行くというのなら止めないが、という前提とともに。

危険はあるかもしれない。だけど、危険を冒してでも【離界盟約】を手に入れたほうがいい――と僕はそう結論づけた。

ノックさんがいろいろな危険について教えてくれたけれど、それでも下手を打たなければ問題ないと判断できた。

【離界盟約】という天賦珠玉――「盟約」という言葉の含まれる、星８つを超える特殊な天賦珠玉はその能力を確認しておきたいと僕は思ったのだ。

僕のスキルホルダーが１６個あることを知らないノックさんは当然、

「――なんと酔狂な」

と呆れ、

「行くのは護衛殿の自由だが、ハイエルフ様を連れて行くことは許しがたい」

と言う。

その感情はもっともだったし、もし無理にアーシャを連れていくとしたらそもそもプンタさんの協力を得られないかもしれないので、僕はアーシャを説得し、プンタさんと２人で行くことにする。

時刻はお昼時。

僕はプンタさんとともにダークエルフの集落を出発した。樹上ではアーシャが心配そうに見ていたけれど、ダークエルフたちがアーシャに危害を加えることはないだろう。安心して待っていて欲しい。

「君……変な人ですよね。あれだけ危険だと聞いた初夏鳥の巣に行きたいなんて……」

「巣、と言っても卵が置いてあるだけなんでしょう？　それに実際、プンタさんは無事に帰ってきてますし」

「それはそうだけど……」
「ひょっとしてあれが初夏鳥ですか？」

枯れた大木がまばらに生えている土地を歩いていく。この辺りは栄養が少ないのか、立ち枯れているような木も多いが、一方で少ない栄養を大事に大事に取り込んで、なんとかかんとか生き延びている木もあった。

自然はしたたかだ。

僕が指差したのはそんな枝の向こうに見える、２羽の鳥だった。並ぶ小さい影が大空をすーっと流れていく。

「自分には見えませんね……群れでしたか？」
「いえ、２羽だけでした」
「じゃあ、晩夏鳥（バンカチョウ）でしょう。青の晩夏鳥は一途、赤の初夏鳥は浮気者」

シルエットはまったく同じだけれど、色が青と赤で違う２種の鳥。いや、２種類ではないのかもしれない。同じ種類の鳥なのではないか。

聞くところによると晩夏鳥は生涯のつがいをただ１羽に定め、２羽で寄り添って暮らし、ふつうの鳥と同じく巣を作って卵を産む。

逆に初夏鳥は群れを成し、そこで多くの異性と関係を持って大量に卵を産む。

どの卵が誰の子かわからないので、「卵置き場」のようなものができる。

「あの辺りです。『卵置き場』」

歩いて２時間――途中で食事をとったりしたのでさほど進んでいない。

「結構集落から近いんですね」
「卵がかえって飛べるようになるまでの半年間がすぎれば、『卵置き場』は捨てられますからね……集落のみんなは近寄らないで過ごします」
「なるほど」

場所は聖王都を東に外れたあたりだった。山の裾野にあり、ぐっと凹んだ土地はぐるりと巨木に囲まれていた。周囲は草も多く生えていて、見通しは悪い。

「うわ……マジか」

僕は思わずそんな声が出た。
「卵置き場」とは言い得て妙だ。むしろそれ以外に言葉がない。
そこには一抱えもありそうな乳白色の卵が、１００ではきかないほどの数、置かれてあった。
地面に直接置かれ、積まれ、倒れて割れているものもある。

（これが成長したらとんでもなくデカくなるな……）

先ほど遠目に見えていた青の晩夏鳥は、かなりの距離にいたから脅威を感じなかったのだろう。

「気をつけてください。もしも生きている卵を刺激したら、群れが飛んできます」

ノックさんの言っていた「危険」とはそれだった。
初夏鳥は卵を産んだあとは放置するくせに、傷つけたり、割ったりしようものなら、群れで襲いかかってくるらしい。

どういうふうに卵の状態を探っているのかは不明だけど。
逃げたとしても地の果てまで追ってくるとか。
過去に一度、腹が減ったダークエルフが卵を持ち帰ろうとして割ってしまい、初夏鳥の群れに追われた。集落まで群れが追ってくる勢いだったので、そのダークエルフには集落のない方向へ逃げてもらい――そのダークエルフは帰らぬ人となった。

「こんなところに隠したんですか」
「いやぁ……卵がかえったら、あとでゆっくり取りにきたらいいかなって……」
「でも使い道のない天賦珠玉でしょう？」
「見ていればキレイですからね」

なるほど、確かに部屋のオブジェに……使えるかなぁ。趣味の悪い間接照明みたいになりそうだ。

「それに卵は、半分くらいは中身が入ってないんですよ。自分は、初夏鳥のメスが、オスの気を惹くためにカラッポの卵を産んでアピールしているんじゃないかって思うんですけど」
「はあ」
「すごくないですか。鳥の恋の駆け引き」
「はあ……」

急に生き生きしだしたな。
プンタさん、他人に理解されない謎の趣味を持っているんだろうなあ……初夏鳥の研究なんて。
もしかしてここに天賦珠玉を隠したのって、実験でもするような気持ちでもあったんじゃない？　雪の中に石を埋めておいたら溶けた後どうなってるのかな、みたいな。
でなきゃ危険とわかっているところに近づかないよね。

「それで、天賦珠玉はどの殻に隠したんですか？」
「あ、はい。あっちです」
言いながら、「卵置き場」に近づいていく。
「不思議なのはカラッポの卵を産むことだけじゃなくって、初夏鳥も晩夏鳥も、お互いの卵の中に一定の割合でお互いのヒナがいるんですよ。この何百個とある卵の中にも、晩夏鳥の雛がいるんです」
「そうらしいですね。種の存続のためですかね」
多様性を持たせることで、環境の変化に柔軟に対応する。
生物の進化だ。
「そうそう！　それで初夏鳥は――」
「あの、プンタさん。もう目の前が卵なんですが」
僕らは手を伸ばせば手前の卵に触れられるというところまでやってきた。
こうして見ると、スーパーで売ってる卵をそのまま大きくしたような感じだな……。カラッポの卵もある、ということだったけれど【森羅万象】で見る限り、どれも同じ「卵」という反応だった。目で見るだけじゃわからない。
「あ、っと……自分が見つけたのはすごくキレイに割れてる殻で、中身もカラッポだったんですよ。だからかぶせ直したらぴったりくっつきましてね」
「はい。どれですか？」
「ええっと……」

プンタさんの視線がさまよう。

「……」

「……」

「……プンタさん？」

「……」

僕を見たプンタさんは、どこか媚びるような笑みと、冷や汗を浮かべていた。

「え、えへへ……どれかわからなくなっちゃいました……」

45（後書き）

問題：「どれかわからなくなっちゃった」問題を解決するためにレイジはどこへ向かうでしょう？

ア）竜人都市
イ）地底都市
ウ）一天祭壇
エ）未開の地カニオン

今度はちゃんと答えがあります！　正解は、明日。

46

わからなくなったということはないでしょう、ほら、なにか印をつけているとか――僕も粘ったのだけれど、プンタさんはやはりわからないようだった。

なぜかと言えば、以前来たときと卵の並び方が変わっているらしい。

初夏鳥が入れ替えたか、あるいは新しい卵を産み落としたせいでわからないようだ。

試しに全部割って確かめる――ということも一瞬頭をよぎったのだけれど、

「ぜぜぜぜ絶対ダメです！　あの鳥の群れは大型モンスターが避けて逃げるほど凶悪なんですよ！」

とプンタさんが真っ青になったので止めておいた。

「プンタの言うことなど聞くから……無駄足ダったようダな。無用な危険がなかっただけ、我々にとっては幸運ダったが」

夕暮れどきに戻った僕らを待っていたのは、ノックさんの呆れたような一言。

でも、アーシャはほっとして喜んでくれたのでよしとしよう。

（どの卵に入っているか、わからない……【森羅万象】は僕の見たもの、触った感触、嗅いだニオイの情報から判断している。だから僕が感じ取れないものはわからない）

夕食後、僕は考えていた。
アーシャは族長に引き留められて、集められたダークエルフたちにハイエルフがどんな生活をしてきたのかを話してもらうようせがまれ、話している。
ちなみに今日5回目らしい。
「泊めていただく恩義もありますし……」
と律儀に演説をしているアーシャは偉い。
（なにか方法はないかなぁ……卵を割らずに中を確認するような方法が。X線か。超音波という手もある……機械もないのに「手もある」じゃないよ、まったく）
ダークエルフの木の枝に座って、足をぶらぶらさせながら考えていた。
なにか方法があるような気がしていたけれど……こう、ここね、喉まで出かかっているのにその先が出てこないんだよね……なんだっけなあ、もう。
「レイジさん、ここにいたんですね。……ってなんですか、その格好は」
僕が足だけで枝にぶら下がり、いわゆる「コウモリ」をやっていると下の枝にアーシャがやってきた。
ひらりとそこに降りたって、
「終わったんですか？」
「はい。……あちらの生活のことを話しているだけなのですが、皆さん熱心に聞いてくださって。あまり特別なことも話せないのです

が……」

「アーシャの生活が、どういうものだったのか、僕だって気になりますよ。だからダークエルフの彼らはもっと喜びますね」

「き、気になりますか、レイジさんも？」

「ええ」

「そ、そうですか……たいしたお話ではないのですが。やっぱり皆さんはハイエルフの歌に興味があるようでしたわ」

それはきっと「魔唱歌（チャント）」のことだろう。

アーシャが歌ったとき――僕は飛行船を不時着させるのに魔力を使いきった結果、気を失っていて夢うつつで聞いていたのだけれど、魔力を載せて歌うそれは、とてつもない力を発揮する。

「レイジさんのお話はしてくれないのですか？」

「僕……ですか？」

「はい」

夜は長く、僕は卵探しの名案を思いついていない。

アーシャと話をするにはいい夜かもしれなかった。

僕らは枝に腰を下ろしていろいろな話をした。僕は転生したことこそ話さなかったけれど、クルヴァーン聖王国で護衛として経験したことを面白おかしく話した。

夜空には敷き詰められたように星が瞬いていて、木々の枝によって切り取られていても少しも明るさを減じることはなかった。

「あ……」

僕はそのときふと、遠くの夜空に青色の光を放ち羽ばたく姿を見つけた。

「どうしました、レイジさん」
「晩夏鳥……」
その青い鳥は2羽並んで、まるで手をつなぐように近い距離で飛んでいる。
ダークエルフの集落の、かなりそばまでやってくると旋回して遠くへ去っていった。
夜でも輝く青い光は幻想的で、光を曳いて僕のまぶたにはその軌跡が残った。
「……美しい鳥ですね」
感動したようにつぶやいたアーシャに、僕は初夏鳥と晩夏鳥について話をした。
「素敵なお話です。一生、ひとりの相手に添い遂げる……願ってもなかなか叶えられないことでしょうね……」
「……比翼連理、という言葉を思い出しました」
「それは？」
僕は日本で、選択授業で漢文を取っていた。
漢文の授業は不人気で、そんなものを選んでいるのは学年で2人だけという有様だった。
白居易の書いた「長恨歌」の一節にある。
天にありては願わくは比翼の鳥となり
地にありては願わくは連理の枝とならん
「『比翼の鳥』というのは、目と翼が1つずつしかないオスとメスの鳥で、常にくっついていないといけないという意味です。もちろ

ん、空想上の鳥ですね。一方の『連理の枝』は、根は違っても伸びていく過程で絡み合い、くっついていく枝のことを意味しています」
「まあ……愛の歌ですか」
「それに近いかもしれませんね」

仲睦まじい男女のたとえで「比翼連理」という言葉になったが、実際には「長恨歌」は離ればなれになったふたりの「悲しみ」の歌だ。

「素敵な言葉ですね」

それを言うのは、野暮というものだろうけれど。

（……そっか）

僕は、どうしてマイナーな「漢文」なんて授業を選んだのか、今になって気がついた。

こつこつと勉強していた僕は、クラス委員を押しつけられたりして一方では「報われない」仕事もせざるを得なかった。自分のことにクラスメイトを巻き込んでいくほど要領がよくなんてなかった。

「漢文」は――ほとんど見向きもされない、でも、こつこつと研究している人がいる、そんな学問に見えたのだ。

（あのときはただ勉強だと思ってやっていたけど、まさか異世界に来て「比翼連理」なんて言葉を思い出すなんて……）

僕が思いに耽っていると、

「……そういうものに、憧れてしまいます。でも私の歩みでは、きっと追いついていけない」

ぽつりと、アーシャが言った。

「アーシャ？」

「……レイジさんは、どうして……そこまでの力をお持ちなのに、他の人を助け、大事を成そうとするのでしょうか」

「え？」

「大望がおありなのですか？　国を興したり、武芸百般を極めたり、魔導の道を進んだり……あなたなら、そのどれもが、いえ、そのすべてができてしまいそうな気がします」

「そんな……」

そんなつもりは全然なかった。

「私の足では――」

言いかけたアーシャは、口を閉ざした。

「……ごめんなさい、変なことを聞いてしまいましたね」

それから僕らはなんとなく気まずい空気のまま夜空を眺めていた。

先日のことと言い、アーシャはきっとなにかを我慢している。

僕には想像もできない多くのことを彼女は抱え込んでいる。

王族、なんていう重たい出自なんだものな……。

「僕は、一歩一歩進んでいるだけなんです」

なにを言っても彼女の満足する答えにはならないかもしれないけれど、なにも言わないのは不誠実な気がした。

「目の前にあることで手一杯で、大抵はいっぱいいっぱいなんです。アーシャから見たら、魔法ができたり、なんかすごそうに見えるかもしれませんけれど……このすべては毎日毎日練習して、自分のものにしてきただけなんですよ」

「毎日毎日……練習を？　レイジさんが？」

「はい。どんなに長い旅路もすべては一歩ずつで構成されていますからね。確実に歩いていくことしか、僕にはできません」

僕の本音だった。

問題集に取りかかって、１つずつ空欄を埋めていくと、最後のページに到達する。

そのときの達成感が、僕は好きだった。

そんなことくらいしか、楽しめることもなかったのだと言えるけど。

「そう……なのですね」

「そうなんです」

「私も、一歩一歩進めるでしょうか……」

アーシャが僕にたずねる。

ハイエルフの王族で、これだけの美貌を持ち、すさまじい魔力を持っていても――そういうことで悩むのだなと僕は変なところで感心した。

「もちろんですよ」

だから、笑ってうなずいた。誰だって少しずつ進んでいくことができる。今ごろキミドリゴルンさんだって魔術の研究を……。

「あ」

そのとき――天啓のように閃いた。
卵。カラッポの卵と、中身のある卵。死んでる卵と、生きてる卵。
見分ける方法。

「あーっ！」

あるじゃないか。卵を区別する、魔道具が。
竜人都市に。
僕は、キミドリゴルンさんの顔と「ゆで卵判別機」のことを思い出したのだった。

46（後書き）

正解は、

ア）竜人都市

でした。

キミドリゴルンさんのゆで卵判別機、ようやく日の目を見ます。

47

「――それじゃ、アーシャのこと、よろしくお願いします」
「もちろんダ。ハイエルフ様にはなに不自由なく生活いただくことをお約束しよう」

族長は力強く請け負った。
竜人都市へ「ゆで卵判別機」を取りに戻ることについて、アーシャとふたりで戻るかちょっと迷ったのだけれど、アーシャを連れていくなら、「我ら全員ついていきます」と平伏されたのでさすがにそれは勘弁してもらいたく、結局僕ひとりで行くことにした。
ダークエルフたちを信用しすぎるのもどうかと思ったけれど、竜人都市でもすでにやったことだし、ダークエルフが僕らを騙すために一芝居打っているということは考えにくい。

「……必要な、ことなのですよね？」

やはり不安はあるのだろう、アーシャに聞かれた。
朝日を浴びた彼女の金色の髪は美しく輝いている。

「はい」

【離界盟約】という天賦がどんなものかはわからないけれど、２つの世界に関する「盟約」の名を冠した天賦なので、きっとなにか役に立つはずだと思った。
僕が竜人都市に戻っている間、ノックさんたちダークエルフはラ＝フィーツァの痕跡を探してくれるらしい。ありがたい。

「それじゃ、いってきます」
「お気を付けて」

僕は身を翻すと枝から飛び降りた。
近くの枝へと降りて、順々に降りていき――最後は【風魔法】で落下スピードを落としながら着地する。

「――お気を付けて！」

アーシャの声が頭上から聞こえてきた。
僕は見上げて手を振った。

（まだ……話してない。僕が星１６までの天賦珠玉を使えることについては。だけどアーシャは僕を信用して……心の底から信頼してくれている）

少しだけ、良心が痛んだ。

「――よし。アーシャの信頼に応えるには、なるべく早くに戻ってくることだな」

気合いを入れ直し、走り出す。
目指すは竜人都市。
数日前に旅立って、すぐに戻るなんてちょっと気まずいけどね。

★　地底都市　★

「もう、アンタにぶっかける酒だってもったいないって思うくらい

にはなったのよォ」
「……」
「この能なしがァッ！　グズ！　さっさと星６つを探し出してこい！！」
「はっ」

最敬礼した元帥はウルメ総本家の当主サルメの前を辞した。
地底都市に侵入者が出る――そんな、天地を揺るがすような出来事から半月以上が経った。
彼も、彼が連れ出した竜人も、そしてスーメリアも行方がわからない。
おそらくは竜人都市にいるのだろうが、竜人都市の場所はわかっていない。

（サルメめ、だいぶ荒れているな）

地底都市の最大の強みは「場所がわからないこと」だった。だというのに、バレた。そのせいでいつ竜人が攻め込んでくるのか、という妄想に駆られているのだ、サルメは。

（冷静に考えれば竜人がこちらに攻め込んでくる理由もないだろうに。大体、都市の所在がわからないほど遠くにいる彼らが遠征してくるとでも本気で思っているのか？）

最近、サルメの情緒不安定は度を超していると元帥は思っていた。いつも侍らせている若い男も、たまに顔に青あざを作っているのでサルメに殴られているのだろう。

（そうだとしても、連中はサルメに媚びるのを止めない。それしか生きる道がないからな……）

元帥はサルメだけでなく彼女のそばにいる、甘い蜜に群がる虫のような連中を蔑みながら軍の総本部に戻る――と、そこには女軍人の参謀と、気弱な設計士のふたりが残っていた。

「おっ、元帥。今日は酒臭くないっすね」

からかうように言われ、

「私に酒を掛けるのももったいないと、言われたよ」

「あちゃあ……やっぱし星6っすか？」

元帥はうなずいた。

サルメの情緒不安定に輪を掛けたのが、天賦珠玉【狂乱王剣舞（インセインブレイド）★★★★★】の紛失だ。

元帥が天賦珠玉を受け取ったのは他の軍属たちも見ており、元帥はそれを保管庫に入れた。だがその天賦珠玉は、翌日には消えていたのである。

当然、誰かが盗んだのだ。

真っ先にサルメは元帥を疑ったが、元帥にはまったく心当たりがなく徹底的に捜索をしたが見つからなかった。その姿を見たサルメはかすかな疑いを残しつつも元帥は一応無実（シロ）ということになった。

盗み出したのはここにいる参謀だった。

「まあ、あんだけ強けりゃ残しておきたくなるっすよねえ」

へらり、と笑ったその顔はいつもの参謀だ。

彼女はあのときもそんなふうに笑いながら懐からサッと天賦珠玉を出した――あのときのことを思い出すと、元帥はいまだに身体が反応してしまう。身体が震え、膝から崩れ落ちそうになった。

（とんでもないことをしやがった）

そう思う一方で、

（これを使え、ということか）

とも思った。

これほどの力を持つ天賦珠玉だ。元帥が心に描いていたクーデターは、この天賦珠玉があれば成し遂げられる。

その天賦珠玉は、元帥が隠している。

「……サルメはもう限界だ。百人長が戻ったら、計画を実行する」

今日、元帥は決意した。

いつもは飄々としている参謀は表情を引き締め、設計士はますます気弱そうに震えた。

百人長は部隊を率いてダークエルフの縄張りに踏み込んでいた。サルメからの注文で、もっと天賦珠玉を集めてこいというのだ。竜人が攻めてきたらどうするのか、と――。

「設計士。百人長の帰りは……」

「いつもどおりなら、明後日じゃないでしょうか」

答えを聞いて元帥はうなずいた。

「信頼できる人間にあたりをつけておけ。百人長が仮に、帰らなかったとしても……作戦は決行する」

「百人長は、自分が【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】を使うって言ってたっすよ」

「そのときは俺が使う」

参謀も設計士もハッと息を呑んだ。
彼らもまたこの天賦珠玉のデメリットは理解している。
――その【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】を使うことは絶対に勧めません。というのも、天賦の使用により記憶の欠落が起きるからです。これが進むとやがて日常生活に支障を来し、死にいたる……と僕は考えます。
スーメリアという実例が、彼の言葉を裏付けていた。
「で、でも元帥、あなたがいなくなったら、誰がサルメ亡き後の地底都市を……」
「後継者を選ぶところまではやるさ」
設計士に微笑みかけると、元帥は彼の肩を強めに叩いた。
「さあ、計画を詰めるぞ。サルメを追い詰め、絶対に逃がさないルートを考えなければな」

48（前書き）

大事なお知らせがあります。

48

★　卵置き場　★

レイジが集落を出て行った翌日、プンタはひとり、初夏鳥の卵置き場へとやってきた。
自分のせいで迷惑を掛けたことはわかっている。
みんなが崇拝しているハイエルフ様をガッカリさせたという自覚もある。
だから――なにかできることはないか、と。もしかしたら、もう一度見に行けばどこに天賦珠玉を隠したのか思い出すのではないか、と。
そう思ったのだ。

「……」

だけどこの日は、朝から妙な視線を感じて気味が悪かった。
きょろきょろと周囲を見るけれどそこには誰もいない。

「気のせいダな」

とつぶやいてみたけれど、視線を感じるままだった。
きっと自分の失敗への後ろめたさと、卵置き場にいってもなにもないかもしれないという不安のせいだろうと自分自身に信じ込ませた。

「さて、探さないと……」

プンタはずらりと並ぶ卵を見やった。

一方――そんなプンタを見つめていたのは１０人の地底人だった。

それを率いる百人長は、

「――お前ら、ここで止まれ。あのダークエルフがなにをするのか確認してェ」

と指示を出した。

ダークエルフの集落があるであろう方角は、これまでの散発的な戦闘経験から予測がついていた。それもこれも優秀な設計士と参謀のおかげだった。

百人長の今回の任務（ミッション）は「天賦珠玉の捜索」と「ダークエルフ集落の確認」だった。

天賦珠玉については結果がはかばかしくはなかったが、集落の発見には成功した。

そんなとき、ひとりの――これまで見てきたダークエルフの中でも群を抜いてだらしない肉体を持ったプンタが出てきたのだから、いったいなんなのかと考えるのは当然だ。

尾行した結果、この異常な量の卵がある場所へとやってきた。

「……百人長、ありゃあ、卵っすかね？」

「それ以外になにに見えるンだよ」

「じゃあ、食料の備蓄っすか？」

「どうかな……あのダークエルフがなにするか、見落とすんじゃねェぞ」

「へい」

地底人たちは初夏鳥について無知だった。初夏鳥の生息域が違ったからだ。

プンタは卵には触れず、そのそばをうろうろしているだけだった。たまに手を伸ばしては、ハッとして引っ込める。そうして「うーん」と唸り、すでに割れている卵の殻を拾ってはためつすがめつしている。

「あいつ、なにしてやがんだ？」

「百人長、さっさと捕らえて吐かせましょうや」

「焦るんじゃねェ。こういう任務に焦りは禁物だろうが」

すると、

「どこに隠したっけなぁ……。あの天賦珠玉なら光が見えてもおかしくなさそうなのに……暗くなるまで待ってみようかなぁ……」

ぽつりとプンタがつぶやいた。

「――あいつ、天賦珠玉って言いやしたぜ」

「ああ。聞いた。ここに隠したが、隠し場所がわからなくなったってェことか？」

「どうしやす、百人長。あいつに任せておいたら日が暮れても見つかりませんぜ」

「だがお前だって隠し場所なんざわからねェだろうが」

「なに言ってんすか」

地底人の部下は、百人長にこう言った。

「卵なんですから、全部ぶっ壊しましょうや。連中の食料がどうな

ろうと知ったこっちゃねえですし」

それは、その場にいる地底人たちをして「確かに」と思わしめる、まさしく単純明快な論理だった。

そうと決まれば話は早い。

百人長率いるチームは、プンタを取り囲むように展開すると、合図にあわせて一斉に姿を現した。

「おい、ダークエルフ」

「!?」

百人長が声を掛け、ぎょっとして振り向いたプンタは――さらに顔を驚きに染めた。

「お前が隠したっつう、天賦珠玉について教えろや。それ以外にもな、聞きてェことはいっぱいあるのよ。いいか？　痛い思いをしたくなけりゃァ、おとなしく――」

「あああああああッ!?」

ぶるぶると震えながらプンタは叫んだ。彼が指差していたのは百人長の部下のひとり。彼が、移動するのに邪魔になって蹴り飛ばして割った卵だった。

どろりと、透明な液体と黄色の塊が流れ出していた。

「あん？　なんだなんだ。お前らにとっちゃそんなに大事な卵だったのかよ」

「うわあああああッ」

「!?　お、おい、止めろ!」

いきなり走って逃げ出したプンタだったが、運動神経の差は歴然

としていた。百人長が率いているチームは地底人種族の中でも選りすぐりの武闘派だ。すぐにプンタに追いつくと、引き倒し、地面にうつ伏せにして動けなくした。

「いきなり逃げるたァ、愛想がねえじゃねえか。なァ、おい。お前の知ってることを全部しゃべれば、痛い思いしなくて済むっつってンだろうが？」

プンタの目の前にしゃがんだ百人長は、ナイフを取り出して、彼の頬にぺたぺたとくっつける。だがプンタが恐れていたのはそんなものではなかった。

「ま、まま、マズイ、マズイマズイマズイ」

「あァ？」

「早く逃げなきゃ！　逃げなきゃ！　さもないと――」

そのとき――はるか上空でヒィヨロロロロロロと、喉を鳴らすような音が聞こえた。

地底人たちが空を見上げると、そこには1羽の赤い鳥が旋回していた。

「あぁあぁぁ……もう、終わりダ……」

プンタがぽろぽろと泣き出し、百人長はつんとするようなアンモニア臭を嗅ぎ取って――このダークエルフが漏らしたのだとわかって、ようやく、事態がなにかとてつもなく悪い方向に転がったことに気がついた。

「……おい、ダークエルフ。あの鳥はなんだ」

「終わりダ。終わりダ。終わりダ……あぁぁぁ」

「おい！　俺の質問に答えろ！」
「――百人長！　空を！」

百人長が空を見上げると、先ほどまで1羽しかいなかった赤い鳥は、5羽に増えていた。

「ありゃ……なんですかね」

部下のひとりが北を指差していた。
木々の枝が張りだしていてよく見えなかったが、先ほどまではなかった黒い点のようなものが北の空にある。
その点の数は、数えるのもバカバカしいほど。１００や２００ではきかない。

「初夏鳥が仲間を呼んダら……逃げられない。どこまでも追ってくるんダ……」
「――アレは初夏鳥とかいう名前の鳥なのか？」
「終わりダ……」
「おい！」

胸ぐらをつかんで百人長はプンタを引きずり上げる。

「言えッ！　あの鳥はなんなんだ！？」

パァンと頬を張ると、プンタの目にわずかばかりの正気が戻った。

「あ、あれは初夏鳥……生きた卵を壊した敵を絶対に許さない。大量に集まって襲いかかってくる」
「なんだと……」
「逃げても、どこまでも追ってくる」

すると部下が、

「百人長！　もう５０羽くらいに増えてんぞ！」

叫んだ。空には、いつの間にか鳥が増えている。旋回する赤い渦に見下ろされ百人長だけでなく部下たちは戦慄した。

「～～～～！！」

決断しなければならない。この、少ない情報で。

（元帥ならどうする？　参謀なら？　ああ、クソッ！　俺は腕っ節だけの男なのによお！）

考えることは今まで他人に任せてきた。

だが、今は自分が決めなければならない。

「聞け！　チームを３つに分ける。リーダーは――」

９人の地底人を３つのチームに分けた。

「――そんで、いつもの帰還ルートＡとＤとＦの３パターンに分かれて戻るんだ」

「ちょ、ちょっと待ってくだせえ。百人長はどうするんで？」

「俺は」

ぐい、と襟首をつかんだプンタを引き上げた。

「こいつが言ってることが正しいかどうか見極める必要もある。こ

のままダークエルフの集落に突っ込んでやるさ」
「ええッ！？」
「なるたけ隠れて逃げるんだぞ！　あと……元帥によろしく伝えてくれ。さァ、急げ！」

百人長の読みでは、いくら鳥の目がよくとも、その特性上は地底までは追ってこられないだろうということだった。そしてルートを分けて逃げ込めれば、その出口を上空から見張られても他の出口を使って出入りができる。
部下たちが走り出すと、上空を旋回している鳥はいくらかを残し3つの集団に分かれて飛んでいく。

「……さて、と。じゃあ、後は俺とお前が生きるか死ぬかだな」
「ヒィッ」

プンタの顔は涙と鼻水でべしゃべしゃになっていた。

「お前、名前は」
「プ、プンタ……」
「よし、プンタ。お前、あの鳥に詳しそうじゃねァか。あの鳥に隠れられそうなルートを考えながら俺をお前の集落につれてけ」
「で、でも、集落に連れ帰ったりしたら自分は殺される！」
「そうか？　じゃあ、今この場で死ぬか？　俺はな、拷問も得意でよォ、数分ありゃァ気が狂うような痛みをやることもできるんだぞ」
「ヒィッ」

脅しながら、百人長は考える。なんとしてでも生き延びる道を。

「俺はここで死ぬわけにゃいかねェんだよ。あの方のためにも生き延びなきゃァな」

４８（後書き）

書籍化決まりました！
富士見ファンタジア文庫から、１１月２０日に発売予定です。なんと私の誕生日です。
イラストレーターは大槍葦人先生です。
すばらしい表紙イラストは活動報告で公開しますので是非見てみてください。
すでにＡｍａｚｏｎで予約も始まっているので是非ともお願いいたします！

49

★　ダークエルフ樹上集落　★

アナスタシアが考えても考えても、レイジというヒト種族は謎だった。

髪を染めているようで、夜中にひっそりとどこかに出かけていき、翌朝には髪の色が少し変わっていることがあった。

クルヴァーン聖王国で貴族の護衛をしていたというのは、年齢を考えれば「？」だったが、実力を考えれば納得だ。

（きっとそこで高度な教育を受けたのでしょうね）

とアナスタシアは思っている。

立ち回りもできて魔法も使える。そんな彼がなぜ「冒険者」になったのかについては聞いていない。

アナスタシアは冒険者稼業について詳しくなかったので、

（きっと冒険者のほうがお金を稼げるのでしょうね）

と、合っている部分もあるが根本的には間違った結論を抱いていた。

彼は恩人だ。

魔力が暴走してしまう自分の身体を治し、この世界にやってきてからは陰に日向に自分を助けてくれた。

だから――レイジが墜落飛行船を確認しに行き、さらには地底都市へ向かっている間は毎日毎日不安で、胸がつぶれるように感じら

れた。

レイジが戻ってきて、うれしくて、気持ちがふわふわして、なにかしていないと頭がどうにかなりそうで、それで魔力加減を間違えて浴場を熱湯にしてしまった。

あの日の夜、レイジを抱きしめた。

そこに彼がいるとわかっていても、触れてみないと確信が持てず、熱を感じないと心配で。

直後に我に返って、なんというはしたないことをしたのかとその夜は眠れなかった。

（レイジさんにそばにいて欲しいのも、レイジさんに早く帰ってきて欲しいのも、すべて私のワガママなのです……）

頭は冷静だ。

ワガママな自分を自覚している。

だけど、この感情をどうしたらいいのかがわからない。今まで生きてきて、こんなに心を揺さぶられたことがなかったから。

（ほんとうに、レイジさんに首輪をつけられたらいいのに）

竜人都市で、竜人の女たちが言っていたことを思い出す。

（黒くて細い革のベルトで、留め具は金色。ネックレスみたいに細いチェーンをつないで私がそれを握ってレイジさんとお散歩するのです。レイジさんが右に行きたいと引っ張って、私は左に行きたいと引っ張ると、ふたりで綱引きみたいな感じになって……ふふ、とても楽しそう）

アナスタシアは妄想をふくらませて右手を頬に添えてほぅと息を吐いた。

遠目に見れば美少女が悩ましげなため息を吐いているところなのだが、考えている内容は少々ブッ飛んでいた。

幼いころからエルフの森の最奥、ハイエルフ王族の住居に閉じ込められて育っていた彼女は、男女の過ごし方も、そもそも恋心なんていうのも知識不足だった。

「……一日中小屋の中にいるのも、さすがに飽きますね」

アナスタシアは「ハイエルフ様はごゆるりとなさってください」という族長に押し切られて樹上住居にいた。朝から屈強なダークエルフたちがラ＝フィーツァの痕跡を探しに出払っており、夕方となる、あともう少しで帰ってくるはずではあったが、集落内の人員は少なかった。

小屋から出て行くと、遠目に族長がいるのが見え、彼もこちらに気がつくとその場に「ははーっ」と土下座をした。ほんとうに止めて欲しいのだが止めてと言っても止めてくれない。

「あら、ハイエルフ様」

「あ……ニッキさん」

近くの枝を歩いていたのは食堂の女ダークエルフだった。ここでは男も女もみんな料理ができるのだが、彼女の腕がピカイチなので厨房を任されているらしい。

名をニッキと言った。

「あのぅ、皆さん会うたびにあんなふうに頭を下げられると困ります」

「あ～、あれねー。温度差はあるけど、やっぱりハイエルフ様はアタシらにとっちゃ伝説みたいなものだから、ああなっちゃいますよね」

「伝説と言われても……私はなにもできませんし」
「いやいや、ハイエルフ様に伝わるお歌があるじゃないですか。アタシも昨晩聞かせてもらいやしたけど、思わず目頭が潤んじまって」
腕組みをして遠い目をしたニッキは、確かに感動を思い出してもう一度目頭を熱くしていた。
「……」
確かに昨晩、請われてハイエルフの王族に伝わる詩を歌った。
――古き森　浮かぶ油　燃え盛る命　焔のごとく
神が降り　森に住まい　8色の葉　人に与う
――初めに木の神が　次に草の神が　最後に花の神が
森を言祝ぎ　風を休め　雨を垂れ　陽を誘う
古代エルフ語で歌うと、魔力が込められてしまい炎が飛び出すので、現代の言葉に直して歌った。それでも気がつくと魔力が出そうになるのでなんとか押さえ込むので精一杯だった。
（……私が歌えば、【火魔法】になってしまう。火はエルフにとって禁忌。それを知れば、この方たちは……）
いつか言わなければいけないと思っていた。そのとき彼らが自分を嫌うだろうことは予想できたし、それはそれで仕方のないことだ。
だけど、今じゃない。
今はまず、「表の世界」へ帰ることが先決だ。
だから彼らを迷わすようなことは言わないほうがいいとアナスタシアは判断していたし、レイジも同意見だった。

（ニッキさんも、私が炎をのせて歌うことを知ったら……きっと軽蔑なさるでしょうね……）

そう思うと気が重くなった。

「ん？」

そんなニッキはふと、遠くの空を見やった。

「どうか……しましたか？」

「いえ、その、ハイエルフ様は聞こえませんでしたか？」

すると、確かにアナスタシアの耳もとらえた。

それは「キィー」というような鳴き声だ。

「あっ、あそこ！」

北の空にいくつものごま粒のような点が見えた。それらは時折降下して、また上がってくる。そのたびに大地に煙が上るようだった。

その赤い身体に、炎を纏った初夏鳥が集団となって飛来しているのだとわかるのは、それから１０分後のことだった。

49（後書き）

たくさんのおめでとう、ありがとうございます。
なかなかお返事かえせなくてすみません。書籍化作業、ルルブレ7巻、その他いろいろ作業で時間がなかなか取れず。
ただ、風の白猿神に食いつく人が多くて笑いました。あれはほんと面白かったよねえ。

50

★　ダークエルフ集落　★

「はぁ、はァッ、ヒィッ、はぁ、はっ、はァッ」
「しゃっきり走れ！　てめえも死ぬぞ！」
「ヒィィィッ」

プンタは百人長にどやされながら走っていた。緩みきったプンタの身体はすでに限界を超え、肉体は悲鳴を上げていた。まだ走れているのが不思議なくらいだった。

「降下ァッ！」
「ヒィッ」

百人長に襟首をつかまれ、横にぶん投げられる。頭から地面に突っ込むと、口には落ち葉と泥とが入ってきた。
直後、ギィェェという鳥の鳴き声と、羽ばたきによる突風が吹き荒れる。
初夏鳥は降下して獲物を捕まえるのだが、その身体は翼を広げると5メートル以上にもなり、降下できる場所は限られていた。

「起きろ、走れェ！」
「も、もう、無……」
「走れャァ！」

ならば木々の密集したところに立ち止まればいいのでは、と考えるのは素人だ。

初夏鳥は身体に炎を纏っており、立ち止まれば遠巻きに火を点けられ、逃げ道を断たれてしまう。

できることは逃げるだけ。

どこまで逃げればいいのかも、わからない。

おそらく逃げ切ることはできない――と感じている。

追ってきている初夏鳥の数は3桁を優に超える。

すでにこれらの情報は百人長に伝えていた。ダークエルフ集落も遠目に見えた。だというのに百人長はなぜか、プンタを放置して逃げなかった。

樹上集落には初夏鳥に気づいたダークエルフたちが武器を手に現れていたが、数が少ない。今日は多くの手練れが偵察に出ていることをプンタは知っている。

その中に、輝くような金色の髪を持つハイエルフがいる。

（ハイエルフ様。ごめんなさい。死ぬのが怖くて。殺されるのが怖くて。初夏鳥を連れてきてしまいました……）

プンタもハイエルフの貴さを知っており、幼いころから過去の種族興亡の話を刷り込まれるほどに聞かされている。

自分の軽はずみな行動が引き起こした、この事態に、肉体的な苦しさとは違った涙があふれてくる。

「もう、ダメッ……」

涙と息苦しさで頭が混乱して、プンタは前のめりに倒れた。それをまた、無理矢理引き起こされる。

「起きろ！　死にてェのか！」

「ど、どうせ、死ぬ、んダ……」
「うるせェ、バカ！」

横っ面を張られ、少しだけ正気が戻ってくる。

「で、でも、アンタも自分を、ダークエルフを殺すつもりで……」
「うるせェ、バカ！」

またひっぱたかれる。

「すぐそこがゴールだろうが！　仲間は助けてくれねェのか！？
ひとりで勝手に死ねと放り捨てるようなヤツらなのかコラァッ！
生きろォ！」

もうめちゃくちゃだった。
最初、プンタの話を聞いていた百人長は「おっかねェ鳥だ」と思い、部隊を3つに分けて逃がしたのは英断だったと思った。
そうしてダークエルフの集落まで向かい、鳥の群れをぶつけてやろうと思っていた。ダークエルフと食い合いになれば自分が逃げる隙も生まれるし、なんなら夜になれば闇に紛れて逃げられると。
だが、そんなことができるのは「ふつうの怪鳥」を相手にしたときだけだ。
走り出して30分、1時間、1時間半と、振り返るたびに膨れ上がっていく鳥影。
全体の4分の1になって追ってきているはずの集団が、これほどの数になっているのを見ると、地底都市を目指して逃げた仲間が無事であるという自信がなくなり、ひいては地底都市すらヤバイのではと思い始めた。
こうなれば、なんとしてでもこの4分の1をダークエルフたちに打ち倒してもらわなければならない。

あの鳥は、空を飛べない種族でも倒せるのだと、そう信じられる確証が欲しくなったのだ。

「あれはプンタ!?　横にいるのは、地底人かッ――バカ者が、地底人に操られ、命惜しさに初夏鳥を連れてくるとは……！」

弓を手にした族長が怒りの声を震わすと、プンタと地底人は射程距離に入ってきた。

「族長、どうするのダ。ここで射殺すか?」

ニッキが問うと、力なく首を横に振った。

「もう遅い。初夏鳥はこの集落もターゲットにした」

巨大な鳥の群れは横に広がると、集落を囲むように上空を旋回し始めた。

それは空を背景に、炎が渦を巻くような気味の悪い光景だった。

「全員、弓を持てぇ！　ノックたちが戻るまで、耐えきるぞ！」

族長の号令に「オオッ」と声が上がった。

初夏鳥は一斉に降下を始めた。あちこちで弦が鳴り、矢が走る。

1本刺さった程度では鳥の勢いを止められず、近くを通り過ぎると風圧で身体が煽られ、枝から落ちていく。

「ここは危険ダ。ハイエルフ様は小屋に――」

「小屋に戻っても危険、そうではありませんか?」

「……そりゃあ、そうだけどね」

じゃあどうするのか、とニッキの目がたずねる。

「族長さん！　鳥を相手に樹上は不利です！　むしろ大地で、大樹を盾に戦うほうが有利なのではありませんか！？」

アナスタシアの声に、族長がハッとする。

「そ、それは……確かに。地上の敵と戦うことばかり考えておりました。――皆の者、聞いたか！　ハイエルフ様のおっしゃったとおり、すぐに地上に降りよ！」

族長の命令であり、なおかつハイエルフの言葉でもあるとなればダークエルフの動きは早かった。次々に枝から枝へ飛び降りていく。

「ハイエルフ様はアタシが連れてくよ！」

「えっ、えっ、あのっ、あっ――」

弓を地面に放り投げたニッキはアナスタシアを片手に抱くと枝から飛び降りた。絹を裂くような悲鳴を上げてしまったが、ニッキは危なげなく枝から枝へ、ロープを片手でつかんでぶら下がり、地面へと降り立った。

「立てますかい、ハイエルフ様」

「あ、ひゃ、ひゃい……」

レイジよりも乱暴で、レイジよりも直線的に降りたものだから思わず腰砕けになりかける。

「来るぞォ！」

誰かが叫んだ。

初夏鳥の一羽が、地面すれすれまで降りて迫ってくる。砂塵を巻き上げ、降下の速度そのままにすさまじい速度で。

そこにいたのはプンタと地底人だ。集落にたどり着いたからか、汗だか涙だか鼻水だかヨダレだかでびしゃびしゃになった顔は失神しており、その場にどしゃりと崩れ落ちる。

あっ、とダークエルフたちは声を上げる。

マッチョばかりの集落にあってプンタは確かに異質な存在だった。丸くてふにふにしていた。

だけれども嫌われていたのかと言えばそうではない。

彼が、気の利く男だということはみんな知っている。

「おいィ！　ここで気ィ失ってンじゃねェよ！」

そのとき、地底人は――敵であるはずの彼は、腰の短剣を引き抜くと、プンタを守るように立った。

なぜ、どうして、なんでアイツが、とダークエルフたちは思ったが、プンタを守ってくれるのであれば是非もない。

「撃てェ！」

族長の命令で放たれた弓矢は、突っ込んで来る初夏鳥に何本も命中し、その身体はぐらりと揺れ、右羽根が地面に触れるとぐるりと身体は回転し、地面にもんどり打って跳ねた。

初夏鳥の巨体はプンタたちから離れた大木に激突すると、幹を震わせ多くの葉を落とす。

「……」

百人長は、初夏鳥が巻き上げた泥が顔にべっしゃり掛かっていたが、それよりもなによりも、大木に打ちつけられてぴくりぴくりとして戦闘不能状態になった初夏鳥を見て、

「うおおおおおおおおッ！」

声を上げた。

「おィ、見たかプンタ！　倒したぞ！　1羽、倒しやがったぞ！」

「う、うぐぅ……」

胸ぐらをつかまれてがっくんがっくんされたプンタが泡を噴いた。

「まだダ！」

その喜びを吹き飛ばしたのは族長の声だ。

「次が来るぞぉ！！」

次々に、初夏鳥たちが降下を始めた。

51

★　ダークエルフ集落　★

飛ぶ鳥を射貫くのは非常に難しい。ましてやその巨体が自分目がけて飛んでくるような状況下なら、なおさら手元が狂う。

さらには1羽への集中射撃ならば仕留められたものの、全方位から滑空してくる初夏鳥を相手にするのは不可能だった。

「右ィ！」

「ダメダ、当たらん！」

「伏せろ！」

例えるなら大型車だけが走る高速道路に突っ立っているようなものだ。しかもその大型車は四方八方からやってくる。

いくら屈強なダークエルフとはいえ、相手のサイズが自分たちの数倍、数は数十倍となれば翻弄されなぶり殺しにされるのは当然の結末だった。

暴風に巻き上げられて転び、羽根先が当たって腕を折り、爪を引っかけられて空中に放り出される。

初夏鳥は炎を纏っているので周囲はたちまち乾燥し、ひりつくような熱気が立ちこめる。

もちろん初夏鳥とて無事ではない。個体同士がぶつかってぴくりとも動かなくなったものもあれば、木に激突してふらふら飛び去ったものもある。

それでも初夏鳥は攻撃を止めない。

ここにいる者どもを根絶やしにしてやる――という、個ではなく群としての意思を感じる。
倒すか、倒されるかなのだ。
その二者択一で言えば、ダークエルフは極めて劣勢だった。

（魔法、私が魔法を使えば、倒せるかもしれません）

アナスタシアは自分の【火魔法】が並々ならぬ威力を持っていることを自覚している。
同じ火を扱っている初夏鳥であっても、自分の魔法は通用する可能性が高い。

（でも――ハイエルフの私が、【火魔法】を使ったら……）

ダークエルフたちはどう思うだろうか。
森の住人にふさわしくない、強烈な炎を自分が発したら……。
それでも、座して死を待つくらいなら……。
いや、調査に出ているダークエルフたちを待てば……。

「チクショウ！　薄汚い火で家を燃やすんじゃない！」

樹上集落ではいくつかの小屋が煙を上げていた。滑空する初夏鳥の炎が引火したのだろう。
見れば、焼き切れているロープもいくつかある。
「薄汚い火」という言葉が、アナスタシアの胸を刺した。
出かかった声がそこで縫い止められた。

「大丈夫、ハイエルフ様はアタシたちが守るから」

アナスタシアのそばに立って冷静に矢を放っているニッキが言う。

「もう少し待てばノックたちが帰ってくる。そうしたら、こんなヤツらブチ殺してやるさ」

ニカッと笑ってみせたニッキの横顔を、通り過ぎた初夏鳥の炎が照らし出す。

だがノックたちが帰ってくるのはどれくらい先か。調査に手間取っているのなら夜遅くということもあり得る。

逆にダークエルフたちはどれだけ持ちこたえられるのか。

（レイジさん……！）

神に祈る思いで、レイジの名を心に叫んだ。

しかし彼は昨日の早朝に出て行った。自分たちが竜人都市からダークエルフ集落までやってくるのに掛かった時間は、2日半。なにかを忘れたとか、予想もしなかったような事情でもない限りレイジが来ることはないとアナスタシアの冷静な部分が推測する。

レイジは来ない。

そう認めるのが、イヤで、アナスタシアは唇を噛む。

「ハイエルフ様！」

「！？」

ニッキの鋭い声で我に返ると、初夏鳥がこちらに向かって一直線に飛んでくる。

横から強い力ではね飛ばされる――ニッキの力強い腕がアナスタシアを遠ざけたのだ。

ニッキは横目でアナスタシアを見た、ニヤリ、と笑ったように見えた、と思うと、

「ニッキさん！！」

直後には初夏鳥が突入してきてニッキの身体ごと空へと舞い上がる。彼女の手にしていた弓が地面に落ちてくるんと回って倒れる。

「おらあああああああ！！」

ニッキは初夏鳥の左羽根の根元に食らいついていた。初夏鳥の炎が彼女の肌を焼く。けれどそれに負けず、腰からナイフを引き抜いたニッキは、初夏鳥の目にナイフを突き刺した。

『ギィィッィイイイイ』

「生意気に苦しがってんじゃねえよ！」

抜く、刺す、抜く、刺す、抜く、刺す。

イヤイヤと首を振って嫌がる初夏鳥は、炎をさらに燃え上がらせて、錐もみ状に飛んでさすがのニッキも中空に投げ出された。

すでにニッキは大木の上空にあった。

「あぁっ……！」

初夏鳥は回転しながら墜落していくが、ニッキの身体は離れた大木に突っ込んでいき、葉に隠れて見えなくなった。

落ちて、こない。

生きているのか死んでいるのかわからない。

（私を、かばってくれた……私の身代わりに、なった……）

地べたに尻餅をついたままのアナスタシアは、ニッキを思う。

（私のために、ニッキさんは……！）

自分はなにを気にしていたのか。

嫌われること？

恐れられること？

蔑まれること？

憎まれること？

（なんという、なんという自分勝手な……！）

声を封印されても、ただの「お飾り」として扱われても、自分はハイエルフの王族だという誇りがあったではないか。

だからこそ、空からモンスターが降り注ぐレフ魔導帝国で魔法を使い、レイジを守った。

（あのときの思いを忘れたの？）

ダークエルフたちが自分をハイエルフと扱ってくれることにいい気になっていた？

レイジがいつも守ってくれるから自分はなにもしなくていいと思っていた？

「私は、アナスタシア」

違う。

この魔力は誰かを守る力。

王族である誇りがあるのなら――いや、自分のために戦ってくれた族長やダークエルフたち、自分のために盾になってくれたニッキに寄せる想いがあるのなら。

「ハイエルフの王族にして、エルフを率いる者！！」

嫌われようと、恐れられようと、蔑まれようと、憎まれようと。

「我が魔力の餌食となれ――」

敵対するすべてを、焼き尽くす。

51（後書き）

この小説が面白いと思われましたら、是非とも「ブックマーク」をよろしくお願いします！
それとページ下部にある★から「評価」していただけると、作者が書き続ける応援となりますので、こちらも是非。

52

★　ダークエルフ　集落　★

百人長は頭を抱えたくなった。
ダークエルフの集落には主力となる戦士がいなかったのだ。地底人の部隊を苦しめた、身長2メートルを越す戦士――ノック――がいない。
主力が留守の集落に初夏鳥を連れてきてしまったのだ。
これでは勝てない。勝てるわけがない。
初夏鳥がダークエルフを翻弄し、傷つけていく。百人長はプンタを大樹の根元に隠すと、自分も物陰で息を潜めた。

（クソッタレ。これじゃあダークエルフが全滅して終わりじゃねェか！　こんなにとんでもねェモンスターがいるなんて聞いたことがねェぞッ！）

自分の不運を呪えばきりがなかった。
正直なところ、ダークエルフ種族が滅びようが生き延びようがどっちでもいいのだ。
天賦珠玉の取り合いでは邪魔になるが、それだけで、この数十年はお互い距離をとって暮らしてきた。

（なんなんだよ……急に天賦珠玉が見つかりやがって……アレさえなけりゃ、わざわざこんな顔色の悪りィ連中を相手にすることなんざなかった）

ちょうどダークエルフ集落と地底都市との等距離あたりで見つかった天賦珠玉は、生活を一変させるものとして地底都市ではとてつもなく価値のあるものとして扱われることになった。

（天賦珠玉だろうがなんだろうが、命あってこそだろうがよッ……！）

初夏鳥が近くで声を上げたので、思わず百人長は首をすくめた。

地底都市では武勇で鳴らす百人長も、初夏鳥が1羽ならまだしも、これだけの群れとなってしまえば嵐が通り過ぎ去るのを願うしかない。

だが今の初夏鳥は、威嚇の声ではなく悲鳴のようだった。

ハッとして見上げると高いところでダークエルフがナイフを初夏鳥の目に突き刺している。

（な、なんだありゃ）

女ダークエルフは身体を焼かれながらも初夏鳥を殺そうとしている――せめて道連れにしてやろうとしているのだ。

どくん、と心臓が高鳴った。

あれこそが戦士だ。あれこそが勇気ある者の姿だ。

ここで地面に這いつくばっている自分が、たまらなく情けなく感じた。

「あァッ」

ダークエルフは初夏鳥から落とされると、木の中に突っ込んで行く。それは奇しくも百人長がいる木だった。落ちてくるかと思って身構えたのだが、落ちてこない。

「どっか枝に引っかかってやがる」

地面に衝突するような大惨事は免れたが、しかし身体は大やけどを負っているはずだ。

すぐの手当が必要だろう。

「助けてやらなきゃ――」

気がつくと、身体が勝手に動いていた。大木にしがみついて登り始めていた。ここはダークエルフの小屋が設置されていない木なので、補助はない。

だが腕力と運動神経が自慢の百人長には木登りなんてたいしたことはなかった。ポケットには地底人の軍属に与えられる特製の傷薬がある。これを塗れば助けられるかもしれないと思うと、無我夢中で登った――。

ダークエルフ族長は左足を折られたが、身体を大木の幹に預けながら、器用に矢を放っていた。

しかし矢の残りは心許なく、さらには戦える仲間の数はどんどん減っている。

極めつけはアナスタシアの防御を任せていたニッキが初夏鳥に空へと連れ去られたことだ。その後を見ていないが、族長はアナスタシアをひとりにはできないと、折れた足を引きずってそちらへ向かおうとした――。

全身に走る震えが身体を押しとどめた。

「私は、アナスタシア」

尊崇するハイエルフの身体から放たれた、濃密な魔力が、彼女を輝かせる。

ふわりと長い髪が浮いて、火の粉が渦を巻いた。

その炎は、初夏鳥の赤い炎とは明らかに違う――彼女の美しい髪のごとき白金色だった。

「ハイエルフの王族にして、エルフを率いる者！！」

その言葉が族長を貫き、脳がしびれる。

次に起きた出来事をなんと表現すればいいのだろう。後世に語り継げばいいのだろう。

アナスタシアが右手を振り上げると、炎が、まるで空へと打ち上がる断頭台の刃のように閃いて、旋回する初夏鳥の群れに激突する。

パッ、と光が散って、アナスタシアの炎に触れた初夏鳥の身体は次々に誘爆していく。

上空は大混乱だ。

アナスタシアの放つ炎は2撃目、3撃目と連続していく。

『クェェェェェ！！』

そこへ、滑空する初夏鳥がアナスタシアの四方から迫る。

アナスタシアはなにひとつあわてた様子もなく、左右に手のひらを突き出すと、ひらりとその場に一回転した。

ゴォッ――。

彼女を中心に10メートルほどの炎の円ができる。

炎は恐ろしいまでの上昇気流を作りだし初夏鳥はバランスを崩し

て彼女の周囲に墜落する。
衝突の衝撃で土砂が舞い上がり、炎の円に触れた初夏鳥は火炎放射器のように高く高く炎を噴き上げる。

――ギィーッ。ギィーッ。ギィーッ。
――クェェエエ。クェェエエ。
――ギィーッ。ギィーッ。ギィーッ。

上空ではその数を、すでに半数まで減らした群れが何事かを叫んでいる。
戸惑っているようだ。
今まで、一心不乱に攻撃することだけを考えていた彼らが困惑しているのだ。

「……」

アナスタシアは無言で空を見上げると、両手首を合わせて空へと突き出した。

「敵を穿つ矢となり、飛べ」

アナスタシアの身体から強烈な魔力が発せられると、その手からは到底「矢」とは呼べないような炎の奔流が打ち上がる。
大木の枝に触れるや瞬時に炭化させ、そこに載っていた小屋がバランスを崩して落ちていく。
炎は、初夏鳥の群れの中央で爆発した。
爆発は日が沈みかけていた周囲を真昼のように明るくし、直後に薄闇が戻ってきた。
断末魔の悲鳴が上空から聞こえ、蜘蛛の子を散らすように初夏鳥は逃げていく。

ちりぢりになった初夏鳥を追うことはもはやできないだろう。そして逃げる鳥影にはもはやなんの戦意も残っていなかった。

52（後書き）

別作品ですが私の書いている「察知されない最強職（ルール・ブレイカー）」の書籍版7巻が9月30日に発売が決定しました。

なんと、コミカライズ企画も進んでおり、ヤングエース本誌に掲載予定です。紙ですよ紙！

詳細はまた追って。

53

★　ダークエルフ集落　近隣　★

「急げ！　あの初夏鳥の群れ、尋常ではない！」

ノックは声を張り上げ１０人からなる部隊を叱咤激励した。
しかし早朝から日暮れまで移動し続け、さらには凶暴なモンスターとの戦闘をなるべく避けるために神経を張り詰めてきた隊員たちの疲労は限界であり――ここにきて全力疾走３０分の追加は彼らの心臓と肺が全力で活動してなお足りなかった。

「ノ、ノック、もう、無理ダ……」
「いいから走れェ！　群れは集落に向かったぞ！」

ノックだけは図抜けた体力を持っていたので、ひとり部隊の先頭を突っ走っている。
３０分ほど前、上空を飛んでいく初夏鳥の群れを見つけたのだ。
それが集落の方向に向かっているとわかった途端、イヤな予感がノックの背筋を這い上った。

「わ、わかって、いる、だが、疲労困憊で、たどり着いても、戦えん……！」
「ヌウ！」

そのふがいなさが頭に来たが、彼の言うこともっともだ。

「さ、先に、ノックは、行ってくれ……」

「わかった！」

ノックはそれまで走っていた速度が冗談であるかのように、風になって走り出す。

その背中を見送りながら隊員たちは唖然とするしかなかった。

（いったいなにが。まさか、初夏鳥に手を出したバカなどはいないはずダが……）

それから突っ走ること15分、ノックは前方に光を見た。

渦巻くような初夏鳥の群れは確かに集落の上空にあった。肝が冷えた。あそこには仲間だけでなくハイエルフ様までいるのだ。

焦って走るが――しかししばらくするととてつもない炎が、まるで大地が天へツバでも吐きかけたような炎が噴き上がり、初夏鳥を散らしていった。

いよいよとんでもないことが起こったのだ。

ノックは全力で走って、走って、たどり着くと――そこには、

「な……なんダ？」

空は残照があるのみとなれば森の中は暗い。

だがところどころに炎の爪痕が残り、集落のある大樹の大地を照らしている。

ダークエルフたちは、額（ぬか）ずいていた。

その中央には――ハイエルフ様がただひとり、立ち尽くしていた。

どこか、困ったように眉をハの字にして。

やった。やってやった。いや、やらかした、かもしれない。
アナスタシアは魔力を残しながらも初夏鳥を散らすと放心したように空を見上げていた。
自分のいちばんまずいところをさらけ出してしまった。エルフの森に住む全員が忌み嫌う「炎」、その使い手であるということを。
嫌うような視線を、罵声を、覚悟はしていた。だが覚悟していてもぶつけられれば当然つらい。アナスタシアは真冬の防寒に衣服を重ね着するように、１枚１枚ゆっくりと心に鎧を重ねていく――。

「ハハァーッ！」

族長がまず跪き、両手を前に投げ出し、額を地面につけた。
それを見た他のダークエルフたちもまた同様に動いた。
アナスタシアを中心に、放射状にダークエルフが額ずいているのである。

「……え？」
「偉大なるハイエルフ様！　さらに王族であったとは存じ上げず、失礼を申し上げましたァッ！」
「え？」
「卑小なる我らではお守り申し上げることすらできず、王族様のお手を煩わせてしまい大変畏れ多く、しかしながら王族様の魔力を感じることができ、この身に余る光栄でございますゥッ！」

ぽかん、とした。
なんだか思ってた反応と違う。

「あ、あの……私、【火魔法】で倒したのですけれど」
「この目にしっかと焼きつけましたァッ！」
「あの、話しづらいので顔を上げてもらえます？」
「畏れ多くも我らはァッ」
「あ、そういうのはもういいので、顔を上げてください……」

がばりと全員が一斉に顔を上げたので、「ひっ」と思わず変な声とともに蛍のような炎が飛んだ。
全員がアナスタシアを見ている。額に土をくっつけたまま。

「あ、あの」

押し寄せるような沈黙に抗って口を開くことがつらい。

「私、天賦ではなく、生まれつきの【火魔法】使いでして、それで……」

しーんと静まり返っているのがやはりつらい。

「そ、そのぅ……みんなイヤじゃないのかなと思いまして……」
「イヤ？　畏れ多くも王族様、疑問に感じておられることが理解できず、我が身の理解力の低さに絶望しております」

ほんともうそういう言い方止めて欲しい。

「火は……森を焼くでしょう」
「はい、もちろんです」

族長はいまだに「わからない」という顔をしながら、言った。

「しかし火がなければ生きていけませぬ」

その単純な言葉はアナスタシアの胸を衝いた。
火がなければ生きていけない。そのとおりだ。
料理にも使うし、消毒にも使うし、暖を取るのにも使う。
こんなにも素直に受け入れてもらえるとは思わなくて――じわり、じわりと込み上げる温かな感情に、思いがけず涙が出そうになる。

（この人たちは私の知っている「エルフの森」の住人とは違うのですね……。レイジさん、私、受け入れてもらえました）

早くレイジに伝えたいとアナスタシアは思った。
どれほどうれしかったかを。どれほど安心したかを。

「王族様！　我らをお導きください！」

一斉にまたダークエルフたちは額ずいた。
自分で言ったこととは言え「エルフを率いる者」とは大きく出たものである。
どうしよう――と思っていると、

「な……なんダ？」

という声がした。ノックが帰ってきたのだ。
アナスタシアはホッとする一方――思い出す。

「あっ！　ニッキさんは！？」

ニッキが落下した木を見に行くと、その根元にはプンタが気を失って転がっており、横では包帯を巻かれたニッキと大の字になって

伸びている地底人がいた。

「こいつッ……！」

「止せ」

ダークエルフのひとりが短剣を抜くのを、族長が押しとどめる。

地底人はぜえぜえと息をしながら、

「……勇者が、大ケガしてるってのに、お仲間の登場は遅せェじゃねェか……俺の手当が遅れてたら、ヤバかったぞ」

勇者、という言葉はアナスタシアから見てもニッキにはぴったりだった。

地底人の手は血まみれで、そばには薬らしき瓶が転がっていた。

彼が治療をしてくれたことは間違いない。

「なぜあなたは……？　それ以前に、どうしてここにプンタさんと？」

アナスタシアが問うと、倒れている百人長の瞳に――畏怖がちらりと見えた。

ダークエルフたちは問答無用でアナスタシアに服従したが、地底人の彼には恐ろしい存在に見えたことだろう。

安堵と感動で浮ついていたアナスタシアの心中は、引き締まる思いだった。

これから彼にいろいろと聞かなければならないだろう――。

54（前書き）

1日分更新、ミスりました。土日は話数管理が甘くなる……。

54

★　地底都市　作戦本部　★

百人長が帰らない――作戦に遅れはつきものだったが、この状況でそんなことが起きるとさすがの元帥も動揺を隠せない。

消灯時刻を過ぎた地底都市の作戦本部で、戸外で物音がするたびにハッとして顔を上げる。いつもなら一房だけ垂れていた前髪は今日はバラバラだった。

「……元帥、落ち着いてくださいよ。百人長のチームだけが戻らないのは確かに心配っすけど、その可能性もあるってことは想定済みだったじゃないっすか」

参謀が言うと、不安そうな顔ながら設計士もまたうなずいた。

「そう……だな」

明日、いよいよウルメ総本家のサルメを討つ。長年、彼女の独裁に苦しめられてきたがいよいよその歴史に終止符を打つ。

作戦は完璧。設計士と参謀が、サルメを絶対に逃さない内容を検討してくれた。

問題は調停者とかいう化け物だが――それは【狂乱王剣舞（インセインブレイド）★★★★】が解決する。

スーメリアの肉体に起きたトラブルを思えば、この天賦珠玉を使わずに済むのがベストなのだけれど、想定外のことがあれば躊躇せずに使うしかない――。

百人長が。

予定では、そうなっていた。元帥自身が使うと最初は言ったのだが、部下たちは、サルメ亡き後に地底都市を率いる元帥の記憶がぼろぼろになってはたまらないと反対したのだ。

なので、天賦珠玉は元帥が保持し、使うのは百人長と決まった。

百人長には計画の詳細を話していない。軍属として、サルメ派の人間とも多く顔を合わせる彼は、「動揺が顔に出たらマズイから、計画は決行直前に全部教えて欲しい」と言っていた。

そのせいかもしれない、他の偵察部隊が戻っているのに百人長のところだけ戻っていないのは――まだまだ作戦決行に余裕があると思っているのであれば、帰りは急がないだろう。

（だが、決行は明日だ……）

もっと万全を期して動きたかったが、待てば待つほど天賦珠玉を隠しきれなくなる。サルメは強権を発動して全地底都市民の家宅を調査するだろう。

明日は、今日より多くの部隊が地底都市を出て外で活動するのでタイミングとしてはベストなのだ。

「……ん、なんだ」

どこか遠くで物音が聞こえたようだった。爆発のような、土砂崩れのような音。

この音ばかりは元帥の聞き間違いではなかったようで参謀たちも聞いていた。

急いで現場へ向かうと、そこはふだん使わない地底都市への出入り口だった。元帥たちが到着するころにはすでに出入り口ほど近い

兵士たちが集まって、魔導ランプの光を点している。

「なにがあった！」

「こ、これは元帥。早いお着きですね」

驚いた兵士たちが敬礼すると、そこにいたのは――全身傷だらけの兵士だった。

彼が百人長の部隊メンバーだということを元帥は知っている。

「おいッ！　その姿はどうした！？」

「そ、それが……」

息も絶え絶えという体で兵士は話した。

初夏鳥という鳥に襲われたことを。

ちりぢりになって帰還したが、自分以外の隊員全員が死んだことを。

自分ひとりが残ったのだが初夏鳥はそれでも攻撃を止めず、執拗に食らいついてきたことを。

「そんな化け物のような鳥が……！？　百人長はどうしたのだ！」

「た、隊長は、初夏鳥を引き連れ、ダークエルフの集落に誘導すると……」

「！？　あのバカッ……！」

百人長の行動が読めた。

数百年、外敵からの侵入を受けてこなかった地底都市にとって、天敵らしい天敵はいなかった。

しかし、最近見つかり出した天賦珠玉。それを争う相手であるダークエルフ。

彼らが地底都市を見つけようと考えたら、どうなるか。

知恵のないモンスターならまだしも、ダークエルフは地底都市にとって天敵となり得るのだ。
であればモンスターの群れを突っ込ませ、被害を出せば地底都市は安泰――。

（百人長、お前は、地底都市の今後まで見据えているのか……！？）

クーデターが成功して元帥がトップに立ったとしても、ダークエルフという敵がいれば地底都市そのものが長続きしない。
であれば、百人長の部隊に降りかかった災難を、そのままダークエルフにぶつけ、自分を犠牲にしてでも地底都市が無事である方法を選んだのかもしれない。
そのとき、ドンッ、ドンッ、と遠くで音がした。外で初夏鳥が暴れているのだろう。

「見てくる。彼の治療を」
「げ、元帥！？　危険でしょう！」
「敵を見なけりゃ、作戦も立てられないっすよ――そういうことっすね、元帥？」

心配する兵士たちとは別に、参謀は当然のことを言った。
設計士は残し、元帥は参謀と、３人の兵士がついてきたのでふだん使われていない細い通路を上っていく。
カビたようなニオイが立ちこめる通路の先には、錆びた鉄扉がある。めったなことでは使わない非常用の通路なのだが、鉄扉まで至ったところで元帥は異変に気づいた。
暑い。
ムッとするような熱が籠もっている。
遠く上空から鳥の鳴き声が聞こえている――こんな夜に、今まで聞いたことのないような声だ。

「お前たち、開けられるか?」
「ハッ」
兵士たちは鉄扉に向かい、かけ声とともに扉を開いた――。
「――――」
森が燃えていた。
真昼のような明るさは炎によるものだ。
外から熱風と火の粉が吹き込んできて、兵士たちが顔を覆った。
「これが……初夏鳥のやったことか……?」
相当の広範囲に渡って火事となっている。
ふらり、と足が前に出そうになったところへ、
「元帥、危険っすよ!」
参謀が制止の声を上げたが元帥は止まらなかった。
(なぜだ)
疑問があったのだ。
(これほどまでに炎をまき散らした初夏鳥。さぞかし大群がいるのだろうと思ったが……どこにもいない)
上空では相変わらず鳴き声が聞こえるが、それだけで、このあたりに降りてきて火を放っているような個体がいないのだ。

確認するしかない――。
元帥は鉄扉から外に出て、空を見上げた。
炎の原となっている山の斜面で、元帥はそれを見た。

「な、な、な……」

初夏鳥は、なるほど、炎を纏った鳥だ。
遠目にも大きさがわかるほどで、あんなものが群れとなって襲ってきたらいくら手練れの百人長チームでもひとたまりもない。
だが、

「あれは、なんだ」

集まった初夏鳥は群れを崩して飛んで逃げようとしている。
だが――その鳥を捕らえては喰っている、雲を突くような巨人がいたのだ。
見た瞬間、震えた。
あんなものと関わってはいけないと本能が知らせる。

「……あれは、ヒトマネよォ。あんなんでも、中身はトカゲの仲間って話よ」

元帥にそう言ったのは――彼の背後にいたのは。
元帥にとっての不倶戴天の仇敵、ウルメ総本家のサルメだった。

55

★　地底都市　入口　★

なぜこんなところにサルメが？

地底都市の頂点に君臨し、先祖代々積み上げてきた財に比例するように巨大化していく総本家の邸宅から一歩も外に出ないはずのサルメが、なぜここにいるのか？

彼女に付き従ういつものお調子者たちは、いつもとはまったく違う、沈痛な面持ちでそばに侍っていた。

（なにかが違う。でも、それはなんだ？）

サルメがこんな場所にいること自体がおかしいのだが、そうではなく、なにか自分がとてつもない勘違いをしているのではないかという気持ちになっていた。

「アレは……神聖古代からこの世界に棲み着いた、８頭の巨大種の一角よォ。今まで討伐されたのはたった２頭。１頭はドワーフが自分たちの住処ごと爆破して相討ちになったけどォ、ドワーフは絶滅したわ。もう１頭はダークエルフが滅ぼしたけどォ、その間にエルフたちは他のモンスターに食い散らかされたってェ話」

「そ、そんな話……今まで聞いたことも……」

「そりゃァ、アンタには言わないわよォ。言うわけないでしょォ？　アンタの心が折れたら、地底都市の荒くれ者どもは誰が引っ張っていくのよォ」

どくん、どくん、と元帥の心臓の鼓動が激しくなる。
この女は、サルメは、いったいなにを言ってる？
これではまるで――。

（俺を、元帥として認め、のみならず慮っていたかのようではないか……！？）

サルメはぼんやりとヒトマネを眺めている。巨大な身体は人間のようだが、夜の闇にそのシルエットしか見えない。
混乱して逃げようとする初夏鳥を捕まえて口に運んでいるその姿は、幼子が菓子をつかんで口に詰め込んでいるかのようだった。

「……アタシたちのさァ、純粋な血ってなんなのかわっかんないのよねェ。前に捧げたのが何百年も前だって話でさァ……記録もなーんも残ってないワケ。それを、今になって差し出せって言われても意味不明なのよォ」
「……なにを……おっしゃっているのですか？」
「ウルメに残ってて、なおかつ可能性がある女は、もうアタシしかいなかったのよォ。しかもこの年増が、子どもなんて産めるはずないじゃないのよ……ねェ」
「なにを！　おっしゃっているのですか！？　サルメ様！？」

鼻をすする音が聞こえた。それは彼女に付き従っているお調子者たちが鼻をすすったのだ。

「元帥ィ」

サルメは左手を差し出した。

「天賦珠玉出して」

ぎくり、とした。ここで彼女が言っているのはそんじょそこらの天賦珠玉であるわけがない。

【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】のことだ。

「なァにビックリした顔してンのよォ……本気でアタシが知らないとでも思っていたワケ？」

「お、恐れながらサルメ様、元帥は――」

「小娘は黙ってなァ」

参謀が横から口を挟もうとしたが、サルメのひとにらみで硬直して動けなかった。

（すべて、バレていたのか？　なぜだ……どこから情報が漏れたのだ？）

情報が漏れていたのであれば自分のクーデター計画など成功するはずもない。すべてが徒労だったのだ。

元帥はのろのろとした手つきで腰のポーチから天賦珠玉を取り出した。

それを受け取りながらサルメは言う。

「……百人長は、アタシの遠縁なのよォ。ちっちゃい頃はアタシのことをお姉さんお姉さんって慕ってくれたっけねェ」

「なっ！？」

「でも百人長を責めたらダメよォ。あの子は全部わかった上で、最後の最後でアンタを止めるつもりだったんだから」

「そ、それは、どういう」

ワケがわからなかった。
百人長が裏切ったのか？　サルメに情報が筒抜けだった？
混乱の火に油を注いだのは、目の前でサルメが【狂乱王剣舞（インセインブレイド）】を取り込んだことだった。こともなげに。ためらいもなく。

「そっ、それは……！？」
「わかってるわよォ、使ったら、記憶がなくなってくンでしょォ？　元帥、後のことは頼んだわよォ。――アンタたちも、評議会の長老どもがやいのやいの言ったら食い止めるンだよ！」

お調子者たちはすでにさめざめと泣いていた。
そうして「ひゃい」と情けない声で答えると、サルメは悲しげな笑みを浮かべて歩き出した。

「サ、サルメ様！？」

サルメは、今までの鈍重さがウソだったかのようにすいすいと焼けた森を歩いていく。その歩む先にいるのはヒトマネの巨体だ。
すでに初夏鳥は数を減らし、群れはちりぢりになっている。
腹を空かせているのか、ヒトマネは、

『――ウ、ォ、オオオオン』

と遠吠えを上げた。
闇のシルエットにほんのりと光る目がこちらを向いた気がして、元帥の身体は縮んだ。

（まさか……まさか、サルメ様は、アレと戦いにいくのか！？　なぜ！？　なんなのだ、いったい、なんなのだ！？）

自分だけ、筋書きを知らない舞台に上がらされたようなものだ。
自分だけ、道化なのだ。

「元帥閣下、今のうちに中へ」

元帥の腕を引いたのは、目と鼻を赤くし、まつげを濡らしたお調子者のひとりだった。

「しかし、サルメ様が行ってしまわれたのだぞ……」
「サルメ様は、すべてお覚悟の上です。ここで万が一にもあなた様を失うことがあればサルメ様に叱られます」
「……すべて、話してくれるのだな？」
「もちろんです。それが……」

彼はまつげを伏せて、言った。

――サルメ様の、遺言でもありますから。

と。

★　ダークエルフ集落　★

初夏鳥を追い散らし、一息吐いた――と思ったアナスタシアだったが、

「……今の音は？」

異常な音を耳にした。
ずしん、ずしん、と響くような――。
「――ノック！　おおい、ノック！」
ノックが置き去りにしたメンバーがようやく走ってくる。だが彼らの表情は、切羽詰まっている。
「来てる……！　ヤツが、来てるんダ！」
悲痛な叫び声が、ひとまずの安息にひたっていた集落を目覚めさせる。
「森喰い山羊（フォレストイーター）がこっちへ向かっている！！」

56

★　ダークエルフ　集落　★

どうして森喰い山羊（フォレストイーター）が現れたのか、誰も知らない。
ダークエルフたちも「巨大種は未開の地カニオンにいる」という認識で、そこに近づかなければ、こんな、歩く天災のようなモンスターに触れる必要もなく平穏無事に暮らしてこられたのだ。

その姿は。
集落を構える大樹よりも大きく。
足を踏み出せば大地が揺れ。
顎（あぎと）を閉じれば草原が消え。
走ろうものなら森が消え。
鳴けば嵐となり。
吠えれば雷が落ちた。

接近は小山が歩いてくるがごとくであり、遠目にもわかっていた。
真っ直ぐにダークエルフの集落を目指していた。

（終わり）

アナスタシアはぼんやりとそう思った。
初夏鳥のようにがんばって倒したり、死力を尽くしたいなどと思う気持ちはまったく湧かなかった。
地面を揺らしながら迫り来るその存在は、この集落の終末を告げ

ていた。
ノックだけでなく、他の部隊も大急ぎで帰ってきたのは、彼らもまたフォレストイーターを発見したからだった。
だが腕利きの戦士たちも、筋肉をいじめぬいて腕や胸をふくらませることに執心している彼らであっても、誰しもが「戦う」などということは考えていなかった。

――終わりダ。

と、そう顔に書いてあった。

《ぉあああぁぉぉぉあああああああああえええええええええええええ》

フォレストイーターは怒っていた。
いや、怒っているとしか見えなかった。たとえば台風を表現するのに「にこやか」とは言わず「荒れ狂う」「怒り」などと言うのと同じく、フォレストイーターが現れ、吠え、雷鳴が轟くと「怒った」としか言いようがなかった。
吠えた余波が、数キロ離れたアナスタシアのところまで届いて、彼女たちは突風に吹き飛ばされて転んだ。
夜空に叢雲が現れて、ぴかりぴかりと雷光を放つ。
あれはやはり天災なのだ。

（終わり……）

アナスタシアは心にそうつぶやきかけ、

（……ほんとうに、終わりなの？）

小さな、疑問が湧いた。

「ノック」

一方、族長は集落で最も信頼できる長身の戦士を呼んだ。

「お前は、ハイエルフ様を連れて逃げるのダ。我らはここで、1秒でも長く時間を――」

言いかけた族長を手で制したのは、アナスタシアだった。

「……族長、皆様。あきらめるのは、まだ早いです」

「しかし、あれは……」

「倒せないかもしれません。多くの犠牲が出るかもしれません。ですが……追い払うことができる可能性があります。……私の魔法なら」

「！」

決意を込めてアナスタシアは言った。

（終わらせない。終わらせたくない）

ここで逃げるのは簡単だ。ちりぢりになって逃げれば数人は生き延びるかもしれない。

でもそれは「終わり」と同じではないか。

バラバラになった数人が生き延びたところでダークエルフの種族を存続できるかと言えば、不可能だろう。

ならば――ここで。

「皆様、お覚悟を」

自分を信じてくれた人たちとともに戦いたい。

「持てる力のすべてをもって、フォレストイーターと戦います」

初夏鳥の残した炎がダークエルフたちを照らし出す。

その中心に立ったアナスタシアは、誰がなんと言おうと「エルフを率いる者」だった――。

★　地底都市　ウルメ総本家　★

ウルメ総本家の一室に通された元帥は、そこに地底都市を動かす「都市評議会」の評議会員、全部で10人のうち、9人と出会う。

9人のうち1人は元帥の父で、欠員である1人はサルメだ。

「……なぜ、評議会の皆さんが……」

「まずは座ってくれ、元帥殿」

評議会員のひとりに言われ、元帥は座った。すると元帥の父が、

「……これまでお前に話していなかったのは、サルメ殿が『自分の責任においてなんとかしたい』とおっしゃっていたからだ」

「父上？」

父とちゃんと話すのは数週間ぶりだった――自分も、父も、公務

で忙しかった。
だがこんなにも父は老いていただろうか？　白髪は薄くなり、シワは深く、身体は縮んでいる。テーブルに載せられた手指は細く枯れ枝のようだった。

「我ら種族の代表であるウルメ総本家には『盟約』が課されておった」
「……盟約？」

父は盟約について語った。
それは種族の長に引き継がれる、種族に刻まれた呪いのようなもの。
権利とともに義務を与えられる。

「権利とはすなわち、調停者と自由に会うことができること」

元帥はハッとする。
スーメリアをさらった少年が侵入してきたとき、サルメは調停者なる者を召喚していた。

「調停者とはなんなのですか、父上」
「この世界を管理し、維持する存在だと聞いておる……。サルメ様は、調停者から義務の履行を迫られていた」
「義務？」
「我ら種族の、『貴顕の血』を差し出せということだった」

言葉のわからなさに、元帥は目を瞬いた。

「種族の純粋なる血が必要なのだそうだ。それがどういうものなのか、わからぬ。過去にその義務が果たされたのは何百年も前だとい

う……記録が残っておらず、どうしていいのかわからなかった」
「……調停者とやらはなにを言ってきたので？」
「ただ『貴顕の血』を差し出せとしか言わなんだ。だから、サルメ様は苦しんだ。サルメ様の血ではダメだというので子どもを欲したのだが、それもうまくいかなかった」
「ま、まさか、若い男を侍らせていたのは……」
父は渋い顔でうなずいた。
「子を成すためよ。協力に応じてくれた者も事情はわかっておるが、彼らにも秘密を守らせた。サルメ様はしかし、調停者の存在や義務の失敗が露見して都市の皆を心配させたくないからと、単に男遊びをしているふうを装いたいと仰った」
唖然として、元帥は言葉を失った。
男遊びに狂い、酒を飲み、贅沢を楽しんでいると思っていたサルメは、自分の知らないところで種族存続のために戦っていたというのか――。
サルメにとって不幸だったのは、ストレスを紛らわすために飲酒をしていたことで、過度の飲酒がもたらす害について知らなかったことだろう。
「――ならば、なおさらサルメ様を止めなければ」
それほど地底都市のことを考えていてくれた人ならば、死なせるわけにはいかない。
なぜ父を始め評議会員たちはこんなところでボサッとしているのかと元帥は焦燥感に駆られた。
「サルメ様は、巨大種の出現が、義務の不履行による反動だと考え

ている」
「……あのヒトマネが？　だから、倒さなければならないということですか？　だとしても！　それをサルメ様ひとりに任せるなんていうのはおかしいでしょう！」
元帥は、ドンッ、と拳をテーブルに叩きつける。
「落ち着け！　バカ者が。アレを倒す、いや、せめて追い返せる可能性を持っているのは星６つの天賦だけだ。ゆえにサルメ様は持っていた天賦をすべて【オーブ着脱】で抜き、【身体強化★★】に付け替えた」
「そんなことはわかっています！　私たちが足手まといだから行くなとおっしゃるのですか！？」
「それもある。だが、サルメ様が望まなかったというのが理由だ」
「サルメ様が？　――まさか」
元帥は父の言葉の先を予測できた。できてしまった。
「サルメ様は……死ぬつもり、なのですか」
父はうなずいた。
「……死ぬことで、種族の長であることが他の者に移るであろうとサルメ様はお考えだ。そこで義務が、一度なくなるのではないかと。あるいは他の者が長になれば、『貴顕の血』がその者でよいということになるかもしれぬ。いや、せめて若い者がいる家系に移れば、子を成す時間を稼げる。……今の、袋小路のような状況を打破するためには、サルメ様が死ぬしかなかったのだ。それほどに義務は重く、義務を果たさなければ我らの生きる道はないとサルメ様は考えた」

父が言葉を吐ききると、室内には毒でも充満したかのように元帥には感じられた。
様々なことが頭の中をぐるぐると回る。
なにが正しかったのか。
どうすればよかったのか。

「始まりました！」

そこへ兵士が飛び込んで来た。

「ヒトマネ相手にサルメ様の戦闘が始まりました！」

元帥はバネ仕掛けのように立ち上がると、走り出した。

「どこへ行く！？　待て！」

父の制止を無視して飛び出した。
狭い廊下を走り、階段を駈け下り、外へと向かう。
どこへ行くのか――決まっている。
戦闘を見届けなければならない。

「ただひとり巨大な宿命に抗い続けた女の、最後の戦いを見ないで、なにが『元帥』だ……！」

元帥は外へと通じる細く暗い通路を走る。
なにも知らなかった。
誰も教えてくれなかった――なんて言ってはいけない。
自分は最初からサルメを軽蔑し、彼女をちゃんと見てこなかった。
彼女のイラ立ちをきちんと受け止めなかった。

飛行船の調査で警邏隊がやられたときに、サルメが激怒したのも――彼女は「わけのわからない理不尽な悪」の存在を知っており、知らぬものに手を出すことで仲間が傷つくことを恐れたからだ。

「私は地底都市に『新たな時代』を到来させたいと、ただそれだけしか考えていなかった……」

なにも知らなかった。

知らなかった、では許されない立場だというのに。

「――元帥！」

鉄扉の向こう、複数の兵士とともに参謀がいる。

仲間が呼んでいる。

元帥は暗い通路を抜け、外へと飛び出した。

57

★　地底都市　外郭　★

戦いは、長く続かなかった。

いかに【身体強化★★】を身につけていたとしてもサルメの元の肉体は、まったく鍛えられていないのだ。

対するヒトマネは、他に類を見ないような巨体とはいえ野生で暮らしてきた。

到着した元帥が見たのは、数々の巨大な斬撃がヒトマネの黒く巨大な肉体に襲いかかるところであり、その体躯が揺れ、たじろぐところだった。

おおっ、と周囲でどよめきが上がった。

だがそれは短い間のことだ。

絶え間なかった斬撃は散発的になり、やがてぽつり、ぽつりといった、閉めきらなかった蛇口からこぼれる滴のようになる。

息切れした呼吸のように、と言ってもいいかもしれない。そしてそれは比喩ではなく、実際のことなのであろう。

ヒトマネは斬撃に慣れた。

そうして斬撃を巨大な腕で受け止めるようになると、大足を振り上げて――踏み潰した。

一瞬遅れて、ずーん、という音と、地響きが元帥たちのところまでやってくる。

しばらくヒトマネは動かなかった。

その沈黙の時間は――地底人たちにある事実を思い知らせた。

斬撃を放っていた人物は、死んだのだと。

ヒトマネが顔を上げた。顔はこちらに向いている。
空の初夏鳥はすでに姿を消し、近場にエサはもはやない。
ダメージは与えたはずだが致命傷ではない。
そうなれば――ヒトマネは次になにを狙うか――。

見られた。

元帥が感じ取ったのは動物的な恐怖の本能だ。全身が総毛立つと同時に、

「ランプを消せェッ！！」

叫んだ。
人々はぎくりとしたように身じろぎした。

「ランプを消せ！　バカ野郎！　あの化け物の標的になってしまうだろう！」
「は、はいっ」

あわてて兵士たちは手にしていた魔導ランプを消したが、周囲は初夏鳥が暴れたせいでいまだ火がくすぶっている。
ヒトマネの目はこちらへと向いている。もう、姿を確認されている。
ヒトマネが、動き出す。
こちらへと、歩いてくる。

「クソッ……二手に分かれるぞ！　ここに都市への入口があることを知られてはならん！　手近な入口へと向かってそこから帰還せよ

！」

「し、しかし元帥、この暗がりでは……」

「魔導ランプなんぞ点けたら、それこそ標的になるだけだろうが！　いいか――ここに、この先に、都市があることだけは絶対に知られるなよ！？　あんな化け物がやってきたら、我ら種族が滅ぶのだぞ！！」

「は、はいぃっ！」

兵士たちは、山を左右に逃げ出した。それは遁走とでも言うべき無様な走りっぷりだったが、ぐずぐずされるよりはよほどいい。

しかし元帥は、兵士たちとは違う方向へと走り出そうとした。

「待ってください」

その腕を、つかまれた。

「どこへ……行くつもりっすか」

元帥の間近で見続けていただけはあり、参謀は彼の心境変化について気づいていたようだった。

「離せ。俺は行かねばならん」

「どこへ」

「……サルメ様のところだ」

確かにヒトマネは足を振り下ろした。そして斬撃は完璧に止んだ。

しかし、彼女が死んだという確証はない。

気絶しているだけかもしれない。疲労困憊で動けないだけかもしれない。大ケガを負って倒れているかもしれない。

だとしたら、彼女を救わなければならない。

自らの命を使ってでもあの化け物を止めようとしたサルメを。

「元帥、バカなことを言っちゃいけませんよ。サルメ様は、元帥を次の指導者に指名してったじゃないっすか」

「だからなんだ。サルメ様が生きていれば、まだサルメ様が指導者だ」

「……なにを聞いたんすか。中で。急にサルメ様サルメ様って」

サルメを探しに行くと言うことはとりもなおさず、自分自身の良心の呵責を少しでも和らげる行為であることは元帥も承知していた。

これは罪滅ぼしなのだ。

戦略的な意味などなにもない、自己満足だ。

「それは……お前には関係ない」

だがこの罪は自分が背負うべきだと元帥は思っていた。

参謀や設計士は自分についてきてくれただけなのだ。

「関係あるっすよ」

「いいや、関係ない」

「あるんすよ!!」

その強い口調に元帥は驚き――ようやく彼女をちゃんと見た。

参謀は、酒場で荒くれ者たちをあしらってきた気丈な彼女は、青ざめ、唇を震わせていた。

「どうした、いったい……？」

「……」

参謀は、ぽつりと言った。

「……サルメ様は死にました」
「なんだって？」
「死んだんすよ。間違いなく」
「どうしてそんなことがわかる」
「だって――」
泣きそうな顔で彼女は言った。
「なんか、頭ん中に薄気味悪い声が響いてきたんすよ！　地底種族の長は死んで、次はあたしが導けって！　そんで、盟約がなんとかかんとかって――」

★　ダークエルフ集落　★

どんなに無害な生き物でも、それがとてつもないサイズにまで巨大化すれば、大きな脅威となる。森喰い山羊（フォレストイーター）はその典型だった。
見た目はヤギ。
行動もヤギ。
だというのにサイズが桁違い――5桁くらい違うので、そこにたたずんでいるだけでも脅威だった。
フォレストイーターは、巨体だが、小さなヤギ同様よく走る。
「散開ぃぃぃぃぃ！」
族長の声に反応し、ダークエルフたちは一斉に動き出した。

アナスタシアはノックに抱えられ、気を失ったプンタや大ケガを負ったニッキたちも他のダークエルフが避難させている。
集落があった場所へとフォレストイーターが駈けてくる。地響きとともに。木々が揺れて葉が散る。

『ぶみぇえええええええええ』

ひたすら不細工な鳴き声で突進してきたフォレストイーターは、ダークエルフたちの生活を何百年と支えてきた大木をあっけなくへし折り、駈け抜けていった。
大木が倒れて家が地面を打ち、掘り返された土砂が舞う。

「きゃあああああっ！？」

離れた巨木に隠れたアナスタシアとノックだったが、飛来した土砂がその木にも当たってびしびしと揺れる。
アナスタシアは頭を抱えてうずくまった。
戦うと言ったのに。自分の魔法なら、なんて言ったのに。身体が動かない。震えて立ち上がれない。

「……ハイエルフ様？」

ノックの気遣わしげな声が聞こえる。
情けない自分が惨めで、思いがけずアナスタシアの目に涙がにじむ。

（こんなとき、あの人なら、あの人ならどうするでしょうか）

閉じたまぶたに浮かぶのは、閉じ込められていた自分を、特異体質の呪いに囚われていた自分を解き放ってくれた彼の姿だった。

（レイジさんなら、きっと――）

立ち上がる。

悩んでいた時間は短かった。

つないでくれた手の、抱きかかえてくれた腕の温もりを思い出し、アナスタシアは両手と両足に力を込めて立ち上がる。

「ノック」

自分の声は震えてはいないだろうか。まつげに涙は残ってはいないだろうか。

王族としての務めを果たせているだろうか。

「はっ！」

ノックは長い背を折ってその場に跪いた。

混乱のさなかに、そんなことをやっている余裕はないのだが――そうせざるを得ない空気が、彼の崇拝する少女から発散されていたのだ。

「魔力を練って魔法を撃ち込みます。敵をこちらに誘導してください」

58

★　ダークエルフ集落跡地　★

「誘導……？　そ、それでは御身が危険です」
「私の魔法が効かなければどちらにせよ死ぬしかありません」
「しかし！」
「誘導、できるのですか？　できないのですか？」

有無を言わせぬ迫力に、ノックはたじろいた。

「……できます。命に替えても、成功させます」
「行きなさい」
「はっ！」

地を蹴ってノックは走り出した。
フォレストイーターは走った先、百メートルは離れたところで急ブレーキで止まり、周囲を見回している。ただでさえ明かりが乏しいところで、大木が倒れ、砂埃が舞い上がっているせいだろう。

「すぅ――はぁ――」

全身から汗が噴いて、アナスタシアは深呼吸をする。
ノックに、ああは言ったものの気を抜けば今にも膝から崩れ落ちそうだった。
身体に残っている魔力は、あと４割くらいだろうか。初夏鳥にだ

いぶ使ってしまった。
ただ残魔力を一点に込めれば――これまで使ったことがないほどの強力な魔法が使えるだろう。
レフ魔導帝国で、空の亀裂から落ちてきたモンスター相手に魔法を撃ち込んで以来の魔力使用だが、あのときよりも魔力の扱いに慣れ、さらには一点集中となる。

（落ち着いて……落ち着いて）

遠くで、ノックが声を上げて仲間に呼びかけているのが聞こえる。
誘導し、ハイエルフ様に討伐していただくのだと。

（私の奥底に眠る魔力を、すべて吐き出して……）

周囲の空気が変わっていくのを感じる。
アナスタシアは瞳を閉じているのでわからなかったが、彼女は今、黄金色に輝き、発する熱のあまり空気はどろりと溶けたようにすら見えた。

（……ッ、うまく、いかない……）

魔力が暴れている。今までのように自由気ままにぶっ放してくれと暴れている。
ふわふわとした綿菓子を、強風の中でまとめて小さなボールにしていくような作業だ。次々に魔力がこぼれていき、それを集めようとすると、先に集めた魔力が散ってしまう。

（どうしよう、間に合わなかったら……）

焦る。

すでにノックは仲間とともにフォレストイーターに弓矢を撃ち込み、注意を引くことに成功している。
フォレストイーターは苛立たしげに鼻を鳴らすとその鼻息が倒れていなかった木々を揺らした。

（ああ、魔力、魔力、魔力、私の魔力なのに、どうして……！）

ずしん、と大地が響いた。
フォレストイーターが走り出す。

（急がなきゃ、でも、できないっ……）

集中が乱れる。極度に濃縮しようとしていた魔力が逃げようとする――。

――僕は、一歩一歩進んでいるだけなんです。

ふと耳元に、アナスタシアの信じる彼の声が聞こえた。

――どんなに長い旅路もすべては一歩ずつで構成されていますからね。確実に歩いていくことしか、僕にはできません。

そうだった、と思い返す。

（レイジさんも、あのレイジさんであっても、少しずつでしかできないって言っていました）

自分も彼にたずねたではないか。

――私も、一歩一歩進めるでしょうか。

と。

彼は少しだけ驚いたようにしてから、優しく微笑み、こう言った。

――もちろんですよ。

アナスタシアは目を閉じたまま集中する。

逃げていった魔力を集め直す。ひとつずつ。ほんのわずかでも、ひとつずつだ。

「ハイエルフ様!?」

いつしか地響きは近く、激しくなっていた。

ノックの驚く、注意を促す声が聞こえる。

（まだ、足りない。まだ、まだ）

アナスタシアは魔力を圧縮していく。その速度は狂おしいほどに遅かったけれど、それでも確かに魔力は集まっていった。

「ハイエルフ様ァー！　そちらへ、フォレストイーターが行きます!!」

今まで感じたことがないほどの魔力の圧縮。まったく新しい体験にアナスタシアは驚きと感動を覚える。

できないと思ったことでも、できてしまえばそれはなんとも当たり前の光景のように感じられる。

「――!!　――――!!」

ついにノックの声も聞こえなくなった。フォレストイーターが走る轟音がかき消すからだ。

「――整いました」

フォレストイーターとの距離があと10メートル、というところでアナスタシアは目を開いた。

彼女を中心に突風が発生し、渦を巻く。

差し出した両手の先に現れたのは一抱え以上はある真っ白な球だった。球はちろりとした炎をまとい、弾丸のように射出されると突進するフォレストイーターの眉間に激突する。

「――――」

誰かがなにかを叫んだかもしれない。

しかし音は聞こえなかった。

無音の世界でアナスタシアは、自分が成し遂げたことを見守る。

爆発が起き、衝撃波がいまだ立っていた大樹を薙ぎ倒していく。

アナスタシアの身体も後ろに飛んだが地面を何メートルも転がって止まると、顔を上げる。

最後まで、見届けなければならない。

超重量のフォレストイーターの突進を食い止めた火球は、いまだヤギの眉間に残り、回転しては顔を焼いていた。

顔面の大半を焼かれたフォレストイーターだったが、四肢で踏ん張って火球に抗っている。

『――――――――――――――――』

滝のようなヨダレとともに発せられた咆吼。

フォレストイーターがねじって首を振ると、火球は顔からようや

く離れ、はるか後方の夜空へと飛ぶと――巨大な花火のような爆発をした。
その爆発による炎はしばらく続き、周囲は白く照らされた。
『……・……・……・……・……・・・』
フォレストイーターの身体はあちこちが焼けていた。気づかぬうちに炎が飛び散っていたのかもしれない。
だが、
（立っている……）
顔を焼かれ、目も焼かれて白く濁り、視界は不良かもしれなかった。
さらには震える足は今にも曲がりそうだった。
それでも、立っている。
（倒せませんでした……）
アナスタシアの胸に、じわりと、こみあげる悔しさ。
ここまでやったのに。やれるだけはやったという満足感はあったけれど、それを上回って悔しさが広がっていく。
涙がこぼれる。
倒しきれなかった。ダークエルフたちの集落を壊され、おそらく何人もケガ人が出ているというのに、自分は倒しきれなかった。
『……・……・……・・・』
フォレストイーターはアナスタシアを見つめている。
きっとヤツは、自分を許さないだろう。ここまで追い詰めた自分

を放っておくことはあり得ない。
ダークエルフたちは近くにいなかった。魔法の余波で飛ばされたらしい。
のろのろと、フォレストイーターが足を踏み出す。
見えないはずの目の代わりに、すんすんと鼻を鳴らして近づいてくる。

（動かないと……でも、これ以上は指一本動きません……）

アナスタシアは倒れたまま立ち上がれない。
このまま死を受け入れれば気持ちは楽になるのか。
死ねば悔しさも忘れられるのか。

（最後に……レイジさんにお会いしたかったです……）

そう思ったせいだろうか、アナスタシアは幻覚を見た。
レイジが自分の頭をなでてくれるのだ。そして、

「よくがんばりましたね」

と、ねぎらってくれる――。

「……レイジさん？」

温もりを感じ、アナスタシアは目を見開いた。
いるはずがない。
だって彼は、遠く離れた竜人都市に向かっているのだから。

「お待たせしました。後は僕に任せてください」

だけれどそこにいる少年の存在感は紛れもなく本物だった。
ああ――声なき声が喉から漏れる。もはや魔力もないので火の粉が飛び散ることもなく。
それでも感情だけは、狂おしいほどのうれしさと、愛しさと、喜びが、爆発するように心からあふれる。
来てくれた。
自分が戦うところを見てくれた。
それだけで――すべてが報われたように感じられたのだ。

すっくと立ち上がったレイジは、怒りの視線をフォレストイーターに向けた。

「最後の始末は僕がつけます」

59

僕は胸騒ぎがして、走っていた。夜の荒野を走っていた。

「ちょっ、お、おまっ、マジ、そんなっ、ずっと、お、おえっ、おえぇっ」

「キミドリゴルンさん！　吐くときはさっき渡した袋に出して！」

僕は走っていた。背中にキミドリゴルンさんを乗せて。

ダークエルフの集落を出たときからなるべく早く戻るべきだと感じたのは、いわゆる「虫の知らせ」みたいなヤツだったのかもしれない。

とにかく僕は、猛スピードで竜人都市に戻り、キミドリゴルンさんと「ゆで卵判別機」を持って休む間もなく折り返したのだ。

（――間に合った）

化け物を目の前にして僕は思う。

遠目に見えた、巨大な【火魔法】は明らかな緊急事態を示していた。「怖いぬ！？」と叫んでいたキミドリゴルンさんに「声を出すと猛獣が来ますからじっとしていてください」とお願いし、森の木の上に置いて、そこからは全力疾走でやってきた。

だから化け物の接近もわかったし、魔法が切れたときが敗北のときだとわかっていた。

ほんとうにギリギリだった。

アーシャの莫大な魔力を使いきってなお倒れなかったこの化け物は、フォレストイーターの名を持つ。

視力はすでに失われていたけれど鼻は利くようで、僕という新た

な人間が登場したことでぴくりと顔を止める。
そして、口を大きく開け、
『えぇぇおおおおおお――』
咆吼を上げようとしたが声は途中で止まった。
僕が【風魔法】を放って、喉の奥にある声帯で空気を拡散させたからだ。むせたフォレストイーターが吐き出す唾液はあちこちに雨のように散らばったが、これも【風魔法】で弾いてこちらに来ないようにした。
「時間を掛けるつもりはないから」
疲労困憊しボロボロのアーシャ、ぼろぼろになった集落。
どれほどの犠牲が出たのか。
怒りに任せて魔法をぶっ放したい気持ちを押さえつけるだけで精一杯だ。
僕は踏み込み、跳ぶ。
「お、お、お、おおおおおおおおおお!!」
【身体強化】【補助魔法】【跳躍術】を合わせた僕のジャンプは見上げるほどに巨大なフォレストイーターだとしても、その顔にまで届く。
巨大なモンスターを倒すにはどうしたらいいか、僕はずっと考えていた。
この化け物を最初に見たのは、「表の世界」のレフ魔導帝国で空に現れた亀裂の向こうだった。
あのとき、僕は恐怖した。
僕の知らないとてつもないモンスターの存在を知り、「勝てるわ

けがない」と思ったのだ。
でもそれからずっと考えていた。
頭の片隅で。
もしも遭遇してしまい、どうしても戦わなければならなかったときに「倒せる手段」を。

「正解は、きっと――」

相手が巨大ならばこそ、近づくこと。
できうる限り最大の火力を撃ち込むこと。
それを叶えるのに必要なのは、

「――『勇気』」

やれることをやり尽くしたのだろうアーシャを見て、僕は勇気をもらった。
でなければできる限り「逃げる」という選択肢を選んだに違いない。
僕の目の前には、むせて、なにが起きたのかわからないといった顔のフォレストイーターがいる。
とてつもなくデカイ顔だ。
その大半を焼き尽くしたのがアーシャの魔法なのだから、とてつもない。

「燃えろぉおおおおおおおお！！」

僕の両手から放たれたのは、炎の槍だ。
それは実際に硬い槍で、【火魔法】に【土魔法】を組み合わせたもの。
さらには槍と言っても巨人が振り回すほどの大きさだ。

その槍は、熱によって赤々としている。熱すれば柔らかくなるが、体表が焼けたフォレストイーター相手ならばさほど問題はなかった。

『――――――――――――――――』

炎の槍は、フォレストイーターの眉間にめり込むと、勢いを殺すことなくずぶずぶとめり込んでいき、頭蓋骨にあるフォレストイーターの脳を焼いていく。

巨体は感電したように震え、足踏みを連打し、吠えようとしても僕が再度【風魔法】をコントロールしているので声も出ず、やがて後ろ足だけで立ち上がる。

地面に降りたった僕は、アーシャの前に戻って最後の警戒をする。

フォレストイーターは、夜空を駈け上がるような仕草を見せ――だがその巨体が浮き上がることはけっしてなく、横倒しに倒れるといくつもの木々を薙ぎ倒して沈黙した。

（完全に沈黙した）

倒してみるとあっけなかったけれど、敵の生命力の9割はすでにアーシャが奪った後だったからできたことだ。

僕がアーシャのところに戻ると、彼女はすでに魔力欠乏症で気を失っていた。

だけれどその顔は苦しそうなものではなく、満足そうな、僕に向かって「後は頼みました」と信頼しているような、そんな顔だったのだ。

一夜明けると、被害の大きさが明らかになった。

周囲の大地は掘り起こされ、大樹は薙ぎ倒され、集落は踏みにじ

られていた。
　ダークエルフたちの被害も甚大で、５人が亡くなり、１０人が一命を取り留めたものの重傷だった。
　無傷のものはほとんどおらず、残りの４１人が必要な道具や衣服をかき集めた。
「……」
　僕の隣で口を開けているキミドリゴルンさんは、倒れたフォレストイーターを見て呆然としているのだ。
　フォレストイーターは、調停者が以前召喚したウロボロスと違ってこの場に残っている。灰になって骨に変わったりはしないので、巨大種とやらは調停者が召喚するものとはちがうのだろう。
　ダークエルフの族長から聞いたところでは８の巨大種がいて、過去にダークエルフたちが撃破したのは巨大な虫だったらしい。話を聞けば羽根が極彩色の巨大カブトムシだ。そんなのが突っ込んできたらぞっとするよね……。
　過去にドワーフたちが巨大鳥は退治しているので残っているのは５種ということになる。
　巨大蝶　幻惑する災厄（ダズル・バタフライ）
　巨大トカゲ　ヒトマネ
　巨大虎　終焉牙
　巨大亀　封印亀骨（ロストジュエル）
　巨大ナメクジ　ギガントスライム
　どれもこれも戦わずに済むならそれに越したことがない。
「おーい、護衛殿。朝食ができたぞ」
　壊滅的な打撃を被ったというのに、それを吹き飛ばすような明る

い声でノックさんが言う。
すでにフォレストイーターの解体が始まり、「食べられる肉は食べ、保存できる肉は保存する」という方向で動いているのだ。
たくましい。
彼らは、アーシャの魔法を見て、「この人についていけば間違いない」と改めて感じたのだという。
アーシャは、よほど疲れていたのだろう今も昏々と眠っているけれど。

「ありがとうございます。こんな巨大なヤギを食べるの、初めてです」
「アタシたちもそうダ」

身体中に包帯を巻いたニッキさんが笑っている。この人も相当の重傷だったけど、もう動いているのがすごい。
僕は昨晩、【回復魔法】を掛けまくり、すでに亡くなっていた人以外の命はなんとか救えた。

「そっちの竜人の旦那も食べな。まあ、今日はアタシが料理できないから男どもの料理ダけどねえ」
「なるほど」

受け取ったのは串に刺さった焼肉である。がぶりと噛みつくと、鼻一杯に香辛料の香りが広がって――。

「うえええええッ！　臭ッ！　なんですかこのニオイ！　おえっ！」

その直後に鼻を突き抜ける獣臭さ！　1ヶ月間敷きっぱなしの布団を押しつけられたような、毛足の長い犬をまったく風呂に入れず

雨に濡れたあと飛び掛かられたような、そんな獣臭さだ。

「やっぱりそうか」

「やっぱりってなんですか、ノックさん!?」

「我慢すれば食えるな。肉の臭みを消すとか男どもがやるわけないダろ」

「ニッキさん……それを先に言ってください」

僕は涙目になるが、ニッキさんはガツガツと肉を食い、ノックさん始め他の人たちも食べ始めた。

静かに、ひたすら肉を食う。

マズイのは間違いない。だけど、仲間たちが命を懸けて倒した敵の肉だ。せめて食らって弔いにしてやろう――そんな思いを感じた。

僕ももう一度、ヤギ肉を噛んだ。

香辛料の香りのあと訪れる、ごまかしのきかない獣臭さ。

（……でもこれは、生きてるって証拠か……）

そう思うと、食べようという気持ちになれた。

「――誰か、誰かいないのか……！」

とそこへ遠くから声が聞こえた。

「百人長！　どこですか……！　百人長！」

向こうで、木の陰に座っていた――なぜかここにいた地底人ががばりと立ち上がる。

彼が走っていった向こうから現れたのはボロボロになった数人の地底人たちだった。

60

敵対している間柄ではあったが、ボロボロの地底人を見て戦いを挑むダークエルフたちではなかった。

ダークエルフたちは亡くなった仲間たちの弔いに出かけ、やってきた地底人に対応したのは僕とノックさん、それに地底人の百人長だった。一応居場所がないからとキミドリゴルンさんもついてきている。

「ありゃァ……フォレストイーターか！？　アンタら、倒したのかよ！？」

地底人のひとりが驚くと、ノックさんが自慢げに、

「我らが崇拝する指導者が倒したのダ」

と胸を張った。

彼らはアーシャの極大魔法が炸裂したところまでは確認し、その後は魔法に吹き飛ばされて見ていない。まあ、僕がしゃしゃり出てもあまり意味がないのでそのままにしている。

「そんなことより、お前らどうしたんだ。まさか……初夏鳥の群れがそっちへ行って被害が？」

「百人長、聞いてくだせェ。確かに鳥公は来ましたが、ほとんど喰われちまったンです」

彼らが言うにはヒトマネという巨大トカゲが出現し、初夏鳥を食っていたらしい。

それからサルメという女傑が戦いを挑んだが、ヒトマネを倒すことはできなかった。
サルメ……確か、調停者を呼び出した人だ。そんな人が自ら戦ったのか？　まるで戦えるような感じではなかったけれど。
いや、それより……。
「サ、サルメ様が……！？」
それを聞いた途端、百人長はその場に膝から崩れ落ちた。
「あの方が……地底都市をなによりも大事にしてくださった方が、死んだ……」
「百人長、しっかりしてくだせェ……。問題はこっからなんです」
「これ以上の問題があるってェのかよ」
「……」
地底人たちは顔を見合わせてから、
「ヒトマネは地底都市に突っ込んできたんです。山が崩れ、都市内の天井も崩落し、元帥閣下は全市民の撤退を命じました」
「元帥が……！？　バカな！　あそこを失っちゃァ、俺たちは生きていけねェだろ！」
「生き埋めになるよりゃマシなんですよ！」
地底人のひとりが吠えるように言ったあと、肩を震わせる。
「ランプが切れて真っ暗闇で……天井が崩落してくるのは恐怖でしたよ……。元帥閣下が決断してくださったおかげで、兵士たちが誘導しながら外へ逃がすことができました……」
「……そう、だったのか」

「まとまっていることはできねェので、３つの集団に分かれました。ですが、食料は1日2日で尽きやす。なんとしてでも地底都市に戻って食料は取ってこねェと」
「ヒトマネは？」
「山の周辺にいるようです。だもんで、地理に明るく勇敢な人が必要ってことで……元帥閣下は百人長をなんとしてでも連れてきてくれと」
「俺を？」
「『サルメ様の思いをいちばん深く知っている百人長が、今は必要だ』と、必ず伝えてくれと言われまして」
「――――」
ぽかん、とした百人長だったが、複雑そうな顔で、
「……そうか、元帥はあの方と俺のことを知ったのか……」
とつぶやいた。
「百人長」
地底人たちに詰め寄られ、百人長は腕組みしてしばらく悩んでから、
「なァ……あんたノックって言ったっけな」
「そうダ」
すると百人長は地面に手をつくと額をこすりつけた。
「こんなこと頼める義理じゃねェッてことはわかってる！　だが、頼む、力を貸してくれねェか！？　地底種族が絶滅しちまう！」

これには仲間たちもぎょっとしたようだったが、次々に百人長にならって土下座を始めた。

「……」

ノックさんはどうしていいかわからない、という視線をこちらに向けてきた。

ね？　困るよね？　いきなり土下座されても。

「――プンタに聞いたぞ。おまえは、プンタが制止するのも構わず初夏鳥の卵を割り、鳥に襲撃されるや我らがダークエルフ集落にそれをなすりつけようとしたのダそうだな」

やってきたのは族長だった。向こうのほうで、泥だらけのプンタさんがこちらを見ている。

はっとして顔をあげた百人長は、何事かを口にしかけ、一度口を引き結んでから、

「そのとおり……です……」

絞り出すように言った。

「我らにこれほどの被害を与えておいて、よくもまあ、手を貸せなどと言えるな？」

「……はい。だけどッ」

百人長はもう一度額を地面にこすりつける。

「虫のいい頼み事だとはわかってる……俺の命ならッ！　どうして

くれても構わねェッ！　八つ裂きにしても、どんなひどい殺され方をしてもッ……！　だから、お願いだ、ほんの少しでいい、手を……お願いだ、手を貸してくれェ……」

ぶるぶると震えながら頼み込む百人長に、族長は――ニヤリと笑った。

「顔を上げよ。お前は地底人の中では多少なりとも立場があるのダろう？　仲間も困惑しているぞ」

「しかし……」

「手は貸す」

「――えっ！？」

予想外の族長の言葉に、百人長が驚いて身体を起こす。

「プンタから聞いた。お前は、置いていけばいいというのにプンタを叱咤激励し、ここまで連れてきたのダと。卵が割れたことは決定的ダが、プンタが『卵置き場』に入った時点で初夏鳥にマークされていた可能性もある……。お前は、プンタの恩人でもある」

「そ、それは……別に……」

「なにか駆け引きを考えてのことではなかったのダろうな。ニッキを救ったこともダ。人は、極限の状態でその本性が現れる。その点で、お前は完全なる悪人ではない」

「……」

「それにこれは、私個人の決定ではない。我らが崇拝するハイエルフ様のご指示ダ」

え、アナスタシアの――と思っていると、

「レイジさん！」

いつ目覚めたのか、アーシャが走ってきて僕の顔を両手でがしっとつかむ。

「ああ、ああ、本物です、本物のレイジさんです……！」

「い、いひゃいれふ」

「もっ、申し訳ありません！」

手を離しながら真っ赤になったアーシャは血色がよくなっている。魔力も戻ってきているようだ。

「……えっと、アーシャ。いいの？　地底人を助けるというのは」

僕がたずねると、アーシャはうなずいた。

「はい。我らエルフ種は地底人の方々に協力をします。その代わり――交換条件がひとつ」

口を開いたアーシャは、ほんの少しの時間でだいぶ変わったようだった。

交換条件、と聞いた地底人たちが固まる。

「……これまでの遺恨をすべて水に流し、互いの存在を尊重し、協力し、生きていくこと。守れますか？」

１４歳の少女とは思えない威厳を感じ、僕ですら鳥肌が立つ。

百人長を始め、地底人たちは目尻に涙を浮かべ、頭を垂れる。

「守ります。必ずそのお約束、守り抜きますッ！！」

こうしてダークエルフと地底人は、恒久的に互いの種族を敬い、助け合うという盟約を結んだのだった。

61

僕らが次に起こした行動は、地底都市に送る当面の食料としてヤギを解体したことだった。ダークエルフたちは筋肉自慢の猛者ぞろいなので、彼らは巨大な肉塊を両肩に担ぐ。

「すまねェ……アンタたちだって、今はこんなことやってる場合じゃねェだろうに」

「困ったときはお互い様ダ」

百人長がしきりに頭を下げるのを、ノックさんは止めた。

「それよりも胸を張れ。仲間が不安がるぞ」

「……あァ、そうだな」

そうして地底人たちは去っていく。

去り際に百人長はなにかもの言いたげにニッキさんを見ていたけれど、彼女は料理の仕方について男衆に講釈を垂れているところだったのでそちらには気づかなかったようだ。

ノックさんを始め、１０人ほどのダークエルフが肉を運ぶことになった。

これだけの肉では焼け石に水だろうけれど、それでも「肉がある」とわかれば運搬を申し出る地底人は多く出るはずだ。そうしたら何往復でもできる。

「これほどの巨大種でも、人が食えばそう日は保たないのダな……」

族長が感慨深げにつぶやいていた。

ちなみに初夏鳥の肉はフォレストイーターより美味しいので、そちらはしっかり保存食として仕込み、フォレストイーターは大盤振る舞いするということだった。

たくましい。

「……えっと、それで我はどうするんだぬ？」

「僕らは初夏鳥の『卵置き場』に向かいます」

ダークエルフ集落の惨状を見ると、僕もなにか手伝えることはある。

だけどダークエルフはすでに「ハイエルフ様についていく」と宣言しており、集落は捨てていく心構えはできていた。

だから、僕がやるべきは1日でも早く「表の世界」に戻る方法を見つけること。

それにはやはり【離界盟約（ワールド・アライアンス）】の天賦は確認するべきだと思うのだ。

「私も今度はついていきますからねっ」

「は、はい……」

アーシャも「卵置き場」に行く気満々だ。

意識が戻って以降、僕の半径1メートルから離れようとしないのでトイレのときにほとほと困った。そしてなぜか、僕の首の辺りをちらちら見ては、両手で「これくらいでしょうか……」と首の太さを確認している。なんなんだろう……聞くのが怖い。

「レ、レイジさん、自分も連れて行ってくれませんか！」

するとプンタさんが声を上げた。プンタさんの傷はさほどなかったのだけれど、体力の消耗が著しかった。正直「卵置き場」までの道のりでも厳しそうだ。

「……どうしても、ですか？」

僕が問うと、プンタさんはしっかりとうなずいた。

僕がいない間に起きた出来事については聞いている。彼は独断で「卵置き場」に向かい、百人長率いる地底人部隊と遭遇した。

行くな、と言われた場所に行ったのだ。それは、死と隣り合わせのこの世界で、絶対にやってはいけないことだ。

どこに天賦珠玉を隠したのかを忘れるという失敗を、取り戻そうとして、また失敗した。

今ついていきたいと言うことは同じことを繰り返そうとしていると見られても仕方がない。

現に族長は口を出したくて仕方がなさそうにムズムズしている。口を出さないのは、アーシャが僕に話をさせようとしているからでしかない。族長はきっとプンタさんを止める。

でも、

「わかりました。では行きましょう」

「っ！　いいの！？」

「はい」

失敗する可能性を思えばプンタさんを連れて行かないほうがいいに決まっている。大体もう、プンタさんの知識は必要ないはずだからだ。

でも……僕はプンタさんと最初に会ったときのことを思い出したのだ。

部屋の片隅にじっとしている。

マッチョばかりのこの集落で、唯一ぷにぷにの身体を持つ。

「ん？　なんだぬ、レイジ、こっちを見て？」

それは竜人都市にいたキミドリゴルンさんと同じだ。
キミドリゴルンさんの研究はまったく役に立たないと思われたけれど、それでも彼は都市のために魔術を学び、浴場を作ることで貢献しようと決心した。
しかも「ゆで卵判別」の研究は役に立ちそう、というオマケまでついている。
プンタさんは――きっと肉体のことで劣等感を持っていた。だけれど初めて、なにか役に立てるかもしれないと思い、そして手を挙げたのだ。その思いをむげにすることなんてできない。

「では、行きましょう」

僕らはダークエルフ集落を出発した。

「卵置き場」に近づくにつれ、不穏な空気が漂っていた。

「……います。上空に。群れてないのは珍しいですよ」

初夏鳥が数羽、ぱらぱらと飛んでいるのだ。常に群れを作るはずの初夏鳥が1羽きりで飛んでいることもあるので、やはり異常事態だと言える。

「そもそも地底人の話では、ヒトマネが食べていたということなんですが……初夏鳥の天敵なんでしょうか？」

僕が疑問をぶつけると、プンタさんは、

「わかりません。巨大種がこちらに来ることはほとんどないので。来ても遠目に見えるくらいで、その日はみんな集落でじっとしています。翌日には影も形も見えなくなりました。どうしてヒトマネと、フォレストイーターの2体が同時にこんなところまで来ていたのか……」

「ヒトマネはいなくなったんでしょうか」

「食べるものがないと判断したのならいなくなってもおかしくありませんね。フォレストイーターは草木も食べますが、ヒトマネは肉食だけのようです」

「ふむ……？」

やっぱり変だよな。

たとえ初夏鳥が好物で、地底人が地底都市周辺まで群れを連れていってしまったからヒトマネが食べたのだとしても、そもそも、かなりの近距離にまでヒトマネが来ていなければ初夏鳥を目撃することもないわけだ。

フォレストイーターもだ。おそらく初夏鳥が目印になったのだろうけれど、ふだんは「未開の地カニオン」にいる2体がこんなに南下しているのか。

（……作為的なものを感じるけど、わからないな……）

なにかを見落としているのだろうか？

真実を知るためのカードはすでに出そろっているのに、僕はまだ真実に気づけていないような――そんな気がする。

あ～、こういうとき、スィリーズ伯爵くらい頭がよかったら「謎はすべて解けた」って言えたのかもしれないのに。

ないものねだりはよくないけどね。【森羅万象】であらゆる内容を記憶できるだけでもよしとしないと。

「そろそろ『卵置き場』です」

プンタさんは息切れしていたけれど、なんとかここまでついてきた。

背の高い下草も生えているので見通しは悪いけれど、乳白色の卵がずらりと並んでいるのが見えた。

だけど、

「……いますね」

「はい……上空にわんさと」

木々の切れ間から「卵置き場」上空に初夏鳥が群れを成しているのが見えた。

さらによくないことには、天賦で鋭敏になった僕の鼻は野獣のニオイを感知していることだ。卵を狙っていると見て間違いないだろう。

アーシャの魔法をぶっ放して鳥を散らせば野獣が来る。

かといってのこのこ卵に近づいたら初夏鳥が僕らを狙う。

さあ、どうする……。

62

野獣の種類はわからなかったけれど、初夏鳥の数が減ったことに気づいたのか、あるいはもともとそういう習性があるのか、初夏鳥の卵を襲って食べる種類の野獣なのだろう。

この「卵置き場」には割れている卵も多くて、その理由が「捕食されたから」ならば説明がつくし。

時刻はゆっくりと夕方になろうとしていた。

初夏鳥はわずかに数を増やしたけれど、野獣の群れは森の中で息を潜めている。

これがなにを意味するのか。

――野獣は夜を待っているんだと思います。夜になれば行動が見えにくくなりますし。ただ初夏鳥も「卵置き場」に何者かが侵入すればそれはわかるので、警戒を怠っていないんじゃないかと……。

というのはプンタさんの分析だ。

ならば、夜になる前にこちらの用事を済ませなければならない。

夕方――ついに僕が待っていたものが現れた。

霧だ。

日中との気温差で生まれる霧は、夕方から朝にかけて生まれる。

だから今時点で発生している霧はかすかに過ぎない。

だけど――ゼロよりは不自然じゃない。

僕は【水魔法】と【火魔法】で人工的な霧を発生させ、【風魔法】で「卵置き場」に霧を送り込む。

かすかに初夏鳥の動きに乱れが出たようだけれど、すぐに群れは元の通りとなった。

視界はかなり悪くなっている。「卵置き場」近辺だけだから、野

獣は気づいていないはずだ。現に、野獣に動きはない。

「……プンタさん、アーシャ、どうですか？」
「で、できてます」
「たぶんこれなら……」

ふたりにお願いしていたのは頭からかぶるカムフラージュ用の布だった。フード付きの僕のマントに、落ちていた卵の殻を拾い集め、貼り付ける。だいぶギザギザのマントになってしまったけれど卵と同じ乳白色に擬態できるので十分だ。

「キミドリゴルンさんは？」
「……これでいけるはずだぬ」

キミドリゴルンさんが手渡してきたのは石板と魔石をくっつけた魔道具だ。「ゆで卵判別機」の軽量化をお願いし、「生卵かどうか」だけがわかるものになっている。

「くっつければ2秒で『生』と出る。出なければ死んでいる卵か、中が空かだぬ」
「わかりました」
「気をつけるんだぬ。3秒くっつけたら回路が切れて爆発する」

なにそのトラップ魔道具。

「わ、わかりました」

だけど機能に関しては十分だ。
僕は卵の殻つきマントを羽織り、「生卵判別機」を手にする。

「……ほんとうに、レイジさんだけで行くのですか？」
「はい。足音を殺して動けるのは僕だけですし、なにかあったとき逃げ帰るにしても僕が適任だと思います」
「……そう、ですね」
アーシャは心配そうな顔だ。
「この周囲にも霧を発生させましたが、野獣がこちらに気づく可能性もあります。そうなったときにはアーシャの魔法が頼りです」
「！」
「よろしくお願いします」
「はい！」
アーシャにいざというときの防衛戦を頼むのは気が引けたのだけれど、初夏鳥やフォレストイーターとの戦いを見る限り、彼女を子ども扱いしてはいけないのだろうと思う。
「行ってきます」
僕はひとり、「卵置き場」へ向かって進んだ。
背後を見やると、２０メートルほど離れるともうアーシャたちの姿は見えない。
霧を濃く出しすぎただろうか……。
不自然過ぎると初夏鳥が降りてきそうだし、降りてきてしまえば天賦珠玉探しどころじゃない。乱戦でぐちゃぐちゃになって天賦珠玉をなくすことがいちばんの懸念点だった。
とはいえ、命が掛かったら天賦珠玉なんて放り出して逃げるけどね。
（確か、ここから見て１１時の方角だっけ）

卵が集積している広場へと出た。
つん、と腐ったニオイがしていったいなんだろうと思ったけれど、確認する余裕はない。
プンタさんに教わった方角へと進んでいく。【疾走術】を使えば足音が鳴らずに済むけれど、割れた殻を踏んだらどうしても音が鳴る。

パキッ。

やばっ……。
霧の中、僕は身を伏せて息を殺す。
静まり返っている。薄闇が降りてきており、霧がなくとも見えなさそうだ。

「！」

ばたばたっ、と羽ばたく音が聞こえ、オレンジ色の炎が上空をひらりと走っていった。
初夏鳥が確認のために降りてきたっぽいな。
だけど僕からは少し離れていたし、光は見えたものの初夏鳥の形までは確認できなかった。霧の目隠しは十分に効いている。

（よし、急ごう）

僕は目的地の手前から、卵を見つけるやそこに石板を2秒くっつけては剥がす、を繰り返した。

「生」
「生」

「生」
「生」
「生」
「反応なし」

……これか？　聞いていた場所からは手前だけど。
もう一度確認のために石板をくっつけると、「生」と出た。

（あっぶな。2秒に足りなかっただけか？）

こうなってみると「余裕を持って3秒」ができないのがつらい。
3秒経つと爆発するし。

「生」
「生」
「生」
「生」
「生」
「生」
「生」
「反応なし」

……もう騙されないぞ。
再確認。

「反応なし」

もう一度。

「反応なし」

これはまさか……？　僕はそっと手を伸ばして卵の殻に手を触れると、それはゆっくりと持ち上がった。

「……空（カラ）か」

正真正銘のカラッポだった。

全身で脱力しつつ次の卵に手を伸ばす。次々に確認していく。遠くで野獣の遠吠えが聞こえた。野獣が、動き出したかもしれない。

（急げ、急げ……！）

野獣はやはり暗くなってから活動するつもりだったのだろう。ここまで来て狙いは卵じゃなくて別にある、なんてことはあるはずがない。

僕は焦りを抑えつつ、きっちり2秒数えて確認していく。「反応なし」はそれから3回あったけれど、再確認ですべて「生」だった。

どこだ？

もう、プンタさんに聞いていた場所は通り過ぎて、その周辺を探し始めている。

すっかり夕陽は沈んで辺りは相当に暗い。月明かりがか細く照らしていたけれど、霧のせいでだいぶ暗い。

「反応なし」

次、次の卵――いや、待て、「反応なし」か。

クセでつい次、次、と行ってしまうところだった。僕は再確認して「反応なし」と出ると「やっぱりな……」と思って次に……。

（反応なし！？）

２回目の「反応なし」だ。僕はあわてて石板と魔石を道具袋に突っ込んで卵に手を伸ばす。

その卵の殻には、ナナメに亀裂が入っていた。あとから殻を載せたのがよくわかるけれど、数メートル離れたらもう見えない亀裂だ。

よくよく考えれば、この卵の高さはプンタさんの胸くらいだった。ちょうどいい、高さだ。

僕は期待のあまり高鳴る鼓動を抑えきれず、ドキドキしながら卵の殻を手に取った。

それをゆっくり持ち上げると、周囲に、赤、青、黄……と明滅するような光があふれ――。

『ギャアオウッ！！』

そのとき霧の向こうから、２メートルほどはあろうかという４本足の巨体が僕へと飛び掛かってきた。

63

深緑色の体毛は短く、筋肉が浮かび上がっている。アスリートのような四肢ながら、ライオン顔は異様にデカくてアンバランスだ。

（ロックマッシャーだ！）

潜んでいる野獣について、プンタさんはいくつかの可能性を教えてくれていた。

森の野獣はダークエルフも狩っているので知識量は相当なものだ。

群れてはいるが危険は少ない「小動物」。

危険はあるが群れない「単独モンスター」。

危険がありさらに群れる「要警戒種」。

緑の体毛にデカイ顔。顎が最大の武器であり「岩すら砕いて食べる」ことからロックマッシャーと呼ばれる――。

もちろん、「要警戒種」だ。

「ウォール（土魔法）、ダークネスボール（闇魔法）！」

僕は2種類の魔法をとっさに展開する。

眼前に現れた土壁へとロックマッシャーは突っ込んでいくが、所詮、土ではその勢いを殺しきることはない。

だけれどそこに放り込んだのが闇の塊だ。

顔を闇に覆われて短い時間ながら視覚を奪うことができる。

『ギャウッ！』

「あ、鼻があった！？」

そもそも視覚に頼らず嗅覚で突っ込んできたロックマッシャーに【闇魔法】はあまり意味がない。

「ピアース（土魔法）！」

突き出した右手から放たれたのは錐のように尖った岩石だ。

全体を細くすることで質量を少なくし、魔力の消費量と発動までの時間を短縮している。

魔法を使用するのに言葉は必要ないのだけれど、焦って違う魔法を撃たないようにわざわざ声に出している。気分だ。

『ギャン！？』

飛来した岩石は自動小銃のようにロックマッシャーの顔面に襲いかかるが、その、ケンカの翌日に腫れて膨れ上がったような顔に当たっては岩石は弾かれてしまう。

どうやら腫れているように見えるそこは、筋肉と骨のようだ。

それでも目や鼻、口の中に撃ち込まれるのはイヤなのだろう、首を振ってたじろぐ。

（よし、今のうちに――）

僕が天賦珠玉に手を伸ばしたときだ、

『ギュルルルルルッ』

横から初夏鳥が突っ込んできてロックマッシャーを蹴り飛ばし、周囲に炎と突風が起きる。

こうなると霧もまた飛ばされてしまう。
「卵置き場」には１０体を超えるロックマッシャーがやってきており、ヤツらは卵を割っては顔を突っ込んでがぶがぶと中身を呑んでいた。

（ああ……この腐臭は、そうか）

僕からは見えていなかったけれど、ロックマッシャーがやってくる方角は卵が何日も前から荒らされていたようで、割れて、腐り始めていたのだ。
漂っていた腐臭はそれが原因だ。

（今は天賦珠玉）

初夏鳥はヒトマネに食われたりロックマッシャーに狙われたりと災難続きだろうけれど、それは知ったことじゃない。
僕は天賦珠玉の入っていた卵の殻へと手を伸ばすが、

「！？」

すでにそこに天賦珠玉はなかった。突風に煽られたからか、コロコロと５メートル先を転がっている。
その先にいたのは別のロックマッシャーだ。

『？』

ロックマッシャーは天賦珠玉を前足で弾くと、それは奥の森へと飛んでいく。

（あぁぁぁぁあああああ！　もう！）

幸運なことには天賦珠玉は光っているのでどこにあるか一目瞭然だということだ。
不幸なことには初夏鳥が次々と降下を始めてロックマッシャーと戦闘を始めている。
熱風と炎が乱舞し、ロックマッシャーが初夏鳥に噛みつこうとし、逆に蹴り飛ばされたりしている。
卵がいくつか割れ、割れるたびに初夏鳥の怒りのボルテージは上がっていく。

（チャンス）

僕は身を低くして【疾走術】を使い天賦珠玉へと向かっていく――と、

「あああああああ！？」

初夏鳥が現れて天賦珠玉を足でつかむ。
マズイ、空に飛んで行かれたら見つけるのが困難になる。

『ヴィイイイ！？』

横から飛び掛かったロックマッシャーが初夏鳥を組み伏してその喉笛に噛みつくと、すぐにも初夏鳥は絶命した。
危なかった……と安堵するのもつかの間、

『？』

天賦珠玉に気がついたロックマッシャーは前足でそれを弾き、

「いい加減にしろォッ！！」

【火魔法】の爆発で加速をした僕はロケットのように飛び出してロックマッシャーの顔に蹴りをくれた。かかとがめり込んでロックマッシャーの鼻をつぶし、巨体を大きくのけぞらせて後ろに倒す。

「ハァ、ハァ、あのね、これがどれだけ大切かわかって――」

天賦珠玉をようやく拾い上げた僕は、

『……』
『……』
『……』
『……』
『……』
『……』

初夏鳥やロックマッシャーたちが戦闘を一瞬止め、僕を凝視しているのに気づいた。

やっべぇ、完璧にバレた。

「……えー、僕の仕事は終わったので、あとはお好きなように争っていただいて……」

『ギャアオウッ！』
『ピルルルル！』

ロックマッシャーと初夏鳥が一斉に僕目がけて襲いかかってきた。

「なんでだよぉっ！？」

僕は走って逃げるが、このままアーシャたちのところへ行けば大混乱だ。
なるべく森を奥へ奥へと走っていく。
吠えながら背後から迫ってくるロックマッシャーには【花魔法】を使ってツタの妨害をし、正面と左右から飛んでくる初夏鳥には【風魔法】で上昇気流を起こせばかわしやすい。

「ていうかなんでそんなにいいコンビネーションなのかな!?」

かわしかわし走って逃げたものの、それは長く続かなかった。
僕の目の前には巨大な絶壁が迫っていたのだ。

「げっ」

どうする。
コイツらの望みはなんだ？　まさか天賦珠玉ってことはないよね？

絶壁の上は高台になっているのだろうか。高さは５０メートルくらいあるので、【火魔法】を連発して飛んでいけば骨の数本は折れて火傷もひどいだろうけれどなんとか登れそうだ。やりたくないけど。大体、飛んでる最中に初夏鳥に食われそうだし。
かといって――左右を見回しても絶壁が続くだけだ。
逃げ回るしかないか？
絶壁を背にし、僕は立ち止まる。
森からはロックマッシャーが包み込むように迫ってくるのを感じ、上空には初夏鳥が旋回している。

（大きな魔法をぶっ放して、アーシャに来てもらうか……）

あまりやりたくはなかったけれど、それがいちばんよさそうだ。
解決手段が「大量殺戮」というのは……ちょっとスマートではないけれど、そう言っていられる場合でもない。
僕ひとりでもやれないことはないと思う。でも魔力切れになるとその後がキツイ。

「……さて、と、いちばん目立つ魔法を撃つかなぁ」

じり、じり、と迫ってくるロックマッシャーを見ながら僕が魔力を練っていると、

「え？」

ぴたり、と止まったロックマッシャーが今度は、じり、じり、と後退していき、最後はくるりと背を向けて逃げ出したのだ。

「……？」

これは、なんだろう。僕が魔法をぶっ放すことが気配でわかって、逃げたんだろうか？
初夏鳥はどうかな――と思って上空を見上げて、僕は気がついた。
なぜロックマッシャーが逃げたのか。
そして初夏鳥もまたいなくなっている理由に。
絶壁の上には顔があった。
にゅっと、身を乗り出して、こちらを見下ろしている顔だ。
その顔は「ロックマッシャーの顔はデカイ」なんて言っていたのが冗談に聞こえるほどに大きく――つまりは家1つぶんくらいはあって、黒々としていて、目と口だけがぽっかり空いていた。
そこにいたのは8つの巨大種の1つ、ヒトマネだったのだ。

64

ヒトマネ、とはよく言ったもので僕の【森羅万象】はヒトマネの顔は「皮膚の模様」だとはっきり看破していた。

月明かりしかなく、しかも絶壁の上に覆い被さるように身を乗り出しているから陰になって見えづらい。それでも、見える情報から「ヒトマネ」は「爬虫類」だという結論が導き出されていた。

ただ地球の爬虫類とは明らかに違うのが、「皮膚の模様」であるはずの「口」は「捕食可能」ということだった。

暗くてはっきりとは見えないけれど「目」と「口」との間には「鼻」らしき穴もある。それは――実際のところは「肛門」なのだった。

つまりヒトマネは、トカゲが逆立ちしているようなモンスターなのだ。

（なぜ、そんなことを……？）

尻尾は短いのか、切れたのか「頭」のてっぺんにはなくて、後ろ足で獲物を捕まえて「口」に運んでいるのだろう。

本物の顔は前足とともに地面についているはずだ。

これほどの巨体を支える首と前足の筋肉はさぞすさまじいんだろうな……と妙なところに感心しつつ、僕はどう行動するべきか迷っていた。

レフ魔導帝国の上空で、赤い空の亀裂の向こうに見たフォレストイーターは、僕が総毛立つほどに畏怖の対象だった。

でも、アーシャが全力で倒そうとし、僕がトドメを刺した――その経験が心の強さにつながった。

今僕は、ヒトマネを見上げていても、恐ろしさを感じるものの動

けないほどではなかった。

（戦うという選択肢はない。逃亡一択だ。だけど足は速いのか？　いや、僕なんかを追ってくるのか？　食べるなら初夏鳥のほうが多いだろうに――）

考えを巡らせた時間は1秒にも満たない。

だけれど――次の瞬間、僕の眼前にはヒトマネの黒い後ろ足が迫っていた。

「!?」

とっさに【火魔法】で爆発を起こし身体を後ろに吹っ飛ばす。ジャンプしてかわすような余裕はなかった。直後に、ヒトマネの爪が地面をえぐって直径3メートルほどに渡って地面が吹き飛ぶ。

（甘かった！　そう言えばコイツ、ぎりぎりまで初夏鳥も接近に気づいていなかったじゃないか！　だけど初夏鳥を食べなかった――ということは）

狙いは僕だ。

「っく」

地面をえぐった手が振り回される。僕には全然届かないけれどすさまじい突風が吹いて身体が吹き飛ばされる。

（この後ろ足、関節どうなってるんだよ!?）

空中で【風魔法】を使いながらバランスを取り、一回転して地面

に着地する――と、

「マジで」

絶壁から跳んだヒトマネが、木々を薙ぎ倒しながら僕の１０メートルほど先に降り立った。

大地が揺れて砂埃が舞う。

肛門の下にある第２の「口」からはダラダラとヨダレが滴っている。

これは、魔力切れなんて気にせず戦わないとすぐに死ぬ――僕がそう覚悟したときだった。

『……ズヴァ、ア、ず、ずまん』

耳鳴りのように不愉快な音を伴いながら、重低音が迫ってきた。

ずまん……すまん、って言ったのか？

『星刻語（アース・トーク）を使うのは、ひっ、久々でな……舌が動かぬ』

唖然とする僕の前で、ヒトマネはゆっくりと身体を回転させ――凸凹とした巨大な頭を、正真正銘の頭をこちらへと向けた。

瞳は左右、とてつもなく離れた場所にぽつりとついている。左右にばっくりと開いた口はオオサンショウウオを彷彿とさせるけれど、ちろちろとのぞいている６本の舌はやはり爬虫類っぽい。

いや……爬虫類に舌が６本あるなんてことはないのだけれど。

そんなことはいいんだ。

僕は――混乱して、口が動かない。

しゃべったのか？　モンスターが？

『小さき者……勇敢な小さき者。聞こえるか？』

僕はこくこくとうなずく。すると満足げにちろちろと舌が動いてから、ヒトマネはつぶらな瞳を瞬いた。

『大ヤギが死に、世界はしばらく荒れる』

どきりとした。大ヤギ、とは絶対にフォレストイーターのことだろう。

『大ヤギは知っているか？』

「……はい」

どきどきする。ヒトマネはフォレストイーターとつながりがあるのだろうか？　あるとすればいきなり怒り狂うこともあるのか？

『大ヤギはなぜ死んだか、知っているか？』

僕は――いつでも逃げ出せるよう算段しながら、それでもこの巨大種相手にウソを吐くことはしなかった。

「はい……僕が殺しました」

いずれにせよ相手は巨大で僕は小さい。であれば、心の強さでまでも負けたくはなかったのだ。ウソを吐かないことが、ヒトマネの前で僕が胸を張るための手段だった。

『小さき者が……？』

ざわり、と空気が震えたような気がした。台風が来る前の生温か

く、心を不穏にさせるあの空気が周囲に流れ出したような気がした。

『……ウソではないようだ』

しかしその空気はスゥッと引いていく。

「怒らないのですか」

『怒りという感情は、とうになくなった。だが久しぶりに心がざわついた……我にもまだ、生き物らしいところがある』

「あなたたちは……何者なのですか」

神聖古代から棲息するらしい8つの巨大種。

彼らが言語を解するとは知らなかった。いや、そもそもすべてが謎に包まれている。

8種というけれどそれですべてなのかどうかもわからない。

『我らはこの世界の均衡を保つために生まれた……言わば柱よ』

「柱……？」

『女神が分断した2つの世界。この世界は、幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）に託され、彼奴らは我らを生み出した』

「ヴィジョン・オーガ」

知らない単語ばかりが出てきて、僕の頭はますます混乱する。

『知らぬか？　知っておろう、あの黒い、霧のような鬼よ』

「――調停者のことですか」

『ああ……古き盟約にはそう書かれておる。そうか……お前は、それゆえにその天賦珠玉を手にしたか』

僕は握りっぱなしだった天賦珠玉を見る。

【離界盟約（ワールド・アライアンス）】――いったいこれは、なんなのだろうか。

『幻想鬼人を信じるな……盟約に関わるのならばなおさらだ』

「僕には、あまりにもわからないことが多すぎます」

『なればその天賦珠玉を使うがいい。できるのだろう？　お前ならば……器を2つ持ちし子ならば』

「……僕のことが、わかるのですか」

『わかるとも……かつてこの世界にもおったからな。その強大な力ゆえに、最後には「災厄」などと呼ばれ、忌まれ、殺されたと聞く』

僕は胸に錐でも突き込まれたような気持ちになった。

「災厄の子」……それは確かに存在し、「災厄」を生み、殺されたのだ。

つまるところ過去にそういうことがあったから、僕もまた殺されようとしたことがあるのだ。

「その人たちは――」

『使うがいい』

「……え？」

『まずはその天賦珠玉を使うのだ。さらばお前の知りたきことがいくつか判明するであろう……我はもう行く』

ずるり、と後退するようにヒトマネは去ろうとする。

『幻想鬼人に気をつけよ。ヤツらはなにか企んでおる……そのせいで我も、理由なきイラ立ちを覚えこんな場所にまで来てしまった。我は戻る……カニオンへ……』

「あ、あのっ」

声を掛けたがなにを言っていいのかわからなかった。

ヒトマネは調停者になにか……精神的な操作を受けたのか？　それでこんな場所までやってきたと？

であればフォレストイーターも同様に？

なんのために？

（あああああっ、わからないなあ、もう……）

ずずずと音を立てながら絶壁をよじ登ったヒトマネは、去っていった。

後には僕と一一妖しく七色に輝く天賦珠玉だけが残されたのだ。

盟約《□□□□□□□□》

僕は星１２の天賦珠玉【離界盟約（ワールド・アライアンス）★★★★★★★★★★★★】を見つめた。

なるべく早くアーシャたちのところに戻るべきなのだけれど、戻ってからこれを「使う」ところは見られたくなかった。

ならばここで使ってしまったほうがいいかもしれない。

「……」

僕は注意深く周囲を見渡す。

月が出ているきりで、ヒトマネがいたときには息を潜めていた虫たちが今は鳴いている。

危険がないことを確認して僕は【森羅万象】を身体から抜き出した。

「……っく、はぁ、はぁっ」

身体に訪れる気怠さと、モヤがかかったような頭。

ああ……まったく、これがなきゃ生きていけない身体になったらダメだというのに。

【森羅万象】がなくとも僕はもう天賦珠玉の抜き出しができる。これは魔法の練習と同じで、何度も挑戦することでマスターしたのだ。

念のため、【森羅万象】とともに取り込んでおいた【オーブ擬態】を取り出してみると、問題なくできた。この【オーブ擬態】はもともとアーシャの身体にあったもので、外側から天賦を確認できる【オーブ視】をごまかすための天賦……のようだ。【森羅万象】によれば。【森羅万象】を見抜かれたら面倒ごとが増えるので、僕はこ

れをつけていた。
道具袋に2つの天賦珠玉を入れ、【離界盟約】と向き合う。
いいんだろうか。
星6つを超えるような天賦珠玉は、持ち主に深刻なダメージを与えるようだ。
9を超えるものについては誰もが使えないような――特別な力を持つ。

「……そんなものが2つも」

【森羅万象】が使えるようになっただけでもすごいことなのに、【離界盟約】……盟約に関わる内容、この世界の成り立ちに関する天賦を僕は手に入れてしまう。
使うがいい、とヒトマネは言った。
元々使うつもりではあったけれど……背中を押されたような気がした。
ここに僕の知りたいことがあるというのなら、やっぱり使わなければいけないし、使わないとわからないことも多いはずだ。

「よしっ」

空いた左手で顔をごしごしとこすってから、僕は声を出す。

「――行きます」

呑み込め、と心に念じると、手のひらに載っていた天賦珠玉はしゅるりとめり込むように消えた。
一瞬、なにも起きなかった。
だけれど次の瞬間――耳を圧するような轟音が響いた。

「！？」

聞こえる。

巨人の怒鳴り声が。

天使の歌声が。

死者のすすり泣きが。

歴史を歌う詩人の声が。

――世界の鼓動が。

「あ……」

理解（わか）った。

「そういう……ことか。そういうことか……！」

それが、調停者――幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）の狙いだったのか。

ならば説明がつく。

ヒトマネたちを暴れさせたことも。

クルヴァーン聖王国でヤツらがやろうとしたことも。

最近、急に、地底人やダークエルフが天賦珠玉を発見し出したことも――。

★

★盟約構造（ライブラリアン／竜人）

・盟約は本条を含み8種から成る。

・盟約を成立せしむる要素は「天賦珠玉」と、「盟約者」と、「調

停者」である。

★★盟約者の盟約（獣王種族／ダークエルフ）
・盟約を結ぶ者は種族の頂点に立つ者である。
・頂点が盟約を保存する。

★★★世界の盟約（ノーム／ノーム）
・２つの世界は同一であり独立する。
・盟約は２つの世界を分けるために行われる。

★★★★天賦珠玉の盟約（ハイエルフ／エルダーホビット）
・天賦珠玉を取りすぎてはならない。
・天賦珠玉は世界を構成する。

★★★★★調停者の盟約（ドワーフ／血色人）
・調停者のみが行き来し、門を開く権利を持つ。
・盟約に違反があった場合、調停者を呼ぶことができる。

★★★★★★盟約のための盟約（聖水人／地底人）
・貴顕の血を捧げることで盟約を維持することができる。
・調停者がこれを監視するが、調停者を害することはできない。

★★★★★★★盟約の破棄（大陸人／ドワーフ）
・盟約の破棄は調停者に対して宣言することで行われる。
・破棄が行われた場合、２つの世界は１つになる。

☆☆☆☆☆☆☆☆盟約の意義（　／　）
・□□□□□□□□は盟約の□□を調停者に□□、□□する。
・□□□□□□□□は盟約が破棄された場合、□□に□□する。

★

頭に流れ込んできたのは盟約の内容と、盟約を与えられた――維持している者が誰かという情報だった。「盟約構造」は竜人都市の長老だったし、「盟約者の盟約」はダークエルフの族長の顔が頭に浮かんだ。長老は風呂に入って、族長は炊事の指示を出してはニッキさんになんか怒られていたので、おそらくだけれど、リアルタイムの情報だ。

それ以外にも、地底人は、確か元帥と呼ばれた男と行動していた女性だったし、聖水人はクルヴァーン聖王国の聖王陛下だ。

だけど、知らない種族も多かった。

それに驚いたことには8盟約のうち7つに、それぞれ「表の世界」「裏の世界」の代表たちが見えたのだ。

「……いたんだ……！」

竜人、ダークエルフ、地底人以外にも――この世界にはまだ、生きている人たちがいる。

「ひっそりと身を隠しながら生きているんだ……！」

ただ、問題は2つ。

1つは最後の盟約が虫食いだらけでわからないこと。これは天賦珠玉が不完全なのか、そもそもそういうものなのかもわからない。誰がこの盟約を負っているのかもわからなかった。

もう1つは、「盟約の破棄」だ。

――破棄が行われた場合、2つの世界は1つになる。

幻想鬼人の狙いはおそらく、これだ。
天賦珠玉をばらまいて地底人とダークエルフの争いが激化すればどちらかが滅びる。
種族の滅亡は盟約を保持できなくなることでもある。
――我らはこの世界の均衡を保つために生まれた……言わば柱よ。
ヒトマネはそう言った。
巨大種が柱だとすると、すでにこちらの世界は柱を3本失っていることになる。
こちらの世界の均衡は崩れているのだ。
「だから、2つの世界を1つにしようとしている……？　そうなるとなにが起きるんだ？」
そこまではわからない。
でも、ヒトマネによれば、幻想鬼人によって生み出された巨大種が、幻想鬼人によって操られて種族を滅亡に追い込もうとしているのだ。
奴らの望みはろくなものじゃないだろう。
この天賦珠玉の能力は盟約を知ることだけではなさそうだった。
実は僕の脳裏に流れ込んできた情報には、2つの世界をつなげるルート――神聖古代にふさがれたルートの内容もあった。
そのうちいくつかは、まだふさがれていないのだ。
そこにいけば「表の世界」へ戻ることができる。
帰れる。
「早く、アーシャに伝えよう」

ここからいちばん近いそのルートは――「表の世界」ではクルヴァーン聖王国の聖王都にあった、あのシンボル。

「一天祭壇（ファーストアルター）」だった。

盟約《□□□□□□□□》（後書き）

そんなわけでいつものお願いです。
もしこの小説が「面白かった」「続きが読みたい」と思われましたら是非ブックマークをお願いします。
ページの下段には★をつけて評価もできますので、そちらのご協力も合わせてお願いいたします。

65（前書き）

コミカライズが電撃大王本誌（11月下旬スタート）にて決定しました。
詳しくは活動報告にて～。

65

森の中で一夜を過ごした僕らが、ダークエルフの集落に――集落の跡地に戻ったのは翌日のお昼頃だった。

異変に気づいたのは、多くの煙が集落あたりから上がっていたからだ。もしや初夏鳥がまた来たのか――と大急ぎで戻ってみると、

「おお、ハイエルフ様が戻られたぞぉぉぉ」

どよどよ……と発せられた多くの人々の声。

そう、そこにいたのは数千人という地底人たちだった。

煙は炊煙で、彼らがフォレストイーターの肉を焼いて食べているところだったのだ。そして人の食欲というのはすごい。山のようなフォレストイーターの肉は、途方もない量で、食べきることは不可能で自然に還すしかないのかななんて思っていたほどだったのに、すでに骨が見え始めているのだから。

「あの……これは？」

やってきた族長に僕がたずねると、

「ノックがハイエルフ様のすばらしさを彼らに説いたところ、彼らもまたハイエルフ様のご指導を賜りたいということでな」

なんか誇らしげに言ってるけれど、さっぱり理解できない。

これだけの人数がいる種族が、いきなり他の種族の傘下に入るなど決めるだろうか？

「……レイジ殿、と言ったか」

そこへ現れたのが地底都市にいた元帥と呼ばれる男だった。

込み入った話になるというので僕らは離れたところに移動する。

僕とアーシャ、族長にノックさん、それに元帥と参謀の6人がいる。

キミドリゴルンさんとプンタさんはへろへろで、草を敷いた簡易ベッドに倒れ込むなり寝息を立てていた。

「私は、地底都市に君臨していたサルメ様から後を託されたのだ」

都市はすでにヒトマネによって破壊され、修復はほぼ不可能だという。

あのヒトマネも調停者によって操られたところはあったのだろうけれど、地底人から見たら不倶戴天の仇敵になってしまった。

数千人が漂流するにはこの世界の環境は厳しく、ダークエルフたちが迎え入れてくれるならともに暮らしたいと元帥は考え、地底人たちをここに連れてきた。

だが3割程度の人々は元帥に反対し、地底都市を復興させると息巻いて都市周辺に残ったのだという。

「重大な決断だったのに……早かったのですね」

「うむ……」

元帥は歯切れが悪く、うなずいた。なにか別の理由でもあるのだろうか？　すでに付け替えた【森羅万象】を通しても、ウソを吐いている人に顕著な反応が出ていないので隙を見てダークエルフを襲撃しようとかそういう考えはなさそうだけれど。

「……アタシのせいなんすよ」

すると元帥の横にいた参謀が口を開いた。

「サルメ様が亡くなって、アタシに……なんか、種族としての盟約？　みたいなのが聞こえて……バカみたいな話って思うかもしれないっすけど」

僕は【離界盟約】を解除していたけれど、盟約の内容は頭の中に残っている。今までは【森羅万象】があってもおぼろげになってしまったのに、記憶があるのだ。

「『盟約のための盟約』……ですね。あなたが、地底人種族の長になったのですね」

参謀はどきりとして僕を見たが、

「……わかってもらえるなら話は早いっす。アタシは近々、『貴顕の血』とやらを捧げなければいけないらしくて……アタシ、地底都市みたいな小さいとこなのに親がわからないんすよ。ああ、母親はわかるんすけど、父親のほうがね……でもそいつはたぶん、サルメ様の血筋の誰かだったんだ」

クルヴァーン聖王国の「聖水色」について思い返すと、あれは「先祖返り」でよみがえることはないと言っていた。地底人が同じ感じなのかはわからないけど、サルメという人にかなり近い血筋の誰かが参謀の父親なのだろうと思われた。

まあ……「聖水色」と同じかどうかわからないし、父親探しをしたいわけではなさそうなので、僕は言わないけれど。

「『貴顕の血』というのは、無垢でなければいけないと聞きました。天賦珠玉を使っていない人でないと」

すると参謀はつらそうにうなずいた。

「やっぱりそうなんだ……盟約を知ったその日、アタシの目の前に『調停者』を名乗る黒い影が現れてそう言ったんだ。でもアタシは、もう天賦珠玉を使っちまった。だからアタシの命は差し出せない――」

「お前が死ぬ必要などない」

遮るように元帥が言う。

「盟約などバカバカしい。そんなもののためにお前も、サルメ様も死ぬなんて……」

そのとき僕はある仮説に思い当たって注意深く参謀を見る。すると彼女は――【森羅万象】によれば――明らかな兆候を示していた。妊娠しているのだ。

元帥の反応を見るに、父はこの人なのではないだろうか。

「貴顕の血」を捧げなければならないという盟約によれば、すでに天賦珠玉を使った彼女は対象外。そうなると次は、お腹の子……。

すべてを知った元帥は、子を守るために盟約に反旗を翻した。そのせいで種族がちりぢりになっても構わないと。

（……それが正しいかどうかなんて僕にはわからない）

この世界に留まることは、種族にとって危険なことだ。僕はいろいろなことを知ってしまってそう思う。

でも元帥はそういった情報を知らずに決断した。妊娠のことは他の人に言っていないのだろう、公になっているのならここでも口にするはずだし。

参謀の妊娠を隠して決断したことが後で知れれば、「我が子かわいさに種族を犠牲にした」と糾弾されることもあるだろう。

（聖王陛下もそうだったな）

クルヴァーン聖王国の聖王陛下は、クルヴシュラト様を犠牲にすることを最後の最後まで悩んで、結局はルイ少年に託してしまった。

ルイ少年のロズィエ家からすれば聖王陛下は「我が子かわいさにルイを殺した」と見えるだろう。でも、あのときはルイ少年が自ら手を挙げたのだし、それさえなければクルヴシュラト様を犠牲にすることを聖王陛下は決断していた。

なにが正しいとか、なにがよかったとか、誰が見るかによって変わるものなのだということを僕はこの世界で思い知った。

「……僕から提案があります。アーシャ、いいかな」

その提案の内容は言ってなかったけれど、アーシャもすぐにわかったのだろう、うなずいた。

「僕らはもうひとつの世界から来て、ずっと、戻る方法を探していました。あっちはこちらの世界と同じようにできていて、参謀さんと同じ盟約に苦しんでいる人々もいます。皆さんもいっしょに行きませんか？」

「――――」

元帥も参謀も目を瞬かせた。

僕の申し出はあまりに突飛だったからだろう。だけれど、すぐに質問が飛びだした。

盟約はどうなるのか。モンスターは。住んでいる人たちは。食料は――。

わからないことはわからないし、わかるところは丁寧に答えていくと、

「……是非とも、我らも連れて行っていただきたい。このとおりだ」

最後には元帥が腰を深々と折って頭を下げたのだった。

66

翌日の朝から僕らは行動することにした。「一天祭壇（ファーストアルター）」に世界をつなぐ道があるのならば、ここからは1日も掛からずに行くことができる。

ダークエルフの皆さんには一度、ラ＝フィーツァの足跡を調べてもらったことがあったけれどそのときはなんの成果も得られなかったらしい。ただ、「表の世界」で言うところのクルヴァーン聖王国、聖王都クルヴァーニュあたりは古い遺跡が残っており、「一天祭壇」のことを考えるとそのあたりになにかあってもおかしくはない。

僕らが探そうとしている移動方法は、かつてラ＝フィーツァが使ったものと同じかもしれなかった。

調査隊は少数で行くべきということになり、僕とノックさん、それに地底人から百人長が選出された。移動スピードを考えればこれ以上増やしても足手まといになるだけだ。

「明日には戻りますから」

「……」

アーシャは最後まで「納得できない」という顔ではあったけどね……。

彼女にはダークエルフたちの指導者として残っていて欲しかったので仕方ない。まあ……僕が不在のときにいろいろあった後だし、「また置いていくの？」という気持ちもわかるんだけど……。

とはいえこれが最後だからと。

「一天祭壇」に「表の世界」への道が見つかればすぐにも全員で移動できるのだからと。

（……最後、か）

早朝から集落を飛び出し、走りながら僕は考えていた。

（向こうの世界に戻ったら、アーシャはどうするんだろうか）

レフ魔導帝国の皇帝のところへ戻るのだろうか？　どうも「籠の鳥」だった生活には嫌気が差していたようだけれど、とはいえエルフの森――「三天森林（サードフォレスト）」に戻ることもできないだろうし。立場的に。ハイエルフで、王族で、「取引」としてレフ魔導帝国に送り込まれた身なのだから。

（冒険者になるとか？　似合わないなあ）

冒険者ならば身分なんて気にせず生きていくことができる。自由業、と言えば聞こえがいいけれど、フリーターであり浮浪者であり稀に英雄になるのが冒険者だ。

（……でも、アーシャがもしも自由（それ）を望むのなら、僕は……）

どうするだろう。止めろというのか。他ならぬ僕自身が冒険者として生きていこうとしているのに？

僕はクルヴァーン聖王国を出るときのことを思い出していた。

あのときはエヴァお嬢様を父であるスィリーズ伯爵のもとへと帰した。ふたりは、ふたりきりしかいない家族で、お嬢様は１２歳で、冒険者になることで叶えられるものがなにもなかったから――と、僕が考えたから。

（たった2か月くらい前のことなのに、やたら懐かしく感じられる

なあ……）

だけどアーシャは違う。

彼女に戻るべき場所はあっても、それを好ましく思っていないし、手に入れた自由を手放すだけなのだとしたら――アーシャが冒険者になるのも一理ある、ように、思う。

（そう思ってしまうのは僕がそう願っているからなんだろうか？）

可憐で美しく、所作は完璧だ。上品で忍耐強く、だけど心の内には炎のような情熱が隠れていた。

彼女の情熱（ほのお）を解き放ってしまったのが、物理的にも、精神的にも、僕なのだとしたら、彼女の今後には責任を負わなければいけないのかもしれない。

（……アーシャが望むことを全力で叶えてあげよう）

僕にできることなんて限られているけれど。

いや、案外「もう冒険なんてまっぴらです！」と言うかもしれないしね。

――弟くんはさぁ、そうやってあり得ない仮定の妄想に逃げるようなところがあるよね。

そのときふと、耳元で姉の声が聞こえた気がしてぎくりとした。

（いやー……ははは。今、ラルクに会ったらなんて言われるかな）

女の子を振り回すなって？　デリカシーが足りないとか？

（……戻ったらアーシャの願いを叶えるのも大事だけど、ラルクのこともしっかりやらなきゃな）

ラルクが取り込んでいる星６つの天賦珠玉【影王魔剣術（シャドウキング）】。この天賦の反動はきっとあるはずで、彼女の健康状態が本気で心配だ。

「――ハイエルフ様を置いてきてしまってよかったのか？」

ノックに言われて我に返った。

「まあ……仕方ないですよ」

「あれは『仕方ない』で済ませられるような顔ではなかったと思うのダが……」

先ほど僕はアーシャを「納得していない」と言ったけれど、実は少々控えめな表現である。

「いやですぅぅぅぅ」「私もついていきますぅぅぅぅ」「ひどいですぅぅぅぅ」と泣くアーシャを、ニッキさんに預けて出てきたのだ。

「……帰ったら全力で謝りますので」

「そうか……お前も大変ダな」

ノックさんに同情されてしんみりしていると、

「くっくくく……ああ、いや、笑って悪りィな。あんだけスゲェ魔法を使うハイエルフさんに、そんだけ頼られてンだからたいしたもんだと思ってよ」

百人長が笑った。

この人は、ヒトマネを食い止めるために戦ったサルメさんと親族

だったらしく、彼女の死を深く悼んでいた。だけれど地底人がダークエルフに合流すると、「俺になにかできることはねェか」と今回の調査にも自ら手を挙げてくれたのだった。

「そう言えばお二人にも聞いておきたいのですが、いいでしょうか？」

僕はヒトマネと話したときのことを思い返しながらたずねるが、よい回答は得られなかった。

ふたりとも、「巨大種が言葉を使う」とは聞いたこともなく、「星刻語（アース・トーク）」、「幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）」という単語についても知らなかった。

「評議会の連中なら知ってたかもしんねェが……連中は全部、『残留派』なんだよな」

百人長によれば、地底都市復興を考える3割の人たちの中に指導者である評議会がまるまる残ったのだそうだ。

「半分は、残された連中を助けるためだが……もう半分は、自分たちが特権階級にいたからよ、それを捨てたくねェンだろうな」

「なるほど……」

元帥のお父さんも残ったようだ。その人はもちろん、残された人たちを救わなければならないという使命感によってだという。

「――レイジ殿、そろそろ見えてくるぞ。遺跡ダ」

「はい」

かなりのスピードを出せたこと、それに戦闘らしい戦闘もなく僕らは予定より数時間早く「聖王都」へとやってくることができた。

どうやらフォレストイーターとヒトマネが現れたせいで多くのモンスターが遠くへと逃げたらしい。安全だけれど、逆に食肉には困りそうだ。

それはともかく――木々が切れると視線の先には多くの石造建築物が現れた。

屋根は落ち、半ば折れた柱や石畳だけがそこに「町」があったことを知らせてくれる。

「ふたりとも、止まってください」

「なんダ？」

「どうしたんだよ」

町の中央通りらしい広い道では石畳の多くが割れて枯れ草が飛び出していたけれど、それでも森の中を走るよりはずっとマシだった。

この先に、「一天祭壇」があるはずだ――けれど、僕は道の先に気配を感じたのだ。

「戦う体力は？」

短く問うと、ふたりの表情が変わる。

「問題ない」

「ヨユーだぜ」

心強い返事だ。これなら【回復魔法】を使っておく必要もなさそうだ。

「構えてください――来ます」

その瞬間、僕らの世界は闇に包まれた。

67

【光魔法】を使って周囲に明かりを確保すると、前方に黒い影が出現した――調停者だ。

僕はいつでも戦えるように右手にはミュール辺境伯からもらった短刀を持ち、左手は自由にしておいた。

ノックさんは両手に金属製のナックルをはめ、拳の大きさが倍くらいになっている。

百人長は左右の手に湾曲した短刀を構えた。

『どこへ行く気だ』

「アンタこそ、盟約に関係ないのに出てくるなんてどういうつもりだよ」

『災厄の子については排除しても問題ないと判断した――』

「――それが幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）の結論か？　都合よくルールを作れる調停者なんて、よほど最初のルールがガバガバだったんだろうね」

僕が言うと調停者は沈黙した。

シュッシュッシュッシュッ――と小さな音が聞こえるのは、天銀によって固められた鎧の内側だ。黒炎が噴き出そうとしてはかろうじて押さえ込んでいるような、そういう感じだ。

『我らが創造主についてこれ以上言ってみろ……お前たちすべてを滅ぼす』

怒りを抑えるのが精一杯というようだった。
だけど僕は調停者の怒りよりもなによりも「創造主」という言葉に引っかかった。

（あ……そうか。この黒い影は魔導生命体だから、造った何者かが別にいるということか。それこそが幻想鬼人……こいつらはただの傀儡なんだ）

いわばこの調停者は「調停者代理人」みたいなものなのだ。
だからきっと何体もいる。
まあ、代理人だろうがなんだろうが、この謎のドーム空間を出したり、瞬間移動みたいなことをしたりするんだからズルイのは確かなんだけど。

「アンタひとりでどうにかなると思っているのか？　この間は僕に負けたじゃないか」

『ひとりではない』

声の直後、調停者の左右に2体ずつの調停者が現れた。それらはコピーしたかのように同じサイズだった。

（5体……マジですか）

竜と同等の戦力が、5体。
1体倒すのですら全力を尽くしてやっとって感じだったのに。
調停者を知らないノックさんはきょとんとし、元帥かサルメさんから調停者について聞いていたらしい百人長は顔を青ざめさせた。

『どうした？　先ほどまでの威勢は？　冷や汗をかいているように

見えるぞ』

僕が1人で倒してしまったから増産したのか？　あるいは最初からいたのか？　もしや、何十体と存在するのか――いや、それはさすがにないはずだ。「表の世界」の竜が他の生命体と同様に生活しているように、幻想鬼人も「裏の世界」で生きているはずだ。天銀の産出量は極めて少ないはずだし、1体造るのに天銀のフルアーマーが必要なのだとしたら何十体も造れるはずがない。

「冷や汗だって？　たった5体しか出てこなくて驚いたんだよ。確実に始末するのに、僕だったら10体は出すからね」

お前なに言ってんの!?　という顔で百人長が僕を見てきたが、

『……』

調停者はなにも言わなかった。

よかった。これで調停者は打ち止めのようだ。

いや、よくはないか。5体でも勝ち目はないんだから。

こんなことになるならアーシャも連れてきて、極大魔法をぶっ放してもらえば……そんな隙を許してくれるわけもないか。

『我らで十分。おしゃべりは終わりだ――死ね、災厄の子』

調停者5体が一斉に走り出した。

「だからその呼び名、止めろっての!!」

僕は左手で「火炎嵐（フレイムトルネード）」を放ち、戦いは始まった。

調停者は相変わらずのでたらめ性能だった。
素早く、重く、硬い。
走れば石畳を割り、「火炎嵐」の炎にも怯まず正面から突っ切ってきた調停者は僕へと右手を伸ばした。そこを【花魔法】を使って枯れ草を太くしてから伸ばすと調停者を跳ね上げて僕の後方に跳ばす。ほんとうははるか彼方に吹っ飛ばすくらいのつもりだったのに、重くて１０メートル程度しかいかなかった。
その間にも次の調停者が腕を伸ばしてきたので身体を開いてかわし、３体目が目の前にいたので【補助魔法】を掛けた足で蹴りをくれる。
大岩でも蹴ったような感触が足の裏から伝わってきて、じぃんと痺れたんだが……。

「うおおおおおッ！」

ノックさんは調停者と正面からの殴り合いを始めた。
あのパワーがあればこそ、殴られた調停者ものけぞっている。僕には無理だ。

「ちょっ、うわ、刃が立たねェよッ！」

ひらりひらりと調停者の攻撃をかわしながら曲刀を振るう百人長だったけれど、天銀の鎧に阻まれて攻撃は通っていない。

（まずは１体……！）

敵の数を減らさなければ話にならない。
前回は温度差によって金属疲労を誘発して鎧を破壊した。だけど

あれくらいの魔法を連発するのは無理だ。効率化してもなんとか2体倒せるかどうかで、残りは倒しきれない。

（問題になるのは結局天銀の鎧なんだよなぁ……こっちの武器は天銀混じりの短刀しかないし！）

考えろ、考えろ、考えろ。

考えている間にも最初に吹っ飛ばした調停者も戻ってきて後ろから襲いかかってくる。

「っく」

振り向きざま、僕が放ったのは【水魔法】だ。左手にきらきらとした冷気が現れ、調停者の足元に氷を造り出す――滑らせてやろうという時間稼ぎだった。

だけど、

『！』

『！』

『！』

僕を襲っている3体はぎくりとしたように動きを停めると、背後へと跳躍した。

（……ん？　なんだ、今の過剰反応は）

奴らは僕の次の一手をうかがうようにじっとしている――。

（そうか。連中は前回僕がどうやって調停者を倒したか、知っているんだな？　だから最初の「火炎嵐」、次に「氷」と来たからまた

金属疲労を引き起こされるんじゃないかと警戒している）

そこまで推測して、僕は疑問を抱いた。

（……どうやって、情報を得たんだ？）

前回の戦いのときには調停者が1体しかいなかった。

観察されている気配もなかったし、他の調停者に誰かが密告したということもないだろう。大体、連絡が取れるのはサルメさんだけだったはずだし、そのサルメさんは調停者や盟約を毛嫌いしていたということだから。

であれば――。

「……幻想鬼人。お前、この魔導生命体を通してここを観察しているな？」

ぴた、と一瞬、調停者たちの動きが止まった。

それは僕を襲っている3体だけではなく残りの2体もだった。おかげでノックさんの右フックがキレイに決まって調停者は吹っ飛び、百人長の剣も見事に調停者の脳天に振り下ろされて見事に跳ね返されていた。

（そうか、そうか、そうか……！）

今の動きでわかった。

調停者は自分の意思がある。だが一方で、幻想鬼人が直接コイツらを操っている。

しかも、調停者たちが一斉に止まったところを見るに、

（幻想鬼人は、1人しかいない。少なくともこれを操れる幻想鬼人

は1人だ）

光明が見えてきた。

68

操る、とは言っても細かいところまで操っているわけではないだろう。

大まかなコントロール、それに――、

（動力や信号の供給だ）

先ほど調停者たちがぴたりと止まったところからそれは判断できる。

「ぐ、ぬぬぬ！」

「がほっ」

ノックさんが力比べで押され、百人長はついに調停者の一撃を食らって吹っ飛んだ。

そう、幻想鬼人が背後で操っていることがわかったところで僕らが不利なのは変わらない。

というか竜レベルが5体とか、どうあっても勝てない。

それでも僕が「光明」だと思ったのは、

「【火魔法】ッ！」

左手の指に1つずつ火球を出現させ、放ると調停者たちは一斉に逃げていく。火球は、背後の闇のドームにぶつかるやそこで爆発した。

「っく」

魔法を撃った隙を突いて調停者が三方向から突っ込んで来る。紙一重でかわしていくけれど一撃が腕をかすめて血が飛んだ。

「【土魔法】！！」

今度は5つの礫弾を発射するけれど、至近距離だというのに調停者はこれをかわして僕から距離を取った。

「【水魔法】、【火魔法】！」

短刀をしまって両手で魔法を放つ。追尾ミサイルのように飛んでいったそれらだったけれど、調停者たちは身体をひねってかわしていく。

僕は1発を、百人長に追撃しようとしていた調停者へと飛ばす。だけどその調停者も背後に目でもついているのか横に跳んでかわし、

「うおわ！？　どこ狙ってンだよ！？」

百人長の肩のぎりぎりを飛んでいった。

「すみません！」

「気ィつけろや！」

「――それよりも、この状況をどうするのダ！？」

見ればノックさんもボロボロで百人長も息が上がっている。

「やってます！」

僕は再度両手に魔法を出現させ、放つ。調停者がかわす。もう一度放つ。かわす。放つ。かわす。

「うおわったァ！？　こいつ、キレちまったか！？」

「レイジ殿！　落ち着いて！」

「だから！」

僕はダメ押しとばかりにもう一度魔法をぶっ放す。炎と氷の乱舞は、まるで花火のようにドーム内を照らしていく。

「やってますってぇ！」

最後の火球がドームにぶつかったときだった――そこに亀裂が入り、パンッという破裂音とともに砕けていく。

波紋のように砕けていく。

外の陽光が射し込んでくる。

『なに……！？』

5体そろって驚愕している調停者に、僕はにやりとした笑みを向ける。

「やってるって言ったでしょ？」

調停者はこの謎のドームを展開して戦いに持ち込む。それはたぶん、調停者としての「特権」を行使するためなのだろう――攻撃してもダメージが通らない、みたいな。

だけどあれはクルヴァーン聖王国ではそうだったものの、ドームを破壊すればダメージが通るようになった。

一方、地底都市ではドームがあってもダメージは通った。

つまり盟約のために行動しているときには「特権」が使えるが、ドームが破壊されることで調停者の「特権」が失われる、あるいは地底都市のときのように盟約と関係のないときにはドームは飾りだ。

今、ここにあるドームは僕らの逃げ道を塞ぐという意味以外にない。

「今からアナスタシアが使った魔法をやります！」

「！？」

「！？」

僕が叫ぶと、ぎょっとしたようにノックさんと百人長はその場に身体を伏せる。調停者たちは我に返り、なにかすさまじい魔法が来るのだろうとバックステップで背後に飛んだ。

「うおおおおおおおッ！！」

僕が発動したのは――【風魔法】と【土魔法】のミックス。

名付けて「砂嵐」だった。

もちろんアーシャの【火魔法】なんてできるわけがないけど、ノックさんと百人長には防御態勢を取ってもらい、回避に特化している調停者には距離を取らせることが目的だった。

すさまじい風が起き、そこに大量の砂塵を混ぜ込むことで不意に周囲は薄暗くなる。

十分だ。

目隠しとしては。

「――起きてください、ふたりとも！」

「え？　うえ？　あの鮮烈かつ高貴なる炎は？」

「――シッ」

僕はノックさんを引っ張り起こし、百人長は僕のもくろみにすぐ気がついてもうこちらに駈け寄ってきていた。
調停者5体との戦闘なんて、勝てるわけがない。
であれば僕らにできるのは、

「逃げましょう」

逃亡一択だ。

「お、お、おいっ、なんでこっちなんだ？　来たのとは反対だろォが」

全力で北に向けて走っていると百人長が聞いてくる。
砂嵐に紛れて逃げ出した僕らだけれど、魔法が切れる数分後には調停者も僕の真意に気づくだろう。調停者は5体で同じ情報を共有できるので、1体が僕らを発見すればそこに合流すればいい。
体力も魔力も切れそうな僕と比べて、向こうは元気いっぱいだ。
まあ、魔導生命体を相手に「元気」という言い方が正しいのかはわからないけど。

「どこに逃げても追われるので、逃げ切れる可能性が、ある方向へ、逃げ、るん、ですっ」

ノックさんと百人長、それに僕自身に【補助魔法】を掛けて走っているので周囲の建物や石畳を突き破って生えている木々が飛ぶように背後へと消えていく。

「――あれだ」

僕にはすぐにピンときた。
そこから立ち上る気配は――なんといったらいいのだろう、あまりにも清らかで、透き通っていた。
逆に、そうと思わなければ気づかないような気配なのだ。

「あそこに『一天祭壇（ファーストアルター）』があります！」

向かう先にはこんもりとした小山があり、そこには茂みが密生していた。
山頂に、石造りの小さな建物があった――。

69

小山の麓についたときには全員の息が上がっていた。全身汗みずくで、拭わないと目に汗が入り込みそうなほどだ。

だけど僕は、小山の頂点にある小さな建物に目が釘付けとなっていた。

小屋と言うにはこぎれいな造りだけれど、神殿と言うにはあまりにも小さい。

とてつもなく長い年月を経ているのだろう、その建物の表面にはツタが覆っており、入口の半分が塞がっていた。

だけれど、ツタの隙間から暗闇が見え――そこからは時折、ぱぁっと明るい光が放たれていた。

あの光は見たことがある。

「表の世界」のクルヴァーン聖王国の「一天祭壇」で、天賦珠玉が発生するときに発せられる光なのだ。

小屋にはきっと、こちらの世界の「一天祭壇」があるに違いない。

「お、おい、ありゃァ……天賦珠玉か？」

百人長の声が震えている。

草に覆われた小山ではあったけれど、そのあちこちに、きらきらと光る天賦珠玉が落ちていたのだ。秋の山に分け入って栗拾いをするにしたってこれほど落ちているということはないだろう。

（ここに……「表の世界」へと続く道が？）

僕は【離界盟約】で確認した通路を探そうとしたけれど、あの天賦を外している今では地道に探すしかなかった。【森羅万象】から

付け替えるにはあまりに危険だ。

「まずは上の小屋に行きましょう」

僕が茂みに入っていくと、両手いっぱいに星1つや2つの天賦珠玉を抱えた百人長が走ってくる。するとノックさんが、

「そんなものは置いていけ」

「だけどよォ」

「どのみち大勢を連れてまたここを通ることになる」

「そっか……」

納得したのかばらばらと天賦珠玉を地面に放って後からついてきた。

（【握力強化★】、【皮革加工★★】、【瞬発力強化★】、【即興演奏★】……）

目に飛び込んでくる天賦珠玉は星1つか2つばかりだった。たまに光の強いものが離れたところに見つかるのだけれど、それは星3つなのかもしれない。

見えるところだけでなく地面にまで埋まっているのだからこの山にはどれほどの天賦珠玉が眠っているのだろうか。

どうしようもないので天賦珠玉を踏んだり蹴ったりしながら登っていくのだけれど、貴重品である天賦珠玉を足蹴にするというのは心苦しいものがある。僕だってこう見えて、過去には鉱山で天賦珠玉を発掘して生活していたのだ。

「……なにかいる？」

小屋からは、カチャン、カタン、という小さな音が聞こえた。はっ、とすると星1つの天賦珠玉が半分開いた小屋の入口から飛び出してきて、僕の横5メートルくらいのところに落ちた。【声量強化★】という、あまりに見かけない天賦珠玉ではあった。

『ヂュ？』

『ヂィー、ヂィー！』

『チチチッ』

見ると小屋には天賦珠玉があふれており、それをオモチャにして遊んでいるネズミ――目が4つあるし体長は30センチを超えているのでネズミらしき動物――が数匹いた。

それらは僕らの接近に気づくと、一目散に小屋の奥へと逃げ込み、物音から察するに抜け穴から向こうへと出て小山を駈け下りていった。

「ふぅ――なんだよ、ネズミか」

曲刀を抜いていた百人長が小さく息を吐いた。

「とりあえず、天賦珠玉を全部どかしてみましょう」

その曲刀を使ってツタを切り裂いてもらうとツタが支えていたらしい天賦珠玉が雪崩を打って外へと出てきた。星4つの天賦珠玉が見えたけれど、次々に流れ出す星1と2に呑まれて消えていく。

探している余裕はない。

ボールプールのようになっている小屋の中、古びた祭壇がひとつ、あった。

長方形の祭壇で、つるりとした表面は灰色だった。

横面には精巧に雲や木々、動物や虫、それに花に人が彫り込まれ

ているけれど、天賦珠玉に隠れていて見えない。僕らは天賦珠玉をまとめて外へと投げ出していく。

「ああ、クソッ、なんでこんなにあふれてンだよ！？　こんな場所があるってわかってたらもっと早くに来るんだったぜ……！」

「奇遇ダな、私も同じ考えダ」

「んで俺らがばったり出くわして戦争かァ？　そうなったらつまらねェけどよ」

「天賦珠玉は争いのタネなのかもしれないな」

「あァ……」

百人長とノックさんの話が聞こえてきて、僕もそうではないかと思うところがあった。

（ラルクが見つけた星６つの天賦珠玉。竜が破壊しに来た天賦珠玉。クルヴシュラト様が生け贄にさせられるときにも星８つの天賦珠玉が使われた。「表の世界」の「一天祭壇」から産出する天賦珠玉を横流しする貴族は、スィリーズ伯爵が突き止めて処分された）

天賦珠玉は争いのタネなのだ。

（だけど天賦珠玉があるからこそ、この厳しい世界を生きていける。だけど天賦珠玉の性能が高いから争いのタネになる……）

鶏が先か、卵が先か。

そんなことを思いながら天賦珠玉を払いのけていくと地面が見え始めた。ホコリをかぶった天賦珠玉の隙間から見えた地面は灰色で、どうやらそこも石畳のようではあった。

だけれど、把手がついている。

力を込めて引っ張ると――もうもうとしたホコリが舞い上がり、

暗い闇が口を開いた。

「……階段！」

小山の内部に降りていく階段がある。螺旋を描くそれは、やたら思わせぶりだった。

かび臭い、湿気っぽい空気が立ち上ってくる。

ここか？　ここが、世界をつなぐ通路の入口なのか？

「ッ！　レイジ殿！　調停者ダ！！」

「！！」

小屋に入っていたせいで気づかなかった。

すさまじい速度でこちらに迫ってくる気配、そして足音。

（迷ってるヒマはない）

僕は叫んだ。

「ここに入ってください！　急いで！！」

未練がましく星3つの天賦珠玉を2つ、手に持って見比べていた百人長がそれを放り出してあわてて飛び込みながら、

「ここ、なんなんだよ！？」

「わかりません！」

「はァッ！？」

「いいから行け」

そこへノックさんが飛び込んで百人長を踏んだ。ぎゃぁぁ、とい

う声とともに階段を転がっていく音が聞こえる。
最後は僕だ。

『待て！！』

調停者の声――僕はそれを無視して穴に飛び込む。
直後、小屋の外壁が吹っ飛んだ。
バラバラとツタの葉と石の欠片が舞う向こうに調停者がいた。

――バイバイ。

僕は口だけ動かして、石のフタを閉じた。
あの調停者の反応を見れば間違いないだろう――これは世界をつなぐ通路だ。

離界《世界を分かつもの》

★　長い長い通路　★

前後左右に明かりはひとつもなく、魔法で光を出そうとしても不思議とその周囲だけはほんのり明るいものの周囲が照らされることはなかった。

両手を広げれば左右の壁に手が届くので間違いなく一本道を進んでいるようだ。

だけれどその道を歩んで、数分過ぎ、３０分過ぎ、１時間過ぎ、しまいにはどれくらい時間が経ったのかもわからず、下っているのか、上っているのか、カーブしているのか、直線なのかも定かではなくなってくると、身体が闇の真空に浮かんでいるような気持ちになる。

近くにいるはずの仲間に声を掛けていたのも最初のうちだけで、次第に、世界には自分しかいないのではという気持ちになってくる。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

息が上がり、汗が垂れ、足は重く、体力は限界だ。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

呼気と鼓動だけが自分の生きている証だ。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

やがて身体は闇に溶け、肺と心臓だけが前に進んでいく感覚が訪れる。

意識が明瞭になり、深い安息と洞察が生まれた。

『盟約を成立せしむる要素は「天賦珠玉」と、「盟約者」と、「調停者」である』

その三者は不可侵だ。

だから天賦珠玉を生み出す「一天祭壇」を調停者は破壊することができなかったし、祭壇の下にあるこの通路にもやってこなかった。

クルヴァーン聖王国では盟約者の聖王が調停者と戦ったけれど、あのドームが破壊される前には調停者にダメージを与えることはできなかった。調停者は聖王騎士団長を倒したけれど、聖王に攻撃をすることはなかった。不可侵だから、意味がないことを知っていた。

『天賦珠玉を取りすぎてはならない』

こんな、警句のような内容が盟約に書かれている。取りすぎればどうなるとかはない。

――天賦珠玉は『神が与えたもの』……ですが一方で『循環するもの』でもあると考えています。え、そう言っているのは聖王宮ではわたくしめだけですがね。こちらの世界で消えた天賦珠玉は、『裏の世界』に行き、『裏の世界』で消えた天賦珠玉はこちらの世界に来るのではないかと。

エルさんはそう言った。その推測が正しければ「取りすぎてはならない」という内容に沿う。

さっき見た、「裏の世界」の「一天祭壇」が吐き出した天賦珠玉

の山。
あれだけ数があれば星４つ以上のものがもっとあっても良さそうだけれど――星が多いと産出確率が低くなるのはもちろんそうだとしても、星が多いと光が増し、発見しやすくなる。
見渡す限りの茂みに星４つ以上のものは、とりあえず僕が完璧に記憶する限り、ない。

（「表の世界」では星の多い天賦珠玉は貴重で、超高額で取引されていた。【オーブ着脱】を使って、使用者が重病に罹った場合は取り出されたりもした）

――星１つは、銀貨１枚。街の食堂で飯が３回食えるほど。星２つは銀貨１００枚。
――１００枚！？　ちなみに、星６つは？
――値がつかぬ。

僕は唐突に、「六天鉱山」でのヒンガ老人との会話を思い出した。
値がつかないほど貴重な天賦珠玉は大事に大事に扱われる。実際、クルヴァーン聖王国ほどの大国、さらには「一天祭壇」という取りこぼしようがない天賦珠玉製造機を抱えている国であっても、星５つ以上の天賦珠玉は７つしかなく、それらは所有する貴族家が代々に渡って保管していた。

（「表の世界」で希少な天賦珠玉の流通を止めてしまった結果、「裏の世界」には回らなくなったんだ。だから、「裏の世界」では凶暴なモンスターに対抗する術がなく、人々はどんどん数を減らしていった）

もっとも、８つの巨大種なんてものがいる時点で「裏の世界」のほうが厳しい世界には違いないのだけれど。

エルさんに、盟約や「裏の世界」の話をしたらきっと喜ぶだろう。エルさんは盟約が破棄されることで「裏の世界」からモンスターが押し寄せる……というふうにとらえていた。２つの世界の間で、天賦珠玉のバランスが崩れ、「裏の世界」にはモンスターがはびこっているということをすでに知っていたのだろうか？

――これは、実はわたくしめの発案ではないのです。『盟約』と『裏の世界』に関する古文書解読、及び『天賦珠玉』研究の第一人者であられたヒンガ博士という方が提唱したものです。もう、２０年以上も前の論文でございましたな……。

エルさんはヒンガ老人の研究によって多くのことを知ったみたいだ。

――この身は、罰を受けるためにあり。死ぬことでは償えぬ罪を犯したゆえ。されど、今際にて日の光を浴びるほどの僥倖に浴した。天地を統べる万能の神よ、願わくばこの忌み子に祝福を授けよ……。

ヒンガ老人は最期にそう言った。

ヒンガ老人は天賦珠玉について研究していたということだけれど、それは「罪」なのだろうか？「死ぬことでは償えぬ」ほどの？

（ヒンガ老人はいったいなにをしたんだろう……）

孫娘のルルシャさんはヒンガ老人の論文をまだ手元に残しているだろうか？　それを読めばなにか手がかりがつかめるかもしれない。

空に現れた赤い亀裂から落ちていったモンスターが、破壊していなければいいんだけど……。

そうだ、「表の世界」に戻ったら僕はレフ魔導帝国に行かなければ。

赤い亀裂はどうなっただろう。
それに――ラルクは。
ラルクはまだ無事だろうか。
ラルクのことだからきっと無茶をしているに違いない。「こんなのへーきへーき」とか言って。
僕が止めなきゃ。
弟の、僕が。

★　レフ魔導帝国・レッドゲート最前線　★

アバは毎日忙しかった。各国の軍が続々と到着するので高官同士の調整はすべてアバの仕事だった。
仕事の漏れがあると何百何千という兵士に影響があり、下手をすると食料も配られないままひもじい思いをさせるかもしれないとなると――しかも兵士たちは自分の故郷であるレフ魔導帝国のために戦ってくれるのだ――アバは一時たりとも気が抜けない。
自分の天幕に戻って仮眠を取ると、すぐに起き出して外へ飛び出していく。

「……？」

その日はふと、天幕の隅に置かれてある魔道具が気になって視線を送った。
25センチくらいの台座と、その上に載せられた平たく丸い、銀製の金属。
「裏の世界」へと旅立ったレイジの生存を確認するための魔道具だ

った。耳を近づければいつものようにウウウウと音がするのだろうけれど、冒険者の「銀の天秤」たちがルルシャとともに「九情の迷宮」調査に出払ってからはアバもあまりチェックできていなかった。

今日は耳を澄ませておこうか――と思ったアバは、「アバ様！会議が始まります！」という部下の声にハッとして、

「わかった。すぐ行く」

書類を小脇に抱えると天幕を飛び出していった。

ウウウウウウ――と魔道具は鳴っている。

だが、その振動はどんどん大きくなっていった。皿のような銀製の金属はカタカタと台座の上で震えると、

――パキッ。

真っ二つに割れたのだった。

激務に追われ自分の天幕に戻って眠ることすらできなかったアバがこれに気がつくのは、数日後のことである。

離界《世界を分かつもの》（後書き）

あっさりしていますがこれにて４章は終了となります。
後日談を挟まずに、次話から５章「竜と鬼、贄と咎」が始まります。

それと別作ですが「察知されない最強職」の新刊が発売されました！
全国書店で発売中です。ぜひどうぞ～！！

1

★　クルヴァーン聖王国領　辺境の館　★

「はぁぁ～～～」

少女はため息を吐いていた。参加を許された会議の末席に座って。

「閣下、ここは俺の部隊にやらせてくだせえ。どうにも腕がなまってます」

「なにを。お前のところは先月の害獣討伐でも出張ったではないか。ここは我が精鋭に任せよ」

「なーにが精鋭だ。それに『害獣討伐』とは笑わせる。お前は散々『羽虫を殺したくらいでいい気になるな』とか言ってたじゃねえか」

「ここは間をとってウチのだな……」

「お前はダメだ」

「そうだ。先週動いたばかりだろ」

「そりゃ、酔って暴れた冒険者どもを鎮圧しただけだろ！？」

さっきからずっと、大の大人がやいのやいのと言い合っているのである。

石造りのお屋敷は殺風景で、敷かれているのは絨毯ではなくモンスターの毛皮である。これとてきちんと手入れをして聖王都で売りに出せばいい値段になるのだろうが、ここに集まる荒くれ者たちが泥だらけの靴で踏むのでもはやボロボロだ。

分厚く重たいだけが取り柄の会議テーブルもさっきからどんどん

どんと叩かれ続けては天板が軋んでいる。確か昨年新調したばかりのテーブルだったはずだが、この調子では今年を越せないかもしれない。

「はぁぁ～～～」

と少女はもう一度ため息を吐いた。

この部屋にいるのはむくつけき大人が6人ばかりと、少女だけだ。

少女は「今後の参考にもなるだろうから会議にはなるべく参加するように」と言われてここに来たのだが、見せられているのは口実をつけて暴れにいきたい男たちの口論だけだった。

「ありゃ、お嬢が悩ましげですぜ」

「どうしたんだ、いったい」

「聖王都に行って以来、ああだ」

少女は生まれて初めて、自分が生まれ育った辺境伯領を出て聖王都へと向かった。

そこで見たものは――少女の心に大きな衝撃を与えた。

清潔で整然とした町並み。特に「第3聖区」より内側は格別で、ゴミひとつ落ちていなかった。少女が今いる領都では「都」とは名ばかりで粗末な家々が並んでおり、油断すると道ばたに落ちている馬糞を踏んづけてしまう。

聖王都は食事もすばらしかった。美しくカットされた野菜、奥行きを感じる芸術的なソース、柔らかく甘い肉。領都の食事は切って焼いて調味料を掛けるだけである。

そしてなにより――人だ。

「こんなんじゃ、エヴァ様を呼べないよぉ……」

少女、ミュール辺境伯の長女であるミラが思い返すのは聖王都で出会った同い年の少女だった。

スィリーズ伯爵家のエヴァは、絵画でも見たことがないほどに整った容姿をしており、さらには毅然とした態度もまたすばらしかった。

夢見心地でエヴァに「ウチにも是非遊びに来て欲しい」と伝え、オーケーをもらったものの、辺境伯領に戻ってきて馬糞のニオイを嗅いだミラは我に返った。

あの可憐なエヴァに嗅がせていいニオイであるわけがない。

こんなところにエヴァを呼べるわけがない。

「ミラ、会議中だ。いい加減にしなさい」

「会議!?　これのどこが会議なの!?　モンスターが現れるとみんなウキウキして誰が倒しに行くか決めているだけじゃない！　持ち回りかクジにすればいいのに！」

「……最後はいつもそうなる」

本質を突いたミラの発言に、父である辺境伯は正直にそう言った。

話し合いで決まるものではないのだが、なにも言わずにクジで決まったらそれはそれですっきりしない、という理由だけで開かれている会議である。

ンモォ、と牛が鳴くのが聞こえた。

「お父様、皆さんがヒマなら、領都の掃除をしましょう?　大通りくらいきれいにしておかないと！」

「へっ、お嬢。笑わせないでくだせえよ、掃除なんて誰が……」

キッ、とにらまれた大男は、ヒッ、と息を呑んだ。つるつるハゲで眉の太い５０絡みの大男が１２歳の少女に気圧されている。

「し、しかし、掃除は冒険者ギルドに依頼で出したじゃぁないっすか。それを俺たちが取っちゃ悪いよなぁ」

と隣に座っていた右目に眼帯をつけた筋肉ダルマが言うと、うんうんとさらに隣にいた角刈りでよく日に焼けた筋肉ダルマがうなずく。

ミラが叫んだ。

「冒険者は誰ひとり、依頼を受けてくれないじゃないですかぁっ」

「……あのな、ミラ。それは仕方がないだろうが。お前がどうしてもっていうから出すには出してやったが、ここに集まる冒険者どもは刺激に餓えてんだ。そんな奴らが今さらクソ拾いなんてやるわきゃねえ」

「お父様。言葉遣い！」

ミラに指摘された辺境伯はひょいと肩をすくめただけだった。

聖王都でいろいろな貴族に会ってわかったことのひとつは、「ウチのパパはおかしい」ということだった。まず貴族家の当主は自ら戦闘斧（バトルアックス）を持ってモンスターと戦ったりしないし、熊の毛皮を頭からかぶったりしないし、貴族の子女は父を「パパ」なんて呼ばない。

領都に戻ってミラがやったことは、きちんとした貴族教育を受けることと、父の再教育だった。こうしてことあるごとにミラは注意しているのだが、父の言葉遣いは直る気配がない。

「そんじゃ、そろそろサイコロで決めますかあ？」

女の筋肉ダルマが言うと、筋肉ダルマたちは「そうだな」「お嬢の機嫌も悪いしな」などと言って賛成する。ちなみに彼らはミュール辺境伯の家臣団であり、それぞれが千人単位の兵力を抱えている。

今回は山麓で起きた大規模地震の調査と、それによって長い冬眠

から起こされたらしい巨大サソリの討伐についてだった。

「はぁぁ～～」

サイコロで「誰が行くか」を決めている筋肉ダルマたちを横目にミラがため息をもう一度吐いていると、父が横にやってきた。

「そう焦るな。ここだっていい土地じゃねえか。なにもエヴァ嬢は、お前が温室育ちの令嬢だから友だちになってくれたわけじゃねえだろ？」

「それは……そうだけど。それでも気にするよ。エヴァ様は、お父様といっしょに他国に向かってお仕事をしてるのよ？」

「ああ、グレンジードのアレか……」

辺境伯も、レフ魔導帝国で起きた出来事について知ってはいたが、辺境伯の所有する武力は辺境を治めるためのものだ。彼がここを離れ、前聖王グレンジードと行動をともにすることはできない。

一方のスィリーズ伯爵は中央貴族なので領地は持っておらず、グレンジードについてレフ魔導帝国へ向かったという。

それを聞いたとき、心の底から「うらやましい」と辺境伯は思ったものだ。

平時こそ辺境は刺激がいっぱいで楽しいが、国家の有事となればそちらに行きたくもなる。

「お、決まったか？」

わぁっ、と筋肉ダルマたちが喚声を上げ、勝ったらしいつるつるハゲの筋肉ダルマが勝利の拳を振り上げている――そこへ、

「閣下、閣下ァッ！」

会議室のドアがバァンと開いて、別の筋肉ダルマが駈け込んできた。ちなみに言うと、辺境伯の家臣はトップの隊長以下全員が筋肉ダルマである。老若男女問わずである。入隊時は細くとも、数か月で肉がついてくる。

「どうした。今日の会議は重要事項決定会議だと言ったろうが」

「……」

サイコロで決める会議のどこが「重要事項」なのかと問いたげな目で娘が見てくるが、キレイに無視して辺境伯はどっしりと腕組みして胸を張る。

「そ、それが、突然現れたっていう大サソリなんですが……退治されちまったようで」

サイコロで負けた筋肉ダルマたちはすぐさま勝ったハゲの筋肉ダルマを見たが、彼はあんぐりと口を開けた。「そりゃあしょうがねえ」「今回はナシだな」「ざまあカンカン、カッパの屁とくらぁ」なんて言って負けた筋肉ダルマたちはニヤニヤした。

「……退治？」

しかし辺境伯は疑問を口にした。

「おい、その大サソリと言うのは、確か１０メートル以上あるデケエやつで、冒険者どもが尻込みしたもんでこっちに回ってきた案件じゃなかったのか？」

「へい」

「いったいどこのどいつが倒した？」

「それが……」

伝令の筋肉ダルマは、懐からそっとあるものを差し出した。

「この館に来てまして。閣下に、これを見せればわかるってそう言われるんで」

それを見た瞬間、ミュール辺境伯は目を見開いた。

見覚えがある短刀だった。だが、新品同様だったそれはすさまじく使い込まれている。

彼にこれを渡したのはたかだか2か月かそこいら前のことだ。

だというのに――いったいどれだけの修羅場があったのか。

「すぐに連れてこい――いや、こっちから行く！　アイツはどこにいるんだ!?」

短刀を、自分が餞別代わりに贈った短刀を握りしめ、辺境伯は声を上げた。

「レイジのヤツ、また強くなりやがったなァ……！」

それは歓喜の声だった。

1（後書き）

新章です。レイジ視点は明日から。

2

長い長い世界を超える通路を抜けると、まばゆい光とともにむせかえるような緑と土のニオイが立ちこめた。

風が吹いて木々の葉がさざめくと、僕の顔にまだらに掛かっていた木漏れ日が揺れる。

そこは森だった。

「え……？　森？」

てっきり聖王都の「一天祭壇」に出るのだとばかり思っていたので僕は呆けてしまう。

「――――」

「――――」

同じタイミングで外へと出てきたノックさんと百人長が呆けた顔をしているので、

「あ、いや、もうちょっと違う場所に出るかと思っていたんです。参ったな、どこなんだろここ……」

「すばらしい」

「え？」

「なんとすばらしいのダ……」

ぽつりとノックさんがつぶやくと、その横ではへなりと百人長が座り込んだ。

「……マジで、俺たちは世界を越えたんだな……なんだよ、この森はよ……命があふれてやがる……」

僕はそのときになってようやく、「裏の世界」からやってきたふたりが、「表の世界」の生命力に驚いていたのだということを知った。

それから僕らは場所を移動して、小川のそばで休憩を取った。周囲を注意深く確認したけれど調停者がやってくるような気配はない。調停者はこちらの世界へとやってくるのは、よほどのことがない限りできないのだろう。

休憩しつつふたりの話を聞いてみると、あの長い通路はふたりにとっても長い通路だったようで、ずっと忘れていたような幼いころの記憶がよみがえってきたのだそうだ。

「そんで、これからどうする？　あの通路が使えることはわかったが、戻ったところであの化け物がいたら意味がねェ」

百人長の問いはもっともだ。

「……それについては僕に考えがあるのですが、聞いていただけますか？」

僕はまず、あの通路を戻っても向こうに調停者は「いない」だろうと考えている。

理由は2つあり、1つ目は調停者の数は限られているのでいつまでも僕のためだけに割くことはできないだろうと思われるからだ。

2つ目の理由は、ふつうに考えて世界を渡ってしまった僕らがすぐまた戻ってくると考えないだろうということだ。向こうの世界に

「逃げた」のならまた「裏の世界」に戻るわけがない。

「ただ、調停者はどうやら僕に強い執着を持っているようです」

僕が黒髪黒目の「災厄の子」であるからなのだけれど、このあたりについてはまだふたりには話していない。

「調停者は、僕があちらの世界に戻ったら……なんらかの方法で探知してくる可能性があります」

「ふむ……あり得るな。でなければあんなふうにピンポイントで待ち伏せなどできない」

ノックさんはうなずくが、

「そんじゃよォ、俺らの仲間はどうすンだ？　戻らなかったら、俺らが死んだとだけ思われるぞ」

「非常に心苦しいのですが……おふたりで行っていただけないでしょうか？」

アーシャのことを思うとつらいのだけれど、僕が戻ることで危険が増すのなら、いっそ僕はこちらの世界に残ったほうがいい。もし仮に、なにか調停者の気を惹くことができるのなら、行動を起こしていれば調停者はダークエルフや地底人たちに注目もしないだろう。

まあ、天賦珠玉をばらまいて、巨大種に都市を攻撃させている幻想鬼人がいったいなにを考えているのかまではわからないので断言はできないんだけど。

「……なるほどな、アンタも苦しい選択なんだな」

百人長はうなずき、ノックさんの腕をぱしんと叩く。

「そういうことなら俺らに任せなァ」
「ああ。レイジ殿、皆をここに連れてこよう」
「ありがとうございます」
僕は深々と頭を下げる。
「皆さんがここに来たとき、確実に迎え入れられるようにしておきますので」

翌日までゆっくり休んでから、ノックさんたちは通路から元の世界へと戻っていった。来るときには持っていなかった多くの果実をお土産にして。
これだけ見たこともない果実があれば、さすがにみんな信じるダろう――とノックさんは用意周到だった。
僕らがやってきた通路は、山の中にぽっかりと開いた裂け目のようなもので、なにか遺跡めいたものや神殿ふうのものはまったくなかった。

（……ここは聖王都じゃない。聖王都付近の山なのか？　とりあえず、今ここがどこなのかを確認しなきゃ）

ノックさんと百人長を見送った僕は、ダメージ覚悟で【火魔法】を使って空へと舞い上がる。すると遠目に、山の麓の町が見えた。小さいながらも人の暮らしが確認できる。
「おっ、あそこに行けば大丈夫そう――って、アレはなんだ？」
炊事の煙とは別に、立ち上っている煙。

それは戦いによるものだというのは【視覚強化】と【森羅万象】ではっきりわかった。

煙の中にいたのは巨大なサソリだ。

なんでこんなところにサソリが？　いや、そんなことよりも――あのサソリは町の外壁を破って暴れていた。

犠牲者が多く出てしまう。

「次から次へと、忙しい……な、っと！」

僕は森をダッシュして町へと向かった。

戦いの末、サソリを倒し、その町がクルヴァーン聖王国領でも最も外れにある辺境伯領なのだと知るのはそれから少し後のことだった。

さらに言うと、僕らが通路を使ったせいで山に異変が起き、はるか昔から眠っていたサソリが目覚めてしまったのだということに気づいたのはさらに後のことだった……。あの通路は、元々あった道というより無理矢理山に穴を開けてしまったものらしいのだ。

2（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。
読んでいて面白かったら是非「小説家になろう」にログインしてブックマークをしていただければ。
またページ下部にある★を通じて作品を評価できますので、こちらのご協力もよろしくお願いいたします。
ブックマークと評価は、作品を書き続けるモチベーションになりますので。

3

ミュール辺境伯のお屋敷は広々としていたけれど、王都のお屋敷と比べるとやはり質素というか、質実剛健というか、無骨な感じがした。

応接間には巨大な熊の剥製が飾られていて、今にも襲いかかってきそうな迫力だ。これを見たらふつうの人は腰を抜かすんじゃないだろうか……というかいいの？　こんなもの応接間に置いておいて？

のっしのっしという足音とともに部屋の扉が開くと、そこには僕の記憶と違わないバーサーカー……じゃなかった、ミュール辺境伯の姿があった。

「レイジィ！　ほんとうに我が領に遊びにくるとはな！　いいぞ。どこへ行く？　ダンジョンか？　荒くれ者の冒険者どもを一斉に締め上げるか？　それとも前人未踏の秘境へ――」

「お、お父様、ご自分の希望ばかり述べないでくださいませぇ……」

横にちょこんとついてきたのはミラ様だった。

エヴァお嬢様といっしょにいたときの印象では「素朴な田舎のお嬢様」という感じだったのに、なんだろう、ちゃんと貴族令嬢っぽさがにじみ出ている。

ああ――そうか。

「パパ」呼びしていたのを止めたり、所作振る舞いが洗練されてきたからか。

「お、おぅ……そうだな。遠いところをわざわざありがとうな。それで？　どういう用件でここに来たんだ？　お前、聖王都でいろいろやらかしたからしばらくは聖王国にいねえと思ってたんだが。ま

あ、聖王都は今隣国のことで忙しいみたいだが」

それを聞いて僕はピンときた。

この人は、レフ魔導帝国でなにが起きたのかほとんど知らないのだ。

「――まずは急な来訪にもかかわらず、お目通りがかないまして光栄です。ミュール辺境伯」

「んな堅ッ苦しいこたァ――」

「レイジ様は当主が直々に認められたお客様ですわ。いつでもお越しいただいて構いませんのよ」

ミラ様は右手を胸に当てた簡単な貴族の礼を返してから、きろりと隣にいる父をにらんだ。バーサーカーは怯んだ。

ミラ様がいれば辺境伯領も安泰だな。

「今日ここに参りましたのは大きなお願いがひとつと、それとレフ魔導帝国で起きた出来事に関するご説明です」

僕が切り出すと、娘にたじたじだった辺境伯の目の色が変わった。

「……お前、アレに関わってンのか？　そうかい、そんなら話を聞かなきゃならねえだろうな。座れ――ウチの家臣団も呼ぶ」

広々としていた応接間も、ムキムキの男女が5人追加されるといきなり狭く感じられる。だけれど僕の話が一通り終わると誰も彼もが黙りこくってその内容を考えていた。

僕が話したのはすべての経緯と、アーシャのことや盟約回りの詳

細ははしょったけれど「裏の世界」のこと、それにこれからやってくるダークエルフ、地底人たちの受け入れだ。

「……レイジ、まずお前の『お願い』についてだが、これは問題ねえ。なんせここにゃ土地があまってっからな」

「閣下。しかし、領内の食料はさほど裕福とは言えませんぜ。ここに数千人追加されちゃあ――」

「ちょい待て」

辺境伯は手で制する。

僕の懸念は、「お願い」が受け入れてもらえるかどうかということだった――それは法律的な問題もそうだし、辺境伯領に十分な食料があるのかという問題もある。

もし難しいのなら、一時的に食料を買わせてもらって、他の土地を探すことも考えていたのだけれど。

「レイジ、お前の話じゃぁ、そのダークエルフとやらの戦闘力はクソ高けぇんだよな？」

「……ええ、まあ」

あ、これはなんかよくない方向に話が行く気がする。

だって辺境伯の目が爛々としてるんだもの。

「それじゃあよ、そいつらにモンスターを狩りまくってもらえや、肉は問題ないわな。んでアレよ、我が辺境伯領でも名産があれば多少は金になるじゃねえか」

「お父様。モンスターの肉を加工して輸出するということをお考えですか？」

「それよ、それ。辺境だ辺境だとバカにしてる連中に、美味い肉を食わしてやろうじゃねえか」

するとミラ様以外の家臣からもあーだこーだと意見が出る。
どうやら辺境伯領は生き物が多い割りにあまり手がつけられていないらしい。というのも強い冒険者たちはダンジョン攻略や希少なモンスターや植物を狙うため、「安定的にモンスターを狩る」ということをやらないのだ。
辺境伯領の兵士たちは領内の町が危険になるとそのたびに出兵するが、往復の時間が掛かるために「安定的にモンスターを狩っている」とは言いがたい。
その「安定的にモンスターを狩る」という仕事をダークエルフたちに任せたいようだ。
僕は手を挙げた。

「ええと、一応言っておきますが、ダークエルフたちは喜ぶと思います。地底人種族も一般的な兵士より戦闘力は高いので役に立てるのではないかと」

地底人は天賦珠玉なしで「裏の世界」の凶悪モンスターと戦ってきたのだから、そりゃ強い。ダークエルフ（マッチョ）たちが異常に強いというだけで。
だけど僕は余計なことを言ったようだ。

「閣下。さすがにこの子ども（・・・）が言うことを鵜呑みにしすぎじゃありませんか？」

家臣の人たちがじろりと僕を見てきたのだ。

「話にゃ聞いてましたけどね、どこからどう見ても子どもでしょうよ。これが強いとは全然思えませんぜ」

ぽつりと「レイジさんが子どもなら私はどうなるの……」と2歳年下のミラ様が言った気がするがカッカしている家臣たちは気づかない。

「そうですぜ。大体、聖王陛下といっしょの場所で戦えたってだけでクソうらやまし……じゃなかった、特別待遇なのに、なにもそれ以上やってやる必要もねえでしょう」

「子どもが見た『強い』なんて言葉で判断できませんぞ」

そうだそうだ、と声が上がる。

「……だ、そうだが？　レイジ？」

にやり、と指鉄砲みたいな形を作ってそれをあごに当てた辺境伯が聞いてくる。

ほら、イヤな予感がしたんだ。

「ミュール辺境伯。僕は先ほどから申し上げておりますとおり、時間がないのです。ダークエルフ、地底人種族の受け入れを承諾いただければすぐにもレフ魔導帝国へ行きたいと思っています」

「おお、おお、そうだったなぁ」

わざとらしく辺境伯はポンポンと膝を叩いた。

なんだなんだ。

「ミラ。あ～、聖王都からの定期便はいつだったかな？」

するとミラ様はハッとしたように、

「2日後、明後日でございます」

「そうだったそうだった。――レイジ、明後日にな、聖王都とここ辺境伯領を行き来する魔導飛行船が飛んでくる。貨物を載せる旧式ではあるがよ、それに乗れば、馬で行く半分の時間で聖王都に行けるぞ」

「！」

ここからレフ魔導帝国まで、最短距離の街道を馬で走っても2か月かかるらしい。

それが、聖王都経由になったとしても魔導飛行船を使えば1か月ほどで到着できる。

「使ってもよろしいので？」

「構わん。だが、今日と明日は、お前手が空くよなぁ？」

今度は僕がハッとする番だった。

「そんじゃあ、手合わせ願おうか」

むくつけき男女6人が指や首を鳴らしながら立ち上がると、ミラ様が顔に手を当てて海より深いため息を吐いた。

3（後書き）

成長したミラ様と成長しない辺境伯。

4

魔導飛行船に乗るのは初めてだったけれど、これに乗ってほんとうに大丈夫なのだろうか？　と思ってしまうくらい狭かった。

ずんぐりむっくりした四角いトドのような形である船は、コンテナを4つくっつけたくらいの大きさで、そのスペースのほとんどに貨物を載せている。

人間はオマケで、主役は貨物なのだ。

辺境伯領は確かに希少なモンスターや植物の生産地であり、冒険者たちが見つけ出したそれらは冒険者ギルドが一時預かり、聖王都に運んで換金するらしい。

現金は聖王都の冒険者ギルドに蓄積されるので辺境伯領で稼いだ冒険者たちは預かり手形を持って聖王都へ凱旋する。

つまり、辺境伯領にはお金が落ちない。

――貨幣は重量があるので飛行船に載せられませんから。

と言うミラ様に、

――であれば少量ずつでいいので運ぶべきです。1か月に2本も飛行船が往来しているのでしたら、運べないことはありません。

――冒険者ギルドに提案したことはありますが、ギルドもここは「支所」なので聖王都にある「本部」よりも力関係で劣っていて……。

――ギルドがダメなら、辺境伯自身がやればよろしいのでは？

――それが、ウチにはお金もあまりなく……あっても、災害やモンスターによって荒れた領内の村々に使ってしまうので。

すでに辺境伯家の財務に携わっているらしいミラ様のため息はやはり深い。

それでも辺境伯のしていることは正しく貴族だった。

――では魔導エンジンに使う燃料はどうですか？

――燃料……？

――魔石や魔力を帯びた触媒だと思われますが、それらは聖王都での補給で往復分あるのでしょうか？

すぐに調べてみると、燃料は聖王都で往復分を積載しているらしい。かなりの量だ。

これを辺境伯領で補給するようにすれば、荷が軽くなる。その分貨物を積めるし、あるいは軽い分、燃費を向上させてもいい。辺境伯領でも魔石を売ることができる。

聖王都からは辺境伯領にはない穀物や塩といった「安いが重い」ものが運ばれてくる。だがそれらは、聖王都で買うと高く、隣の領で買えば安い。

――しかし聖王都で買わなくなると、魔導飛行船が飛ばなくなります。

――なにをおっしゃるのですか。辺境伯領の希少な素材を欲しがっているのは聖王都ですよ。こちらは「飛ばせてやっている」のです。

――確かに。

――穀物は近隣で買いましょう。聖王都から飛んでくるときには空でいいくらいです。どうせお金が回るようになったら欲しいものが出てきますから、そのときのためにスペースは取っておくべきです。

人間の思い込みというのは恐ろしいもので「前からそう決まって

いる」ものが大量にあると、そのすべてに「これはほんとうにそうなのか？」と考えることは難しい。気がつくと「前提知識」がいくつもあって、その「前提知識」が間違っていることに気づかないのだ。

僕はミラ様と話し合いながら辺境伯領で改善できるとこを洗っていく。

まあ、それをしながら、辺境伯の家臣の皆さんと「手合わせ」という名の「模擬戦」をしていたのだけれど。ちなみに先ほどの会話はすべて、僕は練兵場で大勢の兵士に囲まれて戦いつつ、ミラ様は練兵場にテーブルと書類を持ってきてそれに目を通しつつ行った。

「模擬戦」の最後には「もう我慢できねぇ！」と辺境伯閣下ご本人が登場したのだが、「あなた」と病床から抜け出してきた奥様に止められてすごすごと引き下がっていった。

奥様の病気についても【森羅万象】で見ると一悶着あったのだけれど、それまで語り出すと長くなる。

というか信じられないくらい密度の濃い2日間を過ごし、僕は見送りの皆さんに大きく手を振って辺境伯領を出た。傷だらけの家臣の皆様は「絶対また来い」「次は勝つ」「ダークエルフの野郎どもが来るのが楽しみだ」と物騒なことを言いまくっていたけど、ごめん、ノックさん、後は任せました……。

魔導飛行船の貨物の片隅で毛布にくるまるとすぐに眠りに落ちてしまい、気がつけば聖王都についていた。すごい、丸一日以上寝てた。

「うわあ！？　誰！？　君、勝手に乗り込んだらダメだよ！？」

「あ、いや……えっと、ここは？」

「聖王都の発着場だよ！」

聖王都側の荷運びの係に僕は自分のことを説明し、船から下りたのだった。「快適な空の旅」と言われれば確かにそうだけどね。初

めての異世界フライトをまったく覚えていないなんて……。
僕は久しぶりの聖王都を見やった。

「……感傷に浸る前に」

とにかくトイレに行きたい。

聖王都からレフ魔導帝国方面への飛行船は出ておらず、そもそも飛行船は貴重品なので辺境伯領に飛んでいることがあまりにも特別なほどだった。それだけ辺境伯領で採れる素材が貴重なのだろう。
すっきりした僕はすぐにも帝国方面行きの馬車に乗ろうかと思ったけれど、今日の便はすでに出払ってしまっていた。

「――レフのほうはどうなってんだ」
「――さあな、一進一退だって話だが」
「――聖王陛下が行かれたんだろう？」
「――前、だろ。まあ、今の陛下は良くも悪くもふつうだからなぁ……」

そんな話がそこここで聞かれる。
僕は帝国がどうなっているのかを知るために聖王都の冒険者ギルドへと向かった。
ここの冒険者ギルドには何度も来ていたけれど、ついぞ自分が冒険者として利用したことはなかった。ガッチリとした石造りの建物、なぜか鉄格子の嵌められた窓、営業時間中は開きっぱなしの分厚く巨大な扉を見やると、ここにはもう何年も来ていなかったかのような思いに襲われた。

「おい、坊主。入口に立ってちゃいけねえよ」
「あ、すみません」

僕がそそくさと横にどくと、「ここで食いもんねだっても、ケチな野郎ばっかだから止めときな」という言葉が降ってきた。え？と思って見ると、こぎれいな格好をした長身の冒険者は中へと入っていく。

しばらく考えて、合点がいった。

だいぶ汚れ、裾はぼろぼろになったフード付きマントをかぶっている僕は、どう見ても浮浪児なのだろう。

辺境伯領では幸か不幸か見た目を気にする人が誰もいなかったのだけれど、ここは聖王都だ。周囲を見ると晩夏の空の下、みんな清潔なシャツやワンピースを着ており、僕だけ季節にまで取り残されたような有様だった。

「……ま、しょうがないか」

服を仕立てている余裕なんてなく、僕は冒険者ギルドへと入った――すると、そんな僕を待っていたのはさらなる驚きだった。

聞こえてきたのは併設された酒場から聞こえるやんややんやの喝采だった。

中央にいるのはギターとも違う、リュートのような弦楽器をつまはじきながら歌う吟遊詩人である。

『聖なる青き王の御代　偉大なる我が聖王都よ
暗雲立ちこめ　現れし災厄は
地獄より来たる　大ヘビよ
勇猛果敢な剣士さえ　飲み込み　食らい　暴れいたる
光を纏い　剣を掲げる少年が
振るいし剣よ　大ヘビを

打ち砕き　命断ち　聖王都に
安寧をもたらさん
勇者を称えよ　その名はレイジ
光の冒険者　その名はレイジ』

唖然と立ち尽くしたまま、僕はその場に何分も立っていたよね。

「ナニコレ……？」

そのとき僕はふと、同じパーティーメンバーであるダンテスさんとの会話を思い出していた。

――まるで『おとぎ話の英雄によるバケモノ討伐』みたいだと。
――は？
――俺が翌日冒険者ギルドに行ったときに吟遊詩人から話を聞かれたんだ。どうもそいつも遠目で現場を見ていたらしく。
――吟遊詩人？　なんかすごくイヤな予感がしますけど。
――お前がウロボロスを倒したところを歌にしたいんだと熱っぽく言われた。
――……。
――い、いや、俺は断ったんだ。目立ちたくて冒険者をやっているわけじゃないしな？　だけどあまりにしつこいし、『街を救った英雄をみんな知りたがっています』と言われれば、俺のことじゃなく、他ならぬレイジのことだから――。
――つまりダンテスは、レイジくんのことを売って、自分のことは歌うなと念を押して詳細を教えたべな。

ダンテスさんんんんんんん！　恨みますよ！？　いや、もう恨んでますからね！！
これか！　これが歌われてるって内容か！

なんだよ「光の冒険者」って！　あの光はノンさんの【光魔法】だからね！　僕関係ないからね！

「最高だったな。今日の歌も」
「ああ……あの大ヘビが荒らした跡を見たかよ。すっげーよなぁ、そんなヤツがこの冒険者ギルドにいたってんだから」
「同じ冒険者として鼻が高いぜ」

冒険者たちがなんか勘違いしてる！
僕、ここで活動したことないからね！？　手紙を送る依頼はしたけど！　むしろ依頼人のほう！

（うわあああ～～～めっちゃ聞きにくい！　情報集めにくい！）

僕が真剣に、このまま回れ右をして出て行くべきではないか、いや、でもレフの情報は知りたいし……とフードの上から頭をかきむしっていたときだった。

「チッチッチ、そんなもんじゃねーんですわ。『光の冒険者レイジ様』は」
「あ？　なんだよ、獣人のねーちゃん」
「これでもあーしはね、レイジ様と何度も冒険をしてきやしたからね……あの方がどんな方なのかもっと知ってるってわけなんすわ」
「お、おい、マジかよ」
「俺、聞いたことあるぜ。確かに『光の冒険者』は猫系獣人と行動をともにしていたとか」
「ふっふっふ、それがあーしってワケっすわ」
「マジかよ！　もっと話を聞かせてくれよ！」
「お、聞きたいっすか？　いいっすよ～。ただし、ひとり銀貨1枚」
「はあ！？　金とんのかよ！？」

「そりゃあ、そうっすよ。あの『光の冒険者』様の情報（ネタ）だからねえ……レイジ様が夜な夜なあーしの身体を求めながら、寝物語に聞かせてくれたモンスター討伐の話もあるっすよ！」
「……へえ、そりゃ聞いてみたいですねえ」
「そうでしょそうでしょ！　そうなりゃ銀貨1枚なんて安い――」
猫系獣人の顔がピタリと止まった。
「あ、あ、あ……」
「お久しぶりです、『光の冒険者レイジ様』の仲間のゼリィさん」
僕は彼女の顔をがしっとつかんだ。アイアンクロー的なアレである。
「あんぎゃあああああ～～～～～～～！！！！！」
酒場には絶叫が響き渡り、建物内だけでなく鉄格子の向こうの大通りの通行人すらこちらを見ていたらしい。

4（後書き）

ゼリィさんはゼリィさんでした。

5

「んごご、んごぉっ、よ、よがったっずよぉ～、坊ちゃぁん……うぐぐ、うぐぅ～」

ケンカすんなら出て行きやがれ、とギルドの奥から大男が出てきて僕とゼリィさんはつまみ出され、裏通りの道ばたに座り込んだままゼリィさんは涙と鼻水で濡れた顔をこすりつけてくる。僕のマントはますます汚くなった。

アイアンクローをしたのでゼリィさんの顔には五指の痕がしっかりついているけれど、その痛みよりも喜びが勝った……というのはやっぱり僕もうれしいわけで。

少しだけ鼻がつんとした。

「ゼリィさん、教えてください。どうしてあなたがこんなところに？」

手ぬぐいで顔を拭いてやると、にょーんと鼻水が伸びた。大の大人がこんな顔をしちゃってまぁ……。

「あ、あーしは、坊ちゃんが生きてるかどうかわかるっていう魔道具ができるまでは、レフにいたんですが――」

ゼリィさんは語ってくれた。

僕が生きてるかどうかを確認する魔道具ってのを作り上げたのはほんとにすごい。念のため、レフ魔導帝国に入国するときに渡された腕輪を残しておいてほんとによかった。

ゼリィさんは僕が生きているとわかると、

「鬼しぶとい坊ちゃんはどうにかして戻ってくるだろうと思いやして」

と要らない形容詞をくっつけつつ、「自分にできること」をやろうと思ったそうだ。

赤い亀裂は「レッドゲート」と呼ばれていて、今は「黒の空賊」――ラルクだ――が活躍してなんとか戦線を維持しているものの、決定打がない状況だった。

「銀の天秤」のみんなは「九情の迷宮」の再調査に協力していて、ラ＝フィーツァの仕掛けが2つの世界をつなげたのならば、その仕掛けを解析することでつないだ穴を塞げるかもしれないと考えた。

（それは確かにそのとおりだ）

僕も、なんの予備知識もなかったら同じことをしたんじゃないだろうか。

ただ今の僕には【離界盟約（ワールド・アライアンス）】がある。

これを通して見ると世界が変わって見えるのだ。

今、これをこうすればいいというアイディアはないのだけれど、【離界盟約】を使えば別の解決方法が見つかるような……そんな気がする。

なによりラルクが心配だった。

「その、ゼリィさん。ラル――『黒の空賊』の様子はどうですか？　健康そうでした？」

「健康？　……いや、ちょっとわかんねーっすね。あーしもほとんど見たことがないってほどで。戦いから戻ったら帝国が大事に大事にしまっちまうもんですから」

「そう……ですか」

まるで武器だ、と思った。
ひどい扱いは受けていないようだし、ラルクのおかげで戦線が維持されているのならば彼女はむしろ英雄だろう。
でも……ひどく不安だった。
星６つという【影王魔剣術（シャドウキング）】の力を僕は目の当たりにしている。
手に入れたばかりの少女が大の大人を切り刻み、さらにはこちらの世界の調停者にあたる竜すら斬った。
ラルクは魔法を使えないはずだから、魔力ではないなにか……別の力を消費しているに決まっている。

「……坊ちゃん、どうしやした？　せっかくあーしと再会できたのに悲しそうな顔しちゃって」
「ああ、いや、ゼリィさんに会えたのは僥倖でしたよ。……で、それでゼリィさんはどうして聖王都に？」
「あーしにできることは、他の冒険者を集めることだけっすからねぇ」

ゼリィさんが言うにはレフ魔導帝国は国庫を解放して、莫大な報酬をぶら下げて冒険者までかき集めているらしい。戦闘力だけでなく、大量の兵士が駐屯しているので食料の輸送も必要だ。それには護衛が当然ついてくるわけで、護衛費用も帝国が肩代わりしている――その情報を流すのがゼリィさんの仕事だった。
冒険者は金にがめつい割りに疑り深く、特に「秘密主義だった帝国が金を払う」なんて言われたらまず眉にツバを付ける。
だからゼリィさんは帝国の現状を伝えて回っているのだそうだ。
生の情報を聞けることは、冒険者だけでなくギルドにとってもうれしかったようで、今ゼリィさんはギルドの通行証（パスポート）をもらってあらゆる交通機関が無料で使える。

（みんな、戦ってるんだ）

最前線にいるラルクはもちろん、「銀の天秤」のみんなも、それにゼリィさんも。

「行きましょう――ゼリィさん。赤い亀裂（レッドゲート）を閉じに！」

僕は拳を握りしめて立ち上がった。

「へ、ぼ、坊ちゃん？　閉じるって？　坊ちゃん～！」

歩き出す僕の後ろからゼリィさんが声を上げる。

「今日はもう馬車はやってねーっすよ～！」

……そう言えばそうだった。

★　レフ魔導帝国・「月下美人」　★

「月下美人」の薄暗い客室内で、２人の少女はソファに並んで座っていた。

黒のマントに紫色の戦闘服を着た少女は疲れたように身体を完全にソファに預けている。服には謎の液体がこびりついて、それも乾き、パリパリになっている。着替えるのも風呂に入るのも億劫だという有様だった。

もう１人の少女は質素なデザインながらも高級素材を使っている

とおぼしきワンピースを着ており、疲労困憊の少女の左手を握っていた。

両手で包まれるように握られた手からは黄金色の光が滲んでいる。

それはふたりの少女の髪の色――ラルクとエヴァの髪の色をちょうど混ぜたような色ではあった。

ふたりはじっとお互いの瞳を見つめ合っていた。

エヴァの額にはふつふつと汗が浮かんでおり、眉間にはシワが寄っている。一方のラルクは土気色の肌をしてぐったりとしていたが、徐々に頬に赤みが差してきたようだ。

「――もう、いいよ。十分だ」

「ですが」

「アンタもずいぶんへばってるじゃないか。じゃあ、少し寝るから」

「あ……」

ラルクは立ち上がると、ぽん、とエヴァの頭に手を置くと一瞬よろめきながらも部屋を出て行った。

「……」

今エヴァが使用していたのは「鼓舞の魔瞳」だ。スィリーズ家の血統が使える特殊な「魔瞳」であり、「鼓舞の魔瞳」はその目を見た者の戦闘意欲をかき立て、さらに心の距離が近い者には生命力や魔力を分け与えることができる。

「――エヴァ、終わったのですか」

入れ替わりに部屋に入ってきたのはエヴァの父であるスィリーズ伯爵だった。伯爵は、ソファに座ったままの娘に気がついてハッとすると駈け寄ってきた。

「大丈夫ですか」
「……はい、これくらいは」
「フラフラではありませんか」

エヴァは立ち上がろうとしたがすぐその場に座り込んでしまう。
「鼓舞の魔瞳」を使った反動だろう。

「まだあなたは魔瞳を使いこなせていないのです。使いすぎないように、と何度も忠告したでしょう」
「……ですが、最前線で戦っておられるラルク様に比べればわたくしの苦労などたかが知れています」
「とはいえ、エヴァ、あなたが身体を壊しては誰があのラルク嬢を癒すのですか」

傍らにひざまずき、エヴァの手を取ったスィリーズ伯爵は姫を守る騎士のようでもあった。
レイジがスィリーズ家の護衛として働き、「新芽と新月の晩餐会」、「天賦珠玉授与式」と続いた混乱が収束した後――伯爵は娘に対する愛情を隠さなくなり、娘はそれに戸惑いながらも受け入れようとしていた。
ふたりきりの家族の絆は深いものとなっていた。

「お父様、ラルク様の戦いの様子を聞かれましたか？」
「……」

伯爵はうなずいた。
ラルクは毎日出撃し、関所の長いトンネルを抜けて帝国に入ると、すぐに最前線に向かう。
関所周辺はいまだ建物も残り道も整備されているが、レッドゲー

トへ接近するに従って破壊の度合いが強くなる。建物の破損はもちろん、倒したモンスターで回収しきれないものは野ざらしになっている。腐敗を抑えるために焼きたいのだが火事になると手がつけられないのでほとんどはそのままだ。

さらに進むとモンスターだけでなく、各国兵士の装備品が転がっていたり、崩れた建物の下には遺体がそのまま残っている。戦闘が激しい場所では遺体回収もままならないのだ。

そんな場所でラルクは黒い剣を振るう。

皮膚が金属のように硬いゴリラモンスターも、人間の身長ほどもある鎌を持ったオオカマキリモンスターも、どろどろの粘性を持ちさらに強酸を吐くスライムモンスターも、彼女の黒い剣は切り裂いていく。

モンスターは知性があるものもあればないものもある。モンスターの死体を貪っている小型のモンスターは兵士たちが仕留め、どうしても歯が立たない強力なモンスターはラルクの出番だ。

つまり、ラルクが戦うのは必然的に強い相手だけとなる。

「……多くの兵士たちが盾となり、彼女を守りながら進んでいるそうですね。帝国の魔導武装（マジックギア）も惜しみなく投下されていますが、燃料が切れ始めていて、今はラルク嬢に頼りきりだと」

「はい……。この数日はラルク様の疲労が濃くて、わたくしは少しでも彼女の負担を軽くしたいのです」

うつむいたエヴァは膝の上で両手をきゅっと握る。

「ですがラルク様も、お父様と同じようにわたくしに無理をするなと。わたくしもまた、ラルク様に守られている……そう思うと、つらくて」

ラルクの戦いぶりは多くの人々が目撃している。そしてラルクを

守るように、影のように、甲斐甲斐しく立ち回る彼女の仲間――空賊たちも。

獅子奮迅という言葉がふさわしいほどに彼女はモンスターを倒す。その戦い振りは文字通り「命を削っている」のに違いないとみんなが思っているのに、それを口にできない。なぜならラルクはもはや頼みの綱だからだ。

「わたくしが1時間苦しい思いをすることで、ラルク様が1分楽になれるのであれば、わたくしは進んでその役目をまっとうしたいと思います。それが貴族としての責務でもありましょう」

「エヴァ……」

伯爵は娘の成長に胸を打たれながらも、心から愛するエヴァにこれ以上苦しい思いをして欲しくはないとも思っていた。

レッドゲートの問題を解決する方法はあるのか。

模索されている方法の中で、最も確度が高いと思われているのが「九情の迷宮」攻略だった。今ごろ、攻略結果と分析に関する会議が開かれているはずだが――。

その会議には、スィリーズ伯爵がクルヴァーン聖王国から呼び寄せたとある人物も参加しているのだった。

5（後書き）

スィリーズ伯爵が呼んだのはいったい誰か？（難易度：低）

6

★　レフ魔導帝国　天幕街　★

迷宮攻略第４課は冒険者パーティー「銀の天秤」の協力もあって「九情の迷宮」再攻略を着々と進めていた。
攻略結果を突き合わせる初めての会議がこの日、開かれた。
攻略４課のトップであるルルシャももちろん参加し、「銀の天秤」からも参考人としてダンテスが参加することとなった。
迷宮攻略課の各チームに、魔導研究に詳しい大商会の面々、それに迷宮管理局の局長と、帝国内では主要なメンバーが集まり、大天幕といえども５０人も入れば密集具合はなかなかのものだった。
そのほとんどがレフ人であり、ヒト種族やその他の種族は数人しかいない。

「局長、攻略１課が一度すべての攻略結果を確認したいと思います。研究員の層の厚さもありますからな」
「待たれい。研究員の数で言えば我ら２課のほうが多かろう」
「ははは、これだから管理局の皆様は。実際に魔導機械を分析してきたのは我らが商会ですぞ」

それぞれが権利を主張し、議論は進まなかった。
空の赤い亀裂（レッドゲート）を閉じるために「九情の迷宮」は再度攻略され、さらには未発見だった迷宮も見つかった。それらはなんとあらゆるトラップが停止しており、魔道具を拾い放題という状況だったのである。

ただし「未開の地カニオン」から流れ込んでいるモンスターがおり、それらと戦ったために犠牲になった者もあった。それでも、莫大な量の魔道具を無傷で手に入れられるというのはレフ人たちの欲望を大いに刺激した。

国家が危機なのはわかっている。

しかし今のうちに魔道具を確保するだけしたい――なんならよその攻略チームが見つけ出したものも確保したい。そう考えているのである。

「あ、ああ。ええと。皇帝陛下からは本件について迅速に研究を進めるよう言われており……」

場を仕切らなければならない迷宮管理局長はおろおろとするばかりだった。局長は都市から追い出されているというのにその太った身体はいまだ太ったままで、むしろストレスから食べ過ぎてさらに太っているという有様だった。

（水飴を禁じられたアバが痩せていったのとは正反対だな）

横目で局長を見ながらルルシャはそんなことを思った。ちなみにアバは今日も、各国の代表者と様々な懸案事項を話し合っているはずである。

「研究員を持っていない攻略４課の戦果については１課が引き取ってもよろしいのではありませんかな？」

見た目が爬虫類であるレフ人の年齢はわかりにくいが、１課の課長は５０歳を超えているはずだ。老獪な彼は、すべての権利を主張するのは難しくとも、切り崩しやすいところから権利を得ていこうとする。

「失礼ですが、１課長。４課にも研究員はございます。いまだにレッドゲートから出てくるモンスターに衰えがなく、なかなか多くの設備や資材を運び込めないため研究の進みは悪いのですが、それでも現在『畏怖の迷宮』と『憤怒の迷宮』の最奥にある迷宮コントロール機関について急ピッチで分析を進めております」

「おお、いいぞ、ルルシャ殿。結果はいつごろに――」

局長が、ようやく聞こえてきた前向きな情報にうれしそうな声を上げたが、それを遮るように１課長が、

「４課の研究員は、ここにおられる大商会でもない、場末の商会の者どもでしょう。そんな者に触れさせて壊れたらどうする？　あるいはその後ろにいるヒト種族にでも頼んだのか？　だとしたら機密漏洩であり大変な背信行為となろう」

指摘すると、レフ人たちがざわついた。「他種族に任せるだと？」「なんのためにここに他国を呼んでいないと思っている」という声が聞こえてくる。

帝国の街区でレッドゲートから落ちてくるモンスターと戦っている各国兵団の代表は呼ばれていない。それは、ここにいるレフ人の代表者たちが猛烈に反対したからだ。

他国を呼べば、分け前を渡さなければならないではないか――と。

「くっだらねえなあ」

その巨体をイスの背にもたせると、ギッ、と音が鳴った。ダンテスの低い声は多くのレフ人が耳にした。

「……くだらないと言ったのか？　たかだか冒険者の分際で！」

１課長が拳でテーブルを叩くパフォーマンスを見せると、ワッと人々が反応した。そのすべてがダンテスに対する嫌悪感だった。

「ダンテス殿」

「ああ、ルルシャさん。悪い悪い。だってな、ここにいる連中があまりにわかってねえなと思ってよ……大体自分らの命も守ってもらってるって奴らが、なんの権利を主張するんだって話だよな？」

「失礼な！」

ガタガタッとイスから立ち上がるレフ人たちだったが、ダンテスはぎろりと彼らをにらみつける。

「……お前らの町を守ってんのは、お前らが言うヒト種族ってヤツらだよ。その先頭に立ってんのは年端も行かねえ女の子だ。まさか知らねえとは言わせねえぞ」

「ぐっ」

１課長はぎりぎりと歯ぎしりをするが、そこへダンテスが、

「ルルシャさんよ、ここは言っといたほうがいいと思うぜ？　崩壊の危険があって誰も調べたがらなかった『憤怒の迷宮』を、アンタが命を張って調査したんだ。大ケガを負った課員もいた。モンスターがあふれ出てきて俺だって死ぬかもしれねえと思った。それだけ苦労して手に入れた……『英雄武装（ヒロイックギア）』の数々、使っていいのは第４課だけだろうと」

「『英雄武装』だと！？」

「しかも複数！？」

レフ魔導帝国の技術根幹にあるのは「九情の迷宮」で発見された

数々の魔道具だ。その中でも「英雄武装」と呼ばれるものは技術革新をもたらした。

ある「英雄武装」は重力に逆らって空を飛ぶ力をもたらし、ある「英雄武装」は空間を伝う情報伝達の力をもたらし、ある「英雄武装」は空間をねじ曲げる力をもたらした。「武器っぽい」ものも多いが、用途不明のため見かけ倒しのものも多かった。だが見た目はすごい。

これまでに「九情の迷宮」で発見された「英雄武装」と呼ばれる魔道具はたったの２０。それらは帝国が厳密に管理している。というのもいまだそれら「英雄武装」の分析が完全には終わっておらず、理解できない技術がいくつも使われているからだった。

つまるところ「英雄武装」は帝国の強みであり、核なのだ。

「……つ、強がりを。誰にも確認させていないのをいいことに、『英雄武装』とは大きく出たな」

と２課長が強がりを言うと、

「局長、私からひとつ提案がございます」

ルルシャはそれを無視して局長に向かって挙手した。

「う、うむ。言ってみなさい」

「この『英雄武装』を各国に対して公開しましょう」

「なっ！？」

衝撃が天幕内を走る。

「帝国内の研究者はレベルこそトップクラスですが人数が限られ、さらに一時避難しているこの場では設備も限られています。４課が

発見した『英雄武装』を、各国、キースグラン連邦、光天騎士王国、クルヴァーン聖王国に1点ずつ貸与し、研究を進めてもらうのです」
「バカな！？　帝国の至宝を貸与するなど！？」
「気が狂ったか！　いや、ヒト種族は最初から裏切る気だったのだ！」

レフ人たちが口々に叫んで立ち上がるが、ルルシャの背後にのそりと立ち上がったダンテスが腕組みして彼らを睥睨すると、声は小さくなる。だがそれでもざわつきは止まらない。

「あ、ええと、その、ルルシャくん。そういった刺激的な冗談は止めてもらってだね……」
「局長。私は冗談でも裏切りで言っているのでもありません。打算があるにせよ兵力を貸し出してくれている各国に対して、それくらいしなければいけないのではありませんか？　我らが長い年月を掛けても分析し切れていない『英雄武装』ですから、すぐにすべてを解析できるとも思われません。数か月、あるいは数年して国庫に戻ってから我らが研究し、そのすべてをあますところなく分析し尽くせばよいのです。我らの技術的優位性は揺るぎません」
「し、しかしだね、返ってくるかどうかもわからない……」
「そのために3カ国に同時に貸与するのです。1カ国でも戻ってこなければ、その国に圧力を掛けることができるでしょう」
「しかし3つとも返って来なかったら……」
「局長」

ルルシャが立ち上がり、ぐいと身を乗り出した。

「その3カ国がなければ、我らのこの一時避難所もすでになかった可能性が高いのです！　今は、一刻も早く新たな技術を手に入れて、情勢を立て直すべきでしょう！　そうでなければ長時間の迷宮滞在

もできず、レッドゲート封印に関する調査はさらに進まなくなります！」

局長はのけぞり、言葉を失うが、他の課長や大商会のレフ人たちは憎々しげにルルシャをにらんでいた。

「おやおや……」

とそこへ、

「この会議はレッドゲート封印を最終目的としているはずですが、どうも武装（ギア）の確保に精を出す方が多いようですな」

深いシワの刻まれた年かさのレフ人が天幕へと入ってきた。

その人物が何者なのかは、ここにいる全員が知っている。

諸外国とのやりとりを一手に担当する渉外局の局長だ。

飄々とした好々爺のように見える渉外局長だが、処世術に関しては誰よりも抜きんでた実力を持っていることを迷宮管理局長も知っている。

この会議に彼が姿を現したことは、自分にとって幸運なのか不運なのかがわからずごくりとツバを呑む。

「アバくん。客人を」

「はい。――どうぞこちらへ」

渉外局長の後ろに、付き人のように従っていたアバが連れてきたのは――ここにいる全員が目を瞬いた――ウサギ、だった。

巨大なウサギだ。

ウサギが帽子をかぶり、祭祀服を身につけている。

「え、皆様、わたくしめはクルヴァーン聖王国『祭壇管理庁』特級祭司であります、エル＝グ＝ラルンでございます。全員お初かと存じますがお久しぶりの方がいらっしゃったら失礼します。え、初めましての方は初めまして」

ウサギはぺこりと頭を下げた。

「わたくしめがここに参りましたのは、皆様に、え、『裏の世界』とのつながりについてお教えし、是非とも世界をつなぐ亀裂を破壊する手助けになればという思いからでございます」

7

★　レフ魔導帝国　天幕街　★

エルを知っていたのは――それも母の手紙でのやりとりだけだったが――ルルシャだけだった。そのルルシャであってもエルがどのような人物なのかは知らず、まさか巨大なウサギだとは思いも寄らないことだった。

突然の来訪者にふだんならすぐにも反発する人たちも、唖然として見守っていた。その沈黙を利用してエルは説明を続けた。

２つの世界の成り立ちと、空の赤い亀裂（レッドゲート）に関する情報は突飛な内容ではあったけれど、クルヴァーン聖王国では機密情報として扱われながらも真実とされていること、さらにはすでに彼らの尊敬する皇帝がすでに信用したということもあいまって、人々は黙って聞くしかなかった。

だが、レッドゲートに関する情報と、英雄武装（ヒロイックギア）の取り扱いは話が違う。いや――エルの情報提供に対する見返りで英雄武装が貸与されるという側面はもちろんあるのだろうが、それでも、自分たち帝国のものだと信じている英雄武装が他国に渡るということをどうしても許せないレフ人は多かった。

「……あのウサギのせいでうやむやにされたが、英雄武装を国外に持ち出すなどあってはならん」

迷宮攻略第１課の課長と、魔道具を扱う大商会の１つである「ロ

ロロ商会」の番頭は、会議の後に密会していた。

「……まったくですな。大体、第４課の持ってきた魔道具が英雄武装と呼ぶにふさわしいものであるかも確認できておりません。大方、見栄えのいい魔導武装（マジックギア）を発見し、それを英雄武装などとうそぶいておるのでしょう。あそこのお抱えの商会は『オンボロ商会』ですからな」

番頭は敵意剥き出しに「ムゲ商会」のことを「オンボロ商会」と言った。

この番頭はレイジたちが「畏怖の迷宮」で遭遇した「感情攻撃」を使うオートマトンを相手に死にかけ、骨身に染みて「感情攻撃」のすごさを知った。結果として「ムゲ商会」が手に入れたオートマトンを帝国金貨１，０００枚で購入したのだが――あれはダンジョンそのものが「感情トラップ」を仕掛けており、オートマトンに「感情攻撃」の機能は含まれていなかった。

言うなれば、銃が欲しかったのに、買ったのは銃の引き金だけだったのである。

こんなものは詐欺だと、金貨を支払うつもりはなくむしろ相手を詐欺罪で告訴するつもりだったのだが、なにがどうなったのか、渉外局副局長のアバと従兄弟である商会主は告訴を取り下げ金貨も支払うことになった。

――これは貴様の責任だ。

ぶん殴られた左頬の痛みを、番頭は今も覚えている。

このままではガラクタを買って商会に大損害を与えた番頭でしかない。「ロロロ商会」は規模も大きく若手も育ってきており、いつ番頭を交代させられるかわかったものではなかった。

番頭は、商会の仕事も人事もすべて取り仕切る、代表権のないＣ

EOみたいなものだ。
　レフ魔導帝国内では「ロロロ商会の番頭」と言えば尊敬を集めるポジションである。番頭はなんとしてでも名誉を挽回したかった。

「……番頭よ、商会では多少の荒事ができる者も雇っているのだろう？」
「……なにをなさるおつもりで？」

　不穏な気配を感じ取った番頭の声は自然と低くなる。

「……なに、そう警戒するな。第４課が手に入れた英雄武装を、我らが有効利用してやるのだ」
「……奪うということですか？　それはできましょうが、ここいらの天幕に置けばすぐにもバレましょう」

　関所前の広場には今や多くの天幕がひしめいており、周囲の丘にまで他国の軍が展開している。毎朝、関所の細い通路を通るための行列がレフ人の天幕街を貫いていた。
　英雄武装を一時的に隠すならまだしも、研究するとなるとそれなりの設備が必要で、設備がある場所は限られている。そこから機材を持ち出せばそれも怪しまれるので隠す場所がないと番頭は言ったのだ。

「……それについては考えがある。それで、『ロロロ商会』は乗るのか？　乗らないのか？」

　２０しか見つかっていない英雄武装。新たな英雄武装がもしもあり、それらが他国に流れぬよう守ることができたのなら国民は大喜びするだろう。自分たちこそが英雄だ。
　番頭の地位どころか、出資者が現れ新たな商会を立ち上げること

ができるかもしれない――そう思うと番頭の声は震えた。

「……もちろん、ご協力いたします。して、なにをどうすればよろしいのでしょう？」

にたり、と笑う第１課長と、番頭の密会は続いた。

それから数日後、激務のあまり短い仮眠を取っていたルルシャのところへ飛び込んで来たのはアバだった。

「起きたまえ、ルルシャ！」

水飴を止め、すっかり痩せたアバが――口寂しいのか楊子はくわえたままだったが――取り乱した様子でルルシャが寝起きする天幕の外で声を上げた。

「……どうしたのだ。まだ早朝じゃないか」

太陽が昇り始めた、という時間帯だ。朝食の準備をするための炊煙が上がるにも少し早い。

起きて外を歩いている人影だってほとんどなかった。

目をこすりながら出てきたルルシャに、アバは言う。

「落ち着いて聞いてほしい。……『ムゲ商会』の天幕に保管していた英雄武装が奪われたようなのだ」

「……」

寝ぼけたルルシャの頭に、衝撃が強すぎる言葉はなかなか浸透してこなかった。

「――あそこは特に気をつけて警備兵を配置しておいたのは君も承知のとおりだがね、手違いで警備兵のローテーションがズレて、30分ほど警備の空白時間ができてしまったらしい。その間にやられたのだと思う」
「ちょ、ちょっと待ってくれ。ムゲさんは。ムゲさんはずっと中にいたはずだ。彼は」
「頭を殴られ、血を流していた。だが無事だ。今は治療を受けている」

無事、と聞いてホッとはするものの、身体から抜け落ちる気力に立っていられなくなる。

「大丈夫かね」

あわててアバがルルシャの肩をつかむ。痩せたとしても筋力は衰えておらず、思いがけずたくましい腕にルルシャはすがるように、

「……英雄武装は、すべて？」
「ああ……保管してあった3つ、すべてだ」
「犯人は――」
「その調査はこれからだがね」
「――第1課長よ」

断定口調に、アバは眉をひそめる。

「ルルシャ。そういうことは安易に言わないほうがいいと思うが」
「そうに決まっている。あなただってそう思うだろう？　英雄武装の他国貸与に最も反対したのが彼で、第4課の戦果を奪おうとしたのも彼だ。大体、警備のローテーションがズレてその間に犯行を実

行できるなんて内部の人間しかいない」

アバとていちばん怪しいのが第1課長だということはわかっている。

だからこそ、第1課長がそんな危ない橋を渡るはずがないとも思っていた。

「捜索はすぐに始めるから」

そして――アバの直感は正しかった。

第1課長は迷宮攻略1課が所有するすべての天幕の調査を許し、そのすべてに怪しいところはなかった。第2課や3課も協力を申し出て、さらには各大商会も天幕の調査を許可したが――どこにも英雄武装は見当たらなかったのである。

国外へと運び出される物品は厳しくチェックされているが、英雄武装が運び出された形跡もなく、さらにはレフ人たちに広く情報を募集したが、怪しげなものを運んでいる――といった情報は上がってこなかった。

英雄武装は、いずこともなく消えたのだった。

8

僕とゼリィさんはなるべく早くレフ魔導帝国に着く馬車を選んで先を急いだのだけれど、帝国が「崩壊した」という情報が流れると乗合馬車の類は一斉に運行を取りやめ、今、動いているのはこれを商機と見た隊商（キャラバン）の馬車がほとんどだった。

帝国近辺の村で、ゼリィさんは隊商の馬車に乗っていくこととし――護衛を引き受けることで乗せてもらうのだ――僕は先に「走って」向かうことになった。馬が通れる道は限られるけど、自分の足なら行ける道も多い。

人間は意外とできることが多いのである。

「ほんとに大丈夫っすか、坊ちゃん？」

「はい。1日走ればたぶん着きますから」

「1日走るって簡単に言わないでくださいよ……」

うげぇ、と舌を出してイヤそうな顔をするゼリィさん。彼女もついて来られると思うのだけど、そこまで無理はしたくないらしい。

あと、

「ま、坊ちゃんが行って大体解決してくれるんでしょう？　あーしが行く必要ないっすわ」

なんて過剰な期待を持っているらしい。

いや……僕だってなにかできるっていう確証があるわけじゃないんだけどね……。

ともあれ、今日は夜も更けたので隊商の人たちと食事をすることになった。

村には酒場が1軒だけあって、今までもレフ魔導帝国に行く人たちが立ち寄る場所として使われていたみたいだ。もともと帝国は秘密主義だったので往来はさほど多くなく、商売にあまり影響は出ていないみたいだ。

２０席くらいあるテーブル席は、ゼリィさんがお世話になる隊商のメンバーたちでごった返していた。だけど出てくる料理はどこの村にもある焼いた肉と、どこの街でも買える安い酒だ。

長旅に疲れている人たちは、それでも美味い美味いと言って食べるので問題ないらしい。空腹は最高のスパイスってね。

「いやー助かったぜ。アンタみたいな腕利きをここで雇えるなんてな」

隊商のリーダーは２０代の女性で、赤く長い髪を後ろで無造作に縛っていた。前髪がはらりと垂れてくるとうざったそうにかきあげているが、右目の近辺に火傷の痕があってそれを隠す意味もあるようだ。

よく日に焼けていて、袖のないシャツを着ていた。そこから出ている二の腕はしなやかでしっかり筋肉がついている。

よく笑い、よく大きな声を出す、豪快な人だった。

「しかも女だってんだからいい。女の護衛はそういなくてよー」

「女性の護衛でないと苦労することもあるんですか？」

「おー、そりゃそーよ。女じゃなきゃわかんねーことも多いし。なー？」

「そっすよ、坊ちゃん。まあ、坊ちゃんがそれをわかるようになるのはもっと後のことでしょうねえ」

ぽんぽんと僕の頭を叩いてくるゼリィさんがうざったい。すでにお酒を飲み始めているのでウザ絡みしてくるのだ。

「坊ちゃん坊ちゃん言う割りにゃ、貧相な格好してんなー？」
「まあ、まあ、いろいろありまして」

僕だけこの村に残ってゼリィさんを待つ、というふうに言ってある。「走っていくんです」なんて言って止められたら面倒だし。
聖王都からの長旅で僕の格好はいよいよ薄汚れてきた。

「それはそうと、お姉さんはもう何度かレフに行かれているんですよね？　お話を聞かせてくれませんか？」
「お姉さん、だなんて呼び方は止めてくれよ。もうそんな年じゃねーし。かといってオバサンとか呼ぶんじゃねーぞ？　殺すぞ？」
「はあ」

めんどくさい。

「ユーアだ。名前で呼びな」
「はい。ユーアさん」
「いい子だ。――アンタ、レフになんかゆかりがあるんだろ？　だからゼリィをひとりでレフに送り込むと」
「……」

僕は無言を貫いた。余計なことを言うとボロが出るし。

「ま、人にはいろんな事情があらーな。言いたくなきゃいいよ」

それに黙っていると、勝手に本人が納得できるように解釈してくれるから楽である。
ユーアさんはジョッキの酒をぐびりとやってから話し出した。

「……そんで帝国の話だがな。今はあちこちから兵士が集まって殺気立ってるな。最新の情報だとさっきここの村長に聞いてきたんだけど、どうも帝国内で問題が起きているみてーだ」

「問題？」

「あそこは、『九情の迷宮』とかいうダンジョンを抱えていて、それを国ぐるみで攻略しているんだが――そこの攻略チームが、なんでも嘘っぱちの報告を上げて、つるし上げを食ってるとか」

僕とゼリィさんは視線を交わした。なんだそれ。

「なんつったっけなー。迷宮何課だか忘れたが、そこの女リーダーがやらかしたっていう話……」

「女リーダー！？」

僕はハッとした。迷宮攻略課で女性が課長を務めているのはルルシャさんしかいないはずだ。

「お、おー。坊主も男だな。女が好きか？　ん？」

「いや、そうじゃなくて。ルル――迷宮攻略第４課がつるし上げをされているんですか？」

「ま、そりゃ言葉の綾だがな。ただそこの女リーダーは捕まってるらしいぞ。で、そいつらに協力した冒険者も同罪だ、ってんで追っ手が掛かったらしいが……」

「――――」

協力した冒険者、それは「銀の天秤」に違いない。

僕は立ち上がり、外へと飛び出した。

「――ちょっ、坊ちゃん！　待ってください！」

後から追ってきたゼリィさんに、振り返る。

「僕は先行します」

夜も更けていた。ちりばめたような星空が広がっており、近くの森からは涼しげな風が吹いてくる。

明かりは心許ないけれど、【光魔法】を使えば走れないこともない。

「冗談でしょう……坊ちゃん。夜の森を行くなんて自殺行為ですよ」

「僕なら問題ありません」

「問題しかないっすよ!?　あのね、坊ちゃん。確かに坊ちゃんはお強い。でも、森をナメたらいかんですわ。未知の毒を持つ蜘蛛に噛まれたらどうします？　地面が陥没して洞窟に落ちたら？　大体、坊ちゃんはひとりなんですよ!?」

「――ゼリィさん」

僕は彼女を振り向かなかった。

「後日、合流しましょう」

そして走り出した。

「んも～～～坊ちゃんのバカァ～～～！」

ゼリィさんの叫び声も、心配も、後ろに残して僕は村を飛び出した。

（ルルシャさんが捕まった。それに「銀の天秤」のみんなは無事なのか？）

僕は走る。
ゼリィさんの心配は当然のことで、僕だって昼日中の全力と同等のスピードで行けるとは思っていない。
でも、それでも、今出れば昼前には帝国の関所に着けるはずだ。
この半日でなにが変わるでもないかもしれないけれど、それでも僕は走らずにはいられなかった。

★　「裏の世界」ダークエルフ集落　★

「……なるほど、よくわかりましたわ。レイジさんは先に行くと、そういうことなのですね？　私を置いて、先に行くと」
アナスタシアから発せられるオーラに、百人長とノックはたじろいた。
ふたりはレイジと別れてからもう一度「裏の世界」へと行った。
驚いたことにはあれだけ大量に置かれてあった天賦珠玉がすべてなくなっていたのだ。周囲は荒らされ、生え放題だった草木は壊滅状態だった。
それに背筋を寒くしながらも百人長とノックは二手に分かれて集落へと戻った――調停者に尾行されているかもしれなかったからだが、幸い、その気配はなかった。
戻ってみると喜色満面のアナスタシアが駈け寄ってきて、レイジがいないのを確認すると世界が終わったかのような絶望的な表情になり、そして事情をすべて聞いた今――大変なお怒りなのである。

「また、私を置いていくと、そうおっしゃったのですね？」
「い、いや、姫さんよォ、アイツはアイツで向こうで重要な用事があるとかで……」
「私はたいしたことない存在ですものね？」
「そうは言ってねェって！　なあ、ノックもなんとか言え――」
「すべてはハイエルフ様の御心のままに」

すでに土下座しているノックを見て、百人長は唖然とするのだった。

「出発します」
「……なんだって？」
「出発します。『一天祭壇』へ向けて」
「いや、でも準備が……」
「今すぐ！」
「えぇ～！？」
「かしこまりました」

驚く百人長とは裏腹に、ノックはすぐに立ち上がって仲間の元へと走り出した。

「マジかよ……」

この数日走り通しで、身体はフラフラだというのに――。

「百人長さん」
「ヒィッ」

柔らかな声でアーシャに話しかけられ、百人長は総毛立った。

「道案内、お願いしますわね？」
「……は、はい」
有無を言わせぬ微笑に押し切られ、百人長はうなずかざるを得なかった。
これが、ダークエルフたちを従える力か――と驚くと同時に、
（おい、レイジ。お前……次に姫さんに会ったときに言葉を間違えるなよ……どうなるかわかんねェぞ）
レイジに軽く同情するのだった。

9

★　レフ魔導帝国　天幕街　★

「どうなってんだよ、クソッタレ！」
「大きな声は出さないように。すぐにここにも人が来るだろうけどね、それが5分後なのか、1分後なのかは大きな違いだろう？」
アバの天幕へ逃げ込むようにやってきたのはダンテス、ミミノ、ノンの「銀の天秤」メンバーだった。
会議の後、ダンテスたちは関所を通過して帝国内に入っていった。迷宮攻略第４課のメンバーとともに戦利品の持ち運びに同行して3日、戻ってきたら――急にアバに捕まって天幕まで連れてこられたのだ。
来る途中で簡単に事情は聞いていた。
英雄武装が奪われたこと。研究に精を出していたムゲもケガを負ったが無事であること。ルルシャは被害者であるというのに「ありもしない英雄武装を実在するように偽り、帝国を混乱させた」と言われルルシャが捕縛されたこと。そして「銀の天秤」がルルシャを「そそのかした」のではないかということで兵士がダンテスたちを探していること――。
「英雄武装は確実に手に入れてたじゃねえか！　むちゃくちゃ言いやがる」
「怒るのはもっともだがね、今は君たちも姿を隠したほうがよかろう」

「お前、ルルシャが捕まったってのになに冷静ぶってる！」

怒りにまかせて言葉を発したダンテスは、気がついた。

アバの手が握りしめられ、拳が震えていることに。

「……冷静であれと自らに言い聞かせていないと、今にも暴走しそうでね。君から見て冷静のように映るのならばよかった」

「アンタ……」

アバは、自分が思っていた以上に熱い男だったのかとダンテスは初めて知った。

「……すまねえ。いきなりのことでカッとなっちまった」

「いえ」

「それよりもこれからどうするべきか考えましょう」

ノンが言うと、アバは、

「ルルシャが捕まったとは言っても、これまでの功績もある。だからすぐにどうこうはならないだろう。聡明な皇帝陛下に英雄武装を持ち帰った記録を吟味していただければいずれ解放されると見ているね」

「その間、私たちは姿を隠したほうがいいと？」

「そうだね。君たちは帝国国民ではないから、守り切れないかもしれない」

「――おい。そんなことより英雄武装を探したほうが早いんじゃねえか？」

ぽん、と手を叩いてダンテスは言ったが、アバは首を横に振った。

すでに天幕街の捜索は終わっていたのだ。

「そんじゃどこにいったんだよ」
「それがわからないから困っているのだね」
「――あ、そう言えば」
とそこへ、それまで黙っていたミミノが口を開いた。
「『憤怒の迷宮』から戻るとき、ちょっと危ないけど街の真ん中らへんを通ったべな？」
「ん？　ああ、そういやそうだな。レッドゲートからモンスターは落ちてくるが、街を突っ切ったほうが近道だからなあ」
「そのとき、ダンテスは見なかったべな？」
「ん、なにをだ？」
「冒険者だ」
ミミノたちは冒険者であり、冒険者を見間違うことはほとんどない。逆に帝国兵士だったら誰が誰だかわからないので見間違えることばかりだろうが。
ミミノが言うには、建物の陰から陰へとこそこそ移動している５人ばかりの冒険者がいたということだった。ヒト種族の冒険者がもしもいれば、このあたりだと非常に目立つ。だから覚えていた。
「それがなんなんだ？　どっかが雇ったんじゃないのか」
「そりゃ、そうだべな。雇い主がいるんだと思う」
「？　なにが言いたい？」
「冒険者が単独で、雇い主といっしょでもなく帝国内をうろうろしてるのは怪しいべな」
「そりゃ……そうだが」
「そこで、英雄武装だ」

ミミノは人差し指をピンと立てた。

「天幕のどこを探しても英雄武装は見つからなかった」

ピンと中指も立てた。

「国外に運び出した記録はない」

ピンと薬指を立てた。

「だから――英雄武装はない。だな？　だけどもう一箇所隠せるところがあるべな」

「！」

ダンテスだけでなく、アバやノンもわかったようだ。

「まさか――関所を通って、戦闘地域である街中に隠したってことか？」

「そうだべ」

「んなバカな。大体、ただ隠すだけにしても危険過ぎるだろう」

「でもメリットはある」

アバが口を挟んだ。

「街中なら、ここにはない研究設備がある。おおっぴらに研究までできる！」

ぐっ、と両手を握りしめたときだった。

「――アバ副局長、今、天幕内にどなたかいらっしゃるのですか？」

外に複数の気配があった。日が差すシルエットは兵士たちのそれだ。

「いや、ひとりだ」

あわててウソを吐いたアバは、ダンテスたちに、

（天幕の反対側を切って脱出するといい。急いで）

（わかった）

指示を出す。

「――現在、犯罪者とおぼしき『銀の天秤』という冒険者を追っております。中を確認させてもらっても？」

「すまないが今着替えている。すぐに出るから待っていてくれ」

アバが時間を稼いでいる間にダンテスは天幕の奥へと行き、出やすい場所を探す――。

（そうだ、ここを離れる前にレイジくんのことだけ確認しておかなきゃ）

ミミノはひとり、魔道具を確認し――絶句した。

皿のような銀製の金属が、真っ二つになっていたのだ。

（これは、なに？　レイジくんはどうなったべな！？）

すると彼女の腕がつかまれる。

（早くしろ、ミミノ！）
（だけど、ダンテス。レイジくんの――）
（いいから今は逃げるぞ！）

引っ張られ、先に出ていたノンがまくってくれている幕をくぐってミミノは外へと出た。

こうして、レフ魔導帝国の領内にある「九情の迷宮」、その攻略に尽力し多大な功績を挙げたはずの冒険者パーティー「銀の天秤」は、追われるように逃げ出すこととなった。

10

ゼリィさんの言ったとおり、夜の森はひどい道だった。
いくら【夜目】の天賦を学習していたとしても光がまったくないところでは機能しない。だから【光魔法】を数秒おきにフラッシュのように焚けば、魔力も節約できるし【森羅万象】の完全記憶能力で問題なく進める――はずだった。
だけど実際には、

「うばあっ！？」

次のフラッシュを焚いた瞬間、目の前にコウモリがわっさーと飛んでいたり、

「うひいっ！？」

光の影になった場所に思いっきり凹みがあって転びそうになったりする。結局はチッチッチッと舌打ちをするのも併用しつつ、音の跳ね返りを【森羅万象】で分析しながら周囲の地形を把握しつつ走るという――そりゃ、まあ、消耗しますよね。
おかげで大きなケガもなく森を走り抜けられたのだけれど、身体中どろどろだった。

「でも……ようやく着いた」

草原が広がっていて、小高い丘が４つ並んでいる。その３つは柵で囲われていて兵舎が設営してあった。
だけど兵舎の数に比べて人気が少ないのは、多くが戦闘に出払っ

ているからだろう。

「――あれか」

僕は額にくっついた葉っぱをベリッと剥がして歩き出す。彼方の空はいまだ暗雲に包まれていて、赤色の亀裂が空に入っている。【視覚強化】でも少ししか見えないけれど、モンスターはいまだに大量生産されて空から降っているようだ。

「ええと、まずはどうしようかな……『銀の天秤（みんな）』と一度合流したいけど。ゼリィさんやユーアさんの話だと、行商人は1箇所に集められてそこで取引してるんだっけ。そこに行けば話ができるかな――」

こっそり忍び込むこともできるかもしれなかったけど、この日中だと見つかってしまう可能性が高い。だったら正攻法で正面からいったほうが……とか考えながら歩いていたのがいけなかった。

「そこの者、止まれ」

背後から鋭い声が聞こえた。

振り返ると、馬に乗った5人が僕を見据えている。

みんな同じ装備で、銀色の胸部鎧（ブレストプレート）はよく磨かれており、肩や肘、膝から足首に掛けて同じ素材のプロテクターが使われていた。

白と赤と金色をベースにした戦闘服は一分の隙もなく整っており、それらは、

（――光天騎士王国の騎士だ）

彼らの身分をわかりやすく示していた。

戦場にあってもとにかく装備品の手入れをする。「騎士たる者、死に様さえも美しく」というのは彼らのモットー、というより国是ですらある。

現に5人の中にはヒゲを蓄えている人もあったけれど、そのヒゲは毎日整えているのだろうきっちりとしていた。

僕に声を掛けたらしい人物は5人の先頭にいた。

深い緑色をした長髪を後ろで縛っていて、涼やかな目元の瞳もまた緑。ほっそりとしたアゴや高い鼻は彼に女装させたら抜群に似合いそうだ。

まあ、訓練や行軍のせいだろう、肌は日焼けしているので女装するなら化粧しなければならないけど。

「その格好、どこぞの間者か」

女性に――それも美人――見間違われそうな騎士は、年齢も10代とおぼしい。その彼が誰何の声を上げて、彼の年齢の倍くらいはありそうな男たちが沈黙しつつ腰の剣に手を掛けているのは、彼がこの5人の中では位が上だからだろうか。

「……このようなみっともない格好でありますこと、お目汚しをどうぞお許しください。夜通し森を走り抜けましたので」

僕はその場に片膝を突いて頭を垂れた。エヴァお嬢様の護衛時代に学んだ礼の取り方だ。

クルヴァーン聖王国式の仕草が堂に入っていたからだろう、「ほう」とヒゲの騎士が小さく声を上げ、若い隊長が小さく手を挙げるのが影の動きでわかった。

警戒が解かれる。

「して、貴様は何者か」

男にしては透き通った声で、重ねてたずねられる。【森羅万象】がなかったら女性だと勘違いしていたかもしれない――だいぶ中性的な見た目だから。

僕は一瞬、どう名乗るのが正解か考えた。「銀の天秤」の名前は彼らも知っているかもしれない、なんせ「九情の迷宮」のひとつを踏破した冒険者パーティー名だから。でも、ユーアさんが言うにはルルシャさんは捕まり、「銀の天秤」もマズい立場にあるという。

なら、

「クルヴァーン聖王国、ミュール辺境伯から、スィリーズ伯爵への急ぎの使いでございます」

おふたりの名前、借りちゃいます。

「……ミュール辺境伯？」

気配が変わった。

……あれ？　もしかして要らないこと言った？　あるいは「すごいじゃん」っていう驚き？　あー、もう、辺境伯だからどっちもありそうだなあ！

「……それを証明するものはあるか？」

「はっ。剣を外すので、どうぞ警戒なさいませんよう」

僕は腰のベルトに固定した短刀を外し、地面に置いて3歩下がった。

ミュール辺境伯からもらった剣はだいぶガタが来ていたけれど、辺境伯家に2日間厄介になっていたとき、新品をくれたのだ。辺境伯は気前がいい……と思っていたら「我が家のためにここまで働い

てくださったのですから、当然のことです……」と申し訳なさそうにミラ様が言っていたっけ。
どうやら、渡せるお金はないけど、渡せる武器はいっぱいあるということで。

「ヴィルヘルム様、ここは私が」
「うむ」

ヒゲの騎士が馬から降りると、僕が地面に置いた短刀を検める。
最初の短刀はきらびやかなものだったけれど、今回のは簡素な飾りだった。「お前なら持てるだろう」と刀身が太くなり、頑丈になったぶん重いのだけど。
いわば「質実剛健」を地で行くような武器で、柄の部分にひっそりと「辺境伯位ミュール家」の文言が彫られてある。
その文字を探すのに苦労していたようだけれど、ようやく見つけると、

「ううむ、この『名前などどうでもいい』と言わんばかりの文言は、確かに『辺境の暴君』ミュール家のもので間違いないでしょう。第一、好き好んであのミュール家の名前を騙るとも思えませぬ。露見すれば、ミュール家の暴れ馬たちが地の果てまでも追いかけてきますからな」

……辺境伯、なんかすごい言われてますよ？
確かにあそこのムキムキゴリラ――失礼、家臣団の皆様は武器と見るや振り回し、新手と見るや「手合わせ！」「手合わせ！」ってうるさかったよね……。
魔法なしで戦ったら僕に勝てる目はなかったと思う。大体、筋肉の鍛え方が違う。

「ほう。すると、その格好では想像もつかぬほど、貴様も手練れということか？」

きらり、と中性的な男子ヴィルヘルム様の目が光った。

……ん？

「左様ですな。あの家が筋肉のない子どもをただの使いとして出すわけがありませぬ。森を抜けてきたとさらっと言いましたが、夜の森を抜けるなどただの子どもにはできませぬ」

さっきから子ども子ども言われるのが気になるのだけど、そんなことより雲行きが怪しくない？

「……ということは、だ」

返された短刀を身につけている僕を、じっと見つめるヴィルヘルム様の目が怖い。

ヒゲの騎士に、こう問いかける。

「ヨハン。この者は、何者か」

「……短刀を見ただけではわかりませぬな」

――はい？

「そうか、そうか。なれば己の手で自らを証明するしかあるまい」

「いや、待ってください。さっき確認しましたよね？」

「我ら光天騎士王国の騎士が、ウソを吐いたと申すかッ！？」

うお、ヒゲの騎士がツバを飛ばしながら怒鳴ってきた。怖い。

「そう、声を荒げるではない、ヨハン。――そこの者。ミュール辺境伯家の者であれば相当の実力者であろう。つまり、この私と手合わせをし、力を見せてくれればそれでよい。スィリーズ伯爵の元へ責任をもって連れて行こう」

頭が痛くなってきた。こいつも辺境伯と同じ「手合わせ！」「手合わせ！」の人か。グループ「辺境伯」でタグ付けしておこう。

「……いや、そんなヒマはないのですが」

「自信がないと？　ああ、いや、貴様は夜通し森を走ったと言っていたな。であれば我らが光天騎士王国の寝台を貸そう。飯も食っていくといい」

「いや、ですから、僕は先を急いでいるのです」

「我ら光天騎士王国の申し出を断るのかッ！？」

ヒゲの騎士がほんとに鬱陶しい。

「……じゃ、もういいです。今からやりましょう」

僕は膝をつくのも止めて立ち上がった。

「おお！　そうか。それでは私が――」

「いやいや、ヴィルヘルム様、ここは私が」

「なにを言う。あのミュール辺境伯家の者と戦えるチャンスぞ！　ここは私のほうが」

「いや、すでに馬を降りている私が」

「こらヨハン、お前は辺境伯家の剣を触ったではないか」

やいのやいの言い出している。

はぁ～～～～辺境伯家の名前を出したのは失敗だったな……。

「早くしてください。一度に全員掛かってくればいいでしょう？」

僕が言うと、ぴたり、と全員の動きが止まった。

「……今、なんと？」

ヴィルヘルム様の目がぎらりと光った。

「さっさと来いと言ってるんです。それとも光天騎士王国の人たちは、たったひとりの子どもを相手に怖じ気づくのですか？」

右手を前に出し、くいっくいっ、と僕は手招きした。

「開始の合図を。こっちはいつでも臨戦態勢なんですよ？」

１０（後書き）

ナンバリング間違ってました。ご指摘くださった方ありがとうございます。内容的には問題なかったようです。

11（前書き）

健康診断のため本日まで断酒中。手が震える……（末期）。

11

寝不足はよくない。人を短気にさせるから。

「――我ら光天騎士王国を侮辱するかッ――ぶべっ」

すでに馬を降りていたヒゲの騎士、ヨハンという名前っぽい人が腰の剣を引き抜いた――そのとき、彼の身体に【風魔法】をぶち当てて吹っ飛ばした。

鎧が、魔力を散らすような設計になっていたので衝撃は相当に軽減されるみたいだ。なので、ヨハンさんの身体が地面に落ちる前に3発ほど撃ち込んで確実に意識を奪っておく。

あー、ちょっとやり過ぎたかも……と一瞬の後悔。

「こいつ、魔法使いか。発動が相当に早いぞ、馬を降りろ！」

ヴィルヘルム様が言いつつ馬から飛び降りると他の騎士も同様に降りていく。

判断が早い。確かに馬は機動力が高いけど、魔法使いを相手にした場合は小回りがきかないし馬に魔法が当たると落馬の危険もある。助走がつけられる場所ならまた違う使い道もあるんだけど。

「ミュール辺境伯家に魔法使いとは、時代は変わるのだな！」

女性の騎士は2人いて、その2人が同時に突っ込んで来る。

「いったい、あの家になにを期待しているのかはわからないけど――」

「ッ！？　ふたりとも止まれ！」

ヴィルヘルム様が言ったけれど遅かった。
すでに最初のひとりが突きを放っており、僕はギリギリのギリギリまでそれを見極めてから半身を引いてかわす。
直後にふたりめが来ているのでひとりめは無視してそちらの対応だ。
剣は細く突きに特化したものだ。

「おおおおッ！」

服が裂けて薄皮一枚切られる。だけど僕はふたりめの腕をつかみ、そのままぐるりと身体を回転させて一本背負い。

「なっ――がはっ！」

受け身を取る間もなく力一杯地面に叩きつけた。

「くっ」
「遅い」

ひとりめは振り返って次の攻撃に移ろうとしていたけど、

「わあっ！？」

その背中にキックを放つと、前のめりに転んだ。

「……」
「ま、まだまだ！」

顔を泥だらけにした女騎士が立ち上がった――ところへ、

「よせ、ハンナ。トドメを刺されなかっただけで、手合わせとしてはお前はもう負けだ」

「で、ですが……」

「騎士たる者、言い訳をするな」

「……はっ」

ハンナ、と呼ばれた女騎士は渋々うなずくと地面に叩きつけられた仲間の騎士の介抱に当たる。

なるほど……ヴィルヘルム様はちゃんと見てるんだな。

「……それで、まだ続けますか？」

この短い時間でわかったことがある。

騎士たちは、辺境伯の家臣団と比べると数段劣る。最初の【風魔法】だって辺境伯家の人たちは食らって吹っ飛んでも空中で姿勢を直し、追撃が飛んできたら腕ではたき落としてたもの。「客人～～～、なかなかえげつねえこと、やりますねえ？」ってニタリと笑って。ヤバ、思い出すだけで身震いしちゃった。

女騎士との戦いもそうだ。【補助魔法】もなにもなしの僕の力では、筋肉ダルマの家臣団には攻撃が通らなかった。でも騎士たちは簡単に投げられ、簡単にやられた。

「すさまじいな、これが『辺境の暴君』と恐れられるミュール家の力か……」

いや、僕、それは知らないんですけどね？　ここで否定したら自己矛盾してややこしいことになるので言えないんだけど。

大人しく引き下がってくれるのかと思いきや、ヴィルヘルム様は

自分の剣をすらりと引き抜いた。

「……せめて、貴様の剣技を見てみたい」

魔法、素手で負けたのが騎士としてのプライドを傷つけたのだろうか。

「それで納得してもらえるなら」

剣技、と言われると全然得意じゃないんだけど……と思いながら短刀を抜く。僕は以前、アッヘンバッハ公爵領の領都で「腕を見せろ」みたいに言われて、冒険者ギルドの訓練官であるヨーゼフさんに剣を見せたことを思い出す。

あのときは【剣術】スキルに振り回された。

だけど今は、天賦は使いこなしてなんぼだとわかっている。

ちゃんとトレーニングを受けたわけではない僕は、生き延びる術を学んできた――だからこそ剣技と言われるとだいぶ微妙ではある。

「――キエエエエエッ！！」

「！！」

距離は十分にあった。

だけどその距離を、一瞬で詰めて――まるで瞬間移動のように――ヴィルヘルム様の剣は僕のすぐ鼻先にあったのだ。

（殺す気かよッ！！）

ぐいと顔を曲げたけど頬が斬られる。熱い線が走ったような感覚に僕の思考も沸騰する。

【回復魔法】を無意識で使いながら、すぐそこにいる彼の身体に短

刀をねじ込もうと――。

「そこまでッ！！」

がん、と頭を殴られたような大声に、僕の身体は止まった。それは僕だけでなくヴィルヘルム様もそうだった。突っ込んできた勢いはどこにいったのか、ぴたりとその場に止まったのである。

なにかの天賦だ――そう思いつつ、ヴィルヘルム様からは距離を取りながら。声を発した人物へと視線を向ける。

「レフェリー様……」

ヴィルヘルム様のつぶやきに、審判員（レフェリー）？　と僕が内心で首をかしげていると、

「ヴィルヘルムの初撃をかわされた時点で勝負はあった。双方、剣を下ろせ」

総白髪をオールバックでなでつけ、もみあげからアゴまでヒゲがつながっている老騎士が馬を飛ばしてこちらへとやってくるのだった。

その人は光天騎士王国の、今回の遠征部隊を率いる副将軍だった。公正な剣の試合において「審判」を務めることから騎士たちからは「レフェリー様」と呼ばれているらしい。本名はオットーと言うらしいけど、僕としてはそんなことはどうでもいい。

（声の能力……【声術】みたいなのがあるのかな？　聞いたことな

いな。まあ、特殊な天賦はいっぱいあるからね）

僕が警戒を解かずに身構えていると、ヴィルヘルム様を下がらせ、レフェリー様は馬上で僕と向き合った。

「すまぬな、客人。ヴィルヘルムは悪い男ではないのだが強者と見ると挑みたくなる気質があってな」

「……」

「そう身構えないでくれ」

「１０騎で囲まれれば誰だって身構えますよ」

レフェリー様は１０騎の騎馬を連れてきており、それらは僕を囲むように展開していた。

「ああ、これらは目隠しじゃ」

しゃがれた渋い声でレフェリー様は言う。

「目隠し？」

「この草原で客人は目立つからの、こうして騎馬で囲んでいるというわけだ」

「……」

「ふうむ、まだ警戒されておるか。クルヴァーン聖王国の内乱の渦中にあり、年少ながらその実力を示したレイジ殿であるとわかっているゆえ、ワシは単に『客人』として迎え入れたいのじゃ」

「！」

バレている、僕のことが？

どうして――と思いつつ、確かに僕がクルヴァーン聖王国で起こしたあれやこれやは特に隠してはいない。聖王宮でのことは秘匿さ

れているだろうけど、城下のウロボロス戦は吟遊詩人が歌っているくらいだ。

「その驚きようは、やはりレイジ殿であるな」

「……参りましたね、カマをかけられたんですか」

「確証はなかったゆえ、失礼した」

ひらりと、レフェリー様は馬を降りた。

「このまま向かってもその風体であれば魔導帝国の『月下美人』には近づけまい。ここ数日は『英雄武装消失騒ぎ』で警戒はさらに厳しくなっておるからな。レイジ殿がスィリーズ伯爵に会いに行くのであれば、我らを通せばいくらでも簡単になろう」

「む」

ほんとうは伯爵に会うんじゃなくて、ラルクやレッドゲート問題のほうなんだけど――僕の素性を知っていれば「伯爵に会う」と判断するよな。ヴィルヘルム様との最初の会話を知っているわけじゃあるまいし。

レフェリー様はにこやかに手を差し出す。

「それに、情報を仕入れておいても無意味ではあるまい？　客人」

僕は渋々、その手を取った。

老獪な人は苦手だ……どんどん話を先回りされる。

12

オットー様――レフェリー様に連れられて光天騎士王国軍の駐屯地に入っていくと、そこにいるありとあらゆる騎士たちは、どのような作業中であっても、訓練中であっても、すべての動きを止めてレフェリー様を向き、直立不動、右肘を肩の高さまで上げて拳を右胸につけるという敬礼のポーズを取った。

レフェリー様が「楽に」と言うと彼らはポーズを崩して元の作業に戻るのだけれど、そのとき僕をちらりと見て、「なんだこの小汚い少年は？」という顔をした。

光天騎士王国はその名の通り「騎士」の国だ。これは「ナイト」の称号の話ではなくて実際に「馬に乗れる兵士」という意味の「騎士」であり、光天騎士王国の軍属はすべて馬に乗って戦えなければならない。

もちろん騎士には階級があり、僕は詳しくないけれどレフェリー様なんかはトップクラスの騎士なのだろう。

「楽に。楽に」

と言い続けて――3桁はいったんじゃないだろうか――僕はレフェリー様のものらしい天幕へとやってきた。大きなテーブルに簡素なイスが10あるだけの、さっぱりとした天幕だ。

イスを勧められて座ると、なんだかどっと疲れが出てきてその場で眠ってしまいたくなった。だけど最初に絡んできたヴィルヘルム様たちが天幕の入口にぞろりと突っ立っているので気を抜けない。

「前線ゆえ、もてなしはできないのだが。許してくれたまえ、客人」

「長居をする気はないので構いません」

僕が言うと、「レフェリー様の申し出を断るだと……？」と外野の人たちが殺気立つ。ほんとうにめんどくさい。

「スィリーズ伯爵は特別に『月下美人』に滞在であるというからな、使いを出してある。返事があるまで待てばよかろう」

「その間、ここで事情聴取ですか？」

「暇を持て余した老人のおしゃべりに付き合ってくれても罰は当たるまい？」

レフェリー様は魔道具で沸かしたらしいポットを持ってくると、そこからカップに茶を注いだ。えっ――と思ったけれど、そこから出てきたのは緑色のお茶だ。香りも日本茶のそれと同じだった。

そしてなにより【森羅万象】の分析があれは日本茶だとしている。

「クルヴァーン聖王国で飲まれる茶とは違うが……我が国の茶もなかなかよいものだよ」

ティーカップに注がれているのがミスマッチだけれど、僕の前に差し出され、湯気が立つその緑色のお茶。細かい茶葉が舞っている。僕はごくりとつばを呑んで、ティーカップを受け取った。

「この暑い日に熱い茶など、と思うかもしれないが、日陰に入り熱い茶を飲むのはよい。すっと汗が引くよ――ふむ？　そんなに気に入ってくれたかね」

ほどよい熱さだったそれを一気に飲み干すと、鼻から清涼な香りが抜けていくのを感じた。ああ……緑茶だ。まさかこんなところで出会えるなんて。

「もう一杯いただいても？」
「もちろんじゃよ」

注がれるのを待って、僕は半分ほどまた飲み干す。
生きるのに必死だったからか、過酷な日々を過ごしたせいか、こちらの世界での生活が長かったせいか――日本食に対する郷愁は不思議とあまりなかったのだけれど、緑茶を飲んで、急激に和食が恋しくなった。
日本人の体臭は醤油のニオイだなんて話も聞いたことがあったけれど、醤油味のものを食べたいなあ……。

「十分なおもてなしをいただきました」

僕が緑茶を喜んで飲んだことで、レフェリー様もいくぶん気持ちが和らいだようだ。お茶っていいよね。
レフェリー様は僕の向かいに腰を下ろすと、

「ミュール辺境伯は息災か？」
「あの方は殺しても死なないほどに元気ですよ。ここに来たいとも言ってましたし」
「正直に言って、どうじゃね？　ヴィルヘルムやその他の者と、辺境伯との力の差は」
「……」
「率直に言ってくれて構わんぞ。それで気分を害したり、スィリーズ伯爵への橋渡しをするという約束を反故にしたりはせん」
「……はあ。そうですね。申し訳ありませんが、全然足りないかと」
「ほう」

レフェリー様は眉をひょいと上げて驚いたような様子を見せたが、天幕の入口に並んでいる人たちからまた殺気が飛んできた。気分を

害したりしないんじゃないんですかねえ……。
　するとレフェリー様が外野の人たちに言う。
「これ、ワシの顔に泥を塗る気か。大体、完膚なきまでに負けた相手にそのように怒って見せたところで負け犬の遠吠えであろうに。――すまぬな、レイジ殿。彼らは優秀ではあるのだがやはり国外で戦った経験がほとんどなく、井の中の蛙であったのよ。今回のことはいい薬になったに違いない」
　それは別にいいんだけど、関係ない僕をダシにしないでほしいと切に思います。はい。
「しかしレイジ殿はすさまじいな。あのヴィルヘルムの突きをかわせるとは」
「そもそもかわさなかったら僕死んでましたよね？」
「……ワシの制止の声はわずかに遅かったからのう。ヴィルヘルム、こちらへ来なさい」
　ムスッとした顔でやってきた中性的な美形。ムスッとしても絵になるのだからイケメンはズルいと思います（スィリーズ伯爵に続いて2人目のズルい枠）。
「謝罪をしなさい」
「……しかし、レフェリー様」
　言いかけた、ときだった。
「騎士たる者ッ、言い訳をするなァァッ！！」
　立ち上がったレフェリー様は拳をヴィルヘルム様の頬に叩きつけ

た。
　年寄りだ老人だと言っても、僕の目はごまかせない。レフェリー様は服の下に鋼のような筋肉を持っている。そしてその拳の大きいこと。鍛錬されてはいるもののいまだに若く、長身のヴィルヘルム様は一瞬宙を浮いて剥き出しの地面に倒れ伏した。
　これにはみんなぎょっとしたようだったけれど、誰も動けなかった。

「も、申し訳ありませんでした……」
「ワシに謝ってどうする。謝罪するべきはレイジ殿だ」
「……申し訳、ありません」

　殴られた頬を押さえながら、よろよろと立ち上がり、頭を下げられる。地獄のような沈黙がやってきて僕もなにも言えなくなる。
　いや……そんなことされましても。どうしろっていうのよ、この空気。

「謝罪を受け入れてくれますかな」
「はい、受け入れます」
「よかったな、ヴィルヘルム。――下がっていなさい」

　ふらふらと歩いていったヴィルヘルム様は、またも天幕の入口で直立不動になった。治療しないんだ。そこにいるんだ。

「まったく、レイジ殿が手加減して戦ってくださったというのに、それにも気づかず相手を殺すつもりで『瞬歩』を使うとは」

　レフェリー様の言った「手加減」という言葉に再度外野の人たちはざわざわする。
　手加減、というか、殺したり大ケガ負わせたら後腐れができるか

らしなかっただけではあるんだけどね。そこまでもうわかっていたんだな。

この人、あの謎の声のスキル――おそらく天賦だと思うけど――といい、自身の肉体といい、かなり強い。

でも【森羅万象】できっちり学習できたはずだから後で確認しておこう。いざってときに使えそうだ。あとヴィルヘルム様の「瞬歩」？　とかいうのも。

「しかしのう、スィリーズ伯爵もなぜレイジ殿ほど優秀な護衛を手放してしまったのか。そうじゃ、レイジ殿は光天騎士王国に来る気はないか？　ワシが身柄を推薦しよう。そうすれば騎士になるのはもちろん、高い役職にも就けるぞ」

「いえ、それはお断りします」

「それは冒険を続けたいからかね？」

「はい」

と言ってから、ハッとした。

「そうか。レイジ殿はやはり冒険者パーティー『銀の天秤』で活動していたレイジ殿と同一人物なのじゃな」

なにげないふうにレフェリー様は続ける。だけど、

「しかし妙じゃの。『銀の天秤』の少年は、レッドゲートの向こうに吸い込まれたと聞いておったが……こうして目の前にいるわけであるし。どういうことかね？」

それはすでに確信に満ちた口調だった。

この人は最初から知っていたのだ。僕が「銀の天秤」のメンバーであり、「辺境伯の使い」であることなんて「ウソ」なのだと。

キャラバンのユーアさんですらルルシャさんに協力した冒険者がいることを知っていて、彼らが追われていると言った。であればここにいる誰もが「銀の天秤」がレフ魔導帝国に追われていることを知っているはずだ。

先ほどとは違う空気が僕の背後にいる人たちの間に流れる。妙な動きをすれば一斉に襲いかかってきそうな、剣呑な空気だ。

（レフェリー様が老獪な人間だとわかっていたのに……この人は最初から、僕の口から「冒険者」だと言わせるためにここまで話を持っていったんだ）

やられた、という苦い後悔とともに、考える。

どう答えるべきだろう、僕は？

13

選んだ答えは――。

「はい。僕は『銀の天秤』のメンバーのレイジでもあり、レッドゲートに吸い込まれた人間でもあります」

認めることだった。

僕の迷いがさほどなかったことに、レフェリー様は少々驚いたようだった。

「……レイジ殿は知らないのかね。今、『銀の天秤』はレフ魔導帝国に追われておるのじゃよ」

「追われていることは知っていますよ。それにもうひとつ知っていることもあります」

「なんじゃね、それは」

「『銀の天秤』は完璧に潔白であるということです」

「――――」

この言葉は予想外だったのか、レフェリー様の目が見開かれた。

「……くっ、くくっ」

しばらくして、こらえきれない、というふうに笑い出した。

「くくくっ。そうか、そうか……くくっ」

「レフェリー様……？」

その様子の変化におずおずとたずねるヴィルヘルム様。
彼へと向かって右手を開いて見せたレフェリー様は、
「お前たちは、もう下がれ。――いや、ヴィルヘルムだけ残れ」
「しかし……」
「これは命令だ」
すると「ハッ」という応諾の声がそろい、ヴィルヘルム様をひとり残して全員敬礼の姿勢を取ると回れ右してどこぞへと消えていった。
「すまなかったな、レイジ殿」
「なにに対しての謝罪ですか」
「いや……レイジ殿を試したわけではないのだ。あそこに残っていた騎士たちはワシの身を心配してのこと。けっしてレイジ殿に重圧を与えようとしていたわけではない」
「……僕が無害だとわかったと？」
「無害どころか！」
ぱん、と自らの膝を叩いてレフェリー様は声高に言う。
「己の所属を偽らず、さらには仲間を心の底から信じるその姿！まさに騎士道のあるべき姿ではないか。久々にすばらしい男に出会えたものだとワシは感動したのじゃよ」
「……は、はあ」
「必ずスィリーズ伯爵の元へ連れて行こう――もとよりそのつもりではあったがね。使いが戻るまで1時間か2時間はあろうから、しばらく休まれるがよい」
僕は沈黙をもって返した。なぜかと言えば、出会い頭に戦闘にな

り、天幕へと連れてこられては問答が始まった。こんなところで「わかりました！　寝ます！」なんて言えるわけがない。

「ワシとて、ほんとうはもっと話を聞きたいのを我慢しておるのじゃ。レッドゲートからどう帰ってきたのか、とかのう？　じゃが聞かぬのは、それはレイジ殿のためを思ってのこと。レイジ殿の身はワシが必ず保証する。寝不足の身体では満足に戦えまい？」

確かに、光天騎士王国の利益だけを考えたら今この場で僕から情報を引き出そうとするよね。それをしないで、休んでていい、と言ったのは僕への配慮なのだろう。

「……そういうことでしたら」
「ヴィルヘルム、案内しなさい」
「ハッ」

ヴィルヘルム様に連れられて僕は近場の天幕へと案内された。そこは清潔な寝台がひとつ置かれているだけのもので、周囲に人気はなかった。

無言で一礼するとヴィルヘルム様も遠ざかっていく。僕は寝台に腰を下ろすと、そのままバタンと後ろに倒れた。あ～～、これはマズいですね。さすがに疲れましたね……なんて思っていると、気がついたら寝ていた。

僕もだいぶ図太くなってきたらしい。

「……やっぱりおかしいのでは？」
「少年騎士もいるので、おかしいということはありません」
「僕が騎士なんて……」

「この期に及んで怯むのですか、レイジ殿ともあろう方が」

中性的なイケメン、ヴィルヘルム様がちくりちくりと嫌みを利かせてくる。

今、僕がいるのは魔導飛行船「月下美人」の真下だった。

仮眠（爆睡）していた僕はヴィルヘルム様に起こされ、スィリーズ伯爵と連絡が取れたことを知った。ただ伯爵との面会はあくまでも「光天騎士王国の外交の一環として」だった。そのため武装を解いたヴィルヘルム様に付き従う騎士のひとりを演じなければならない。

つまり光天騎士王国の制服を着なければならなかった。

荷物はほとんどないのでカバンに詰め替えればいいだけだったけれど、制服がね……なんか着慣れないというか、騎士の制服を着た以上は背筋をピンと伸ばさなければならないような気がしてしまうというか。

「ヴィルヘルム様、先方がお越しですよ」

ヨハン、という名前のオッサン騎士に言われ、ヴィルヘルム様は顔を前方へと戻した。

レフェリー様にぶん殴られた頬は腫れも引いている。【回復魔法】でなんとかしたのだろう。

このヴィルヘルム様、実は光天騎士王国内では王族の遠縁に当たる人だそうだ。

とはいえ実力主義が定着している騎士王国では「血筋よりも腕」であり、そこまで特別扱いではないのだという。

ただ、「外交のための代表」などとして活動するときにはその「血筋」が利いてくる。

「光天騎士王国の皆様、こちらへどうぞ」

移動式の長い階段が取り付けられ、そこからレフ人の高官が案内のために降りてきた。
本来ならば国の最重要施設である「月下美人」に他国の人間を入れることはあり得ないが、クルヴァーン聖王国、光天騎士王国、キースグラン連邦の兵力を頼っている今となってはそんなことは言っていられないようだ。
武装解除を求められることもなく――それはそうだ、本気で襲うつもりならとっくに襲われているのだから――ヴィルヘルム様を先頭に、僕らは長い階段を上がって甲板へとたどり着いた。
そこから船内に入ると、細い廊下を通って1室の前へと案内される。

「こちらでございます。私はここで待っておりますのでなにかありましたらお呼びください」
「ありがとう」

ヴィルヘルム様がうなずくと、ヨハンさんが前に出て扉を開いた。
そこはちょっとした会議室になっていて、思いのほか広々としていた。ヴィルヘルム様が室内に入っていき、お付きの人たちが続き、僕が最後に扉を閉めると――空気のこもる感覚と、音が遮断された静寂が耳についた。
部屋にいたのはたったふたり。
長テーブルの向こうには――イケメン貴族がいた。
その横にいたもうひとり、執事長のセバスさんだった。

（ああ……変わらないなあ）

ほんの2か月程度だ。
ほんの2か月前は僕も、あの人たちといっしょに暮らしていたの

に。

「九情の迷宮」、レッドゲート、「裏の世界」と立て続けに続いた激戦のせいで、伯爵邸での生活はなんだかとてつもなく昔のことのように感じられた。

「これは、ヴィルヘルム閣下。お会いできて光栄です。クルヴァーン聖王国にて伯爵位をちょうだいしております、ヴィクトル＝スィリーズでございます」

「突然の面会申し込み、大変失礼しました」

「いえ、いつでも歓迎ですよ」

にこやかな笑顔を浮かべた伯爵だったけれど――そのうさんくさい笑顔すら懐かしくて。

「伯爵、実は用件があるのは私ではないのです」

「……とおっしゃると？」

「彼に、見覚えはありませんか？」

僕が指差され、初めて伯爵と執事長の視線が僕へと向いた。

その目が、見開かれた。

「また、お会いできましたね……伯爵」

14

あまりにも複雑な思いがあふれてきて、僕はかろうじてそれだけを言うことができた。

よろり、とテーブルに手をついた伯爵は、小走りになって僕の前までやってくると、

「レイジさんっ！　君は、生きていたのですか……！　よかった、よかった、ほんとうによかった……！！」

僕の顔を両手で包み込んだのだった。

「――――」

この人が、こんなことをするなんて。

この人が、こんなに感情をあらわにするなんて。

この人が、僕に対してこれほどの――親愛の情を持っていてくれたなんて。

別れ方はけっしていいものではなかった。僕はエヴァお嬢様とともに伯爵の罪を暴き、そしてお嬢様を、たったひとりの伯爵の娘である彼女を「連れていく」と言って伯爵邸を後にした。

恨まれても仕方がなかった。

だというのに、僕の頬に伝わってくる伯爵の温もりは本物だった。

「ご心配を……おかけしました」

うるんだ伯爵の目を見て、思いがけず僕まで涙がにじみそうになったのをなんとか踏みとどまってこらえる。むしろ執事長のセバス

さんがハンカチを取り出して目元を覆っていた。すべてにおいて伯爵が第一、という執事長は、伯爵がこれほどまでに感情的になっているのを見て感極まってしまったのかもしれない。

「……感動のご対面、となるとは思いませんでしたな」

ヴィルヘルム様が言うので、

「失礼――あまりに、驚いてしまったので。ヴィルヘルム閣下、なぜここにレイジさんがいるのかご説明をいただけるのでしょうか？」

「もちろんです」

それから僕らはテーブルのイスに腰を下ろして話を進めた。

ヴィルヘルム様は光天騎士王国の陣営近くに僕が現れ、その格好ではマズいぞとこうして伯爵との面会をセッティングしたという経緯を話した。「手合わせ」の件はすっぽり抜け落ちているのだけど、そこをつつくほど僕も非道な男じゃありません。

「なるほど……。確かに、『英雄武装』に関する事件があった今は、光天騎士王国の騎士として来てもらえたことは都合がよかったといえますね」

代わって伯爵が現在の状況を話してくれた。

ルルシャさんが「英雄武装」を発見し、それを各国に研究のための貸与をしようとしたこと。しかしそれらが消失したこと。ルルシャさんが「虚偽の報告をした」と訴える者がいること。

今、皇帝は態度を決めかねていて、「英雄武装」を実際に見ていないためにとりあえずルルシャさんが逃げないようにと身柄を確保しているところだという。「銀の天秤」も同様だったが、手配の最中で「犯罪者を捕らえる」というふうに曲解され、「銀の天秤」の

みんなは逃げ出した。

（……ひどい話だ）

今はどうやって「レッドゲート」を閉じるべきかを考えなければいけないのに、欲深い人たちは「英雄武装」を自分の手元に置きたくてしょうがないのだ。

そんなことに巻き込まれたルルシャさんや、ダンテスさん、ミミノさん、ノンさんが不憫でならない。

ムゲさんなんて直接危害を加えられ、今は治療中だという。

（……許せない）

気づけば僕は、膝の上で拳を握りしめていた。

「こちらの状況は今お話ししたとおりです。それで……レイジさん。なにがあったのか話してくれるのでしょうか？」

「はい、もちろんそれは構いません」

「あなたといっしょに呑み込まれた方々、特にハイエルフのアナスタシア様はどうなりました？」

そこはかなり重要なポイントなのだろう、伯爵の声に力がこもっていたし、ヴィルヘルム様もわずかに身を乗り出した。

魔導飛行船を贈る見返りとして、エルフの森である「三天森林（サードフォレスト）」からやってきたアーシャ。彼女は、森のあるキースグラン連邦とレフ魔導帝国をつなげる象徴的な存在でもあるのは僕も知っている。

そして森から出てこないエルフの中でも、ハイエルフという貴種。彼女が今どこにいるのか――それは今後の帝国と連邦の関係を考える上でも極めて重要な情報なのだろう。

「……アナスタシア様は無事です」

アーシャ、なんて言えるわけもなく僕がそう答えると、おおっ、と騎士たちが小さく声を上げた。

「問題がなければ今ごろはミュール辺境伯領にいらっしゃるはずです」

「なんですって……？」

「！？」

さすがに予想していなかったのだろう、イケメン伯爵と中性的イケメン騎士のふたりはぎょっとした顔を見せた。僕が「辺境伯領から来た」と言ったのだからその可能性くらい考えていていいだろうに、ヴィルヘルム様は。

「もしやレイジさんも辺境伯領から？」

「はい」

「なぜレッドゲートに呑み込まれたふたりが――」

「伯爵、少々お待ちください」

矢継ぎ早に質問をしてくる伯爵に「待った」を掛けた僕は、

「あの、先に聞きたいのですが……エヴァお嬢様はこちらにいらっしゃるのですか？」

「あ、ああ……そうでしたね。エヴァはこの船に乗っていますよ」

どきり、とした。

あんなふうにお別れをしたお嬢様と、こんなに早く再会できるチャンスが巡ってくるとは思ってもみなかった。

「セバス、エヴァは来られるだろうか？」
「それは……今はお休みになっていただいたほうが……」
「エヴァお嬢様になにかあったのですか」

僕が問うと、

「実は、彼女にも役割がありましてね……今はかなり消耗しています。もちろん、ケガをしているとか病気だとかそういうことではないのですが」
「会うことは……？」
「それは構いませんよ」

聞いて、ホッとした。

「後でその時間を設けましょう。そのころには『黒の空賊』ラルクさんも戻られ、エヴァの役割も果たせるでしょうし」
「……」

ぽかん、と口を開けてしまった。
今の言葉は聞き間違いだろうか。

「黒の空賊……ラルク？」

ラルク、って、あのラルク？
僕の姉のラルク？
そう言えば――そうだ。そうだそうだそうだ！　ラルクはいたじゃないか。この「月下美人」に乗っていたのはラルクだった！　なんでそんなことに気づかなかったんだろう。「月下美人」を盗んだのがラルクで、今、この飛行船を帝国が使っているのならラルクから帝国へと渡ったことになる。

「あ、あ、あの、ラルクは――」

お嬢様について聞いたときよりもずっとずっと心拍数が上がっていた。僕が腰を浮かせながら伯爵に問いかけようとしたときだった。

雷が聞こえたのだと思った。

飛行船の中、さらには遮音がしっかりされている会議室だというのに、すさまじい大音量の雷鳴が聞こえたのだと思ったのだ。

だけどそれは違った。

その直後に、「月下美人」を揺るがすほどの衝撃波が襲ってきたからだ。

「な、なにが――」

伯爵が周囲を見回し、ヴィルヘルム様たち騎士が一斉に立ち上がり剣に手を添えた。

そのときには僕はもう、

「――レイジさん！」

廊下へと飛び出していた。

衝撃に、へたり込んでいた案内役のレフ人がいる。僕は来た道をダッシュで戻り、一足飛びに階段を駈け上がり甲板へとやってきた。

「これは……！！」

真っ先に見たのは、レッドゲート。今やそれは昨日までの倍くらいに亀裂が広がっていた。

そこから身を乗り出していたのは巨大なモンスター。

紫色の毛並みに黒の縞模様。この紫が黄色やオレンジだったらす

ぐに想像がついたのだけれど――見たことのない色合いだった。
だけど顔は、虎だ。
「終焉牙（しゅうえんが）！！」
「裏の世界」に棲息する８の巨大種のうちの１つ――虎の超巨大モンスターが、レッドゲートを無理矢理広げ、今、その身を宙に解き放ち――こちらの世界の大地に降り立った。

15

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

その巨大種が大地に降り立ったとき、日々、戦いに身を投じている人々がなにを思っただろうか。

咆吼は雷のように轟き、周囲一帯に終焉牙の存在を知らしめる。

見た目は確実に虎でありながら紫色の毛並みに黒の縞模様。縞にはほんのりと紫色の魔力が展開しており、巨体すべてを魔力の膜が覆っているのがわかる。

足はなんと6本あり、尻尾は3本だった。レフ魔導帝国の高層建築を軽々と超えるほどの上背があり、この肉体を支えるには6本もの足が必要で、バランスを取るには3本もの尻尾が必要なのだろうか。

後頭部から背中に掛けて、白い毛のたてがみが流れていた。これは風によって揺れるのではなく巨体の発汗によって立ち上る上昇気流によって逆立っている。

そして顔だ。

鋭い牙は長く黒い。

大きな瞳は４つありひとつひとつが別々の方向を見ていた。

「な、なんだアレは。聞いておらんぞ、あんな化け物が出るとは……」

「落ち着きなされ、閣下」

キースグラン連邦の陣営では１０万という全軍を統括する貴族が、終焉牙を遠目に見て腰を抜かしそうになった。それをそばにいた副官がそつなく支え、イスに座らせる。

トップは貴族、副官はたたき上げの将軍――これがキースグラン連邦が遠征する際の常だった。

戦場の経験などはないが功績の欲しい貴族を総大将にし、実務は副官がきっちりこなす。

今回もまた同様で、副官である将軍は５０歳手前という年齢ながらいまだ前線で戦える肉体を持ち、右目は戦争で潰れながらも残った左目で鋭く終焉牙を見つめる。

「だ、大丈夫なのかね……我が軍は」

「ハッ。問題ありません」

即答し、安心させながらも頭の中で将軍は計算する。

帝国内へは２万人全員が戦っているわけではない。１度の行軍で３日の滞在をするため、食料や戦略物資の輸送部隊、ケガ人を治療する医務隊も含んでおり、前線に滞在している２万人と入れ替わっていく。

重傷者はこの陣地へ運ばなければならず、交代のタイミングで戻ってくる。

今のところ、死者は１千人弱、重傷者は３千人を数えていた。

正直、戦果はよろしくない。

――１０万人もの兵を差し向ければ、すぐにも騒動は終わらせられる。

と連邦のトップであるゲッフェルト王は見込んでおり、この将軍もまた同意見だった。軍部に所属して３０年の経験からしても１０

万人で押さえ込めないモンスターなどいなかったのである。
しかし――レッドゲートからはいまだ大量のモンスターが湧き出ている。
そこにきてあの巨大なモンスターだ。

「ほ、ほんとうに大丈夫なのかね？　あんな巨大モンスター、見たことも聞いたこともないぞ」
「ハッ。問題ありません」

考えることもせず機械的に答えつつも、将軍は内心で舌打ちしている。小太りで若い貴族はゲッフェルト王の遠縁にあたり、これから連邦の社交界でも注目を浴びるであろうことは確かだった。ゆえに今回の総大将を、ゲッフェルト王自らが指名した。
だが、将軍から見ればそれは「知らない世界」であり、「どうでもいい事情」だ。
「あんな巨大モンスター」どころか、ろくすっぽモンスター討伐の現場に行ったこともないのだから、「見たことも聞いたこともない」のは当然だろうとしか思わない。

「……しかしながら、前線の様子が気になるので行って参ります」
「しょ、将軍がわざわざ行くのか？」
「ハッ。閣下はこちらでお待ちください」
「だが……」
「もし気に掛かるようでしたら、ごいっしょに最前線まで行かれますか？」
「ヒッ！？」

手を差し伸べられ、若い貴族はぶんぶんぶんと首を横に振った。

「では行って参ります」

当然の反応を当然のように受け止めて、将軍は歩き出した。
あれほどの巨大モンスターをはたして押さえ込めるのか。
大体、今までだって強敵が現れたらレフ魔導帝国が抱えている「黒の空賊」とやらに頼ってきたというのに――。
将軍の歩む速度は自然と速まっていった。

光天騎士王国の陣営では、レフェリーこと副将軍オットーが終焉牙の出現を目撃した。

「……ほう」

片眉をくいと上げて、考える。
あのレッドゲートが出現したとき、亀裂の向こうに巨大なヤギの目が見えた――そんな情報も、光天騎士王国はつかんでいた。
騎士、と言いながらも、情報収集や分析をしっかり行うのがこの国の特徴であり、キースグラン連邦に比べれば国のサイズは数分の一にはなるものの対等に付き合っているのは、そのあたりにも理由がある。
もちろん、光天騎士王国の強みはやはり「騎士」ではあるのだが。

「あのレッドゲート、モンスターを新たに生み出すなんらかの魔術なのか……それとも、神話や伝説でしか聞いたことがない『空間をつなげる』魔術なのか。ふうむ。やはりレイジ殿にはもう少し話を聞いておくべきであったか……」

オットーが向かった先は、軍が駐屯している小高い丘のてっぺんだ。

そこには2メートルはあろうかという大男が腕組みして立っていた。

フルプレートの金属鎧は白色に塗られ、光天騎士王国のシンボルカラーである赤色と金色で縁取られてあった。

傍らに2人の騎士を控えさせ、それぞれが、人間が振りえるとは思えないサイズの大剣と長槍を持っていた。

「将軍。どうやら新手でございます」

オットーが声を掛けた大男――光天騎士王国全軍を率いる将軍はじっと終焉牙を見据えていた。

金色の長髪は波打って背後に流れており、石くらい優に噛み砕きそうながっしりしたアゴの先端はふたつに割れている。

彫りの深い目元は青色で、そこにはなんの感情も見えなかった。

「オットー。陣営を任せる」

ガラスが震えそうな重低音が聞こえたのは、将軍が言葉を発したからだ。

「……かしこまりました、フリードリヒ様」

オットーは恭しく頭を垂れた。

総大将であるフリードリヒ＝ベルガーの年齢は、３０代前半だろう。オットーよりもはるかに若く、ひょっとしたら半分くらいの年齢かもしれなかった。

だというのに彼が将軍であり、総大将であるのは――なによりも彼が、この軍勢の中で「最強」であるというシンプルな事実による。

フルプレートの金属鎧は、重量で５０キログラムは超える。だがまるでその重さを感じさせないほどの軽い足取りでフリードリヒは

歩き出す。金属がこすれて鳴る音に、身体を覆う強力なバネのような筋肉の軋む音が混じった。
彼に付き従って2人の騎士が武器を持って進む。
フリードリヒが歩いたあとには、草原にめり込んだ巨大な足跡だけが残った。

クルヴァーン聖王国の元トップであるグレンジードはすでに前線にいた。
最前線の陣営は、帝国の街並にある、大通りを封鎖する形で築かれてあった。半ば崩れた建築物はそれでも堅牢であり、利用すれば柵で封鎖する範囲を少なくすることができたからだ。
午前の戦闘を終え、昼食を取るために最前線の陣営に戻ってきたところで――終焉牙の咆吼を聞いた。
音波によって突風が吹いてがれきが飛び、幕舎のいくつかが倒れた。
あらゆる兵士たちがその動きを止めて咆吼の来た方角を見やった。
誰かが、小さく声を上げた。
見上げたそこに巨大な虎がいたのだから、当然だ。

「さっきからメリメリ音がすると思ったら、あの亀裂が小せえからと無理矢理こじ開けやがったか」

手ぬぐいで身体と、得物である長槍を拭ったグレンジードは野生動物のような獰猛な目を終焉牙へと向ける。

「まだまだ奥の手を隠し持ってそうだな、レッドゲートはよ」

置かれてあった水差しに直接口を付けて、ごくごくと水分を補給

したグレンジードは、呆然としている兵士たちを見やる。

「おい、てめえら！　ぼさっとしてるんじゃねえぞ！　新手が出てきたんだ、一番槍は俺がもらうぞ！！」

大声で怒鳴りつけると、兵士たちは我に返った。

そしてグレンジードが馬に飛び乗って駈け出すと、

「ちょ、ちょっと陛下！？　みんな、聖王陛下を守れ！！」

元、聖王なのだが、かつての口調でそう呼んでしまいながら多くの兵士がグレンジードに続いた。

人々の騒ぎなどまるで気づかぬように、終焉牙は、今まで見たことのなかった新たな世界を睥睨していた。

16

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

グレンジードに勝算があるわけではなかった。人の身のみならず建物すらも軽々と超えるほどの巨大種。これを見て「勝てそう」と思えるのはよほどの自信家か愚か者のいずれかだろう。

だがグレンジードは動いた。

それはひとえに――「コイツを放っておいたら、やがてクルヴァーン聖王国にも被害が出る」という思いからだった。

帝国の戦線は、「黒の空賊」の活躍と、各国の兵力投下によって維持されている。

そして仮になにかあったとしても、巨大な関所がモンスターを食い止めてくれるはずだった。その安心感があったからこそ関所を通って攻め込めるし、なにかあれば「安全圏」で休息できた。

（だが、コイツはマズい）

終焉牙は大きすぎる。関所はひとつの巨大防壁になっているが、終焉牙ならばそこを、あるいは帝国を取り囲む断崖を超えてしまうだろう。

北へと行けば「未開の地カニオン」だが、南へと来てしまった場合、東にクルヴァーン聖王国、西に光天騎士王国がある。

こんな虎を都市に放ったらどうなるか――どれほどの被害が出るのか考えたくもない。

今ならばここ、レフ魔導帝国という天然の要塞が、天然の巨大檻

となって巨大モンスターを閉じ込めておける。

（勝負するしかねえ）

自分の手で殺すことができなくとも、放置して外に逃げられるのが最悪だ。幸い、レフには飛行船がある。最近は砲弾数を渋って空からの攻撃をしていなかったが、今となってはそれすらも幸運だ。すべての爆撃をもってこの巨大モンスターを討伐するしかない。

そのためにはここで誰かが時間を稼ぐ必要がある――。

「――チィッ」

終焉牙が前脚を振り下ろすと、地響きが発生し、グレンジードの乗っている馬が走るのを止めて身体をのけぞらした。

地面に飛び降りたグレンジードだったが、馬は逃げ出してしまった。本能が、逃走を選択したのだろう。

「ここまで来りゃあ、上等よ」

すでにグレンジードから終焉牙までは１００メートルの距離となっている。右手に長槍を持ち、グレンジードは走り出す。

その槍は穂が長く、ショートソードが先端にくっついているほどだった。さらに柄の手前には十文字槍のように左右に鎌がついており、穂先へ向けて緩やかにカーブしている。

素材には天銀（ミスリル）をふんだんに使っており、グレンジードからあふれる水色――聖王色の魔力を流すことで硬度を増すことができるという逸品だった。

「おおおおおおおおッ！！」

近寄れば、そびえるような生き物だ。
だがグレンジードは怯まない。
全長3メートルにも及ぶ長槍の、石突きを地面に突き刺すと、棒高跳びの要領で空へと身を投げ出す。
それでも、終焉牙の腹にぎりぎり届くというところ。

「こっちを見ろやァァァッ！！」

グレンジードの魔力が大量に、長槍へと流れ込む。
銀色だったそれは今や聖水色の輝きを放つ。
聖王になったからと言って肉体の鍛錬を怠った日は一日としてない。グレンジードが身体をひねって繰り出した突きは、終焉牙の前脚の、付け根へと吸い込まれていく。
【竜槍術★★★★★】はグレンジードが取り込んでいるレアリティの高い天賦だ。クルヴァーン聖王国のルシエル公爵家の「剣聖オーギュスタン」が持つ【竜剣術★★★★★】と同系統の天賦で、この世界の調停者である「竜」の名を持つ。
放たれる武技に魔力を載せることで特殊な衝撃波を上乗せできる――という代物だった。まさに竜を相手にするのであれば十分に戦えるほどの力。
そのとき、初めて、終焉牙がこちらを見た。
紫と黒の体毛の中で黄金の瞳はやたらと目立つ。
確実に気づいたはずだ。攻撃されたことを。
だがまるで意に介さず、攻撃を受け入れた。

ギイイイイイイイ――。

穂先が毛皮に触れる直前で、聖水色の魔力と、紫色の魔力とがぶつかり合って火花が走る。
金属に金属を差し込み、無理矢理こじ開けるような音が響き渡る。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

最後に物を言うのは筋肉だと言わんばかりにグレンジードは力を込める。魔力で覆われていた終焉牙の身体を、開き、穂先が毛皮へと到達する。

「！？」

グレンジードは目を疑った。

魔力のぶつかり合いによってまぶしいほどの光があふれる中、長槍の穂先は長い毛によって絡め取られていたのだ。その毛の１本１本が生きているかのように――。

『バアアウウウウウウウッ』

突如吠えた終焉牙。咆吼は衝撃波となって襲いかかりグレンジードの身体は吹き飛ばされる。

「聖王――！！」

「受け止めろおおお！！」

追ってきた部下たちがだいぶ遅れていたのがよかった。彼らはグレンジードの落下地点に散らばって受け止めようとする。

だが宙を舞いながらグレンジードは見ていた。

終焉牙はもはやこちらを見てもいなかった。

（敵ですらねえと……思われたのか……！？）

絡み取られた天銀の槍は毛皮にぶら下がっている。

それだけが、自分の残した攻撃だというのなら、なんと情けないことか――恥辱に身体が熱くなる。怒りが身体を満たす。

「――アンタの相手は、あたしだよ」

終焉牙が見ていたのは、正面の建物、その屋上に立っていた少女。吹く風に金髪が横に流れ、黒の戦闘服が音を立てている。

「黒の空賊」ラルクだ。

グレンジードが冷静に考えるまでもなく理解できる――終焉牙が「敵」だと認めたのは「黒の空賊」だけなのだと。

（まだだ、終わってねえぞ……クソッタレ！）

最初に挑んだときの「どうにかしなければならない」という思いとはまったく違う、「どうあってもこちらを振り向かせてやる」という思いがグレンジードの心を満たしていた。

17

レフ魔導帝国の、文字通り「入口」であった関所の前は混沌の現場だった。かつて僕ら冒険者が屋外で一夜を明かした広場や、冒険者ギルドの小屋があったスペースは、各国の色とりどりの兵士で押し合いへし合いしていた。

「おい、通れないだろうが！」
「こっちは中へ行くんだよ！」
「いでっ、誰だぶつかってきたのは！」
「将軍！　将軍ー！」

数人を捕まえて話を聞いてみると、光天騎士王国の総大将である将軍がすでに関所を通過して中へと入り、それを追う兵士たちが殺到、さらにはキースグラン連邦の副将もまた前線へと向かい、それをサポートする追加の兵士が殺到しているという。

クルヴァーン聖王国はすでに元聖王であるグレンジード閣下が前線にいるために、状況確認のための兵士を送り込もうとしているために、混乱に拍車を掛けた。

一方、中からは、ちょうどキースグラン連邦の兵士入れ替わりタイミングだったこともあって分厚い塀を挟んで軍隊が滞留しているのだ。関所としてはその役目を果たしているといえるけれど、今は最悪の状況だった。

そして僕は――出遅れていた。

「ぬう……我が光天騎士王国がこの有様か」

先ほど、「月下美人」から出て行こうとした僕を呼び止めたのが

このヴィルヘルム様だった。彼が言うには、所属不明の騎士の姿で現場に突入すれば要らぬ疑いを生み、面倒が生じると。だったら彼といっしょに行ったほうがいいと。

だがヴィルヘルム様は儀礼服を着ていたので騎士の制服に着替えるまで待たされたのだ。

スィリーズ伯爵と多少話すことができたのはよかったけど、出遅れたせいで混雑に巻き込まれて、中へ行けないのでは意味がない。

中には、ラルクがいる。彼女が戦っているのだ。

「ヴィルヘルム様、さすがにこれが落ち着くのを待っていられません。僕は先に行きます」

「先に行く……と言ってもどうするのだ？　この人混みを割って進むのか」

「いえ、上から行きます」

「……上？」

きょとん、とした顔で見上げるヴィルヘルム様と、他の騎士たち。

「少々目立つのですが、仕方ないですよね？　この制服を着てしまってますが」

「いや、それは構わないが――おい、レイジ殿！？」

僕は走り出した――関所ではない、この広場を囲む絶壁へと。

（【身体強化】、【補助魔法】――【脚力強化】、【跳躍術】！）

絶壁の手前でぐっとかがみ込んだ僕の足が、地面を蹴り飛ばすとそこの土がえぐれて爆ぜる。

「うおっ！？」

「ありゃなんだ！」

その爆発音に気づいたのか、一部の兵士がざわつく。

僕の身体は７メートルほどの高さへと舞い上がるが、絶壁の上まではこの１０倍近くある。

「あれじゃ全然届かないな」

「いや、待て――なんだあれ！」

そこへ【火魔法】を追加。爆発とともに僕の身体は打ち上げられ、【風魔法】で加速する。まだ届かない。さらに魔法を追加、追加、追加――。

げっ、とか、ぎゃあ、とか、そんな悲鳴に似た声が兵士たちから聞こえてくる。

確かに、痛い。まだまだ扱いには慣れてないのだ。

だけど【回復魔法】を併用すればすぐに傷はなくなるし――なにより、こうして、

「届きやがった！」

「すげえ！」

僕の身体は絶壁の上へと到達した。

「ふぅ――」

焦げた制服を払いながら、僕は周囲を見回す。

「未開の地カニオン」と帝国とを隔てる絶壁は、テーブルマウンテンやエアーズロックのような隆起した台地となっている。

はるか下で、あんぐりと口を開けているヴィルヘルム様たちに、右脇を上げて右手の拳を胸につける――光天騎士王国式の敬礼を送

った。
ハッとしたヴィルヘルム様たちもまた同様の敬礼を返してくれる。
「よし、行くか」
この高さに立ってなお、ひょっこりと頭ひとつ飛び出して見えるのが終焉牙だ。

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

終焉牙が最初に「敵」だと認めたのは「黒の空賊」ラルクだった。
彼女はたったひとりで立っており、仲間の空賊やお付きのレフ魔導帝国の兵士たちはとっくに下がらせている――足手まといになるとしか思えなかったからだ。
まずは初手で、終焉牙がそちらへと突っ込んでいく。その突進は、一歩進めば地面を大きく揺らすほどだ。
建物の上に立ったラルクはしかし、あわてなかった。
「来い、あたしの魔剣」
終焉牙は、その小さい人間を「敵」と認めはしたものの、多少なりとも侮りがなかったと言えばウソになるだろう。
比べてみれば人間のサイズなど象と虫ほどに違い、突っ込んで踏み潰せば終わりだ。
どれほど虫が、強い力を持っていたとしても。
だから「突進」という攻撃方法を選択した。その身を、直接ぶつ

ける攻撃方法を。

『！！！！』

ラルクの身体から、長く、巨（おお）きく、禍々しい黒の腕が数十本と生えていく。それらは光を一切通さず、どのような形状になっているのかはにわかには判別できない。

そして終焉牙がブレーキを掛けて止まるには、2者の距離は接近しすぎていた。

「死ね」

終焉牙の額に向けて放たれた黒の刃が激突する――瞬間、終焉牙の体表に張られていた魔力が干渉する。

触れた箇所が黒く変色し、剥がれていく。だが一方の刃もまた粉々に砕け散った。

刃の数は多く次々と繰り出される。

魔力膜が剥がれた毛皮に深々と突き刺さり、鮮血が噴出する。

『！！！！』

終焉牙は自らの身に起きた異変――この数百年、ケガをすることなどなかったのだからそれは天変地異にも匹敵する異変と言えるだろう――に驚きつつも、突進の速度を緩めることはなかった。

ドッ――。

巨体が衝突した建物は端から粉々に崩れ、吹っ飛んでいく。

いくらラルクが刃で切り裂いたとしても、この高さから落ちれば彼女の命はない――はずだ。

だがラルクは、衝突の寸前、建物の縁を蹴って宙へと飛び出していた。彼女の身体は、４枚の黒の羽によって平行移動していく。

『グルルルルウウアアアアアアアアア』

数棟の建物を破壊して走っていった終焉牙は、その先で立ち止まると、吼えた。

額から血を流し、４つある瞳のひとつをつぶされていたのだ。

「――ごぼっ」

だが、ラルクとて無事ではない。衝突をかわすことはできたが、地面に着地すると――そこに水たまりができそうなほどの血を吐いた。

「あーあ……出てくるなら最初に出てきてくれよ」

すでにラルクの体力は限界まで削られていたのだ。【影王魔剣術（シャドウキング）】が終焉牙に有効であることはわかったが、このまま刃を繰り出し続ければ遠からずラルクの身体がもたない。

次に攻撃をするにしても、多少の休息を挟まなければ――。

『ウウウウウウウ』

終焉牙はくるりと振り返ると、３つ残った目を怒りに濁らせてラルクを見据えた。

「……そう簡単に休ませちゃ、くれねーよなぁ」

ラルクが自嘲気味に笑って、立ち上がろうとしたときだった。

「少々の時間なら稼ごう。少し休め」

そこに現れたのは大きな体躯を持つ男だった。そして特筆すべきは、男と同じくらいの高さがある大盾だ。

「ああ～～、ほんとは診療してから薬を出したいけど、その時間はなさそうだべな。サクッと効く薬を服んでおいて、な？」

ラルクの右肩に置かれた手は小さく、それがハーフリングのものだとはラルクは知らなかった。

「できる限り【回復魔法】を使わせていただきますわ」

左肩に置かれた手は温かく、同じヒト種族の聖職者らしき女性が言った。

「それでいいですか、お父さん？」

「ノン、頼む。ミミノは俺のサポートに入ってくれ。でなきゃ、あんな化け物、数秒すらもたねえよ」

「わかってるべな。出し惜しみなしで行こう！」

最前線で戦い続けてきたラルクに手を差し伸べたのは、冒険者パーティー「銀の天秤」の３人だった。

17（後書き）

いつものお願いです。もしお読みいただき「面白かった」「このまま続きも読みたい」と思われましたらログインしての「ブックマーク」をお願いいたします。またページ下部にある「★」から評価もできますので、こちらのご協力も是非。

18

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

ノンによって身体を支えられたラルクは、前へ前へと進んでいくダンテスとミミノの背中に叫ぶ。

「無理だ！　アンタたちにどうにかなる相手じゃねーよ！　見りゃわかるだろ!?」

「見てわかっています。時間稼ぎならできると」

「どうやって――」

「シッ、今は体力を回復させてください」

ラルクの焦りも理解できる。どう考えたって、あれほどの巨大モンスターを相手に盾ひとつでどうにかなるものではない。ノンだって心配だったが、今自分がなすべきはこの少女を――触れてみて初めてわかる、この少女の細さを――癒すことだ。

【回復魔法】を発動させるが、自分の魔力が入り込んでいく感じがほとんどしない。

ふつうならば水を撒けば大地が吸い取るように魔力が浸透し、傷を癒し、自然回復力を増大させる。

だがラルクはどうだろう。まるで踏み固め続けカチカチになった地面に水をまいているかのようだった。

（これほどになるまで、この子は自らを酷使して戦ってきたのですね……！）

ノンもまたラルクの奮闘振りを知っているが、年齢は見たところ13、4ではないかと思われた。実際は20歳の自分と3つしか違わないとわかれば驚くだろう。

不摂生な生活と、【影王魔剣術】の行使によりラルクの肉体はさほど成長しなかったのだ。

「――無駄だ。魔法で治るんならとっくに治してる」

自暴自棄にも聞こえる口調でラルクは言う。

「これを多少なりともどうにかできるのはあの貴族の嬢ちゃんくらいで――」

言いかけたときだ。

ガァン、とメイスで大盾を鳴らしたダンテスが叫んだ。

「犬っころ、敵はこちらだぞ！」

その大音声は離れた場所にいるノンが聞いても耳にうるさいほどだった。モンスターの注意を集めるための発声法で、魔道具によって声を増幅することができる。

さすがに、終焉牙もダンテスへと視線を向けた。

「ダンテス！」

「なんだ、ミミノ」

「虎は猫の仲間だべな！？」

「……し、知ってるわい、そんなこと」

すばしっこく駈けて建物の陰に入っていくミミノに負け惜しみを

言ったダンテスだったが、のそりのそりと近づいてくる終焉牙へと再度目を向けた。

終焉牙は、まるでダンテスのことなど相手にしていない。だが先ほどこちらを見た一瞬で、ラルクの姿を見失っており――ノンが移動させたからだ――まずはダンテスを踏み潰そうと決めたようだ。

だがラルクとの接触で手痛いしっぺ返しを食らったせいもあるだろう、その足取りはどこか慎重だ。

『グルルルオオオオオオオオオ！！』

咆吼が放たれると衝撃波によって砂塵が舞う。

ダンテスは大地にしっかりと足を踏みしめ、大盾で音圧を防いだが、それだけでみしみしと盾が軋み、飛んできた小石がぱらぱらと音を立てる。

「……参るぜ、コイツは。誰も勝てねえんじゃねえのか？」

弱気になる自分を、ぎりぎりで持ちこたえる。

「ビビったら負けだ」

咆吼が止み、大盾をどけると――そこには、吹き飛ばされなかったダンテスに不愉快そうにしている終焉牙がいた。

「ビビったら……タイミングがずれる」

大盾を握りしめるダンテスの左腕には、いつもならつけていない見慣れぬ金色の腕輪があった。

金属製のバングルに、スマートフォンほどの大きさの箱が2つくっついている。表面には様々な回路が浮かび上がっては消えている。

片側の中央にはボタンらしきものがあり、もう片方には青色にきらめく球形の鉱石が5つ、スロットにはまっていた。

「来いや、犬っころ！」

先ほど猫だと言われたことも忘れて叫ぶと、終焉牙は軽やかに走り出し、ダンテスへ向けて前脚を振り下ろした。

ダンテスにはその攻撃の、距離感がつかみにくかった。あまりに巨大なものが迫ってくるのでわかりにくかったのだ。しかも前脚は徐々に加速していった。

「――早く！！」

ミミノの叫び声が聞こえなければマズかった。

「は、発動！！」

大盾を構え、ダンテスは腕輪のボタンを押す――そのタイミングはまさに紙一重だった。

あとコンマ1秒遅ければ、盾などものともせずに切り裂かれ、ダンテスの首が飛んでいただろう。

ダンテスの身体に這うように薄い魔力膜が出現する。その膜は彼の身体を伝って地面にまで広がっていた。

膜が張られた直後、終焉牙の爪が大盾に触れる。

「！？」

次の瞬間に起きたことを目撃したラルクは目を疑った。

終焉牙の爪が割れ、前脚に展開していた魔力も切り裂かれ、毛皮ごと肉が断たれたのだ。

『ギアアアアッ！？』

即座に身を引いた終焉牙の動きは早かった。反射神経だけで動いたと言っていいだろう。

「ふー……うまくいったみてえだな」

「――ダンテス、ぼさっとしたらダメだべな！」

「わ、わかってる。あんまり急でよお」

ダンテスが展開していた魔力膜は、もはやそこにない。彼が押していたボタンもすでに手が離れている。

そしてスロットに入っていた青色の鉱石は、1つが黒く焦げて変色しており、2つ目の半分ほどまで変色が進んでいた。

「あ、あれは……？」

唖然とするラルクに、ノンは【回復魔法】を使いながら答える。

「あれは『英雄武装（ヒロイックギア）』です。私たちが見つけた、魔道具です」

実のところ「銀の天秤」は、レフ魔導帝国から出奔したのではなく、帝国内に身を隠していたのだった。

そして彼らは消失した「英雄武装」をすでに発見していた――自らの潔白を証明するために。

18（後書き）

レビューをいただきました。ありがとうございます。
本ページの上部からご確認いただけますのでどうぞ！

19（前書き）

潔白晴らしてどーすんだというツッコミありがとうございました。
誤字訂正送ってくださる方、いつも助かっています……勢いだけで書いているせいですね。
（でも勢いがなくなっちゃうと毎日更新が止まっちゃう）

19

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

「お父さんが身につけている腕輪型の『英雄武装（ヒロイックギア）』、『キミウツス（君映）カガミ（す鏡）』は一切の減衰なく衝撃を跳ね返す効果があります」

ノンの説明に、ラルクが目を見開く。

「なんだって……！？　それじゃあ、どんな敵にだって勝てるじゃねーか！」

「ですが燃料となる玉（ギョク）の原理が不明で、お父さんが今使っただけでも1個以上は消費されているはずです」

「その玉とかいうのはあといくつあるんだ！？」

「……3個か4個です」

ラルクは天を仰ぐ。とてつもなくデカい化け物を倒せる方法が見つかったかもしれないと思ったのに、これでは。

「元は15個あったのですが、どのように使用される武装なのかを確認するのに使ってしまいました」

「なんだよ、使えねーな！」

ラルクの悪態にノンは眉をひそめるが、

「……それでも、あの巨大モンスターを警戒させるには十分です」

終焉牙はなにが起きたのかわからず、血に濡れた前脚をぺろりぺろりと舐めながら注意深くダンテスを観察していた。ダンテスはどっしりと構えて動かない。

確かにダンテスは「時間を稼ぐ」と言った。その言葉に偽りはない。

「……最後はあたしがケリをつけるしかないってことか」

【回復魔法】を立て続けに使い続けているノンは、ふう、と大きく息を吐いて、笑った。

「いえ、まだまだやれますよ。見つけた英雄武装はひとつだけではありませんから」

終焉牙の鼻はよく利いていたが、数多のモンスターや人間の死臭が漂うこの街中では敵を探知する能力としてはあまり機能していなかった。

そのぶん目に頼っていたのだが――それでも終焉牙はその小さな姿を見つけることができなかった。

単に小さかったからではない。

その姿は空間にぬるりと溶けるようであり、じっと止まっていれば姿を確認できない状態だったからだ。

終焉牙ははるか悠久の時を生きてきたが、今までに見たことのなかった技術――レイジが見ればそれを「光学迷彩だ！」と言っただろう。

（もう少し。あと少しは近づけるべな）

ミミノの小さな身体をぎりぎり覆い隠せるマントがその光学迷彩の効果を持つ魔道具――「英雄武装」だった。これは「タソガレニ(黄昏に)キユ(消ゆ)」という名前のついた武装で、残念なことには大人を隠すには小さく、すばらしいことには燃料消費がなく半永久的に使えそうなところだった――今のところは。

ダンテスが終焉牙の攻撃を跳ね返したのを見届けたミミノは、「タソガレニキユ」を身に纏い、路地裏を駈け抜けた。そうして終焉牙の後方へと移動する。

（大っきい……）

見上げるほどの終焉牙に、ぞわりと鳥肌が立つ。だがミミノは恐怖心を振り払う。

（ここでがんばらなきゃ、レイジくんに笑われるべな！）

アバの天幕に置いておいた、レイジの生存を確認するための魔道具が壊れていた。それがなにを意味するのか、確認するほどの時間がなかった。

だが、ただごとではないのはわかる。

今このレッドゲートの状況を考えると、前向きに捉えられるものではなかった――最悪の予想が何度も脳裏をよぎった。つまり、レイジは死んだのではないか……ということだ。

ミミノはそれを振り払うために危地を選んで飛び込んだ。帝国の追っ手から逃げるときも単に逃亡するのではなく「関所を通って中に入ろ。そして『英雄武装』を取り戻すんだ！」と主張し、さらには発見した場所にいた見張りを「倒す」ことを選択し、取り戻した「英雄武装」を使って突如として現れた終焉牙に対応することも提案した。

今はこうして、自らが先頭に立って終焉牙に立ち向かおうとして

いる。
自分が手を動かしていなければ、歩を進めていなければ、レイジとつながっていたはずの細い線が切れてしまうような気がして。
最悪の予想を直視するのがイヤで。
「冒険者」であることを言い訳にして、危険を冒しているのだ。
（この距離なら、行ける）
ミミノが取り出したのは円盤に目盛りが刻まれており、しっかり握れる取っ手のある金属製の魔道具だった。レイジが見たら「体育のときに使う握力計？」と思わず言ってしまいそうな見た目だったが、その色は鈍い金色だった。
（「英雄武装」の力、借りるべな！）
そのとき、ミミノが力んだせいだろうか、あるいは単なる予感だろうか――ちらりと終焉牙が後ろを振り向いたのだ。
ひとつ潰れたものの３つ残った目が、「タソガレニキユ」からはみ出たミミノの顔や身体を捕らえる。
『――――』
大きな口を開いて吠える、という直前、
「こっちのが速い！！」
ミミノは懐から放り出した数本のツタ、すべてに【花魔法】を掛ける。それはしゅるるるとすさまじい速度で長くなり、終焉牙の左後ろ足に絡みつく――が、巨体から見ればあまりにも細いツタだ。
人間に、髪の毛が数本絡みついたようなものだ。

一瞬、終焉牙すらきょとんとする。
だがミミノにとってはそれでよかったのだ――「英雄武装」の把手をつかみ、レバーをぐいと握り込む。
3つ目の英雄武装――彼らが持っていた最後の「英雄武装」、「デイネイハウタフ（泥濘は唄ふ）」が発動する。
目盛りが青白く光りぐるぐると回転する。
円盤の向けられた方角、キーンと耳に突き刺さるような高音が響くと終焉牙はのけぞったが、もちろん効果は「音を出すこと」ではない。

『!?』

巻き付いていたツタが、黒く変色する――と思うと、終焉牙の身体がバランスを崩して倒れ込む。

『グルルルアアアアアアアア!!』

巨体が倒れた衝撃と、咆吼によってミミノの小さな身体は吹っ飛んだ――が、それをがっしりと抱き止めた男がいた。

「……面妖な技を使う。ハーフリングの秘技か?」

そこにいたのは、2メートルはあろうかという大男――光天騎士王国の将軍、フリードリヒ＝ベルガーがそこにはいた。
ミミノは直感する――これは好機だと。

「攻撃をお願いしますべな！　拘束効果は５１２秒しかありません!!」

ふむ、とうなずきながらミミノを下ろし、フリードリヒはそばに

いた騎士から大剣を受け取る――その大剣を見てミミノですら目を剥いた。ダンテスがかつて使っていたそれよりも1．5倍ほどは大きいのだ。

「任された」

重低音で答えたフリードリヒは、走り出した。巨大な虎へ向かって。

同時に反対側にやってきていた軍勢からも喚声が上がったのが聞こえた。

そちらに展開していたのはキースグラン連邦の手勢だ。

もちろん、最初に蹴散らされた元聖王グレンジードたちもまた武器を手に終焉牙に特攻をかける。

そして、ノンがかけ続ける【回復魔法】を押しのけ、ラルクもまた走り出した――「今やらなきゃいつやんだよ」と言いつつ、口元の血を拭って。それにダンテスが並んだ。

なすすべもないかと思われた終焉牙との戦闘だったが、今、一斉攻撃が始まろうとしていた――それはひとえに「銀の天秤」が手に入れた「英雄武装」によって、だったのだ。

19（後書き）

キミウツスカガミ……全反射
タソガレニキユ……光学迷彩
デイネイニウタフ……？？？

その効果は次話で。

20

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

「撃てェ！」

キースグラン連邦の弓兵が一斉に矢を放つと、雨のように終焉牙へと降り注いだ。しかしそのどれもが、終焉牙の展開する魔力によって弾かれた。傷どころか、毛の1本を断つことすらできないのだ。

弓兵の隊長はこの結果を見て目を剥いた。城の外壁にだってもう少しは傷をつけられるだろう。

「い、いかがしますか、副将軍――副将軍!?」

終焉牙が降臨してすぐにやってきた将軍にたずねると、連邦軍全体の副官でありながら、生粋の軍人でもある彼は、

「知れたこと。矢よりも剣が強い」

自らの剣をすらりと抜いた。その刀身は美しい魔力が走っており、武器そのものが魔道具である――ある種の「宝剣」であった。

「行くぞ！　ついてこい！！」

将軍が駈け出すと、オオッという声とともにキースグラン連邦の兵士たちが終焉牙へと突撃した。

分厚いフルプレートメイルを着ていても、軽々と走り、現代日本ならば鉄骨に見まがうほどの大剣を棒きれのように担ぐ。

光天騎士王国の総大将であるフリードリヒが一歩走ると石畳が割れ、大地がえぐれ、爆発したように土くれが飛んだ。長いマントをはためかせて風のように走るが、身体はギシギシと筋肉が軋んでいる。

その一歩は数メートルに及び、彼の疾走スピードについてこられるのは一握りの駿馬だけであろう。

騎士たちが後を追ったがその差はぐんぐん開いていく。

「コオオオオオオ――」

フリードリヒは突出していることなどまったく気にしていない。戦場ではいつもこうなのだから。

独特の呼吸法で酸素を取り入れたフリードリヒは、倒れた終焉牙の背中側へと到達する。振りかぶった剣の一撃は、終焉牙の体表に展開した魔力に触れるが、それをいともたやすく切り裂いていく。切られた部分は、氷のように割れて破片が飛び散った。

そして体毛が刀身に絡みついていくが、これもまた同様、断ち切られた。

肉に到達する――。

「！」

そこで、剣が止まった。岩盤を叩いたかのような固い感触とともに。

この大剣が重いだけで切れ味が悪いとかそういうことではない。

大きさと重さ、そして切れ味と三拍子そろった特注品なのだ。これまでも多くのモンスターを斬り、鎧ごと人間を斬り、樹木すらも叩き斬ってきた。

『ルルルルロロロロロオオオ』

肉を切れなかったわけではなく、途中で止められたのだ。筋繊維に挟まれ、取り込まれた。だが当然、肉が切れれば血が出るし、終焉牙は痛みを感じて暴れた。

「ぬうう」

フリードリヒの筋肉がふくらみ、両手で持っていた大剣に力を込める。動かないかに見えた剣は、次の瞬間には湿った音とともに抜けた。終焉牙の赤い血が飛んだ。

終焉牙はこちらに背を向けているので、足は反対側にある。暴れたせいで足が動き、キースグラン連邦の兵士たちが多くやられたようだ。

「５１２秒と言っていたな」

淡々とつぶやくと、相変わらず無防備に投げ出されている背中に向かって大剣を振り下ろす、振り下ろす、振り下ろす。鉱夫が穴を掘るように。終焉牙の背中の一部が血まみれになり、白い背骨があらわになっていく――。

元聖王グレンジードは初撃の後、空中から墜落するのをぎりぎり免れた――それはぎりぎり駈けつけた聖王騎士団のおかげだった。

彼らに助け起こされ、もう一度突っ込もうとしたところを押さえつけられ、無理やりに引き下がらされた。
頭から水を掛けられ「冷静になってください！」と叫ばれること５０回ほど、ようやくグレンジードの頭にも冷静さが戻ってきた。元とは言え聖王国のトップだった自分に水を掛けるほどだ、よほど平常心を失っているように見えたのだろう――そして実際そうだった。
そのさなか、終焉牙が倒れた。

「行くぞ」
「し、しかし陛下、陛下の武器は――」

無手のグレンジードに聖王騎士が進言すると

「あそこにある」

ぶらん、と体毛に絡め取られたままの槍を指差した。
左前足の付け根にあるので、地面付近に垂れ下がっていた。

「ナメやがって……まずは武器を取り戻す。それからぶっ殺す」

数か月前までは一国の王だったとは思えないほどの獰猛な口調で言ったが、聖王騎士たちは恭しくうなずいた。

「承知しました。参りましょう」
「おう、聖王騎士団第５隊と６隊はついてこい。７隊は残りの兵士をまとめて攻撃しろ」
「ハッ！」

そしてグレンジードは走り出す。武器を持たないだけに速く、目

の前には暴れて苦しむ終焉牙の後ろ足が迫ってきた。
左後ろ足は黒いロープのようなもので縛られており動かず、右後ろ足がジタバタしていた。

「近づきすぎると危険です、陛下！」
「問題ねえ！」

動かない左後ろ足に飛び乗ったグレンジードは、そこを足場に走っていく。足は付け根から放射状に動くので、腹の付近を走れば当たらない。

「ぐああっ」

背後では聖王騎士が、右後ろ足に蹴り飛ばされる。

「無理はすんな！　確実に左後ろ足をつぶせ！」

グレンジードは自分の槍を目がけて走る。
あれを手に入れ、もう一度この化け物に突き刺してやる――それだけを考えて。

「アレも『英雄武装』とかいうヤツかよ！？」

ラルクが走りながらダンテスにたずねると、

「そうだ。『デイネイハウタフ』は対象の体積はそのままに質量を増大させる……もの？　らしい？」
「なんだよそりゃ……」

「俺に聞くなよ……ミミノはその説明でわかったみたいだから、扱いは任せたんだよ……」
「そうかよ……」

ラルクもダンテスも、科学的なことはさっぱりだった。
「デイネイハウタフ」はダンテスの説明の通りだったが、ミミノは【花魔法】で増幅したツタをロープのように終焉牙に巻きつけてから発動した。
今、終焉牙に巻き付いているのはただの黒いツタに見えるが、その実は、超重量の物質となっている。
あの巨体がバランスを崩して倒れ、さらには動けなくなるほどの重量だ。
その原理がどうなっているかはもちろん未解明であり、ただ「デイネイハウタフ」の効果としてわかっているだけだった。

「ただ、５１２秒しか続かないらしい」
「!?　そういう重要な情報は、さっさと言えよ!」

ラルクとダンテスは終焉牙の頭――後頭部へと近づいていく。ドッシンバッタンと暴れており、立ち上がろうとしてもなかなかうまくいかないようだったが、動き回っているものの首はがら空きだ。

「――だけどまあ、十分だ」

ラルクの身体から黒い影が湯気のように立ち上り――ダンテスはその光景を唖然として見やった。
これは、聞いたことがある、と思った。
かつて通過した街、アッヘンバッハ公爵領の領都――あそこで遭遇した竜、そして天銀級冒険者のクリスタ＝ラ＝クリスタ。
爆発に巻き込まれたダンテスは見ていなかったが、竜の首を落と

したのは巨大な黒い剣だったという。
もしかしたら、とは思っていた。
この帝国で戦っている「黒の空賊」が領都で竜にトドメを刺した人物と、同じではないか、とは。
だがダンテスは領都では気を失っていたし、帝国内の戦闘ではラルクは最小限の動きでモンスターを倒しまくっていた。

「こいつぁ……すげえ」

今目の前にあるのは、巨大な刃――刃、と言っていいのか。
塔のように高くそびえる黒い刃だったのだ。
これならば竜くらいなんなく殺せるだろう。

「あの首、叩き落とす」

言ったラルクの口から、血が一筋、流れた。

21

終焉牙が倒れ込んだのを見たとき、「マジで？」と正直思った。
どうやってあんな巨大種を転ばせることができたのか、想像もつかなかったのだ。
僕の【遠視】を使うとかすかに終焉牙の左後ろ足にツタの絡んでいるのが見え、それが、「極めて高い重量」であると【森羅万象】が教えてくれる。「重力魔法」みたいな魔法はなかったはずだけど、一体どうやって――。

「ああ、もう、邪魔！」

走っていくのに光天騎士王国の制服が邪魔なので脱ぎ捨てる。防刃加工をしたこの服は、確かに対人戦闘では重宝するだろうけれど、一発食らったら即死みたいな巨大モンスター相手では動きにくいだけだった。
絶壁を登るときに僕だとバレたら困ったけれど、目撃者は僕のことを光天騎士王国の騎士だと思っただろう。であればもう、制服は用済みだ――後で返しますんで、とりあえずここに置かせてください、ヴィルヘルム様……。
半袖のシャツに長ズボン、道具袋は腰にぶら下げた――どっちかというと「みすぼらしい」格好になった僕は絶壁から跳んだ。

「うおおおおっ！」

【風魔法】で飛距離を伸ばし、着地の衝撃を殺し、背の高い建物に着地する。
終焉牙まではあと1キロってところだ。

そのとき僕は見た――巨大な黒の刃が、天に届けとばかりに屹立するのを。

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

上手くいきすぎている、とグレンジードは思った。

槍を取り返し、無防備な腹に向けて何度も何度も何度も何度も槍を撃ち込むと、やがて魔力の外装は剥がれ落ち、うねうねと動く毛を断ち切り、肉を傷つけた。

あっというまに血まみれになるが、終焉牙の巨体を思えば――目の前に肉の壁がそそり立っているようにしか見えない――人間がちょっとすりむいてケガをした、くらいのものかもしれない。

（にしても、だ）

立ち上がろうとしては転んでいる終焉牙だったが、この巨体に最初感じた「畏れ」のような感情を考えるとこのままで終わるとは到底思えない。

こちらの攻撃が、上手くいきすぎている。

「ぬうん！」

長槍を腹に差し込み、ぐぐいとねじ込んでいく。ついに持ち手が３０センチほどになるまでめり込んだところでグレンジードは叫んだ。

「騎士ども！！　一度退けェェッ！」

グレンジードに備わっていた本能と言うべきか、聖王という血筋が与えた予感だったのか、それはわからないが、順調にダメージを与えていた状況だというのに彼は撤退の指示を出した。
わけがわからないという顔をしていた聖王騎士たちだったけれど、それでもグレンジードの命令は絶対だ。
暴れる足をかわし、たまに弾き飛ばされながら終焉牙と距離を置く。

「陛下！　なにかございましたか――その血は!?」

血に濡れたグレンジードを見て聖王騎士がハッとするが、

「これは返り血だ。あと俺はもう陛下じゃねえっつってんだろ――」

ごちん、と拳を聖王騎士の頭に落としたところで、グレンジードは見た。
終焉牙の頭の向こうに、黒く、巨大な刃が立っているのを。

「――――」

思いがけず、言葉が口からこぼれた。

「――今は、ダメだ」

終焉牙を転ばせた立役者であるミミノは、光天騎士王国の将軍であるフリードリヒに抱き止められたその場所にいまだ立っていた。
回復や魔法の補助といった薬剤は豊富に持っていたけれど、直接攻撃をするのなら自分の出る幕はない。

できることは「英雄武装」の「デイネイハウタフ」の効力が続いているうちに、あの終焉牙を倒しきれるのを祈るだけだった。
効果時間は５１２秒。
時間にして８分強。まだまだ時間はある――。

「……え？」

カタカタ……と手にしていた「デイネイハウタフ」が揺れていた。
鈍い金色の、握力計みたいな形状をしているそれは、効果を及ぼす対象を記憶させてから矢印で重量をどこまで増やすかを設定する。最後にレバーを引けば発動――という極めて簡単な造りだった。
メカニズムは不明だが。
すでに使い方まではムゲが見いだしており、ミミノは今回、矢印を「最大」に設定して使用した――結果は終焉牙のような巨体ですら倒せるほどの重量アップとなった。

「えええええ！？」

けれどもあらゆる作用には反作用があり、力を使うには燃料が必要となる。
「デイネイハウタフ」には「キミウツスカガミ」のようにわかりやすい燃料スロットがなかったのでわからなかったし、ムゲもそこまで調べる時間がなかったのだが――当然内部には魔道具発動のための回路があり、最大出力で使うのならば相応の反動がある。
加えて、いくら堅牢に作られたものであっても道具は道具、長い長い年月を経て劣化が進んでいる。

「わあっ！？」

ミミノが握りしめていた「デイネイハウタフ」は内部から破裂す

るように破損し、金属や鉱石とともにどろりとした液体が――高熱によって溶けた金属が噴出し、石畳に飛び散って煙を放った。

つまり、そのときこそが、「デイネイハウタフ」の効力が途切れたとき。

発動から５１２秒経っていようと、いるまいと、大元の魔道具が壊れれば――効力はなくなる。

終焉牙の左後ろ足に食い込んでいた、黒く変色したツタは鮮やかな緑を取り戻す。と同時に、内部の筋肉の隆起によってぶつぶつぶつんと切れた。

『グルルッ』

終焉牙は今、拘束から解き放たれる。

21（後書き）

またレビューをいただきました。ありがとうございます、ありがとうございます。

22

★　レフ魔導帝国　レッドゲート最前線　★

行け――と思わずダンテスは叫びかけた。
自分にはけっしてできない巨大な黒の刃を操る「黒の空賊」。その力がうらやましいとか、妬ましいとか、そんなことを思うよりも前に――目の前にいる、世界の理を外れた巨大獣を一刻も早く倒して欲しいという思いのほうが強かった。
終焉牙の太くたくましい首を両断できるほどの、塔のごとくそびえる刃。それを持つラルクの手が震えていた。
今、刃は無防備な首に向かって振り下ろされる――という瞬間、終焉牙の身体は電気でも走ったかと思えるような反応をした。

「チッ」

血に濡れたラルクの口から舌打ちが漏れる。終焉牙の拘束が解けたのだとは直感的にわかった。
ラルクは黒の刃を振り下ろす。
金属に比べれば大幅に質量をもたないその刃は、軽々と、終焉牙の首に向かって振り下ろされる――。

『グルルァァッ!!』

身体を反転させて顔を向けた終焉牙の、口が、刃を受け止める。
【影王魔剣術】の切れ味を受け止めた歯の硬さにラルクは驚いたものの、

「うあああああああああ！」

全身の力を振り絞り、刃を下ろそうとするが、動かない。

「がんばれ、がんばれ……！」

そばではダンテスが、応援することしかできない自分に歯がゆさを感じながらも声を上げる。

だが、拮抗は数秒で崩れた。

パキィィィィイ――。

刃が、【影王魔剣術】で生み出された最強の剣が、ガラスのように砕けたのだ。

破片はすぐにも煙となって空中に消える。

「――ガハッ、ハァ、ハァッハァ……」

「大丈夫か！」

その場にくずおれ、地面に両手を突いたラルクの肩にダンテスは手を添えるが、

「……に、逃げ、ろ……」

「！」

終焉牙の巨体が立ち上がり、その場でぴょんぴょんぴょんと地面を踏みならした。きっと攻撃を加えている兵士たちをつぶすためだろう。

その衝撃は地震のように伝わってきて、倒れそうになるラルクの

身体をダンテスが支え、立ち上がらせる。

「逃げるなら、お前もだ」

「……」

言葉を話す力もないのか、青を通り越して白くなりつつある顔のラルクは虚ろな目を地面に向けていた。

「ちくしょおおお！」

大盾を左手に、右手にラルクを抱えたダンテスが走り出す。

撤退だ。撤退するしかない。

この場にいる最大戦力が「黒の空賊」ラルクの剣であることは疑いようがなく、そのラルクが動けないのだ。

だが、

「お父さん！！」

進行方向、建物の陰に身を潜めていたノンが叫ぶ。

「あ……？」

ダンテスは視界が暗くなるのを感じた。

それが――陽光を遮られたのだと気づいたのはすぐのことだ。

「なにぃっ！？」

終焉牙がダンテスの頭上を飛び越えて、進行方向に着地する。

着地の衝撃で地面が揺れて、ダンテスはその場で急停止。

「ノン、逃げろ！」
「お父さんは！？」
「俺だって逃げるしかねえ！」
「わ、わかった！」

世界と交換にしてでも絶対に守らなければならない娘のノンが逃げていく。終焉牙はノンの存在など歯牙にも掛けていないので問題なさそうだ。
問題は――。

「……こっち、だわなあ」

ひとつつぶされたが、終焉牙の残りの目が爛々とダンテスとラルクを見据えている。
ダンテスの「キミウツスカガミ」による攻撃反射も警戒しているだろうが、それ以上に警戒しているのはやはりラルクだ。ラルクこそが最大の脅威だと認識している。

「こりゃあ……守り切らねばなるまいな」

大盾を構えたダンテスは、「キミウツスカガミ」の残りの発動時間を思いながら脱出手段に考えを巡らせる――はずが、

「――は？」

目の前の地面が盛り上がったと思うと、そこから礫弾が射出される。あわてて大盾で防いで事なきを得たが、次の瞬間には目の前に終焉牙が迫っていた。

（発動発動発動）

先ほど攻撃反射によって傷ついたほうではない、左前脚が振り下ろされる――ダンテスは「キミウツスカガミ」を発動させる。身体を魔力の膜が覆う――ぎりぎり、間に合った。

「なっ、なに!?」

だが前脚はダンテスの手前でピタリと止まった。

ジジジジッ、という音は触媒を消費する音だった。すべての触媒を短時間で消費しきるとダンテスを覆う魔力膜は消え去った。

（このモンスター……知性があるのか!?）

予想もしなかった【土魔法】による攻撃。間髪を入れず直接攻撃。その間ずっと、終焉牙はダンテスの行動を観察していた。

攻撃を反射するのは、いったいどういう条件で発動するのかを。

反射し続けるのであれば最初の【土魔法】だって反射できるはずだ。だがそうではなかった。ということは強い攻撃だけを選択して反射する――逆に言うとずっと反射することはできない。

「ぐはっ」

魔力膜が消えたダンテスを、いともたやすく終焉牙は吹っ飛ばした。ダンテスは１０メートル以上飛んでバウンドすると、また数メートル転がった。大盾は数秒経ってから離れた場所に落ちてガランと音を立てた。

今、終焉牙の目の前には地面に横たわるラルクがいる。自分の目を潰した憎き相手が。

『グルルルル――』

終焉牙が口を開け、ラルクを噛み砕こうとする寸前のことだった。

『！！』

ハッとして身を引く終焉牙の鼻先に、炎の矢が飛来する。

『グルルァァッ！！』

多少の魔法ならば食らってもびくともしないはずが、終焉牙はイヤイヤするように顔を動かしてかわし、最後には後方へと跳ねてかわす。

その判断は正しかった。

飛んできた【火魔法】は大きさこそ小さかったものの、終焉牙がかわしたせいで地面や建物に当たると爆発を起こすほどの威力だったからだ。

「――間に合った。間一髪、だけど……」

倒れた少女の前に立った少年は、終焉牙から守るように両手を広げた。

そして倒れた少女へと視線を向けると、くしゃりと表情をゆがめた。

「こんなになるまでがんばったんだな……」

レイジは地面に膝をつくと、虚ろな視線を彷徨わせるラルクへと手を差し伸べた。

罪と咎

★　ラルク　★

鉱山に「弟くん」が連れてこられた日のことは今でも覚えている。
すべてをあきらめ、すべてに絶望し、うつむいていた少年。
彼を見たときに感じたのは「絶対に守ってやる」という思いだった。
そしてその思いが消えることは、これまで、一秒たりともなかった。

あの日――「六天鉱山（シックスマイン）」で崩落があった日、ラルクの精神を縛りつける契約魔術が解かれた。楔が外れて積んでいたレンガが崩れ落ちるようにラルクの心は広がっていき――急に目の前が晴れたような気持ちになった。
押さえつけられていた欲望が膨れ上がり、目の前にあった天賦珠玉【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】を手に取ると体内に取り込んだ。
全身で感じる全能感。
ラルクは自分へと襲いかかってきた兵士たちを次々と斬った。
そうして、はたと気がつく。
自分を見つめる視線に。

「……」

彼はなにも言わなかった。言えなかった。
鉱山奴隷として生きていて、ラルクにとって唯一の心のよりどこ

ろであり、自分になにかあっても彼の命だけは助けようと思っていた――弟。

その彼が自分に怯えているのは一目でわかった。

全能感が急速にしぼんでいき、この数秒で「人殺し」に変容した自分に気づいて――自分が、たまらなく汚らわしい存在のように感じられた。

胸を満たしたのは「後悔」だ。後になってみれば「弟くんを助ける方法は他になかった」とわかるのだが、それでも、あのときのラルクは重い後悔によってつぶされてしまいそうだった。

――弟くん。

手を差し伸べた。

どうか、この手を取って欲しいと願って。

そうすれば自分は「人殺し」の罪を背負っても生きていけると思って。

――ひっ。

と、おののいた彼を見て、ラルクは手を引っ込めた。

そうに決まっている。欲望に突き動かされたやすく人を殺した自分が、誰かに愛されることなどあるはずがない。

ラルクは彼に背を向けて歩き出した。

彼の命を救うことができた。そのためになら死んでもいいと思っていたのは自分だ。だから、今は満足しろと自分に言い聞かせて。

それからのことはあまり覚えていない。

気がつくと鉱山の麓の町にいて、「奴隷が反乱した」だのいう言葉が聞こえてきた。自分の格好が鉱山奴隷のそれだと気づいて、服

を売っていた店へ入り込むといくつか見繕って盗み出し、着替えた。食事も盗んだ。そうして町を転々として――やがて領都へとやってきた。

そこでまさか、彼に再会できるとは思わなかった。

だがその再会こそが、きっと最後に神様が与えてくれたチャンスなのだろうとも思えた。

自分は人を殺し、星6つという「値が付けられない」とヒンガ老人に言わしめた天賦珠玉を体内に取り込んだ。見つかれば確実に処刑。弟とともに行動していれば、弟も殺されるだろう。

ならば、彼とは離れて生きていったほうがいい。

ただそれでも――未練がましく「いつかどこかで」なんて文字を残した。彼が、目にするわけもないのに。

それからはいろいろなことがあった。

殺したぶんを取り返すかのように多くの人たちを救い、身体は不調に次ぐ不調で何度も血を吐いた。【影王魔剣術】のせいだろうとは気づいていたけれど使わないわけにはいかなかった。もはやこの天賦はラルクの身体の一部だ。そうして最後は「月下美人」まで盗み出した。わけのわからない亀裂が空に現れたりしなければ今ごろ身体の治療のために遠国にまで足を伸ばしていたことだろう。

（……クソッタレ）

レッドゲートから出現するモンスターとの戦闘は熾烈を極めたが、それでも、少しずつ、ほんの少しずつ、自分の心が軽くなるのを感じていた。少なくとも自分は今、誰かの役に立っている。ラルクの行動はすべて鉱山で殺した罪もない兵士たちに対する、罪滅ぼしだった。

（こんなことを思い返すってことは……あたしは長くないんだな……）

終焉牙を見た瞬間、「勝てない」と思った。だが「やらなきゃ」とも同時に思った。星６つの天賦を持ってしても勝てないような相手こそ、自分が命を懸けるにふさわしいと思えた。

背負った「罪」が「消えた」と自分で思えなければ――「いつかどこかで」、弟と再会することはできないと信じていたから。

それこそがラルクが、自身にあるのだと信じている「咎」だった。この罪と咎は、自分が死ぬまで消えないということは薄々勘づいている。だとしても歩みを止めることはできない。

それはラルクが、彼の姉だから。

彼を守ろうと誓ったときからずっと、ラルクは思っている。彼の姉としてふさわしい生き様を送りたいと。

（……あたしは、弟くんに恥ずかしくない生き方をできたのか……？）

終焉牙を倒すことはかなわなかった。

運が悪かったとしか言えないが、今さらそれをとやかくは言わない。勝負は時の運だから。

ただこのままあの巨大種が解き放たれ、弟にまで危害を加えたらと思うと――それだけは悔やまれる。

自分を守ろうとした冒険者が吹き飛ばされ、終焉牙が近づいてくる気配を感じる。

（ああ……あたしは、今度は誰も守れなかったのか……）

だがなぜか、終焉牙は後ろへ飛びのいた。魔法が使われたらしい――。

「こんなになるまでがんばったんだな……」

ラルクは目を見開いた。
まるで鉱山にいたときのように貧乏くさい格好で、腰には道具袋までぶら下げている。剣だけは見慣れなかったけれど――それでもそれが彼だとはすぐに気がついた。
ウソだろ、とか、なんでここに、とかいう言葉よりも先に――出てきた感情があった。
差し伸べられた手は、あの日、鉱山で崩落があった日、ラルクが差し伸べた手と同じだった。

……あたしは、手を取って欲しかったんだ。
……弟くんだから、取って欲しかったんだ。

言いたいことは山ほどあった。
でもそんな恨み節は口を突いて出てこなかった。
いつの間にか弟は大きくなって、身長は抜かされているかもしれない。
触れた彼の手は大きくなっていて、引き寄せられ、抱きすくめられると――温かくて。
自分が守られる立場になるだなんて、考えてもみなかった。

「……大きくなったなあ」

ラルクの口から出た言葉はそれだけだった。

罪と咎（後書き）

本話のサブタイトルは誤字ではありません。

23

大きくなった――その声を耳にしたとき僕はこの４年に起きたことが身体に一気に流れ込んできたように感じられた。

４年だ。

長かった。

僕が大きくなるには十分な時間で、ラルクが天賦を使った反動で命を磨り減らすにも十分な時間だった。

「……ちょっと待ってて、姉さん」

話したいことはいくらでもあった。でも、今は――目の前の問題に立ち向かわなければならない。

姉さん、と僕が言ったとき、ラルクの身体がピクリと動いた気がした。彼女をその場に座らせる。ダンテスさんのことも気がかりだったけれど、気を失っているだけのようなのでとりあえずは大丈夫だろう。

今は――。

「終焉牙をどうにかしなきゃ」

僕はラルクから離れて数歩進む。終焉牙は魔法を警戒して飛びのいていたけれど、あの魔法程度で退けられるような相手じゃない。

戦って勝てるか？

「裏の世界」でフォレストイーター、ヒトマネと見てきた僕からすると単独で勝てる確率はほとんどない。先ほどの攻撃で終焉牙もダメージを負っていたけれど、多少の傷という程度だ。大体、８の巨大種は種族の存亡を懸けて攻略するような相手だ。アーシャみたい

に規格外の魔力を持っていたとしても倒しきれない相手だ。
なら、できることは少ない。
僕は――「説得」に一縷の望みをかけた。

「終焉牙……と、呼んでいいのかはわからないけれど、話を聞いて欲しい」

【風魔法】を使って終焉牙へ向けて声を送る。終焉牙の反応はないが、逆に言えば動きもなく、3つの目を吊り上げた怒りの顔をこちらに向けている。

「……弟くん、なにをしてるんだ？　モンスターに話なんて通じない」
「大丈夫だから、ここは任せて」

ラルクの忠告はもっともだったけれど、僕はヒトマネとすでに会話しているのだ。

「僕はあなたたちの世界で、フォレストイーター、ヒトマネと遭遇しました。ヒトマネはフォレストイーターのことを『大ヤギ』と言っていましたが……あなたも『星刻語（アース・トーク）』を使うことはできませんか？」

『……』

沈黙だ。答える気がないのか、話せないのか、あるいは――聞こえていないのか。

「あなた方は『幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）』によって操られています」

そのとき初めて、終焉牙の表情に変化が現れた。かすかな変化だったけれど――ようやく僕の言葉に耳を貸そうとしているかのようだった。

行けるかもしれない。

幻想鬼人がなにを考えているかはまだまだわからないけれど、こちらの世界を害そうとしていることは明らかだ。

終焉牙を操ってレッドゲートを広げ、襲撃する――フォレストイーターやヒトマネが暴走していたことを思えば十分にあり得る。

『……我は――』

終焉牙の瞳が右を向き、左を向き、そうしてわずかに星刻語が発せられたときだった。

「――弟くん！」

ラルクの声に振り返った僕は、

「あ……」

その空に、黒い影を見た――何隻もの軍事魔導飛行船がこちらへ向かっているのだ。

そして砲台がチカッ、チカッと光ったと思うと、黒の砲弾が終焉牙目がけて降り注いだ。

ドッ――ドドドドドッ――――。

攻城戦の兵器ともなり得る砲撃の衝撃はすさまじく、終焉牙だけでなく周囲の建物に当たるや貫通して地面に落ち、爆発する。

終焉牙は踊るようにそれをかわすが、数発が被弾する。

『グルルルアアアアアアアア！！！！！』

砂塵が舞い上がり、咆吼が音圧となって僕の身体にぶち当たる。

「くそっ……あと少しで話ができそうだったのに！！」

「逃げろ！　早く！」

ラルクが叫んでいる。

終焉牙は憎々しげに空を見上げる――もうダメだろう、また終焉牙の思考は怒りに染まってしまった。

僕は振り返るとラルクを抱え上げ、走り出した。

「バカ、あたしはいいから！」

「……」

「あたしはいいんだ！　弟くんだけでも逃げて――」

「――黙って。集中できない」

「集中ってなんだよ！？」

思い出していたのはヴィルヘルム様の動き。

レフェリー様が「瞬歩」と呼んでいたあの移動方法だった。

（踏み込んで――飛ぶ）

それはぎょっとするような体験だった。簡単に言えば、目の前の風景が一瞬で切り替わる。確かに移動したはずなのに僕は空気抵抗も感じなかった。

「うおあ！？　なにしたんだ！？」

腕の中のラルクも驚いている。
だけど説明している余裕はないので、そのままダンテスさんのそばまで走った。

「う、うぅ……レイジ、か？」
「気づきましたか」
「今、どうなってる……」
「飛行船から終焉牙を空爆しています。ダンテスさん、一度ラルクと避難してもらえますか」

起き上がったダンテスさんは僕と終焉牙を見て、うなずいた。
この人はさすがだ。今なんの情報が必要で、なにをするべきか、こんな状況でも瞬時に判断できる。

「わかった。――来てくれるな、ラルクさんよ」
「ちょっ、ちょっと待ってくれ！　弟くんはどうするんだよ！？」
「僕はまだ戦います」
「そんなの――」
「――ラルク、後で話すから。あの終焉牙は僕がどうにかしなきゃいけない……気がするんだ」

するとラルクは黙り込んだ。ダンテスさんが手を差し伸べると、

「大丈夫……ひとりで歩ける」

とその手を断った。

「……レイジ、っていうんだな」

僕はうなずいた。

名前のこともあとで説明しなきゃ。

「僕はレイジで、冒険者で、ダンテスさんと同じ『銀の天秤』のパーティーメンバーで……それで、姉さんの弟なんだ」

ああ、ほんとうに、話さなければいけないことがあまりにも多い。

「だから、行ってくる」

ふたりに背を向けて僕は走り出した。

24

軍事用の魔導飛行船から降り注ぐ砲弾は、数百発を数えた。これほどの砲弾を一気に放出するというのはかなりの大盤振る舞いなのではないかと思うけれど、こうでもしなければ倒せないと踏んだのだろう。

終焉牙は先ほどの場所にはすでにいなかった。地面を蹴って走り、砲弾を回避しているのだ。そのせいで命中率は著しく下がって、１０発放って１発も当たらないような有様だった。

（砲撃に慣れていないのか？）

レフ魔導帝国は小国で、魔道具の技術によって成り立っている。これまで大きな戦争をしたこともなく、武力として軍事用の魔導飛行船を所有しているものの、実戦投入したことなどなかった。

それに砲台は動かない城壁を破壊したりするためのもので、巨大モンスターを狩るために使うなんてことは想定外なのだろう。

僕は建物の屋上に出ると終焉牙がどこにいるかを探したが、あの巨体が走っているのであればすぐにわかった。

北側の絶壁付近にいる。終焉牙の巨体ならば、ジャンプすれば絶壁を登れそうだと僕は思った。もしかしたら帝国は北側へ――「未開の地カニオン」へと追いやるつもりなのかもしれない。

（……そんなに上手くいくだろうか？　その前に、飛行船の優位を過信しすぎじゃないだろうか？）

魔導飛行船は左右に展開しながら終焉牙を追い詰めていく。

最初の砲撃時に見たときよりも高度が下がっているのは、砲撃が

当たらなかったから近づこうとしたせいだ。
いくら終焉牙が巨体であったとしても、３００メートルほどの上空にあればジャンプしても届かないと考えているのだ。

「ん……？」

僕はそのとき、気がついた。
終焉牙の体表に這っていた魔力がすべて消え去っているのだ。転ばされて地上から攻撃を食らっていたときでさえ這わせていた魔力が、ない。
砲撃を食らえば大ダメージだが、「かわせる」という自信があるのかもしれない。
なくなった魔力はどこに行ったのか――。

「ッ！？　ダメだ！」

地上からのジャンプなら、届かないのは間違いない。
だけど彼らは勘違いしている――終焉牙は、巨大種たちは、魔法を使えるのだ。
レッドゲートが出現したとき、フォレストイーターが魔法を使っていたのを僕は思い出した。

『コオオオオオオオッ』

吠えると同時に、楔（くさび）のような形をした、暗紫色のエネルギー塊が出現した。１本、２本、３本……その数は最終的に、飛行船の数と同数になった。
ロケット弾のように方向が調整され、尖った先端が飛行船へとロックオンされる。
魔導飛行船の対応は様々だった。

砲撃を放ったり、あるいは旋回して逃げようとしたり。
エネルギー塊が射出される――砲撃のために停まっていた飛行船には次々に突き刺さり爆発していく。
逃げようとしていた飛行船には、かすったもの、当たらなかったものとあったが、周囲の爆発に巻き込まれて大きくバランスを崩した。

「ああ……」

無傷で逃げ出せたのが2隻だけで、爆発で全損したものが半分ほど、巻き込まれて墜落したものが残りだった。

『グオオオオオオオオオッ！！』

勝ちどきを上げるように終焉牙は吠えた――だけど、僕は見ていた。
まだ勝負はついていない。
地上から多くの兵士たちが終焉牙に向かって駈け出している。
空から、爆発した飛行船の破片が降り注いでいる中を。

「――すごい」

彼らだって今の惨状を見ていたはずなのに、怯まずに進んでいく。
死を恐れないのか――怖くないわけがない。だけど、それでも、ここで戦わずしてどうするとばかりに突き進む。
魔力の鎧がなくなった今がチャンスなのだ。

「僕も行かなきゃ」

屋上を蹴って空へと身を投げ出した。【風魔法】で加速し、【火

魔法】で上昇し、次々に屋上を飛び移っていく。短距離ならば「瞬歩」も使えたけれど、まだ慣れないからスタミナの消費が激しい。

ワァッ――と喚声が耳に聞こえてきた。

魔法を撃ち終わった終焉牙はいまだ魔力の鎧を身に纏っておらず、飛び跳ねては踏み潰そうとしている。

そこへ、巨大な弩弓を抱えた部隊が現れた――キースグラン連邦の兵士らしい。3人で引く弓につがえられるのは短槍のような矢だ。それらが発射されると、地面にばかり気を取られていた終焉牙の左側面に次々に突き刺さる。

『グルルルオオオ』

次に現れたのは見覚えのある淡い青色――聖水色の魔力を放つ、元聖王グレンジード様だ。矢によって足が止まった終焉牙へ接近すると、その左前足に、すでに傷をつけられていたその足に深々と槍を突き刺した。

右側面でも動きがあった。光天騎士王国の騎士たちが一斉に突撃する。先頭を走るのはひときわ大きな騎士で、信じられないほど大きな剣を担いでいる。

だけどそのときには終焉牙も反撃に転じようとしていた。大きく息を吸い込んで咆吼を放とうとしたのだ。一時的にも人々を退けるのならば面で圧迫できる咆吼は有効だ。

「あれは……」

けれど、放たれなかった。

息を吸おうとした終焉牙に向けて放たれた革袋を僕は目撃していた。それは終焉牙の口に引っかかるとパンッと弾け、粉塵をまき散らす。

咆吼の代わりに終焉牙はクシャミをし、ヨダレと涙を降らせた。

「ミミノさんだ！」

あんな薬剤を戦線に投入できるのはミミノさんに違いないと僕は思った。ミミノさんの姿は見えなかったけれど、方角的に光天騎士王国の軍勢に紛れ込んでいるらしい。

この間に、先頭の巨大な騎士が突っ込んで行き――なんと終焉牙の左前足を斬り飛ばした。ワァァッとひときわ大きな歓声が上がる。

（すごい、すごい！）

キースグラン連邦、クルヴァーン聖王国、光天騎士王国の３カ国が共同で戦線に立ったことなんて歴史をひもといてもほとんどないはずだ。だけれど彼らは、戦争のプロたちは、あうんの呼吸で戦況を読み取り、自分たちの最善をこなしていく。

類い希なる才能とか、星の数の多い天賦とか、そういったものが大きく影響するこの世界であっても、人が集まればそれは確かな力になるのだ。

僕も彼らの力になりたい。

「行くぞ！」

終焉牙までの距離は５００メートルほど。背の高い建物はもうなく、僕は最後の屋上から宙へ飛び出した。クルヴァーン聖王国の聖王騎士たちの頭上を飛んで一気に終焉牙へと迫る。

視界を失った終焉牙は苛立ったように周囲を踏みならす。斬られた左前足は浮かせたままで。

「お前ら！　今だ、畳み掛けろ！」

突き刺した槍を持って行かれ、無手となったグレンジード様が叫ぶ。

すると――終焉牙はくるりと後ろを向くと、

「聖王陛下ァァ！　お逃げください！」

「尻尾です！！」

聖王騎士たちが叫ぶ。

終焉牙は身体を後ろに向けて、ナナメに――ちょうどグレンジード様へ向けて、尻尾を振り下ろしたのだ。

「あ――？」

高速で迫る、巨大な尻尾はそれだけで凶悪な武器だ。

気づかず振り返ったグレンジード様が回避することはもはや不可能だった。

「――させない」

その前に滑り込んだ僕は、右手に【火魔法】を5つ、左手に【風魔法】を5つ発動させる。

しかも圧縮して破壊力を増したバージョンだ。

「『爆炎嵐（ボムトルネード）』ッ！！」

以前から使っていた「火炎嵐（フレイムトルネード）」の改良版。

放った魔法が、尻尾と正面から衝突し、大爆発を起こした。

25

爆発によって跳ね上げられた尻尾と、飛び散りきらめく炎の破片。
終焉牙はいまだ暴れており地面はぐらぐらと揺れている。

「お前ッ、伯爵（ヴィクトル）んとこの――」

グレンジード様は僕にすぐ気がついたみたいだったけれど、

「閣下、礼も取らず去るご無礼、お許しを」

旧交を温めているような時間はない――いや、まあ、旧交があったのかと言われればアレだけど。

「うおおおおおおッ！」

僕は大地を踏みしめ走り出す。跳躍し、魔法を使って上空へと。

「――飛んだ!?」
「――人が、どうやって」
「――魔法を使って飛ぶという話を聞いたことがある」
「――魔道具じゃないのか」

兵士や騎士たちのざわつきが聞こえたけれど、それは後だ。

「終焉牙ッ！　いい加減に止めてください！　こうなればどちらも大きな被害が出ます！　それは、幻想鬼人の思うつぼでしょう!?」

怒りに瞳を濁らせていた終焉牙は、咆吼を放って僕を落とそうとする。
その咆吼に魔力が込められていることは【森羅万象】によって分析済みだ。【風魔法】をぶつけると衝撃とともに咆吼は破壊され、反動で僕の身体は大きく舞い上がった。

「ッ！」

見下ろして気づく。もう、魔力の鎧は復活している――。

「皆さん、下がってください！　すでに終焉牙は魔力で覆われています！」

押し込めば行けるかと思えた戦況だったけれど、終焉牙が魔力の鎧を手にしてしまえば形勢はあっという間に逆転だ。こちらには追加の飛行船はないみたいで、空は沈黙している。このまま戦いを続ければここにいる人たちの大半が死ぬだろう。
すると、前足を斬り飛ばした長身の騎士が叫ぶ。

「君はなにをしようとしている！！」

すごいな。僕は１００メートルくらい高いところにいるのに、はっきりと声が聞こえる。
【風魔法】に声を乗せて僕も叫び返す。

「終焉牙を説得します！」
「できるのか！！」
「やってみます！！」

するとその騎士は――部下らしい光天騎士王国の騎士を下がらせ

ていく。それに応じるようにグレンジード様も聖王騎士団を、キースグラン連邦の兵士たちも下がっていく。

僕は魔法で空気抵抗を上げながらゆっくりと降りていく――今回は【風魔法】様々だ。殺傷能力はない魔法だと思っていたけど、こういう使い方をさせたらメチャクチャ便利だった。

終焉牙の正面へと、僕は降り立った。

「終焉牙、話を聞いてくれますか。戦闘に突入したことは悲しいすれ違いです」

『……』

「僕の仲間が大勢傷つき、命を落としました。あなたも前足を失いました。これ以上戦うことはお互いに利益がないですし、幻想鬼人が喜ぶだけです」

『……ヴィ、幻想鬼人め……』

終焉牙の怒りは収まっていなかったけれど、それが少しずつ、幻想鬼人へとすり替わっていくのを僕は感じた。

「お願いです、戦いを止めてくれませんか。あなたの世界へ戻って欲しい。そうしたら僕が、あの空の亀裂を――レッドゲートを閉じます」

『……小さき者、なにができる？　……いや、お前は、そうか……』

なにかを感じ取ったのかもしれない。僕が、【森羅万象】を持っているからだろうか？　あるいは腰の道具袋に入っている【離界盟約】の天賦珠玉を？

「あの空を解析し、閉じます」

『……いまだ、幻想鬼人の気配を感じる……』

「ヤツはなにをしようとしているのですか」

『わからぬ……だが……ぬっ』

終焉牙の目の色が赤く染まった――それはあまりに突然のことで、なんの予兆もなかった。

『グルルルルアアアアアア！！！！！！』

とっさに【風魔法】を展開したけれど咆吼の威力を殺しきれなかった。僕の身体はボールのようにはね飛ばされて後ろへ飛んでいく。全身をひっぱたかれたような衝撃は【回復魔法】で癒しながら、空中で向きを変え、着地する。

『「災厄ノ子」ガ、小癪ナ真似ヲ……！　巨大種ハ我ラノ駒ダ！！』

「調停者！！」

終焉牙の顔に、まとわりつくような黒い炎が発生している。

調停者だ。

ヒトマネやフォレストイーターのときには精神を操っていたようだけれど、今、調停者は直接終焉牙をのっとっているのだ。

「マズい――」

終焉牙の身体を使って、調停者は先ほどの魔法をもう一度放とうとする。【闇魔法】に属するその魔法は、魔力の鎧を捨ててでもロケット弾のように楔を発射する。
ずらりと、並んだ楔の数は１００を超えた。
終焉牙の身体からは急速に生気が失われ、瞳からは血の涙が垂れ、毛皮は枯れ草のようにしおれていく。
終焉牙の魔力は１００発も魔法を撃てるほどない。
だから――生命力を犠牲にして魔力へと転換したのだ。
自分の身体ではないからできることだった。

「皆さん、逃げてください！！」

僕が叫ぶまでもなく、多くの兵士たちが逃走態勢に入っていた。
だけどグレンジード様やあの長身の騎士は両腕を組んでその場に立っている。
まるで――僕が戦っているのを放って、逃げるわけにはいかないとでも言いたげに。

（でも、でも、今からなにができる？　もう魔法は発動しているのに！）

考えを巡らすけれど、１本や２本の楔を吹き飛ばすことはできるとしても、３桁は不可能だ。これは魔導飛行船を撃ち落とすようなしろものなのだから。
そんな僕をあざ笑う調停者が、告げる。

『コレデ「災厄ノ子」ニ煩ワサレルコトモナクナル……カカカカカカカカカッ！』

１００本を超える【闇魔法】のロケット弾が発射された。

26

時間にしてはほんの数瞬という短い時間だった。
だけれどそのとき僕が目にして、考えたことはあまりにも多かった。
まず見えたのは、ミミノさんだった。ミミノさんは光天騎士王国の長身騎士の隣に出現し――そうとしか言えないほどに空中から突然現れたように感じられた――僕に向けて小さなビンを数本見せた。
ミミノさん逃げて、とか、どうやって出てきたのか、とか、考える一方で、僕はそのビンがなんなのか気づいた。
推測にしか過ぎない。
でも、そうとしか考えられない。
だから僕は両手を広げ――すべての魔力を込めて魔法を発動した。
【光魔法】を。
それは【闇魔法】とは対になる魔法で、楔ロケットを止めるには最も適した魔法であるはずだった。
ただ問題は――膨大な終焉牙の魔力量に対して、僕の魔力では到底かなわない、ということだ。
それを解決するのが、ミミノさんのビンだ。

「レイジくん！！」

ちょっと会わなかっただけのミミノさんなのに、なんだかとても懐かしい。そして会ってすぐ僕を信じて――僕ならやってくれると信じて、あのビンを投げた。
ごっそりと魔力が抜ける感覚――僕の魔法が発動する。

「きらめく極光（グリントオーロラ）！！」

ぐるりとロケットを取り囲むように出現する光のカーテン。
発射された【闇魔法】は先端がその光に触れるや溶けるように消えていく。
僕の魔力は、【魔力量増大】の天賦を取り込んだこともあって一般の魔法使いよりははるかに多い。だけど――それでも、消せるのは5分の1がせいぜい。
カーテンの光も、闇を打ち消すのと同様に消滅していき、やがて穴が開いた。

『無駄ナコトヲ！』

調停者の勝ち誇った叫びが聞こえる。
そうだろう。こんな薄いカーテン1枚で防げるような魔法じゃない。
すぐにもカーテンはズタズタになって外へと闇の楔が飛び出していく――。

パリンッ。パリンパリンパリンッ。

放物線を描いて僕の足元まで飛んできたビンが割れるや、紫色の燐光をまき散らす。
と同時に、動画を早回しするように、割れた数と同じだけのカーテンが出現した。

「1枚なら無理でも、枚数を重ねればいい」

『――ナァッ！？』

これはミミノさん特製の「魔法複製薬（デュープ・ポーション）」。発動した魔法をもう一

度再生するというとんでもない秘薬だ。
ミミノさんは僕がなにか、魔法で解決しようとするだろうと考えてこの秘薬を使ってくれたのだ。
途端にまばゆくなる周囲。
ドドドドドドッ――と【闇魔法】はカーテンに直撃して消滅していく。
光量はすぐにも少なくなって、最後の闇が消えると、最初の1枚程度の光だけが残り、それもまた溶けるように消えた。

「ふぅー……」

その場に膝をついてしまったけれど、なんとかかんとか意識までは手放さずに済んだ。

「レイジくん！」
「うばあっ！？」

横からミミノさんに飛びつかれ、僕は結局地面に転げた。

「レイジくんだべな！？　本物の！」
「あ、は、はい……」
「よかった……生きててよかったよぉ……」

僕に馬乗りになりながらメソメソと泣き出してしまう。その身体の大半が透けて見える、謎の光学迷彩っぽいマントが気になってしょうがないのだけれど、それはともかく、

『ナ、ナ、ナンナノダ、貴様ハ……！』

まだ戦闘中だ。

僕はミミノさんにどいてもらって立ち上がると、調停者を見やる。

『「災厄ノ子」、ヤハリ最初ニ貴様ヲ殺スベキダッタ』

ゆらりと炎が揺らぐと、人の形となって終焉牙の外へと出てくる。

立っていられないほど衰弱した終焉牙はその場に倒れた。

どこに隠し持っていたのか天銀のプレートメイルが調停者の身体にはまっていく。

調停者は単体でも強い。

僕の、魔力カラッポの状態で戦えるのか……？

「……弟くんを殺す？　冗談言えよ。死ぬのはアンタだろうが」

そのとき僕の背後から声が聞こえた――。

「ラルク……！？　どうして！」

ぼろぼろで戦線離脱したはずのラルクがここにいた。

服装こそさっきと同じだったけれど、その足取りはしっかりしている。

「貴族の嬢ちゃんに治してもらったんだよ、『鼓舞の魔瞳』とかいうやつでさ。力、使いすぎてぶっ倒れたみたいだけど」

「え？　え？　エヴァお嬢様が？」

確かにラルクの力は回復していると【森羅万象】でも答えが出ている。

「ノンに治してもらって、俺も戦線復帰だ」

あちこち汚れていたけれど、大盾を持ったダンテスさんもやってきた。

「……騎士が守られるのでは話にならんな」

すると光天騎士王国の長身の騎士もやってきて、僕の前に立った。

「おい、レイジ。後で話があるからよ、今度はちゃんと待っててくれよな――あの黒い野郎にゃ恨みがしこたまあるもんで、そっちが先だ」

グレンジード様も予備の槍を手に調停者へと向かう。

他にも続々と騎士や兵士が集まってくる。

これだけいれば、いくら調停者とてどうしようもないだろう。

『……』

だけれど――調停者は無言だった。

そのたたずまいにはどこか「余裕」さえ感じられる。

（なんでだ？　他に何体もいるから、この1体が破壊されてもどうでもいいみたいに思っているのか？　あるいはなにか他に――）

ちらり、と調停者が見やったのは空。

レッドゲートだった。

「あ――」

それは最悪の展開だ。

ゲートの向こうにちらりと黒く巨大な影が見えた。

「次です」

僕は声を上げた。

調停者は、次の巨大種をこちらに連れてこようとしている――。

「ラルク！　調停者の相手、お願い！」

「そりゃ最初からそのつもりだったよ。んで弟くんは……ってどこ行くんだ！？」

僕は走り出した――レッドゲートへ向かって。

次の巨大種が出てくる前に亀裂を塞がなければならない。

だけど、走り出してすぐにがくんと膝に力が入らなくなった。魔力を使いすぎたのだ。

「レイジくん、これ！　体力と魔力の回復薬だ！」

「っ、ありがとうございます……！」

さすがミミノさん、わかってくれてる。僕は飛んできた小さなビンの蓋を取って、甘ったるい液体を口から流し込んだ。腹の中が熱くなって、力が湧いてくる。

「行ける……！」

僕は走り出す。【疾走術】で、常人ならざる速度で。

道具袋から取り出した、星１２の天賦珠玉【離界盟約（ワールド・アライアンス）】。

これがあれば、なんとかなるはずだ。

「間に合えええええええ！」

27

レッドゲートは終焉牙が通行したせいで大きく開いており、大型モンスターでも簡単に通り抜けられるような有様だった。

終焉牙の周囲に多くの兵力が割かれているけれど、帝国市街地にはさらにモンスターが追加されており、こちらでも激戦が繰り広げられている。

僕は戦う人々の間をすり抜けるように走り、レッドゲートを目指す。

レッドゲートから吹き込んでくる風は濃密で、肺を焼くような異様な瘴気を持っている。【森羅万象】によれば微毒であるという。

終焉牙が出てきたことを考えるに、レッドゲートがつながっている先は――「裏の世界」の「未開の地カニオン」。８の巨大種が縄張りとしている土地だ。

「――あれは……！」

黒いシルエットでしか見えなかったが、終焉牙と同等の大きさだ。

フォルムは丸く、動きは鈍重。

亀の巨大種である「封印亀骨（ロストジュエル）」だ。

『オオォォォ……』

開かれた口からカッと光が放出される。

それは耳をつんざく爆音とともに帝国の地面に突き刺さると地面を割り、土砂を巻き上げる。口を向けた方向へと光は走り、高層建築を次々と真っ二つに割って消えた。

一拍遅れて斬られた建物が滑り落ちるように崩れていく。

「……むちゃくちゃだ」

瞳は赤黒い光を放っており、怒りに感情を支配され、正気を失っている。つまり終焉牙と同様に調停者にコントロールされているのだ。

あんなのが来たらたまらない。

のそり、のそりと封印亀骨はレッドゲートへ近づいてくる。動きが遅いのが不幸中の幸いだけれど、あと数分もしたらこっちに来てしまうだろう。

僕はレッドゲートの下までやってきた。落下によって死んだモンスターが山をなしており、すさまじい腐臭を放っていた。追加の大型モンスターが落ちてきてはあちこちへ散り、あるいは死体を漁っている。

建物の陰に隠れ、僕は身体から【森羅万象】を抜いた。

「ッ……！」

動悸が速まり汗が噴き出した。気持ちの面でもだいぶ無理をしていたみたいだ。【森羅万象】がもたらしてくれる冷静な思考でなんとか押さえつけていたのに、これがないと今すぐ逃げ出したくなるし、泣きたくなる。

「しっかりしろ……！　これは僕にしかできないんだぞ……！」

代わりに取り込むのは星１２の天賦珠玉、【離界盟約】だ。

これは、これだけは、僕にしかできない。

僕は異なる世界からやってきた転生者で、スキルホルダーが１６あり、そんな境遇の人間は僕以外にいないのだから。

（僕はたったひとりだ。でも、ひとりぼっちじゃない……！）

僕には仲間がいる。仕えていた人たちもいる。

押し寄せてくる孤独感をはねのけ、僕は天賦珠玉を掲げる――するりと溶けるように身体に入り込んでくる。

今の「盟約者」がどこにいるのかがわかる。

ふたつの世界を成立させる盟約の情報がクリアに、頭に浮かんでくる。

「……やっぱり、あのレッドゲートはイレギュラーだ！　完全な盟約違反！！」

見上げたレッドゲートがどうやって世界をつなげたのかがはっきりとわかる。

ラ＝フィーツァは、完全に、自由に、ふたつの世界を行き来できることを目的として「九情の迷宮」を作ったのだ。

僕も使った、歩いて通れる世界をつなげるルートは確かにあったけれど、あれは調停者たちが監視しているものでいつでも簡単に閉じられてしまう。

調停者の管理外のルートを作ろうとしたのだ。

ラ＝フィーツァの作り上げた「九情の迷宮」は長年に渡り「９つの感情」エネルギーを溜め込んだ。「天賦珠玉」が非常に重要な数字として考えている「８」を超える「９」をもって、そのエネルギーをぶつけ、ふたつの世界をつなげる盟約に穴を空けた。

その穴こそがレッドゲート。

一度空いた穴を固定化すれば、世界はつながる。

だけど、計画は完璧じゃなかったみたいだ。

迷宮の経年劣化による崩落もあって、想定ほどエネルギーはたまっていなかった。結果として穴の固定化はできておらず、終焉牙が無理やり広げることもできたし、逆に言えば、

「今なら閉じることができる……！」

盟約にとってイレギュラーであるレッドゲート。流れ込んでいる「九情の迷宮」のエネルギーは、今や僕の目にははっきりと見える。

「でも……間に合わない」

解決方法は簡単なことだ。「九情の迷宮」に行って、その機能を停止すればいい。全部を止める必要はなくて、レッドゲートを維持できなくなる水準まで落ちればいいのだから、３つか４つでいいだろう。

だけど――今から各迷宮に潜って、機能を停止している間に封印亀骨はこちらの世界にやってきてしまう。

「どうすれば、どうすればいいんだよ……！？　レッドゲートを閉じる方法がわかったって、時間が足りないんじゃあ――」

僕はこのときまで気づいていなかった。【森羅万象】を外したせいかもしれないし、すさまじい腐臭や瘴気のせいで注意が散漫になっていたからかもしれない。

そんな巨大な生き物が背後にいるだなんて、気づきもしなかったのだ。

《「災厄の子」よ》

振り返ったそこにいたのは。

《閉じ方がわからず我らは手をこまぬいているだけであったが……幻想鬼人は調停者の範疇を超えて少々やり過ぎた》

巨大な翼を持ち、鱗は魔力によって覆われている。
アッヘンバッハ公爵領領都で見たときには金色に近い色合いだったけれど、僕に話しかけてきた個体は赤色で、その背後の上空には４体の、青、紫、紫、緑が飛んでいた。
そう、こちらの世界の調停者は――竜は、言った。

《亀裂を閉じる方法とやらを教えよ。我らが手助けしてやる》

27（後書き）

オバスキの特設ページも公開されましたので、ぜひ見てみてね。
各ページの下部のリンクからどうぞ！

28

「う、わわわあああああああっ！？」

すさまじい速度で空へと舞い上がる。吹きつける風と身体に感じる重力は相当なものだった。

気づけば僕はレフ魔導帝国の上空高くにいて、レッドゲートと同じくらいだった。

《フッ。空の旅を楽しむ余裕はないぞ》

「わ、わかってます。あの光の方向へ！」

今僕がいるのは竜の背だ。人ひとりどころか１０人乗っても問題なさそうな巨体は安定して空を飛んでいる。

レッドゲートを閉じるための解決方法は、「九情の迷宮」の３つか４つ、機能を停止すること。エネルギー量の大きいダンジョンを停めたほうがいいので、僕は竜の背に乗って「畏怖の迷宮」に向かっていた。

赤い竜――「炎竜」と言うらしい――は、僕の提案した解決方法をすぐに信じてくれた。

ゴオオオオオッ。

レッドゲート周辺には青と緑の竜が２体飛んでいて、亀裂目がけて魔法を撃ち込んでいる。青の「海竜」は【水魔法】を、緑の「樹竜」は【花魔法】の使い手だ。魔法、と言っても人間が使うものとは比べものにならないほどの規模で、撃ち込まれた氷塊や、破城槌

のごとき大木は封印亀骨（ロストジュエル）に直撃し、足止めに成功している。
2体いた紫の「影竜」は僕の指示した迷宮――「溺愛の迷宮」と「崇拝の迷宮」に向かっており、中枢にあるコントロール室のような場所を破壊してもらうことになっている。

「ここです！」

距離的に近いこともあったけれど、空を飛べば「畏怖の迷宮」まではすぐだった。崖にある迷宮への入口を見つけると、僕は竜の背に立ってジャンプした。【風魔法】を使えば問題なく入口に到着できる。

《我はもうひとつ、「悲嘆の迷宮」とやらに向かうとしよう》

「よろしくお願いします」

すでに攻略された迷宮は、それだけ多くの感情エネルギーを吸い込んでいる。だからこの4つをつぶせば確実にレッドゲートを閉じることができるはずだ。

「あの、ありがとうございます」

《礼は要らぬ。もとよりこれは調停者同士の問題……だが》

その場で羽ばたき、滞空していた竜はなにかを言い淀んだ。

「だが、なんでしょうか」

《いや……いい。行け、「災厄の子」よ。我らとお前は相容れぬ存在だ》

「ッ！」

羽ばたきが強くなり、僕にも強い風が吹いてくる。

「あのっ！『災厄の子』ってなんなんですか！？」

《――己の胸に手を当ててみよ》

「！？」

竜は高度を上げると「悲嘆の迷宮」に向かって飛んでいった。

「僕の胸に……手を当ててみる？」

右手を当ててみたけれど、いつもどおりの手触りがあるだけだった。まったく意味がわからない。

もしや――日本にいたころのさらに前世があるのでは？　とか思って【離界盟約】の天賦を入れた状態で【森羅万象】を取り込もうとしてみたけれど、無理だった。僕のスキルホルダーは１２以上２２未満ということなのだろう。つまり前世と今世のふたりぶん、１６でほぼ確定のはずだ。

「ワケがわからん！」

僕は「畏怖の迷宮」へと入っていく。ここはショートカットを作ってあり、すぐにもコントロール室へと行けるはずだ――。

★　ラルク　★

「アイツ！　なにやってんだ！？」

ラルクは思わず声を上げた。突如としてやってきた竜、それも5体。アッヘンバッハ公爵領の領都で見たあの竜はあまりに凶暴で、そんなのが5体もやってきて暴れたらさすがにこの都市は更地になるだろうと思えた。

だが、竜はレッドゲートを攻撃し始め、さらに1体はなんと弟くんをその背中に乗せて飛び立ったのだ。

「！」

すぐそばで金属同士のぶつかる耳障りな音が聞こえた。見ればダンテスが、大盾で調停者の攻撃を防いでいる。

「よ、よそ見するな、『黒の空賊』！　竜も気になるが先にこっちだろうが！」

終焉牙に比べれば調停者は戦いやすかったが、けっして手を抜いて勝てる相手ではない。さらにはこちらは騎士や兵士が入り乱れ、調停者はその隙を縫って移動するために同士討ちまで発生しかねない。

調停者は、実力者からつぶしていくことにしたようで、ラルクもこうして狙われるのだ。

「悪い！　あと――ラルクだ」

「なんだって？」

「あたしの名前、ラルクっていうんだよ！　弟くんに聞かなかったのか！？」

「――ラルクか、わかった」

ダンテスはうなずいたが、「弟くん？」と内心で首をかしげている。

ラルクとダンテスは並び立つ。

調停者はすでに兵士たちに紛れ、あちこちで斬りつけながら混乱を誘う。なんともいやらしい戦い方だった。

「こりゃ、退かせたほうがいいだろうな」

「あたしも賛成だ。だけど命令権を持ってるのは誰なんだ？」

「――私だ」

「俺だよ」

そこにやってきたのは光天騎士王国の長身の騎士フリードリヒと、クルヴァーン聖王国のグレンジードだ。

「私以外の騎士は退かせる。あの者とは一対一でやらせてもらおう、よろしいな？　元聖王」

「バカを言え。アレは俺の獲物だ。ウチをむちゃくちゃにした元凶だぞ。下がるのはお前らだ」

「なんだと？」

「あ？」

眉間にシワを寄せるフリードリヒと、腕組みして睨めつけるグレンジード。グレンジードも大男なのだがフリードリヒには１０センチほど負ける。

ふたりが高貴な人物だと気づいたダンテスはあわてて、

「ど、どうかケンカはお止めいただきになられたほうがですね……」

「オッサンたち元気だな。ふたりでやれよ。とにかく倒せりゃなん

でもいいだろ」
「ラルク！？」

冒険者という肩書きながら、世の中の身分社会を骨身に染みてわかっているダンテスが、ラルクの発言に目を剥いた。

「……」
「……」

するとフリードリヒとグレンジードはラルクを見て、それからお互いを見やって、

「フッ。子どもの言葉は真理を突く」
「共闘も悪くはねえ、か」

ふたりそろって、正面を向いた。

「――騎士たちに告ぐ！！　これよりはこのフリードリヒ＝ベルガーが剣を取り、敵を討つ！　邪魔立てすることなきよう退けェッ！！」
「聖王騎士ィィ！　下がれ！　俺の命令だ！！」

ふたりの大声は戦場中に響き渡り、２国の騎士たちは一斉に退き始めた。そうなると残ったキースグラン連邦の兵士も退いていく。
中央に残ったのは調停者ただひとりだ。
武器を持って悠然と歩いていくフリードリヒとグレンジードを観察している。

「行くぞ、元聖王」
「ああ、デカイの」

ふたりは同時に、調停者へと向かって走り出した。

2001

29

炎竜からはなんだか気になることを言われたものの、とりあえずそれは忘れ、「畏怖の迷宮」のコントロールルームに突入してレッドゲートへのエネルギー供給を止めた。

研究チームがコントロールルームの手前に陣取っていたのは、きっと僕と同じように迷宮の稼働を止めようとしていたのだろうけれど、実際に止める方法はかなり複雑で、【森羅万象】の力を使わなければならなかった。

唖然とする彼らを放っておいて僕が外へと戻ると、別の迷宮から黒煙が上がっているところだった。他の竜が外部から攻撃をしているのだろう。【離界盟約】の天賦珠玉を戻すと、エネルギーは徐々に収まり、レッドゲートへの供給は完全に止まるのが見えた。

「ふー……」

これで、一安心だ。調停者との戦いはお任せしてきてしまったけれど、最悪、竜たちが調停者を押さえ込むだろう。

これで、終わりだ。

これで――。

「……？」

僕は首をかしげた。レッドゲートへのエネルギー供給は止まったというのに、レッドゲートが閉じていかないのだ。

迷宮の破壊を終えた竜たちがレッドゲートへと集まっていく。彼らも不思議そうにレッドゲートを見上げていたが、向こうの世界にいる封印亀骨が光を吐き出し、攻撃を続けてくるので一度散開した。

それからぐるぐると輪になって回転する――。

「なにを、やってるんだ……？」

輪の中心に現れたのは巨大な魔法陣だ。見たこともないようなもので、それは徐々にせり上がっていくとレッドゲートを覆っていく。

「うっ！？」

耳に突き刺さるような高音が響き、猛烈な頭痛と吐き気に、僕はその場に膝をついた。あとで聞いたところによると兵士の多くがこの瞬間、意識を失って倒れたらしい。

魔法陣はレッドゲートに干渉すると、新たな空間の切れ目を作りだし――「空間の切れ目」としか呼べないほど、それは異様な現象だった――レッドゲートにぴったりと重ねた。

封印亀骨がもう一度光を吐き出したが、それはこちらに飛び出てくることがなく、レッドゲートの向こうの大気を震わせるだけだった。

力を相当に使ったのだろう、2体の竜がバランスを崩して落ちそうになるが、なんとか持ちこたえてよろよろと飛んでいき、この場を去っていく。

他の竜もそれに続き、最後に残った炎竜だけがこちらへと飛んできた。

《……してやられたな》

僕を見下ろした炎竜が不可解な言葉を吐いた。

「どういうことですか……！？　確かにエネルギーは断たれ、レッドゲートはもう閉じられるだけでしょう！？」

《見えぬのか》

「え？」

《お前の目は、盟約者を見ることができるだろう？　それはそういう天賦だ》

「いったいなにを言って――」

確かに【離界盟約】は現在の盟約者が誰なのかを確認できる。そのとき僕は――気がついた。

「裏の世界」の地底人種族の、盟約者が代わっている。

代わっていることはおかしくはない。なぜなら、今の盟約者である「参謀」と呼ばれていた彼女が「表の世界」へとやってきたのなら――時間的にもノックさんたちに連れられてアーシャとともに、ミュール辺境伯領に到着していてもおかしくないはずだ――「裏の世界」の盟約者は代わる。

つまり、崩壊した地底都市に残った人が次の盟約者となったのだ。

それは老人だった。だけど様子がおかしい。

虚ろな瞳で呆然と座り込んでいるのが【離界盟約】によって捕捉された。

《……ここの迷宮は、人の感情をエネルギーに変えて世界をつなげることに成功した。人の感情に着目したのは面白い。確かに、人の感情は時に強いきらめきのような力を持つ》

もしや……地底人種族の盟約者は。

《裏を返せば、人さえ集めればエネルギーを吸い出すことができる》

「調停者が、彼らを捕らえたのですか」

最悪の推測だった。

こちらに亀裂があるのと同様、「裏の世界」にも亀裂は存在する。そしてその亀裂にエネルギーを注ぎ込めば、向こうから亀裂を維持することができる――。

調停者が地底人種族を捕らえ、まるでバッテリーを使うがごとくエネルギーを吸い出しているのだとしたら。

《おそらくは、そうだ》

炎竜の、淡々とした答えに僕は燃え上がるような怒りを感じた。

「なぜですか!?　調停者は世界に干渉してはいけないのでしょう!?」

《ああ。だが盟約者に干渉はできる》

「なんなんですか、それは！　結果的に世界に干渉していれば同じことじゃないですか!!　大体、『貴顕の血』を捧げることだって意味が不明です！　それだって世界への干渉に他ならない！」

《――――》

そのとき、炎竜の目がハッとしたように開かれた。

「……どうしたんですか」

《いや……その方法もあったな》

「は？」

《「災厄の子」よ。お前が考えている以上に、我らは「貴種」を重要視し、そしてまた「貴種」は力を持つ》

ばさっ、ばさっ、と翼を動かし、炎竜の身体が持ち上がっていく。

「ちょ、ちょっと待ってください！！　まだ話は終わってない――」

《安心していいぞ。あの亀裂は我らの力によって一時的に封印した。放っておいても数百年は破れなかろう》

「数百年？　それなら、地底人の命が絶えるほうが先じゃないですか！」

《幻想鬼人とてバカではない。地底人を守りながら、生け贄を差し出させるだろう。そして亀裂を維持しながら次を待つはずだ》

「次！？『生け贄』が、『貴種』ということですか――」

もう、だいぶ遠い。

《――心構えしておくことだ》

僕の声は届かないだろうけれど、竜の声ははっきりと聞こえた。

《亀裂が残った影響は、これから現れる。世界の存続に関わることであれば我は知恵を貸そう――我らはしばし休息する》

そうして竜は飛び去っていった。

「……なんなんだよ」

竜と話をすればわからなかったことも解け、すっきりするのかと思っていたのに――これではわからないことが増えたようなものだ。

「なんなんだよ……！」

禍々しい瘴気はなくなり、空気は少しずつ清浄なものに戻りつつある。そしてなによりモンスターが落ちてくることはもうなくなった。

ただ、赤く、凍りついたような亀裂だけが空には残っていた。

2007

30（前書き）

活動報告では書きましたが、腰をやってしまって2日ほどじっとしていました。お待たせしました。

だいぶ回復して、調べたところ「日常生活を送りながら直すのがいい」みたいな記事を見つけたので、とりあえずは休み休み無理しない程度で更新も再開していきたいと思います。

最初は立って歩くことすらできなかったからね……。

安静にしすぎるのもよくないようなので。ていうか2日じっとしてるだけで足がふにゃふにゃになった気がします。

2008

30

なんだかもやもやしたものが残ったにせよ――レフ魔導帝国上空に現れたレッドゲートの問題は解決した。

亀裂の向こうには時折なんらかの影が見えるものの、こちらの世界に干渉することはいっさいできなくなった。

最後に残った調停者はグレンジード様と、光天騎士王国の長身の騎士――なんと総大将だったらしい――が倒し、なにか恨み言をいうでもなく調停者は消滅し、その場にはミスリルを使った鎧だけが残った。

終焉牙は、ひっそりと息を引き取っていた。

その巨体を後に調べてみると、筋肉のあちこちが断裂し、血管は破裂、内臓はぼろぼろだったという――調停者がむちゃくちゃをやらかしたからだ。

それで、僕はと言うと――戦闘から一夜明け、

「――まあ、これで手打ちってことだろうな」

難しい顔でダンテスさんが言った。

僕は今、ダンテスさんたちが寝起きしていた場所、ルルシャさんの天幕にいる。

「ああ。なんにせよ私は助かったけれどね」

「英雄武装（ヒロイックギア）」を発見したと「虚偽の報告」をした罪で捕まっていたルルシャさんは釈放されていた。

今回の終焉牙戦ではダンテスさんたち「銀の天秤」が「英雄武装」を活用したことで被害を大幅に押さえることができたのは明らかで、

それがルルシャさんたちの発見したものであることもまた同様だった。

ダンテスさんたちは「英雄武装」を迷宮攻略第1課の管理する施設で発見したと報告し、そこでとっちめたごろつきを縛り上げておいたことから、ロロロ商会が「英雄武装」を盗み出すことを指示したことも発覚、第1課長とロロロ商会番頭は逮捕され取り調べを受けている。

「いや～、寝込んでる間に終わっちゃいましたねえ」

頭をかいているのはムゲさんだ。「英雄武装」盗難の際に殴られて気を失い、それから帝国の監視の下、療養中だったけれどようやく回復したのだった。

「『英雄武装』はどうなるんですか？」

僕がたずねると、ルルシャさんが、

「私が提言したとおり、今回の遠征に協力してくれたクルヴァーン聖王国、光天騎士王国、キースグラン連邦にそれぞれ貸与されることになったよ。ただ……どれがどこに行くかではだいぶ揉めそうだけれどね」

と苦笑する。

僕が聞いた範囲では、衝撃を全反射するという「キミウツスカガミ（君映す 鏡）」は触媒なのかエネルギー源なのかわからないけれど、それがない。

光学迷彩の効果がある「タソガレニキユ（黄昏に消ゆ）」は今も使える。

対象の重量を増加させる「デイネイハウタフ（泥濘は唄ふ）」は破損している。

その3つのいずれも、今の魔法では再現できないらしく価値はす

さまじいのだが、「デイネイハウタフ」だけは壊れてしまっているので他のふたつがいいと考えるのは道理だろう。

「いずれにせよ、『英雄武装』の貸与で、帝国が差し出すものはだいぶ軽くなるだろうけれど」

3国とも、無償で出兵したわけではない。それは当然だ。

本来なら魔導飛行船を渡したりすれば済んだろうけれど……もうほとんど残っていないらしい。

終焉牙の魔法で相当破壊されたしね……。

思えば、ほんとうに多くの人が犠牲になったんだ。

「レイジくん、そんな顔をしないでください」

僕が表情を暗くしていたからか、ノンさんが言ってくれた。

「戦って亡くなった人たちは、この国に平和を取り戻すために命を懸けたのです。みんな納得してのことでしたよ」

「……はい」

「そうだぞ、レイジ。俺もお前もがんばった。むしろがんばりすぎたくらいだ。死んでいったヤツらのことを気にするなとは言わんが、気にしすぎるな。今もどこかで野垂れ死んでるヤツだっているんだし、そこまで気にするのかって話だ」

「お父さん、そのたとえは間違っている気がしますけど」

「……俺には難しいことはわからん」

腕組みしてふいっとそっぽを向いたダンテスさんがおかしくて、僕は思わず噴き出した。

「ありがとうございます、ダンテスさん、ノンさん。町の崩壊がす

ごすぎて、ちょっと気が滅入っていたかもしれません」

レッドゲートは封印されたけど、モンスターが破壊した町はそのままだ。

大量の死骸、破壊された町並み。

無事な町並みは半分か、もう少しと言ったところだろう。それでも半分残ったのはラッキーだったと考えるべきだろうか。

「これから帝国は大きな方針転換をしなければならない」

ルルシャさんが言うと、ムゲさんも、

「そうそう。きっと他の国ともっと交流を持つようになるでしょう。そうなりゃ、行商も盛んになりますよ！」

「あれ、ムゲさん、まだ行商を続けるんですか？　確かロロロ商会から大金をせしめてましたよね」

「あ、はあ、まあそうなんですが……」

僕の問いに、ムゲさんは歯切れが悪い。

「――ムゲさんは、帝国の復興に多額の資金提供をすると申し出てくれたのだよ」

とそこへ、天幕の入口にやってきたすらりとしたレフ人が言った。

……誰？　なんか長楊子くわえてるけど。

「ふふ、彼はアバだよ。渉外局副局長の」

「え？」

ええー！？　水飴舐めててぶくぶくに太ってた、あの！？

「……そこまで驚かれると、今までどう見られていたのかと少々気になるが」

ひっそりと眉をひそめたアバさんは言いながら、楊子を口から取った。

「ムゲさんだけでなく、多くの商会が帝国復興のために資金を提供すると申し出ていてね。隣国から多くの資材を輸入して町をもう一度作っていくことになる。……それでも、もう戻りたくないと言うレフ人も多かろうけれどね」

クルヴァーン聖王国は難民化したレフ人を受け入れているという。あの国は、ヒト種族至上主義のキースグラン連邦や、偏見がないまでもヒト種族が大多数を占める光天騎士王国と比べればレフ人にとって住みやすいに違いない。

「ま、そんなわけで私は相棒（猫チャン）といっしょにまた行商をやりますよ！むしろ新しい迷宮発掘がなくなった今、帝国内で技術開発やるより、行商をやったほうが儲かりますからね！」

あっはっは、とムゲさんが笑う――たくましいなあ。

提供した資金については復興後、国が利子を付けて返してくれるらしく、一種の「投資」なのだそうだ。

損をしない賭け、かもしれない。でも帝国がこのまま沈んでいけば資金は返って来ないわけで、さらにはムゲさんは帝国のために行商をやると言っているのだから――全身全霊で帝国をもう一度よみがえらせるつもりなのだろう。

「僕もなにか協力できることがあればします！」

「ありがとうございます、レイジさん。でも帝国はレイジさんに借りができっぱなしですからねえ。ちょっとは私らにもがんばらせてください」
「いや……そんなことは」
「そんなことはあるよ」
苦笑しながらルルシャさんが言う。
「迷宮の攻略に始まり、巨大なイソギンチャクの討伐や『豊穣ノ空』墜落を防いでくれたこと、それからアナスタシア殿下も救ってくれたのだろう？　戻ってきてからは巨大モンスター――終焉牙と言ったか、あんな化け物との戦いに、竜を使ってのレッドゲート封鎖。どれだけ恩を売ったのかというほどじゃないか」
「い、いや、そんな……僕だけががんばったんじゃないですし」
その都度、全力で走っていただけだけど、面と向かって挙げられるとかなり恥ずかしい。
「ルルシャ殿の言うとおりだよ。もちろん、君だけじゃなく冒険者パーティー『銀の天秤』にも大きな借りがあるし、『黒の空賊』にもそうだね」
アバさんが言った。
「そんなわけで、私は君たちを呼びに来たのだよ。レッドゲート封鎖を祝っての褒賞授与について、皇帝陛下からお達しがあるとのことだ」
「ほう、ずいぶん早いな」
ダンテスさんが片眉を上げた。国の褒賞なんていうものはあれこ

れ落ち着いてからあるもんだ――みたいにかつて言っていたから、昨日の今日で褒賞というのは確かに早い。

「君たちは冒険者だから、なるべく早くしないとどこかに行ってしまう。このままなにも与えずに出国させたら帝国の恥だと口を酸っぱく局長に言ったのが効いたのかもしれないな」

にやり、とアバさんは笑った。……太っていたころにやってたら「ぐひひ」って感じだけど、スリムになった今やると結構決まるな。体型って大事だな。

「なるほどなあ。――だってよ、ミミノ。準備はできたのか？」

ダンテスさんは、それまでずっと黙って天幕の奥で作業をしていたミミノさんに声を掛けた。

「うん、うん！　オッケー、できたべな！」

ミミノさんは立ち上がる。

手に持っていたのは――僕の服だ。

「今のレイジくんの背丈に合うように直した！」

借りていた光天騎士王国の制服は返却し、着の身着のままの粗末な格好だったのでミミノさんが「とにかく服を！」というわけで過去に着ていたものを直してくれた。

まさかこんなに早く着ることになるとは。

「うんうん、よく似合う！」

ささっと物陰で着替えると、すぐにミミノさんが言ってくれた。
ハーフリングのスタイルなのか、袖には派手なあしらいの刺繍があったり、ふわりとした着心地に布をぎゅっとヒモでしばったりという感じだけれど、着心地は抜群だ。
なにより、ニコニコしているミミノさんが手作りしてくれたというのがうれしい。

「そ、そうですか？」
「レイジくんはもともと男前だからなぁ～。なに着ても似合うけどね」
「そんなことないですって！　あの……いつもありがとうございます。ミミノさん」
「えっへっへ～」

すでに僕より少し背が小さくなったミミノさんが胸を張っている。
かわいい。思わず頭をなでたくなってしまうのだけれど、それはミミノさんが望んでいるリアクションではないのだろう。というかミミノさんはいつまでも僕の頭をなでたい側なのだと思う。

「よし、そんじゃあ行きますか。どんなお礼がもらえるのかねえ」

ダンテスさんの言葉に、僕らは立ち上がった。

３０（後書き）

ラルクとエヴァについては次話で。

2017

31

魔導飛行船「月下美人」が、いまだレフ魔導帝国の臨時政府拠点となっていた。

（ここのどこかにラルクがいるんだよな……エヴァお嬢様も来てたりするのかな）

細く長い廊下を歩きながら僕はそんなことを考えていた。

レッドゲートが閉じられたあと、終焉牙のところへ戻るとすでにラルクはいなかった。なんでも空賊仲間と貴族のお嬢様が治療のために連れ去ったのだとか。

ほんの少しラルクとかわした言葉を考えると、「貴族のお嬢様」はエヴァお嬢様のことだと思われる。

いつの間にふたりに接点が生まれていたのか……すごく謎です。

ラルクの星６つの天賦珠玉【影王魔剣術（シャドウキング）】はやはりラルクの身体を蝕んでいたようだ。僕の記憶を呼び起こし、【森羅万象】で確認してみても同じ結論だった。ラルクからあの天賦珠玉を外さないと……ラルクの身体はやがて耐えきれなくなってしまうだろう。相当無理して戦っていたみたいだし。

「――レイジ、レイジ？」

「あ、は、はいっ」

「ちゃんと聞いておかないと、こういうのは作法が肝心だからな」

考え事をしているうちに、僕らは謁見の間の控え室へとやってきた。そこではこれからの謁見についての手順の説明があった。

ただそれだけではなく、いちばん汚れた格好をしていたダンテス

さんが、レフ人の侍従さんに顔をしかめられ着替えさせられていた。
「作法が肝心」と言ったダンテスさんの見た目は作法にかなっていなかったらしい。
さらに顔を拭かれ、無精ひげを剃られ、髪を整える。
赤を基調としたシンプルなジャケットに、すらりとしたズボンを穿くと、ダンテスさんは見違えるほどに立派な大人という感じになった。
僕も髪だけは整えさせられ、服についてもなにか言われるのかなと思ったけれど、侍従さんは「ムムム」とうなってから、「よし」とうなずいていた。僕とミミノさんの服がハーフリングの伝統に則ったものであることに気づいたのだろう。ノンさんは修道服なのでセーフである。

「なんだか、俺だけ冒険者じゃなくなっちまったみたいだな……」

少々サイズが合わず、ぱっつんとしているジャケットを窮屈そうに着ているダンテスさんが言ったが、

「お父さん、ふだんはこんなもの着られないのですから楽しんだらいいんですよ」
「ううむ、まあ、確かにな。一国のトップと会う冒険者なんて、俺たちより上の『白金級（プラチナランク）』でも稀だからなぁ」

とそこへ、呼び出しの声が掛かった。

「――冒険者パーティー『銀の天秤』、参りました」

同時に控え室の扉が開き、薄暗い廊下へと続く。その先には大広間の入口があってそこからはきらびやかな光が射し込んでいた。
おお……。

思わず声が出そうになった。
ここが飛行船内だとは思えないほどに高い天井があって、シャンデリアが輝いている。それらは魔道具なので光量は一定だった。
左右にはレフ人の高官が並んでいて、幾何学的な模様が織り込まれた金色の絨毯は一直線に進み、数段上がったところにいる皇帝の玉座へと続いている。

（あれがレフ魔導帝国の皇帝……）

金糸をふんだんに織り込んだ上着は、老齢である皇帝にはむしろ重そうだった。王冠や金の錫杖もあったけれど、それは隣の台に置かれてあった。
それでも――僕らを射抜くように見据える視線は本物だと感じた。
迫力が、他の人と比べて段違いだ。

「……お父さん、ほら、進んで」
「お、おう」

ダンテスさんでさえ気圧されていたのにノンさんは平然として、父の背中を押していた。こういう場に慣れているんだろうか。

「だ、だ、大丈夫だからな、レイジくん、わたしがついてるべな！」
「ミミノさん、服引っ張らないで……」

ぐいぐい僕の袖を引っ張ってくるミミノさんもテンパってるみたいだ。仕方ないので手を握ってあげると、ぎゅうっと握りかえしてきた。かわいい。おかしいな……この人確か２４歳のはずなんだが……。
ダンテスさんに続いてノンさん、僕とミミノさんが続く。
さわさわと、かすかな声で高官たちが囁き合っている。僕の【聴

覚強化】でも少しくらいしか拾えないような声で。内容は、まあ、「あれが冒険者か」とか他愛のないものだったけれど。

「『銀の天秤』でございます」

あらかじめ言われていた場所――部屋の真ん中らへんでダンテスさんがそう言って片膝をつくと、僕らもそれに続いた。

皇帝の横にいた初老のレフ人が口を開いた。なんだか老獪な感じの顔つきである。

「うむ。このたびの働きは見事であったと聞いている。これより栄光あるレフ魔導帝国皇帝陛下よりお言葉をちょうだいするゆえ、そのままで聞け」

「はっ」

僕らが頭を下げていると、ややあって、しゃがれた声が聞こえてきた。

「……正規の軍に所属していないにも関わらず、一軍にも匹敵する働きをしたようじゃな。それに、ルルシャのためによく尽くしてくれた」

おや、と思う。ルルシャさんのことをわざわざ言うなんて。

「英雄武装」のことがあったからかなとも思うけれど、なんだか今の言い方はルルシャさんに肩入れしているように感じられた。

「お前たちが冒険者であろうとなかろうと、余は正しく評価する。今回、お前たちの功績は勲一等とする」

勲一等、ということは――最も功績を挙げたということ？

その発言に高官たちが一斉にザワザワする。「我が国で一等が出たことがあったか？」「ない、聞いたこともない」「『英雄武装』の発見でも勲五等だものな」「救国の英雄並だということか」という声が聞こえる。

「静かに。皇帝陛下の御前である」

初老のレフ人が言うと、また広間は静まり返った。

「……本来であれば我が国で年金暮らしを確約するところじゃがな、そのようなものは欲しくなかろ？　なにせ、今は半壊しておる」

自嘲気味の言葉にどう反応していいかわからない僕ら。

「さらば、お前たちが欲しいものを言え。その望みを叶えてやろう。名誉が欲しくば余が後ろ盾になり、『天銀級（ミスリルランク）』冒険者に推薦するし、金が欲しくば帝国金貨３０００枚は用意してやろう。『魔導武装（マジックギア）』も好きなものを言え、商会に作らせよう。どうだえ？」

まさか――こういう報酬は想定していなかった。

帝国金貨３０００枚だと、大体１５億円くらいの金額だ。

これは冒険者が報酬で得られるものとしては破格のものではないだろうか。

「……申し上げてもよろしいでしょうか」

するとダンテスさんが顔を上げた。

32

ダンテスさんはもう、「欲しいもの」が決まっているんだろうか？
僕が不思議に思っていると、

「構わぬ」

初老のレフ高官が皇帝を見て、皇帝はそう言った。
「ありがとうございます。――今回、最も苦労し、また最も功績を挙げたのはここにいるレイジです」

僕？　急になんの話だろう。

「ですが彼は、今こそ髪を染めていますが元は黒髪黒目であるということから『災厄の子』といわれなき差別を受けて来ました。これほど人々のために尽くすことができる男だというのに」

僕は――「災厄の子」という言葉が出てきた驚きよりも、僕を「男」と言ってくれた驚きのほうが勝って、思わず息を呑んだ。
「少年」とか「男の子」ではなくて「男」
それはつまり、一人前の冒険者として認めてくれたということだ。

「俺たちが欲しいものは、レイジが、差別を受けるようなことがないこと。つまり、レフ魔導帝国による身分証明、そして皇帝陛下の後ろ盾です」

まさか、そんなことを……ここで言ってくれるなんて。
横にいるミミノさんがにこっとしている。前にいるノンさんもこ

ちらを振り向いて優しく微笑んでいる。
ああ――この人たちは、最初からそれを望もうと決めていたんだ。
冒険者としての栄光やお金なんかじゃなく。
ただ、僕の身分を。
僕が誰からも後ろ指指されず生きていける身分を。

「――ッ」

目頭が熱くなって僕は顔を伏せた。
ぽたぽたと涙がこぼれて絨毯に吸い込まれていく。ミミノさんがそっと、僕の手を握ってくれる。それが温かくて、また感情が込み上げてきた。

「ふむ……そのようなものでいいのかえ？　渉外局長、余は『災厄の子』などという迷信は信じぬのだが、他国はどうなってる」
「はっ、そうですな。農村や僻地では迷信を本気で信じることも多く、差別はいまだ残っていると言えましょう」

顔を上げられずに聞いていただけだったけれど、答えたのは初老のレフ人だった。その人が渉外局長、つまりアバさんの上司に当たる人だったんだ。

「そのような非科学的なことが？」
「はっ」
「ふむ……ヒト種族の考えることはわからんな」

レフ魔導帝国はその名の通り、魔道具の技術によって大きく発展してきた。だからこそ実在する技術以外の迷信の類は信じないのだろうか。
ダンテスさんは――ダンテスさんたちはきっと、そこも考えた上

でこの内容を持ち出したんだ。

「わかった。『銀の天秤』に約束しよう。レイジにはレフ魔導帝国皇帝である余が後ろ盾となり、その身元を保証する」

おおっ、というどよめきが広がっていった。

ダンテスさんの手が伸びてきて僕の頭をくしゃりとなでる。

「……よかったな、レイジ」

「こんなの、卑怯ですよ……」

ミミノさんの差し出してくれたハンカチで顔を拭うと、にこやかに笑うパーティーメンバーがいた。

どよめきがいまだ残る大広間に、渉外局長の声が響いた。

「静かに。皇帝陛下の御前である」

改めて静まり返ったところで、皇帝が言う。

「……殊勝なことだな。しかしこれだけが褒賞というのは少ない気がするが？」

「はっ、陛下。勲一等に対して『身分の保障』だけでは他国に笑われましょう」

「他にはなにかないのかえ？　やはり金か？」

もっと出してくれるという。

「え、どうする？　レイジのこと以外なにも考えてなかったな」

「お父さん……」

「しょ、しょうがねえだろ。『なにか特別にやってやる』って言わ

れたら言おうか、くらいに話し合ってただけじゃねえか」

やっぱり話し合ってたのか。

「――ここはレイジくんの希望でいいんじゃないか？」

ミミノさんが言うと、ダンテスさんとノンさんが僕を見た。

「そうだな」

「はい。いちばん苦労したのはレイジくんですし」

「い、いや、ちょっと待ってください！　僕ばかりもらってしまうのはよくないですよ」

「いいから、ほら、なにか欲しいものを言え。武器でもいいみたいだぞ」

ダンテスさんに腕をつかまれて、ぐい、と僕は立ち上がらされる。多くの人々の視線が突き刺さり――さらには皇帝が面白そうに僕を見ているのが感じられる。

「どうだえ？『災厄の子』、改め、余がその身元を保証する冒険者レイジよ。なにを望む？」

僕は口を引き結んだ。

これは――考えようによっては、いいチャンスかもしれないと思えた。

「……陛下、無理かもしれませんが、僕の望みを申し上げます」

無理かもしれない、という言葉を聞いた皇帝の目は、ますます興味深そうに見開かれた。

「僕の望みは――」

謁見の間を出るとどっと疲れが噴き出した。
控え室のソファに、僕ら４人は座り込む。

「いやー……もういいわ。こういうのを『晴れ舞台』とか言うんだろうけど、俺はギルドのカウンターで依頼完了の報酬をもらうくらいの舞台で十分だ……」

ダンテスさんが口にすると、

「はい……でも、いい経験になったと思いましょう。お父さんはこれからもっとお金を稼がないと引退なんてできませんからね？」
「うっ。そうだよなあ……」
「それより、レイジくんだべな……まさかあんなこと言い出すとは思わなかったし、ていうか、全然その話聞いてなかったんだけど！？」

がばりとミミノさんが起きる。

「はは……そうですよね。まあ、話す時間もほとんどなかったですし」

身体を起こした僕も頭をかいた。
昨日まで大立ち回りしていて、昨日の今日で呼び出されている。
【回復魔法】でみんな、表面上の傷は癒えているものの疲労や、肉体の芯に残ったダメージは消えていない。

ノンさんに至っては、実は兵士たちの治療に明け方まで走り回っていて、仮眠程度しか取っていないはずだ。

これからレフ魔導帝国はこの大騒動の後処理をしなければならず、さらには復興へ向けて動いていく。大仕事が続くんだ。

「話した内容は、先ほど皇帝陛下に言ったとおりなんですが――」

と僕が、もうひとつの「望み」について説明しようとしたときだった。

「――レイジくん」

扉が開くと、急ぎ足でアバさんが入ってきた。

「どうしました？　まさか、僕の言った『望み』が――」

「違う、そうではない。あ、いや、もちろん君の『望み』はあまりに想定外でこれから皇帝陛下と側近で緊急会議が開かれることになって、君はこの国をずいぶん振り回してくれたわけだが……って今はその話ではない」

アバさんは首を振りながら続ける。

「実は……君の知り合いだと聞いている『黒の空賊』だが……彼女が仲間とともに姿を消したのだ」

32（後書き）

レイジが口にした「望み」についてはもう少しお待ちください。
皇帝が即答できず、検討しなければならない内容……となると？

33

僕らは控え室を出て、「月下美人」の廊下を早歩きで進んでいた。向かっているのはラルクが寝起きしていたという部屋だ。

歩きながらアバさんが言う。

「実は……彼女には勲四等が与えられることになっていた」

「四？」

四、というのはおかしな気がした。最前線の維持はほとんどラルク頼みだったと聞いていたし。

「ああ、いや、功績としては勲一等相当なのだが、彼女は一度『月下美人』を盗んでいるから……それと相殺されて勲四等なのだ」

「ということは、そちらの罪状はもう清算されたということですか？」

「そうだね」

ほっ、とする。大丈夫だろうとは思っていたけれど、ラルクが魔導飛行船を一度は盗んだのも事実だし、それでこの国は大騒ぎになっていたとも聞いていたし。

「だけど、罪を犯した彼女が表彰されることに不快感を示す高官も多くて、前線で戦闘が行われている間も議論が行われていたのだ。たぶん、彼女はそのことを知っていたのだろう」

「そんな……褒賞が与えられることは？」

「決まったのは昨日だよ。彼女は知らなかったと思うね。彼女は自分が疎んじられていると感じ、あるいは訴追されることを恐れて姿

を消したのだと思われる」
「……」
違う、と僕は気がついた。
僕に内緒で姿を消すほどのことじゃない。
ラルクが気にしていたのは帝国のことではなくて――。
「キースグラン連邦」
「!?」
ぎくり、としてアバさんが足を止める。
「キースグラン連邦がラルクを要求したのではありませんか？」
「……な、なぜレイジくんがそれを」
やっぱり。
あの国はラルクが使っている【影王魔剣術（シャドウキング）】が、「六天鉱山（シックスマイン）」から出土したものだと気づいている。さらにはラルクが、鉱山から逃げ出した奴隷であることも。
「キースグラン連邦は事情を説明しましたか？」
「いや……ただ、『黒の空賊』がキースグラン連邦の国民であり、保護したいので速やかに身柄を引き渡すようにと……」
「……なるほど」
キースグラン連邦は鉱山での出来事を隠したいのだろうか？　それよりも単純に、事を荒立てず手っ取り早くラルクの身柄を押さえたいということか。
彼女が暴れれば多くの死者が出るから、油断させ、一気に天賦珠玉を抜く……。

「急ぎましょう、アバさん。ラルクの部屋になにかがあったんですよね？」

アバさんは僕からも情報を聞きたそうにしていたけれど、ラルクを探すのを優先したいのか、すぐに彼女の部屋へと案内してくれた。

「――ここが」

その部屋はおそらく他の部屋とも大きく変わりのない部屋だった。ただ、場所の限られた飛行船内にしては大きいなと思えるくらいで。生活感がないホテルのような一室で、わずかにベッドのシーツが乱れているだけだ。

「これを」

サイドテーブルには紙とペン、それにインク瓶が置かれてあった。紙には下手くそな文字で――だけれど、それなりにちゃんと読める程度の筆跡でこう書かれてあった。

『弟くんへ
あたしはどうやらそう長くは生きられないみたいだ
でももう少しあがいてみる』

彼女と長い別れになったアッヘンバッハ公爵領の領都で見た書き置きよりは、だいぶ上手になっていたことが、時の流れを感じさせた。

「……どうして！」

僕はラルクが天賦を使いすぎて、生命力を削っていることを知っていた。だからなんとしてでも、これ以上天賦を使わせず、できれば天賦珠玉を抜き出すことを納得させようと思っていた。
なのに、その矢先にラルクがいなくなってしまうなんて。

「レイジくん」

ミミノさんの手が僕の手首に添えられて、ハッとした。紙を持つ手がぶるぶる震えていて今にも破ってしまいそうだったのだ。

「よく見るべな……『もう少しあがいてみる』って」
「……はい、でもそれが……」
「彼女は生きようとしてる」
「！」

ミミノさんの言葉が、すっ、と胸に入り込んできた。
そうだ、ラルクは生きようとしている。どうにかして生きようとしている。

「捜そう。レイジくんにとって大切な人なんだべな？」

そうだ。ミミノさんの言うとおりだ。
ラルクがいなくなってしまったのなら捜せばいい。

「――ダンテスさん、ノンさん」

僕がふたりを振り返ると、

「わかってる、皆まで言うな」
「はい。……私は教会が戻ってこいと言ってくるまでですけど、お

付き合いしましょう」

僕が言うまでもなく、そう言ってくれた。

……こんなに僕は、よくしてもらっていいんだろうか、なんて思ってしまう。

クルヴァーン聖王国で4年振りに再会し、僕のワガママでルルシャさんに会いにここレフ魔導帝国へとやってきた。それからは想定外の連続で――僕の身分のことまで気にしてもらって、その上でまたラルクを追うことをお願いしてしまっている。

それなら、いっそ僕ひとりのほうが――。

「レイジ。ひとりで捜しに行こうなんて考えるんじゃあないぞ」

「!?」

「顔に書いてある。それくらいすぐにわかるさ。――ひとりの手は2本しかねえが、ふたりなら4本、4人なら8本あるんだ。ゼリィのヤツも合流したら、アイツはこういうときによく働くはずだぞ」

「……ダンテスさん、ありがとうございます」

「おう」

ニッ、と笑って親指を立てるダンテスさんがイケメン過ぎる。

「レイジくん、追うなら早く動いたほうがいいでしょうな。身分については今日、遅くとも明日には公文書を発行します。もうひとつの『望み』はしばらく検討に時間が掛かるでしょうから――」

「はい、落ち着いたらここの冒険者ギルドに確認の連絡を入れるようにします」

「それがいい」

「あ……それと」

僕は、もうひとり、会わなければいけない人がいることを当然覚

えていた。
さすがになんの挨拶もなく出て行くわけにはいかないだろう。
「――ラルク様が出て行ってしまわれたというのはほんとうですか!?」
ちょうどそのタイミングで部屋に飛び込んで来たのは――深い紫色のワンピースを着た少女。
長い金髪はラメをまぶしてなくとも十分に光を放っていて、瞳の赤は美しい宝石のよう。
彼女は、
「お嬢様……しばらくぶりですね」
エヴァお嬢様は、その場ではたと、立ち止まった。
「レイジ……」
僕が幻ではないのか、これが夢ではないのか、単純に見間違いではないのか――それを確認するようにつぶやいた、お嬢様は、
「レイジ！」
改めてもう一度、声を上げた。

33（後書き）

ついに再会です。

さて、この小説をお読みの皆様にお願いです。「面白い」「続きが気になる」と思われましたら是非、ページ下部にある★から「評価」をお願いいたします。

また「ブックマーク」も是非。

皆様が考えておられる以上に、このふたつは作者が書き続ける原動力となりますので！

34

エヴァお嬢様は以前別れたときと変わらず、いや、あのときよりも美しさに磨きが掛かっているように感じられた。僕のそばにいるダンテスさんが目を瞠り、ノンさんが息を呑み、ミミノさんがあわあわと口を動かすのが感じられた。

お嬢様と別れてからせいぜい2か月だ。初夏が盛夏を過ぎて晩夏になる程度の時間でなにがどれほど変わるのだろう――でも僕は確かにお嬢様に変化を感じ取っていた。

レイジ、と声を上げたお嬢様は走り出そうとして、踏みとどまった。そして一流の貴族令嬢にしかできない完璧な一礼をすると、

「――久しぶりですね、レイジ。レッドゲートの災難はとても大きかったですが、あなたならきっと解決に導いてくれるのだと信じていましたわ」

花が咲くような笑顔を見せた。

やっぱり、お嬢様はお嬢様だ。僕の予想を簡単に越えてくる。

――お嬢様。ここで……お別れです。

あの日の夜、僕がスィリーズ伯爵邸を後にした夜。

僕は唐突に別れを告げて、お嬢様を無理やりお屋敷へと戻した。

――レイジ、わた、わたくしはっ、あなたとずっといっしょにいたかったの……！　あなたが、どうして行かなければいけないの……！？

理由はいくつもあった。僕が「災厄の子」である以上、クルヴァーン聖王国で生きていくことは難しかったし、伯爵にこれ以上迷惑を掛けられなかったとかもある。

それになにより、僕のトラブルにお嬢様を巻き込みたくなかった。

――ほんとうに……これが最後のお別れではないのね？

お嬢様は完全に納得していなかったに違いない。

だけど僕の言うとおりにしてくれた。僕のワガママを聞いてくれた。

あれから――お嬢様がなにを考えていたのか僕は知らない。割り切れない思いを抱えていたのか、あるいはすっぱり気持ちを切り替えたのか。

ただ、今、お嬢様の背後にいるスィリーズ伯爵は僕が知っている……とおりの伯爵なので、ふたりの仲は悪くないのだろう。それだけでも、僕がワガママを言った甲斐があるというものだ。

「エヴァ＝スィリーズ様、しばらくぶりでございます。今は冒険者として活動をしています」

僕がその場に片膝をついて礼を取ると、お嬢様はほんのわずか、切なそうに表情をゆがめ、でもすぐに元の完璧な微笑を取り戻した。

僕はもうスィリーズ伯爵家の人間ではなく、むしろお嬢様と親しいことを主張するとクルヴァーン聖王国内では「災厄の子」とつながりがあると非難される原因となってしまう。お嬢様も、伯爵も、それを十分に理解した上でこうして話してくれているのだ。

そして――そうすることで僕を守ってもくれている。

つながりがあるとなれば、伯爵は僕を敵としなければならない。それは僕にとってとてもやりにくいことで、レフ魔導帝国の身分保証ができてしまった今はなおさらだ。僕らが今まで通りに会って、

話せるのは、他人行儀のフリをするからなのだ。

「なぜレイジがここにいるのですか？」

「……お嬢様が『鼓舞の魔瞳』でラルクの治療をしてくださったと聞きました、ありがとうございます」

「なぜ……あなたがそれに礼を言うのかしら」

「ラルクは、僕の姉なのです」

「えっ――」

驚くのも無理はないよな、僕とラルクは全然似てないし。

「義理の、ですけれど」

「そう……なのですか」

僕が「六天鉱山（シックスマイン）」でラルクとともに過ごした日々のことを、お嬢様には話していない。クルヴァーン聖王国に来る前のことなのだろうとお嬢様は納得してくれたようだ。

「お嬢様、『鼓舞の魔瞳』、しっかり使えるようになられたのですね……がんばりましたね」

「！！」

お嬢様にとって「鼓舞の魔瞳」は、禁忌の中の禁忌だった。

生まれてすぐに実のお母様を暴走させ、失意のうちに死なせてしまった。

同い年だったルイ少年を暴走させ、星８つの天賦珠玉を取り込む結果となり彼を死なせた。

だけれど僕は魔瞳を忌み嫌って欲しくなかったから、お嬢様に言った。

――お嬢様はその魔瞳を使いこなせる人物になってください。

と。

父の伯爵が使える「審理の魔瞳」は相手がウソを吐いているかどうか確認でき、貴族社会ではとてつもなく有用なものだ。だけれど、お嬢様の「鼓舞の魔瞳」はもっと違うことができる。

だから、使えるようになって欲しかった。

そうすればお嬢様は自分の過去を乗り越えられるから。

その魔瞳に、付加的な効果――生命力を回復させるようなことができたというのはお嬢様が真剣に魔瞳と向き合った結果だということは明らかだ。

「はい……わたくし、がんばりましたの」

「ほんとうに、すばらしいですね」

「心からそう思っている？」

「もちろんです。この短い時間でそこまで成長なさったことが、僕はとても誇らしいです」

「……ふふ。レイジ、もっと褒めてもいいのだわ」

お嬢様の口調が柔らかくなった。その目に浮かんだ涙は、魔瞳と向き合うことがどれほど大変なことだったのかを僕に知らせる。

「それで――ラルク様がいなくなったと聞きましたけれど」

これ以上話しては感情を抑えつけられないと思ったのか、お嬢様は僕から視線を逸らしてベッドを見やった。

「はい。いろいろあって、逃げるように出て行ってしまいました」

「そう……。あなたが、我が国を出て行った理由はラルク様のことがあったから？」

僕はお嬢様との別れ際に、次に会ったときにクルヴァーン聖王国を出て行かなければならない理由について教えると言っていたっけ。逃げ出す理由ではなく、いつか出て行かなければいけない理由を。

「いえ、ラルクと出会えたのは偶然でした。実は僕の恩人の孫娘さんがレフ魔導帝国にいて……」

ルルシャさんについて少し話すと、お嬢様は納得したようにうなずいて、

「義理堅いところはレイジらしいですね」

と、また完璧な貴族令嬢に戻って小さく笑った。

「ラルク様を追うのですか？」

「はい、そのつもりです」

「……」

少しだけ訪れた沈黙で、お嬢様はなにを思ったのだろうか。

「……まだ、あなたに渡す天賦珠玉を見繕っていませんの」

「いつでも、待っていますよ」

「でもあなたがどこにいるかわかりませんわ」

「それは……冒険者は旅の空ですしね」

とそこへ、ぽん、と手を叩いてスィリーズ伯爵が割り込んできた。

「そうだ、いいことを思いつきました。レイジさん、定期的に我がスィリーズ邸に手紙を出してくれませんか？　そうすればあなたに

連絡を取りやすくもなる」
「え……しかし、僕からの連絡は、聖王国内でも問題になるのでは。僕は『災厄の子』ですし」
「その程度では文句を言われない程度に、力をつけていますよ。――エヴァはどう思いますか」
「はい。そうしていただければすばらしいですわ。お父様、よい提案ありがとうございます」

大丈夫なのだろうか、という心配よりもむしろ――なんだろう、スィリーズ親子によって首輪をつけられたような気持ちがする。
まあ……それはそれで別にイヤな気持ちではないのだけれど。
なにも知らずに心配だけしているお嬢様のことを思えば、僕が手紙を出して安心できるならたいした手間でもないし。なんだかんだ言いながら伯爵も僕を気にしてくれているのだし。

「……そろそろ行かないといけません。ラルクがいなくなって、時間が経たないうちに捜しに出たいので」

礼を取るのを止めて立ち上がった僕へ、

「わかりました。……レイジ。落ち着いたらまた聖王国に――」

お嬢様はなにかを言おうとし、小さく首を横に振った。

「――手紙、待っていますわ」
「必ず、冒険者ギルドを通じてお送りしましょう」
「ええ、きっとよ」

お嬢様が右手を伏せ、人差し指と中指をくっつけて差し出した。
僕はお嬢様に近づいて、その手をそっと握る。

「また約束が増えてしまいましたね」

するとお嬢様は小声で、

「……もっといっぱい約束が欲しいのだわ」

と可愛らしいワガママを言ったのだった。

35

魔導飛行船「月下美人」を出てルルシャさんの天幕へと戻る間、僕はダンテスさんたちからエヴァお嬢様について質問攻めに遭った。

クルヴァーン聖王国での出来事についてはいろいろと話していたし、「お嬢様はとても美しい御方で」くらいは言っていたのだけれど、「雇い主のことだから、まぁ」みたいな感じで話半分に受け取っていたらしい。

「お前も苦労したんだなあ……」

とよくわからない同情のされ方をダンテスさんにされ、

「はぁ～、貴族のお嬢様って実在するんだべな～」

とミミノさんは妙な実感を得て、

「レイジくん、障害が多ければ多いほど（恋は）燃え上がりますよね！　私、応援しますからね！」

とノンさんは明後日の方向に情熱を燃やしていた。

ノンさんはなにか勘違いしてそうだったので、

「えーっと……お嬢様は僕の雇い主だった方ですよ」

「はい。そしてレイジくんは護衛を辞めました……そう、対等の存在になるために！」

「……」

なんか、ノンさんの目がきらっきらしている。
お嬢様はスィリーズ伯爵家の次期当主になると思うんだけどなぁ。
僕は「ずっと護衛でいて欲しい」みたいなことを言われたような気がしたし、つまりは「優秀な護衛」が欲しかったんじゃないかと思っているんだけど。自分で自分を「優秀」と言うことになるのが恥ずかしいので、ノンさんには言わなかったけど。

（それ以前に……スィリーズ伯爵の監視の目をかいくぐってお嬢様と恋愛成就できるような強者はいるんだろうか？）

無理だね。
面倒なことにあの人ウソまで見抜く能力があるし。
そうなるとお嬢様は政略結婚的なことになるのかな？　うーん……。

（ま、今から心配してもしょうがないな。まだお嬢様は１２歳だし）

僕は気持ちを切り替えることにした。
天幕に戻るとルルシャさんはおらず、仕事に出かけているようだった。

「さあ、アバさんが言うことにゃ今日明日中にはレイジの身分証ができるってことだから、出立準備を済ませちまおうぜ」

ダンテスさんは言ったが、ばっちり決まっている首から上と、いつもの冒険者スタイルの首から下のアンバランスがすごい。

「出立って言ってもどこに行くべな？」
「レイジは心当たりないのか」
「そうなんですよね……」

あごに手を当てて考えてみる。ラルクの目撃情報がないかについてはアバさんに確認してもらっているのだけど、目撃情報がなかったら僕らはどこへ行けばいいのか。

ノンさんが簡易的な地図を出してくれる。

ここから北は「未開の地カニオン」であり、ラルクたちが行くとは考えにくい。南から東はクルヴァーン聖王国、西には光天騎士王国がある。

光天騎士王国を挟んで南にはキースグラン連邦がつながって、光天騎士王国の西とキースグラン連邦の北には大海が広がっている。

（そう言えば、ここから移動することを聖王国のミュール辺境伯に連絡しておかなきゃな）

「裏の世界」から来た人々の受け入れをお願いしているので、本来なら僕はもう一度辺境伯領に戻るべきなのだけれど、さすがに今はラルクを優先したい。

（……僕がラルクの天賦珠玉を外せば、これ以上体調が悪化することはないはずだ。それは一日でも早いほうがいい）

ラルクは身体の変調に気づいていた。

で、帝国に来て「月下美人」を盗んだ――。

「そう言えば……どうしてラルクは『月下美人』を盗んだんだろう……」

僕のつぶやきを聞いたミミノさんが、

「うーん……売るにしても買い手がいないべな。空賊をしてなにか

なしとげたいことがあったとか？　お仲間がいたみたいだから、彼らに生活を与えてやるとか……」

「それはあんまりラルクっぽくないなって思ったんですよね。食い扶持を与えるのに武器を渡すとは思えなくて。確証はないんですけど」

「今はレイジくんの知識が頼みの綱だから、確証はなくていいと思うよ」

「はい……。そうなると、別の目的で『月下美人』を盗んだのなら……なんでしょうね？」

「シンプルに、移動手段が欲しかったとか？」

「空を飛ばなければいけないような場所に行くってことですかね。でも、そんな場所あるのかな？」

そこまで話を聞いていたノンさんが、ふと地図に手を伸ばした。

「私、聞いたことがあります。光天騎士王国の西に海が広がっていますよね。このあたりには無人島が数多くあるのですが――」

海域の一点を人差し指でくるりとなぞる。

「――潮も速く岩礁が多くて船では近づけないそうなんです。ですがその無人島のひとつに、『賢者』が住まうと……」

「賢者？」

「薬学に精通した方で、あらゆる難病を治したと言います。ですがキースグラン連邦で迫害に遭って、弟子を連れて海へと逃げたそうです」

どきり、とした。

キースグラン連邦で迫害に遭ったのは僕も同じだからだ。

今となっては消えた鉱山奴隷の入れ墨があった手首を、思わずさ

すってしまう。
まさか――黒髪黒目の日本人の転生者とか？
いや、さすがにそれは……ない、と言い切れるだろうか。
この世界にはない医学の知識を持った人だったら、「賢者」と呼ばれてもおかしくはないような……。

「そりゃあ、俺も聞いたことがあるな。俺が聞いたのは賢者がひとりで逃げたって話だが」

ダンテスさんも続ける。

「……ということは、割と有名な話なんですね。それならラルクも知っていた可能性が高いです」
「ああ。レイジの姉ちゃんもそうだが、お供につけてた男どもが連れて行こうとしているのかもしれねえな」
「ラルクの仲間が、ですか？」
「ちょっと戦場で見かけたくらいだがな、あの連中はレイジの姉ちゃんに服従しているというか、心酔しているような感じがあった。だったら、レイジの姉ちゃんの命を救うために賢者に会いに行こうと言い出してもおかしくねえ」
「なるほど」

そうするとしっくりくる。
最初、自分が助かるためにラルクが飛行船を盗むようなことをやるだろうかという疑問はあったのだ。むしろ「なんか面白そうだったから盗んだ」と言われたほうが納得できる。
だけど、仲間がそれを望んだのなら。
ラルクは渋々ながらも力を使っただろう。

「じゃあ、アバさんの連絡待ちではありますが、今のところは光天

騎士王国方面に行く、というのが当面の方針ですね――」

と僕が言いかけたときだった。

「――『黒の空賊』の行方をお捜しですかい？　あーしに、いい情報がありますぜ……」

天幕の入口から、声が聞こえた。

35（後書き）

いったい誰リィさんなんだ……

36（前書き）

すみません、更新した気になって忘れてました。

36

「ゼリィさん！」

猫系獣人のゼリィさんがそこにはいた。

「坊ちゃん、３日ぶりっすねえ。皆さんはお久しぶりっす」

「おお。ゼリィに冒険者を集めてこいって頼んでたけど無駄になっちまったなあ」

ゼリィさん、クルヴァーン聖王国の首都クルヴァーニュの冒険者ギルドにいたっけ。

「ああ、でもゼリィさんは冒険者ギルドで飲んだくれ――もごっ！？」

「ナ、ナハハ……ちょっと坊ちゃんに大事な話があるんであーしの歓迎ムードは一度しまってもらって大丈夫ですよ」

僕はゼリィさんに口を塞がれ、腕でぐるりと頭を抱えられて外へと引っ張り出された。

「坊ちゃん、坊ちゃん……！　なにしれっとほんとうのこと言おうとしてんすか！？　あーしがサボッてたみたいになるでしょ！？」

「サボってたじゃん……」

「いやいや、あーしみたいな一般戦闘力系女子はこんな地獄を体現したかのような戦場で戦うなんて無理っすからね」

一般戦闘力系女子ってなに？

「ダンテスさんは前線で戦ってたけど……」

僕が言うと、はぁー、とゼリィさんはため息を吐いた。

「あのねえ、坊ちゃん。ダンテスの旦那はヤバイっすからね？　ヒト種族の限界値を超えてますからね？」

「そんなに？」

「わかりませんか？　あの人、人間離れしてるでしょ。あーし、最初あの人が坊ちゃんと出会ったとき『灰銀級冒険者』だったって聞いて耳を疑いやしたよ。すぐに『純金級』に上がったみたいですけども、『純金級』の中でもトップクラス、『白金級』でもなんもおかしいことないですよ」

「……確かに、ダンテスさんはむちゃくちゃやるよね」

それ、盾で防げるの？　とか思うことはしょっちゅうだし、アクロバティックな動きは盾役じゃ考えられないレベルだ。４０歳になろうとしている人間じゃないのは間違いない。

「なるほどね……」

「なにが『なるほどね』ですか。いちばんヤバイのは坊ちゃんですからね？」

「……」

非難の矛先がこっちを向いた。

「あのダンテスさんですら『レイジは別格』とかたまに言ってましたから」

「え。なにそれ初耳」

「『教えたことをすぐに吸収する』って」

「……」

それ全部【森羅万象】先生の力なんだよなあ……。

「なんの天賦使ってるか知らないっすけど、ダンテスの旦那が人間離れなら、坊ちゃんはとっくに人間辞めてますよ」

言い方。

「そんなふたりが活躍してるような超人大決戦の現場に、あーしを巻き込まないで欲しいんですわ。ノンさんやミミノさんは、まあ、後方支援だからいいですけど、あーしが出てったら即死っすよ、即死。あーしに向いてるのは情報収集とか連絡係っすからね。ふたりの基準で見ないで欲しいんですわ」

「……スミマセンデシタ」

「わかればよろしい」

ぽんぽん、と背中を叩かれ、僕はゼリィさんから解放された。

あれぇ……なんで僕が怒られた感じになってんの……？

「話は終わったか？」

天幕の入口にダンテスさんが出てきた。

「あい、あい、終わりやしたよ。――それで坊ちゃんに皆さん、ちょいと立ち聞きさせてもらいやしたけど、どうやら『黒の空賊』をお探しのようで。あーしは隊商のユーアさんとここに来るまでにいろいろ情報を集めながら来たんですけどね、『黒の空賊』らしき数人を見やしたよ」

「！」

「むしろあーしらが隊商だとわかると、向こうから近づいてきて、馬車を売ってくれと言われやした。結構な大金だったもんでユーアさんは1台売りましてね」
「売っちゃったの！？」
「まあ、まさか坊ちゃんが『黒の空賊』を捜してるとは思わなかったですし、しょーがないっすよ、ユーアさんは商売人ですしね。だけどユーアさんが道をたずねられてそれに事細かに答えてたのをあーしも聞いてましたから、どこに行ったかはわかりやす」

ゼリィさんは天幕に入って、地図の一点を指差した。

「光天騎士王国で間違いないっすわ」

この日の夜にはアバさんが僕の身分を保証するという証書を持ってきてくれた。この世界でこの身分証がどこまで効果があるかわからなかったけれど、その効果よりもむしろ『銀の天秤』のみんなが僕のためにしてくれたことがうれしくて、僕はありがたく証書を受け取った。

それは流麗な紋様が刻まれた１５センチ四方の鋼板で、魔力を帯びた宝石が埋め込まれてある代物だった。

『レフ魔導帝国はこの者の身分を恒久的に保証し、またこの者が望む場合、帝国内での生活の一切を約束するものである』

冒険者ギルドのギルド証と同じく身分証として使えると聞いたけれど、できれば使うような機会がこないことを祈りたい。

この日は夜遅くまで忙しかった。

僕とダンテスさんは長距離移動のための物資調達をするために天幕を出たけれど、物がないこの帝国最前線でそれはなかなか困難なはずだった。

でも行く先々で、「大盾の！　戦場では世話になったな」とか「『英雄武装』を見つけたってほんとうか？」とか、多くのレフ人に声を掛けられ、彼らだって備蓄は少ないのだろうけれどなけなしの物資を少しずつ分けてくれた。

「レイジよ、感謝されるってのは悪くねえもんだろ？」

日が沈んで、レフ魔導帝国らしからぬかがり火があちこちに灯る中、荷物を抱えた天幕への帰り道でそうダンテスさんは言った。

きっと、アッヘンバッハ公爵領の領都で、僕がなにも言わず出て行ったことを言っているのだろう。ダンテスさんたちは竜を退けたことで一躍英雄扱いになったと聞いている。

「……はい」

つらいことばかりだったけれど、がんばってよかった。

きっと家族や友人を失った人も多いだろうに、それでも、この国の人たちはレッドゲートが塞がれ、故国を取り戻せたことを喜んでいる。

「おお、こんなところにいたのか」

すると横から大柄な人物が現れ、手が伸びてくると僕の荷物をひとつ持ってくれた。

「あ……グレンジード公爵！？」

「！？」

僕が言うとダンテスさんもぎくりと固まった。
そこにいるのは、お供をひとりもつけていなかったけれど確かに聖水色の髪を持つ、元聖王、グレンジード公爵だった。

「よお。あ、堅苦しい礼はしなくていいぞ」

にっ、と笑った公爵は、膝をつこうとした僕を止めた。

「伯爵（ヴィクトル）に聞いてな、お前がすぐにも出発しそうだぞってよ。だからまあ、こうして顔を出しに来た」

「……レイジ、閣下はお前にお話があるようなので俺は先に……」

「ダメです、ここにいてください」

今日の謁見ですっかり貴族アレルギーになりつつあるダンテスさんが早速逃げようとしたけれど、僕は先回りしてそれを止める。
ダンテスさんが叱られた子どもみたいな顔になった。

「お前は大盾の冒険者だな？　かなりの腕前じゃないか。どうだ？聖王国（ウチ）に来て騎士どもを指導しないか？」

「あ、あう！？　いや、その、え？」

ああ、ダンテスさんがテンパってる！

「……公爵閣下、戯れはお止めください。ダンテスさんは僕らのリーダーですし、困ります。あと荷物を持たれるのも困ります」

「戯れじゃあないんだが、パーティーが困るっていうならしょうがねえな」

無茶な勧誘はダメ、絶対。そこはわかってくれたようだけれど、

荷物は返してくれなかった。

……こんなところ見つかったら、伯爵にすごい目で見られちゃうよな。「元聖王を荷物持ちにするとは、さすがレイジさんですね？」って言われる未来が容易に想像できる。

「……その、な、レイジ。俺はお前に謝りたかった」

グレンジード公爵はぽつりと言った。

37

公爵の口から語られた言葉は短く、僕の知っている世界からするとあまりに抽象的なことばかりだった。クルヴァーン聖王国の聖王は絶対無二の存在ながらあらゆる政治を6大公爵家と進めねばならなかったこと。「一天祭壇」があるおかげで潤っているがその代わりに各国からの移民がすさまじく多いこと。膨れ上がる人口と爆発的に増える諸問題、派閥、勢力……。

その中で「聖水色」を持つ聖王は特別であり、グレンジード公爵にとってもそれがよりどころだった。

同じ「聖水色」を持つ子どもたちが可愛くて可愛くて仕方がなかった。

「子ども可愛さのあまりに聖王としての判断が鈍っていたのかと言われれば、そうなんだと思う。俺はクルヴシュラトを生け贄として捧げなければならなかったが、できなかった……ロズィエ公爵家のルイが身代わりの手を挙げてくれたことに、ホッとしてしまった」

ルイ少年はお嬢様にいい格好を見せようとしていたのではないかと僕は推測していた。お嬢様の「鼓舞の魔瞳」によって、本来ならば聖王のなすことに異議の声を上げるなんてあるはずがなかったことを、やってしまった。

でもそれらはすべて不運が重なった不幸でしかない。

僕はそう思うし、そう信じている。

ただそれをグレンジード公爵に言ったところで意味はないのだろう。

「俺は……」

夕焼けに染まる空を見上げ、グレンジード公爵はつぶやいた。茜色の雲がたなびいて、秋の訪れを感じさせる。もう夜は涼しいくらいだ。

「……閣下」

そこへ、それまで黙っていたダンテスさんが口を開いた。

「俺は貴族や雲の上の人たちのことはわかりません。ですが、俺には娘がいて、娘が可愛いってことは誰より知っています。だからたぶん……閣下のなさったことは、理解できます」

「……」

グレンジード公爵は見上げていた視線を、横にいたダンテスさんへと向けた。

「……そうか」

「ええ。……なんの慰めにもならないでしょうが」

「いや、そんなことはない。……すまねえな」

どこか張り詰めていたようなグレンジード公爵だったのに、今は少し険がとれたように感じられた。

「あれから報告を受けたんだ、レイジ。お前は調停者から我ら聖王国の貴族たちを守ったのみならず、その後の――環の蛇（ウロボロス）戦でも活躍したようだな」

「あ、いえ……それはダンテスさんたちもいたので」

「褒賞は必ずとらせるから聖王都に来てくれないか」

どきりとした。
僕が４年という歳月を過ごし、スィリーズ伯爵家もある聖王都。
そして僕がお嬢様に別れを告げた場所――。

「ですが、僕は……」
「お前が『災厄の子』であろうとなかろうと、俺の名の下に文句は言わせん。公爵家の名前を貸すことだってできる」
「閣下それはやり過ぎです」
「それくらいしねえと、お前のしてくれたことに返せないだろう…？　後悔してももう戻らないものを目にするのはこりごりなんだ……」

くしゃりと公爵は顔をゆがめた。それはまるで泣き出しそうな子どもみたいで――ああ、大人になっても人は、こんな顔をしたりするんだなって、まるで他人事みたいに僕は思った。
きっと公爵が気にしているのはルイ少年のことなのだろう。ルイ少年はもう戻ることはないから。
この人は、自分の息子だけ助かればいいだなんて考えるような人物ではないから。

「……わかりました。いつか聖王都に寄ったときにはいただきます。ただ、身分に関してはレフ魔導帝国が僕の身元を保証してくれることになりましたので、大丈夫だと思います」
「なに？」

僕は帝国が発行してくれたプレートについてグレンジード公爵に話した。それと、これからどうしても光天騎士王国に行かなければいけないことも。

「先を越されたか……」

ほんとうに悔しそうに言う。

「いいか、必ず聖王都に来てくれ。必ずだぞ」

「は、はい……わかりました」

「褒賞もそうだが、なにか力になってやりてえからな。そうだ、伯爵（クトル）の娘のエヴァ（ヴィ）と言ったか？　あの娘と結婚したいなら俺が後ろ盾になってやるから」

「ファ！？　い、いや、そういうのじゃないですから、お嬢様とは！」

「俺に任せておけ」

「違いますからね！？」

そんなことを言っている間に、ルルシャさんの天幕へと戻ってきた。結局グレンジード公爵に荷物持ちをさせてしまった。

「じゃあな！」

一国の公爵とは思えない、ざっくばらんな感じで手を上げると公爵は去っていった。

「ふー……疲れた」

「ダンテスさんも、苦手なものがあるんですね……」

「1週間に1回くらいなら大丈夫だが、立て続けにあるとつらい。――それはそうとレイジ、お前やっぱりあのお嬢様のことが」

「ないですって！　もう、ダンテスさんまで。お嬢様とは雇い主と護衛の関係でしたよ……うん」

奴隷商潰しをしたり、お嬢様が僕を寝ずに看病してくれたりしたのは、ちょっとだけ、ほんのかすかに、素粒子レベルで雇い主と護

衛の関係からは逸脱していたかもしれないけれど。
それはともかく、僕らは荷物を持って天幕へと入っていく――。

「……」
「うわっ、ダンテスさん、急に止まらないでください」

前を歩いていたダンテスさんが立ち止まったのでその背中に顔がぶつかりそうになった。

「どうしたん――」

前をひょこっとのぞいてみて、気づいた。
夕暮れ時の無人の天幕は薄暗く、しかしそこにはダンテスさんを超える巨体が立ち、こちらを見下ろし――暗闇に瞳を輝かせていたのだ。

「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！？」
「……私だ」
「しゃべったあああああああ！！」

僕とダンテスさんが荷物を思わず放り出してしまうと、

「レイジ殿……その反応はあまりにあまりではないか」

巨体の影からひょっこり出てきたのは、光天騎士王国の騎士にして中性的なイケメンであるヴィルヘルム様だった。
となると……このデカイ人は。

「……急な訪問、あいすまぬ。だが貴殿らが明日にも旅立つと耳にした」

光天騎士王国軍の総大将、フリードリヒ様だった。
もう偉い人やだ、とダンテスさんが泣きそうな声で言った。

37（後書き）

オッサンオッサン&オッサン。

書籍版オバスキは11／20発売で、Amazonさんなどオンライン書店の予約ももちろんOKですが、店舗での購入特典もありますので、是非そちらもご注目くださいませ。
公式でまとめて告知されてないのでとりあえずこちらでまとめておきます。

・メロンブックス様
特典SS「鉱山、ラルクとふたり暮らし」
有償特典タペストリー（大浴場の口絵イラストをタペストリーに）
・とらのあな様　特典SS「大浴場、その後のこと」
・アニメイト様　特典SS「『銀の天秤』、力の片鱗」
・ゲーマーズ様　特典SS「俺の名前はオスカー」

38

マンガだったら「ズゥゥウウウンンンン」みたいな擬音が書かれそうだった。複数人が寝泊まりできるほどに大きな天幕だというのに、中央にイスを置いてどっかと座ったフリードリヒ様はどこか窮屈そうに腕を組んでいる。

身長差では負けているけれど体格的にはそこまで負けていないはずのダンテスさんは、「身分差」という目に見えない差によって縮こまっている。

フリードリヒ様が口を開くと、アゴの筋肉まで躍動する。

「単刀直入に言う。光天騎士王国に来い」

「あ、はい。そのつもりです」

「そうか――ならばあとのことはヴィルヘルムに任せる」

ズゥゥウウンンンと音を立てながら（幻聴）フリードリヒ様が立ち上がると、騎士たちを連れてのっしのっしと出て行った。

あれ？　終わり？

「……なんだ、終わりか？」

明らかにホッとしたようにダンテスさんは言ったけれど、まだヴィルヘルム様とヒゲの騎士――ヨハンさんが残っている。

「ダンテスさん、一応こちらの若い騎士様も貴族みたいな扱いの方のようです」

「ひぃっ」

もうダンテスさんが貴族アレルギーになっちゃいそう。正確には「王族の遠縁」なんだけどそんなこと言ったらアレルギーが加速する。

「……あー、その、なんだ……私は他の騎士と同等に扱っていただきたいが」

「いや、それは無理でしょう。ヴィルヘルム様が光天騎士王国の代表として外交をしていたのは見てますし」

「……む、そうか」

しょんぼりと肩を落としたヴィルヘルム様に、ヨハンさんが「ま、しょうがありませんよ」となにか励ますようなことを言っている。なになに、なんなの。僕にフランクな付き合いを所望なの。無理ですよ。こちとら庶民ですよ。護衛時代の経験で貴族にちょっと慣れてるだけの庶民ですよ。

「ところで先ほどの件、フリードリヒ様との話だが……光天騎士王国に来てくれるというのはほんとうか？」

「はい。そのつもりでした」

「そ、そうか……お前は冒険者が性に合っているという感じかと思っていたが」

「え？　そうですね、冒険者稼業はしばらく続けたいですね」

「それは難しいな。騎士が冒険者をやるなどとは……」

「え？」

「む？」

なんだか話が噛み合わないぞ。

「ちょっと待て、レイジ。お前は光天騎士王国に来てくれるのだろう？」

「はい。そのつもりですと申し上げました」
「騎士になるのだろう？」
「はい？」
なんで？
「……まさかとは思うが、なにか用事があって我が国に来るのか？」
「まさかもなにも、そのとおりです。そのために出発の準備を急いでいるんですよ」
「……」
あちゃーという感じでヴィルヘルム様が額に手を当てて天を仰ぎ、ヒゲの騎士のヨハンさんはプッと噴き出している。
「ちょ、ちょっと、なんなんでしょうか？　どうして『光天騎士王国に行く』のが『騎士になる』ってことなんですか？」
「それは……お前な、今日、帝国から褒賞をもらったのだろう？」
「はい、まあ」
「その流れで光天騎士王国の『5光騎士（ファイブナイツ）』の一角であるフリードリヒ様が『我が国に来い』と言ったら、それは『騎士に取り立ててやる』という意味になるだろうに」
「えぇ？」
さすがにそれは飛躍しすぎでは。というか僕が光天騎士王国からなにかもらうような筋合いじゃないし。あとあの大きい騎士様、もうちょっと言葉を使ってくれないとわからないよ。
大体光天騎士王国って一兵卒までみんな「騎士」なんだし。
「はぁ……一応、お前のために用意されたポジションと待遇があるのだが聞くか？」

「いえ、結構です」
「そうか……栄えある『11天騎士（イレブンナイツ）』の席に推挙するという話だったのだが」
「はあ」
チラッ、と見てきても心は動きませんて。知らないし、その役職みたいなの。
「すごいことなのだぞ、騎士の頂点『王剣騎士（キングスナイト）』の下、『5光騎士』、そして『11天騎士』となるのだ。光天騎士王国の中枢だ。フリードリヒ様はそこまでお前のことを……いや、いい」
僕がまったくなびいていないことに気づいたのか、ヴィルヘルム様は説明を打ち切ってしまった。さすがにこれにはヨハンさんも苦笑いしている。
「それならば仕方はないか。――ヨハン、行こう」
「はっ」
立ち上がったヴィルヘルム様を僕は呼び止める。
「すみません、僕からひとつうかがいたいことがありまして――」
これはチャンスだとばかりに僕は光天騎士王国までの道のりについてたずねた。
おそらくラルクが通ったであろう道だ。
ヴィルヘルム様は快く答えてくれた。それはほぼ一本道で、先を急ぐのであれば街道を進むしかないという。
「ありがとうございます」

「いや……そうか、我が国に行くのであれば軍用の馬車を貸してやろうか？」
「いいのですか？」
「速度が出るが乗り心地は最悪なのと、民間馬車と同じ速度だが乗り心地は最高の馬車とどちらがいい？　私のお勧めはもちろん後者――」
「速度優先で！」
食い気味で答えると、
「そ、そうか……わかった。明日の夜明けには乗れるように手配しておこう」
と残念そうな顔をした。
「ありがとうございます！」
「う、うむ……。レイジ、その……いや、いい。ではな」
「はい」
今、いちばん欲しいものをくれようというヴィルヘルム様には感謝しかない、僕が頭を深々と下げると、ヴィルヘルム様が去っていく気配。
「……ヴィルヘルム様はね、同じ１０代のレイジ殿ともっと話したかったんですよ。是非また別の機会にお願いします」
そっ、とヨハンさんは囁くと、去っていった。
「同じ１０代……か」

夕陽はすでに沈んでいて、ふたりの姿はすぐに見えなくなった。

（年齢は近くても境遇は全然違うんだよな。偉い人には偉い人なりの悩みがあるんだろうか……や、そりゃあるよねえ。エヴァお嬢様だって友だちいないことを密かに悩んでたっぽいし。今はミラ様とか文通仲間ができてるけど）

僕がそんなことをつらつら考えていると、

「――ハッ。も、もういないのか？　いなくなったのか？」

ダンテスさんが気絶から覚めたみたいにあわてて息を吸い込んできょろきょろとしていた。

ちなみに――ミミノさんやノンさんは騎士たちがわらわらといる剣呑な空気を察して近寄らず、ゼリィさんに至っては賭場に行って負け越していた。

38（後書き）

昨日のあとがきに書いた特典ＳＳのタイトルですが納品したものと違っているようです。すみません、私の手元にタイトルだけ残ってないんですよね……！（本文はある）。

ですが、タイトルは違えど内容は同じなので！　大丈夫です！

39

翌早朝、まだ太陽がその姿を見せず、東の空がほんのり明るくなったころ。
僕らは準備をすべて整えてルルシャさんの天幕を出た。

「気をつけて。まあ、君たちは十分にそれを承知しているだろうけれど」
「ルルシャさんも。これからお忙しいでしょうが……」
「ああ。だけど、それは望むところだよ」

にこりと微笑んだルルシャさんと握手をする。
その微笑み方は――全然似てないのに、どこかヒンガ老人の面影を彷彿とさせたので思わず僕は目を見開いてしまった。

――この身は、罰を受けるためにあり。死ぬことでは償えぬ罪を犯したゆえ。されど、今際にて日の光を浴びるほどの僥倖に浴した。天地を統べる万能の神よ、願わくばこの忌み子に祝福を授けよ……。

ヒンガ老人が最後に告げた言葉を僕は完璧に覚えている。
「死ぬことでは償えぬ罪」……それがなんなのか、僕はまだ知らない。

「君は、祖父に導かれてこのレフ魔導帝国に来てくれた。そして私の救世主になり、のみならずこの国の救世主にもなってくれた。ほんとうなら国を挙げて君の、君たちの栄光を讃えなければいけないのだけれど……」
「そ、そんな。要らないです、そんなの。帝国の兵士さんだってみ

んながんばってつかんだ結果ですから」
「君はほんとうに謙虚だね。ここのお偉いさんたちにも見習わせたいよ」
　するとアバさんが、
「まったくだね……。部下の手柄はすべて上司のもの、上司の失敗はすべて部下のせい。これでは役人は仕事をしなくなる」
「それでも君は副局長まで上り詰めたのだからたいしたものじゃないか。早く局長になってまずは渉外局を改革してくれたまえ」
「……そのつもりだよ。局長になったらまずやることは決まっているけどね……」
「へえ？　楽しみだね」
「ああ……楽しみにしていてくれ」
　アバさんは長楊子をくわえながらなにか考えるように言った。
　あー、これはアレですね。局長になったらプロポーズする気ですね。僕だけじゃなくみんな察したのか（ルルシャさん本人はのぞく）、ニヤニヤしている。
　僕らの表情に気づいたアバさんがあわてて、
「そ、そうだ、仕事があるんだった。では、『銀の天秤』。また会おう」
　そうして去っていった――いくら仕事が山積みでもこんな朝早くは誰もまだ働いてないだろうにね。
「……ううっ、皆さん、お世話になりました」
　見送りに来てくれたもうひとり、ムゲさんは順々に僕らと握手を

し、目に涙を浮かべていた。

「ほんとうは私もいっしょに出たかったんですが……猫チャンの拡張がまだ終わらなくて」

ムゲさんは行商を再開するにあたって、復興のための資材を大量に運べるように猫チャンを改造しているのだった。なにげにムゲさんは、「英雄武装」の研究に始まり今度は猫チャンの改造と、毎日睡眠時間を削って働き続けているいちばんのブラック労働者かもしれない。

「ムゲさん、お願いだから猫チャンの前にアンタがへたばるなよ？」

「気をつけますよ、ダンテスさん。今度は運転手を雇って、私は寝ていこうかと思っています」

「……」

移動時間に休んで、あとは寝ずに働くというのか。ダンテスさんが真顔になる。発想がブラック労働から出てこない。この世界では聞いたことがない「過労死」という言葉が僕の頭をよぎるけれど、移動の時間に寝るのなら大丈夫なんだろうか……？

「それじゃ、そろそろ行きますね」

僕らはルルシャさんとムゲさんに別れを告げて天幕から離れていく。

日の出直前とはいえ、すでに起きて朝食の準備を始めている人たちも多く、ぽつりぽつりと炊煙が上がっているのが見えた。

この広場に展開している天幕たちはいつ、なくなるのだろうか。あるいは復興が進んでも、今後は帝国を訪れる人たちのために残したりするんだろうか――。

「今日はどこまで行けるか？」
「その馬車がどれくらい速いかわからないべな」
「乗り心地はともかく、あまり窮屈だと長時間は大変ですね」
「眠れればなんでもいいっすわ～」

ダンテスさん、ミミノさん、ノンさん、それにゼリィさんが話しながら僕の前を進んでいく。
そのとき曙光が射して、多くの人々によって踏みならされ、荒れた平原を照らし出した。
ふと振り返った僕は視線の先に「月下美人」を見た。
太陽に片側を照らされた月下美人の甲板に、ひとりの姿を見つけた。
それが見間違いでなければ――いや、見間違えるわけがない。
僕が、エヴァお嬢様を見間違えるわけがない。
エヴァお嬢様は、緩やかな風に髪をなびかせながら僕を見つめていた。
両手を口元に寄せて大きな声でなにかを叫ぶ。
それは、この距離では聞こえるわけもないのだけれど、僕にはお嬢様がなにを言っているのか完璧に聞き取ることができた。

――早く戻ってきなさい。約束があるのだわ。

と。
僕は振り返り、片膝をついて右手を胸に当て、頭を垂れた。
それで十分伝わっただろう――護衛（僕）が雇い主（お嬢様）にする返答としては。
まあ、お嬢様は「はい」か「イエス」か「かしこまりました」しか受け付けないんだけどね。
立ち上がった僕は少し遅れてダンテスさんたちに追いついた。

「あれ？　坊ちゃん、なにかしてました？」

ゼリィさんに言われ、

「はい。ちょっとしたお暇（いとま）を告げに……」

詳しく話すのは恥ずかしいので誤魔化した。

「――さあ、早く行きましょうか。そして早く追いついて、早くなんとかしてやりましょう」

僕の姉、ラルクを。

40

★　光天騎士王国　港町ザッカーハーフェン　★

開いた窓から入り込んでくる風は潮の香りをたぶんに含んでいる。ウミネコの鳴く声も遠くに聞こえ、光天騎士王国でも指折りの港町であるザッカーハーフェンはのどかな昼下がりを迎えていた――のだが、室内に漂う空気には緊張感があった。

修道服を着た初老の男性は額の汗を拭うと、

「……相当に身体が弱っているようですな。精のつくものを食べて、しっかり寝るしかありません。食欲はおありか？」

「……」

【回復魔法】による治療を受けていた少女――ラルクは、青白い顔を左右に振った。

「それはいけない。食事は身体を作る基本中の基本ですぞ。魔法はあくまでも身体が自然に回復するその補助をするだけですから」

「……」

「滞在されている間は毎日来ましょう。しっかり食事を取ること。よろしいな？」

言って、男は立ち上がった。

「少しよろしいか？　確か、クックさんと言ったか」

「へい」

宿の廊下へは、ラルクとともに行動をしてきた空賊の男が――もともとは山賊で、その前は家具作りの職人だった男、クックがいっしょに出た。

「先生、お嬢の具合はそんなに悪いので？」

「うむ……いったいなにをやったらあれほど生命力が尽きてしまうのだね。まるで消えかけのロウソクだ。クックさん、彼女の家族はどこに？」

「……今は、俺たちが家族みてえなもんで、はい」

「そうか。なるべく多くの時間をともに過ごしてあげなさい。私もなるべく来るから」

それは、手を尽くしようがない危篤の病人を相手にしたかのような言葉だった。それほどだったのかとハッとすると、クックは顔をうつむけながら、

「先生、こちら今日のお礼です」

革袋にずっしりと入った金を差し出した。

「こんなにはもらえない――」

「お嬢のことはどうぞ内密にしてもらえますか？　穏やかに過ごしてもらいてえもんで」

「うむ……そういうことなら」

修道士は革袋をもらうと自分のカバンに詰め、宿を出て行った。

「ふぅー……どうしたもんかな。金だって限りがあらあな」

クックはため息を吐いた。こんな陰気な顔を見せるわけにはいかないと、ラルクの部屋には戻らず宿の食堂へやってくる。

食堂には誰もいない。背もたれもない粗末な木製のイスに座ってクックは、

「酒をくれ」

「あれまあ、昼から呑むのかい？　病気のお嬢ちゃんはどうした」

「うるせえババア、とっとと持ってこい」

「はー、いやだいやだ。子どもを置いて酒を呑む甲斐性なしに酒を出さなきゃならんなんて。これも商売だから仕方なく出すが、因果なもんだわ」

宿の老女はジョッキに入ったエールを持ってくる。口に含むと温いが、多少はささくれだった気持ちも収まる。

「さあて、どうするかな……」

レフ魔導帝国から逃げ出すように出てきたのは、あそこにはキースグラン連邦の連中がいたからだった。ラルクは目立ちすぎ、彼女の天賦が「六天鉱山（シックスマイン）」で採掘された【影王魔剣術（シャドウキング）】であることはとっくにバレているだろう。

帝国の危機の真っ最中に取り上げられることはさすがになかったが、レッドゲート問題が終息すればすぐにもキースグラン連邦はラルクを寄越せと言ってくるのは想像に難くなく、だからクックはラルクたちとともに帝国を抜け出した――まさかレッドゲートが閉じられたその翌日に逃げ出すとはさすがに見抜かれないだろうから。

そのあたりはレイジが推測したとおりだった。

「だけどまあ、急な旅はお嬢をさらに痛めつけたようなもんだったな」

どこぞの貴族の令嬢がなぜかラルクを治療してくれたおかげでラルクは延命できたようなものだ。だがキースグラン連邦ともめるとなれば、その貴族だってラルクを見放さざるを得ないだろう。

いずれにせよラルクは貴族の令嬢によって延命し、その生命力を使ってなんとかかんとか帝国から光天騎士王国までやってきたものの、エネルギーが切れて動けなくなってしまったのだ。

血を吐いた数など数えられない。ひどいときは一晩に2回や3回なんてこともあった。

「あと少しなのに……」

彼女を治療できる最後の希望は、医薬に通じた「賢者」の存在。そのために港町までやってきたが、問題はふたつあった。

「お嬢は船に耐えられるのか……？　数日は乗らなきゃならんだろうし。それに――」

「――お頭、昼から酒かよ？」

町に出ていた仲間のひとりが戻ってきた。「月下美人」を動かすときにはエンジニアとして活躍していた男である。

「どうだった？」

「はぁー……どうもこうもねえよ。漁師どもはそろって『船を出さない』ってそればっかし。これじゃあ『賢者』を捜すどころじゃねえわ」

もうひとつの問題、それは――船を出せない、ということだった。

金の問題ではない。金は、帝国にいたときに出納係に無理を言って少しずつもらっていたものをこのクックが貯めておいた。こう見

えて計画的なアウトローなのである。
ではなぜ船を出せないのか。

「海に出た正体不明の怪物か……」
「こっちの連中は『海坊主』って呼んでるみたいだけどな。――あっ、俺にも酒ください、お姉さん」

エンジニアが気安く呼ぶと、老女は「いやだいやだ、そろいもそろって昼から酒飲んで」と言いながらもお姉さんと呼ばれたことがうれしかったらしくいそいそとジョッキを持ってきた。

「『幽霊の正体見たり枯れ尾花』――だったか」
「なに、それ」

ジョッキを口元に運ぶエンジニアに、クックは、

「いやさ、昔の詩人が遺した言葉よ。海坊主だの言ったところで、実際はたいしたことのねえものなんじゃないか？　たとえば、一時的な海流のうねり、あるいはクジラ、あるいは雲の影……」
「それはそうかもだけど、船乗りが船を出さないってんだからしょうがねえさ。連中、海坊主が出たら沖には船を出さない、沿岸で漁業やる、海坊主がいなくなるまでひたすら待つ……って感じだもんな。帆を操って動かす船は経験が物を言うから俺らじゃ動かせねえし」
「ふーむ……」

クックは太い腕を組んで天井を見上げたが、

「俺も俺で考えてみるが、お前、このこと、口滑らしてお嬢に言うんじゃねえぞ。お嬢のことだ、なに言い出すか……」

「そうだな、たとえばアタシが海坊主とやらを退治してやるとかな」
「そうそう。言い出しかねねえ――」

背後からの声にあわてて振り返ると、そこにいたのはベッドにいたはずのラルクだった。

「お嬢！？」
「おいおい、大の大人が昼からエールか？　アタシにも寄越せ」
「あっ」

止める間もなくクックのジョッキが奪われ、ラルクは細い喉をごっごっと鳴らして飲んでいく。

「ぷはーっ、うめえな！『酒は百薬の長』とはよく言ったもんだぜ」
「お嬢……身体にもよくねえし、大体まだガキだろうが」
「アタシはもう17だ。この辺じゃ珍しくもなんともねーっての」
「そりゃまあそうだが、『万病の元』だなんて言葉もあるぜ」
「出た、お頭の謎知識。どこで仕入れたんだよ」
「うるせえ、俺は学がある空賊なんだよ」
「飛行船はもうねえけどな」
「そりゃあないが……いや、待てよ？」

クックはぽん、と手を叩いた。

「……お前、エンジニアだよな？」

隣に座ったエンジニアの腕を、がっちりとつかむ。

「そういう質問するときって大体無茶振りするよな！？　俺、やだよ！」

「まあまあ話を聞けや……いいか？　飛ばねえ船なら飛ぶ船より動かすの楽だろ？」
「だから言っただろ、帆を操るのは経験が――」
「帆じゃねえ」
「あ？」
「海坊主を倒すよりよっぽど現実的じゃねえか、俺らにとっちゃ。……盗むんだよ、船を。数は少ねえが、探しゃどっかにあるはずの魔導船を」

４０（後書き）

活動報告に書籍版販売特典について書きました！
なんと……書店で買うと、電子版もついてくるのです！！

41

★　光天騎士王国　沖合１０ｋｍ　★

夜の海は静かで、星明かりさえも余さず映し出す鏡のように水面は穏やかだった。

『……』

しかし、黒い海に――さらに深い闇がゆらりと浮かび上がる。村ひとつ呑み込みそうなほどに大きなそれは、海面付近でじっとしていたが、やがてゆっくりと沈んでいった。

★　光天騎士王国　港町ザッカーハーフェン　★

「見つけたぜ、お嬢、お頭。魔導船はこのザッカーハーフェンには４隻ある」

魔導ランプの冷たい光が室内を照らし出す。小さなテーブルに集まっているのは男が４人、女は――ラルクはベッドに座って話を聞いていた。

山賊時代から「お頭」クックと付き合いがある面々ばかりで、「

人は襲うがケガはさせず、金は奪うが取りすぎない」という小規模襲撃を繰り返していた彼らは、警備隊から目の敵にされることも多くなく細々と暮らしていた。
そのころから役割は変わらなかった。

「ほう。４隻全部か？」
「当然」

胸を張った細身の男はスカウトと呼ばれていた。名前はなく、役割の「斥候（スカウト）」と呼ばれ、「技術者（エンジニア）」と呼ばれる仲間同様それで十分だった。
スカウトはテーブルに置かれたこの街の簡易地図を指差す。

「この港は漁業船と輸送船に大きく２つに分けてある。だけど、この一角だけは町の顔役どもが使える停泊所になってるんだ」
「ん？　軍用船もあるだろうが」
「軍用船は隣の港だよ。さすがに一般人と同じところじゃ軍船を動かせねえだろ」
「それもそうか――そんで、魔導船はその金持ちの停泊所にあるってこったな？」
「そう。だけど、揚場（ドック）が併設されてるもんで、すぐにしまっちまうんだ」
「はー。せっかくの船を海に浮かべず、陸でご丁寧に保存かよ。金持ちはなんでもしまいこんで腐らせちまうな」

お頭は言ったが、スカウトはにやりとする。

「そこがチャンスなんだ。鍵屋の出番だ」

ぽん、と横に座っていた小柄な男の頭に手を置く。

ボサボサの髪は目元まで垂れ下がり、ずんぐりむっくりした体型はドワーフを彷彿とさせるのだが、単に背が小さいヒト種族である。

「お、お、俺が？」

「ドックに侵入してかっぱらっちまえばいい。それにはお前が必要だろ？　鍵屋の腕なら開けられる」

「そんなにうまく行くのかよ……」

胡乱な目をするエンジニアに、スカウトは、

「行けると思うぜ。海に浮かべてりゃあ人の目もあるが、ドックにしまい込まれてちゃあ逆に人目は気にしなくていい。俺ぁ思うんだが、いちばん時間が掛かるのはエンジニア、お前が魔導船を起動するところだろ？」

「なるほどな。スカウトにしちゃ頭が切れてるじゃねえか」

「……俺にしては、は余計だろ、お頭」

「魔導船のエンジンに火ィさえ入れりゃ、あとは海にドボンしてオサラバだな」

「そんなにうまく行くのかよ……」

エンジニアは胡乱な目を今度はお頭に向けるが、

「ってことだが、どうする、お嬢」

お頭はラルクへと首を振り向けた。

ラルクは声を掛けられてようやく気がついたように口を開く。

「……ん？　ああ、お前らが行けるってんならそれでいーよ」

「お嬢……。マジでついてくるのか？　さすがに足手まといだからここにいろよ」

「うるせーな。アタシのためにお前らがやるっつってんのに、ひとりでここでぐっすり眠ってるわけにはいかねーだろ。おら、決まったんなら行くぞ」
「お嬢、こういうのはですね、綿密に計画を立てて……」
「黙れエンジニア。計画なんて立てたこともねーくせによく言うぜ」
さっさと立ち上がったラルクの言い分は、ある意味で正しい。
これ以上考えても調査しても新たな情報を手に入れられる見込みも、ツテもない。
どのみち彼らは出たとこ勝負。どうしても成功しなさそうだったら逃げればいいし、敵に囲まれる程度の修羅場は何度もくぐってきた。

（……だけど今回は、お嬢の天賦は使わせたくねえ）

お頭は思う。
ラルクの不調は天賦によるものであることはほぼ確実で、それを治すために船が必要なのに船を手に入れるために天賦を使わせたら本末転倒だ。

「よっし、お前ら、行くぞ。海賊団『潮風五万里』の出港だ」

お頭は言いながら立ち上がった。

「……」
「……」
「……」
「……おい、クック。そのクソダセー名前、マジで止めろよ」

仲間3人の冷たい視線と、ラルクの呆れたような声を聞いたお頭

はつぶやく。

「これだから学のねえ賊はダメなんだ」

「それ学とか関係ねーだろ……」

夜更けのザッカーハーフェンは、繁華街こそいまだに人通りがあるものの、一本裏通りに入るだけで暗く、人気はない。どこかに潮でも入り込んでいるのか、チャポ、チャポッ、という音が絶え間なく聞こえている。

5人はなにげなく歩いているように見えたが、その誰もが足音を立てていない。さらには自然と物陰を選んで通っているので表通りからちらりと見た人間がいても、そこを5人もの人間が通ったとはまったく思わないだろう。

夜更けの港はさらに人影が少ない。輸送船にはかがり火が焚かれて警備兵や傭兵が歩哨として立っているが、漁船の区画は無人だった。

さらにその先――資産家たちのドックがある区画もまた同様だ。

「おい、マジでこんなところに魔導船があるのか？　飛行船ほどじゃねーけど、それでも一財産のはずだよな……なのに警備が全然なってねーぞ」

ラルクが言うと、

「ま、魔道具で、侵入者除けのものが、せ、設定されてる……」

鍵屋が指差したのはいちばん手前のドックだった。

3階建てほどの高さの、石造りの建築物で、小さな窓があちこち

についている。
ドックは港に面した方向に巨大な扉があり、そこを開けば坂を下ってそのまま海に降りられる仕組みだ。
扉にはロープが渡され、魔導ランプのようなものが数個ぶらさがっていた。

「は、範囲はわからないけど、ち、ち、近づけば警報が鳴る……シンプルだけど、や、厄介だ」

ちなみにドックの裏手には警備兵の詰め所があり、警報が鳴れば出動するような仕組みになっているようだ。歩哨で突っ立っているよりは効率がいいという考えなのだろう。

「どうやって解除するんだよ、ここの持ち主は」
「警報解除の魔道具があるんだ。今からそれの代用品を作るのは現実的じゃねえな」

スカウトが代わりに答えた。

「残りのドックも見ようぜ」

同じ警報システムが設置されているドックが多く、それらを除外すると、侵入できそうなドックはふたつに絞られた。そのうち片方が、魔導船のあるというドックらしい。

「たぶん……だけどな。確率的には五分五分だ」
「ふーん、そんじゃ悪い賭けでもねーな。どうせダメ元さ、そこにチャレンジしてみよーぜ」

ラルクは右拳を左手に打ちつけた。

41（後書き）

発売まであと5日！

うちの妻が「ツイッターでファンタジア文庫公式がカウントダウンやってるじゃん。めっちゃプッシュしてもらってるじゃん」と言ったのですが、公式がプッシュしているというより担当のやる気が異常なだけな気がします。

（いい意味で）

（……いい意味で「異常」？）

42

★　光天騎士王国　港町ザッカーハーフェン　★

狙いのドックには通用口のような扉があり、鍵屋はさっそく確認を始めた。

「……う、うん、問題ない。こ、これなら、10分で開く」

「5分でやれ」

クックに言われ、大急ぎで解錠に取りかかる。

「クックにしちゃ珍しいじゃん、鍵屋をそんなに急かすなんて」

「……別に、急いだほうがいいだろうが」

そっけないクックの反応にラルクは首をかしげるが――クックとしては誰にも気づかれず、もめ事なんて起きるわけもなく、静かに魔導船を盗み出したいだけだった。

もし見つかりでもしたら大勢に追われる。そうなればラルクは天賦の力を使ってしまうだろう。

「……まだか？」

「ま、まだだよ。始めたばっかりだ」

クックは天を仰いだ。ドックとドックに挟まれるようにしてあるこの通路は、ひっそりとして暗いが、身を隠すものはなにもない。

海がすぐそこにあるからだろう、ざざざ……という波音に紛れてカチャリカチャリと解錠を進める音が聞こえる。

「……」
「……」

クックは海の方角を、スカウトは町の方角を確認しているが、

「……何人かいるな。こっちに向かっている」
「チッ。パトロールの時間か？」
「わからん。どうも決まった時間にやってるんじゃねえみてえだし」
「まだか、鍵屋。もう5分になるぞ」
「そ、そろそろ――開いた」

キィ、と手前に扉が開いたときだった。
指向性を持たせた魔導ランプ――つまるところ懐中電灯のような光が通路へと射し込んだ。

「……おい、どうした？　なんで進まない？」
「ああ、いや……なんか変じゃなかったか？」

ドックとドックとの間、細い通路に入るところで5人の警備兵は立ち止まっていた。
明かりを手にした先頭の男は続けて言う。

「なんか……ここが真っ暗で」
「バカ。夜中にここいらが真っ暗になるのは当然だろうが。さっさと行け」

「え、えぇ……？　おっかしーなー」

頭をかきながら5人はぞろぞろと通路へと入ってくる。

やがて通用口の前へ差し掛かり、

「そうそう、この辺で……なんか明かりが届かなくなったんだよ。暗幕に遮られたみたいな感じでさ」

「カーッ、お前、こないだ舞台なんてもん観に行ったばっかりに、暗幕なんて言葉使いやがって」

「そ、そんなんじゃない」

「はいはい、恋人がいてうらやましいですよ。はいはい。さっさと行こうぜ。さっさと戻って俺は眠りてえ」

「……」

首をかしげながら先頭の警備兵が進むと、談笑しながら彼らは遠ざかっていく。

「……行ったか？」

「行ったな」

「ふぅ……危なかった」

通用口に入ったすぐの場所で、クックたち5人は壁に背を付けて息を潜めていたが、警備兵が通り過ぎたとわかると一斉に息を吐いた。

あの瞬間、光が伸びてきた瞬間、確かに彼らは通路にいた。

だけれどそのときには闇の幕が――「暗幕のようなもの」が通路にいる彼らを隠していた。その隙に通用口から中へと滑り込んだのだ。

「へっ、やっぱあたしを連れてきてよかったろうが？　ん？　あたしの能力は戦うだけじゃねーんだよ」

ラルクは得意げに言った。「暗幕」とはつまり、ラルクの放った【影王魔剣術】の刃だったのだ。刃を広く大きくし、一時的に彼らを隠した。

「……」

クックは魔導ランプに明かりを点した。浮かび上がったラルクの額にはふつふつと脂汗が浮かんでいて――彼女はたった一瞬能力を使っただけでこれほど消耗したのだ。

「……そのとおりだな、ったく、俺たちゃお嬢がいなきゃなんもできねえのか？　おい、行くぞ」

だがクックは心配を口にせず、仲間たちが立ち上がる言葉を選んだ。

（今やるべきは、我が身のふがいなさを悔いることでもなく、お嬢を甘やかすことでもなく、前へと進むことだ）

光によってドックの広大な空間を見渡すことができる。

「おお……」

誰かが声を漏らしたが、それはクック自身かもしれなかった。

目の前に、そびえるほどに巨大な魔導船がある。帆船が当たり前のこの世界において、帆がなく、左右に巨大水車のような水かきが

ついているのは「異様」と言っていいだろう。
左右から支えられるように船体は持ち上がっており、地面はV字に掘られて傾斜し、海へと向かっている。そこには丸太が置かれてあるので、この上をごろごろと運ばれていくのだろう。
そしてその船体すべては黒光りする金属でできている。

「鉄が海に浮くのかよ？」

とスカウトが思わず言ってしまったのは仕方ないことだろう。

「……エンジニア、動かせるか？」
「まあ、船なんてのは操舵はたいして難しくないんで大丈夫じゃないかな」
「よし、そんじゃ１０分で動かせ」
「いや操舵の話だよな！？　魔導エンジンの起動はやってみなきゃわからんからな！？」

そう言いながらもあたふたと操舵室へと向かった。移動式の階段が掛けられており、エンジニアを先頭に、スカウト、クック、そしてラルクが後を追う。鍵屋はドック正面の扉を開ける役割があって別行動だ。
ラルクは階段を上がるだけで息を切らしていた。甲板に上がるところでクックが手を差し伸べると、

「……ったく、年は取りたくないもんだね」

なんてうそぶいた。

「強がりを言えるウチは問題ねえな」
「まーね。本物の年寄りは二言目には説教か『くたびれた』だろ？」

「お前、俺をじろじろ見ながらそんなこと言うんじゃねえ」
「へへっ」

クックの手を取らず、ラルクは段差を跳んで甲板へと降り立った。

それから１０分が経過した。

「お、お、お、お、お頭～」

鍵屋にしては声を張っていた。
甲板から身を乗り出したクックは、

「どうした！」
「もう、正面、開いたから、いつでも、出て行ける！」
「バカ野郎！　そんならさっさと登ってこい！」
「は、はい～」

ボサボサの髪を振り乱した鍵屋は階段を探し当てると、そちらへと駈けていく。

「いよっしゃ！」

操舵室からエンジニアの声が聞こえたと思うと、ブウウウウンと船は大きく振動した。

「急げ、鍵屋！」
「は、はいぃぃ」
「スカウト～！　左右の留め具を外してくれ！」

「おっしゃ！」

船体を支えている留め具を外せば船は落ち、海へと向かうだろう。

「あたしもやる――」

座って休んでいたラルクが立ち上がったところで、その姿が見えた。

「――やべえ、バレたぞ！」

通用口が開くと、わらわらと大勢の警備兵が雪崩れ込んできた。

43

★　光天騎士王国　港町ザッカーハーフェン　★

「な、なんだ!?　船が動いている!?」
「賊がいるぞ!」

先ほど疑問を感じていた警備兵が仲間を呼んできたらしい――急にドック内は明るくなる。

「スカウト!!」
「わかってら――よっと」

むりやり留め具を離したので、バチンと金具が吹っ飛び、船はぐらりと傾いだ。水車が補修のための櫓に当たって、木製の櫓はめきめきと折れていく。

「チッ」

ラルクは手を伸ばすと【影王魔剣術】を発動。長く伸びた黒い刃が次々に船を支える留め具を切り裂いていく。

魔導船が落下し、一瞬、甲板にいたラルクたちの身体は宙を浮くが、地響きとともに着地した魔導船へと降り立つ。クックは着地に失敗してごろごろと転がった。

ぎ、ぎぎぎ、と魔導船はずり落ちるように前へと進んでいく。

「――アイツら、魔導船を盗む気だぞ！？」

魔導船の起こした震動で警備兵たちも動きを止められたが、彼らはすぐに、

「――あそこに仲間がいる！」

ぐらぐらと揺れる階段の途中にいた鍵屋を発見した。

「鍵屋！　走れ！！」

魔導船の位置が下がったので階段の出口はラルクのずっと上だ。ラルクは甲板を後方へ走りながら叫ぶ。鍵屋はよたよたと起き上がって階段を上がり始めるが、その下方にはすでに警備兵がわらわらと集まっていた。

「急げ鍵屋！！」

「わ、わかっ、はっ、はぁっ」

魔導船が加速していく。鍵屋はようやくいちばん上にたどり着く。今すぐ飛び降りてくれれば魔導船に乗れるというのに、鍵屋はその高さに驚き、おののき、足がすくむ。

「――ッ！」

ラルクは手を伸ばすけれど、もう自分にできることはなにもない。手の先にチリッと黒い刃が見えたが、それは――他人を傷つける武器でしかないことはよくよく理解している。

（でも）

ラルクはこの天賦を手に入れた日、多くの人たちの命を奪った。
彼らのうち大半は、自分の職務を全うするためだけにあの場にいただけだ。その命を奪っていい、いかなる理由もなかった。
弟が自分の手を取らなかったのは当然だ――と思っていた。

（それでも、弟くんはあたしに手を差し伸べてくれた）

レフ魔導帝国で4年振りに出会った弟は、身長も伸び、大人びていた。
そして自分を助けるために行動した。

（弟くんなら、こんなところであきらめない！）

ラルクは手に黒の刃を纏わせる。
警備兵が階段を上っていくので大きく揺れる。
鍵屋はその場にへたり込んで動けない。

「そこだあああああああ！！」

黒の刃がほとばしる。刃は、警備兵の進む少し上をナナメに切り裂いた。
揺れていた階段から、切られ、分離した上部が滑り落ちるのはすぐだった。

「わ、わあああああああああ！？」

鍵屋の身体を乗せた階段が宙に浮く。甲板後方、ぎりぎりのところに落ちると、木々は破損し、鍵屋の身体が投げ出される。

魔導船はどんどん加速していく。

「つかめえええ！」

走り込んできたスカウトが手を伸ばし、鍵屋の身体をつかむと、一気に引き込んだ。

「ぶつかるぞおおおお！！」

操舵室でエンジニアが叫んだ。

魔導船の舳先がドックの扉に接触すると、すでに鍵の開いていた扉だったが、魔導船の重量に押されて右扉は外側に倒れるように壊れ、海水に落ちて水しぶきを上げる。

これだけ暴れてもほとんど破損していない魔導船は、着水するとバネで跳ねるように体勢が水平になる。

「火ィ吹けや、エンジン！！」

エンジニアが出力を全開にすると左右の車輪が回転し、水を掻き出していく。

「――待て！！」

「――逃げられると思うなよ！！」

警備兵たちがドックから飛び出して堤防を追ってくるが、魔導船の加速はすさまじく、あっという間に彼らを置き去りにした。魔導船の立てた波が停泊している小さな漁船を揺らしていく。

振り返れば、あわてる警備兵たちが見えた。

「ふぅー……」

ラルクは甲板の手すりに手をついていたが、その場に崩れるように倒れた。

「お、お嬢！　お嬢！」

クックが駈け寄ってくる足音が聞こえた――。

★

潮の香りがすることは、町に到着するずっと前からわかっていた。港町ザッカーハーフェンはこれまで見てきたどの光天騎士王国の町よりも雑然としていて、そして市民に活気があった。

「……この町にいるかな」

結局ここにたどり着くまで、ラルクには追いつけなかった。僕らの乗った馬車が遅かったわけではないと思う。ただ、ラルクたちが速すぎただけで。

空賊なんてやってるくらいだから、もしかしたら……とは思ったんだけどな～……。まさかこれほど「逃げ足」が速いとは思わなかった。

夜間の旅は危険だけれど、やる人がいないわけじゃない。彼らは旅に慣れ、野外の危険を誰よりも熟知している。

僕らは夜間、休息を取っていたぶんだけ遅れたのだ。

「きっといるべな。船は出せないって話だし」

心配そうにミミノさんが言ってくれる。
僕らは借りていた馬車を光天騎士王国の騎士に返す。
町の入口で、ラルクたちらしき一行が入ったことは確認している。気になるのはそれが3日前ということだけれど――追跡が1日遅れだったことを考えると途中でさらに2日ぶんも距離を空けられていたことに驚いた。
へろへろの騎士が手を挙げて去っていくので彼らも彼らで追跡に全力を尽くしてくれたことは間違いない。ラルクたちの速度がやはり異常なのだ――夜間の移動だけでなく、なにかしらの近道を使ったのかもしれない。
僕らは町に着いて早々ではあったけれど港に向かった。

「港で足止めを食らっていることを願おうぜ？　海坊主だかなんだかで出船してないって話じゃねえか」
「今までのラルクを見ている限り、僕の予想なんて軽々と飛び越えて行くんですよねえ……」
「そ、そんなにすごいのか、お前の姉は」

ダンテスさんがちょっと引いていた。

「だからあーしの提案した近道を使えばよかったんっすよ～」
「いや……ゼリィさんの知ってる近道って、途中にいる山賊を全滅させるか無視して通るかとか、法外な通行料を取られるか強行突破するかとか、危険がいっぱいだったじゃないですか。騎士さんがついてきてくれてるのにそんなとこ行けるわけないでしょ」
「馬車だけかっぱらえばよかったっすね」
「そういうことじゃないです」

拳を頭にコツンと当てて「てへっ」とかベロ出しているゼリィさんは確実に僕をからかっているのだと思います。早く借金返して欲

しい。

「……なんだか騒がしいですね」

港が近づいてきたところでノンさんが言った。

僕の耳も喧噪は捉えていたけれど、港町なんてこんなものかなと思っていた――でもなんだか少し違うようだ。

家々が切れた向こうにちらりと海が見え、そう言えばこの世界で初めて海を見るかもしれないと思うと僕のテンションが上がった。

というところで、こんな声が聞こえてきた。

「――魔導船が盗まれたってよ。なんでも盗賊は黒い刃をぶん回してたそうだぞ」

ああ……ラルクはやっぱり僕の予想を超えてくる。

44

ダンテスさんとノンさんには冒険者ギルドで「海坊主」に関する情報を集めてもらい、僕はミミノさんとともに船を貸し出してもらえないか、その交渉をしに出かけることとなった。ゼリィさん？いつの間にかいなくなってた。

交渉する相手は騎士団だ。

この光天騎士王国はやはり騎士の国なので、騎士に話を通すのが早い。

「――あいわかった。他ならぬレイジ殿の頼み、聞きましょう」

そして、決断も早い。

港町ザッカーハーフェンの騎士を統括している指揮官は、反り返るようなカイゼルひげの中年紳士だった。騎士とは言え、ふだんから帯剣しているわけではないし、実のところこの港町の町長を兼任しているのでそちらの仕事のほうが忙しいようだ。

「軍船に、いくつか魔導船があります。これを出しましょう」

あまりにもあっけなく承諾を得られたので僕のほうがびっくりだ。

「あ、あのう、いいのでしょうか？」

「もちろんです。理由はふたつございます」

爪の先までよく整えられた指が2本、ぴしりと立てられた。

「ひとつ目は、海坊主問題は深刻でしてな。海坊主の気分次第で行

ったり来たりされては今後も大きな問題が残り続けることになります。いずれにせよ調査船は出す予定でした。ふたつ目は――」

懐から一通の書状を出した。

「フリードリヒ＝ベルガー閣下からの書状です。レイジ殿が訪れた際には便宜を図るようにと……」

あの大きい騎士の人がそこまで気にかけてくれたとは。

「それに私はですな、フリードリヒ様の大ファンでして。こうして直筆の書状をいただけただけでレイジ殿に協力する理由になりましょうな」

町長は茶目っ気たっぷりにウインクした。

ファン？　と思ったけれど、その後の話を聞くに、同じ騎士でも前線で戦う人もいれば後方支援もいる、そして、町長のように書類仕事が得意となると文官としての仕事を回されるのだそうだ。

この国は文官も騎士だ。

適材適所という言葉はあるけれど、それでも町長の仕事をしつつも騎士としての花形である「５光騎士（ファイブナイツ）」や「１１天騎士（イレブンナイツ）」には憧れがあるのだそうだ。

そんな役職に僕を推挙しようとしてたのか、あの人は……。

というかそれを断った僕って「不敬者！」って怒られたりしそう。

そのことは黙っておこう。

「では早速、参りましょう。お連れの方には騎士団の港湾施設にくるようお伝えしておきます」

伝令が冒険者ギルドと、どこぞとしれぬところへと（ゼリィさん

のいる場所だ。ゼリィさんがどこにいるかもちゃんと把握しているらしい……恐るべし光天騎士王国）走っていくのを見送り、僕とミミノさんは町長に連れられて港へと向かう。

「わざわざすみません、町長自らにこんな案内をしていただいて……」

「いいえ、構いませんとも。『１１（イレブンナイツ）天騎士』に推挙されるかもしれなかった御方を案内できるなんて、騎士の誉れですからな」

「……」

知ってるんかーい。

一瞬、きらっ、て目が光ったからね！　やっぱり「不敬なり！」って怒ってるかもね！

「ふふふ、そう固くならず。我ら光天騎士王国の良さをしれば、レイジ殿もこの国で暮らしたいとお思いになりますよ」

「そ、そうですかね……」

「もちろんです」

町長と僕らだけでなく、後ろには１０人ほどの騎士たちが整然とついてくる。

町の人たちは騎士を警戒することもなく、

「――おっ、町長。今夜一局どう？」

「――ほら、騎士の方々よ。ご挨拶して」

「――騎士さんが通るぞー、台車どけてやれや」

なんて感じで、気軽に将棋っぽいゲームに町長を誘ったり、小さい子どもが手を振ったり、通行の邪魔だから道を空けたりしてくれる。

偉くて尊敬されているのでもなく、権威だからと疎んじられるのでもなく、自然と溶け込んでいる。確か、首都のほうは規律が厳しいと聞いていたけれど、外れにある港町はずっと柔らかくなっているのだろう。

（確かに、いいなぁ……ここ。町と騎士が優しく融け合ってる感じがする）

僕がそんなことを思っていると、

「ときにレイジ殿。風のウワサではどうも、レフ魔導帝国の皇帝陛下にとんでもないお願いをしたのだとか？」

「ブッ」

いきなりきわどいツッコミが飛んできて、僕は噴き出した。

「なな、な、なんで町長がそのことを……！？」

「ウワサは風のように伝わりますからなあ。ただ、どうしてもその中身までは伝わってこず……いったいどのようなお願いをしたのかと思いまして。かの帝国皇帝が即答できず、検討会を開いたほどなのでしょう？」

そこまで伝わってるのが怖い。僕ら、かなりの速度でここまで来たのに、ウワサのほうが伝わるの早いってどういうこと？

「今はお急ぎのようですから、是非とも、海から戻られたら食事でも……？」

「わ、わかりました」

僕らは、民間の港の隣にあるもうひとつの港、軍港へとやってき

ていた。
　こちらは商船や漁船と違って、大砲やシールドなどが甲板に並んでおり、物々しい雰囲気がある。
　町長は部下とともに軍船の確認へと向かったので、僕とミミノさんはそこに残された。

「いやー……びっくりですね。どうして町長があんなことまで知ってるのか」
「食事の約束しちゃったけど、いいのか、レイジくん？」
「さすがに断れませんよね。こっちの都合で軍船まで出してもらうなんて、ふつうできませんし」
「……」
「……ミミノさん？」

　顔をうつむけたミミノさんは、

「……さっきの話だけどな、わたしたちも気になってたんだ。どうしてレイジくんがあの『お願い』をしたのか。なんとなくはわかるんだけど」
「そう言えば、あまりその話はしませんでしたね。僕もどこからが機密でどこまでが話していいのかわからないところもあったので」
「話したくないのならいいんだけど……」
「いえ、そういうことでは全然ないです」

　僕は改めて、皇帝にお願いしたことを思い出す。

「僕が願ったこと……『アナスタシア殿下の身柄の解放』は、僕が勝手に願っただけで、アナスタシア殿下自身がそう考えているかまでは、まだ聞いていないんです」

４４（後書き）

書籍版発売まであと2日！　ここからは毎日更新します！（つまり平常運転）

45

ハイエルフの王族ではあったものの、声を出すとエルフの嫌う【火魔法】を自然と発動してしまうことから、アーシャは魔導飛行船との「対価」としてレフ魔導帝国へとやってきた。

声も出さず、能動的に動かないアーシャはまさに「鑑賞物」としての扱いを受け、公式の行事などに参列してただそこにいるだけの存在として扱われていた。

だけれど、彼女の体質はコントロール可能だったわけで、今、アーシャはしゃべることもできるし自由に魔法も使える。それは「裏の世界」で十分わかった。

「でもそれならどうして、レイジくんは、アナスタシア殿下の声を治してしまったことを言ったんだべな？」

僕は皇帝に「お願い」をしたときに、アーシャの喉や声についても一通り説明した。まあ、もちろん、部屋に忍び込んだことまでは言わなかったけど。

そうなるとアーシャの「価値」は高まり、帝国としては彼女を手放したくなどないだろう。それもあって「持ち帰って検討」という日本のサラリーマンみたいな対応になったのだと思う。

「……これから自由になるというときに、隠し事や秘密があったら、その自由に陰りができてしまうと思ったんです」

「レイジくん……」

ミミノさんは心配そうに僕を見る。

ああ、こういう顔を見ると、ミミノさんは僕よりも年上なんだな

あと思う。ふだんは僕よりも小さい子って感じなのに。
きっとミミノさんは、僕が「言わなかったこと」にも気がついた。
僕の「自由」は、「隠し事や秘密」のある「自由」だったから。
鉱山から解放されたことは契約奴隷としてはイレギュラーなことだったし、僕はラルクのことを隠し、ゼリィさんとともにこっそりと国外に脱出した。
アーシャにはそんな思いをして欲しくなかった、と思うのは僕のワガママでしかない。
事情を話してしまうことで皇帝がアーシャを手放したくないと思う、そのデメリットを知りながら。

「大丈夫ですよ、ミミノさん。僕自身のことはもうなんとでもできるでしょうし」

【森羅万象】のおかげで戦闘能力も高くなったし、なにより逃げ足についてはだいぶ自信がある。キースグラン連邦で捕まることはないだろう。

「それに皆さんがくれたこれがあるから、黒髪黒目であることの引け目もなくなりました」

道具袋から取り出したのは、レフ魔導帝国が発行した僕の身分証だ。

「……レイジくんをいじめるヤツがいたら、わたしが許さないから！　それにレイジくんが望むならどこにでもついてってやるべな！」
「ありがとうございます、ミミノさん。心強いです」
「もっと頼っていいべな！」

胸を張るミミノさんが可愛い。でも急に幼く見えてきた。

魔導エンジンを積んだ軍船は１００人以上が乗れるような代物ではあったけれど、海坊主を相手にするならこれくらいは必要ということだった。

ダンテスさんにノンさんもやってきて合流し、ゼリィさんはすでに酔っ払っていたけど甲板に放り込んで、僕らも船に乗った。

「――すると、冒険者ギルドは何百年も昔から海坊主について把握しながらも、ほとんど情報はないということですか？」

ダンテスさんからの報告を聞いて、僕は言った。

港から沖に出ると船の揺れが大きくなるが、船室に入ってしまえば風はない。

「ああ。過去に何度か討伐チームを組んでやってみたが、全滅を繰り返し、最終的には『触らぬ神に祟りなし』ということになったらしい。実際、長くても数か月すればいなくなるし、次に出てくるのは何年後、何十年後だからな」

「――しかしですな、『銀の天秤』リーダー、ダンテス殿。その数か月の間に食い扶持をなくし、死ぬ者もあるのが事実なのです」

町長もなぜかついてきた。そして町長は「銀の天秤」の活躍も耳にしており、騎士だとか冒険者だとか関係なく尊敬のまなざしを向けていた。いや、ミミノさんには向けていなかったのでマッチョが好きなだけかもしれない――と僕はフリードリヒ様を思い出しながら思った。

「そんなに影響があるのか――あったんですか」

「ダンテス殿、私相手にはふつうに、ざっくばらんに、気軽に、冒険者同士のように接してくだされ」
「し、しかし……」
「いいのです。私がいいと言っているのです」

ダンテスさんが助けを求めて僕を見るけど、僕は「あきらめて」という顔でうなずき、部屋にいる他の騎士さんたちは「すまん」って感じでうなずき、ゼリィさんは甲板で「おえええええ」と盛大に海へ吐いていた。

「じゃ、じゃあ、ふつうに話すが……」
「はい、ダンテス殿」

おえええええ。

「海坊主で、陸地に死者が出る、と？」
「はい……残念なことですが、数か月も留まられると沖を専門に活動している漁師がどうしても食い扶持をなくしてしまいます。町も補助をしているのですが、借金をしている者などはどうしようもなく、自ら命を絶つ者が出てきますな」
「そうか……」
「そのために、海坊主を討伐できないまでも、追い払う方法がないかを確認したいのです」

僕は、テーブルに広げられた海図を見た。そこには海坊主の目撃地点が、今回、過去と、色分けされてバツ印がつけられてある。
発見箇所はばらけているのだが、堤防や陸地からは一定の距離になっている――つなげれば線になりそうな感じで。
つなげれば線になるもうひとつの海岸線……それってアレのことか？

いや、でも、さすがにそれくらいみんな考えてるよな……。
うーん。

「どうした、レイジ？　なにか思いついたことがあるなら言ってみてくれ」
「あ、えーっと……その、皆さんもう考えたことかもしれないんですが」

僕はバツ印を指差した。

「あのー……もしかしてここに、大陸棚のようなものがあるのでは？」

45（後書き）

書籍版はいよいよ明日発売です！
「紙を買うと電子がもらえる」キャンペーンもやっていますので、是非文庫と電子書籍と両方入手してくださいませ。
（ネット書店は対象外なのでお気を付けください！）

店舗特典は活動報告にまとめてありますのでそちらをご覧いただければ。
私も明日はこそこそと書店をハシゴしてきます！

46

「大陸棚」は海底の地形のことで、陸地から一定の距離まで緩やかに傾斜する海底が、ある場所で急に深くなる場所までのことを指す。

ここに大陸棚があるということは、賢者がいるという群島はかなり遠く、違う大陸プレート上にあるのだろうか……なんて考えてしまったけれどそれは今はどうでもいいことだ。

僕は一通り大陸棚について説明をしたのだけれど、ダンテスさんは「？」という顔で首をかしげ、

「レイジ、大陸棚なんて言葉は俺は初めて聞いたぞ。町長はどうだ？」

「海坊主が目撃されたあたりの水深は１００メートルをはるかに超えており、どれほど深いかわかっておりません。そのため海底地形は不明ですな」

「あ……」

そうか。そりゃそうだよね。海底の地形がどうなってるかなんて調べようがない。

この世界には海底探査船なんてものはないし、超音波の測定器なんてものももちろんないのだから。

「しかし……この辺りの海域では採れる魚種が変わるという話は聞いたことがございます。そうだろう？」

と町長は騎士たちにも聞いてみるのだが、ほとんどは「わからない」という感じで、ひとりの若い騎士がおずおずと手を挙げた。

「うちの爺様が漁師をやっておりますが、『海坊主は食い物が違うから港までは来ない』というようなことを言っておりました」
「……それは初耳ですが、報告書にそのような内容は今までなかったと思いますよ」
「ちょ、町長、爺様の発言はまともに取り合ってもらえなくてですね……そもそも海坊主がどんな化け物かもわからないのに、なにを食べているかなどはさらにわからないものだからと」
「ふー……わかりました。あなたのお祖父様はすばらしい漁師の勘をお持ちなのでしょう」
「はっ。恐れ入ります」
「――レイジ殿。大陸棚という場所があることは不勉強ながら初耳でしたが、そこに棲息する魚の生態は変わるのでしょうか？」

僕は日本にいたときの知識を必死で思い出す。

「ええと、はい、たぶん。大陸棚があることで海流の動きにも変化があるはずですから、魚の棲息はもちろん、回遊魚の訪れる季節も変わると思います」
「ふむ……つまり海坊主は捕食のためにザッカーハーフェンの沖合、大陸棚に現れると？」
「……可能性はあります。ですが、僕が思うに……」

もうひとつの可能性を口にしようとしたときだった。

「――町長！　前方に魔導船を発見！」

監視に当たっていた騎士の声が聞こえてきた。

「戦闘中！！　何者かと戦闘中です！！」

水平線にぽつんと見えた小さな点が、僕らの追っている――ラルクの乗っている魔導船なのだというのはすぐには信じがたかったけれど、すぐにそれがそうなのだとわかるようになった。

派手に水しぶきがあがっているのだ。

それは魔導船からの攻撃なのか、あるいは海底からの攻撃なのかは定かではなかった。

「スピードもっと上がりませんか！？」

「これで全速力ですよ……！」

僕は操舵室の騎士に声を掛けたが、すでにできる限りの速度を出しているらしい。

甲板に飛び出して舳先へ向かうとそこにはゼリィさんがいた。

「坊ちゃん」

「ゼリィさん、見えますか？」

「なんとなくは」

船酔いしていたゼリィさんの口元はキラキラしたなにかで汚れていたけれどそれを突っ込む気にはなれなくて放置。

ゼリィさんは僕より目がいい。僕は天賦を吸収しているのにゼリィさんのほうがよく見えたりすることがあり、それはきっと猫系獣人という種族特性なのだろう。

「……ヤバイっすね」

額に手をかざして目を凝らしていたゼリィさんが言った。

「あれ、戦ってないっすよ。逃げてるんです！」
「えっ――」

そういうことか。
1日先行していたはずのラルクの魔導船にすぐ追いついてしまったことが不思議だったけれど、海坊主に遭遇し、Uターンして沿岸へと逃げてきているからなのだ。
すさまじい水しぶきとともに緑色の触手のようなものが跳ね上がった。直撃は免れたものの魔導船はぐらりと揺れている。

「海坊主……あれが！？」

僕は目を疑った。
沖からこちらへ向かっている魔導船は、濃い色の海を走っていた。それは単に海の色が変わっているだけなのだと思っていたけれど――すさまじい広範囲に渡る「影」なのだ。
その全部が海坊主なのだとしたら。
村や町をまるごと呑み込むほどのサイズだ。

（あんなのとどう戦ったらいい！？　海中にいる敵だぞ！？）

魔導船の姿が見る見るはっきりしてくる。向こうもこちらに気づいたようで、「逃げろ」とでも言わんばかりに甲板に立った誰かが白旗を振り回している。そこへ、波が立って魔導船が揺らいで白旗が空へと舞った。
触手が何本も伸びてくる。あれに捕まったら終わりだ。

「あっ――」

黒い刃がほとばしり、触手を切り裂いていく。

「……あんのバカ！　バカラルク！！」

ためらわずに【影王魔剣術】を使った。天賦が原因で身体がもたないことを理解していないのか？　理解してても使っているのか？

どっちにしろ――バカだ。

「これ以上は近づけません！　撤退しましょう、町長！」

「し、しかし……」

「旋回している間に追いつかれますよ！？」

「ううむ」

後ろでは町長に騎士たちが詰め寄っている。

騎士たちの言うことは正しい。この船に載っている装備で、あの巨大な生き物をどうこうできるとは僕にも思えない。

「町長――」

僕は言った。

「引き返してください」

「坊ちゃん、それは――」

横にいたゼリィさんがぎょっとした顔をする。

だけど、僕が言おうとしたことはゼリィさんが考えたことと少し違う。

「皆さんは引き返してください。僕がひとり、向こうの魔導船へ飛び移りますから」

僕は【火魔法】と【風魔法】を展開した。

46（後書き）

いよいよ本日書籍版が発売されます。私も書店を巡ってきますので、その内容は別途活動報告に掲載します～。

書籍版、電子版ゲットされましたら、是非とも活動報告に入手書き込みお願いします！

47

【強化魔法】を掛け、【身体強化】【跳躍術】を使うのはもはや自然にできるようになっている。舳先を踏んで飛び出すと、僕の身体は何メートルも高く飛び出していく。

「坊ちゃん！」
「レイジ！」

みんなの声が背後から聞こえるけれど、ごめんなさい、今はラルクのところに行かせてください。

「う、お、お、おおおおおおおおお！！」

【火魔法】と【風魔法】を同時に発動させ、これまで以上の爆風を生み出す。僕の身体はロケットのように飛んでいき、身体にすさまじい慣性力が掛かる。骨が軋み、視界が歪む。それを無理やり【回復魔法】で押さえ込む――僕の行動はだんだん人間離れしてきたような気がする。

「あれは――！？」

緑色の飛沫が何本も上がって、触手のように魔導船へ伸びてくるのを相変わらずラルクが斬り落としているのだけれど、その向こう、海面がせり上がってずぞぞぞぞぞとなにかが上がってくる。

飛沫をまき散らしながら出てきたそれは、深い緑色の小山だ。窪みがいくつかあって、その空洞は黒々として――顔のように見えなくもない。

これが海坊主の海坊主たるゆえんか。

「――もっとスピード出せ！」

「――やってるって、お頭、邪魔だからあっち行ってろ！」

「――わ、わ、わ、わ」

「――お嬢にだけ戦わせてんじゃねえ！　弓ぐらい撃て！」

魔導船で騒いでいるラルクの仲間たちが見えてくる。

そしてラルクはと言えば、魔導船の甲板後方で【影王魔剣術】の黒い刃を撃ちまくっていたけれど――ついに、手をかざしてもそれは出てこなくなった。

脱力するようにその場に膝をつくと、うなだれる。

そこへ、何本もの触手が襲い掛かる――。

「ラルクぅぅうううううう！！！！！！！！」

威力を極限まで高め、出力を極限まで細くした【風魔法】を左右の指に展開。１０本の風の刃を持って僕は彼女の頭上から甲板へと飛び降りる。

ドンッ、というすさまじい衝撃を足で殺しきるのは不可能で、またも骨にヒビが入り身体が悲鳴を上げるのを【回復魔法】で押さえ込む。今の僕の肉体は借金を借金でカバーしている自転車操業状態。

でも、それでも、ここで無理をしないでいつ、無理をする。

遅れてついてきた風の刃は、僕を中心に前方へ１０筋になって放たれ、触手を切り裂いていく――ぼとぼとぼとと甲板に触手が落ちてくる。

「……弟、くん？」

僕は振り返った。

「ラルク……」

そして、言った。

「――こんの、バカ！！！！！！！！」

「え」

「バカバカバカバカ！　考えなし！　向こう見ず！　計画性皆無のアホ！」

「え、いや、ちょっと、え、なに？　いきなりあたしディスられてんの？」

「当たり前だろ！」

僕はここぞとばかりに言った。

「確かなあてもなく、なに勝手に出奔してんだよ！？　賢者とかいう人がいる保証だってないんだろ！　大体、【影王魔剣術】が身体を悪くしてんのに、使いまくってどうすんだよ！　賢者に会う前に死ぬわ！」

「そこまで――わかってたのか」

「わかってた。わかってたよ」

僕は彼女の頭に手を載せて、【回復魔法】とともに【闇魔法】を使う。

「僕が、ラルクと肩を並べて戦えることくらい分かってたろ？　だったら……もっと頼ってよ。僕らは姉弟なんだから……」

「……お前、これ……」

ラルクの瞳がとろんとして、まぶたが閉じられる。

そう、相手に触れなければ発動できない【闇魔法】、「夢魔の祈り（プレイング・ナイトメア）」を発動したのだ――ラルクを眠らせるために。

力が抜けた彼女を抱きかかえながら、

「そこの人、ラルクをお願いします！　寝かせておかないと体力がもちません」

「あ、ああ」

長身ながらがっしりとした体躯の人が来て、ラルクを任せることにした。その間にも僕は【風魔法】を使って触手を斬り落としていく。

「お前、確かお嬢の……」

「はい、弟です」

僕は答えた――そう、答えられることのうれしさを噛みしめながら。

「全然似てねえな」

「……」

それはまあ、そうだけどさ！　今言うべきことかな、それ！？

「で、どうすんだ、この化け物」

「まあ、なんとかやってみるので、皆さんはケガをしないようにがんばってください」

「なんとかやってみるって――いや、いい。すまねえが、頼む」

「はい」

ラルクが去っていったのを確認して、僕は改めて海坊主に向き合

う。

「さて――それじゃ、始めようか。できれば穏便に帰ってくれればいいんだけどね……」

こちらは海坊主の縄張りに勝手に入ってきた船。海坊主はそれに攻撃を加えているだけ。なるべくなら戦わずに済ませたいけれど、向こうは魔導船を破壊する気満々だった。

気の進まない戦いが始まろうとしていた――。

まずは海坊主がどんな生き物なのか確認しなければならない。

周囲を確認する。

甲板に落ちた緑色の触手の残骸を見ると、ぴちぴちとうねるように動いていた。太さは様々で、毛のように細いものから丸太のように太いものまである。

正面にいる海坊主の「顔」を見ると、窪みにはボゥとした光が点っており、こちらを見ているような――そんな感じがする。

こういうときに【森羅万象】が役に立つ。

【森羅万象】が伝えてくる情報は、海坊主がやはり単体の生物であること。触手には麻痺毒を含んだ針が隠されていること。ボゥとした光は感覚器であり、視覚情報ではなく温度や魔力の流れを探知していることなどだった。

触手の切れっ端が海に落ちていくと、それは海坊主の本体に吸収されていく。つまり、【風魔法】で切り裂くのは有効だが海坊主に打撃を与えることはできないということだ。

「それなら、触手を切りまくってこのまま港まで逃げる……？」

海坊主が岸までやってきたという記録はないし、これほどの巨体ならば水深の浅い海で引き返す可能性は高い。
名案では？　――なんてのは浅はかでした。

「うわあああっ！？」

魔導船がいきなり大きく傾いたのだ。

「――ぎゃーっ！」
「――お、お、お頭、痛い……」

操舵室内でも人々が倒れて折り重なっている。僕もあわてて甲板の手すりをつかんだけれど、身体が浮かんでそのまま海に放り出されそうなほどだった。
海坊主が、船底から攻撃を仕掛けてきたのだ。
それだけじゃない。

「ちょ、ちょ、ちょっとちょっと……！」

正面にある「顔」の「口」が開いたと思うと、青白い光がそこに集まってくる。「高エネルギー反応」だと【森羅万象】が伝えてくる。
こういうときは決まってる。
カッ――とレーザーのように光が放たれるのだ。

「ちっきしょおおおおお！！」

夢中で【闇魔法】を繰り出し、魔導船後方に闇の雲を出現させる。放たれたレーザー光を吸収し、闇の雲がみるみる縮んでいく――レーザーは止まらないので僕はさらに闇の雲を追加する。

エネルギーを、魔法で相殺していくのだ。

「あんなデカいのと我慢比べできるかぁっ！」

やけになって叫んだときだ――矢が飛んできて、僕の足元に突き刺さった。矢には小さなビンがついていて着地と同時に砕け散る。淡い燐光が立ち上ったその直後、映像を早回しするようにもうひとつの闇の雲が現れてどんどんどんどんレーザー光を吸収していく。

「――坊ちゃん！」

「――レイジくん！」

弓を放ったであろうゼリィさんと、ミミノさんの声が聞こえた。帰るようにお願いしたはずの軍船が、すぐそこにまでやってきていたのだ。軍船はUターンを始めており、この魔導船と並走しようというのだろう。

僕を助けるために残ってくれたのだ。

48

【闇魔法】がレーザーを吸収しきると、再度海坊主の顔がそこに現れる。

ミミノさんの、あの反則みたいなポーションがあるなら心強い。

何発でも来い！　――と思ったところへ、

「レイジくん！『魔法複製薬（デュープ・ポーション）』はこれで打ち止めだべな！」

というミミノさんの声。

で、ですよね……これ作るのめっちゃお金掛かるって言ってましたものね……！

「む」

海坊主は、小山のような身体を縮ませていた。ぬらぬらした表面にはシワが寄っているようにも見える。

魔法を使ったから縮んだのか？　ということは、あの魔法は何発も撃てない？

「それなら――こっちから反撃だ！」

今なお触手が襲いかかってきて、それを【風魔法】で切り裂きながらの反撃だ。さらには全速前進の魔導船上はぐらぐら揺れるのでバランスを保つのが難しい。

でも、敵の図体がデカいのはラッキーだ。

「行け！」

【火魔法】を3発繰り出すと、バスケットボール大の火球は弾丸のように回転しながら海坊主の顔面に直撃する。
飛沫が上がり、高熱で海水が蒸発する。
ごっそりと肉が削れたそこにあったのもまた、緑色の肉体だった。
緑色の体液が噴き出す。

「ぎゃー、めっちゃグロい！」

いつの間にか近くに来ていたゼリィさんが叫んでいる。

「レイジ！　俺たちにできることはほとんどねえが、後ろは気にせずぶちかましてこい！」
「レイジ殿！　ここであなた方を見捨てるほど、騎士道は腐ってはおりませんぞ！」

ダンテスさんにしてはめずらしく長剣を構えている。軍船にも触手が降り注いでおり、それを器用に切り裂いている――この人、ほんとにとんでもないことをさらっとやるよね……！
触手が分散したおかげで、こっちに来る攻撃は薄くなる。
十分です、ダンテスさん。
それに町長もほんとうにありがとうございます。

「ミミノさん！　ありったけの毒をください！」
「毒！？」
「あれは――れっきとした生き物です。毒は有効のはずです！」
「わ、わかった」

ミミノさんが道具袋からとりだした、一抱えほどのたくさんのビン――いや、そんなにたくさん毒が入っていたんですかね……？

ふだんからそれほどの量を持ち歩いている……？
受け取ったゼリィさんが、接近した船と船の間を、陸上にいるときとほぼ変わりなく跳んでこちらへやってくる。
「坊ちゃん、持ってきやしたよ――坊ちゃん？」
「あ、あー……いえ、大丈夫です」
ゼリィさんの運動神経もすさまじいな、と感心していたなんて言ったら絶対この猫系獣人は増長するので言わない。
僕は手ぬぐいを広げて毒のビンをまるっと包み込む。がしゃがしゃ音がして危ないことこの上ないけれど、一時的なものだからたぶん大丈夫だ。
「ゼリィさん、泳げます？」
「な～に言ってんすか、坊ちゃん。『闇牙傭兵団の人魚姫』とウワサになったあーしですよ？　嵐の中だって泳げますぜ。実際、借金取りから逃げるときに嵐の夜に大河を泳いで逃げたこともありやす」
それは自慢できることではないのでは……と思ったけれど、まあ、いい。
「じゃ、僕が海に落ちたら拾ってください」
「それくらい任せてくだ――え？　今なんて？　坊ちゃん、坊ちゃん！」
僕は毒ビンを両手で抱えて飛び出していた。【火魔法】と【風魔法】でぐんぐんと海坊主に迫る。
残りの魔力量は心許ない。レーザーを防ぐための【闇魔法】でかなり持って行かれたからだ。
でも、大丈夫。

すでに【森羅万象】による情報分析は終わっている。
触手以外に毒はなく、おそらくだけれど生物でいう「口」は下にある――海中に向けて口が開いていて、そこで食事をしている。
つまり、これは巨大なクラゲなのだと。
魔法を使い、体液が血のように流れる時点でクラゲそのものではないのだけれど、クラゲの仲間であることは間違いない。
だから、

「やっぱり……こっちはがら空きじゃないか」

空中を駈けて海坊主に突っ込んで行く僕を、捕捉する触手はなかった。
海中に向けて生えている触手を海面に出すには、傘の外側から出す必要がある。つまり、傘の中心に行けば行くほど触手は届かないのである。
だけど、小山のくぼんだ目のようなところがチカッ、チカッと光ったと思うと、

「うわあ！？」

細いレーザーを撃ってきた。身体をひねって射線をかわしたけれど、服を破られた。
危ない……魔力切れのくせにぎりぎりまで絞り出してくるなあ、もう。

「だけどこれで終わりだから！」

僕は小山目がけてナナメに急降下していく。

「うおおおおおおお！！」

残った魔力のほとんどを使って、【風魔法】を展開。身体から急速に力が抜けていく。

巨大な空気の刃で傘を切り裂くと、どぷっ、と大量の体液が噴き出した。小山を切り裂いた場所に着地した僕は生臭いニオイに包まれ、同時に大量の体液を身体に浴びた。「うげーっ」というゼリィさんの声が聞こえた。

これは無害これは無害これは無害と念じながら僕は手ぬぐいにくるまれた毒ビンを海坊主に突っ込んだ。ずぶりとした感触に、ひんやりした温度が伝わってくる。

ぶぶぶぶと海坊主が震えたのは、異物を突っ込まれたせいだろうか？

でも正直、僕はこれ以外の方法を思いつかなかった。

クラゲの生命力を舐めてはいけない。

触手や傘を片っ端から斬っていっても、生き延びそうな気がするのだ。

時間が経って海坊主の魔力が回復したら、またあのレーザー光を撃ってくるだろうし。

「だから……苦しませてごめんだけど」

僕は腕を抜くと、背後に跳んだ――【風魔法】で距離を取りながら、【土魔法】を放つ。

正真正銘、僕の魔力の残りカスで撃った礫弾は、見事に、緑の体液に染まった手ぬぐいに突き刺さるとビンを木っ端微塵にした。

僕の身体が海に落ちる。

海坊主の傘が、緑から青に、青から白に、白から緑に――めまぐるしく変わっていくのが見える。

ああ、毒は効いたんだな……さすが、ミミノさんの毒だ。

……怒らせたら怖いのは、物理的にはミミノさんだな……。

そんなことを思う僕の身体は海面に浮き上がった。

49

クラゲの生態は地球のそれですらわからないことが多いというのに、この異世界でどんな生態なのか、については【森羅万象】頼りになってしまう。

切り裂いた触手については与える影響としては低かったけれど、毒は有効であったことから今回の作戦を選んだ。

クラゲは死ぬと、海水に溶けるみたいだ。そのとき毒は海に流れ出す。

とはいえ猛毒ではあるけれど、さすがに量がそこまで多くないので――むしろこの量でよく海坊主を仕留められたなと感心すると同時にミミノさんが怖くなったけど――海坊主が死んだあとは、広い海に拡散して無毒化するだろう。海洋汚染なんてレベルにはもちろんならない。

「――坊ちゃん！」

魔力切れで脱力している僕の身体を引き寄せてくれたのはゼリィさんだった。こう言うと怒られそうだけど、腕利きの冒険者としても活躍しているゼリィさんの腕はたくましく、僕は安心する――安心すると眠くなるので、気をしっかり持つ。

晩夏とは言え太陽の陽射しはぎらついていて、僕の目を焼いた。

「無茶ばっかりして……しっかりつかんでください」

船へと泳いで戻りながらゼリィさんが言う。僕をマントのように背負いながら平泳ぎで進むその姿は、自己申告通りかなりの水泳上手っぽい。

「へへ……すみません。でも長引いたら魔導船がもたなさそうだったので……」

先ほどまで波を立てていた巨大生物海坊主は沈黙しており、海底へとゆらゆら沈んでいく。海面に漂うように伸びた触手は、沈む本体に引きずられてするすると落ちていく。

「……それを見てなきゃなんない、人たちのことも考えてくださいよ……。レッドゲートが出てきたときからかれこれ、坊ちゃんはむちゃくちゃしすぎです」

珍しく真剣な口調で言われて、僕はハッとした。軍船の縁で僕の名を呼んでいるミミノさんの目に、涙が浮かんでいるのがこの距離でも確認できる。

「……すみません」

心配してくれることのうれしさと、申し訳なさとで胸が一杯になって、僕が言えたのはそれだけだった。「わかってくれたんなら、いいっす」とゼリィさんは小さく言った。

「ところで」

しんみりした空気を吹き飛ばすように明るい声でゼリィさんが、

「あの海坊主は結局なんだったんです？　こんな化け物見たことないっすけど、毒は効いたんですねえ」

僕はクラゲについて説明しようと思ったけれど、どう言ったらい

いんだろうか。

「不思議っすよね～。わざわざ船を襲ってくる生き物なんてのも」

「……そうですね。気が立っていたんでしょう」

「人間みたいに感情があるんすか？」

「それはわかりませんが、ちょうど、そういう時期だったんじゃないかと」

「……時期？」

僕がさっき、船室で町長やダンテスさんに言おうと思ったこと。

なぜ、海坊主がこの大陸棚なんて場所にやってくるのか――。

まず目撃例が少ないのは海坊主が出たら逃げるように言われているから仕方ないにしても、どうしてそこまで生態が不明で謎のヴェールに包まれているのか？

それは近づいた船はことごとく沈められたからで、ゼリィさんの言ったように、海坊主は「わざわざ船を襲った」のだ。

「推測にしか過ぎませんが……海坊主が沿岸に近づく理由は、『産卵』ではないかと」

大陸棚があるような浅めの海底に卵を産む。産んだらまた沖に戻る。

産卵は体力が必要なので食欲が旺盛であり、さらには神経質になるので気が立ちやすい。そんなところへ船が来たら襲いかかる――というわけだ。

「はぁ……なるほど。坊ちゃん、よくそんなこと思いつきますね？」

日本のテレビではよくそういうのやってましたから、と言えれば楽なんだけどな。

「……坊ちゃん？　どうしました？」

僕はそれよりも、気になることがひとつ。

クラゲが産卵するのならそれはそれでいい。確か、受精卵を抱えて幼生になってから放出するようなものもいれば、死んだあとに若い個体に生まれ変わる「不老不死」みたいなのもいるはずだ。まあ、毒で死んだら生まれ変われないだろうけど。

問題は海坊主が有性生殖なのか、無性生殖なのかということだ。

「……ゼリィさん、急いでもらえますか？」

「え。結構急いでますけど」

「全力で。僕、なんかイヤな予感がするんです」

無性生殖ならば勝手に卵を作って勝手に子を生み出すだけだ。長い人生……クラゲ生の果てに海坊主クラスになるものもあれば、小さいうちに魚に食われたりもするのだろう。

でも、問題は、この海坊主が――有性生殖だった場合だ。

「――レイジくん、後ろ！！」

ミミノさんの、悲鳴のような声が聞こえた。

そのとき僕は自分の「イヤな予感」が的中したことを知る。

「ゼリィさん、急いで！」

海面が盛り上がっていくのを感じる。波が起きているのだ。

振り返った僕は見る――死んだ海坊主の向こうに、もう1体の海坊主が現れたことを。

有性生殖のためにやってきた、つがいとなるべき、もう1体の海

坊主だ。

「で、で、で、出たにゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

「ゼリィさん全力！　こういうときだけ猫っぽいフリしなくていいから！」

「坊ちゃんがいなければもっと速く泳げますけど！？」

「借金踏み倒す気ならこのままゼリィさんを沈めますからね！」

僕の魔力もほんのわずか戻っており、【水魔法】で水流を作りだし僕らの身体を前へ前へと進めていく。

海面に現れた海坊主は、周囲を見回すように窪みの奥のほのかな光を明滅させる。僕にはそれが、死神の乗った潜水艦がレーダーでも照射しているようにしか見えなかった。

ぴたりと海坊主の動きが止まる。なんだと思っていると、ざざざざざと海面が膨れ上がり――青黒く変色した、僕が毒殺した海坊主を、触手を使って持ち上げたのだ。

２体目の海坊主の、緑色が斑に赤黒く変色する。

これを「怒り」と表現せず、なんと言うべきだろう。

クラゲには脳がないから感情なんてない、と言うなかれ――この世界のクラゲにはあるかもしれないし、大体地球のクラゲはレーザーを撃ったりしない。

「げっ」

魔導船までの距離は３０メートルほどになっているけれど、海を進む速度では、その距離は気が遠くなるほどに遠い。

海坊主の周囲に青白い燐光が集まってくる。

「――撃ってくる気だ」

「ぎゃー！　坊ちゃん！　盾になってぇ！」

「ちょっ、ゼリィさん！？」

ぐるりと振り向いたゼリィさんは僕の腕を振り払い、海坊主へと僕の身体を向けた。この人、本気で僕を盾にする気だ……！？

だけどもう魔力は足りない。ミミノさんの「魔法複製薬（デュープ・ポーション）」ももうない。

これは本格的に打つ手がない――めまぐるしく頭を回転させていた僕は、ふと、照りつける太陽の陽射しが陰ったことに気がついた。

49（後書き）

書籍版好評発売中です！　購入報告、ほんとうにありがとうございます。励みになります。
Ｗｅｂ版からは大きく手を入れて、さらに楽しめる内容になっているのでお楽しみくださいませ。

いつものお願いです。
この小説を読んで「面白い」「続きが気になる」「日が陰った……」ということはズバリＸＸＸだろ！」と思われましたら、ブックマークや評価をよろしくお願いします。
どちらもＩＤでのログインが必要で、評価についてはページ下部の★から可能です。
よろしくご協力、お願いいたします。

50

それの接近には、海にいた僕はまったく気づかなかった。
僕とゼリィさんだけでなく、少し離れたところにあった魔導船や軍船までも覆うような大きな影――魔導飛行船はその高度を下げて徐々にこちらに近づいていた。

「な、な、なんなんです、坊ちゃん、あれは!?　新手の敵ですか!?」
「ゼリィさん、よかったですね」
「なにが!?」
「僕らはどうやら助かったみたいですよ」

魔導飛行船の甲板から身を乗り出した人物は、僕がよく知っている人だった。あんなふうにしたら危ないっていうのに、なんだかだんだん行動が大胆になってくる気がする。

「――レイジさん!」

手を振っているハイエルフの王族を見て、僕は思った。

「アーシャ!　魔法を!」

海坊主は空を脅威だと感じたらしく、光を空へと向ける。
どうしてここにアーシャがいるのか、あの魔導飛行船――見たことのない旗印の魔導飛行船がなんなのか、それらは全然わからないけれども今はこの状況を突破するのが先だ。

「――あれを倒せばいいのですね？」
「え……」
僕はその瞬間、背筋に悪寒が走った。それは海坊主がもう1体現れたときとは比べものにならないほどの悪寒だ。
「ゼリィさん！！　逃げて！！」
「へ？　あの飛行船が倒してくれるんじゃ……」
「いいから！！」
あわててもう一度【水魔法】を使って水流を生み出す。
「巻き添えを食らいますよ！！」
バランスなんてどうでもいい、スピード最優先の魔法ブーストによって僕らの身体は前に押し出されるけれど、それはぎりぎり間に合わなかった。
海坊主が空へとレーザー光を放った。
同時に、アーシャも魔法を放った。
アーシャが生み出した炎の槍は、どんな城壁や城門すらも貫通しそうなまでに巨大だった。
そのふたつは正面から激突する――激突の衝撃波が上から僕らを叩きつけるように襲いかかってくる。
「がぶぼっ！？」
僕とゼリィさんは海中に沈んでいくが、空中で起きた衝突による、すさまじいまでの光は海底深くまで照らし出している。
死んだほうの海坊主が光のカーテンの中で揺らめいて、幻想的ですらあった。

「がほっ――うわああ！？」

海面に戻ってくると現実が僕らを待ち受けている。

海はうねり、僕らの身体を前方へと押し出し、すさまじい熱量が周囲の水を蒸発させて視界は一気に悪くなる。

どうやらレーザー光と炎の槍はぶつかって消滅したらしいけれど、飛び散った炎が周囲に落ちてジュワワッ、ボンッ、と海面に弾けている。

「ゼリィさん！」

「ぼ、坊ちゃん……ご無事で……」

「気をしっかり。なるべく早く逃げよう」

「……まだなにかあるんで？」

「次にアーシャが魔法を撃ったら周囲は熱湯風呂になるよ」

「逃げますううううう！！」

ゼリィさんが抜き手を切って泳ぎだした――こいつ、僕を置いていく気満々だな！？　僕も泳げる程度には回復してきたので、急いでその後を追う。

「――全然見えません。ですが、海の敵には炎が有効ですよね、レイジさん！」

上から、恐ろしい言葉が降ってくる。

だけどアーシャを止めれば海坊主の触手が襲ってくるし、止めることはできない。

できることと言えば、

「アーシャ！　なるべく、なるべく範囲を狭めてお願いします！！」

「――わかりましたわ！」

霧の掛かったような向こうに現れたのは先ほどと同じ炎の槍。

違う違う、そうじゃ……そうじゃない！

僕の脳裏に黒いサングラスの顔が浮かぶ。

そんなこと考えている間に、

「――レイジさん、今助けます！」

今日いちばんの僕の脅威である炎の槍が、海面に突き刺さった。

★

「も、申し訳ありませんでした……」

肩をすくめて小さくしているアーシャは本気で反省しているようだった。

ここは町長のお屋敷であり、ハイエルフの王族であるアーシャはここに迎え入れられた。

あれから――僕が本気で命の危険を感じた海坊主戦からは、1日が経っている。ラルクは体力を使い果たしたという感じで眠りこけていた。

「……海坊主を倒せたということはすばらしかったですし、被害もレイジ殿とゼリィ殿だけでしたから大丈夫ではありませんかな……？」

町長も困ったように言った。

アーシャの【火魔法】によって2体目の海坊主も死に、というか、形も残らないほど木っ端微塵になり、周囲一帯の海水温は異常に上昇した。

僕はとっさに「潜れ！」とゼリィさんに叫んだおかげで爆発や熱湯に巻き込まれることもなく、まあ、ぐちゃぐちゃになった水流に巻き込まれて海の深くまで誘われてさすがに死神の顔が目の前をよぎったけれど、素数を数えて落ち着きを取り戻してからはなんとかかんとか海面まで戻ることができた。

海面には湯気が立っていて、爆発に巻き込まれた魚がぷかぷか浮いていたりとなかなかの地獄絵図だった。魔導船や軍船はかなり遠くに流されていたので、泳いでそちらに行くのではなく、微弱な【光魔法】でチカチカやって僕は救助を待った――。

「大丈夫じゃないっすよ！？　危うく死にかけましたよ、ねえ、坊ちゃん！　あー、これはアレですわ、しばらく仕事もできませんわ、そのぶんの補填はしていただかないと――あ痛っ！？」

当たり屋みたいなことを言い出したチンピラさん……じゃない、ゼリィさんの後頭部にチョップを入れて、僕は、

「アーシャが来なかったら僕らだって海坊主に殺されていたので、それを考えればアーシャのしたことは間違いではなかったと思います」

「レイジさん……！」

ぱぁぁ、と叱られていた子どもがいきなり褒められたような目でアーシャがこっちを見てくる。

「……でも、魔法の加減ができるようにならないと、ダメですね」

「はぃぃ……」

しゅん、と叱られた子犬のようにしょんぼりする。忙しい人だ。これくらい感情が豊かになってくれたのはうれしいんだけど。

「それで――アーシャはどうしてここに？　それにあの魔導飛行船は誰の……というか、そちらの方々は？」

アーシャが座っているその背後に、3人のエルフが立っている。同じ、緑色を基調とした戦闘服だ。足元は編み上げの革のブーツで、それもおそろいである。

そのうちのひとりは、僕も見覚えがあった。

「……ひとりは、ポリーナさんですよね」

そう、僕らと初めて出会ったのは、彼女がパーティー「黄金旅団」に加入していたとき。

ダンテスさんとミミノさんがかつてパーティーを組んでいたレオンのパーティーにいた、エルフ。

だけれど彼女はレフ魔導帝国に入国するためだけに「黄金旅団」に加入していたらしく、最後に僕が彼女を見たのは、僕がアーシャを「しゃべれる」ようにするために彼女の部屋に忍び込んだとき。

僕を賊だと勘違いして麻痺毒を盛られたのだ。

【森羅万象】がある僕には、あのときのことをはっきり覚えている。

――アナスタシア殿下を襲うとは、どういうつもりですか。

弓で狙いを付けながら僕に問いかけ、

――レイジさん、あなたが殿下に手を出さないのならばそれでいい。しかし、次に近づくことがあったら容赦しない。

最後にはそう言い捨てて去ったのだ。

どうも「密命」でも受けてそうな雰囲気だよな、とは思ったものの、レッドゲート出現からかれこれ姿を見ていないのでどこに行ったんだろうという感じだったのに――まさかここで再会するとは。

50（後書き）

めっちゃロングパスでしたがようやく伏線回収できました。
魚の小骨のように喉に突き刺さったままの伏線が大量にある……。

51

ポリーナさんは冒険者として活動していたときとは違い、髪の毛もきっちり整え、横にいるふたりのエルフのクローン兵士のようにさえ見えた。3人とも女性で、3人とも前髪はナナメにパッツン、もみあげを片側で編み込み全体的にはショートカットという同じヘアスタイルである。

「……私がポリーナだとよくお気づきになりましたね」

似ている、というより「無個性」になったことに自覚があったのか、ポリーナさんはそう言った。

「我らはエルフの森、シルヴィス王国の王族を警護する特別執行機関（シークレットサーヴィス）です。魔導飛行船は王国所有の『梟の羽搏き（はばたき）』でございます。これ以上の事情をお話しするには、少々ここは騒がしいようです」

「……なるほど」

アーシャの身体のこととかあるし、ここでは話せないという意味だろう。この部屋には町長や僕らだけでなく、ダンテスさんたちパーティーメンバーや、話の内容を書き留める書記官たちもいるし。

町長はにこやかに言った。

「なににせよ、海坊主が討伐されたということは非常にめでたいことです。本日は宴席を設けますので、是非皆様ご参加くださいませ。エルフの貴き御方にご満足いただけるかはわかりませんが……」

「もちろん、参加いたします」

「殿下」

「ね？　いいでしょう」
「……はっ」
なにか言いかけたポリーナさんは、言葉を呑み込んだ。

「さて」
僕らのとった宿に移動したところで、アーシャは、
「レイジさん……私を置いてずいぶんとご活躍なさったようですね……」
ゴゴゴゴゴと背後に炎でも揺らめきそうな気迫で言われる。
「ア、アーシャさん……？」
「私はずいぶん待ったのですよ……？　いい子にして、ダークエルフの皆様と待っていたのですよ……？　そうして聞いたお話は『先に行ってるから待ってろ』ですか……？」
「うぐっ」
確かに、いっしょについていきたそうにしていたアーシャを押しとどめたのは僕だ。それからレッドゲートに真っ直ぐに向かった――。
アーシャのことを考えていなかったわけではないけれど、どうしても、目の前のレッドゲートを優先してしまった。
「な、なんか込み入った話がありそうだから、俺たちは失礼するぜ！」

「坊ちゃん、がんばって～」
「レイジくん、女性には常に真心で対応しなくてはいけませんよ？」
ダンテスさんにゼリィさん、それにノンさんが部屋を出て行った。
「レイジくん……」
ミミノさんは、どこか思い詰めたような顔で、
「……女の子を振り回したらちゃんと責任は取らなきゃダメだからな！？　わたしもいっしょに謝ろうか！？」
「だ、大丈夫です！」
「その大丈夫が心配なんだべ――」
「ほんとに、大丈夫ですって！？」
僕はミミノさんの背中を押して廊下へと出ていただいた。いっしょに謝るとか、ママかな？
「で……そちらの方々は」
「我らはアナスタシア殿下から離れることはいたしません。それに、聞いておきたい事情もありますし」
「殿下の喉のことですか？」
「それもあります」
それも？
「……長期間、男女がふたりっきりでいなくなったら、要らぬことを疑う輩も出てきますので」
聞きたいことってそっち方面かよ！

「なにもなかったですよ！？」
「この麗しい殿下とともにいてなにもなかったですって！？　あなたほんとうに男ですか！？」
「理不尽な逆ギレ！」

ああ――そうなんだ、ポリーナさんは本気の本気でアーシャのことを心配し、アーシャを守ろうとしていたんだ。

「アーシャ……いろいろと、お互い話さなければいけないことがあるみたいだけど、まずは」

僕はテーブルに――ハイエルフの王族がいるには似つかわしくない粗末なテーブルに手をついて、頭を下げた。

「ごめんなさい。ほんとうに。アーシャをないがしろにしたわけじゃなくて、どうしても僕は――」
「あ、頭をあげてくださいませ、レイジさん」
「でも」
「ほんとうはわかっていましたから」
「……え？」

顔を上げた僕の目の前に、困ったようなアーシャの顔があった。

「レイジさんが理由もなく、私を置いていくはずはないって……わかっていましたから。でも放っておかれたのが切なくて、ちょっとすねただけですから」
「アーシャ……」
「私もいっぱい話したいことがあるんです。レイジさんがいなくなったあとの集落のこととか、辺境伯領のこと、それにポリーナのこ

とも」

そっと握られたアーシャの手はなんだか火照って温かい。

「おほんっ。レイジさん、それ以上殿下に触れていると不敬罪とします」

ひっ。思わず離れた僕と、

「不敬ではありません！　私が好きで触ったのですから！」

「好きで男性の手に触れるなど、王族にあるまじき行為です。破廉恥です」

「は、破廉恥！？」

ポッ、とアーシャの頬が赤くなり、ボッ、といくつもの炎が宙を舞った。

「と、とりあえず、お互い落ち着いて話し合いましょう――」

ポリーナさん、こんなキャラだったっけ……もっと寡黙でなにを考えてるかわからない感じだった気がするけど。いや、なにを考えてるのかわからないのは今もそうだな。

「まず、僕のほうから話しますね」

レッドゲート問題が解決したことを告げると、アーシャもポリーナさんも驚いていた。ただこれは恒久的な解決ではないこと、竜が意味深な言葉を告げたことなども加えると、ポリーナさんたち３人はなにかひそひそと話をした。

それは僕の【聴覚強化】をもってしても聞こえない程度の声で、

「――竜の話を……もしも……」
「――それなら『三天森林（サードフォレスト）』に……急いで連絡を……」
「――わかった」

話し合いが終わったのか、ひとりがアーシャに言う。

「殿下。『梟の羽搏き』に戻る必要があり、私が行って参ります」
「わかりました」
「失礼します」

彼女は恭しく頭を垂れると、開かれた窓からひらりと身を宙に躍らせた――ここ、3階なんだけど。
隣の2階建ての屋根に飛び移ると音もなく駈けていく。【疾走術】持ちなんだろうか。

「……下から出ていけばいいのに」

アーシャのつぶやきに１００パーセント同意の僕です。

「それで……どうしてレイジさんはこちらにいらしたのですか？」
「僕の姉を追ってきたんです」

ラルクは今、空賊……海賊？　の仲間の人たちによって看病されている。あれから眠ったままだ。
魔導船については持ち主に返却し、修繕費については支払うので海坊主を倒したことで盗み出した罪をチャラにしてもらおうと思っていた。
すると魔導船の持ち主である資産家はなんと町長のお兄さんだった。

――なんと。「レッドゲート戦役」で活躍されたレイジ殿が乗船され、戦われたと!?　なんという誉れ。傷はそのままにしておきましょう!

とむしろ喜ばれる始末。お兄さんも町長と同じく戦う騎士に憧れていたらしい。

「悪事千里を走る」と言うけれど、僕の名前が妙な形に変換されて光天騎士王国内に伝播しているようで怖い。

ラルクの天賦珠玉については、実はすでに回収済みだ。賊の「お頭」と呼ばれているクックさんに確認して僕が引っこ抜き、僕が持っている。これ以上悪化することはないはずだけれど、結構ヤバイ体調ではある。

「明日には出船し、海にいる賢者という人を捜したいと思っています」

「……」

「……アーシャ?」

「あ、い、いえ……」

「レイジさん。我らシルヴィス王国には失われた生命力を回復させる秘薬があります」

「ポリーナ!」

えっ、そんなものがあるの?　と思いつつ、あわてたような、恐ろしがっているようなアーシャも気になった。

「ですがそれは、非常に貴重な品で、王族の管理しているものです」

「ああ……そうなんですか。それじゃあ、入手はできませんね」

「なぜですか?　目の前にいらっしゃるのは王族であるアナスタシア殿下ですよ」

「……ポリーナ、その話は」

「今、殿下は魔法を操れるようになり、お声を出すことも可能です。であれば完全なる、正当なる王族でいらっしゃいます。殿下のお父上である国王陛下もきっとアナスタシア殿下を再度お迎えになりましょう。完璧にコントロールされている【火魔法】はマイナスにはなりません」

ああ……そういうことか。

ポリーナさんはアーシャの声が戻ったから、彼女をエルフの森に連れ戻そうというのだ。

52

なんて身勝手な――アーシャが声を出すとエルフの嫌う【火魔法】になるからと封印し、外交の道具として使ったくせに、彼女がそれを乗り越えれば「戻ってこい」だって？

（……でも、アーシャが戻りたいのなら）

彼女自身が故郷に戻りたいのであれば、それは尊重しなければいけないとも思う。

「……もし、私が王国に戻ることでレイジさんのお姉様を治せるのなら――」

「待ってください、アーシャ。君自身はどうしたいんですか。僕は、僕と姉のことで、他の人を犠牲にしたくないです」

これ以上は、という言葉を呑み込んだ。

僕とラルクが手に入れた自由は、鉱山の崩落や戦いで死んだ人たちの上に成り立っている。それは忘れちゃいけないし、忘れることもできない。

「……私は……」

言い淀むアーシャの目をじっと見つめる。すると――彼女は、意を決したように言った。

「私は、レイジさんといっしょにいたいです……これから先も、ずっと！！」

「殿下！」

ポリーナさんともうひとりのエルフが悲痛な声を上げた。

それが、アーシャの気持ち。心からの気持ち。

僕といっしょにいたいという――聞いた僕の心がほっこりと温かくなる。

「ありがとう、アーシャ……僕と冒険者をしたいってことだね！」

「はい――えっ、え？」

「あれ？　違った？」

「あ、い、え、違わ……ない、です……」

赤くなったアーシャの周囲にボボボッと炎が現れては消える。どうしたんだろうか。

「この、鈍感少年め！　しかし今はその鈍感に感謝しましょう！」

「ポリーナさん!?　罵倒と感謝とどっちなの!?」

「ですが殿下、殿下のお身体はおひとりで決められることではありません」

僕をキレイに無視してポリーナさんは続ける。

「レフ魔導帝国にいらっしゃった殿下は、まだまだお勤めをしなければならないでしょう。少なくとも次代の皇帝が現れるまでは……その間に、この少年は大人になり、どこぞの馬の骨を孕ませて田舎で農場でもやってるかもしれませんよ」

いちいちトゲがある言い方！　アーシャが真に受けてあわあわしてるじゃないか。

「そ、そうなのですか、レイジさん！？」
「違います」
きっぱり否定すると、
「ほう、孕ませても責任は取らないと？」
「そういうことじゃないですよ！？」
ポリーナさんの毒舌がいちいち手厳しいんだが！
「あのですね、まだ話していないことがひとつあります。僕はレッドゲートを閉じる戦いで帝国皇帝から褒賞をいただきました。僕が望むことを叶えてやると――そこで僕は、皇帝に申し出ました。アナスタシア殿下の身柄の解放を」
これは予想外だったのか、ポリーナさんはぽかんと口を開け、アーシャは腰を浮かせてからもう一度座り直した。
アーシャの瞳が潤んだ。
「そんな……レイジさんの褒賞を、私などのために……」
「いえ、僕もパーティーメンバーからプレゼントしてもらったものがあったので、僕も誰かになにかをプレゼントしたかっただけですから……あと、皇帝陛下は即答できずに『検討する』とおっしゃったので、もしかしたら叶わないかも」
「でも、それでも！　私は……レイジさんが私のためにそんなことをしてくださったことがうれしいのです」
うるうるした瞳で感謝の視線を向けられるとさすがに面映ゆい。
「ポリーナさん、どうですか？　これが叶えばアーシャは自分で自

分の将来を選ぶことができます」

僕が言うと、ポリーナさんが歯ぎしりしてにらみ返してきた。

その日の夜は、町長が宣言したとおり宴会となった。

海坊主が出現してからまだ日が浅かったので、町の人たちはさほどダメージを受けていなかったけれど、それでも「討伐」の喜びで町のあちこちで酒盛りが行われているようだった。

町長のお屋敷の、広い庭には多くのテーブルが出され、魚をふんだんに使った料理の大皿が置かれた。給仕係がいるので、そこにいけば取り分けてくれるというワンランク上の立食パーティーのような雰囲気だった。

「レイジの坊ちゃん。お嬢はまだ寝てるからよ、俺らは宿に戻ってるぜ」

ラルクの賊仲間であるクックさんが僕に言う。

まだ太陽は西の稜線に掛かったくらいであり、これからが宴の本格スタートという感じだった。

「こんなに早く行ってしまうんですか」

「魔導船を盗んだ俺たちがここにいるのは、どうにも間が悪い。飯は先にたらふく食わせてもらったし、それに」

夕方といえどまだじわりと暑いのに、薄手の上着を羽織っているなーと思っていたら、がばりと開かれたそこには酒瓶が2本ずつ左右に収まっていた。

「にひ」

クックさんだけでなく、鍵屋さん、エンジニアさん、スカウトさんもそれぞれハムやチーズ、魚の干物なんかを上着の裏にぶら下げている。

「俺らは宿で酒盛りと行くから、気にせず楽しんでくれよ」

「はい」

苦笑してうなずくと、彼らは去っていった。

ラルクのことは心配だけど、今僕にできることはほとんどない。

【回復魔法】で僕が知っているのは外傷を治すものだけで、生命力そのものを回復させるような代物はそれこそエヴァお嬢様の「鼓舞の魔瞳」みたいな極めて特殊なものしかなかった。

賢者を捜す間、スィリーズ伯爵のところにラルクを送り込もうかとも思っている。お嬢様なら回復の手伝いをしてくれるだろうし……。でも、それにしたところでラルクが目覚めて自分で歩けるかどうかで、移動する手間が全然違う。

ノンさんは「魔法の師匠」なる人物に手紙で問い合わせもしてくれていて、それもなにかヒントになるかもしれない。そのノンさんは、ダンテスさんといっしょに町の騎士たちと話している。日中、ダンテスさんは騎士たちから訓練への参加を頼まれて、そこに顔を出していたらしい。

「――あの盾さばきはどこかの流派なのですか？」

「――この街の騎士になりませんか」

「――騎士が無理であれば、せめて指南役に……」

光天騎士王国の、強い人に対する執着がすごい。さっきから僕もぎらぎらした視線を送ってくる町長と、その横にいる太った町長（

見た目は完璧に同じの別人――たぶんお兄さん）に気づいているけれど、あえて気づかないフリをしている。絶対、いろいろ話をしてくれとせがまれる。

「レイジくん、浮かない顔だべな？」
「あ……ミミノさん」

やってきたのはミミノさんだ。お皿の上には四角くカットされた魚と、赤い小さな実のようなものが並んでいる。この実を口いっぱいほおばったミミノさんは、きっとリスみたいなんだろうなあと勝手に想像してニヤニヤしてしまう。

「？　今度はどうして笑うの？」
「す、すみません。なんでもないです。――ところでミミノさん、あの、ポーションのことなんですけど……とりあえず僕の持っているお金を全部お渡ししますので、手に入れにくい材料とか教えていただければ僕も探すようにします」

僕のために、ひとつ作るのに金貨が数枚飛ぶという「魔法複製薬（デュープ・ポーション）」を何本も何本も使わせてしまった――金額についてはそのぶっ壊れ性能を考えると当然とも思えるのだけれど。あと貴重な毒も。

「あぁ、そんなのいいべな。パーティーメンバーを助けるのにお金なんて」
「でも――」
「それともレイジくんは、わたしがピンチになってもお金を出してくれない？」
「お金で解決できることなら財布を空にしてでも助けます！　――あ」
「ほら」

ミミノさんはにこーっと笑った。

「わかってたけど、でも、やっぱり実際言ってもらえるとうれしいべな～」

くっ、笑顔がまぶしすぎる。この笑顔をずっと守りたい。

パーティーの運営資金は別で管理しているので、そこから捻出するから大丈夫ということだった。僕らがアッヘンバッハ公爵領領都で倒した竜、それにクルヴァーン聖王国で仕留めたウロボロスの素材の代金とかもあって、余裕はあるという。

「あっ」

するとミミノさんが小さく声を上げる。

「レイジくん、お金のことなんかより、君にはやらなければいけない仕事があるのだよ？」

僕の身体をぐるりと反転させ、ぽんぽんと背中を叩いたミミノさんは、茶目っ気たっぷりにこう言った。

「……女の子のエスコートは、男の子の特権だからな」

と。

そう、視線の先は町長邸――ドレスアップをし、中から出てくるハイエルフの王女殿下がいた。

52（後書き）

羅船未草様にレビューをいただきました。ありがとうございます。とても励みになります……！　レビューは本作ページ上部「レビュー」から見に行くことができますので、そちらもどうぞお楽しみくださいませ。

53

深緑色の滑らかなドレスはほっそりとしたアーシャのボディラインを際立たせ、だいぶ荒っぽい旅を経験したというのに二の腕は白く肌理も細やかだった。

髪をアップにしているのでうなじが見え、うっすらとしている化粧にどきりとしてしまう――これは魔性の女だ。

馬子にも衣装だなんて言えない。もともとアーシャはすさまじい美形なのだから鬼に金棒、ハイエルフに化粧だ。

「――え、ええーっと、お集まりの皆様、本日はお越しくださいまして誠にありがとうございます」

見とれていたのは僕だけではなくて会場にいる全員だった。フォークを取り落とし、連れの女性ににらまれている男の人もいる。

なんとかかんとか復活した町長が今回の海坊主討伐パーティーの挨拶を進めていく。アーシャの視線と僕の視線がぶつかって、彼女が微笑むと――僕の胸の鼓動がさらに早まった。アーシャの後ろに控え、ドヤ顔しているポリーナさんがいたおかげで冷静になれたけど。

町長が自分自身も海坊主討伐の現場にいたことを発表すると、集まった人たちの間から「おおっ」とどよめきが起きる。

それから僕ら「銀の天秤」の活躍に触れ、次に騎士たちの勇敢さに触れ、最後はアーシャの魔法に言及して話は締めくくられた。

僕らに向けられる視線があまりに多くてなんとも恥ずかしい。

「では今日は皆様、楽しくお過ごしください」

町長の挨拶が終わると、８人ほどの弦楽隊が音楽を奏でる。
この世界で音楽の楽しみなんてものはほとんどなくて、吟遊詩人が酒場で歌うくらいなので、とても新鮮に感じられた。

「ほれ、レイジくん、行っておいで」

とまあ、音楽を聴いている余裕なんてものはなく、ミミノさんに背中を押されて僕はアーシャのほうへと歩き出した。彼女もこちらにしずしずとやってくる。

「……レイジさん、私とっても変な気分なんです。今までこういうドレスは何度も着たことがあったのに今日はどうしてだかとても恥ずかしい気がして」
「とてもよく似合っていますよ」

ストレートな褒め言葉が口からするりと出たことに自分でも驚いたけれど、アーシャは頬を染め――あるいは夕焼けがそう見せただけかもしれないけれど――自然な色の紅を塗った唇を曲げて笑って見せた。

「ふふ。レイジさんから聞く褒め言葉は、私を楽しい気分にさせてくれますね。他の誰に言われてもそんなことは思わないのに」
「そ、そうですか……？」

そんなふうに言われてしまうと、恋愛経験少なめの、うぶな男子の僕はどきどきしてしまう。

「お姉様はよろしいのですか？」
「はい。今はクックさんたちがついてくれているので……。ありがとうございます、ラルクのことを気にかけてくださって」

「ふふふ。レイジさんはお姉様のことをまるで他人のように呼ぶのですね」
「まあ、実際他人ですしねえ」
「……え？」
「僕らがいた場所が、他に子どもたちのいなかったところで大人ばかりだったんです。なのでラルクは僕を弟だと言い張っていたんですよね」
「ちょ、ちょっと待ってくださいませ。お姉様、いえ、ラルク様はほんとうに他人でいらっしゃる……？」
「はい、完璧に他人ですね。似ても似つかないし」
「だとしたら、そのぅ……それは、ラルク様がレイジさんのことを――」

アーシャがなにかを言いかけたところへ、

「――レイジ殿、アナスタシア殿下、主役のおふたりだけで話をなさらず、どうぞ我々も輪に加えてくださいませ」

町長とそのお兄さんがやってきた。ラルクが魔導船のドックを破壊し、さらには魔導船を盗み出したこともあるので、さすがにその頼みは断れない。

「ええ、もちろん。――アーシャもいいかな？」
「は、はい。構いませんわ」

少しだけ寂しそうな顔をしたアーシャだったけれど、場所を弁える能力はさすがの王族だ。僕らはあとでいくらでも話ができるしね。

「レイジ殿、空を飛んでいましたな！？　あれはいったいどのようにしてなさるのですか」

「【火魔法】と【風魔法】の応用で――」

隠すこともないので僕は空を飛ぶ方法を伝えるのだが、みんなピンとこないらしい。どうやら【火魔法】を身体の近くで爆発させるなど、「火傷するだけ」のようだ。

「いやはや、一体どのような天賦をお持ちなのか気になりますな。2系統の魔法を達人級までコントロール可能で、さらには魔力もおありとは」

目つきの鋭い商人風の男が言う。商人かもしれないと思ったのは体つきが太っていて、武術の経験がまったくなさそうな足取りや体幹だったからだ――【森羅万象】もそう認定している。

町長はそれについてはなにも言わなかった。僕が【闇魔法】を使ったのは見ているはずだけれど、そうすると魔法だけでスキルホルダーを6つ使うことになってしまうし、天賦の構成は人によっては大きな秘密だから、わざと隠してくれたのだろう。

だけどまぁ……顔には「興味津々」って書いてあるんだよなあ。

僕は内心苦笑しながら答える。

「たいしたものは持っていませんよ」

「いやいや、達人はみなそう仰る。私めはキースグラン連邦を中心に活動している貿易商のヤーゴと申します。海坊主が出たとやらで大型船を出せなくなり、往生しておりました。感謝しても仕切れませんぞ、レイジ殿。以後お見知りおきを……」

「あ、はい」

差し出された手を握ると、武器を握ったこともないような柔らかな手だった。指先にたこがあったのはペンだこかもしれない。

（……ん？）

ほんのかすか――僕が【森羅万象】を持っていなければ気づかないほどの変化が、握られた手の力にあった。

すぐにその手は離れていったけれど、ヤーゴさんの目には驚愕が浮かんでいた。

（ははぁ、なるほどね）

ピンときた。この人、僕の天賦を視たな。

過去に、同じように握手を求められてそのときに視られたことがあった。スィリーズ伯爵邸でスペキュラ2等書記官と会ったときのことだ。

伯爵はこう言っていた。

――天賦【オーブ視★★】は、見た相手の天賦を知ることができます。彼のレベルでは星の数まではわかりませんがね……。

あのとき僕は【森羅万象】を外していたので視られることはなかった。

でも今はつけている。

「ヤーゴさん、なにか視えましたか？」

僕はにっこりと笑ってたずねた。

53（後書き）

問題：この後の展開は？

（1）ヤーゴが他の人になにか言う前に暴力的な手段によって封殺する

（2）ヤーゴも転生者であることがわかり意気投合し、大航海時代に突入する

（3）ヤーゴに天賦の中身はバレなかった

（4）ヤーゴには天賦の中身を理解できなかった

答えは明日！

（3と4は似ているけどちょっと違います）

【告知】

書籍版発売しておりますので是非是非書店でお買い求めいただければこれに勝る幸せはありません……！

それと本日11／27発売の「電撃大王」本誌にて、オバスキのコミカライズが始まります！

センターカラー&64ページというボリュームでお届けします。

こちらも是非ご注目くださいませ。

活動報告にも書きましたのでそちらもご参考まで。

54

額にふつふつと汗を浮かべたヤーゴさんだったけれど、

「はい。すばらしくお強い方なのだということを再確認しました。私は非才の身でございますが、レイジ殿が発する強者のオーラ、とくと拝見しました」

「言い過ぎです。ちなみに僕は身体強化系の天賦を持っているだけで、魔法系は【魔力量増大】以外は所持しておりませんよ」

「！？」

僕が言ったその内容は、まさにヤーゴさんが「視た」ものと同じだったはずだ。

さらりと所持天賦の話をした僕に、周囲の人たちはざわつく。

「まさか、八道魔法の天賦を持たずに魔法を使われていらっしゃるのですか」

「なんとも……確かに、玄人は魔法系の天賦をあえて外すとも言いますが」

「そのお年でそれほどの魔法を使えるというのはすばらしい才能ですな。まさに持って生まれた天賦」

そんな言葉が聞こえてくるのを僕はにこやかに聞き流す。

（なーんてね）

内心では、舌を出しているけれど。

だって僕はそんな天賦はひとつもつけていないのだから。

僕が今つけている天賦はふたつだけ。
ひとつは【森羅万象★★★★★★★★★】。
もうひとつは――【オーブ擬態★★★】である。
アーシャの身体に元々入れられていた天賦で、これをつけているおかげで誰に視られても問題ない。

（それにしても、今のが【オーブ視】か。【森羅万象】で覚えたんじゃないかな）

試してみたくてしようがないけれど、なにか機会があったときにしよう。握手しなければ使えないみたいだし、他人の天賦を盗み見るってのは悪趣味だからあまり使うチャンスはなさそうだけど。

「――そうだ、町長さん。沖合の群島にいるという賢者様についてなにかご存じではありませんか？」
「『薬理の賢者』様ですな。はい、存じております。なかなか難しい海域にいらっしゃるので相当の腕利き船頭でしかその場所へはたどり着けぬという島におられます」
「そう……なんですね」

やっぱり、到着するのは難しいのか。
最悪、近いところまで運んでもらって空を飛んでいくか……？
かなり身体に負担を掛けるけど、一時的なものならなんとかがんばるしかないか……。

「――というのは昔の話」
「え？」

いきなり町長の声のトーンが変わった。

「潮が速くとも今は魔導船がありますからな、魔導船ならば問題なく島に渡ることはできましょう」
「そうなんですか！？」

すごい。科学の進歩すごい。
魔法万能のこの世界でもちゃんと科学が進歩してる！

「ここは『英雄』レイジ殿のために軍の魔導船を動かしましょう――」
「ちょっと待たれい、町長。ここは私の魔導船を」

そこへ割って入ったのが町長のお兄さんだ。

「いや！　是非ともここは我が商会の船に」

さらに割って入ってきたのがヤーゴさんだ。この人の船には乗りたくないけど。

「いいえ」

凛とした声――なんと、アーシャまでもが割って入ってきた。

「エルフの魔導飛行船で運びますわ！　他ならぬレイジさんの頼みでしたら！」
「……殿下、『梟の羽搏き』の目的外使用は固く禁じられております。たとえ王族であるアナスタシア殿下であっても認められません」
「あぅ……」

ポリーナさんにたしなめられ、アーシャは真っ赤になってうつむいてしまった。

張り切った小さい子どもが失敗したようなようにも見えて、大人たちがほっこりとした笑顔で見守っている（僕も含む）。

「ありがとうございます、アーシャ。気持ちだけでもうれしいです」

「……うぅ、私は役に立てないのでしょうか……」

「海坊主を1体倒してくれたじゃないですか。アーシャがいなかったらやばかったですよ」

僕が言うと、なぜか大人たちも結束して「そうだそうだ」「アナスタシア殿下はすごい」と褒めちぎる。これやっぱりしょんぼりしている小さい子どもを励ましてる図だよな。

「では――レイジ殿を誰が『薬理の賢者』様の島へ送り届けるかについては、カードで決めましょう！」

「ほう……」

「構いませんぞ」

「では私も参加しよう」

「我も」

町長率いる大人（オッサン）たちはぞろぞろと邸内へと入っていった。いつの間にか魔導船の所有者が増えていて１０人近くも立候補してくれたらしい。

「……い、いいのかな？」

僕、魔導船を使うのにいくら掛かるとか全然わからないんだけど。

トントン拍子に話が進んだことに僕がおろおろしていると、アーシャがぽつりと言った。

「レイジさん、大人気ですね。少しだけ……寂しいですわ」

「アーシャ？」
「あちらの世界に行ったときには私とレイジさんしかいなかったのに、いつの間にかレイジさんの周囲には人が増えて、こちらの世界に戻ってきてちょっと目を離した隙にさらにまた多くの人が集まりますもの」
「……協力してくださる方は多いですけど、これから先もいっしょにいられる方は少ないですよ」
「そう……でしょうか？」
「はい。流行は一過性のもので、評価はいつでも表にも裏にもなり得る物だと僕は理解しています。だから」
アーシャが言ってくれたことを思い返す。
――私は、レイジさんといっしょにいたいです……これから先も、ずっと！！
それは確かに、僕の胸に響いた。
「……アーシャが僕といっしょに冒険をしたいと言ってくれたのがとてもうれしかったんです」
アーシャは目を瞬かせると、ふう、と小さく息を吐いた。「しょうがないヤツだ」とでも言いたげに。
「僕、変なこと言いました？」
「いいえ。今はそれでいいことにします。だって私はレイジさんからもらってばかりなのですから。……でも、あくまでも、今はですからね」
「？　はい」
「そうだ……レイジさんに贈り物があったのです」

ポリーナさんが布で包まれたものをアーシャに手渡すと、彼女はそれを僕に見せてくれた。
小さな革製の……ベルト、だろうか？

「僕にこれを？」
「はい。――それでは、レイジさん。私はもう行きます」
「あ……」

ドレスを翻して去っていくアーシャを照らすのは、かがり火の炎だった。
いつの間にか日は暮れて、夜のとばりが下りている。
炎の明かりに照らされたアーシャは、彼女がどれだけ厭おうとも美しく見え――。

「アーシャ！」

なぜだろう。
僕はアーシャが自分からどんどん離れていくように感じられた。
彼女がこれからどうするのか、とか、ダークエルフたちはどうしたのか、とか、レフ魔導帝国での身柄の解放のこと、とか……話さなければいけないことはたくさんあったのに、

「僕は姉の治療を今はしなくちゃいけないんです……でも、それが終わったら、きっと冒険をしましょう」

なぜか僕は、冒険をしようとしか言えなかったのだ。
足を止めたアーシャは横顔だけをこちらに振り向いて、

「もちろんです。約束ですよ」

とだけ、にこやかに言ったのだった。

54（後書き）

多くの問題チャレンジありがとうございます！
正解は、

（3）ヤーゴに天賦の中身はバレなかった

でした。
【オーブ擬態】については「裏の世界」でさらっと書いておいたので、覚えていた人も多かったでしょうか？
（記憶力勝負かよ、っていう）

擬態は★3つで視るほうは★1つというのは、擬態のほうが能力的に優越するという意味合いになります。
そもそも視るスキルに対してしか意味がない擬態なのに、簡単に見破られたら意味ないですからね。擬態のメリットって視られない以外にないので。（ないよね？）
この辺の設定は出す機会もなさそうなのであとがきでちょこちょこ書いていこうかしらん。

それと大変申し訳ありませんが、明日は諸々の都合で休載となります。そろそろスケジュールが死に始めました。

55

★　光天騎士王国　港町ザッカーハーフェン　町長邸　★

「いやはや、『銀の天秤』の皆様を冒険者にしておくのは惜しい。皆様全員で我が国の騎士になるというのはいかがですか」
「そうですぞ。教会組織でも最も多く教皇聖下を輩出しているのが我らが王国教会です。ノン殿もそちらで修行をなされては……」
「こらこら、俺はともかくノンにまで変なこと吹き込むんじゃねえ」

騎士たちが、若い女性でもあるノンに目を向けるとダンテスがその視線を遮るようにノンの前へと出た。

「いや、変なことではございませんとも。なあ？」
「も、もちろん。若くて美しい方がこの国に留まるのは国の利益」
「やっぱり変なこと考えてねえか？」
「もう、お父さん……」

ノンは、自分が父を過保護にした反動で父もまた自分を過保護にするのだろうという自覚はあったものの、さすがに人前でされると恥ずかしい年齢ではある。こちとられっきとした大人なのだ。

「……ノン様、お手紙が届いておりますが」

そこへ、すすすと近づいてきたこのお屋敷の執事に言われ、

「手紙、ですか？」
「はい。王国教会から」
「……なるほど」

ノンはうなずき、挨拶をしてその場を辞してからお屋敷へと入った。

そこで手渡された封書は、確かに王国教会の封蝋がされたものだった。すぐに中に目を通す――いろいろと覚悟はしていたものの、そこに書かれてあったのは、「教会に戻れ」とかそういうことではなかった。

「！」

しかし目を通していくにつれ、内容に驚いて目を見開いた。

振り返ると父のダンテスが心配そうな顔でこちらを見ている――ノンは「大丈夫」という意味を込めて手を振った。父は小さくうなずいた。

「いかがなさいました？」

執事に聞かれ、

「……いささか、町長様にご迷惑をおかけしてしまうかもしれません」

ノンは、額に手を当てて小さくため息を吐いた。

★

アーシャが去っていった会場で、僕は立ち尽くしていた。アーシャはなにをしようとしているのかと考えながら。
だけれど答えは出てこなくて――女心はやっぱり難しいよな、とか思っていると、

「レイジ！」

ラルクの賊仲間のスカウトさんが走ってきた。

「お嬢が目ぇ醒ました！」
「！！」

僕はそれまで考えていたことも頭から消え去り、スカウトさんとともに走り出す。何事かと多くの人がこちらを見てきたけれど、僕は町長のお屋敷を飛び出し、宿へと向かった。

「ちょっ、ちょっと、早、早ぇーな、おい！　さすがお嬢の弟！！」

【身体強化】に【疾走術】、さらには【補助魔法】を重ね掛けした僕は、斥候が本職のスカウトさんよりも早く宿に着き、ラルクの部屋へと飛び込んだ。

「ラルク！！」

魔導ランプの明かりが照らす室内にはベッドに身体を起こしたラルクと、その体調を確認している医者、それにクックさんたちがいた。

「……その声、弟くんか？　ったく、夜だってのに騒がしいったらねーよ……」
「ラルク……？」
僕はぎくりとした。
彼女の瞳はこちらを向いているというのに、僕を見てはいなかったのだ。
【森羅万象】がなくともわかる。ラルクは、目が見えなくなっているのだ。
「お静かに。先日の診察のときにはこのような症状はありませんでしたが、なにか変わったことはありませんかな」
医者がクックさんにたずねると、クックさんはその「答え」をわかっているだろうにむっつりと黙り込んだ。
「……ふむ。とりあえず、体調は安定しているようですがこれは吉報ではありませんな。低位で安定しているということです。目が見えなければ激しい運動もすぐにはできないでしょうが、とにかく安静になさってください。いいですか、私は言いましたよ」
「へい」
「では」
エンジニアさんが医者を見送りに部屋を出て行き、入れ替わりにへろへろになったスカウトさんが部屋に入ってきた。
「クック」
医者が去った途端に、ラルクは不機嫌そうに言った。

「あたしの天賦、盗んだのはアンタか？」
「違う。盗むわけがねえだろ、今さら」
「……まあ、そーだな。盗む方法があって盗む気があるならとっくに盗んでるわな。じゃあ、弟くんだな？」
「そうだよ。僕がラルクの【影王魔剣術】を取り出した」
僕が素直に答えると、ラルクは舌打ちする。
「勝手なことを……早く返してくれ。あれはあたしのだ」
「ラルク、あれはよくないものなんだ。それはわかってるだろ？」
僕の【森羅万象】が分析を続けている。ラルクの視覚が失われたのは【影王魔剣術】のせいであることは間違いない。そして、天賦を使う代償にラルクの生命力は奪われ続け、とっくに視覚は失われていたのに天賦の能力がそれを補っていた――という異常な状態だったこともわかった。
「よかろうが悪かろうが、あれがあってこそのあたしなんだ！」
「違う。あれがなくてもラルクはラルクだ」
「あの天賦珠玉はあたしが見つけたんだよ！　だからあたしのものだ！　だから返せよ！」
「違う……違うよ。天賦珠玉に振り回されたらダメなんだよ。そのために死んだりしたら、なんのために生きてるのか――」
「弟くんだって、わけのわからない異常な強さは天賦で手に入れたんだろ」
「！？」
ぎくり、とした。
それはそのとおりだし、僕にだってそれを忘れるほどバカじゃない。

だけど――今ラルクを諭している僕が、【森羅万象】によって様々なものを手に入れている僕が、たまらなく愚かに思えたのだ。
どの面下げてそんなことを言えるのだ、と。

「ぼ、僕は……」
「……別にそれを悪いなんて言わねーよ。ただ、あたしのものはあたしのものだ。だから返せ」
「……」
「弟くん！」
「返さない……これはラルクをダメにするから！」
「お前ッ！！」

枕を投げつけてきたけれど、僕には当たらず斜め後ろにいたスカウトさんの顔にバフッとぶつかった。

「出て行け！！　顔も見たくねーよ！！」
「……ラルク、僕は」
「出て行けって言っただろーが！！」
「お嬢、なにするんだ！？」

憎々しげににらみつけながらベッドから降りようとしたラルクを、クックさんが止めようとする。僕の肩に手を載せて、難しそうな顔でスカウトさんがうなずく。

「また……来る」
「天賦を盗んだような野郎は来るな！！」

ラルクの言葉が胸に突き刺さる。僕は部屋を出ると、とぼとぼと宿の外までやってきた。
確かに――僕はラルクにひどいことをした。彼女が納得ずくで【

影王魔剣術】を使っていたことはわかっていたのに、彼女の意見も聞かず、勝手に天賦を外した。

それで、ラルクがあそこまで激怒するとは思わなかったのだ。

僕はラルクを誤解していたのか？

あるいは会わなかった４年間でそんなに変わったのか？

――ラルクは、命を削ることを知っていてもなお、あの天賦を使うだろう。

――弱い人を守るためだ――僕のような弱者を。

――他の誰が言っても、ラルクはあの力を手放さないだろう。力があれば多くの人間を守れることを知ったラルクは。

――僕ならラルクを説得できる。いや、絶対してみせる。

そんなことを考えていた自分はどれほど傲慢だったのか。

「……僕は、【森羅万象】を手に入れて調子に乗ってたのか……」

ぼんやりと空を見上げたとき――ふと、周囲の騒がしさに気がついた。

「――アレなんだよ？」

「――ほら、魔導飛行船だよ。エルフの」

「――夜に飛ぶのか？」

夜だというのに通りには多くの人が出てきている。彼らの視線は空に集まっていた――夜空に、いくつもの光を掲げながら浮いている巨大なシルエットがあったのだ。

「『梟の羽搏き』……？」

僕はようやく気がついた。

あれにはアーシャが乗っていて――あの魔導飛行船が向かうのは「三天森林（サードフォレスト）」であろうこと。

つまりアーシャは、エルフの森に戻ると決めたのだということに。

56

アーシャは僕と冒険したいと言っていたのに、どうして王国へ帰ってしまったのか。

いや……僕はそうなることを心のどこかで予期していたような気がする。

彼女はハイエルフの王族で、王女で、殿下で、僕とは住む世界が明らかに違う。

彼女が望んでいたものは、「一時の冒険」でしかなくて、それは物語の世界の出来事に憧れるようなものなんじゃないか――と。

「あ……」

波の音が耳を打ったのを感じたときに、僕はようやく自分が港まで来ていることに気がついた。

さすがにここは人気がなくて吹いてくる風に潮の香りが混じっている。

アーシャが乗った魔導飛行船ははるか遠くにあって、その光もどんどん小さくなり、今や消えかかっていた。

「ああ……」

無力感と、浅はかだった自分への失望に、小さく息が漏れる。

そのままそこに座り込みたい――と思ったときだった。

「坊～～～～っちゃん」

「うわ！？」

いきなり肩に腕を回され、横にはゼリィさんがいた。
いまだに僕より全然背の高いゼリィさんの体温は高く、吐息は酒臭い。

「およ。いつもならあーしが近づくと気味悪いくらいすぐにわかるのに、今日はどうも無防備じゃないっすかあ」
「……なにか、用ですか？」
「用がなきゃ来ちゃいけませんか」
「今日はそういう気分じゃなくて」

僕は酔っ払いを両手で押しのける。

「はは～ん。坊ちゃん、フラれましたか」
「……は？」
「まあ、ハイエルフなんて高嶺の花どころか、雲の上の星みたいなもんですから、忘れたほうがいいっすよ」
「違いますよ……アーシャはそういうんじゃないんです。ていうかアーシャを忘れるなんてできません」
「お？　そうですか？　そしたらお姉ちゃんへの禁断の恋ですか？」
「は！？　ラルクに！？　いや、なにバカなこと言ってんですか！」
「ほおう、ほっぺた真っ赤じゃないですか。ということはこっちが本命……」
「ち、違いますって。これはびっくりしただけですから」
「でも血はつながってないんでしょう？　じゃあオッケーですって！　ナハハハ」
「なにもオッケーじゃないですよ……大体、ラルクには『もう来るな』って言われたばっかりですし」
「なにがあったんで？」
「それは……」

僕は一瞬迷ったけれど、ゼリィさんに話をした。ラルクの天賦を取り上げたこと。それがあるからラルクは無理をしてしまうこと。だけど理解してもらえなかったことを。

もう、ゼリィさんとはだいぶ長いし、十分に信頼している……海坊主戦で盾にされたことは忘れてないけど。

「あ～、そりゃ坊ちゃんが悪い」

「……やっぱり、事前の相談なしにそういうことしたらダメですよね……」

ちゃらんぽらんの代名詞であるゼリィさんだけど、そんな彼女であっても改めて言われると落ち込むよな……。

「違いますって。『強い女』を目指す女が、いちばん弱いところを惚れた男に突かれたら、どうしょーもないでしょ」

「……はい？」

「ラルクさんは強いっすけど、ありゃー目一杯無理してますからね。あーしにはわかりやす」

「い、いや、そうじゃなくて……なに、『惚れた男』って。誰のこと？」

「はぁぁぁぁぁぁ」

わざとらしく大きなため息を吐くゼリィさん。

「坊ちゃん……情緒がいまひとつ育ってないと思ってましたけど、ここまでとは。あなたですよあなた」

「は？」

ちょっと待って、どういうことだ？

「ラルクは、姉なんだよ？」
「そりゃー、そういう建前でないと坊ちゃんのそばに近寄れないからでしょ。ラルクさんもだいぶ情緒が育ってないですからね。いったいどんなとこで育ったんです？」

奴隷が集まる鉱山です。

「坊ちゃん、確かラルクさんはやべーことを過去にやって逃げてんでしょ？　だから坊ちゃんに想いを伝えるわけにゃいかないんですよ。だって、巻き込みたくないし」
「それは……」
「だから、姉だ姉だと言い続けることで、昔以上に距離を縮めたくないんすよ。それに、坊ちゃんから心配もされたくない。相談もせずに、レフ魔導帝国を逃げるように出て行ったのもそのためです。すべては、惚れた男のためだと思えばしっくりくる」

そんな……ことって。
ラルクが僕を大事にしてくれているのはわかっていたけど。
確かに、さっきもラルクは僕を「レイジ」と言わずに「弟くん」としか言わなかった。

「はぁぁぁぁ」

ゼリィさんがまたわざとらしいため息を吐く。

「だというのに、その惚れた男は、唯一のラルクさんのよりどころである天賦を奪っちまったんだから、ラルクさんも立つ瀬がないっすよ。あーしがラルクさんだったら怒りと、恥ずかしさとで、ブチキレます」
「……ブチキレられました」

ゼリィさんが「ほらぁ」という顔をするのが心底ムカつく。
ムカつくけど……今は、ゼリィさんが正しいような気がした。

「僕、ラルクに天賦珠玉を返してきます」
「それは止めたほうがいいっすよ」
「……え？　なんでですか。僕が間違ってたなら、謝らなきゃでしょ」
「ほんっとーにわかってないんすね、坊ちゃん。女心ってヤツを」
「昼から酒飲んでる人に女心を語られたくはないんですけど……」
「酒は女のたしなみ」

ドヤ顔するな。

「あのね、坊ちゃん。今のラルクさんのことを考えてくださいよ。彼女は今、自分のためを思って行動してくれた坊ちゃんのことを思い出しているに違いないんです。で、そんな坊ちゃんにキツイ言葉をぶつけた自分を恥じて、消え入りたいほどの気持ちっすよ」
「……まるで見てきたように言うんですね」
「てゆーかこんなこともわからない坊ちゃんが悪いんです」
「うぐっ」
「そこへ坊ちゃんがやってきて『ごめん、僕が悪かった』なんて言ったらどうなります？」
「……ますます立場がない……」
「そーゆーことです」

えへんと腕組みして胸を反らすゼリィさん。
今回ばかりはゼリィさんが正しいような気がする。

「じゃあ、僕はどうしたら……」

「ちょっと時間を置きましょう。これはラルクさんにとってもチャンスなんですよ、坊ちゃんに対して素直になるチャンスです。それには時間が必要なんですよ。『強い女』になるためにゃ、『弱さ』を知らなきゃいけないんです」
「……わかり、ました」

このままラルクと会わないでいるのは心苦しい気もしたけれど、確かに、僕らは冷静になる時間が必要かもしれない。

「なので、坊ちゃんは『三天森林（サードフォレスト）』に行ってきてください」
「わかりまし――は？」
「ハイエルフのお嬢様と話をしなきゃいけないのは坊ちゃんでしょ？　これは坊ちゃんにしかできないじゃないですか」
「いや、でも、え？　ラルクのことは……」
「――それは私たちに任せてもらえますか」

声がした。
振り返ったそこにいたのはノンさんだった。
その後ろにはダンテスさんとミミノさんもいる。

「『薬理の賢者』様に会いに行くのはお父さんとミミノさん、そしてゼリィさんの3人で問題ないでしょう」
「でもこれは僕の姉の――」
「レイジくん」

ノンさんが近づいてきた。
今はノンさんとの身長差も縮まってきたけれど、それでも少しだけノンさんのほうが高い。

「実は……先ほど連絡があり、私の魔法の師匠がここザッカーハー

フェンに来るようです。師匠は【回復魔法】の天才なので、ラルクさんの回復に力を貸してくれるでしょう」
「そんな……いいのでしょうか」
「いいんです」
ノンさんが両手を差し出して僕の肩に置いた。
「すべてをひとりで抱え込まないでください。そしてすべてをひとりでやらなければいけないと、思い込まないでください。私たちを頼ってください。私たちは同じ『銀の天秤』のパーティーメンバーであり、家族みたいなものでしょう？　ラルクさんがレイジくんの家族なら、私もまたラルクさんの家族です」
「ノン、さん……」
にこりと微笑んだノンさんが、僕の強ばった心を溶かしていく。
たぶん、僕は結構無理をしていたんだと思う。
人の命を救わなきゃいけなくて、そのために全力を尽くし続けなければいけなくて。
だけどほんとうに報われて欲しい人が報われなくて。
だから無力感が……キツくて。
「わたしもついてるべな！」
「俺もいる」
ミミノさんとダンテスさんが近寄ってきて、
「とーぜん、この頼りになるあーしもいますからね。借金の減額、期待してますよ」
ぱちりとウインクするゼリィさんがいて。

「はい……！」

僕は、じわりと熱くなった目元を袖で拭った。

「皆さん、お世話になります……！」

そう言った瞬間、確かに、僕の身体は――心までもが、軽くなったような気がしたのだ。

56（後書き）

文庫版オバスキ発売しております！
ゴリゴリに書き直した文庫版は、本作をより楽しめる形になったのではないかなと思います。
初動が命といわれているライトノベル業界ですので是非ともお買い求めください……！

57（前書き）

なんと300話目でした。

57

一夜明けて、旅支度を終えた僕はエルフの国であるシルヴィス王国を目指すことにした。

アーシャがどんな思いで国に帰ったのかはわからないけれど、それを話してもらいたいと思ったし、もしも――僕のために、ラルクのために戻ってくれたのならばそんなふうに自分を犠牲にして欲しくないと思った。

「……行ってくるよ、ラルク」

彼女が泊まっているはずの宿を見上げて僕は別れの言葉を口にした。

今まで、ラルクとの再会はとにかく慌ただしかったけれど、今回はとても静かだった。

「銀の天秤」のみんなは魔導船の手配や、ラルクの仲間であるクックさんとの相談、それにノンさんの師匠という人の出迎えに朝から大忙しだった。

なので今日の旅立ちは僕ひとりだ。

ノンさんの師匠は【回復魔法】の天才だと言っていたけれど、実際に教会組織の中でトップ１０に入るほどの腕前らしく、また特殊な病状の患者を回復させた経験が豊富らしい。手紙での問い合わせに「それなら直接行く」とわざわざ言ってくれたそうだ。

であれば、「薬理の賢者」様に出向いている間、任せることができる。

ノンさんの感覚では「師匠の魔法でもラルクさんを治すのは難しい」ということだったから、賢者様には会いに行かなければならないのだ。

「レイジ殿、ここにおられたか」
「え？」
ここ港町ザッカーハーフェンから海沿いにキースグラン連邦へと抜けようかと考え、乗合馬車を探していた僕に声を掛けたのは昨晩、町長邸で出会った商人ヤーゴさんだ。
太っていてにこやかながら、どこか油断のない物腰の人だ。
後ろには屈強な護衛を3人ほど連れている。
「ヤーゴさん……どうしてこちらに？」
「レイジ殿が『三天森林（サードフォレスト）』への移動手段を探していると聞きましてな」
ヤーゴさんは「薬理の賢者」様への船を出す件で、「勝負」に負けて――なんの勝負が町長邸内で行われたのかは知らないけど――いたはずだ。
「我が船に乗られてはいかがか？　キースグラン連邦の首都ヴァルハラを経由しますが、『三天森林』近くまでお連れしましょう。船は速いですぞ。なにより馬車と違って夜も走れますから」
「そんな……よろしいのですか」
「もちろんです。レッドゲート戦役の英雄を乗せられることは誉れだと昨晩もお話ししましたでしょう？」
「……では、お願いいたします」
僕は素直に、ぺこりと頭を下げた。昨日ノンさんにも言われたように、もう少し他人を頼ることを覚えたほうがいいと思ったのだ。
「おお、そうですか！　早速こちらへ。我が船も本日出船予定でご

ざいましたから」
「ありがとうございます」
「いやあ、昨晩はもっとお話をうかがいたかったのに、いつの間にかお帰りになっていたので話したりなかったのです。是非とも様々なお話を……」
ぺらぺらとしゃべるヤーゴさんは、僕の天賦を盗み見ようとした人ではあるのだけれど、こうしているところを見ている範囲では単に商売熱心で好奇心旺盛な人……という印象だった。案外、悪い人ではないのかもしれない。
それから僕は船に乗せてもらい、昼過ぎには大型魔導船は出船した。
貨物の輸送のための船だけれど、１００人ほどは乗船できる規模だ。僕くらい追加で乗せてもなんともないらしい。
「……ラルクのこと、お願いします」
港から船が出て行くと、あっという間に町は小さくなっていく。
魔導船とはいえ動力は魔道具だけでなく風にも頼っているようで、帆が東風を受けて大きくふくらんでいた。
甲板で、遠ざかる町を眺めながら僕はいろいろなことを考えていた。
ラルクのこと。アーシャのこと。
「銀の天秤」のみんなのこと。みんなは口には出していないけれどいつの間にかパーティーメンバーみたいな扱いになっているゼリィさんのこと。
エヴァお嬢様のことも考えた。
「今ごろなにしてるのかな……」

レフ魔導帝国で告げた別れ。いつ、お嬢様と再会できるか――僕には全然見当もつかない。

なるべく早く会いに行きたいけれど、シルヴィス王国でなにが待ち受けているやら。

「シルヴィス王国は……キースグラン連邦の一部なんだよな」

事前に聞いた情報だと「三天森林」は連邦の頂点であるゲッフェルト王の直轄領でありつつも、エルフの自治を認めているがゆえにエルフたちは「王国」を自ら名乗っているのだとか。

政治的にめちゃくちゃめんどくさそうなところだ。

アーシャには、そんなところにいて欲しくないという気持ちもちょっとある。

「それにキースグラン連邦は……『六天鉱山（シックスマイン）』があるところでもあるんだよな」

僕とラルクが出会い、僕の、ほんとうの意味でのこの世界での「生」が始まった場所でもある。

ラルクが【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★★★★】を手に入れ、僕が【森羅万象（ワールド・ルーラー）★★★★★★★★★★】を手に入れた場所。

あの鉱山でのことを思うと、今でも心がぐちゃぐちゃになる。

契約魔術に縛られ、偽りの平和を暮らしていた。

偽りの心を持った犯罪奴隷の人たちはにこやかに笑い、偽りの食事を食べ、偽りの酒を飲んでいた。

だけど真実もあそこにはあった。

「……ヒンガ老人」

僕にこの世界で生きていく知識を教えてくれた人。

あの人なら、今の僕になんと言うだろうか。
今僕が、やろうとしていることを聞いたら、なんと言うだろうか。

「僕は……ひょっとしたらとてもマズいことに手を出そうとしているのかもしれない」

ラルクが視力を失ったとわかったときに、気がついた。
【影王魔剣術】はラルクの失われた生命力すら補完していたことに。
星6つの天賦が、闇の剣を飛ばすだけの能力であるわけがない。
それは【森羅万象】が、情報を解析するだけでなく、学習した天賦を使えるようにするように。
星の多い天賦には、すぐにわかる使い方と、踏み込んだ使い方とがあるのだ。
つまり、

「【森羅万象】には、まだ他の使い道もあるんじゃないだろうか。
それに【離界盟約（ワールド・アライアンス）】にも……」

これは仮説に過ぎない。
でも、僕には【森羅万象】や【離界盟約】にはまだまだ可能性があるという――確信めいた予感があった。
ただそのことは、僕を、ラルクのように――扱いきれぬ天賦を使ってしまった彼女が生きていく力を失ってしまったように、危険な領域に追い込む可能性もあった。
いや、ほぼ確実に僕は危ない目に遭うだろう。

「きっと……ヒンガ老人なら止めるでしょうね。『大それたことをするものではない』と言って」

甲板の手すりを握りしめる。

もう、町は見えない。見覚えのない海岸線が見えるだけだ。
僕は未知の世界に踏み出そうとしている。だけれど踏み出さなければ得られない知識であれば、踏み出すしかない。
これから先の冒険で――その知識が、必要になるのではないかと思えたのだ。
レッドゲート、海坊主と危険が続いてますますその思いは深まった。

「ごめんなさい、ヒンガ老人。あなたの教えに背くかもしれないけれど……」

僕は、大切な人を守るために、【森羅万象】と【離界盟約】の新たな能力を探る。
そう、決めた。

57（後書き）

【森羅万象】……（1）情報解析、（2）学習能力、（3）？？？
【離界盟約】……（1）盟約内容確認、（2）盟約者確認、（3）？？？

レイジくん、進化します。

さて。
Ｗｅｂ版オバスキの面白さをそのままに、さらに加筆修正してパワーアップした文庫版オバスキは、富士見ファンタジア文庫より発売中です！
結構直しました。
特にドラゴン戦ですね。かなり盛り上がる形になったのではないかなと。

発売から1か月過ぎると書店の棚が次の新作に譲らねばならないので、是非とも今のうちにお求めくださいませ。
とはいえコロナがまた猛威を振るっている昨今ですので、ネット書店（２４時間年中無休）や電子書籍（２４時間年中無休）のほうがいいかもしれません。
ページ下部に書影を載せました！　大槍先生のイラスト、モノクロもすばらしいのでこちらもあわせて楽しんでいただければ。

で。
皆さんに「買って買って！」と言うだけでお前はなんもしないのかよ、と自分で自分にツッコミが入りまして。
私にできることはなにかな？　と考えたときに、それはまあ、小説

を書くことだよなと。

そんなわけで！　明日から1週間、毎日2話掲載（正午＆１８時）にします！！

本編を更新はこれまでと同じ１８時、正午の更新はＳＳを掲載します。

ＳＳは年末年始明けまでの、期間限定公開とさせてください（本編との齟齬が発生しそうで怖い……）。

文庫版未読の方、面白くなってますので是非ともお願いします！

買ってくださった方はほんとにほんとにありがとうございます……！

58

★　光天騎士王国　港町ザッカーハーフェン　★

ラルクはひとり、部屋に閉じこもっていた。そこにはクックも、他の仲間たちもいない。

窓も閉じているために部屋は暗く、ベッドサイドのテーブルには手をつけられていない食事と、水薬があった。

「……なんなんだよ。どうしてだよ……弟くん……」

視界を失ったラルクが思うのは、「六天鉱山」で出会い、彼女の考え方を、彼女の人生を、変えてしまった少年のことだ。

「……あれがあたしにとってどれだけ大切かってこと、わかってるだろ、弟くん……」

自分が守るべき相手だと思っていた少年。

鉱山でもそうだったし、天賦を手に入れてからもそうだった。

彼が気になって領都に追いかけていったとき、竜が出現し、それを倒したことでラルクの思いは確固たるものになった。

弟は、姉が守るのだと。

だけれど４年振りに再会した弟は――大きくなっていた。身長だって自分とあまり変わらないほどだし、なにより、星６つの天賦を持っている自分よりも強かった。

「……元気さえ取り戻せば、あたしはまた弟くんを守れるのに……」

ずっと夢見ていた。
また弟と再会し、ふたりで毎日を楽しく過ごすことを。
自分は多くの人間を殺したせいでお尋ね者になり、いちばん大変なときに彼のそばにはいられなかったけれど、それだって彼を助けるためにしたことだ。
こんな再会は望んでなかった。
惨めだった。
力を失った自分も。
彼に八つ当たりした自分も。
弟のためを思って行動した過去を悔やんでいる自分も――。

「わっ、暗い」

そのとき部屋のドアが開いた。
入ってきたのはラルクよりも背の低い――あまり見ないカラフルな色合いの服を着たミミノだった。
ミミノが「銀の天秤」に所属し、弟のパーティーメンバーであることもラルクはわかっている。

「入ってくんじゃねえ！」
「あー、そうか。目が見えないんだったべな。だから暗くてもいいんだな」
「入るなって言ったろ！」

ラルクは近くをまさぐってなにかを投げつけようと思ったが、すでにクックたちに「出て行け」と散々投げつけたあとだったのでそばにはなにもなかった。ベッドサイドの食事が載せられたテーブルが少々離れたところに移してあったのはクックの先見の明と言えるだろう。

ずかずかと部屋へ入ってきたミミノは窓を開けた。射し込んだ光が部屋の惨状を照らし出す――枕も、シーツも、花瓶も、酒瓶のようなものも投げられ、床に飛び散っている。

「あーあー。ダメだべな、こんな暗いところでじめじめしてたら。頭にカビ生えるよ？」

「うるせえ！」

「それに女の子が男みたいな口調を使うのは、どうかと思うなー。女には女の武器があるんだからな」

「うるせえっつってんだろ！」

とっさに右手を伸ばしたラルクは、しかし、そこから――慣れ親しんだ闇の刃が出てこないことに気がついてハッとする。

「……その苛立ちも、全部天賦がなくなったせいだよ」

ミミノの言葉が胸に深く突き刺さる。

「だったら……なんなんだよ。アンタにゃ関係ねーだろ。あたしがこのままここでくたばったって」

「関係あるべな。だって、レイジくんが悲しむもの」

「知らねーよそんな名前ッ！！　あたしの弟くんは……弟くんなんだ……！」

すぐそばに人の気配を感じて、ラルクは顔を上げた。

直後、パンッ、と乾いた音を聞いた――自分の頬がはたかれたのだと気づくには少し時間が必要だった。

「姉なら、弟の成長を喜ぶもんだ！！」

ミミノの声が呆然とするラルクの頭に響く。

「どーして認めてあげないべな!?　レイジくん、お姉ちゃんに褒めてもらいたくてめちゃくちゃがんばってたのに!!」

「……褒めて、もらいたくて……あたしに？」

「当然だべな！　レイジくんは、ウチのパーティーに入ったときからずっと、姉に会うんだって言ってた。会わなきゃいけないって。それが人生の最初の目標だって」

「……」

頬に手を当てたラルクは、見えない目をミミノへと向ける。

「……アンタ、泣いてんのか……？」

ぽた、ぽた、という音。そして鼻をすするような音。ミミノの声は震えている。

「悔しいべな……！　あんなにがんばったレイジくんを、あなたは否定したの……！　だっていうのに、レイジくんは、自分が悪いんだって言って……泣きそうな顔してたんだ……」

「……弟くんが……」

ミミノは目元に人差し指をやると、涙を拭った。

「わたしはレイジくんに頼まれて、あなたのために『薬理の賢者』様に会ってくるべ。薬のことはハーフリングの得意分野だからな。だけど、わたしたちが戻ってくるまでにあなたが死んだら困る。レイジくんに合わせる顔がない。だからあなたには特別な治療を受けてもらうんだ――今、高位の【回復魔法】を使える先生がこの街に向かってるから」

「……あたしは」
「言っておくけど、拒否権なんてないべな」
「は、はあ！？　なんでだよ！」
「レイジくんがそう言ったから」
「……」

ぽかんとしたラルクは、身体中から力が抜けるようにうなだれた。

「なんなんだよ、弟くんは……あたしの知らない４年でなにがあったんだよ」
「それは、治療してくれるノンに聞いてみるべな。いーっぱい教えてくれるよ」
「……アンタは？」
「ん？」
「アンタは、弟くんのなんなんだ？」

すると、

「とっても頼りになって、とっても身近で、なにかあったらレイジくんはすぐにわたしのことを頼ってくれるような存在だべな！　つまり……うん、わたしは！」

答えるミミノが輝くような笑顔を浮かべているのをラルクは見ることができなかったが、想像するにたやすかった。

「ママだべな！」

それはさすがにおかしい、とツッコミがすぐに入った。

58（後書き）

ママノさん！（錯乱）

書籍版オバスキも大好評（当社比）発売中（真実）ですので是非よろしくお願いします！

ページ下部にある書影タップで、なろうさんの書報ページに行くことができます。

（書報ページには運営さんがすぐに掲載してくれました……ありがたやありがたや）

あとどうでもいいことなんですけど、さっき警察署にいってきたらホワイトボードに「12月3日はカレンダーの日」と書かれていました。

1、2、3と並んでるからなんですかねえ。

（警察署でそれを告知する意味は）

59（前書き）

「三天森林」編。

59

この世界に天賦珠玉を産出する場所は８つある。

そのうちのひとつが「三天森林（サードフォレスト）」であり、これはエルフたちが管理していて、どのように天賦珠玉ができるのかはエルフ以外にはほとんど知られていない。

確かに、僕がいた「六天鉱山（シックスマイン）」では鉱山がダンジョン化しており、そこの壁に生えていたし、クルヴァーン聖王国で見た「一天祭壇（ファーストアルター）」はピカーッと光ったと思うと天賦珠玉が出現した。

場所によって出現のしかたが違うんだろう。

「三天森林」は広大なキースグラン連邦のほぼ中央に位置していて、それは光天騎士王国の国土がすっぽり入ってしまうほどに広い大森林でもあった。実際に天賦珠玉が出現するのはごく一部のようだけれど……それはともかく、

「すごいなぁ……」

連邦首都ヴァルハラから乗合馬車を乗り継いで、「三天森林」へと到達したのは港町ザッカーハーフェンを出発してから１５日後のことだった。

僕の目の前には巨大な木々が立っており、僕のいる草原と、森林との間に明確な線でも引かれているかのように境目ははっきりしていた。

高さは１０メートル以上あろうかという森林からは鳥の鳴き声がひっきりなしに聞こえてくる。

「――森で採れた果実を売ってるぞ～」

「――エルフ特製のポーションを買わんか」

「――シルヴィス王国入国希望者はこちらへ」
「――冒険者はギルドが依頼を出してるぞ」

起伏のある草原を縫うように走っていた街道は森の手前で一度止まる。「三天森林」に入るには入国と同じ審査があるようだ。
小さな集落ができていて、宿や店、食堂にギルドなどの公的機関と様々な建物がある。

（これだけ広ければどこからでも密入国できそうだけど）

と思っていたら、やっぱり密入国問題は深刻のようで――「三天森林」独自の希少な獣を狙ったり、天賦珠玉を狙ったりする密猟者が後を絶たないのだ――冒険者ギルドには「『三天森林』内のパトロール依頼」などが掲示されてあった。報酬が高額なのは、密猟者との戦闘が避けられないことや、この国境の集落はたいして魅力がないので冒険者たちが留まりたがらないからのようだ。

（それにしてもエルフがいないなぁ）

店で売っているのも、宿屋を経営しているのも、ヒト種族ばかりだった。キースグラン連邦は全体的に亜人種への偏見が強く、ここにも獣人やドワーフはいない。
シルヴィス王国への入国希望者を審査する建物だけは、違った。入口にはエルフの警備兵がふたり立っていて、鋭い目つきで並んでいる入国希望者を見つめていた。革に特殊な薬剤を染みこませ硬化させた皮革鎧（レザーメイル）に、木製の槍を持っている。槍の穂は金属ではなく鉱石をとがらせ、鋭く磨いたものだった。このまま森に入っていけば森の住民として溶け込んでしまうだろう。
金髪に長い耳という僕の中での「エルフらしさ」はばっちりで、美形ではあるけれど、目つきがキツイ感じだ。

審査はひとりずつ行われるために、並ぶのは屋外だ。今は秋だからいいけれど、冬や、雨の日はかなり大変だろうと思われた。

「次の者、入れ」

僕の番になり、中へと入ると、5人のエルフがいた。3人は武装しており、ふたりはカウンターの向こうにいる。

そのふたりは美しい藍色の布で仕立てられた服を着ており、いかにも文官然としていた。武装エルフとは違って目元もどこか優しいが、油断はできない雰囲気がある。

「身分証を。……ふむ、これは冒険者のギルド証か。名前はレイジと。残念ながら入国はできないね」

え？

「ちょ、ちょっと待ってください。どうしてですか？　まだなにもお話ししてませんのに」

「冒険者だからね」

「すみません、よくわかりません。冒険者のギルド証は身分証としても問題ないはずですが」

「身分を証明できないことが問題なのではなく、冒険者なのが問題なんだ」

カウンターの向こうにいるふたりのうち、片方はめんどくさそうな顔をしていたが、もうひとりは僕のために説明してくれた。

つまりは、すべて、密猟者が原因らしい。

密猟者の大半は冒険者であり、彼らが言うには「ギルドの依頼を受けてきた」と。確かにギルドの依頼内容は「三天森林」でしか手に入らないものを持ってくるよう指定されていた。

市場で手に入れようとすれば、報酬金額では割に合わないほどに高い。

だが「三天森林」で密猟すればタダだ。

ギルドは、入手の方法までは指定しないし、依頼の品の市場相場まで確認していられないので依頼人の要望どおりに依頼は掲載され、冒険者は受諾してしまうという。

「だがそれは冒険者ギルドの問題だ。我々の問題ではなく、我々は国の、森の利益を守らなければならない」

「それは確かに……ですが、密猟者もまた冒険者が取り締まっていますよね？」

「そう。そこがさらに問題なのだ」

どうやらその「取り締まり」の依頼を受けるのが、他ならぬ密猟者らしい。合法的に「三天森林」にも入れるし、さらには「取り締まり依頼」の報酬まで受け取れるというなんとも間の抜けた状況なのだそうだ。

冒険者ギルドもさすがにこれを問題だと考えて、「取り締まり依頼」を受ける冒険者の身元を確認したりとがんばってはいるが、できることは限られており、あまり状況は改善していないのだとか。

「というわけで、そんな冒険者を我々が入国させると思うかい？」

「それは……そのとおりですね」

「では、帰ってくれたまえ――」

「ちょっと待ってください。僕の身元を保証するものがあればどうですか？」

「どういうことだい」

冒険者としての僕しか見てもらえないなら他の身分証を出せばいい。

こんなところでいきなり活躍の機会があるとは思わなかったけど――。

「こちらです」

僕は、レフ魔導帝国で発行してもらった身分証をカウンターに出した。怪訝な顔をしたふたりのエルフだったけれど――すぐに、顔色が変わった。

59（後書き）

ここもキースグラン連邦ですが、オスカーの活動範囲とは違うのでオスカーは出てきません（誰からも望まれていない可能性）。

書籍の1巻はちょうど領都の戦いが終わったところ（Ｗｅｂ版の1章と同じ）なのですが、本編と関係ない描写も結構多くて、異常な分量の文字数だったのをゴッソリ削ってわかりやすくし、一方で面白くすべき要素をきちんと持ち上げるような感じで改稿をしました。改稿するの、私は嫌いではないんですけど「これダメ。あれダメ」と言ってくる人とは仕事しづらくて。ただファンタジアの編集氏は「ここ面白い。あそこ面白い。もっと面白くして」と言ってきたので楽しく仕事できました。

「面白くして」は無茶振りだけどね？

その後の話の整合性を考えるとかなり悩みましたが、悩んだかいもあっていい改稿になりました。

毎日の投稿と並行して進めるのがキツかっただけで……。

60

「……わかった、入国を許可しよう」

と、文官が言ったのはそれからすぐのことだった。さっきまでめんどくさそうな顔をしていたもうひとりは食い入るように僕の身分証に見入っている。

……そんなにレフ魔導帝国ってネームバリューがあるのだろうか？　あるいは、魔導飛行船を贈ってきた国だから彼らにとって憧れがあるとか？

うーん。

「すぐに入国するのかね」

「あ……はい。よろしくお願いします」

わからないことを考えてもしょうがないので、僕はうなずいた。

今は、アーシャに会うのが先だ。

シルヴィス王国までは森の入口から馬車が出ており、それに乗っていけということだった。逆に、勝手に歩いていくとかなったら密猟者に間違われるのだという。

馬車――角がないしエルフたちが「馬車」と言っていたのでたぶん、馬だと思うのだけれど、足は6本あって背中にはコケが生えている――に乗って進むこと2時間、変わり映えのしない深い森の光景に飽きてきた僕の耳に歌声が聞こえてきた。

「……そろそろ着く」

馬車の御者はエルフで、乗っている客は僕以外にふたりだけ。ふたりはヒト種族で、商人のようだったけれど無駄口を叩くとエルフに嫌われるから黙っててくれとあらかじめ言われていたので無言だった。

なんだか護送馬車だなとは思う。実際、数人のエルフが森の中から監視していたし。

「わあ……あれが」

僕は御者台の後ろから背伸びして前方を見やると、そこには――樹上の集落があった。

大木の枝にまたがるように、木製の住居が置かれ、木と木は吊り橋でつながっている。

吊り橋には色とりどりの布がかけられてあってとてもカラフルだ――カラフルなのに森と調和しているという、不思議な感覚があった。

（ダークエルフの集落に似てる……）

もっと素朴で、もっと粗野で、もっと危険はあったけれどたたずまいがどこか、ダークエルフたちの集落をほうふつとさせた。

まあ、奥の方は「木の上なのに3階建て!?」みたいな建物もちらちら見えていて、ダークエルフのそれとは全然違うんだけどね。

馬車が停まり、森へと降り立つ。

すると、「あーっ」みたいな声がして、歌声がぴたりと止んだ。

吊り橋に集まっていた数人の子どもたちが蜘蛛の子を散らすように逃げていく。

どこかで木材を加工する音が聞こえる。いくつかの歌声はまだ聞

こえていて、それは集団で酒造りをしているようなそんな歌詞がきれぎれに届いた。
集落は樹上にあったけれど、作業場や倉庫は地上にあり、地上を歩いているエルフも多かった。彼らは一様に麻を織った服を着ていて、それらは自然色に染められていた。

「では」
「ええ、また後ほど」

同乗者だったふたりは行き先が決まっているのか、そそくさと歩いていく。彼らを見つめるエルフの視線は冷ややかで、なんだか悪いことでもしているみたいだった。

「……さて、と。王族に会うにはどうしたらいいかな」

馬車の停留所らしいここから道が伸びている。道は踏み固められた地面で、馬（？）を使って荷車を牽いたりするのが見えるが、通行人が多いとは言えないだろう。
ゆったりとした時間が流れているのを感じる。
だけれど旅人にはあまりにも不親切で、「ようこそシルヴィス王国へ」みたいな看板は要らないけれど、せめて道しるべくらいは欲しい。案内という案内が皆無だった。

「ん」

どうしたらいいか途方に暮れようとしていた僕は、大通りを向こうからやってくる集団に気がついた。
皮革鎧に身を包み、鉱石の槍を装備したのと、弓と矢を持ったのと、2種類のエルフ兵士がやってくるのだ。
先頭の人物だけは腰に鞘付きの剣を装備していて、額には青い宝

石をはめ込んだ革ヒモを結んでいた。

「――お前がレイジか」

近くまでやってくると、先頭のエルフが僕に問う。

槍のエルフ兵士が僕をぐるり取り囲み、弓のエルフ兵士は遠巻きに警戒している。槍が15人、弓が7人だ。

「はい」

「そうか――お前が、アナスタシア王女殿下を攫った誘拐犯か！！」

「……はい？」

僕が聞き返すよりも先に、槍は構えられ、弓には矢がつがえられた。

「よくもまあ、こうしてのこのこと我らが王国にやってきたものだな。卑劣なヒト種族のことだから、姿をくらませたのかと思ったが……いや、逃げようとしたところで地の果てまで追いかけるがな。我らが崇拝するハイエルフ様に危害を加えた男ならば」

「いやちょっと待ってください。僕、ここでそんな認識になってるんですか？　アーシャはなんと言ってます？」

「王女殿下をなれなれしく呼ぶなァッ！！」

カッ、と目を見開いてにらんでくる青い宝石の人。怖い。目がイッてる。なにかヤバイ煙でも吸ったんだろうか。

「えーっと……僕のことがどう伝わってるか全然わからないのですが、とりあえずアナスタシア殿下には会えますか？」

無実の犯罪者と思われようと、今、僕が優先すべきはアーシャに

会うことだ。いや、まあ、すでに「六天鉱山」では逃亡奴隷でバリバリ犯罪者ではあるんだけど。

「会えるわけがなかろう！！　盗っ人猛々しいとはこのことだ！！」
「それじゃあ、あなたについていけばハイエルフの方に会えますか？」
「会えるわけが……いや、会える。お前の取り調べはハイエルフ様が直々にするとおっしゃっていた。しかし！　ハイエルフ『様』だ！！」
「わかりました。じゃあ、会わせてください、ハイエルフ様に」
「むう……無抵抗とは、情けない」

もうなんなんだこのエルフ。だいぶ沸点が低いぞ。僕が暴れたほうがよかったんだろうか？

「武器を出せ！」
「持ってないです」
「そんなわけがあるか！」
「見ての通りですよ」

僕は、度重なる戦闘でガタがきていた短刀を置いてきていた。ダンテスさんに預け、修理を依頼している。
道具袋の中を見せ、武器らしいものがないのを確認してもらうと、またも青い宝石のエルフは微妙そうな顔をした。
なんなんだよ。

60（後書き）

文庫版オバスキ、コミカライズ版オバスキ、どちらもよろしくお願いしますー！

私もいまだに書店に行って並んでいるのを見て「ふふっ」と笑っては去って行きます。たまにずれてる本があったりしたら直したりします。

1巻が書店の新刊コーナーにあるのはあと2週間くらいですので、是非ともご覧くださいませ。そして「ふふっ」としてください！

61

兵士に囲まれながら連れて行かれたのはひときわ大きな樹木の前だった。樹齢何万年……という感じではなく、何十本もの木々が集まって、融け合って、大木に進化している。

見上げると１００を超える住居がそこにはあって、大木の周りはドーナツ型の広場になっており、少ないながらも子どもたちが駈け回ったり、楽器片手に歌を歌うエルフがいたり、地べたに座り込んでおしゃべりしたり、カードゲームをしたりと様々だ。

だが兵士たちが僕を取り囲んでやってくると騒がしさはぴたりと止んだ。

「これからハイエルフ様のお屋敷へと向かう。くれぐれも粗相のないように」

「僕を縛らなくていいんですか？」

「フンッ、武器も持たぬ小僧を縛ったとあれば、我らエルフ精鋭団（エルヴンガード）の名折れよ」

「へー……」

どうやら彼らは武技に自信があるようだ。

確かに、人間よりはるかに寿命があるというエルフだから、戦闘能力は実は高いのかもしれない。手でも握って覚えたての【オーブ視】を発動したい気持ちもあったけれど、盗み見みたいなことをしたらそれこそ後ろめたくなるので止めておく。

大木の周囲には幾筋もの階段が設置されており、それを伝って上ることができる。手すりはないがみんながみんなスッスッと上っていくので慣れれば怖くはないのだろう。あと上りの階段と下りの階段がはっきり分かれているのですれ違う必要がないようになってい

る。
２０メートルほど上ったところに広い踊り場があって、そこからまた別々の階段がある。
僕が連れて行かれたのは、幹をくりぬいて作られた螺旋階段だった。
そこを通ると――不意に視界が開ける。
この樹木は、森林地帯の中でも頭ひとつ抜きんでた存在らしい。

「おお……」

木々のてっぺんを見下ろす形になり、緑の葉の絨毯が見渡す限り広がっている。僕がやってきた方角は、やはり線が引かれたように草原と森林とで分かれているけれど。
森林のさらに奥、ここから１０キロ以上は優にある向こうに――ひときわ巨大な木が見えた。
もちろん、他にも僕がいる場所と同じように頭ひとつ抜きんでている樹木はあるのだけれど、それは、完全に、別格だった。
木々の絨毯をぶち抜いて幹が伸び、その上に巨大な枝と葉を広げ、広大な範囲にその勢力を伸ばしている。
すごい。
なんて大きな樹だろう……。

「見るな」

感動していた僕の前に、にゅっ、と青い宝石のエルフが顔を出した。

「え、ええ～？　見えちゃうものはしょうがないじゃないですか」
「ヒト種族が見ると、世界樹が穢れるという話がある」
「！」

世界樹！　やっぱりあれ、世界樹って言うんだ！

「世界樹って言うんですねえ」

「！？」

僕が言うと、青い宝石のエルフは顔を真っ赤にして、

「そ、そうやって情報収集する気だな！　そうはさせんぞ！　早く行け！」

と僕の背中を押した。

わずかに坂となっているそこを上りきると、

「わあ」

一軒家がたっていた。

横幅が8メートルほどで、さほど大きくはないけれど、一軒の家であることは間違いない。

縁側のようになっているそこは、こちらに向かって大きく開かれており、室内は木板の張られた床にテーブルが置かれてある。

それだけしかない、部屋と言っていい。

青い宝石のエルフだけでなく兵士たちが一斉に跪いた。弓のエルフはいないので、ここには槍のエルフだけだった。

テーブルにはひとりのエルフが――ハイエルフが座っていて、肘を突いて両手にほおを載せて面白そうな顔でこちらを見ていた。

「――お前？　アーシャを攫ったヒト種族って」

男は言った。

プラチナブロンドの髪は肩までの長さで、複雑に結われ、いくつもの宝石がぶら下がっている。びっくりするくらい整った容姿で、ぴょこんと伸びた長い耳が、彼がエルフであることを明確に示している。

滑らかな肌も、サファイアブルーの瞳も、僕にある人物を想起させた。

（アーシャと同じだ……！）

この人がハイエルフであり、アーシャの親族であることを疑う要素はなにひとつなかった。

「ふーん……ヒト種族の子どものくせに、ずいぶんと落ち着き払ってるんだな。アーシャの知り合いだから自分は安全だとか思ってる？」

「いや、そういうわけではないです」

「それじゃ、あの気持ち悪いトカゲどもが守ってくれるって？」

「……もしかしてそれ、レフ魔導帝国のことを言っていますか？」

「そうだよ。お前がこれ見よがしに身分証を出してくれたおかげで、アーシャを攫った犯人レイジが来たってすぐにわかったんだ」

この世界にはインターネットもなければ電話もない。だけど超長距離通信用の魔道具はあるので、それを使って僕の情報を得ているのだろう。

つまり僕が帝国で発行された身分証を出したのは、正解でもあり、不正解でもあったというわけだ。

「……」

「お、どうした？　怒ったのか？　トカゲの友だちのお前が、怒ったのか？」

「……怒りましたよ。でもそれは、懸命に生きているレフの皆さんをバカにされたことというより、あなたのようなエルフがアーシャの親族であるということに対する憤りです」

僕がにらみつけると、ハイエルフは目を細めた。

「へぇ……それでどうするんだ？　まさかこの場で俺を殴る？」

僕の背後にいたエルフたちの身体に緊張が走るのを感じた。跪いたままだけど。

「いいえ、そんなことよりアーシャに会わせてください。僕がここに来たのはアーシャに会って、話をするためですから」

と言うと――ハイエルフの彼は、口元に手をやった。

その仕草がなにを意味するのか――僕が内心警戒したそのとき、

「――ぷっ」

彼は、

「くくっ、あはははははは！」

膝を叩いて笑い出したのだった。

……え？

なに？　なにか笑うところある？　やけに無邪気に笑ってるんだけど。

「で、殿下……？」

背後のエルフが恐る恐るたずねると、彼――やはり王族のハイエルフは、

「あー、笑った笑った。おっかしーわ、お前。サイコーだぜ。おい、エルヴンガードたち、下がっていいぞ」

「え！？　し、しかしですね、我らはハイエルフ様たちの……」

「そのハイエルフ様の命令だ。それともなにか？　王族の『落ちこぼれ』の命令は聞けないって？」

「と、とんでもありません！」

武装兵たちは全員、あわてて立ち上がると回れ右して螺旋階段を去って行った。

「あのー……？」

僕が戸惑いがちにたずねると、彼は手招きしながら言った。

「こっち来て座れよ。俺はアーシャの兄、マトヴェイだ。１０人ちょいいる次期ハイエルフの王位継承者の中ではぶっちぎりのビリ、『落ちこぼれのマトヴェイ』って言われてる」

「落ちこぼれ……？」

「そう怪訝な顔をするな。俺とお前は共通点がひとつある――」

にっ、と笑ったマトヴェイは、やはり信じられないほど整った笑顔だった。

「――アーシャを、この国から解き放ちたいってとこさ」

61（後書き）

ごめんなさい、風邪ひいたっぽいので明日は更新できないかもしれません。

62

お前がどんなヤツか知りたくて、カマかけたりして悪かったな――と言いながらマトヴェイさんはお茶を振る舞ってくれた。ティーカップの中で花のつぼみが開いていくというフラワーティーだ。

急な展開に僕がよくわからず目を瞬いていると、

「そう警戒するなよ、毒が入ってるか心配なら俺のカップと替えてもいいぞ」

「あ……いいえ、大丈夫です」

彼の急激な豹変に驚きながらも僕は席につくと、カップのお茶をいただいた。【森羅万象】でこのお茶が無害なことだけでなく、「鎮静作用」や「微弱な解毒効果」があることもわかっていた。

ふわっとふくよかな香りが鼻を抜けていく。これはいいお茶だ（お茶の善し悪しなんて僕にわかるわけないのだけど）。

「いい飲みっぷりだ。落ちこぼれでも、茶だけは淹れるのがうまいと評判なんだぞ」

「……その、マトヴェイ様、僕は――」

「待て。マトヴェイでいい。アーシャだって愛称で呼び捨てなんだろ？」

「それは……」

かといってあなたもそうとはいかないでしょう、と思いつつ、僕は、

「……マトヴェイ、さん」
「ま、それでいいや」
「マトヴェイさん、僕はアーシャと話をしにきたんです。彼女がここに留まりたいのなら止めはしない」
「あいつが逃げたいと言ったら？」
「それは……」
「全力で逃がすか？『三天森林』のエルフ全員を敵に回すことになっても？」
「……」

もちろんそのつもりだが、ここで「はい」と答えるにはまだこの人のことを僕は知らなさすぎる。

「……まあ、いいさ。だけど俺の話を聞いたらお前も気が変わるかもしれないぜ？」

マトヴェイさんはそう前置きして、自分で淹れたお茶を一口飲んだ。こいつは最高だな、なんて言いつつ、話し始める。

「アーシャは落ちこぼれの俺よりもひどい扱いだった。森の木々は火を嫌う。だがアーシャは火をまき散らす存在だったからな……だから声を封じた。他ならぬ父である王が」
「表向きは『邪悪な魔法使いによる呪い』だったんでしょう？　そんな重要なことを僕に話してもいいのですか？」
「ああ。だって、お前がアーシャの喉を元通りにしたんだろ？」
「……それは、はい、まあ、最終的には本人の努力ですけど」
「煮え切らねえな。だけどすげえな、お前。この森にいる薬師たちが全員さじを投げた病気だってのに……」

ああ、そういうことか――僕は納得した。

アーシャの問題を、王族たちが放置し続けたわけはない。なにかしら解決しようと努力をしたはずなのだ。
だけど彼らは根本的に間違っていた。

「あれは病気ではありません。アーシャの体質なんです」
「体質……？」
「声とともに息が漏れるように、アーシャは声とともに【火魔法】が紡がれてしまう体質だったんです。【火魔法】と極めて親和性が高い肉体だった、と言ってもいいかもしれません」
「……いや、待て待て、そう簡単に言うけどな。それを病気と言っても同じだろ？」
「違いますよ。病気は根本原因を断てば終わりですが、体質ならばそれと付き合っていかなきゃいけない。アーシャには、魔力をコントロールするトレーニングをしてもらいました。彼女は元々才能があったのでしょう、最初こそ話しながら炎を出現させていましたけど、次第に炎は小さくなって――今は感情が高ぶったときにしか出ません」
「……」
「どうしました？」
「あ、いや」

じっ、と僕を見つめるマトヴェイさんに、なんだか居心地が悪く感じた。
イケメンに見つめられるのは身体によくないのである。

「……あいつ、話したがらなかったんじゃねえかなと思ってな」
「それは……どうでしょうか。僕にはそう感じられませんでしたけど」
「そりゃあ、そうだろ。声を出したら火が出て、周りが大騒ぎしてたんだ。で、喉を封じられたんだぞ。声を出すことがイヤになった

って当然だ」

そうか――確かに、それはそのとおりかもしれない。

でもマトヴェイさんに言ったとおり、僕はそんなふうに感じなかった。

「アーシャは……話したくて仕方なかった、みたいに感じました。僕は、ですけど」

「……ふぅむ、そういうことか」

「？」

「つまりだ、アーシャは、いろんなことを話してみたくてたまらなかったんだ。お前と」

にやりとするマトヴェイさん。イケメンはにやりとしてもサマになるからずるい。

「そりゃあ、おしゃべりも上手になるわけだ。ふぅん、なるほどねえ」

「……？」

「でも肝心要のことを当の本人には話さなかったんだなぁ、まったく、我が妹ながら呆れた奥手だ」

「あのー、マトヴェイさん？」

「いや、いいんだ。こっちの話こっちの話」

なにかマトヴェイさんは勝手に納得しているが、僕は置いてきぼりにされている。

「ちなみに僕らのことはどこまでご存じなんですか？」

「アーシャといっしょにどこかへ転移魔法で飛ばされたんだろ？俺は見たことがねえけど、実在するんだな。その前にアーシャが【

火魔法】をぶっ放したことも知ってる。で、1か月くらいかけてお前たちは戻ってきた」

なるほど……「裏の世界」のことはそんなに知られていないのか。いや、レッドゲートと「裏の世界」をつなげて考えるのは知識がなきゃできないよな。

「それじゃアーシャは今どこに？」

「ああ、今ごろ国王のところだろうよ。んでこれからのことを話してるんじゃないのか？」

マトヴェイさんは言った。

「このままここに残るか、それともレフ魔導帝国に戻るか。あ、さっきはトカゲとか言ってみたけど俺は差別思想とか全然ないからな、一応言っておくけど。レフの技術はすごくてな、アーシャがいいって言うなら俺が代わりに帝国に行きたいくらいだわ」

「はあ……」

この人、ざっくばらんすぎないだろうか。アーシャよりもぐいぐい距離を詰めてくる。

「だけどアーシャはお前が来ていることを知らない」

「それは、そうだと思います」

「じゃ、行くか」

「行くってどこに？」

「決まってんだろ」

と言いながら立ち上がったマトヴェイさんは【花魔法】を発動する。

魔力が集中する気配を感じ、すると、この小さな家がずずずずと揺れながら動き出した。

「このままハイエルフのお屋敷まで行くぞ」

「え、え!?」

とてつもない、と思った。

ハイエルフのことで驚くのはアーシャに続いて二人目だ。

こんな魔法の使い方があったなんて――僕らのいる家を載せ、樹木ごと、動いているのだった。

63

図抜けた魔力量があればできることも増えるのだということを僕は知った。アーシャの魔力量もそうだけど、マトヴェイさんの魔力量も半端ない。

「すごいですね。この規模の【花魔法】なんて初めて見ました」

「ま、まあね、俺くらいになればこれくらいはね……」

いや、でもカップを持つ手が震えてるな？　ほんとは結構無理してるのかな？

樹木が歩いているのか、あるいは枝をすさまじく伸ばしているのかはわからないけれど、しばらくして動きは止まった。

「世界樹」なんて言葉が聞こえたあそこにはまだ距離があったけれど、その手前のひときわ大きな木の前で止まっている。

そこには、お屋敷があった。

複数の巨木に支えられたお屋敷が建っていたのだ。

壁面は白く塗られ、窓枠や屋根にも複雑な彫刻が施されている。

動物や花のデザインだ。

それらすべてが木製であるようだ。

「マトヴェイ！！　貴様誰の許可を得てヒト種族などを連れてきた！」

家の前のアプローチも当然樹木の幹なのだけれど、完璧に道のようになっているから、これもまた【花魔法】で作り出したものなのかもしれない。

そこにやってきたのはマトヴェイさんによく似たイケメンだった

けれど、目元がかなりきつめだ。

「あれは3番目の兄貴のホロブリトだ」

「……あちこちの枝に隠れている方々もご兄弟ですよね」

「お前、よく気づいたな？」

僕はうなずいた。

「――隠れていたわけではない」

するとあちらこちらからイケメンや美女がぞろぞろと出てきた。

全部でなんと17人もいる。

「黄色い髪飾りのがいちばん上の兄貴のヤロスラフで、青色のバングルつけてるのが2番目の兄貴のスヴャトスラフ、3番目の兄貴はアレだろ、で、4番目の兄貴が髪の毛をひっつめにしてるアンドレイで、5番目の兄貴が髪を短く刈り込んでるアレクサンドル、6番目――」

「あ、それくらいで結構です」

【森羅万象】がある僕は記憶することができるけれど、今は紹介してもらうようなタイミングでもないだろう。

問題は――彼ら全員がとてつもない魔力を持っているということだ。

「そのヒト種族、気配でも嗅ぎ取れるのか？」

4番目のアンドレイさんが言う。

それは、ちょっと違う。

僕はここに来るまで【森羅万象】の新たな使い方について模索し

ていたのだ。
そしてある使い方を発見した。

「……皆さんの魔力量は隠そうとしても隠しきれるものではないでしょう？」

【森羅万象】は、すでに習得している天賦を組み合わせて新たな能力を得ることができたのだ。
【視覚強化】、【魔力操作】、【オーブ視】……この辺りをうまく組み合わせて、僕は【魔力視】とでも言えばいいのか、他人の魔力量を可視化できるようになった。
立ち上る湯気のような魔力は、一般的に魔力があると言われているエルフの数倍から数十倍はある。
だからどこかに隠れていてもそこから魔力が漏れていれば視ることができる。

「へえ、魔力を感じ取るのね。であればお前のような卑しいヒト種族がいていい場所ではないとわかるでしょうに」

視えるだけに、わかってしまう。
この人――17人いる中でもずば抜けて、魔力がある。
アーシャもすごかったけれど、この人はケタが違う。

「……あれはユーリー。俺の双子の姉で……天才さ」

ぽつりと、マトヴェイさんが言った。

「落ちこぼれのマトヴェイが連れてきた卑しいヒト種族よ、さっさと帰りなさい」

双子の姉か……。

ハイエルフの王族がどんな生活をしているのかはわからないけれど、想像でしかないのだけれど……あれだけの魔力を持った姉がいたら、確かに、比べられ、「落ちこぼれ」と言われてしまうのだろう。

マトヴェイさんの魔力はここにいる人たちと比べても確かに少ない。半分くらいだろうか。そうだとしてもヒト種族の社会ならば国に召し抱えられて「大魔導師」と言われるほどはあるというのに。

「僕はアーシャに会いに来ただけです」

「あの子はお前に会わない」

「一度会って、少しだけ話をさせてもらえればそれだけでいいんです。お願いします」

僕は頭を下げた――が、

「……図に乗るな、ヒト種族がッ！！」

ユーリーさんが激怒し、彼女の周囲に渦を巻くように魔力が集まるのが見えた。

「止せ、ここでどんな魔法を使うつもりだ」

「そうよ。カッとして魔法を撃つなんてヒト種族みたい」

「やれやれ、これが次期王の第一候補とは先が思いやられる」

するとハイエルフ兄弟たちが次々に文句を言い始める。

ユーリーさんが次の王……女王？　ていうか、そんなに仲が良くないのか、みんな？

「うるさいッ！　アンタたちの足りない魔力を私が補ってあげてい

るんでしょうが！」

バッ、とユーリーさんが手を伸ばすと――そこから突風が発せられ、僕に襲いかかってくる。

「！！」

直撃すればはね飛ばされ、大樹のはるか下に落とされるであろう風だ――けれど、

（これは……）

僕はあることに気づいた。

だけどそれを確認するには、まずはこの【風魔法】をなんとかする必要がある。

「そぉぉおおおおいっ！！」

僕もまた【風魔法】を展開する。

「バカな。ヒト種族が、我らハイエルフの魔力にあらがえるとでも？」

「悪あがきね」

そんなささやきが聞こえたが、確かに、僕の魔力量は全然ユーリーさんにはかなわない。たとえるならダンプカーに三輪車をぶつけるようなものだろう。

だけどね、僕には【森羅万象】がある。

小型の竜巻のような魔法が僕に届く――寸前、【風魔法】はウソのようにかき消えた。

「!?」

驚きに、その場にいる全員が動きを止める。

いちばん驚いたのはユーリーさん本人のようだ。

僕はにやりとした。

63（後書き）

17人の名前はさすがに出ません！

【森羅万象】の新たな使い方は「組み合わせによる能力開発」でした。

ただ簡単なことではないので、試行錯誤と、訓練が必要になります。

もともとレイジはナチュラルに【火魔法】と【風魔法】を組み合わせたりしていたので、その辺りから萌芽はあったんですけどね。

実を言うと「ユニーク特性」にあるスキルはこの組み合わせによるものがあったりします。

【聖剣術（ホーリーソード）★★★★★★】（技能＋神秘）

【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】（闇魔法＋邪神魔法＋剣術＋肉体強化＋免疫強化）

こんな感じで。本文で語られることがないと思ったのでここに書いておきます。

八道魔法以外の魔法はいろいろありますが、なかなか出番がないですね。出現確率がレアだというのもあるのですが。【回復魔法】を始めとするいろいろは設定だけ作って死蔵されてます。【人魔法】とか設定集を今開いて久々に思い出しました。他人の感情に作用する魔法です。

64

「お、おいおい……次期女王ともあろう方が、ヒト種族相手に手加減をするなんてな」

ハイエルフのひとりが言うと、

「なるほど、手加減。そうよね」

「手を抜いたとも言える」

他の兄弟たちがうなずくのだが、

「違う……断じて手加減などしていないッ！　お前、なにをした！？」

ユーリーさんは驚愕の面持ちのまま僕にたずねる。

「【風魔法】で作られた風を分析して、ほどいただけですよ」

「そんなことができるわけない！　複雑に織られた絨毯を、針一本で糸にほどくようなものだぞ！？」

うまいたとえに思いがけず拍手しそうになっちゃった。

風とは空気の流れだ。【風魔法】は大気に作用して風を作り出すのだけど、逆に言えば空気の流れを完璧に把握できればそれをほどくことができる。

岩塊を投げつける【土魔法】だったらこうはいかないんだけど。

もちろん空気の流れを把握して、それをほどくなんて、スーパーコンピューター並みの解析能力が必要なんだけど――そこはほら、

ウチの【森羅万象（スーパーコンピューター）】ががんばりますから。
　ユーリーさんは【風魔法】がどういうものなのかをちゃんと理解していて、だからこそ「絨毯」みたいなたとえがするりと出てくるんだろう。この人、才能があるのはもちろんだけど、理解力もすごいな。

「……え？　なに、なにがあった？」

　僕の横でしゃがんでいたマトヴェイさんはもうちょっとユーリーさんを見習うように。

「全員、静粛に！！」

　そこへ警笛のように鋭い声が響く。お屋敷の扉がいつの間にか開かれ、ポリーナさんたち特別執行機関（シークレットサーヴィス）に付き添われたハイエルフが出てくる。
　深緑色のガウンに、頭にはみずみずしい草花の王冠。ただここにいるイケメンたちと違って――そのハイエルフはかなりの老齢で、ポリーナさんたちがそばで支えながらでないと歩けないようだった。
　顔には皺が刻まれ、総白髪は縮れている。【森羅万象】がなくともそろそろ寿命が尽きようとしていることが伝わってくる――それでも【森羅万象】によればあと１０年は問題なさそうだけれど。
　ユーリーさんが真っ先にその場に片膝をつくと、他のハイエルフたちもそれにならった。マトヴェイさんはしゃがみ疲れたのかそのままあぐらをかいて、僕は――とりあえずスィリーズ伯爵邸で教わった、片膝をついて、右手を胸に当て、頭を垂れるポーズを取った。

「……お前が、レイジか。顔を上げてくれ」
「はい」

しゃがれた声には厳しさと優しさが同居していた。

「私がシルヴィス王国の国王、シルヴィス8世である。ここにいる者は皆、私の子でな……ハイエルフの王族として責務を果たそうと日々懸命に生きているのだ。ユーリーが失礼をしたな」

「……陛下！」

ユーリーさんは、謝罪をしたシルヴィス国王になにか言おうとしたけれど、国王陛下が優しげなまなざしを向けるとぐっと黙り込んでしまった。

「私は少し、レイジと話がしたい。ふたりきりにしてくれぬか」

「！？」

改めて驚愕が走り、全員の顔が「ノー」を示していた。特にひどい反応だったのがポリーナさんたちシークレットサーヴィスで、

「陛下、それはお止めください。ヒト種族がここまで足を踏み入れただけでも異例中の異例ですのに、陛下がふたりきりでヒト種族と話すなどと……」

「私が、どうしてもと言っているのにか？」

「はい、それが我らの使命です。もし陛下がそれでもなおとおっしゃるのであれば、我らの命を絶ってからにしてください。これはシークレットサーヴィスの総意です」

ポリーナさんたちは国王陛下の前で頭を垂れた。さすがにこれには陛下も困ったように頭をかいた――なんだかふつうのおじいちゃんに見えるな。耳が長いのをのぞけば。

「……僕は国王陛下と話をしに来たのではありません。アーシャに

会わせてもらえればそれでいいのです」

口を挟むと、ポリーナさんたちがぎろりとにらみつけてきた。

「一応、私はこの国のトップなのだがなあ」

苦笑交じりに言うこの王様は、なんだか、ここにいる誰よりも――「落ちこぼれ」のマトヴェイさんの姿に重なって見える。

「アーシャに会わせるかどうかは、私が判断しようと思っておったのだよ。だが、ふたりきりはよくないという。であればこうしようか、ユーリーと私、そしてレイジの3人で話そう」

「し、しかし陛下！」

「シークレットサーヴィスは全員で掛かってもユーリーには勝てまい？」

「それは……」

そうなのか。それくらいユーリーさんはすごいのか。

「――陛下、マトヴェイさんも同席いただきたいです」

僕が言うと、国王陛下は興味深そうに僕と、あぐらをかいているマトヴェイさんを見やった。

それは「承諾」を意味していた。

お屋敷の外にはテラス席があって、4脚のイスと、テーブルにはティーセットが置かれてあった。お屋敷の中にポリーナさんたちがこちらを警戒している気配を感じるけれど、小声で話せば聞こえな

いだろう距離だった。
数キロ先にある「世界樹」が、緑の絨毯の上に見える絶景ポイントだったが、僕ら以外にそれを楽しんでいる人はいない。「世界樹」には多くの鳥が集まって生命を育んでいた。

「――ほう、さすがだな、マトヴェイ」

ティーセットでお茶を淹れているのはマトヴェイさんだった。自ら進んでお茶を淹れたのは、自分がそれにふさわしいと――立場からも、お茶を淹れる力量からも、判断したのだと思う。
国王陛下はカップを鼻に持っていって香りを十分に楽しんでから、一口すすって「さすが」という感想を口にした。マトヴェイさんは照れくさそうに座った。

「……お茶を淹れるのだけは得意だったわね、昔から」
「お茶を淹れさせたら全部泥水に変えるお前に比べたら誰だって得意になるだろ」
「なんですって!?」
「これこれ」

ユーリーさんとマトヴェイさんのやりとりに、国王陛下が間に入る。
僕の右側に座っている国王陛下は、カップを下ろすと、

「さて……異例ずくめの君にはいろいろと話をしておきたいこともあるのだが、それにしてもまったく緊張している様子もないのだな？」
「はい。国王陛下が僕を害そうと思っておられないことはわかっていますので」
「だがここには、歴代ハイエルフでも最高魔力と言われているユー

リーもいるのだぞ。先ほどはそなたにもすさまじい魔法を放っただろう」

そうなのか、それほどなのか。

褒められてうれしくないわけがないようで、ユーリーさんは視線を逸らしながらも口元をにんまりさせている。

「はい。でもユーリーさんが僕を傷つけるつもりがないこともわかっていましたから」

「！」

ハッとしてこちらを見るユーリーさんと、相変わらずにこやかなままの国王陛下。「いや、殺す気満々だったぞ、こいつは」ともろに言ってまたユーリーさんににらまれているマトヴェイさん。

「ほう……それはなぜ、そう思ったのだね？」

「あのとき僕が【風魔法】で吹き飛ばされていたら、そのまま大樹の下に真っ逆さまだったはずですけど、そこには魔法によって生み出された気流が渦巻いていました。ユーリーさんは僕を、あたかも真綿でくるむような感じで地面に下ろすことを考えていたのでしょう」

「……」

なにも言わず、だけど驚いた顔でこちらを見ているユーリーさん。

「兄弟の皆さんはいろいろな考えがおありでしょうから、とりあえずはヒト種族に対して『強気な自分』を見せることを優先したのかなと僕は思いました」

つまりこの人は、最初から僕に敵対するつもりが薄かったのだ。

まあ、どこまで本気かはわからなかったから、もちろん僕だって対抗魔法を撃ったけどね。

「ほっほぉ。聞いたか、ユーリー。レイジはかなりの切れ者ぞ」

「……はい。私の魔法を打ち消されたことでもそれは感じております」

「あれはそなたが手加減をしたのではなく、やはりレイジが打ち消したのだな？」

「私は本気ではね飛ばすつもりで撃ちました」

いや、本気で撃たないでよ……と思いつつも、その後ろで受け止める――受け止められるという自信があったからこそなんだろうな。

ユーリーさんひとりの魔力量で、どこぞの国の魔法軍全部に相当しそうなほどだし。

僕だって空を移動するのに【火魔法】と【風魔法】を併用する。空気の力だけじゃ人ひとりを浮き上がらせる浮力が足りないからだ。だけどユーリーさんは【風魔法】だけで解決できる――それだけの魔力があるということ。

「風をほどく、というのは簡単なことではない。よくもそんなことが思いついたものだな。その発想、洞察力がアーシャの病を治療したことに関わっているのかね？」

国王陛下の質問に、僕はようやく納得した。

この人の真意はここにあったのかと。

誰にも治せなかったアーシャをどうやって治したのか。アーシャは説明していないのだろう。説明することで僕になにか悪い影響があったら申し訳ないと――たとえばシークレットサーヴィスの人たちが「王女殿下に触れた罪で殺す」みたいに襲いかかってくるとか。

そして一方の国王陛下は、おそらく僕が治療したことがわかって

いるにしても、どうやってやったのかが見当もつかない。ということは、最悪の可能性としては、僕がアーシャの身体を不調にさせてた原因となんらかの関係がある……。壮大なマッチポンプを仕掛けたのではないかと。

そこまで考えてなお「ふたりきりで」話をしたいと持ちかけたのは僕に油断をさせて、真相を知る糸口にしたかったからかもしれない。

（……なるほど。見た目は優しいおじいちゃんだけど、さすがにいろいろと考えてるよね）

僕に【森羅万象】がなければここまで考えられなかっただろう。だけれど国王陛下の表情に「疑念」「探究」といった表情を【森羅万象】が見つけてくれたおかげでそこまで考えられたんだ。

「もとよりそれは、話しておくべきだと思っていました。それは……これから先、アーシャと同じような子が生まれたときに、安心してその子が暮らせるようにして欲しいからです」

「お前ッ！　国王陛下がアナスタシアを虐げたような言い方を！」

「よい、ユーリー……アーシャにはなに不自由なく暮らさせていたが、確かに、他の者よりは制約が多かったのも事実だ」

国王陛下は素直に聞き入れてくれた。それがただのポーズなのか、本気でそう思っているのかは僕の【森羅万象】でもわからなかった。

「……アーシャの特異体質について説明します」

64（後書き）

ハイエルフの本質について迫ります。
ユーリーは不器用だけど根はいい子。次期女王とか言われて責任感でおしつぶされそう。だけど双子の兄貴は「おちこぼれ」と言われることをいいことにふらふらしていて、イライラしてしまうのです。

65

それから僕は彼女のことについて話をした。
彼女が生まれ持って得た魔力が【火魔法】と親和性が高く、声を発するだけで魔法の詠唱に近い行為になってしまうこと。
それを克服するために【魔力操作】を覚えてもらったこと。
マトヴェイさんにさっき話した内容だ。

「……そうか。あれは病気ではないのか」

国王陛下はそう言って、お茶を一口飲んだ。

「だとしても、アーシャが魔力をコントロールできるようになっても【火魔法】しか使えないの？」

心配そうな顔でユーリーさんが聞いてくる。
国王陛下を崇拝しつつも、一方でアーシャのことも心配な……ハイエルフとは言ってもふつうの女性なのだ。

「訓練次第でしょうが、別に他の魔法も問題なく使えるようになると思いますよ」
「……陛下！」
「うむ。だとしたらすばらしいことだ……ハイエルフにとってはな」
「……」
？
なんだろう、ユーリーさんと国王陛下は、喜びと、悲しみとが半々みたいな顔になっている。
するとマトヴェイさんが言った。

「……肉親としてはビミョーなんだよ。アーシャがふつうのハイエルフになってうれしい一方、ふつうのハイエルフには務めがあるからな」

「務め？　王族としての、なにかがあるんですか」

「そう。死ぬまでここに留まり、毎日『世界樹』に唄を歌って聞かせるっていう務めがな」

なんだそれ。

僕がわからないでいると、

――初めに木の神が　次に草の神が　最後に花の神が
　森を言祝ぎ　風を休め　雨を垂れ　陽を誘う

小さな声でユーリーさんが唄を歌った。僕の知らない言語で――だけれど頭にはイメージが浮かんでくるという不思議な唄だった。

すると周囲の空気がざわりとし、足元の樹木や木々の葉が揺れた。

「……歌うことで魔力を帯びるこれを、『魔唱歌（チャント）』というの。私たちははるかな昔よりこの唄を受け継ぎ、歌い続けることを定めとされた一族。そうして世界樹を守ることが使命なのよ」

「アーシャが歌ったら火が出るからな、だからアイツには禁じられた。逆に言えば、アーシャはこの森から出ることを許されたハイエルフなんだ」

ユーリーさんとマトヴェイさんが言った。

「でも、それならどうして彼女に、足かせのような天賦珠玉を与えたのですか？　彼女が持っていた天賦は、【オーブ擬態★★★】、【生殖途絶★】、【魔力伝播★★☆☆】という、ふつうの親ならば

与えないようなものでした」
「！」
「そうなのか？」

ユーリーさんとマトヴェイさんが驚きに目を瞠る。
すると国王陛下はゆっくりとうなずいた。

「一度森を出てしまえば、アーシャの行動を止めることも、監視することも難しいのはわかっていた。他種族と血が混じることは問題ないが、たとえば森を出ていったエルフ、あるいはハーフエルフとの間に子どもが生まれた場合、ハイエルフが産まれる可能性を排除できなかった。ゆえに、【生殖途絶】を与えねばならなかった」
「なぜですか。アーシャには親になる権利もないと？」
「ハイエルフが産まれてしまったとして、我らがその子を捕捉できなければ、その子は務めを果たさなくなる。それは使命に背くことになろう」
「アーシャはすでに背いているではありませんか」
「火を嫌う森にアーシャはそぐわない。それで納得できぬか？」
「納得できるかどうかで……使命を語れるのですか？」
「……うむ」
「それじゃあ、誰かが使命をコントロールしているみたいじゃないですか！」

国王陛下は目を閉じて黙りこくった――僕はそのとき、ようやく気がついた。

「そうか……そういうことだったんですね」

使命。務め。それは宗教的なにかだと勝手に思っていたのだけれど、違うのだ。

「盟約者として、そうすべきだと、お考えなのですね？」
「……」
国王陛下は無言だったけれど、それは肯定……なのだろう。
僕は【離界盟約】を通じてこちらの世界の盟約者が誰なのかを知っている。今僕の目の前にいる国王陛下が、まさにその人なのだ。
盟約者はハイエルフの王族から決定されるはずだ。
だけど、
「それはおかしい」
僕の言葉に鋭い目つきでユーリーさんがにらんでくる。
「お前に、ヒト種族になにがわかる！！」
「わかりますよ。僕は調停者である竜と話をしたことがありますから」
「なっ……！？」
ここで「裏の世界」の話をするのは混乱させるだけだと思い、こちらの世界の調停者、竜のことだけを僕は口にした。
驚いたのはユーリーさんよりもシルヴィス陛下のほうだった。
「そ、そなたが、竜と……？」
「はい。ちなみにハイエルフの盟約は『天賦珠玉』の盟約ですね？」
その内容はこうだ。
『天賦珠玉を取りすぎてはならない』
『天賦珠玉は世界を構成する』

たった2行の盟約でしかない。

「盟約に含まれているのは天賦珠玉に関する情報だけです。『魔唱(チャント)歌』を捧げよ、なんていう内容はありません」

「なぜそこまで知っている――そうか、竜が教えたのだな？　しかし、なぜそなたに……」

「因縁のある間柄なんです」

アッヘンバッハ公爵領の領都では竜に襲われ、クルヴァーン聖王国や「裏の世界」では調停者に翻弄され、レッドゲート戦役では竜に助けられた。

因縁としか言いようがない。

「……確かに、我らハイエルフの務めは盟約に含まれぬ」

「陛下！　それ以上は――」

「いいのだ、ユーリー。レイジは我らが想像していた以上に、物事を知っている。であれば話したところでなににもならぬだろう……」

国王陛下は僕に顔を向けた。

「……だが、この話をする前に、そなたにはアーシャに会ってもらおう」

「え、いいのですか？」

「うむ。マトヴェイ、案内を」

「お、おう……」

マトヴェイさんが立ち上がったので、僕もそれに続いた。お屋敷のほうに歩き出そうとするマトヴェイさんについていく前に、僕は、

「……アーシャに会ったら、僕の目的は叶いますよ」
「わかっている。だが、そなたはまたここに戻ってくるだろう……いや、戻らぬのならそれでもよい」
「……」

僕は国王陛下に、この、おそらく数百年は生きているであろう人生の大先輩に頭を深々と垂れた。
いよいよ、アーシャに会える。

66

★　アナスタシア　★

ハイエルフのお屋敷に戻ってきたのは数年ぶりだというのに、1日も経てばここでの生活にすぐになじんでしまった。

木材だけで造られたお屋敷は、特殊な魔法素材も組み合わせているので耐久性が非常に高い。ここには他の国でもあまり見られない完璧に透明な窓ガラスが使われていたが、これはハイエルフの持つふんだんな魔力を使って造られた特別製のガラスだ。

シルヴィス王国の民であるエルフたちはハイエルフに仕えることを至上の喜びだと考えているので、凝ったデザインのカーテン、絵画、家具などは数年ごとにエルフたちが新品を納入し、入れ替えられる。

「殿下、それでは失礼いたします」

メイドも当然エルフで、彼女たちはアナスタシアの世話を終えると深々と頭を垂れて部屋を出て行った。

「……こんな生活こそ、ウソみたいに思えたのに」

レイジと過ごした「裏の世界」での刺激的な日々も、レフ魔導帝国での客人扱いの日々も、まるで夢のなかの出来事に感じられるのが不思議だった。

「……長い、ハイエルフとしての人生を思えば、きっと泡沫の出来

事なのかもしれませんね……」

父である国王や、他の兄弟とはすでに再会していたが、彼らの対応は王族らしく抑制されていた。唯一、ユーリーとマトヴェイの双子だけは感情をあらわにして喜んでくれたがその後すぐに悲しげな顔になった。きっと、進んでここに――ハイエルフの務めを果たしに戻ってきた自分に、同情してくれたのだろうとアーシャは思う。

「それでも、自分だけ務めから逃れるわけにはいきません」

家族のみんなが魔唱歌（チャント）を通じて王族としての務めを果たしていたのを、自分はなにもできずに見守っていた。歯がゆかった。みんなと歌いたかった。

だがその思いを叶えるのと、レイジとずっといっしょにいたいという思いを叶えるのとは、両立しない。それもわかりきったことだった。

どちらかを選ぶのなら――もし自分が、このお屋敷に戻ることでレイジの姉を助ける役に立てるのなら、喜んで戻ろうとアーシャは決心した。

生命力を回復させる「秘薬」の話はすでに国王にしてある。国王はいつもどおりの優しげな面持ちだったが――アーシャは、これほどまでに老け込んでいただろうかと思った。なにを考えているのか昔からわかりづらいところがあったが、今回もまさにそれで、アーシャが欲しがった「秘薬」についても「用意しよう」とすぐに請け合った。

あとはそれを送ればよいだろう。

自分の役目は果たせるはずだ。

レイジは、元気になった姉を見て喜んでくれる。そして冒険の旅に出る――。

「……ダメ」

その横に自分がいる姿を想像しては、いけないのだ。想像すればするほど悲しくなるから。せっかく色あせようとしてくれた記憶が、また鮮やかによみがえってしまうから。

レイジとふたりきりで過ごした夜のこと。竜人族の里でお風呂にお湯を張るなんていう仕事をしたのは初めてだった。ダークエルフの集落では巨大なヤギを相手に戦うことになってしまった。

そして――あの夜、レイジが、レフ魔導帝国の自分の部屋にやってきてくれた夜。

「声」を取り戻してくれた夜。

いともたやすくやってのけた、アーシャにとってはとてつもない偉業。

それをけして誇ることも、恩着せがましくすることもなく、ただにっこりと「よかったですね」としか言わない彼。

思い出してしまうと、感情が揺れてしまう。揺れた感情は厄介で、なかなか元に戻ってくれないのだ。

アーシャは両目を閉じて、それらを忘れようとする。落ち着いて、落ち着いて、苦しいのは今だけだから――と自分に言い聞かせて。

「……ん、なんでしょう」

そのときふと、アーシャは感じた。

お屋敷の中はいつも通り静まり返っている。結構な数のエルフたちが働いているはずなのだが彼らは音を消して行動できるようトレーニングされているので気配を感じさせない。

だというのに今、お屋敷内がざわついたように感じたのだ。

部屋を出ると広い廊下には誰もいない。

乗馬服で冒険していたときには思い出しもしなかった、長いドレスの裾をつまんで歩いていくと、木靴がコツ、コツ、と音を立てる。

長い廊下を進んでいくと向こうからあわてた様子のメイドが走ってきて、アーシャに気づくとハッとして顔を伏せた。

「どうしました」

メイドが走ることも珍しければ、アーシャを見てそんな反応をするのも珍しい。

なにか異変があったのか、と思うと動悸が速くなる。

メイドはしばらく口ごもっていたが、それはアーシャが「声を発した」ことに驚いているのかもしれない。これまで実際に声を聞かせたのは国王や兄弟たちと、数少ないメイドたちだけだったから。

「……いえ、なにもございません。ですが殿下はどうぞお部屋にお戻りください」

「なにもないのに、なぜ戻らなければならないのです」

「それは……」

言い淀むメイドからはそれ以上情報を得られなさそうで、アーシャは先を進んだ。「あっ」とメイドは小さく声を上げたが、それだけだ。

アーシャは3度廊下を曲がる。その先は玄関ホールだ。今いるのは2階なので玄関を見下ろすことができる――ここまで来るとはっきりとわかる。ざわついている。確実に。お屋敷が。

なにがあったのか。

アーシャは木靴を鳴らして歩いていく――すると、ポリーナたちシークレットサーヴィスの声が聞こえてきた。

「――アナスタシア殿下に会うことはかないません」

「――いや、陛下が許可を出したんだ」

話しているのはマトヴェイのようだ。アーシャの頭に疑問符が現れる。自分に会うのにマトヴェイならば許可もなにもないだろうし、ポリーナが止める意味もわからなかった。

だけれど次の瞬間、心臓が止まるほどに驚いた。

「――行きましょう、マトヴェイさん。ここで押し問答していても仕方ありませんし、国王陛下をあまりお待たせしたくありません」

その声を、忘れることなど不可能だった。

――怖がらないで、大丈夫。

あの夜、自分の手を取って「声」を取り戻してくれた。

――アーシャ！

親しい人にはそう呼んで欲しいと、今考えてもなんてはしたないお願いをしたのかと思ってしまうそのことに、レイジは戸惑いながらもそう呼んでくれた。

――どんなに長い旅路もすべては一歩ずつで構成されていますからね。確実に歩いていくことしか、僕にはできません。

レイジと比べて、自分はどうしてなにもできないのかと、自分自身に失望しかけていたとき――彼はそう語った。

それがどれだけ、自分の背を押してくれただろう。

ダークエルフの人たちを導く、なんていう、王族ならばやって当然だが王族になりきれなかった自分には負担でしかなかったそのことも、レイジの言葉があったからこそできたのだ。

一歩ずつ、前へ。

そう思えば、ハイエルフの王族の「務め」もまた「一歩」なのではないか。

レイジが言ったように、自分も務めを果たすべく一歩ずつ進んでいくべきだと思えるようになったのだ。

「っ」

気づけば駈け出していた。

玄関ホールの吹き抜けにやってくると、アーシャは手すりをつかんで見下ろした。

足音に気づいたのだろう、多くの人たちが自分を見上げる。

シークレットサーヴィスにメイド、執事、それに兄弟たち。

だけどアーシャの瞳に映っていたのはたったひとりだった。

たったひとりだけでよかったのだ。

「レイジさん……！」

彼さえいればそれでよかった。

でも、その思いを振り切って、自分は自分の「一歩」を進む覚悟を決めた――はずなのに。

実際に彼の顔を見てしまうと覚悟は砂のように崩れてしまう。

「どうして……レイジさん……」

話さなければならない言葉は多いというのに、思いが喉につまって、代わりに涙があふれる。

「アーシャ」

あれだけ多くの人たちに囲まれていたはずなのに、レイジは階段

を駆け上がってもう自分の前にいた。シークレットサーヴィスたちが驚愕の表情を浮かべるほどに。

「あなたが望んでいなかったかもしれないのですが……」

苦笑したレイジの顔は、なにひとつ変わらない。

「来ちゃいました」

アーシャはレイジの胸に飛び込んだ。感情が制御できずに火の玉が出てしまい、きっとエルフたちを怖がらせてしまうのだけれど――もう自分を止められなかった。きっとレイジは困ったような顔で【風魔法】を使って火を消してくれているのだろう。そんな優しさも、こわごわと自分の肩に手を載せてくれるその温かさも――つまるところレイジのすべてが。

（……大好きなんです……心の底から、あなただけが）

自分を、もう騙すことも、思いを隠すこともできない――アーシャはそう感じていた。

66（後書き）

引き下がることをやめたアーシャ（っょぃ）。

67

もしかしたら、来て欲しいとは思われていないかもしれない。その考えは常に頭のどこかにあり続けて――だから、アーシャに抱きつかれたときは正直に言うとホッとしたのだった。

ただ……うん、アレだね。ポリーナさん始めシークレットサーヴィスの皆さんが視線だけで殺しそうな勢いでこっちを見てきたり、メイドや執事の方々が唖然としているのはなかなかに居心地が悪いです。

しばらくして落ち着いたらしいアーシャとともに、部屋に移った。厳重に人払いをし、もちろんポリーナさんたちは「絶対にダメ」と食い下がってきたのだけど、マトヴェイさんが「陛下が許可したことだ」と言い切って押し通した。

広い部屋はアーシャの部屋らしく、素朴で温かみがある内装だった。

「ここは……私が幼いころから過ごしてきた部屋なんです。そのまま残っていたので今回も使わせてもらうことになって……」

アーシャが言葉を句切って僕を見る。

「……レイジさん。どうして、こちらに？　マトヴェイ兄様が力添えを？」

「いや、俺はなにもしてない。レイジはほぼ自分の力だけでここまで来たんだ」

「どうしてもアーシャと話をしたくて」
「私と……話を？」
僕はうなずき、そして話し始めた。
アーシャがどうしてシルヴィス王国に戻ったのか、理由を聞きたかったこと。レフ魔導帝国の皇帝が条件を呑めばアーシャは自由の身になるのだから、自分の好きなように生きてもいいこと。もしもラルクを気にして戻ったのなら、それは止してほしいこと。
ラルクの件は、僕もどうしたらいいかわからない。
【森羅万象】ではラルクの生命力低下について情報があるものの、それをどうしたらいいのか、教えてくれないのだ。
こんなことは初めてだった。
たとえばダンテスさんの石化毒については治療方法が頭に思い浮かんだし、アーシャの特異体質についてもそうだ。
だけどラルクのそれは――あるがままの自然をそのまま映し出すように、【森羅万象】はただ「生命力が低下している」としか言わないのだった。
これは憶測でしかないのだけれど、病気や毒と違って明確な異物がないから、【森羅万象】は僕の望む答えを出さないんじゃないだろうか。
「エルフの秘薬が、どんなものか僕は知りません。でもそれでラルクを治せる保証はありませんし、今はアーシャの思いを優先して欲しいんです」
「……」
僕の話をうつむいて聞いていたアーシャは、笑みを――なんとも穏やかで、見る人を安心させるような笑みを浮かべた。
「レイジさん、ひとつ勘違いをなさっていますわ」

「え……？」
「私、魔唱歌（チャント）を歌えることがとても誇らしいのです。そうしてマトヴェイ兄様たちと同じようにこの森のために自分がなにかできる……そうしてくれたレイジさんに感謝もしていますし、なにかお礼ができるのならとも思います。秘薬はそのうちのひとつです。もちろん、ラルク様が治らなければ意味がないものになってしまいますけれど」
「意味がないなんて、そんな……でも、そうだったんですね」
アーシャは、いやいやここに戻ってきたのではないのか。それがわかっただけでもよかった。
ハイエルフの王族なのだ――そう簡単に「自由に生きます」と言えないだろうことくらいはわかっていたけれど、それでもアーシャは、自分の責務に対して真正面から取り組もうとしている。
それなら、僕も彼女の背中を押してあげるべきだろう。
「わかりまし――」
「ちょっと待て、アーシャ」
すると、それまで黙っていたマトヴェイさんが口を開いた。
「確かにお前は落ちこぼれの俺なんかよりよっぽど魔力量もあるし、魔唱歌（チャント）をやってくれるなら陛下も、ユーリーたち兄弟も喜ぶだろう。だけど、別に魔唱歌は毎日毎日歌ってるわけじゃないし、お前がいない間だってどうにかなっていた」
「そう……なんですか？」
マトヴェイさんは腕組みし、うなずいた。
「季節ごとに重要な節目があり、そのときには魔唱歌が必要になる。

だが、それだけさ。魔唱歌が必要ないときにお前がここから出ていって悪いなんてことはないだろう」
「マトヴェイ兄様、それは……」
「ああ、そうだ。陛下に交渉して、お前だけでも外に出る許可をもらったらいい。この森にもそろそろ変化が必要だ」
「……」
今度はアーシャが難しい顔をして黙り込んだ。
「どうした、アーシャ。お前だって本音を言えば外に出たいのだろう？　目を見ればわかる。どうして素直になれない。ここに、お前のためにわざわざやってきてくれたレイジがいるんだぞ」
「……ですが、それは……そんな、ワガママを……」
「なにがワガママだ！」
拳を、マトヴェイさんがテーブルに叩きつける。
「お前を、魔導飛行船の代金として他国に売った、この国のほうがよほどワガママじゃないか……！　お前は正当な権利を主張しているだけだ」
「……魔唱歌はハイエルフしか歌えません」
「だからなんだ」
「少しでもハイエルフの血を残し、この森を守ろうとする陛下のお気持ちを、私は理解できます」
「この森が滅ぶなら滅べばいい」
「兄様！　言葉が過ぎます」
「過ぎるものか！　俺はお前たちに比べれば圧倒的に魔力量が少ない落ちこぼれだが、おかげでいろいろなものがよく見えている。エルフの暮らしも、この森の外の暮らしもだ。『三天森林（サードフォレスト）』の外を見て見ろ。キースグラン連邦は『六天鉱山（シックスマイン）』を失い、天賦珠玉を死ぬ

ほど欲しがっている。だが陛下はここからの持ち出しを制限しているだろう？　鉱山が動かなければ、やがて連邦はこの森に圧力を掛けるぞ。そうなったら魔唱歌もなにもあったものじゃない」
「でも兄様は――」
「ちょ、ちょっと待ってください」
僕は間に入った。
「アーシャの希望を聞くだけのことが……なんだか話が変わりすぎではありませんか？」
「むう……」
「そ、そうですね。ごめんなさい」
「この世界のバランスを取るためにも盟約を守ることは重要だと僕は思っています」
「お前も陛下と同じ考えか」
マトヴェイさんが僕を見る目に敵意がふくらむ。
「落ち着いてください――ハイエルフの盟約を守るのと、産出された天賦珠玉を出し渋るのは話が違うということです」
「……む？」
「産出された天賦珠玉はどうしているんですか？　全部壊すわけではないですよね？　もし、外部の圧力が掛かるのならそれを流通させれば終わりです。この森はそのままですよ」
「それは……いや、そうはいかない」
「どうしてですか」
「……いや、実は」
「兄様」
言いかけたマトヴェイさんをアーシャが止める。

なんだ？　なにか秘密でもあるのか？

「……レイジさん。これ以上はいけません。これ以上は、あくまでもハイエルフの問題で――」

「盟約を守るのに魔唱歌は必要ありません」

僕はそこで、国王陛下の話を聞いて感じていた疑問をぶつけた。

「天賦珠玉を取りすぎるな、天賦珠玉は世界を構成する……これだけですから。魔唱歌とはいったいなんなのですか？　天賦珠玉の産出量を調整するなんてできないでしょう？　森を守る結界のようなものですか？　いや、それなら密猟者がうろつくわけもないし」

「……」

「……」

するとアーシャも、マトヴェイさんも黙りこくってしまった。

どうやら魔唱歌にハイエルフの秘密があるみたいだ。

――そなたはまたここに戻ってくるだろう……いや、戻らぬのならそれでもよい。

国王陛下はさっき、そう言った。

つまりは「これ以上秘密に首を突っ込むのか」、「回れ右して聞かなかったことにして帰るのか」、そのどちらかを選べということだ。

「……ハイエルフは魔唱歌によって縛り付けられてきた種族でもある、ということなんですね」

アーシャの運命もまた魔唱歌の「務め」によって縛られているの

なら。

「もう一度陛下に、話を聞きます」

その「務め」がなんなのかを明らかにし、彼らの運命を縛る鎖をほどかないと――アーシャがほんとうに、自分の気持ちに正直になることはできない。

【森羅万象】なら魔唱歌の秘密を解き明かすことができるはずだ。

67（後書き）

神王さんにレビューをいただきました。ありがとうございます！
レビューはページ上部「レビュー」から見ることができるので、そちらもお楽しみくださいませ。

68

シルヴィス陛下のところへと向かうと、先ほどと同じようにユーリーさんと陛下のふたりが座っていた。

「……早かったの」

陛下はそれまで身につけていなかった膝掛けを使っているので、メイドの人がお世話をしていたようだ。

一国の王に、ここまで時間を取らせてしまって申し訳ないという気持ちもあるけれど、必要なことだから仕方がない。

ここから先の話は僕と陛下の話になるからと、アーシャたちには部屋に残ってもらった。

「陛下、魔唱歌について教えてください」

「……アーシャの特異体質を看破したそなたなら、そう言うと思った」

「やはりなにか秘密が」

すると陛下は首を横に振った。

「ユーリー。レイジを、世界樹へと案内しなさい」

「……いいのですか。これは我ら一族以外には知らない秘密の中の秘密……」

「よい」

「……」

するとユーリーさんは厳しい顔で立ち上がった。

「……陛下のご命令とあれば」
「すまぬな。余が行きたかったが、もう足も悪い」
ユーリーさんが歩き出す後ろへとついていく前に、僕は一度陛下に頭を垂れた。
「レイジ」
すると陛下は優しい声で――今日聞いた中では最も優しい声で言ったのだった。
「君がアーシャに出会ったことは運命だったのだ。大いなる運命が君をハイエルフに導いた」
その言葉の裏に、どんな意味が隠されているのか僕にはわからない。
「……これで、余の罪や咎が薄れるとは思わぬが……」
「陛下？」
そこへ、
「レイジとやら、なにをしている」
「あっ……。では、行って参ります、陛下」
僕はきびすを返すとだいぶ遠くにまで進んでいたユーリーさんを追いかけた。

ユーリーさんの移動方法はシンプルだった。木から木へと飛び移り、【風魔法】で加速するというそれだけだった。

今までの僕なら【火魔法】を併用してついていくところだけれど、ここで火を使うと怒られそうなので【風魔法】と【跳躍術】、その他筋力強化系の天賦で補って追いかけていく。

（……なんだか変だな）

魔法を使ってみてわかったのだけれど、【風魔法】を使っても自分の体内から魔力が減っていく気配がないのだ。こんこんと湧き続ける温泉みたいなものだ。

「……ふん、人間にしてはだいぶ魔法を使えるようね」

エルフたちが住む区画を抜けて、周囲は大森林だ。木々を縫うように跳んでいくユーリーさんが僕を振り返り、言う。

「あの、ユーリーさん……もしかして【魔力量増大】の天賦を持っていますか？」

「……なぜお前にそれを話さなければならないの？」

質問に質問で返されてしまった。

「いや、まあ、なんとなく」

「無駄口を叩かずについてくることよ」

先に話題を振ったのはそっちなのになあ……。

ま、それはともかく。

今の反応だと持っていてもおかしくない。それも星3つ以上のめ

ちゃくちゃレアなものだ。
僕がエルフの森に反応して大気中の魔力を取り入れられる――なんてことはあり得ないし、【森羅万象】も否定しているので、考えられる可能性は新たな天賦の取得だった。
で、魔力を大量に持っているハイエルフたちの中で、魔法を使ったのはユーリーさんとマトヴェイさんのふたりだけ。となればどちらかからなにか天賦を学び、その内容こそが【魔力量増大】なんじゃないかと思ったのだ。
ただ僕は過去に、天銀級冒険者クリスタ＝ラ＝クリスタが持っていたらしい【魔力量増大★★】を学習しているので、少なくとも星3つ以上の天賦を学習したということになる。
とりあえず棚からぼた餅で魔力が増えたのはラッキーだった。
ユーリーさんほどではないけれど、アーシャの魔力量には近づけたと思う。

（……さっきの陛下の言葉、気になるな）

ユーリーさんが無言になったので、僕は移動中に陛下の言葉について考えていた。

（罪と咎。なんだろう……どこかで聞いたことがあるような……）

【森羅万象】のおかげで僕はあらゆることを記憶できているけれど、あたりをつけて思い出すことはできるものの、関連のあるものをうまく紐付けて考えることは僕が考えなければいけない。
記憶が膨大すぎて、なんだか埋もれてしまっているように感じられるのだった。
うーんうーんと唸っていると、「うるさい」とユーリーさんが言う。それくらいいいじゃないか。

「もう着く」
「あ、はい」

木々がまばらになってくると、正面に現れたのは――巨大な樹木の「壁」だった。

左右に広がったそれが「幹」なのだと、生きている樹木の一部なのだと、わかってはいるもののどう見ても「壁」にしか見えず、なんだか脳がバグったような感じになる。

「すごい……」

周囲は広々として、足元は苔むしている。

その樹木――世界樹を見上げると、根元から上のほうへ、苔が続いている。上部では確かに枝を広げて多くの鳥が集まっていた。

一本の木ではなく、複数の木が寄り添うように育っているのだと【森羅万象】が教えてくれた。

「……生命樹？」

葉の形に見覚えがある。モミジのように葉は5又に分かれていて、その先でさらに5つに分かれる。僕が「ダブルモミジ」と勝手に名付け、アッヘンバッハ公爵領の領都ユーヴェルマインズでその名を「生命樹の葉」だと教わったアレだ。

葉っぱだけで長期間保存しておいてもみずみずしさが失われず、ダンテスさんの石化毒を治すのに使った。

「ヒト種族はそう呼ぶらしいわね。この葉は我らにとってとても貴重な葉だけれど、ヒト種族には扱えないでしょうね」
「確かに、ハイエルフにしか調合できない薬草だと聞きました」

僕は扱えたけど、ユーリーさんの前でそれを口にするほどバカではないです。はい。

「こっちよ」

ユーリーさんが先に立ち、世界樹へと近づいていく。足元はふかふかで、ほとんど誰もここを訪れていないだろうことがわかる。空から鳥の鳴き声が降り注ぎ、木漏れ日が苔の上にまだら模様を作っていた。

よく見なければわからないけれど、寄り添うように立つ木と木の間に隙間があって、中に入れるらしい。太った大人は入れなさそうなその隙間に身体を滑り込ませると――中はほんのりと明るかった。

そこにあったのは空洞だった。小屋がひとつすっぽり入るほどのサイズで、中央には上と下からツタのように枝が伸びてきてひとつのコブを形作っている。

その中央に、赤黒い光があった。

「これは……」

どくん……どくん……と、ゆっくりながら、でも確実に刻まれる鼓動。

「……私たちが魔唱歌を歌う理由がこれよ。この世界樹の下に眠る、生命竜クルトゥスヴィータに魔力を与え、その命をつないでいるの」

68（後書き）

いよいよエルフの森の話が核心に迫ってきました。

もしこの小説を読んで「面白い」「続きが読みたい」と思われましたら、ぜひブックマークや評価にて協力をお願いいたします。

評価はこのページの下にある★からつけられます！

69

エルフの始祖たちは流浪の民だった。世界は荒廃し、一族が存亡の危機にあった。

それを救ったのが生命竜クルトゥスヴィータだった。

その竜はエルフたちに森を与えた。森は住処を、食料を、エルフたちにもたらし、外敵が入り込もうとすると惑わせ、追い返した。

クルトゥスヴィータはその森を維持し続けたが、エルフたちがその数を増やし、繁栄するのとは裏腹に衰弱していった。衰弱すれば森が外敵をはねのける力は弱まったが、そのときにはエルフたちが自力で戦えるようになっていた。

今度は自分たちがクルトゥスヴィータを助ける番ではないか――そう考えた、エルフたちの王であるハイエルフは魔唱歌を歌うことでクルトゥスヴィータに魔力を与えた。

クルトゥスヴィータは長い眠りについたが、そこには木が生え、今やこれほどの大樹にまで成長している――。

そう、ユーリーさんは語った。

「もはやクルトゥスヴィータがどのような形であったのかも知らないけれど、ここにクルトゥスヴィータにつながる木があり、大地に今も眠っている竜に魔力を提供できるのなら、一族を救った英雄のために魔唱歌を捧げ続けることは私たちの務め。そうでしょう？」

それがハイエルフの……王族の務めか。

だけど。

（……やっぱり）

僕は鼓動を続ける赤黒い光を見つめ続け、【森羅万象】で確認をした。

（これはクルトゥスヴィータの一部なんかじゃない）

見た目は角張っているし、異様な光と鼓動があるけれども、これは間違いない。

天賦珠玉だ。

それも、何者かが改造した天賦珠玉だった。

「……ユーリーさん、これは」

「これがクルトゥスヴィータの身体の一部……私たち祖先を守ってくれた存在だと思うと、なんだか温かな気持ちになる。私たちハイエルフはクルトゥスヴィータの思いに応えなければならないと、身が引き締まるの」

「……」

言えなかった。

僕が見た、真実を。

僕らはそれからしばらくじっとしていたけれど、温かなまなざしを向けているユーリーさんとは裏腹に、僕は居心地が悪くて仕方なかった。

なぜあんなところに天賦珠玉があるのか。

天賦珠玉の改造などできるのか。

元はなんの天賦珠玉だったのか――それすらも【森羅万象】では解析できなかった。

頭の整理ができず、僕はハイエルフのお屋敷に戻ってもほぼ無言

だった。シルヴィス陛下はすでに執務に戻っているということで、今日は泊まっていってよいと許可が出ていたので僕は一晩厄介になることにした。

夕食はアーシャとマトヴェイさん、それにユーリーさんもなぜかいっしょにとることになったけれど他の兄弟たちはいなかった。やっぱり兄弟仲はいいとは言えないらしい。

マトヴェイさんとユーリーさんがすぐにバチバチやりあうのでこのふたりも別に仲がいいわけではないようだけれど。

「ふぅ……」

「お疲れですね」

夕食後、僕に与えられた客室には僕とアーシャのふたりがいた。苦笑しながらもアーシャが淹れてくれたお茶をいただくと、薬草の香りがツンとする、身体によいものだった。

「あんなにユーリー姉様が話をしているの、初めて見ました」

「……え？」

「マトヴェイ兄様と双子の姉弟なのに、ふたりはどこかよそよそしかったんです。ですが私がここにいなかった何年かの間になにかがあったのか……あるいはレイジさんが来たから、ふたりも変わったのかも」

「僕が？　そんなことはないでしょう」

「いえ。そんなことがあるんです。レイジさんの熱意に動かされてしまうんです……私も、そうですから」

うつむき加減に、こちらを上目遣いでそう言うアーシャは反則レベルで可愛い。

「そう言ってもらえるのはうれしい、というか面映ゆいというか…

…僕はただ、精一杯生きてるだけなんですけど」

日本にいたとき、誰かにそんなことを言ってもらったりしたことなんてなかったな。【森羅万象】があるおかげで、努力したことが自分の身につくのがうれしくて、それで僕は努力を惜しまなくなった。もともと勉強するのも好きだったけど。

「……レイジさん、陛下とはどんなお話を？　あの、話しにくいことでしたらおっしゃらないでいいのですが……」

「……」

アーシャに話すべきか、迷った。国王陛下やユーリーさんは世界樹のことを――生命竜クルトゥスヴィータを「秘密の中の秘密」として扱っていたし、アーシャがどこまで知っているかわからない。

これはとても、繊細な内容なのだ。

多くのエルフに深い影響を与えるような……。

「――レイジ様、いらっしゃいますか」

僕が迷っていると扉がノックされ、メイドさんが入ってきた。アーシャがいたので少し驚いたようだったけれどすぐに平静を保って、

「国王陛下がお呼びですので、お越しください」

「……わかりました」

僕は立ち上がった。

「アーシャ、この話はきっとします。でも今は」

「……はい、いってらっしゃいませ。私、待っていますから」

聞き分けのよい子のように素直に言うアーシャを見て、僕は思う。

「僕、あなたを待たせてばかりですか？」

「はい。でも、待つのは苦じゃありません。声を出せるようになるまでの年月を考えたら……全然」

国王陛下の私室、とは言ってもアーシャの部屋とさほど変わらなかった。エルフたちは森とともに生きているので、過度の装飾を望まないのだろう。

「さて……なにを見たのか、聞かせてもらえるかね」

ここにいるのは僕と陛下のふたりだけだった。シークレットサーヴィスの人たちが1ダースほど廊下に並んでいるけれど、声を潜めれば聞こえない。

「……改造された天賦珠玉を」

それだけ言えば通じたのだろう――陛下は「そうか」と言ってうなずいた。

「陛下、僕がそれを見破るとわかっていて送り出しましたね？」

「ああ」

「なぜですか……ユーリーさんはそれを知らないようでした」

「歴代の国王のみに受け継がれているのだよ。あれはひとつの天賦珠玉ではなく、複数の天賦珠玉を組み合わせているのだ……国王が代々その研究を進めている。他に手段がなかったのだ。地中のクルトゥスヴィータを生かし続けるために、魔力を生命力に転換するよ

うなものはな」
「……僕は詳しくありませんが、天賦珠玉の改造は、禁忌なのではありませんか？」
国王陛下が言っていた「罪と咎」という言葉は、天賦珠玉の改造がけして褒められた行為ではないことを示しているように感じられた。
「そのとおり。世界を構成する天賦珠玉に手を入れるなどもってのほかよ。ゆえに、余だけが関わるようにしているのだ……無論ひとりだけで研究などできるものではないが、世界は広い。禁忌と知りながら、あるいはそうと知らずに天賦珠玉の改造実験を行う者もある」
ぱさり、とテーブルに置かれたのは論文のようだった――僕はそれを見て、息が止まるかと思った。
執筆者の名前に、「ヒンガ」という名前があったのだ。

69（後書き）

書籍版プロローグ、コミカライズ第1話のヒンガ老人のセリフ伏線をようやく回収できそうです。

70

「これは……ヒンガ老人の……」

僕のつぶやきを聞いた陛下は、

「ほう、ヒンガ博士を知っているのか」

「……盟約や天賦珠玉研究の第一人者であったと聞いています」

それはクルヴァーン聖王国で、ウサギの特級祭司、エルさんから聞いたことだ。

「うむ。ヒト種族の短い人生でありながら、かなり深い研究をしている。惜しむらくは、十年か、あるいは二十年か……そのころよりパタリと研究をやめてしまったことだろう」

「ヒンガ博士はフォルシャ王国の貴族、あるいは高位の方でいらっしゃったようです。かの国の滅亡によって、研究は失われたのではないかと」

「……そうか、フォルシャ王国は、それで……」

「？　なにか思い当たることがあるのですか」

「フォルシャ王国は、表向き、このキースグラン連邦内の勢力争いで負けて滅んだと言われているが実際は違う。局地的な流行病に襲われ、人口の大部分が死んだのだ。そして、病が終息したころには国を支えられるだけの人口が残っておらず、ゲッフェルト王が併呑したと聞いた」

「そんな――局地的な流行病などあり得るのですか？」

電車や飛行機で隣の国に行けるような世界ではないのはわかって

いるけれど、それでも馬車を使っての輸送は頻繁に行われ、人の移動も十分にあるはずだ。

だというのに、たったひとつの国だけを滅ぼすような病気が……？

「あり得ない、であろうな――ふつうならば」

「ふつう、とはどういう意味でしょうか」

「その病気はフォルシャ王国だけを狙ったものなのだ……この罪によって」

とん、と国王陛下の痩せ細った指先がヒンガ老人の論文を指差した。

表書きには素っ気なく「天賦珠玉内部構成に関する考察」というタイトルがあるだけなのだけれど、どんな中身なのか。

「……中を見ても？」

「構わぬよ。だが、くれぐれも口外しないように」

僕は、かなりの年月が経ったせいか、色あせた紙の束を手に取った。中を見る――と。

「これは……」

すぐに内容がわかった。

「天賦珠玉の改造、破壊に関する考察……」

「そのとおり。星の数を変化させたり、あるいは、本来破壊できない天賦珠玉を壊すことを調べ上げた論文だ」

破壊できない？　天賦珠玉って破壊できないのか？　壊そうと思ったことはなかったけれど。

見た目は鉱石のように固く、でも体内に取り込める不思議な物体だ。

【森羅万象】であっても天賦珠玉は「天賦珠玉」としか判別できない。

「――いや、でも、確か竜が天賦珠玉を壊していましたよ」

僕はアッヘンバッハ公爵領の領都、ユーヴェルマインズで竜と戦ったときのことを思い出す。

竜は口からブレスを吐いて天賦珠玉を壊したはずだ。

「レイジくん、竜は調停者だよ」

「あ……」

「当然、天賦珠玉に干渉できる。だが我らには無理だ――いや、完全に無理ではない。それを研究したのがヒンガ博士だ」

僕はざっと最後まで目を通す。内容の細かいところは丸暗記してあとで精査しよう。

「『天賦珠玉は八道魔法のすべてを同量混ぜ合わせることで破壊や改変ができる』……？　この技術を使って、生命竜クルトゥスヴィータにつながる心臓のようなものを作ったのですか」

「そのとおり。不完全なものではあったが……。とはいえ、この技術を完成させたのは余よりもずっと前の国王だ。ヒンガ博士は我らの技術を再発見したに過ぎぬ」

「そう……か」

生命竜クルトゥスヴィータははるか昔に眠りについたわけなので、ハイエルフの国王が技術を発見したのは何百年、何千年もの昔ということになる。

「再発見、とは言え、いくつか余も知らぬことがあったし……ヒト種族もこのような研究をするのだなと感心したが、そうか、やはり禁忌に触れた罰を受けたか」
「……フォルシャ王国を襲った流行病が『禁忌に触れた罰』だとおっしゃるのですか」
「でなければそなたの話したような不自然な病が流行るわけもあるまい」
「……」
僕は、覚えている。ヒンガ老人が最期に――見たいと言っていた太陽をその目で見つつ言った言葉を。
――この身は、罰を受けるためにあり。死ぬことでは償えぬ罪を犯したゆえ。されど、今際にて日の光を浴びるほどの僥倖に浴した。天地を統べる万能の神よ、願わくばこの忌み子に祝福を授けよ……。
ヒンガ老人は、自分のせいでフォルシャ王国が滅んだことを知っていた？
だからその罪滅ぼしのために「六天鉱山（シックスマイン）」にいたのだろうか？
――レイジ、お前の人生に幸多からんことを願う。
僕の、僕なんかの幸せを願って死んだあの人が、多くの人々を殺した病気を呼び込んだ張本人だと――大罪人だと？
「……ふざけてる」
世界をふたつに分け、天賦珠玉なんてものを作り出したのが「天地を統べる万能の神」ならば、なぜ人の営みにまで文句を付けるの

か。
目の前に不思議があれば解き明かしたくなるのは当たり前じゃないか。
学者たちが天賦珠玉を研究するのは当然じゃないか。
なのに――罰を、病気を与えることで、その行動を止めようとする？

「ふっ、若いな、レイジ。だが、若さもよいものだ」

陛下は小さく笑って言う。

「雨が降れば大地を潤し、風が吹けば緑が揺れる。それに文句を言う者などあろうか」
「……僕の憤りは、まさに天に唾するようなものだとおっしゃりたいのですか」
「天賦珠玉改変の研究を最初に始めた国王は、指先から徐々に腐り落ちる奇病に罹り死んだようだ。次の代の国王は、咳が止まらなくなり血を吐き続けて死んだ。その次は身体中の毛という毛が抜けた……。余の代にまでなると、最初ほどの重さはないが、それでも平均的なハイエルフの寿命よりもずっと短く、こうして死を迎えることになる。エルフや、事情を知らぬハイエルフから見れば、国王という仕事は呪われておるのだよ」
「それでも……研究を続けてきたんですね」
「クルトゥスヴィータがいなければエルフ全員が野垂れ死んでおったろう。その大恩に報いるのならば国王の命くらいたいしたものではあるまい。指先が腐り落ち、肘までなくなっても研究を続け、論文に血をぶちまけながら死に、毛がなくなって冬に凍えながらも研究を続けた先代たちの意志を継ぐことができる……余は幸せだ。次代に研究を譲り、死ぬことができる」
「……」

「ユーリーは立派な志を持っている。きっと、女王として皆を率いながら、この『責任ある仕事』も全うしてくれるに違いない。いや……ユーリーに限らず、兄弟たちは皆、立派だ。国王の仕事が呪われているとわかりながらも、それを継ぎたいと願っているのだから。もちろん、マトヴェイもだ」

「……アーシャは、どうですか。アーシャは立派ではないから国の外に出したのですか？」

陛下は首を横に振った。

「そんなことはない」

「アーシャに埋め込まれた天賦珠玉は、見たことのない星を持っていました。それは陛下が作り出したものなのではありませんか？」

それは【魔力伝播★★☆☆】という天賦珠玉だった。星は浮かんでいるものの、暗く弱い光を放っていた。

「そう。アーシャはしゃべれないながらも筆談で意思の疎通はできたし、あの子が立派な志を持っていることはわかっていた。だから、余の作り出した天賦珠玉を与えた……あれは魔力を自然と吐き出させる天賦珠玉でな、過って【火魔法】を発動しても大火事にならぬようにしたのだ」

「アーシャにも、神が罰を与えるかもしれなかったんですよ」

「あの子はハイエルフのために役に立ちたいと願っていた。国王の仕事が罰を受け入れることならば、あの子もまた国王の仕事に携わったことになる」

歪んでいる、と思った。この人の愛情は歪みきっている。

でもそれこそがエルフたちの精神の根幹にあって、この森全体を支えているのだ。

天賦珠玉を改変し、なおかつ自らの身に災厄が降りかかるとわかっていても――自己犠牲の精神を発揮することでみんなの気持ちをひとつにしている。

「……僕には、理解できません」

正直に、言った。

「それでよいのだ、人の子よ。だからこそそなたにアーシャを託すことができる」

「え……？」

僕の目の前で、陛下は、

「今は、今こそは、『禁忌に触れた王』ではなくただの父親として……君に頼みたい」

頭を深々と下げたのだった。

「アーシャを……幸せにしてやってくれ。あの子は国王でもないのに生まれたときから災厄をその身に受けて来た。だからもう十分だろう。今後はこの森から旅立ち、大空の下を羽ばたかせてやりたいのだ」

「あ、頭を上げてください」

「頼まれてくれるか？」

頭を下げたまま、ちらりと視線をこちらに向ける国王陛下。

「わかりました――彼女が望むのなら」

「望まぬとも連れ出して欲しいのだ。あの子は責任を感じて残ると

言い出しかねない」
「それは……そうですけど、でも無理やりは」
「アーシャは可愛くないとでも言うのか」
「いえ、可愛いですけども」
「そして君を好いておる。さらわぬ理由などなかろう」
「いやいや、そんな理由――え？　アーシャが、僕を……？」

がばりと身体を起こした陛下は、呆れたように首を横に振った。

「なんじゃお前は、鈍感だのう。あんなにわかりやすい女は他におらんだろうて」
「え、え？　いや、でもアーシャは同じ冒険者として僕といっしょにいたいと……」
「『いっしょにいたい』とまで言われたのか？　それなのにお前は『冒険者として』とかわけのわからぬふうに受け止めたのか？」
「あ、え、う……」
「はっきりしろ。ウチの娘は世界一可愛いだろうが」
「あ、その、はい、可愛いと思いますが」
「ならば、連れて行け！」
「いや、その理屈は……」

立ち上がった陛下が僕の胸ぐらをつかんでぐわんぐわん揺すってくる。

「ちょっ、陛下！？」
「さらってよいと父親が言っているのだ。いいな！　明日だ！　明日もう出て行け！」
「ええ～！？」

バンッ、と扉が開き、シークレットサーヴィスが飛び込んで来た。

「陛下、なにがありましたか！？」
「この男がやはり乱暴狼藉を……あれ？」
僕が暴れるどころか、むしろ陛下が暴れている姿を見て、シークレットサーヴィスたちは固まった。
そりゃ、そういう反応になるよ……。

70（後書き）

Ｋｅｎｔａさんよりレビューをいただきました！　ありがとうございます。
最近レビューが増えたのは書籍やコミカライズが始まったからでしょうか。

それはともかく、本編の展開については自分では「もうちょっと早くしなきゃ……！」と思っていたくらいなので、「もっとゆっくりでもええんやで」という意見は新鮮でした。
確かにいろいろ置き去りになっている人たちがその後どうなっているのかとか、フォローがあってもいいかもなあ……いいのかなあ……。
引き続きオバスキをよろしくお願いします。

レイジが既視感を覚えていた陛下の台詞「罪と咎」というのは、ヒンガ老人のそれでした。おじいちゃんたちは同じ言葉を使うんですね（違う）。

71（前書き）

すみません、ちょい短いです。

71

翌日、陛下は熱を出した。興奮しすぎたらしい。
でもベッドで「くれぐれもレイジの責任ではないから怒るな」とシークレットサーヴィスやその他ハイエルフの皆様に伝えたらしく、僕はいろいろな人たちからにらまれるくらいで済んだ。
そんな陛下からの伝言は、「昨日は久々に楽しかった。約束を忘れるな」だった。
約束、してないんだけど……。

「レイジさん、おはようございます」

与えられた客室で僕が朝食をいただいていると、アーシャがやってきた。
花咲くような笑顔はとても可愛らしく、陛下が世界一と言いたくなるのもうなずけるほどで……この子が僕を好きだなんてこと、あるのかなあ、とぼんやり思う。

「？　どうかされましたか？」
「あ、ええと、いや……今日はパンツスタイルなんですね」

昨日のドレスではなく、レフ魔導帝国で見た乗馬服に近い、すらりとしたズボンを穿いていた。

「はい。なんでも陛下の命令でこれを着なさいと……どういうことなのでしょうか」
「……」

長旅でも動きやすいようにということですね？

「それに旅行鞄ひとつに荷物を詰めるよう命令もありまして……」

「……」

ほんとに今日出発なんですね？

「……アーシャ」

僕は食べかけの食事をそのままに、彼女のところへと歩いていく。

そして両手で彼女の両腕をつかんだ。

「よく聞いて」

「は、はい」

「今から、この国を出ます」

「はい――はい？」

「なので、どうしてもやり残したことだけ済ませてください。時間は３０分です。シークレットサーヴィスに気づかれると面倒なので、気をつけてください。僕はユーリーさんにだけ話してきます」

「え、えええええ――」

大声とともに火の玉がボボボッと浮かんだ彼女の口をとっさに押さえた。

陛下……約束（してないけど）は果たします。でも、僕はお尋ね者になるんじゃないですかね……。

僕がユーリーさんの居場所を聞くと、彼女は昨日と同じテラスにいた。分厚く、図鑑のように大きな書物をテーブルに広げてそれを読んでいる姿は一幅の絵にようにも見えた。

「ユーリーさん。読書の途中にすみません」
「……読書、と言えるのかどうかはわからないけど。何度も読み直しているだけだから」
「何度も？」
「これはシルヴィス王国の歴史書」
見たことのない文字で書かれている。彼女が話している言葉も、他の国でも、基本的には同じ大陸共通語なのだが各種族には共通語が導入される前の独自の言語がある。
アーシャが歌った魔唱歌も古いエルフの言葉だったし。
「陛下が、よく読んでおくようにと……歴史は繰り返すものだからと仰っていたわ」
「……」
なにも言えなかった。
歴史は繰り返す――国王に降りかかる災難のことを言っているのだろう。
「昨晩、陛下と話をしたのね？　私は、自分が王になっても自分の運命を受け入れる準備ができているわ」
「……はい。わかっています」
「そう……それならもう行きなさい。アーシャを連れていくんでしょ」
ユーリーさんにはすべてお見通しだったのか、あるいは陛下からあらかじめ聞いていたのか。
どちらにしてもユーリーさんが次期国王になるのなら、この国は問題ないだろうと思われた。
一見すると厳しい人ながら、優しさがちゃんとある。そして僕み

たいな他種族にも寛容だ。他の兄弟の人はヒト種族というだけで敵視している人もいたからね。

「それにしてもあなた、流されすぎじゃない？　大丈夫？　どうせ陛下に無理に言われたんでしょ」

「あ、あはは……」

そこまでわかってたんかい。それじゃあ止めてよ――と一瞬思ったけど、でも、陛下があそこまで強引だったからこそ僕の腹も決まったのだ。

確かに流されすぎかもしれない。でも、今回は、それでよしとする。

ほんとうに、どうしても、心の底からイヤだったら――アーシャはきっと正直に言ってくれるだろうから。

「あの、ひとつだけ、僕からユーリーさんにいいでしょうか」

「……なに？」

「シルヴィス国王陛下がこの先、あまり長くないことはご存じなのでしょう？」

「……」

今度はユーリーさんがなにも言えなくなる番だった。でもそれは「肯定」だ。

「あなたが即位されたときに、僕はこの国に来ます。必ず来ます。ですからそのときには、僕と会う時間を少しだけ作っていただけませんか」

「……わかったわ」

ユーリーさんは案外、すんなりと、うなずいた。

よかった。それなら僕はそのときにこそ、この胸に抱えている真実を話すことができる。陛下には話せなかったことだけれど、ユーリーさんになら話せる――まだ間に合う。

「代わりに私からもいいかしら？　あなたに頼み事をしたいの」
「なんでしょう。僕にできることなら」
「……アーシャを、それにマトヴェイをお願い」
「？」

僕は首をかしげた。アーシャはともかく、マトヴェイさんも？

「わからない、という顔をしているわね。……別にいいの、ただ気にかけてさえくれれば」
「でもマトヴェイさんはこの国に残るのですよね？」
「もちろんよ。あのバカを森の外に出したら問題しか起こさないでしょ。ただ気にかけてくれればいい、というのは文字通りそのままの意味よ」
「わかりました……？」

よくわからないけど、うなずいた。
僕はユーリーさんに別れを告げるとその場をあとにする。お屋敷に入る前に振り返ると、ユーリーさんは僕がさっき話しかけたときと同じ格好で歴史書の続きを読んでいた――。

71（後書き）

天賦珠玉の破壊については【オーブ破壊】の天賦がありますが、「天賦を使わないでの破壊ができない」という話ですね。ややこしくてすみません。

それでは天賦珠玉はなにでできているのかという点については、現時点では「解析不能の不思議物質」と思っておいていただければ。

次号、脱出回。

72

アーシャの荷物はあまりなく、すぐに準備は終わった。

「あの……レイジさん。でもこんなことしたらよくない、ですよね……？」

アーシャはさすがに気が引けるようだ。それはそうだろう、彼女は自分でこの地に戻ってきたのにこんなふうにこっそりと抜け出すことになるのだから。国に迷惑を掛けるだけなのではと思うのはしょうがない。

でも、アーシャは昨日の陛下の話を聞いてないからそう思うのであって――。

――そして君を好いておる。さらわぬ理由などなかろう。

アーシャが僕を……。

「？　レイジさん？」

「あ、い、いえ、あのー、アーシャはまだ、公式的にはレフ魔導帝国の人ですから、とりあえず帝国の決定が下るまでは国がどうのとか考えるの止めましょうよ、ね！」

ダメだ。ダメダメ。アーシャが僕をどう思っているかなんてアーシャが知っていればいいことで、陛下の思い違いだという可能性も十分にあるじゃないか。余計なことは今は考えるのを止そう！　うん。

「でも……まだ、秘薬を……」

そうか。アーシャはラルクのためにここに戻ってきてくれたのに、その目的を果たしていないのも気がかりだよな……。

「いいんです。これはラルクの問題であって、アーシャの問題じゃない。ラルクだってきっと同じことを言うと思います」

「……」

「それにこれは僕が好きでやることですから」

「え……？」

「僕は自分が『そうしたい』からあなたを連れてこの国を出るんです。アーシャももっと自分に素直になっていいんです」

「……レイジさんが、私を連れて出たいから……」

「はい。他の誰でもない、あなただからです」

「！」

アーシャの顔が赤くなって、ボッ、とカーテンのような炎が周囲を包む。暑い暑い。【風魔法】ですぐに散らした。

「そ、そ、そういう言い方はッ……！」

「アーシャ、そろそろ行きましょう」

「あ、うー……はい」

僕はアーシャのバッグを持つと、アーシャは僕の後ろについて出てきた。

廊下には誰もおらず好都合だった。

「アーシャ、窓から飛び降りるよ」

「は、はい」

こちらは屋敷の裏側に面していて、昨日の日中は人気が少ないのを僕は知っていた。窓を開き、アーシャの手を取る。

「声を出さないで」

「は、はひっ」

アーシャがもう片方の手で口を押さえたのを確認して、ジャンプした――2階から1階までの高さなので僕の【風魔法】でも十分勢いを殺すことができる。

ふわりと着地すると、「ふー」と手を離してアーシャが息を吐いた。

（こんなふうに出て行かなきゃいけないのは……やっぱりよくないのかな）

自分で連れ出しておいてなんだけど、こそこそと夜逃げでもするみたいに出て行くことに、ほんの少し僕は心が痛んだ。

だけれどアーシャを見て、気持ちが変わった。

「レイジさん、行きましょう」

晴れがましいほどの笑顔で、そう言ったんだ。

「……はい！」

僕はアーシャの手を取って走り出す。大木の切れ目にやってくると、また飛んだ――身体が宙に浮き、眼下の森がすぐそこに迫る。

【風魔法】でスピードを殺しながら、枝の切れ目を狙うけれど、それでもぴしぱしと木の葉が身体に当たる。

大地に着地したときには結構強めの魔法が必要だったけれど、魔

力量が増えた僕にはたいしたことはなかった。
そこは森林の奥深くで、ハイエルフのお屋敷を支える巨木がある以外は、しんと静まり返った森だった。

「……ここは、エルフたちの暮らす町からは遠いんですか？」
「はい。歩いて1時間ほどの距離があります」

広く、踏みならされた道ができているけれど人通りはなかった。
静まり返った森を、僕とアーシャは手を取り合って進む。
方角的に北へ進めば森の外に出られることはわかっているし、草原に着けば見晴らしもいいので街道や町を見つけるのはさほど難しくないはずだった。
できれば町には近づかず進んでいきたい――そう考えるのは当然のことだろう。

「……アーシャ、止まって」

走り出してから30分ほどして、僕は立ち止まった。

「囲まれてるね」

わざと、ここまで来させられたのだろう――陛下から命令が出ていたからだろうか。僕らに手を出すなと。だからわざわざここまで移動した？
彼らはここで初めて姿を現した。
枝の上に、木の陰に、身を潜めていたのはシークレットサーヴィスの制服。
向こうからゆっくりと歩いてきたのは僕も知っているエルフだった。

「ポリーナさん。僕らの見送りは必要ありませんよ」
「あなたへの見送りが必要ないことはわかっていますが、アナスタシア殿下にはそうはいきません」
１０メートルほど離れたところでポリーナさんは立ち止まる。
「今すぐアナスタシア殿下を解放すれば、あなたは死なずに済みます」
それを聞いて、思わず笑ってしまった。
「死なない程度にはボコボコにするってことじゃないですか。イヤですよ」
「当然でしょう。ただでさえヒト種族のあなたが、王族の皆様と接点を持っていることも許しがたいのに、こうしてこの国から連れ出そうとするとは……！」
ポリーナさんだけでなく、僕らを囲んでいる２０人ほどのシークレットサーヴィス全員から怒気が発せられた。
参ったな……尾行を見抜く力とか、見られていることに気づく力とか、そういうのが僕には足りなさすぎる。天賦に頼りすぎているからかもしれない。これでも【森羅万象】を外してトレーニングとか結構やってるんだけど、戦う能力ばかりに偏りすぎていたかもしれない。
察知能力を学ぶなら……ゼリィさん？　いやー、それはないな（即答）。
「……なにをニヤついている？」
「別に。用がないならどいてください」
「このッ！」

ポリーナさんが僕に目がけて【土魔法】のストーンバレットを飛ばしてくる。僕が首だけひねってそれをかわすと、

「なにィッ！？」

上から降ってきた男の一撃は、【風魔法】で吹っ飛ばしてかわした。男が錐もみしながら飛んでいく。

姿さえ見えていればたいしたことはない。

「アーシャ、離れていてください」

「私も戦えます！」

「それはわかってます。でも、今日くらいは君を守らせて欲しいんです」

「！？」

ボッ、とまた小さな火が飛んだけれど、

「い、いつもレイジさんは、私のことを守って……くれて、ますけど……でも、無理はしないでくださいね！」

「もちろん」

アーシャが離れていくと、シークレットサーヴィスたちがざわついた。

「バカなのですか？　アナスタシア殿下から離れたら私たちは全力を出せるのですよ」

「ポリーナさん、それは僕も同じですよ。ああ、密かにアーシャに手を出したりしないでくださいね――そうしたらさすがにアーシャも魔法をぶっ放すと思いますよ」

「……」

ハイエルフ王族の魔力量についてはシークレットサーヴィスたちもよくわかっているのだろう、動き出そうとしていた数人がぴくりと止まった。

「さて……それじゃ僕からも警告を。国王陛下が僕に、アーシャを連れていっていいと許可をくださいました。その僕を襲うということはあなたたちがこの国の反逆者になるということです。それをわかった上で掛かってくるように」

「我々は！　全エルフのために行動しているのです！　ヒト種族の甘言に惑わされることはありません！」

「そうですか。それじゃあ、どうぞ――」

僕が言っている途中に5方向からシークレットサーヴィスたちが襲いかかってくる。武器はナイフ、ショートソード、斧と様々だったけれど、それらは金属ではなく石を切り出して作られている。

「――人の言葉を遮らないでください」

僕は右手に【火魔法】を5つ、左手に【風魔法】を5つ展開し、小さめの火炎嵐（フレイムトルネード）をそれぞれにぶっ放した。

72（後書き）

ムツさんにもレビューをいただきました！　ありがとうございます……！

73

「うっ！？」
「ぐ」
「かわせ！」

5人中ふたりが直撃して吹っ飛び、ふたりが一部にケガ、ひとりは完全にかわして僕へと接近する。振り下ろしてきた斧は鋭い一撃――だけれど僕の【土魔法】が発動し、地面から伸びるように出現した土壁にめり込んでしまう。

「魔法の展開が、早すぎる……！？」
「天賦を持たない人のほうが展開は早いらしいですよ」
「ごぼっ」

土壁から伸びた泥の塊が男の腹にめり込み、「く」の字になって吹っ飛んだ。

「む」

すさまじい速度で飛来する矢が切る空気音。

（3本。全部かわせる――けど）

ここは徹底的に見せつけてやるつもりで僕は【風魔法】を展開。僕の周囲をドーム状に取り囲むような風の層に矢が吸い込まれると、僕を中心に、まるで衛星が地球の周囲を回るように矢はぐるりと一周し――矢を放った本人へと飛んでいく。

「なに！？」
「うわあッ」
「むう！」

矢は誰にも刺さらなかったけれど、驚かせ、警戒させるには十分だったようだ。

「な、なんなんですか、その魔法は！？」

ポリーナさんが驚いてる驚いてる。

「言ったでしょう。天賦を持たない人のほうが魔法の展開は早いんです」
「そんなバカな！？【風魔法】も【火魔法】も【土魔法】も天賦を使わずに魔法発動を！？」
「……まあ」

正確に言うと【森羅万象】で学び、【森羅万象】を外しても使えるようにし、それから多くの天賦を取り込んだ結果が今なのだけれども。

「ならば大規模魔法です……皆！　多少、森が傷ついても構いません！」

ポリーナさん含め、シークレットサーヴィスたちの魔力が膨れ上がるのを感じる。

エルフは長命だからなのか魔力量も高い。接近戦もできて魔法も使えるなんて、冒険者にしたらみんないい成績を出せそうだ。

「……でもそれじゃあ、ダメですよ」

モンスター相手ならこちらの行動がどんなものかわからないかもしれない。

あるいは誰かを護衛するときならば相手を追い返せばいいだけだからこれでいいのかもしれない。

この人たちは、自分から相手を倒しに行くという戦略が圧倒的にない。

「そんなに時間を掛けたら」

「！」

僕は向こうの魔法が発動する直前に、ポリーナさんとの距離を一気に詰めた。「瞬歩」もだいぶ実用できるようになっていた。

「な、な――ごほっ」

僕のパンチがポリーナさんのお腹にめり込むと、彼女はずるりとくずおれ、そのまま気を失った。

女性を殴るのは趣味じゃないけど、向こうは殺すつもりなのだ。今さらためらいはない。

「う、撃てェッ！」

他のエルフが叫ぶと、【土魔法】と【風魔法】の嵐が僕へと降り注ぐ。

「全然ダメですね」

僕はそれら全部を吹き飛ばすような強い風を起こした。【風魔法】

は打ち消され、石つぶての威力は下がり僕の手前で地面に落ちた。
魔法を組み合わせるにしても風と土じゃあ特に相乗効果が出てこない。使うなら砂嵐とかにしないと。殺傷能力はないけど。

「まだやるんですか？　やるなら、面倒ですけど全員に直接攻撃しますよ」
「……」

シークレットサーヴィスたちは黙りこくった。このままだんまり、ということはないだろうけど――イヤだな、と思った。彼らは「ハイエルフこそ至高」という思想がすべてで、自分たちがケガをすることなどいとわない。きっと襲いかかってくるだろう。
そうしたら僕は――戦う必要がある。

（無益で、不毛だ……）

僕の胸に潜んでいた寂しさが勢いを増すのを感じる。
この国は不毛だ。豊かな実りはあるけれどそれは表面的なもので、エルフはハイエルフを崇拝し、ハイエルフたちは過去に縛られて生きている。

「……行くぞッ！！」

シークレットサーヴィスのひとりが、声を上げた――ときだった。
ゴウンゴウンゴウン……とエンジン音が聞こえてきた。僕らがいる場所は木漏れ日が射し込んでいたけれど、それは巨大な影によって覆われてしまう。

「！」

全員が空を見上げ、気がつく――空にある大きな存在に。

「『梟の羽搏き』！？　なぜここに！」

巨大な魔導飛行船は、ゆっくりと降下してくると、木々に触れるギリギリのところで止まった。プロペラによって浮遊しているために強風が吹き下ろしてくる。

『――シークレットサーヴィスは今すぐ国王陛下の元に戻れ。これは陛下による勅命だ』

声を大きくする魔道具によって、魔導飛行船から声が聞こえてくる――勅命、という言葉にエルフたちが凍りついた。

僕はその声の持ち主が誰なのかすぐにわかった。

『レイジ。アーシャ。遅くなってすまなかったな……ロープを垂らすからそれをつかめるか？』

マトヴェイさんはそう言った。

「梟の羽搏き」はレフ魔導帝国で造られた飛行船ながら、エルフのために多くの改良が加えられているようだった。

エルフの嫌う金属は極限まで少なくなっており、シンプルな木目が美しい仕上がりとなっていた。

飛行船内にあるラウンジで、マトヴェイさんと会うことができた。

「マトヴェイさん！　どうしてこんな……」

「いやー、だってシークレットサーヴィスがお前たちをそのまま行

かせるわけはないだろ？」
「それは……まあ、そうですね」
僕が納得していると、
「マトヴェイ兄様。魔導飛行船を動かすのは相当な無理をなさったのでは……」
アーシャが心配している。どうやらシルヴィス王国に1艇しかないこの船は、かなり慎重な運用をされているらしい。
「無理くらいするさ。可愛い妹が旅立つ日なんだぞ？」
「兄様……」
「……とはいえ、ユーリーに尻を蹴飛ばされて俺が動かすことになったんだけどな」
マトヴェイさんは右手で自分のお尻をさすりながらそう言った……って、リアルに蹴られたんですか？
「はは……まったく、ユーリーにはかなわねえよ。俺には、陛下がなにを考えていたのかも、アーシャのことも、全然わかってなかった……」

74

マトヴェイさんはこのまま、僕らを光天騎士王国まで送ってくれるのだという。

だけどその表情は暗い――マトヴェイさんもマトヴェイさんなりに苦労しているのだなと僕は思う。

「こんなことを言うのは差し出口かもしれませんが……」

僕はマトヴェイさんに、ユーリーさんの言葉を伝えた。彼女はマトヴェイさんを「気にかけて欲しい」と僕に言ったことを。

「気にかける？　どういうことだ」

「……これは僕の想像でしかないのですが、ユーリーさんが次の女王に就任したあと、外との交流を増やすおつもりではないでしょうか？」

「外との……？」

「エルフは『三天森林（サードフォレスト）』を持ち、閉鎖的な暮らしをしてきましたがそれを転換するということです。エルフの新時代を始めようということです。マトヴェイさんにはシルヴィス王国に留まりながら、外部との折衝を任せたいのではないかと」

「な、なんで俺が」

「固定観念に縛られず、外部からの客――僕にも優しく接せられるような王族はマトヴェイさんしかいません。ユーリーさんは、マトヴェイさんのそうした人格を買っているのだと思います」

「……ユーリーが」

信じられない、と小さくつぶやくマトヴェイさんに、アーシャも

言った。

「ユーリー姉様がマトヴェイ兄様を見る目は厳しいのですが、優しさもあったのだと私も思うのです。それは……レイジさんがユーリー姉様を『優しい』とおっしゃったからこそ気づいたのですが」

「……そう、なのか」

「きっとそうです。マトヴェイ兄様が、憎まれ口を叩きながらもユーリー姉様を尊敬しているように」

「！」

図星を指されたのか、マトヴェイさんはあわてたように、

「べ、別に尊敬なんか……まあ、アイツの魔力はすごいけどな……。ちょ、ちょっと運行状況を確認してくる！」

照れ隠しするように去って行った。

「……ほんとうのことなのですか、レイジさん。ユーリー姉様が女王に即位されたあとのことというのは……」

「推測でしかありませんが。でもそれはユーリーさんが、というより、現国王シルヴィス陛下の意向のように感じます」

「陛下の？」

「この『梟の羽搏き（はばたき）』を見てください。木材をふんだんに使っていますが、機関部分はすべて鋼鉄製。もちろん【火魔法】の類の魔術も使われています。国益には資するでしょうけれど、エルフたちから見たら、この魔導飛行船は受け入れられないものですよね？」

「……それは、【火魔法】を使う私と引き替えにしたものだから……」

アーシャが悲しげに目を伏せるので僕は首を横に振った。

「違いますよ、アーシャ。国王陛下はご自分よりも国のことを、エルフたちのことをお考えです。【火魔法】を無自覚に使ってしまうアーシャを手放したことだって苦渋の選択であったでしょう。であれば、国のためにならないものを、エルフたちが受け入れられない魔導飛行船を、その対価として手に入れたのなら、そこには重要な意味があるはずです」

「……その意味こそが、シルヴィス王国の新時代……」

僕はうなずいた。

「……少し、考えたいです」

「それがいいと思います。僕の言ったことは推測でしかありませんから」

ラウンジのソファに座ったアーシャから離れ、僕は飛行船上部へと向かった。

キースグラン連邦上空を飛ぶ「梟の羽搏き」はすでに大森林を抜けて草原の上を飛んでいる。風が強いので甲板に出ることはできないのだけれど、展望室からは後方の大森林を一望できる。

午前の陽射しが照らし出す大森林――はるか向こうに世界樹がうっすらと見え、そこにはもやが掛かっていた。

（エルフたちは「シルヴィス王国」を名乗っている。でも一方ではキースグラン連邦の一部であることを受け入れ、ここがゲッフェルト王の直轄領という扱いを受けている……。それを受け入れざるを得ない理由は、たぶんこれだ）

いくら森での戦い方に慣れたエルフたちであっても、魔導飛行船で空から来られてはハイエルフたちを守ることは不可能だ。世界樹

だってまた然り。
魔導飛行船は戦争を一変させる力を持っているために、各国はこれをなんとか手に入れようとした。レフ魔導帝国が小国ながら存在感があったのは、技術的に各国をリードしていたからだ。
よくは知らないけれど、国の中枢のような場所には魔導飛行船用の対空兵器が備えられているらしい。
いずれにせよ魔導飛行船が増えてきたことを知ったシルヴィス陛下は、このまま閉鎖的な暮らしを続けることはできないと悟ったんだろう。キースグラン連邦が「三天森林」の開放を要求してくる前に、魔導飛行船を手に入れた。

（それに……もしかしたら、陛下も知っていたのかもしれない）

世界樹について、僕は陛下に言わなかった。

（あの心臓みたいな物質……天賦珠玉を改変したなにかは、生命竜クルトゥスヴィータにつながっていない）

魔力を吸収し、世界樹を成長させているだけなのだ。
それは魔力の流れを見ていてもはっきりとわかった。
つまり――、

（ハイエルフの「務め」は、なんの意味もないものなんだ）

生命竜クルトゥスヴィータが地中に埋まっているのなら、もはやとっくに死に、土に還っていることだろう。
連綿と続けられてきたハイエルフの「務め」はただ世界樹を大きくするだけの行為だった。
僕はそれを、陛下に言えなかった。
あなたの人生は――天賦珠玉を改造し、その報いを受けてきた先

祖代々の国王の行為はすべて、無駄だったなんて、言えなかったのだ。

でも、新時代を導こうとしている今の陛下は、もしかしたら……この行為は無駄なのではないかと知っているのかもしれない。

（……わからないな）

それに口を出すことの無意味さだって僕は理解している。

だからユーリーさんに、話そう。彼女が女王に即位して、僕と会う時間を取ってもらったらそのときに。

74（後書き）

月曜だ！　今日も寒い！　もし面白かったら「ブックマーク」「評価（ページの下にある☆）」をお願いします！
アカウント持ってないですって？　ここまで読んだなら作りましょう！　簡単ですから！

75

光天騎士王国の港町、ザッカーハーフェンに戻るのに、空を進むとあっという間だった。そりゃあね、鉄道や高速道路が普及している日本ですら空の便は圧倒的に早いんだもんね……この世界だととんでもない技術革新になるよね……。

「すまないが、もう帰らなければならないのだ」

時刻はちょうど夜明けだった。茜色の陽射しが射して、草原を燃えるように染め上げている。

ここは町の郊外で、魔導飛行船を一時的に着陸させていた。エンジンは掛かったままで僕とアーシャ、マトヴェイさんが急ぎ足で降りた。

だけれどマトヴェイさんとはここでお別れで、彼はシルヴィス王国へとんぼ返りすることになっていた。やはり無茶な借り方をしていたようで、燃料もぎりぎりらしい。

「マトヴェイ兄様、ほんとうに、ほんとうにいろいろとありがとうございました。すぐにまた出て行く私をお許しください」

「いいのだ、アーシャ。元気でな」

「はい……」

抱きしめ合うハイエルフの兄妹はとても絵になる。魔導飛行船の乗組員であるエルフたちは、それを見て感動しているようだった。

マトヴェイさんはほんとうに、レフ魔導帝国に行ったアーシャを心配していてくれたんだと思う。だからこそ帰ってきたことを喜び、一方で彼女の自由を望み、こうして送り出すとやはり寂しいのだ。

これほど感情豊かで、温かい人がいるのならシルヴィス王国もまだまだ大丈夫なんじゃないかなと僕は勝手に安心した。

ちなみにエルフの乗組員たちもマトヴェイさんには協力的だった。彼らは「落ちこぼれ」のマトヴェイさんであってもハイエルフはハイエルフなのだ。

「レイジ、これを……」

「？」

名残惜しそうにアーシャと離れたマトヴェイさんが、僕に差し出したのは木製の小箱だった。

「ユーリーが俺の荷物に忍ばせていたようだ……まったく、アイツにはかなわねえよ」

わざとぶっきらぼうに言ったのはユーリーさんに対するわだかまりがだいぶなくなってきた証拠だろうか？　僕へと、押しつけるようにそれを寄越す。僕が中身を確認する前に、

「それじゃあ……俺はもう行くよ」

マトヴェイさんは魔導飛行船に戻るようだ。

「ふたりとも、いつでもシルヴィス王国に来てくれていいんだぞ。これが今生の別れじゃない――だけどレイジ、お前はヒト種族だ。俺たちよりもはるかに寿命が短い。だからなるべく顔を出せ。せっかくできた……友人なのだから」

照れくさそうに言ったマトヴェイさんに、

「はい。必ずまた行きます！」

僕ははっきりと、そう答えたのだった。

きっと今のマトヴェイさんなら大丈夫だ。ユーリーさんと協力して、エルフの森をいい方向に持って行けるだろう。

マトヴェイさんが乗り込んだ魔導飛行船が浮き上がると、強風が吹き荒れる――それを僕が【風魔法】で防風壁を作り出す。

――古き森　浮かぶ油　燃え盛る命　焔のごとく
神が降り　森に住まい　８色の葉　人に与う
――初めに木の神が　次に草の神が　最後に花の神が
森を言祝ぎ　風を休め　雨を垂れ　陽を誘う

アーシャがその歌を口ずさんでいた。本来、こういう場所で歌っていいようなものではないはずだけれど、それでも彼女は歌いたいと思ったのだろう。

金色の粉が火の粉のようにアーシャと、僕を取り囲むように舞い上がる。

見上げればそこに、朝日を浴びた「梟の羽搏き（はばたき）」がある。

上昇時には本来出てはいけないはずの甲板に、マトヴェイさんが飛び出してきた。

「アーシャッ！　我がシルヴィス王国の王女アナスタシアよ！」

あわてたエルフたちがマトヴェイさんを両脇から抱えて引き込もうとするが、それでもマトヴェイさんは甲板の手すりをつかんで踏ん張った。

「貴女は、最初から王女だった！　誰がなんと言おうと、気高く、誇り高い王女だった！」

アーシャの練り上げた魔力がさらに高まり、辺り一面は金色の湖のようになっていく。
魔導飛行船が遠ざかる。
「貴女の前途に限りない幸運がもたらされんことを――」
ついにマトヴェイさんは引き剥がされ、船内に連れ戻されていく。
やがて魔導飛行船がどんどん小さくなっていき、アーシャの歌も終わると、日が昇っているというのに周囲は不意に暗くなったように光がなくなった。
「ふふ、マトヴェイ兄様、あんなに危ないことをして……」
「……アーシャの魔唱歌を聞きたかったんじゃないですか？」
「そうでしょうか」
「そうですよ」
「……そうだと、いいです」
アーシャはにこりと微笑んだ。
難しい顔をしても、一生懸命であっても、泣いていても、アーシャはかわいいのだけれど――やっぱり笑っているのがいちばんだと僕は思った。
「そう言えば、先ほどの小箱は？」
「ああ……これですか」
木製の小箱を開けなくとも、僕には中身に想像がついたのだけれど、アーシャの前で箱を開けてみる。
「こ、これって」

驚いたアーシャが中に入っていたビンを取り上げる。

「……ユーリーさんには大きな大きな借りができてしまいましたね」

それはエルフの秘薬だった。

「はい……。いつか必ず、ユーリー姉様にも恩返しをしたいです」

「その機会はきっとありますよ」

遠くからザッカーハーフェンの騎士たちが馬を飛ばしてやってくるのが見える。さすがに魔導飛行船が停まっていれば飛んでくるよな。

さあ、町へ行こう。ラルクは、「銀の天秤」のみんなはどうしているだろうか。

76（前書き）

更新に関するお知らせが後書きに書いてあります。

76

ザッカーハーフェンの騎士たちと合流すると、彼らもあの魔導飛行船がエルフのものだとわかっていたようで、僕らを運んできたのだと知ると納得してくれた。

「できれば事前に連絡が欲しかったですが……」

困り切った顔で言われてしまうと、ほんとすんません、という言葉しか出てこないけど。

連絡したかったんですけど……こっちも大急ぎだったので……。

僕とアーシャは騎士たちとともに町へと入った。

朝早くだというのに港のほうはかなりの賑わいがあり、「『海坊主』がいなくなったもので、みんな喜んで漁に出てますよ」と言われるとやっぱりうれしい。

ラルクがいるはずの宿の前で騎士たちと別れた。町長もきっと会いたいだろうからあとで来て欲しいと言われたけれど、そこはまあ「時間ができたら必ず」とふんわりかわしておいた。いやね、どうしても拒否ってわけじゃないんだけど、あんまりこう「英雄！」みたいに見られると居心地が悪いんですよ……。

僕とアーシャが入口から入ると――ちょうど宿の人たちが朝食の支度をしていたところだった。

「あ……ちょっと、クックさん！　クックさーん！　帰ってきたよ！　男の子と、信じられない美少女！」

女性の従業員が大声で2階に上がっていく――いや、その見分け方よ。「信じられない美少女」はわかるけど、僕はだいぶざっくり

「男の子」とききましたか。
　すると2階からどたどたと音が聞こえ、「うわあっ」という声のあとにドシンッと響いた。「なにやってんのよ、もう！」「す、すまねえ」なんてやりとりがあって、腰をさすりながら女性に付き添われて降りてきたのはクックさんだった。

「だ、大丈夫ですか」
「面目ねえ。俺がケガ人になっちまうところだった」
「ケガするのはいいけど、建物に傷でもつけたら承知しないよ」

　ぷりぷりしながら宿の女性は去って行った。

「おー、怖い怖い」
「クックさん。それでラルクは」
「おう、そうだな。お嬢は今は寝てるよ。つうか、ここんとこほとんどずっと寝てる」
「容態は安定しているってことですか？」
「そういうことだ。お嬢も、ちゃんと身体を治そうとしてくれてよ……ノンさんと師匠さんが毎日来てくれてる。手が掛からなくていいが、だいぶ聞き分けがよくなっちまってそれはそれで悲しいような――」
「……ちょっと、待ってください。ダンテスさんとミミノさんは？　あ、あとゼリィさんも。『薬理の賢者』様に会いに行きましたよね？」

　シルヴィス王国から戻ってくるのはあっという間だったけれど、それでも行きは、船に乗って馬車に乗ってと日にちが掛かってる。
「薬理の賢者」様がいるという沖の群島は、さすがに見える範囲にはないとは言っても、往復で数日あれば事足りるはずだ。
　クックさんは、眉間にシワを寄せた。

「実は、まだ帰ってきてねえんだ。港のほうじゃ、捜索隊を出すかって話になってる」

ベッドで眠っているラルクの顔は安らかだった。心なしか血色もよくなったように感じられる――【森羅万象】で見ても、前回より生命力が回復しているらしい。ノンさんの【回復魔法】は上手くいってるんだ。師匠さんの魔法でも難しいと言っていたのに。

「……ラルク」

この部屋で、「返せ」と言われた天賦珠玉。僕がラルクから【影王魔剣術】を勝手に抜いたことをラルクは怒っていた。あのとき以来だ、ラルクの顔を見るのは。

（僕だって【森羅万象】を勝手に取り上げられたら怒るだろう。しかもそれが、理解のできない理不尽な強さを持った相手によるものだったら……）

そこまで考えが至らなかったのは事実だ。

だから、ラルクの治療のめどがついたらちゃんと話し合わなきゃ。

僕らは――たったふたりの姉弟なんだから。

「……行きましょう、アーシャ」

「いいのですか？　起きるのを待たなくて」

「はい」

僕はクックさんに、引き続きラルクをお願いした。クックさんや

仲間たちはラルクが治るまでそばにいてやると言ってくれた。

（天賦がなくてもラルクにはすばらしい仲間がいる。僕もできることをしなくちゃ）

僕とアーシャが次に向かったのは教会だった。ダンテスさんたちのことも気がかりだったけど、情報を集めるにはまずノンさんに聞いたほうがいいだろうと思ったのだ。

ザッカーハーフェンの教会はこざっぱりとした清潔な白い壁の建物で、朝だというのに多くの人たちが訪れ、祈りを捧げては出ていった。光天騎士王国は教会との結びつきが深く、敬虔な国民も多いのだろう。

「――おお、なんとためになる……」

「――他にはどのようなお話があるのでしょうか」

「――我ら迷える若輩に教えを……」

礼拝堂に入って、気がついた。隅のほうにテーブルが出ていると思うと、朝から葡萄酒の入った瓶が置かれ、銅製のゴブレットでそれを飲む女性がいる。そして5人ほどの男たちが――年齢も見た目もバラバラの男たちが女性に群がって、葡萄酒を注いだり、床に膝をついてなにかを懇願したりしている。

「あぁら？　もうたっぷりお話はしたと思うけど？」

その女性は――確かに、修道服を着ていた。ノンさんが着ているそれとほとんど同じ――刺繍に紫色の飾りが入っている以外は同じ――だというのに、まったくそうとは見えなかった。

裾がはだけてムッチリとした太ももが見えている。ゴブレットを持つ右手の指はなまめかしく動き、左腕で支えているはずの胸はこ

ぼれ落ちそうだ。
　ストロベリーブロンドの長い髪はきらきらしていて右目を隠している。アメシストのような紫色の左目の下には泣きぼくろがあり――修道女らしからぬ化粧を施した顔の中でも色気を放っていた。
　色気、そう、色気だ。色気の塊。色気お化けなのである。

「――そこをなんとか。もう少し」
「――先っちょだけでも」
「――この時間のために生きておるのです」

　男たちは彼女のご機嫌を取るのに忙しいらしい。

「ふわぁ……」

　アーシャから思わず変な声と火の粉が噴き出すほどには色気である。

「見てはいけません」
「あう」

　僕はアーシャの顔をつかんで正面を向けた。なんだか見てはいけないものを見てしまった気分だし、僕らには関係のないことなので無視するに限る。
　不思議なことに他の来訪者は、異様な空間となっているそのスペースには気づかないようで――思い思いのイスに座って祈りを捧げている。

（あの人たちはザッカーハーフェンの日常の1ページなんだろうか……怖）

僕は礼拝堂のいちばん奥、神像が5体直立している下にある講壇へと向かった。そこに立って講釈を垂れているような者はいなかったけれど、その脇で掃除をしている人物が誰なのかは分かっていた。

「？」

その人は僕らの足音に気づいて顔を上げた。

「――レイジくん」

「ただいま戻りました。ノンさん」

ホウキを手から取り落とし、走り出したノンさんは、

「ちょ、え？　ノンさん、どうしました？」

僕にがばりと抱きついたのだった。

突然のことにどうしていいかわからなくなる。彼女の柔らかな身体と温かな体温が伝わってくる。

「よく無事で帰ってきて……くれましたね……。お父さんたちが、戻らなくて――私、レイジくんまで帰って来なかったらどうしようかって……」

「ノンさん……」

そうか。そうだよな。いくらダンテスさんが異常なまでに強くても、海に出て消息不明になったら心配するに決まってる。

僕はノンさんの背中に手を回し、ぎゅっと抱きしめた。

「大丈夫です。僕が捜しにいきますから」

やるべきことはやっぱり捜索だ。船を借りて海に出る。こうなることがわかっていたら無理を言ってマトヴェイさんに魔導飛行船を出してもらえばよかったかもしれない――とは思うものの、燃料がないと難しいか。

「だからまずは、わかっている情報を教えてください……ね？」

「はい……はい、わかりまし――」

と言いかけたノンさんが僕の後方を見て固まった。

「へぇ～……それがノンの言ってたレイジって子ぉ？」

色気お化けがそこには立っていた。

「はい、師匠」

そしてノンさんが答える――師匠、って、え？　この人が？

76（後書き）

師匠だって知ってた（知ってた）。

というわけで前書きにありますとおり、更新頻度については毎日から週1回、日曜更新にしたいと思っております。
そのぶん文字数は増やして読み応えを上げ、前書きに前話のあらすじを少しいれる形です。

理由はいろいろありまして、
（1）5章、というか物語の終着点がそろそろ見えてきたので、もう少し構成を練りながら進めないと破綻する（長かった5章……）
（2）他の原稿や書籍関連作業が渋滞している（ようやくルルブレ8巻の初稿が終わりそう）
（3）年末でいろいろ忙しい（コロナのせいで例年よりはマシですね）
（4）新作も書きたい（書きたい）
と言ったところでしょうか。

（1）の理由が大きいですね。日々、本作の更新にすさまじいエネルギーと時間を消費していて、設定がガバるところも多く、個人的にその辺は大きなストレスになっていました。
いい形で物語を終わらせたいなと。もうすぐ１００万字ですし。
毎日１８時の更新を待っていただいている皆様には感謝の言葉しかありません。ほんとにありがとうございます。
終着点までお付き合いいただければ幸いです。

77（前書き）

アーシャとともに、シルヴィス王国から港町ザッカーハーフェンに戻ってきたレイジたち。

「銀の天秤」が「薬理の賢者」に会いに行ったまま帰ってきていないと聞いて、ノンがいる教会へ。

教会では色気お化けことノンの「師匠」がいた。

77

ノンさんの師匠である色気お化け――もとい、リビエラさんは正真正銘ノンさんの師匠であり、正真正銘教会組織の偉い人で、

「びっくりしたぁ？　私が教会の人間だって言うと驚く人多いんだけどぉ、神様は別にエッチなこと禁止してないじゃない～」

正真正銘色気お化けだった。

場所を移して教会内の事務室。僕とノンさんとアーシャ、それにリビエラさんは４人でテーブルを前に座っていて、リビエラさんが僕の横に座ろうとしたのをノンさんが阻止して対角に置いてくれた。心臓に悪いので離していただけるとほんとうにありがたいです。

「……」

アーシャは僕の横で、警戒心たっぷりといった感じの目をリビエラさんに向けているけど間違ってもリビエラさんのようには育たないと思います。反面教師も大事。

「ノンさん、ダンテスさんのことですが――」

「レイジくん、ハイエルフのお姫様がここにいるということは――」

「あの、私の持ってきた薬がありまして――」

「この部屋殺風景よねぇ。お花くらい飾りましょうよぉ」

一斉に口を開いて情報が交通渋滞を起こした。ひとり、しゃべらなくてもいいことを言っている人もいるけれど。

「ええと……じゃあ、とりあえず僕から」

僕はこれまでの顛末を話すことにした。アーシャを連れ戻せたこと。彼女がエルフの秘薬を持ってきたので治療に活かせないかということ。それに、ラルクを治療してくれたお礼を。

「ラルクの様子、少し回復しているようでした。ほんとうにありがとうございます」

「……」

「……ノンさん？」

お礼を言うと、ノンさんの表情が曇る。

「――全ッ然、うまくいってないのよぉ」

それまでほわわんと室内を見回していたリビエラさんが不機嫌そうに頬杖をつきながら言った。

「そ、そうなんですか？」

「私と、不肖のこの弟子が最大級の魔力をぶち込んでるのよぉ？死ぬ間際のおじいちゃんだって勃起するってのに、ラルクって子はぴくりともしない」

勃起とか言わないでください。ノンさんの顔が真っ赤になって、アーシャはきょとんとしてるじゃないですか。

ツッコミを入れたらやぶ蛇くさいから言わないでおくけども。

「逆に聞くけどぉ、プロの私たちがようやくわかるレベルの『回復』具合をどうしてあなたがわかるのぉ？『レッドゲート戦役』の『英雄』さん？」

「……」

これは……難しい質問だった。

うっすら微笑んではいるけれど、この人は僕を信用していない。

もちろん、会ったばかりだから当然なのだろうけれど、信用どころか最初から疑っているような感じすらあった。

僕のことはなにかしら聞いているんだと思う。この街の町長さんだって知っていたし。

でもどうして僕を疑うのか――。

「ちょ、ちょっと師匠。どうしたんですか？　いつもは男の子と見るとヨダレを垂らして頭をなでようとするのに」

「ノンは黙ってなさい。ほんと黙って」

「――ラルクは僕の姉ですよ？　顔色を見ればどうなったかくらいわかります」

ここで【森羅万象】の話なんてするわけもなく、僕は当たり障りのないところで答えた。

「ふうん……そ。それなら別にいいけど」

「師匠……」

なんとなく納得したのか、そうではないのか。

「だけどねぇ、あの子の状態は異常よ。私だって今まで見たことがない――傷を負ったのでもなく、病気に罹ったわけでもなく、ただ衰えている。老人みたいにね。このまま放っておいたらあの子、蛇の抜け殻みたいになったと思うわ」

「……」

「このタイミングで私を呼んだのは英断ね」

やっぱり、かなり危ないところまで行っていたんだ。

「そう、だったんですね……ノンさん、リビエラさんを呼んでくださってありがとうございます」

「い、いいんです。私にできることなんてあまりありませんし」

ノンさんがあわてて首を横に振るが、リビエラさんは、

「そお？　ノンは、パパの石化だって治したんでしょぉ？　私だって病状が進んだら治せるかどうかわからないってのに……あなたは相当『できる』子よ」

「！」

「まあ、どうやって治したのか、なかなか教えてくれないんだけどねぇ……『英雄』さんはなにか知ってるぅ？」

ノンさんが冷や汗を噴き出して青い顔をしている。

あ～、そう言えばノンさんはダンテスさんの石化毒を治すために光天騎士王国に向かってたんだったな……。

「……ノンさんは僕をかばってくれているんです」

「へぇ？　どういうことぉ？」

「石化毒を治したのは、一般的には使うことが許されない材料を利用したからです。これがバレると僕が裁かれますから」

「なにを使ったのぉ？」

僕はにっこり笑って首を横に振った。言わない、という意思表示だ。

「……あらぁ？　私が教会の人間だから訴え出るとでも思っている

のかしら？　言わないわよ。ただの好奇心、こ・う・き・し・ん」

最後にハートでもつきそうな声で言われたけど、僕だって言う気はない。

「……むう。これでなびかない男はいないんだけどなぁ～。それじゃあ、しょうがない。今の私は教会の人間じゃなくただのイイ女。それを証明すればいいわけねぇ？」

おもむろに帽子を放り捨て、修道服をがばりと脱ぎ出そうとしたリビエラさんを、

「師匠！？　ダメダメダメですから！！」

ノンさんがすごい勢いで止めに入った。

「見ちゃダメです、レイジさん！」

アーシャも僕の目を手で覆ってきたけれど――思いっきり裾をまくり上げたので、むっちりした太ももの上にある、下着がちらりと見えてしまった。

「大丈夫ですか、レイジくん。師匠のお見苦しいものをお見せしました……！」
「なによぉ、見せられて喜ばない男はいな――」
「露出狂ですか？」
「ひどくなぁい！？」

ひどくないです。ラルクを助けてもらってるから強くは言えないけど、それがなければマトモに相手しませんよ。

師匠を落ち着かせたノンさんが着座したところで、

「ノンさん、それでラルクは、このまま治療を続けても難しいということでしょうか？」

「はい……。現状をなんとか食い止めているだけです。それで――エルフの秘薬というのは」

「こちらです」

アーシャが言って、テーブルにビンを置いた。

ノンさんが手に取るよりも先にリビエラさんがビンのフタを開けて中身を確認する。

「……すごいわね。これがエルフの秘薬……」

「師匠、知ってるんですか」

「一度だけ過去に見たことがあってねぇ。私の師匠の師匠が『教皇聖下になにかあったときに使う』と言って保存していたのよぉ。使っちゃったけど」

「どんな効果があるんですか」

「わからないわぁ」

「……わからない？」

「病気でも傷でも何でも治すらしいけどねぇ、そんなの、この世界にあるのっていうね。ただ、エルフがとてもとても大切にしている生命樹の葉を利用しているから、なかなか出回らないのよぉ。よく手に入れられたわね？」

アーシャは小さく微笑んだ。きっとユーリーさんのことを思い出しているのだろう。

「とにかく、これは使ってみましょぉ。いいんでしょ？　教会に差し出せば死ぬまで使い切れないくらいのお金をくれるとは思うけど」

げっ、高価だろうとは思っていたけど、それほどだったのか。

「もちろんです」

だけどアーシャは即答だった。

「ふぅ～ん、いいわねぇ。恋する女の子は強いのねぇ、ノン？」

「？　そうですね、師匠」

「……はぁ、うちの弟子は色恋沙汰に淡泊すぎるのよねぇ」

「師匠が奔放すぎるせいですね」

それを言われるとなにも言えないのか、梅干しでも口に突っ込まれたかのようにリビエラさんは黙ってしまった。

「それで――ノンさん。ダンテスさんは……」

「はい。実は、どうして戻ってこないのか私にもわからなくて」

さっき礼拝堂で再会したときよりもずっと落ち着いた感じでノンさんは話してくれた。リビエラさん、もしかしてノンさんを落ち着かせるためにふざけたことを言ったりやったりしたのかなぁ……。

ノンさんが語ったところによると、僕の持っている情報とほぼ同じだった。捜索船を派遣するべきかという議論が出たのは、ダンテスさんたちを捜すのではなく、ダンテスさんたちを乗せていった船に町長のお兄さんも乗っていて、彼もまだ戻っていないからのようだ。

「――わかりました。それじゃ、今から僕は町長さんのところに行ってきます。船を出してもらって確認してきます」

「私も――」

「ノンさん。できればノンさんにはラルクをお願いしたいのですがいいでしょうか……？」
「……わかりました」
ほんとうは誰よりも行きたいだろうに、ノンさんはうなずいてくれた。
「ま、しょうがないわよねぇ。ノンが行っても足手まといになるだけだしぃ」
「そ、そんなこと私が誰よりもわかってます」
目尻に涙を浮かべてにらむノンさんに、リビエラさんは笑った――それは姉が妹に向けるような親密な笑顔だった。
「――そうだとわかっていても行きたいんならさぁ、お願いしますって言えばいいのよ。患者さんは私が診てればいいんだしぃ」
「！！」
ハッ、として固まったノンさんは、リビエラさんの言葉の真意に気づいたのだろう。
ここは私に任せて行ってきなさい、っていう。
「……いいんですか、師匠」
「いいのよぉ。こういうときに頼るのが弟子の仕事よ」
立ち上がったノンさんは深々とリビエラさんに頭を下げた。
それから僕へと顔を向けた。
その表情を見れば次に出てくる言葉がなにかくらいわかるし、この流れで僕が断ることなんてできはしない。
だけどまあ、少し心配なのは、ノンさんというストッパーがいな

いリビエラさんにラルクを任せて大丈夫なのかなぁということで。
この人、女の子には手を出したりしないよね……？

☆

ノンさんは出かける準備をするというのであとから合流することになり、僕とアーシャのふたりは町長邸に向かった。

「レイジさん……あの、こんなことを聞く女は嫌がられるかもしれないのですが……」
「な、なんですか。ていうかなに聞かれてもアーシャを嫌いになったりしないですよ」

怖い前置き来た。

「先ほど、なにをリビエラさんと話していらっしゃったのですか？」
「あぁ……」

僕は教会を出るときに、リビエラさんに呼び止められたのだ。ノンさんも部屋に戻っていて、アーシャにも声が聞こえないところだったのでふたりきりの会話だった。

――思っていたような危険人物じゃなくて安心したよぉ。お姉ちゃんのことは任せてね。

ということだった。
それを聞いて僕が気がついたのは、リビエラさんからすれば、僕は、弟子のすぐそばにいる異常な存在に見えていたのではないかと。

高位の聖職者でも治せなかった石化を治し、さらには「レッドゲート戦役」で戦果を上げるほどの戦闘能力もある。しかも年齢は１４歳……。

客観的に見たら気持ち悪いよな。

「……リビエラさん、ノンさんのことを心配していたんです。だから気をつけてあげてくれって」

教会内部でも結構高い地位にいるらしいリビエラさんは、素行はともかく、【回復魔法】の腕は超一流なのだとか。そんな彼女が光天騎士王国内でも外れにある港町ザッカーハーフェンにまで来てくれたのは弟子であるノンさんを心配してのこと。

ノンさんに対しては、素直にそうは言ってないっぽいけどね。

「……弟子思いのいい方、なんでしょうか？」

「そういうことにしときましょう」

僕らが町長邸に着くと、僕の帰還がすでに知らされていたらしく、町長はすぐに会ってくれた。そして町長のお兄さんを捜しに行く船をすぐに出してくれると約束してくれた。

「兄はズルいのです！　私を差し置いて、すばらしい冒険者とともに冒険を経験しているなどッ……！」

どうやら、兄が心配というより、それにかこつけて町長自身も船に乗りたいだけらしい。

それは止めてください、勘弁してください、これ以上面倒ごとを増やさないでください――と騎士たちに説得されるものの、ヤダヤダ絶対行くと駄々をこね続ける町長。

見かねた警備隊長の騎士さんが、

「レイジ殿、港に行きましょう……」
「い、いいんですか」
「許可は出たので、ここにいても時間の無駄です」
「……」

町長のワガママは「無駄」扱いされてしまった。かわいそうに…
…と思いつつも、僕も少しだけ「早く終わらないかな」と思ってた。

「ノンさん！」

港で先に待っていたノンさんは、背中にリュックを背負っていた。
冒険に必要な道具をいつも入れているリュックだ。
僕らが使っていい船は、海坊主との戦いでも使った軍船だ。
船の速度も十分。戦闘に耐えうるほどに頑丈。

「行きましょう」

僕らは船に乗り込んだ。
さあ、ダンテスさん、ミミノさん、ゼリィさん――待っててください。迎えに行きますから。

78（前書き）

【前回のあらすじ】

ノンの師匠であるリビエラは悪い人ではなかったので、ラルクのことを頼み、ハイエルフの秘薬を預けた。

レイジは港町ザッカーハーフェンの、光天騎士王国所有の軍船を借りて、「薬理の賢者」様がいるという沖合の群島を探索することに。

ダンテス、ミミノ、ゼリィたちの消息が途絶えたのは一体なぜなのか？

78

港町ザッカーハーフェンを出た軍船は沖合をすいすいと進んでいく。すでに一晩が経っており、見渡す限り海しかなかった。

そう言えば、ゼリィさんは船酔いひどかったよな……だけど「薬理の賢者」様を捜しに行ってくれたんだ。

あの人はちゃらんぽらんで、どうしようもなく自堕落で、救いようがないところがいっぱいあるんだけど――それでも僕のために行動してくれる。

（無事に帰れたら、多少は借金を減らしてあげようかな……）

いや、まぁ、いまだに借金を完済していないゼリィさんもたいがいではあるんだけど。

『総員に告ぐ。群島が見えてきた。戦闘配備をせよ。繰り返す、群島が見えてきた――』

そのとき船内放送が掛かった。

水平線にちょこんと、頭が見えたのは群島のひとつだろう。

ここから先は、光天騎士王国の騎士たちもほとんど情報がない場所だという――潮流は厳しく、人を襲う鳥も飛んでいるのだとか。

「――ほんとうにここでよろしいのですか」

心配そうに聞いてくる船長に、僕はうなずいて返した。

「この先は暗礁が多くて、熟練の船乗りでないと進むのが難しい…
…そうでしたよね？」
「はい。先日、『銀の天秤』を乗せて運んだ船には、ザッカーハー
フェンでも屈指の操船技術を持つ船長が乗船していました。本船は
軍船で図体も大きいものですから……」
「いえいえ、ここまで運んでいただいただけでも十分ですよ。大変
お手数ですが、また5日後にここまでお願いいたします」
「必ずや参ります」

僕とノンさん、それにアーシャの3人は、3人と荷物で一杯にな
ってしまうような小舟に乗り換えていた。
ここから最寄りの島までは5キロメートルもなく、島影ははっき
りと見えている。
船長たちを見上げて手を振ると、彼らは敬礼で僕らを見送ってく
れた。

「それじゃあ、ノンさん、アーシャ、しっかりつかまってください」
「はい」
「わ、わかりました」
「行きます――」

僕は船の後方に陣取って、両手を構える。【風魔法】をぶっ放す
と、

「わっ」
「うわわわわわ!?」

船が猛スピードで波を割って突き進んでいく。アーシャから発せ
られた火の玉があっという間に後方に流れていく。

「――おお」
「――これほどとは……」
「――レイジ殿がいれば船の常識が変わりますな」
そんな声が軍船からも聞こえたけれど、それもまたすぐに聞こえなくなるほど遠ざかる。
「！」
魔法を使いながら下を見ると、確かに青々とした海面の向こうに黒々とした岩礁が見える。さらには潮の流れも速いようで、多少の潮なら無視できそうな速度で小舟が突っ走っていても、気づけば蛇行している。
「もうちょっと右です、レイジくん！」
「はい！」
僕は両手で発動させている【風魔法】のうち、右手の魔力を上げると、舳先は右へと向いていく。
「砂浜はすぐそこです！」
「はい！」
魔法を切って振り返ると、僕らはすでに島の湾内に侵入していた。
「失礼――」
跳躍した僕が船の先端に立つと、今度はそちらに向けて【風魔法】を放つ。急ブレーキが掛かった小舟はゆっくりと旋回して、波打ち

際に到達した。

「よっ、と。到着」

小舟から飛び降りた僕が手を差し出し、ノンさんを降ろす。

「アーシャも。……アーシャ？」

「……ちょ、ちょっとお待ちください……心臓に悪すぎます……」

どうやらアーシャには刺激が強かったらしい……ジェットスキーみたいなものだったからね……。

しばらくして落ち着いた彼女を降ろし、小舟を波打ち際から離れた場所に避難させ、ロープで近くの木に結びつけておく。これで大丈夫だろう。

「では、行きましょう」

5日分の食料が入った荷物を持って、僕らは島へと分け入っていく――ちなみに、「群島」と言うだけあって大小合わせて30を超える島があるという。

だけど「薬理の賢者」様がいるという島は最も高い山がある島で、この島とその島との間は引き潮で道ができるようにつながっているので、歩いて渡れるのだそうだ。

ダンテスさんたちの船が見当たらないので、彼らは直接船で乗り込んだのかもしれないけれど。

島には野生のモンスターが棲息していた。

毒蛇、毒蛾といった面倒なものもいれば、大型の肉食恐竜みたい

なものまで。ただどれも魔法を見たことがないのか、【火魔法】を起こすと驚いたように逃げていった。

植物は光天騎士王国のものとよく似ていたけれど、見たことのないものも多く、特に食べられる果実が多かったのはよかった。【森羅万象】があればそれが食べても大丈夫かどうかすぐにわかるのはほんとうに便利だった。

島の反対側に出て、遠浅の海の向こうに天を突くような山がそびえているのを確認したときには――日も暮れて、すっかり夜になっていた。

干潮の時刻は過ぎて、今は潮が満ち始めている――ちょうど明日の早朝に干潮となるので僕らは砂浜で野営することにした。

「――僕が見ている順番ですから、ノンさんも早く休んでください」

食事を終えると、アーシャはすぐに眠りに落ちた。「裏の世界」では結構過酷な日々を過ごしたものだけれど、それでも、元々は箱入りのお嬢様だったわけで。まだまだ体力的には厳しいのだろう。毛布にくるまって横になっているアーシャは、幸せそうな寝顔を見せていた。

最初の焚き火番は僕がやると言ったのだけれど、ノンさんはなぜか眠ろうとはせずに僕の隣に腰を下ろした。

「懐かしいですね……レイジくんと野営をした回数はあまりないのですが、あのころ、レイジくんと初めて出会った森のことを思い出します。ここは海なのに……」

「……あのとき皆さんに拾ってもらえなかったら、僕はきっとまともな生活を送れなかったんじゃないかなって思うんです」

「そうですか？　レイジくんならどこでもうまくやれたと思いますけれど」

僕は無言で首を横に振った。

「六天鉱山（シックスマイン）」を出て、僕は森を彷徨っていた。街に入ろうとしても警戒が厳しくてどうしようもなかったんだよな。

それで、焚き火で焼いた乾燥肉のニオイに釣られてふらふらと近づいたんだ。

僕は【森羅万象】を持っていたから、もし「銀の天秤」に出会わなかったとしても、町に入らずそこそこ戦えるくらいの天賦を学習できたはずだ。でもその先に待っているのは、町への不法侵入、それに食料を盗んだり……そんな後ろ暗い生活だったんじゃないかと思う。

一度、その道に手を染めれば転がり落ちるのは早い。もっとも、裏社会での生き方に覚醒してそっちの世界で名を馳せたりしたかもしれないけれど。

ラルクは、たぶんぎりぎりのところで立ち止まれた。

それは――なんでなのか、ちゃんと聞いたことはないけれど、僕がいたからじゃないかなって思うのだ。

では僕は？

鉱山で、ラルクの手を取らなかった僕はきっと――後悔し続けながらもやがて忘れて、悪の道を進んでしまったのではないかと。

「……少しでも、レイジくんの力になれたのならよかったです」

「少しなんて！」

声を上げそうになって、ハッとした。アーシャは眉をむむむと動かしたけれど寝たままだ。よかった。

「僕はミミノさんに、ダンテスさんに、ノンさんに、それに……ライキラさんにも返しきれない恩があります」

「いいえ、レイジくんはもうとっくに恩返ししてくれました。父の身体を見ればわかるじゃないですか。……でも、そう言ってくださ

ってありがとうございます」
「……ノンさん？」
なんだか様子が変だなと思った。
最初は、ダンテスさんたちの消息がわからなくなって不安なのかなと思っていたけれど、それだけじゃないような――。
「私は、必ずお父さんを見つけて、帰ります」
「もちろんです」
「でも……。戻ったら、『銀の天秤』での旅はおしまいです」
「……え？」
旅がおしまい、という言葉の意味が一瞬理解できなかった。
「私が、お父さんの治療のために一時的に教会を離れているという身だと知っているでしょう？」
「あ……」
そうだった。ノンさんは、石化したダンテスさんを助けるために特別な許可を得ているのだ。
ふつう、教会に入ると一生涯、教会とともに暮らすことになる。それは窮屈なようだけれど、この世界で衣食住が保証されていることはすばらしい好条件でもあって、奥さんを亡くしたダンテスさんはノンさんを教会に預けたはずだ。
「実は師匠がザッカーハーフェンに来たのも、旅から戻らない私に業を煮やして連れ戻しに来たという側面もあるんです」
「ご、ごめんなさい、そんなことも知らずに僕はラルクのことをお願いしたりして……」
「謝らないでください。どのみち戻らなければいけなかったんです。

ラルクさんを師匠に診てもらえたのはむしろラッキーでした。アレでも【回復魔法】の使い手としては教会内でもトップクラスですからね」

「ノンさんは……リビエラさんとともに光天騎士王国の教会に行くのですか？」

「……どこに行くかはわかりません。師匠は多忙なので、大陸中を飛び回っていますし――しばらくはそれに付き合うことになるのだとは思いますが」

ほら、師匠はちゃんと誰かが見ていないと危ういでしょう？　と言ってノンさんは笑った。

僕もくすりと笑ったけれど――波のように押し寄せる悲しさは消えなかった。

どうしようもないことだとわかっているのだけれど。

いつかは別れが来ると知っていたのに。

「他の人よりも長い休暇をいただいちゃいましたね。でも、それも終わりということです」

膝を抱えて夜空を見上げるノンさんを、焚き火の明かりが照らす。

「教会に戻らない道は？」とか「教会って辞められないんですか？」とか、喉元まで言葉が出かかったけれど、言えなかった。言えるわけがなかった。

これまで教会はノンさんを育て、ダンテスさんの心の安定すらも支えてきたのだ。次はノンさんがその恩に応える番なのだ。

僕が、「銀の天秤」の皆さんに恩があるのと同じで。

「……もう、会えないということでは、な、ないんですよね？」

びっくりするくらい情けない声が出た。

僕を見たノンさんもまた驚いたような顔をしてから――ハンカチを取り出して僕の頬に当てた。

「もちろん、会えますよ……だから泣かないでください」

「ご、ごめんなさい。ノンさんが平気なのに、僕が、泣いたりして……」

ぽろぽろとこぼれる涙が止まらなかった。

悲しいのだけれど、それだけじゃなかった。ずっとダンテスさんといっしょにいたいはずのノンさんが、それでも自分の責任に向き合って、教会に戻ることを決めたっていう――その覚悟がかっこよくて、僕もまた誇らしくて、なんだか感情があふれてきたのだ。

「……平気じゃないですよ。私も、全然平気じゃないんです」

ノンさんが腕を伸ばして僕を引き寄せた。

まだ、ノンさんのほうが僕よりも少し背が高くて――僕は彼女の胸に額を当てるような形になって。

その直前に見た彼女の瞳にはきらりと光るものがあった。

「……レイジくん」

「……はい」

「……町に戻るまでには、誰にも内緒にしててください。まだ誰にも話していないんです……」

「……わかりました……」

打ち寄せる波は小さくて、夜の底に響くような波音がずっとずっと聞こえていた。

◇

翌早朝、僕らは移動を開始した。砂浜には一本の道ができていて、それが隣の島――「薬理の賢者」様がいるはずの島につながっている。

「すごいですね……海があったところに道ができています。こんなの、家の中にいたのではけっして見られない光景です」

アーシャが感動している。

「こういう風景を見られるのが冒険者の特権ですね。山の農村に暮らしていても、一生海を見ない人もいれば、逆に一生雪を見ない人もいますから」

そう言うノンさんは、昨晩の涙を感じさせないほどに明るかった。

僕らは道が消える前に急いで隣の島に渡る――そそり立つような山がそびえる、そこを島だと知らなければ大陸の一部と勘違いしそうなほどに大きな島だ。

砂浜の向こうは人の手の入っていない原生林だ。

ここを進んでいくのは大変そうだな……と思っていると、

「……『銀の天秤』の仲間か？」

森の奥から、声が聞こえた。

身構える僕たちの前にやってきたのは、和服のような、着流しに近い服を着た男だった。年の頃は２０代後半にみえる。

髪は焦げ茶色で長く、後ろで複雑に結っている。

瞳は金色で、感情をうかがわせない瞳が僕らを見つめていた。

武器らしいものは持っていないけれど、僕の【森羅万象】は男の筋肉が相当発達していることを見抜いていた。

「あなたは、『薬理の賢者』様のお仲間ですか？」

確か、ここには賢者様とその仲間が移住しているはずだ。

「――ついてくるといい。賢者様がお前たちに会われるだろう」

僕の質問には答えず、男は原生林を――道のないような森の中をすいすい歩いていった。

怪しさ満点ではあったけれど、僕らにはついていかない選択肢はなかった。どのみちこの島を探険する必要があるのだし。それでも周囲の警戒はおろそかにせずに進んでいく。

「大丈夫……なのでしょうか？　待ち伏せされていたふうではありましたけれど」

「アーシャが不安に思うのはわかりますが、逆に言えば彼は僕らを待っていたんじゃないでしょうか？」

「待っていた……？」

「『銀の天秤』という言葉を口にした以上、ダンテスさんたちは先にここに来ているようです。そして後続が来るだろうことを予測し、待っていた……。待つなら優秀な船乗りが直接乗り付けるか、あの干潮時の道しかないので、待機時間もさほど長くはないのだと思います」

「ああ、確かに！」

アーシャは納得しているけれど、僕は僕で腑に落ちないところがあった。

ひとつは、彼らがなにを待っていたのかということだ。追ってきそうなのはノンさんか、僕だろう。ノンさんの回復魔法なのか、あるいは僕の戦闘能力なのか――「薬理の賢者」様という、薬剤のスペシャリストがいる以上、待っていたのは僕のほうなんじゃないかという気がする。

まあ、いずれにせよ厄介ごとが待っていそうなのは間違いない。

それにもうひとつ、

（あの人は……ふつうのヒト種族じゃない）

エルフやドワーフのようにはっきりとした違いは出てきていないけれど、僕の【森羅万象】は、彼が、ヒト種族ではないと見抜いていたのだ。

出迎えに来た男はすいすいと歩いていくが、やがて獣道に接するとそれに沿って進むことになった。

「――町、でしょうか。見えてきましたね」

急ぎ足で先を進むノンさんが言った。

木々が不意に切れて、そこには広々とした農園があった。その向こうには岩を積んだ壁があり、立ち並ぶ家々が見えた。

それは――想像以上の規模だった。

１０軒や２０軒じゃない、１００軒をはるかに超える数の家があったのだ。

土台は石造りだったが、建物自体は木造だろう。漆喰のような、粘土のようなもので塗り固められた壁に、様々な色合いの屋根が載っている。

色は、ここに来るまでに見かけた花の色合いそのものだ。目にも

鮮やかな緋色、春を感じさせる黄色、南国のようなピンク、果実のようなオレンジ――暖色ばかりで、寒色がまったく使われていない。

さらに、せり出した屋根の先に彫られた動物も特徴的だった。躍動感のある猿、猪、鳥、ネズミと、様々なものがあるが、どうやら哺乳類と鳥類だけのようだ。

原生林では特に動物の姿は見かけず、鳥の鳴き声だけが聞こえていたけれど、もしかしたら島の奥に行けばこれらの動物がいるのかもしれない。

「――ん、来客か」

「――珍しいな、またか」

「――先日のヤツらの仲間か？」

出迎えの男と同じような格好をした人々が、僕らを見かけてはそんな言葉を交わしている。

カゴにフルーツをいっぱいに載せた者、野良仕事にでも行くのか鍬を片手に持った者――そしてなぜか、書物を抱えた者がやたら多かった。

ドワーフにハーフリング、獣人といった人々もここに来るとちらほらと見かけるけれど、大多数は出迎えの男と同じ、単一の種族だった。

「あちらだ」

真っ直ぐな道はあまりなく、緩やかにうねった道を何度も曲がって進んでいく。ここには馬や牛といった動物がいないことに僕は気づいていた。人々が物を運ぶのも、移動も、すべて徒歩なのだ。

僕らの向かう先は、群島で最も高い山を背にした――3階建ての、この町の中ではいちばん大きなお屋敷だった。

石の壁に囲まれた敷地となっていたけれど門らしい門はなく、た

だ「区切りとして壁がある」という感じだ。
お屋敷の前の中庭に、僕らは見知った人影を見つけた――。

「ダンテスさん――」

僕が言うよりも早くノンさんが走り出していた。
そして、ようやく見つけた父に飛びつくと――ダンテスさんは驚きながらもしっかりとノンさんを受け止めた。

感動の再会――と言いたいところだけど、ひとしきり抱きついたあとのノンさんは、鬼のような形相で、

「お父さん!!　なんの連絡もなしになにしてるの!!」

とお説教が始まった。それが済むまでの数分間、僕も、アーシャも、どうすることもできなくて眺めているしかなく、出迎えの男も特になんの感情もないような顔で父娘のやりとりを眺めていた。
やりとり、とは言ってもダンテスさんは正座させられて「すまん」「悪かった」「いやほんと反省している」を繰り返していただけなのだけれど。

「で……どういうことなの？」

感情が収まったノンさんがたずねると、ダンテスさんは苦笑しながら立ち上がり、膝をはたいた。

「いや、それが俺にもなんと言っていいのかわからんのだが……ああ、今、ミミノとゼリィは町の人の手伝いに出かけているから安心

してくれ。船で送ってくれた人たちもだ」

ふたりがいないので少しそわそわしていた僕に、ダンテスさんはそう言ってくれた。

「……で、事情を話すとだな――賢者様は待っておられたのだ」

「待っていた……ですか？　なにを？」

僕はダンテスさんの言葉の先を、聞かずともわかっていたようなものだった。

だけれど自分から言い出せずに質問をした。

「お前……らしい」

ダンテスさんは、僕を見ていた。

「お前が来るから、ここで待っていろと……。遅かれ早かれレイジがここに来るから、待っていろと言われたんだ。俺たちは賢者様の機嫌を損ねたくなかったから、待つことにした」

「……」

僕を、待っていた。

「来い」

ここで、出迎えの男が僕に言った。

やはりこの人が待っていたのは僕なのだ。

「……わかりました」

「ちょっと待ってくれ。それならミミノたちが戻ってからでも……」

「いえ、ダンテスさん。大丈夫です。ノンさんも、アーシャも、待っていてもらえますか？」

僕はみんなに安心してもらうよう、軽い口調で言った。

「見れば町は平和で、切迫した危険がある感じではありません。ですからなにかの話し合いになるのだと思います」

「だが……」

「なにか難しそうなら相談しに戻ってきますから」

「ううむ。そうか、それなら――」

ダンテスさんは手を伸ばして、僕の頭をなでた。

「自分で全部背負い込むなよ？」

「……はい」

ああ、温かいな――と思った。この人は、この人たちは。

「じゃ、行ってきます」

出迎えの男は先へとずんずん進んでいたので、僕は小走りにそれを追った。

僕が来ることを知っていた賢者様――警戒してしまうのは当然だけれど、僕にはなんとなく、その用件が察せられた。

「……てっきり仲間といっしょに行くのかと思ったが」

出迎えの男が、建物のドアを開けながら言った。

「いえ、賢者様の用があるのは僕だけなんでしょう？」

「……お前は、賢者様がなにをおっしゃるのかわかっているのか」

一歩踏み込んで、気がついた。

そこは玄関ホールと言うよりも――すでに施設の一部なのだ。

3階まで吹き抜けており、階段が左右に伸びている。

壁という壁には「棚」が備え付けられてあり、ぎっしりと書物が並んでいた。

「具体的にはわかりません。でも、あなた方は……記録する種族（ライブラリアン）。盟約の一族じゃないですか」

「知っていたのか」

「確証は、ありませんでしたけれどね。盟約絡みなら僕を待っていらっしゃるのも理解できます」

ツンとする、古い書物のニオイを嗅ぎながら僕は建物の奥へと案内された。

78（後書き）

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします！

竜と鬼、贄と咎（前書き）

前回あらすじ：

「薬理の賢者」に会いに行くべく船に乗ったレイジたち。その島にたどり着く前に、ノンから告げられたのは――この旅をもって教会に戻る、ということだった。

「銀の天秤」たちがいる島に着くと、来るのを知っていたかのように待ち構えていた男に導かれ、レイジは島の中心部にある町へとやってくる。そこは「盟約者」の一族たる「記録する者（ライブラリアン）」の町だった。ダンテスと再会するも、彼らは「レイジが来るのを待てと言われた」という。

自分を待っている「薬理の賢者」はきっと、盟約絡みの話があるのだろう――そう思いつつ、レイジは賢者の待つ部屋へと入った。

竜と鬼、贄と咎

通されたのはこぢんまりとした部屋で、書見台が置かれてあり、魔導ランプがほんのり明かりを点していた。
開かれた本は1ページが1メートルほどの正方形ですさまじく大きく、その前に、ちょこんと座っている人物があった。
ふっさふさの白髪は床に届きそうなほどに長く、眉とひげとが顔を覆い隠しており、表情が全然わからない。
着ている服は案内してくれた男と同じではあったけれど、両手両足にじゃらじゃらと巻きつけている金属の鎖がなんだか不気味だった――【森羅万象】によればその金属は、天銀を含む合金のようで、謎の魔力を放っていた。

「賢者様、お連れしました」
「……」

男が言うよりも前から、その小さい老人――賢者様は僕を見つめていた。ふっさふさの眉毛の下から。

「レイジと申します」
「……」

なにもしゃべらない。
男が部屋から出て行くと、賢者様は書見台のイスからぴょんと降りた。すたすたと歩いていく――書棚がある壁へと。
書棚と書棚に挟まれた幅2メートルもない壁面に手をかざすと、スゥと壁がなくなって道ができた。
ちら、と振り返っただけで賢者様は先へと進んでしまった。

「……ついて来いってことですか？」

僕の【森羅万象】は賢者様について奇妙な反応を示していた。

――「理解不能」と。

ヒト種族でないのは別にかまわないけれど、ライブラリアンのような反応でもなければ、ただひたすら「理解不能」というエラー判定を繰り返していた。

「だからって……ここで引き返すわけにもいかないよね」

僕は賢者様の消えた通路へと足を踏み入れた――。

「――え？」

気がつくとそこは草原だった。

外に出たとかそういうことじゃないのは、周囲一面が草原で、天を突くような山も、密林もないことからうかがい知れた。

異常なのは空だ。

雲ひとつない空には茜色と、青空と、夜の闇とが混在していたのだから。

見ていると不安な気持ちに襲われる空だった。

賢者様は草原をすたすたと進んでいた。僕がついてくると確信しているかのように。それは少々しゃくだったけれども、僕は賢者様の後を追った。

しばらく進むと草原の先にぽつんと、四角い布が敷かれてある場所が現れた。レジャーシートのようなそれは、モザイク模様に織られた色鮮やかな布だ。

賢者様によく似た服を着た老人がすでにそこに座っていたけれど、そちらの老人は白髪を刈り込んでいて、ヒゲもなければ眉毛はふさ

ふさではなかった。
彫りの深い顔で、紫色の目がぎらりとしている。
だけれど特徴的なのは額、いや、生え際だ。
そこに2本の突起があったのだ――まるで「角」のような。

「……ここに連れてくるとはどういう了見だ」

しゃがれた声で、角の老人は言った。
僕の【森羅万象】はこちらの老人に対しても「理解不能」のエラーを吐いている――だけれど僕は、彼が、いや、彼らが何者なのか、すでに見当がつき始めていた。

「あなたは……ひょっとして、幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）ですか」

ああ、そうだよ、とこともなげに角の老人は言った。

★

「裏の世界」でヒトマネはこう言った。

――我らはこの世界の均衡を保つために生まれた……言わば柱よ。女神が分断したふたつの世界。この世界は、幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）に託され、彼奴らは我らを生み出した。

「調停者」と呼ばれる存在、黒い人型のヤツらは、幻想鬼人が生み出した自動人形であるという。
彼が幻想鬼人なのだとすると、もうひとりの賢者様――老人は。

「……座れ。もてなしは、できぬがな」

ふっさふさのヒゲの下にある口がもごもごと動き、言葉が発せられる。その口調は老人のそれだったけれど、その声は驚くほどに若かった。

僕は、いぶかしみながらも靴を脱いで敷物に座った。幻想鬼人は興味深そうに僕を見ていた――ちなみに彼も、賢者様も裸足だ。

「察しのとおり、我は竜だ」

「！」

僕が問うよりも先に賢者様が言った。

「この姿は、そう見せているだけ。詳しいことは説明する必要もあるまい」

「……ライブラリアンに竜の血が流れていることも、説明する必要はないのですか？」

僕は、ライブラリアンと呼ばれる人たちが、ヒト種族と違うところがある――竜のような気配を身に纏っていることに気づいていた。

「知っていたのか。彼の者たちは我についていきたいと言った。元はヒト種族であったが、適性があったゆえに、血を授けた。だがそれは些細なこと」

「些細な、というのは……僕がここに呼ばれた理由に比べれば些細だということですか」

賢者様は、ゆっくりとうなずいた。

「でも僕はただ、ラルクの――姉の治療薬を探しているだけなんで

す。『調停者』とは戦いましたけど、それは向こうが襲ってきたからで……」

「調停者」の話をすると、幻想鬼人は露骨にイヤそうな顔でぶつぶつ言った。「あれを1体作るのにどれだけ苦労すると……」とかなんとか。

そんなに大事にしたいのならしまっておけばいいのに。世の中を混乱させるようなことに使うから、こっちだって必死になって壊しただけだ。

「星6つの天賦珠玉を使い、その代償を払った娘か」

「賢者様はご存じなのですか」

「……こちらの世界の『調停者』は我だからな。天賦珠玉は世界を支える。力を持った天賦珠玉に注目するのは自然なこと」

「ラルクは、生命力が低下しています。どうしたらそれを上げることができますか」

「壊しなさい」

「……え？」

「星6つの天賦珠玉を破壊しなさい。そうすれば、天賦珠玉内に閉じ込められていた生命力が本人に戻る」

「でも、天賦珠玉の破壊はできないんじゃ……」

「そのための【オーブ破壊】の天賦だ」

「あ――」

そうか、天賦の取り付け、取り外しは【オーブ着脱】という天賦があるけれどこれはレアリティが高かったはず。

一方で【オーブ破壊】はさほど珍しくはないが――とは言っても【オーブ着脱】に比べればというだけで、ユニーク特性の天賦珠玉は基本的に珍しい――これは取り込まれた天賦を、選んで、破壊できる。

「本来、取り込んだ者が死ぬことでオーブは破壊される。だがそれでは意味がないのだろう？」
「はい……」
ラルクに【影王魔剣術】を取り込ませて、ラルクを殺すことで天賦を消滅させたら本末転倒もいいところだ。
でも【オーブ破壊】なら簡単に解決できる――。
（……問題は、ラルクがそれを承知するかどうか、か……）
ラルクとのケンカを思い出すと、僕が彼女を説得できるか、不安になった。【影王魔剣術】をあれだけ欲しがっていたラルクにそれを戻してあげて、その上で破壊させろ、だなんて。
「ではこちらの話だ」
賢者様は言った。
「『災厄の子』であるそなたに、力を貸して欲しい」
「力、ですか？」
「【離界盟約】の天賦珠玉を持っているだろう」
「……はい」
ウソを吐いても仕方がないので、僕は正直に答えた。【影王魔剣術】は港町ザッカーハーフェンにいるクックさんに預けてきたけど、【離界盟約】は僕しか扱えないので僕が持っている。今も、腰にぶら下げた道具袋に入っている。
「あの力を使い、ふたつの世界をつなげるのだ」

「――は？」

賢者様、いや、竜の言ったことはシンプルだった。意味も理解した。でも、まったくわけがわからなかった。

「おい、竜の。話を急ぎすぎるのはお前の悪い癖だ」

しゃがれた声で幻想鬼人が言った。

「ふむ……ならばお前が説明してみよ。元はと言えばお前の管理能力の問題だ」

「あ？　ケンカ売ってんのか？」

老人にしては威勢よく、額に青筋を立てながら言う幻想鬼人に、

「と、とにかく、事情を説明してくれませんか。全然わかりません」

「……まあ、いいだろう」

そうして、幻想鬼人は語り出したのだ――僕が知らなかった、できれば知りたくなかった様々な事情を。

世界の歴史を。

★

女神によって分けられたふたつの世界は、「調停者」、「盟約者」、「天賦珠玉」によって支えられていた――というのはすでに【離界盟約】によって僕も知っていた。

だけれど、長い歴史で天賦珠玉が「表の世界」――僕のいる世界

に偏ってしまった。
それで、世界のバランスが狂ってしまったのだという。

「特に、星の多い天賦珠玉だ。お前たちはそれらを【オーブ着脱】でもって引っこ抜き、なかなか消滅しないようにした。場合によっちゃ、倉庫にしまってあるものも多い」

お前たち、と言われても僕はまったく関係ないのだが。
まあ、それはともかく。
星の多い天賦珠玉が回ってこなくなった「裏の世界」では、天賦珠玉を扱える種族が大幅に少なくなり、今、存亡の危機であるという。

「……もしかして、クルヴァーン聖王国で調停者が『盟約の破棄』にこだわっていたのはそれが理由ですか」

僕が仕えていたエヴァお嬢様が参加していた「天賦珠玉授与式」のことだ。
あそこで黒いドームに覆われ、調停者が出現し、聖王陛下に盟約の破棄を迫ったと聞いている。僕がぎりぎりでドームを破壊したのでそれは成らなかったのだけど。
幻想鬼人は渋い顔でうなずいた。

「あれはあの個体がだいぶ暴走してはいたが、使命として盟約をどうにかしなきゃならんとは与えていたからな。ある意味、想定内の行動だと言える」
「そんな！　星８つの、意味不明な天賦珠玉で生け贄を捧げさせるようなことをして、そんな要求までして……！」
「生け贄……まあ、生け贄ではあるわな」

幻想鬼人は、その盟約をそらんじた。

★盟約のための盟約（聖水人／地底人）
貴顕の血を捧げることで盟約を維持することができる。
調停者がこれを監視するが、調停者を害することはできない。

そう、このせいでクルヴァーン聖王国では天賦珠玉授与式まで貴族の子どもは天賦を持つことができなくなっていた。

「地底人は、毎回きっちり捧げている。盟約を反古にしていたのは聖水人――お前らのいうところのクルヴァーンとかいう国の王族だ」
「！」
「これによって盟約者を世界に記憶させ、ふたつの世界を維持することができる」
「でも……それは……」
「毎日大量の人間が死んでいるというのに、ひとりの命を捧げることを受け入れられんのか？　だとすれば、それこそがお前の咎よ」
「咎……」
「ワシらは世界を維持するために死力を尽くしとる。そして『災厄の子』であるお前に目を付けたのだ……『災厄の子』はこれまでにも世界に混乱をもたらしてきたが、お前は少々違うと思っていたのだがな」

「災厄の子」、それは転生者だ。
人より倍の16枠、天賦を所持することができる――限界超え（オーバーリミット）の天賦（スキルホルダー）を扱える者だ。
この力は確かに、悪用しようと思えばいろいろなことができると思う。強大な権力が多くの人々によって監視されているのとは違い、

たったひとりに依存する力は、使い手を――僕を勘違いさせてもおかしくはなかった。
つまり、僕は選ばれた人間、特別な人間なのではないか、という。

「僕は……『銀の天秤』の皆さんに、ミミノさんに、ダンテスさんに、ノンさんに、ライキラさんに出会えたから、この力に溺れずに済んだだけです」

そしてたぶん、エヴァお嬢様やアーシャ、ゼリィさん……ラルクに出会えたから、だろう。
そのとき初めて、ふたりの老人の目に――超越者としてではない、感情が宿ったような気がした。

「……前にいた『災厄の子』はな、お前のように敷物に座る前には靴を脱いでおった。だが何年もこの世界におると振る舞いが変わった……攻撃的になってな。結局、その子の咎を晴らすのに――つまるところその子を殺すのに、ヒト種族は数万という命を犠牲にすることになった」

数万という人命は、僕には想像しにくい、現実味のない話だった。
でもこれは他人事ではないのだというのは、ふたりの老人の真剣な表情から伝わってくる。
それまで黙っていた賢者様が口を開いた。

「……我らに、女神の考えはわからぬが、お前のような転生者が現れるのはこういった事態を想定してのことかもしれぬ。星８つを超えた天賦が存在する理由だ」

そもそも、８枠しかスキルホルダーはないのにそれを超える天賦が存在するのはおかしなことだった。

16枠のスキルホルダーがなければ、扱えない天賦がある理由は――世界の崩壊を防ぐため。

女神様は、セーフティネットとして転生者を用意していた……。

僕のことなのに。実感がなさ過ぎて頭がくらくらする。

そんな僕を見た幻想鬼人は、

「いずれにせよ、お前に頼みたいのは【離界盟約】を用いて盟約を破棄すること。盟約者が破棄してくれても構わんが、説得するのは難しかろう。盟約者は、よほどのことがない限り盟約を維持するように気持ちが働くようになっている」

「……暗示のようなものですか？」

「まあ、そうだ」

「ふたつの世界がつながったらどうなりますか」

「ふむ……おそらく、だが、生命の密度が一時的に2倍になる。それぞれの生き物は死なずに維持され、ひとつの世界で暮らすことになる」

少しだけ、ホッとした。世界がひとつになることで犠牲が生じるというのなら、僕はできる限りその引き金を引きたくない。

「だが、お前も知ってのとおり、ワシの管理する世界のモンスターは凶暴に進化している。8の巨大種を生み出したがうまくコントロールできなかった。それらモンスターもまたやってくる。十分な対策を取っておかねば多くの犠牲が出る……それはワシらの望むことではない」

そうだ。向こうのモンスターがやってきたらこっちの住民だってひとたまりもない。

「結局、犠牲が出るのならやりたくないという顔だな」

「……それは、当然でしょう。誰だって当事者になんてなりたくないです」
「放っておいても世界は滅びるぞ」
「止められないんですか？　たとえば、天賦珠玉の偏りを改善するとか……」
「お前が星5つ、6つの天賦珠玉を壊して回るのか？」
「……」

無理だ。
星6つの天賦珠玉なんて国宝を超えるような代物だ。
それを「世界が崩壊しそうなので壊させてください」と言っても話を聞いてくれないだろう。
そうなると力尽くでやるしかない。

「世界が滅びるというのは……具体的にどうなるんでしょうか」
「ほう。自ら崩壊を望むか？」
「いえ、その……いろんな可能性を知っておきたいというか」
「簡単なことだ」

賢者様が言った。

「あらゆる生き物の生命活動が強制的に停止される。そして、無に還る。我と幻想鬼人は残るかもしれぬが、確証はない」

思っていた以上に切迫した内容だった。

「……タイムリミットってどれくらいあるんですか」

幻想鬼人は首を横に振った、わからん、と言いながら。

「明日かもしれんし、来年かもしれんし、１００年後かもしれん。世界というものは様々な要素が循環しながら構成されておるが、ワシの世界は今、多くのポイントで目詰まりを起こしておる。極めつけは、聖水人の貴顕の血が提供されなかったことだ。予断を許さん状況だ」

「そんな……」

あのときの、クルヴァーン聖王国の「天賦珠玉授与式」でのことがそんなにも大きな影響を与えていたなんて。

「レッドゲートは……赤い亀裂でふたつの世界がつながったことはどうなるんでしょうか」

「ワシは、あれによっていくつもの目詰まりを解消できるかもしれんと感じた」

「あれは規定外のものだ。我は、むしろ崩壊を加速させると感じた」

老人ふたりの意見は逆だった。

だから調停者は亀裂から侵入しようとし、竜たちは亀裂を閉じようとしたのか。

「ワシと竜と、意見が一致している点は少ないが……だが、一致した点については確実だと考えておる。お前の提案したとおり、天賦珠玉を壊して偏りを正すのもいいかもしれんがそれでは間に合わん――時間がない、という意見は一致しておるのだ」

「……」

実質的に選択肢はない、ということか。

「……多くのモンスターが現れることの警鐘を鳴らし、各国に戦闘準備を早急に整えてもらい、なるべく早いタイミングで盟約を破棄

する……」

言っていて、あまりの難しさに吐き気すら覚えた。

「なんで……僕なんですか。なんで僕がそんなことをしなければいけないんですか。無理ですよ……できるわけがない」

誰もいなければ泣きたいくらいだった。

僕はここに、こんなことを聞くために来たんじゃない。

僕はただ、ラルクの身体を治してもらいたかっただけなのに。

たったひとりの姉の、健康を願うのはそんなに悪いことなのか。

「……幼いそなたに、あまりに重い荷物を背負わせてしまったな。よい。決めずともよいのだ。先ほど幻想鬼人が言ったとおり、この世界はまだまだもつかもしれぬ」

「竜よ、ずいぶんこやつに甘いのだな？　世界が滅びてもいいのか。大体こやつくらい力があれば、自分の仲間たちの命は十分守れるはずだ」

「仲間だけでない、見も知らぬ人々の命すら想像できるこの子は……やはりこれまでの『災厄の子』とは違う、あまりにも優しい子だ。よいのだ。そなたが背負う必要はない」

賢者様の手が伸びてきて僕の頭をなでた。

そのしわだらけの手は、人の体温を感じさせないものだったけれど、おっかなびっくり触れるような触り方に優しさを感じて――僕は絶対にこんなことで泣くものかと奥歯を噛みしめた。

竜と鬼、贄と咎（後書き）

いろいろと明らかになりました。
レイジの選択は、次回に。

またコミカライズ版オバスキの第2話が、コミックウォーカー、ニコニコマンガで公開されていますのでそちらもお楽しみください。

「面白かった」「続きが気になる」と思われましたら是非「ブックマーク」「評価」をお願いいたします。

79（前書き）

「薬理の賢者」に連れられて向かったところは、謎の空間。そこにいた角のある老人は幻想鬼人で、賢者は竜だった。

ふたりが言うには、レイジの持つ【離界盟約】によってふたつの世界をつなげないと、ふたつの世界は滅びるという。原因は天賦珠玉の偏りが大きいが、それを解消するのに天賦珠玉を破壊して回るというのはあまり現実的ではなかった。

世界の崩壊を防ぐためには盟約の破棄が必要だ。

しかしふたつの世界がつながれば、「裏の世界」の凶悪なモンスターがこちらの世界に雪崩れ込んでくる――。

79

「レイジくん！！」

僕が賢者様のお屋敷を出て行くと――そこにはみんながそろっていた。

ミミノさん、ダンテスさん、ゼリィさん。それに彼らを乗せていってくれた船長さんやクルーたちも。

もちろん、いっしょにやってきたノンさんとアーシャもいる。

「大丈夫だったべな！？　心配したよ！」

「いえいえ、こちらこそミミノさんたちのことすごく心配してましたから」

飛びついてきたミミノさんは僕よりも身長が低くなっていて、出会った当初は僕のほうが小さかったことを思うと年月の流れを感じる。

「賢者様とは会えたべな？」

「あ、はい……」

「……もしかして、お姉さんは治せないべな……？」

僕が浮かない表情をしていたからだろう、ミミノさんがおっかなびっくりたずねるけれど、

「いえ、治す方法についてはうかがいました。そう難しくはないやり方なので、戻ればきっとなんとかなります」

それにはラルクを説得する――【影王魔剣術】を破壊することを承諾させるという、気の進まない仕事があったけれど。

「じゃあ、どうしたの？」

「……」

僕はみんなを見る。

先ほど賢者様と幻想鬼人には「少し考える時間をください」と言って出てきた。出迎えをしてくれたライブラリアンの男は中でなにがあったのか察しているのか、あるいはなにも知らないのか、淡々と僕を外まで案内してくれた。

このことは――賢者様たちが告げたことは、隠し通せるものではないと思う。

隠し通したところで、世界が滅びるのなら隠す意味もない。

「……皆さん」

いよいよ、僕も覚悟を決めるときなのだ。

「話したいことがあります」

僕のすべてを伝える――この人たちになら伝えてもいいと思える――ときなのだ。

ダンテスさんたちが寝起きしているという家に向かった。そこは他の家々と同じ木造の一軒家だったけれど、大きめの1室しかない間取りで、ベッドが並んでいる殺風景な室内だった。

ベッドに腰を下ろし、並んだ人たちの顔を見る。

ダンテスさんは信頼に足る人だ。いつだって仲間のためを思って行動してくれるし、惜しみなく僕にあらゆる戦い方の知恵を授けてくれた。

ミミノさんは僕にこの世界での生き方を教えてくれた。僕はこれほどにいい人を、前世でも今世でも見たことがない。

ノンさんはダンテスさんが大好きで、たったふたりの父娘関係をものすごく大切にしている。そして今では僕やミミノさんのことも家族だと思ってくれている。

ゼリィさんはほんとにダメなヤツで、借金まみれだし、ギャンブルやるし、しかも弱いし、さらには生活もだらしない。でも、彼女がいなければ、なにも持たなかった逃亡奴隷の僕はとっくに捕まっていただろうし、あれ以来、彼女はずっとついてきてくれている。

アーシャは、僕といっしょに冒険をするという道を選んだ。王族としての務めを果たしたい気持ちと板挟みになりながらも、僕を選んでくれたのは、「喉」の問題を解決してくれた恩だけじゃなく本心から――僕のことを、好き、なのかもしれない。いずれにせよ、彼女は信用を絶対に裏切ったりしない。

「……皆さんに、ずっと言わなければいけないと思っていました」

だから、この人たちになら、話すことができる。

「僕はこの世界に生まれましたが、実は前世の知識があるのです。その前世はここことは違う世界――異世界での人生であり、僕の魂は世界を超えて転生しました」

それから僕は一気に話した。

転生した結果、他の人の倍のスキルホルダーがあること。

「六天鉱山（シックスマイン）」での鉱山崩落時に星１０の天賦珠玉を見つけ、それを使って窮地を切り抜けたこと。

【森羅万象】は他人の天賦を模倣でき、【森羅万象】によって前世の記憶がよみがえったこと。

そういったとてつもない天賦珠玉を扱えるために所有者が暴走してきた歴史があり、黒髪黒目――つまり日本人の転生者はこの世界では珍しいがゆえに目立ち、「災厄の子」として殺されてきたこと。

「僕が年齢にそぐわない戦闘能力の高さを持っていると、皆さん思っていたでしょうけれど、それはすべて【森羅万象】のおかげで、僕の力ではないんです」

そこまで言った僕は、顔をうつむけたまま上げることができなかった。

「なんだ、そうだったのか」とガッカリされるのではないかとか、「天賦を盗んでいたのか」と怒られるのではないか――そんな恐れが心のどこかにあったのだ。

「……それはおかしい」

だけどダンテスさんが言ったのは、僕がまったく考えもしない言葉だった。

顔を上げると、本気で「わからない」といった顔のダンテスさんが腕組みしていた。

「おかしい、とは……？」

「お前は確かに年齢に似合わない力を持っているが、戦闘時の動きは天賦によってもたらされたものではないと感じていた。天賦は、たとえば【剣術】ならば型に沿った剣の振りを意識せずともできるようになるが、お前の動きはきちんと自分のものになっていた」

「それは、僕が【森羅万象】を取り外してトレーニングしたからです」

「なに？　取り外し？」

僕はダンテスさんの目の前で星１０の天賦珠玉を胸から取り出して見せた。ダンテスさん以外のみんなが「おおっ」と、僕が話し始めてから初めて声を上げている。

「これが星１０だべな？」

「きれいですね……」

「うわー、こんなん、使い物にならないと思ってたんすけど、意外や意外、使える人がいたんすねー」

「吸い込まれそうです」

ほぼほぼ真っ黒の天賦珠玉で、中央に虹色の光があって回転している。

僕なんかは最初見たとき「不気味だな」と思ったんだけど、みんなが興味津々でマジマジと見るのでなんだか恥ずかしい。

左手で天賦珠玉を持ったまま、僕は右手の人差し指に【火魔法】で炎を点して見せた。

「【森羅万象】を外してトレーニングすることで、【森羅万象】を取り込んでからの動きが磨かれることに気づいたんです。単に【森羅万象】頼みではダンテスさんの言ったとおり、型どおりの動きしかできないんですけど……」

「それほどのトレーニングを積んでいたのか」

「ダンテスさんと別れてから、４年もありましたからね」

すると――ダンテスさんが「フッ」と小さく笑った。

「……あの、ダンテスさん？」

「いやな。それなら、もはやお前の戦闘能力はお前のものではない

か。天賦だけがもたらしたものではない」
「でも、【森羅万象】がなければこの力は得られなかったわけで……」
「では聞くが、俺の戦い方は天賦珠玉を持っていれば誰でもできるものか？」
ダンテスさんの戦い方――僕は常日頃からダンテスさんの戦闘能力は「異常」だと思っている。上級の冒険者はみんなそうなのかもしれないけれど、軽く人間の限界を突破しているんじゃないだろうか。
「そんなわけないですよ！　ダンテスさんの戦いは、これまでの経験に加えて、様々な角度から考え抜かれ、鍛え抜かれた技術の塊です。それでいて特別な天賦を使っていないんだから、とんでもないことで――」
「つまり、そういうことだ。お前、軽々と天賦ナシで魔法使ってみせただろ？　それ、ふつうに考えて異常だからな？」
「あ……」
「そうだべな。天賦を持たずに魔法を使うだけじゃなく、レイジくんは何種類もできるんだろ？　そんな天才児、どこにもいないし、努力でできるようになったのならレイジくんは努力の天才だ」
ミミノさんも賛成してくれる。
「レイジは気が優しいからな、もしかしたらいろんな人の天賦を『盗んだ』といったふうに感じていたかもしれないが……俺はまったくそうだとは思わん。お前は、お前の努力によって天賦をものにしていったのだ。俺がそうしてきたようにな。だから、胸を張っていい。お前の強さはお前だけのものだ」
「……ダンテスさん」

言うとおりだった。
僕は心のどこかで【森羅万象】によって手に入れた強さは、自分のものじゃないという思いがあった。だからラルクとケンカしたとき、

――弟くんだって、わけのわからない異常な強さは天賦で手に入れたんだろ。

そう言われ、なにも言えなくなったのだ。

「……」

うれしくて涙が出そうになった。
自分の罪を全部告白し、それを赦してもらったような感じさえして。
でも――まだダメだ。
今、話さなきゃいけないことは、それじゃない。

「レイジさん……その、レイジさんの境遇が、賢者様との話になにか関係が？」

するとアーシャがおずおずとたずねてきた。
僕はうなずいて、【森羅万象】を身体に取り込みながら道具袋からもうひとつの天賦珠玉を取り出す。
厳重に遮光用の布にくるまれたそれを剥がすと、赤、青、黄……と様々な色にちかちかと輝きを変える忙しない天賦珠玉が現れた。

「これは星１２の天賦珠玉【離界盟約】です。『裏の世界』で手に入れました」

みんな、目を細めながら星の数を見ているようだ。ある程度のところで布で覆ってしまう――目がチカチカするし。

「こりゃまたすごいっすね……どんな効果がある天賦珠玉なんですか？」

ゼリィさんの目が金貨マークになっていないのは、星８つを超える天賦珠玉なんて売り物にならないと直感的に理解できているからだろう。

「ふたつの世界をつなげる盟約についての完璧な理解と、盟約の……破棄ができるようです」

僕は８つの盟約、それに調停者について説明した。

世界は女神によってふたつに分かたれ、調停者がこれを管理していること。調停者は竜と幻想鬼人であること。

ダンテスさんはアッヘンバッハ公爵領の領都ユーヴェルマインズで、竜と戦ったことを思い出したようだ。竜は天賦珠玉に執着し、天賦珠玉を破壊していた。

アーシャにはある程度説明をしていたけれど、アーシャの一族が盟約者であることを知るとみんな驚いていた。さらにはこの町にいるライブラリアンたちもそうだ。

そして――「薬理の賢者」様が竜であることはみんなをさらに驚かせた。

あのお屋敷には違う空間に伝わるドアがあり、それは過去にクルヴァーン聖王国で調停者が使った黒いドームに似たようなものかもしれない。僕が賢者様と幻想鬼人に会って聞いた話を伝える。

世界が崩壊の危機であることを。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

聞いた5人は、黙りこくってしまった。
戻ってきた僕が浮かない様子だった理由は十分に伝わったみたいだ。

「……盟約を破棄する、というのはここにいるライブラリアンの方でもできるのでしょうか？　すべてをレイジくんが背負う必要はないと思います」

最初に口を開いたのはノンさんで、ノンさんは僕を気遣って言ってくれた。

「破棄にできるのは各条に関する項目だけのようで……ライブラリアンが破棄できるのは盟約の構造だけなんです。それを破棄した場合、世界のバランスが大きく崩れる可能性があり、手を出せないそうです」

一方で聖水人――クルヴァーン聖王国の聖王が盟約者である盟約は、盟約の「維持」に関するものだ。これを破棄することですべての盟約者に調停者が働きかけ、ひとつずつ破棄していくことができる――そう、幻想鬼人は考えていた。
だけどそれとて、誰しもやったことがない前代未聞のものであるのでリスクは大きいという。

「……【離界盟約】は、一気にすべての盟約を破棄できるので、僕

がやるのがいちばん安全ではあります」

恐ろしいことが起こるのに「安全」と言うのは自己矛盾も甚だしかったけれども。

「レイジ。盟約を破棄するとふたつの世界がつながるというのは決まっているのか？」

「はい」

僕は、盟約の「破棄」に関わる項目にそう明記されていると告げた。

そして、【離界盟約】をもってしてもわからなかった最後の項目。

☆☆☆☆☆☆☆☆盟約の意義（　／　）

・□□□□□□□□は盟約の□□を調停者に□□、□□する。

・□□□□□□□□は盟約が破棄された場合、□□に□□する。

これについては――賢者様も、幻想鬼人も知らないと言っていた。そんな項目があることすら知らないようだった。

【離界盟約】を始め、天賦珠玉は彼らが創造したものではないので、盟約についても１００％完全に知らないと言うことなのだろうか。

ただここまで話してもさすがに情報過多になるだろうから、ダンテスさんたちには話さないでおいた。

「……レイジくん。こんなの、レイジくんが背負うのはおかしいよ。わたしは今日聞いたことを忘れて、お姉さんの治療をいちばんに考えるべきだと思うべな」

「私もミミノさんと同意見です。あまりにあまりです」

ミミノさんとノンさんは、なにもしなくていいと言ってくれた。

「う～ん、あーしは坊ちゃんの好きにすればいいと思いやすけどねえ。いつ世界が崩壊するのかがわかったら、その前に全財産使って美味しいお酒飲みましょう！」

ゼリィさんは相変わらずだった。全財産とか言ってるけど、僕の借金を返す気はないのだろうか。

「……私は、シルヴィス国王陛下に相談してみてはと思います。盟約者全体で責任を持つべきことであるように感じます」

アーシャは前向きな提案をしてくれた。

確かに、各国首脳に警戒を呼びかける、なんてことは僕にできるわけもない話だけれど、盟約者同士が話し合いの場を持つ、というやり方ならできるかもしれない。

ハイエルフ、ここのライブラリアン、それにクルヴァーン聖王国なら話ができそうだ。

「……レイジ」

最後にダンテスさんは、

「お前、この世界が滅ぶのだけは避けたいと思っているだろう？」

「それは――もちろんそうです」

「ならば、盟約を破棄するしかない。そしてそれができるのは今のところお前だけだ。だから、いざとなったらやれ」

「！」

僕の背中を、押した。
いや――押してくれたのだ。

「後のことは大人の責任だ。アナスタシアのお嬢様がいいことを言ってくれたが、俺たちにできることは俺たちがやる。だからお前は『いざとなったら盟約を破棄する』ことだけに集中してくれればいい」

それ以外のことは受け持つから、最後のボタンだけ押してくれと、言ってくれたのだ。
僕が選ぶ必要はないと。
この人は――なんて温かい人なんだろう。
その言葉を聞いただけで、僕が悩んでいたことが溶けて消えていくのを感じた。

「……ありがとうございます、ダンテスさん」

僕の心は決まった。

「でも、僕も行動します。できる限りのことをします！　皆さんも、お願いです――いっしょに、この世界がなくならないよう、動いてもらえるでしょうか？」

ミミノさんはにこやかに、

「わかったべな。レイジくんがそう言うならな」

ノンさんは、ふうとため息を吐きながら、

「そこまでレイジくんが背負う必要は、ほんとうにないと思います

が……教会については私にお任せください」

アーシャは真面目な顔で、

「出てきたばかりですが、またシルヴィス王国に戻らなければなりませんね」

ゼリィさんはキョトンとして、

「あーし、なんもできなさそうですね～」

「いや、ゼリィは俺といっしょに冒険者ギルドに行くぞ」

「ええぇ……？　ダンテスの旦那、あーしにできることなんてなんもないっすよ」

「足が速い。これは重要なことだ」

「使いっ走りにする気っすね！？」

げんなりするゼリィさんに僕は言った。

「ゼリィさん、今回はいろいろがんばってくれたので、僕からの借金は――これが終わったら一度チャラにしてもいいですよ」

「ダンテスの旦那！　あーしは『使いっ走りのゼリィ』として名を馳せたこともあるんですぜ！　どこでも行きますわ！」

すさまじい豹変振りだった。これっきりで「借金」という切り札（カード）が使えなくなるのは残念だけど、どうせゼリィさんのことだからまた僕に借金をするだろう。

「じゃ、そういうわけだ――レイジ、お前はまず、お姉さんのことをしっかりやれ。もう手放しで大丈夫だというところまで回復してから動けばいいからな」

「……わかりました」
「今はわたしたちに任せるべな！」

みんなが優しくて、その優しさがうれしくて、また涙が出そうになる。

僕らは、「盟約者同士の話し合い」と、「警鐘を鳴らす」という2面で動いていくことになった。

★　謎の空間　★

「……盟約の破棄を選んだか。あの子はよい仲間に恵まれたようだ」

先ほど、「災厄の子」であるレイジがそれを告げて去って行った。仲間とともになんとかできる道を全力で探すという。

「薬理の賢者」がぽつりとつぶやくと、その姿は老人のそれからみるみる巨大な竜へと変わった。胴体こそでっぷりとした灰色の竜だったが、後頭部から背中にかけて生えているたてがみは真っ白になっており、鱗の色合いもくすんでいる。

「ふん。お前も酔狂よな。なにが『薬理の賢者』だ。こちらの世界に深く関わって、それのどこが『調停者』か」

《幻想鬼人よ。そなたのように長年なにもせず、今になって必死になって操り人形を派遣するほうがよほどバランスが悪いではないか》

竜になった賢者は、大気を震わせるような声を発する。

「大体、お前のとこの種族が天賦珠玉を循環させず、溜め込み始めたことが失敗のきっかけぞ」

《それは誰にもわからぬこと……女神様はふたつの世界はやがてひとつになることまでお考えだったのではないか？》
「……お前、言わなかったな。もしもふたつの世界がひとつになれば、ワシらは消滅するかもしれんことを」
《言う必要があったかね》
「ふん……」

ふたつの世界の監視者にして調停者である竜と幻想鬼人。
この2種族は女神によって選出されたが、確かに、ふたつの世界がなくなるのであればそのお役は御免となるだろう。

《これ以上、余計なことを、あの子に抱えて欲しくなかった》
「ずいぶんとお優しいことだ」
《そなたもそうなのではないか？　操り人形を動かし、なんとかしようとしたのは、世界に生きる命に責任をもたせたくなかった……》
「バァカ、そんなわけないだろうが。ワシはただ、世界があわさったあとにモンスターを片づける戦力として期待されたくなかっただけさ」
《そうか。8の巨大種がそなたの代わりに活躍してくれるだろう。そなたが、彼らの魂を解放し、叡智を与えてやれば……》
「……ふん。ほとんど、死んじまったがな。まったく、あいつらを創り出すのだって死ぬほど苦労したってのによ……だけど、まあ」

幻想鬼人はぶつぶつつぶやいてから、言った。

「あれを倒せるくらいだ、『災厄の子』はふたつの世界がくっついたあともうまくやるだろうさ。そのときっと『災厄の子』は『希望の子』となるんだろう」
《まったく、同感だ》

ふたりは無言のまま長い間そこにじっとしていた。
時が止まったような時間ではあったけれど、それは彼らが生きてきた悠久の年月にくらべれば瞬き程度の時間でしかなかった。

79（後書き）

これにて本章は終わりとなります。
次話から最終章、「再臨する女神と希望の子」が始まります。

コミカライズ版がコミックウォーカー、ニコニコマンガで更新されておりますので、公開期間中に是非お読みくださいませ！（ページ下部のリンクから行けます）

それといつものお願いですが、もし「面白かった」「続きが読みたい」と思われましたら「ブックマーク」と「評価」をよろしくお願いします！
作者にとって書き続けるモチベーションになります。

出会いと予兆（前書き）

レイジは「銀の天秤」メンバー、ゼリィ、アナスタシアの5人に自分の素性を、秘密をすべて打ち明けた。そして世界が崩壊の危機にあり、それを解決するために自分が盟約を破棄しなければならないこと。

仲間たちは、すべてをレイジが背負う必要はないと言い、今はラルクの治療に専念すべきだと告げる。「盟約者同士の話し合い」をすべきで、それはアナスタシアがエルフの王国に戻って進めることになり、不慮の事態に備えての「各国首脳に警鐘を鳴らす」ことについてはダンテスたちが担当することとなった。

出会いと予兆

★　港町ザッカーハーフェン　冒険者ギルド　★

石で積まれた土台に、一枚板の天板を張った冒険者ギルドのカウンターは、ダンテスが腕を乗せて身体をもたせかけてもびくともしなかった。

だがそのカウンターの向こうにいるギルドの受付嬢はびくびくしている。

「……つまり、ギルドは俺の報告を無視するってことだな？」

「そ、そのぅ、そういうわけではございませんで……あんまり突飛なお話ですから」

「これでも純金級（ゴールドランク）冒険者なんだがな。まったく相手にもされないとは」

「で、ですから、ここのギルドではそんなに重大な情報を扱えないんですぅ！　首都との通信も毎月1回の定期報告だけですし……キースグラン連邦ほど活発ではありません……」

「……仕方ねえ、か」

ダンテスはカウンターから身体を離すと、

「無理言ってすまなかったな」

きびすを返してカウンターを離れ、ギルドを出て行った。

ギルド内にはたったひとりの受付嬢兼サブマスターがひとりいるきりで、他に冒険者はいなかった。

「ふう……騎士が強すぎて冒険者のつけいる隙がない、っていうこの国じゃ、しょうがねえのかもな……」

いまだ日中は暑く、強い日射しがダンテスを照りつける。少々寂しくなった頭髪をかき上げてダンテスは宿へと向かった。

冒険者ギルドは国境を越えて支部があるので様々な情報を持っているはずだ。世界に異常があれば最初に気づくのは冒険者ギルドである可能性も高い。

だからこそダンテスは、早めにギルドの上層部に知って欲しかったのだが――あまりに設備や機能に乏しい田舎町のギルドではなにもできなかったというわけだ。

「ダンテス様」

「おっ、旦那じゃないっすか～」

「アナスタシア、それにゼリィか。今から行くのか？」

エルフの国であるシルヴィス王国はハイエルフが治めており、アナスタシアもまたハイエルフだ。

だが、ひとりでシルヴィス王国へ向かうのはさすがに道中危険もあるので、ゼリィが同行することになっていた。

「そっすよ～。船がもう出ちゃいやすからね。これを逃したら次は5日後だってんだから、急がなきゃ」

「……」

「旦那？」

「俺も行こう」

「ええ！？　なに言ってんすか。旦那は冒険者ギルドと連絡取るのが役目でしょ」

「ここじゃダメだ。もっと大きい町に行かなきゃならん」

受付嬢はこう言った。

――キースグラン連邦とほど活発ではありません。

と。

であれば光天騎士王国に留まる理由はなく、ザッカーハーフェンからの移動は船がいちばんいい。

「ダンテス様。私とゼリィ様で、シルヴィス王国へ向かう途中にギルドに連絡を入れておきますよ？」

「そうっすよ。大体ノン嬢はどうするんすか？」

今、ミミノとノンはふたりでこの街の領主の屋敷に向かっている。領主を通じて光天騎士王国の中枢へと「世界の崩壊」についての情報を伝えるためだ。

さらには「薬理の賢者」に関する報告もするために今日は一日いっぱい掛かるだろう。

「ふたりはそのままラルクの治療に当たることになってる。俺がいる必要はない」

「でも……」

「ノンとは、もういっぱい話したさ」

すでにダンテスは、「ザッカーハーフェンでのラルクさんの治療が終わったら、私は教会に戻ります」とノンから聞いていた。

いつか、この日が来ることはわかっていた。

だから「そうか」とダンテスは受け入れた。

「それにこれが最後の別れというわけでもねえし、ノンにはノンの

やるべきことがある」

師匠のリビエラを通じて教会の上層部に世界の危機について伝える役目こそが、ノンの仕事だった。

「……わかりやした。正直、旦那が来てくれれば百人力っす」

「ありがとうございます、ダンテス様」

「安心してくれ、アナスタシア。俺が目を光らせている間は、ゼリィに酒なんて呑ませねえからな」

「旦那！？　1日1杯くらいはいいでしょ！？　せめて1瓶！」

「増えてんじゃねえか」

3人は急ぎ足で港へと向かうと、ザッカーハーフェンから国境を越えてキースグラン連邦へと向かう定期便の乗船手続きが始まっていた。

レイジのいる宿に言づてを頼み、船に乗り込むと一一程なくして客船は出港した。

（……ノン、またな）

娘であるノンと離ればなれになるのはいつ以来だろうと、遠ざかる陸地を眺めながらダンテスは思う。

思えば、パーティー「黄金旅団」で仲間をかばって石化毒を受け、口止めしたにもかかわらずミミノが教会のノンに知らせてしまい、ノンは飛んできた。一度入れば外に出られない、その代わり衣食住の保証はされている教会組織を出るというのはかなり無理な話なのだが、「師匠のリビエラが口添えしてくれたおかげで特例として認められた」とノンは言っていた。

そのときダンテスは思ったのだ一一「これが最後に、娘と過ごせる時間なんだな」と。

だから話すべきことは話した。それまで話すこともなかった、ノンが小さいころに亡くなった妻についても。
遺言のつもりで。

（だけど今は違う。まだまだ話したりないことばかりだ）

ノンが教会に戻ることはわかっていた。
そして自分が冒険者として活躍できるタイムリミットが近づいていることも。
であれば、ノンの赴任する教会がある町に住もう。そして教会に通いながら、その町で生きていこう。
そう――考えるようになっていた。

（石化が始まったときにゃ、考えることもできなかった……夢物語みたいな生活だ。ノンのそばで、穏やかで、幸福な日々を送ることができるっていうんだからな）

夢を見るきっかけは、レイジだ。
レイジが自分の石化を治してくれた――そのレイジのためにできることがあるのなら。

（世界を救う手伝いくらいはお安いご用だ）

★　キースグラン連邦　首都ヴァルハラ　★

世界を旅してきたダンテスであったとしても、この大都市に来るのは初めてで、そしてその偉容には驚かざるを得なかった。
それだけでひとつの町はありそうな、巨大な白亜の城を中心にし

て広がる都市。ヴァルハラは、いくつもの国を束ねるキースグラン連邦の中心地であり、世界でも比類なき最大都市だった。

都市というものはそれ自体が生き物のようなものだ。

呼吸をし、食料を消費し、血のように人や金が流れる。

馬車に大きな道路、という既存の技術だけではヴァルハラほどの大都市を生きながらえさせることは不可能であり、自然と技術は進歩した。

リィィンゴォォォン……リィィンゴォォォン……リィィンゴォォォン……。

ダンテスが、足元に埋められた鉄の棒に怪訝な顔をしていると、鐘の音が遠くから迫ってくるのが聞こえた。

「オッサン、そこに立ってちゃ轢かれるぞ？」

「む」

「こっちこっち」

町の子どもに引っ張られるように鉄の棒から離れると――しばらくして巨大な鉄の車輪に載せられた貨車と客車が走ってきた。地響きを立てて通り過ぎる車両は、不思議なことにそれを牽く馬もなく、先頭車両から立ち上るもうもうとした黒い煙がまた異様だった。

「な、なんだアレは……」

「知らないのかよ、オッサン。さてはお上りさんだな？　魔術と蒸気で走るスチームトレインだ」

「スチームトレイン……」

ヴァルハラの町を切り裂くように線路が敷設され、これらはヴァルハラ運営上、すでに必要不可欠なものとして利用されていた。

馬に頼らない動力は魔導飛行船が代表的なものとしてあったが、レフ魔導帝国で走っていた自動車に近いシステムとして、蒸気機関車がヴァルハラを走っていた。

「助かったよ、坊や。ついでに冒険者ギルドに案内してくれないか」
「いいぜ」

さっ、と差し出された手のひらに、ダンテスは銀貨を1枚載せた。

「ヒューッ、オッサンは気前がいいね。こっちだ、ついてきな」

都会で暮らす子どもはこんなふうに大人びるのだろうか……ノンは田舎暮らしだったからのびのびと、それこそ近所の男の子たちを逆に泣かすくらいの勢いで育っていたよなあ……なんて思いつつ、子どもに案内されて、ダンテスは冒険者ギルドへとやってきた。

すでにアナスタシアとゼリィとは別れており、彼女たちも今ごろはシルヴィス王国に到着しているころだろう。

子どもに手を振って別れを告げ、ダンテスはギルドへ――表に掲げられた看板は確かに冒険者ギルドのものなのだが、見た目は高級ホテルのようなそこへと足を踏み入れる。

内装もまたホテルのロビーだった。そしてラウンジにたむろしているのは、いくつもの冒険者ギルドで見てきた屈強な男たちではなく瀟洒な衣服に身を包んだ商人（ビジネスマン）たちである。

「――最近はとんと見かけなかったのに、妙な格好の冒険者が来ましたな」
「――まったく。田舎者だと一目でわかります」
「――田舎で食い詰めて都会に来たといったところでしょう……」

そんな声が聞こえるが、気にせずダンテスはずんずんと進んだ。

木目の美しいカウンターにいたのは、見目麗しい受付嬢がふたり。制服を着ていなければここがホテルのフロントだと勘違いしているところだった。

「ヴァルハラ冒険者ギルドへようこそお越しくださいました」

ダンテスが近づいていくとふたりは同時に立ち上がり、腰を折って一礼をした。

「誠に恐れ入りますが、当ギルドは一般冒険者様向けの依頼を取り扱っておりません。お手数とは存じますが、都市外郭にあるギルド支部にお越しくださいますようお願いいたします」

「知ってる。ギルドマスターに会わせてくれ」

ダンテスは、ザッカーハーフェンのギルドでしたのと同じように左肘をカウンターに乗せて身体をもたせかけた。

市内に入る前に、すでに外郭のギルド支部には行っている。そこで「ギルドマスターに会いたい」と言うと「中央のギルドに行かないとダメ」と返されたのだった。

「誠に恐れ入りますが、ギルドマスターは多忙であり一般冒険者様との面会はできません」

「頼む、火急の用件だ。取り次いでくれないか」

ダンテスは冒険者証を差し出す――金色の冒険者証を見ても受付嬢は眉ひとつ動かさなかった。

各地方のギルドでは絶大なネームバリューを持つ「純金級」も、ヴァルハラのギルドともなればその効力も薄れる。

「純金」の上の「白金（プラチナ）」、最高級の「天銀（ミスリル）」といった冒険者とのつながりもあるからだ。

「――たかだか純金級でギルドマスターに会えると思っているとは……」
「――田舎者は怖い物知らずですな」
商人たちが囁いているが、ダンテスには聞こえない。
（ミスったな……。冒険者ギルド全体を統括するギルド本部があるヴァルハラなら、話が早いと思ったんだが、これなら別の町のギルドマスターから報告をあげてもらったほうがよかったかもしれん）
受付嬢の態度はあくまでも丁寧だった。
「恐れ入りますが、ギルドマスターに直接連絡ができるのは白金級の冒険者からとなっております」
「そうだったのか」
「申し訳ございません」
「いや……邪魔したな」
ダンテスの冒険者歴は結構長いが、今まで積極的に横のつながりを作ってこなかったせいで白金級以上の冒険者の知り合いはなかった。
どうするべきか――悩みながらギルドを出ようとしたダンテスの前で、建物のドアが開いた。
「ん？」
「お……？」
そこにいたのは――、

「おい、お前ダンテスか!?　なんでこんなところにいるんだよ!」

射し込む外の光を浴び、きらきらと照り輝くスキンヘッド――「消えぬ光剣」の異名を持ち、アッヘンバッハ公爵領領都ユーヴェルマインズ冒険者ギルドの訓練官にして、ダンテスとともに竜と戦ったヨーゼフだった。

「それはこちらのセリフだ。あなたはどうしてここに」

「俺か？　……ちっと『六天鉱山（シックスマイン）』で問題があってな。いろいろと話が必要だもんで、使いっ走りで来たんだよ」

声を潜めたヨーゼフの言葉は、ダンテスにしか聞こえなかったろう。

「……問題？」

「……ああ。誰にも言うなよ」

ヨーゼフはダンテスに耳打ちした。

「六天鉱山」で天賦珠玉が産出されなくなった――と。

★　シルヴィス王国　★

とんぼ返りしてきたアナスタシアに、シークレットサーヴィスの面々は白けたような顔をしていたけれど、兄であるマトヴェイはうれしそうだった。

父にして国王であるシルヴィス8世に面会を申し出ると、他の兄姉たちは一様に反対したために、マトヴェイの双子の姉のユーリーがまず話を聞くということになった。

「悪く思わないで。この国を出て行くことを許可したのは、ひとえに、あなたがハイエルフ王族の身分を捨てたことと同じだから」
「わかっています、ユーリー姉様。こうして姉様に話を聞いていただけるだけでも幸いです」
「俺もいるぞ、俺も」
「もちろんマトヴェイ兄様も」

アナスタシアに言われ、それだけで喜色満面のマトヴェイ。
先日、ようやく戻ってきた可愛い妹が、また出て行くことになって彼女を送り届けて以来ぼけーっとなにをするでもなく日々を送っていたところにアナスタシアが戻ってきたのだ。
ちなみにゼリィは「部外者は一歩たりとも入るな」と追い出されている――のだが、実はこっそりと侵入し、ハイエルフ王族のいるお屋敷そばまでやってきていた。今のところシークレットサーヴィスはこの侵入者に気づいていない。

「それで……話ってなに？　実はこちらも忙しくて、あまりアーシャに構っている時間がないの」

ユーリーはそう言いながら、ティーカップを口元に運んだ。
樹上にあるお屋敷の庭で、降り注ぐ陽射しのなか、お茶をしているユーリーの姿はそれだけで一幅の絵になりそうなほどに美しい。

「はい、実は……」

だからこそアナスタシアは、自分が話している内容が現実離れした、おとぎ話のように感じられた。
ふたつに別れた世界のバランスが崩れていること。
盟約者たちが盟約を破棄して、ふたつの世界をひとつにしなけれ

ば崩壊の危機が迫ること。
世界がひとつになれば凶悪なモンスターがあふれること。

「……あなたが『裏の世界』に行ったことを、それにレフ魔導帝国に出現したレッドゲート（赤い門）を知らなければ、聞く価値のない与太話だと断じるところね」
「それに……」

ユーリーのあとにマトヴェイが言いかけ、双子の姉弟は視線を交わし、うなずきあった。

（なんでしょうか……おふたりはなにか別の情報をお持ちのような）

はたして姉は、こう言った。

「実は、『三天森林（サードフォレスト）』の天賦珠玉が、枯渇しつつあるの」
「枯渇……！？」
「ほんとうは部外者であるあなたに話してはいけないことなのだけれど、今の話を聞いて得心したわ。我らに伝わる盟約は2項目。『天賦珠玉を取りすぎてはならない』、『天賦珠玉は世界を構成する』……世界を構成する力が弱まっているのであれば、天賦珠玉がなくなるのも致し方なしということね」
「――――」

そのときアナスタシアは、背筋が凍るような恐怖に襲われた。
レイジの言葉を信用していなかったわけではない。だが、彼の話した「世界崩壊の危機」はどこか現実味を持っていなかったのだ。
「裏の世界」に実際に行ったアナスタシアでさえそうなのだから、この世界の人たちを納得させることはとてつもなく難しい。
だが「新たな天賦珠玉が出現しない」という形で、現在、危機は

迫っているのだ。

「ユーリー姉様、マトヴェイ兄様、お願いがあります。世界の崩壊を防ぐためには盟約の破棄が必要です」

「わかっているわ。実はその件については陛下とすでに検討を始めているの。だけど……私たちが盟約の破棄をしたらなにが起きるかわからない。天賦珠玉が消えるかもしれない」

「え……！？」

「天賦珠玉がない状態で、モンスターと戦える？」

「そ、それは……」

考えてもみなかった。確かに盟約は、盟約者と調停者、それに天賦珠玉から成っている。

その盟約を破棄し、天賦珠玉が消えたら――その状態で「裏の世界」のモンスターと戦うことになったら、どうなるのか。

巨大ヤギであるフォレストイーターのような化け物だっているのだ。

モンスターによって町が滅ぼされれば「裏の世界」と同じ状況になるのではないか。

「……とはいえ、やるしかないのだけど」

「そうだよな。俺たちは盟約者として正しく振る舞わなければならない」

動揺するアナスタシアをよそに、ユーリーとマトヴェイの腹は決まっているようだ。

「兄弟たちは反対している人も多いけど、アーシャがこれだけの情報を持ってきた以上はやるしかないでしょうね。一度、国王陛下と話してみるわ」

「お姉様、ありがとうございます」
「いいのよ。でも、やるとなったら忙しくなるからね。あなたも戦場に駆り出されるわよ」
「……はい、覚悟の上です」

たとえ、森を愛するエルフらしからぬ【火魔法】で白眼視されることになったとしても、アナスタシアはすでに決心していた。
レイジが戦うのだから、自分も戦うと。

「ふふ……あのヒト種族の子が、そんなに好きなのね」
「え！？」
「そんなに顔を赤くして。あなた、結構顔に出るのよ」
「そそそそんなことないですよ！？」
「陛下も知ってるし」
「陛下も！？」

動転するアナスタシアを見て、ユーリーは微笑み、マトヴェイは可愛い妹が遠くに行ってしまうような切なそうな顔をするのだった。

出会いと予兆（後書き）

最終章なので各話のサブタイトルもつけていこうかと思います。
またチーズさんに温かいレビューをいただきました。ありがとうございます！
レビューもまた作品の一部。ぜひご覧いただければ幸いです。

それと書籍版「オバスキ」ですが……2巻の発売が決定しました！！！！

やった……これでクルヴァーン聖王国編が出る！
エヴァお嬢様がイラストになりますよ！！
さらに、がっつり改稿をして、お嬢様のお嬢様度が大幅アップしているのでこれはほんとに多くの人に読んでいただきたいです。
なんなら2巻からでもＯＫ（Ｗｅｂ版既読の方のみですが）。
発売日は来月２月２０日です！　書影や店舗特典についてはまた告知しますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

あのときと同じ顔で

ひとりで大丈夫だと言ったのは僕だ。
だから、ミミノさんとノンさんには町長、教会組織の幹部であるリビエラさんに話をすることをお願いし――僕はひとり、ラルクがいる宿へと戻ってきた。
これから僕はラルクを説得しなければならない。
彼女に【影王魔剣術】の天賦を戻し、その上で、それを破壊することを承諾してもらうのだ。
ラルクが眠っている隙にやってしまうことも考えたのだけれど、あまりに卑怯だし、どうしようもなく僕とラルクの仲が決裂したときの最終手段だと思っていた。

（ラルクにとって、【影王魔剣術】は鉱山を抜け出すための力で、僕よりもラルクはずっとずっと天賦珠玉が重要だということをわかっていた。だから彼女にとって……【影王魔剣術】は彼女自身そのものだ）

それを捨てさせることがどれほど難しいか。

「……だけど、怯んではいられない」

僕は宿に入った。
朝食、チェックアウトの時間帯を過ぎたカウンターは無人で、食堂に視線を向けると、ラルクの仲間であるクックさんがいた。

「アンタは――」
「おはようございます。ようやく戻りました」

「……パーティーの仲間は、ダメだったのか？」

僕が深刻な顔をしていたせいだろう、クックさんに聞かれ、

「あ……いえ、そちらは大丈夫です。全員無事に帰還しています」

「そうなのか？　それじゃあ、賢者様との話し合いが……？」

「……ラルクの身体を元に戻す方法については、聞くことができました」

「なんだと!?」

「ただちょっと難しいので……僕からラルクに話をさせてもらえますか？」

「わかった。……すまねえな」

「どうして謝るんです。むしろ僕はクックさんに感謝しかしていないですよ」

鉱山を出たラルクがどうやってクックさんたちを仲間にしたのかはほとんど聞いていないけれど、孤独だった彼女に寄り添ってくれたクックさんたちに感謝こそすれ、謝られることなんてない。

「俺たちはお嬢に命を助けられた。だからお嬢になにかあったときは俺たちが命を張る番だと覚悟してたのに――なんもできなかった」

「そんなことは」

「アンタみたいな小さい弟に、全部任せちまったことが悔しくてよ……」

賢者様に会いに行くという段階で、クックさんたちも同行を希望したのだけれど、ラルクのそばに誰かがついていなければならないことと、純粋な戦闘能力で考えても「銀の天秤」には及ばないこと、それに時間もなかったことからクックさんたちには残ってもらったのだ。

そこまで気を配る余裕がなかったと言ってもいいかもしれない。

「……なら、お願いがあります」

少年の僕が下手な慰めを言っても、むしろもっと誇りを傷つけてしまうだろう。

「なんだ？　俺たちにできることならなんでも言ってくれ」

「ありがとうございます」

ほんとうに、ラルクはいい人たちと巡り会ったんだな。

「僕はなんとしてでもラルクの身体を治したいと思っています。そのとき、ラルクが僕を絶縁するかもしれません」

「なっ……なにをやる気なんだ」

「それはまだ言えません。ですが……僕を、ラルクが絶縁したとき、クックさんたちはラルクのそばにいてあげてください。お願いします」

「そんなことはお安いご用だが」

「絶対ですよ。絶対の絶対に、ラルクの肩を持ってください。必要とあらば僕に石を投げてください」

「アンタ……」

最終手段を執ったときに、ラルクは僕と絶縁するかもしれないし、その覚悟はしていた。

いや、今ようやく覚悟ができたと言うべきだろうか。

クックさんたちがいるなら、ラルクは大丈夫だ。

僕が絶縁されたとしても。

「……俺はよ、クソみたいな生き方しかしてこなかったと思ってる。

必要悪だなんて言葉では片づけられん、他人様の財産を奪い、生活を脅かすことで生きてきた。お嬢に会ってから、ずいぶん変わっちまったけどな……とはいえ、そんな生き方をしてきたからこそわかることもある」

クックさんは手を伸ばし、僕の右腕をぽんぽんと叩いた。

「善く生きるということは苦しいんだ……アンタが苦しんでいる姿は、アンタがまっとうで、心の底から善人だからだ」

「……僕はそんないい人間じゃ」

「約束する。もしお嬢がアンタに石を投げるなら、俺も心を鬼にしてアンタに石を投げてやる。だけどそれから先、何年かかっても、お嬢の誤解を解いてやる。世界でいちばんお嬢のことを思って、愛してくれたのは、他ならぬアンタ――レイジだってよ」

それだけで十分だった。クックさんがそう言ってくれただけで、僕は最後の迷いを捨てることができた。

「行ってきます」

「ああ。行ってこい」

僕は食堂を出て、宿の2階へと上がっていく。

宿泊客がいないのか、あるいはみんな出払って活動中なのか、ひっそりと静まり返っていた。

開かれた窓から陽射しが射し込んで、かすかに舞い上がったホコリが見える。

ラルクがいるはずの部屋の前に立ち、ノックした。

「――なんだよ、クックか？　あんま腹減ってねーから、パン持ってきても困るぞ」

声が聞こえた。
ぶっきらぼうで、女の子らしさなんて全然ないラルクの声。
僕と言い争ったときの悲痛な叫びじゃない、いつものラルクの声。
（ああ……よくなってる。最悪の状態は脱しているんだ）
そう思うだけで胸がいっぱいになりそうで、僕は奥歯を噛みしめ、自分のやらなきゃいけないことを思い出す。
「僕だよ。レイジだ」
はっ、と息を呑むような気配が感じられた。
これからラルクの口から出てくるのは、拒絶なのか、あるいは――わからない。あれからミミノさんがラルクと話してくれたみたいだけれど、ラルクは僕よりもずっとガンコだから、そう簡単に自分の考えを曲げるとも思えないし。
「な、中に入っても……いいかな？」
言いかけたときだった。
扉が外側に開かれて、危うく僕の顔にぶつかるところだったけれど――そこにはラルクがいたのだ。
薄手の、麻で織られた寝間着姿で、足元は裸足。病的なまでに白い肌はわずかに血色がよくなっていたけれど――確かにラルクがいた。
「弟くん……無事だったのか？」
「あ、うん」

この反応はあまりに予想外過ぎて、僕は間の抜けた返事しかできなかった。

「～～～～」

焦点が合わないラルクの目は、彼女の視力がいまだ回復していないことを示している。

だけどその瞳が潤んだと思うと、ぽふり、と僕の胸に右拳をぶつけた――とても軽く。

「バカ野郎……あたしのために無茶ばっかしやがって……」

そのまま倒れるように前屈みになったラルクの額が、僕の胸に当たる。

「……ごめんな、弟くん。あたしはいい姉じゃなかったよな……。あたしは【影王魔剣術】の力を、弟くんを守るために手に入れたのに……それなのに、あの力が自分のものだと勘違いして、今度はアンタを危険にさらしたりして……あたしは、アンタが生きていて、元気だったらそれで満足だったのに」

聞いて、僕はそれまで考えていた説得の言葉を全部忘れてしまった。

「ごめん、ラルク。僕もバカだった。僕の家族はラルクしかいないのに、僕が正しいと思ってることを押しつけようとした」

「……まだあたしを、姉だと思ってくれるのか……？」

「当たり前だよ」

「ありがとう……」

レイジ、と姉が小さくつぶやいた。

思っていたよりすんなりと、と言うより、僕の覚悟やクックさんに話したことがなんだったのかと思うほどに――あのときは僕も必死だったのだから仕方なかったのだけれど、案ずるより産むがやすしとはこういうことなんだな――ラルクは【影王魔剣術】の破壊を承知してくれた。

「お、アンタか。仲間はみんな呼んでおいたぞ」

そして僕をラルクの元に送り出したクックさんはと言うと、のんきな口調でそう言い、2階から戻ってきた僕を出迎えた。

スカウトさん、鍵屋さん、エンジニアさんの3人もいた。

「えっと……その」

「うまくいったんだろ？　まあ、大丈夫だとは思っていたが」

「……そうだったんですか？」

「だけどアンタも本気の顔をしていたし、水を差すのも悪かろうと思ってそこに乗っかったんだ」

「……」

マジか。

僕だけ覚悟損みたいなところあるよね、これ……。

「そうガッカリしなさんな。アンタの考えじゃ、最悪のケースもあったんだろ？」

「それは……まあ……」

「なら、上手く収まってよかったと笑いねえ」

「……それもそうですね」

スカウトさんたちも「よかったよかった」と笑っている。

これでいいのだろう。

「そんで、お嬢は治ったのか？」

「いえ、これからです」

僕はやろうとしていることを説明した。

星６つの天賦珠玉を破壊すると告げたときにはさすがのクックさんも口笛を吹き、エンジニアさんは「お、お、お、おう……お嬢が助かるためならしょうがないよな……しょうが、うん……」と目を泳がせていた。

それくらい星６つの天賦珠玉は貴重だからね。

だけどクックさんは革袋にしまわれていた【影王魔剣術】を僕に渡してくれた。

「あともうひとつ頼みがあるのですが――」

天賦を破壊する【オーブ破壊】の天賦がどのように作用するのかがわからなかったので、「確認のため」と称してクックさんに付き合ってもらって「天賦破壊屋」というそのものずばりの店へと向かった。

この【オーブ破壊】の天賦は「ユニーク特性」で、取得や使用については国に届け出が必要になっている。【オーブ着脱】に比べればレアリティは低いとはいえ、管理が必要なものではあるのだ。

「……とまあこんな感じらしいが、大丈夫か？」

「はい」

クックさんが持っていた【腕力強化★】を破壊するプロセスを見せてもらい、僕は【森羅万象】でこれができるようになったことを確信した。

「じゃあ、ラルクを連れて行ってきます」
「おお……。俺たちは、まあ、お邪魔のようだな」
「いえ、そういうわけでは。終わったらすぐに戻りますので」
「ああ」

宿に戻り、僕はクックさんたちにそう言うと、ラルクの部屋へと向かった。
僕が天賦を学習できることは説明できないので、一応、外に連れ出すフリが必要だ。

「ラルク、入るよ――」

彼女の部屋に入ると、ベッドには普段着に着替えたラルクがいた。
男のようなシャツにズボン。動きやすい服装は空賊時代の服だ。
ラルクはこれから先、切った張ったの戦場に行く必要もないから、町で暮らすことだってできるはずだ。
だけどそれを話すのはまだ先でいいだろう。

「……」
「……髪、乱れてるね」
「ああ……」

さっきはうなずいてくれた天賦珠玉の破壊も、いざこれからやるとなると緊張するのか、ラルクの表情は暗かった。
だけれど体調が戻れば、気持ちもきっと変わるはずだ。
僕は櫛を使ってラルクの髪を整える。長い毛を梳(くしけず)ってひとつに束

ねていく。鉱山にいたころ――鉱山での貧しい食事をしていたあのころでもラルクの髪は美しさを持っていたけれど、今はバサバサで艶がなく、枝毛ばかりで生命力が感じられなかった。

（でもそれも……すぐに元に戻る）

飾り紐でくくると、多少は見られるようになった。

「……悪いね。髪なんて気にしなかったから。治療に来ていたリビエラさんはやたらとあたしに『着飾れ』だの『髪は女の命』だの言ってきたけどさ」

ベッドから下りて立ち上がろうとしたラルクは足元がふらついて倒れそうになる。僕はそれを腕で支えながら、

「ラルク、目が見えるようになるまでの辛抱だから」

「……あ？　ちょ、おいっ、弟くん！？」

ラルクを両腕で持ち上げて抱えた――お姫様抱っこというヤツだ。

「バカ、止めろこんな恥ずかしい」

「今は目が見えないんだよね？　じゃあ恥ずかしくない」

「そういう問題じゃねえ！」

ラルクは文句を言ったけれど、僕の腕から逃れるほどの力すらなかった。

階段を下りていくと食堂にいたクックさんたちが目を丸くする。

「ヒューッ。いいねえ、こうして見るとお嬢もちゃーんと女の子だ」

「スカウト、後で覚えてろ」

「そんなこと言えるくらいにはお嬢も回復したんだなあ」
口笛と拍手に冷やかされながら僕らは宿を出た。
さて――と。
「ラルク。それじゃ行くよ」
天賦を破壊する店にわざわざ行く必要はないし、その店主が【オーブ視】みたいなものを持っていたら困ることになるので念には念を入れて僕は丘に向かった。
ラルクを抱きかかえているからだろう、なんだか微笑ましいものでも見るような目で見られるけれど、気にせず進んでいく。
【補助魔法】を使う必要もないくらいラルクが軽かったのが、悲しかった。
丘は一応町の内部になっているのだけれど、町を見下ろせるところで、とりたててなにがあるわけでもない場所だった。
日中の丘には人気がほとんどなく、僕はラルクを連れて見晴らしのよい草原へとやってきた。
沖合にせり出した岬の、小高い丘と灯台が見える。
風が吹き抜けて、草の匂いが鼻を抜ける。
僕は彼女を草の上に下ろした。
「なんだここ、草っぽいとこじゃねーか。なにすんだよ」
「ラルクに話していなかったことを……話すよ」
「……」
僕が言うと、ラルクの背筋が少し伸びたように感じられた。
「でもその前に、身体を治そう。【影王魔剣術】……入れるよ」
「あ、ああ」

革袋から取り出した星６つの天賦珠玉を、ラルクの両手に押し当てる。
僕は【オーブ着脱】の天賦も学習しているので相手に天賦を与えることもできる。

「ん……あっ、ああ、あああああああっ！！」

ずぶりとラルクの身体に吸い込まれた天賦珠玉が、彼女に吸収されていく――それと同時に、色を失っていた彼女の瞳が光を取り戻す。

「……見える」

彼女は周囲をきょろきょろと見回した。
眼下にはザッカーハーフェンの町、遠くにはきらきらと陽射しが波間に照り返す港があり、ウミネコが飛んでいくのが見えたはずだ。

「弟くん……いや、レイジ」
「うん」
「アンタはあたしが、天賦珠玉を返してもらったらこの力を使って逃げ出すとは思わなかったのか？」
「思わなかったよ」
「どうして。あたしがあれほど、【影王魔剣術】を欲しがっていたことは知ってるだろ。そのためにならウソのひとつやふたつ吐くかもしれない――」
「思わなかったよ。ラルクはそんなことしない」
「どうして」
「ラルクはラルクだから」
「……」

「ラルクは、ずっとラルクのままだから。僕の姉のラルクだから」
「……」
僕を見つめていたアメシストのような紫色の瞳は、ふいっとそっぽを向いた。
「……かなわねーな、弟くんには。あ、いや、レイジか……」
「いいよ、『弟くん』で。僕はラルクの弟だもん」
「……」
ぽりぽりと首筋をかくラルクの耳が真っ赤だ。心拍数の上昇、体温の上昇――【森羅万象】さん、そんなこと教えてくれなくったってわかるよ。
「じゃあ、天賦（それ）、消すよ……」
「ああ」
今度は僕の目をしっかりと見つめて、なんでもないように――まったくたいしたことではないかのように、ラルクは返事をした。
彼女は目を閉じる。
そんなに簡単に割り切れたのだろうか。
あれほど必要としていた天賦（ちから）を消すというのに。
大体どうやって天賦を消すのかも説明していないのに。
それとも僕を――信頼しているから、すべてを任せるのか。
（こんな感じなんだ……）
ラルクの手を握って目を閉じると、彼女の身体の中に強烈な光が見える。これが天賦なのだろう。
それはごわごわとしたような触感があるのだけれど、力を込める

と、みしりとした手応えがあり、次にガラスのように砕け散った――雪玉が砕けたようにちらちらとした光が舞って、闇に溶けて消えていった。

「……終わったな」

僕が目を開けると、うっすら瞳を開けたラルクがいた。

天賦が失われたことがわかるのだろうか。

「目はどう？」

「見えるよ。体調も悪くない……」

風が吹いてラルクの長い髪を揺らした。彼女は視線を町へと、海へと向けた。

悪くない、の後になにか言葉が続きそうだった。「だけど」という言葉とともに。

でも彼女は言わなかった。それなら僕も聞かない。聞いても仕方がない。

賢者様の言ったとおり彼女の体調は戻った――もちろん健康体からはまだまだ遠いのだけれど、ここからは少しずつ戻していくことはできるだろう。少なくとも寝たきりになるようなことはもうない。

「……ラルク。話があるんだ。ちょっと長くなる」

「聞くよ。今のあたしにはだいぶ時間があるしね」

ラルクの隣に腰を下ろして、僕は今まで起きたことを全部話した。

生まれの秘密や天賦の秘密を聞いても、ラルクは特別驚いたような感じもなければ感情的になったりもしなかった。

最後まで聞き終えて、彼女は僕の頭に手を伸ばした。

そして僕の頭をくしゃくしゃとやった。

がんばったんだな、弟くん。

そう言ったときのラルクは、鉱山にいたときの顔と同じだった。

あのときと同じ顔で（後書き）

姉と弟、ようやく心を通わせることができました。
ここまで長かった……。

手を握って、開いて――ラルクはその場でぴょんぴょんとジャンプしてみてから言った。

いくら回復したといってもついさっきまで寝たきりだった彼女なので僕はハラハラし、案の定足がもつれて草原の上にラルクは座り込んでしまった。

「だ、大丈夫!?」

「……うん。完璧に健康ってわけじゃないけど、もうふつうに暮らすことくらいはできるな」

「ほんと？　無理してない？」

「おう。これなら酒場や港で働くこともできそうだぜ」

ラルクはニカッと笑ってみせたけれど、僕の【森羅万象】は違う情報を教えてくれていた。

彼女は、相当無理している。

もちろん視覚すら失われていたときに比べれば元気も元気なんだろうけど、いわゆる「健康体」にはまだまだ遠い。

（……僕に心配させたくないんだな）

水くさいな、って思う。僕とラルクは姉弟なのに。いや、姉弟だからこそ強がりたいのかな。

「お前のおかげだよ、レイジ」

そんなふうに言われたら、僕がもうどうこう言えることはない。

「……ラルク。これからどうしたい？」

問題は、これからのことだ。

僕はふたつの世界をひとつにすること、そしてその後に起きるであろう混乱に備えるべく行動しなきゃいけない。

きっと大変な旅と、交渉になる。

それに付き合うにはラルクの体力はもたないだろう。

「あたし、『六天鉱山（シックスマイン）』に行こうかと思うんだ」

「え？」

彼女の答えは僕がまったく予想しないものだった。

「……あたしは、いくら逃げるためとは言え、多くの鉱山兵を殺しただろ。その人たちにも家族がいたはずだし……」

「罪を償うってこと？」

「……」

ラルクはじっと黙ってから、言った。

「……あたしの父親はね、兵士だったんだ。それが戦争で死んでさ、ふつうなら遺族にまとまった金が支払われるはずなんだけど、負け戦だからそんなこともなくて。あたしの母親は父親が死んだことを受け入れられずにどこかへ消えて、残ったあたしを遠い血縁の人たちが鉱山に売ったんだ」

僕はラルクの過去を初めて知った。

「どうってことない、どこにでもある話だよな？」

冗談めかして言う彼女は、僕の隣にすとんと座った。

「……あたしのせいで、あたしみたいな境遇の子が生まれたかもしれない。そう思うとさ、なにかしなきゃいけないんじゃないかって思って……」

「ラルク……」

「ただ、勘違いするなよ？　あたしはもう一度同じ状況になったとしても、天賦を手に入れて道を切り開く。あのときとった行動は、後悔してない」

契約魔術というまやかしで、僕らは働かされていた。

あの鉱山で正当な報酬が支払われていたとは思えないし、それが奴隷を使う人間の――領主の権利だなんて認めたくない。

僕やラルクが働いていたときの現状を正確に知った今なら、あのときの鉱山のやり方は間違っていたと思う。

僕だって黒髪黒目だという――「災厄の子」の言い伝えだけで殺されそうになったのだから、同じことがもう一度起きたら、僕はもう一度逃げ出すだろう。

でも、確かに――ラルクの言ったとおり、あの落盤事故とその後の暴動で不幸になった子どもたちがいるのなら、救いたいという気持ちはわかる。

「ラルク、僕はヒンガ老人の最期に立ち会えたんだ」

「……そうか、あのジイさんは死んだのか」

「ヒンガ老人の遺言に従って、お孫さんに会ったりしたんだよ」

僕はそのことがあったから、たぶん六天鉱山での出来事をうまく自分の中で消化できたのだと思う。

だけどラルクはあの暴動で鉱山を飛び出したっきりだ。

彼女の中でまだ鉱山での出来事は居心地が悪い記憶のままなのだろう。

「自己満足にすぎねーってことはわかってるんだけどさ、あたしは六天鉱山に行ってみるよ」

「……そうだね」

「弟くんは、やらなきゃいけないことがあるんだろ？」

「うん」

つまり、僕らはここでまたお別れだということになる。

「ラルク、これを持っていって」

僕は道具袋から、厳重に革の袋と綿でくるんだ、青色の光を放つ石を取り出す。

「……キレイだな」

「燐熒（りんけい）魔石っていうんだって。キレイだけど、ヒンガ老人の歯に仕込んであったんだよ」

「げっ。きたねー」

ラルクの言い方が、まるでヒンガ老人を前に勉強していたときのそれと同じで、僕は思わず噴き出した。

「笑うことねーだろ。あのジイさんの歯かよ、これ」

「まあ、そんなようなもんだね。ラルクが持ってってよ」

「……でも、これはお前が」

「ううん。次に会ったときに返してくれればいいから。流した魔力を3から4倍にして返すらしいけど、これだけ小さいと使い道はないかも」

「……」

ラルクはちょっと迷ったようだったけれど、受け取った。

これが最後の別れじゃない、という意味を込めたのだから受け取ってくれないと困る。

「あと、これ」

僕は財布にしている革袋を取り出した。その、ジャラリという硬質な音でなにが入っているのかラルクにもわかったらしい。

「バ、バカ、金なんてもらえねーよ」

「気取るなよ。大体、鉱山で死んだ兵士さんの遺族を探したところで、渡せるお金はあるの？」

「……そりゃ、お前、さっきも言ったとおり港とか酒場で働いてだな」

それ、いつまで掛かるんだよ……。

「た、ため息吐くんじゃねーよ！　生意気だぞ、弟のくせに！」

「これは姉も弟も関係ないでしょ。ほら、受け取って。貸しておくから必ず返しにきて」

「……」

さっきの魔石よりもはるかにイヤそうに、ラルクは受け取った。

感情としてはイヤだけど、受け取らないと確かになにもできないとわかっているのかもしれない。

僕だって大富豪というわけではないけれど、いっぱしの冒険者以上には稼いできたのだ。当面の旅費さえあればなんとかなる。

「……借りただけだからな。こんなもんすぐ返してやる」
「当然でしょ。利子は年率でいい？」
「は！？　利子取るのかよ！？」
「すぐ返す気があるなら、利子がついても大丈夫でしょ」
「くっ……」

ラルクは口をへの字にして僕を見てきたが、これで気兼ねなく受け取ってくれるのなら僕としても結果オーライだ。

「すぐ返してやるからな！　よし、そうとなったら今日にもキースグラン連邦に向かうぜ」
「あ……ラルク、もうひとつだけいい？」
「まだなんかあんのかよ！？」
「うん」
「なんだよ。早く言え……って、お前」

ラルクは僕の手を見て目を見開いた。
そこに現れたのは漆黒の刃――自在に伸びる剣だった。

「【影王魔剣術】は天賦がなくても再現できるはずなんだ――今は【森羅万象】の力を利用してるけど、時間を掛けて訓練すれば【森羅万象】がなくても使えるようになると思う。ラルクは、４年も使い込んだんだからきっと再現できる。そのときは天賦に生命力を吸われることもない、力の込め方もわかるだろうから、安全に使える」
「……マジかよ」
「『六天鉱山』に行ったその後、どういう生き方をラルクが選ぶのか次第だけど……このことは知っておいて損はないんじゃないかなって思って」

もう、なにも出ていない僕の手のひらを見つめたままラルクはう

なずいた。

「……わかった。サンキュな、弟くん」

宿に戻ると、ラルクが回復したことを知ってクックさんたちは大喜びした。やれ宴会だ、快気祝いだと盛り上がってはいたけれど、

「ダメだ。今日中に町を出る」

とラルクが言うときょとんとした。

「……ま、説明すると長くなるから、旅の途中で道々話す」

「いや、だってお嬢、せっかく弟さんと再会したってのに……」

「それともなにか？　あたしについてきたくねーってのか？」

するとクックさんたちは顔を見合わせて、

「お、俺らもついていっていいんですかい？　いや、てっきりこれからは弟さんと……それとも弟さんもいっしょに？」

「バカ言ってんじゃねーよ。レイジにゃやることがあるんだ。こいつはデッケー男だからな」

「そりゃまあ……」

「で？　どうなんだ？　ついてくんのか？　来ねーのか？」

「行きます！！」

声をそろえて言った彼らの表情は明るかった。

このときまで僕は彼らの考えを知らなかった。クックさんたちは、僕という人間が現れたことで自分たちはラルクの人生に「邪魔にな

る」と考えていたのだろう。
彼らもまた膿に傷のある人たちだから。

「こいつはうれしいぜ！　宴会だァ！」
「バカ。出発するっつってんだろ。早く荷造りしな！」
「へい！」

クックさんたちはこぞって自分の部屋へと走っていき、宿の女将さんから「どたどた走らんでよ！」と怒鳴られていた。

「……それじゃ、あたしは行ってくるよ」
「うん」
「弟くん、気をつけてな。アンタも無理しがちだからな」
「わかって――いや、うん、気をつけるね」
「そうそう。素直がいちばんだぜ？」

ニッ、と笑ったラルクは僕の頭に手を伸ばそうとして、止めた。

「……もう、頭なでなでするような年齢じゃねーよな」

そして拳を突き出したので、僕もそこに拳を軽くぶつけた。

「じゃーな」
「うん」

ラルクは階段を駈け上がっていく。「うるさい！」とまた女将さんが怒鳴っている。
お別れの挨拶にしては軽いなーと思う。
だけど、それでいいのだ。ラルクらしい。
僕らはまた会えるのだから。

「いよっし。それじゃ僕も行くか」

来たときよりもずっと身軽になって、僕は宿を出た。

★

「治ったぁ……？」

美女というのは間の抜けた顔をしても顔が崩れないんだなあとそんなことを思った。

教会に向かい、そこにいたノンさんと合流するとリビエラさんも当然いたので、ラルクが回復したことを報告したのだ。

星６つの天賦珠玉を犠牲にしたことは言わなかったけどね。

「ええ、『薬理の賢者』様に教えていただいた治療法で、完全とは言わないまでも飛び跳ねられるほどには」

「……エルフの秘薬を使ってもそこまで効果が出なかったのにぃ……？」

疑っている目つき。だけど、僕がウソを言う理由もないので信じざるを得ない――という感じだろうか。

「……わかったわぁ。それじゃラルクさんの治療はこれで止めていいのねぇ？」

「はい、もう大丈夫です。ほんとうにありがとうございました」

ぺこりと頭を下げた僕に、

「それじゃ治療費だけど――」
「……す、すみません。それはちょっと待っていただいていいですか？　なんとか工面するので……」
やっぱりお金掛かるのか。
あらかたのお金をラルクに渡してしまった後に、僕が気がついたのはラルクの治療費をどうするかということだった。
冷や汗をダラダラかきながらぺこぺこする僕に、リビエラさんはうふふふふと妖艶に笑う。
「いいのよぉ……？　お金の掛からない方法を教えてあげるからぁ～」
「え？　そんなのあるんですか？　もしかして奉仕活動とか？」
「そうそう。ただ、奉仕するのは私に対して身体を使って――」
「違うでしょ、師匠……」
呆れたようにノンさんが額に指先を当てる。
「今回のことは貴重な治療研究に当たるからそもそも治療費は取らないって話だったじゃないですか」
「実費はいただくわよぉ？　貴重なエルフの秘薬が……」
「それってレイジくんが持ってきたヤツじゃないですか……なに自分の手柄みたいに言ってるんですか」
「むう、可愛くない弟子ねぇ。――でも、奉仕活動、の代わりにレイジくんの知識はもらおうと思ってたのよぉ」
「知識……ですか？」
僕がなにか教えられることなんてあるだろうか？「薬理の賢者」様に教わった治療方法云々については無理だけど。必然的にラルク

の星6つ天賦珠玉についても話さなきゃいけなくなるし。
あ。
「前にも言ったけどぉ、石化の治し方よ」
それは――言えないと前に説明したことだった。
ヤバイんだよな。天銀使(ミスリル)ってるから。
「……レイジくん、あなたが想像している以上に石化で死んでいく人は多いのよぉ。今までは、軽傷以外は治せなかったの。それを、あなたの知っている知識で治せるのなら……」
「……」
「ヤバイものを使っているのなら、私が私の名前で治療法を見つけたと発表するわぁ。この薬剤については実費請求だけにして、教会も金儲けしないってことにする。それでもダメかしらぁ……？」
「……」
そこまで言われれば、仕方ない。
この人にはラルクの命をつないでもらった恩があるし……ラルクのためにわざわざこの町まで来てくれたのだ。
「わかりました……。ほんとに、僕のことは秘密にしてくれるんですよね？」
「もちろんよぉ。私、男の子との約束は守るわぁ」
「弟子との約束は？」
「そんなもんゴミよゴミ」
ぴきっ、とノンさんの額に青筋が立ったけれど、その気安いふたりの関係なら――信用できると僕は思った。
少なくともノンさんがこの人を信用しているのだから、僕も信用

していいはずだ。
それから僕はどうやってダンテスさんの石化を治したかについて話した。
モミジのような葉っぱの先端が、さらにモミジのように五又に分かれているダブルモミジ（生命樹の葉）。イトミミズみたいなヤツ。そして――天銀。

「……生命樹の葉を、天銀に合わせるなんてねぇ……。その媒介をしているのがキンダワームということかしら」

あのイトミミズ、どうやらキンダワームと言うらしい。

「薬剤の一種としては前々から知られていたものだけれど、キンダワームは乾燥して使ってたのよねぇ。生きたまま使うというのは面白い発想ねぇ。どうやってその薬の知識を得たのか……知りたいところだけどぉ、それは話してくれる内容の外のことよねぇ」
「はい」

僕の【森羅万象】については話すつもりがない。

「……」

ノンさんは、僕が天銀を使ってダンテスさんを治したことを知って顔を青ざめさせている。

「あらぁ、ノン。そんな顔しなくていいのよぉ。この子が人知れず天銀を手に入れて、あの、国が管理する最重要金属を勝手に使っちゃったとしても、今さら裁ける人はいないんだからぁ……」
「……そ、それはそうですけど。だからなんですね、レイジくん。あなたが私たちの前から姿を消したのは」

「理由のひとつではあります」
「私は……私はどうしたらあなたに恩を返せるんですか……」
今にも泣きそうなノンさんの肩を抱き寄せ、リビエラさんが言った。
「そんな顔しないのよぉ。この子は、あなたたちに喜んで欲しいがためにやったんだからぁ……あなたも石化解毒薬の研究に参加しなさい。そして多くの人たちを救うのよぉ。それこそが、この子に対する恩返しになるでしょ」
僕はうなずいた。
そのとおりだと思った。リビエラさん、いいこと言うなぁ……見た目は頭どうかしてる感じなのに。
「じゃ、この問題はこれで終わりね」
ぱん、とリビエラさんが手を叩くと、ノンさんも目尻の涙を指先で拭い取ってからうなずいた。
「さて――お次の問題は、もっと深刻ねぇ」
そうだ。
石化解毒薬だけでない――ここに僕がいる理由は、もうひとつある。
「世界が崩壊するって話、正直私は信じられないのよぉ。だって石化の治療と違って実例があるわけじゃないからねぇ」
「それは……そうですよね。信じられないですよね」
「でもねぇ」

と、リビエラさんは言った。

「一応長距離通信で報告したらぁ……枢機卿が反応したのよねぇ。わかる？　枢機卿。教会トップの教皇聖下の補佐をしてるの」

「……」

大物中の大物だ。

思わず背筋が伸びたのは僕だけじゃなく、ノンさんもだった。

「会いに行きましょ？　こういうのはやっぱり、文字だけじゃ伝わらないし、当事者が直接話したほうがいいでしょ～」

ちょっとそこまで散歩に、くらいの気軽さでリビエラさんは言った。

トマソン枢機卿

光天騎士王国の王都は、今まで見た中で最も美しく、そして最も近寄りがたかった。

青々とした山脈に囲まれた都市は六角形になっており、整った町並みが広がっていた。

王都の中央に位置するのは騎士王のいる居城でありいくつもの尖塔が空を突き刺すようにそびえている。

居城の近くにあるのが王都教会だ。

ここは「大聖霊礼拝堂」と呼ばれ、教会のトップである教皇がいる総本山の次に規模が大きいものだという。

「大聖霊礼拝堂」は詰まるところ、教会ナンバー2である枢機卿の屋敷なのだ。

「そこを行く者たち、止まれ」

リビエラさんを先頭に、ノンさん、ミミノさん、僕が続いて「大聖霊礼拝堂」にやってくると、入口までの長い石段を登っている最中に声を掛けられた。

きっちりした光天騎士王国で、汚れひとつない白い石段。

そんなところへ、修道服を着崩して行くのだから目立たないわけがない。

先ほど馬車を降りたら、周囲がざわついたもんね。

（リビエラさんって、ほんとうに教会関係者なんだろうか？）

と僕が何度目になるかわからない疑問を抱いたとき――「大聖霊礼拝堂」を守護する神殿騎士に声を掛けられた、というわけだ。

フルフェイスの鉄仮面に、ねずみ色の光沢があるチェインメイル。前掛けは緋色と白色を組み合わせていて、汚れどころか刺繍のほつれもなかった。

一般的な騎士と違うのは、神殿騎士は刃物を持たず、錫杖と、腰にメイスを持っている。

「なぁによぉ、トマソン枢機卿に話があって来てるのよ？　むしろこっちは呼ばれてるんだからぁ」

「……枢機卿猊下に？」

神殿騎士たちが顔を見合わせる。

「その証拠はあるのか？」

信用されてないな、リビエラさん……。

一応この人、教会組織の偉い人じゃなかったっけ？

「証拠ぉ？　そんなの枢機卿に聞いてくればわかるでしょ」

「しかし、枢機卿猊下はお忙しい御方。なにかの間違いでは……」

と神殿騎士が対応に困っていると、

「これはこれは……リビエラ様。研究棟にしかおられないあなたが本堂へなんのご用で？」

そこへ、がっちりした体躯の聖職者がやってきた。

年の頃は４０代後半といったところで、左手には革製のバッグを抱えていた。

のっぺりとした顔で、ビー玉をはめ込んだような青くつぶらな目が、不機嫌そうにリビエラさんを見つめている。

「こ、これはレッグサン司祭様」

神殿騎士たちが敬礼し、ノンさんが膝を折って礼を取るあたり、この人も結構偉いようだ。

「トマソン枢機卿に会いに来たのよぉ」

「……枢機卿猊下があなたと？　失礼ながらなにかの間違いでは？」

「同じこと、今言われてたわよ」

「ふむ……君たち、もういい。この人は研究棟にしかいないからわからなかったのだろうが、リビエラという工部司祭筆頭だ」

「！」

神殿騎士たちはあわててリビエラさんにも頭を下げたところを見るに、工部司祭筆頭という肩書きは確かに偉いものらしい。

「それじゃ中に入らせてもらうわよぉ？」

「――お待ちください。この様子では中に入って神殿騎士と顔を合わせるたびに誰何（すいか）されますよ」

「……通達しといてよ、『リビエラが来たから通せ』って」

「無茶をおっしゃらないでください。あなたのためだけに神殿騎士があるのではない。むしろあなたがその服装を改めれば問題がなくなるのでは？」

「私のアイデンティティーが失われて大問題よぉ」

服装を直せば通れるなら僕ならすぐに直すけどなあ……と思ってしまうが、僕はふと視線を感じて顔を上げた。

「大聖霊礼拝堂」も城と同じように尖塔が並んでいるのだけど、そのうちのひとつの窓が開かれていて、ひとりの男性が顔を出していた。そして僕が見ているとわかると手を招くような仕草をしたのだ。

「あの、上の人が『こっち来い』って言ってますよ」
「ん？　――猊下！」

レッグサン司祭が声を上げると、その場に膝を折った。あわててリビエラさんとノンさんも同じように膝を折るのだけど、

「――早よ上がってこい！」

という言葉が降ってきて、あわててレッグサン司祭がリビエラさんを導いて本堂へと入っていくのだった。

全世界に散らばる教会組織のナンバー2というのは、やはりすごいのだなと思った。

意匠の凝らされた分厚い扉を開いてその執務室に入ると、目に飛び込んでくるのは見事なステンドグラスだ。

その光が降り注ぐ場所に置かれた陳列棚には、年代物の酒器や、宝石の埋め込まれた文箱、天銀製のペーパーナイフといったものが置かれている。

陳列棚は入り口前のスペースにでんと置かれてあるので、それを見ながら奥へ進むと、先ほど顔を出していたらしい窓があって、その前に置かれた執務机にトマソン枢機卿がいた。

臙脂色の布に、金糸の刺繍。描かれた紋様は葉やツタといったもので、花はなかった。

でっぷり太ったトマソン枢機卿は白髪をオールバックになでつけており、そこに載せられていた円形の帽子は――地球にもあったカロッタ帽に似ているけれど、これは頭頂部に本物の植物の葉っぱがつけられてある――服と同じ臙脂色だった。

「なにを入口でぐずぐずしておったか」

枢機卿は不機嫌そうに人差し指でトントンと机を叩きながら言った。

「申し訳ありませんわぁ。レッグサン司祭が足止めをするので……」

「なっ！？　ち、違います。私は、ふだん本堂に近寄ろうともしないリビエラ工部司祭が枢機卿に会われるというものに不審を覚え――」

「レッグサン司祭」

トマソン枢機卿が言うと、

「はっ」

「お前の熱心さはわかっておる」

「はっ。ありがたきお言葉」

「下がれ」

「……はっ」

すごすごと去って行く司祭を見送ってから、トマソン枢機卿は、

「リビエラ工部司祭」

今度はリビエラさんに視線を向けた。

「はぁい」

「服を直せ」

「えぇ～……？　でも、これは私のアイデンティティーでぇ」

「直せ。直さないならお前ひとり出て行け」

「……」

うわぁ……リビエラさんの顔がメチャクチャ渋くなってる。世界一酸っぱい梅干しを食べてもこうはならないという顔だ。

「い、いいですよ、リビエラさん。僕のことは自分でどうにでもなりますから……」

リビエラさんのアイデンティティーのほうが、この場合大事なような気がする。

「君がレイジくんかね」

ぎょろりとした枢機卿の目が僕を向いて、

「は、はい」

思わず声がうわずった。

すごい迫力がある、この人。貴族や騎士とは違う凄みで……なんというか、「校長先生の威厳」みたいな凄みだ。

「リビエラ工部司祭を甘やかすことはならんぞ。本人はどうでもよくとも、下で研究にいそしむ司祭たちが迷惑なのだ。リビエラが工部司祭筆頭であるがゆえに、『工部は交尾』などと陰口をたたかれる」

「文句言ってんのはレッグサンがいる『法部』の連中でしょぉ……」

「だからなんだ？　工部も法部も、７部１２局すべて教会の重要な機関だ。お前ひとりのせいでここにヒビを入れてもいいと？」

「うっ……」

ばつが悪そうにリビエラさんは服装を正した。「この人年食ってどんどんガンコになるのよぉ……」とぼやきながら。

「よし、よし。お前はそうしておれば押しも押されもせぬ筆頭司祭だ。これからも教会のために尽くせよ」

「……」

リビエラさんはふてくされたように唇を尖らせたが、トマソン枢機卿はまるで気にもかけずに、

「で、君がウワサの少年か……なるほど、こうして見るとただの少年だな」

「ウワサの？」

「ああ、いやなに、クルヴァーン聖王国から『災厄の子』についての情報が上がってきておってな」

「！」

クルヴァーン聖王国を、僕は円満に出てきたわけではなかった。僕が「災厄の子」だと知った六大公爵家は僕を捕らえようとしたくらいだ。

「そう身構えるな。そのつもりなら先に動いておるし、エルからも君のことはくれぐれもよろしく頼むと手紙が来ておる」

「エル……。特級祭司のエルさんですか？」

「そう。ワシの数少ない文通仲間だ」

顔をほころばせながら言った枢機卿は、先ほどまでの威厳はなく、どこにでもいる優しそうな老人のように見えたから不思議だった。

「来なさい。奥の部屋へ」

立ち上がった枢機卿は杖を突きながらこちらへやってくると、僕の腕にそっと手を触れた。

「枢機卿、それってぇ……」

「心配するな。ここはワシと少年が腹を割って話したほうがいいだろうと思ってのこと。皆、よいな？」

よいな、と言われればノーとも言えない。

ノンさんは先ほどから緊張して固まったまま、ミミノさんは不安そうな顔で僕を見ていたが、

「わかりました」

と僕は枢機卿に続いて奥の間へと入った。

窓がなく、魔道具のランプが点って部屋が明るくなった。

そこはこぢんまりとした部屋で、古ぼけた小さなデスクには書きかけの手紙があり、横の書見台には大きな書物が開かれてあった。

壁の三面は書棚になっていて、最後の一面は地図や宗教画が貼られてある。

こちらにはなんだか生活感があると僕は感じた。

枢機卿は書棚から1冊の書物を手に取ると、2脚あるイスとテーブルのところへとやってきた。

「掛けなさい」

「あ、はい」

「早速だが、これだ」

表紙もなにもない書物だけれど、すさまじく古いものだった。

革の装丁はぼろぼろではあったが中の羊皮紙に比べればそれでも

マシ。きっとカバーを付け替えているのだろう。
中身は――ざっと、
「1千年以上古いものとお見受けしますが……」
「そのとおりだ」
トマソン枢機卿は中のページを開いて見せた。
各ページはそれぞれ筆致が違っていて、なんらかの書き付けを残してきたようだ。書物というより私的なファイルだろうか。
「このページ……古語で書かれているのだが読めるかね？」
「いいえ。不勉強で、申し訳ありません」
「いやいや、構わんよ。古語を読める者などこの礼拝堂にも何人いるかというくらいだ。これはね、君の言うとおり、1千年、いや、それよりもずっと昔の教皇聖下が書かれたものなのだ。真筆だぞ」
驚いた。
それはそんな昔から教会があったのかという驚きでもあるし、教皇聖下の書かれたものがこうして――博物館でもないところに、ひっそりと残ってきたことに対する驚きでもある。
「もしかして、代々枢機卿猊下が受け継ぐものなのですか」
「そのとおりだ。ゆえに枢機卿になるには古語を読めなければならぬ。……ここに書かれているのはな」
そして僕は、今日いちばんの驚きを味わうことになる。
「『ふたつの世界がひとつに交わるとき、教会がいかなる役割を果たすべきか』について考察されている」

つまり、千年を超える昔から、教会はもうふたつの世界がひとつになることを想定していたのだ――。

★　ノン・ミミノ・リビエラ　★

レイジと枢機卿がいなくなった部屋に残った3人は、応接用のソファに腰を下ろしていた。修道士が運んできたのは、白湯だった。

最初ミミノは「もしかしたらこれは『帰れ』っていう意味だべな!?」と思ったのだが、

「ミミノさん、教会では贅沢を戒めるためにお客様に白湯を出すことはよくあるのですよ」

とノンが言った。

「そう……なの？」

「はい。特に枢機卿猊下を始め、上層部の方々はその傾向が強いですね。猊下は、この豪奢な造りの執務室は受け継いだだけで、お住まいも教会所有の邸宅ですから」

「そうなのよぉ、あの人とか初めて見たとき『うわぁ、この人絶対賄賂とか受け取ってる～』って心が躍ったのにぃ、話してみたらすさまじい堅物なんだから」

「師匠……賄賂に心を躍らせてどうするんですか……」

ノンがハァと息を吐くが、

「ノンも、猊下に気に入られるようにしとくと得よぉ。賄賂は通用しにくい組織だけどぉ、権威を重視する司祭はいっぱいいるんだか

らぁ」
「……そういうのは、結構です」
「なぁに言ってるのよぉ、あなただってこれからここで働くんだから、おろそかにはできないわよぉ」
「堅物や権威に逆らいまくっている師匠の言葉とは思えませんね」
「私だって偉くなんてなりたくないけどぉ、私の才能を周りが放っておかないんだから罪な女よねぇ」

手をひらひらさせて笑うリビエラは、いつの間にか服が着崩れている。

（いつの間に……！？　どうやったんだべな……！？）

とミミノは驚愕しつつ、

「あ、そうか……ノンとはここでお別れになるんだべな」
「ミミノさんには長くお世話になりました。父のこと、よろしくお願いします」
「ううん、ダンテスに助けてもらってるのはわたしのほうだよ。――ノンはどこかの教会に行くのかと思ってたけど、ここで研究をするべな？」
「最初は私も地方の教会に行くつもりだったんですが……」

歯切れ悪くノンは言った。

師匠のリビエラからは元々「研究職になる道もある」と聞いていた。その場合はリビエラの下に所属するのだが、ノンとしては地方の教会で、そこに住む人たちと交流するほうが自分に合っている気がしていた。

リビエラはそこまで言わないが教会は組織としてすさまじく巨大なので、政治的なつながりがどうしても必要になってくる。そんな

の、やりたくない。
だが――レイジから聞いたこと。
聞いてしまったこと。
あの石化治療薬に、天銀が使われており、彼はそれを重罪だと知りながらダンテスを助けるために作ってくれた。
それを知ってしまえば、前にリビエラが言ったとおり、レイジに対する恩返しとして石化治療薬の研究をするべきではないかと思うのだ。

「……うまく師匠にのせられましたね」

リビエラはノンを手元に置いておきたいというフシがあり、石化治療薬をダシにしてノンの進路を決めようとしたのかもしれない。
その証拠に、リビエラはにこにことして、

「ノンが来てくれたら、いっぱいお願いしたいことあるのよねぇ～」
「掃除や洗濯は自分でやるのが教会の常識ですが」
「……」

図星を指されたとでも言うようにリビエラは黙ってしまった。

「研究のことですよね、師匠？」
「も、もちろんよぉ～」
「ここに残ることになればこっちのものだから、なし崩し的に雑用を押しつけようだなんて思ってませんよね、師匠？」
「……」

またしても図星を指されたとでも言うようにリビエラは黙ってしまった。
それを見たミミノは、少し安心する。

（この師匠さん……行動はちょっとアレだけど、ノンとは気安い間柄なんだなぁ。それならノンを安心して任せられるな）

これからも冒険者として生きていくつもりのミミノは、ノンとはここで離れることになる。

いっしょにいた時間は5年に満たないくらいだけれど、それでも、ノンは実の家族のように感じていたのだ。

ノンが、安全な場所にいて、幸せに過ごしてくれるのなら、ミミノもうれしい。

「リビエラさん」

「ん？　なぁに」

「ノンのこと、よろしくお願いしますべな」

頭を下げたミミノに、リビエラは目を瞬かせてから、

「もちろんよぉ」

と答えたのだった。

それから女3人の話には花が咲いた。

トマソン枢機卿（後書き）

ついに１００万字超えました。まだ連載開始１年経ってないんだけどなぁ。

そんなわけで、応援してくださる方は是非ブックマークをお願いします。★の「評価」も入れていただけるとさらにうれしいです。

お嬢様に届いた手紙

★　クルヴァーン聖王国　スィリーズ伯爵邸　★

部屋のドアがノックされたが、その音はふだんよりもほんのわずかに強い音だった。これは幼いころから「執事が鳴らす快適なノック音はかくあるべし」という音を聴き続けたヴィクトル＝スィリーズ伯爵でなければ気づかなかっただろう。

「――セバスではありませんか。あなたにしては珍しくあわてているようですが、なにか事件ですか」

入室を許可した伯爵が、いつもと同じ――ようにエヴァには見えるのだが――執事長であるセバスを迎え入れてそう言うと、

「はっ……申し訳ありません。ですが、これればかりは閣下とお嬢様の語らいのお時間に割り込んででもお届けしなければと」

ソファで向き合って座るふたりは、そのまま絵画に収まりそうなほどに美しい父娘だった。

つい数日前までレッドゲート戦役の最前線にいた伯爵も、エヴァも、ともに疲れひとつ見せず、凛としたたたずまいだ。

特にエヴァは日を追うごとに美しく成長している。

彼女のためにドレスを仕立てる際、仕立屋のデザイナーがその可憐な姿に感激してあらゆる仕事をそっちのけでデザインしたという話が、聖王国の貴族社会でも話題になった。

おかげで、最近は婚約打診の手紙が引きも切らない。

「まさかとは思いますが、６大公爵家からの婚約打診などではありませんよね？」
「はっ……その程度ではあわてません」
「執事長。お父様も、仮にも公爵家の方々を冗談に使うなんてお行儀がよろしくありませんよ」
「ふふ。これはエヴァの言うとおりですね……それで、用件は？」
「はっ」

セバスはいつも通りの歩調で近寄ってくるが、じっとりと汗をかいている――かなりの重要な用件らしいと伯爵が目を細めると、

「……レイジ殿からの手紙です」

恭しく、一通の手紙を差し出した。

「！」
「……エヴァ、そのようにはしゃぐのはお行儀がよろしくありませんよ？」
「うっ……」

思わず目を輝かせ、腰を浮かせたエヴァは伯爵に言われてうろたえる。

「閣下。そう意地悪をするものではありません。お嬢様、ではお嬢様に先に読んでいただきましょう」
「セバス。それは……」
「お二方宛となっておりますからな」
「……いつの間にか、セバスは娘の肩を持つようになりましたね……」

ほっほっ、と好々爺然として笑う執事長を見て、

（セバスも変わったな……前はもっとぴりぴりしていたというのに）

伯爵は思う。

エヴァの成長を見守るその姿はまさに孫を見る祖父のようであり、最近では次の執事長を誰にするかなんて相談もしてくるので、本気で引退してただエヴァを見守る老人になりたいのではないかと伯爵は考えてしまう。

だが、それはそれでいい。

代替わりというものは必要なのだ――自分が、エヴァに家督を継がせようと思っているように。

「それで、エヴァ。レイジさんはなんと？」

最初は喜色満面の笑みで、不意に真顔になり、それから――深刻そうな表情に変化していくエヴァ。

「お父様……レイジは言っています。『世界の危機』だと」

差し出された手紙を受け取り、伯爵もまたその文面に目を通す。

このお屋敷で過ごしている間に、だいぶ改善されたとはいえ、レイジの筆はまだまだ下手くそだったし、文章の稚拙さも感じられる。

だがそれでも十分内容は伝わった。

ふう、と伯爵はため息を吐いた。

「……彼は、問題を引き寄せる魔道具でも持っているのでしょうか」

伯爵が立ち上がると同時に、エヴァも立ち上がっていた。

その横では伯爵から手紙を渡されたセバスが大急ぎで目を通している。

「行きますよ、エヴァ」

「はい、お父様」

スィリーズ伯爵父娘は、手紙を受け取るやすぐに行動を開始する――向かう先はこの国の中枢である聖王宮だ。

約束（アポイント）なしの訪問を認められているのは、ごく一握りの貴族だけだった。

６大公爵家の一角であるリビエレ家は、「一天祭壇（ファーストアルター）」から出現する天賦珠玉を横流しにしていた疑いで現在はお屋敷へ軟禁されており、それに連なる貴族たちが降爵や改易――爵位の剥奪で平民に落とされたりしているさなかだ。

主立った貴族への調査は終わっているのでスィリーズ伯爵の「審理の魔瞳」――相手がウソを吐いているかどうかを確認できる――の出番はもうほとんどなかったが、それでも「祭壇管理庁」の「長官特別補佐官」という肩書きをもらっているので日々、聖王宮を出入りしている。

伯爵とエヴァが聖王宮に入ってすぐの停留所で馬車を降りると、同じタイミングでやってきたであろう人物がそこにいた。

「よう、ヴィクトル」

「これは――グレンジード公爵閣下」

「ああ、よせよせ、こんなところで礼は取らんでいい」

すぐにその場に跪（ひざまづ）こうとした父娘を止めるが、

「しかし、閣下。ここは聖王宮でございます。王族の閣下に対して礼を失するのは臣下として……」
「うるせえ。俺がいいっつってんだよ。エヴァ嬢の服が汚れて可哀想だろ」
「……」
グレンジードは数か月前まで聖王であり、その青色の光を放つ髪はこの国の頂点であることをはっきりと示している。
不承不承、スィリーズ伯爵とエヴァは立ち上がる。
「しかし、お前も耳が早いな、ヴィクトル」
連れ立って歩き出しながらグレンジードは言った。
3人の周囲に供はいない。
この聖王宮にはできうる限り供を連れてきてはならないという不文律があり、中で働いている使用人も最小限、いちばん多いのは「一天祭壇」のための祭司だった。
「なにが、でしょうか？」
「ん、レイ――聖王陛下の案件じゃないのか」
レイ、と言いかけたのは今の聖王がグレンジードの娘であるレイファルジアだからだ。
さすがに、それまでの呼び方がすぐには抜けないらしい。
「違います。陛下に申し上げたいことがありまして、参上しました」
「そうか。だが、同じことかもしれんな」
「え？」
「まあ、行けばわかる」

それ以上は言葉もなく3人は進んでいく。
通されたのはドアも窓も開かれたままの解放感のある会議室だった。
テーブルこそ巨木から切り出した一枚天板を使ったすばらしい出来のものだったが、それとて装飾は最小限で、「質素」という言葉がなにより似合う。
太古の生活様式をなるべく生かし、冬は寒く、夏は暑いという聖王宮は、「国の頂点」というイメージからはほど遠い生活を送ることになる場所だった。

「――陛下、グレンジード参りました」
「スィリーズもここに」
「スィリーズ家が娘、エヴァでございます」

会議室のテーブルに座っている人物を認めた3人は、一斉に跪いた。

「グレンジード、スィリーズ伯爵、そしてエヴァ、よくぞ参りました。こちらへ」

かつてグレンジードが着ていた、着流しのような服を身に纏っている女性が現在の聖王――聖女王だ。
手入れのされた長いストレートヘアは胸の下まで届きそうに長く、青色の光とあいまって神秘的に見える。
髪飾りは黄金の地金にルビーをあしらったものだ。
怜悧な面持ちは、豪放磊落な父グレンジードとは似ても似つかず、母親に似ているのだともっぱらの評判だった。
彼女の背後にいるのは聖王騎士が護衛のために2名、控えており、直立不動の体勢である。

現在の聖王騎士は、団長が調停者との戦いにおいて死亡したために団長不在で、一時的に聖女王が全権を預かっている。
そこも含めて、この、まだ２０歳にもならないという聖女王の双肩に掛かる重圧は大変なものだった。

「グレンジードの意見を聞きたくて喚びました。忙しいでしょうに、感謝します」
「はっ。いつでもお喚びください」

聖女王の近くに腰を下ろしたグレンジードの言葉に――実の父からの言葉に、励まされたのだろうか、聖女王はほんのりと微笑んだ。

「スィリーズ伯爵も、エヴァも座ってください」
「はっ……しかし、よろしいのですか」
「構いません。どのみち、伯爵にも協力してもらうことになったでしょうから。『聖王国きっての切れ者』と評判の、スィリーズ伯爵にはね」
「畏れ多いことでございます」

伯爵とエヴァはグレンジードの対面に座った。

「本題に入りましょう。教会のトマソン枢機卿から軍事行動の要請がありました」
「！　それほどの緊急事態ですか」

グレンジードは目を見開いたが、

「……その様子ですと、スィリーズ伯爵はすでに情報をつかんでいたのですね」
「我々もつい先ほど、信頼できる筋から手紙をもらったのです」

伯爵はレイジからの手紙を差し出すと、聖王騎士がやってきて聖女王へと手渡した。
内容は――これがレイジからの手紙でなければにわかには信じられないようなものだった。
ふたつの世界が崩壊の危機にあること。
これを回避するにはふたつの世界をひとつにするしかないこと。
その場合、凶暴なモンスターが雪崩れ込んでくるのでこれを防ぐ態勢を整えなければならないこと。

「枢機卿も同じ内容を送ってきていますが、どうやらレイジは枢機卿と行動をともにしているようです」
「……教会ナンバー2と」

思わずエヴァが声を発してしまうほどに、それは驚きだった。
この世界に広く散らばる教会組織。
武力こそほとんどないが、その影響力たるやすさまじいものがある。
時の教皇が思想的に問題がないのかどうか、各国のトップが常に目を光らせているほどだ。
そこのナンバー2ということは、一国のトップよりも権力がある。

「陛下。俺も何度か会いましたが、トマソン枢機卿は信頼に足る方です」
「はい。余もそう思いますが、グレンジードのその言葉を聞いておきたかったのです」
「軍事行動というのは、つまり、この未曾有の事態に対応しろということでしょうか」

グレンジードの言葉に、聖女王はうなずいた。

「ですが、どのような規模で、どの国がどこを担当するのか……枢機卿からの連絡には、天賦珠玉の産出も困難になる可能性についても示唆されていました。実際、『一天祭壇』から出現する天賦珠玉が減っています」

それは「祭壇管理庁」に所属するスィリーズ伯爵も知っていた。

だがこのことは極秘であり、外部に漏れていないはずだ。

それをトマソン枢機卿が知っている――それは、枢機卿の意見に信憑性を持たせていた。

「教会は、各国の代表を集めて『世界結合（ワールド・ユナイト）』に対応する会議を招集したいと言っています。本来なら余が向かうべきですが――」

「それはお止めください。陛下が今、聖王宮を離れると、６大公爵家がバラバラになる可能性があります」

グレンジードの言葉に、聖女王はうなずいた。

「余も同意見です。グレンジード、帰ってきたばかりで申し訳ありませんが、あなたが余の名代として会議に参加してくれませんか」

ちりん、とテーブルに置かれた鈴を鳴らすと、祭司のひとりが盆を持ってきた。

そこに載せられてあったのは青色に光る勾玉のようなもの――これがなんなのか、知っている貴族は少ない。

「すべての決定権を、あなたに預けます」

聖王の、聖女王の代理人として認める「全権委任紋章」だ。

「はっ。謹んでこの大役、お受けします」

グレンジードは椅子を立つと、跪いて紋章を受け取った。

「スィリーズ伯」

「はっ」

「あなたもグレンジードに同行してください。期待しています」

「はっ！」

これが、先ほど聖女王の言っていた、「伯爵にも協力してもらう」という言葉の意味か――エヴァは、目の前で起きていることの重大性を知りつつも、現実感がないような気持ちだった。

ふたつの世界がつながろうとしている――もしエヴァが、レフ魔導帝国で「レッドゲート」を見ていなかったら、さらに現実感がなかっただろう。

危機感もなかったかもしれない。

だが、レイジが知らせてくれた。他ならぬレイジが。

彼はその信じがたい内容の手紙の最後にこう記していた。

『非常に危険な状況になると思われるので、エヴァお嬢様には前線に来て欲しくありません。ですがきっと、お嬢様は前線に向かうのでしょう。「鼓舞の魔瞳」を有効に使える場所が前線であると知っているお嬢様なら。

でもそのときは必ず僕に知らせてください。なにかあったら、僕がお嬢様を護ります』

ふつふつと湧き上がってくる感情。

レイジの手紙を読んだときに感じた切迫感と、レイジの言葉への喜び。

聖女王が「切れ者」だと父を評し、さらには各国代表が集まる世

界会議への参加要請。
緊張、興奮、恐怖、名誉――様々な感情がない交ぜになっている。
それをすべて「貴族」の冷徹さで覆い隠し、エヴァは父とともに旅立った。
世界会議の行われる場所は、教会の総本山であるブランストーク湖上国だ。

キースグラン連邦の広大な領地と、南部に広がる未開の地「カニオン」とに挟まれた小さな土地が、ブランストーク湖上国だった。
カニオンとの境界は生命の生存を許さないほどの高山地帯によって遮られており、実質、キースグラン連邦とのみ国境を接しているような形だった。
巨大な湖であるカニ湖に、浮島がいくつかあり、それらがブランストーク湖上国のすべてだった。
人口は1万人程度。
そのほとんどが聖職者であり、教会のための国家であり、なんら実権を持たない国家でもあった。

「あれが……教会の総本山なのですね」

魔導飛行船は決められたルートに限り簡単な事前申請によって飛行可能となるよう国際条約によって結ばれている。
エヴァは眼下に広がる景色に目を奪われていた。
穏やかな湖面は空の青と流れゆく秋の雲を映しており、豊かな緑の森が湖全体を囲んでいる。
渡り鳥が飛来しては、湖で羽を休めていた。
最も巨大な浮島にそびえる、白亜の大教会が総本山だ。
そのすぐ隣には小さな浮島があり、魔導飛行船の停船所となって

いる。
そこにはすでに二桁に上ろうという魔導飛行船が到着していて――中でも、他のものより数倍は大きいであろう巨大船はキースグラン連邦の首都ヴァルハラが所有している船だった。
もうひとつ、人目を引く船があり、それは外装のほとんどを木材によって覆い、甲板にいくつもの樹木が生えているという、ハイエルフの国、シルヴィス王国が所有する魔導飛行船だった。これは「飛ぶ森」などとも言われている。

「多くの国々がトマソン枢機卿の呼びかけに応えたのだと思いますが……彼らはどこの国の者でしょうかね」

エヴァの横に立ち、外を見ていたスィリーズ伯爵が言った。
今、魔導飛行船は停船所に向かって降下している。
その浮島の片隅に――見慣れぬ衣服の集団がいたのだ。
それは聖女王が着ていた服にも近い、着流しのような簡素な服。
焦げ茶色の長髪を後ろに流し、複雑に結っている。
全員が全員、手には紙の束や書籍を持っているのだ。
国の代表である貴族や、騎士が集まるここには似つかわしくない集団だった。

「あちらはノームに、ドワーフでしょうか？」

エヴァが気づいたのは、背の低い集団、そして樽のような腹を抱えた集団だった。

「そのようですね……。国家代表が集まる会議かと思っていましたが、トマソン枢機卿はなにをお考えなのでしょうか」
「おい、考えるのは後だ。行くぜ」

飛行船が大きく揺れ、着陸が完了する。
魔導飛行船のクルーに先導されて、グレンジード、伯爵、エヴァが続いた。

「お供いたします」
「おう」

聖王騎士団の第２隊隊長アルテュールが恭しく頭を垂れて言うと、グレンジードはその腕をぽんと叩いて甲板へと出た。
この日、１６の国の代表と、ライブラリアン、獣王種族、ノーム、ドワーフの代表がここブランストーク湖上国へと集まった。
世界会議は翌早朝から、始まる。

お嬢様に届いた手紙（後書き）

書籍版「オバスキ」の2巻が発売されました！
本話にもありますとおり、第2章クルヴァーン聖王国編となっております。
かなり改良を加え、めっちゃ面白くなりましたので是非お手にとっていただければ幸いです。

早速Ａｍａｚｏｎでもレビューをいただいていました。ありがとうございます。
そういうのも販促につながりますので、もしよろしければそちらもお願いします。

そして、本作にうめもんじさんからレビューをいただきました！
レビューもうれしいです！

「災厄の子」

★　ブランストーク湖上国　教会総本山「白の聖堂」大会議場　★

円形の会議場だった。それはとてつもなく広く、舞踏会を開けそうなほどだった。

スリットが入ったような窓にはステンドグラスがはまっており、東から南、西に掛けて３２個あった。

分厚い布地のカーテンが掛けられることはなく、差し込む光によっておよその時間帯がわかる仕組みになっている。

だが広い会議場を満遍なく明るくするには光量が足りず、円卓と、その周囲に設けられた控えのテーブルには多くのロウソクが灯されている。

（すごい……そうそうたるメンバーなのだわ）

控えのテーブルに、貴族や文官とともに座っているエヴァは背筋が伸びっぱなしだった。

クルヴァーン聖王国を含む１６の国の代表。

その中には――特にキースグラン連邦に所属する小国には――国家元首が来ているところもある。

円卓に着座できるのは代表者１名だけなので、クルヴァーン聖王国の代表にして聖女王の「全権委任紋章」を持っているグレンジード公爵が円卓にはついて、その背後にひっそりと立っているのがスィリーズ伯爵だった。

「エヴァ嬢、ご覧ください。あれは獣王種族ですね……とても目立ちます」

エヴァの隣に座っているのは同い年で、6大公爵家のひとつであるエベーニュ家のエタンだった。

ハーフリングでもある彼は、レイジがクルヴァーン聖王国を出なければいけなくなったときに揉めたエベーニュ家の当事者でもあったが、今はエヴァとも和解している。

「災厄の子」を処刑したがったのは彼の父や上位貴族たちであり、エタン本人にはそんな気持ちはなく――レイジが去った後に、彼の護衛がレイジを追い出すようなことをしたと聞いて深く後悔し、エヴァに謝罪を申し入れた経緯もあった。

「はい。皆様とても大きな身体でいらっしゃいます」

まるでゴリラの身体を少し修正し、ヒト種族に似せたような男が極彩色の着物を羽織っていた。

なんと背中には羽の装飾まである。

彼が獣王種族の代表のようだが、大柄であるグレンジードよりも二回りは大きく、円卓の立派なイスですら軋むので、今、さらに巨大なイスが4人がかりで運ばれてきたところだった。

彼のみならず随行のメンバーも大柄で、全員が全員、「獣人」と言うより「人型の獣」という感じがするほどに獣寄りだった。

「あそこまで獣になってしまうと、モンスターと勘違いしてしまいそうだの」

「左様」

「どこに住んでおるのだ、あやつらは」

エヴァと同じテーブルでは上位貴族たちがそんな会話をしている。

（……我が聖王国は多様性を認める国家だというのに、そんな会話をするなんて……）

抗議したい気持ちが湧くが、ぐっとこらえる。

大体クルヴァーン聖王国にだって、特級祭司のエル＝グ＝ラルンのような者もいる。彼は見た目は完全にウサギだが言葉を話すし、聖王宮の難しい祭司職をこなしている、国にとって必要不可欠な人材――ウサギ材だった。

エヴァとしてはざわざわしているこの広い会議場で、このぶしつけで、失礼千万の会話がかの種族に聞こえないことを祈るだけだったが――エルよりもむしろヒト種族寄りの獣人女性がひとり、こちらを見ていた。

ぴんと立ったふたつの耳はしっかりと会話を捉えていたらしい。

３０メートルは離れていようというのに。

エヴァが席を立って向こうのテーブルに謝罪に行こうと思ったそのとき、カラーン……カラーン……と乾いた鐘が鳴った。

１６の国の代表席に、４種族の代表席。

だが座席は２２あり――残りふたつの座席につくべき人物がここにやってきたのだ。

『第３２０代教皇、エルメントラウト＝エイリヒ＝クラウゼグート聖下、枢機卿トマソン猊下の御入来（じゅらい）でございます』

司祭が魔道具を使い拡声して言うと、会議場はしんとしずまり返った。

奥にある、よく磨かれて照り光る木製のドアが開くと、ねずみ色の修道服にねずみ色のヴェールを掛けた女性――いや、少女が現れ、その左右には修道女が付き従っていた。

それが教皇だとわかるのは、彼女の手に握られた銀色の錫杖が天銀製であるからだ。

妖しくも神秘の光を放つそれは、この場にいる2百を超える瞳を引きつけるには十分だった。

だけれどエヴァは、彼女の後ろを見て声を上げそうになった。

臙脂色の恰幅のよい男はトマソン枢機卿だ。

むっつりとして、半世紀も前から刻まれていそうな眉間の皺は深い。

彼は後ろに3人を連れてきており、そのうちふたりは分厚い書類を抱えた上級司祭だった。

だが、もうひとりは――この場にはあまりにもそぐわない、カラフルな旅装束を着た少年だったのだ。

（レイジ……！？）

髪を染めるのは止めたのか、黒髪黒目の少年はまさに、エヴァの護衛だったレイジその人だ。

★

広い会議場でも、そこにお嬢様がいるのはすぐにわかった。

いやぁ……お嬢様、どんどん美人になっていくね。

その隣にいるのはエタン様みたいだ。僕を見て驚き、それから複雑そうに顔をゆがめた。

僕をかつて、国から追い出す片棒を担ぐみたいになったことを後悔しているのかもしれない。でもエタン様は関係ないし、それは彼のお父さんと、彼の護衛のレレノアさんがやったことなのでエタン様には気にしないで欲しい。

しん、と静まった会議場を教皇聖下が進んでいく。
トマソン様や僕はその後にくっついていくだけだ。
教皇聖下が、円卓でもいちばんゴージャスな――とはいってもきらびやかなわけではなくて、イスの背に見事な彫刻が施されているというだけに過ぎないのだけれど――イスに座ると、付き人たちは後ろの控えテーブルに下がった。
トマソン枢機卿が教皇聖下の横に座り、付き人の司祭たちは必要な書類を猊下の前に並べる。そして控えのテーブルに下がるので僕もついていこうとすると、

「レイジ、君はここにいなさい」
「え、でも……」
「護衛代わりだよ。私と聖下の護衛ができるのだ、光栄に思ってもいいぞ」

むっつりとした顔で言うので真面目にとらえてしまいがちなのだけれど、トマソン枢機卿は意外とお茶目な人だ。
僕は小さく笑って、

「わかりました。後出しでいいので冒険者ギルドに護衛依頼を出しておいてくださいね」

と答えた。

「まったく、冒険者は金にがめつくて困る」

ぶつぶつ言うトマソン枢機卿は、だけれどどこか楽しそうなことに僕は気づいていた。
ここまで偉くなると冗談を言ってくれる人もいないのかもしれないな――そんなことを僕は思う。

破天荒な格好で男たちを魅了してやまないリビエラさんを重宝するのも、真面目一辺倒な教会組織の中でリビエラさんが異彩を放っているからだろうし。

「……」

僕と猊下のやりとりを、少し驚いたように――ヴェールが掛かっているのであまりよくは見えないのだけど――教皇聖下が見ていた。

『これより、世界国家間協定第18章1項、「教会発議による招集」に基づき世界会議を開催いたします』

先ほどと同じ、拡声の魔道具を使って司祭がアナウンスする。

それから彼はトマソン枢機卿が各国、各種族代表に送った手紙の内容をさらに詳しく説明する――それらは僕がすでに知っていることだった。

（ここに至るまで、めちゃくちゃ早かったな）

僕は少しだけ過去のことを振り返る。

トマソン枢機卿に面会してから、枢機卿が教皇聖下に連絡を取るのはすぐだった。

数が少ないながらも教会は長距離通信の魔道具を持っていて、1秒間に金貨が1枚溶けるほどの燃費の悪さながらお互いに顔を映し出し、声を届けることができる。

枢機卿は教皇聖下と話をして世界会議の開催を決定した。

こういう緊急事態のために教会が発議すれば会議ができるような協定が結ばれているのだという。

各国がそれに応じるかはわからなかったけれど――最大国家であるキースグラン連邦の首都ヴァルハラを擁するゲッフェルト王が召

集に応じたのがよかった。
　各国は次々に参加を表明し、独立自尊を貫くいくつかの小国以外は参加が決まる。
――なぜゲッフェルト王は承諾したのでしょうか。
　僕が疑問に思うと、
――「六天鉱山（シックスマイン）」で天賦珠玉が採れないからだろう。
　と枢機卿はこともなげに言った。
　枢機卿の召集通知には、天賦珠玉の出現率の減少はもとより、「問題を解決できるかもしれない」ということをほのめかした内容が書かれてあったのだ。
　結果、これだけ多くの代表者が集まった。
　盟約者の代表としては「ライブラリアン」「ノーム」「獣王種族」「ドワーフ」の４種族が来ていて、「ハイエルフ」のシルヴィス王国からはアーシャの姉でありマトヴェイさんの双子であるユーリーさんが代表として、「聖水人」の代表としてはクルヴァーン聖王国からグレンジード公爵が来ている。
　唯一不明だったのが「大陸人」の代表者だったが、僕はその人物をすでに発見していた。
（あの人……どこの国の人だろう）
　見た感じはふつうのヒト種族だけど、１６カ国のうちのひとつの代表として席に着いている。
　長い栗色の髪を後ろでひとつにまとめた、音楽の教科書に出てきそうな感じの貴族姿だった。
　年齢は３０歳前後の男性で、知性的な瞳を瞬かせて説明を聞いて

いる。
つまりここには「盟約者」の代表もそろっているというわけだった。

（アーシャはさすがにいないか）

彼女はシルヴィス王国の王族ではあるけれど、すでにその籍は「ない」という立場だ。
それでもアーシャはシルヴィス王国に向かったし、こうしてユーリーさんが来ているのはアーシャが働きかけたからこそなんだろうと僕は思う。

『――以上がことの経緯でございます。今回の件については教会にて過去より綿々と検討されている事項であり、極めて信憑性が高いことと受け止められております』

説明が終わると、場は静まり返った。
一癖も二癖もありそうな各国代表者は改めて告げられた、「世界崩壊の危険性」「その結果の天賦珠玉の枯渇」「解決方法はふたつの世界をひとつにすること」――その事実を受け止めているようだった。

『――よろしいか』

そこで小さく手を挙げたのは、「大陸人」の代表である彼だった。
卓上には拡声の魔道具が置かれてあり、それに手を載せると小さな声でも会議場の隅々まで届く。

『キースグラン連邦ウインドル共和国人民代表のホリデイだ。今回の召集は「ふたつの世界」とやらをひとつにすることの同意、そし

て出現するという「もうひとつの世界」からの来客をいかに処理するべきか、その討議であると理解してもよろしいか？』

『その通りです』

教会側の代表としてトマソン枢機卿が答えた。

『では討議を始める前に伺いたいが、枢機卿猊下の後ろにいるのは「災厄の子」ではありませんか？』

ホリデイ代表が言うと、会議場全体が揺れるようにざわりとした。貴族たちは気づいていた者は「やはり」とか「恐ろしい」と言い、気づいていなかった者は「なぜ猊下の背後に」「猊下が危険では」とそんなことを言い始める。

「……」

すると小さく、トマソン枢機卿が手を挙げた。

『お静かに願います。枢機卿、お願いいたします』

相変わらずのむっつりとした顔で枢機卿は口を開いた。

『……黒い髪、そして黒い目が災厄を運ぶという話は古来より伝わっています。ですが、それは迷信であり、黒い髪、そして黒い目に災厄との因果関係がないことは教会の長年の研究で明らかであります。これは各国教会へ通達される節目節目の教典にも明確に書かれています』

えっ……そうなのか？

教会には「災厄の子」なんてものは「ない」ってことが伝わってる？

実は――僕は黒髪に戻すようトマソン枢機卿に言われ、それは無駄にみんなを刺激するからイヤですと一度はお断りしたのだ。

だけど枢機卿が「どうしても」と重ねて言うし、それは教皇聖下もご存じのことだからとなればあらがえず――それにいい加減自分を偽るための染髪剤の使用に嫌気も差していたので思い切って黒い髪に染め直したのだった。

『そのような通達は見たことがございませんが』

ホリデイ代表が言うと、

『それはウインドルの教会に問題があるようですな。こちらにその写しがあります』

すでに手回し済みだったらしく、枢機卿は写しを各国代表に見せる。

ホリデイ代表はそれに目を通すとフンフンとうなずき、再度言う。

『しかしながら猊下、キースグラン連邦でも、５００年前に現れた黒髪黒目の人物が、人智を越える力を発揮してひとつの国を焼いたという記録が残っておりますが』

他の代表たちでもうなずく者が何人かいた。

『……それはその人物の力なのでしょう。たとえば我が悪の心に染まれば、教会の力を利用して多くの人々を不幸にすることができます。そうすれば、「女教皇は災厄である」と言うのでしょうか』

『なるほど。教皇聖下はそこにいる黒髪黒目の少年の身元を保証すると仰せなのですな』

『はい』

このときに起きたざわつきは今まで以上のものだった。

ざわつきはすぐには収まらず、トマソン枢機卿がちりんちりんとベルを何度も鳴らして、ようやく静かになっていく。

（え？　なに？　どういうこと？）

僕はと言えば、ことの重要性をよくわかっていなかった。

身元を保証する……っていうのはレフ魔導帝国のそれと同じ？

いや、違うっぽいな。

ここにはレフの代表者もいるけれど、彼はおろおろしているし。

渉外局の副局長であるアバさんが来てくれればよかったのに、全然知らない人だ。

ただ僕にもわかっているのは、きっと枢機卿は――こうなることを見越して僕に黒髪にするよう命じたのだ。

そのとき――教皇聖下が、この城の主である少女が手を挙げた。

『皆、教皇聖下のご発言があります』

ハッ、と息を呑むような気配の後、場は静まり返った。

聖下は、その白く細い指先を魔道具の上にそっと載せると口を開いた。

『「レッドゲート戦役」の英雄であるレイジは、教会がその身元を保証し、保護します。よって黒髪黒目であるというそれだけの、いわれなき偏見をなくすよう各国に要請するものです』

はっきりと、そう、言ったのだ。

「あ……」

そういうことか。

僕は、ようやくわかった。

根深く残っている「災厄の子」に対する偏見を、教会はこのタイミングでもって完全に払拭するつもりなのだ。

僕というわかりやすい人物をバックアップすることで。

「ふっ」

ちら、と半身だけをひねって見せたトマソン枢機卿が、そのむっつりした顔に似合わないウインクをしてみせる。

僕は頭を下げそうになるのをぐっとこらえた。

――仲間だけでない、見も知らぬ人々の命すら想像できるこの子は……やはりこれまでの「災厄の子」とは違う、あまりにも優しい子だ。よいのだ。そなたが背負う必要はない。

そう言って僕の頭をなでてくれた、賢者様のことが思い出される。

前を向いてきて、よかった。

みんながいたからだけれど、間違った方向ではなくて、正しいと自分が信じられる道を進んでこられてほんとうによかった。

これから生まれるであろう黒髪黒目の子が――それが転生者であろうとなかろうと――偏見に悩んだり迫害されたりしないことを僕は願った。

「災厄の子」（後書き）

書籍版「限界超えの天賦は、転生者にしか扱えない」2巻、富士見ファンタジア文庫より好評発売中です！

動き出す過去の英雄と、動き出す革命家

★　キースグラン連邦　首都ヴァルハラ　★

いかつい男ふたりの前にいる男は、さらにいかつかった。
ダンテスとて、冒険者として戦ってきた人生を振り返ると数多くの大男を見てきた。
今、彼の横にいる「消えぬ光剣」ことヨーゼフもまた同じである。
彼の頭は今日もぴかぴかに磨き上がっている。
だが――、

（さすがだ……「天銀級（ミスリル・クラス）」の盾役（タンク）としてその名を轟かせた冒険者、グルジオは）

ダンテスが見上げるようにしなければならないほどの上背、そして身体の分厚さは人間離れしている。
現役時代はボッサボサのたてがみのようだった頭髪は今やキレイに刈り込まれてはいるが、顔に残るいくつもの傷痕、手袋をしているが左手の義手は、まさに歴戦の猛者だ。
彼が、鎧ではなく貴族のような服を着ているのが不思議なほど。

「――ったく、一難去ってまた一難か？」

グルジオはヨーゼフとダンテスのふたりを応接室のソファに座らせた。
ここはキースグラン連邦の首都、ヴァルハラにある冒険者ギルド。
そのギルドマスターの応接室だった。

現役の冒険者であり黄金級（ゴールド・クラス）のダンテス、以前は黄金級冒険者でありながら今は引退してギルドの訓練官として働いているヨーゼフのふたりは、界隈では有名人だったがそれでもグルジオと比べてしまうと霞む。

年齢もふたりより２０は上のはずだが、いまだ最前線で戦っていそうな気配を醸し出している。

「報告は聞いてるよ」

グルジオはヨーゼフの差し出した紙にさっと目を通す。

アッヘンバッハ公爵領の領都ユーヴェルマインズ冒険者ギルドの使いでここに来たはずのヨーゼフだというのに、グルジオとの面会は１０日も待たされた。

それほどにグルジオは多忙だった。

自分の地位をひけらかすために、無理に待たせたのではないのだろう。その証拠に、グルジオはヨーゼフにも、ダンテスにも、丁重な態度だった。

「『六天鉱山（シックスマイン）』の枯渇は非常に重要な問題かと思います」

ヨーゼフが言うと、

「ああ、その通りだ。だからこれは冒険者でなく、公爵軍と王の騎士隊が動くという」

「……」

「『それで勝てるのか』って顔だな？　俺は実際にこの目で見ちゃいねえが、そんなに竜は脅威か」

領都ユーヴェルマインズを襲った竜ならば、ひょっとしたらこの規格外のギルドマスターならばひとりで押さえ込むかもしれない。

現役と引退という違いはあれど、同じ天銀級だったハーフエルフのクリスタ＝ラ＝クリスタの魔法はすさまじかった。
だが――「六天鉱山」の奥にいた竜のサイズは、領都を襲ったそれの数倍あるという。

「……正直なところ、粒ぞろいの精鋭でなければ倒せないのではないでしょうか」

ヨーゼフはピンと背筋を伸ばして答える。

「公爵軍はともかく、ゲッフェルト王は本気だ。騎士隊にゃ、星４つ持ちがごろごろいるぞ」
「しかし竜との戦いは数ではなく質ではありませんか？」
「ああ。だから、全滅するかもしれんな。全滅したら――いよいよ俺の出番だ」

にやり、と獰猛な笑みを浮かべたグルジオを見て、ヨーゼフの背筋が凍る。
こういうときに彼我の差を痛感するのだ。
クラスの差は、それほどまでに大きい。
今ここでダンテスとヨーゼフのふたりが掛かって、グルジオひとりを相手にどれくらい戦えるだろうか？
数分？　あるいは――数秒？

（強くなったつもりでいたが、俺もまだまだだな……）

ダンテスもまた内心に思う。
得てして玄人は腕が上がれば上がるほど、達人との差が明確にわかるようになる。
それは冒険者にしても同じだった。

自分の実力が上がれば上がるほど、その上にいる冒険者との差がわかる。

「……と言いたいところだが、俺はずっと待機だとよ」

「え？　な、なぜ！？」

拍子抜けしたようなグルジオの物言いに、ヨーゼフが声を上げる。

「俺が最近忙しかったのはそっちのせいだ。どうやら教会から『待った』が掛かってるようでな。近く、起きる大変な事態に備えろとな。国王陛下から見れば、六天鉱山の一時的な天賦珠玉枯渇よりも――大体、鉱山はこないだからぶっ壊れてて使えてなかったんだ――教会の予言を大事にしているようだ」

「……」

「ふむ、その顔を見るに、お前はなにが起きるか知ってんだな？」

「……はい、ここにいるダンテスから聞きました。彼の仲間が教会に報告をしたのだと思われます」

「そうか。そんなら話は早え」

グルジオは言った。

「仲間を全員このヴァルハラに連れてこい。戦力はひとりでも多いほうがいい」

「なぜですか。ここにはグルジオ様、あなたがいるでしょう」

初めてダンテスが言うと、

「そうだ。俺がいれば大抵は守ってやれる」

「……ならば他の街に行きます。あなたがいない場所に」

するとグルジオは難しい顔で首を横に振る。

「ほんとうにヤバい事態なら、戦力を分散させることは論外だ」

ダンテスは驚いた。

グルジオはすでに、世界の融合後の危機を、「これから起きる現実のもの」として把握している。

「ギルドはどうするのですか。冒険者たちにどういった通達を」

「なにもしねえよ」

「なにも……！？　なぜです。あなたは『世界の融合』についてそれほど危機感を持っているというのに」

「これからなにか起きるかもしれないから街にいろとでもいうのか？　冒険者は自由が信条だ。金ももらえねえのに大人しくしてるヤツなんざいねえ」

「予算はつきませんか」

横からヨーゼフが言うと、

「つくわけねえだろ、バカタレ。ユーヴェルマインズだって火の車だろうが」

「……はい。なので本部から……」

「ギルドにゃ金がねえ。だから俺も貴族どもにあちこち聞いてみたが、ダメだ」

そのとき初めてダンテスとヨーゼフのふたりは、グルジオの忙しかった理由を知る。

貴族を相手に資金拠出を求めていたのだ。

冒険者を使って街を守るために。

「……ひりつくんだよな。今回の件は。俺が今まで対峙したどのモンスターよりもやべえニオイがぷんぷんする」

超自然的な「予感」でもって危機を感じ取ったグルジオと、ぬくぬくとした環境にいる貴族とでは危機感に対して考え方がまったく違うのだ。

（ならば、冒険者ギルドはなにも手を打たないというのか？）

実は、それはダンテスが、冒険者ギルドに話を持ち込む前からすでに予想されていたことではあった。

冒険者を縛ることは難しい。

領都ユーヴェルマインズに竜が飛来する……それくらいわかりやすい敵がいなければ。

あるいは金があれば「依頼」とすることができるのだが、その手は使えないようだ。

「……グルジオ様。ひとつ提案があるのですが」

「ん？」

控えめに手を挙げたダンテスに、グルジオが視線を向ける。

「世界の融合についてはある程度、日程の算段がつきます。問題はその後に起きるモンスターの襲来です」

「ああ。それで？　たかだか数日かもしれんが、全冒険者ギルドで冒険者を数日足止めするのにいくら掛かるかお前は知っているのか？」

「ふっ、残念ながら俺は知りませんが、およその数値を計算した者はいます」

ダンテスは脳裏に、自分のパーティーメンバーであり、聡明極まる少年のことを思い浮かべた。
彼が口にした数字をグルジオに伝えると、その日初めての表情を見せた。
驚き、である。

「ほう……うちの職員に三日三晩計算させた数字とそう変わらんな。どうやった？」
「ははは。それが、私はその計算方法を聞いてもどうもピンときませんで」

レイジがやった計算は、いわゆる「フェルミ推定」と呼ばれるものだ。
実数や実態がわからないものに対して、いくつかの手がかりを元に推測する。
冒険者ギルドは逆に、ギルドの数も冒険者の数やランクも、資料をかき集めれば実数を計算できてしまうので、時間を掛けてしまう。
一方のレイジは大雑把な数字さえ把握できればいいので、計算に時間は掛からない。
ちなみにはじき出された金額は、小国の半年分の予算に匹敵した。
これらのことは、ダンテスと別れる前にすでに話し合っていたことだった。

「いずれにせよ、その者が言うには、『冒険者を引き留めるだけならいくらでも方法がある』と」
「……いくらでも、は言い過ぎだろうが」
「いえ。我らは冒険者として長く時間を過ごしすぎたせいで、『自由』が信条の冒険者を引き留めることは難しく、『依頼』を通じてならば確実だが金が掛かる――という固定観念に縛られているようです」

「ふむ……『自由』なはずの我らが『縛られている』とな。そういう側面はあるかもしれんな」

グルジオはあごに手を当てながらそう言った。

この歳、この地位にあってなお、自分の間違いや欠点を認められるグルジオに、ダンテスは感心する。

（グルジオ様ならば）

大丈夫かもしれない。

冒険者たちを引き留め、未知の災害と戦えるかもしれない――。

ダンテスは「希望」をそこに見た。

「では、聞こう。その『いくらでも』ある提案とやらを？」

「はっ。実は――」

それからダンテスは、レイジと話した多くの事柄についてグルジオに伝えた。

彼らの話し合いはそれから夜更けまで続くことになり――グルジオはこの日、残りの予定をすべてキャンセルすることになった。

各国にまたがる冒険者ギルドが、グルジオを中心に大きく動き出すことになるのはそれから数日してのことだった。

★

鐘が鳴った。

会議が一時中断されると、僕は強ばっていた身体から力が抜けていくのを感じた。教皇聖下と枢機卿猊下はふたりで相談することがあるということで、僕は解放され、ひとり城内の廊下を控え室へと向かって歩いていく。

「レイジくん！」

僕に最初に気がついたのはミミノさんだった。その横にはノンさんがいて、廊下をこちらに向かっているところだった。

「あれ、どうしました。ふたりとも」

「その……黒髪に戻したレイジくんが心配でな、そろそろ会議の休憩時間になるっていう鐘が聞こえたから様子を見に来たんだべな……」

心配してくれてたことがうれしくて、なんだかむずがゆいような気持ちもあった。

僕は、先ほどのことを話した。

教皇聖下が僕の後ろ盾になる――という発言を聞いたときにはノンさんはハッとしたように息を呑んだけれど、やはりそれは結構重要なことなんだろうか？

「――ああ、いたいた。レイジくん」

とそこへ声が掛かり――振り向くと、にこやかな顔で歩いてきたのは、

「ホ、ホリデイ代表……！？」

先ほど僕が「災厄の子」だと指摘したウインドル共和国のホリデ

イ人民代表だった。
ミミノさんは僕の前に身体を滑り込ませ、ノンさんはその横に立った。

「あ……あ～、そう構えないでくれたまえ。実は君と話をしておきたかったんだ」
「……話、ですか？」
「まずはその剣呑な空気を和らげようよ、ね？　危害を加える気なんてないことは、私がひとりでここにいることからわかるだろう？」

確かにホリデイ代表はひとりでそこに立っている。

「でも、廊下の奥と窓の外に、合計１２人潜ませてますよね？」

指摘すると、ホリデイ代表はぎょっとしたような顔をした。

「……参ったな、こりゃ。私の想定以上にデキる子だったか」

そんなことをつぶやきながらあごに手を当てて考えるようにし、

「ええとね、これは枢機卿猊下から口止めされていたのだけど……さっきの発言は、猊下に頼まれていたことだったんだよ」
「……え？」
「教会があの場を使って君の身元保証、それに黒髪黒目への差別をなくそうとしたことは君もわかっていただろ？」

それは、まあ。
でなければわざわざ「黒髪に戻そう」なんてならないもんね。

「でも教会を相手に無用に刺激するような発言はみんなしたがらな

いし、あるいは偏見の塊みたいな国家代表がいた場合に議論が紛糾してしまうから、猊下は議論をコントロールするために私に依頼をしたというわけさ」

「なるほど……」

「だから黒髪黒目に対して他意はない。大体、共和制の我が国では差別を持っているような人間は人民代表には選ばれない……と、このあたりはわからないかな」

「いえ。絶対の君主を持たず、代表を選挙などで選ぶということですよね」

現代地球ではわりとふつうにあった政治形態だった。

するとホリデイ代表は目を瞬かせ、

「君は……そうか、だからこそ教会は君の身元を保証したのかな」

「どういう意味ですか？」

「そのままの意味だよ。君は武人としても優れ、さらには聡明だ。だから教会は君を手元に置いておきたいと思ったのだろう」

「い、いえ、そんな……たいしたことでは」

「レイジくんはすごいんだべな！」

ミミノさんがドヤッてるのはかわいいけども。

「この騒ぎが落ち着いたら、是非ともウインドルに招待したいな。どうだい？」

「――それは……少し興味があります」

この世界は王国や帝国といった、君主制の国家がほとんどだ。

ウインドル共和国はキースグラン連邦の一部で、数少ない共和制国家だった。

興味がないと言ったらウソになる。

「よかった。――それと、今は少し時間があるかね？　会議再開まで、あと1時間ほどではあるが」
「はい。時間はありますが……」
「盟約の破棄について話をしたい」
ずばっ、とホリデイ代表は切り込んできた。
盟約者のうち、「大陸人」の代表であるという自覚がホリデイ代表にはあるようだ。
彼はノンさんや他の人たちと同じ「ヒト種族」であることは間違いなく、盟約者として覚醒したのもある程度成長してからだったらしい。
「――ウインドル共和国には盟約に関する記録が残っていてね、過去にも人民代表が『大陸人』代表であったことが何度もあるようだ」
この大陸にヒト種族は多く、人口比で言ってもウインドル共和国にだけ盟約者が多く出るというのは確率的におかしなことになる。
偶然に頼って盟約者が選定されるわけではないようだけど……その基準がよくわからないな。
「私が関与している盟約は――」
「盟約の破棄、ですね」
「……そうだ。枢機卿猊下から聞いたのかな？」
僕が【離界盟約（ワールド・アライアンス）】を使えることはまだ秘密なので、そうです、とうなずいておいた。

すると、少し考えるようにホリデイ代表はティーカップを口に運んだ。

ここは僕に与えられた控え室だった。

控え室と言いながら結構豪華な造りで、貴族の応接間といった趣がある。

壁に掛かった絵は宗教画だけども。

ホリデイ代表の背後にふたり、部屋の入口に3人、窓の外に5人の護衛が配置されている。

彼らは文官や秘書のような質素な格好をしているのだけれど、その袖や裾、頭髪に暗器を仕込んでいる。ごりごりの武闘派だ。

僕は盟約の破棄について記憶をよみがえらせる。

盟約の破棄（大陸人／ドワーフ）

・盟約の破棄は調停者に対して宣言することで行われる。

・破棄が行われた場合、2つの世界は1つになる。

破棄の方法は「調停者に対して宣言する」となっている。

そこでなにか悩むことはあるのだろうか。

「……レイジくん、先ほどの会議を聞いていてどう思った？」

「どう、とは……」

「醜いと、思わなかったかね？」

僕が「災厄の子」かどうかの話が終わると、「世界の統一」について話が進んだ。

だがそこからが難航した。

世界の危機が迫っていると言われても、各国代表はそれを実感しているわけではない。

「レッドゲート」の問題はレフ魔導帝国の話、という感じだし、唯一の問題である「天賦珠玉の枯渇」にだけ関心があった。

つまるところ、根本的な解決ではなく「天賦珠玉をもっと出せ」としか言わなかったのだ。

この状況を推測していたのなら「教会が隠しているのか」と発言する代表までいた。

今、教皇聖下と枢機卿猊下が話し合っているのは、この頭痛がするような代表たちをどう排除して、残りの代表たちと建設的な議論ができるかといったところだろう。

「実はウインドル共和国は、天賦に頼らない形での国家運営を進めている」

「えっ」

僕は驚いた。そんなことが可能なのだろうか？

技能系の天賦珠玉であれば、それをひとつ使うだけで、その人は食いっぱぐれない。

魔法のように便利な道具だ。

パソコンやスマートフォンのようなものかもしれない。

一度使ってしまうとその前には戻れない。

「星の数が低いものだけは希望者にのみ配布しているけれどね。だけどそれは一時的な貸与で、決められた年月のあとに返却するようにしている」

「どうして、そんな……」

不便な道を、とは言えなかった。

ホリデイ代表は確信に満ちた顔をしていたからだ。

「天賦があると努力を忘れるからさ」

その言葉は、僕の身体を貫いた。

ラルクは、僕の姉は――努力をしないわけではなかったけれど、【影王魔剣術（シャドウキング）★★★★★★】を手にしてしまったせいで、それに頼り切ってしまうようになった。

代償は大きかったし、ラルクは今、それを乗り越えようと苦労しているはずだ。

（……僕だって、他人事じゃない）

今までの行動基準は【森羅万象】ありきのものだった。

これを手放すことはほんとうに難しい。

「――天賦があっても、努力をして世のために行動する人は多くいますわ」

そこへ、ノンさんが言った。

ホリデイ代表は、反論を聞いてもイヤな顔ひとつせず――むしろうれしそうに、

「そのとおりです。きっとあなたも、レイジさんも、努力の人なのでしょう。ですが多くの者が努力をできなくなることもまた事実です」

「……」

ノンさんも思い当たるフシがあるのか、じっと黙り込んでしまった。

「実は我が国の政策は実験的なところもあるのです。たとえば我が国は国内に凶暴なモンスターの出現する場所はほとんどありませんから、強力な天賦を必要としていません。また、国境が隣接するところはすべて同じ連邦内の国家であり、外敵に脅威を感じることも

ない」

キースグラン連邦は、出現する天賦珠玉を各国に分配するのだが、ウインドル共和国は星の多い天賦珠玉を断っており、その対価に大国からの資金援助や、有事での軍事協力などを取り付けているのだそうだ。

「天賦珠玉を使う他国に頼った政策……であるのは間違いありません。もちろん一方で、我が国の農業生産量は連邦内でも群を抜いており、豊かになっております」

「それはつまり、ふたつの世界がひとつになったあとの……モデルケースになるということですね」

「そのとおりです」

我が意を得たりとばかりにホリデイ代表はうなずいた。

「我が国はすでに天賦珠玉を必要としておりませんので、それを知っている連邦内の他国は私の発言を無視するでしょう。ですが、どのみち天賦珠玉が枯渇するのであれば、世界の崩壊が現実になる前に盟約を破棄すべきです」

「……ホリデイ代表は、世界が崩壊すると思いますか？」

「思いますよ」

あっさりと、しかしきっぱりと、断言する。

「この世界を誰よりも長く見つめてきた教会が、そう言っているのです。他にどんな専門家を連れてきたって、それは単に、『こうあって欲しい世界』の代弁者を連れてくるようなものです。私は思考を放棄しているのではありませんよ？」

「はい。適材適所という言葉もあります」

「ウインドル共和国は小国ですからね。私にできないことはどんどん他の者にやってもらう……そういう考えが染みついています」
「君主制の国は、難しいかもしれませんね……」

国王、皇帝、そういった立場の人は、すべてを自分の主観で決めることができる。

もちろん臣下や専門家の意見を聞いてから判断するのだろうけど、選挙が行われる共和制の国とは違って君主はその後もずっと君主だ。自分の治世がずっと続いて欲しいと考えるだろうし、他国の有識者の意見より、自国の者の意見を重用するだろう。

「でも一方で、君主制の国家は、国王がこうと決めてしまえば改革は早いですよね？　共和制の場合は次の選挙に当選するために、任期満了前は目先の利益に走ることもある」
「……レイジくん、君、何歳？　どこで政治のことを勉強したの？」
「あ、いえ……たまたま興味があっただけで」
「ふーむ。ますます我が国に欲しくなったな……その前に教皇聖下に釘を刺して……」
「あの、ホリデイ代表？」
「ああ、ごめんごめん。――私の狙いはまさにそこなんだ」
「そこ……？」
「私はすでに『大陸人』代表なので、ある意味君主のようなものでもある。つまり『大陸人』としての決定は私が握っているんだ」

それはそうだろう。

だからこの人は、大胆な決定ができるのかもしれない。

「さっきも言ったとおり、盟約の破棄に関しては天賦珠玉の消滅や強いモンスターの出現などのデメリットはもちろんあるけれど、逆に、我が国には多くの食料があるためにこれを盾に他国に守っても

らうことも可能だ。つまり、私は盟約の破棄に前向きだ」
「はい。でも他国は――」
「そう。他国は後ろ向きだ。いつ崩壊するかわからない世界より、枯渇する天賦珠玉のほうが大事なんだよ。不思議だよな、彼らには次の選挙なんてないのに」
皮肉っぽくホリデイ代表は笑った。

「ゆえに、世界の統一を進める」
「え？　どうしてその結論に？」
「無理やりその境遇に追い込めば、君主はリーダーシップを発揮する。君主が決めれば、臣下は従わなければならない――それはさっき君も指摘したことだろう？」

僕は唖然とした。
この人は、「現状維持を唱える国は無視して改革を進める」と言っているのだ。
そしてそれは、今の切羽詰まった状況を考えると正しい部分があるし、一方で、世界崩壊に向けて準備をしない――つまり「現状維持」国家にとっては被害が甚大なものになる。

「世界がなくなるより、マシだと私は思うがね」

選挙があるから保守的になる？
冗談じゃない。
この人は――根っからの革命家なんじゃないだろうか。
そう思うと、彼を見る護衛たちの目が、どこか神を崇拝するような狂信的なものさえ帯びているように感じられる。

（……危険だ。でも、どうしたらいいんだ？）

まずいことには、ホリデイ代表自身が盟約者だということ。
彼が望めば調停者を呼び出し、盟約を破棄できる。彼の手元にはいつでも世界統合を進められるボタンがあるのだ。
それを押していないのは、単に世界の動向を見守っているだけに過ぎない。
なにかあればためらいなく押すだろう――たとえ、すべてではなくたったひとつの盟約破棄のせいで世界統合が不完全になったとしても。

「君はどう思う？」

ティーカップに口をつけ、ホリデイ代表が言ったとき――次の会議開始を知らせる鐘が鳴り響いた。

「……ああ、残念だね。また後で話そう」

この人はやる気だ。
他国の同調が難しいとなれば、単独でもためらわずに盟約の破棄をする。
至極残念そうにそう言ったホリデイ代表は、護衛たちを引き連れて部屋を出て行った。

欲望は尽きるところを知らないが、落としどころは必ずある

ウインドル共和国のホリデイ人民代表からの接触がないまま、5日が経過していた。

その間「世界会議」は毎日、朝から夕方まで続けられており、それ以外の時間は議題に関する検討や調整、各国の外交が進められているらしい……「らしい」と言うのは、正直なところ僕の出番はもうないからだ。

まあ、国と国の関係がどうのって言われたってどうしようもないよね。

ウインドル共和国は小国なので、ここぞとばかりに各国要人と面会していると聞いた。

トマソン枢機卿は教皇聖下とともに、会議をどう引っ張っていくかの話を連夜話し合っている。

「――お久しぶりです、お嬢様」

「レイジも……変わりない、とは言えないのだわ。ずいぶん立派になったように思うの。それにその黒髪もよく似合ってる」

「お嬢様も、この短い間に一段と大人びましたね」

「それがいちばんの褒め言葉よ」

ふふん、とエヴァお嬢様は笑った。

ここはクルヴァーン聖王国に割り当てられている屋敷の近くにある中庭だった。

残照がわずかに残る庭園は、すでに秋の訪れを感じさせる冷ややかな風が吹いている。

美しい白亜の城や屋敷群、それに発着を繰り返す魔導飛行船を眺めていると、ここが、この世界でも隔絶した重要度を持つ場所だと

いうことに気づかされる。
僕とお嬢様は、ようやく面会することができた。お嬢様の護衛と、執事長――僕がスィリーズ家のお屋敷でも、お世話になっていた方々が控えていたけれど、お嬢様と僕が腰を下ろしているベンチからは、距離を置いていてくれる。
伯爵はグレンジード公爵とともに別の国の代表との晩餐に向かった。

「お嬢様は、今日はよろしかったのですか？」
「ええ……先方に年の若い子がいらっしゃるときには呼ばれるのだけど」

お嬢様もお嬢様で苦労しているようだ。
あれから――「レッドゲート」のときに会ってから、さほど間が空いていないけれど、それでもお嬢様がどんどん一人前のレディーへと成長しているのがわかる。
立ち居振る舞い、仕草のひとつがどんどん洗練されているからね。

「それよりもレイジ、あなたは今回の会議をどう見ているの？」
「どう……とは？」
「少なくともあなたは、教会側の人間だと皆が思っているわ。教皇聖下があなたの身柄を保証してしまったので当然と言えば当然だけれど」
「僕は教会の代弁者ではないんですけどね……」

思わず苦笑がこぼれる。
とはいえお嬢様の指摘も事実で、僕にも各国の要人――代表本人ではなくその側近たちから、熱心な「面会希望」が引きも切らさず届いていた。
全部断ってるけど。

いや、まあ、会ってもいいんだけど、会ってなに話すの？　って感じじゃないか。
向こうはなにか有益なものを期待しているんだろうけど、僕がなにかできることなんてないし。

「それはわかっているのだわ。お父様は『レイジさんから教会に関する情報を引き出してきてください』と言われたけれどね」
「はは。直球ですね」
「わたくしが聞きたいのは、教会なんて関係なしに、あなた個人の意見はどこにあるのかということ」
「……僕の意見は変わらないです。手紙、読んでいただけましたよね？」

お嬢様はしっかりとうなずいた。
僕がお嬢様宛で送った手紙には、この世界が崩壊する危機について書いた。
そして最後には、

『非常に危険な状況になると思われるので、エヴァお嬢様には前線に来て欲しくありません。ですがきっと、お嬢様は前線に向かうのでしょう。「鼓舞の魔瞳」を有効に使える場所が前線であると知っているお嬢様なら。
でもそのときは必ず僕に知らせてください。なにかあったら、僕がお嬢様を護ります』

そう、書いた。

「この世界が戦場になるとわかっていても、僕は世界の融合を進めるべきだと思います。いつ崩壊するかわからない世界で、見せかけだけの毎日を過ごすのは……イヤです」

「……多くの人が犠牲になるかもしれないとしても？」

わかっている。犠牲になる人が出るだろうことは。

だけど前に進まなければいけない。

人は前に進むことで育まれ、成長し、発展してきたから。

「はい」

この一言を言えるようになるまでに僕は迷いに迷った。

でもみんなが支えてくれるから、言えるようになった。

その「みんな」にはお嬢様も含まれている。

選択を任されたら、お嬢様ならきっと希望の光があるほうを選ぶだろうから。

「……わたくしも同じ意見だわ」

微笑んだお嬢様を見て――ああ、この人はこんなにも柔らかい表情ができるようになったのだなと僕の胸がじんわり温かくなった。

「レイジ。となると今の会議の流れは非常に悪いものだと思うのだけれど」

僕はうなずいた。

初日から、会議は一向に前進していないのだ。

各国「天賦珠玉の枯渇をどうにかしたい」

教会「それは世界崩壊の兆候だ」

各国「その証拠はないし、教会は枯渇について分かっている情報をすべて開示すべき」

教会「すべての情報を開示している。崩壊を防ぐために世界の融

合を進めなければならない」
　各国「融合によってモンスターが増えるには天賦珠玉が足りない。今は無理」
　教会「一刻を争う」
　各国「その証拠はない。あるいは教会は情報を隠しているのでは？」

　そんな感じで、各国は教会に対して懐疑的で、天賦珠玉がなくなってきたことに対する疑心暗鬼から建設的な議論ができないのだ。
　さらには、すべての国が裕福ではなく、ウインドル共和国のように直接武力をほとんど持たない国もあれば、そもそも国の運営が崖っぷちでヤバイところもある。そういうところは教会の援助を当てにしているし、今回の会議に参加した理由もそれがすべてだ。

「はい。教皇聖下や枢機卿も同じ考えで、本来ならばこの会議で各国承諾の上で世界融合を進め、その後に訪れるモンスターとの戦いについても共同戦線を張れるようにしたかったようです」
「今の状況では、それも無理なのだわ……」
「現実的な落としどころを探っていくことになりそうです」
「それは、教会の言い分に同調する国だけを巻き込んで共同戦線を張るということ？」

　さすがお嬢様。
　スィリーズ伯爵の下で鍛えられてるんだろうなあ……こういうところの頭の回転が速い。

「ええ。モンスターが出現すると言っても、大陸全土に渡って出現するとは考えられません。僕が向こうの世界に行ったときにも、かなりムラがあるように感じられました」

こちらの世界で言う未開の地「カニオン」には巨大種がいるほどに混沌としているけれど、それ以外は、戦力を集めればコントロール可能だと思われる。
この辺の情報はすべて伝えてある。

「……でもどれほどの国が同調するかしら？」
「クルヴァーン聖王国は……」
「もちろん、賛成よ」

よかった。
ここで、グレンジード公爵を説得しなければいけないとかなったらやりづらいにもほどがある。

「レッドゲート戦役を経験しているから、向こうの世界の脅威については理解しているのだわ」
「ああ、なるほど……そういう事情が」
「だけれど、逆に言えばほとんどの国が脅威について知らないのだから、会議で賛成しようがないの」

確かに、会議での各国の様子をうかがっていてもそんな感じだった。

「……レイジ。盟約の破棄というのはすぐにできるの？」
「できます。教会は、おそらく会議が終わって、1か月とか、そのくらいの時間を設けて破棄を行う心づもりだったのだと思います。そのために各種族代表が集まっているので」
「確か……盟約者のことなのだわ」
「はい」

僕は改めてお嬢様に説明する。

８条から成る盟約について。ライブラリアン、獣王種族、ノーム、ハイエルフ、ドワーフ、聖水人、大陸人のことを。

「でも、レイジ。それでは7種しかいないのだわ」

「８条については僕もよくわかりません」

☆☆☆☆☆☆☆☆盟約の意義（　／　）

・□□□□□□□□は盟約の□□を調停者に□□、□□する。

・□□□□□□□□は盟約が破棄された場合、□□に□□する。

この内容をお嬢様にはっきりと伝えることができないのは、盟約の制限によるものだ。

あまりにも謎なので、あまり意味がない盟約なのでは？　という気さえする。

「ですが８条目には盟約者が指定されていないので、問題はないと判断するしかありません」

僕は【離界盟約】を装着しないと完全には盟約の把握をできないのだけれど、ここのところ【森羅万象】との付け替えが多くあったせいで少しずつその力を使えるようになっていて、盟約内容の把握ならば未装着の状態でもわかるようになっていた。

星１２という天賦珠玉なのに、それしかできないのかという見方もできるけど……。

「そういうことだったのね」

「結局のところ問題は、その１か月なりの期間があったとしても各国が戦闘準備を整えなければ意味がないというところでしょうか」

「目に見える利益を与えない限り、うまくいかないと思うのだわ」

「利益、ですか」

「使途を決めたお金を渡すの。防衛準備をするようにと」
「でも、それは……教会の発案に反対した国だけがお金をもらえて、賛成した国は損をすることになりますよね。かといって、すべての国にお金を渡すこともできない」
実はそのあたりについては教会でもすでに検討済みで、トマソン枢機卿がぼやきながら僕にその話をしてくれた。
――皆、教会は金を持っていると勘違いしておるのだ。ごねれば金が出ると。
教会はすでに「融合後」の世界をにらんでいて、そのときに多くの資材や食料、お金が必要になると見込んでいる。
だからここで各国にばらまくわけにはいかないのだ。
ただ単にモンスターに勝利するだけではダメで、その後の世界の行く末まで案じている。
それほどまでに、枢機卿猊下も、教皇聖下も、今回の案件に真剣に取り組んでくださっている。
「……それじゃ、資金以外のメリットを渡さなければダメなのだわ」
「と言うと？」
「キースグラン連邦内は連邦維持に関する税金が結構な負担だと聞いているわ。防衛期間中はその税金の減免。その他の国家に関しては、教会による無償治療」
「それは聖下もお考えのようです。すでに妥協ラインの一部として組み込まれているとか」
こくり、とお嬢様はうなずいた。
「それだけでは足りないのね？」

「はい」
「……お父様やグレンジード公爵はクルヴァーン聖王国が保持している星５つの天賦珠玉を放出してもいいとお考えのようだわ」
「えっ！？」

思わず声が出た。
それは６大公爵家のうち５公爵家が持つもので、それ以外に伯爵家が１つ持っている天賦珠玉だ。
ロズィエ公爵家の【剣術★★★★★】。
リス公爵家の【英雄指揮術★★★★★】。
エベーニュ公爵家の【神秘調合★★★★★】。
ルシエル公爵家の【竜剣術★★★★★】。
ラメール公爵家の【魔力強化★★★★★】。
モンターニュ伯爵家の【祈祷術★★★★★】。
失われてしまったけれど、聖王騎士団の【聖剣術（ホーリーソード）★★★★★】。
「一天祭壇（ファーストアルター）」を持つクルヴァーン聖王国でも、星５つ以上はこれしかない。
他国には星５つ以上のものがあってもひとつといったところだろう。
これを、放出する？

「そんな……公爵家は納得しないでしょう」
「でも、それを果たせば各国はクルヴァーン聖王国がどれほどまでに真剣であるかを理解できるはずなのだわ。レイジ……グレンジード公爵が聖王陛下だったときの言葉を覚えている？」
「はい」

グレンジード公爵は「新芽と新月の晩餐会」でこう仰った。

――これから天賦珠玉を選び、多くのことを学び、時に戦い、時

に失敗し、時に喜び、時に苦しみながらも――貴き血を持って生まれた以上はその宿命と戦わねばならん。

これが本物の貴族かと感心したのを覚えている。

生まれからして「貴い」なんておかしいような気もしたけれど、グレンジード公爵は「聖水色」を持つ王族の責務を知っていた。

生け贄を捧げなければならないという責務だ。

だからこそ「生まれ」に対してすさまじいこだわりがあったのだろう。

「公爵家には現聖王陛下がすでに説明をなさっていることよ。それを放出するというカードは、明日、あるいは明後日には切られると思うのだわ」

僕は胸が震えるのを感じていた。

「貴き血」を持って生まれた彼らは、身を切られるよりもつらい思いで天賦珠玉を拠出するのだ。

各国を説得するために。

「でもね、レイジ。問題はそれだけでは各国が納得しない可能性もあるということ」

「……はい」

だけれど、人の欲に限りはない。

それでは足りないと言う国もあれば、６つしかない天賦珠玉を手に入れられなかった国は文句を言うだろう。

「もう少し決め手があればいいのだけれど……。グレンジード公爵も、お父様も、今はそれを探しに各国代表者と話をしているのだわ」

僕の知らないところで進んでいる調整作業に、頭が下がる思いだった。
僕だって、大陸の国々が同調してモンスターと戦うというのは、なかなか簡単なことではないだろうと思っていた。
だけれどこれほどだとは。
きっとホリデイ人民代表は、調整作業が難航することを見越して自ら盟約を破棄すると言ったのだろう。

「各国の防衛を動かすための、最後の一押し……」

それがなければ、真っ先に犠牲になるのはなんの罪もない領民たちだ。
なにかないか？
お金はダメ。
レアリティの高い天賦珠玉はもうない。
レフ魔導帝国はレッドゲートの戦役が終わってからの復興途上だ。
余裕はないだろう。
なにか、なにか、なにか――。

「……悪いとは思いましたが、お話を聞かせていただきました」

そのとき僕らのいる庭園へと、やってくる数人の姿があった。
エヴァお嬢様の護衛が驚いているところを見ると、彼ら――彼女：たちに気づいていなかったのだろう。
これほどの距離を立ち聞き？
いや――向こうの声が、ここまで届いたことを考えると、なにか魔法を使ったのか？
だけどそんなことより僕は、現れた人影を見て思わず立ち上がっていた。

「アーシャ！！」

シークレットサーヴィスのエルフたちを引き連れた、ハイエルフのアーシャがそこにはいたのだった。

「あ、大丈夫です、彼女は僕の知人です。シルヴィス王国の――」

「――冒険者のアーシャです」

護衛に阻まれそうになったアーシャに助け船を出そうとしたけれど、アーシャははっきりと「冒険者」だと言った。シークレットサーヴィスの人たちがイヤそうな顔をしたけれど、よくよく考えれば「冒険者になる」ということで出国してきたはずなのにいまだに護衛をつけてくれるんだな……。

「……レイジ、こちらの方は？」

やってきたアーシャを注意深く観察しながらお嬢様がたずねるので、

「こちらはアーシャ。今は冒険者ですが……以前はエルフの森に住んでいて、ハイエルフの血を引いています」

「冒険者のアーシャですわ。レイジさんとは行動をともにしていますの」

するり、とアーシャは僕の横に立った。

……あれ？　なんか距離が近いな。いつもはもう半歩くらい離れてるんだけど。

僕が少し横に移動すると、アーシャが着いてくる。

「レイジは『銀の天秤』に所属しているのではなかった？」

「あ、はい。パーティーはそうですね、アーシャはまだパーティーには……」
「そう。パーティーメンバーではないのね」
ん？　なんかちょっと言い方にトゲがあるように聞こえるな。
「いえ。すぐに加入するつもりですの」
ん？　アーシャって、こんなに押しが強かったっけ……。
ていうか「銀の天秤」に加入するとかそういう話は一切してこなかったような気が……。
「あ、えーっと。アーシャ、こちらの方はクルヴァーン聖王国のスィリーズ伯爵家、エヴァお嬢様。僕が以前護衛を務めていた……」
「なるほど。前の雇い主でいらっしゃるのですね」
ん？
「今でも雇う気はあるのだわ。レイジ、いつでも戻ってきていいのよ」
ん？
「そうはいきません。レイジさんは私と旅をしてくださるとおっしゃったので……」
「ほう……。それは初耳なのだわ。レイジ、ほんとう？　確か、わたくしを世界一周の旅に連れ出してくれるのではなかった？」
「え？　いや、ちょっと待ってください。なんかギスギスしてませんか？」
「いいえ～。ただ、ちょっと、いえ、相当に？　前の雇い主の方が

美貌をお持ちでしたので……」
「そんなことないのだわ。ただ手紙に書かれていなかったことを知って混乱しているだけ……」
そ、そうか。ふたりが問題ないなら……いいのかな。
「で、アーシャ。どうしてここに来たんですか？　ていうか立ち聞きはよくないと思いますけど……魔法使いました？」
「そ、それは！　……確かに、ごめんなさい。なんだかいい雰囲気だったので気になって……」
ごめんなさい、以降がごにょごにょしていて僕の【聴覚強化】でもあまり聞き取れなかったけど、謝ったならいいか。
「でも、おおよその話はわかりました。天賦珠玉の枯渇によって困っている国々があり、一定期間でもいいから彼らを動かして防衛準備を整えたいということですね？」
「はい、そうです。なかなかいい手がなくて……」
「それでしたら、お手伝いできると思います」
アーシャはにこりと微笑んだ。
「シルヴィス王国がなにを管理しているのかはご存じですよね」
「え……それはエルフの森と、『三天森林（サードフォレスト）』ですよね？　――まさか」
「はい、そのまさかです。賢明なるシルヴィス国王陛下はこう決断されました」
――国庫に保存している天賦珠玉をすべて放出し、困窮する各国に配布せよ。そして、来たるべき脅威に備えるべし。

「私は、それを伝えるべくやってきたマトヴェイ兄様に同行してきたのです。今ごろユーリーお姉様も知っているはずですわ。『三天森林』の枯渇も始まっている今、時間的な余裕はないと国王陛下はお考えです。つまり明日の世界会議で、すべての決着をつけるのです」

欲望は尽きるところを知らないが、落としどころは必ずある（後書き）

国王はイケメン。

分配会議（前書き）

●あらすじ：

世界会議は膠着状態だった。「教会が発案なんだから金を出せ」という各国に対して、教会は決め手を欠いていた。このまま賛同する国家だけでも「世界結合」に向けた防衛ラインの協議を進めるべきか――そう悩んでいたところへやってきたのが、ハイエルフのアーシャだった。

エルフのシルヴィス王国国王は、ごねる各国に備蓄してきた天賦珠玉を放出し、脅威に備えさせよと決断をしたのだった。

分配会議

世界会議の様相は、一変した。

翌朝の会議開始早々、シルヴィス王国代表ユーリーからの提案があった。

――「来たるべき脅威」に向けた防衛ライン構築に当たり、協力を希望する国に対して我が王国の天賦珠玉を分け与える。

シルヴィス王国が備蓄してきた天賦珠玉の総数は、２６７万個。大半が星１つや２つであるのは確かだが、星５つが４個、星４つは９５９個、星３つは２万個もあったのだ。

これには各国も目の色を変えたが、次の言葉で静まり返った。

「『三天森林（サードフォレスト）』における天賦珠玉はすでに枯渇しております。ゆえに、『世界結合（ワールド・ユナイト）』を成功させなければこの先の未来はありません。それほどまでに、我が国王は先行きを案じておられます」

２６７万個もの天賦珠玉、さらには星５つが４個含まれるとなれば、これを買うにはとてつもない金額が必要になる。

いや、星５つがある時点で、金を積んでも手に入れられないだろう――そもそも星５つの天賦珠玉の出現確率は極めて低く、さらには新たな天賦珠玉の出現がなくなった今ならばなおさらだ。

特別席でこの議論を見守っているアーシャはにこにこしており、それが目に入ったユーリーさんは少し恥ずかしそうに頬を赤らめていた。アーシャの隣にいるマトヴェイさんは「これでもゴネる国があったらそこは無視しちゃえよ、もう」という顔で膝に頬杖をついている。

そこから先の議論はトマソン枢機卿が引き取った。
直接、天賦珠玉が産出する土地を有する国は、今回の分配には含まれない。
具体的には「一天祭壇（ファーストアルター）」を有するクルヴァーン聖王国。
「三天森林」、「六天鉱山（シックスマイン）」を有するキースグラン連邦の首都ヴァルハラ。
「五天石塔（フィフスタワー）」を有するドワーフの王国。
「七天高地（セブンスハイランド）」を有する光天騎士王国。
「二天海底（セカンドオーシャン）」、「四天氷河（フォースグレイシャー）」、「八天炎河（エイスラーヴァ）」は天賦珠玉の採掘が過酷な土地であり、また特定の国家が所有しているとは認められない紛争地域も含まれており、今回は対象外とされた。
それ以外にも、分配を辞退する国もあった。
教会に対する忠誠が高く、資金や軍備も充実している国。
あとは天賦珠玉に頼らない国家運営を自負しているウインドル共和国だ。

「星５つの天賦珠玉については、４つしかないために抽選とする。また星５つを手に入れた国は、星４つの天賦珠玉分配は受けられないものとする。さらに、星５つがどのような内容の天賦珠玉であるかについても、分配されるまではわからないものとする」

この発言には各国代表から非難の声が相次いだ。
たとえば戦闘に役に立たない星５つの天賦珠玉もあるのだ――【手先が器用★★★★★】みたいなものがあるかもしれない。

「不満ならば、星５つについては辞退すればよろしい」

しかしトマソン枢機卿はその非難に取り合わなかった。
確かに、【手先が器用】であっても星５つならば「いくら積んでもいいから欲しい」という資産家がいるかもしれない。そういう人

物に売れば、相当な金額にはなるだろう。事実、トマソン枢機卿もその後に、

「もし星５つの天賦珠玉が分配されたが、要らないということであれば、教会にはオークションを開催して売却を支援する用意もある」

と言った。

すると今度は星４つの天賦珠玉について質問が続いた。

これは星５つが分配されるであろう４カ国をのぞく、６カ国で分配することになるが、今回の防衛ライン構築に必要そうな天賦珠玉は限られているために教会が９５９個をリスト化し、６カ国で順に欲しいものを１つずつ選んでいくという方式になった。

こうなると、各国が悩むのは「博打を打って星５つを得るか、堅実に戦力強化となる星４つを１６０個得るか」ということになる。

（上手い……）

僕は内心、トマソン枢機卿の手腕に感嘆していた。

もう、すべての国が気にしているのは「防衛ライン構築に参加するかどうか」ではなく、「いかにして天賦珠玉を得て帰るか」に移っているのだ。

アーシャが到着したのが昨日だ。

たった一晩で、トマソン枢機卿は分配の方法を詰め、議論を誘導できている。

（【議論が器用】みたいな天賦珠玉でもあるんだろうか？）

寝不足の日々が続いているせいだろう、トマソン枢機卿の顔色は悪い。

一方で、枢機卿の隣にいる教皇聖下はじっとしていた。

初日に僕の身分を保証するという話をされて以来、発言をしていない。
僕と年齢はさほど変わらないというのにどうして教皇なんていう地位に就いているのか、僕はほとんど知らなかった。

「！」

ちらりと、教皇聖下が僕を見た。
ねずみ色のヴェール越しにはその表情はほとんどうかがえないのだが、はめ込まれた宝石のような、紫色の瞳がきらりと輝いたように感じられた。
すぐにその視線は正面に戻されたけれど、僕は、この人が単なる少女ではないのだろうことを感じ取った。【森羅万象】がなにも反応しないのが不思議なほどに。

世界会議の話し合いは進み、各国による条約の締結は3日後に行われることとなった。
それまでに、条約文の詳細が詰められることになり、どの国が星５つの天賦珠玉を手に入れるのかも決まる。
僕からすると星４つを１６０個と、星５つを１個だったら１６０個もらったほうがいいに決まっているように感じられるのだけれど、星５つというのはやはり別格らしい。いまだに悩んでいる国は多いようだ。
確かに、クルヴァーン聖王国にいたときも、星５つの有無で貴族家の権勢が変わると聞いたしね……。
だけど世界会議が進む一方で、もうひとつの話し合いも進んでいた。

「――これで全員だな」

と言ったのは、グレンジード公爵だった。

世界会議が行われているのと同じ建物内にある、小会議場。

ここに集まっているのは各種族代表だった。

ライブラリアンの代表は、僕も見覚えがある「薬理の賢者」様の集落にいた人だ。

獣王種族の代表は、巨大ゴリラさん。

ノームの代表は、灰色の長い髪と長いヒゲが特徴の老人だった。

背は僕の腰くらいまでしかなく、大きな鼻は垂れていて荒れているのか凸凹があった。横の巨大ゴリラさんと比べると１０倍以上体重が違いそうだ……。

ハイエルフの代表はユーリーさんだ。

ドワーフの代表は、国家代表でもあるガチムチの男性。「王太子」と呼ばれていたけれど、見た感じ５０歳を超えているんだよね。白髪交じりの長い髪を後ろで束ねていて、豊かなヒゲをごしごしごしごしている。

聖水人の代表はもちろんグレンジード公爵。

そして大陸人の代表はウインドル共和国のホリデイ人民代表である。

各代表は数人の供を連れてきているので、小会議場内は結構な人口密度だった。僕はグレンジード公爵の後ろに立っている――スィリーズ伯爵の隣である。ちなみにエヴァお嬢様は後ろの予備テーブルに着座していた。

「ここに集まってもらったのは、無論、盟約の破棄に関することだ。先ほどの会議で『世界結合』について話がまとまったが、盟約の破棄は盟約者たちが行わなけりゃならん」

すると、派手な着物を羽織った巨大ゴリラが小さく手を挙げた。

「どうしてあなたが話を進めているのかしら？」

……まさかの女性だった。いや、あの、すみません。勝手に男だと勘違いしていました。

しかも声が丸っこくてかわいい。

「トマソン枢機卿に頼まれただけさ。俺が進めるのに問題があるなら、あなたが進めてくださっても構わない、ミンミンシャン閣下」

「……んもう、閣下なんて他人行儀の呼び方は止めてよ。あたしとあなたの仲でしょう？」

えっ。グレンジード公爵のお知り合い？

ていうかミンミンシャンって名前なの？

僕の理解が追いついていないでいると、横からスィリーズ伯爵がこっそりと、

「……かつて公爵閣下が聖王陛下に即位される前、ミンミンシャン閣下と戦うことになりましてね。公爵閣下が辛くも勝利したのですが、それ以来、ミンミンシャン閣下は公爵閣下に惚れ込みました」

「……なんか突っ込みどころ満載ですね、その話」

「……ようやくあなたにも伝えることができてうれしいですよ」

いたずらっぽくウインクしてみせるスィリーズ伯爵は、イケメンなので無駄に絵になる。

「ふう。あたしはあなたが進行役でも構わないけど、でもねえ、あなたはクルヴァーンの利益を考えなければいけないところもあるんでしょう？　そうなると、盟約者代表としては余計な考えが混じってしまうでしょう？」

「つまり、俺がクルヴァーン聖王国が最も被害を受けそうにない形で盟約の破棄をさせようとするということか？」
「そうよ」
ずばり、と切り込んでくる巨大ゴリラさんに、グレンジード公爵は両手を挙げた。
「わかった。それなら他の人が進めてくれて構わない……ただし、今日の話し合いは盟約の破棄を行う前提にして欲しい。今から、盟約の破棄の是々非々を議論する時間はないのでね」
「……ワシらは、ただの道具か。盟約を破棄するための」
憤懣やるかたなし、という顔で言ったのはノーム代表だった。
「教会とは共存共栄の関係であったからこたびの召喚にも従った。だが、各国代表は己の利益ばかりを囀り、本気で盟約と盟約者、天賦珠玉のあり方について考える者はなかったではないか」
「そうねえ。さすがのあたしも、レベルの低い議論に呆れたわ」
グレンジード公爵は腰を浮かせ、手をテーブルについて頭を下げる。
「……すまない。と俺が謝っても仕方のないことだが、盟約者を軽んじていたわけじゃない。あの場で各国の同意を取り付けなければ、とにもかくにも『世界結合』後に動けなくなる」
「賢明なるノームの長老殿。私たち森の民も今回のことは腹に据えかねるところがある。しかしながら我が父王は前に進むことを決断なさった。どうか長老殿も前向きに考えていただきたい……それはノームの安寧にもつながるのだから」

ユーリーさんがフォローに入ると、「ふん」と鼻を鳴らしてノームの長老は引き下がった。
どうしようもないことはわかっている。
盟約を破棄することは既定事項として織り込まれていたからだ。
ただ、この憤りを口にしなければ気が済まないというのも事実だろう。

「……国家として組み込まれていない、ライブラリアン、獣王種族、ノームの3種族には別の形で恩に報いるのはどうかな？」

そこでホリデイ代表が口を挟んだ。
ウインドル共和国は今回の天賦珠玉分配にも関わっていないし、さらには盟約の破棄にも前向き――どころか「超前向き」だ。なんならひとりでも盟約を破棄しようという人だ。

「それは悪くない提案ではあると思うが、なにか必要なものはあるか？」

グレンジード公爵がうなずくと、

「……特にない。我らは賢者様に従って生きるのみ」

とライブラリアン。

「あたしは、グレンジード公爵がウチの集落に引っ越してきてくればそれでいいわよ」

ばちこーん、とウインクするミンミンシャン閣下。
グレンジード公爵は青ざめて冷や汗をだらだら流し始め、それを後ろから見たスィリーズ伯爵は笑い出したいのをこらえているのだ

ろう――頬が痙攣している。

「……ワシらは、そこの偏屈どもが流通を止めている天銀（ミスリル）を、正常に市場に流してくれりゃあいい」

ノームの長老は、ドワーフの王太子殿下をぎょろりとにらんで言った。

え？　ドワーフの王国が天銀の流通になにか手を加えてるの？

「おいおい。偏屈だってよ。どこの誰だ偏屈なのは。ノームより偏屈がいるわきゃねえと思うがよ」

うわあ、ドワーフの王太子殿下、めっちゃ口悪い。

それに追従するように付き添いの人たちも「へっへっへ」なんて笑ってる。

「……伯爵。天銀の流通って……」

「……国家間の流通は元々制限されていますが、ノーム種族の集落がある立地的に、どうしてもドワーフに頼らざるを得ないのです。大地信仰のノームとドワーフはそれぞれ天銀に対して強い執着を持っており、力で勝るドワーフがなかなか天銀を渡さないようですね」

ドワーフ最悪じゃないか。

「……一方でノームは、ドワーフの大地信仰の聖地と呼ばれる場所を封鎖して、もう２００年になります」

どっちもどっちだった。

争いは同じレベルの者同士でしか……という有名なワードを思い出してしまった。

「特定の種族に関わる要求でないほうがよろしかろうと思いますな。教会に一肌脱いでもらうくらいのことがいい」

グレンジード公爵はノームとドワーフの仲裁に入るふうを見せながら、実際は自分個人に向けられた要求をかわそうと必死のようだ。

「……それより、盟約破棄の実行日はいつになるのか」

ライブラリアン代表が、視線だけでバチバチ火花を散らしているノームとドワーフをキレイに無視して言った。

「条約締結から2か月後。それで足並みをそろえるらしい。できれば盟約者本人にここ、ブランストーク湖上国に集まってもらい、全員そろった段階で実施したい」

「そろわなかったら？」

ホリデイ代表が口を挟んだ。

どこか、余裕の笑みを浮かべて。

「それでもやるさ」

グレンジード公爵はブレなかった――そのときちらりと、背後にいる僕に視線を投げてきた。

――いざとなったら、頼む。

そう言っている気がして。

僕の【離界盟約】を使えば、盟約者全員がそろわなくとも全員が破棄を宣言するのと同じことができるはずだ。そういう実感が、あ

った。
　これだけ多くの人が動いて、「世界結合」に向けた準備を進めている。
　盟約者同士の話し合いだってそうだ。
　本来あるべき形で破棄ができるようにと、多くの人が集まり、話し合い、すりあわせ、調整している。
　でも、もしも――ダメだったら。
　グレンジード公爵の「頼む」は、「全力を尽くすが、もしもダメだったら頼む」という意味であると僕は理解した。

（そのときは）

　賢者様も、ダンテスさんたちも、僕がすべてを背負う必要はないと言ってくれた。
　でも、

（僕がやります）

　事ここに至れば、やるしかない。
　それくらいの覚悟はできた。

「……なるほどね」

　ホリデイ代表は小さく笑った。それが――なにを意味するのか。

「では、ふたつたずねたいが……ひとつは、盟約は8条あるのに盟約者は7人しかいない。これで満足に破棄ができるのかということ」

　グレンジード公爵が答える。

「8番目の盟約者は空欄だ。今ここにいる7種族以外にはいないことになっている」
「ではもうひとつ。盟約の破棄とともに天賦珠玉が消失することをどうして先ほどの会議で言わなかったのか？」
その発言は電撃のようなショックとともに小会議室を走った。
「……なんだと？」
「聞こえなかったのかな。盟約は天賦珠玉についても言及されている。盟約が破棄されれば、当然、盟約とともに天賦珠玉が消えることも考えるべきだろう。それを知っていれば、『三天森林』産の天賦珠玉をもらうことで盟約の破棄に賛成していた各国は――どう思うだろうね？」
会議室内に小さなざわめきが満ちていく。
それは――その可能性は、否定できなかった。
でも考えたくなかった。
なぜなら、天賦なしに向こうの世界のモンスターと戦って勝つことは、ほぼ不可能だろうと思うからだ。
ホリデイ代表は余裕の笑みを浮かべている。
それは、ウインドル共和国が天賦珠玉に頼らない国家運営をしているからだ。
（でも――おかしい）
ウインドル共和国は他国の軍隊に安全保障を任せている。
その軍隊は天賦によって成立しているじゃないか。
それが骨抜きになったら、巡り巡ってウインドル共和国が危険になるはずだ。
それがわからないホリデイ代表ではないだろうに。

「――天賦珠玉は消えません。え、正確に言えば、天賦珠玉が消える可能性はありますが、体内に取り込んだ天賦は消えません」

そこへ、聞き覚えのある声が響いた。

小会議室のドアは開かれており――そこに立っていたのは、ウサギだった。

祭司服を着た、ウサギだったのだ。

「盟約者の皆様、お久しぶりでございます。え、初めましての方は初めまして。わたくしめはクルヴァーン聖王国『祭壇管理庁』特級祭司であります、エル＝グ＝ラルンでございます」

人々の反応ははっきりと分かれた。

エルさんを知っている人たちは驚きながらもどこか納得した顔をして。

知らない人たちは「なぜここにウサギが」「獣王種族……？」という顔だった。

「ようやく、長年掛けてきた研究の成果が、え、見られるようです。――それは気が遠くなるほどに、え、長い年月でございました。今になって思うのは、ふたつに分かたれた世界というものは、ひとつであるべきものであり、分かたれていた期間というものは、え、ひとつに結合するまでの『準備期間』であったのではないかと……そう思うのであります」

エルさんがひょこひょこと歩いてくると、ライブラリアンの代表の横にやってきた。

「……久しいですね、エル＝グ＝ラルン」

「はい。え、私の役割もそろそろ終わりそうです」
「ええ……賢者様も、あなたのことは気にしていました」
「それはそれは」

エルさんはテーブルについた人々を見回してから、最後に、僕の顔を見て視線を止めた――たぶん、僕だと思う。

「……エル＝グ＝ラルン。彼は……」
「え、わかっております。『災厄の子』などというバカげた呼称を教皇聖下が止めさせようとしたことは、誠にすばらしいと存じます」
「賢者様は、彼が『希望』だと」
「『希望』……」

スッ、とエルさんの目が細められた。

「いい言葉ですね。私のような、え、『停滞』を象徴するような者よりもずっといい」
「エル」

咎めるようにグレンジード公爵は言った。
それは、「話が脱線している」と言いたいのか、あるいは「卑下するようなことを言うな」と言いたいのか……。
いずれにせよ、エルさんはコホンと咳払いした。

「それでは『世界結合』後に起こりうることについて、現在までに観測されてきたあらゆる盟約に関係する事柄を元に、え、推測したいと思います」

盟約破棄

全員の視線が集まり、沈黙が支配する会議室でエルさんは言った。

「今、そっくりな形をしているふたつの世界は、え、別々に存在しております」

運ばれてきた黒板に、エルさんはチョークを握ってふたつの丸を書いた。

そこに「我」、「彼」という文字を書き入れる。

「結合とは言うものの、これはゲートが開くようなものではございません。え、先日のレフ魔導帝国に起きたレッドゲートとは違います」

次にエルさんは、二重丸を書いた――ふたつの丸はほとんどかぶっているような線で。

そこに「我・彼」という文字を書き入れる。

「世界の結合は、同じ形をしたものを重ね合わせるようなものでございます。え、我らからすると、彼の世界の者どもが突然目の前に現れるように感じ、彼の世界の者どもにとっては我らが突然目の前に現れるように感じるでしょう」

「単純に人口が倍になるようなものだな？」

グレンジード公爵が言うと、エルさんはうなずいた。

「あらゆる生命が倍になるために、食肉には事欠かないでしょう――

―しばらくは。しかしながら、え、皆さんご存じの【八道魔法】というものがございますな？」

エルさんは二重丸の下に「生命×2」と書き、その下に「火・水・風・土・雷・花・光・闇」と書き、そこに、

「これらは、世界の根幹を成すものであり、ふたつの世界がひとつになっても総量は変わりませぬ」

「×1」と付け加えた。

「……大地や空、海は変わらず……木々はどうなる？」

「おそらく生命力の強いものだけが残るでしょう。え、彼の世界についてはそこにおられるレイジ殿が実際に見てきたということで、話をうかがうに、だいぶあちらは荒れているということ」

みんなの視線がこちらを向いた。

……いきなり見られるとソワソワする。

「建物、城砦に【土魔法】で強化をかけることで、え、彼の世界の植物よりも強くなれば、問題ないと思われますが、かけなかった部分の街中に、森が出現することも十分あり得ます」

「【土魔法】で都市すべてに強化をかければどうだ」

グレンジード公爵が全員を代表して質問する形になっている。

「もちろん、都市の形は維持できましょう。彼の世界で同じように【土魔法】を使っていなければ」

「……それが最優先だな」

「え、左様です」

その内容を大急ぎで教会関係者が書き留めている。これを世界会議の参加メンバーに伝えるためだろう。

どれだけ防衛ラインを強化したとしても、内側から食い破られたらたまらない……あれ？　ちょっと待てよ？

「す、すみません。もしかして、向こうの世界の生命体はこちらの世界の同じ座標――ええっと、対応する同じ場所に現れるということでしょうか？」

僕は思わずたずねていた。

エルさんはうなずく。

「え、左様です」

「つまり街中に、あるいは城の中にモンスターが出現することも……？」

「十分あり得ます。と言うより、現れる前提で考えておいたほうがよろしいでしょう」

ざわめきが広がっていくが、グレンジード公爵はそれすらも想定済みだったのか、

「たとえば建物ひとつにがっちり【土魔法】をかけておくとする。その場合、モンスターはどこに出る？」

「え、モンスターに限ったことではありませんが、【土魔法】――もちろん【水魔法】やその他【八道魔法】であればなんでも結構ですが、それをかけておけば、簡単に言えばそれらはすべて『大地の一部』となります。おそらく、ではございますが、室内に現れることもないでしょう」

「屋根の上に出るってことか」

「え、左様で。もちろん、推測に推測を重ねたことではございます」
「だがそれでも、やらんよりはやったほうがいい」

公爵の言葉に多くの人がうなずくが、ホリデイ代表が静かに手を挙げた。

「ところで、天賦珠玉の話がまだだったが」
「え、左様でございますね。まず皆様ご存じの通り、世界の結合は『盟約』に記されたものであり、世界が結合することにより『盟約』を構成する『天賦珠玉』、『盟約者』、『調停者』は役目を終え、消滅するものと思われます」
「ならば、シルヴィス王国の配った天賦珠玉はやはり意味がなかったということか」
「意味はございます」
「……ふむ？」
「体内に取り込み、『天賦』となればそれは『天賦珠玉』ではございません」
「それは詭弁ではないのか」
「いえ。盟約には明確に『天賦珠玉』と書かれています。『天賦』ではなく」
「つまり、出し惜しみせずすべての天賦珠玉を取り込んでおいたほうがいいということかね」
「え、左様です」

猛然とその内容を書き留めていく教会関係者たち。
これも重要な情報だ。

「しかしそれが真実であるという保証は？」
「ございません。え、すべて推測でございます。この世界がふたつに分かたれた後、ひとつに戻ったことはこれまでにございませんで

したので。ですが、世界を分けた女神は元に戻ることも当然考えていたでしょう。そのとき、世界を構成する『天賦珠玉』、『盟約者』、『調停者』が消えたとして、天賦まで消えてしまうとそれは大きな問題になることくらいは分かっていたはずです」

「天賦が残っても、持ち主が死ねば消えるだろう？　取り出すこともできないし」

「え、左様です。それでよいのです……それは、あなた様がいちばんおわかりでしょう」

エルさんの言葉に、ホリデイ代表はくつくつと笑い出した。

「そのとおりだ。つまり私の、いや、我が国の望む未来がやってくるということだな」

そうか……ホリデイ代表は「天賦珠玉に頼らない国」を目指している。

天賦珠玉が消えても天賦は残る。だがその天賦は一代限り。

世界は、強制的に「天賦珠玉に頼らない世界」になっていくのだ。

「……エルさんのこと、ホリデイ代表ももともと知っているような感じですね」

僕が隣のスィリーズ伯爵に小声で話しかけると、

「……盟約に関しては世界的に見てもエル祭司の知識は突出していますからね。各盟約者に話を聞きに行っていますよ」

なるほど。だからみんなエルさんの言うことを真剣に聞いているのか。

天賦や天賦珠玉の研究は盛んでも、盟約に関する研究をしてもあ

まり利益はないから、エルさん以外に専門家もあまりいないのだろう。

「……エルさんって何者なんですか」

「……ふむ。それは、私が軽々と伝えられないことですね」

「……そう、ですか……」

謎が深まるばかりだった。

めっちゃ長生きらしいし、ただのウサギではないのだろうけれど。

「え、では他にもご質問ある方がいれば、どうぞ。長きにわたって研究してきた成果を披露するときでございますから、出し惜しみはございません。その内容はすべて、え、この脳に詰まっております」

指を自分の頭にくっつけたエルさんには、謎の貫禄があった。

世界会議が終わった。

参加各国は「世界結合に関する戦線を維持するための条約」を締結し、国防の強化のために自国へ戻ることになり、夕暮れの空を、まるで秋に舞うトンボのように多くの魔導飛行船が飛び立っていく。

周囲の湖にも多くの船が出て行く。

（納得した国、しない国、いろいろあるんだろうけど……やれるべきはやった）

盟約者である各種族代表も去って行く。

あと2か月後に、またここに集まるのだ。

僕はそれまで、教会を軸に各国を回って【土魔法】による強化を

行うことになっている。それが今僕にできることだ。

「やあ、君とは結局、個別に話をする時間が持てなかったね」

魔導飛行船の発着場を、遠くから眺めていた僕へとやってきた人影があった。

ぞろぞろと２０人ほどを引き連れているウインドル共和国のホリデイ代表だ。

あわてて僕が腰を折って礼を取ると、

「ああ、いやいや、そんなにかしこまらなくて大丈夫。――少し彼と話したいから先に行っていてくれ」

最低限の３人の護衛だけを残して、他の人たちは魔導飛行船へと歩き出した。

「あの……僕になにか？」

「あなたには是非とも我が国に来ていただきたいのです」

最初に話したときのように、丁寧な物腰に変わった。

だけれどこの人はなにを考えているのかわからないことがある。

僕は用心をする。

「……僕は教会と行動を共にするので」

「そうですか？　我が国は【土魔法】の使い手が少ないので来ていただけると助かるのですが」

抜け目なく、そして決断力もある。

まさにこの人は「政治家」なのだ。貴族でも、王でもなく、政治家。そういった人間はこの世界においてはとても珍しい。

「なぜ僕なのですか。僕は『災厄の子』ですよ」
「ふふ。それはあのときだけの言葉でしょう？」

ホリデイ代表は世界会議が始まってすぐに僕を「災厄の子」だと言い、教会は、教皇聖下は僕の身柄を保証するという話をした。
だけどホリデイ代表によれば、それはそう指摘するよう指示されていたのだという。

「……とはいえ、ほんとうに災厄はあったのだと思うのですよ」

後ろに手を組み、夕空に舞い上がる魔導飛行船を眺めながらホリデイ代表は言う。

「彼らは、信じがたいほどの力を持ち、暴れに暴れたと言います。そう……一般の天賦珠玉では説明がつかないような力を持って」
「……」
「私が天賦珠玉に頼らない世界を目指しているのは、そんな力の差が生まれないことを望んでいるからですよ。私は、おかしいですか？」
「……いえ」

もしかして、この人は知っているのだろうか。僕が、いや、黒髪黒目の――前世持ちたちのスキルホルダーが16あるということを……？

「クルヴァーン聖王国のグレンジード公爵は、『盟約者の8番目は空欄』だと言われた。おかしいとは思いませんか」
「……え？」

突然の話の展開に、僕は呆けてしまう。

「我ら盟約者は自分の盟約内容しか知らない。他の盟約者が誰なのかも知らない。だというのにグレンジード公爵は、誰も知らない８番目が『空欄』だということを知っていた……エル＝グ＝ラルンが知ったのではありません。なぜなら、彼が探り当てたのならば他の盟約者にもすぐ伝えたでしょう。そうする約束をしていますから」

約束。

それはエルさんが盟約者から情報を手に入れるために、逆に情報もすべて伝えると――そういうものだろうか。

「ではグレンジード公爵はどこで知ったのか……。そう言えばレイジさん、あなたがクルヴァーン聖王国に入ったのはほんの４年とかそこら前のようですね」

夕焼けを背にしたホリデイ代表の表情はうかがい知れない。

この人はきっと、疑ってる。僕がなんらかの方法で盟約について深く知っているのだと。

会議中にグレンジード公爵が僕に目配せしたことにも気づいているはずだ。

――条約締結から2か月後。それで足並みをそろえるらしい。できれば盟約者本人にここ、ブランストーク湖上国に集まってもらい、全員そろった段階で実施したい。

――そろわなかったら？

――それでもやるさ

僕がいるから、最悪、盟約者が集まらなくとも盟約の破棄はできるという視線だった。

「……レイジさん、ウインドル共和国に来たくなったでしょう？」

どうして今の会話の流れで、またホリデイ代表に会いたいなんて思わなくちゃいけないんだ。

「ええ、とても」

だけど僕はにこりと笑って返した。

ふっ、と笑ったようなホリデイ代表だったけれど、

「……2か月後、もう一度来る。そのときに世界は変わる」

最後はぶっきらぼうに言うと、魔導飛行船へと去って行った。

「……」

天賦珠玉がなければ、平等な社会になる。

そんな単純なことじゃない。むしろ偶然手に入れた天賦珠玉が、格差を埋めることだってあるはずだ。

だけど、それでも――ホリデイ代表が目指しているのもひとつの答えだ。

「レイジ！」

「――お嬢様」

「どうしたのだわ？　難しい顔をしていてよ」

やってきたのはエヴァお嬢様だった。

スィリーズ伯爵はグレンジード公爵とともにいて、魔導飛行船に向かっている。時間はあまりありませんよ、と言われ、エヴァお嬢

様は「はい！」と伯爵に手を振った。

「慌ただしい日々でしたが、聖王国に戻ってもまた慌ただしくなりそうよ」

「ええ、ほんとうに」

「……レイジは、聖王国には来ないのね」

クルヴァーン聖王国は大陸でも有数の強国だ。教会のサポートは必要としていないだろう。

「おそらく行くことはないと思います」

「そう……」

お嬢様は残念そうに目を伏せたが、

「それなら、今渡しておくのだわ」

「？」

差し出された手に置かれたのは、ほんのり虹色に光る天賦珠玉だった。

「これは……」

「前に約束していたでしょう？　わたくしが、あなたに天賦珠玉を上げると言ったこと」

そのときのことが脳裏によみがえる。

――わたくしがあなたにふさわしい、天賦珠玉を与えるのよ！

喜びなさい！

そう、どこか恥ずかしげに言って――。

――ありがたき幸せです、お嬢様。
――ほんとにうれしがってる？
――もちろん。
――そ。期待していていいのだわ。

あのときの優しいやりとりをまだ覚えてくれていたなんて。
僕はその天賦珠玉をよく見た。

【水中呼吸（ダイバー）★★】

……ん？　水中呼吸？

「ほ、ほんとうはもっと時間を掛けてしっかり選びたかったの！　だけれど、こんなに早くあなたと頻繁に会うとは思わなくて……それで、一応持っていたこれを上げようと……」
「いや、うれしいです。予想外でしたけど」
「……お父様は『なまじ戦闘に関するような天賦珠玉よりも、ちょっと変わったもののほうがレイジさんは喜ぶ』とおっしゃったから」

なるほど、伯爵はよくご存じだ。

「今、使っても？」
「もちろんよ。だって、2か月したら天賦珠玉がなくなってしまうのでしょう？」

その通りだ。
僕は【水中呼吸（ダイバー）★★】を握りしめるとそれを取り込んだ。

「……ど、どう？」
「特になにか変わった感じはありませんが、きっと水の中で呼吸ができるようになったのだと思います」
「そ、そう……」

お嬢様からすると思っていたような「すごい！　さすがお嬢様」となるようなものではないとわかっているので、どこか拍子抜けになってしまったのだろうか。

「……すぐそこに湖もありますし、泳いでみましょうか」
「そんなことはしなくていいからね！？」

とそこへ、スィリーズ家の騎士がやってきてそろそろ出発の時間だと告げる。

「それじゃ、行くのだわ」
「はい、お気を付けて」
「……レイジ」

歩き出そうとして、名残惜しそうにお嬢様は足を止めた。
いや――「名残惜しそうに」なんて思ってしまうのは僕自身がそう感じているからだろうか。

「『世界結合（ワールド・ユナイト）』が終わったら……」
「……お嬢様？」
「ううん、いいのだわ。レイジこそ、気をつけて。あなたのことだからきっと紛争地域に向かうのでしょう？」
「い、いやぁ……どうでしょうね」

助けを求められれば行ってしまう気がする。

「……強いあなただからこそ、気をつけるのよ。次にわたくしに会うときには、武勇伝よりも、あなたの無事な姿を見せて」

それは貴族としての体面も、年頃の女の子としての見栄もない――心の底から僕を心配してくれている言葉だった。

僕の胸にじんと響いた。

「もちろんです」

「……約束よ」

「はい、約束です」

お嬢様が右手を伏せ、人差し指と中指をくっつけて差し出した。

それは、僕がクルヴァーン聖王国を出ることになった夜にした約束と同じだった。

お嬢様の指を握る。

温かくて、柔らかな指。

だけれど少しずつ、確かに、大人になろうとしている女性（レディー）の手。

「また会いましょう」

お嬢様は手を離すと歩き出す。そしてもう振り返らなかった。

「……はい、必ず」

僕は、この「世界結合」を絶対に成功させるという気持ちを新たにした。

★

それからの2か月はあっという間に過ぎていった。
教会に所属する形で、ノンさん、ミミノさん、アーシャたちといっしょに大陸のあちこちに移動した。
移動先は小国、小さい都市が多く、満足に防衛ラインを築けそうにないところばかりだった。
2か月でなにができるのか――それは大いに疑問ではあったけれど、少しでも被害を減らすために僕は【土魔法】を使いまくった。
ちなみに【土魔法】の強化効果は数か月続くようで、「世界結合」のときは問題なく越せそうだ。
ミミノさんは治療薬を作りまくり、ノンさんは負傷している人の治療に当たった。アーシャはハイエルフであることからその土地の有力者との話し合いでは存在感を発揮した。あと、稀にいる街中のエルフはアーシャを見るといきなりひれ伏したことが何度かあった。
毎日、魔力を使いすぎて倒れるように眠り、あとは移動を繰り返した。
2か月のタイムリミットが近づくにつれて人々の雰囲気は少しずつ変わっていった。
詳しくはわからずとも、なにかとんでもないことが起きる――それは周知されていた。
一方で、冒険者ギルドはどんどん活況になっていった。
ダンテスさんに伝えた「作戦」が上手くいっているらしく、多くの冒険者が街に残るようになった。

（これで、かなりの犠牲を減らせるはずだ）

対人戦ならば衛兵が強いけれど、対モンスターはやはり冒険者が上手であることが多い。
その彼らが街に留まっているのは大きい。

「……なんでこんなに冒険者が多いんだべな？」

2か月ぎりぎり、最後の街で最後の作業を終えたミミノさんと合流すると、そんなことを聞かれた。

「あれ、言ってませんでしたっけ？　僕はアイディアを出しただけではあるんですけど、ダンテスさんが冒険者ギルドの説得に上手くいったみたいですね」

「ん？　説得？　なにかギルドにやらせるの？」

「はい。臨時の『昇級試験』、それに伴う『冒険者ギルド武闘会』です」

自由が信条の冒険者だけれど、冒険者ギルドを拠点に活動しているのはどこも変わらない。

それならば、彼らが自主的にギルドに残りたいと思うような仕掛けを作ればいいと思ったのだ。

それが「昇級試験」である。

さらには試験そのものが楽しいものであるように、拠点とするギルド内で模擬戦を行い、勝者を昇級させるという形にした。各ギルド内で「最強」を決める武闘会を開くのである。

ギルドは、この模擬戦に「賭け」を導入し、払い戻し金額をギルドが上乗せすることでお得感を出す。

これらを「世界結合」前後に実施することで、冒険者には街に留まらせようとしたのだ。

そして作戦は成功しつつあり、どこの街の冒険者ギルドも盛況で、一体誰に賭けるべきか、あいつが初戦で負けた、こいつが強い、だのの話題で盛り上がっている。

「ほ～、よく考えたなあ」

「『世界結合』のことは割と広まってるので、ギルドがなんのためにこんなことをしているのか、見抜いてる冒険者も多いようですけどね……」

とはいえそういった賢い冒険者は、「命令じゃなく、ギルドが冒険者を楽しませようとしてるのなら、しょうがねえからのってやるか」という感じでこのお祭りを傍観してくれている。

彼らとてモンスターが目の前に現れたら戦うだろう。街に留まってくれるだけでありがたい。

そうして2か月のタイムリミットは、残すところあと1日となる。すでにほとんどの盟約者はブランストーク湖上国に再度集まっており、ホリデイ代表を乗せた魔導飛行船がぎりぎりで到着した。

「ダンテスさん！」
「おお、レイジ」

そして僕たちもダンテスさんと再会した。
隣にいるゴリゴリの前衛タイプのおじさまはどこかのバーサーカーさんでしょうか……あ、ヴァルハラ冒険者ギルドのギルドマスター様でしたか。

どうやら冒険者ギルドも上層部だけは「世界結合」について知らされているようで、ダンテスさんは僕らに合流するためにいっしょに来てくれたらしい。

ちなみにゼリィさんもアーシャといっしょに行動していたはずだけど、いつの間にかどこかにいなくなっていたようで、それがちゃっかりダンテスさんとともにやってきた。

いやほんと、どこ行ってたの？

「坊ちゃん、それは聞かぬが花ってやつですぜ……」

「正直あまり興味はないです」
「そんな！？　お金貸してください！」
どういう話のつながりなんだよ。
「ノンもミミノも、息災でなによりだ。――なんとかかんとか形にはなった」
ダンテスさんがしみじみ言ったけれど、僕らが再会を喜ぶ時間もなく、最終打ち合わせが行われた。
なんとかかんとか。
ほんとに、そうだ。
突貫工事だったけど、あとは各国の独自の努力に期待するしかない――これればかりは時間を掛けても結果は同じだろうし。
そして翌日――いよいよその日がやってきた。
僕らは教会の大聖堂に集まっていた。
ふだんは多くのイスが並ぶそこはがらんとしており、教会の持つ神殿騎士たちがずらりと並んでいた。
盟約者たちはみんなげっそりと疲れていた。
盟約者ということは種族の代表者でもあるのだ。グレンジード公爵はお供の数も最小限にしており、スィリーズ伯爵やエヴァお嬢様は今回来ていなかった。
「2か月なんて時間が足りなすぎる。来年って言っときゃよかったぜ……」
と、僕にもぼやいたほどだった。
しかし来年だと未来が不透明だったし危機感も薄れる。かといっ

て冬に設定すると大雪の地域では交通網が麻痺するしモンスターとの戦闘で悪影響が出る。
農作物の収穫が終わった今が、ぎりぎりのタイミングでもあった。
それをわかった上でのぼやきだったのだろう。

「……皆様、お集まりいただき、ありがとうございます」

トマソン枢機卿もいない。枢機卿は防衛ラインが未整備の小国に自ら出向いて陣頭指揮を執っているらしい。
安全なところで保身を図ることがない、すばらしい人だと思う。
だから今日の、ここでの司会役は教皇聖下その人だった。

「盟約者の皆様は、円に合わせてお並びください」

大聖堂の床は美しいタイルがはめ込まれ、大きな円が描かれ、そこには銀河が描かれてあった。
天井は高く、南向きのステンドグラスがまぶしい。
ライブラリアンの代表、獣王種族のミンミンシャン閣下、ノームの老人、ドワーフの王太子、聖水人のグレンジード公爵、ハイエルフのユーリーさん、大陸人のホリデイ代表。
8番目は空席だ。

「……破棄を行う正午まで、あと3分となりました。ここからは盟約者にお任せしてもよろしいでしょうか」
「承知した」

答えたのは盟約第1条の盟約者であるライブラリアン代表だった。
僕を「薬理の賢者」様のところへ案内してくれたあの人だ。
ここの正午に合わせているので、時差も計算して各国はレベル最高の警戒態勢に移行している――はずだ。

都市部の人々には、建物内にいるように通達されている。
今ごろ、どこの街でも人通りが途絶えていることだろう。

「では、時間が来るとともに破棄を宣言しよう」

ライブラリアン代表が言うと、盟約者たちはうなずいた。
誰も一言も発しなくなった。
身じろぎすること、息をすることすら恐ろしく感じられた。
物音が完全に絶えた。
盟約者の皆さんも覚悟は決まっているのだろうけれど、それでも緊張するようでぴりぴりした空気が漂った。
僕は【離界盟約】を身につけるべきか迷ったけれど、「世界結合」と同時に天賦珠玉が消えてしまうのならば、最初から――記憶を取り戻してからずっと、僕を助けてくれた【森羅万象】を身につけておこうと決めた。
だから【離界盟約】は今両手で包むように持っている。

「……あと1分です」

手元の時計を見て、教皇聖下が発言すると、緊張はいや増した。
神殿騎士の持つ槍が震え、盟約者の付き添いは青い顔をして倒れそうだった。
ライブラリアンの代表は眉間に深くシワを刻み。
ミンミンシャン閣下は貧乏揺すりをし。
ノームの代表は何度も何度もあごひげをさすり。
ドワーフの王太子はハッハッと荒く息を繰り返し。
ユーリーさんは瞳をつむったまま目を開かず。
グレンジード公爵はステンドグラスを見据え。
ホリデイ代表は唯一リラックスしたようにポケットに手を突っ込んでいる。

「あと１０秒となります」
「……承知した」

ライブラリアンの代表が引き取った。
緊張がピークに達する。
ここにいる誰しもが手を握りしめ、来たるべき時を待つ。
あと７秒。

「では、皆、ここに宣言しよう。さあ！」

あと３秒。

「我らは」

あと２秒。

「盟約を」

あと１秒。

「破棄する」

声音がそろい、響いたそのとき――パリン、と小さな音が鳴った。
それは僕の手から。
【離界盟約】の天賦珠玉が割れたのだ。

盟約破棄（後書き）

コミカライズが掲載されている電撃大王も好評発売中です。
コミックウォーカー、ニコニコ漫画でもどうぞ。

別作品「察知されない最強職」８巻も、３１日に発売されます。こちらもよろしくお願いいたします。

★エイプリルフール　学園オバスキ（前書き）

エイプリルフール企画です。

★エイプリルフール　学園オバスキ

はっ、とするとクラスに設置されたスピーカーから、授業開始を告げる鐘の音が聞こえてきたところだった。

「え？」

あれ、どういうことだ？　僕は確か、ブランストーク湖上国の…
…ええっと、なんだっけ。

「――勉強してきた？」
「――え、今日なんかあったっけ」
「――小テストだろ」
「――げっ」

そんな声が聞こえてきてドキリとする。
懐かしい――並んだ机に、制服に、黒板に。
ここは僕が通っていた教室だった。

「起立――」

クラス委員の声に従って立ち上がった僕は、機械的に頭を下げ、そして気がつく。

「今日は先週告知したとおり小テストですよー」
「ぶほっ！？」

教壇にいるの、

「ノンさん!?　なにやってんですか!?」

いつもの修道服ではない、ダークカラーのスーツに身を包んだノンさんは、その、つまり、出るところと引っ込むところがはっきりしていて、はっきり言えば目に毒だった。

「？　どうしました、レイジさん」

「あ、え、あ――」

いや、僕はなにを言ってるんだ。

ノン先生は社会科の教師じゃないか。

「すみません……なんでもないです」

恥ずかしさに顔から汗が噴き出る。おいおいレイジ、ノンちゃん先生が好きすぎだろ～、みたいな声が掛かって周囲に笑いが起きる。

僕はいそいそとイスに座り、前から送られてきたプリントを受け取った。

小テスト。

そうだ、小テスト。

なんだかわからないけど僕は小テストを受けるのだ。

そうしなきゃいけない気がする。

謎のパワーが働いている気がする。

「いよしっ」

ふふふ。これでも勉強は得意だからね。

掛かってこい！

『時事問題』

……ん？

『安倍晋三首相は歴代最長となる通算３１８８日の在任期間をもって辞任しましたが、その次を担った首相の名前をフルネームで答えよ』

んんんん!?

いやちょっと待って!?　なにこれ、僕知らないんだけど!

ていうか安倍首相が辞任したの!?　次、誰!?　ふつうに知りたい!

『猛威を振るっている新型コロナウイルスの――』

んんんん!?　なにその新しい病気!

（あ、ダメだこれ……）

僕が異世界に行っている間に、日本はずいぶん先へと行ってしまったらしい。

（――だけどね）

僕は異世界で手に入れたのだ。

力を。

（僕には【森羅万象】がある！）

天賦が身体に息づいているのを感じている。

僕はその力を解放する。

（教えて、【森羅万象】！！）

紙。植物紙。インク。化学合成による。インクの焼きつけ。油性。植物紙。パルプ原料……。

「……」

そうでした。

【森羅万象】さんは、そういう力でした……。

僕は小テストの時間を、凍りついた彫像のようにして過ごしたのだった。

★　保健室　★

がららっ、と乱暴に戸を開くのはいつも同じ生徒だった。

「うっす。いるかよ、ミミノォ」

「まーたアンタだべな？」

白衣の袖を折って、裾は内側に折って縫い付けている保健室の主、ミミノは、小さい身体をイスから器用に下ろして腕組みした。

「ライキラ！　またケンカしたべな！？」

やってきたのはほぼ毎日ここに来ている獣人だった。

その恵まれた体躯を学校の制服に窮屈そうに押し込んでいる彼は、

左腕を見せた。

「おら。ケガしてんだよ」
「なにしてケガしたんだべ」
「こけた」
「はぁ～～？　獣人が転んでケガするなんてあり得ないべな」
「そういう人種差別はしちゃいけねーってお勉強しなかったのか？　保健室のセンセ」
「まったく生意気ばっかり言って」

ぶつぶつ言いながら、治療の準備を始めるミミノを見て、ライキラは小さく笑ってイスに座る。

「そんで、相手はケガさせてないべな？」
「ぶん投げて転がして終わりだ。実力の違いを教えてやった――あっ」
「ほら、やっぱりケンカしたべな！」
「ず、ずりーぞミミノ！　誘導尋問だ！」
「まったく……どうしてケンカばっかりするのかねえ。ほら、傷口出して」
「……おう」

一本取られて悔しそうながら、ライキラは不承不承左手を出した。
肘の辺りに擦り傷がある。
ミミノは薬瓶からガーゼに液体を染みこませる。

「……ちょっと待てミミノ。なんだよその怪しげな緑色の液体は」
「キズグスリダベナ」
「てめっ、また怪しげな薬作ったな！？」

あわてて腕を引っ込めるライキラ。

「俺で実験すんじゃねーよ！」

「ダイジョブ、ダイジョブ、コワクナイ」

「消毒だけしてくれりゃいいんだっつうの！」

「鮮度が命なんだべな！　今日もライキラが来ると思って作っておいたんだ！　これがうまくいけば、民間治療として画期的な……」

「やっぱり実験じゃねーか！？」

「貴重な経験と言って！」

「おまっ……そういうところだぞ。そういうところ直さねーから、いまだに結婚できねーんだよ」

「はぁ！？　結婚してないんであってできないんじゃないですけどお！？」

ぎゃーぎゃーとふたりで言い合う保健室。

「……」

外の廊下を通りがかった校長は注意するべきかどうか悩んでから、止めた。

「……元気なのは、いいことだ」

薄くなってきた前頭部をさすりながら歩いていく。

「たぶん……」

ダンテス校長の苦労は尽きない。

★エイプリルフール　学園オバスキ（後書き）

本日４／１に新作を投稿しました！
「裏庭ダンジョンで年収１２０億円」
という頭の悪そうなタイトルですが、是非こちらもお楽しみください。ページ下部にリンクがあります←←←←←

8番目の盟約者

盟約の破棄を宣言したとき、僕の手元の天賦珠玉が割れた。
はっとして顔を上げると、大聖堂の高い天井付近に空間の揺らぎがあり――そこに待機している「薬理の賢者」様と幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）のふたりの気配が色濃くなる。
盟約の破棄は彼ら調停者に対して行われるのだが――なにも起きない？

（いや、天賦珠玉が割れたんだ。なにも起きないはずがない）

手元の天賦珠玉はすでに塵と化して消えている。
周囲がざわざわする。

「――なんだ、なにが起きた？」
「――天賦は使えるぞ」
「――外も特に変わった様子はないが……」

だけど、盟約者たちだけは違った。
彼らは一様に――僕がさっき見た調停者たちのいる場所を見上げている。
それは呆けているとも言えるし、恐怖しているとも言えるし、単に驚いているだけのようでもあった。

「グレンジード公爵……ッ！？」

僕が話しかけようとしたときだった。
なにか音が鳴ったわけではないというのに、すさまじい音が聞こ

えたようにさえ感じられた――それほどの、光が、弾けたのだ。
宙に。
辺りが白一色になり、なにも見えなくなる。
僕はなにかを言ったかもしれない。
あるいは誰かが叫んだかもしれない。
でもなにも聞こえなかった。
耳がおかしくなったみたいだった。

「……」

言葉を、失った。
一面の白い空間に僕らはいた。
目を開けられるようになった僕は、その場に立ち尽くし、あるいはへたり込んでいる盟約者たちを見た。
そして離れたところに「薬理の賢者」様と幻想鬼人のふたりもいた。
みんなが見上げていたのは――ここが白の空間だというのに、さらに白い、意識が「白さ」を感じさせる存在だった。

『――竜よ。幻想鬼人よ。長い間の務めに、感謝します』

その声は雪が降る音よりも静かで、教会の鐘よりも深く、花火よりも大きく僕らの脳裏に響いた。
「薬理の賢者」様と幻想鬼人はその場に跪いた。
僕は、いや、僕だけでなく盟約者たちも、この存在が神――女神であることを疑う理由はなかった。

『――ふたつの世界の盟約者よ。長い間の務めに、感謝します』

盟約者たちもまたそろって、その場に膝をついた。

僕は気がつく。
ここにはちょうど7人がそろっているけれど、「裏の世界」にも盟約者がいる。
見えないが、この白い空間のどこかにいるのだろうか。
彼らは盟約の破棄が行われることを知らなかったのだから、一堂に会しているわけがない。

『――――そしてふたつの器を持つ者よ』

視線が、僕を射抜いた。
その瞬間、意味不明な震えが身体を走り、まるで高熱に罹ったかのようだった。
なぜ僕がこの場にいるのか。
盟約者、調停者とは関係ない僕がこの場にいるのか。
それは――女神が呼んだからなのだとわかった。

『――――世界崩壊の前に、盟約破棄へと導いたことを、感謝します』

なにか言おうと思った。
とんでもない、とか。
光栄です、とか。

（違う……違う！）

唇が震えた。
言わなければならないのに、言葉が出てこなかった。

『――――あなたの役目は終わりました』

あなた、という言葉が指しているのは僕だ。
役目、とはなんだ。
役目、とは「世界を結合する」ことか？
ではそれが「終わった」というのはどういう意味だ？

『――新たな世界のスタートに、あなたは必要ありません』

「必要ない」とはどういうことだ？

（この存在は女神じゃない）

そのとき、閃きが、啓示が、僕を貫いた。

☆☆☆☆☆☆☆盟約の意義（晴海礼治／レイジ）

・□□□□□□□は盟約の□□を調停者に□□、□□する。
・□□□□□□□は盟約が破棄された場合、□□に□□する。

・世□□□□□者は盟約の□持を調停者に□じ、□□する。
・□□□超□□□は盟約が破棄された場合、□□に□□する。

・世□を□□□者は盟約の□持を調停者に□じ、監□する。
・□□□超□す□□は盟約が破棄された場合、□界に□□する。

・世□を□□□る者は盟約の□持を調停者に命じ、監□する。
・□界□超□す□者は盟約が破棄された場合、□界に降□する。

・世□を超越□る者は盟約の維持を調停者に命じ、監□する。
・□界□超□する者は盟約が破棄された場合、世界に降□する。

・世界を超越する者は盟約の維持を調停者に命じ、監視する。
・世界を超越する者は盟約が破棄された場合、世界に降臨する。

これは、「世界を超越する者」が世界にやってくるための、降りてくるための下準備。
光が、その超越存在の周囲に集まる。

（動け……ない……！！）

あれは、僕を害そうとしている。
僕がもはや要らないのだと言っている。
ふたつの器を――限界超え（オーバーリミット）の天賦（スキルホルダー）を扱える者は要らないのだと。
新しい世界には。

『――――せめて安らかに眠れ』

光が僕へとほとばしる――寸前、なにかの影が飛び込んで来た。
それはもこもこの毛皮を持ったウサギだった。

「エルさん――」

ようやく僕の口から出た言葉がこれだった。
光はエルさんにぶつかり、エルさんの身体が破壊され、飛び散る――その中身を見て驚いた。
金属が、ネジが、歯車が、シリンダーが、飛び散っていく。
宝石のような――あるいは宝石そのものだったのかもしれない――瞳が僕を見た。

――え、逃げなさい。

そう、言われたような気がした。
だけど光はエルさんを壊しただけでは止まらなかった。

「――あ、あああああああああああッ!?」

僕の身体にぶち当たった光が、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い、熱い！！！！
身体が焼ける。
燃え上がる。
吹き飛ばされる。
飛翔するのを感じる。
僕は魔法を展開しようとするが上手くいかない。
だけど次の瞬間、視界が一転した。
まるで僕だけ、空間のポケットに入ったかのような感覚。
そして、

「――ッ、なんだここ!?」

周囲は、雲。

僕ははるか上空から自由落下を始めていたのだった。

「くっ」

魔法が使えるようになった。

僕は【回復魔法】で身体を癒しながら空中でバランスを整える。

「これは……！」

見たことのない場所だった。

荒野と、密林がまだらになった、異様なまでに不自然な土地だ。

人家はまったく見当たらないが、密林の上空を多くの鳥が飛び交っている。

荒れ果てた大地からは巨大なミミズのようなモンスターが飛び出して、滑空してきた鳥を食らっている。

「！」

密林の奥に見えたのは巨木を薙ぎ倒しながら進んでいく超巨大な――肌色の山。

僕の【森羅万象】は、それが「ナメクジ」だと判別している。

「ギガントスライムだ……！」

「裏の世界」の巨大種のうちのひとつだ。

一瞬、ここが「裏の世界」なのかと思ったけれど、すでにふたつの世界が結合しているのだと思い直す。

「【風魔法】！！」

地面に激突する前に僕は魔法を展開し、身体を滑空させる。
ここが世界のどこなのだかわからないけれど、ギガントスライムを見たおかげでひとつ可能性に思い当たった。
「裏の世界」では巨大種がいたのは未開の地「カニオン」だ。

「つまりここは、カニオンのどこかってこと！」

僕は荒れ地の地面すれすれを【風魔法】で滑空しながら砂塵を巻き上げる。
背後では、さっきのデカミミズがどんどん飛び出して僕を食おうとしてくるんだけど……。

「……それはそうとどっちに行ったらいいんだ！？」

ただでさえ考えなきゃいけないことばかりなのに。
あの存在がなんなのか、とか、エルさんはロボットだったのか、とか！

「ん……」

僕の向かう先に見えていたのは、巨大な海――いや【森羅万象】によるとあれは湖らしい。
超高速でそちらに飛んでいく僕。
背後からは巨大ミミズ。

「……行くぞおおおお！」

僕は思い切り水しぶきを上げながら、湖に突っ込んだのである。

★　白の空間　★

その場の全員が跪いていた。
ただひとり――いや、1体、エルをのぞいては。

『――なぜあのようなことをしたのですか？　エル。悠久の時を生きる者よ』

すでにバラバラになった身体は、毛皮と、多くの魔術機器と、機械に分かれて転がっていた。

「……」

言葉を話す能力はとうに失われており、物言わぬ亡骸の赤い瞳が、ただ白い存在を見上げていた。

『――あなたもここで眠りなさい。そして……』

超越存在は辺りを見回した。
全員が跪いている。
先ほどから変わりはない。

『――誰かが、禁じている魔法を使ったように感じましたが……』

誰も、動かない。

『――――良いでしょう。新たな世界へと戻りましょう』

次の瞬間、白の世界はなくなり、盟約者と調停者たちは元の大聖堂へと戻ったのだった。

★　銀の天秤　★

なにかが起きた――そう、ダンテスは感じたが、いったいなにが起きたのかはわからなかった。

ただ次の瞬間には盟約者たちが姿を消し、さらにはレイジまでもいなくなったのだ。

「な、なんで!?　レイジくんは!?」

「わからん」

「探すべな!」

「待て、ミミノ。あわてるな……盟約者たちもいない。なにがあったんだ」

聖堂内に光を落としていたステンドグラスが陰ったと思うと、ドンッ、という衝撃とともに大聖堂が大きく揺れた。

『ギィィイイアアアアアア!!』

ステンドグラスにへばりついた、巨大な生き物。

その姿はトカゲによく似ているが、前足から後ろ足に掛けて翼膜がついている。そこだけ見るとムササビのようでもあった。

次々にへばりついてくる――やがてステンドグラスが砕け散ると、

色とりどりのゼリービーンズのような光とともにそれらは中に飛び込んで来た。
トカゲはトカゲでも、そのサイズは普通乗用車ほどもあるだろう。
そんなトカゲが、6体いた。

「キャアアアアアアッ!?」

聖堂内はパニックに陥った。
出口に向かって逃げ出す者。
教皇を守ろうと動く者。

「モンスターから離れよ！　ここからは我らの仕事!!」

壁に整列していた神殿騎士たちが一斉に剣を抜き、トカゲに飛び掛かっていく。
逃げる人と戦う人が入れ違い、モンスターの咆吼が響き渡る。
どうする――ダンテスは迷う。
これは、明らかに向こうの世界のモンスターだろう。見たこともない種類だ。

（本来ならここで待機が正解。レイジが戻ってくるのを待つべきだ）

しかし気になる。
大聖堂は教会の中枢とも言うべき場所だ。念入りに魔法で強化されていたはずだ。
だというのにこのモンスターたちは侵入を果たした。

「お父さん。ここは騎士様たちが守ります。我らは外へ行きましょう――もっと混乱しているはずです」
「だが……」

「レイジくんならきっと、みんなを守ってもらいたいと思います」
「……」
毅然としたノンの、娘の態度にダンテスは苦笑した。
その通りだ。
「行くぞ」
ダンテスが言うと、「銀の天秤」は大聖堂から外へと出ていく。
外は快晴。
燦々とした太陽の陽射しが降り注ぐ――中、
「……これは」
見たこともない怪鳥が飛び、突如として現れた池には毒々しい色のカエルがいて、ピンク色の猿が群れをなして敷地内を走っていた。
ダンテスの事前の想像以上だった。
「――まずは敷地内を掃討するぞ。敵対しないモンスターは外に逃がす」
「んだな！」
「はい！」
「あいあい～」
ミミノ、ノン、ゼリィの3人が反応した。
「銀の天秤」が治安を取り戻すべく行動を開始する――そのころ。
世界各地でも同様のことが起きていた。
幸い、多くの都市や街では警備が増強されていたために混乱が起きても収まる方向で動いていた。場所によってはモンスターどころ

か動物がまったく現れなかったところもあるという。
だが――少数の、まったく防衛対応を行っていなかった街には惨劇が訪れた。
モンスターによって家は崩され、住民は食われた。
救援がやってくる前に滅びた街や村もあった。
それでも、軍による治安対応ができない場所では多くの冒険者による奮闘が見られた――彼らは自らの冒険者ランクを上げるために、あるいは冒険者の戦いに賭けをするためにギルド近辺に滞在していたので、すぐに行動に移ることができたのだ。
また、事前に情報を入手していた冒険者ギルドの指示もあり、冒険者の活躍で救われた人々も多い。
しかし、「世界結合」を行ってからの数日の戦いは――あくまでもほとんどが想定内のこと。
問題は街の外だ。
突如として現れた巨大な山、森林、湖、川。
大きく地形を変えたところもあった。
そして、森の中は人の里よりもはるかに多くの、密度の濃い、生存を賭けた戦いが起きていたのだった。
結果、生き延びた生命体について人々が知ることになるのは、10日以上も後のことなのだが――それはまた後の話だ。

スィリーズ伯爵は大聖堂の隅で息を潜めていた。
彼が随行していた相手、グレンジード公爵はその姿を忽然と消した。
ぼんやりと宙を見つめていたようだったが――レイジたちが感じた強い光を、スィリーズ伯爵他、すべての人たちは感じなかった。

「そおおおりゃあ！」

神殿騎士が討ち漏らした1匹のモンスターを、冒険者ギルドマス

ターがなんと素手で殴り飛ばしていた。
モンスターはすでに鎮圧されつつあったが、肝心要のグレンジード公爵が戻ってこない。
すでに教皇は避難を終えており、残っている非戦闘員は、盟約者絡みの人々だ。

「あっ！」

誰かが叫んだ。
そこには、たった1度の瞬きの前後で――またも盟約者たちが現れたのだった。
しかし彼らは全員が跪いており、あたかも、彼らが囲む中央になにか貴い存在がいるかのようだった。

「閣下！」

スィリーズ伯爵が駈け寄ると、はっとしたようにグレンジードは立ち上がった。

「閣下、今までどちらに」
「……」
「……閣下？」

彼はなにかを確認するかのように、盟約者たちによって囲まれた空間を見つめていたが、

「……神に、いや、女神に拝謁した」
「なんですって？」

問いかける伯爵を見ずに、グレンジード公爵は宙を見つめたまま

だった。

「すばらしい……！！　あの御方と同じ世界にいられるというだけで、この『世界結合』を遂行した価値はあった！」

その表情は――いつものように自信に満ちあふれたグレンジード公爵のそれではあった。

だが、違う、とスィリーズ伯爵は感じた。

自らの、ではない、他者の強大な力に陶酔するような言い方はグレンジード公爵のものではない。

（いったい、なにが）

スィリーズ伯爵は気づいている。

何かが起きたことを。

そして、盟約者たちは戻ってきているのに、レイジだけはここにいないことにも――。

8番目の盟約者（後書き）

急展開。これまでの設定を惜しみなく投下していきます。

新作連載もよろしくお願いします！　この下にリンクがあります←

女神の幻想（前書き）

前回あらすじ：

「世界結合」のために盟約の破棄が宣言されると、盟約者と調停者、そしてなぜかレイジもまた辺り一面の白い空間に転移した。

そこに現れた「世界を超越する者」の登場で、レイジは盟約者が不明だった最後の「盟約」が何かについて知る。

世界を超越する者――盟約者たちが呼ぶには「女神」が登場し、「用済み」だと言わんばかりにレイジに光線を放った。それを間一髪で間に入り込んだのはウサギの司祭エルで、エルは破壊され、光は衰えながらもレイジを焼いてはね飛ばした。レイジは白い空間から飛び出し、未開の地「カニオン」に墜落した。

一方で盟約者たちは現世に戻されたが、彼らは一様に女神へと陶酔していたのだった。

女神の幻想

「世界結合」はうまくいったようで、アナスタシアは自分の中の「盟約者」としての自覚が急速に薄れていくのを感じていた。一方、出現したモンスターを退治するために「銀の天秤」が動いたのはわかっていたが、そちらに合流したいと思ったものの、ハイエルフはハイエルフで傷ついた神殿騎士を回復したり、空を飛ぶモンスターの撃墜のために魔法や弓を使ったりと忙しく動いている。自分の得意なことを考えれば、飛行モンスターの討伐のほうがいいだろうと判断したアナスタシアもまた動こうとした――ときだ。

ハイエルフの盟約者代表として盟約破棄を宣言した姉のユーリーが消えたかと思うと、しばらくしてアナスタシアの前に突如として現れた。

「お、お姉様!?　今までどちらに……!?」

跪くようにうずくまっていたユーリーがすっくと立ち上がると、彼女は視線を窓の外へと向けた。

そこではモンスターとの戦いが繰り広げられている。

「……許せないわ」

「え?」

「女神様の世界にあのような汚物があってはいけない。私たちこそが女神様に選ばれた種族だというのに」

「――――」

今、言われた言葉を一瞬理解できなかった。

その間にユーリーは窓から身を乗り出すと、両手を空へと向けた。

呪文の詠唱とともに手のひらの先にいくつもの魔法陣が現れる。

「極大魔法……！？　皆さん、伏せてください！！」

アナスタシアが叫んだが、それは少し遅かった。

ユーリーの魔力が生み出したのは巨大な竜巻だ。風圧が、窓を破り、大聖堂内にも暴風が吹き荒れる。割れたステンドグラスが飛び、戦闘中のモンスターも、神殿騎士も、壁際にまで吹き飛ばされる。

一方で外で戦っていた人々もまた風に煽られて転がった。空を飛んでいたモンスターは風に巻き込まれて墜落し、即死、あるいは重傷を負う。

その風が止んだころには――あらゆる戦闘行為が一時停まっていた。

「――落ちたモンスターを殺しなさい。そして埋め、清めなさい」

外にいる人々に告げるとユーリーは振り返った。

割れた窓ガラスの破片越しに、南中をわずかに過ぎた陽光が降り注ぐ。

こんなふうに――周囲への影響も考えず、感情の赴くままに魔法を放つような姉ではなかった。

一体なにが起きたのか、アナスタシアは混乱する。

いまだ大聖堂内では多くの人々が伏せて、暴風の難を逃れており――そんな人々に向けてユーリーは笑顔で言った。

「さあ、皆様。女神様の住まうこの世界を、美しく整えましょうね――」

★

世界は変わった。

それは強力なモンスターの出現や、新たな住人の登場、地形の変化――それだけではなかった。

ひとつは天賦珠玉が消えたこと。

体内に天賦は残っているので表向きの生活は問題なかったが、だが、これから育つ子どもたちは天賦珠玉を使うことができないので、自力で技術を習得していかなくてはいけない。

もうひとつは、新たな宗教の誕生だ。

もともと【回復魔法】の使い手を集めることで教会は成り立っていたが、これまでの、いるかいないのか、恩恵があるのかないのかわからない「神」への信仰ではなく、はっきりと形のある「女神」への信仰へと切り替わったのだ。

それがなんの変化なのか――と多くの民衆は思ったし、実際のところ表だった変化はなかった。

しかし、各国上層部では大きな変化だった。

教会はこれまで、【回復魔法】などの天賦珠玉を優先的に都合してもらい、一方で傷病者の看護で国に協力した。

だが天賦珠玉はなくなり、国は教会に対するアドバンテージを失ったのだ。

そうなると【回復魔法】の力を背景に、教会は各国上層部に影響力を持つようになる。

「――また、出兵の要請か」

盟約の破棄が行われてから、すでに3か月が経とうとしていた。

秋が深まり本格的な冬を予感させるように夜は寒く、弾けば鳴るような冷気が満ちている。

廊下を、しらしらと輝く銀色の杖を突きながら――これが天銀（ミスリル）製

であることは明らかだ――老人が歩き、その横に腰をかがめるようにして報告をする男がひとり。

彼らの背後には付き添いの者たちが鈴なりだった。

大陸に広大な領土を広げるキースグラン連邦の盟主であるゲッフェルト王は苦々しげな顔をする。

「はっ……いかがいたしましょう」

「リグラ王国を動かせ。あそこには暇を持て余してけしからんことをするならずものが山ほどいるじゃろ」

「報酬を要求してくると思いますが」

「今まで連中のためにどれだけ便宜を図ったと思っておる。『今こそ忠誠心を見せるとき』とでも言うておけ」

「かしこまりました」

男は慇懃に頭を垂れると、しずしずと進んでいくゲッフェルト王の一行を見送った。

「……父上。教会はなにをそんなに焦っているのですか。教会からの出兵要請はこれでもう3度目。毎月1度のペースになっておりますぞ」

王太子であるゲッフェルト王の息子がたずねる。

息子、とは言っても年齢はすでに60を超えており、身体は壮健だったが肉体はすでに下り坂だ。

「女神がどうのと言っている、アレであろう」

「辺境のモンスターなど放っておけばよいのに……。このままいけば大陸中のモンスターが死滅するのではありませんか？」

「女神は潔癖なのじゃろ」

冗談ととっていいのか、皮肉ととっていいのかわからず、付き添いの者たちは微妙な笑みを浮かべた。

教会が「女神」の名を盾に各国に「モンスターを滅ぼすべし」と焚きつけているのだ。

付き添いの者たちが小声で囁き合う。

「――あの盟約の破棄とやらがこんな影響をもたらすとはな。教会は『女神』とかいう架空の存在を生み出したのではないか？」

「――なんでも『女神』のせいにすればいい、か」

「――しかし、教皇聖下に『女神』が乗り移ったとかいうウワサもありましたぞ」

「――ウワサはウワサであろう。教皇聖下に箔を付けるために、いかにも教会の考えそうなことだ」

「――だがトマソン枢機卿猊下も退任され、その座は空席。すべての発令を教皇聖下が直々に決めておられるという事実……」

「――子どもゆえに、潔癖なのではないか？」

「――違いない」

小さな笑い声が上がる。

彼らは貴族であり、大国の中枢にいると信じている者たちだ。つまるところ、自分のそばには危機がないのだと信じている。

「父上。モンスターとは言え、あれらを倒して素材を卸し、生計を立てている者もあります。駆逐されてしまえばそれはそれで……」

「すべてを駆逐など、それこそ死滅などできるわけがない」

「しかし教会の要請は今後も続くのではありませんか」

「リグラ王国に任せたのは、かの国が未開の地『カニオン』に隣接しているからだ。適当に、未開の地に追い出せばよい」

「つまり父上は、『カニオン』にモンスターを閉じ込め、必要なときに踏み込んで間引きすればよいとおっしゃるのですか。まるで金

貸しから金を引き出すように」

王太子が言うと、付き添いの者たちの間から、「さすが陛下」「ご慧眼」などという追従の声が上がる。

ゲッフェルト王は、ふん、と小さく鼻を鳴らしたきりだった。

それが合っているとも、間違っているとも言わなかった。

一行がたどり着いたのは小さな会議室だ。扉が開かれると室内は明かりの魔道具が煌々と光を放っており、溜め込んだ水が流れ出すように暗い廊下を照らし出す。

同時に、温められた暖気も流れ出た。

「王太子よ、お前に話がある」

「はっ。――皆、勤めご苦労」

王太子が振り返って貴族たちに言うと、彼らは口々に「なんのこれくらい」「本日も国王陛下のそばにいるという光栄に浴しました」などと言って頭を垂れる。

いつもの光景になにも感じない、王と子は小さな会議室に入ると扉は閉められた。

侍従の用意した茶を飲んで身体を温めると、ゲッフェルト王は口を開いた。

「……ワシも後何度、冬を越せるかはわからぬ」

「父上、なにをおっしゃいます。この国は、連邦は、まだまだ父上を必要としておりますぞ」

それはこれまでに何度となく交わされた会話だった。

ゲッフェルト王の「後数年」詐欺は父と子の間でも繰り広げられているのだった。

だが、

「今回ばかりは違う。『女神』とやらの名を聞いたとき、いよいよワシも死ぬときだと知った」
「……父上？」
いつもと違う雰囲気を漂わせた父の、王の、連邦の盟主に王太子は気がついた。
「ワシがお前に残してやれる知恵はさほどなかろう。しかしそれらは今後１０年……いや、数年のこの国を導く指針にはなるはずじゃ。心して聞け」
王太子は知らず知らず背筋が伸びるのを感じた。
これは遺言だ――そう気がついたのだ。
ツバを呑んだ彼に、父は言う。
「『女神』とやらはおそらく天賦珠玉を造り出した張本人であろう」
「っ……！？」
「けして逆らうな。逆らえばこの国など簡単に滅ぶ。それは、盟約者として『世界結合』に立ち会った連中を見ればわかる。連中は『女神』に心酔したという」
「それは、聞いております。我が直轄領のシルヴィス王国のユーリー次期女王は『女神』信仰を強いていると。クルヴァーン聖王国は先代王が現女王と『女神』に対する方針を巡って衝突し、貴族もまたどちらにつくかで真っ二つに割れているとか」
「今思えば、『世界結合』の場にワシも、お前も立ち会わなかったことがよかったようにも感じるが……実際になにが起こったのか、わからぬことがもどかしい」
「そのとおりです」
「つまり、お前がすぐにやるべきはトマソン枢機卿――前枢機卿と

連絡を取ることじゃ」
「退任された、猊下をですか」
「煮ても焼いても食えぬあの古狸が、やすやすと退任するわけがあるまい。まして、これほど混乱した教会を放っておくなどあり得ぬ」
王太子は驚いた。
滅多に人を褒めないゲッフェルト王が、トマソン枢機卿を――言葉だけ聞くと馬鹿にしているようにも聞こえるが、王太子からすると「べた褒め」に近い評価なのである。
「……退任にはなにか理由がある、と。猊下はなんらかの秘密を握ったか、『女神』と対立したために身を引いた、ということですね。放っておけば猊下の身に危険が迫る可能性もある……私が連絡し、適当な理由をつけて保護するべきだと」
「わかっておるならよい」
年老いたゲッフェルト王の表情はわかりにくかったが、王太子の答えに満足しているのは明らかだった。
しかし王太子は王太子で、背筋が凍るような思いだった。
（父は……いったいどこまで先を見通しているのだ）
ヒントを与えられれば王太子とて考えることができる。行動することも。だがそのヒントにたどり着くのに自分はどれくらい時間が掛かるだろう――父がいなくなったとしたら。
「次に、竜だ」
「竜……？」
また話が飛び、王太子は首をかしげる。

「盟約者の他に調停者がいることは知っておるか」
「はい、確か――盟約を守るような立ち位置だったかと」

盟約が破棄された結果、盟約者ではない者も盟約に関する知識を手に入れることができるようになった。
まるで霧が晴れるようにそれらの情報は明らかになって、国家の上層部には伝えられた。
しかし破棄された盟約にどれほどの価値があるというのか――各国首脳は盟約の吟味などはせず、目の前の、現れたモンスターとの戦いに勝つことに夢中だった。

「盟約者の話題はよく聞いたが、調停者がどこにいったのか、わからぬ」
「それは……そうですね。しかし、元々竜の存在はあまり認知されていませんでしたが」
「じゃが、ヤツらは強大な力（スーパーパワー）を持っていた。ワシらは知らぬが、幻想鬼人（ジョン・オーガ）とやらもそうであろう。竜が、今『女神』とどういう関係にあるのか調べるのだ」
「竜が……ですか」
「腑に落ちぬという顔じゃな」
「……申し訳ありません。父上の深謀遠慮には、まだ私はほど遠く……」
「いや、これはただの勘じゃ。もしワシが他国の王であったならば竜のことは忘れておったろう」
「と、おっしゃいますと」
「我が国には竜がいる」
「！」

王太子はハッとした。

「アッヘンバッハ公爵領、『六天鉱山（シックスマイン）』ですか！」

それは天賦珠玉が枯渇し、そしてダンジョンとしての機能も失った山だ。

かつて竜がいて、その竜は領都ユーヴェルマインズを襲い、討伐された。

だが「世界結合」前にあの鉱山に新たな竜が棲み着いたことが秘密裏に報告されていたのだ。

「そうじゃ」

ゲッフェルト王はうなずいた。

「今やあそこは無人の鉱山ではある。じゃが、竜がいるのならば接触してみるのも手であろう。人を差し向けよ」

「わかりました」

王太子はうなずいた。

（やはりまだ、父を失うわけにはいかぬ……）

父子の対話は夜更けまで続いた。

★

アッヘンバッハ公爵領の「六天鉱山（シックスマイン）」と言えば、多くの採掘者で賑わった。

しかしその場所も今ではひっそりとしており、麓の鉱山町も、竜が暴れたことで破壊され、今では領都ユーヴェルマインズからの連絡員が鉱山を監視するための、小屋がひとつあるきりだった。

「――いやはや、ここがかつては賑わっていただなんて誰も信じられんわな。今残っているのはがれきの山。めぼしいものもすべて持っていかれちまったし……いいところといったらモンスターがいないくらいか」

問わず語りに、領兵であり連絡員でもある兵士が言う。

「アレだろ？　今やあちこちに正体不明の凶暴凶悪のモンスターがいるっていう。ここは、山が守ってくれてるんだ。だからモンスターも近寄らねえ」

「おいおい、単に食い物がないだけだろ。こんな寒いところにゃ、ここから先はなんの恵みもありゃしねえ」

「そうかもしれねえな」

もうひとりの兵士――たったふたりしかいない連絡員ではあったが――とのやりとりに、あっはっはと笑っている。

「……そう、なんですね」

答えたのはひとりの少女だった。

長い金髪を後ろでひとつにまとめ、大きな紫色の瞳も、長いまつげも、少女が将来的には美しくなるだろうことを予感させていたが、着ている、こなれた感じの旅装束のせいで彼女をどこか中性的に見せていた。

「まあ、ちょっとはあったまって行きな」

「ありがとう」

少女は――ラルクは、差し出されたマグカップを受け取った。入っているのは白湯だったが、一足先に冬に突入している山の中ではこれがなによりもありがたい。

舌が火傷しそうなほどに熱い白湯だったが、マグカップを持っているだけでラルクの身体は温まる。

「そんで、お前さんは死んだ親父さんの供養だったか。鉱山暴動のときに遭遇したってんなら、親父さんは災難だったな。確かにあんときゃ多くの冒険者も犠牲になった。それ以上に、領兵も死んじまったが……」

「……ええ」

「行くなら早いほうがいいかもしれねえな。毎日毎日、日が短くなりやがる」

「そうします」

ラルクは立ち上がると、白湯の礼を言って小屋を出た。

「鉱山の中には入るなよ」

「はい」

領兵たちはヒマを持て余していたのだろう、小屋の外にまで出てきてラルクに声を掛けた。

ラルクはひとり、がれきの街を出て行く。

一直線に鉱山へと伸びる緩やかな坂道は針葉樹林を突っ切っていく――ここにやってくるのは、以前にここを抜け出したとき以来だ。

（……これはけじめだ）

冒険者の父が鉱山暴動のときにここで死んだ。そんなウソを使って、ラルクは「六天鉱山」を目指して歩いた。

ともに行動をしてきた空賊仲間――クックたちはさらに離れた街に滞在している。

彼らはラルクを心配してついていきたがったがラルクが断った。

ここでなにかをする気はなく、単に、ほんとうに、けじめとして訪れただけだったのだ。

（あたしができることは、もうほとんどない）

世の中が大きく変わったという話はあちこちの街で聞いた。

だがラルクがやるべきは、鉱山暴動で命を落とした人たちへの謝罪だった。

領都ユーヴェルマインズでは犠牲となった領兵の家族を養うための互助会のようなものができあがっており、そこにお金を寄付してきた。

冒険者は、あくまでも自己責任なので放っておかれているようだったが、せめてもと思い家族がわかる場合はギルドを通じて送金する手続きを取った。

犠牲者の合同墓地があってそこにも向かったが、そこには遺品が眠っているだけで、肉体のほとんどは鉱山で簡易的に埋葬されただけだという。

遺族に会って謝罪をしたかったが、クックたちに止められた。

――今、お嬢が出て行ってなんになる。お嬢みたいな奴隷がいたって言われてもピンとこねえし、遺族は事件を思い出して悲しい思いをするだけだ。調査が入ってお嬢が捕まったとしてもお嬢は逃亡奴隷で死刑になるだけ。そんなら、これからお嬢がちゃんと稼いで遺族に金を送ったほうがよほどいい。

クックの言うことに納得ができなかった。
だが、筋は通っていた。
ゆえにこうして、最後のなすべきこと――鉱山にある簡易墓地に行くことにしたのだ。
これから先は互助会や冒険者ギルドに送金していくだけだった。

（こんなに長かったっけ……）

あの日、鉱山を抜け出した日、ラルクは転げるように道を下っていった。
今となってはがれきとなったあの街は、先に逃げ出していた逃亡奴隷と門番が戦っていたのでラルクはその隙に街の塀を乗り越えて侵入、手近な家の外に置かれてあった子供服に着替えた。「必要な方、どうぞ」と書かれてあったのでチャリティーのつもりだったのかもしれない。あちこち繕った古着で、ボロのような帽子で髪の毛を隠せば、身なりはもう貧乏ながらも街の子だ。

（寒いな……）

あの日は晴れていた。
今日は薄い雲がかかり、暗い。吹きつける風は凍えるように冷たい。

「あ……」

不意に木立が切れたと思うと、目の前に――山がそびえていた。
入口は大きく崩れ、巨大な岩石がいくつも転がっている。
外側からこうして見るのは初めてかもしれない。
奴隷として連れてこられた日は馬車の荷台で眠りこけていたし、逃げ出す日は振り返りもしなかった――振り返ったときにレイジの

姿が見えたら、きっと戻ってしまうと思ったからだ。

「……行こう」

ラルクは確かな足取りで歩いていく。

「六天鉱山」――かつて、天賦珠玉を採掘できる場所だった鉱山へと。

オオオオオ……と風が鳴れば、それはまるで巨大な生き物が息を吐いたかのようだった。

いや、あるいはほんとうに何者かの吐息だったのかもしれない。

レイジと大森林

おかしいな？　とはずっと思っていた。

太陽の方角を確認しつつ進んでいけば、大雑把ながら未開の地「カニオン」から出られるはずだ――たとえ、砂漠の巨大ワームに襲われて、方向転換を何度したとしても太陽の位置は不変だから。

魔法を併用した僕の移動速度は馬を使うよりも速く、数日も進めば目の前に山脈が現れ、それを超えればキースグラン連邦のどこかか、クルヴァーン聖王国か、レフ魔導帝国にたどりつく……はずだった。

だけれど僕がたどり着いたのは、

「……森じゃん！」

見渡す限りの森。むしろ大森林。

【火魔法】の爆発と【風魔法】の上昇気流と合わせて木々の上まで飛び上がってみたけれども、それでも木、木、木、林、林、林、森、森、森……。

「なんで……？」

考えられることはひとつだ。

世界が結合したせいで、大地が大きく変わってしまったということ。

僕の【森羅万象】はまだ使えたけれど、あくまでもこれは「自分が感じ取った事象を解析する」という能力。今僕がどこにいるのか、なんていう情報はほとんどわからない。

公転と自転、つまり太陽の位置から自分がどこにいるのか割り出

すなんてこともできるはできるのかもしれないが、どうやればいいかわからないし、それぞれの都市の座標も把握していないのであまり意味はないだろう。

「……どうする？」

悩もうとしたとき、ぐううと僕のお腹が鳴った。

「どうするもこうするも……食べ物を探すしかないか」

僕は大森林に足を踏み入れる。

【森羅万象】を全開にして食べられそうな果実を探し歩く。

鳥の鳴き声、どこかで獣が争う音。

まさに大自然、という感じだけれど――。

「……懐かしいな」

僕がこの世界で前世の記憶を取り戻し、天賦珠玉鉱山を出てからは森林地帯で食うや食わずやの生活をしていたっけ。

たまたま「銀の天秤」のパーティーに拾われたからよかったようなものの……。

「みんな無事かな」

あの女神のような存在が気になる。

どうして僕を殺そうとしたのか。

そして僕をかばったエルさん――あの人の姿はまるでロボットみたいだった。

「はー……もう、一難去ってまた一難か」

世界はどうなったのか。

「とりあえず、食料を探しながら進むか……」

僕には【森羅万象】があるから、死ぬことはないだろう。

とにかく今は話の通じる人を探すだけだ。

★

それから半月が経過した。

なんと、半月だ。

僕がいちばん驚いている。

１５日間も、きっかり、１５日間も、僕は真っ直ぐ進み――方角が間違っていたということはない、僕には【森羅万象】があるのだから――森で寝、森で食べ、森で暮らしたのである。

大森林に入ってから優に５００キロは進んでいると思う。

アマゾンの熱帯雨林とかを思えば５００キロくらいたいしたことはないのかもしれないけれど、それにしても、これだけ進んで森しかないのはキツイ。

だから、だろう。

僕は最初、目の前に現れたその人が獣だと信じ、

「なんかツルツルした獣だな？」

くらいにしか思わなかったのである。

豊かな赤茶色の髪は強めのウェーブが掛かっていて、こめかみには鳥の羽根飾りが左右についていた。

赤や黄色、オレンジといった暖色に染められた袖のない麻の衣服はなんとも鮮やかだ。
そして背が低い。
たぶん１３０センチくらいしかない。
だけどその人が成獣――じゃなかった、成人であることは、背が低いのにやたらと胸が大きいことからもわかる。
勝ち気な目元は今は驚愕に揺れていて、ぺたんと座り込んだ彼女はM字型に足を開いていて短いスカートの中の、毛皮で作ったらしいパンツが丸見えだった。

「あ……あ、あ……」

僕を指差してあわあわしている彼女を見て、僕はようやく、人と出会えたのだと気がついた。

「い、いや～、こんなところで奇遇ですね」
「ぎゃあああああああ！？」

第一接触（コンタクト）、失敗。
彼女は泡を噴いて背後にぶっ倒れたのだった。

「なんで……？」

と僕は考えようとしてハッと気がついた。
僕の背後には「今日の食事は豪勢にもほどがある」と思いながらも仕留めた、ダンプカーサイズのイノシシがおり、イノシシは僕の魔法で切り裂かれてズタズタ。
１５日間の森林行＋砂漠と湖の数日間、野外暮らしだった僕は泥まみれであり、さらには返り血で身体半分真っ赤っかなのだ。
軽いスプラッターだよな。

「――ハッ」
「目覚めました？」
「！？」

起き上がった彼女は僕から逃げようとしたけれど、僕がふつうの格好――まあ、近くに川がなかったから【水魔法】で水浴びしてなんとかかんとか汚れを落としただけだし、血の汚れが服に染み付いているのだけれども、とりあえずは「ふつうの」格好――をしているのに気づいて、ほぅ、と小さく息を吐いた。
辺りは暗くなっており、焚き火が彼女を照らし出す。

「あなた……見なかったべな？　小さな血まみれの化け物が、森の主って長老様が言ってたイノシシ、ぶっ殺してた！」
「み、見てませんね……倒れていたあなたのそばには誰もいなかったですから」
「そう……」

ハーフリングのミミノさんを彷彿とさせる話し方に、驚きつつ、適当に誤魔化した。

「ええと、君は？　僕はレイジと言います」
「私はヤンヤ。見ての通りエルダーホビットのヤンヤ」

どこをどうしたら「見ての通り」なのかはわからないが。

「お前、『もうひとつの世界』の住人だろ」
「！」

「知ってるぞ。盟約者の長老様が言ってたべ。世界はひとつになったって」

エルダーホビット、という種族について僕は思いだしていた。「天賦珠玉の盟約」に関わる盟約者で、僕らの世界でハイエルフ種族が担っていた役割を、あちらの世界ではエルダーホビットが担っていた。

「助けてくれて感謝するべな。ヤンヤはお前に恩を返したいから、集落に来るといいべ」

「それは願ったり叶ったりだけど、いいのですか？」

「もちろんだ。長老様が言ってたべ。森で迷子を見つけたら、連れて帰れって。きっと迷子がいるって。だけど大猪には注意しろって――ああっ！　さっきの黒い化け物は大猪を食っていたんだべ！　恐ろしいべな！」

「……そ、そうですね」

もう、あれをやったのが自分だとは言えない感じになっていた。

翌朝になって僕はヤンヤとともに歩き出した。

彼女は腰にダガー。背には木製の弓矢を装備していた。

エルダーホビットの「エルダー」とはなにかと聞くと、一般的なホビット種族の祖先に当たる種族のようで、寿命も２００年ほどとかなりのもののようだ。

ヤンヤもすでに２２歳なのだが、このまま年齢を重ねてももう大きくはならないらしい。

「ヤンヤは狩りが苦手なんだべな……胸が邪魔だべ……」

他のエルダーホビットの女性は胸が小さいのがふつうだが、ヤンヤはやはり大きいほうのようで、両手でその大きな胸を持ち上げて「ハァ」とため息交じりにぼやいていた。
目元は強気な感じなのだが、しょんぼりしているのはどこか愛くるしさを感じさせる。

「できれば捨てたいべ……」
「そんなもったいない」
「ん？」
「――ハッ、い、いえ、なんでもないです」
「？」
「いや、ほんとに……」
「……お前、なんか口調が堅苦しいべな？　ヤンヤの命を救ったのだからもっと堂々とするべ」
「これはクセみたいなものなので」
「うーん」

納得できない、みたいな顔をされましても。
それからヤンヤは、エルダーホビットは全部で１，８０３人いて、来月お産の女性がいるので来月には１，８０４人になること。
ヤンヤのダガーもそうだが、これを造るための製鉄技術が２０年前ほどからできており、急速に武器が強くなり、集落に行けば腹一杯肉を食えること。
魔法はないが「呪術」があり、明日の天気を占ったり、病人の治療、加護を授けて邪を退けられることなどを話した。

「きっとヤンヤも、加護を授かったからレイジに助けてもらえたんだな！」

ヤンヤは上機嫌だった。「呪術」という天賦珠玉は聞いたことがなかったし、ヤンヤに「天賦」について知っているかと聞いたが知らなかった。

今さらそんなことを言っても、つまらないだろうと思って僕は黙っていた。

（文明レベルはそう高くないから、魔導エンジンを積んだ飛行船でぴゅーっと隣国まで……なんてできそうにないな）

ヤンヤの服装を見ているとわかるが、暮らし向きはだいぶ原始的なようだ。

そんなこんなで歩くこと1時間――僕は森の中を漂う炊煙に気づいた。

1時間歩いても、僕の目には変化のない大森林なのだが、ヤンヤは迷うことなく集落を目指していたようだ。

「――ヤンヤだ！　ヤンヤが帰ってきたべなー！」

一晩を集落の外で過ごしたヤンヤを、心配するような声が響き渡った。

大森林を切り開いて作られた集落は木製のバリケードで囲まれていた。そのいくつかに青銅や鉄の突起がくっついている。

木造の家に、椰子の葉で葺いた屋根。年中気候は温暖だというので――僕は今までの考えを改めざるを得なかった。

僕は確かに未開の地「カニオン」に飛ばされたのかもしれない。

だけれど、僕の落ちた場所は各国家から信じられないほど遠くなのではないか。

札幌にいたのが東京に飛ばされたくらいのつもりだったが、鹿児島、あるいは沖縄くらい遠いのかもしれない。

「お前さんが、ヤンヤを助けてくれたんだべな」

長老、とヤンヤが呼んでいた人の家に僕は案内されていた。

エルダーホビットたちはみんなヤンヤと似たような服装で、男の人も身長１５０センチもない人が多い。

僕もあまり身長があるほうではないけれど、ここではぶっちぎりに背が高い。

やってきた村長は白髪をきっちりと切りそろえている清潔感のある老人だった。

「はい、レイジと言います」

「……」

長老は僕をじっと見ている。

板敷きの間で、開かれた木窓から心地よい風と、大量のエルダーホビットたちの視線が入り込んでくる。いや、もうちょっと上手にのぞき見しようよね？　それガン見だよね？

「……『もうひとつの世界』の住人、のようだべな」

ふつうに話を続けるの！？

オオッ、てめっちゃ観衆の声が聞こえてるけど。

「あの、ここでは盟約の話はオープンになっているんでしょうか」

「む？　どういう意味だべな」

「僕のいた世界では、盟約や盟約者についての情報は限られた人しか知りませんでしたから……」

「限られた人間しか知らぬでどうする。その者たちが死んだら？」

あ、そうか、と僕は気がついた。

僕が知っている「裏の世界」では人と呼べる人種はかなり数を減らしていた。それもこれも凶暴なモンスターのせいで。

僕は自分の知識を伝えることにした。

それにはまず、僕がこちらの世界にも来たことがあることを伝え、その点はさすがに驚いていた。

「ふむ……にわかには信じられぬべな」

「そうですよね。世界を超えた移動は失伝してましたし……」

「まさかひとつの都市に１００万を超える人間がいるなど」

って、そっちか。

人間が繁栄していることを知らないと、想像つかないかもね。

「僕も聞いてもいいですか？」

「……うむ、よかろう」

すでに長老の家はエルダーホビットたちで囲まれており――なんなら集落全員がいるのかもしれない――僕の話した内容を吟味する声でざわざわしていた。

「レイジはヤンヤのことを助けてくれたべな！」

中でもいちばんうるさいのはヤンヤだったけれど……。

「盟約の破棄が行われたことをヤンヤは知っているようでしたが、長老もご存じだったのですか」

「当然だべなぁ。女神のいる場へ送られたからの」

「！　あの白い空間に、長老も？」
「すると、レイジも？」

僕の話と長老の話は一致していたけれど、違うのは、女神と長老は一対一で会ったということだった。
女神が発した言葉も一言一句同じだった。
調停者、盟約者に「感謝」を告げたこと。
そして僕を「必要ない」と言ったこと。
それはおかしな発言だった。長老の前に僕はいないので、なんの話をしているのかわからなかったらしい。
ただ、強烈な圧力で跪かされ、女神の姿を見たのはほんのわずかな間だけだったと。

「あのクソ女は一度ブチ殺さねぇと気が済まないべな」
「……え？」

聞き間違いかと、思った。
「クソ女」って「女神」のことだよね？
すると長老は言った。

「ついてくるべな、レイジ。我らエルダーホビットに伝わる歴史をお前にも教えてやるべな」

僕らが向かったのは村の中心だった。そこには八方に向けた石碑が建っている。
石碑自体はかなり古いもののようで【森羅万象】でも「数百年以上」置かれてあるという分析だったけれど、文字はくっきりと鮮明だ。

「……文字がへたるたびに刻み直すんだべな。この苦しい歴史を忘れんようにするためにな」

長老は、石碑の文字に手を触れながら言う。

そこに書かれていたのは――。

『天賦珠玉は世界を支えない。見つけたら捨てるべし』

『得意を探し、一族のために使う。それは天賦珠玉に頼らない道。天賦珠玉は人を堕落させ、女神の監視を強めるためのものである』

『盟約に縛られてはならない。盟約に縛られれば一族は滅びる』

『工夫し、考えよ。考えることをやめたとき一族の進歩は止まり、外敵に食われる』

『愛し愛され、助け合う。我らは全員が生き延びる道を探る』

『敵を倒し、肉を食うことの意味を考え、強敵であればすぐに逃げよ。8大種の討伐状況　×甲虫　×鳥　蜥蜴　×山羊　蝶　亀　×虎　蛞蝓』

『調停者を信じるな。呼び出すな。ヤツらは女神の走狗』

『我らエルダーホビットは、自らの都合で世界を割り、一族を離ればなれにさせた女神の悪行を許さない』

最後のフレーズは、ここにいる全員が――結局こちらにも集まってきた――唱和した。

びりびりと僕の腹にまで響くその声は、「積年の恨み」なんて言葉では伝わらないほどに恨みが籠もっている。

「……なぜクソ女が世界を割ったのか、知っておるべな？」

淡々と話しかけられ、僕は村長の心のうちに潜む底知れぬ感情に

恐ろしさを感じていた。

「世界のバランスを取れなくなったとか……断片的な話ですが」

「さよう。そのためにあのクソ女は世界を割ったが、そのせいで一族はバラバラになった」

「……！」

世界を割るということがどういうことか。

僕はなんとなく、同じものをコピーしたように考えていたけれど、どうやらそうではなかったらしい。

今回の「世界結合」でふたつの世界の生物の量をあわせたように、もともとあった生物を半分にしたのだ。

同じ広さで生命の密度が下がれば、後は増えるだけ――とは簡単にはならないだろう。

エルダーホビットたちの苦難の歴史の始まりだった。

「あのクソ女は我らに天賦珠玉を与えたが、同時に調停者に世界を任せもしたべな。幻想鬼人はモンスターをコントロールするために８の巨大種を用意したが、その結果どうなったか」

「……あまりコントロールできているとは言えなかったようですね」

「そのとおりだ。暴走した巨大種によっていくつの種族が滅んだことか……」

「……」

幻想鬼人に会ったことのある僕だけれど、あの人が多くの種族を滅ぼそうとしたとは思えなかった。保身や尖った考え方を持っているのだろうし、「薬理の賢者」様よりかは意地の悪い人のように感じられた。

それでも、盟約の破棄を望み、世界が元の状態に戻ることを願っていた。

「ゆえに！　我らは叫ぶ！」

――女神の悪行を許さない！！

エルダーホビットたちの声が唱和し、大気を震わせる。

そうか――この人たちは、女神への恨みを糧に生きてきた。一族の中心にその思いを据えることで気持ちがバラバラになることを防ぎ、厳しかった世界で生きながらえることができた。

それから僕は長老やヤンヤ、集落の人たちと多くのことを話した。彼らが盟約を破棄しなかったのはそれすらも「女神の罠」ではないかと疑っていたからしい。もちろん、はるか昔のことはわからないが、長老は「盟約の破棄」に対してひどく消極的だった――起きてしまった以上は仕方がないという判断のようだけれど。

調停者の幻想鬼人は女神の手下だから近づかない、という考えのもと、調停者を呼び出すことは一切しなかったらしい。

（地底人とは真逆なんだな）

と僕は思った。

エルダーホビットの歴史は長いが、大体2千人前後で集落の人数は安定しているのだとか。やはりモンスターの襲来が厄介で、数十年に一度、多くの仲間が死傷するような激しい戦いがあり、そのたびに女神への恨みを強くする。

だというのにヤンヤのように明るい人柄が多いのは、もしかしたら温暖な気候のせいかもしれない。冬で食べ物がなくなって死ぬ、みたいなことは滅多にないという。

そして肝心なことだけれど、

「長老。この森をどちらに向かえば抜け出せるでしょうか」

僕の問いに、長老は笑った。

「知るはずもないべな！」

どうしよう。

レイジと大森林（後書き）

長老が女神に幻惑されなかったのは「恨み」が勝っていたからです。

この小説を読んで「面白い」「続きが気になる」と思われましたら是非ともブックマーク、★★★★★による評価ポイントでの応援をお願いいたします！

新連載「裏庭ダンジョンで年収１２０億円」もどうぞよろしくお願いします。←にリンクがあります。

ローファンタジーランキングで月間2位にまで上がりました。

読んでいただいている方、ブックマークや★にご協力いただいた方、ありがとうございます。

完結まで見えている作品ですので、完結してから読むもよし、連載感を楽しむもよしという感じでお楽しみいただければ幸いです。

また私の別作品、コミカライズ版「察知されない最強職」のＷｅｂ配信がスタートしております。

ニコニコ漫画、コミックウォーカーにございますので、是非お読みいただければ幸いです。

辺境伯領の安定（前書き）

前回あらすじ：
未開の地「カニオン」にいるレイジは、「カニオン」のあまりの広さに自分がどこにいるのかわからなくなってしまっている。
そんななか「裏の世界」のエルダーホビット種族と出会った。彼らは「女神」に対して深い恨みを抱いており、盟約者でありながら調停者の幻想鬼人ともまったく接触を持たずに過ごしてきたという。

辺境伯領の安定

エルダーホビットの皆さんは威勢良く「女神の悪行を許さない！！」なんて叫んだものの、

「ひ、ひぃぃっ」
「声を出すな、静かに、静かにだべな……！」
「た、た、助けてくれ、神様」
「あんなクソ女神に祈るな！」

怯えて震えていた。
それは僕がこの集落にやってきて5日後のこと、とりあえず周囲の地理を確認するべく僕があちこち飛び回っていると（魔法を使って飛行しているので文字通り「飛び回って」）――はるか地平線のあたりで、ずしん、ずしん、と大地を震わせながら歩いている存在があった。
僕はすぐにそれを報告し、エルダーホビットの斥候部隊もそれを確認。
結果としてその巨大生物が「封印亀骨（ロストジュエル）」であることが判明。

「隠れろ、隠れるんだべな……そうすれば過ぎ去る……！」

巨大種相手にはなにもできないらしく、集落の建物の中に避難したエルダーホビットたちは、封印亀骨が地平線の向こう、見えなくなるまで震えているだけだった。
そして亀が去った夜、

「ふー。ヤツも我らに気づかぬとは、所詮亀だな！」

「そうだべそうだべ！」
「今日は宴会じゃー！」
「うおおおおお！！」

脅威が去ったということで備蓄を解放して酒盛りして盛り上がっていた。この集落の備蓄はたいして多くはなく、備蓄だけで生きようとしたらぎりぎり1か月食いつなげるか、という程度しかなかった。

（だ、大丈夫かなぁ……）

綱渡りの生き方してるなぁ、と思いながら、僕は備蓄庫になっている倉庫の前でたたずんでいた。

小さい集落内での犯罪は起こりようがなく、扉もカギもついていない。

月光が射し込んで中のものがはっきりと見える。

カゴに入った稗のような穀物と、乾燥肉が積まれている。果物は豊富に採れるようでドライフルーツにしたものがあり、果実酒の甕（かめ）も並んでいた。

「なにしてるべな？」
「――あ、ヤンヤ」

ひょっこりやってきたのは、僕が初めて出会ったエルダーホビットのヤンヤだった。年齢で言えば彼女のほうが年上なんだけど、ヤンヤもヤンヤで「さん付けなんて止めてくれ！」と言うのでなんとなく呼び捨てになっている。

「いや……こんなに備蓄を食べちゃって大丈夫なのかなって」
「？　大丈夫だべ。だって、あんな巨大種が出てくるのなんて年に

1回もないぞ」

年に1回もないかもしれないが、その1回という数字は巨大種の気まぐれによって左右されるんじゃないだろうか……。

「――レイジ。そーんな難しい顔すんな！」

「うわっ」

僕が考え込んでいると、ヤンヤが手を伸ばして僕の眉間を親指でもみほぐす。

彼女の手からはフルーツの香りがした。

「これでみんな気持ちよく、明日も働けるんだから、いいべ？」

「あ……」

僕は納得した。確かにその通りだと思えたのだ。

外敵の恐怖は常にある。であればそれを乗り越えたときに、純粋に喜び、その恐怖を引きずらない。いちいち怯えていたら、年がら年中暗い顔をして過ごすことになってしまう。

それはエルダーホビットの処世術なのかもしれない。

「……わかりました。そのとおりですね」

「うむうむ。素直な子にこそエルダーホビットの加護が与えられるべな。女神なんかよりずっと強い力があるんだぞ」

「そ、そうですか」

あのアホみたいな存在感を放っていた女神より強いとはあまり思えないけれども。

「信じてないな！？　ヤンヤだってあの黒い血塗られた化け物に遭

遇しても生き延びた加護なんだべ！」

その禍々しい感じの生き物は僕です。

「信じてます。信じてますって――それよりヤンヤに聞きたいんですけど」

「ん？」

「明日から、僕も狩りに参加してもいいですか？」

ここの食糧事情が気になるのは、変わらないのだ。

「狩りにぃ？　レイジが？　狩りってのは危ないものだべな」

「心得てます」

「うーん。それじゃヤンヤもいっしょに頼んであげるけど、怖くなったらすぐに言うべな？」

「はい」

一応僕だって許可をもらって森の中を歩き回っていたんだけどな。

まあ、いいか。

当面の食料に困らない程度、それにめぼしい脅威を排除しておこう。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「――とりあえず今日の猟果はこんなところです」

翌日の夕方、唖然とした顔の長老以下多くのエルダーホビットたち。

ニシキヘビを１０倍くらいにした大蛇は、魔法で頭を吹っ飛ばした。

先日倒した巨大イノシシの仲間みたいなのもいたので、しっかり仕留めておいた。

野犬もはぐれの１頭程度ならともかく、５０頭くらいの群れがいたので半分を仕留め、残りはエルダーホビットを二度と襲わないようニオイを散々嗅がせてから追い払った。

他にも鹿や小型の獣は山ほど獲った。

狩りに同行した狩猟部隊の皆さんは、最初こそ驚いたけれど、だんだん驚きは薄れ、無感動になり、最後は他の狩猟部隊も呼んで淡々と獲物を運んでくれた。

「長老、明日以降も周囲の脅威は追い払っておきます」

「……あ、ありがとう……」

女神に対して敵対している彼らの前で、実力を隠す必要はない。

僕はエルダーホビットのために働くことにした――ここが「カニオン」のどこにあり、どの方向へ行けば戻れるのかを確認できるまでは。

事態が動いたのは、それからさらに半月後のことだった。

「大変だ！」

夜間の斥候部隊の人が、早朝に大声を上げて戻ってきた。

「空に巨大な影が！　あんなでっかい鳥、見たこともねえべ！」

★　クルヴァーン聖王国　ミュール辺境伯領　★

鬨の声が響き渡るその草原には、大量のモンスターの群れが倒れ伏していた。

勝利したのはミュール辺境伯軍。

「世界結合」で大量に発生したモンスターだが、それは辺境伯領とはいえ例外ではない。

ただ、ミュール辺境伯軍はクルヴァーン聖王国内でも屈指の強さを誇り、街の周囲に出現したモンスターは即座に、領内の辺鄙な場所に現れた群れですらも1か月と経たずにこうして滅ぼした。

「ふぅ――一通り、領内の安定は確保できた。助力に感謝する、ノック殿」

ミュール辺境伯は熊の毛皮を相変わらず頭からかぶり、大人が数人がかりで持つような重さのバトルアックスを振り回し、誰よりも多くのモンスターを屠っていた。

その辺境伯に負けず劣らず倒したのがダークエルフのノックだ。

「なに。ふだん飯を食わせてもらっている礼ダ」

「ふはは。飯を食わせるだけで八面六臂の活躍をしてくれるのならば、お前らの引く手は数多だぜ」

「飯は中身ではなく、誰と食うかダからな……呼ばれても行かぬ」

そんなふうに気取ったことを言ってはいるが、確かに辺境伯自身も認めるように、これほど迅速に多くのモンスターを掃討できたのはダークエルフの助力によるところが大きい。

彼らは辺境伯の騎士たちよりも強く、さらにはモンスターとの戦い方に慣れている。
ただ、

「俺がいちばんダ！」
「俺ダろ！」
「違う、俺ダ！」

ちょっとズレているのは、こうしてモンスターを倒した後だというのに誰がいちばん重いモンスターを運べるかを競争している。
食肉になるものであればちゃんと確保しておかなければならないので、戦闘後だというのに動き回れるダークエルフたちは疲れ果てて休んでいる軍の兵士と比べて明らかに異質だった。
彼らにとってはこの持ち運びですら「筋トレ」の一環なのだ。

「……部下が騒がしくてすまん」
「なぁに。うちの騎士どもにもいい刺激になってるさ、お前たちが来たことすべてが。それに――」
「それに、なんダ？」
「いや……なんでもねえ」

辺境伯は言い淀んだが、

「レイジのことダろう」
「……ちっ、わかってんなら聞くんじゃねえや」

ミュール辺境伯は娘であるミラの、貴族社会デビューのために聖王都クルヴァーニュを訪れていた。
それが、レイジとの出会いだった。
そのときに見た、少年ながら底知れない戦いのセンスに驚き、彼

を気にかけるようになった。
いろいろな行き違いもあって彼はクルヴァーン聖王国を離れてしまい、その別れ方については辺境伯も心底から悔やんだのだが――彼は予想外の方角から再度辺境伯の前に現れた。
別の世界から来たという。
その後、ダークエルフの集団がこれほどやってきてしまえば信じざるを得ない。彼らは、あり得ないほどに強かったのだから。

「では先に帰る。我らを導くアナスタシア様のところへ」
「……わかった」

ダークエルフたちはノックに率いられ、去っていく。

「……アナスタシアか」

辺境伯は思いを巡らせる。
今回の「世界結合」について聖王都から報せが届いてからというもの、辺境伯は愚直なまでにその指示に従った。結果として世界は結合され、モンスターはあふれたのでこれでよかったのだと思うが――問題は、その後だ。
レイジの消息が不明となった。
さらには、聖王都では先王グレンジードが中心となり、「女神」なる存在への忠誠を誓い、モンスターを撲滅するよう貴族に強力に働きかけている。

（モンスター討伐は構わねぇが、勝手に貴族をまとめられると困るのは聖女王陛下だ）

グレンジードの娘にして現在の王である、聖女王からは内々にミュール辺境伯へと連絡があった。

――父の様子がおかしい。くれぐれも辺境伯は取り込まれませんよう。

聖女王は今のところグレンジードのするがままにさせているらしい。やっていることはクルヴァーン聖王国にとって利益であるからだ。

グレンジードの手綱を強く握ってしまうことで貴族たちが割れるのを危惧しているという。

（冷静極まりねえが、こういうときに強く出られねえのも困ったもんだ）

聖女王はグレンジードにまったく似ず、冷静沈着で常に何手も先を読んで行動するタイプだ。

だがこういう混乱期に、聖女王の動きは他の者から見ると「遅い」と思われがちだ。

（うまくいかねえもんだな……グレンジードが聖王だったときは安定期で、混乱期に冷静な今の聖女王が王位に就くってえのは）

ミュール辺境伯は考えながら、戦場を後にする。

とにもかくにも、辺境伯領はこれで落ち着いた。

隣の領地や国境を接している隣国の光天騎士王国などではモンスター侵攻による被害が出始めている場所もあるという。

「――お父様、お帰りなさいませ」

屋敷に戻ると娘のミラが待ち構えていた。

ミラは聖王都のヴィクトル＝スィリーズ伯爵の娘エヴァと――レ

イジの主人だった彼女と、文通友だちになっている。エヴァはすでに父を手伝って中央の実務に携わっているようで、なにくれとなくミラにも情報を漏らしてくれていた。

今はそれがありがたい。

「ミラ、レイジの行方は？」

「……まだ、まったくつかめていないようです」

「ふーむ……ヴィクトルにもわからんとなるとよほどだな」

「で、でも、エヴァ様はあきらめていません！　だから私たちも――」

「わぁってる。ちゃんと手伝うさ」

ダークエルフのノックと交わした約束があった。

それは、辺境伯領が落ち着いたらレイジ捜索に手を貸すこと――である。

「世界結合」のときに、ブランストーク湖上国にいたアナスタシアは、レイジが行方不明だとわかると大急ぎで辺境伯領に戻ってきた。そして事情を話すと、レイジを捜したいと言った。

辺境伯は、モンスター退治に手を貸してくれるのならいいぞと請け合ったのだ。

（アナスタシア嬢はあまり語りたがらなかったが、どうもハイエルフは彼女を手元に置いておきたいようだな）

ダークエルフたちは精強だが、彼らはアナスタシアを崇拝している。

だからこそ最初は冗談だろうと辺境伯も思ったのだが、ノックは真面目な顔でこう言ったのだ。

――アナスタシア様は我らよりも強い。

と。

それが、類い希なる彼女の魔力量によるものだとわかったのは、アナスタシアもまたモンスター討伐に参加してから、である。

彼女の【火魔法】は、雨の日限定で大活躍した。雨でなければ延焼を起こして大火事になってしまうのである。

雨であっても、１００人の軍隊よりも早く、犠牲もなく、モンスターを薙ぎ払う彼女の魔法は、歴戦の猛者たる辺境伯といえど背筋が凍った。

そんなアナスタシアを知っていれば、ハイエルフも手元においておきたくなるのだろう――シルヴィス王国は、先代王が存命であるにもかかわらず半ば強引に、ユーリーというハイエルフの女性が王位に就いたと聞いている。

ユーリーは女神信仰を始めた。

それはさほど珍しいことではなく――いくつかの国家でも同様に女神を主神とする信仰の変化を受け入れ、教会と歩調を合わせてその勢力を拡大しているという。

「ったくなにが起きているんやら……」

こう言った情報も、手紙を通じて中央のエヴァからもたらされるのだから、娘のミラも辺境伯にとっては重要な部下となっている。

「あのね、お父様。お願いがあるのだけど――」

「ダメだ」

「え、ええっ!?　まだなにも言ってないよ!?」

「どうせ、聖王都クルヴァーニュに行きてえとか言うんだろう。ここで肉体労働にいそしんでいる父を放っておいて」

「うぐっ」

正解らしい。
スィリーズ伯爵は、精力的に活動するグレンジード公爵の下でかなり忙しく働いているらしく、エヴァも同様に振り回されているという。
そのエヴァの力になってやりたいとミラは考えたのだろう。

「で、でも、こういうときに手伝ってあげられなくて、なにが友だちかってお父様なら言うでしょ！？」
「まあな」
「じゃあ――」
「待て。待て。あわてるな……くくっ、意地悪が過ぎたな」
「は？」
「俺を放っておいて行くな、と言ったんだ。俺もいっしょなら問題ねえ」
「え……お父様も？　行くの？　聖王都に？」
「そうだ。幸い、どこもかしこもモンスターでおおわらわだ。国境を守る辺境伯がいる必要は、当面ない」

ミュール辺境伯は、レイジに「バーサーカー」と内心で呼ばれていたその凶悪な顔をゆがめて、笑って見せた。

「アナスタシア嬢と、ダークエルフの腕利きを何人か連れていくぞ。それでグレンジードの顔を拝もうじゃねえか――いったいどんなツラして、『女神様』だなんて言ってるのかをよ」

こうして、大陸でも例を見ないほどにモンスターの問題を早期に解決した、ミュール辺境伯は領地を離れ、一路聖王都クルヴァーニュを目指すことになった。

辺境伯領の安定（後書き）

街の外も大方掃除してしまった辺境伯はやっぱりバーサーカー。

４／２７発売の電撃大王にてコミカライズ第６話が掲載されます。

最後の、最後のカットが、クソカッコイイ……！

聖王都の混迷

★　聖王都クルヴァーニュ　★

クルヴァーン聖王国の首都である聖王都クルヴァーニュは、木の年輪のように城壁が巡らされており、その中枢にはかつて「一天祭壇（ファーストアルター）」があった。

「かつて」という言い方はおかしいかもしれない。

なぜならば、祭壇は現在もそこにあるからだ――ただ、期待されている結果を生み出していないだけで。

あの日、「世界結合（ワールド・ユナイト）」が行われたその瞬間から天賦珠玉の産出はぴたりと止んでいた。

ただ、もともと産出量は極端に減っていたので――それこそ「枯渇だ」と騒がれるほどには、大騒ぎにはならなかった。

この国の頂点は「聖王」あるいは「聖女王」であることに変わりはなく、年輪のような城壁の中心に頂点の住まう「聖王宮」があり、政を行っていることで聖王都は「世界結合」前後でも混乱なく運営されていた。

表向きは。

確かに、クルヴァーニュの市街地に出現したモンスターは聖王騎士団や聖王国軍、それに冒険者たちによってあっという間に鎮圧された。

むしろ「あれだけ騒いだのにこんなもの？」と拍子抜けする市民が多かった――それほどには念入りに、事前準備が行われていたからだ。

もちろんクルヴァーニュの外側、平野や森林地帯には大きな変化

が起きているようだったが今のところ一般市民に影響はない。だから一般市民は落ち着きを取り戻し、これまで通りに生活をしている。

変わったのは、クルヴァーニュの中枢だ。

「――正気ですか」

端正な顔の陰に、憤懣やるかたなしという感情を潜ませながら発言したのはクルヴァーン聖王国の数少ない公爵家、ハーフリングであるエベーニュ公爵だった。

背は低く、髪を複雑に結って宝石で飾っている。

「銀の天秤」のミミノと同じハーフリングであり、薬剤の取引で非常に強い権力を持っている公爵家だ。

元は「6大公爵家」と呼ばれていたが、「一天祭壇」から産出する天賦珠玉を横流しするという事件が起き――その黒幕であったリビエレ公爵家はお取り潰しが決まり、リビエレ公爵家が所有していた海運の権利は一時的に聖王家が預かっている。

エベーニュ公爵が「正気ですか」と発言をしたのは、聖王都の中枢に最も近い、「1の壁」と「2の壁」の間にある「議場」だ。ここで「議場」と言えば、聖女王が臨席し、貴族の当主だけが発言権を持つ「議場」がたったひとつあるきりだ。

コンサートホールのように2階席まで用意された議場で、中央に円卓があり、離れた場所に聖女王の座るイスがある。

円卓に着いているのは6人――5大公爵家の当主と、先代聖王グレンジードだ。

当主の背後には文官や貴族が控えており、この会議を見守るためだけにやってきた下位貴族、あるいはその使いの者たちは2階席にいる。

「正気か、というのはどのような意味だ？」

むっつりと、なにひとつ面白くなさそうな顔でグレンジードが応える。

するとエベーニュ公爵は、

「私の耳がおかしくなったのでなければ、グレンジード公は今、今年度予算の配分を見直し、その１０分の１を『女神信仰のための教会造り』に充てると聞こえましたが」

「聖女王陛下の御前で冗談など言わぬ」

「……そうですか。ならばなおさらタチが悪い」

ふー、と息を吐いた。

グレンジード公爵が「世界結合」から戻ってきた後、女神信仰に深くハマッたとは聞いていた。だがこれほどとは思わなかった。

ちらりと聖女王を見やると、彼女もイスの肘掛けに肘を突いて、額を押さえている。

（この件、聖女王陛下には通していなかったな？）

グレンジード公爵の背後にはスィリーズ伯爵がいて、彼も難しい顔をしている。こんな話が「むちゃくちゃ」であることを重々承知しているのだろう。

「グレンジード公、予算の使い道はおいそれと変更すべきものではありません」

「そんなことは百も承知だ。だからこうして議会に諮っているのだろうが」

「議論にならないでしょう。元々は『世界結合』に備え、甚大な被害が出た場合にすぐに財政出動できるようにとっておいた予算です。これは他ならぬあなたが言い出したものでしょう」

「聖王都の被害は軽微であった。ならば使い道はなく死蔵される資

金だ」

「なにを仰る。各地の被害状況はいまだ予断を許しません。都市部は問題なくとも、どこに凶悪なモンスターが潜んでいるのかもわからないのですよ。実際、大陸西方のマハト王国は首都を襲撃されて半壊状態だとか」

エベーニュ公爵が言うと、どよめきが議場を走った。

この情報はつい昨日、公爵が独自につかんだもので、多くの貴族がいまだ知らない。

とはいえグレンジード公爵は当然知っているだろう――切れ者のスィリーズ伯爵がそばについているのだから。

（……その切れ者がなぜグレンジード公の暴走を許すのか。所詮はグレンジード公の覚えがめでたい腰巾着か）

過去にスィリーズ伯爵とは摩擦があった。黒髪黒目の少年、「災厄の子」を匿っているという情報を入手したエベーニュ公爵は、「災厄の子」を差し出すようスィリーズ伯爵に迫ったのだ。

そのために送り込んだ手勢は撃退され、逃げられてしまった。

「他国は他国だ。エベーニュ公よ、貴殿は我が聖王国の被害が軽微であったとして、他国が破壊されていたらこの予算を他国に拠出するのか？」

グレンジードが反駁（はんばく）するので、エベーニュ公は改めて意識をこちらに戻す。

「私が申し上げたマハト王国の件は、聖王国全体の行く末が予断を許さない状況であるということを示したかったのです。今回の『世界結合』は世界全体の問題であり、クルヴァーン聖王国だけが無事

であればいいということはない――そう、この『議場』で発言されたのは他ならぬグレンジード公ではありませんか」

「……」

「大体、これほどの予算を使ってどのような教会を造るつもりですか？　ブランストーク湖上国の教会本殿よりも豪華なものを造るおつもりですか」

「当然、そうだ。他国に負けるわけにはいかぬ」

「バカバカしい」

「……なんだと？」

「バカバカしいでしょう。今は国民が死ぬかもしれないという状況であるというのに、国のトップがやることが『教会造り』となれば、バカバカしいと言いたくもなります」

「……」

するとグレンジードの身体から得も言われぬ怒気が発せられ、親の仇のようにエベーニュ公爵はにらみつけられる。

今にも飛び掛かってきそうな迫力に、さすがにエベーニュ公爵も背筋が冷えた。

（どういうことだ？　なにをそんなに感情的になっている？）

女神信仰を始めたと言っても、これは明らかにおかしい。

「……ならば決を採ればよい」

獣が唸るような声でグレンジードは言う。

「決、ですと？」

「……そうだ。『議場』では貴族の投票によって議事を決定するであろう」

「それは議論が尽くされた後のことです」
「慣例では、そうだ。だが緊急時には議論を省略してもよい」

まずい、と直感的にエベーニュ公爵は悟った。
聖女王に話を通さなかったことも、議論にもならないような提案も、所詮は「見せかけ」だけのことなのだ。
グレンジードは最初から「多数決」によってこの予算変更案を押し通すつもりだ。

「今が緊急事態だと仰るのか！？　先ほど聖王都の被害は軽微だと――」
「エベーニュ公、先行きが不透明であると言ったのは貴殿だ。つまり、今は緊急時である」
「その緊急時に備えた予算を付け替えるというのに、緊急時であると言うのは詭弁にもほどがありましょうが！」
「議論は終わりだ。決を採る」
「バカな！！　そのような横暴がこの『議場』で通るはずがない」
「私の発案した、予算付け替えに賛成する貴族は起立せよ」

エベーニュ公爵を無視してグレンジードは自ら立ち上がりながら宣言した。
必ずしも「議場」にすべての貴族当主が参加できるものではない――貴族には領地持ちが多いのだから。
ゆえに参加している貴族の総数を基準に多数決が行われる。
ざっ、という音とともに多くの貴族が立ち上がる。１階にいる高位貴族はもちろん、２階席の貴族たちも。

（やられた――）

今回この「議場」で、これほど重要な議案が出てくることは予定

になく、エベーニュ公爵は自分の派閥にいる貴族たちに参加を要請しなかった。
重要案件は事前に通知する、という暗黙の了解を易々と破ってきたのだ、グレンジードは。
こんな禁じ手を使えば貴族同士の摩擦が激しくなり、内部分裂を引き起こすことくらいグレンジードだってわかっているはずなのに。

（なんということだ）

しかしエベーニュ公爵がいちばん驚いたのは、5大公爵家のうち、ロズィエ公爵、リス公爵、ラメール公爵の3人が立ち上がったことだ。
この3人にすでに根回しがされていたこと、それを察知できていなかったこと、そのふたつにエベーニュ公爵は衝撃を受ける。
最後の頼みの綱である聖女王を見上げると、険しい表情のまま彼女は動かなかった。
その聖女王と視線が合った。

（「お前も動くな」と……仰るのですか。だがこれではグレンジード公の暴走は止まらない。今、黙るのは悪手ですよ、陛下……！）

使う予定だった予算を使わずに済み、その「浮いた金」を好きに使わせろと言っているだけのように聞こえる案だ。
しかしこれが上手くいってしまえば、グレンジードはさらに要求を加速させる――人間というものはそういうものだとエベーニュ公爵は理解している。
どうやって3公爵を抱き込んだのかはわからない。
引退した先代聖王が国の代表として活動する、というところまでは良かった。さらには小粒の貴族を配下に従えていると聞いてもなんとも思わなかった。だが公爵家にまで手が伸びたとなると――。

（無視できない脅威に……！！）

たとえるなら砂浜にいて、気づけば足元まで潮位が上がっていたときのような恐ろしさを感じた。

「数えるまでもない。賛成多数で決定だな」

「待たれよ、グレンジード公爵！」

「……エベーニュ公、もうこれは決まりだ。話は終わり――」

グレンジードが言いかけたときだった。

「――終わりではありません」

滑らかながらも意志の強さを感じさせる声が「議場」内に響いた。

貴族たちがざわついたのは、その人物の登場を誰も予期していなかったからに違いない。

聖王家の証明である透き通るような青色の髪と目、年の頃は聖女王と同じほどなのだが王位を得られなかった人物――聖女王の兄であり、いまだ王位継承権第1位の聖王子だ。

聖王子の横にいるのは同じ「青」を持つ、王位継承権第2位の聖王子――クルヴシュラトがいる。

そしてその後ろにいるのは、熊の毛皮をかぶった巨体。

「ずいぶんとまあ手荒なことしてるじゃねえか、公爵閣下。だけど荒っぽいのは戦いだけで十分だ。こういう場所じゃスマートにやるもんだぜ」

ミュール辺境伯はにやりと笑った。

聖王子による議事の差し止め要求によって、グレンジード公爵の希望は叶わなかった。次回「議場」での審議は明日になるが、エベーニュ公爵も、5大公爵家の最後であるルシエル公爵家も仲間の貴族を集めるので、多数決になったとしても対抗できる。

議事の差し止めは公爵家、つまり聖王家の血を引いた者による特権のようなものだった。もちろん乱発は許されないし、他の公爵家が反対すれば差し止めもできないために、すでに3公爵家がグレンジード派になっていたエベーニュ公爵には使えなかった。だが聖王子が2人も加われば話は違う。

クルヴシュラトや聖女王の兄でもある第1王子は、聖王都に留まっていると政争に巻き込まれるからと離れた領地へと出向いていたはずだった。だからこそグレンジード公爵も強引な議論を進めようとしたのだろう。

その彼が「議場」にやってきたのはミュール辺境伯の働きだった。聖王子のふたりに、辺境伯は聖女王に呼ばれていった。

辺境伯についてきたミラはエヴァと落ち合った。

「――こ、ここ？　こんなところで会わなきゃいけないの？」

「はい。誰の目があるかもわかりませんから」

同じ区画には「議場」もあるという「第1聖区」には、「一天祭壇」のための「祭壇管理庁」があった。この組織はすでに解体されており、「祭壇管理庁」の使用していた建物も封鎖されている。

ここの「長官特別補佐」だったスィリーズ伯爵は建物の鍵を持っていて、誰もいない建物での密会となった。

誰も使っていないせいか、ほこりっぽいニオイがする廊下で向き合っている。

部屋を用意することはもちろん、お茶なんて当然ない。

ここにいられる時間はそう長くない、ということだ。

「……それくらい、大変なんですね」

「ミラ様がお考えよりも、ずっと。グレンジード公爵がかなり派手に動いておられますので、貴族たちが刺激され、互いに監視するような状態なのですわ」

ちらり、とエヴァはミラの背後を見る。

ここにいるのはエヴァとミラ、そしてもうひとり、

「ブランストーク湖上国以来ですね、エヴァ＝スィリーズ様」

「ええ……アナスタシア様」

アナスタシアがここにいた。

「？　？？」

じ……と見つめ合うふたり。

過去にどんなやりとりがあったのかを知らないミラには、この無言がよくわからない。

――アーシャ、こちらの方はクルヴァーン聖王国のスィリーズ伯爵家、エヴァお嬢様。僕が以前護衛を務めていた……。

――なるほど。前の雇い主でいらっしゃるのですね。

――今でも雇う気はあるのだわ。レイジ、いつでも戻ってきていいのよ。

――そうはいきません。レイジさんは私と旅をしてくださるとおっしゃったので……。

――ほう……。それは初耳なのだわ。レイジ、ほんとう？　確か、わたくしを世界一周の旅に連れ出してくれるのではなかった？

――え？　いや、ちょっと待ってください。なんかギスギスしてませんか？

――いいえ～。ただ、ちょっと、いえ、相当に？　前の雇い主の方が美貌をお持ちでしたので……。

――そんなことないのだわ。ただ手紙に書かれていなかったことを知って混乱しているだけ……。

きっとミラがその場にいたらハラハラしてどうしたらいいかわからなかったに違いないやりとりだ。

「……」

「……」

ミラからすれば、エヴァは「はわ～、今日もエヴァ様はかわいいです～」という感じで、アナスタシアは「はわ～、今日もアナスタシア様はおきれいです～」と変わらない。

ふたりが並んでいるこの場に自分がいてもいいのだろうか？　と疑問に思うことはあっても、このふたりがどんな思惑で火花を散らしているかなんて――それどころかなにか互いに思うところがあるだなんて考えもしないのである。

「……アナスタシア様」

「……エヴァ様」

ふっ、とふたりは表情を緩めた。

「レイジを捜すのだわ」

「はい。そのために協力しましょう」

とりあえず、レイジの捜索が最優先――ということでふたりはま

とまった。

「スィリーズ家の情報網すべてを使ってレイジの行方を捜していますわ。ですが、今のところまったく情報が入ってきません」

「シルヴィス王国にいる兄のひとりと秘密で連絡を取っているのですが、こちらも情報はありません。キースグラン連邦全体にもないようです」

「シルヴィス王国は今機能しているのですか？」

「いえ……それは先ほどのグレンジード公爵と同様の問題が起きています。とはいえ、諜報活動の現場に影響はないはずです」

「なるほど……では光天騎士王国と連邦以西の国家ですね」

「レフ魔導帝国はどうでしょうか？　国土はかなり狭いですが、魔導飛行船を持っています」

「実は第1王子は先日までレフにいらっしゃったのです。めぼしい情報はなかったと伺いましたわ」

意見がまとまるや、即座に情報交換を始めるエヴァとアナスタシア。お互いに出し惜しみなく矢継ぎ早に情報をぶつけ合うのを、ミラはただキョロキョロとふたりを見ていることしかできなかった。

（かわいい人と、きれいな人が、お話ししてる……）

しかし彼女に戸惑いはなかった。

（それを間近で見られて、ミラは幸せです！）

満面の笑顔だった。

「――光天騎士王国にはトマソン枢機卿がいらっしゃいますね？」

「はい。ですので、『銀の天秤』のノン様を通じて確認をしている

ところです。今、私がクルヴァーニュにいることはノン様もご存じですので、近いうちに連絡があると思われます」
「……」
「……どうされました、エヴァ様」
「……わたくしは、光天騎士王国にレイジがいるとは思えないのです」
「そうですね、私もそう思います。いたとしたらなんらかの消息が聞こえてくると思いますし」
と言ったアナスタシアと、エヴァの視線が交差する。
「となると」
「レイジさんがいるのは……」
ふたりはうなずき合った。
「「未開の地『カニオン』」」

女神の目

★　ブランストーク湖上国　★

「盟約破棄」――つまり「世界結合（ワールド・ユナイト）」の舞台となったブランストーク湖上国の大聖堂は、その後の戦闘によってあちこちに傷を負ったがすでにそれらは修復されており、元の静謐とした空気を取り戻していた。

しかし、教会の総本山であり、年中信徒が訪れるこの大聖堂は――ずっと門戸を閉ざしたままとなっていた。

「……」

ステンドグラスから虹色の光が降り注ぐそこに、ぽつねんと立ち尽くしている少女がいた。

彼女の周囲には誰もおらず、首をうつむけ両手をだらりと下げているその姿はどこか異質なものを感じさせる。

『――――鬼よ、いますか』

少女は動かなかったが、その身体の周囲から声が聞こえた。

「はっ……ここにおります。女神様」

煙が集まったかと思うと跪いた老人の形となった。

それは幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）だった。

『――竜とは連絡が取れましたか』

「取れておりません。世界結合時に掛かった身体的な負荷がいまだ解消できておらんのでしょう」

『――……』

「……女神様？　いかがなさいました」

『――いえ、なんでもありません。あなたと竜だけはその存在を把握しづらいのがなんとも不便ですね』

世界をふたつに分けた後も「調停者」として幻想鬼人と竜種はふたつの世界の中間にあった。そのために女神の強力な影響力の範囲外にある。

「……それもそう長いことではございますまい。各地で着々と女神像と新教会の建設が進んでおります」

『――ええ、そうですね』

笑ったのか、そよりとした風が吹いたように幻想鬼人には感じられた。

『――少し眠ります。この娘を保存するように』

「はっ」

直後、操り人形の糸が切れたように少女の身体がふらつく。それを幻想鬼人が受け止めると――少女はひどく衰弱していた。

この少女は今もなお「教皇」と呼ばれ、教会組織全体のトップに君臨している。

だが、女神を地上に降ろす際の入れ物としてちょうどよいようで、女神はこの少女の身体を頻繁に使っている。

目から、血が、涙のようにつうと流れた。

（……限界ではないか。いや、限界を超えているのか）

幻想鬼人は少女の身体に魔力を流し込み、回復させてやる。悠久の時を生きる幻想鬼人にはこういう魔法を扱うことができる。どこまでもつかはわからない。女神というとてつもなく大きな存在を受け止めるには、いくら波長が合う存在だとはいっても限度がある。

「う……」

かすかに少女は身じろぎしたが、すぐに寝入ってしまった。今は寝かせておくしかないだろう。

「竜のバカめ、なにをしているのやら」

呪うようにつぶやいた。

女神の言うとおり、この世界には女神の影響外の者がいる。

幻想鬼人と竜はその最たるもので、女神に「呼び出し」を食らっても無視できるし、その居場所を探知されることもない。

あの日――「世界結合」の日、女神によって殺されそうになったレイジを救ったのはエルと、竜の魔法だった。

女神の攻撃が直撃したらどんな頑健な生き物でも即死だ。

だからエルが文字通り身体を張って攻撃を逸らし、竜の魔法によってあの空間に「穴」を空けて逃がした。

（おそらくレイジは生きているだろう……いや、死んでいるかもしれんが、であれば女神様への「叛逆」である行動を取った竜は浮かばれんな）

竜は明らかにレイジに対して同情的だった。

（危険だぞ……竜よ）

いくら女神が竜や幻想鬼人の行動を把握できずとも、魔法の痕跡は残る。

あの空間で魔法を使えたのは影響範囲外――それでも魔法をかろうじて撃てる程度だったが――の竜か幻想鬼人であることは女神も知っているはずだ。

そして今、竜とは連絡が取れない。

なのに女神はそれを放置している。

（……もうじき、多くの場所は女神の「目」によって把握される。竜よ、どうするというのだ）

幻想鬼人は少女を抱き上げ、歩き出す。

枯れ木のように軽い、と思った。

★　キースグラン連邦　首都ヴァルハラ　★

「各地では女神を信仰するために、莫大な予算を使って巨大な神殿を建造しておるようです。これほど混乱している情勢で、金の使い道などいくらでもあろうに……いかがお考えですかな」

珍しく、ゲッフェルト王が人払いをしていた。
ここにいるのは老齢のゲッフェルト王にその息子である王太子、そして昨日ヴァルハラ市に到着した客人の3人だけだった。
ゲッフェルト王の執務室は絢爛豪華そのものと言っていい。
キースグレン連邦という超大国をその手に収めているからこその贅沢さだろう。

「教会の教えとしてはあり得んですよ。我らが信仰していた神があれだとは到底思えん。思いたくもない」

答えた客人――トマソン枢機卿は苛立たしげに答えた。
「世界結合」に向けた準備をしていたときからするといくぶん痩せたようだが、エネルギッシュな迫力は変わらない。
そんなトマソンを相手に、ゲッフェルト王は丁重に対応している――王太子をして野に下ったトマソンを連れてこさせたのは他ならぬゲッフェルト王だからだ。

「しかし、女神の超パワーを見せつけられた各国要人はすっかり女神教信者なんでしょう。教会トップの教皇聖下からしてそうだと」
「……エリーにはむごいことをしてしまった」

第320代教皇、エルメントラウト＝エイリヒ＝クラウゼグートを「エリー」と呼べるのはトマソンくらいのものだろう。

「あの子は感受性がすさまじく高く、いわゆる『霊感』と呼ばれるものを持っておりました。それはどんな天賦にも再現できぬものだった」
「血筋による特別な能力ですか」
「いいやエリーはなにもないところにいきなり才能を開花させたような存在ですよ。まさに奇跡のような……」

「……それが、女神による『奇跡』だとはお考えになりませんでしたか、猊下」

しばらくの沈黙の後、トマソンは口を開いた。

「……もう枢機卿ではありません」

「あなたを慕う者は多い」

「止めましょう。ワシはこれ以上、いたずらに混乱を生みたくない」

トマソンは疲れたように手を振った。

きっと枢機卿を辞任するときに多くの摩擦があったのだろうと感じさせる仕草だった。

「――時に、クルヴァーン聖王国はグレンジード公爵の暴走を食い止めることができたのだとか」

ゲッフェルト王が話題を変えると、トマソンは身を乗り出した。

「ほう。それは誠ですか。グレンジード公は盟約者のなかでも1、2を争う押し出しの強さだというのに」

「――ああ、ちょうど連絡が来ました」

ふたりの間に置かれた応接デスクで、巨大な水晶玉を戴く魔道具が明滅する。

ゲッフェルト王がそこに手をかざすと、おぼろげな人影が映し出される。

『ゲッフェルト陛下、王太子殿下。それに――トマソン枢機卿猊下、このような形での拝謁、お許しください』

眉目秀麗なその男性は、おそらくシビアな交渉ごとを毎日のようにこなしているだろうに、完璧な角度で一礼する。

「いや、こちらこそすまぬ。君には苦労を掛ける……スィリーズ伯爵」

通信相手は、クルヴァーン聖王国の伯爵位を持つスィリーズ。つまりエヴァの父であるヴィクトル＝スィリーズ伯爵だった。

「……閣下はクルヴァーン聖王国の臣の中でも群を抜いた忠義の士だと聞いていたが」

まさかスィリーズ伯爵とゲッフェルト王が個人的なホットラインを持っていたとは思わず、トマソンは眉根を寄せる。

『私の忠義はいまだ聖女王陛下にございます。陛下もこのことをご存じです』

「なんだって？」

「聖女王陛下が直接動くのはあまりに目立つ。ゆえに、話しやすい者を頼みますと連絡したのです。そうしたらスィリーズ伯を推薦してくださいました」

「大丈夫なのですか――あ、いや、これは失言をしてしまった」

『いえ、猊下が不審に思うのも当然です。私はグレンジード公爵と常に行動をともにしておりますから。この会話の内容が公爵に伝わるのではないかとお思いのなのでしょう？』

「う、うむ……」

『……グレンジード公爵の振るまいが異常であることは誰の目にも明らかです。これを正すのが真なる忠臣であると考えます』

トマソンはハッとする。

スィリーズ伯爵の言葉が本気のものであるのなら、彼は命を懸けて主であるグレンジード公爵を正しい道に導こうとしている。

グレンジード公爵と聖女王との間に確執があり、多くの混乱が発生している現状で、公爵はスィリーズ伯爵を自分の「右腕」として使っている。

その「右腕」が自分の情報を聖女王に、さらには他国に流していると知ったら、グレンジード公爵はスィリーズ伯爵を殺すだろう。あの気性だ。忠臣がどうこうと考えるまでもなく。

「……ワシはほんとうに失言をしたようだな。許してくれ、スィリーズ伯爵」

両手を膝について頭を下げるトマソンに、スィリーズ伯爵は、

『猊下、そのようなことをなさらないでください。これは私にとっても必要なことなのです。だからこそ皆様にこうして密かに連絡を取っています』

「ふむ。聞かせてもらおう――『聖王国の智謀』とも名高い、閣下の考えを」

それからスィリーズ伯爵は話し出した。

グレンジード公爵の考える「神殿」の設計図、要件を見てわかったことがある。

『これは――なんらかの魔道具です』

見たことのない魔術紋が神殿全体に描かれている。
魔術「紋」というのは「式」とは違い、はっきりそうと書かれたものではない。むしろ華美な紋様として見せるほうを重視しているために、この紋様を見た技師たちは「変わった柄だな」としか思わなかったという。

「なぜそれが魔術紋だとわかったのだね？」

『はい、猊下。すべては私の娘が考えたことです』

最初スィリーズ伯爵も「変わった柄だな」という印象で、それよりむしろ総工費や予算の捻出方法で頭を悩ませていたので見落としていた。
その違和感を突き詰めて考えたのがエヴァだった。
エヴァはひとつひとつの紋様は無視し、その紋様がはめ込まれる場所をピックアップし、それが「立体的な魔術式」として機能する魔術紋なのだと見抜いた。

「ほう……すばらしい娘さんをお持ちのようだ」
「是非とも我が国に欲しいと前に言ったのだが、すげなく断られましたよ」

くつくつとゲッフェルト王が笑うと、スィリーズ伯爵は苦笑しつつ、

『まだまだ子どもでございます』

と答えた。しかしその表情は誇らしげでもあった。

『その魔術紋が機能するものだという前提で考えますと、神殿の核に置かれる魔石のサイズ、量を考えると、半径で６００キロメートルほどに影響を及ぼすことができるようです』

「……かなり広いな」

『最大で、ですが。たとえば空気を清浄にする、であるとか、傷病者の回復速度を高める、などの効果に限れば、神殿内がせいぜいでしょう。外側に影響を出そうとすると、かなり軽いものになるので「なにか変わった」と感じる者はいないと考えます』

「だというのにスィリーズ伯爵は……外側に影響させていると考えておるのだな？　なぜだね」

『魔術紋が外側に向いているからです』

「ふむ……」

『納得できませんか』

「それにしてはあまりに大がかり過ぎる。正直に言えば『意味がなさそう』だと思える」

『私もこれを見るまではそう思っておりました』

スィリーズ伯爵が広げて見せたのは１枚の地図だった。

グレンジード公爵が提案する「神殿建設予定地」を中心に、半径６００キロメートルの大円、地方の神殿は半径１００キロメートル程度として小円が描かれている。

『……我が国の国土のほぼ全体を覆うことができます』

「これは……」

「――余も独自に調べてみたのです。おい、出してくれ」

「はっ」

王太子が1枚の地図を持ってきてそれを広げると――そこに書かれてあったのは、すでに建設が始まっている、あるいは建設予定となっている神殿の分布図だった。

「各国の代表も、同じように国土を覆うように神殿を造っておるのです。そして『なぜこの場所に?』と問うたところ同じように答えました」

――女神様のご神託がありましたので。

「……」

2枚の地図を凝視していたトマソン枢機卿は、絞り出すような声で言った。

「……なにを、しようとしているのですか」

『わかりません』

真面目くさった顔でスィリーズ伯爵は答えた。

『神のみぞ知る、ということでしょうか』

それが冗談でもなんでもないことを、ここにいる全員が知ってい

た。

女神の目（後書き）

本作のコミカライズ版第1巻が6月に発売されます！　よろしくお願いします。

残る空白地帯

★　キースグラン連邦　ウインドル共和国　★

ウインドル共和国は、教会の総本山であるブランストーク湖上国に近い場所にある小国で、周囲を連邦所属の国々に囲まれていた。国土は狭いながら肥沃な大地に恵まれており、「連邦の穀倉地帯」と言えばこのウインドル共和国を含む一帯を指す。

そのせいで共和国は周囲の国々から土地を狙われていた――連邦内とはいえ小競り合いは年中起きているのだから。

「天賦珠玉を使わない」という信念で運営される共和国は軍事力を増している各国から干渉を受けそうなものだが、それをうまく回避してきたのが歴代のトップ――人民代表である。

「剣よりも舌」と言われるほどに、弁舌の得意さ、交渉の巧みさが人民代表には求められ、それを使って周辺国の思惑をいなし、ぶつけ合い、あるいは妥協しながらウインドル共和国は生き延びてきている。

だが――そんな共和国代表であったとしても、さすがに今回は参っていた。

「……またか。もうこれで１０回は断っているぞ」

「はぁ」

人民代表ホリデイの執務室があるのは、首都にある白亜の宮殿――ではなく、木製の平屋だ。これは「清貧」を重んじる国の伝統で、「人民代表こそ質素な暮らしをすべき」という考えを体現している。

国民はこの平屋を、愛を込めて「木造宮」と呼んだ。
とはいえ国の重要人物がいる場所であるために周囲は広範囲に渡って更地となっており、決められたルート以外には侵入者を撃退する魔術が仕掛けられてある。
今日は朝から雨が降り、「木造宮」はいよいよもって薄暗い。

「今度は、『建造費をすべてもつから神殿を造らせろ』だったか……いったいなんなんだ。これほどまで神殿神殿と言われるとは思わなかった。今では『神殿外交』なんて新聞には書かれているぞ」

ホリデイは呆れた顔で机に紙を滑らせ、紙が机から落ちそうになるのを、側近が指で受け止めた。
それは隣国の王から送られてきた親書で、「ウインドル共和国も是非とも女神神殿を建造すべきである。費用はすべてこちらが賄う」――といった内容が書かれてあった。
昨年、ウインドル共和国が借りている軍事力への対価を「2倍寄越せ」と言ってきた国が、である。
つい数か月前は「世界結合」のための「八道魔法」を扱える人間が足りずに「５００人寄越せ」と言ってきた国が、である。

「しかし、ホリデイ代表も最初はそうでしたよね？」
「ん？」
「『世界結合』から戻ってきたころは『どうすれば神殿を建てる予算が出る？』と何度も質問して我々を困らせたではありませんか」
「そうだったか？」

ホリデイは首をひねる。

「確かあの頃は……穀倉地帯のど真ん中に大量のモンスターが出現して、それどころではなかったはずだが」

「我々がそちらに意識を向かせたんですよ。神殿なんて造ってる場合じゃなかったので」
「お前な……私は人民代表だぞ」
「その通りです、閣下。それゆえに人民である我々の思いを尊重していただきました」
敬礼して見せる側近に、ホリデイは苦笑した。
「――次の会議は15分後です。それでは失礼します」
「わかった」
側近が部屋を出て行くと、ホリデイは立ち上がり、窓の外を眺めた。
「……妙だな。あの頃の記憶が曖昧だ」
分厚い雲が空を覆い、しとしとと雨が芝生を濡らしている。
「確か、女神に会った。だが顔を上げることができなかった……あのとき、なにかやりとりがあったのだが」
こめかみに手を当てるが記憶の抽斗からはなにも出てこない。
「その後、モンスターとの戦闘があり、私は避難した……そして戦闘が終わるやすぐに我が共和国に戻ってきたはずだ。だがそのときなにを考えていたのかが思い出せない」
ホリデイは常日頃から、自分が「いつ死んでも」大丈夫なように側近たちを育てている。記憶が曖昧になるほどの状態であっても側近たちは最善の選択をして自分をここに運んだのだろう。

振り返ってみると、「神殿の建造？　冗談じゃない。今は忙しいのだ」と発言した記憶が鮮明に思い出されるが、それ以前がなかった。

つい今、側近に言われるまで、そのことすら思い当たらなかった。

「……思考の改ざん」

その可能性に思い当たって、ホリデイは背筋が震える思いがした。

「なぜこんなことすら考えられなかった？　いつからだ。思い出せ。私が覚えているのは――やはり『世界結合』の直前までだ」

大聖堂でカウントダウンをしたことははっきりと覚えている。もともと記憶力は抜群にいいほうなのだ。

「女神。神殿。それがいったいなんだというのだ」

ホリデイは執務机に戻ると積まれた紙の束を手に取った。

「確か……クルヴァーン聖王国の先代聖王が神殿建造を強硬に進めているとか。彼は私と同じく『世界結合』に関与した。となると今ごろ目が覚めているはずだが……」

クルヴァーン聖王国に関する最新資料をめくっていくが、そこに書かれている内容は相も変わらずグレンジード公爵が神殿建造に邁進しているという記載だった。

「おかしいな。あのとき女神が私たちになんらかの思考改ざん……強力な催眠をかけたのは間違いないだろう。だが私のそれは解け、先代聖王は解けていない？」

ホリデイは他の資料を確認する。

「しかも周辺国の首脳も神殿神殿と言い出した。それは『世界結合』のあとだ」

推測を手元の紙に書き留めていく。

――ブランストークに最初の「女神信奉」神殿が完成。
　これは既存の大聖堂を改修したもの。
――クルヴァーン聖王国、各「盟約者」が神殿建造をスタート。
ハイエルフのシルヴィス王国だけは情報を得られず。
――共和国周辺でも神殿建造の動き。

ふと、手を止める。

「神殿建造を最初に言い出したのは周辺のどの国だったか……」

そのとき部屋の扉がノックされた。
「入れ」と言うと、別の側近が顔を出す。

「ホリデイ代表、会議のお時間ですが――」
「あー、ちょうどよかった。君の出身はゼンマル王国だったね」
「？　そうですが……」

ホリデイの側近はほとんどが共和国出身者で固められていたが、例外的に別の国の者もいる。
それほどに優秀な者だけだが。
とは言えこの国の慣習に従ってもらい、側近就任の時点ですべての天賦を【オーブ破壊】によってなくすことになる。

彼はもともと天賦がなかったのか【オーブ破壊】を行ってもなにも天賦が見当たらなかった。

「最初にゼンマル王国が言ってきたのだったか、神殿建造の話」
「はい、そうです。ついにホリデイ代表も決断されましたか。神殿を造ることに」
「いやいや、違う違う。まったく、みんな神殿を建造する金などないというのに、君だけは前向きだな。故国が巨大な神殿を造っているからかい？」
「そういうわけでは……新聞にもあるように、神殿を建造していないのはこの辺りでは我が国だけですし、要らぬ波風を立てる必要はないのではないかと」
「ヴァルハラも造っていないよ」
「彼らは傲慢なのでしょう」
「言うねえ」

メモを取る。

――神殿建造は周辺国ではゼンマル王国が最初。
ゼンマル王国は大聖堂に最も近い。偶然か？

「閣下……なにか問題が？」
「問題かどうかはこれから判断する。神殿をどうするかもな」

メモを執務机の抽斗にしまい、立ち上がる。
会議室に向かうべく、側近とともに部屋を出ると――廊下の窓に雨が打ちつける音が聞こえた。

「まったく暗いな」
「ええ……。神殿を造る際にはなるべく大きく明るいものがよいで

しょう。それこそゼンマル王国に負けないような」
「それはどうかな」
「なぜそこまで躊躇なさるのです？　すでに何カ国も、費用の支援を申し出ているのでしょう？　我が国の懐は痛まず、国民の仕事もできる。いいことずくめではありませんか」
「そうだな。だがうまい話には裏がある」
「――隣国が信用ならない、と」
「そこではない」

稲光がホリデイの横顔を照らし出した。遅れて、ごろごろごろ……と低い音が聞こえた。

「この女神神殿にはなにか問題がある気がしている。大体、モンスターの問題も片付いていないというのに神殿神殿と各国が血眼になっているのはおかしいではないか」
「はあ……では閣下はどのようにお考えで？」
「ふむ。これは推測に過ぎないのだが」

アゴに手を当てて歩くホリデイ代表。
その後ろで、側近がそっと懐に手を忍ばせ――すらりと白刃を抜いたことには気づかなかった。

「女神神殿には人の心を狂わせるなにかがあるのではないか？　神殿の建造予算だけで目が飛び出るような金額であった。巨大な魔石を使うとしているし、あれだけのものは魔導飛行船ですらなかなかないぞ。誰かがなんらかの意志を持って神殿を建造させようとしているのだ――」

稲光がもう一度、廊下を照らし出した。
ふたりの影が映し出される。

後ろの人物の手には鋭利なものが握られ、今それが振り下ろされようとしていた。

★　クルヴァーン聖王国　★

聖王宮は国のトップである聖女王が暮らす場所だ。そのために人間の出入りは厳しく管理されている。
逆に聖王国の政が行われる「議場」は、入退場の入口こそ違うものの聖女王や貴族は自由に出入りできる。

「――それは真実ですか」

なにに使うのかもわからないような小部屋にいたのは、聖女王とスィリーズ伯爵だ。いや、案外、こういう密会のためだけに用意されてある小部屋なのかもしれない。
聖女王は付き人すら伴わずここにいる。

「ええ、真のこと。ホリデイ代表は側近に刺されて死亡。これからウインドル共和国は副代表が一時的に政権を握るものの、次の代表を決める総選挙に突入するため身動きが取れないと」
「……それを、聖女王陛下に連絡してきたのはどうしてでしょうか」
「決まっているでしょう。女神に関係しているからです」
「……」

スィリーズはその場に座り込みたくなった。
あまりにも多くのことが起こりすぎる。

聖王国内でグレンジードの暴走を止めるだけで精一杯だというのに、他国のことにまで首を突っ込む余裕はまったくない。

「……スィリーズ伯。お父様のこと、それにゲッフェルト王とのつなぎ役だけでもあなたには大きな負担を掛けてしまいましたね……ごめんなさい。ウインドル共和国については別の誰かに――」

「お待ちください、陛下。私がやります」

「しかし……」

「……申し訳ありません。ふがいない顔を見せてしまいました。けれど、私がやるのがいちばんです。私には『審理の魔瞳』があり、女神の手先がいたとしてもウソを見破ることができますから」

「……」

グレンジード公爵だけでなく聖女王もスィリーズ伯爵の能力を高く買っている。極めて優れた精神力に、冷徹な頭脳の持ち主だ。

そんな彼だからこそ一瞬見せた疲れ切った表情に――とてつもない負荷を感じたのだ。

「……苦労を掛けます」

「臣なればこそ、望むところです。それで詳しい内容をお教えください」

「これを、あとで読みなさい。また連絡します」

「はっ」

聖女王は紙切れを手渡すと、小部屋を出て行った。

この小部屋には出入り口が2か所あり、スィリーズはその紙切れを懐にしまって部屋をあとにする。

「――なんだ、ヴィクトル。こんなところにいたのか」

「閣下」

廊下を進むと向こうからグレンジードが歩いてくる。
彼の周囲には多くの貴族がいるが――それらはここ最近グレンジード公爵にすり寄ってきた連中だ。「議場」で投票をしたのも彼らで、利害関係があるからこそグレンジードについているが、彼が失脚すれば一瞬でいなくなるような連中である。

「なにをしていた？　お前が必要だったのだが」
「申し訳ありません。なんのご用でしょうか」

一礼して答えると、「スィリーズ伯は『議場』を散歩する余裕もあるらしい」「うらやましいですな。こちらは神殿建造のことで手一杯だというのに」なんていう嫌みが聞こえてくる。
これまでならば「黙れ」くらいはグレンジードは言ったはずだが、今はなにも言わなかった――むしろ「そのとおりだ」とでも言わんばかりににやついている。

「神殿建造を進める」
「――なんですって？」
「リグラ王国から予算を引っ張ることができそうだ。こいつの手柄だ」

グレンジード公爵の腰巾着となっていた貴族のひとりが、胸を張りながら出てきた。

「不肖、このわたくしめが交渉しましてな。小規模神殿はすでに二桁以上できあがり、大規模神殿の建造も急ピッチで進んでいるリグラ王国に技術と予算の供与をお願いしたのです」
「そんなバカな。あり得ない」

スィリーズ伯爵が言ってしまうのも無理はない。
リグラ王国に、いったいどんな利益があるというのか。

「こちらはなにを差し出したのですか」
「なにも。強いていえば、建造のための土地くらいでしょうか」
「土地を？　そこにスパイが出入りするような場所を造られたらどうするのですか」
「黙らっしゃい！」

甲高い声で貴族が言う。

「グレンジード公爵のそばにいた貴殿がなにもしないので、わたくしめが骨を折ったのではありませんか。女神神殿建造は公爵の肝いり。あなたは聖女王陛下の顔色をうかがって、難しい仕事はすべて公爵に任せ――」
「止せ。スィリーズはよくやっている」

そこでようやくグレンジードが口を利いた。

「ヴィクトル。神殿にはスパイの入り込むような余地はない。あらゆる箇所に俺も目を配る」
「……はっ」
「お前がリグラ王国と連絡を取り合って、建造を進めるんだ」
「かしこまりました……」

スィリーズ伯爵は頭を垂れ、甲高い声でわめいていた貴族は「こ、これはわたくしめの手柄では……」とごねていたがグレンジードは譲らなかった。

「いいか、ヴィクトル。必ず建造するんだぞ」

もう一度念を押して、グレンジード公爵は去っていった。

「……」

顔を上げたスィリーズ伯爵は、鋼鉄のような無表情で「議場」を出ると大急ぎでお屋敷に戻った。

外は雨が降っていた。それはまるでホリデイ代表が刺されたのと同じような天気だったが、スィリーズ伯爵がそこまで知ることはなかった。

出迎えた執事長に、

「エヴァはいますか」

「外出中でございます。急用でございますか」

「そうです。私は執務室にいるので、戻ったら来るように伝えてください」

「はっ」

スィリーズ伯爵は執務室に入るや、カギを掛け、カーテンをすべて閉めて魔導ランプを点けた。

懐から、聖女王からもらった紙切れを取り出す。

「……なんですか、これは」

それが、ホリデイ代表が最後に書き残したメモ書きの写しだということをスィリーズ伯爵は知らない。

どのような経路で聖女王が手に入れたのかもわからないが、

「ウインドル共和国に関すること、のようですね。ゼンマルが大聖堂……ブランストークの大聖堂ですね。最初の女神神殿に近い……」

ハッとして立ち上がると、抽斗から取り出した世界地図を机に広げる。

「最初がブランストーク湖上国。次にできたのは……」

それはゲッフェルト王にも見せた各地の神殿の配置だ。

「……順番に、広がっています」

神殿は、まずブランストーク湖上国の教会総本山を中心にし、次に各「盟約者」の本拠地を中心に、広がっている。

「これはまるで――伝染病ではありませんか」

神殿の空白地帯は、今では半分ほどだ。

クルヴァーン聖王国。

光天騎士王国。

レフ魔導帝国。

キースグラン連邦内ゲッフェルト王国、ウインドル共和国、小国をのぞけばめぼしいのはこれくらいしかない。

「……エヴァは無事でしょうか」

スィリーズ伯爵は得も言われぬ胸騒ぎがして、窓際に寄った。

カーテンをずらして外を見やる。

「！！」

思わずのけぞった。

雨が打つ窓ガラスの向こう――屋敷が面している表通りに騎士が4人、馬に乗っていた。

フードを目深にかぶり、濡れそぼるマントの紋章がはっきりとその所属を示していた。

グレンジード公爵の騎士だった。

残る空白地帯（後書き）

コミカライズ版オバスキは6月に1巻が発売されます！
ファンタジー世界をばっちり描いてくださっているので是非←のリンクからＷｅｂ公開分を見てみてください～。

再会、そして北進（前書き）

●前回あらすじ：

「女神の目」計画によって大陸各地に女神神殿が着々と建設されていく中、その反対派だったウインドル共和国の人民代表ホリデイは側近に刺されて死んだ。

クルヴァーン聖王国も「予算がない」という理由で神殿建造にストップが掛かっていたが、グレンジード公爵はリグラ王国から資金を引っ張って神殿を建造するようにスィリーズ伯爵に命じる。この異常な展開にスィリーズ伯爵は身の危険を感じるようになる……伯爵邸を監視する騎士たちもいたのだった。

再会、そして北進

★　光天騎士王国　光天王都　★

騎士の国である光天騎士王国において冒険者の立場はあまりよくはなかった――というのも彼らに任される仕事はほとんどなかったからだ。

しかし「世界結合」以降、光天騎士王国内には特に多くのモンスターが出現し、騎士たちはその掃討で大わらわとなり、冒険者にも仕事が回ってくることが増えた。

「――こっちは終わったぞ」
「おお。さすが『硬銀』の、強えーな」
「助太刀は？」
「頼む。――おおい、『硬銀の大盾』が来てくれたぞ！」

光天王都にほど近い森林地帯に、群れをなしたオオカミ。紫色の瞳を持つモンスターで、人間よりも一回り大きく、毒を持ち、性格は凶暴という厄介極まりない相手だった。

だが騎士たちは平原に現れた巨大蜘蛛の討伐に出ており、そちらに比べればオオカミごとき凶暴性はたいしたことがないという有様だ。

「おおっ。あれが『硬銀の大盾』ダンテス！」
「前衛お願いします！」
「任された。――ミミノは負傷者救護、ゼリィは遊撃を」
「了解だべな」

「あいあい～」

「銀の天秤」パーティーは光天騎士王国の光天王都を中心に活動していた。というのも「世界結合」後、あちこちでモンスターの討伐が始まったが光天騎士王国では手が足りないという報告を受けたからだ。

さらに、レイジが行方不明だという情報もあった。光天騎士王国はレイジの実力を買って、上級騎士に取り立てようとしたこともあり、恩を売れば捜索に手を貸してくれるのではないかという期待があった。

「一気に畳みかけるぞ！」

ダンテスが加勢した冒険者チームはオオカミの群れの最後の1頭を討伐した。

光天王都は騎士による騎士のための王都ではあったが、冒険者ギルドは存在する。併設されている直営の酒場は、モンスター討伐の報酬を得た冒険者たちで賑わっていた。

「『硬銀』の旦那はやっぱりすげえな」

「腕の1本や2本覚悟したもんだが、『硬銀』が来たあとはまるでケガの心配もなかった」

「あれが立ち回りっていうんだ、お前ら覚えとけよ」

騎士の存在感が強すぎるために全体的に冒険者のレベルが低い光天王都の冒険者ギルドで、「純金級（ゴールド・ランク）」のダンテスはやたらと持ち上げられ、酒を勧められ、断り切れずにあちこちのテーブルを回るハ

メになり、ミミノとゼリィのテーブルに戻ってきたころにはだいぶ酔っ払っていた。

「ダンテスぅ……こんな姿を見たらノンがなんて言うべな？」
「す、すまん。黙っていてくれ……」
「冗談だべな。みんな、浮かれてるんだからしょうがないし」

勝利の余韻に酔ってしまうのは仕方がないだろう。

「しっかし、騎士様たちは大変そうっすねえ。巨大グモ、倒しきれずに逆に被害甚大だとか」
「教会の聖職者を連れて行ければよかったんだと思うけどな、うまくいってないみたいだべ」
「ノンさんが欲しいっすねえ」
「ノンはなぁ……」

ゼリィとミミノがそんなことを話している。
ブランストーク湖上国での「世界結合」以後、教皇は各教会の聖職者についてすべて教会が一律で管理すると発表し、ノンも教会総本山に残ることになってしまった。

「モンスター討伐のときくらい貸してくれたっていいでしょうに」
「一応、運び込まれた負傷者の治療はしてくれてるみたいだべな？」
「現場にいりゃあ、重傷者だって助かったっすよ。何人死んだんすかねえ」
「あんまり大きな声で教会批判はよくないべ」
「う～～～ん」

ゼリィは腕組みして身体をのけぞらせる。彼女にしては珍しく難しい顔だ。

「なんか、『世界結合』で、あーしらからは見えない偉い人たちが……おかしくなっちまった感じがしやせんか？」
「……」
「……ぐぅ」

ダンテスは寝入ってしまったが、ミミノはゼリィの言うことにも一理あると思った。
冒険者はモンスター討伐で潤っているが、国の上層部にはおかしな動きが多い。ダンテスは、ヴァルハラ市の冒険者ギルドマスターであるグルジオと個人的に連絡を取っており、その内容をミミノたちにも教えてくれるのだが、きな臭い動きがあまりにも多い。
教会ナンバー2のトマソン枢機卿の退任。
ウインドル共和国ホリデイ代表の殺害。
女神神殿の建造。
ここ光天騎士王国がトマソン枢機卿の根城だったが、神殿建造に反対していた枢機卿が失脚させられると神殿建造の気運が一気に高まった。
しかし光天騎士王国がそれに「待った」をかけており、それに反発する教会は聖職者の貸し出しを取りやめ、自分たちで土地を買い、ゼロから神殿建造を始めている。

「ノンが無事だといいんだけどな……」

教会総本山に残してきたノンが気がかりだった。

「ん？　ミミノさん、レイジ坊ちゃんのことは心配じゃないんですかい？」
「レイジくんがいなくなるのはいつものことだからなぁ……」
「なははは」

並行する別の世界に行ってしまい、ようやく再会したと思ったら今度は枢機卿とともに行動することになり、「世界結合」が終わったと思ったらその姿はかき消えていた。
だがミミノには確信がある。
レイジは生きているはずだと。
これまでにも難しい状況はいくつもあったが、彼は生き延びて、帰ってきた。

「レイジくんにとって『銀の天秤』は『帰るべき家』だからな」
両手で持ったマグカップに入ったジュースを、ミミノはちびりと飲んだ。

「レイジはきっと、わたくしのところに帰ってくるのだわ」
「私にとっては、レイジさんが『帰るべき場所』です」

声に――ミミノはハッとして振り返る。
いつ入ってきたのか、薄暗い酒場にフード姿のふたり組。
聞き覚えのある、声。

「お待たせしました、ミミノさん。ようやく合流できましたね」
フードを外したそこにいたのはハイエルフのアナスタシア。

「光天王都には初めて来たのだわ。治安のいいすばらしいところね」
もうひとりはエヴァ＝スィリーズ――レイジが「お嬢様」と呼んだ少女だった。

エヴァとアナスタシアはふたりでここまでやってきたわけではなかった。スィリーズ家騎士の筆頭であるマクシム隊長、他5名の騎士がついてきている。ただし彼らの装備は騎士としてのそれではなく旅人のような姿ではあったが。

「久しぶりにぐっすり眠れたのだわ！」

翌朝、宿の食堂に降りてきたエヴァが言う。

輝かんばかりの金髪に美しい赤い目はどう見ても平民のそれではなかったが、横に美貌のハイエルフであるアナスタシアもいるので違和感なく見えてしまうのが恐ろしい。

「うー……頭痛てぇ。ミミノ、二日酔いの薬はねえか？　アナスタシアと貴族のお嬢ちゃんの幻覚が見えるんだ」

「いい薬はあるべな。だけどそれは幻覚じゃない」

「そうか……幻覚じゃないのか。……ッ！？」

二日酔いのダンテスが二度見したが、確かにそこには街の宿に似合わない少女がふたりいたのだった。

「ともかく、なんでここにアナスタシアとお嬢様がいるのか説明して欲しいべな」

ふたりは語り出した。

まず今回の旅は勝手に思いついて勝手に行動したことではなく、きちんとスィリーズ伯爵の許可を得ていること。ゆえに、騎士を6人もつけている。マクシム隊長はスィリーズ伯爵の武力の要ではあったが、聖王都で武力を使うことはおそらくないだろうこと、もし

使うことになったらそれは最終手段で、きっと死を免れない局面だろうという判断で、マクシム隊長をエヴァにつけたのだった。
スィリーズ伯爵はクルヴァーン聖王国でかなり微妙な立場にあり、伯爵は秘密裏にエヴァを国外に出したかった。それも、女神神殿がないところへ。

「女神神殿？　それって教会が造ってるやつべな？」
「そうなのだわ。神殿そのものがひとつの魔道具になっていて、『強い信仰心を与えるのではないか』とお父様は言っていたけれど……推測の域は出ないのよ」
「信仰心、くらいなら問題なく感じるけど」
「『その油断が命取りになる』と。お父様はキースグラン連邦のゲッフェルト王とも内密に話をしていたので、そちらからの情報も得ていたみたい」

聞いて、ミミノがダンテスを見ると薬を服んでいくぶん体調が回復したらしいダンテスはじっと腕組みしていた。

「……俺が、グルジオ様から聞いた内容とも一致する。どうもきな臭い動きがあるらしい……ゲッフェルト王は連邦内に影響力を持っておられるのだが、神殿建造は慎重に行うよう通達を出しても聞きやしないんだとか。モンスター掃討戦が続く今、そんなことやってる場合じゃねえんだが」
「仰るとおりなのだわ。でも、仮に今、神殿建造を退けたとしてもモンスターとの戦いが安定化した後はどうなるか」
「ふむ……。それで、エヴァ様とアナスタシアはどうしてここに？」
「わたくしたちは『銀の天秤』と合流すること。それに光天騎士王との面会を希望しているのだわ」
「ほう。それはスィリーズ伯爵からなにか重要な話が？」

するとエヴァは首を横に振った。

「レイジを捜すためなのだわ」

全員が、ハッ、と息を呑んだ。

「レイジさんはきっと未開の地『カニオン』にいると私たちは考えています」

アナスタシアが補足する。

「皆さんがどこまで未開の地『カニオン』についてご存じなのかはわかりませんが、我々の情報網でレイジさんを見つけることができない以上、人間の住めない場所にいると考えるのが適当です」

「いや、しかし……ただ見つかっていないだけかもしれないぞ。この大陸はそれくらい広い」

「ですが、女神神殿は大陸の大半をカバーしています」

「？」

「『世界結合』の日に盟約者とともに女神のいる場所へ消えたというレイジさんは、女神にとってイレギュラーな存在であると考えています」

「その証拠もあるのだわ」

エヴァが取り出したのは小さなメモ紙だった。

「これは……クルヴァーン聖王国の特級祭司、エル＝グ＝ラルンの書き置き」

スィリーズ伯爵がグレンジード公爵ににらまれて動けなかったが、そのぶんフリーハンドで動けたのがエヴァとミラ辺境伯令嬢、それ

にアナスタシアだ。彼女たちは旧「祭壇管理庁」の建物を使って会合を何度か重ねたが、そのときにミラが偶然、隠し扉と隠し書斎を発見した。

ウサギの祭司、エルのものだった。

――女神の悲願である「世界結合」が成れば、黒髪黒目の「災厄の子」、それに調停者は女神の理想である世界において邪魔になる可能性がある。

そう、書かれていた。

彼女たちは「世界結合」の日にエルがブランストーク湖上国にいたこと、その後、見るも無惨な姿で発見されたことを知っている――地獄の業火で焼かれたような姿で。

そのときまでエルが、魔導生命体であったことをほとんど誰も知らなかった。エルを造り出したテクノロジーは完璧に失伝しており、多くの研究者が解明しようとしているがその一端すら明らかになっていないようだ。

誰が造ったのか、なぜクルヴァーン聖王国にいたのか――王族は知っている可能性があったが沈黙している――そのあたりはいまだエヴァたちもわからない。

「レイジが盟約者とともに消え、その場で死んでいたらエルとともに発見されたはずなのだわ。でも、見つかっていない。ブランストーク湖上国は女神のお膝元だけれど、見つかっていない」

「加えて、女神神殿の魔術影響範囲はブランストーク湖上国周辺をぐるりと覆っていますが、ウインドル共和国をのぞく場所でレイジさんは見つかっていません。ウインドル共和国はホリデイ代表が――亡くなってしまいましたが……レイジさんを見つけていれば必ず一報をくださったはずです」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。その『魔術影響範囲』ってのはなん

だ？」

ダンテスがたずねるが、これればかりはアナスタシアもエヴァも「わからない」としか言えない。

「今はそこに近づくのが『危険』であるとしか言えません……」

「危険……？」

「でもレイジさんは、エル祭司、調停者と同じイレギュラーですから、女神の影響を受けていないと思うのです」

彼らはレイジが「なぜイレギュラーなのか」について答えを知っている。

「災厄の子」、それは転生者だ。

人より倍の16枠、天賦を所持することができる――限界超え（オーバーリミット）の天賦を扱える者（スキルホルダー）だからだ。

「クルヴァーン聖王国。光天騎士王国。レフ魔導帝国。キースグラン連邦内ゲッフェルト王国、ウインドル共和国――これくらいしか、今はレイジが隠れていられる場所はないと思うのだわ」

「……黒髪黒目のレイジを見つけた、女神の信者たちはきっとアイツを告発する、ということか」

「ええ、そうよ」

「つまりエヴァ様とアナスタシアは、光天騎士王に国内のレイジ捜索について話をし、そのままレフ魔導帝国に抜け、そこでも収穫がなければ……」

「ええ。未開の地『カニオン』に行くのだわ。レイジが苦しんでいるのなら、次はわたくしが手を差し伸べる番だから」

揺るぎない言葉に、ダンテスは思わず唸った。

――愛されたもんだな、レイジ。

と、次に会ったときには言ってやりたいとさえ思った。

★　レフ魔導帝国　関所　★

光天騎士王との謁見はかなったのだが、望んでいた情報は得られなかった――つまり光天騎士王国もレイジの居場所を把握していなかったのだ。

残すところはレフ魔導帝国だけだ。

「レッドゲート戦役」以来、レフは国が受けたダメージの回復に努めてきた。「世界結合」によるモンスター大量発生では国土が小さいことが幸いし、国民の被害はほとんどなかった――のだが、

「……まだ、戦闘中？」

関所の内側、市街地は復旧作業が進んでいるが戦闘地域も多いために外国人の入国ができないのだという。

今は国民の半数が関所の南側にキャンプを展開しており――それは「レッドゲート戦役」のときのままだった。

「チュパッ――そうなんだ。未開の地『カニオン』側はかなり戦況が厳しくてね、こちらも魔導飛行船で空から爆撃を仕掛けているが、向こうは無尽蔵に湧いてくるんじゃないかってくらい敵が出てきてさ。チュパッ」

渉外局副局長のアバと再会した「銀の天秤」一行、それにエヴァと騎士たちは、レフ魔導帝国がどうなっているのかを彼の天幕で聞いているところだった。

ここは以前「銀の天秤」も拠点にしていて、「裏の世界」に行っ

たレイジを捜すための魔道具まで残っていた。――残っていたと言うより、アバが片付けをやるような時間すらないのかもしれない。

アバはまた水飴を舐めており、痩せ細った姿はどこに行ったのかまたまるまると太っている。前より体重は増えているかもしれない。国が復興に向かっているのでもう我慢はしなくていいということだろうか。トカゲのような皮膚も艶がよくなっていた。

「魔道具（マギクラフト）製作者たちもがんばっているけどね、なにせ敵が多くてね。君たちの友人の、ムゲは相変わらず物資の輸送で力を発揮しているみたいだけど。チュパッ」

「そっか……ムゲさんが元気なのはよかったべな！　ルルシャさんはどうしてる？」

「彼女は、周囲が止めても聞かなくてね……最前線で魔導武装（マジックギア）の修理や触媒の補充をやってる。チュパッ」

「ルルシャさんらしいべな」

「アバさんよ、俺たち『銀の天秤』はモンスター討伐に力を貸すぞ」

ダンテスが申し出ると、

「チュパッ。願ってもない申し出だ。ほんとうにありがとう」

「こういう情勢だ、困ったときにはお互い様だ」

「ふふふ。こんな形でレフに戻ってくることになるとは思わなかったですけれど」

レフ魔導帝国に暮らしていたアナスタシアが笑うと、アバはまじまじと彼女を見つめる。

「……しかし、ほんとうにアナスタシア殿下がお話しになっているのですね」

水飴を舐めるのも忘れて。

「私がこうして言葉を発せられるようになったのはすべてレイジさんのおかげです。ですから、レイジさんの捜索にこの力が必要ならば惜しみなく使います」

ちりり、と彼女の周囲に火の粉が舞い、アバは息を呑んだ。

「それと、私はもう『殿下』ではありませんから」

「あ……そ、それは、はあ、わかりました。……チュパッ」

「――エヴァ様はどうなさるのですか？」

アナスタシアが水を向けると、座っていたエヴァは難しい顔をし、その後ろに立っているマクシム隊長や騎士たちは口々に反対意見を発した。

「お嬢様、戦闘行為はなるべく避けるようにというのが伯爵閣下からのご命令です」

「我々騎士はお嬢様をお守りするためのものですぞ」

「ただでさえお守りするのが難しい場所ですから……」

エヴァは難しい顔のまま答えなかった。

心情としては当然モンスター討伐に参加したいのだろうが、貴族としての地位がそれを妨げているのだろう。

前なら――レイジと出会ったころならば、エヴァはきっと「モンスター討伐に力を貸すのだわ！」と即断即決だったはずだ。

（……レイジから聞いていた話とはだいぶ違うなあ。レイジ、お嬢様も成長してるぞ）

それを微笑ましそうな目でダンテスが見ていた。

「……さようですな。貴族位の方が来られると、こちらとしても困惑すると思います。お心はありがたくいただきますが、もしお怪我をされると、我が帝国としても面目が潰れてしまいますので」

アバが丁重な断りを入れると、エヴァは重い口を開いた。

「ですが、貴国が困っておられるのになにもしないのは、聖王国貴族の振るまいとしては正しくありませんわ」

「正式に騎士の派遣という形でしたらそのとおりですが、今、スィリーズ伯爵令嬢はお忍びの形でいらしています。渉外局副局長の私がそう認識をしております以上、問題が起きれば我が帝国の責となってしまいます」

「……」

悔しそうに歯噛みするエヴァに、アバは重ねて伝えた。

「戦況は、先ほども申しましたとおり激戦となっております。さらに昨日のことですが、巨大な鳥影のようなものが北の空に確認されております」

「鳥影？」

ダンテスがその単語を聞きつける。

「それは鳥と言うにはあまりにも大きく、魔導飛行船ほどもあるということで……もしかしたら情報としてだけ伝わっている８の巨大種のひとつではないかと。あるいは」

アバの冷静沈着な瞳と、エヴァの苦しそうな瞳が出会った。

「竜かもしれぬ、ということです」

異変と消息

「なりません、お嬢様。戦闘地域への入場は禁止されております。それを破るようでしたら無理やりにでも従わせろというのが伯爵閣下のご命令です」

スィリーズ伯爵家の筆頭武官であり騎士隊の隊長でもあるマクシムは譲らなかった。

ムスッとした顔でそっぽを向いているのはエヴァだ。

「でも、『銀の天秤』の皆様は戦いに赴いているのだわ」

「それは彼らが冒険者だからです。レフ魔導帝国からの依頼を受け、モンスター討伐に赴くのは彼らの生業でしょう」

「ならばわたくしも貴族としての務めを果たすべきでしょう」

「アバ渉外副局長も仰っていたではありませんか。お嬢様は今『お忍び』でここにいらしていて、『お忍び』だからこそ滞在を許されているのです」

「わたくしの力は、きっと前線で役に立つのだわ！」

「それもわかっておりますが、スィリーズ伯爵閣下はその力を使うことを望んではいらっしゃいません」

エヴァの「鼓舞の魔瞳」は大勢の人間の闘争心に火を点ける。そうすることで身体的能力が向上するようで、元は「我を失う」というようなデメリットもあったのだが今エヴァは力の加減をコントロールできるようになっているために、デメリットが発生しない。

ただこの力はスィリーズ伯爵にとっても「切り札」と言っていいほどに強力な能力で、ここぞというとき以外には隠したい。ましてや他国で使うなどもってのほかだ。

そうなるとエヴァは、帝国の関所付近に設けられた天幕で座っていることしかできない。
夕方になると「銀の天秤」が帰ってくるので彼らの話を聞くことだけが楽しみ、という、隠居老人みたいな立ち位置になっている。

「……戦況はどうなっているの」

エヴァが根負けして、話題を変えた。
実のところマクシムとのやりとりは毎日繰り返されていることで、エヴァとて自分のワガママが通るとは思っていない。
聖王国を出て、レイジを捜すためにここまで来られたことですら幸運中の幸運なのだ。

「見通しとしては悪くないようですぞ。モンスターは減少傾向にあり、帝国の弾薬が尽きる前には終息するだろうと」
「……我がクルヴァーン聖王国からの支援は期待できないのでしょうね」
「残念ながら。光天騎士王国もまた同じ状況でしょうし、他国を救えるほど手が空いている国はないと思われます」
「未開の地『カニオン』に行けるのはいつになるのかしら……」

ここでもう5日は足踏みをしている。
エヴァにとってレイジを捜すことは単に彼を助けたいだけではない。彼が、あまりに不可解なこの世界を元に戻すためのカギになるのだと思っているからこそ、一刻も早くレイジに会わなければいけないと思っていた。
だが――エヴァの思いとは裏腹に、事態は悪い方向へと進む。

「――ふう～～今日も働いたっすわ～～」

「銀の天秤」メンバーにして猫系獣人のゼリィが誰よりも早く天幕に戻ってきたのは昼の3時だった。夕暮れ時と言うにはまだまだ早い。

彼女は装備品をぽいぽいぽいっと投げるように片づけると、

「じゃ、あーしは野暮用があるっすから！」

右手で雑な敬礼をして見せて天幕を出て行った。

帝国の一般市民が開いている賭場に通っているのだ。ゼリィだけは日当を毎日もらっていて、それを使って遊んでいるらしい。

真面目一辺倒のマクシムや騎士たちは「アレでいいのか？」とダンテスに聞いたことがあったが、「ゼリィなりの気の緩め方なんだ……たぶん」とダンテスも言うので不問に付されている。

レフ人らしい、魔道具を使った賭場があってそれはそれは珍しいものなのだとゼリィは力説していたが、その言葉が響いたのは誰もいなかった。

それから2時間ほどするとダンテス、ミミノ、アナスタシアの3人が帰ってくる。この3人には帝国の兵士が護衛としてついてくるほどで――というよりアナスタシアを警護しているようだが――彼らが天幕に到着すると最敬礼して帰っていった。

「今日もアナスタシアは大活躍だったな」

「い、いえ、そんな……私の力は最前線で戦うダンテスさんや、軍の皆様がいてこそです」

ダンテスが褒めるとアナスタシアが恐縮する。

アナスタシアの【火魔法】は確かに、ある程度敵に接近しなければその高熱は空気中に拡散してしまう。

ただし彼女の魔法は強力なので、大型モンスターも仕留められるために帝国から重宝されていた。

「ミミノさんの秘薬もすさまじかったですし……」
「ここでは『魔法複製薬（デュープ・ポーション）』を作り放題だべな！」

帝国が国庫を解放して希少な薬剤も提供してくれるために、「発動した魔法を再構築する」という――つまりは同じ魔法をもう1度使えるという「魔法複製薬」をいくつも作れた。

アナスタシアの【火魔法】に合わせると、火力はとてつもなく凶悪になる。

「今日はどんな薬を作るべかな～？」

ほくほく顔のミミノは、夕食後に薬の調合をするのが日課になっていた。

なにせここには、夢に見たような薬剤が山ほどあるのだ。

薬師の種族として名高いハーフリングとしてもこんなに楽しいことはない。

「その前に汚れを落としたいですね……」
「そうそう、新しい石けんも作ったんだべな。ニオイもしっかり落ちるよ」
「まあ、すばらしいです！」
「むう……」

楽しそうに話しているミミノとアナスタシアを、うらやましそうにエヴァが見ている。

自身も戦場に立ちたいのにそれが許されない彼女のことを、ミミノとアナスタシアもわかっている。アナスタシアはエヴァの無念さをからかう気にもなれず、

「ええっと……お嬢様もいっしょに汗を流しますか？」
「気を遣われているのだわ！？」
「自分の手でやりたいことができない苦しさは、私にもわかりますから」
「うんうん、若い女の子同士、仲良くするべな～。帝国の蒸気風呂は気持ちいいからねえ」

にこにこしてミミノが道具袋から新しい石けんを取り出したところだった。

「……ミミノ、残念だがそのお披露目は後になりそうだぞ」

ダンテスが真剣な表情で言った。気づけばマクシム隊長と他の騎士も集まっている。
夕焼けの照らす天幕の中をひとりの騎士が大急ぎで走ってくる。
それは帝国の服装ではなく――光天騎士王国の軍服だった。

「ここに、エヴァ＝スィリーズ様は……」

息を切らしながら騎士が言うと、エヴァは前に進み出た。

「わたくしです。なにか？」
「はっ。至急ご連絡したいことがあり、参りました。貴国で異変があったようです」
「！」

遠距離通信できる魔道具は開発されているが、そのほとんどは戦場となっている帝国内部だ。だから国境に近い光天騎士王国の街からこの騎士がやってきたのだろう。
差し出された書状を受け取ったエヴァは厳しい顔でそこに目を通

す。

「……この内容は真実ですか」

「書状の内容は我が王国の大将軍フリードリヒ＝ベルガー様が認めたものです」

「わかりました」

騎士は敬礼をすると去っていく――その彼が立ち去るよりも前にダンテスはたずねていた。

「いったいなにがあったのですか」

「……」

もう一度書面に目を落とし、エヴァはつぶやいた。

「……グレンジード公爵が兵を動員して聖王宮を制圧し、再度『聖王』を名乗ったようです」

「なっ……!?」

冒険者であり政治に詳しくも興味もないダンテスだったが、それでも「クーデター」という言葉が脳裏をよぎった。

誰より動揺したのはマクシムだった。

「お、お嬢様！　閣下は、お嬢様のお父上は!?」

「生死不明……と書かれていますね。ただ我が家のある『第2聖区』でも大きな戦闘があったと記されています」

「そんな……！　戻りましょう、今すぐに！」

「戻りません」

「!?」

凍りつくマクシムや騎士たちにエヴァは告げる。

「戻ったところでなにができるというのですか。すでに戦闘は終わり、グレンジード公爵が『聖王』を名乗っているのです。多くの貴族を従えていた公爵のことですから聖王都の掌握もほどなく終わるでしょう。今になってみれば、お父様はこうなることも見越してわたくしを聖王都の外に出したのではないかと思います」

「お、お、お嬢様……しかし、我々は……」

「あなたたちの任務はなんですか」

「……お嬢様をお守りすることです」

「そのとおりです」

エヴァの言葉はすべて筋が通っている――そう感じているからだろう、マクシムを始め、騎士たちは全員うなだれたまま動けなかった。

「……任務はそうですが、それでも戻りたいという考えならば、父の捜索に戻ることを許可します」

「！」

「行くならばすぐに発ちなさい。一刻も早いほうがいいでしょう」

エヴァは彼らに背を向けるとひとり天幕へと入っていった。

マクシムや騎士たちは視線を交わし合い――そしてエヴァの消えていった天幕に一礼すると、そこに背を向けて離れていった。

薄暗い天幕の中にはもうもうと湯気が立ちこめている。

強いハーブの香りもしており、息を吸って吐くだけで体内が洗われるような感じがする。

蒸気風呂にはこの時間、ふたりしかいなかった。

「……エヴァ様は、あれでよかったのでしょうか」

ほっそりとした腕の、きめ細かな白い肌は蒸気に濡れていた。アナスタシアがたずねると、隣にいたミミノが顔を向ける。すでにアナスタシアよりも背が低いミミノだ。結った髪をほどいて垂らしており、それはしっとりと濡れていた。

「よくないべな。エヴァ様が誰よりも聖王国に帰りたいに決まってる」

「それでも帰らないと言ったのは自分の責務のため……」

「だなぁ……」

「騎士の方々は帰るでしょうか」

ミミノは首を横に振った。それは「わからない」という意味だ。

「でもきっと、ダンテスがなんとかしてくれるべ」

「えっ？」

「――さっきのエヴァ様の顔、昔のノンみたいだった。ダンテスは放っておけないべな」

石化症状が進行していたころのノンは、時折思い詰めたような顔をしていた。それはそうだ、自分の父が徐々に死のうとしているのだから。

だがダンテスはノンが思い悩んでいても手を貸すことも、話を聞くこともできなかった。彼女の悩みの原因は他ならぬ自分自身だったのだから。

「自分が無力だって知るとさ、人って、優しくなれるもんだよ」

ミミノもまた無力を感じていたひとりだ。あのときレイジに出会わなかったらずっと悲しい結末が待っていただろう。

「ミミノさんって……」

アナスタシアは言った。

「ときどき、すごく年上に見えます」

「いや、年上だからね！？　何歳だと思ってたべな！？」

夜も更けたというのに天幕内は魔導ランプが点っていた。

エヴァは今日届けられた書状をじっと見つめている。そこに書かれた文字の内容はすべて把握済みだし、見つめていると内容が変わるわけでもない。

それでもエヴァは見つめていた。

「エヴァお嬢様」

やってきた大柄な人物に、エヴァは心ここにあらずという視線を向けた。

「あ……ダンテスさん」

「ちょっといいですかい」

お忍び、さらにはレイジの深い知り合いであるとはいえ貴族と冒険者の身分差は大きい。

ダンテスは数歩離れた場所に立ち止まって、座るエヴァに話しか

ける。

「――モンスターとの戦いは確かに好転してはいますが、明日明後日にどうにかなるということではありません。むしろ、強力な巨大モンスターがやってきたら一気に状況は悪くなる可能性すらあると俺は思っています」

「そう……ですか」

「ええ。つまり、ここにいてもただ無為に日々を過ごすことになります」

「……」

エヴァは聡い。それだけでダンテスの言いたいことがわかったようだ。

「……わたくしに、帝国を離れよと？」

「そうは申していません。ただ、なすべきことがあるならば、なされるべきではないかと」

「……」

瞳を閉じたエヴァは、テーブルに置かれていた手を握りしめた。

「……ダンテスさんはこういうとき、どうするのですか。自分の力及ばぬ事態に巻き込まれたときには」

「なにも……」

「……なにも？」

「なにも、しませんでした。俺は。ただロウソクの火が消えるその日を待っていました」

かつてエヴァは聞いたことがあった。ダンテスの石化のこと、そしてそれをレイジが治し、そのせいでレイジが逃げ出さなければい

けなくなったことを。
石化毒に冒され、「なにも」しなかった――この、多くの修羅場をくぐった勇猛な冒険者ですら「なにも」しなかったという事実はエヴァの心にのしかかってきた。
彼女は、自分の中の冷徹な部分が「聖王国に戻るだけ無駄。情報を取れない今、なにもできずに終わるのはほぼ確定。むしろ捕らえられることで不利益がある場合もある」と囁いてくるのを聞いていた。感情を抑えつけるのには十分な理屈だった。

「――でもそれは間違いだった」
「！」

ハッとしたエヴァにダンテスは告げる。

「死に場所を探して生きる……そんなものは、ダメなんですよ。俺を見てくれている周りの人たちをどれほど傷つけていたのか、今になればわかるんです。同じように……自分を殺している姿ってのは痛ましい」
「……わたくしは、痛ましく見えますか」
「とても。心が泣いているのがわかるのに、あなたの頬は乾いている。お嬢様、あなたは貴族なんでしょう。誇り高く、レイジが命を賭しても守ろうとした御方だ。そのあなたが、今、ほんとうにやらなきゃいけないことを見誤っているんだ」
「でもッ……」

エヴァが立ち上がると、安物のイスが倒れて音を立てる。
声は震えているのに彼女の瞳から涙はこぼれない。
痛ましいな――ダンテスは心につぶやく。

（こんな少女が、無理して、意地はって、矜持だ責務だなんだと言

って泣くことすらできねえ。これを痛ましいと言わずになんて言う）

エヴァが声を振り絞る。

「……わたくしが行ったところでなにもできないのだわ。ただの小娘は、この有事においてはなんの役にも立たないのだから」

「そのための仲間でしょう」

「仲間……そう、ね。でもマクシムや騎士たちは、先に聖王国へ向かったのだわ。わたくしよりも彼らのほうがお父様のお役に立てるはずだからそれでいい。わたくしは、ここにいれば……」

「ああ、騎士隊長ですか。そろそろ来ますよ」

「……は？」

するとどたどたという数人の足音が響いてきた。

「お嬢様！」

マクシムと、騎士たちが天幕の入口に現れた。

「みんな……どうしたの？　先に聖王国に戻ったのだとばかり」

「いえ？　そんなことありませんよ――それよりも、ようやく話をつけられたんで」

「話？」

「レフ魔導帝国とです。帝国の魔導飛行船を借りることができました。これで一足飛びに聖王都まで戻ることができます」

「――――」

エヴァは口を開いたまま、なにを言っていいのかわからなくなる。

騎士たちが口々に言う。

「我が国と帝国との間で定期的に行われている物資の交換船に潜り込めるということです。これなら疑われることなく着地できましょう」
「グレンジード公爵も他国の船を落とすようなことはしないでしょうし」
「陸路で行けば何日も掛かりますからね……」
「まずは向こうで情報収集と行きましょう」

彼らは最初から、「エヴァを置いて聖王国へ帰る」なんて考えもしなかったのだ。

「お嬢様。お嬢様は聖王都に戻らないと仰せでしたが、我らは戻るべきだと思っております。主君の命令は絶対ではありますが、ご判断が間違っていた場合は進言するのもまた騎士の務め。それでもなお、我らが間違っているとお考えでしたら、ここで仰ってください」

マクシムを始め、騎士たちはその場に膝をついた――ダンテスはニヤリとする。

「お嬢様、忠実なる騎士の皆様になにか一言あってもいいのではありませんか？」
「あ……」

我に返ったエヴァは、

「……お父様の危機に、なにをおいてもはせ参じるのが娘の務めよね」
「賢明なるご判断だと存じます」
「あの、みんな……ありがとう。わたくしが、間違っていたのだわ」

マクシムたちが顔を上げる――それは安堵の笑顔だった。

「ダンテスさん」

「はい」

「……その、皆様は……その」

言い淀むエヴァに、ダンテスは微笑んだ。

「お嬢様は、もっとワガママになったほうがよろしいかと思います。一言、こう仰ってください――『ついてきて欲しい』と」

「……お見通し、ということね」

苦笑しつつ、エヴァは、

「ダンテスさん、いえ、冒険者パーティー『銀の天秤』にお願いしたいのです。我がクルヴァーン聖王国スィリーズ伯爵家の娘、エヴァ＝スィリーズとともに聖王国へ来ていただけますか？」

「喜んで、お供しましょう」

ダンテスが応えると、マクシムや騎士たちも大いに湧いて喜んだ。すでに彼らもダンテスたちの実力を知っているからだ。

「今、ミミノとアナスタシアがゼリィを連れ戻しに行っています。合流してすぐに向かいましょう――ゼリィはこういうときに活躍できますから、しっかりこき使わないと」

「頼もしいですわ」

準備のために騎士たちが天幕を出て行くと、それに続いて、ダンテスが、そしてエヴァが外へと出た。

満天の星空の向こう、数隻の魔導飛行船が黒々としたシルエット

でそびえるように停泊している。

「……レイジ、ごめんなさいなのだわ。あなたを捜しに行こうと思ったのに、また戻らなければいけなくなってしまった」

そのつぶやきを耳に留めたダンテスが「？」という顔で振り返る。

「ダンテスさん」

「はっ、なんでしょう」

「――さっきはほんとうにありがとう。レイジに諭されたような気がしたのだわ」

「レイジに……ですか？」

「ええ。でも――レイジならきっと言わないような言葉があったから、やっぱりダンテスさんとレイジは違うのね」

エヴァは、自分のそばにいて、自分のためになんでもしてくれた――文字通り「なんでも」、木に登ったり、下町に出たりという願いを叶えてくれた少年を思い出していた。

「レイジはわたくしに『もっとワガママになっていい』だなんて言わないの。それはもう、絶対に言わないはずだから」

聖王都到着

★　★　クルヴァーン聖王国聖王都クルヴァーニュ上空　★

風を切って魔導飛行船が聖王都クルヴァーニュ上空へと到達する。
馬で行けば１０日は掛かる距離を、１日も必要とせず移動できるのだから魔導飛行船を各国が欲しがるのも当然だった。
聖王国の所有する魔導飛行船は「第２聖区」に発着場があったけれど、外国船用の発着場は「第５街区」にある。
着陸したのは、エヴァが聖王都への帰還を決めた翌日、夕刻だった。
早速、クルヴァーン側の担当者がやってきて、レフ人の船長と挨拶を交わす。

「――今回は早いのですな」
「――申し訳ありません。我が帝国ではモンスター掃討戦が長引いておりまして、物品が不足しております」
「――それはそれは……できる限り積んでいってください」
「――ご協力、感謝します」
「――なに、こういうときには協力し合うものでしょう」

和やかな雰囲気だった。「レッドゲート戦役」以降、帝国と聖王国の交流は深まっているからだ。
レフからは魔道具の提供を、クルヴァーンからは食料や薬剤、衣類といった生活必需品を提供している。魔道具の運用に必要な触媒

も多い。
　魔道具の入った箱が木箱で数箱であるというのに、クルヴァーンが提供するものは山と積まれている。
　それほどに魔道具に関する技術が帝国は進んでいる。
　一方で聖王国は、レフの全人口の数十倍という人口を抱えており、魔導飛行船をいっぱいにする程度の生活必需品の提供など、日々消費される物量を考えると誤差のようなものだ。

「……行くぞ」

　荷物のやりとりが行われている隙に、ダンテスたち一行は発着場に降り立った。物陰を選んで進んでいく――。

（特に変わった様子は見られないのだわ）

　発着場をあっけなく抜けると、街に紛れ込む。
　ボロのフードを目深にかぶったエヴァは周囲を観察しながら進む。
　とてもではないがクーデターが起きた聖王都だとは思えない落ち着き振りだ。

（ん、あれは……教会？）

　修道服を着た聖職者が集まっているのだが、彼らの視線の先にあるのは建物に掛けられたハシゴや足場だった。

「――いやはや、我が教会もついに教皇聖下のいらっしゃる総本山と同じように改装されるのですな」
「――しかしよろしいのでしょうか。まだまだモンスターの脅威が去ったわけではないのに……」
「――市場では値上がりしているものもあるとか」

「――それは商人が暴利を貪っているだけでは？　教会の予算を教会が使うのは問題ありますまい」

教会の改装。

つまりは教会の「魔道具化」を進めているのだ。

止めなければ――こんな聖王都のど真ん中に魔道具化した教会が置かれたらどんな影響が出るかわからない。

「……エヴァ様、今はこのまま行きましょう」

足を止めてしまったエヴァに、ダンテスがささやきかけた。

「……ええ、わかっているのだわ」

すでにある教会を改装することで女神神殿とするのが各国で行われているが、1日や2日でできることではない。少なくとも半月以上は掛かる。

クーデター後に改装が始まったのだとすると、まだ着手したばかりだろう。

（今は、お父様を見つけなければ……）

エヴァたちは街を進んでいく。

すでに仲間のひとり――猫系獣人の冒険者が姿を消していることにエヴァが気づくのは1時間以上も後のことだ。

★　ゼリィ　★

聖王都の街中は落ち着いていたが、「第２聖区」ともなるとぴりぴりとした緊張感が漂い、あちこちに完全武装の兵士が巡回していた。

すでに夜は更けており、魔導ランプの街灯が主要な通りを照らし出していたが、裏道ともなれば暗く静まり返っている。

そこを、風のように走り抜けていく黒い影があった。

ゼリィだ。

かつてレイジがエヴァの護衛を辞め、聖王都を出ていこうとしたときにこんなやりとりがあった。

――ていうかよく「第３聖区」まで入れましたね。

――これくらいならちょちょいのちょいで入れちゃいますよ。さすがに「第２聖区」はヤバイので行きませんけどね。

――ヤバイ警備態勢？

――バレたときにヤバイって意味です。入るのはまぁ。

大言壮語ではなかったのである。

偵察や斥候任務に特化しているゼリィは、戦闘能力こそ低いがこういうときに真価を発揮する。

「ふぅ～ん、騎士は使ってないんすねえ。貴族に連なる騎士は全員自宅待機にしてるってことかな？　たたき上げの兵士のほうが扱いやすいと……そのぶん、騎士より弱っちいんですけどねえ」

貴族の血縁者が多い騎士たちは、確かに血筋で選ばれているところもあったが一般兵士に比べれば厳しい訓練を受けているし、希少な天賦を持っている。

グレンジード公爵は自分の派閥でコントロールできない騎士を使いたがらず、兵士を使ったのだろうが、そのせいで警備に穴がいくつもできている。

だからこそゼリィは簡単にここまでやってくることができた。

「あら？　誰もいないじゃん」

スィリーズ伯爵邸に到達したが、兵士による監視や争いの跡はなかった。かといって伯爵の騎士もいないのでゼリィはするりと塀を乗り越えると敷地内に侵入した。

裏口に回ってノックをする――誰かが出てくる前に離れた場所に姿を隠す。

「？　あら？　今音がしたと思ったんだけどねえ……」

扉が開かれて現れたのは気の強そうなメイドだった。

「や、どうも～」

「え！？　だ、だ、誰か――」

「あ、待って待って、待ってって、ねえ？」

「――もごもぐっ！？」

暗闇からゼリィが姿を現すといきなり声を上げられそうになったので、距離を詰めて彼女の口に分厚い布を当てる。素手で口を閉じようとすると噛まれたりするからだ――意外と言うべきか当然と言うべきかゼリィは手慣れている。

「傷つくっすよねえ、いきなり大声出されちゃうと……ま、それはともかく、あーしはエヴァお嬢様の使いで来てるんですわ」

「！？」

「なんで、大声出さないで？　いいっすか？」

うんうん、とメイドがうなずいたのでゼリィはそっと彼女を解放

した――。

「キャアアアアアア！！　侵入者よぉぉぉおおおおお！！」

執事長のセバスは微笑みを浮かべてはいたがそれはどこか苦笑気味でもあった。

反対にゼリィはソファの上であぐらをかいて、頬杖をついてムッスーとしていた。

「いやはや……まさかほんとうにエヴァお嬢様からのご連絡だとは思いもよらず」

「だからってひどいっすよ。絶叫されて取り囲まれて疑われて」

「こちらも厳しい状況でございますので、どうぞご理解いただきたく」

深々とセバスが頭を下げるので、

「あー、わかったっすよ。大丈夫です。そんなに怒ってはいやせんから」

ゼリィはセバスに頭を上げさせた。

あのあと使用人たちに囲まれたのだが、ゼリィの足ならば簡単に逃げることはできた。それをしなかったのは騎士や兵士がいなかったからだ――この屋敷には武力が残されていないのだ。

セバスがやってきてようやく疑いが解けた。

約束を違えたメイドは自分で握りこぶしを頭に当てて「てへっ★」なんて言ってまったく反省していない。これがゼリィが本物の盗賊だったら刺し殺されていてもおかしくないので気をつけて欲しいも

のだ――とは思うものの「第2聖区」にあるこのお屋敷に盗賊が来るわけもないのでメイドの警戒心の低さはある意味仕方がないところでもある。

「状況はどうなってるんですか」
「その前に、お嬢様は今どちらに……」
「聖王都まで来てるっすよ」
「！　そう、ですか……やはり」

やはり、という言葉にゼリィが首をかしげる。

「……エヴァお嬢様でしたらきっと、伯爵の危機には聖王都に戻られるだろうとは思っておりました。いやはや、勇敢な方でございます」

わんぱくな孫を見守る祖父のような、娘の成長を喜ぶ父のような、そんなふたつの感情が交ざった顔でセバスは言った。

「しかしお早いお戻りでしたね。光天騎士王国にいらっしゃったのでしょう？」
「違うっすよ。レフ魔導帝国から魔導飛行船でびゅーんと」
「おお……」
「あーしなんてせっかく勝ってる賭場から引きずり出されやしたからね……あーし、この一件が終わったら絶対博打三昧の暮らしをするんだ」

レイジが聞けば「むしろ今までも博打三昧だったのでは？　あとフラグ立てるってことは実現しないってことですよ？」と言いそうなセリフをゼリィが口にすると、以前、ゼリィの素性を調べたことのあるセバスは彼女の言うことをスルーする。

「こちらの状況をご説明しますので、エヴァお嬢様に伝達をお願いいたします――」

エヴァたちがいたのは「第４街区」にある、とある商会の建物だった。

そこはかつてレイジとともに乗り込んで、奴隷斡旋を摘発した場所でもある――実のところスィリーズ伯爵家の息が掛かっている商会なのであり、なにかあったときには頼れる場所だった。

ぶくぶく太った商会長はエヴァを見ると「ひぃっ」と顔を青ざめさせたが、今はお忍びであること、エヴァがここにいることを隠すことを約束させた。真っ青な顔でうなずいた商会長は――よほどレイジが暴れたことがトラウマになっているらしい――エヴァたちを商会内に案内するとそそくさと逃げるように出て行った。

夜が更けると、騎士たちが交代で仮眠を取りながら警備をする。ダンテスたちも休めるときに休むべきだと客室を借りて眠っていた。

ゼリィが帰ってきたのはそんなときで、彼女が帰還するやいなや全員が起きて一室に集まった。

「お帰りなさい、ゼリィさん。危険な任務をお願いしてしまいましたね」

大部屋の明かりはテーブルに置かれた魔導ランプがひとつきりだった。それを囲むように全員がイスに座り、騎士たちはエヴァの背後に立っている。

「いえいえ、これくらいたいしたことないですわ。ただちょっとばかり報酬をはずんでくれりゃ言うことないっすけど」

「ゼリィ」

人差し指と親指で丸を作ってコインを作りながらぱちりんとウインクをしたゼリィに、ダンテスがたしなめるように言う。

「いえ、ダンテスさん。それだけの価値がある仕事をしてくれていますわ。事が済んだらスィリーズ伯爵家が、ゼリィさんだけでなく皆様にきちんとした形でお礼をいたします」

「おほっ」

ゼリィが露骨に喜ぶが、

「あのな、ゼリィ。これでお前、実は潜入に失敗したとかだったら許さねえぞ」

「だ、大丈夫っすよ、ダンテスの旦那。『第2聖区』まで行ってきやしたから――まず最初に、これを伝えなきゃ始まらないっすね」

「スィリーズ伯爵はご無事です」

わずかに前のめりだったエヴァの身体が少しだけ元に戻る。落ち着いて見えたエヴァも、内心は相当に焦っていたらしい――彼女がイの一番にゼリィを出迎えたほどだ。

「今はグレンジード公爵とともに行動をしているそうです」

「公爵と……」

「ええ。クーデターに手を貸した以上、全部終わったら処刑されても仕方がないと」

「……」

エヴァは膝の上で両手を握りしめるが、泣き出すことも、大声を

出すこともなかった。
この場にいる誰しもがエヴァの強さを知っていたが、これほどまでだとはみんな思っていなかった。
感情を、理性がねじ伏せているのだ。

「すいやせん、手紙でもありゃよかったんですが、証拠を残すのはマズいってことで――やっぱ伯爵はグレンジード公爵からにらまれてるみたいなんですわ。だから、セバスって執事長から口頭で聞いたことをできる限り正確に伝えやす」
「お願いします」
「クーデターを起こすことが決まったあとに、それを伯爵は知ったようです。だもんで、もう止めることは不可能で、あとは手を貸すかどうか。すでに手勢を集めていたグレンジード公爵を前に身を挺して死んでも犬死ににしかならねえからと、伯爵は手を貸すことにしたようです」
「……お父様らしい判断ですわ。公爵の懐に入って、なるべく血が流れないように動いたのではありませんか？」
「ご賢察の通りでさ。伯爵は聖女王とも通じていたもんですから、聖女王は伯爵がグレンジード公爵といっしょに動いたことを知って、抵抗らしい抵抗をせずに聖王宮を明け渡したようです」
「すると、聖女王はご無事なのですか！」
「はい。そのようで」
「……」

エヴァは力が抜けるようにイスの背もたれに身体を預けた。

「そこが、そんなに重要なんすかね？　あーしにはよくわからないっすけど」
「……うむ。聖女王陛下がご存命で、その後にもしも聖女王陛下が再度国の頂点に立つことになれば、伯爵閣下の行動を把握しておら

れた陛下は伯爵を処刑することはなかろう」

マクシム隊長が解説を入れると、「あ、なるほど」とゼリィも納得した。

「聖王都内へは大々的に告知をしていないのでしょうね。ですから、混乱が少ないのです。けれど一方で光天騎士王国はクーデターを把握している……先にそちらに連絡をしたということでしょう」

「え？　どうして他国に先に言うんですかい」

「詳細はわかりませんが、グレンジード公爵も混乱は望まないということではないでしょうか」

「クーデターやっといて混乱は望まないってのは……？」

「……すべての行動原理が『女神神殿建造』に行き着くのです。グレンジード公爵は。そのため、国内予算を大幅に変えることなく教会建造の予算を他国から手に入れるためにまず周辺国に連絡を入れたのだということです」

「はぁ……」

「わかりませんか？」

「すいやせん、あーしはどうもそのへんのことは……」

「それくらい公爵にとって重要なことなのです。神殿を建造することが……クーデターを起こしてでもやらなければいけないほどに」

「！！」

緊張が、全員の間に走った。

「わたくしたちは少し思い違いをしていたのかもしれませんわ。公爵は、なにを差し置いても女神神殿の建造に突き進みます。お父様は、もう神殿建造のサボタージュはできないでしょう。それほどまでに神殿が重要なのです」

「そ、そういうことだったんですね……あの伝言は」

「伝言？」

ゼリィはうなずいた。

「お屋敷を出るときに伯爵は、セバスさんにこう言ったそうです。エヴァお嬢様から連絡があったらこう伝えるように、と」

――私の命はおそらく無事ですが、次に会うときに私が、以前と同じ私とは限りません。公爵のように……。

神殿がひとつの魔道具であると見抜いた伯爵は、自分自身がその魔道具の影響下に置かれた場合――今のグレンジード公爵のように女神を盲信するようになるのではと考えた。

少なくとも、そうなると考えた上で行動しなければならない。

「お嬢様……どうしやすか？　伯爵は、お嬢様にこう言っているんです。命は無事だから逃げろと。今ならまだ間に合うから。せっかくこの聖王都まで来たってのに残念ですけど……」

全員の視線がエヴァに集まった。

「残りますわ」

エヴァは即答した。

「わたくしはスィリーズ伯爵の娘、エヴァ＝スィリーズ。父が孤軍奮闘しているというのに安全な場所へ逃げることなどできません。わたくしになにができるのかはわかりませんが……それでも、娘として、貴族家のひとりとして、なすべきことをします」

その言葉に伯爵家の騎士たちは誇らしげに胸を張り、マクシムは滂沱として涙をこぼした。

「お嬢様、立派になられて……」

「隊長……これから行動するというのに、泣いてどうするのです」

「しかし、止められません……」

ため息を吐くエヴァに、ダンテスが苦笑して口を挟む。

「それで、行動するのはいいですが、なにか目算がおありか？」

「……その前に『銀の天秤』の皆様には」

「もちろん参加する」

「いえ、そうではなく、皆様には離れていただこうかと――」

「あり得ませんよ。ここで引いたらレイジに怒られちまいます――ああ、いや、レイジは怒ったりしねえか。ただレイジなら間違いなく、お嬢様のお役に立とうとするでしょうから」

「レイジなら……ですか」

「ええ。まあ、スィリーズ伯爵家には無事でいてもらわないと困るってメンバーもいますしね」

ダンテスが親指で指したのはゼリィだ。報酬をもらいたい一心で彼女はこくんこくんと首を縦に振る。

それを見て、エヴァは小さく笑った。

「ありがとうございます。『銀の天秤』が手伝ってくれるのでしたらこんなに心強いことはありません」

「俺たちは冒険者ですから聖王都の中心部には入れないと思いますが、それでもやれることはやりましょう」

「――実は、ひとつ考えていたことがあるんです。それは冒険者である皆様にしかできないことです」

「？」

ダンテスと、ミミノ、ゼリィが顔を見合わせた。

「わたくしの考えたことは、こうです」

エヴァは自身の計画を話し始めた。

疑心と信心

★　聖王宮　★

「まさかこんな建物があったとは……」

スィリーズ伯爵の口から思わずため息が漏れる。

貴族として、「祭壇管理庁」という聖王宮に近い場所で働いていた身として、聖王宮のことをよく知った気でいたが、彼の知らない場所はいくつもあるようだった。

その建物はこんもりと茂る木々に隠されたところにあり、倉庫と住居を兼用したような場所だった。武器や魔道具がしまわれ、戦略地図や食料の備蓄などものものしい物品が大量にあった。

スィリーズ伯爵はここで寝起きするようグレンジード公爵に命じられていたために、外との連絡が取れなくなっている。

窓の外は夜の闇に沈んでおり、なにも見えなかった。

さすがのグレンジード公爵も実の娘である聖女王には手を出さないだろうと思われたが、実際に確認したわけではない。

「ともかく、計画書の仕上げをしなければ……集中して書類を整理するにはうってつけの場所ですからね、ここは」

広いテーブルに積まれた書類はすべて「女神神殿建造計画」に関する内容だった。

聖王都の物資、各地の物資をいかにコントロールしながら神殿を建造するかをスィリーズ伯爵が計画することになっていた。

資金は他国から引っ張ってくるとか今年の予算から捻出するとか

いろいろな意見が出ていたが、金があっても物がなければ事業は進められない。グレンジード公爵は、計画の要をスィリーズ伯爵に任せるつもりのようだ。

「……エヴァは今ごろどうしているでしょうか」

だが伯爵には多くの気がかりがあった。

娘のこと。

この国のこと。

連絡が途絶えたことで動きがわからなくなったキースグラン連邦のゲッフェルト王のこと。

お屋敷のこと。

世界がおかしくなっていくだろうこと。

そして、自分がその片棒を担いでいること。

「ふう……」

頭痛がしてくるが、すでにグレンジード公爵は走り出してしまった。

もう引き返せないところに来ている。

自分は任された仕事をするしかない。

その上で――。

「――スィリーズ伯爵」

「！」

声を掛けられ、ハッとした伯爵は部屋の隅に立つ見慣れぬ人物に気がついた。

「あなたは……」

フードを外したその姿は、小柄な男だった。口元にマスクをつけているために目元しか見えない。

「ゲッフェルト王からの使いで参った」

「……なるほど。私からの連絡が途絶えたせいですか」

「この国で混乱が起きているからだ」

すでにクーデターのことは各国首脳に伝えられている。

「ゲッフェルト王が私になにを？」

伯爵は警戒した。

聖王宮はクルヴァーン聖王国の最も深い場所にあり、警備レベルだって最上級だ。

だというのにこの男がここにいる。

（かなりの手練れ……いえ、ゲッフェルト王が持つ最高レベルの密偵かもしれませんね）

密偵、ならばいい。

（……暗殺者の可能性も）

それならば狙いは自分だ。

ゲッフェルト王と内通していたことをグレンジード公爵が知れば、きっと怒り狂うし、その怒りの矛先は伯爵だけでなくゲッフェルト王にも向かう。

ならば伯爵を始末してしまえば、露見することもない――そう考えてもおかしくないのがゲッフェルト王だ。

「……我が主、ゲッフェルト王は危惧されている。貴殿の口から余計な言葉が漏れるのではないかと」
「それは心配ありません。グレンジード公爵は私に重要な問題を任せています。これは信頼の証でしょう」
「公爵は貴殿を疑っていないと？」
「はい」
「果たしてそうかな」
「……どういう意味ですか」

意味深な言葉に警戒を深める伯爵。

「今、グレンジード公爵の配下がなにをしているかわかるか」
「……」
「貴殿の屋敷を捜索しているぞ」
「！」

驚きのあまり、伯爵の表情が強ばった。

「――公爵に捨てられた貴殿は、ゲッフェルト王にとって邪魔になる。ここで死んでいただく」

懐から短刀を抜いた男が床を蹴って伯爵に迫る。

「待て、私は――」
「どいてろぉ！」

横に突き飛ばされた伯爵は、自分のいた場所に別の人物が立ち、その人物が抜いた刃と男の刃がぶつかり火花が飛ぶのを見た。

「何者」
「それはこっちのセリフだっつーんすよ！」
男とよく似た格好ではあったが、彼女のほうが上背があり、フードが脱げたその頭にはネコミミがあった。
スィリーズ伯爵は彼女を知っている。
「銀の天秤」のパーティーにいる斥候タイプの冒険者。
伯爵が頼りにしていた少年、レイジとともに行動していた冒険者。
今は、娘のエヴァと行動をともにしているはずの――ゼリィだ。

「邪魔するならば殺す」
「はっ！　姿を見られたからにはどっちにしろ殺す気のくせに！」
「……」
話しながらも男が流れるように繰り出す刃を、ゼリィは刃で受け、ギリギリでかわそうとする。
だが男のほうが明らかに上手で、ゼリィの身体にはあっという間にいくつもの傷ができた。
止めなければ。
しかしスィリーズ伯爵に武力はない。
ならば、

「誰かおらぬか！　賊が紛れ込んでいるぞ！！」
窓の外に向かって大声を上げた。

「チッ」
「げっ、伯爵。あーしも捕まっちまいますよ――げふっ」
あわてたゼリィの腹に蹴りをくれて距離を取った男は、窓に近寄

ると、

「……伯爵、また来る」

そう言って外へと飛び出していく――。

「ウソですね？」

その背中に声を掛けた。

きらり、と伯爵の瞳に魔力が宿ったのを男は見逃していた。

「！！」

「今後、入り込めないほどに警備レベルは上がります。そうなればあなたはもう私に届かない……そして、うちの屋敷が捜索されていることもウソでしょう？」

「なにを言う。ほんとうのことだ。俺を足止めするにはたいしたことのない手だったな――切れ者と聞いていたが」

男は飛ぶように去っていった。伯爵はゼリィを近くの棚に押し込むと、入れ替わりに飛び込んで来た警備兵たちに男を追わせた。足跡が残っているので警備兵たちはすぐに信じて出て行った。

「ふう……もう出てきて大丈夫ですよ」

「や、や、やべーっすよ。なんなんですか、アイツ。もう少しであーしも死ぬとこでしたわ」

「申し訳ありません。ですが助かりました……。警備兵が追っていますが、あまり時間はないでしょうから手短に話しましょう――エヴァが、聖王都にいるのですね？」

こくりとゼリィがうなずいた。

「エヴァお嬢様は、伯爵の伝言を聞いたんですけど残るって」
「……そう、ですか。理由を言っていましたか？」
「ええ。『お父様が無策で公爵に従うはずがありません。なにか公爵の裏をかく方法を考えるはずです』ということで」
伯爵は目を瞬いた。
それから、
「ふっ……ふふ。ふふふふふ。さすがは我が娘ですね」
「お嬢様の言ったことは正しいんで？」
「ええ。私にできることをやらねばならないと思っていますよ。成功率はそう高くないですが……」
「そりゃ、よかった。あーしらも死ぬのなんて死んでもゴメンっすからねえ。それはそうと、さっきの男は……」
「私も動転してしまいましたね……ですが大丈夫です。ウソは見破れましたし、私を仕留め損なったとしても疑心暗鬼にさせて、公爵に情報を売らないように釘を刺したのでしょう」
あのとき伯爵は「審理の魔瞳」を使っていた。
伯爵邸を捜索しているというのもウソ。
もう一度来るというのもウソ――少なくともその気があっても、忍び込むのは難しいと男は判断したのだろう。
この能力があることは聖王国の上位貴族ならば知っていることだが、ゼリィや先ほどの男が知っているかどうかはわからない。
「ゼリィさん。あなたも早く去ってください。ここの警備はさらに厳しくなります」
「うへえ。あーしもかなり苦労させられたってのに、もっとキツくなるんすか」

耳を澄ますと外が騒がしい。
程なくして伯爵のところにも状況確認で何人もやって来るだろう。
「それじゃ、伯爵。最後に……こちらも動いてやすから、くれぐれも希望を捨てませんよう」
「動いている？　エヴァが、ですか」
「へい。ま、あーしら冒険者もですがね。では」
窓枠を飛び越えるとゼリィの身体は闇に溶け、すぐに見えなくなった。
「……冒険者も、動いている？」
伯爵は首をかしげた。

★　グレンジード公爵　★

「侵入者だと？」
グレンジード公爵の獰猛な目でにらみつけられた警備兵の隊長は震え上がった。
報告を受けたのは、グレンジードが目覚めたこの時間――日の出のあとすぐだ。
「は、はい。スィリーズ伯爵が狙われたようですが、伯爵が大声を上げてくださったおかげで我々警備兵が急行し、事なきを得ました」
「バカ野郎！」

「ひぃっ」
「聖王宮内部まで突破されてることが大問題だろうがッ！！」
「も、も、申し訳ありません……」

ぐしゃり、と音がしたのはグレンジード公爵の手元にあった銀製のカップが潰れたからだ。入っていた水が噴き出し、金属が傷つけたことによる出血によってピンク色になった水がテーブルを汚す。

「……ヴィクトルは無事か」
「えっ」
「スィリーズ伯爵は無事なのかと聞いている」
「も、もちろんで――あ、いえ、侵入者ともみ合いになったとかで、少々ケガをされました」
「……」
「せ、聖王陛下？」

なにも言わずに立ち上がったグレンジードを怯えた目で隊長が見たが、彼はなにも言わずに部屋を出て行った。
向かった先はスィリーズ伯爵のいる建物だ。

「ヴィクトル」
「！　これは……陛下。お見苦しいところをお見せして申し訳ございません」

殺風景な部屋で、司祭から【回復魔法】による治療を受けていたスィリーズ伯爵は上半身が裸だった。
魔法で回復したとはいえ、傷だった場所は赤く残っている。
実のところ、これは伯爵が自分でつけたものだった。ゼリィが男と戦ったが、その際に彼女は傷ついて血が飛んだ。それを拭くよりも先に兵士が来てしまったので急いでナイフで腕を切ったのだった。

「いかがされましたか。計画の進捗については……申し訳ありません、不審者の侵入で昨日はほとんど作業ができず」
「休め」
「……は？」
「今日は休め。お前の身体も大事だ」

伯爵は聞き間違いかと思った。
グレンジードの頭の中は「女神」というワードで占められているはずで、自分の身体を心配するなんてことはついぞなかったはずだ。
彼は「審理の魔瞳」で確認したがグレンジードはウソを吐いていない。

「ここの警備は倍にする。安心して寝ていろ」
「は、はぁ……わかりました」

そのグレンジードの手から、血が垂れている。

「陛下、手をケガしておいでです」
「あ？　……ああ、こんなものたいしたものでは」
「治療をしましょう」

伯爵のために来ていた司祭は今度はグレンジードに【回復魔法】を使う。

「……陛下、最近あまりよく眠れていらっしゃらないではありませんか。ご無理は禁物ですぞ」
「わかっている」

苦々しい顔でグレンジードは答えたが、彼が不眠であることは伯

爵にとっても初耳だった。

（……苦しんで、おられる？）

はた、と伯爵は思い当たった。

（娘を追い出し、聖王の座に戻るだけでも大きなストレスが掛かっているでしょうに。さらには盟友であるミュール辺境伯も聖王都を去った……）

女神のことしか言わない辺境伯とは何度も衝突し、最後はケンカ別れのようになって辺境伯は娘のミラとともに領地へと帰った。

辺境伯は、まさか自分の娘を追放することはあるまいと思っていたようだが、辺境伯がいなくなるとますますグレンジードは暴走したのだ。

そんななか、最初からずっとそばにいるのはスィリーズ伯爵だけだ。

（もしかしたら、もしかしたら……陛下には正気に戻るチャンスなのかもしれません）

不眠とストレスによって「盲信」というタガが外れかかっている。

どうすれば正気を引き出せるのか。

どうすれば――。

「陛下。聖王陛下」

そこへ、伝令兵が駈けてきた。

「緊急の伝令でございます！　聖王都『第５街区』、『第６街区』、

『第7街区』にてモンスターが発生したとみられます」
「……なんだと？『世界結合』のモンスターは、駆除が終わっているだろうが」
「しかし、取り残しがあったようで……」
「チッ。対応はどうなってる」
「聖王都警備兵が出ておりますが、なにぶん広く、手が回っておりません。騎士が動ければまだ……」
「……騎士を動かすのは状況を把握してからだ」
「は、はっ。現在は冒険者ギルドが自主的に動いているようです」

冒険者、という言葉に伯爵はハッとしたが、グレンジードはそれに気づかなかった。

「わかった。モンスター相手なら冒険者ギルドが適役だろう。金を使っていい、ギルドを動かせ」
「はっ！」

伝令兵が駈け戻っていく。

「……ヴィクトル。休めと言ったそばからすまねえが……」
「わかっております。原因究明と問題対応のために骨を折りましょう」
「頼む」

手の傷が塞がったグレンジードは、ぐっぱっと握ったり開いたりしたが、司祭が「しばらくは包帯を巻いてください」と言っても無視して歩き出す。

上着を急いで羽織った伯爵もまたそれについて歩き出した。

朝の清浄な空気が漂う森は静謐そのものだったが、しかしスィリーズ伯爵は、街で起きている異変が気になって仕方なかった――お

そらくエヴァが仕掛けたなんらかの「策略」なのだろうと思えば、なおさらだ。

★　第１聖区　大会議室　★

朝早くの召集に応じた貴族はわずか５人だった。スィリーズ伯爵をのぞけばたったの４人。これが、今のグレンジードの腹心だというのだから笑えない。

王が交代したばかりの時期に、即時即応の態勢でいるのは当然であるというのに――。

「……事件の経緯について報告しろ」

不機嫌を隠そうともせずに言うと、聖王都の警備隊長が敬礼して話し出す。

モンスターの出現は深夜に起きたという。

今は使われていない地下水道があり、そこから出てきたらしい。

同時多発的ではあったが冒険者ギルドが対応したので被害は軽微で済んだが、街は混乱している。

「ふーむ……地下水道か。どう思う、ヴィクトル」

「……はっ。確かに見落としがあってもおかしくありません。ですがモンスターはさほど多くないと思われます」

「俺も同じ意見だ。お前たちはどうだ」

グレンジードが水を向けると、残り４人の貴族は追従の笑みを浮かべて「そのとおり」としか言わなかった。

「では、モンスターが出現した地下水道近辺を調査したいと思います」
「ああ、そうしろ。騎士は動かさなくていい。――意外に早く済みそうな問題だったな」
安堵したように笑ったグレンジードとは裏腹に、スィリーズ伯爵は怪訝な顔だった。

（モンスターが出現した……たったそれだけ？　それでなにができるというのですか、エヴァ）

このタイミングでのモンスター出現、これは明らかにエヴァの仕業だとスィリーズ伯爵はにらんだが、その意図がわからない。
多少の混乱が起きたところで聖王宮にはなんの影響もないのだ。

「……どうした？　ヴィクトル。お前なにか気になるところがあるみてえだが」
「い、いえ、陛下。そういうわけではありません」
「ふうむ。お前の勘は当たるからよ。もう少し調べてみるか？」

グレンジードが言うと他の貴族たちは露骨にイヤそうに顔をしかめ――頬には「早く帰って寝たい」と書いてあった――警備隊長はおろおろする。

「では……情報をもう少々もらえますか、隊長殿」
「は、はっ。どのような情報でしょうか？」
「出現場所はどこでしょうか」

テーブルに広げられた聖王都の地図に、隊長は黒檀を削って作られた獣の駒を5箇所に置く。モンスターの出現箇所はどこも下町に

あるようだ。

（深夜に出現してもすぐに警備隊は駈けつけられませんね）

スィリーズはそう考えながら、

「モンスターの種類は？」

「はっ。チャコールウルフ、火噴き蜥蜴（ベビーサラマンダー）、迷彩大蛇（ミラージュバイパー）などだと報告が上がっています」

「それらは冒険者が仕留めたと」

「はっ」

「なるほど……わかりました」

スィリーズ伯爵は言った。

「なにがわかったんだ、ヴィクトル」

「ああ、いえ……地下水道に元々棲息したモンスターであれば水棲生物のはずですが、水とはまったく関係ないモンスターであれば、やはり『世界結合』が原因だと」

「ふむ」

じっ、とグレンジードが伯爵を見つめる。

「……なにか、陛下？」

「昨晩一斉に出現したというのはどう思う？」

「正直、わかりません。人為的なものを感じましたが、聖王都をかく乱するにもこの規模では意味がありませんし、自然棲息のモンスターを捕まえて放すことはあまり現実的ではありません。モンスターを捕獲するだけならまだしも、聖王都内に運び込むなんてことはとても」

「……まあ、そうだな」

完璧に納得したのではないようだが、グレンジードはそれ以上追及しなかった。

地下水道については追跡調査をするということで、この会議はお開きになった。

「……」

グレンジードはひとり、会議室に残って聖王都の地図を見つめていた。

「……ヴィクトルにしては冴えがねえな」

グレンジードはスィリーズ伯爵に対して全幅の信頼を置いている。彼の頭脳の冴えはこれまで何度も助けられ、驚かされてきた。

今日のように彼がなにか引っかかるところがあれば、それを掘り下げると新たな事実の側面が見えてくるのに――今日ばかりはたいした結果が得られなかった。

「俺が気にしすぎか？　あるいは、ヴィクトルが疲れているのか……昨晩、襲撃されたというしな。いや、あのヴィクトルがその程度で動揺するか？　――おい、誰かいるか」

窓の外に声を掛けると、

「はっ」

するりと木の陰からひとりの男が出てきた。

警備隊の制服を着ているが、聖王家が使っている暗部である。

「ヴィクトルはほんとうに妙な動きはしてねえんだな？」
「はっ。昨晩の襲撃は予想外でしたが、我らが追跡する前に姿を消されました……申し訳ありません」
グレンジードは伯爵の能力に「全幅の信頼」を置いているからこそ、彼を監視させている。
だがすべてを自分が用意した聖王宮内は手薄になっていた。
そこを突かれたのだからグレンジードも頭が痛い。
「それを責めているんじゃねえ。敵は何者だ。目的はなんだと思う」
「……我らは推測することを許されておりません」
「言え。お前らにしかわからんものだってあるだろう。蛇の道は蛇という」
「……そこまで仰せでしたら申し上げます。かすかに姿を見かけた者が言うには敵はかなりの手練れで、我ら聖王家暗部にもひとりいるかどうかというレベルの者です」
「それほどか」
「はっ。完璧に足取りが消えておりました」
「では……お前たちに匹敵する者。つまりどこぞの王家が抱えている暗部」
グレンジードが手を振ると、男はするりと木陰に入り姿を消した。
「……なぜ他国がヴィクトルを狙う？　俺ではなく、ヴィクトルが新政権の要だとバレているってことか？　あるいは……ヴィクトルが他国と通じていたか？」
聖王都の地図を見つめるが、そこにあるのはつややかに光る獣の駒だけだ。

「それはないな。ヴィクトルの身辺はきっちり調べておいた。もちろん、ヴィクトルなら俺の目をかいくぐることはできたかもしれんが……」

その能力が図抜けているからこそ、万全を図りたいグレンジード。

「くそっ、まとまらねえ。どうしてだ。もう少し俺の頭はまともだったはずだが……」

女神のことを考えるときは澄んだ湖のように思考がクリアになるというのに、それ以外のことは靄が掛かったようになってしまう。

「女神様……」

ふと、グレンジードは地図に気づいた。

獣が置かれてあるのは、下町ではあったがどれも大教会にほど近い場所だったのだ。

それらすべて、今は女神神殿にするべく改装が進んでいる。

「……目標は、神殿かッ……！？」

カッ、と頭に血が上る。

ただ近くでモンスターが出現しただけで、そこに論理的なものはなにもない。

だがグレンジードはこれが「答え」だと直感した。

「おい、誰か！　ヴィクトルを呼べ――」

言いかけ、口を閉ざした。

「……ヴィクトルが、これを見落とすか？　女神様の神殿のそばで事件が起きたという情報を？」

会議室に侍従が入ってきた。

「陛下、ご用でしょうか」

「ちょっと待て」

グレンジードは考える。

（ヴィクトルはあえて、俺に言わなかったんだな？　アイツが気づかないわけがない）

自分が気づくことくらい伯爵は気づくだろう、という、異様なまでに重い信頼がある。

（ではなぜ俺に言わなかった？　この程度たいしたことがないと踏んだからか？　あるいは地下水道の調査を待つつもりだったか？　どちらもあり得る。だが……アイツが叛逆しようとしていたら？）

一度疑心暗鬼になると止まらない。

「……決めたぞ」

にやり、とグレンジードは笑った。

「スィリーズ伯爵を呼べ。俺は伯爵とともに、昨晩事件が起きた場所、そして改装中の神殿を視察する！」

疑心と信心（後書き）

クルヴァーン聖王国の話題が続きますがもう少しだけ続きます。

さて、書籍版「オバスキ」ですが、大変残念ながら売り上げ不振により2巻で打ち切りとなってしまいました。

書籍を購入してくださった方、多忙のなか依頼を引き受けてくださった大槍先生には申し訳ない気持ちでいっぱいです。

すべて自分の実力不足です。ごめんなさい。

後はコミック版が出るのみとなります。

コミック版は長月先生がすばらしい画力で仕上げてくださり、コミック用に書き足したコンテンツもたっぷりあります。店舗特典もバラエティ豊富なので是非ご覧ください。

数ページ入っているオバスキプチ図鑑は長月先生が挿絵、テキストを私が執筆しました。

とてもよい出来の本です。お読みいただければ幸いです。

少女と聖王

★　「銀の天秤」　★

ダンテスは目を疑った。ここは聖王都クルヴァーニュ「第5街区」――つまり中流階級の町並みが広がっているような場所だ。そこへ、きらびやかな武装をし、警備隊に囲まれたグレンジード聖王が馬に乗って現れたのだから。

「ん？　どうしたんだべ、ダンテス」

「隠れろ、ミミノ！　お前は服が目立つ」

ゼリィ、アナスタシアはエヴァとともに別行動。ここにいるのはダンテスとミミノだけだったが――聖王グレンジードが一介の冒険者である自分を知っていることはないだろうと思いつつも、なんらかの拍子で思い出されてはかなわない。

陰で様子をうかがいつつ、ミミノには建物の――教会の裏手へと向かわせた。

「……しかしなんで聖王と伯爵が？」

ここには多くの人が行き交い、聖王に気づいて足を止める者も多い。

そして同様に、多くの冒険者もいた。

彼らは働いていた――そう、早朝にあった襲撃の後処理のためだ。

地下水道の調査は警備隊が行っているが、破壊されたがれきの処理や汚れた場所の掃除は冒険者に任されている。

「まさかとは思うが、いきなり狂言がバレたってことはねえだろうな。頼むぜ、エヴァお嬢様よ」

早朝のモンスターによる襲撃は、もちろんエヴァの「作戦」だった。

実際にはモンスターの襲撃などなかった。

地下水道の位置は冒険者ギルドが把握していたので、そこを崩落させ、モンスターと戦った痕跡だけを残した。

チャコールウルフくらいなら死体を持ち込むことができるので、新鮮なものを現場に残しておく。他のモンスターは「血」が薬剤の一部として取引されているためにそれを散らしておく。

あとは誰もいない未明に、大きな音を出せば終わりだ。

この計画には冒険者ギルドを巻き込んでいる。

聖王都冒険者ギルドは相当嫌がったが、ヴァルハラ市冒険者ギルドマスターのグルジオが長距離通信で説得に加わったからなんとか通った。

「――もうほとんど片付いてるじゃねえか」

「――はっ。本日の市民活動に支障が出ないよう急がせました！」

「――ふうん」

グレンジードと報告している警備隊長の声が聞こえてくる。

彼らは教会の前で止まる。

グレンジードが馬から降りるとスィリーズ伯爵も続き、彼らは教会に入っていく。

「おいおい……やべえぞ、これは」

改装中の教会は外壁に足場が組まれていたが、今日は、モンスタ

ーの襲撃が近くであったからということで作業者がおらず閑散としている。

それこそが「作戦の目的」のひとつだった。

今、教会内にはゼリィがいて、エヴァの手配した魔道具師を案内している。

教会にかけられようとしている魔術がどんなもので、どうすれば無害化できるかを確認させているのだ。

その上で、もし細工ができるならやってしまえ――ということだ。

そこにはアナスタシアとエヴァもいっしょにいる。かなり高価な触媒を使うこともあるので、即断即決できるエヴァがいたほうがいいだろうという思惑だった。

「クソッタレ！」

「どうしたべな、ダンテス」

教会の裏手に走ってきたダンテスに、ミミノが驚いた顔をする。

「今すぐゼリィに連絡しろ！　中に聖王が入ってった！」

「え……」

ええ――!?　というミミノの叫び声が響き渡った。

静かな教会内部では、大聖堂に多くの足音が響いていた。グレンジードが教会の司祭に改装の進み具合をたずね、媚びるように司祭は答える。

（ちょっ……どういうことっすか!?）

ゼリィ、エヴァ、アナスタシアの3人は大聖堂の2階通路からその光景を見下ろしていた。目立つからとエヴァの騎士たちを連れてこなかったが、それは正解だった。彼らがいたらとっくに見つかっていただろう。

連れてこられた魔道具師は小柄な女性で、「え？　どうして先代の聖王陛下がここに？」とわからない顔をしている。詳しい事情を説明していないので彼女もよくわかっていないのだ。

エヴァたちがここにいた時間は短かったが、それでも得られるものはあった。

魔道具師が言うには、「使われている魔術の半分以上がわからない」のだ。

これらを解明し修正するのはすさまじく時間が掛かるという。

とりあえず今日は魔術式の書き写しだけでもと大急ぎでやらせていたら、大聖堂にグレンジードやエヴァの父が入ってきたのだ。

逃げ出すにも2階からの通路は必ず教会の入口付近を通ることになる。ここで身を伏せて、危機が過ぎ去るのを待つしかない。

「――改装工事の進捗は8割ってところか？」

グレンジードがたずねると、司祭がにこやかに答えた。

「はい、さようでございます。希少な触媒がなかなか手に入らず難儀しておりましたが、スィリーズ伯爵に手を回していただいたおかげで滞りなく入ってくるようになりまして」

「ほう？　ヴィクトルが」

ちらりとグレンジードが視線を向けると、スィリーズ伯爵は目礼した。

「……」

グレンジードは少し考えるようにしてから、司祭へと顔を向けた。
「教会を女神神殿として改装することができれば、確実に女神様の恩恵が得られることだろう」
「おおっ……ありがとうございます、聖王陛下」
「俺がどうこうしたことじゃねえ、女神様に祈れ」
「もちろんでございます」
「女神様がおられる限りこの国……いや、世界は安泰だ」

具体的な神の形を持たなかった各地の教会だったが、今は聖堂のいちばん奥に祭壇が設置されてある。
そこにはどっしりとした台座があり、白い布を掛けられた石像がある。
石像は3メートルはあろうかという大きさだったが、昼の光がステンドグラスに注ぎ込み、美しい色を布に投げかけていた。

「見ろ、ヴィクトル」

グレンジードが白い布に手を伸ばすと、するりと布が取れた。
石像はすでに完成していた。
大切なものをかき抱くように両手を胸の前に重ねた女性の立像だ。
髪は長く、整った顔立ち。
白色を基調とした天然の岩石を利用している。
波打つ服のひだといい、磨き込まれた姿は非常によくできている。

「俺が拝謁した女神様はこんなものではなかったが、それでもないよりはマシだろう」
「はっ」
「一般市民には形としての神が必要だ。そうだろう？」

「おっしゃるとおりかと思います」
「なあ、ヴィクトル。俺は……お前を信じていいんだよな？」
首だけ振り返ったグレンジードの瞳には、感情が見えなかった。
唐突な質問に、一瞬答えるのが遅れた。
「……もちろんでございます、聖王陛下」
「……」
頭を垂れるスィリーズ伯爵と、なにが起きているのかよくわからず困惑している司祭や兵士たち。
「……司祭」
「は、はいっ。なんでございましょうか、陛下」
「今朝方、モンスターが暴れたようだな。ここは無事だったか？」
「はい。女神様の恩恵か、何事もなく無事でございました」
「他の教会はどうだ」
「……と、おっしゃいますと？」
「他のモンスター出没地点も教会の近くだろう」
頭を垂れたままのスィリーズ伯爵が、ぴくりと動いた。
「あ、はあ……今日の今日のことですので詳しくはわかりませんが、特に破壊されたといったことはないようです。もちろん、大事を取って改装工事は止めていますが」
「スィリーズ伯」
「……はっ」
「お前は、『モンスターの出没地点がすべて教会の近くであること』を何故俺に言わなかった？」

言葉は冷たく響いた。
事情を知らない他の者たちも、これはただならない質問なのではないかと息を呑む。

「……陛下の慧眼、恐れ入ります」
「スィリーズ伯。俺にわかることがお前にわからねえわけがねえだろう。わかりやすく言う必要があるか？」

こつ、こつ、と近づいてくるグレンジード。

「お前、このモンスター出現のことを知っていたな？」
「――知りませんでした」

顔を上げたスィリーズ伯爵は、グレンジードを真っ向から見据えた。

「じゃあ、どうして黙っていた？」
「言う必要がありませんでしたので。モンスターの出現は地下水道。たまたまそれが教会付近を通っていたというだけで、教会が近くにあったのは偶然である可能性が高いです」
「3箇所すべてでもか？」
「3箇所すべてでもです」
「……スィリーズ伯」

目の前に立ったグレンジードは一見落ち着いていた。
だがそれは、嵐の前に凪になる海原のようなものだ。

「お前には失望した。この期に及んで、女神神殿建造を阻止しようとするんだからな」
「……陛下、私は」

「黙れ。一度や二度ならば偶然や、お前に別の思惑があるのだろうと思うが、こうも女神様に刃向かうことが続くのであれば見逃せん」
「なんのことですか」
「改装に必要な希少触媒が手に入らないと司祭は言っていたな？」
「それを手配したのは私です」
「それはそうだろう、手に入らないよう手を回したのもお前なのだから」
「……」
「でなければつじつまが合わん。魔術触媒の輸出入はお前の管掌ではまったくない。だとするとお前が直接魔術の商会に圧力を掛けて『売らせた』としか考えられんが、それができるということは逆を言えば、『売らせない』こともできたということだ」
「……そのような事実はございません、陛下」
「さっきから言っているだろうが、すべてが状況証拠でしかねえ。だが、それが続けば真実が見えてくる……ああ、本来ならお前の『瞳』を使ってもらえりゃすぐ済むんだが、俺はそれに頼り切りだったようだ。こうまで考えねばわからんのだから」
「陛下」
「極めつけは」

グレンジードは人差し指を上げた――指し示したのは2階通路。
すでに少女たちは首を引っ込めていたが、

「……2階に、ネズミが紛れ込んでいる。捕らえよ」
「は、はっ！」

警備兵たちがあわてて走り出すと、2階通路に雪崩れ込んできた。

「――お待ちを、アナスタシアさん」

魔法を撃つべく構えたその手をエヴァは止める。

「ですが」

「抵抗するのはいつでもできます」

「……」

警備兵が、「動くな！　こちらへ来い！」と刃を突きつけてくるのに従い、４人は１階へと降りていく。

「エヴァ！？」

「……申し訳ありません、お父様」

スィリーズ家の親娘がこんなところで再会となってしまった。

エヴァがなにかを仕組んだことは間違いないと思った伯爵も、この場にエヴァがいるというのは完璧に想定外のことだった。

思わず天を仰ぎそうになるのをこらえる。

「なんだ？　その反応は……まさかほんとうにお前は、この教会に娘がいることを知らなかったのか？　ネズミがいるのは察していたが、俺だってエヴァ嬢がいるとは思ってなかったがよ」

「陛下、娘は関係のないことです。叛逆の罪に問うのであれば伯爵家当主である私になるでしょう」

「認めるのか？　自らの非を」

「違うと申し上げております。ですが、陛下が私を信じないのでしたらなにを申し上げても無意味でしょう」

「――そう言っているが、エヴァ嬢、なにか申し開きはあるか？　この教会に忍び込んでいた合理的な理由を説明できるなら聞いてやる」

「陛下」

「黙れ、スィリーズ伯。貴族家の罪ならばお前がかぶるのが妥当だ

が、娘の罪ならば娘自身が償う必要があるだろう」
「それは……」
するとエヴァがすっと一歩前に出た。
「――グレンジード公爵」
その呼び名に多くの人々がハッとしたが、グレンジードだけは相変わらずの無感情だった。
「まずはしばらく聖王都を空けまして、ご挨拶にもうかがえませんでしたこと、お詫び申し上げますわ。ですが、わたくしの絶対の忠誠を捧げる聖女王陛下に対する、公爵閣下の振る舞いを思えばわたくしの失礼などたいしたことはありませんね」
「……それで？　なぜここにいた？」
クーデターへの批判など無視して、グレンジードは先を促す。
エヴァは――まったく反応しないグレンジードに目を細める。
「わたくしがここにいたのは、神殿全体に施されようとしている魔術を解き明かすためですわ」
「……やはりそうか。それを知ってなんとする」
「無作為に市民に影響を与えるようなものであれば許されません」
「エヴァ！」
伯爵は声を上げるが、エヴァは止まらなかった。
エヴァが見ているのはグレンジードの反応だ。
あまりに感情に波がなさすぎる。
グレンジードにとってスィリーズ伯爵は有能な配下であり、信頼できる友のはずだ。

その伯爵の裏切りに直面しても激昂しない――あの激しやすいグレンジードが。

（すでになんらかの精神干渉を受けているはずなのだわ）

一方で、完全に精神を乗っ取られているわけではないのは先ほどのやりとりからもわかる。

グレンジードは、スィリーズ伯爵が自ら罪を告白し、許しを乞うのを望んでいるかのようだった。

「我がクルヴァーン聖王国は、種族による差別がなく、来る者を拒まず去る者を追わず、大陸一の国家であると同時に大陸一の懐深い国家であったはずです。そんな国民の意識を一斉に変えるような魔術が許されるのですか」

「！」

「あなた様が……生涯を懸けて尽くした国を、そのような魔術で汚してよいのですか。『盟約者』としての責務に縛られた苦しみは、まやかしの魔術で塗り替えてよいのですか」

エヴァがこの世界を構築する根幹に触れたのは、天賦珠玉の授与式だった。

グレンジードも自分の息子である聖王子クルヴシュラトの命を捧げることに、深く悩み、苦しんだと聞いた。

それでもなおクルヴシュラトを犠牲にすることを決意し、しかし土壇場になってルイが身代わりを買って出て彼が死んだ。

あのときの苦しみを忘れるはずがない。

（いえ……忘れたとは言わせないのだわ）

エヴァの心に今も引っかかっている事件。

もしかしたら、自分がなにかをすれば変えることができたのではないかという思い。

きっとグレンジードの心にもあるはずだ。

「まやかしの魔術などではない。女神様の……完全なる女神様の……。魔術、ではなく……。これは……神の……」

するとグレンジードの表情が歪んだ。

脂汗が噴き出し、顔が青くなる。

右手で額を押さえるとよろりと傾き、祭壇へと歩いていく。

その様子の変化にざわりと人々が動こうとしたが、スィリーズ伯爵が手で制した。

「静かに。今、なにかと戦っていらっしゃいます」

戦う、という言葉がしっくりくるほどにグレンジードは祭壇に手を突くと荒く息をした。

真打ち登場

★　教会　★

苦悶の表情を浮かべるグレンジードが、いったいなにと戦っているのかはわからなかった。
彼の心にどんな想いがあるのかも。
だが――拮抗はやがて破られる。
ふっ、とステンドグラスの光が弱まったように感じられた。
それをきっかけにしたかのように、教会の司祭が叫んだのだ。

「女神様こそ至高!!　女神様こそ唯一の信仰!!」

すると司祭の付き人たちも口々に叫ぶ。

「女神様こそが我らを救われる!」
「女神様!」
「女神様!」

スィリーズ伯爵も、彼の娘であるエヴァも、教会関係者がこんなふうに叫ぶことは想定もしていなかった。
彼らは精神干渉を受けていないはずだ。
だけれど、彼らは――信じていた。女神を信仰することこそが教会の地位を押し上げることを。
教会こそが世界に君臨する最高の権威になれることを。

「口を閉じよ!　今は聖王陛下が――」

「――よい、スィリーズ伯」

低く、唸るようなグレンジードの声に周囲は静まり返った。

声だけではなかった。

グレンジードの瞳は赤く充血し、涙が一筋――血が、一筋、目から流れていた。

額には寄生虫でもいるかのように太い血管が浮かび上がってはどくんどくんと動き、脂ぎった顔は土気色になっていた。

「くだらぬ言葉に耳を傾けるところであった。警備隊よ、スィリーズ伯、その娘エヴァ、その仲間たちを捕縛せよ」

「！！」

スィリーズ伯爵はその瞬間に悟った。

かすかに残っていた、これまでのグレンジードの自我のようなものが――消えた。

警備隊はためらいながらも縄を用意してスィリーズ伯爵やエヴァたちを縛り上げていく。

「陛下……」

なんと声を掛けていいかわからない。

もう、後戻りできないところまで来てしまったのだと、それだけを感じた。

「スィリーズ伯。貴様は我が聖王国における最優先の事業である女神様の神殿建造計画を意図的にサボタージュし、のみならず娘を使って神殿予定地を毀損しようとした。この罪は重い。死罪を言い渡す」

「……陛下」

「そんな！　お父様！！」

エヴァが声を上げたが、グレンジードは腰に吊った剣をすらりと抜いた。

芸術品のように美しい刃がステンドグラスの、七色の光を吸って輝く――。

「死ね」

スィリーズ伯爵がぎゅっと瞳を閉じた、そのとき、ステンドグラスに染みのようにできた黒い影。

振り上げられた刃。

影はだんだんと大きくなっていく。

さすがのグレンジードも「おかしい」と感じ、振り返ると――影が、ステンドグラスに激突し、内側にガラスが割れた。

「おおおおおおおおおおおおッ！！」

「――ッ！！」

とっさにグレンジードはそちらに剣を振るったが、その人物は空中で身体をひねると剣の軌道をかわし、靴底をグレンジードの額に向けた。

ゴツッ、という音とともに蹴りが入ると、グレンジードは真後ろに叩きつけられるように倒れ、侵入者は【風魔法】を発動しつつふわりと着地する。

「女神の使徒がこんなところにいるなんて……って、あれ！？　グレンジード公爵！？」

その侵入者は、黒髪黒目の少年は、ぎょっとしたように叫んだ。

★

「女神の使徒」、という言葉はずばりそのままの意味だ。女神のために生き、女神のために死ぬ。それを無上の喜びとする者のことらしい。

僕が「女神の使徒」だと知って攻撃を加えた相手はグレンジード公爵だった。

仮にも一国の王だった人に蹴りをくれて、背後にブッ倒して、気絶させるなんて――こ、これ、もしかしなくとも不敬罪で死刑だよね？　不敬どころか反逆罪？　どっちにしてもヤバイ！

「……あれ？」

僕が降り立ったのは教会のど真ん中、よく見るとすぐそこにスィリーズ伯爵がいて――この人のぽかんとした顔は初めて見たかもしれない――しかも縛られている。

その向こうには多くの兵士と、

「お嬢様！？　それにアーシャ、ゼリィさん――」

「ナイスぅ！　坊ちゃん！」

ゼリィさんが縛られているというレアな光景を目撃したのだけれど、それも一瞬のことで、ゼリィさんは袖に忍ばせていた隠し刃でロープをぶつりと切ると唖然としている兵士たちの間を縫うように走る。

剣帯を切って走れば吊り下げられていた剣が落ち、兵士たちは混乱する。

「はあああああッ！」

アーシャはと言えば縄を【火魔法】で焼き切って、エヴァお嬢様、スィリーズ伯爵の縄も同様に焼き切っていく。

このときになると兵士たちも一斉に動き出す。

「へ、陛下！？」

「侵入者を討て！」

「逃がすな！！」

「坊ちゃん！　一発ぶっ放して！」

ゼリィさんが教会の入口に到達して、ドアを開け放つとこちらに手を振る。

「あ、はい」

なにがなんだかわからなかったけれど、僕は【風魔法】を両手で展開した。

ゴォッ――と暴風が吹き荒れ、スィリーズ伯爵、エヴァお嬢様、アーシャ、その後ろにいる小柄の人から教会入り口までを無風にし、兵士たちを左右に吹き飛ばす。

中には【風魔法】で抵抗しようとした兵士もいたけれど、強引に魔力でねじ伏せた。

「・・・・・！？」

「・・・！！」

「・・・・・・・・・！！！！！」

密閉された空間だと風のコントロールが難しい。

兵士たちは柔らかな顔の表面を引きつらせ、まぶたがまくれ上がり、頬が膨らんで唇の横からヨダレを垂らし、なんとか踏ん張ろうとするが動けない。

「・・・・・・!?!?!?!」

空気の逃げ道である教会入口にいるゼリィさんの顔も大変なことになっているし髪の毛は全部逆立っていたが、見なかったことにしよう。

「逃げましょう！　……で、いいんですよね？」

「助かります、レイジさん。ですが」

「――伯爵？」

スィリーズ伯爵は教会の入口ではない、逆へと歩いていく。

そこにあるのは砕け散ったステンドグラスと、落ちた剣と、倒れ伏したグレンジード公爵だけだ。

伯爵はグレンジード公爵の横に落ちていた剣を、手にした。

「……お父様。お父様ぁあああああ！！」

エヴァお嬢様が絶叫する。

その直後、伯爵は剣を振り下ろした。

剣の切っ先がグレンジード公爵の首を斬る――寸前、剣が跳ねた。

熱いものにでも触れたかのようにスィリーズ伯爵の手も上へと上がり、指から離れた剣は遠くへと飛んでいく。

「な、なにが……」

「伯爵！　逃げますよ！！」

「あ、ああ……」

呆然とする伯爵の背中をつかむとぐいと引いた。
明らかに、ほっとしたようなお嬢様だけでなくみんなが一斉に走り出す。
ふらふらしている、誰だかわからないもうひとりの女性だけは僕が両腕で抱えて走る。
暴風に煽られて転がり出ていたゼリィさんの後に続いて僕らが続く。
【風魔法】を切って扉を閉じると、【土魔法】を展開して扉を塞いだ。

（どうして、伯爵はグレンジード様を殺そうとしたんだ……？　それにあの、弾けるような障壁は……）

そうして――僕らは逃亡した。

教会を出ると数人の兵士が待機していたのだけれど、彼らはすでにツタで縛られて転がされていた。

「レイジくん！　こっちだべな！」
「ミミノさん！」

警備隊の馬を強奪したらしく、それに飛び乗って僕らは走り出す。
お嬢様もアーシャももちろん乗れる。
ゼリィさんは僕が抱え出した女性とともにどこかに消えていたけれど彼女なら問題ないだろう。
ただ――ミミノさんだけは背が低く馬に乗れておらず、僕が手を伸ばすとそれにつかまった。彼女を引き上げて僕の前に座らせる。

「あ、ありがとう！」
「ていうか、どっちへ逃げれば！？」
「聖王都を出ます」

僕の叫びには伯爵が即座に答えた。
先ほどの動揺から一転して、冷静さを取り戻している。

「アテがあるのですか」
「そうです。――レイジさん、前方を蹴散らしてください！」
「！！」

聖王都を出てなにがあるのか、とか、そもそも今はなにが起きてどうなっているのか、とか、聞きたいことは山ほどあったけれどそれは後回し。
前方は柵でバリケードが組まれており、１０人程度の兵士がいた。

（なんだなんだ。逃げられることも想定して防衛線が張られてたってこと？）

僕が【土魔法】で地面を隆起させ、バリケードを破壊しようとするとそれに対抗するように【土魔法】が掛けられ、一瞬拮抗する。

「ここはわたしの出番べな！」

僕の前に座っているミミノさんが魔法を展開する――それは【花魔法】だ。
バリケードに使われている木々がにょろにょろと伸びて兵士たちに巻き付いていく。
魔法使いの集中力が途切れたのだろう、僕の【土魔法】が勝って

地面の隆起とともにバリケードや兵士たちが左右に流されていく。
ゴッソリえぐれた地面を、馬が跳んで渡っていく。

「伯爵家の急ぎの使いだ！　どけどけどけぇ！」

【風魔法】にのせて大声を発すると、ハッとした往来の人たちがどいていく。
僕らはその調子で各街区の門を抜けて聖王都の郊外へと脱出した。

「はぁ、はぁ、はぁっ……」

全員、疲労困憊という体ではあったけれどここにぐずぐずしているわけにはいかない。

（なんせグレンジード公爵……先代聖王に危害を加えた犯人がここにいるんだから）

えっ、もしかして悪いのって僕だけ？
いや、そうするとスィリーズ伯爵が逃げることの意味もわからないし、なんかロープで縛られてたし……。

「……皆、こちらです」

伯爵に連れられて向かったのは、さらに馬を出して1時間ほどの距離にある――森だった。

森の内部には小さな小屋があり、手入れがされているのか清潔だった。

隠し棚があって、そこを開けると遠距離通信用の魔道具が鎮座している。
スィリーズ伯爵はそれを使う必要があるということなので僕らは小屋の外で待機することになった。

「――レイジ！」
「レイジさん！」

右からお嬢様、左からアーシャが僕に飛びついてくる――正確にはお嬢様はぎりぎりのところで止まって、貴族の令嬢らしく微笑んだのだけれど、アーシャはタックルするように僕にぶつかってきた。

「レイジさん、レイジさん、レイジさん……ご無事だったのですね……！　うっ、うぐっ、うわあぁぁぁっ……」
「アーシャ……」

こらえきれないというように泣き出した彼女の肩に、そっと手を載せた。

「……ごめんなさい、しばらく留守にしました」
「い、いいのです、ただ、レイジさんがご無事だったのなら、それだけで……」

ぎゅううと強く強く抱きしめられる。
どうしよう。
アーシャってこんなに情熱的な子だったっけ。
いや、こういうところもあったね。あったよね。

「……レイジ」
「ハッ」

凍えるような声が聞こえたと思うと、それはもちろんエヴァお嬢様のものだった。

「ずいぶんと親しそうなご関係なのだわ？」

「お、お、お嬢様っ、これは……！」

怖っ！　完璧な笑顔なのがまた怖い！

お嬢様、貴族として立派になられて……じゃなくて怖いよ！

「レイジくんはモテモテだべなぁ」

「ミミノさん……からかわないでください」

「あははは。アナスタシア、エヴァお嬢様も、今はなによりもお互いの情報交換と、これからどうするかを決めるときだべな」

「……それは、はい」

お嬢様が渋々うなずいたが、アーシャは離れない。

「アナスタシア」

「……う、はい」

ミミノさんに重ねて言われるとアーシャはのろのろと僕から離れた。

その瞳は濡れていたけれど、僕に背を向けるとハンカチで目元を押さえる。

「――お帰りなさい、レイジさん」

振り返ったアーシャに言われ、僕はお嬢様を見て、ミミノさんを見て。

「ただいま戻りました」

少しだけ、気持ちが落ち着いたのだった。

ちなみに、ここにいるのはお嬢様とアーシャ、ミミノさんだけだ。さっきいたもうひとりが魔道具師だということだけれど、彼女はゼリィさんが手引きして逃がしたようだ。今回のゼリィさんは有能だな。

あとダンテスさんもいると聞いて、無性に会いたくなったけれど、ダンテスさんはお嬢様の護衛騎士であるマクシム隊長たちとともに聖王都内にいるのではないかということだった。

今日のことをマクシムさんに伝えなきゃいけないし。

なんとかして合流できればいいんだけど。

「今までのことを話すのだわ」

それから僕はなにが起きていたのかを聞いた。

行方不明になった僕を捜すためにお嬢様が国を出てレフ魔導帝国まで向かったこと。

クルヴァーン聖王国でクーデターが起きてグレンジード公爵が再度聖王を名乗ったこと――つまり僕は現役聖王陛下に蹴りをくれてしまったわけだ。

（……これ本格的にヤバイやつでは。ん、でもグレンジード公爵はクーデターを起こした悪人だし、セーフなのか？　でも先代の聖王であることは間違いないし……）

僕がそんなことでくよくよ悩んでいると、お嬢様の説明は先へと進む。

お嬢様が聖王都に戻り、教会の女神神殿改装を阻止しようとしたところ、グレンジード公爵にバレて捕まった。
そこへ僕が飛び込んで来たと……なるほど。

「それで、レイジはどうしてあの教会に？　それに今までどこに？」
「今までいたのはお嬢様の推察通り未開の地『カニオン』でしたね。あそこを出られたのはほんとについ最近で……それで教会に飛び込んだのは、グレンジード公爵が『女神の使徒』になっていたからです」

使徒について少し説明をした。

「レイジはその、『女神の使徒』がどこにいるかわかるの？」
「いえ、実は僕ではなくてですね――これはステンドグラスを割って入ってきたことにもつながるのですが」

と言いかけたときだった。

「――皆さん、少しお話があります」

スィリーズ伯爵が小屋から出てきた。
その表情は緊迫している。
自然僕らも無言になり、伯爵のそばへと近づいた。

「実はここは、ミュール辺境伯と連絡する手段として残しておいたものです」

ミュール辺境伯……グレンジード公爵の盟友で、熊の毛皮をかぶっていたあの人だ。
娘のミラ様はエヴァお嬢様と仲良くしていたっけ。

「辺境伯はいまだ領地に戻っておられず、ふたつ隣の領地であるエベーニュ公爵家に滞在しています。エベーニュ公爵は聖女王派です」

エベーニュ公爵はミミノさんと同じハーフリング種族で、腹黒の当主とは裏腹に、息子のエタン様は純朴そうな方だった。

僕がお嬢様の護衛を辞めて聖王都を出るときに、兵士を率いてきたときっきりだけれど、元気かな？　あのとき捕まりそうになったことには恨みとかはあんまりなくて、むしろ僕がやり過ぎて兵士さんたちをたたきのめしてしまったし、親の命令に従わざるを得なかったエタン様にはちょっと同情しているくらいだ。

「他の公爵家がグレンジード様を推しているので、エベーニュ公爵はなぜそのような動きになったのか独自で調べておられて……ようやく、その情報の一端がつかめたようです」

「お父様、なにがあったのですか。５大公爵家が聖女王を裏切るというのはよほどのことだというお話でしたよね」

「はい。グレンジード様はクーデターが成功した暁には公爵家の数を半分にし、その利権をすべて渡すと言っていたようです」

「……なんと。忠誠心を、利権に替えたのですか」

「それほどに公爵家の力は大きいということです。単純に力が倍になるということではなく相乗効果もあり、さらには公爵家が減ることでその発言力も高まる。大きな権力を持てることでしょう」

「その約束をあきらめさせることができるのでしょうか」

「いえ、その手の攻略はあきらめたようです。代わりに……エベーニュ公爵はミュール辺境伯、ルシエル公爵と手を組みました」

ルシエル公爵は５大公爵家のひとつであり、エベーニュ公爵と同様に聖女王を裏切らなかった公爵家だ。

「聖王都を、再度奪還するために挙兵します」
「！！」
お嬢様が固まる。
戦争――いや、伯爵たちは内戦を決意したということだ。
「……勝算はあるのですか」
僕の問いに、ハッとしたようにお嬢様がこちらを見る。
お嬢様はひょっとしたらなんとかして戦いを避ける方法を考えようとしたのかもしれない。だけれど、内戦は最終手段だ。ここに至るまでにいくつもの選択肢を考えては消していたはずだ。
であれば――もう、やるしかないのだ。
「あります」
伯爵はうなずく。
「……レイジさん、あなたにはやるべきことがあるのでしょう？」
「はい」
僕は迷いなく答えた。
それは――この世界を元に戻すこと。
「世界結合」以前に戻すということじゃない。
女神による精神干渉や監視が完全にこの世界を覆う前に、そんなものがない世界にすること。
女神は神殿を通じて精神干渉や監視を行っていることは、ここに来る前に聞いた。
僕の思いを伯爵がどこまでわかっているのかは知らないけれど、

「レイジさん、その前に少しだけ、力を貸してくれませんか。あなたの力が必要です」
「わかりました。もちろんです」

僕は請け合った。
僕の目的を果たすには、女神神殿がひとつでも少ないほうがいい。
スィリーズ伯爵は小さく息を吐いた。
心底――助かった、とでもいうふうに。

「聖王宮から聖女王陛下を連れ出してください」

依頼はなかなかに、難しいものだった。

真打ち登場（後書き）

いよいよコミカライズ1巻が発売となりました！
ページ←にリンクがありますので是非ご確認ください。
それとＹｏｕＴｕｂｅに紹介マンガを掲載してもらったので、未読の方はそちらからも是非どうぞ。

聖女王の命

スィリーズ伯爵は教会から脱出するときに、真っ先に聖王宮に向かい、聖女王陛下を連れ出すことも考えたらしい。だが、その後どうするかの計画がなかった。

反対派もいるとは言え、聖王都はグレンジード公爵が押さえている。聖王都で動員できる兵士に対抗できなければほどなく聖女王陛下とともに伯爵は捕まってしまうだろう。

だが、5大公爵家のエベーニュ公爵とルシエル公爵、それに聖王国きっての武闘派であるミュール辺境伯が動くことがわかった。

他の公爵家は静観を決めるよう働きかけている。

これで聖女王陛下さえいればグレンジード公爵と戦えるというわけだ。

――ほんとうなら、教会でグレンジード様を殺せていればよかったのですが。

苦しそうに、悲しみを吐き出すように伯爵は言った。

これまでの経緯を聞くに、確かにそれがいちばん簡単で、手っ取り早い解決方法だったのかもしれない。

だけれど――そうなればきっと伯爵はずっとその罪を背負うことになる。

あるいは、この騒動が落ち着いたら自ら命を絶つくらいのことは考えているのかもしれない。

（……そんなのは、イヤだな）

だからと言って、グレンジード様が目を覚ます方法は思いつきも

しないのだけれど。
あのときスィリーズ伯爵がグレンジード様を斬ろうとしたときに弾かれたのは――僕の【森羅万象】でもわからなかった。
なにか物理的なバリアがあったという感じでもなく、磁石の同極が反発し合うような印象だった。
（イヤな感じだ）
僕は【森羅万象】に慣れすぎたのかもしれない。わからない……というよりなんの情報も得られないものがあると必要以上に不安な気持ちになる。
「――坊ちゃん」
夜はすっかり更けており、建物の陰にいる僕のところにやってきたのは暗い色のフードをかぶったゼリィさんだった。
スィリーズ伯爵の依頼を受けて聖女王陛下を連れ出すために僕は単独で聖王都へと戻っていた。
冒険者ギルドでダンテスさんと再会し、ダンテスさんにはマクシム隊長たちとともにエヴァお嬢様のところへと向かってもらった。
そして僕はギルドを通じてゼリィさんに連絡し、こうして行動を共にしているというわけだ。
「いやぁ、坊ちゃんったらあんな派手な登場をして、男前が上がりましたねぇ……懸賞金の額も上がっちゃったかもしれませんよ？」
「ちょっ、不吉なこと言わないで！」
「すでにスィリーズ伯爵とエヴァお嬢様には懸賞金が掛かっていますから」
それは僕も冒険者ギルドで聞いていた。だけれど「銀の天秤」に

は追っ手が掛かっていないので、グレンジード公爵は飛び込んで来たのが僕だったかどうかすら認識できていないようだ。

「ゼリィさん、道案内お願いします」
「はいはい。人使いが荒いんだから、もう」
「……」

あれ？

「ん、どうしやした、坊ちゃん」
「あ、いや……文句言う割りにゼリィさんがなんかうれしそう？だから」
「へっ！？」

ぴんっ、とゼリィさんの尻尾が立つ。

「べっ、べべべべ別に坊ちゃんが生きてるのがわかって安心したとかそういうんじゃないっすよ！？」
「僕のこと心配してくれたんですか？」
「そういうわけじゃ！」
「え、心配しなかったんですか……？」
「そんな捨てられそうな子犬の目を！？　し、心配しなかったわけじゃないっすよ。そりゃ、あーしがお金を借りてる相手ですから、死なれたら困るじゃないっすか！」

逆でしょ。借りてる相手が死んで借金がうやむやになったら大喜びするタイプの人でしょ、あなた。

「……ゼリィさん、前方に警邏隊」
「あいあい、ラクショーっすよ。とりあえず、聖王宮まではノンス

トップで行きやすよ……ついてきてください」

不法侵入についてやたら心強い言葉を聞けた。

僕はゼリィさんについて夜の街を駈ける。ゼリィさんの手引きと僕の魔法があれば簡単に聖王宮にたどり着くことができた。

「この先なんすけど……まず、聖女王陛下って方が誰なのかあーしにはわからないのと、中の地図とかがないもんで、道案内ができないのが問題っすね」

「問題しかないね。……でも、手がかりはある」

僕は聖女王を見つけられるだろうと思った。

「手がかりっすか？」

「うん。簡単なことですよ――いちばん警備が厳重なところから調べていけばいいんです」

★　クルヴァーン聖王国　聖女王　★

聖王宮内が騒がしいことには気づいていた。

聖女王は聖王宮の最奥とも言うべき場所にいたが――閉じ込められていたが、それでも、外や通路を行き交う人々の様子を見ればわかることも多い。

（……昨日は侵入者があったという連絡があったが、今日はなにもない。だがこのざわめきは、侵入者の余波ではなく……また別のもの）

聖女王は私室の寝台に座って考えていた。
部屋の入口には屈強な兵士が2名。部屋を囲むように10名の兵士、それに中庭や屋根の上には暗部が配置されているはずだ。
今日の午前に侵入者の話があり、警備兵が増員された。
そして夕方にまた増員されたのだから――「別の事件」が起きたに決まっている。

（お父様は、今日も来られない……）

ふう、と小さく息を吐く。
聖王が生きている間に次の聖王へ、譲位することは過去にもあったけれど、それはこんな激動の時代ではなかった。
だが聖女王である彼女は楽観していた。
父を尊敬し、父と話し合うことで解決できるだろうと思っていたからだ。

（だというのに、会話すらしてくれないとは……）

クーデターを起こされたことも意外だったし、その後になんの話し合いも持たれないことも不可思議だった。
聖女王の兄である、聖王太子、それに弟のクルヴシュラトは聖王都を落ち延びているはずだが、連絡を取ることもできない。

「まったく、父様はなにをお考えなのか……」

自分がこうして生きている以上、必要以上の血を流そうとは思っていないらしい。
だけれどなにを考えているのかさっぱりわからない。
これまでは、意外な行動に出ても、すぐにその理由を教えてくれたりなんとなくわかったりしたものなのに。

情に厚く、時に感情的になるのは聖王としてさほど悪いことではないと聖女王は思っている。
むしろ国民からは好ましく見えているだろう。
それだけに――今回の状況は、まったく意味不明だ。

「――かなり、深いところまで心を操られているようです」
「！？」

自分が口にした疑問に答えるような言葉にぎくりとしたが、それでも彼女は声を上げることはなかった。

「……お前は、レイジか？」
「ご存じでしたか」

いつやってきたのか、室内にひっそりと立っている少年は黒髪黒目だった。
聖女王が即位するきっかけとなった「一天祭壇」での調停者との戦い、それにウロボロス出現による聖王都の破壊、これらを止めた立役者こそがレイジだ。

（そして……その後、「黒髪黒目」であるという理由だけで、この都を追われたのもまた、彼）

エベーニュ公爵家など古い家柄の貴族は、レイジを排斥するよう強く申し出て実際そういった行動に出た。
結果として追っ手は返り討ちに遭い、レイジは聖王都を離れた――それは聖女王にとっても、思い返すとほろ苦い出来事だった。
父のグレンジードは大いに後悔し、「救国の英雄」であるレイジをいつか厚遇したいと漏らしていたが、なかなかちょうどいいタイミングがなかった。

そんなレイジがなぜここに？

「ッ」

はっ、として天井を見上げた。そこにはこの部屋を監視する暗部がいるはずで――、

「上の人たちは制圧しました。外の人たちには手を出していません、目立つので」

「な……」

あっさりと言われたが、にわかには信じられなかった。だが、天井に張られた板がパカリと開いて、そこからネコミミ獣人の女性がにょっきりと顔を出せば――見たことのない顔だからきっとレイジの仲間なのだろう――天井裏はすでに彼らの手に落ちたことがわかる。

「はは……どうやら余が考えているよりもずっと、お前は強いのだな」

肯定するでも否定するでもなく、レイジは小さく会釈だけした。その余裕ある姿こそが彼の強さを物語っているように聖女王には感じられた。

「それで、要求はなんだ？」

「スィリーズ伯爵がお待ちです。ついてきていただけますか」

「……血が流れることは避けられぬか」

「！」

聖女王の言葉に、今度はレイジが驚いたようだった。

「エベーニュ公爵、ルシエル公爵あたりがスィリーズ伯を後押ししているのだろう？」
「そ、そこまでご存じでしたか……」
「だが、余は聖王都が血に染まることを望まぬ」
それを避けるために父であるグレンジードのクーデターを許したのだ。
言うなれば父娘（おやこ）ゲンカの範疇だと思っているし、その結果、多くの人間の血が流れるなどもってのほかだ。
「……陛下、お言葉ですが、もはや事態はのっぴきならぬところまで来ております」
「ならば余を殺せ」
「は？」
「余が死ねば、父は多少なりとも冷静さを取り戻すであろう。それでも冷静さを欠いたままであれば、お前が父を殺せ。ここまで忍び込むことができたお前ならばそれも可能だ」
「……」
レイジが苦悶の表情を浮かべている。
まさかこんな展開になるとは思っていなかったのだろう。
聖女王は死ぬ覚悟はとっくにできていた。父に殺されることも十分あり得たが、そうなるとその後の聖王国運営において血塗られた歴史ができあがってしまい、問題が生じる。できれば違う形で自分の命を使いたいと思っていた。
幸い、兄は優秀だ。クルヴシュラトももう何年かすれば兄を支えることができる。
自分がここで死ぬことで、父を取り戻せるのならばそれでいい。

「……お言葉ですが、陛下、できません」

レイジという少年は聡い。

聖女王の覚悟をはっきりと理解した上で、そう応えている。

本気で言っていることもわかっているのだろう――天井から首を出しているネコミミ獣人も顔を半分隠してぶるぶる震えている。

「人を殺すのは怖いか？」

「そうではありません……いえ、そうかもしれないけど」

「余が、ここを去れば父はさらに暴走する。公爵たちが兵を集めていることが知れれば、内戦になる。とどのつまり、お前はひとりを殺すか、大量の兵士を殺すかのいずれかを選ぶことになろう」

「……」

酷な選択を迫っていることはわかっている。

だが、この少年にしかできないのだ。

「……やっぱり、できません」

首を横に振る彼に、かすかな失望を感じた。

これが、自分の命を使える最後のチャンスではないかとすら聖女王は思っていたのに――。

「僕は、どっちも選びたくありません」

「レイジ……そんなワガママが通るような状況ではないのだ」

「通します」

「――なんだと？」

「聖女王陛下にお願い申し上げます。時間稼ぎをしてください」

「じ、時間稼ぎ？」

彼女は耳を疑った。
いったい、彼はなにを言っているのか。
単に人を殺すという罪を逃れたいだけではなかったのか。

「あなた様をここから連れ出します。そしてスィリーズ伯爵とともに別の領地へ逃げてください。そうすればそちらの警戒をしなければならず、グレンジード公爵の動きは鈍ります」
「それは……そうかもしれぬが、結局は聖王都近郊での会戦は避けられまい」
「でも、それは数か月後です。あるいは半年とか、1年後」
「なにが言いたいのだ。時間を稼いでなんとする」

すると少年は、決然として言った。

「その間に、女神を斃(たお)します」

それは無謀で、不明瞭で、非合理的な提案だ。
だが彼はそれを信じ切っており、必ず成し遂げるのだという意思を感じた。
父が女神によって精神汚染、あるいは洗脳されている可能性については聖女王も把握している。だがそれを解除する方法は、いくら調べさせてもわからなかった。スィリーズ伯爵も、「まずは女神神殿建造を阻止」という場当たり的なアイディアしか出せなかった。
女神を斃す。
神を殺す。
できるものなら――と思いつつも、それこそグレンジードを正気に返らせるよりも難しいことであるのは間違いなかったし、検討すらできなかった。

「……できるのか」

少年は、うなずいた。

「どうやって」

「ブランストーク湖上国の教皇聖下が今は女神の依り代になっているようです。その彼女を通じて、女神を現世に降ろし、それを討ちます」

「教皇を殺せばいいということか？」

「いえ……教皇の生死はおそらく関係ありません。その先にいる女神を討てればいいのです」

「そんなことが可能なのか？」

「可能です。おそらく、僕でなければできないことです」

なぜ、彼にしかできないのか、なぜ、教皇と女神の関係性を知っているのか――疑問は尽きない。

だが聖女王がやるべきことはたったひとつだ。

「……時間稼ぎ、か。そんなものを頼まれたことは生まれて初めてだ」

「そ、それは……すみません」

この少年を信じるかどうか。

信じるのならばその未来のために自分の命を使えるかどうか。

今ここで決定すること。

「任せてくれ。半年だろうが1年だろうが、いくらでももたせてみせよう」

「えっ」

「お前を信じる。我が命、そして、聖王国民の命を託すぞ」

「そ、それは重いですね……」

途端に気弱そうな顔を見せる少年に、

「ふっ、ふふっ……ふふふ」

「陛下？」

思わず笑ってしまった。

（どうかしている――この少年にすべてを託してしまうなんて。いや……自分が今死んだところで、この先が明るいかどうかなどわからなかった。後始末を兄に押しつけるだけだったかもしれない。結局のところ、自分の未来は自分で決めねばならぬということか）

不安もあるし、この選択でよかったのかという迷いもある。

だが、気持ちはせいせいしていた。

「さ、どこへでも連れて行け」

「はい――失礼します、陛下」

少年は聖女王に近づくと、その身体を抱きかかえた。

小柄な少年よりも自分のほうが背が高いというのに、彼は軽々と彼女を持ち上げ、そして外された天井へ向かって跳躍するとひらりと天井裏へ移り、あっという間に屋根の上へと移っていく。

その手引きをしているのが猫系獣人で、そこいらに気を失った暗部が転がっていたが――それほどまでにこの少年と、手練れの聖王国暗部の実力差はあるのかと聖女王は改めて驚いた。

「行きます。しっかりとくっついてください」

「うむ。なかなかたくましい身体だな」

「っ！？　ご、ご冗談を……」

「ふふ」

まるで少女に戻ったような気持ちで、抱えられながら夜の闇を駈けていく。

音もなく、まるで風になったかのようだった。

信じられないことに警備の兵士に誰ひとり気づかれることなく聖王宮を抜けると、ペースを落とすことなく進み、空が白むころには聖王都を抜けていた。

森小屋でスィリーズ伯爵と合流するが、レイジはそのままブランストーク湖上国を目指すという。

彼の仲間はすべてそろっていた。

聖女王が驚いたことには、スィリーズ伯爵の娘も、レイジについていくという。よくも伯爵が許したなと思っていると、

「――事ここに至れば、世界のどこにいても危険は同じです。私は娘の気持ちを尊重します」

と言う。

「そうか、余も立場が違えばそうしたかもしれぬな」

「……は？」

「なんでもない、忘れよ」

小さく笑って、手を振った。

朝焼けに染まる森で、黒髪黒目の少年とは別れた。

これから行く場所は違えど、同じ目標を目指すことになる。

世界を取り戻すために、女神を斃すという目標だ。

聖女王の命（後書き）

新しくレビューもいただきました。ありがとうございます！

ｙｏｕｔｕｂｅで公開されている漫画についても←にリンクを貼りましたので是非お楽しみいただければと思います。

ｇｏｏｄ評価もありがとうございます！

ふー……緊張した。
さすがに一国のトップともなると纏っている雰囲気が違うよね。
まさかあそこで「余を殺せ」と言われるなんて思わなかったよ。
話し合いがうまくいって、最後は聖女王陛下も死なないことで納得してくださったけど……僕は思う。自分の命をなげうってなにかしようっていうのはほんとうによくないって。

「出発準備は整ったぞ」

ダンテスさんが言った。
朝日がゆっくりと昇り、僕らは森から街道へと出ていた。

「だけどな、レイジ。魔導飛行船のあてはあるのか？」

ダンテスさんが疑問に思うのは無理はない。
この先、陸路で進むにしても大陸の中東部から西部へと向かうことになるからだ。
馬を使っても3か月は優に掛かるだろう。

「その前に――ダンテスさん、それに皆さん。改めてお話があります」

僕は全員を前に言った。
「銀の天秤」からはダンテスさん、ミミノさん、ゼリィさん、アーシャ。
クルヴァーン聖王国からはエヴァお嬢様、マクシムさん、それに

騎士が４名。

「僕はこれから、ブランストーク湖上国を目指そうと思っています――そこにいる女神を討伐するために」

「……その話はなんとなく聞いていたがな。神様を倒すってのはどうなんだ？」

聖女王陛下には見得を切って話したことだったけれど、そう言われてもみんなには「？」という感じだろう。

大体みんな、女神を直接見ていないのだし。

「まず、僕の推測から聞いていただけますか。あの女神は、神ではありません」

「なっ……」

「神とは、そもそもなんなのでしょうか」

「？？」

僕が逆に質問するとダンテスさんは首をかしげる。

「――神とは、地上に住む我らに恵みを与え、魂を救済するものだと聞いたべな」

ミミノさんが小さく手を挙げて答えた。おそらくそれは教会の教えなのだろう。

「そうですよね。その神は、どんな形をしているのでしょうか」

「んんん？　神に形はないんじゃないか？」

「ええ、僕もそう思います。つまり女神は女神であるがゆえに神ではないのです」

「お、おいおいレイジ。ますますわかんねえぞ。俺にもわかりやす

く話してくれ」

降参とばかりにダンテスさんが両手を挙げる。

僕の代わりに口を開いたのはエヴァお嬢様だった。

「女神という存在は実際に形があり、各種族……『盟約者』たちを呼び出したと聞いたのだわ。その姿は神々しく、思わず跪いてしまったほどだと。つまり、この世界を調和する神が実在するのなら、そんなふうに出てくることがおかしいということね？　神は魂を平等に扱うべきだし、代表者の前だけに姿を現したり、自分を崇めるような神殿を建てさせたりはしない……つまり、この世界に干渉しすぎなのだわ」

「おっしゃるとおりです、お嬢様。女神が創り出したという『盟約者』、『調停者』、『天賦珠玉』……これらのシステムこそが『女神が神ではない』ことを示しています。ほんとうの神なら、そんな後付けのシステムを使わなくとも世界を救えるはずですし、あるいはシステムなしで人類が滅亡するのだとしてもそれを放っておくのが神です」

僕が言うと、みんな考え込むように黙ってしまった。

ややあって、アーシャが言う。

「ですが、レイジさん。世界をふたつに分けたり、『天賦珠玉』を創り出す存在であればそれは神と呼んでも差し支えないのではないでしょうか？」

「そうですね、この世界に生きる者からすれば超越した力を持った存在だと思います。でも、今わかっている範囲だけでも、あの女神にはできないことがあるんです」

「えっ」

「まず、世界が崩壊しようとしたときに、世界をふたつに分けるこ

とで解決しようとしました。つまり、世界を救うほどの力は持っていないんです。大体、『世界の崩壊』とはなにを意味していると思いますか？」

「それは……なんでしょう。生きとし生けるものがすべて滅んでしまうということでしょうか」

「はい、それも崩壊のひとつだと思います。でも、女神は『天賦珠玉』を人々に与えることで生き延びる術を与えましたよね？　動物やモンスターには与えていません。つまり女神にとって『世界の崩壊』とは、ヒト種族やドワーフ、エルフ、獣人といった人々……『人語を解する者の全滅』を意味するんだと思います。女神が救おうとしているのは『言葉が通じる者』だけなんですよ」

「！！」

驚きにアーシャが停まってしまうと、今度はミミノさんが、

「でもな、レイジくん。アーシャが言ったとおり、女神がすんごい力を持った者だってことは変わらないべな？　どんなヤツで、倒せるヤツかどうかもわからないし」

「もちろんそうです。女神にとって最悪の事態は人々が全員死ぬことで、それには僕らも含まれますから、集団自殺する以外に女神を苦しめる方法はないってことになります。さすがにそんなことはできないので、他の方法が必要です」

「他の方法？」

「女神神殿です」

ここで、神殿が出てくるのだ。

女神が出現して、この地上に干渉しようとして真っ先にやり始めたことが「女神神殿」の建造だ。

神殿に刻まれているという魔術式がどういうものかは判明していないものの、僕がお嬢様たちから聞いただけでも「広範囲に影響を

与える」ものだとわかっている。
それが「精神干渉」なんじゃないかとお嬢様は疑っていて、僕もその可能性は十分あると思う。
今度実際に女神神殿やその魔術式を見てみれば【森羅万象】がはっきりと答えを教えてくれるだろう。

「神殿を建造し、女神への信仰心を集めること……。これは女神が望む世界へと作り上げるための手段として有効です。それに僕はもうひとつ、女神の目的もあるのではないかと考えています。それは……女神への信仰心そのものが、女神の力になっているのではないかということです」
「信仰心？　信仰心じゃ腹は膨れないっすよ」

ゼリィさんが言った。

「それはその通りです。でも――神を信仰することで【回復魔法】を使えるようになると聞いたことがあります」
「あ……それはわたしも聞いたことがあるべな。確かに、『天賦珠玉』を使わずとも信仰を通じて【回復魔法】に目覚める方がいるって、前にノンが」
「つまり、信仰心を通じて力を得る方法があるのではないかと僕は考えていますし、神殿はその装置なんじゃないかとも思うんです」

根拠があやふやでただの「勘」みたいなのはのぞいたけれど、話せることは全部話した。
ただの推測だけれど、僕はほぼ真実だと思っている。
なぜなら――【森羅万象】を使って確認できる範囲で、この推測はすべて裏付けられているからだ。

（それに……僕みたいな転生者だって、女神の書いた筋書きに組み

込まれている）

過去に何度も現れた黒髪黒目。

それは強力な力を持って――おそらく星９つ以上の天賦珠玉の力――暴れたせいで、不吉の象徴になってしまった。

でも、それでも現れたのは女神が、星９つ以上の天賦珠玉を使わせたかったからではないかと思うんだ。

「盟約者」と「調停者」がいるふたつの世界。

だけれど彼らの勢力バランスはその時々で大きく変わったし、「調停者」の幻想鬼人が言っていたけれど世界は崩壊しようとしていた。

せっかくふたつに分けた世界が崩壊しかかっていたのだ。

それを正すことができるのは、既存の世界にはない限界超えの天賦（スーパーパワー）。

つまり――ほんとうに、ほんとうに、腹が立つことだけれど、転生者（僕）は女神の世界結合計画に最初から組み込まれていたということになる。

「盟約者」と「調停者」では世界をどうにもできなくなったときの、安全策として。

「……今やるべきは、世界中に女神神殿ができてしまう前に、１日でも早くブランストーク湖上国に行き、教皇聖下の先にいる女神を斃すことです」

疑問はいっぱいあるだろうと思う。

アーシャの言ったとおり、女神が超越者であることは間違いないし、その女神に勝つことは容易じゃないこともわかりきっている。

「これは無謀な賭けであることはわかっています。ですから……もし気が乗らない場合は遠慮なく――」

「行くに決まっているだろう」

ダンテスさんが即座に言った。そして僕の頭にぽんぽんと手をのせた。

「よーくわかったぜ、説明してくれてありがとうな」

「あ……ダンテスさん。でも、女神は人を殺そうとはしていないんですよ。信仰心を持つ者は救います。それこそ教会の神のように」

「でも女神はレイジを殺そうとした。そうだな？」

「……」

「だったら俺の敵だ。何度だって言うが、お前は俺の……俺とノンの恩人だからな」

ニッ、と笑うダンテスさんの温かさが胸に沁みてくる。

僕がダンテスさんにしてあげたことなんて、逃亡奴隷として森をさまよっていた僕を救ってくれたことの恩返しだったのに……。

「……僕、ダンテスさんにもらってばかりで、なにも返せてないです」

「仲間を相手に、『もらった』も『返した』もねえよ。なあ、ミミノ？」

「そうだべな。レイジくんはどーんとわたしに頼ったらいいべな！」

ミミノさんが小さな胸を叩いている。

「坊ちゃん、あーしはもう借金チャラになってますからね？」

「う……」

そのとおりだった。以前僕はゼリィさんに借金をなくすことを約束している。

さすがに女神討伐についてくるところまで含めてようやくチャラだなんて言えはしない。

「つまり！　坊ちゃんがあーしに借りを作るってことっすよね！？」
「え？」
「いや～、気分いいっすわ～。坊ちゃんがあーしに借りだなんて！」
「ゼリィさん……ついてきてくれるんですか？」
「……この流れで『行かない』なんて言えるわけないっしょ。鈍い人っすね」

ゼリィさんの腕が伸びて、人差し指が僕の鼻を突いた。痛い。
……そうだった、この人は、こういう人だった。
ちゃらんぽらんで、どうしようもなく自堕落で、救いようがない。
だけど、誰よりも仲間思いなんだ。

「わたくしももちろん行くのだわ」
「私ももちろん行きます」

エヴァお嬢様とアーシャが同じタイミングで言った。
ふたりは「むむむ」と視線で火花を散らしている。

「ありがとうございます、ふたりとも。でも、危険な戦いになりますよ」
「私はレイジさんとともに進むと決めましたから――それに、ユーリーお姉様の豹変に、女神が関わっているのならば許せませんわ」

アーシャの姉であるユーリーは「盟約者」として女神に直接会っている。
シルヴィス王国に戻ると強引に王位を奪い、女神信仰を始めたという。

「あれほど、国王陛下を敬い、愛していらしたお姉様の気持ちを曲げるなんて……」

彼女たちの絆が強いことは僕も知っている。特に、声を出すことを許されなかったアーシャにもちゃんと向き合っていたユーリーの精神を汚染したというのならばアーシャの怒りもなおさらだろう。

「レイジ。聖女王陛下が、お父様が戦うことを決意されているのに、わたくしが引くわけにはいかないでしょう？」

エヴァお嬢様は、やはりエヴァお嬢様だ。

しばらく会わなかったうちにお嬢様の背は伸びて、雰囲気は大人びている。

背後にいるマクシム隊長たちの決意も固いらしい。

「レイジ」

お嬢様の持つ瞳は「鼓舞の魔瞳」だ。

だけれどそれだけでなく、お嬢様の持つ瞳は強い光を持っている。

僕は、お嬢様が僕になにを言うのか聞かずともわかっていた。

「皆で、行くのだわ。そして女神を斃すのよ」

もう僕はお嬢様の護衛ではない。

でも、

「わかりました、お嬢様」

そう答えるのはちっともイヤじゃなかった。

「――それでレイジ、話を戻すぞ」

全員の気持ちが固まった――というところだけれど、ダンテスさんが言った。

「どうやって行く？　魔導飛行船があれば早いが」

あ、そうだった。最初はダンテスさんのその質問だったっけ。

「そうですね。魔導飛行船は確かに早いのですが、途中で補給が必要ですし、補給地の近くに女神神殿があれば女神に捕捉される可能性が高いです」

「そうなると海路か？」

「いえ、違います」

「ん？　それじゃ馬か？　かなり時間が掛かるぞ」

ダンテスさんの懸念ももっともだ。

そして僕がアテにしている移動手段については――「思いつけ」というほうが無理な相談だ。

（時間的にはそろそろなんだけど……）

思いながら僕は言う。

「あのー、教会に僕が現れたとき、かなり高いところから来たじゃないですか」

「そう言えばそうだったのだわ。レイジがステンドグラスを壊して

落ちてきたから驚いたのよ」

エヴァお嬢様がうなずく。

「あれにも関係しているんですが――あ、ちょうど来たみたいです」

「来た？」

みんなきょろきょろと周囲を見るが、朝の街道はときおり商隊が通りかかるくらいで、木々の陰にいる僕らには気がつかないだろう。

「方角としては、こっちです」

僕が指したのは後方、森の奥――の、上空。

木々の切れ間に見える青空に、ぽつりと小さな点がふたつ、浮かんでいた。

それらはだんだんと大きくなり、羽を広げた形がわかるようになる。

「お、おいおい……あれはまさか……！？」

「ダンテスさん、大丈夫です。武器をしまってください」

メイスと盾を構えようとしたダンテスさんに僕は言う。

そう、あれは敵じゃない。

だけどダンテスさんと僕はかつて、あれを敵として戦った。

翼を広げた姿は大きくなる。遠近感が狂ったかのように大きくなる。どんどん、どんどんと。

「――――――～～～～！！」

誰かがなにか叫んだようだった。

でも聞こえなかった。
それらが降りてくると急制動するために羽ばたき、地上には暴風が吹き荒れたからだ。
僕らを通り過ぎた草原に、地響きとともに降り立った。
紫色の体表はぬらりとしており、広げた羽を閉じながらこちらを振り向く。

『来たぞ、レイジよ』
『さっさと行くぞ』

それは2体の竜――かつてレフ魔導帝国でともに戦ってくれた、影竜たちだった。

「皆さん、そういうわけで」

いまだ状況を理解できず、風に吹き飛ばされないように伏せていた態勢のみんなに僕は言った。

「目指すはブランストーク湖上国。竜に乗れば、女神にも捕捉されません！」

ウソだろ、という顔でダンテスさんが僕を見ていた。
ウソじゃないです。
マジです。

女神再考（後書き）

コミカライズ1巻発売しております。
初動1か月が勝負……！　なにとぞよろしくお願いします！

著者の別原作「察知されない最強職」のコミカライズも、ニコニコマンガ、コミックウォーカーで読めますのでこちらもあわせてお楽しみくださいませ。

影竜航路（前書き）

●前回あらすじ：
女神は存在こそ超越者だったが本物の神ではないとレイジは推測する。
その力の源は、信仰心。ゆえに世界中に女神神殿が建造される前に女神を斃さなければならない。
レイジはブランストーク湖上国へ向かうことを提案する。そう、竜に乗って。

影竜航路

竜との出会い――再会は、衝撃的だった。
僕がエルダーホビットの集落に滞在していたときに、突如として現れた「巨大な鳥影」。
すわ女神の手下による襲撃かと身構えていると、向こうは敵意などまったくない優雅な飛行で集落の広場に降り立ったのだ。
その体表は金色に輝いていた。
今までに見たことのない竜だった。

「――レイジ！」

だけれどもっと驚いたことには、その背から降り立ったひとりの――少女だ。

「ラルク……？」

レイジの姉にして、今ごろは、彼女が殺してしまった家族の補償のために動いているはずのラルクがそこにいたのだ。
彼女は軽やかな足取りで走ってくると、レイジを抱きしめた。

「よかった……！　アンタ、無事だったんだな」
「ラルク……本物？」
「本物に決まってんだろ！　姉の顔を忘れたのか！？」

がばりと身体を離すと、彼女の顔がすぐそこにある。
長い金髪は後ろでまとめられていて、イタズラっぽい紫色の瞳はこの短い間にどんどん大人びている。

つんとした鼻の下の薄い唇が開くと、

「……ま、まじまじ見んなよ」

「ご、ごめん」

僕を突き飛ばすようにして離れた。

「って、そうじゃないよ、どうしてラルクがここに!?」

広場の周囲にはエルダーホビットの皆さんが完全武装して取り囲んでいる。

一応、なにかあれば戦えるようにということだけれど、金色の竜は知ってか知らずか大あくびをしている。のんきなものだ。

「アンタが『世界結合』のために行動しているとき、あたしは『六天鉱山（シックスマイン）』へと向かった。そこでこの竜に出会ったんだ」

「竜……まさか鉱山に竜が？」

『我は金竜。先代の経験を引き継いで生まれ落ちた』

いきなりしゃべったので思わずそちらを見る。

先代……というと、

「もしかして、領都ユーヴェルマインズで戦った……？」

『左様。この娘にすっぱりと首を斬り落とされた竜よ』

「あの竜の生まれ変わりなんだって」

「!?　!?」

僕はラルクと金竜とどっちも見やる。
転生するの？　いや、それより首を斬り落とした相手を乗せてきたの？
「金竜が言うにはさ……アンタが女神の怒りを買ったって」
「え……」
『竜はそれぞれ別の個体がありながら、統一した思念を持つ。「薬理の賢者」を名乗る竜が見ていたものも我は知っている』
「あ……そうだ、賢者様はご無事ですか？」
『無論だ。あれは竜の中でも最も長く生きている……それだけ狡知に長けているのだ。ヤツも、お前がどうなったのかを気にしていた。吹き飛ばされてどこにいったかも探知できなかったからな』
「あたしは難しい話はわからないけど、金竜の話を聞いてレイジを捜すのを手伝ってくれって頼んだんだ」
「ラルク……」
武装解除したエルダーホビットたちは、数人の見張りを残してふだんの生活を始めた。こんな巨大な竜を残してよくも平気だなと思うけれど、どうやら僕がいるから、なにかあっても僕がなんとかするだろうと思っているふうだ。
なんともたくましい。
それから聞けば、ラルクは金竜と出会ってすぐに打ち解けたのだという。
なぜかと言えばそれはずばり、ラルクが金竜を殺すほどの力を持っていたからだ。
この金竜は、金竜に言わせれば『任務にクソ真面目』だった先代

に比べ、『強いヤツが好き』という変わり者のようで、ラルクをひと目見るや彼女が何者かわかったらしい。
ラルクは正直に、自分の力は失われていると言ったけれど、金竜は『それなら力が戻る手伝いをしてやる』とか言い出した。
ただ話していくうちに行方不明の僕を捜すことが最優先だろうとなり――こうして世界中を飛んでいたようだ。

『この辺りを飛んでいたのにはワケがある。ここからもっと飛んだ先で、竜族が集まろうと話しておったのだ。そこにはもちろん、「薬理の賢者」を名乗るあの竜も来る』

僕は、是非ともそこに連れて行って欲しいと金竜に頼んだ。
そしてそれは叶えられ――12頭の竜と出会い、あるいは再会し、そこで女神に関する話を聞いた。
僕は影竜2頭と行動をともにすることになり、情勢が不安定なクルヴァーン聖王国を目指したというわけだ。
ほんとうは、ラルクにも来て欲しかった。
だけれど彼女の身体はまだまだぼろぼろだったし、ラルク自身が、

――あたしにはもう、いっしょに戦う力はないんだ。

寂しそうに言ったのだ。
それを押してまで「ついてきて」とは言えなかった。
未開の地「カニオン」の最奥で僕はラルクと別れた。
これは最後の別れじゃない、女神を斃したら必ずもう一度会おうと約束して。

「――とまあ、いろいろあって影竜と行動をともにしています。影

竜はすごいんですよ。周囲に溶け込むような魔法を使えるので地上から発見するのはかなり難しいし、探知系の魔術にも引っかからないんです。もちろん、上を通れば日光が遮られて一瞬暗くなったりはしますけどね」

『ふっ。まあな。バカな金竜は我を「地味」だとか言いおったがな』

『そうそう。頭のいい竜なのだぞ』

自慢げに2頭が言う。

「……レイジ、それはよくわかったが、これ以外に移動方法はなかったのか？」

ダンテスさんにしては珍しく、青い顔でそう言った。

ただ今上空5千メートル。

時速300キロメートルほどの速度で西へと飛んでいる。

街道を行く商隊も砂粒のように小さいが、そんな彼らも恐るべき速度で後方へと去っていく。

僕らは影竜2頭の背中に分かれて乗っていた。

風圧は影竜がなんらかの魔法でかなり軽減してくれているのだけれど、鬼のような寒さはいかんともしがたく、身を寄せ合って【風魔法】と【補助魔法】でなんとかしのぐ。

【火魔法】は温度調節がすさまじく難しいからだ。

「こ、これっ、どれくらいで向こうに着くんだべな！？」

「安心してください、ミミノさん。今きついですけど、そのぶん早く進みますから」

ミミノさんが明らかにホッとした顔をした。

「あと3日もあればなんとか」
「3日も!?」
「――ミミノ、ミミノ？　おいミミノッ！」
スッ、と白目を剥いたミミノさんを、ダンテスさんがぎゅっとつかむ。
「ずりぃぞ！　お前、楽になりやがって！」
「一応、ロープできっちり巻いているので、寝てしまっても落ちないようになっているんですが」
「寝られるかよ!?」
確かに、魔導飛行船での空路だって「落ちるのでは」という恐怖に耐えきれず失神する人も多いらしい。
そんな中、竜のこの速度はヤバイよね。
でも、彼らが言うには『本気出せばもっと速いけどな』……ということで。
みんなを怖がらせたくないので、それは言わないでおいた。
夜になれば休息のために地上へと降りた。
キースグラン連邦は女神神殿の建造を行っていない地域があり、そこを狙って着陸したのだ――もちろん影竜がバレたら大騒ぎになるので、こっそりとだけれど。
宿に入ると、さすがのエヴァお嬢様も真っ青な顔で震えていて、それでも気丈に食事をとると眠ってしまった。
逆に気を失っていたミミノさんは元気で、それに意外なタフさでアーシャも問題がなく、僕らは宿の隣にある酒場にやってきた。
あ、ゼリィさんは賭場に出かけました。「徹夜して竜の背中で寝

やす」と言って。

「……信じられないべな。もう、クルヴァーン聖王国ははるか彼方なんだべ？」

温めたミルクにたっぷりのハチミツを入れたものを飲みながらミミノさんは言った。

アーシャはホットワインで、僕はミミノさんと同じものをいただいていた。

店内はなかなか混み合っていたけれど、それだけに僕らもうまく紛れ込むことができた。

なにせキースグラン連邦はヒト種族びいきの国が多く、ハーフリングのミミノさんやハイエルフのアーシャはどうしても目立ってしまうからだ。

「それで……いろいろとお話をうかがいたいのですが、まず、竜は味方なのでしょうか」

竜の背中ではあまり落ち着いて話もできなかったからね。

アーシャの質問に、僕はうなずいた。

「そう……だと思います。少なくとも僕は竜のことを信じています」

アーシャとミミノさんに、「薬理の賢者」様のこと。

それにラルクのことを話した。

竜たちがどうして女神に対抗しようとしているのか。

――自然はあるべき姿に戻すべきじゃ。

未開の地「カニオン」の奥地で再会した「薬理の賢者」様はそう

言った。
「調停者」としてあまりにも長い時間、彼らは強者として君臨してきた。
時に人と争い、時に獣と争い。
その長い時間、積み重ねた思考を僕がうかがい知ることはできない。
でも、「薬理の賢者」様が僕を助けてくれたことはわかっているし、彼らが女神を斃したいと願っているのならそれを疑う理由はなかった。

「竜たちは今、なにをしてるんだべな？　影竜といっしょでブランストーク湖上国に向かってるのか？」
「いえ、彼らは女神に対抗する力がないと言っていました。それが、世界を分かつ以前に取り決めた女神との契約なのだと」

竜が「調停者」になるときに決めた契約。
それはいまだに竜を縛っているようだ。
同じ「調停者」である幻想鬼人ももちろん同じ立場なのだけれど、竜は幻想鬼人がなにを考えているかわからないと言っていた。
今のところは様子見に徹しているようだが、もしかしたら女神につくかもしれない。
そのときには幻想鬼人――あの黒い影たちと戦うことになる。

「いずれにせよ、竜がしてくれるのはサポートだけですね。女神とは僕たちが直接戦う必要があります」
「……すごい存在なんだべな？」
「はい。ですが戦わなければいけません」

神ではないのに神を名乗る存在。
その女神が洗脳で操る世界……ディストピアだ。

もしかしたら戦争がなくなり、平和になるのかもしれない。
だけれど知識ある者たちがすべて家畜化するようなものだ。
女神がたったひとりのプレイヤーで、シミュレーションゲームをやるようなもの……と言ってもいいかもしれない。
それを望む人たちが、そうなるのならいい。
だけれど女神は、「盟約者」を始め、一方的に洗脳を始めている。
そんなことはやっぱり、許されるべきじゃないと僕は思うのだ。

「レイジくん、これ……遅くなっちゃったけどな」

ミミノさんがテーブルに置いたのは、見覚えのある短刀だった。
ミュール辺境伯からもらい、度重なる戦闘でだいぶガタが来ていたのでダンテスさんに修理を依頼していたものだ。

「直ったんですか!?」
「うん。なんでも、堅牢性を高めるためにかなり特殊な鍛造方法だったらしくて、歪んだ刀身を直せる鍛冶職人を見つけるのに苦労したんだべな」
「うわぁ……」

相変わらずのずっしりとした重さに、鞘から引き抜くと、鈍い光を放ちながら刀身が現れる。
申し訳程度にミュール辺境伯の名前が刻印されているのもそのままだった。

「あれ。なにかちょっと輝きが違いますね」
「なんでもヴァルハラ市のギルドマスター、グルジオ様が紹介してくれた鍛冶職人というのが変わり者のドワーフで――」
「……いやちょっと待ってください、今なんて?」
「変わり者のドワーフ」

「そうじゃなくて！　これ、直すためにギルドマスターにお願いしたんですか!?　大陸トップの!?」
「うん。グルジオ様も、レイジくんが使っているものだと聞いたら喜んで職人を紹介してくれたべな」
「……」
うわぁ……なんか、だいぶ偉い人が出てきてしまったな。
「その鍛冶職人のドワーフが、変わり者でな。ただ刃を鍛えるだけじゃつまらないからと、魔術で強化してくれたんだ」
「いやぁ……なんか魔力が漂ってるなとは思ったんです」
「柄の内部に天銀（ミスリル）が仕込んであって、そこに魔術が刻まれてるって」
「……」
ミスリル？
国が管理してる希少金属では？
教皇聖下とかが使う杖とかに用いるようなヤツでは？
ノームの種族とドワーフ種族が争いになるような戦略物質では？
「レイジくんにならいいだろうって、グルジオ様が」
「……」
グルジオ様の僕への評価はいったいどこから来たんだろう……。
「レイジさんにふさわしい輝きですね」
「だな。これくらいの武器を使ったほうがいいべな」
アーシャはうっとりした目で言うし、ミミノさんも「当然」みたいに言ってる。
でもミミノさんのは「うちの子はすごいんだから」って感じだか

らまだいいんだけど。

「……期待には応えなければいけませんね」

すぐに短刀を鞘にしまって、僕らは店を出た。

出来合いの剣で戦わなければいけないとなったらマズいなと思っていたけれど、思わぬ名剣が手に入った。

「それじゃ、おやすみなさい」

「はい」

僕は宿の廊下でミミノさんとアーシャと別れた。

「……」

暗い廊下で、ひとり思う。

多くの人の期待を背負っているのだ。

「――レイジ？」

そこへ、廊下へとエヴァお嬢様が出てきた。

「お嬢様……どうしたんですか？」

「少し眠ったら目が覚めてしまったのだわ。レイジはこれから寝るの？」

「あ、はい……」

少し言い淀んだ僕を見て、お嬢様は、

「――すこし話に付き合いなさい」

と言った。

宿は大きく、廊下の突き当たりにはバルコニーがあった。
そこからはひっそりとした大通りを見下ろすことができる。
お嬢様は見慣れない旅装束で、着替えを持ち運ぶことなんて当然できないので、着た切り雀みたいだ。

「こういう生活も慣れたのだわ」

お嬢様が、いつの間にかたくましくもなっていた。
ほこりっぽい旅でもなお清潔感を保ち、凛とした美しさがあるのは「さすが」としか言いようがないのだけれど。
僕らはバルコニーで並んだ。
空は薄い月が上がっており、もう少しで新月になろうという頃合いだ。
夜も遅くなり、眼下の通りを行く人もいない。

「――レイジ、なにをプレッシャーに感じているの？」
「えっ」

僕の顔をのぞき込むように、お嬢様は言う。

「それくらいわかるのだわ」
「……」

3年ほどの期間、僕はお嬢様の護衛として暮らしていた。
その間、僕はお嬢様に常に目を光らせて――突拍子もないことを

考えるし、実行する人だったから――いた。

（……見ていたのは僕だけじゃなかったんだ）

お嬢様も僕を見ていてくれたのだ。

「話すことで楽になることもあるのよ、レイジ。少なくとも今回のことは、あなたひとりだけが背負っていい問題ではないのだわ。わたくしはもう、あなたの主人ではないけれど――あなたが話したくなさそうだから、あえてこう言うわ。――話しなさい、レイジ。あなたの抱えているものを、このわたくしに」

この人には頭が上がらないな――それは僕が平民で、お嬢様が貴族だからとかいう理由じゃない。

エヴァお嬢様は生まれながらにして持っているのだろう、他者の苦しみも我がことのように背負える力を。

お嬢様の「鼓舞の魔瞳」はお嬢様だからこそ備わったのだと今になれば思う。

「……特級祭司のエルさんについてご存じですか？」

お嬢様はうなずき、教えてくれた。

エルさんがブランストーク湖上国で焼け焦げた姿で発見されたこと。

その後、エルさんの隠し書斎を見つけ、僕が女神によって排除されるかもしれないという内容の書き置きがあったらしい。

「竜に聞いた話では、エルさんは女神が過去に作った調停者だったようです」

「……あの方は魔導生命体だったのでは？」

「そのとおりです。本来は竜や幻想鬼人のように種族を選ぶのではなく、女神が定めた調停者として機能させたかったのだろうと竜は言っていました。ですが、それにはいくつか問題がありました」

世界をふたつに分け、盟約に違反がないよう監視する役目を負うのが調停者だ。

だけれど世界を元に戻す機会がいつ訪れるのか、ふたつに分けた時点では女神には予測不可能だった。

ゆえに、経年劣化や魔術触媒の摩耗による活動限界がある魔導生命体では、その責任を担うのは難があった。

結局、エルさんは生み出されたものの――竜によればエルさんに似た魔導生命体が他に数十といたようだが、数百年でほぼすべて活動を止め、エルさんだけが奇跡的に残ったのだという――調停者には種族として生き延びられる者のほうがふさわしい、ということで死してもなお記憶を次世代に引き継げる竜と、極めて長命の幻想鬼人が選ばれた。

エルさんはその長い活動期間で、だんだんと過去の記憶を失い、クルヴァーン聖王国の建国に関与し、やがて「一天祭壇（ファーストアルター）」の管理者になっていった。

「……女神が降臨したとき、盟約者、調停者とともに異世界転生者である僕が呼び出されました。僕は気づきませんでしたが、エルさんもその場に呼ばれていたようです……エルさんもまたブランストークで『世界結合』に向けた話し合いに参加していましたから」

僕はお嬢様に、エルさんの最後について話した。

僕をかばうために、その身を焼いたことを。

「……エルさんがどうして僕を助けてくれたのか。女神によって生み出された存在のエルさんが、なぜ女神の考えに背くような行動を

してくれたのか。僕はどちらも知らないから、想像することしかできません。きっとエルさんは……女神を止めて欲しいのだと思います」

あのときエルさんがいなかったら、僕はあの場で死んでいた。

女神にとって僕は邪魔な存在だからだ。

僕は――エルさんに生かされた。

そのことを考えると、やっぱり心が苦しくて。

冒険者ギルドマスターのグルジオさんが僕に期待してくれるように、誰かの思いを感じると、やっぱり重圧に感じてしまう。

「……わたくしがピンチに陥ったとき、レイジは助けてくれたのだわ」

ややあって、お嬢様が言った。

「わたくしもきっと、レイジがピンチだったら身体を張ってでも助けると思うの。でもそのとき感じる思いは……わたくしを負担に感じて欲しいなんてことではないのだわ」

「お嬢様……」

「エル様が考えていたことはわたくしにもわからない。だけれど、レイジ、あなたはあなたらしくあればいいのだわ。そんなレイジを、エル様は護ったのだから」

ひとつひとつの言葉が優しく沁みるのを感じた。

この人は、ほんとうに僕のことをよく見ていてくれて、そして考えてくれているのだ。

「僕らしく……ですか？」

お嬢様はふわりと笑った。

「あなたの思うように行動しなさい、レイジ。そんなあなただからこそ、竜もここにいるみんなも、いっしょに戦おうと思ったのだから。いつも自然体のレイジに、わたくしも――」

言いかけて、ハッと口を閉ざすお嬢様。

「お嬢様？」

「……もう寝ましょう。女神と戦う体力を作らないと」

お嬢様の言うとおりだ、夜もだいぶ遅い。

僕はお嬢様の言いかけた言葉が少し気になったけれど自分の部屋へと戻ることにした。

さっきまでの心の重さがウソのように、ぐっすりと眠れた。

翌日も朝から移動を開始し、途中で宿泊をする。

ブランストーク湖上国まで少し距離があったが、女神神殿のない場所は限られていた。

決戦の朝がやってくる。

影竜航路（後書き）

またレビューをいただきました。ありがとうございます！

コミカライズ版オバスキ、ふつうなら初動で売れるか売れないかわかる、という感じなのですが、不思議なことに店頭で少しずつ売れているようです。

ありがとうございます。

これが漫画家先生の絵の力か。

最初の1か月を過ぎると撤去されたり目立たないところに置かれてしまいますので、読もうかなと思っていらした方は是非とも今のうちにお願いいたします。

決戦当日（前書き）

●前回あらすじ：
竜に乗って移動をするレイジたち一行は、ついにブランストーク湖上国に到達する。
ここには教皇がいて、教皇は女神がこの世界との接点に利用しているはずだ。

決戦当日

夜明けまであと2時間はあるという時刻。
僕らは草原にいた。

「ここから先は女神神殿の効果範囲です。おそらく、一歩でも足を踏み入れた瞬間に捕捉されると思われます」

居並ぶ全員に僕は言った。

「作戦のおさらいをします。教皇聖下がおられる場所は大聖堂内の一室であると思われます。敵は襲撃に対して防衛ラインを敷いている可能性がありますが、この短時間では完璧ではないはずです。影竜2頭で奇襲します。そして、エヴァお嬢様には――」
「わかっているのだわ。レイジたちが任務を遂行する間、その部屋には誰も、一歩も近寄らせません」
「ありがとうございます」

お嬢様に「盾」になってもらうことにはさすがに躊躇した。
だけれど戦力を考えると明らかにそのほうが利点が多いのだ。
お嬢様は「鼓舞の魔瞳」を使うことができるので騎士たちの底力を上げることができ、なんなら敵に強めに使うことで混乱させることもできる。「鼓舞の魔瞳」を強力に掛けると、戦闘意欲が過剰に昂進し、敵味方の見境なく襲いかかるから。

「ゼリィさんはかく乱を」
「わかってやす」

直接的な戦闘力が低いゼリィさんは、聖堂内を走り回って混乱を引き起こしてもらう。
そうすれば教皇聖下のところへとやってくる戦力が減るはずだからだ。

「腕が鳴るっすよね～～。どんなことしてやろーかなー」
「……ほ、ほどほどにね？」
「なーに言ってるんすか、坊ちゃん。あーしが活躍すればするほど安全になるんですよ？」
「そ、それは……」

そうだけども。
ゼリィさんって、僕の予想の斜め上を行く厄介な嫌がらせをしそうなんだよなぁ。
背に腹はかえられないからしょうがないんだけども。

「……その間に、僕たち『銀の天秤』は女神を弑しにいきます」

ダンテスさん、ミミノさん、そしてアーシャ。
ノンさんが今どこにいるのかわからないけれど、僕の冒険の土台は、ずっと「銀の天秤」のみんなといっしょにあった。

「おう、女神との対決は出たとこ勝負だな？」
「はい……最悪、教皇聖下のお命をいただくことになると思います」

女神と接点を持てるチャンスは少ない。
一方的に知られるだけなら女神神殿に行けばいいけれど、こちらから女神になにかアクションを起こすことはできない。
「薬理の賢者」様が言うには、教皇聖下は女神が地上に影響を与えるために使用している「依り代」のようなものだという。

教皇聖下を通じてなら、女神に会うことができる。
教皇聖下に意識が残っているのならば説得をして女神を呼び出してもらう。
意識がないようなら――強硬手段になるが、竜がなんとかすると言っていた。

『幻想鬼人（ヴィジョン・オーガ）がどう動くかはまだわからぬが、もしヤツが敵対するようなら我らがなんとかしよう』
『うむ』

影竜2頭が力強く言った。
もし幻想鬼人が敵対しないようなら話は早い。竜の力はすさまじく強いので教皇聖下を護る神殿騎士たちを竜に相手してもらえばいいのだ。
だけど、幻想鬼人がどう出るか。
これもまた出たとこ勝負だ。

（……正直、不確定要素が多すぎる。でも、今打てる手はすべて打ったし、時間が経てば経つほど女神が有利になる）

女神神殿の建造が進めば進むだけ女神は強化され、敵が増えるのだ。

「行きましょう」

僕らは影竜に乗り込んだ。
みんな乗り込むのも慣れたものだ。ダンテスさんは「これで最後これで最後……」とつぶやいているし、相変わらずミミノさんは、すんとした顔で悟りを開いたような感じがあるけれども。
いまだ暗い空を影竜に乗って飛ぶ。

飛び始めてしばらくして、空気が変わるのに気がついた。

「ッ！　皆さん！　女神神殿の影響区域に入りました！」

僕が声を上げながら振り向くと、みんな苦しそうな顔をしていた。

「あ～……これはきっついな。頭の中になんか声が響いてくるぜ」

「ダンテスさん、大丈夫ですか」

「ああ、これほどとは思わなかった。この中心地に行くとなると厄介だな……」

「――お嬢様！」

僕は隣を飛ぶ影竜に声を掛ける。

そこでお嬢様に「鼓舞の魔瞳」を発動してもらう――お嬢様も苦しいだろうに――すると全員の表情が和らいだ。

「アーシャ、どうですか」

「は、はい……かなりよくなりました」

僕にはなんの影響もないので、どんな感じなのかがわからない。

影竜にも影響がないので、調停者や僕のようなイレギュラーには効かない魔術なのだ。

そして「影響がない」存在を女神は見逃さない。

今、女神は僕らが近づいていることを確認したはずだ。

「気を抜けば持ってかれる感じだ。温かく心地いい風が吹いてきたような、そんな感じで……頭の中に誰かが囁いてくる」

ダンテスさんが吐き捨てるように言った。

「……やはり、女神なんてろくなものじゃないな。魔術で精神をおかしくして、俺たちを家畜のように扱う――その魂胆をはっきりと実感したよ」

すると影竜が叫ぶ。

『湖が見えてきたぞ』

はるか遠く、山脈の向こうに小さな水面が見えた。

僕らが近づくに連れて、僕らの背後、東の空が少しずつ白んでくる。

ベストな時間だ。

多くの人たちが眠っている時間で、なおかつ闇ではなく視界を確保できる時間は明け方しかないと思っていたのだ。

『スピードを上げるぞ。しっかりつかまっておれ』

影竜の言葉に、「ひぇっ」とミミノさんが顔を青ざめさせる。

それから――僕だって初めて経験するような速度が身体を襲った。

耳には空を切る爆音だけしか聞こえなくなる。

さっきは小さな水面にしか見えなかった湖があっという間に大きくなり、その湖畔にそびえる大聖堂がはっきりと見えた。

『むう。これは予想外だ』

「なにがですか!?」

爆音に負けじと僕は声を張り上げる。

『教皇とかいう娘、建物におらんぞ』

竜には女神の存在、女神に強く影響された存在を感じ取る力がある。

えっ、と僕が聞き返すより先に影竜は言った。

『湖のすぐそばに立っておる』

湖のそば？

外にいるってこと？

このまま突っ込めば、あと1分もしないうちに大聖堂に着く。

僕は考えを巡らせる――だけれど、答えは決まっている。

「このまま湖に行きます！！」

計画の変更はやむなしだ。

でも計画の中止はしない。

今日が、今が、最初で最後の機会なのだから。

「皆さん、教皇聖下は外にいます！　戦う場所は変わりますが、作戦はそのまま決行します！！」

着地に入るために影竜の速度は緩められ、僕の声はみんなに届いた。

「おう、そうこなくちゃな！」

「了解だべな！」

「わかりました！」

「りょーかいっす～」

「わかったのだわ！」

そしてマクシムさんや騎士たちの「オウッ」という声。

『降りるぞ』

空から急降下を始めると、お腹の下がひやっとするような浮遊感。

（あれだ……）

ほんのりとした光が湖を照らしている。

静かに浮かんでいる幾隻もの船。

大聖堂から船着き場までは広い草原がひろがっていて、その中央に立っている小さな人影。

教皇聖下だ。

（なんであんなところに？　女神は僕らの接近に気づいているはずだけれど――）

とか冷静に考えていられるのもそれまでだった。

『つぶしていくぞ』

『おおよ』

湖面が近づく、と思った瞬間、影竜は水平飛行に移行し僕らの身体に強烈な重力が掛かる。

ゴオオオオッ！！

湖の上を飛ぶ影竜は口から黒い息吹を吐き出した。

それらは停泊している船を次々に破壊していく。

湖にはいくつもの水柱が立った。

（すごい……これが竜の力）

湖の船を一掃すると、さすがの騒ぎに大聖堂には多くの明かりが点き始めた。

影竜はぐるりと一周して飛ぶと、教皇聖下のいる草原へと降り立った。

（おかしい……なにもかもがおかしい）

ひとり、たたずんでいるのが教皇聖下であることは間違いない。

大聖堂の窓からこちらを認めた騎士たちが「聖下があんなところに！」と叫んでいた。

（でも、計画を進めるしかない……！）

影竜が着陸すると、僕らは一斉に飛び降りた。

「あちらは任せるのだわ！」

「お気を付けて！」

お嬢様とマクシム隊長たちが走り出す。

大聖堂から吐き出された騎士たちがこちらに走ってくる。

（ここは広い……お嬢様たちだけで押さえるのはほとんど不可能だ）

だから女神はここにいるのか？

（でも、その間に教皇聖下になにかあったら困るのは女神だ。一体どうしてこんなところに――）

僕が迷っていると、

「行け、レイジ。迷っていても埒が明かん」

ダンテスさんが僕の背中をどんと押してくれた。

そうだ。ダンテスさんの言うとおりだ。

ここまで来たら進むしかない。

「――教皇聖下」

僕らはひとりたたずむ教皇聖下へ向かって歩き出す。

教皇としてふだん活動するときに着ている服ではなかった。

麻の、薄手の洋服でまるで室内着だ。

ただ手にしているミスリル製の錫杖だけが教皇聖下の証明のようだった。

（足が……裸足？）

草むらに立っているとは言え、裸足の姿は痛々しささえ感じられた。

彼女はうつむいていてどんな表情を浮かべているのかもわからない。

ふだんからヴェールを掛けていることもあって、元の顔や表情はほとんど知らないのだけれど。

「お話があります」

最大限の警戒でもって僕らは１０メートルほど離れた場所で対峙した。

ダンテスさんは僕の真横で大盾を構えている。
ミミノさんとアーシャは僕の背後3メートルほどのところ。
キィン、と剣のぶつかる音が聞こえた――お嬢様たちの戦闘が始まった。

「教皇聖下に取り憑いている女神についてです。この世界は女神ただひとりのものではありません。そして女神への信仰を強制されるようなものでもありません。賢明なる教皇聖下ならばおわかりかと思いますが――」

そのとき、がばりと教皇聖下の顔が上がった。

「あ……」

瞳にはなにも映っていない、空虚だった。
唇はカサカサで【森羅万象】を使うまでもなく健康状態が劣悪だとわかる。
頬にある血の跡はなんなのか――。

『――――残念です、竜よ』

声が聞こえた。
その声は教皇聖下の肉体から発せられたのではなく、頭に直接響いてくるようだった。
女神だ、と直感した瞬間、影竜の前に黒い影が何体も何体も現れた。

『ッ！　幻想鬼人め、女神についたか』
『小癪な』

その黒い影は幻想鬼人の操る魔導生命体だ。
1体ずつが恐ろしいほどに強い。
それらがまとまって影竜に襲いかかったのだ。

「影竜さん！！」

『レイジ、お前は女神と戦え』

影竜が動けば大地が揺れる。
黒い影との戦いはすさまじいまでに激化していく。
でも――幻想鬼人は竜と戦う道を選んだ。
依然、僕らは自由だ。

「女神……いや、神を僭称する者よ。この世界をお前のオモチャにするな！！」

この世界で懸命に生きている人たちを僕は知っている。
平民はもちろん多くの冒険者も必死で生きている。
もうひとつの世界にいたキミドリゴルンさんも、ダークエルフのノックさんも、地底人だってそうだ。
エルダーホビットのヤンヤだって。
ダンテスさんも。
ノンさんも。
ミミノさんも。
ゼリィさんも。
死んでしまった……ライキラさんも
そして、アーシャも、エヴァお嬢様も、僕の姉のラルクも。
そんな人たちの思いを踏みにじるな――。

『――――』

だけれど女神はなにも言わなかった。
ただ、その入れ物である教皇聖下の口が動いて、ニッ、と笑っただけだった。

なにかを感じる間もなかった。
前兆も予感も、感覚もなく。
それは起きた。

★　ブランストーク湖上国　大聖堂前庭　★

エヴァは見ていた。
見ていたけれど、なにが起きたのかはわからなかった。
ただレイジがなにかを大きな声で言った。
それから少しして――教皇聖下が、糸の切れた人形のようにその場に座り込んだ。

「……レイジ？」

レイジは――ダンテスとアーシャ、ミミノを含めた４人は、その姿を消した。

「レイジィィィッ！！」

煙のように、ではなく。
その場に存在しなかったかのように消えたのだ。

決戦当日（後書き）

ファイナルステージへ。
いろいろな疑問はあるかと思いますが、読み進めるといろいろと解決されると思います。

コミカライズ版「限界超えの天賦は転生者にしか扱えない」、発売しております。
是非ともお手にとってくださいませ。
すでに書籍、電子版を購入してくださいました皆様、ありがとうございます。
地図が掲載されているのでいろいろとはかどると思います。
プロが描く地図はすげぇや……！

それと別作品「察知されない最強職」のコミカライズが８／３に１巻が発売されます！
こちらも是非お願いいたします。
すでにａｍａｚｏｎ等では予約が始まっておりますので是非。

女神戦（前書き）

前回あらすじ‥

エヴァと彼女の騎士たちに神殿騎士たちの妨害を任せ、ゼリィは後方かく乱のために動いた。

影竜は同じ調停者幻想鬼人の、黒い魔導生命体との戦いを余儀なくされる。

レイジ、ダンテス、アナスタシア、ミミノの４人はひとり湖畔にたたずむ教皇と向き合うのだが、その瞬間、彼らの姿は消えた。

女神戦

あのとき――教皇聖下に近づいたときに「こうなるかもしれない」という予感はあった。
だって前回だって、こうだったからだ。
なんの予兆もなく、ただ一度瞬きしただけで世界は変わっていた。

一面の白い空間に僕らはいた。

ぽかんとするダンテスさんとミミノさん、警戒心をあらわにするアーシャ。
明るいのに影は出ず、どこに立っているのかもわからないような空間。

『――――まさかあなたのほうからやってくるとは思いませんでした、転生者よ』

女神の声が響いた。
だけれど今までと少し違うのは――その声の発する方向がなんとなくわかるということだ。
僕らがそちらを向くと、その方向の「白」が他よりも明るく感じられる。
人の影のような……シルエットがうっすら見える。
その存在に対しては【森羅万象】でも認識ができない。

『――――ですがあなたを探す手間が省けました。あなたは、これからの世界には不必要の存在です』

「レイジの命が必要かどうかなんて、他の誰かが決めることじゃねえな」

僕の前に、大盾を構えたダンテスさんがずいっと前に出る。

『――――跪け』

「!?」

女神がそう声を発した瞬間、ダンテスさんは大盾を取り落とし、膝をついた。

そのまま頭を地面につけそうになるぎりぎりのところで、腕をついて身体を持ち上げる。

「ダンテスさん!」

「だ、大丈夫だ、レイジ……悪趣味なことしやがる」

ダンテスさんは両腕に力を込めると無理やり起き上がる。

『――――……』

それが意外だったのか、女神は黙っている。

「……俺が頭を垂れるのは、心底感服し、尊敬できる相手だけだ。少なくとも、顔も見せずに口先だけのヤツじゃあねえな……」

両足がぷるぷるし、膝に腕を突いてようやくという感じだったけれど、それでもダンテスさんは立っている。

「――出てこい、女神。いや、神を自称する者よ。僕らはここに、

決着を付けるために来た」

僕はミミノさんから受け取った短刀を抜いた。

後ろに、ミミノさんとアーシャがやってくる。

『――竜がなにかをしたのですか？　いえ……調べるのは後で構いませんね』

そんなことを言った女神は、腕を振るったようだった。

その直後、僕らと女神との間に――5つの人影が現れる。

「！！」

青白い、人の姿を取ってはいるが生身ではない。

魂というか、その人物の存在そのものというか――そんな人影だ。

『なんじゃ、ここは……』

『あらぁ、女神様のいらっしゃるところじゃないのぉ』

『ふん。汚らわしいドワーフまでおるではないか』

ずんぐりむっくりしたドワーフの王太子。

ゴリラの獣人女性のミンミンシャン閣下。

ドワーフと敵対しているノームの老人。

そして残りのふたりは、

『……アーシャ、ここにいたの』

「ユーリー姉様……！？」

『いつの間にこんなところまで来ていやがったんだ……あの蹴りは

効いたぞ、レイジ』

「グレンジード公！」

ハイエルフのユーリー様。
グレンジード公爵。
つまりかつての盟約者のうち、５人だ。
戦闘に特化していそうな５人。

『――――そこにいる４人を、蹴散らしなさい』

女神の言葉に呼び出された５人の存在は、はっとしたように背筋を伸ばした。
青白い存在に瞳の色だけが金色になり、その表情がうかがえなくなる。
グレンジード公爵の手に巨大な槍が現れ、ユーリー様の手には長い杖が現れる。

「――来ます！！　ダンテスさん！」

「オオッ！」

ダンテスさんは女神の圧力が解けたのか、大盾をつかんで構える。

『ぜえええええいッ！！』
「おおおおおおおお！！」

槍と大盾が激突する。

『――風と水の精霊よ、集まり叢雲となり、いかづちを降らせ』
「させません！！」

周囲に暗雲が立ちこめると、アーシャが両手をそちらに差し伸べ業火球を飛ばす。
炎の塊が雲にぶつかると爆発して風が吹き荒れる。

「みんな気をつけるべな！」

ミミノさんが薬をまくと僕らの周囲の風が弱まる。

『あたしもいるのよぉん！』
『死ね！！』

ナックルガードを付けたミンミンシャン閣下が右から、巨大なバトルアックスを持ったドワーフの王太子が左から突っ込んで来る。

「ダンテスさん、左は僕が」
「――違う！　お前は行け、レイジ！」

えっ、と聞き返す必要もなかった。
行けとダンテスさんは言った。
どこに――女神のところへ、だ。
この5人は押さえるから、行けと。
その横顔をちらりと見る。

（もう、僕のことなんて見ていない）

疑っていないからだ。
僕が、ダンテスさんを信じ、女神へと向かうことを。
そして女神を斃すことを。

「行ってきます！！」

何百何千、いや、何万回とやってきた、【補助魔法】からの【疾走術】、【身体強化】、【脚力強化】、【瞬発力】の組み合わせ。

僕の身体は弾丸のように飛び出しながらもその足音はなく、すり抜けざまにグレンジード公爵の脇腹に一発、ドワーフ王太子の脇腹に一発、パンチをくれていく。

『ぐっ』

『ごはぁっ』

グレンジード公爵は態勢を崩し、王太子は横に転げていった。

目の前にいたのは魔法を詠唱しているノームの長老だった。

『ぎょむっ！？』

その顔を踏んで僕は奥へと跳んだ。

背後では、さらに魔法と、武器とがぶつかる音が聞こえてくるが僕はただ前を見据えていた。

すぐそこに、女神の姿がある。

『一一一一人の身では我に、届かない』

逃げるでもない、動揺するでもない、なにか行動を起こすでもない。

女神はただそこにいた。

「やってみなければ一一わからない！！」

僕は【風魔法】を追い風にして速度を極限まで上げ、上昇気流と

ともに跳躍。
女神の身体に向かって短刀を振り抜いた。
ッキィィィイィィイ――――――。
鉄の塊に鉄の棒を叩きつけたような、絶対に壊れないという感触。
ミスリルが反応したらしい魔力の反発により耳を刺す超高音が響き渡る。
「クソッ」
僕は振り向きざま、右手の指1つ1つに【火魔法】を、左手の指には【風魔法】を展開。
魔力が急速に失われていく。
「『火炎嵐（フレイムトルネード）』」
放たれた劫火の嵐は女神の身体を包み込んだけれど、炎は、女神から数センチ離れたところまでしか届かず、嵐が通り過ぎてもそこに女神は浮いていた。
『――――無駄だということがわかったでしょう』
ここまで鉄壁の防御力があるとは……。
「……」
『――――この空間へやってきた時点で、あなたの負けは決まったのです』

「……教皇聖下が、お前にとっては重要だった」

『――――なんですって？』

「だから、教皇聖下に手を出せば、お前は聖下を失いたくないがために姿を現すのだと僕は考えた――この空間に呼び出されるかもしれないという可能性だって考慮していた」

『――――それで？　結果として負けるのでしょう？』

「それはどうかな。そこまで考えていた僕が、無策でここに来るわけはないだろ」

僕は短刀に意識を集中する。短刀に含まれているミスリルが魔力を吸って青白く輝く。

もっと、もっとだ。

もっと輝け。

女神になんて負けないくらい、明るくなれ――。

『――――あなたの相手をするのは、我ではありません』

すると女神は言った。

「やれやれ……」

僕と女神の間に現れたのは、小柄な老人だ。

「まさか、ワシが直接戦うことになるとは」

幻想鬼人（ヴィジョンオーガ）はつぶやくと、腕のストレッチを始めた。

★　ダンテス　★

「ミミノッ、すまねえ、伏せろ！！」

ダンテスの大盾でかばいきれなかったドワーフの斬撃が、後方にいるミミノを襲う。

「うおっとぉ！？」

がばりと伏せたミミノの後ろ髪が少々切れて飛んだ。

「ミミノさん！　魔法の余波はケアしなくて問題ありません！　ダンテスさんのカバーを！」

ユーリーだけでなく、ノームの魔法も【火魔法】で相殺しているアナスタシアは、額にびっしりと汗をかいていた。

魔法の適性が高いというエルフの中でも、ハイエルフは桁違いの達人であることが多い。

さらにユーリーは数いる兄妹の中でも最強の魔法使い。

いくらアナスタシアが、レイジから見ても規格外の魔力の持ち主であったとしても、ユーリーの相手をするのはかなり大変のはずで、さらにはノームの長老の魔法が不規則に飛んでくるのだから相当キツイのだろう。

「……アナスタシア！　キツくなったらすぐ言うべな！」

「はい！」

現在進行形で「キツイ」のは間違いないと思われるが、それでもアナスタシアは弱音を吐かなかった。
それ以上にキツそうなダンテスが目の前にいるからだ。

「う、おおおおおおおおッ！！」

大盾でグレンジードの槍を押し返し、隙を突いて打ち込んできたミンミンシャンの拳にメイスを打ちつける。
火花こそ出ないが、硬質な音が鳴る。

「ぜえ、ぜぇっ、はあ、はぁっ」
「ダンテス、ポーション！」
「飲むヒマが、ねぇっ！！」

ドワーフが死角から斬り込んでくる。
振り向きざま大盾で正面から受け止めると、グレンジードとミンミンシャンが迫ってくる。

「そぉいっ！」

ミミノがグレンジードとミンミンシャンの鼻先に、２つの小さなボトルを放り投げた。
ふたりは無視して突っ込んで来るが、ボトルが身体に触れるや小さな爆発を起こして勢いを止める。

「ナイスッ……！」

その間にダンテスはドワーフの横面にメイスを叩き込み、

「おおおおおおッ！」

力任せに振り抜いた。
金色に光っていた目が弾け、顔の上半分がこそげ飛んだ。
身体は地面を転がって行ったが、しばらくすると起き上がり、ふつふつと湧き上がるように青白い顔、金色の目が復活する。

「……クソが。キリがねえ」

実のところ、すでに何度か青い敵の破壊は成功していた。
最初にアナスタシアの魔法がノームの長老を焼き尽くしたのだ。
だが、残ったチリのような青色の存在から、少し時間が掛かったものの、元通りの存在へと復活を遂げたのである。

「ダンテス、しゃっきりするべな！」

ミミノが投げたポーションは、ダンテスの後頭部にぶつかって割れた。
中身が飛び出すと、半分はダメになってしまったが残りはダンテスの身体に掛かり、染みこんでいく。

「あ～……助かるぜ、ミミノ。飲むヒマねぇから、後のもこうしてくれ」
「これ1本作るのに、金貨2枚掛かるんだけどなぁ」
「……」

少し沈黙して、

「……命あっての物種だ」
「ま、そうだね」

ふたりはうなずいた。

「おらぁ、掛かってこい！」

ダンテスはメイスで大盾をガンガンと鳴らして敵を挑発する。
ほんとうなら支援役のミミノを攻撃するのが筋だろうが、敵はダンテスの単純な挑発に乗ってしまっている。
本能的に動いているだけのようだ。
だからこそ、ダンテスも、アナスタシアも、なんとか敵の攻撃をしのげている。
でなければ一流の戦闘能力を持った敵を複数相手になんてできはしない。

（どうしたらいいべな……倒しても倒しても、敵は復活する。それに魔力も無尽蔵なのか？）

敵は一向に疲れた気配もない。
逆にアナスタシアの魔力も、ミミノの薬剤も、いずれは底をつく。
このまま戦い続けても、もって３０分かそこいらだろう。
それほどの消耗戦になっていた。

（レイジくん、勝算はあるべな？）

ミミノは離れた場所で戦っているレイジを見た。
そして――目を見開いた。

★

幻想鬼人の老人は、自身が戦えないから黒い魔導生命体を創り出していたのだと思っていた。
でもそれは――大きな間違いだった。

「……こうなったら、手加減を期待するんじゃねえぞ。何百年ぶりかに解放するからよ、そもそも手加減なんてできっこねえけどな――『災厄の子』よ」

巨大な赤鬼がそこにいた。
老人であった面影はもうどこにもない。
纏っていた着物はすべてちぎれ飛び、身長は3メートルを超える。
露出している肌は赤銅色で、体毛で覆われている部分は灰銀色だ。
額に1本、こめかみから2本の角が生え、天を突くようにそそり立っている。
気難しい老人だった顔はなく、深い琥珀色をした目は吊り上がり、口からは牙がのぞいていた。

「……！！」

幻想鬼人の言葉に、僕は身構える。
次の瞬間、幻想鬼人は僕に向かって駈け出した――その速度は瞬間移動したのではないかと思えるほどで、

「――ぐっ！？」

ショルダータックルがぶち当たり、僕の身体は背後に吹き飛んだ。
ぎりぎり。
なんとかぎりぎり、両腕で防御できたけれど、骨にヒビが入っているのを感じた。
地面に叩きつけられる前に【風魔法】で速度を殺し、身体を反転

させる――。

「遅いぞ」

「！？」

上から幻想鬼人が降ってきた！？

組んだ両手を僕目がけて振り下ろしてくる。

【火魔法】で小さな爆発を起こし、僕は緊急回避。

「面白れぇ魔法の使い方をするじゃねえか。長生きしてみるもんだ」

「……僕はあなたと戦いたくありません」

着地して距離を置いた僕は、【回復魔法】で身体を癒しながら言う。

「今さらバカなこと言いおって。女神様にたてついたお前を排除するのは当然だろう」

「でも！　僕のような転生者は、都合のいいように扱われて、用が済んだら殺されるのですか！？　そんなの、あまりに身勝手です」

「いいか？　女神様はこの世界を統治なさる貴き存在だ。ワシらがそれに従うのは当然のことだろう。ワシはあまりにも長い年月を生きてきたが、それもすべて女神様が望む世界を作り上げるため」

「違う……そんなの間違っています。生き物はもっと自由でいいはずです！」

「その結果、世界が滅んでもいいとお前は言うのだな？」

「世界が滅ばぬよう、知恵を絞って行動する自由すらないのですか。生きるすべてを女神の言いなりだなんて、そんな世界ならないほうがいい」

「ほう、世界の崩壊を望むとは……やはり『災厄の子』だったな」

「違う！」

僕は声を張り上げる。

「みんな懸命に生きているんです！　貧乏に苦しむ人も、重い責任に苦しむ人も、思い描くように生きられないことに苦しむ人も、病に苦しむ人も、懸命に生きています。その彼らの苦しみや努力が、すべて『女神の意思』だなんて……あっていいはずがありません！」

すると――幻想鬼人は、ふっ、と小さく笑った。

（ああ……この人は、やっぱりわかっているんだ。僕の考えも、僕たちの思いもすべてちゃんとわかっているんだ）

そこへ、

『――――幻想鬼人、おしゃべりはそのあたりまでにしてください』

「おっと……これは失礼しました、女神様。そういうわけで、『災厄の子』よ、勝負に移るぞ」

「……」

「準備はいいか？」

僕は短刀を構える。

「……打ち破らなければいけない相手ならば、打ち破るのみ」

「その決意やよし」

幻想鬼人の巨体があっという間に僕の前へと迫る。

天賦と魔法を上乗せし、さらに魔力まで突っ込んだ短刀の刃を振り抜くと、幻想鬼人の拳にぶつかる。

雷鳴のような火花が走る。

「オオオオオオオオオオ！！」

「ぜあああああああああ！！」

雨のように振り下ろされる拳に僕は短刀をぶつけ、弾いていく。

魔力が弾け、衝撃波が周囲に飛び散る。

僕の皮膚はあちこちが裂けていたがすぐさま【回復魔法】で治癒していく。

真っ向からの殴り合い。

最高の武器がなければすぐにも僕は打ち負けていただろう。

こんなにも――強かったのだ。

幻想鬼人は。

それは、そうなのだろう。

竜だって隔絶した存在だし、その対となる調停者が幻想鬼人なのだから。

「そんなものか『災厄の子』よ！！」

「うおおおおおおおおお！！」

「！？」

幻想鬼人はその瞬間、攻撃を止めて上体を反らした。

僕の短刀から、黒い剣がうっすら伸びており、それは幻想鬼人の胸を切り裂いていた。

距離を置いた幻想鬼人の胸からどくどくと血があふれている。

（初見であれをかわすのか……）

こっそりと練習していた【影王魔剣術（シャドウキング）】。

姉のラルクの力。

女神戦の隠し球として使おうと思っていたのだけれど、幻想鬼人相手に出さざるを得なかった。

「……おお、怖い怖い。あんな攻撃方法を持っているとはな」

「ずいぶんと余裕そうですが、結構な重傷ですよ？　あなたにそれを治す手段はないのでは？」

幻想鬼人の身体には無数の傷がついている。

そして彼は今までその傷をすべて放置している――【回復魔法】の類は使えないのだろうと僕は踏んでいた。

ダンテスさんたちが戦っている青い存在とは根本的に違い、幻想鬼人は本人がこの場に呼ばれているのだ。

「そうだな。ワシに、これを治す手段はない」

「それなら、ここで止めませんか――」

「――ワシにはない、と言ったのだぞ？」

「！？」

その瞬間、幻想鬼人の身体が金色に輝くと胸の傷はすっかり塞がっていた。

『――――この程度の傷は傷のうちに入りません』

女神の力だ。

（ズルすぎるだろ、その力……）

だけど、女神自身は直接攻撃をしてこない。

前回の白い空間では、エルさんを破壊し、僕を弾き飛ばしたあの光線を撃ってこないのだ。

それこそが、勝機だ。

「……さて、それでは続きと行くぞ」

首をごきりごきりと回しながら幻想鬼人は言った。

「！」

そしてそのとき――僕は、気がついた。
この白い空間の「白」に、わずかに陰りが出ていることに。
待っていた。
これを、待っていた。

「もう、聞かないのですか」

僕は幻想鬼人に言った。

「なにがだ？」
「準備はいいかと」

そのとき――幻想鬼人は虚を突かれたように目を見開いた。

「できましたよ、準備」

にやり、と口元をゆがめた幻想鬼人は――くるりと身を翻した。
そしてすぐそこにいた存在。
輝く光の女神に向かって、拳を繰り出したのだった。

女神戦（後書き）

「準備」がなんなのかについては次話で。

コミカライズ版「オバスキ」1巻が発売中です。
また7月末発売電撃大王でも巻頭に掲載していただきました。
是非お読みくださいませ。
別作品「察知されない最強職」のコミカライズも8／3に発売されます。
ほぼ同日発売のヤングエースでは表紙を飾ります。
こちらもなにとぞよろしくお願いします！

★　ブランストーク湖上国　大聖堂　★

「――こっちに逃げたぞ」
「――逃げ足の速いヤツだ」

神殿騎士は大聖堂内を走り回っているが、まだその姿をはっきり捉えることも、ましてや捕まえることもできてはいない。

「あーしを追うにはちょっとレベル低いっすねえ～よっと」

窓を開けてゼリィが壺を投げると、階下のバルコニーに落ちてとんでもない音が鳴る。

避難していたらしいメイドの金切り声が聞こえるが、よほど高いものだったに違いない。

音に困惑する騎士たちは、ゼリィの位置がまたわからなくなる。

壺のあった部屋へ踏み込んできたときには、とっくにどこかにいなくなっている。

かく乱は、ゼリィの得意中の得意だった。

「……だけど、このままじゃじり貧っすよ」

窓の外、はるか、敷地の外ではエヴァとマクシム隊長たちとが戦っている。

神殿騎士の数が少なかったこともあり、さらにはエヴァが発動す

る「鼓舞の魔瞳」によって騎士同士の同士討ちもあり、なんとか戦線は拮抗している。
だけれど、それもいつまで続くか。
エヴァは疲労困憊だし、騎士たちはすっかり息が上がっている。

「あーしにはできることをするだけっすけど……」

巨大建造物である聖堂内を駈け回り、混乱を引き起こしながらゼリィはどんどん奥へと進んでいく。
ゼリィの目的は神殿騎士をこちらに引きつけることだが、

「坊ちゃん……どこに行ったんすか」

気がつけばレイジたちの姿が消えており、ここで戦う意味がわからなくなってきている。

「ん？」

そのときゼリィは、装飾がやたら豪華な廊下へと出た。
ぺた、ぺた……と裸足で歩いているのは教皇その人だ。
虚ろな瞳で、衰弱しきっている。

（！？）

だけれどゼリィがさらに驚いたのは、

「聖下」

彼女に駈け寄り、歩くのを手助けした修道女が一一見覚えのある人物だったことだ。

（ノンさん……！？）

ノンは、教皇の手助けをしながら奥の間へと向かう。

（なんでここに……あ、いや、確かノンさんはここにいたんでしたねえ！？　でも教皇の付き人をやるほど偉くなってたんすか！？）

わけがわからないでいるゼリィは、すぐ後ろに忍び寄っている人物に気づかなかった。

★

幻想鬼人が振り返り、繰り出した拳は女神に直撃する。

衝撃とともに光があふれ、目を開けていられないほどになるけれど僕は【闇魔法】を展開してなにが起きているのかを確認する。

女神の周囲に展開されている障壁。

これに、かすかに、ヒビが入った。

「全力出したんだが……それでこれか。少々ショックではある」

『――――なんのつもりですか、幻想鬼人』

ヒビは即座に塞がった。

「そう、難しいことじゃありませんぜ。ワシも、竜も、そろそろアンタに頭を下げるのに疲れたちゅうだけで」

『――――裏切るのですか』

「もう契約は終わっとるでしょう」

『――――残念です……幻想鬼人。あなたは竜と違い、冷静な判断ができると思っていたのですが』

スッ、と手を掲げた女神だったが、それから数秒経ってもなにも起きなかった。

「……無駄ですな、女神様。大聖堂の魔術は、今ごろワシの人形たちが壊しとるはずだ」

幻想鬼人の創り出した黒い炎の魔導生命体。あれは影竜と戦っていたはずだけれど、幻想鬼人が命令すればすぐにも戦わなくなるだろう。

そうなれば――影竜と魔導生命体とで大聖堂の破壊を始めるのはたやすい。

とはいえ、軍船を吹っ飛ばしたような影竜の攻撃では多くの死者が出てしまう。

僕はあらかじめ、精神に影響するような魔道具の破壊だけを影竜にお願いしておいた。

『――――なるほど。用意周到に、裏切るつもりであったことを理解しました』

女神の言うとおりだ。

幻想鬼人は最初から裏切るつもりだった。

ただそれを誰にも――竜にも――言わなかっただけで。

竜たちと話したときに、「薬理の賢者」様は僕に言った。

――幻想鬼人が、なにを考えているのかはわからぬ。きっと、君に入れ込みすぎの我らに呆れているのだろう。だが……こうも思うのだ。幻想鬼人もまた、女神に従うのはもう懲りたのではないかと。

幻想鬼人は僕が竜の力を借りてここに来たときに、なんの作戦もなく来たわけじゃないと思ったのだろう。だから「準備」という言葉に力を込めて話をした。

準備。

そう、準備だ。

女神を斃す準備だ。

それなら――できている。

『――――愚かだと言わざるを得ません。竜も、幻想鬼人も、大人しくしていれば苦しみもなく生きていけたというのに』

その声に、僕はわずかな「苛立ち」を感じ取った。

女神が、「超越者」が、苛立っているのだ。

女神は再度手を掲げる。

「だからそれは効かな――っぐ!?」

幻想鬼人が胸を押さえ、うずくまる。

しゅるしゅると空気が抜けるように身体が小さくなっていく。

「だ、大丈夫ですか!?」

僕が駈け寄ろうとすると、幻想鬼人は手で僕を制する。

「……お、お前がやるのは、女神（ヤツ）とケリをつけることだ……！」

幻想鬼人は立ち上がると、もう一度、女神へと踏み込んで拳を繰り出した。
光が弾ける。
甲高く、耳障りな音が耳を刺す。

「――ごほっ」
「幻想鬼人さん！」

ごぼっ、と口から血を吐いた幻想鬼人は、すでに老人の大きさにまで戻っていた。
その場に膝をついた幻想鬼人に駆け寄り、見上げる。
女神はそこに輝くまま立っている――ただし、障壁には大きくヒビが入っている。

『――――愚かな』

「愚かかどうかは……ワシが決めること。どけ、坊主」

僕を乱暴に押しのけ、立ち上がった幻想鬼人はその障壁に手を突いた。

「ちびちびと永らえてきたこの命……ようやく使い道を見つけたよ」
「！」

その身体から紫色の炎が立ち上ると同時に、障壁のヒビは大きく広がり、硬質な音とともに崩れていく。

「行けッ、坊主……お前、こそ、が……」

幻想鬼人がその場に倒れる。
放ってはおけない。
だけれど、彼の言ったとおりこれは最初で最後のチャンスだ。

「行きます」

障壁を割って中へと飛び込む。
すぐ目の前に女神がいる。

「……の……子……」

幻想鬼人がなんと言ったのかは聞こえなかった。
僕は短刀を握りしめ、繰り出していたからだ。

「おおおおおおおおおおおおッ――――」

そして女神は――いや、女神と僕は、その姿を消した。

★　白の空間　★

「消えた……？」
「はあ、はぁっ、はあ……」
「！　アナスタシア、大丈夫か」

戦っていたグレンジードたちの青白い姿が消えたと思うと、アナスタシアがその場に崩れ落ちた。ダンテスが駈け寄ると彼女は荒く息を吐いている。

「も、もう少しで、限界でした……」

魔力切れの症状だ。

「わかった、しゃべらなくていい――ミミノ！　魔力の回復薬を！」

「――しっかりするべな！」

ミミノは、離れた場所にいた幻想鬼人を抱き起こしていた。

明らかにそちらは重傷――命に響きそうな傷だとわかる。

幻想鬼人は目を閉じたまま、動かなかった。

「しっかり！　目を開けて！　ポーションねじ込むぞ！」

ミミノは懐からビンを取り出して、幻想鬼人の口に当てる。

次の瞬間、地面が揺れ、白の空間の白色が明滅を始めた。

「な、な、な、なんっ、なんだ……！？」

ポーションが跳ねて地面を転がって行く――と、びしり、と地面に亀裂が走った。

次の瞬間、浮遊感とともに白が消失した。

「うおわ！？」

ダンテスが腕を振ったがなにもつかめず、すぐに、足は草の生えた地面に触れた。

「こ、ここは……戻った、のか？」

彼らがいたのはブランストーク湖上国の湖畔だった。

近くにはエヴァや神殿騎士たちがいる。
影竜と黒い炎の魔導生命体はどこにも見当たらなかったが――周囲はやたらと静まり返っていた。

「なん、だ……？」

その理由は明らかだった。
夜も明けた時間帯。
空は一面の晴天――のはずが、黒い雲が立ちこめていた。
雲には雷鳴が龍のように走っている。
そして雲と雲の隙間からは、血のように赤い光が漏れている。

「なにが起きようとしている……？」

生ぬるい風が吹いて、ダンテスは背筋にひやりとしたものを感じた。

★

突然目の前が真っ暗になったのかと思ったけれど、僕が立っていたのは薄暗く、広く、かび臭い空洞だった。
真っ先に思い出したのは「六天鉱山」だ。
でも、あそこと違うのは――足元が平らで、人工物を思わせること。
そして僕の１０メートルほど先にひとりの女性が立っていること、だった。
光がないこの場所で、なぜ目が見えているのかはわからない。
でも確かに、そこに女性が立っていた。

「……女神だな？」

僕は確信を持ってたずねた。

その女性はゆったりとした布を重ねて着ており、その長い髪や顔の作りは各地で建造されている女神像にそっくりだった。

この空間はいったい何なのか。

女神の住処？

世界のどこかに、こんな場所があって、ここから女神は遠隔操作をしているのか？

その答えは目の前にある。

「そうよ」

女は答えた。

声はしっとりとしていて、年齢は３０代といったところだろうか。

もちろん、実際の年齢は何百何千だろうから、肉体の年齢だ。

だけれど問題は声の質じゃない。

話した内容でもない。

その――言語だ。

女が答えたのは――その黒髪黒目の女が使ったのは。

日本語だった。

「……」

僕が日本人の転移者で、日本語がわかるからこそ、わざわざ日本語を使ったのだ。

すると女は言う。

「……驚いた感じがしないな？　お前は、私が日本人だと気づいて

いたのか？」
「驚かなかったわけじゃない。ただ、可能性のひとつとして考えていただけだった。女神はひょっとしたら、僕と同じ転生者かもしれないということを」
女神の髪の色や目の色は伝えられていないし、登場してもとにかく光っていてよく見えなかった。
だけど僕は、なんとなく女神は日本人ではないかと思っていたのだ。
「災厄の子」と呼ばれる黒髪黒目の転生者が日本人だ。
すべてを日本人でそろえていることにはなにか理由があるはずだ。
ひとつは、わかりやすいこと。
黒髪黒目がこの世界にいないのなら、日本人をピックアップして転移させれば一一女神がもしも転移させているのであれば一一目立つ。
もうひとつは、女神自身が日本人だからだ。
「それで……『災厄の子』よ、お前のせいで計画は大幅に狂ったぞ」
「黒髪黒目を『災厄の子』だと言うのなら、お前だってそうじゃないか」
「そう。私が最初の『災厄の子』だった」
女は淡々としていた。
その言葉になんの感情も乗っていないために、まるで用意されたテキストを棒読みされているかのようだった。
「……幻想鬼人が裏切ったときには、もうちょっと感情豊かだったのにな」
ぴくり、と女の眉が動く。

だけれどそれだけだった。
長い間、調停者として動いてくれた幻想鬼人と、ポッと出の僕とじゃ、それは心に響くものが違うだろう。

「女神を名乗るとか……なんでこんなことをしてる？　お前の力はなんなんだ？　お前の以前にも転生者はいたのか？　お前の最終目的はなんなんだ？」

僕は疑問をぶつけた。

「……」

女神が口を開くことはなかった。
そうか、話す気はないか。
そうだろうね。
僕なんてお前からしたら、ただの計画の一部である駒で、使い捨てで、今もなお殺そうとしている相手だもんな。

「……」

女神はいつ手にしたのか、片刃の剣を手にしていた。
長く、白く仄光る刀身は雪で固めたようだ。

「死ね」

女神が動いた――と思った瞬間、数歩で距離を詰められた。

「！」

下からの斬り上げは熟練の冒険者を思わせる速度。

だけど、

「――こちとら何度も死線をくぐってきてるんだ」

僕は紙一重で斬撃をかわすと、すれ違いざま短刀を振り抜いた。

女神の首を――骨ごと断ち切って、斬り飛ばす。

血しぶきをまき散らしながらぐるんぐるんと回転した女神の首は、地面に落ちてどしゃりと音を立てる。

ふらり、と首を失った身体が揺らぐと、その場に倒れ、どくどくと血を流す。

「……」

あっけなかった。

あまりにもあっけない幕切れだ。

だけど、こんなものなのかもしれない。

女神のいる――女神本体のいる場所へと到達したならば、斃すのはたやすいのだ。

だからこそ女神はあの白い空間を利用し、信者を利用し、僕らを殺そうとした。

まだ不完全だったからだ。

力が足りず、「世界結合」の影響なのか光線を放つほどの力もなく、ひたすら「女神神殿」建造を推し進めて信者の力をかき集めようとした。

その真実の姿が、これだ。

（意外と……なんとも思わないんだな……）

僕は女神を、同じ日本人を殺したことに対する意識が薄いことに気づいた。

罪悪感も、達成感も、忌避感も、安心感も、なにもない。

（……女神を斃したら、どうなるんだろう。……どうもならないか。あるべき世界に戻るだけ）

天賦珠玉も、盟約者も、調停者もなくなり、あるのは厳しい自然とそこに暮らす者の世界。

もともと、人々は厳しい自然の前に敗北しようとしていた。

だけれどそこに無理やり手をつっこんだのが女神だ。

（人々は生きていけるんだろうか？　天賦珠玉もない世界で……それを乗り越えていくのが、人なんだよね……）

僕は周囲を見回す。

さて、と……。

僕はここからどう帰ったらいいんだろうね？

「……」

そのとき、倒れた女神のほうからなにかが動く気配がした。

「……マジですか」

女神は立ち上がり、首を元に戻すとそれがくっついた。口からあぶくのように血があふれ、それを「ペッ」と吐くと、次はいつ手にしたのか白い槍を持っている。

女神は僕に向かって走り出す。

「何度やっても同じだ」

鋭い突きだけれど、僕には届かない。
次は首と両腕を切り捨てた。
正直……ひどい絵面だ。見たくない。
だけれど見なければならない――。

「……復活するのか」

かなり離れたところに腕は落ちていたのだけれど、それが消えると、女神の身体にくっついて再生する。
次は斧だった。
次は弓だった。
次は棍だった。
次は、次は、次は――。

「はあ、はあ、はぁっ……」

さすがに精神的に堪える。
身体をバラバラにしても、【火魔法】で焼いても、【土魔法】で閉じ込めても、女神は復活した。

「……」

身体中が血と、汚れをこびりつかせ、着ていた服も四散してぼろぼろになってなお無表情で女神は立っていた。
今の武器は、錫杖だ。

「はあ、はあ、はあ……」
「……怖いか？」
「！！」

久しぶりに聞いた女神の声に、僕はどきりとした。
怖い？
何度殺してもよみがえる女神が、怖い？

「……信仰心がある限り、何度でもよみがえるってことか。だけど僕はこの先何回戦ってもお前に勝つ」
「では千回なら？　１万回なら？」
「……」
「……その顔が見たかった」

僕はきっと苦しげな顔をしているのだろう。
女神はそのときはっきりと――表情を崩した。
にこやかに笑ったのだ。

「私の計画を破壊し、私自身をここまで痛めつけたのだから、もっと苦しむ顔を見せてくれ」

女神は錫杖を構えた。

「――まさか」
「『使えない』と思ったか？」

錫杖が光る――瞬間、目もくらむほどの光線が放たれて僕の身体目がけて飛び込んで来た。

つまらない、悪あがき（前書き）

●前回あらすじ：
女神の障壁を破った幻想鬼人。そしてレイジは女神の本体がいる場所へと到達した。
そこは暗く、広い空間。だが「白い空間」のように非現実的なそれではなく、この世界のどこかにあるような場所だった。
女神の正体はレイジと同じ異世界人――黒髪黒目の日本人の、転移者だった。
直接対決でレイジは女神を斃したと思ったが、女神は何度でも復活した。そして、使えないと踏んでいた光線攻撃がレイジを襲う。

つまらない、悪あがき

目の前が真っ白に染まる。
女神の放った光線が僕の身体に直撃しようとする――。

（……くっ）

この攻撃についてもずっと考えていた。
いったいどのような性質で、どんなエネルギーなのか。
今までの戦いの中で見てきたうちでも、トップクラスに破壊力がある攻撃。
でも。
破壊力の高い攻撃ならば他にもあった。
竜の息吹。
黒の魔導生命体の破壊光線。
アーシャの【火魔法】。
フォレストイーターの突進。
終焉牙の魔法。
それらとは一線を画するような攻撃なのか？

（違う。絶対に違う。この世界に存在する、なんらかの攻撃手段だ）

女神が、僕と同じ、世界を越えてやってきた者だとわかって――
さらに確信を得た。
女神は神でもなければ創造者でもない。
すでに世界にあるものを使っているだけの存在。
つまり。
「天賦珠玉」によって得られるような、攻撃手段なんだ。

それなら――。

「おおおおおおおおおッ！！」

僕が展開したのは「白」の対極にある「黒」。
姉であるラルクが使っていた【影王魔剣術】。
僕にできうる限り最大限の出力で黒の斬撃を放つ。
黒と白が混じり合い、しかし、

（足りない……！！）

まだ使い慣れていない【影王魔剣術】では光線を消しきることができない。
僕は身体を反らしたけれど、それでも光線が左肩に当たり、僕の身体ははね飛ばされる。
身体がボールみたいに地面を跳ねた。
危ない……。
一瞬、意識が飛びかけた。
光線から広がる熱が僕の身体を焼くのを感じる。
【回復魔法】をすぐに展開するけれど、痛みがなかなか引かない。
そして【影王魔剣術】を使ったせいで僕の体力も大幅に磨り減っていた。

「……まだ生きてるなんて。ほんとうにしぶとい。昆虫並みだな」

女がゆっくりと近づいてくる。
寝ていては、ダメだ。
僕は立ち上がるが、どこに飛んだのか短刀が手元になかった。

「お前には悩まされたが、それも終わる。そう思うと久々に感じる

よ……うれしいという感情を」
「っぐぶ！？」
錫杖が振り回され、かわすこともできず僕の腕にめり込み、僕はそのまま吹っ飛ばされる。
「何千年……いったいどれくらいだろうか。長生きも過ぎると感動をすることがなくなる」
「……」
僕は立ち上がる。
ゆっくりと近づいてくる女に――笑みを浮かべたままの女をにらむ。
「どうした。攻撃してこないのか？　ああ、そうだったな。私は何度でもよみがえる。だから攻撃など意味がないのだったな。先ほど、お前の絶望した顔を見たのだったな。――ほら」
「っぐ！」
錫杖が無造作に振り回される。
今度は、両腕で防いだけれど、それでも後ろに吹っ飛ばされて地面を転がった。
「そろそろ終わりにするか。お前を殺し、私は現世に降臨する。これでイレギュラーはない」
「……」
僕は、なけなしの力を振り絞って立ち上がる。
「……寝ていればいいものを」

呆れたような女の声。

「なんだ、お前は？　叩かれることが趣味なのか？」

カラカラカラカラと錫杖を地面に引きずりながら女が歩いてくる。

「……撃ってみろよ」

僕は言った。ガラガラの声で。

身体中が痛い。

僕だって、寝てていいなら寝転がっていたい。

だけど――ここで寝てはダメだ。

「は？」

「さっきの光線、もう一発撃ってみろよ」

僕はこの女を斃すためにここに来たのだから。

「……」

「撃てないんだろ……だからその棒きれで、僕を叩くんだ。それともお前は、棒きれで誰か叩くのが趣味なのか？」

「負け犬の遠吠えを！」

「【火魔法】」

踏み込んできた女神の身体に向けて、僕は魔法を放つ。

魔力の残りも少なくなっているから殺傷力は低めで、単に女を吹っ飛ばす程度のものだったが――まさか反撃があると思わなかったのだろう、女は転がった。

「……つまらない悪あがきをするな。お前はここで死ぬ運命なのだから」

すぐに女は起き上がり、錫杖を手にした。
ダメージはほとんど入っていない。

「神でもないのに『運命』とか言うな」

僕の言葉に、女の身体がぴたりと止まった。

「生きるためにあがく人を、『つまらない』とか言うな」

女の顔からは笑みが消えている。

「お前は女神でもなければニセモノの神ですらない。ただ長生きした、独りよがりの女だ」

その瞬間、女の顔が――崩れた。

「うるさいぃぃぃぃぃぃいいいいいいいいいい！！！！！」

甲高い声を発した口は醜く歪み、目が吊り上がった。
急に２０も３０も年を取ったような疲れ果てた顔だ。

「お望み通り一発で殺してやるぅぅぅぅ！！」

女が錫杖を僕に向けた。
先ほどと同じ構え、そして先ほどと同じ光線が――。

「………………？」

出なかった。

「ふー……ようやくか」

僕は安堵のため息を吐いた。

「お前、なにをした。私になにをしたのよ」

「まだわからないのか？　やっぱりただの人なんだね」

「言えぇ！」

錫杖をこちらにぶん投げてきたけれど、【風魔法】で難なくその軌道を逸らした。

「あの光線、かなりのエネルギーを使うんだろ？　それだけじゃない、何度も何度も肉体を復活させるのだってエネルギーを使うはずだ。生命力なのか、魔力なのかはその仕組みはわからないけどな」

「だからなんなの！！　もったいぶってんじゃないわよ！」

「それを供給しているのはなんだ？」

「……」

女は、自分の両手を不思議そうに見やる。

まるでそこを見れば無尽蔵に水が湧き出るはずなのに、とでも言いたげに。

「……力が……入ってこない……？」

「さっき転んだときにできたアンタの額の傷だって、治っていない」

「！」

ハッとして女は額に手を当てる。

指先に血がついたが、痛みよりもなによりも、女はその事実にショックを受けていた。

「どうしてだか、わかる？」

女は今や青ざめていた。

指先の血を呆然と見つめている。

「どうして『力が入ってこない』のか、わかる？」

「……な、なにをしたのよ。ブランストークの大聖堂を壊したくらいじゃ、なにも変化はないはず……」

僕はそのとき、作戦が成功したことを確信した。

この女はブランストーク大聖堂しか気にしていなかった。

そうなるように仕向けたからだ。

竜に乗って派手な登場。

調停者同士の対決。

「銀の天秤」のみんなと、白の空間での戦い。

それもすべて女神の注目を集めるためのこと。

「！！」

女神はそのとき、気がついたようだ。

「ま、まさか、お前は、まさか……」

僕はうなずいた。

「アンタから見たらつまらない存在の人たちと、力を合わせて、悪あがきをしたんだよ。僕は――僕たちは、大陸中の女神神殿を一斉

に破壊したんだ」

★　クルヴァーン聖王国　★

「なんだなんだ、まともな騎士は残っちゃいねえのかよ！」

ミュール辺境伯の振り回した両手斧が、カイトシールドを構えた騎士たちを吹き飛ばしていく。

聖都クルヴァーニュの中央大通りは、早朝からの動乱で、通行人ひとりおらず緊迫した空気が流れていた。

人々は窓の隙間から外の様子をうかがっていた。

戦っているのは聖王国の騎士や兵士同士であり、なにが起きているのか正確に理解できる者は一般市民にはいなかった。

「そもそもお主とまともに戦える者などほとんどおらんだろうが」

馬上のルシエル公爵は苦笑交じりに言う。

「へっ。オーギュスタンのジイさんが敵だったらまだ骨があったんだがな」

「ほほほ」

ミュール辺境伯の軽口に、ルシエル公爵の隣に控えていた老人が小さく笑う。

星5つの天賦【竜剣術】を扱うオーギュスタンは、この国最高の武力として考えられているが、彼はルシエル公爵家の人間だった。

「続々と来たぞ、辺境伯」

前方から、完全装備の騎士隊がやってくる。
５大公爵家のロズィエ、リス、ラメール公爵家は防衛サイドだ。
残りひとつのエベーニュ公爵家は聖女王を保護している。

「人数としては3倍といったところか。どうだ、オーギュスタン」
「ほほほ。年寄りの死に場所としてはまたとないでしょう」
「いやいや、聖女王陛下は、『死ぬな』と仰せだ」
「ふうむ、そのほうが難しいですが、まあ、やってみましょう」

オーギュスタンはその背に似合わぬ長い長い剣を携え、ミュール辺境伯の横に立った。

「陛下は、犠牲が多く出ることを望んでおられぬ。なるべく時間を稼ぐことだ」

後ろからルシエル公爵が声を掛ける。

「わーってるよ。それよりそっちの別働隊は大丈夫なんだろうな？」
「ここでこれだけの騒ぎを起こしておるのだ、聖堂の――女神神殿の破壊くらいたいしたことはなかろう」
「よし。それなら――あとは気兼ねなく暴れられるな」

ミュール辺境伯の目がぎらりと輝いた。

「行くぜエエエエエエエ！　ぶっ殺せ！！」

彼の後に続けとばかりに、辺境伯領の腕利き兵士たちが雄叫びを上げる。

「ほほほ」

オーギュスタンも、軽やかに走り出した。

「……なるべく犠牲者を出すなと言っておるのに」

ルシエル公爵はため息を吐いた。

同時刻、聖王国内の小都市でも秘密裏に動く影があった。

「ノック、これで魔術は破壊できたんダな？」

「たぶん……としか言えないな」

「しかしこれ以上はできんぞ」

「うむ」

その教会は――かつて教会であり、グレンジード公爵の命令で急ピッチで女神神殿に作り替えられていたものは、ひどい有様となっていた。

壁は破壊され、祭壇は破壊され、イスは破壊され、机は破壊され、説教壇は破壊されていた。

「な、な、な……」

騒ぎを聞きつけてやってきた兵士、それに教会の修道士は驚いて口をあんぐりさせている。

「な、何者ですか、あなたたちは……」

そこにいたのは、多くの種族が生活するこのクルヴァーン聖王国でも、あまり見かけない種族――ダークエルフが5人。
その誰もが、背は高く、筋骨隆々として、破壊活動をまったく隠す気もないのか両手に大槌を持っていた。

「靄が掛かっていたような頭が、すっきりしたとは思わんか、ヒト種族よ」
「え……？」

ノックの言葉に、今度はキョトンとする修道士。

「た、確かに……なにか今は、妙に思考が晴れやかだ……」
「つまりは、そういうことダ」
「なにが！？」
「サラバダ」

ダークエルフたちは身を翻すと、破壊した壁の穴から外へと飛び出していく。

「ちょっ！？　お、お、追って！　追ってください！　こんなことして罰が当たりますよ！？」

修道士が言うと、兵士たちもあわてて追いかけたが、空いた壁の穴からはこんな声が聞こえてくるだけだった。

――罰なら、レイジが与えに行ったさ。

と。

★　リグラ王国　★

キースグラン連邦内にあるリグラ王国の王都には、今、非常事態を告げる鐘が鳴り響いていた。

「――そんなバカな。見間違いではないのか？」

守備隊隊長は報告に戸惑っていた。

「いえ、間違いありません。何人もの監視兵が見ております――あれは、竜でした」

緑色の竜が飛来した。

そして、王都内に着陸するや、建物を破壊して飛び去った――。

いつまた竜が戻ってくるかもわからず、王都内は厳重警戒態勢となっている。

「今まで王都に竜が飛来した例などないぞ……」

「単に気まぐれで、やってきたとか」

「気まぐれで建物を壊して帰ったのか？　そんなことがあるわけなかろう――破壊されたのは確か」

兵士が答えた。

「女神神殿です」

この後、彼らの元に、各地の神殿を破壊し飛び去っていく同じ竜の報告が舞い込んでくることになるのだが――それはすべてが終わった翌日のことだ。

★　ウインドル共和国首都　★

夜明けの直後はいまだ暗い首都の路地裏だったが、立ち尽くす5人は光によって照らし出されていた。
ヒト種族よりも背は低く、オレンジや黄色、赤といった鮮やかな色で染め上げられた服を着ている。

「……これはやり過ぎでは、ヤンヤ？」
「……ど、どうだろうね？　やるなら徹底的に、って長老が言ってたべな」

エルダーホビットのヤンヤは冷や汗をかいていた。
彼女たちの目の前にあるのは女神神殿。
ただし、恐ろしいほどの炎を吹き上げている。

「――火事だ！」
「――消防組を呼んでくれ！　延焼を防がないとマズいぞ！」
「――避難しろーっ！」

付近の住民たちも目覚め、大声を上げている。
この火災はもちろんエルダーホビットたちの仕業だ。
作戦決行日の前日に首都に忍び込み、今日、火を点けた。
すべてはレイジと打ち合わせた通りに。
移動は竜が手伝ってくれたが、竜の背に乗って飛ぶことを嫌がった長老は若いヤンヤたちに指令を下したのだった。
神殿を燃やせ、と。
積年の恨みを今こそ晴らせ、と。

「よし、逃げるべ！」
「だな！」
「おーっ」

５人のエルダーホビットたちはわーっと逃げ出した。
本来ならこのあと、「女神の悪行を許さない！！」というお決まりのフレーズを連呼する予定だったが、そんな余裕はまったくなかった。
幸い、火災は女神神殿を焼いただけで済んだ。

★

アッヘンバッハ公爵領領都ユーヴェルマインズ

★

大陸各地で、今日、時間を合わせて女神神殿を破壊する――神殿の魔術を無効化する、という行動が行われていた。
直接的に飛び回れる竜はもちろん大活躍だったが、竜だけで大陸中の神殿を破壊できるものでもない。
エルフの国であるシルヴィス王国ではアーシャの兄であるマトヴェイが密かに行動をし、魔術の一部を削って、無効化までは行かないものの魔術の弱体化を導いた。
獣人の住む集落には竜人キミドリゴルンや地底人のスーメリアたちが忍び込んだ。
ノームの里には地底人種族の元帥たちが。
キースグラン連邦所属の各国には、ヴァルハラのゲッフェルト王や光天騎士王国のフリードリヒ将軍が精鋭を派遣し、破壊活動を行った――これが表沙汰になれば大問題になることはわかっていたが、それでもやらなければならぬと決断した。

「……ここに戻ってくることになるとはね」

薄暗い早朝、フードを目深にかぶった少女は真新しい神殿を見上げていた。

４年以上も前、ここには竜が飛来して大暴れした。

多くの建物が破壊され、一度は更地となった。

そこに建てられたのが――教会であり、今は女神神殿だ。

神殿の裏口には鍵が掛かっていたが、少女の手から黒く、小さな斬撃が発せられると、ロックを断ち切って扉は開いた。

暗い廊下を進んでいく。当直らしい警備兵がイスに座って居眠りをしている。

少女が通り抜けていくと、やがてホールへと出た。

天井が高いが、暗くてよく見えない。

ステンドグラスから入ってくる光量は少なかった。

かすかな光の中、直立している女の姿があり――女神の石像だった。

それこそが、この神殿の魔術の核となる部分であるらしい。

――姉さん、お願いがあるんだ。女神神殿を破壊するのを手伝って欲しい。

それは弟のレイジの頼み事。

自分がしてもらったことに比べれば、はるかに小さな頼み事。

「弟くんのためだったら、神殿のひとつやふたつ、ぶっ壊してやるよ」

ラルクの身体から立ち上る黒い渦。

それは――ラルクが訓練を重ねてモノにできるようになった【影

王魔剣術】。

天賦珠玉に頼らない、ラルクだけの力。

フォーン。

空を切る音は軽く、どこか間が抜けているような感じすらあった。

振り抜いたラルクの手の先には――5メートルはあろうかという巨大な黒の刃。

壁際にあった垂れ幕が途中で斬られてストンと落ちた。

それから少しして、女神像は身体の中央で真っ二つに断ち切られ、切り口からナナメにするりとずれていく。

やがてその上体が完全に離れて床に落ちると、ずーんと音と震動を立てた。

女神像の身体に埋まっていた魔術触媒がパァッと光を放つがすぐに収まっていく。

「な、何事だ!?」

物音に気づき、居眠りから目覚めた警備兵がホールに駆け込んできたがそこにはもう誰もいなかった。

ホールの入口、大扉の閂（かんぬき）が外されて外側に大きく開かれている。

外では、曙光が射して神殿の一部を照らしている。

「……」

外にいたラルクが振り返り、神殿を見上げた。

（あの日……あたしと弟くんが鉱山から逃げ出した日も、こんな夜明けだったっけ）

あれからずいぶんと時間が過ぎていた。

「あとは頼んだよ、弟くん」

★

大勢の人たちが時間を合わせて女神神殿の破壊をしてくれた。
核となる魔術の破壊を。

「……なっ……」

女はよろけるように、後ずさった。

「これで、終わりだ」

僕は女へと、手のひらを突きつけ、魔法を発動した。

つまらない、悪あがき（後書き）

次回「決着」です。

ある女の死

★　ＨＣｆ！ｋＭ＊Ｊ－ｙ１　★

昨日のことを思い出せと言われれば、かなり正確なことを思い出せるだろう。
１年前のことを思い出せと言われれば、詳細はともかくそこそこ思い出せるだろう。
１０年前のことを思い出せと言われれば、印象的な出来事でなければ難しいだろう。
では１００年前だったら。
１千年前だったら。

――ほんと、【ＨＣｆ！ｋＭ＊Ｊ－ｙ１】さんってすごいですよね。
――うんうん。頼りになる！
――今度、また相談お願いしてもいいですか？

彼女の脳裏にかすかに残っているのは、同じ、黒髪黒目の、２０年ほど生きた者たちに囲まれた記憶。
囲まれること。
頼りにされること。
それは、心を満たし、彼女を幸せな気持ちにさせた。

――また明日！
――【ＨＣｆ！ｋＭ＊Ｊ－ｙ１】さん、ちゃんと寝てくださいね。
昨日も残業だったじゃないですか。

――そうそう、がんばりすぎですよ！

彼らと別れ、その後、その後――なにが起きたのだったか。

彼女は気づけば違う世界に転移していた。

それは不運だったが、幸運もあった。

彼女には天賦（スキル）が与えられたのだ。

森の真ん中に放り出された彼女を生きながらえさせるほどには十分な天賦。

明らかに地球ではないこの世界で、彼女が生きていく上で頼りにするしかない唯一の天賦。

【不撓不屈（オモイハツウズ）】

彼女の気持ちが強ければ強いほど、あらゆることが叶えられた。

１週間の飢えをしのぐことも。

不治の病という老人を治療することも。

「剣聖」と呼ばれた剣客を倒すことも。

彼女はかつて「日本」というところにいたときの記憶を思い返し、頼られた記憶、満足した記憶で自身を強くした。

人々を感動させ、人々に感謝されると、彼女の天賦はさらに強くなった。

他者の「思い」もまた自分の力になると知った。

彼女は寿命さえも超越した。

彼女はやがてウワサになり、伝説になり、物語になった。

しかしやがて限界を知った。

世界の人口が、一定の数値から増えず、むしろ減少傾向にあったのだ。

この世界は崩壊に向かっていたのだ。

彼女は世界を救う方法を模索した。

そこで、自分に与えられた天賦について研究した。

天賦を、宝玉に閉じ込める方法を編み出した――その所業はヒト種族の限界をはるかに超越し、まさしく神の領域に足を踏み込んでいた。

気づけば彼女は、人々の間で「神」のように崇められていた。

集まった力は大きかった。

彼女は乾坤一擲の策を実行に移す。

世界を、分割する。

世界を、再構築する。

そのために2種族をピックアップした。

「竜」は「記憶を引き継ぎ種として永遠である」という力を与え、「幻想鬼人」には「超長命である」という力を与えた。

この2種は「調停者」として活動することになる。

世界を2つに割った彼女は――神とすら崇められた彼女は疲れ果て、長い長い眠りについた。

2つに割られた世界は混乱し、彼女を愛する者は消え、やがて忘れられたのだ。

長い長い年月が過ぎた。

調停者は盟約者を見守り、介入することなく過ごしていた。

盟約者たちは己の使命を種族の記憶に刻まれながらも、世界を再構築するという最終目標を知らぬままに過ごした。

2つに割られた世界の住人は「天賦珠玉」を使って、厳しい自然

を相手に生き延びていた。
人口は、片方の世界で増加に転じ、片方の世界で減少が進んだ。
減少ぶんよりも増加のほうが大きかったのは幸いだった。
長い眠りの中で、女神は歯がゆく思いながら世界の移り変わりを見つめていた。
たまに、人々の見る夢の中に現れるくらいのことはできたが、それくらいのものだった。
2つに割られた世界も少しずつほころびが生じ、崩壊に向かった。
もはやこれまでかと思ったが、イレギュラー……自分と同じ転生者が世界をかき乱し、やがて世界は再構築の道をたどる。
安堵しつつも、女神は決意していた。

――自分の手でコントロールしなければ……放っておいたら、無知なる人々はまた世界を崩壊させてしまう。

彼女はやがて世界が1つに戻ったときに、自分の力がある程度戻ってくるよう設計していた。
そして復活するや、自らが再度女神となり、人々の信仰を集めるのだ――以前よりも多くなった人口は、きっと自分の力になる。
予想外のトラブルは多かったが最初の目的、人口減少を防ぎ、頭数を増やすという目的は達成できた。
彼女は、自分に力があり、そして自分が君臨し続ければこの世界を守ることができると考えていた。

――ほんと、【ＨＣｆ！ｋＭ＊Ｊ－ｙ1】さんってすごいですよね。

そうだ、私はすごいのだ。
私だけがすごいのだ。
盟約者も調停者も頼りにはならなかった。

――うんうん。頼りになる！

そうだ、私を崇拝すればいいのだ。

力はすべて私に集めればいいのだ。

――今度、また相談お願いしてもいいですか？

人々の願いを叶え、争いのない世界を作るのは――この私だ。

「これで、終わりだ」

少年の声が聞こえてくる。

（どうして……）

魔法の発動を感じる。

（どうして……こんなことに）

彼女の脳裏によぎったのは、ひとりの人物だった。

★

残りの魔力をすべて使って、僕は「火炎嵐（フレイムトルネード）」を放った。

すべてを焼き尽くすつもりで。

さもなくばまた復活しそうな……そんな気がしたのだ。
轟、という音とともに火炎の竜巻が発生する。
女は叫び声を上げることもなくその炎に飲まれる。
僕の肌もひりつくほどに熱い。

「……ァ……」

人の姿を保っていられるのは後どれくらいか……というところで、女は口を開いた。

「……オモイハ、ツウズ……を……くれ、た……神なら……天賦を……与えた、私は……神では……ない、の……」

オモイハツウズ……思いは通ず？
なんのことだろう。

「……」

炎が消えていく。
彼女を塵にして。
すでに跡形もなくその姿はなくなっていて――灰だけが巻き上げられて空間を飛んでいった。
残り火が消えるとそれすらも見えなくなった。

「……」

まだ、復活するのではないか。
ひょっとしたら取りこぼした女神神殿があって、力を溜め込んでいるのではないか。

僕の知らないなにか秘策があるんじゃないか。

「……」

僕は警戒を崩さないままその場に立っていた。

だけれどこの暗闇ではなにも動くものはなく、ただ静まり返っていた。

どこかに空洞があるのだろう空気の流れる音だけが耳についた。

「……終わった」

ぽつりとつぶやいてみたけれど、それはひどく現実感がなかった。

――ドォンッ。

「！」

低く響く音とともに地面が揺れた。

この空間に衝撃が走ったのだ。

なんだ？

もしかして、自分が死ねばこの空間が崩壊するみたいなトラップが？

だとしたら――もう魔力も体力も残ってない僕には相当ヤバイぞ。

――ドォンッ！！

次の衝撃はすぐそこで起きた。パラパラと砂が落ち、次にはがれきが降ってくる。

「に、逃げなきゃ――」

――ドォォォォンッ！！！！

離れた場所の天井が崩落した。
太陽の光が射し込む――そこへ、ぬっ、と巨大な顔が現れた。

《レイジ！！！！》

大気を震わせるその大声を、僕は聞いたことがあった。
それは、鱗で覆われた顔から発せられていた。
巨大な、年老いた竜だ。

「『薬理の賢者』様……？」

竜の姿をした賢者様は、空間を滑空すると僕の前へと降り立った。
その風に煽られて僕はぺたんとその場に座ってしまう。

《レイジ、無事か》

「はい……なんとか。でもどうしてここに？」

《神殿を破壊したあと、空に変化があってな……その変化をたどっていくと、この場所に着いた。かすかに、女神様の気配が感じられたのだが》

「……斃しました」

すると巨大な竜は、目を見開いた。

《……そう、か。斃したか》

「はい……」

《ありがとう、レイジ。だが妙だな……我は女神様の気配がまだ消えていないように感じるのだ》

「!?　なんですって!?」

まだ、生きてるのか？
なんてしぶとい！
顔を上げた僕に、賢者様は言う。

《我の背に乗れ、レイジ。その場所へ向かう》

「は、はい！」

わずかに回復した魔力もすぐに【回復魔法】に使うと、僕は賢者様の背に乗った。
崩落した天井から外に出ると、そこは山岳地帯だった。
山腹がえぐれているのは、賢者様が破壊したからだろう――よくよく観察すると石造りの古い神殿跡のようにも見える。

「空が……！」

先ほど賢者様の言っていた空の異変、というものがなんなのか、わかった。
黒い雲が立ちこめて、雷鳴が雲の間を走っている。
雲の切れ目は赤く、まるで血のように染まっている。

（女神は斃したのに……どうして……。もしかして斃せていないのか？　いや、【森羅万象】も女神の存在は消えたと判断していたし……）

今、僕は自分が大陸のどこにいるのかわからなかったが――すぐにそれは知れた。

遠目に見えるのは巨大な湖、そして破壊された軍船。

湖畔にあるのは城のような大聖堂。

ブランストーク湖上国だ。

大聖堂のあちこちから、黒煙が立ち上っている。

《あそこだ。あの場所から女神様の気配を感じる》

「あ――」

僕は、気がついた。

そういうことか。

女神が、あの女がこだわっていたヒト種族があそこにいる。

「教皇聖下……！！」

地上に現れるときの依り代でもあった教皇聖下。

万が一があったときのために、彼女になにか仕掛けを施していたのなら――。

（また復活する気なのか！？）

執念。

思いは通ず、と言っていた。

背筋が冷たくなる。
ひょっとしたら、あの存在を斃すのは不可能なのかもしれない。
「――『銀の天秤』のみんなだ。あそこに降ろしてもらえますか！？」
《承知した》
湖畔の草原ではすでに戦いが終結していた。
黒い魔導生命体が影竜と戦うことを止め、逆に協働するようになれば、影竜たちを止められる者は神殿騎士にはいなかったのだろう。
騎士や警備兵はすでに武装解除され、影竜ににらまれ、心細そうに突っ立っていた。
その横にいたのが「銀の天秤」のみんなだ。
「ダンテスさん！　ミミノさん！　アーシャ！」
「薬理の賢者」様に乗って僕が降りていくと、また竜が増えたのかと神殿騎士たちがぎょっとしたような顔をする。
「レイジ！　無事だったか！」
「レイジくん！」
「よかった……！」
草原に降りると、足がふらついたけれど駈け寄ってきたダンテスさんが支えてくれた。
「レイジくん、ぼろぼろになって……これ飲んで、な？」
ミミノさんからポーションをもらって飲み干すと、身体がだいぶ

軽くなる。

「ダンテスさん！　教皇聖下はどこですか！？」
「せ、聖下か？　中にいらっしゃるはずだが――」
「そちらに向かいます！！」

僕が走り出すと、ダンテスさんもついてくる。

「どうしたんだ。確か、エヴァ嬢も教皇聖下を確認すると言って中に行かれたぞ」
「！」

そうだ、ここにはエヴァ様とマクシム隊長たちがいない。
僕らは城門をくぐって敷地内に入った。
女神の影響が解けたのだろうか、呆然と立ち尽くす者、きょろきょろ周囲を見回す者も多い。

「あっちじゃ」
「！？『薬理の賢者』様！？」

地上1メートルくらいをツィーと滑るように浮きながら飛んできたのは、人型になった「薬理の賢者」様だった。
白髪とヒゲをなびかせて飛んでいる。
賢者様が指差したのは――この中心、大聖堂。
盟約を破棄したあの場所だった。

「わかりました……！！」

僕らは入口へと続く階段を駈け上がる。
すでに大きく開かれていた扉から、ホールへと飛び込んだ。

「――あ」

そこで、僕は見た。

エピローグ（1）　1年（前書き）

そんなわけで長かったお話もいよいよ最終盤です。

●前回あらすじ‥

多くの人々の協力によって女神への力の供給を断ち、女神を斃した……はずだった。

レイジのいるところに飛び込んで来た竜、「薬理の賢者」が言うことには、まだかすかに女神の気配が残っていると。

レイジは竜に乗ってブランストーク湖上国、その大聖堂へと戻った。

エピローグ（1）　1年

「な……！？」

がらんとした大聖堂は、混乱の痕が残っていた。
イスや机は倒れ、カーテンは焦げていた。
その中心、ステンドグラスから陽光がナナメに射し込んだ場所には3人――この広い大聖堂にたった3人がいた。
ひとりの修道女がこちらに背を向け、向こうには教皇聖下が立っていた。
彼女の背後にいたのは、

「ゼリィさん！！」

ゼリィさんのダガーが教皇聖下の胸を貫いていた。

「がふっ……」

鮮血が聖下の口からあふれ、肌は紙のように白くなっている。
僕は走り出す。
その気配に気づいた聖下、そしてゼリィさん。

「来ては……なり、ま……」
「坊ちゃん、来ちゃだめっすよ！！」
「！？」

僕が急ブレーキを掛けると、後から続こうとしていた他のみんなも停まる。

座り込んでいた修道女の身体が発光していることに気がついた。
そしてそれが、

「ノン！？」

叫んだダンテスさんの娘、ノンさんであることにも。
ノンさんが発動しているのは【回復魔法】だ。それは聖下の肉体をかろうじて「生」へとつなぎ止めている。

（なんだ、なにをしているんだ……！？）

ゼリィさんがダガーを引き抜く。
刀身が抜かれるとともに血があふれ出し……いや、待て。
なんだあれは。
刀身にまとわりついた、黒い一一毛？

「！！」

僕の【森羅万象】が解析した情報で、わかった。

「ミミノさん！『魔法複製薬（デュープ・ポーション）』はありますか！？」
「え？　た、確か全部使って……いや、あったべな。あと１個だけ！」
「使ってください！！　僕も【回復魔法】を使います！」

ミミノさんがバッグの中をあさってポーションを取りだし、それを地面に叩きつけるとノンさんの使っている魔法が再度発動する。
僕は聖下に駆け寄ってその腕に手を添えて魔法を発動する。

「ぼ、坊ちゃん、ダメですよ……坊ちゃんが近くにいたら坊ちゃん

だって巻き添えに――」
「その毛は、女神の残した毛ですね？」
「！」

聖下の滴る血を吸った、一房もありそうな長い毛はダガーに絡まって床に転がっている。
それは毛だ。
確かに毛だ。
女神の――あの女の毛だ。

（女神の依り代。それが聖下。ただそれは、単に聖下を通じて「メッセージを発するため」だけのものじゃなく……自分になにか、不慮の事態が起きたときに、乗り移るためのものなんだ）

僕の残り少ない魔力がどんどんなくなっていく。
集中力が途切れないようにするので精一杯だった――このまま放っておけば聖下も死んでしまう。
この人自身はなにもしていないのに。
あの女の犠牲になってしまう。

「け、賢者様！　この毛を」
「あいわかった」

スッ、と移動してきた「薬理の賢者」様は落ちているダガーに向かって小さな炎を飛ばした。それはダガーごと毛を焼いてしまう。

「ミミノ、薬を！【回復魔法】を使える者は他にいないのか！？」
「連れてきたのだわ！」

大聖堂の奥からやってきたのはエヴァお嬢様と、彼女の騎士たち

だった。
そしてその後ろには数人の高位司祭がいた。
「お嬢様……！？」
「彼らは元の教会の教えに従いたいと希望を出していた方々なのだわ。だから女神教徒に目を付けられて、幽閉されていたの――もちろん」
お嬢様は不敵に笑った。
「全員、高レベルの【回復魔法】の使い手よ」
まいったな、この人にはやっぱり勝てない。
お嬢様の目には、魔力を使うことでそれを目にした人の意欲をかき立てる「鼓舞の魔瞳」という力が宿っている。
だけれどそんなものがなくとも、お嬢様は人を奮い起こさせる。
「は、離れて……依り代を取り外しても、女神が生きている限りは、この身を……」
聖下が手を突いて僕の身体を押し出そうとした。
「大丈夫です、聖下」
僕はその手を握り返す――【回復魔法】によって少しずつ元に戻りつつある手を。
この人もまた、自分のことよりも他人を優先できる人なのだ。
「女神は斃しました」

「薬理の賢者」様もうなずき、

「女神様の気配は消えた……今度こそ、完全に」

そう言った。

これで、ほんとうのほんとうに――終わりだ。

聖下の命も助かる。僕よりも【回復魔法】に優れた人たちが治療に当たっているのだから。

ノンさんも――そう言えばどうしてノンさんがここにいるんだろうか？　ゼリィさんも。後で聞かなきゃな。

そんなことをふと思っていると、僕の身体から急に力が抜けた。

終わった。

その言葉が、身体に染み入るように入ってきて、もうこれ以上立っていられなくなった。

「――ッ！？　――――！！」

「――――！　――！」

誰かが叫んでいる。

視界が暗くなって、僕はそのまま意識を失った――まるで底なしの闇に自由落下していくように。

★

――ほんと、【ＨＣｆ！ｋＭ＊Ｊ－ｙ１】さんってすごいですよね。

――うんうん。頼りになる！
――今度、また相談お願いしてもいいですか？

見たこともない人たちに、そんな言葉を投げかけられた。
夜のオフィス。
僕は、前世だって今世だって、こんなところにいたことはない。
少し――ほんの少しだけ前の世代のパソコンが並んでいて、少々古くさく感じられる。

――また明日！
――【ＨＣｆ！ｋＭ＊Ｊ－ｙ１】さん、ちゃんと寝てくださいね。昨日も残業だったじゃないですか。
――そうそう、がんばりすぎですよ！

次に僕がいたのは夜の繁華街だ。
さっきと同じ人たちが、たぶん酔っ払っているんだろう、なんだかテンション高く話しかけてくる。

――なーに、たいしたことないわよ、これくらい。また明日ね！

その声は、聞いたことがあった。

――何千年……いったいどれくらいだろうか。長生きも過ぎると感動をすることがなくなる。

女神を名乗った女の声だ。
僕が知っているあの女とは全然違う、快活で、自信にあふれて、親身な感じに思わず呆然としてしまう。
それからの年月が流れるように見える。
こちらの世界での生活が始まり、【不撓不屈】を使うことで様々

な経験をしたこと。
時に、常人ならば死んでいるような事故にも遭い、そのたびに必死で生き延びたこと。
ひとつひとつは強烈な経験であったとしても、それが何度も起きれば感覚は麻痺してくる。
そうして彼女は神の領域に足を踏み入れるようになった。

「……他に道はなかったんですか」

僕は彼女に聞きたかった。
それほどの力があるのなら、世界をふたつに割るなんてことはせずに、自分の力でモンスターを倒せば、間引けばよかったのに。
でも……それができないこともわかった。
彼女の人生を垣間見たから。
危険はモンスターだけでなく、自然現象もあったのだ。
異常気象に土壌の変化。
農作物は死んで家畜は育たない。
こうなればモンスターどころではなく、人々は死に絶える。
人々だけでなく、星そのものの根幹を震わすようなショックを与えなければいけなかった——ゆえに彼女は、世界を2つに割るという手法を採った。

「……」

返事はない。
彼女は、僕とそう変わらない話し言葉を操っていたのでほとんど同じ時代を生きていたはずだ。
だけれどコミュニケーションを取れたのかというと、そんなことはなくて。
会話はすれ違いまくっていたように感じられる。

あまりに長い年月を生きすぎたせいなのか。
もう、答えを聞くことはできない。

★

あー……寝た。
めっちゃ寝た。
見たことのない天井があった。
天井っていうか天蓋付きのベッドだ、これ。
なんか長い夢を見ていた気がするけど、思い出せないな。
なにしてたんだっけ？
ああ、そうそう……確か女神と戦って……。

「！？」

がばっ、と起き上がろうとして起き上がれなかった。
身体の力の入れ方を忘れてしまったみたいで、力が入らない――いや、筋肉が弱くなって起きられないみたいだ。【森羅万象】が教えてくれた。
沈み込むような布団に手を突いて起き上がる。天蓋から垂れ下がるレースを押しのけると、そこはお屋敷の一室だった。
どこかはわからないけれど、少なくとも治療院じゃない。
窓から見える景色も――今は深夜のようだ――見たことがない街だった。

「うーさぶさぶ……」

そんなことを思っていると部屋のドアが開いて誰かが入ってきた。

「冬はイヤんなりやすねぇ……こういうときは、坊ちゃんの布団がいちばん温かくて最高なんすよ」

ほろ酔い加減の（聞きもしないのに【森羅万象】は分析した）ゼリィさんは、ベッドのレースを手慣れた感じでたぐると、するりと布団に潜り込んだ。

「ふー、温かい温かい。……あれ？　いつもよりなんか広いっすね」

「……」

この人、なにやってんの？

僕のベッドで暖を取ってるの？

「あ、あれ？　坊ちゃんの身体がない……？」

僕はベッドに戻って布団を剥ぎ取って、

「ゼリィさん」

「ギャ――――――！！！！　坊ちゃんのお化けが出たァー！！」

「人を勝手に殺すな」

「ひゃんっ！？」

脳天にチョップを落とすと、ゼリィさんは目をぱちくりした。

「ぼ、坊ちゃん……生きて？」

「さっき目が覚めたんです。ここ、どこですか？」

「坊ちゃん！　坊ちゃん坊ちゃん坊ちゃん！　あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～～」

「え、ちょっ。ゼリィさん？」

ぽろぽろと涙をこぼしてゼリィさんは泣き出してしまった。
ベッドの上で泣くゼリィさんと、オロオロする僕。
うん、この構図は大変によろしくない。

「失礼します。ゼリィさん、このお部屋に勝手に入ることは禁じられているとあれほど――ッ！？」

そのとき部屋に入ってきたメイドさんが、僕らを見て固まった。
だから――よろしくないって思ったんですよねぇ！

それから、屋敷内は大騒ぎになった。
ゼリィさんと僕とのただならぬ関係を疑われ――ということは全然なくて、僕が目を覚ましたから、だった。
泣き止んだゼリィさんに聞いたところ、どうやら僕は1年もの間眠っていたらしい。
驚きだ。
冬の気配は感じていたから、てっきり、女神との戦いから数日か、長くても10日くらい経っているのかと思っていたのに……。
常人ならば身体を起こすことさえできないものだけれど、僕は自然と魔法の補助を使い、起き上がれたようだ。
さらには1年もの間、食事もしていなかったけれど生き延びたのだとか。
深夜だというのに診察に来た医者は「奇跡だ」と言っていたっけ。

（これは……）

奇跡でもなんでもない。

僕の【森羅万象】が学んでしまったのだろう――【不撓不屈】を。
思いの力さえあれば、1年間寝て過ごすくらいはなんとかしてしまう天賦を。

「ゼリィさん、僕が気を失ってからのことを教えてくれますか？」
「はいぃ……」

散々泣きはらしたゼリィさんは（どうやら僕はずっと目が覚めないと思っていたようで……それもそうだ、1年間昏睡状態だったら）、ちーん、と鼻をかんでから教えてくれた。
まず、僕がいるのはウインドル共和国の首都だった。
あのとき大聖堂にいた教皇聖下は一命を取り留め、女神神殿を建造することがないよう正式に各国へ通達した。
女神の精神汚染を受けていた盟約者たちは、女神の束縛が解けたものの、強いショック状態に陥って回復に時間が掛かっているそうだ。
クルヴァーン聖王国では聖女王が即位し、グレンジード公爵を始めその一派は捕縛された。グレンジード公爵自身は無気力状態となっているためにクーデターの罪を問う裁判もできず、国内のとある場所に幽閉されている。
その他の地域も、混乱はあったもののおおむね平常に戻りつつあるそうだ。

「そりゃ、1年も経てば、だよね」
「そーっすよ……1年寝てた人とは思えないっすわ」
「うーん、身体によくなさそうなんだけどお腹が空いて空いて」

最初は白湯をもらっていたのだけれど、どうしてもお腹が空いてしまいスープをもらうと、もう止まらなかった。
パンに肉料理、野菜に果物。

あるものを出してもらって口に放り込んでいる。
身体は悲鳴を上げているけれど魔法でなんとか消化吸収している。
これ……たぶん【不撓不屈】がなんとかしているところもあるんだろうなぁ……なんか複雑な心境だ。

「それで、エヴァお嬢様とか『銀の天秤』のみんなは？」
「まだまだ世の中、混乱してやすからね。腕利きの冒険者を遊ばせておく余裕なんてギルドにゃないみたいで。ダンテスの旦那も、坊ちゃんが目覚めたときにボケッとしてたらガッカリされるから……なんて言って、大陸のあちこちを飛び回って難しい仕事を請けてますよ。ああ、そうそう、『銀の天秤』も今や天銀級（ミスリルランク）っすよ」
「……え？」

ゼリィさんが取り出したのは冒険者ギルドのプレートで、その素材は確かに天銀（ミスリル）だった。

「ダンテスの旦那も最初は断ったんですが……冒険者ギルドの、ほら、偉い人」
「グルジオ様？」
「そうそう。その人が、今回の一件でギルドから出せるものといったらそれくらいしかないって。冒険者ランクが全体的に上がってますからねぇ」

冒険者ランクが全体的に上がっている――あ、そうか。
アレだ。
「世界結合」に合わせて冒険者を町に留めておくために出したアイディア、「ランクアップ武闘会」みたいなヤツ。
おかげで町の被害は食い止められたけど、そのせいで冒険者たちのランクが上がったっていう副作用はあったはずだ。

「……まあ、今回の一件は全部、闇に葬られるらしいっすわ。名誉を求めるつもりなんてあーしにゃないっすけど、ダンテスの旦那にミミノさん、アナスタシアさん、それにノンさんは報われて欲しいと思ってたんで、せめて天銀級くらいもらってくれてよかったっすね」

「あー、そうですね。公開できないですよね、いろいろと」

世界規模で行われた女神による侵略。

それを防ぐために、僕は竜や、協力者たちとともに各国でテロまがいのことを行った。

後になってみれば「洗脳なんて冗談じゃない」とみんなわかってくれるとは思うのだけれど、女神に対しては全員が被害者だ。

胸を張って「神殿を破壊したのは我々です！」なんて言えるわけもない。

「それじゃ、ノンさんは？　それにエヴァお嬢様についてもまだ聞いてないけど」

「ノンさんはブランストーク湖上国に残ってやすね。でも『銀の天秤』に復帰するんだ～って言ってやしたから、教皇聖下にお願いしてるところでしょう。それが、今回のことの報酬だっていうんですから、慎ましいにもほどがありますよねぇ……」

「ノンさんらしい」

すべてをなげうってでも父親（ダンテスさん）のそばにいたがったのだから。

「エヴァお嬢様はもちろんクルヴァーン聖王国にいらっしゃいますぜ。聖女王陛下の新時代の中枢にいるとか……」

「なるほど」

これもエヴァお嬢様らしいなと思った。

5大公爵家もふたつに割れた内乱。
1年くらいでは混乱も収まらないだろう――そこでじっとしているスィリーズ伯爵のわけがない。
きっと精力的に暗躍し、お嬢様もその手伝いをしているはずだ。
さすが。

「そう言えば……なんであのときゼリィさんは大聖堂で、教皇聖下の背中を刺してたんですか」
「あ、その説明していませんでしたね」

ゼリィさんが言うには、混乱を引き起こすべく城内を荒らし回っていたところ、ふらふらの教皇聖下が戻ってきて、それをノンさんが介抱していたという。
僕らと連絡が取れていなかったノンさんだけれど、女神による精神汚染を免れていたらしい。
それは、ノンさんの師匠である――あの「お色気お化け」の――リビエラさんが、精神を強靱にする魔法薬を持っていて、それを服用していたから大丈夫だったのだ。
ノンさんはノンさんで教会内で情報を集めており、僕らが女神に戦いを挑んだ日に、彼女も行動を起こした。
具体的には弱った教皇聖下を通じて、女神をどうにかしようとしたのだ。
僕や「銀の天秤」との戦いに気を取られた女神の目を盗み、教皇聖下はノンさんに告げる――「この身体の中には女神の依り代がある。それを取り除きなさい」と。
そこへやってきたゼリィさんが合流し、3人は大聖堂に向かった。

「え、なんで大聖堂に？」
「依り代ってのがなんなのかわからなかったんすよ。それで、女神の力がいちばん発揮できる場所に行って確認しようということで…

…」

いつも教皇聖下は、大聖堂に入ると気を失ってしまって記憶がないのだそうだ。

今回、もし自分が気を失ったら「ためらわず殺すように」と言ったというのだから、肝が据わっている。

聖下も聖下で、これが、女神に対抗する最後のチャンスだと感じていた――。

「……教皇聖下は、女神を放っておいたらまずいとわかっていたんですね」

「そうっすねー。なんだか直感的に、あれは『神』じゃないとわかっていたみたいっすよ」

「直感で？」

「ええ。ちらっと聞きやしたけど、教皇聖下は『神託』を授かることがあるとか……そのときの感覚と女神のそれとは全然違ったみたいで」

「……」

神。

（マジものの神がいるのかー。ウソだろー……まあいいや。僕にはもう関係ないし）

僕は考えるのを止めた。

これ以上新しい上位存在とか出てきても、どうしたらいいかわからないもの。

エピローグ（1）　1年（後書き）

エピローグは数話掛かります。
あともうちょっとだけ続くんじゃよ。

エピローグ（2）　究極の二択（前書き）

●前回あらすじ：
女神を斃したが、そのときに無理をしすぎた僕は気を失い、気づけば1年という月日が経っていた。
各地での混乱はあらかた終息していたが、それでも世界的に増えたモンスターへの対応は続いている。
ゼリィから、教皇聖下の話として「神」の存在を臭わされたが、レイジはそれは聞かなかったことにした。

エピローグ（2）　究極の二択

ゼリィさんは、僕にとってはほんの少し前、彼女にとっては1年前となる大聖堂での出来事を思い出すように言った。

「えーっと……それで、大聖堂に来たわけですよ。誰もいなかった大聖堂で教皇聖下の服を剥いだら――」

「ゼリィさん、言い方」

「――ひんむいたら？」

もういいや。

「背中がなんか光ってるんですよ。で、それだっていうんで、『ひと思いにやって』と教皇聖下もおっしゃるんで、ダガーでぐさっとやりました」

「だいぶ思い切りましたね」

「ノンさんが言いましたから。なにがあっても【回復魔法】で救うって」

「……それは、心強いですね」

「ええ。あの人、めっちゃいい女っすよねー。あーしが男だったら放っておかないっすよ。坊ちゃんはどう思います？」

「え！？」

「スタイル抜群なんですよ、あの人。ゆったりした服着てますけど」

知ってます。

温泉にいっしょに入ったことが……。

「それで中身もカッコイイ。最高の女っすよ。――それとも坊ちゃ

んは他に気になる人が？」
「いやいや、僕はそんな……」
「アナスタシアさんもどえらい美人っすよねー。坊ちゃんが目を覚まさなくなってから、1か月はベッドのそばから離れませんでしたよ」
「アーシャが……そうでしたか」
だいぶ心配を掛けてしまったみたいだ。
彼女の顔が思い出される。
思えば、ずっと心配を掛け通しだったかもしれない。
「エヴァお嬢様は真っ先に離れてクルヴァーンに帰っちまいやしたけど、坊ちゃんをどの国に預けるかですぐにウインドル共和国にするべきって決めて、受け入れ準備まで全部整えていかれやした。あの年で大人顔負けの仕事っぷりなんだから、すごいっすよねぇ」
「ええ、お嬢様は成長なさいましたね」
出会ったときは大変だったんだけどなぁ。
僕が苦笑すると、ゼリィさんは、
「それでもお嬢様は、出発の日の朝まで夜通しで坊ちゃんの枕元にいらしたんですよ。心配そうな顔で……おかげであーしはベッドに潜り込めませんでしたけどねえ」
なんでゼリィさんがそんなことを知っているのかと思えば、そういうことか。
「入らないでくださいよ、勝手に」
「許可を取ろうとしたんですが、坊ちゃんは眠ってたもんで」
「あなたって人は……」

僕はベッドサイドにいるお嬢様を想像した。
クルヴァーン聖王国で無茶をしたときにもお嬢様は枕元にいてくださったっけ。
お嬢様は確かに成長したけど……変わらないところもあるんだな。

「可愛い女の子と言ったら、坊ちゃんのお姉さんも来てやしたよ」
「ラルクが？」
「一度だけふらっといらして、坊ちゃんの顔を見たら『また来る』って言って行っちまいやしたけど」

ラルクらしいなぁ。
今どこにいるんだろうか。
僕らがいた鉱山での、犠牲者遺族を救う基金については立ち上げたはずだけれど……それからもう1年経っている。
山賊？　空賊？　仲間のクックさんたちといっしょに行動してるのかな。

「そうだ。ミミノさんにはなるたけ早く知らせてあげなきゃっすね。坊ちゃんを目覚めさせようとして、目玉が飛び出るくらい高価い薬剤に手ぇ出したりしてましたから」
「え！？」
「ダンテスさんがなんとか止めてましたけど、四六時中監視するわけにもいかないので、気づくと借金まで……」
「ちょっ、僕行ってきます！」
「いやいや坊ちゃん、どこにいるかわかってるんですか」
「あ」

立ち上がって飛び出そうとした僕だったけれど、

「落ち着いてくださいよ～」

まさかゼリィさんにそんなことを言われるなんて……。

「すみません……それでミミノさんは今どこに？」

「１０日後にこっちに来る予定っすよ。だから、焦る必要はないです。っていうか坊ちゃん、ミミノさんのことになるとなんでそんなにあわてるんですか」

「そりゃあわてますよ。自分のことで他の人が借金なんて……いや、ミミノさんにはほんとうにお世話になっているので」

「ママみたいな」

「……否定はしませんけど」

ちっちゃいけどね、ミミノさん。

「それで、これからどうしやす？　女神は消えて世の中は元の通りに……あー、まぁ、ふたつの世界がくっついたから完璧にってことはないんですけど、おおむね元通りになりやした。坊ちゃんも天銀級冒険者で『銀の天秤』のメンバーっすよ」

「はい。僕はみんなとまた冒険ができればそれで――」

「さっき、エヴァお嬢様がウインドル共和国に坊ちゃんを運ぶようにしたって言いやしたけど、あーしが知る限り、教皇聖下も、クルヴァーンの聖女王様も、光天騎士王国も、ヴァルハラ市長やゲッフェルト王も坊ちゃんの身柄を引き取りたいと申し出てやしたからね。他にも情報をつかんだ各国のトップや有力貴族に大富豪が申し出たとか聞きやしたけど、忘れやした。ウインドル共和国はその点いろいろ公平な国なのでここになったってことらしいっす」

「……え？」

なんだその面々は。

せっかく戻ってきた温かい血がスッと引いたような感じさえする。

「うまく使えば一国を滅ぼすなんてたやすい竜を操り、たったひとりであっても軍隊に匹敵する力を持ってる坊ちゃんですよ？　ほっとくわけないじゃないっすか」

「い、いや、僕はそんな……」

え、僕そんなふうに思われてるの？

「歩く核弾頭」みたいな？　あ、今日までは「昏睡してる核弾頭」か。コントロールできないという点じゃもっと危ない気がする。

「坊ちゃん」

にこり、とゼリィさんが笑った。

こういうときのゼリィさんは１００パーセント、完全に、僕をからかっている。

「今や世界にとってスーパー重要人物（ＶＩＰ）となったワケですから、身の振り方、ちゃんと考えたほうがいいっすよ？　特に『結婚』なんかはね？　めちゃくちゃ政治的な話になっちゃいますからね？」

「……」

ほら、からかってる。

……からかってるんだよね？

そのまま立ち上がって食堂を出て行かないでゼリィさぁぁぁぁん！

ウインドル共和国は女神による混乱のさなかにホリデイ代表が殺された。

だけれどこの国は立ち直りが早く、女神の影響がなくなった後にはすぐに新たな人民代表を選出し、今ではどの国よりも早く元の状態に戻っているという。

（人ってたくましいよね……）

歩くリハビリも兼ねて、僕は8日間、首都をうろうろしていた。

活気あふれる朝の市場、にぎやかな昼の商店街、酔客が大声を出している夜の繁華街。

パッと見は他の国とあまり変わらない。

でも、他の国と違ってどこか人々の警戒心が緩そうに感じられるのは治安がいいからなのか。

それとも、武力を自分の国で持たないとしているからなのか。

（そう言えばホリデイ代表に、この国に招待されていたっけ。あの人がヒト種族代表の盟約者だったのは、わかる気がする）

戦乱やモンスターの脅威がない世界。

行き着く先はこのウインドル共和国みたいになるのかもしれない。

とはいえ、軍事力を他国に頼っているだけで他の国がそれを肩代わりしているだけではあるのだけど。

これからの世界はどうなっていくのかな。

「――ここが冒険者ギルドか」

ウインドル共和国にも冒険者ギルドはある。

軍事力を他国に頼っているとはいえ、国内に出現するモンスターすべての掃討を頼っていてはお金がいくらあっても足りないからだ。

とはいえ、小さい建物を見るにあまり盛んに活動しているような感じではないけれど……。

「……一応入ってみるかな」

これまでギルドには足が向かなかったのは、女神戦のことは僕としても結構しんどかったことだったからかもしれない。

「こんにちは～……」

ドアをそっと開くと、中は殺風景な――まるでお役所のような雰囲気で、カウンターと、待合のイスが並んでいるだけの場所だった。

だけれど、結構な人が集まっていた。

なんでだろう、と思っていると、

「――なんで受理されないべな!?　２０日掛かるところを１５日で終わらせてきたんだ！　早く終わるぶんには問題ないべな！」

「そ、それが、今回の依頼は『きっちり２０日』という記載がありまして……」

「それくらいギルドのほうでうまくやっておけばいいべな！」

「不正をすることはできません……」

「あ～～～も～～～～融通が利かないなぁ！　せっかくレイジくんの目が覚めたって聞いたから大急ぎで帰ってきたのにぃ！」

「ミミノ、ミミノ、仕方ないだろ。結果報告だけ後でまたここに来ればいい」

カウンターにいるのは見覚えのある小さいハーフリングの背中、巨大な盾を背負った頼りがいのある背中だった。

周囲の冒険者たちは、

「――なにもめてんだ？」

「――天銀級らしいぞ」

「――は？　有名人？」
「――『銀の天秤』なんて聞いたことないが」
そんなことを言っている。
「アナスタシアは先に向かっているんだし、俺たちも行こう。時間の無駄だ」
「……うぅ。せっかくレイジくんに会うんだから心置きなく会いたかったんだよねぇ。わたし特製のスーパーポーションを飲ませなきゃだし、体調の検査に何日も掛かるはずだし……」
「あ、あの毒……じゃなかった、ポーションを飲ませる気か。あれは本気だったのか」
ダンテスさんの顔が引きつっている。
え。今「毒」って言った？
「とにかく行くべな。レイジくんのことだから1年のブランクなんて無視して無理するかもしれない――」
「さすがに僕だってそんな無茶しませんよ」
近くに寄って言うと、ぽかん、と口を開けてミミノさんとダンテスさんがこちらを見た。
「レ、レ、レ、レ、レ、レ……」
「お久しぶり……になるんですよね。ミミノさん、ダンテスさん。僕からしたらたったの数日ぶりなんですけど」
「レイジ！　どうしてここに？」
「散歩してて、たまたまです」
「歩けるのか。見た目は問題なさそうだが」
「はい。一応無理をしていないだけで、身体は絶好調です。魔法も

問題なく――」
「レイジぐうううううううんんんんん！！！！！」
ミミノさんの小さい身体がタックルするように僕にしがみついてきた。
それを、しっかりと受け止めるくらいの力は今の僕にはある。
「心配したんだべなぁあああああ！」
「す、すみません……でももう、大丈夫です」
僕の胸に額をこすりつけて泣きじゃくるミミノさんと、僕を見たダンテスさんは小さく笑った。
「……レイジ、少し、背伸びたか？」
「そうかもしれません」
僕はちらりとダンテスさんの額を見て、1年経ったんだな、と妙なところで実感した……なにが、とは言わないけど。
「俺はまた髪が薄くなった」
「……そ、そうですか！？　全然気づきませんでした！」
一応気を遣ってなにも言わなかったのに！
お屋敷に戻ると、僕がいなかったせいで魔力のコントロールが利かずに暴走しそうだったアーシャをなだめているゼリィさんがいた。
「坊ちゃん！　待ってましたァ！」

このときほどゼリィさんが本気で、心の底から、僕が帰って来るのを待っていたことはなかったんじゃないかっていうくらい、感情がこもっていたっけ。

「レイジさん……！」

アーシャの周囲に漂っていた火の粉――魔力の濃度が濃すぎて発火していた――は少しずつ収まり、彼女は目に涙を浮かべるとこちらへ向かって駆け出した。

ダンテスさんを見たときよりもはるかに実感する――1年経ったのだなと。

アーシャの表情は僕の記憶にあったそれよりもずっと大人びて感じられたのだ。

「レイジ！」

そのとき、別の声が背後から聞こえ、アーシャの足がハッとして止まった。

「……え？」

声を聞いて僕はそれが誰だかわかった。

だけれど、「あり得ない」ことだった。

その人がここにいるなんて――。

「お、お嬢様……？」

振り返ると、確かにそこにエヴァお嬢様がいた。

そしてお嬢様もぐんと身長が伸びていた。

着ているドレスだけでなく、漂う雰囲気は「大人の世界に一歩足を踏み入れた少女」から「大人の世界にすっかり慣れた少女」という感じがする。

「それに……ラルク！？」

お嬢様の横にいたのは、ばつが悪そうにぽりぽりとほおを人差し指でかいているラルクだった。

「……よっ、レイジ」

軽く言ってくれる。

彼女は旅装束だったけれど、胸が大きくなっているのがわかった。栄養の概念なんてまったくなかった鉱山奴隷の食事を思えば、今はちゃんとご飯を食べているのだろう。

「あなたが目を覚ましたと聞いて、父から魔導飛行船を借りて大急ぎで来たのですわ。ラルクさんはたまたまクルヴァーン聖王国にいらしていて、当家に逗留されていたために同行していただきました」

「や、ちょっとこのお嬢様の行動力にびっくりした、っつうか、お前が目を覚ましたって聞いたら聖王宮の重要な会議をすっぽかして帰ってきて。飛行船の中でもずっとそわそわして……」

「ラルクさんもどうしても来たいと言うので！　連れてきたのですわ！」

すっかり貴族になってしまったのかと思っていたエヴァお嬢様だけれど、ラルクの言葉を遮ったあたりはなんだか前と変わらない気がして――僕はどこかホッとしている自分に気づいていた。

そんなふたりの後ろにはマクシム隊長や騎士たち、ラルクの空賊仲間であるクックさんたちがいた。

にこやかに、手を振ってくれている。

（ありがたいなぁ……）

僕のためにわざわざ来てくれたんだ――と思うと、胸がじんとして熱くなった。

あれ……。

おかしいな、視界がにじんで、涙が出そうになる。

そうか。

僕はようやく、あれこれいろんなことが終わったのだと実感できたのかもしれない。

「――レイジ」

するとダンテスさんが言った。

「麗しいお嬢様たちとの感動の再会途中ですまないが、重要な話を先に済ませたい。お前の将来に関わることだ」

めっちゃ深刻そうな顔だった。

え、えぇ……？

全部終わったんじゃないんですか……？

お屋敷の持ち主は心の広い方のようで、急な、しかも大量の来訪者でも快く受け入れてくれた。

なんか「今やレイジ殿は世界が注目する方ですからな」とか言われて……調子に乗る前に恐ろしくてどうしていいかわからなくなる。

冗談だったらよかったのに、目がマジなんだよね……。

「さて、なにはともあれ目が覚めてよかった」

テーブルを囲んでいるのは僕、ダンテスさん、ミミノさん、ラルク、エヴァお嬢様、アーシャの6人だった。

ゼリィさん？「今日は賭場が立つんで！」と言ってうれしそうに出て行ったよ。

エヴァお嬢様には専属の執事がいて、その人は壁際に控えている。護衛のマクシム隊長も同様だ。

「ありがとうございます。ご心配をおかけしました」

僕が言うと、ダンテスさんは微笑んだ。

だけれどすぐに顔を引き締める。

「で、だな。冒険者ギルド全体のマスターであるグルジオ様が、今回の一連の出来事の顛末を聞きたいと。女神との戦いについてはレイジしか知らないだろう？　それに竜は姿を消してしまってな」

「竜が……？　幻想鬼人は」

「たぶん、死んだ。あの白い空間でお前を女神のところに送り出したあと、動かなくなった。俺たちは大聖堂前に戻されたが、そのとき幻想鬼人はいなかったんだ」

「そう……ですか」

竜とは違って、なにを考えているのかわかりにくい人だった。

だけど、それでも、最後の最後では――女神を斃すというところで意見が一致した。

あのとき、あの人も死を覚悟していたんだろうか。

僕が「準備はできた」と告げたとき、僕の提案に乗ってくれた。

僕に賭けてくれたんだ。

「……それでな、レイジ。あらゆる事情を把握しているのはお前しかいない。だがお前は1年間昏睡状態だった。だからいろいろなことが宙に浮いている」
「宙に浮いている……とは？」
「今回の混乱の原因はなんなのか。誰が責任を負わなければいけないのか。盟約者たちは精神にきちまってな、話があまり噛み合わねえんだ。それで、お前にはグルジオ様に話をして欲しい」
「わかりました」
「すまねえな、目が覚めたばかりだってのに」
「いえ……説明の必要があるのも当然だなと思いましたし」
「そうか、相変わらずお前は賢いな」

ダンテスさんがフッと笑った。

「……ダンテスさん、もう少し立ち入った内容を話しておいたほうがいいのではありませんか？」

そう言ったのはエヴァお嬢様だった。

「いや、スィリーズ伯爵令嬢、俺も――私もそう思いましたが、レイジが話をするのに必要ない情報は伝えても負担になるだけでしょう」
「そうかもしれません。しかし、レイジは聞く権利がありますし、なんなら、聞いておきたかったと後で思うことになると思います」

ん？　なんだなんだ。
他に裏事情みたいなのがあるのかな。

「あー……うむ、どうする、レイジ」

ダンテスさんにしては歯切れ悪く聞いてきた。

「どんな内容かはわかりませんが、今さらなにを聞いても負担にならないので、とりあえず聞いておいたほうがいいのかなって思ってます」

「そ、そうか……そのな」

ちら、とダンテスさんが見たのはなぜかアーシャだった。

「……今回のことはすべて、黒髪黒目のお前が仕組んだことで、お前を処刑しろという声が数カ国から上がった」

「げっ」

あ～……なるほど。

そのことは考えなかったなぁ。

だけど、黒髪黒目への偏見を考えたら、そうなっちゃうのかぁ。

「その国の名前を早く教えてください、ダンテスさん」

すると――うっそりと笑みを浮かべたアーシャが言った。

なんだろう、今までに見たことのない笑顔だ。

「妖艶」なんて言葉が似合いそうな……。

「えっと、アーシャ？　その国がどこなのか聞いてどうするんです？」

「決まっています。焼きます」

焼きますか。

そう来ますか。

だからダンテスさんが額に手を当てて天を仰ぐんですね。

「アーシャ、ダメです」

「でも！　レイジさんはこの世界を救ったいわば英雄ではありませんか！？　そんな人をつかまえて処刑だなどと……頭の沸いている浅慮なる王侯貴族を一掃するチャンスだと思いませんか？」

アーシャってこんな子だったっけ！？

「アーシャ」

僕はじっと彼女を見つめた。

「ダメです」

「……はい」

唇をとがらせ、小さな声で反応したアーシャは今度は幼子みたいだ。

「焼くのなら、見た目で差別してしまう、つまらない偏見のほうですよ」

うまいことを言ってしまった。

「弟くん、あんまりうまくねーぞ」

姉に突っ込まれた。恥ずかしい……！

「さすがレイジさん。すばらしいお言葉ですね！」

だからアーシャってこんな子だったっけ!?　ねえ!?

「……ともかく」

一貫して落ち着いているエヴァお嬢様が言った。

「そういう見当違いなことを言い出した国は、ゲッフェルト王が押さえ込んでくれましたわ。世界会議を召集して、その場で証言してもらうという意見が圧倒的でしたが、グルジオ様がそれを押しのけ、政治的に中立な冒険者ギルドが……なにせレイジも冒険者ですからね、ギルドが話を聞くということで今は収まっています」

「なるほど……」

グルジオ様にはお世話になってばっかりだなぁ。

女神と戦うときの武器、短刀を直してくださったのもあの人のツテだったし。

「一応言っておきますが、レイジ、くれぐれもグルジオ様に負い目があるなどと考える必要はありません」

「えっ!?」

お嬢様に見透かされている。

「冒険者ギルドは治安が不安定になった各国で活躍しており、ギルドとしての地位が向上しています。それもすべてレイジ、あなたが、女神を斃してくれたおかげ。あれがなければ世の中がどうなっていたかもわからないのですから」

「僕だけじゃないでしょう。ここにいるみんなも、もちろんお嬢様もいっしょに戦ってくれたじゃないですか」

「……」

僕が言うと、お嬢様は目をぱちくりさせ、
「……そ。恩に着てくれてもいいのだわ」
昔みたいな口調で言った。
「それはともかく、グルジオ様はレイジに感謝こそすれ、あなたがグルジオ様に負い目があるということはありません」
「わ、わかりました」
成長した貴族のお嬢様としての発言はぐいぐいくるなぁ。
「証言はそれでいいと思うんだけどさ、問題はその後だと思うぜ」
するとラルクが言う。
「なに、その後って？」
「弟くんはどーすんだよ。その後。聞いたかもしんねーけど、各国首脳が弟くんを狙ってるぜ、なんならグルジオってヤツだって冒険者ギルドに弟くんを縛り付けておきたいんだ。処刑処刑言ってるヤツらだって処刑をなくしてやるからうちのために働けって言いたいんだよ」
「うへぇ」
ゼリィさんにちらっと聞いてたけど、来るところまで来ちゃってるなぁ。
「『うへぇ』じゃねーよ。他人事みたいに……ちゃんと考えておけよ、これからどーすんのかをさ。冒険者として活動します！　って

言って収まるほど簡単な話じゃねーんだ」

えっ、そうなの！？

「ちゃんと存在感を出して、この世界がおかしな方向にいかないようにがんばるか……それか、あらゆる面倒ごとを全部放り出して、なんなら富と名声も全部すてて、冒険者になるか。それならいけるかもしんねーけど。こんだけ苦労してなんもないなんて……つまんねーしな」

つまらない。

その言い方がラルクらしくて、

「ふふ」

僕は思わず笑ってしまった。

「なに笑ってんだ」

「いや、うん。ありがとう……究極の二択を教えてくれて。考えてみるよ」

僕は考えなければならないらしい。

後悔しない、僕らしい、未来の選択だ。

エピローグ（2）　究極の二択（後書き）

某ハイエルフ「やっぱり焼きます？」

エピローグ（3）　3人の花嫁

「――そして僕は意識を失い、1年という月日が経ちました」

ここはウインドル共和国の冒険者ギルド。

そのマスタールームだった。

応接セットはこぢんまりとしていて、そこでこんな……世界を揺るがした女神を名乗る女と、その最期について打ち明け話が行われているとは誰も思わないだろう。

僕の前に座っている巨漢は、冒険者ギルド全体を統括しているグルジオ様だ。ふだんはキースグラン連邦の盟主であるゲッフェルト王がいるヴァルハラ市のギルドマスターを務めている。

グルジオ様も、僕が目覚めたと連絡を受けて大急ぎでやってきたそうだ。

この場にはグルジオ様しかいない。

ここのギルドマスターやダンテスさんたちは同席していない。

グルジオ様はできればふたりきりで話したいと言ったし、僕も――秘密にしたいわけではなかったけれど、ダンテスさんに心配を掛けたくなかったのだ。

（心配？）

ふと、気がつく。

（変だな、僕は。もう心配なんてすることはないのに……女神も斃したんだから）

内心でそのおかしさに苦笑していると、話を聞き終わったグルジ

オ様は深いため息を吐いた。

「……信じられねえことばかりだが、それはこれから調査するとして、だ。まずは礼を言おう。レイジ。お前はこの世界を救った」

「いえ、そんな……」

世界を救うとか、そんなたいそうな目的で戦ったのとは違う気がした。

僕は生きるのに必死で、僕の大切な人たちが女神の傀儡になるのがイヤだっただけだ。

「お前の話した内容は教皇聖下から聞いたものと矛盾がない。おそらく真実なのだろう……お前が女神とやらと戦った神殿跡とかいうのも、調べさせてみよう」

「あ、そうですね」

それが遺っていたか。

あそこに――死体はもうないだろうと思うけれど、あそこでの出来事を思うと僕の心が落ち着かなくなった。

「どうした、レイジ？」

「いえ……」

「お前は誇っていいのだ。お前の成し遂げたことはあまりにも大きい」

「……」

なぜだか素直に喜べない自分がいることに僕は気づいていた。

「それで、今聞いた内容は神殿跡の調査が完了次第、各国首脳に共有する。たぶん、そう時間は掛からんだろう……早くて1か月か、

そこらだな。そうなればどの国もお前や『銀の天秤』メンバーを招待して、戦勝パレードをしたがるだろうよ」

「せ、戦勝パレードですか？」

「おかしなもんだろ？　戦ったのはお前たちだけで、ほとんどの国は女神神殿の建造に突っ走ってたくらいなのによ。だがむしろ、そういう国ほどお前たちを歓待したがるだろう。女神神殿を造った負い目があるからかもしれんな」

「はあ……」

「ダンテスから聞いているかもしれんが、どの国もお前たちを召し抱えたがるだろう。とてつもない高額のオファーもあるに違いないが……簡単にオーケーを出すなよ？　もちろん、どうしてもその国で働きてえってんならオーケーすればいいが。お前の自由だ」

「……」

「なんだ？　浮かない顔だな」

「い、いえ……そういうのって、結局はその国に縛られるってことですよね？」

「いちがいにそうとは言えんが……冒険者として専属契約にしてくれと言うかもしれねえし。とはいえ、金をもらった以上は頼み事を断れねえのが人情だ。自由ではなくなるな」

「はい……」

ラルクに突きつけられた二択を、僕はまだ迷っていたのだ。

すべてを手に入れる束縛か。

なにも手にしない自由か。

「おいレイジ。あらゆる冒険者たちが憧れる名声を手にするチャンスでもあるんだ。そこは間違えるなよ？　俺としちゃあ、俺の次の冒険者ギルドマスターになってくれたら言うことねえんだがな」

がっはっはっは、とグルジオ様は笑っている。

そうだよね……。
あらゆる冒険者……ダンテスさんやミミノさんも、それを目指していたのかな。
物語の英雄に匹敵するような名声を。
ダンテスさんが最初からそのくらいの立場だったら、石化毒にやられたとしても多くの人たちが全力でダンテスさんを救おうとしたはずだ。
ミミノさんやノンさんがあんなに苦労することもなかった。

「光栄です……身に余るほどの」

僕の答えは、だけれど、決まっていた。

「僕は、自由を選びます」

悩んで悩んで悩んだ。
僕の決定は他の人たちにも大きく影響してしまうことは明らかだったから。

「……理由を聞いてもいいか？」

答えが予想通りだったのか、グルジオ様はそこまで驚いたふうではなかった。
理由。
理由か。

「僕は……奴隷でした。鉱山奴隷です」

決断するときに思い浮かんだのは、鉱山での光景だった。
ラルクがいて、ヒンガ老人がいて。

もしもラルクがいなければ――彼女がとんでもない天賦珠玉を見つけなければ。
ヒンガ老人がいなければ――老人が僕に学を与え、僕に進むべき道を教えてくれなければ。
鉱山の崩落事故が起きなければ。
僕は今も鉱山で働いていたんじゃないかな。
偶然が積み重なって今僕はここにいる。
その僕にとってなによりも大事なことは……やっぱり、「自由」なんだ。

「そうだったのか」

グルジオ様は僕の素性を知らなかったのだろう、こちらのほうが驚いていた。
だけれどそれで納得できたようでもあった。

「すみません」
「なにを謝ることがある。お前の人生だ、お前が決めればいい。とはいえお前がここに滞在していることは各国の知るところだ。俺がヴァルハラ市に戻ってお前の返答を各国に知らせるまで、あと1か月ってところだ。今は冒険者ギルド、つまり俺が今後を決めると思われているから手を出してこないが、自由を選んだお前には各国が殺到するはずだ」
「う……そ、そうですよね」

自由であることは自分の身を自分で守らなければいけない、ということでもある。
ただの冒険者ならば「与(くみ)しやすし」と考えて高圧的に服従を迫ってくる王侯貴族も出てくる、ということだろう。

「あと1か月だぞ。覚悟しておけよ」
「！」

あと1か月。
そうか。
グルジオ様は、

「わかりました。覚悟します」

その間に「姿をくらませ」と言っているのだ。

「……ほんとうは、救世の英雄に夜逃げみたいな真似をさせたくはねえんだが……」
「いえ、お気遣い感謝します」
「せめて俺からの餞別がある、受け取ってくれるか？」
「……」
「ん、どうした？　なんか裏があるわけじゃねえぞ。純粋な餞別だ」
「あっ、いえ……ちょっと以前のことを思い出しまして」

クルヴァーン聖王国を出るときだ。
「黒髪黒目」を理由に国を追われることになった僕に、ミュール辺境伯が「餞別だ」と言って短刀をくれたっけ。
そう思うとグルジオ様はミュール辺境伯とどこか雰囲気が似ている。

「身につけるようなものなんだが、受け取ってくれるか？　パーティーメンバー分ある」
「ありがたくいただきます」

僕は笑ってうなずいた。

「こっちこそ、ありがとうよ。……お前がとてつもなく能力の高い冒険者だとはわかっているが、これだけは言わせてくれ。なにかあったらいつでも力になる。いつでも連絡してきてくれ」

グルジオ様は右手を差し出したので、僕は握りかえした。

「はい、ありがとうございます」

きっとこの人とのつながりはずっと消えないのだろう。

自由を手に入れた僕がやるべきは、やっぱり、冒険者だろうと思うからだ。

★　キースグラン連邦　ヴァルハラ市　★

「……ふむ。この世界のすべてを手に入れられるかもしれぬという地位も、金も捨てるというか」

冒険者ギルドのグルジオがヴァルハラ市に帰るよりも早く、レイジが「自由」を手に入れたという話を聞きつけたのはキースグラン連邦の盟主、ゲッフェルト王だった。

「はい。完全に正確な情報というわけではありませんが、間諜の報告では8割方間違いないだろうと」

答えたのは王太子だ。

すでに初老に差し掛かっている王太子はゲッフェルト王の実の子である。

彼自身有能なのだが、「傑物」と呼ばれるゲッフェルト王がまだまだ現役なのでいまだ王太子である。
父のゲッフェルト王は今回も「死ぬ死ぬ詐欺」をしていた。

――今回ばかりは違う。「女神」とやらの名を聞いたとき、いよいよワシも死ぬときだと知った。

女神との戦いが始まったときには、そんなことを言っていたのに、こうして生き延びている。
父より先に自分が死ぬのだろうな、老衰で。
そんなことを王太子は思って、すでに達観している。

「各国はいまだ、冒険者レイジはギルドの要職、あるいはキースグラン連邦のいずれかの国での首脳に迎え入れられると考えています。もし、それを断るという話が広まれば……」
「争奪戦が始まるのう」
「そのとおりです。ですが、今ならば競合相手はいません。いかがなさいますか？」

イスに座ったゲッフェルト王と王太子以外、この部屋にはいない。
王は言った。

「……手を出すな」
「は？」
「監視は続けよ……いや、監視と言わず、きちんと挨拶をさせよ。そしてスカウトはするな。なにか助言や手助けを求められれば応えよ。つかず離れずの距離を保て」
「そ、それでいいのですか？　他の国に取られてしまっては……」
「取られるわけがなかろう。そこでなびくような者ならば、グルジオの誘いに乗っておるわ」

「はあ……」

納得できない王太子に、王は言う。

「いいか、くれぐれも手を出すでないぞ。これはワシの遺言だと思え」

「……承知しました」

王太子は気を引き締めて――どころか、「また始まったよ……」という思いでげんなりしつつうなずいて部屋を出た。

「さて……」

ゲッフェルト王は窓から外を眺める。

陽の射す美しい庭を見下ろし、その向こうにはヴァルハラ市の壮麗な町並みが広がっている。

「自由を手に入れた冒険者よ、お前はこれからどうするのだ？　世間の目から逃れ隠れ住むのか？　それとも世界を陰から操ろうというのか？　お前が表舞台に立たないという選択をしたとしても、世界はまだまだお前の力を必要としておるぞ」

にやりと笑った超高齢の王は、確かに、まだまだ現役のままでいそうだった。

★

グルジオ様からの申し出は断った――そう告げると、ダンテスさ

んはにやりと笑って僕の頭をぽんぽんと叩いた。

「ああ、それでいいんだよ」

すでにダンテスさんにはこの話をしていたのだ。

ダンテスさんは奇しくも、グルジオ様と同じことを言った。

――お前の人生なんだ、お前が好きに選んでいいんだぞ。

って。

「それで……グルジオ様がおっしゃるには、あと1か月くらいでこの話は広まるから、逃げるなら今のうちだと」

「おお、それもそうだな。――ミミノ、それじゃ予定通り行くか」

「んだねえ」

予定通り？　予定ってなんだろ、と僕が首をひねっているとミミノさんが、

「レイジくんがもしかしたらグルジオ様にほだされて、いい返事をしちゃうかもしれないべな～って思ってたんだ。だから、これからわたしたちがしようとしていたことは話してなかったんだ」

「うっ」

そんな、僕は簡単にほだされたりしませんよ！　と言いたいところだけど、確かにその危険はあったよね……！

そこまで考えてくれてるミミノさんがすごい。

「そ、それで予定って？」

「ああ、まずはノンに会いに行こうと思ってな。教皇聖下の許可が

出て、俺たちのパーティーに同行してもいいということになった」
「！」
さすがノンさん。ダンテスさんといっしょにいられる権利を勝ち取ったんだ。
「次にはハーフリングの里だべな。わたし、全然故郷に連絡取ってなかったから、いい加減一度は帰ってこいって父が言うべな」
おお、ハーフリングの里！
薬師で有名なハーフリングの里ってどんなところなんだろう。
聞いてみるとクルヴァーン聖王国のエベーニュ公爵の出身地である里とは違うらしい。ハーフリングの里っていくつもあるのか……。
それから僕は、自分の準備をするために部屋へと戻った。
「すぴー」
「……」
「むにゃ……あ、坊ちゃん……ダメですよ、あーしは人妻なんすよ……」
「……」
「ふぎゃー！？」
僕のベッドで寝ていた猫系獣人の頭にチョップをくれてやったら、飛び起きた。
「な、な、なにするんすか坊ちゃん！　いや、人妻に手を出すスケコマシ！」
「夢の中でも見ていい夢と見ちゃいけない夢があるよね？　大体ゼリィさん、いつ結婚したんですか」
「……それもそっすね」

「納得するんだ。そこで」

生々しかったなー、とか聞きたくもない感想を述べているゼリィさん。

「そうだ、町を出ることになったんで準備してください」

「おっ、そういう結果になりましたか。グルジオ様はそれでいいと？」

「しょうがないな、って感じでしたけど……」

「それでいーんすよ。これから各国への説明で死ぬほど苦労すると思いやすけど、あの人も。それがマスターの仕事っすから」

にしし と笑ったゼリィさんは次に、

「それで……もうひとつの懸案は？」

「ん？　なにそれ」

「またまたぁ～。なにトボけちゃってんすか～」

「いや本気でわからないけど。なにが？」

はぁ……とため息を吐いたゼリィさんが肩をすくめて首を横に振っている。

なんだろう、このムカつくリアクションは。

「決まってるでしょ。アナスタシアちゃん、エヴァお嬢様、それに美形のお姉ちゃん。誰が坊ちゃんの本命なんすか？」

「え……え？」

「いい加減決めたほうがいいっすよ～。女の旬は短いっすからね。ただでさえ坊ちゃんは寝ててみんなの1年を無駄にしちゃったんすから」

「い、いやちょっと待って。なに、本命って」

「またまたぁ～。なにトボけちゃってんすか～」

はぁ……とため息を吐いたゼリィさんが肩をすくめて首を横に振っている。

だからそれは止めて。

「坊ちゃんの目覚めをずっと待ってたアナスタシアちゃん。多忙の公務をぶっちぎって坊ちゃんに会いに来て、まだこのお屋敷にいるエヴァお嬢様。『連れられてきた』って言いながら坊ちゃんとずっといっしょにいたそうな美形のお姉ちゃん。その誰が坊ちゃんの本命なのか決めなさいって言ってんすよ」

「い、いやいや、そんな……僕は」

「お姉ちゃんと血はつながってないんでしょ？　いけるいける！」

「そうじゃなくて！」

「そうなんすよ」

不意に、ゼリィさんは真顔になった。

「言ったでしょ、坊ちゃん。女の旬は短いんすよ。坊ちゃんが決めないと、ずるずると彼女たちの時間を無駄にしちゃいますよ。それとも坊ちゃん、貴族ばりに一夫多妻で3人とも引き取っちゃいます？」

あ、なんならあーしもついでに愛人枠で！　なんてゼリィさんは最後に茶化したけれど……それでも言ってることは本気だった。

「その……ほんとうに、そうなのかな。3人が、僕を、その……」

「初々しいなぁその反応！　坊ちゃんってたまに大人っぽいこと言う割りに、こういうところは初々しいっすよねえ」

しょうがないじゃないか！　日本にいたときだって彼女なんていなかったんだから！

「見ればわかるでしょ。一目瞭然でしょ。美形のお姉ちゃんはちょっとわかりにくいところありますけど、押せばいけます」

「それは『行ける』ってことじゃないんじゃ……」

「お姉ちゃんのほうも初々しいんすよ。どうしていいかわかってないだけっすよ、アレは」

ゼリィさんはベッドから降りた。

「エヴァお嬢様も、そんなに長くはここに滞在できませんよ？　ましてや坊ちゃんが旅に出るんなら今言っておかなきゃ。誰を選ぶのかを」

「それは……」

「お嬢様の国だっていろいろ変わってて忙しいんでしょ？　だったら、坊ちゃんがいつまでも束縛しておいたらかわいそうっすよ」

「束縛なんて――」

違う、と思ったけれど、傍から見たらそうなのかもしれない。

「アナスタシアちゃんだって、見てるこっちがつらいくらい坊ちゃんに一途でしょ。これから同じパーティーで行動するならなおさら、はっきりさせなきゃ」

「うぐ……」

ゼリィさんに正論で押されるなんて。

「じゃ、あーしは行くので、ちゃんと決めてくださいね」

ドアから部屋を出て行ってしまった。

「……」

どうしよう。決めろって？　３人から誰を選ぶか……僕が選ぶの？
真剣に、恋とか愛とか考えたことがなかった。
こっちの世界では生きるのに精一杯だったからだ。

「――あっ、もちろんあーしを選んでくれてもいっすよ？　部屋で待ってます！」

いきなり扉が開いてゼリィさんが捨て台詞を残していったものだから心臓が飛び出るかと思った。

「あっち行っててください！」
「はいはい～」

扉が閉じられた。
遠ざかっていく気配をしっかりと感じる。
よし……完全にいなくなったな。

「ふう……」

僕はイスに腰を下ろした。

「どうしよう……」

富と名声か、自由か。
その二択を迫られたときよりもずっと僕は迷い――。

「いや」

――迷わなかった。

ゼリィさんに突きつけられたあと、僕の心はもう決まっていたのだ。

「……」

この気持ちは、揺るがないと思う。

だったらあとは行動するまでだ。

「行こう」

僕は部屋を出て、彼女がいるはずの部屋へと向かった。

エピローグ（3）　3人の花嫁（後書き）

選ぶのはひとりだけです。
ご期待に添えなかった場合はほんとうにすみません……。

エピローグ（4）　4年後の約束（前書き）

前話ではたくさんのご感想ありがとうございました。

エピローグ（4）　4年後の約束

ゼリィさんに問い詰められて、僕が思い浮かべたのは彼女のことだった。

最初から好意があったのかと言われればそんなことはなくて。

僕の、この奇妙な……鉱山崩落の事件から始まる一連の、大騒動の中で少しずつ彼女に惹かれていったのだと思う。

でも、ゼリィさんに言われなければこの気持ちを自覚することはなかっただろう。

腹立たしいことではあるけれどゼリィさんのおかげかもしれない。

でなければ彼女と僕の関係を……今のままの、居心地のいい関係を崩さないよう僕は生きていっただろうから。

その部屋をノックすると、確かに彼女は在室中だった。

部屋には彼女だけでなく多くの人がいて――護衛の騎士だけでなく、クルヴァーン聖王国から連れてきた文官たちもここにいた。

「……あら、レイジ。どうしたのですか？」

左右の手に書類を持ったエヴァお嬢様は、僕を見ると小さく首をかしげた。

その姿を見たときに、僕はいろいろな思いが胸に込み上げるのを感じた。

初めて出会ったころは「幼い」という言葉でしか表現できなかった、傍若無人だったお嬢様。

それが今では、大人の文官を相手にして対等の議論をしている。

お嬢様がこうなるきっかけになったのが僕なのだとしたら、それは誇らしい――と以前思ったことがある。
だけれど、今のお嬢様は僕の想像をはるかに超えて成長している。
（――うっかりしてたら、僕が大人ぶっていられなくなっちゃうな）
そんな危惧を覚えるほどに。

「お嬢様、少しお話ししたいことがあります」
「今？　そうね……そろそろこちらを発たねばならないから、片づけなければいけない案件が多いのですけれど」
「であればなおさらです」
離ればなれになるのなら、今話しておかなくちゃ。
「……」
お嬢様は僕の顔をじっと見つめた。
その整った美しさにどきりとする。
でも――僕は知っている、彼女の美しさは見た目ではなくて、その中にある、一本筋の通った心だ。
気位、というふうに言ってもいいかもしれない。
「わかりましたわ。――皆様、手続きは続けておいてください。レイジはこちらに」
僕はお嬢様とともに、部屋からバルコニーへと出た。
地上3階のこの部屋は、目の前に大きな庭を見下ろし、その先には首都の町並みが広がっている。
陽射しが出ていて今日は暖かいけれど、吹く風は冷たさを感じる。

でもそれが僕には心地よかった。
これから話すことを考えると、僕の体温はさっきから上昇しっぱなしだからだ。

「それで、どうしたの？　なにか問題でもあった？」

みんなの前だと伯爵令嬢然とした話し方をするのが板についてきたお嬢様だけれど、僕とふたりだけのときにはこうして、言葉を崩してくれる。
それがうれしかった。

「その……お嬢様、もう聖王国へ帰られるのですね」

いきなり本題に入れず、僕は遠回りの道を選んでしまった。

「そうよ。お父様が内務大臣に抜擢されるという話があって、そのせいで今は殺人的に忙しいのだわ」
「スィリーズ伯爵を？」
「今まで日の当たる地位は意図的に避けていらっしゃったのだけれど、そうも言ってられないみたい」
「でも伯爵なら軽々とこなしてしまうのでしょう？」
「もう、レイジまで。みんなそうやって期待するからお父様が働き過ぎてしまうのよ。だからわたくしもなるべくお仕事を肩代わりしているの。ようやくお父様も『早く帰ってくるように』ってわたくしを頼ってくださるようになったんだから」
「な、なるほど……」
「……それで、レイジにしては深刻そうな顔だったけれど、どうしたの？　お父様の話をしたいわけではないのでしょう？」
「はい」
「もしかして、仲間のことを気にしている？　あなたは……英雄に

なる選択をしなかったのでしょう？　ほんとうは仲間たちは英雄になりたかったのかもしれないと思っているのでは？」

「それは……」

僕の心の迷いには、確かにそれはあった。

みんなの未来に関わることまで僕の意思を最優先で決めてしまっていいのかと。

「レイジ……あなたの仲間思いは美徳だけれど、でもそれにとらわれてしまってはダメよ」

「とらわれる……ですか」

「ええ。仲間だってあなたの決断を尊重するとしたのでしょう？　であればあなたが決めればいいのだわ。にもかかわらずあなたがくよくよ悩んでしまっては、仲間に失礼よ」

「……」

よく見ている。お嬢様はほんとうに、よく見てくれているのだ。

僕が気にかけていることを、心配を、僕よりもちゃんと見ていてくれて、ちゃんと「大丈夫」って言ってくれる。

それが温かくて、僕の胸はじんわりした。

「……いい仲間に、恵まれたのね」

「……はい」

「ならわたくしは安心して、聖王国に戻れるのだわ」

バルコニーの手すりに手をついたお嬢様に日の光が降り注いでいる。

そよ風になびく金髪は光を含んで煌めいている。

魔力を込めれば多くの人に力を与える魔瞳は赤く、美しい。

今は13歳のお嬢様には幼さが遺っているけれど、きっとこれか

らは――お嬢様にも多くの貴族から求婚の申し込みがあるんだろうな。

そんなことに思い当たったとき、

（――いやだな）

と僕は思ったのだ。

お嬢様がどれほど傍若無人で、じゃじゃ馬で、向こう見ずで――勇気のある人なのかを知っているのは僕だけでいい、なんて、思ってしまったのだ。

そのとき、

「お嬢様が好きです」

思っていた言葉はするりと口から出てきた。

「僕は冒険者でいる道を選んでしまいました。そしてお嬢様は貴族です。そこに問題がないわけないことはわかっています。でも、僕の想いは変わりません」

お嬢様は、目を見開いて僕を見ていた。

「覚えていますか……世界を見せるためにあなたを連れ出すと言った約束を。いつになってもいいです。待っていますから……あなたを」

僕はお嬢様の隣に立った。

「この世界で、僕はあなたとともに生きていきたい」

詩のようなフレーズも、甘いささやきも、僕にはないのだけれど。
それでも想いには正直に伝えたいと思った。
すると――お嬢様の瞳から、一筋の涙がこぼれた。

「ッ！？　お、お嬢様！？」
「ご……ごめんなさい、そんなつもりじゃなくて……」

僕は高揚していた気持ちから一変して、血の気が引くのを感じた。
僕の言葉のなにがお嬢様を悲しませてしまったのかと。
あたふたする僕がなにもできないでうちに、お嬢様は人差し指で目元を拭った。

「――うれしくて」

という言葉とともに。

「うれしくて……？」
「……ええ。レイジが地位や名誉ではなく冒険者としての自由を選ぶことはわかっていたのだわ。だって、あなたはスィリーズ家に守られるのではなく、国外へ出る道を選んだ人だから」

あ……。

そうか、お嬢様は、今回も僕が「自由」でいることを選択するとわかっていた。
そしてそれはお嬢様と「距離を置く」ことだと考えたんじゃないだろうか。

「立場は違っても、お嬢様を想う気持ちは変わりません」
「……そういうセリフを、さらっと口にできるようになったのね」
「うっ、ぼ、僕だってがんばってしゃべってるんですよ」

慣れないセリフのオンパレードで、僕のキャパはいっぱいいっぱいなのがほんとうのところだ。

「４年……」

「え？」

「４年、待っていて欲しいの。そうすればわたくしは１７歳になり、聖王国の貴族社会でも一人前のレディーとして認められるから。ほんとうは１７歳の誕生日前後で結婚を発表するのが多いのだけれど。１７歳になれば、自分の未来を自分で決められるのだわ」

「えっと……それは、つまり？」

お嬢様は――気丈なお嬢様にしては珍しく、赤くなった顔を伏せてもじもじした。

「も、もう！　レイジは勘が鈍いのだわ！　１７歳になれば、わたくしは結婚相手を自分で選べるということよ。貴族でなくとも……た、たとえば、冒険者であっても」

「……」

これは――お嬢様が僕を受け入れてくれた、ということだろうか。

僕は喜んでいいんだろうか。

「……お嬢様」

「な、なに？」

「抱きしめてもいいですか？」

「っ！？　バ、バカなことを言わないの！　そういうのは、４年後よ！」

真っ赤になって怒っているお嬢様はこんなに可愛かったっけ、と

思えるほどだった。

「我慢できそうにありません」

「わたくしは1年、寝ているあなたを待ち続けたのだわ」

「うぐっ」

それを言われるとツライ。

先がどうなるかもわからず待つだけの日々と、4年待てばいいと期限がわかっている日々とでは重みが全然違うだろう。

「……で、でも、4年もお預けするだけじゃかわいそうだから、ひとつだけ許可してあげるのだわ。ふ、ふたりきりでいるときには、『エヴァ』と呼んでもいいのよ」

お嬢様の、今できる精一杯らしい。

それがなんだか微笑ましくて、

「な、なにを笑っているの!?　レイジ!」

思わずほっこりしてしまった。

「いえ……あ、いや。えーっと、その……エヴァ」

「!」

「これからもよろしくね」

お嬢様の――エヴァの背筋がぴんと伸びた。

そうして彼女は、口元を緩ませて笑ったのだ。

「ええ!」

そんな彼女の笑顔は、幸せそうな笑顔は今まで見たこともなかった。

スィリーズ伯爵のひとり娘として、権謀術数渦巻く貴族社会で育てられた彼女は、横暴だったり天真爛漫だったりはしたけれど、こんなふうに警戒心を解いて、相手にすべてを委ねるような笑顔を浮かべたことはなかったのかもしれない。

そしてその笑顔が、他ならぬ僕に向けられたものだということがうれしかった。

うれしいと同時に、僕がエヴァを守らなければいけないんだということに気がついた。

僕もエヴァもお互いを見つめ合っていて、自然と手が伸びて手と手を握り合っていた。

温かく柔らかなエヴァの手を感じていると自然と僕の表情も緩んで、きっと僕もエヴァと同じ顔をしていたに違いない。

だからだろう。

「――ゴホン」

その人の接近に気づかなかった。

「1年もの眠りから目覚めて早々、娘に接近しすぎではありませんか、レイジさん」

ここにいるはずのない――無表情の、しかし静かな怒りを潜ませているスィリーズ伯爵がそこにはいた。

「は、伯爵!?」

「お、お父様!?」

そして僕とエヴァは伯爵の後ろに、窓ガラスの向こう、室内から

こちらの様子をうかがっているみんながいるのに気がついた。
ミミノさんが親指を立ててみせて、横ではダンテスさんが天を仰いで手ぬぐいで目元を拭っている……って、そこまでするほどのことかな!?
その横にいたゼリィさんがにまにましているので、ゼリィさんがみんなに伝えて回ったのだろうことがわかる。あとで絞めよう。
エヴァの部下や護衛たちは伯爵という想定外のお客さんに青い顔をしていて、伯爵についてきたのかマクシム隊長もよくわからない顔でキョロキョロしていた。
そして――アーシャとラルクもいた。
アーシャは少し寂しそうに微笑み、ラルクは僕と目が合うとニカッと笑ってくれた。

「……レイジさん、無粋なことを言ってしまうことには申し訳なく思うのですが、今は聖王国が非常に忙しない状況なので、また日を改めてうちに来なさい。――エヴァ、そろそろこちらも限界です」
「わかっていますわ、お父様」

エヴァはすでにお嬢様の顔に戻っていた。
伯爵が室内に戻っていくと、エヴァはちらりと僕を見て、

「……ほんとうは何日も前に戻っている予定だったのだけれど、今日の今日まで引き延ばしていたのだわ。でも……待っててよかった」

ふわりと微笑んだ彼女に、僕はどきりとする。

「もう……行ってしまうんだね」
「ええ、でもすぐに遊びに来てくれるんでしょう？　だってあなたは――」

自由が信条の冒険者なんだから。
そう言ってエヴァは室内へと戻った。
僕の胸は鼓動を速めている。
このドキドキは今までに感じたことのある感覚と少し違った。
胸の奥がじりじりと熱くなって、これからやってくる未来に否が応でも期待してしまうような――そんなドキドキだったのだ。

エピローグ（4）　4年後の約束（後書き）

次回、エピローグとしても最終話となります。

エピローグ（5）　五英雄（前書き）

前話ではこれで終わりと書いたな？　あれはウソだ。
すみません、1万字書いても終わらなかったので、もう1話だけ続きます。
すみませんすみませんすみません。

エピローグ（5）　五英雄

★　キースグラン連邦　とある山麓の村　★

山に訪れる春は遅い。
それでも日々暖かくなる毎日を実感できるもので――酒場には多くの村人が詰めかけていた。
山道も通れるようになり、本格的に街との交易が再開されるので、悪くなりそうな食材を酒場も放出しているのだ。
村人たちもこれから手に入るだろう現金収入をあてにして酒を飲む。
春が始まる直前の、一種の儀式のようなものだ。

「――おい、聞いたか？」
「あ？　ああ、あのテッドのアホみたいな歌だろう？　この冬何度も聞かされたぜ」
「違う」
「だが何度聞いても笑っちまう」
「違うっての」
「……なにが違うんだ？　トビー」

ジョッキで2杯の葡萄酒を飲んでいてすでにいい感じに酔っ払っていたが、トビーの様子がふだんと違うとようやく気がついた。
トビーは声を潜める。

「……昨日、来てただろ？　街からの行商人がさ」
「あ、ああ……山道の開通を確認してくれた人だろ。いつもと違う

人だったが」
「村長とそいつが話をしているのを聞いちまったんだ。俺以外にも知ってるヤツがいるのかと思って今日は耳をそばだててたんだが…」
…どうやら村長はだんまりを決め込むらしい」
「な、なんだよ。そんな秘密があるのか？」
「……」
「もったいぶるなよトビー」
「……知ったからにはお前にも一枚噛んでもらうぞ、マークス」
「そりゃ構わねぇが。儲け話なんだな？」

神妙な顔でトビーはうなずいた。

「……この5年、俺たちは山奥に入れなかった。そうだな？」
「あ、ああ。クソデカい化け物みたいな蝶が飛んでたからな。あの鱗粉を吸って、5人も仲間が死んだ……」
「それ以来、山奥の……尾根続きの山は越えちゃならねえってことになった」
「そりゃしょうがねえだろ。確かに山奥じゃ、街でアホみたいに高く売れる黒茸が採れるが……それでも命あっての物種だ」
「そこだよ。黒茸だよ」
「なにが言いてぇんだよ。さっさと話せ」
「……行商人が言うには、化け物蝶は……なんでも『幻惑する災厄（ダズル・バタフライ）』とかいう名前らしいが」
「ダズ……なに？」
「その化け物蝶は、いなくなったんだそうだ」
「はあ！？」

ガタッ、とマークスが腰を浮かせたので村人たちがこちらを見る。

「お、おい～、マークス、そんなビックリするこたぁねぇだろ。お

前が１０歳まで寝小便してたことなんてみんな知ってるっての」

トビーがあわてて誤魔化すと、村人たちは「まぁたアイツら小便の話してやがる」とか「いつまで経ってもガキだな」とか言いながら自分たちの話に戻った。

「……でけえ声出すなよバカ」
「わ、悪い……っていうか１０歳まで寝小便なんてしてねえよ」
「そこはどうでもいい。問題はその話を聞いた村長が、だんまり決め込んでるってことだ」
「ん？　なんで村長は黙ってんだ」
「決まってる。身内で黒茸を独占するんだ」
「！」

さすがに今度はマークスも声を上げなかった。

「……どのみち街との行き来が再開したらウワサは聞こえてくる。その前に、採れるだけ採っちまおうって肚なんだ」
「い、いや、しかしそんな……」
「５年だぞ？　あの、化け物蝶が現れてから５年だぞ？　その間、手つかずだった山だ……どんだけ黒茸が生えてるかわかったもんじゃねえ。俺が村長だったら絶対独り占めする」

ごくり、とマークスはつばを呑んだ。

「どうだ、マークス。乗るか？　明日の朝一で採りに行くんだ」
「……やる」
「よっしゃ、決まりだな。当然だが、化け物蝶がいたらすぐ逃げるぞ」
「当然だ」

ふたりはジョッキをごつんとぶつけ合って、ぐびぐびと葡萄酒を飲んだ。
勝利の味がした。

「ぶはーっ。……そういや、トビー。化け物蝶はどうなったんだ？　倒した、ってことじゃないんだよな」
「ああ、そうみたいだ。なんでも、凄腕の冒険者たちが追っ払ったらしいぞ」
「冒険者が？　騎士団が、とかじゃないのか」
「騎士団が動くかよ。こんな山奥に」
「それもそうか」
「その冒険者はよお、行商人がえらくうれしそうに言ってたが、どうも有名人らしくてな」

トビーは言った。

「『五英雄』、なんて呼ばれているらしいぞ」
「……英雄？　大げさじゃねえか？」
「だな。――おい、飲み過ぎるんじゃねえぞ。明日、朝イチだ」
「わかってる」

ふたりはにんまり笑って、ジョッキをぶつけ合った。
このふたりが巨万の富を手に入れるのかどうかは――翌朝、集合場所にマークスが行ってみると、村人たちが総出でキノコ採りの装備をして現れたらしい。
あれだけ騒がしい酒場でも、トビーの話はしっかり、他のテーブルにも聞こえていた、ということだった。

★　竜人と獣人の街　★

ふたつの世界がひとつになった影響は、モンスターの出現だけではもちろんなかった。
人里離れた場所にあった獣人族の街。
その横に、突如として出現したのが――竜人たちの街だった。

「どうしてお前らは横入りするぬらァ！」
「あぁ？　トカゲどもは黙ってろやァ！」

竜人と獣人が街中でいがみ合っている。
ふたりとも上背があり、筋骨隆々だ。
違う見た目、違う価値観、違う世界に生きてきた2種族に、いきなり「仲良くしろ」というのも無理な話で――こうしたケンカは日常茶飯事だった。

「またケンカだ……」
「いい加減にしてくれぬる」

それでも、モンスターの脅威を前にいがみ合っている場合ではなく、2種族のトップたちは協調路線を選んだ。
治安部隊には竜人と獣人を両方混ぜる、という方針もそのためだった。
だが――共存が始まってから5年。
モンスターの脅威は少しばかり遠くなり、むしろ街中でのケンカは増える一方だった。

「お前らケンカは止せ」
「そうだぬる。仲良くしたらいいぬろ？」

治安部隊が声を掛けると、ふたりは、

「黙っていられないぬる！　こっちは夜勤明けでようやくここに来たってのに！」

「知るかよ。こちとら２０連勤明けだ」

バチバチと視線で火花を散らすふたり。

「……めんどくせえな。いっしょに行けよ」

「それがいいぬる。だって、風呂だぞ？」

そう、ふたりがいがみ合っていたのは公衆大浴場の前だった。

「獣人が入ると毛が抜けるぬる！」

「トカゲどもは長湯で邪魔くせえんだよ！」

相容れない価値観がぶつかり合う。

「……お前ら」

「……ナメてんぬら？」

４０連勤真っ最中で、なんなら2徹目突入の治安部隊は目を細めた。

ブラック度合いで言えば治安部隊がダントツなのだ。

さすがにその気配に、ケンカしていたふたりも気がつく。

「……こ、これは仲良く風呂に入れってことだよな？　なっ、トカゲ？」

「……そ、そうぬらね、犬っころ」

ふたりが合意にいたろうとしたそこへ、

「ほいほい、邪魔ぬら、デカいの」

竜人の老人集団がやってくるとさっさと中に入ってしまった。

「あっ、クソジジイども！」

「長老！　抜かすんじゃねえぬら！」

竜人族の長老たちを追いかけて獣人も竜人も風呂へと入っていった。

「――ふぃー」

熱気の立ちこめるボイラー室でキミドリゴルンは大きく息を吐いた。

多くの魔道具が稼働し、水を汲み上げ、沸かし、大浴場に供給している。

これらの魔道具を管理するのがキミドリゴルンの仕事だった。

「稼働に問題はないけど、経年劣化で入れ替えたほうがいい設備が多いぬろぉ……」

それでもやりがいはある。

風呂という文化は、竜人だけでなく獣人の心もつかんだのだ。

毛嫌いする獣人もいるが。

２種族の協調路線が、問題が多いながらもうまくいっているのは

風呂によるところが大きい――そう、キミドリゴルンは自負している。

「ボス～。そろそろ飯にしましょうよ」
「そうっすよー」
「わかったぬる」

獣人の部下もふたりいる。
彼らはキミドリゴルンを竜人だからと敵対したりはせず、真面目に魔道具のことを勉強していた。

「……レイジくんは今ごろどこにいるんぬる？」

この風呂を、ダイナミックな魔法で作り出したレイジという少年とはしばらく会っていない。

「でも、彼ならきっとどこでも活躍しているんぬろ」

そう思えるだけの信頼が、キミドリゴルンにはあった。

★　ブランストーク湖上国　世界会議　★

2年に1度、世界各国の首脳がブランストーク湖上国に集まるようになり、今回で「世界会議」は3回目となる。
最初の1回は「世界結合」を行ったときだ。
2回目は「世界結合」後の混乱を乗り越えつつあったときで、各国は連携していた。
そして3回目――誰しもが今回の会議は「荒れる」とわかってい

た。

「王太子殿下、ご無沙汰しております」

「これは、大元帥殿」

壮麗な大教会の、広い廊下で出会ったのは――方や「王太子」と呼ぶにはすでに老齢の男性。

しかしながらまだまだ最前線でテキパキと仕事をこなしている、精力あふれるゲッフェルト王国王太子だ。

もう片方は見上げるほどの大男であり、明らかに会議室よりも戦場が似合っているという光天騎士王国のフリードリヒ＝ベルガー大元帥だった。

フリードリヒは光天騎士王国の全戦力の総責任者だ。

騎士のトップは国王なので、そこは違うのだが。

「会議の開始までまだ時間があります。どうです、少々話でも」

「よい提案をありがとう。立ち話もなんだから座りましょう」

手近な応接間に入ると、老人と大男という妙な組み合わせのふたりはイスに座った。

それぞれ引き連れている人間が３０人ほどもいるので、広々した応接間の人口密度はあっという間に上がる。

「……モンスターの脅威はほぼ去ったと言っていいのだろうな。我が連邦はかなり落ち着いたと言える。貴国はいかがか」

「ええ。『世界結合』以前に戻ったと言えるでしょう。ですが、まだまだモンスター掃討の手は緩められませぬ」

「うむ……これより後の世代には天賦珠玉がないからな」

王太子の言葉にフリードリヒは重々しくうなずいた。

今、現役で戦っている騎士や冒険者はいい。彼らは天賦珠玉によって力を手に入れているのだから。
だがこれから生まれてくる子どもたちの世代にはそれがない。
であれば、できる限り多くモンスターを減らしておきたいと考えるのは当然だ。

「聞きましたぞ、王太子殿下。レフ魔導帝国からの技術供与を引き出したとか」
「さすが、貴国は帝国の隣国であるからな。耳が早い」

その「次世代」の生き残りのためにゲッフェルト王国が選んだ道のひとつが、「魔道具による武装」だった。
魔道具研究で抜きんでているのは今も昔もレフ魔導帝国だ。
彼らと直接の取引を行い、一方で技術を供与してもらうという取引が、先日成功した。

「王太子殿下の功が大きいと聞いておりますぞ」
「ははは、フリードリヒ殿もそんな世辞を言うようになったか。あれはすべて父の采配よ」
「ゲッフェルト陛下はお元気ですか」
「元気も元気。おそらく私が先に寿命で死ぬよ」

明るく笑う王太子に、フリードリヒはどう反応していいかわからない。
冗談なのか、本気なのか。
そんな困ったフリードリヒを見て、ますます王太子は笑う。

「……あら、皆様、こちらにいらっしゃったのですね」

凛とした声が聞こえた。

室内に充満していた付き人たちはハッとするとその人物のために道を空けた。

「おお、これは……」

「ご無沙汰しております、聖下」

王太子、大元帥といえど彼女をむげにはできない。

教会の頂点に立つ少女が――教皇が室内に入ると、ふたりは立って出迎えた。

「なにか楽しそうな笑い声が聞こえまして」

「いや、なに。私が父の悪口を言っておったのです。そうでしょう、大元帥」

「お戯れを……」

こういったやりとりが得意ではないフリードリヒは苦笑した。

教皇もイスに座ると、3人は話を再開する。

「それはそうと、聞きましたか、聖下。『五英雄』のことを」

「ええ。彼らの話を聞かない日はありませんね。いったい、どれほどの活躍をすれば気が済むのでしょう。アンデッドモンスターに占領された街の解放、伝染病の早期解決に地域紛争の調停……およそ冒険者とは呼べないほどの活躍振りですね」

「いやしかし彼らのおかげで助かっておりますよ、我が連邦は。特に巨大種については悩みの種でしたが『五英雄』が動くことで巨大種を未開の地『カニオン』に追い払ってくれましたからな」

「今は、未開の地『カニオン』について調査を希望しているとか？」

「そのようです。しかしながら、私はクルヴァーン聖王国にしばらく留まることになるのではないかと思っておりますが……」

するとフリードリヒと教皇は、即座に首を横に振った。

「彼らが政治に関わることはないでしょうな」

「はい、フリードリヒ様に同意見です。そのような御方だとは思われませんでした」

「ふうむ。お二方とも五英雄とは行動をともにすることが多かったがゆえに、そう思われるということですか」

少しうらやましそうに王太子は言った。

五英雄――「世界結合」に関わり、その後の女神による混乱においては解決するにあたって中心的な役割を果たした。

フリードリヒはその以前から五英雄とつながりがあり、教皇は女神の依り代だったので五英雄に救われた。

ゲッフェルト王国は大陸でも有数の大国だが、これら混乱のさなかにおいては特に目立った役割を果たせなかった。

せめて五英雄とつながりでもあれば……と思ったのだが、まさかたかだか冒険者風情が大活躍するだなんて思いもしなかった。

「しかしながら、五英雄の中心的な人物である『天銀勇者（ミスリルブレイヴ）』は聖王国の貴族の娘と結婚するのでしょう？　どうしても、聖王国寄りの行動を、今後するのではないかと思ってしまいますが」

「それをおっしゃるのなら、『天銀聖女（ミスリルセイント）』は教会所属ですよ」

「『天銀大盾（ミスリルシールド）』は是非とも我が国の騎士に迎えたかったのですがな……」

「いずれにせよ、王太子殿下。彼らは今後も各国の思惑に左右されないバランサーとして行動してくれるはずです。秤のような立場で……」

「それならばよいのですが……。確かパーティー名もそんな名前でしたな。『天銀の秤』とかなんとか」

それは間違っているのだが、教皇も、フリードリヒも小さく笑って追認してしまった。

★　未開の地「カニオン」最前線　★

クルヴァーン聖王国の国土は広く、未開の地「カニオン」と接している部分もまた広い。
そのため、聖王国奥地の開拓村落ではいまだに多くのモンスターに悩まされていた。

ズン……ズズン……ズンッ……。

地響きがあると、粗末な農村は揺れて、屋根から砂埃が落ちてくる。
子どもたちは母親にしがみついて恐怖と戦っている。

「お、お母さん、逃げなくていいの？　今逃げれば逃げ切れるよ」
「大丈夫。お父さんや村長さんを信じて……」

母親もまた青い顔をしていたが、必死で子どもたちに言い聞かせていた。
どのみち村を捨てて逃げたところで、その先はない。
この土地を開拓することに賭けたのだ。
農村にいる多くの者たちが同じ立場だった。
しかし、重い足音はどんどん近づいてくる。
いよいよ、子どものひとりが泣き出した――そのとき、

「来てくれた！」

扉が開かれ、飛び込んで来たのは古びた革鎧と錆びた槍を手にした父親だった。
子どもたちは父親が帰ってきた安心で彼へと殺到するが、

「お、お父さん、来てくれた、って……街にお願いした冒険者が来てくれたのかい！？」
「そうだ！　これで助かるぞ！」
「で、でもふつうの冒険者じゃどうにもならないかもって……」
「ふつうじゃない冒険者が来てくれたんだ！　みんな、出迎えに行ってる！」

父親に連れられて一家が出て行くと、村の入口には人だかりができていた。

「あの人たちが……？」

母親は内心で首をかしげる。
たった5人しかいない。
この村に迫っているモンスターは3桁を超えるというのに。
しかもそのうち3人は女性で、ひとりは長男と同じくらいの背の高さしかない。

「――頼みます、頼みます皆様。皆様だけが頼りなのです」
「――わ、わかっています。大丈夫ですよ、村長」

すらりとした背の青年が、村長と話している。
やっぱり、おかしいと母親は思った。
冒険者と言えば荒くれ者というのが一般認識だ。
だというのにあの青年は優しそうで、村長に対する物腰も柔らか

い。
今まで見たことのない黒髪黒目は目を惹くが――「黒髪黒目は災厄」だという迷信もあったはずだ。

「――行きましょう、ダンテスさん」
「――おう」

だが、ダンテスと呼ばれた大男が、マントから大盾を取り出したとき――母親は驚きに目を瞠った。
なんという美しい銀色だろうか。
それはうっすらと光を纏っている。
生まれて初めて見るが、あれが――「天銀（ミスリル）」というものではないだろうかと思った。
ハッとすると、他のメンバーも全員が天銀製の装備を身につけていた。
天銀の杖、天銀のプロテクター、天銀のワンド。
気の弱そうな青年は、腰に二振りの短刀を装備している。
あれもまた天銀製なのだろう。

「では行ってきます」

青年は軽い口調で言ったが、その直後には――真剣極まりないまなざしへと変化していた。
触れれば切れるような、ピンと張り詰めた空気を漂わせ、彼らは村の奥にある開拓地へと向かう――。

「『天銀の秤』の皆様、どうぞよろしくお願いします……」

その場に平伏しそうな勢いで村長は頭を下げた。
そして村人たちもまた全員が同じように頭を下げていた。

彼らならなんとかしてくれる。
と、感じさせるような迫力が確かにあったのだ。

★

未開の地「カニオン」からモンスターがあふれ出すという連絡があったとき、迷わず討伐を引き受けてしまったけれども――早まったかもしれない。
そう、これって結構ヤバイのだ。
だって、

「……レイジ、マジで大丈夫なんだな？」

農村を出て、開拓地へと進みながらダンテスさんに聞かれる。

「だ、大丈夫……だと思います」
「そうか？　だってなぁ、明日だろ？　お前たちの結婚式は……」

そのとおりである。
僕の結婚式――エヴァと僕との結婚式は、明日なのだ。
僕がエヴァに告白して、「４年後」の約束を取り付けてからあっという間に４年なんて過ぎてしまった。
その間、僕ら「銀の天秤」はめまぐるしく活動をしていて――冒険者ギルドマスターのグルジオ様からもらった「お土産」、天銀製の装備を使って活動していたせいもあって「天銀の秤」なんていう間違ったパーティー名で呼ばれもしている。
それが、いちいち「間違いですよ」なんて訂正するヒマもないほどに忙しかった。

天銀級の冒険者ともなれば左うちわで出動するのは年に1回、みたいなこともあるようだけれど――この4年で出会った天銀級の人のうち、大半がそうだった――僕らは動き続けた。

――救える命は全部救いたい。

なんて言い出したのは確か……僕です。僕が全部悪いんです。

でもその気持ちは薄れておらず、今もこうして――結婚式のためにクルヴァーン聖王国へと戻る道すがら聞いてしまった、辺境開拓地の危機のために足を運んだのだった。

「と、とりあえずミュール辺境伯にも連絡を取っていますし、数を大幅に減らせれば僕らの目的としては達成でしょう」

「それはまあそうだが……」

ダンテスさんは「大丈夫か？」という顔を崩さない。

そ、そうですよね。

ヤバイっすよね。

時間的にはギリギリ間に合うと僕は踏んでいるのだけど、それより問題なのはエヴァの心証だよね。

新郎が結婚式の前日に戦場にいるってどうなんだよって僕だって思う。

だからといって、ダンテスさんたちだけに任せて僕だけ結婚式に行くというのは「ナシ」だった。

だって、ダンテスさんたちにも結婚式には出てもらいたいから。

「――レイジくん。エヴァ様にはいっしょに謝ってあげますから」

「あ、ありがとうございます」

「きっと理解してくれますよ」

ノンさんの優しさに救われるなぁ、もう。
僕が冒険者でいる道を選んでから、ノンさんもすぐに「銀の天秤」に戻ってきた。あくまでも「教会所属」という建前は崩せないけれど、それさえ守ってくれれば行動はすべて自由、なんていう破格の条件だった。

「――このまま結婚式なんて流れちゃえばいいのです」
「――こーら、アーシャはまだそんなこと言ってるべな？」

離れたところではアーシャとミミノさんがなにか話している。
いつの間にかミミノさんたちもアナスタシアのことをアーシャと呼ぶようになっていたっけ。
アーシャは……僕とエヴァの結婚を、複雑そうな顔をしながらも最終的には賛成してくれた。ただ、今みたいにスネることがあるけれど。

「おいでなすったぞ」

ダンテスさんが言う。
僕らの前方には、最初のモンスターが出現した――。

どれほど強大なモンスターであっても、天銀製の大盾を装備したダンテスさんの守りを打ち破ることはできない。

「どりゃあああああァッ！！」

サイクロプスの拳を正面から受け止めたダンテスさんは、その場に踏ん張るどころか、拳を横にいなして懐に潜り込むや、短槍を繰

り出してサイクロプスの顔面を貫いた。
一度、竜と模擬戦をやったときにも単身で竜と渡り合っていた。
僕だけじゃなく、他の竜たちも目を剥いていたっけ。ヒト種族にこんなことができるのか？　って。

「吹き荒れよ、火炎！！」

アーシャの放った炎の刃は水平に飛来すると、モンスターの集団にぶち当たって爆炎と化す。

「ほいほい」

ミミノさんが球形の秘薬をスリングショットで撃ち出すと、爆炎がさらに増して周囲一帯を包み込む。
「魔法複製薬（デュープ・ポーション）」は改良が重ねられ、アーシャの魔法にだけ特化すれば触媒の量も抑えられるとわかってからは、ミミノさんは出し惜しみせずこの「魔法強化薬（エンハンス・ポーション）アーシャ版」を使いまくっている。

「『神聖壁界陣（セイクリッドシールド）』」

ノンさんが展開しているのは神聖な魔力による障壁だ。
これによって打ち漏らしたモンスターが開拓村に向かうのを防ぐことができる。
ノンさんも天銀の錫杖を使うようになってから魔法の能力が格段に上がっていて、今では国の大神官レベルの魔法をバンバン使っている。

「レイジ、大物だ！」
「はい！」

ダンテスさんが大型種を引き受け、アーシャとミミノさんが小型から中型のモンスターを根こそぎ倒す。ノンさんが万一に備えての防御だとすれば――僕の役目は、

「仕留めてきます」

群れのボス、あるいはダンテスさんの武器では届かない大型モンスターの討伐だ。

今回の群れには、肥大化が進み、翼が退化したワイバーンがいた。グランドワイバーンと呼ばれるそれは、他のモンスターを踏み潰し、3つある頭から火、毒、氷を吐き出した。

『『『グルオオオオオオオオオオオオオオ』』』

「頭が3つあるから3倍うるさいなぁ」

僕が見上げていると、

「レイジさん、焼きましょうか？」

「レイジくん、中毒症状になったらいい薬があるからねぇ」

「ミミノさん……それ、まだ試験段階の薬とおっしゃってましたよね？　魔法で治しますよ」

アーシャとミミノさんの申し出は丁重にお断りすることにする。

これくらいの敵を相手に被弾してなんていられない――なんせ、結婚式を前にした新郎だからね。

……フラグじゃないぞ。

「そいっ」

僕は駈け出すと、いくつもの魔法を重ね掛けし、跳躍する。
天賦珠玉はなくなったけれど天賦はまだ体内に生きているし、戦闘を重ねるにつれて磨きが掛かっている感じがある。
弾丸のように飛び出した僕は軽々とグランドワイバーンの顔面に迫る。

『!?』

面食らっている竜頭に、僕は2本の短刀を引き抜いて斬りつけた。
スパッ、と。
コンニャクを切るくらいの手応えしか感じなかったけれど、×印の斬撃はグランドワイバーンの頭をキレイに切り裂いた。
相変わらず怖いほどの切れ味なんだよな、この天銀の短刀。

『グルオオオオ!』
『ゴアッ』

毒頭が怒り、氷頭が氷塊を吐き出した。

「ほいっ」

僕は空中に足場を創り出し、それを踏んで跳躍した。
まさかそんな挙動をするとは思っていなかったのだろう、毒頭がぎょっとしたけれど、僕が迫っているとわかってあわてて毒霧を吐き出した。

「【風魔法】」

天銀のなにがずるいって、短刀だけどそのままワンドのような役割もできるってことなんだよね。

簡単な術式の魔法だったのに、天銀によって増幅された風は突風となって毒霧を打ち消す。

「すぐに終わらせよう」

左手の短刀で毒頭を、右手で氷頭を切り裂いた。

さすがに3つの頭をすべて失うと、グランドワイバーンはその場にナナメに倒れ込んだ。

「ふー……」

「相変わらずえげつない攻撃だな。初見であれをさばききれるヤツはおらんぞ」

着地した僕にダンテスさんが言った。

「空中の足場は、かなり魔法を研究した成果ですからね～」

日本のマンガやアニメじゃよくあるものだった気がするけどね。

とはいえ、既存の八道魔法や天賦に縛られていたら思いつきもしなかったと思う。

天賦の縛りがなくなって、逆に魔法や魔術の自由は利くようになるんじゃないだろうか。

「残りを片づけましょう」

「お、おお……これ、辺境伯軍が来る前に全部終わるんじゃないのか？」

「奥の調査まではさすがにやれませんからね。その辺はお任せしちゃいましょう」

「そうだな」

ドォンッ、と火柱が上がる。
アーシャがまた魔法を使ったらしい。
「俺たちも負けてられねえな」
「はい」
僕らはモンスター討伐へと駆け出した。

結論から言うと――めちゃくちゃ時間が掛かった。
追加のモンスターがどんどん湧いてきたからだ。
グランドワイバーンを倒したときには胴体を残す余裕があったけれど――残しておけば、食べることもできるし、素材は資産にもなるからだ――夕方になるころには僕も魔法をぶっ放して敵を倒すことを最優先にした。
で、全部が終わったのは――日もどっぷりと暮れてから。

「お、終わった……」

泥だらけ、息も上がってぜえぜえする。
ダンテスさんは鬼のスタミナなので周囲を警戒しているけれど、アーシャと、行動をともにしているミミノさんは背中をあわせて座り込んでいるし、そのふたりにノンさんが疲労回復の魔法を掛けていた。
周囲は――だいぶ大変なことになっていた。
広範囲に渡って木々は薙ぎ倒され、焼かれ、大量のモンスターの死体があった。

「み、皆様、戦闘は終わったのでしょうか……？」

村長が、数人の村民を連れて恐る恐るという顔でやってきた。
ダンテスさんがそれに応対している。

「ああ、もうしばらくは大丈夫だろう。ミュール辺境伯軍が明日には来るだろうから、周囲の偵察をしてくれるはずだ」
「なんと、そこまでしてくださるとは……！　せめてモンスターの素材のはぎとりだけは手伝わせてくださいませ」
「あー、いや、手伝いとかはしなくていい」
「と、おっしゃいますと……？」
「この素材は村のものだ。自分たちのものとして管理してくれ。代官も来るだろうから、国に納めるぶんについては相談しなさい――開拓村とは言え、免税されているのは農作物だけだろう？」

素材は村に渡す。
これは僕らのポリシーでもあった。
というか正直なところ、いちいち素材を管理なんてしていられないのだ。
その手間を考えたら全部渡しちゃうほうがいい。
ミミノさんは触媒に使えそうなものは戦闘中に拾い集めているので、希少なものはいただいているしね。

「なっ！？　そ、そんなことはできません。これほど大量のモンスターが……」
「俺たちはこれ以外に、国やギルドから討伐報酬が出るからな」
「し、しかし……」
「急がないと素材が腐るぞ。ほら、早くするんだな。夜通しかけて剥ぐ価値があるぞ」

ダンテスさんが強引に村長たちの背中を押すと、松明を持った村

民たちが散ってモンスターの素材を剥ぎに掛かる。

「……で、レイジ。こんな時間になっちまったわけだが」

そのダンテスさんは、座って休んでいる僕のところまでやってきた。

「へへ……思った以上に時間が掛かりましたね」

「今から全力出して走っても明日の結婚式になんぞ間に合わんぞ。夜だから馬も出せんし。どうする気だ、お前は……」

呆れた顔のダンテスさん。

「……実は奥の手があるんです」

「奥の手ぇ？　いや、まぁ、お前を疑うわけじゃないが、４年もずっといっしょに行動していると大体どんなことができるかはわかるもんだぞ。さすがに高速移動の方法は――」

「僕がやる必要はないんですよ」

「？」

「あ、ほら……あれです」

僕は夜空を指差した。

「ん？　なんにもないじゃ……いや、待て。まさかあれは――」

ダンテスさんの顔が、引きつった。

空には巨大な影が浮かんでいたのだ――。

エピローグ（5）　五英雄（後書き）

後1話だけ続くところですが、新作を投稿したのでよろしければ読んでやってください。
メイドさんが旅に出る話です。
こっちはエピローグまで書き上がっているので安心してお読みいただけます。

『メイドなら当然です。　～　地味仕事をすべて引き受けていた万能メイドさん、濡れ衣を着せられたので旅に出ることにしました。』

←にリンクがあります。

エピローグ　オーバーリミット・スキルホルダー

★　エヴァ＝スィリーズ　★

クルヴァーン聖王国、スィリーズ伯爵邸には夜明け前から多くの人々の出入りがあった。
屋敷内は夜通し明かりが灯され、今日という日の準備に追われている。
主役であるエヴァ＝スィリーズもまた夜明け前に起こされ、朝の沐浴、神への祈り、肌の手入れに髪のメイクアップと、大量のスケジュールをこなしていた。

「……」

メイドたちによって少しずつ、少しずつ、完成形へと近づいていくエヴァ。
彼女を見たメイドたちは「ほぅ……」とため息を吐いた。
それほどまでに彼女は、今日の主役は、輝かんばかりの美しさだったからだ。
ただ当の本人はそれほど自覚がないというだけで――。

（ようやく、今日が来たのだわ）

この日が来るのをどれほど待ち望んでいただろうか。
レイジと出会ったのは11歳のときだった。
あのときはなんとも思わず――ただ「同年代の男の子を護衛だな

んて、お父様はどうかしている」くらいにしか思わなかった。
そんなレイジが使えるとわかったのは、彼が自分のワガママに応えてくれるとわかったからだ。
木登りや下町の視察、それに奴隷商撲滅活動まで。
こんなに便利な護衛がいてくれてラッキー！　と思いつつ、一方で彼がどんな人間でどうやったらこの年でこんな力を身につけられるのかが不思議だった。
不思議と言えば、彼は父のスィリーズ伯爵と対等に話していると感じたときだ。
最初は「不思議」にしか思わなかったが、日を追うにつれて、なぜ父と対等なのがレイジで、自分ではないのかと思うようになった――それが「嫉妬」という感情なのだと気づくのには結構時間が掛かった。
同時に、レイジを、ひとりの男の子として強烈に意識するようになっていった。
その後に起きた「新芽と新月の晩餐会」、クルヴシュラト聖王太子の暗殺未遂、「天賦珠玉授与式」での調停者との戦闘、さらにはウロボロス災禍。
すべての中心にレイジがいた。
彼は、エヴァの想像を軽々と超えていく能力を発揮した。
そうして――エヴァと父の間にあった秘密にたどり着き、契約魔術を破棄し、エヴァとスィリーズ伯爵をほんとうの意味で対等にし――。

（……聖王都を追われた）

レイジは自分を、聖王都から連れ出してくれるのだと思っていた。
それが突き放されたように感じた。
レイジの言った、

『伯爵とあなたはたったふたりの父娘です』

という言葉が胸に刺さった。

そのとおりだった。対等になれた今だからこそ、エヴァが父のもとに戻らなければいけないことはわかっていた。

だけれどエヴァはこうも思った。

――それならあなたは、ひとりぼっちなのだわ。

と。

でもそれを言ってはいけなかった。

レイジがいつか連れ出してくれると「約束」してくれたからではなかった。

レイジが、ようやく自分を対等の少女として扱ってくれたから。

（あなたのことを想わない日はなかったのよ）

離れる、ということがつらいことを初めて知った。

離れる、ということが不安になることだと初めて知った。

離れる、ということがレイジへの好意を知るきっかけになった。

それから世界では多くの事件が起き、レイジが「消えた」と聞いては我を失うほどに心配したし、レフ魔導帝国でひと目見られたときには心が躍って仕方がなかった。

まあ、あんなにキレイな姉がいるなんて知らなかったし、ハイエルフの王族なんていう少女がパーティーに加わったなんていうのもやきもきする原因にはなったけれど。

そんな彼が――女神との戦いで昏睡状態に陥ったと聞いたときには、「信じられない」という思いが先に立った。

レイジが目を覚ますまでの1年は、思い出そうにも記憶が抜け落ちているのではというくらい覚えていない。

仕事に忙殺されていたとも言えるし、このままレイジが目を覚まさないのではという不安に押しつぶされそうだったとも言える。

（目を覚ましてくれて……ほんとうによかった）

報せを聞いて、灰色だった世界が急に色づいたように感じられた。

レイジが生きていてくれる、それだけでよかった。

ましてや自分に好意を伝えてくれるなんて――考えてもみなかった。

「――お嬢様、下準備が整いました。お食事の後に、婚礼ドレスにお着替えいただき、大聖堂へと向かいます」

メイド長の言葉に、エヴァは立ち上がる。

朝食の準備はすでに整っており、食堂に入ると父のスィリーズ伯爵が待っていた。

父は、エヴァの姿を見てハッとしたような顔になったけれど、すぐに微笑んだ。

「……とてもきれいですよ、エヴァ」

「ありがとうございます、お父様」

父と娘、ふたりの食卓は静かだったが、聖王国の政権中枢にいて多忙を極めるスィリーズ伯爵は、それでも、なるべく時間を作ってエヴァとともに過ごした。

「……アデールに、どんどん似てきますね」

「お母様に、ですか」

エヴァの「鼓舞の魔瞳」が暴発したことで、母のアデールは赤ん

坊だったエヴァに傷を負わせてしまった。それを苦にしたアデールは、もともと産後の状態も悪かったことから亡くなってしまった。

一連の事件こそが父娘の間で契約魔術を使うことになった原因でもあったが――こうして父から、母の話を聞くことはめったになかった。

「私たちの結婚式もよく晴れていました。……まさかこうして、娘の結婚式を見ることになるとは。時間が経つのは早いですね」

「お父様はまだまだお若いでしょう」

エヴァの目にはスィリーズ伯爵はまだまだ若く見えるし、それは貴族の社交界でも同じことを聞けた。「スィリーズ伯爵の若さの秘密は国家機密に値する」なんて言うマダムの多いこと。

いまだにスィリーズ伯爵の後妻になりたいと願う令嬢も多いのだが、今まではエヴァがいたから遠慮していたフシがある。

「今後が心配ですわ」

「私の心配ですか？　そうですか、エヴァに心配されるのも悪くありませんね」

「茶化しているのではありませんよ」

「わかっていますよ。……それよりもエヴァは、レイジさんを心配なさったほうがよろしい」

「……」

結婚式当日だというのに、レイジが聖王都に入ったという情報が入ってこない。

優秀な連絡員が屋敷には常駐しているので、連絡漏れということはないだろう。

レイジのことだからこういうことになるんじゃないかという気はしていた。

その理由が、「聖王国僻地の開拓村を救いに行く」というのだから止めることもできない。

「大丈夫ですよ、お父様。レイジは必ず間に合いますわ」

「！」

にこりと微笑んだ娘に、父は固まり、そして、

「……そうですか」

寂しそうに微笑んだ。

それは父よりも深い信頼を寄せる相手を見つけた、娘に対する寂しさかもしれなかった。

聖王都クルヴァーニュの中心に聖王宮はあり、それを囲むように「1の壁」が存在する。壁は「8の壁」まであるが、「1の壁」と「2の壁」の間にある区画は「第1聖区」と呼ばれている。

「第1聖区」は国の中枢である施設が多いために貴族と、そこで働く者の出入りしかできない。

そのためにふだんは閑散としているのだが――今日ばかりは多くの馬車でごったがえしていた。

各地から貴族が集まっているのだ。

国内だけでなく国外からの賓客も多い。

聖女王の信頼厚く、内務大臣を務めるスィリーズ伯爵の娘にして、聖王国社交界の「華」とも言われるエヴァ＝スィリーズ。

「五英雄」のひとりにして各国上層部ならば知っている女神討伐の立役者レイジ。

このふたりの結婚式が行われるというのだから。

だが、その結婚式が行われる大聖堂内部は外の喧噪も届かず静かだった。

「あわわわわわ、エヴァ様、おおおおきれいですすすう～～！」

控え室にいたエヴァのところへとやってきたのは、ミラ＝ミュール。「熊辺境伯」と名高いミュール辺境伯の娘だ。

目をキラキラさせて、婚礼ドレスに着替えたエヴァへと駆け寄っている。

「……ミラ、あなた、また転びますわよ。落ち着きなさい」

呆れた顔をしているのはシャルロット＝フレーズ。

フレーズ侯爵家の娘で、エヴァ、ミラとともに「新芽と新月の晩餐会」に参加した同い年の少女だ。

「いや、ほんとうにおきれいだべな」

「……あ、と、入ってもよかったかな？」

それに続いたのは同じく同年齢のハーフリング、エタン＝エベーニュに聖王太子クルヴシュラトだった。

ここにロズィエ公爵家のルイがいれば「新芽と新月の晩餐会」に参加し、同じテーブルを囲んだメンバーと同じになるのだが――彼はすでに亡くなった。

5年以上も前のことで彼らは思い出すこともあまりなくなっていた。

彼らは成長し、背も伸び、大人びた装いに身を包んでいる。

そして関係性も変わった。

シャルロットはエタンと婚約をしているし、クルヴシュラトは「聖王太子」の肩書きを返上し――これはルイが死んだことと関係し

ているかもしれなかったが――今では地方貴族として活動している。
変わらないのはミラだけで、辺境の地で、相変わらず暴れ回っている父の手綱を握っていた。

「もちろんですわ。あとは時間を待つだけですから」

にこりと微笑んだエヴァに、エタンは一瞬目を奪われ、シャルロットからひじ鉄を食らっている。

「け、け、結婚しちゃうんですねぇ……」
「ミ、ミラ様、涙を拭いてくださいませ。せっかくのお化粧が台無しになってしまいますわ」
「……ときにエヴァ様。『天銀勇者（ミスリルブレイヴ）』殿の姿が見当たらないようですが……」

クルヴシュラトがきょろきょろすると、

「まだ来ていませんわ」
「え……？　式はそろそろ始まるのでは……」
「ごめんなさいぃぃ！　パパの動きが遅いばっかりに……帰ったら叱らなきゃ」
「だ、大丈夫ですわ、ミラ様。ミュール辺境伯にはモンスター討伐後の後始末をお願いしているので……討伐に向かったのはレイジの希望でもありますから」

レイジが戦っていたのは辺境ではあったがミュール辺境伯領ではなく、その隣だった。
だが機動力の高い部隊を持っているのはミュール辺境伯しかおらず、「銀の天秤」はあらかじめミュール辺境伯に戦闘後の後始末を依頼していた。

ちなみに言えばそういうときに動けるのがダークエルフ部隊だった。

彼らは武闘派で鳴らす辺境伯領にありながらめきめきと頭角を現し、今では領地まで与えられている。

「結婚式直前までモンスター討伐かぁ……」

「英雄の名は伊達ではないんだべな」

「あら？　エタン様も研究の虫でわたくしへの手紙の返事もほとんどくださらないではありませんか？」

「あ、あははは……」

結婚前からエタンはすでにシャルロットの尻に敷かれているようだった。

とはいえ女神騒動では聖女王支持に回ったエベーニュ公爵家のエタンと、財力のあるフレーズ侯爵家のシャルロットのふたりの婚約は、貴族たちにとってもビッグニュースだったりする。

ゴーン……ゴーン……。

鐘が鳴る。

いよいよ、聖堂が解放され、多くの客が入場してくる。

「――聖女王陛下おなり――」

「――エベーニュ公爵家当主――」

「――キースグラン連邦ヴァルハラ市長――」

「――ヴァルハラ市ギルドマスターグルジオ様おなり――」

来客を告げる声がここまで聞こえてくると、クルヴシュラトが頬を引きつらせた。

「す、すごい人たちが来ていますね」
「ええ。すべてレイジの……『五英雄』の威光によるものですけれど」
「そんなことはないでしょう。聡明なエヴァ様がすでに我が国の政治において重要な役割を果たしていることは、貴族なら誰しもが知っています」
「ふふ。フォローありがとうございますわ。ですがレイジの活躍にすこしでもあやかろうという動きがあるのは事実ですわ。それにわたくし、それくらいでいいと思いますの」
「……え？」
「プレッシャーを感じるくらいが……追いかける背中があるということは、それだけで燃えますから」

そのとききらりと光ったエヴァの瞳に、クルヴシュラトは一瞬見とれた。
きっとスィリーズ伯爵がここにいればこう思ったに違いない――何年も前の、そう、レイジと出会ったときのエヴァの顔に戻っていると。

「やあ、ここにいたのか。今日の花嫁は美しいですな」
「！　これは……！」

思いがけぬ来客が控え室に現れ、エヴァは立ち上がった。
でっぷりと太った、司教の格好をした老人だ。

「トマソン枢機卿、本日は式の執行をお引き受けいただき誠に……」
「ああ、ああ、いい、いいから。顔を上げなさい。こんな老人にへいこら頭を下げるものじゃないよ」

トマソンは教会に籍が戻っており、教皇たっての希望で枢機卿に

また着任していた。
そんな彼が、レイジとエヴァの結婚式を執り行う神父をやると言い出し、持ち前の実行力でここにいるというわけだった。

「たまには現場の仕事もせんと、聖句も忘れてしまうからな」

相変わらずのざっくばらんな言い振りだったが、トマソン枢機卿とあまり接点のなかったエヴァはもとより、教会のナンバー2である彼を前に同い年の4人は緊張している。

「それより――まだ来とらんのか？　君の花婿は」
「はい」
「ふうむ、こんなに美しい花嫁を心配させるとは。説教のひとつもせねばならん」
「いえ、心配はしておりませんわ。レイジは必ず来ますから」
「……ほう」

確信めいた物言いに、トマソン枢機卿は目を瞬かせた。
そこへ、

「――お嬢様～。エヴァお嬢様～」

走ってくる、声。
エヴァや他の貴族子女だけでなくトマソン枢機卿にももちろん護衛がついており、彼らが警戒心をみなぎらせる。

「問題ありませんわ。あの方は、当家の有能な連絡員ですから」
「連絡員？」

ミラがきょとんとすると、

「ええ……なにかいい報せだと思いますけれど」

部屋に飛び込んで来たのは礼服を着てはいるものの、着崩している女性。

あわてふためているところは、なんというかいつもどおりの――ゼリィだった。

「エヴァお嬢様！　連絡きたっすよ、坊ちゃんから！」

「レイジはいつ到着すると？」

「そ、それが――」

ゼリィは人差し指を上に向けた。

「もう来てる、って」

「……もう？　どこに？」

「さ、さあ、それは……」

ゼリィもまた首をかしげたときだった。

部屋が不意に暗くなった。

「あ、あれを見るべな！？」

エタンが窓から外を見て叫ぶ。

そこには――聖王都上空には、巨大な影があったのだ。

エヴァは走った。

あそこにレイジがいるのは間違いないと信じていた。

聖堂から外に出ると、馬車で混み合っており、降りた貴族たちもかなりの数だった。
そんな彼らは一様に見上げていた――巨大な影、魔導飛行船を。

「『豊穣ノ空』……！」

エヴァも、乗ったことがある。
行方不明になったレイジを捜しに向かったレフ魔導帝国で。
帝国が今もなお誇る、世界最大の魔導飛行船が「豊穣ノ空」だ。

「……ふふふ」
「エ、エヴァ様？」

思わず笑い出したエヴァに、追いついたミラが首をかしげる。
周囲ではあれが「敵襲ではないか」として大騒ぎになっているのに。

「ミラ様」
「は、はい」
「確かに……我が夫となる人物は、英雄と呼ばれるのにふさわしいかもしれませんわ」

だって、とエヴァは付け加える。

「『豊穣ノ空』を馬車代わりに使える者なんて、この世界に何人いるでしょうか」

★　ラルク　★

懐から懐中時計を取り出し、確認した少女は――強い風に長い金髪をなびかせていた。

「お嬢～。そんな寒いところにいねえで、焚き火に当たったらどうだい。こんなに冷てえ風は身体に毒だ」

「……そうだね。っていうか『お嬢』はもう止めろっつの。あたしだってもういい年なんだぞ」

そこは山肌の露出したとある山脈だった。

彼女、ラルクが見つめていたのは東――クルヴァーン聖王国のある方角だ。

「あ、今日はレイジの結婚式か」

ふと気づいたようにクックが言った。

山の洞窟は風よけにはちょうどよく、焚き火が燃えている。

仲間たちがお茶を淹れていた。

「……ん、まあな」

今ごろ、式が始まっているだろう。

ラルクもレイジから式への参列を誘われていたけれど、こうして遠く離れた場所に、今、いる。

「行きゃよかったのに。そんなに寂しそうな顔するくれえなら」

「うるせえ、黙ってろ」

「へいへい」

クックが離れると、焚き火の前でラルクは座り込んだ。

――ノリ悪いぞー！　つまんなーい！
――いやそんなわかりやすく唇を尖らせられましても。
――見たくない？　見たくない？
――わかったよ、わかったわかった、見たい見たい、見たいから
こめかみに拳を当てないで。ぐりぐりしないで。痛たたたたっ！？
――ふふっ、素直がいちばんよ、弟くん。

目をつぶって思い出されるのは、いつだって、ふたりが「姉弟」として暮らしていた鉱山でのことだった。

「……今さら、姉ってガラじゃないよ」

鉱山を出て、レイジと離れて過ごす時間が長くなって――再会したときにはレイジはすっかり大人びていた。
うれしさよりも、彼の周りにすでに多くの人間がいることに嫉妬した。
だから、だろう。
自分をもっと見て欲しくて、自分にもっと頼って欲しくて、ラルクは肉体に深刻な負担があるのを知りつつ【影王魔剣術】を使った。

「……最後はその弟くんに救われたんだから、笑えないよなぁ……」

天賦を引き抜いて、代わりに視力を失った。
それから視力を取り戻すことができて――あの港が見える丘で、レイジを見たときに初めて自分の想いに向き合った。
もう、弟くんは弟じゃない。
ひとりの男としてしか見られなかった。
だけれどその想いを伝えるには、「姉弟」というつながりが重かった。

レイジがエヴァを選んで――「悲しい」よりもどこかホッとしている自分もいたのだ。
でもホッとした自分に腹が立って、次は寂しくなって。
自分を持て余したラルクはこうして世界各地を回る旅に出た。

「お嬢、ゴルちゃん呼んでもらえます？　もうちょっと『カニオン』のほうを調べたいんすよね」
「あ、ああ……いいよ」

ゴルちゃん、とは金色の竜――ゴールドドラゴンのことだ。
あれからラルクと行動をともにするようになり、今もこうして旅に付き合ってくれている。
もの好きなヤツだとラルクは思っている。
どうせ旅をするのならついでに――と、ラルクたちが今やっていることがあった。
未開の地「カニオン」を含む、未探査地域の測量だった。

「ちょっと待ってな」

ラルクは立ち上がり、温まった身体で外へと出る。

「おーい、ゴル！」

遠くを悠々と飛んでいる金色の竜に、ラルクは手を振った。

――今から弟くんのところに連れてってくれ！

と、言えるようになるのは――まだまだ先だろう。
ラルクの感情が、想いが、落ち着いてからのことになるはずだ。

「……まあいいさ。あんなクソッタレな鉱山で出会ったあたしたちだ。いつだってまた会える」

つぶやくと、こちらへ向かって飛んでくる人なつっこい竜に、ラルクはもう一度大きく手を振った。

★

「ほ、ほんとうにここから行くんですか！？」

「あ、はい。お世話になりました、ルルシャさん、アバ局長」

「豊穣ノ空」の甲板に人はいない。

それもそうだ、今、この巨大魔導飛行船は航空中なのだから。

びゅうびゅう吹きつける風のために、渉外局の局長――今年副局長から昇進したという――アバさんに支えられながら、ルルシャさんは心配そうな顔をしていた。

まあ、そりゃね。

ここから飛び降りるって言ったらね。

「……レ、レイジ、俺たちは後からゆっくり行くぞ……？」

「お父さん、今さらなにを言ってるんですか。聖王都郊外に着陸していたら何時間もかかりますよ」

「し、しかしだな、こんな格好で飛び降りるなんて……」

僕は婚礼用の礼服、ダンテスさんやノンさんも武装を解いてドレスを着込んでいた。

「ミミノさんをしっかりお願いね」

「わ、わかったよ、ノン……」

高所恐怖症のミミノさんはすでに気を失っており、ダンテスさんの背中にくくりつけられていた。

「――行きましょう」

アーシャは落ち着き払っていた。

彼女は【火魔法】以外にも魔法を使えるようになっていて、今は簡単な【風魔法】で空気の流れをコントロールしているために、彼女の長い髪はそよそよとなびいているくらいだった。

「皆様、ありがとうございました！」

大声を上げて、ブリッジからこちらを見下ろしている人たちに頭を下げる。

「豊穣ノ空」の最高司令官に、その他クルーたち。

さらには老齢の帝国皇帝もいた。

いやぁ……ほんとうは、こういうこともあろうかと事前に「魔導飛行船、借りられませんか？」とお願いしていたのだけれど、まさか「豊穣ノ空」が来るとは思わなかったし、さらには皇帝陛下もいらっしゃるなんて……。

アバさんからは「陛下の名代も結婚式には参列するから頼むよ」なんて言われるし。

まあ、こんなこともあろうかと礼服一式をすぐに魔導飛行船に送れるように手配しておいた僕は成長した……成長、なのか？　ますますよくない方向にいってないか？

（まあ……考えたところでしょうがないか）

結婚式に遅れるわけにはいかない。
それには空を飛ぶしかない。
お願いできるのはレフ魔導帝国だけだった。

（……しょ、しょうがないよな）

眼下の聖王都では騎士たちが走り回っているような気配があるし、事前通達をしていなかったせいか聖王国の発着場から魔導飛行船が2隻ほど離陸しているけれど――しょうがなかったこと、ということにしよう。
僕らは甲板の手すりを超えて縁に立った。

「じゃ、魔法をかけますね」

【風魔法】の応用でアーシャが作ったものよりも強い――バリアのような空気の膜を作り出す。

「すごい……やっぱりレイジさんの魔法は私よりもずっと繊細で美しいですね」
「そんなことないですよ。アーシャほど魔力がないから工夫をしているだけで」
「レイジさん」
「はい？」

アーシャはにこりと微笑んだ。

「私はレイジさんよりもずっと長生きをします。何百年も。もしかしたらもっと先まで。だから、私が寂しくないように……たくさん子どもを作ってくださいね？」
「ブッ」

突然の言葉に思わず噴き出した。

「け、結婚式直前にそんなこと言わないでくださいよ」

「ふふふ。行きましょう」

ぴょん、となんでもないことのようにアーシャは飛行船から飛び降りた。

「ちょっ、先に行かないで!?　ノンさん、ダンテスさん、行きましょう！」

「はい」

「あ、ああ……」

僕がアーシャを追って飛ぶと、ノンさんがダンテスさんの手を引いて飛び降りる。

振り返ると、ブリッジの人たちが大騒ぎしている。

ほんとうに飛んだのか？　とか、すごい、とか言っているのだろうか。

皇帝陛下だけは落ち着いてじっとこっちを見ていたけれど。

（おお……）

眼下に広がっている聖王都。

そして聖王宮の周囲に森がある。

ウロボロスの出現によって破壊された場所はとっくに復旧されているけれど、まるで古傷が残っているかのようにそこだけ一直線に、不自然に、新しい建物が並んでいた。

（いろんなことがあったなぁ……）

ほんとうに、いろんなことが。
まさか自分が、１７歳の花嫁を迎えることになるとは思わなかったけれど。
これからもきっといろんなことが起きるんだろう。

（つらくて苦しいことも多いけど、僕は……転生してよかった。この世界に来られて、よかった）

中央聖堂の建物がはっきり見える。馬車が右往左往しているのが見える。
エヴァが――僕の花嫁が、まぶしそうにこちらを見上げているのが見える。
こっちの世界でも婚礼用のドレスは純白なんだよね。
髪をひとまとめにして、みずみずしい白の花で飾りつけている。

――無毒性。食用も可能。

【森羅万象】がそんなことを教えてくれる。
食べられるんだ、いや、そんなことより。
大きな赤い瞳。
うっすら化粧をして、にこりと微笑んだエヴァ。
……可愛すぎないかな？　うちの花嫁は。

「【風魔法】」

上空５０メートルくらいまで降りてくると、上昇気流を発生させて落下速度を遅くする。
ノンさんもアーシャも、スカートの裾を押さえていて優雅ですらある――ダンテスさんは青い顔だけれど。

「――誰だあれは!?」
「――『五英雄』だ!!」
「――天銀がないぞ」

僕らを中心にドーナツ状の空間ができていた。
僕はそこに降りたって、服を整える。
そしてエヴァのところへ――今日ばかりは世界一美しい、なんて言っちゃってもいいだろう――花嫁のところへ歩いていく。

「お待たせ」

僕が言うと、エヴァは笑った。

「ええ、待ったのだわ――４年もね」
「行こうか」

僕が腕を差し出すと、そこにほっそりとした手を絡めてエヴァが歩き出す。

「エヴァ様ぁ～～」

なぜか（ほんとになんでだ?）泣いているミラ様が、ゼリィさんに支えられながら拍手をすると、その拍手の輪は広がっていった。
みんな、中央聖堂へ向かう僕らのために道を空けてくれる。
以前、僕が聖王都を出るときには力ずくで道を開いた。そうして僕は追放されるようにここを出て行った。
今日は違う。みんなは今日僕を、僕たちを祝福してくれる。
聖堂の入口にいたスィリーズ伯爵が難しい顔をしているけれど、間に合ったので許して欲しいところだ。

僕は……ほんとに、結婚するんだなぁ。

「……ねえ、エヴァ」

「なにかしら？」

「幸せになろうね」

「！」

横目で見ると、目を見開いた彼女は一一頬を染めて、

「……当然、よ」

と言った。

正直、それだけで僕は十二分の幸せを感じたのだけれど一一僕の人生はここでゴールじゃない。

今日もまたひとつの始まりなんだ。

晴海礼治としての記憶を思い出した鉱山事故とラルクとの別れ一一あの日もひとつの始まりだった。

ダンテスさん、ミミノさん、ノンさん、ライキラさんに出会った日も。

ゼリィさんとともに街から逃げた日も。

お嬢様と出会った日も。

アーシャと出会った日も。

すべてが始まりなんだ。

「緊張してる？」

「いいえ。どうしてかしら一一あなたといっしょにいるから？」

「きっとそうだよ」

僕とエヴァは聖堂へと足を踏み入れた。

前途を祝福するかのように、聖堂内には午後の陽射しがさんさん

と降り注いでいた。

★　　★　　★

それからのことを――それよりずっと後の世界について、少しだけ記そう。

スィリーズ伯爵家は子宝に恵まれ、多くの子孫がクルヴァーン聖王国に留まらず大陸の各地で活躍している。

特に未開の地「カニオン」の調査では目覚ましい成果を見せたのだが、そんな彼らがバイブルとして扱っていたのが「カニオン調査記」というあるチームによる測量図だった。

チームの中心人物はラルク＝ハルミと名乗り、彼女たちの測量図によって「カニオン」の調査は数百年分前進したという。

世界は安定しており、モンスターは相変わらず多いものの、暮らす人々との戦力は拮抗しており偏りは見られない。

種族間の壁も高くはなくなり、交流も進んでいる。

時折、黒髪黒目の赤子が生まれることがあった。

いまだに、片田舎ではこういった特徴を持つ子を「災厄の子」だとして忌み嫌う偏見があったのだが――次第にそれも薄れていった。

なぜかと言えば、黒髪黒目を持つ子が生まれた……というウワサが広まると、どこからともなく「精霊女王」という異名を持つハイ

エルフの女性が現れ、その子に祝福を与えるからだった。
そして黒髪黒目の子が、男の子であれ女の子であれ、成長するまで陰ながら見守っていてくれるという。
黒髪黒目の子は、他の子と変わらないふつうの子であることが多かった。
だが１００年に1度くらい――明らかに異質な子が現れた。
人智を越えるような能力を持っていたのだ。
この世界に、天賦珠玉がなくなってから久しい。
スキルの枠が8つある、なんていう知識すらほとんどの人々が知らない。知る必要もなくなっている。
だというのに人々は、そういった黒髪黒目の子をこう呼んだ。

――限界超え（オーバーリミット）の天賦を扱える者（スキルホルダー）と。

ハイエルフの女性は、こういった子をしっかりと導いて、世界を陰から支えられるような大人に成長させるべく協力を惜しまなかったという。

エピローグ　オーバーリミット・スキルホルダー（後書き）

終わった……。結局最終話も1万字超えてるやんね。オーバーリミットノベルであったな（特になにも超えてない）。
長い間のご愛顧、誠にありがとうございました。
あと新作「メイドさん」も公開してるので読んでね。リンクは下にあります。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://ncode.syosetu.com/n5378gc/

限界超えの天賦《スキル》は、転生者にしか扱えない
ー　オーバーリミット・スキルホルダー

2024年5月14日15時18分発行